遊戯王　～絶望と希望の神々の物語～

機皇帝プラシド∞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　～絶望と希望の神々の物語～

【Ｎコード】
Ｎ５７１７Ｏ

【作者名】
機皇帝プラシド∞

【あらすじ】
最高神ディスペアは進化を遂げスレイになり、最強の神『究極神』を切り札として戦う。（３月２０日、あらすじを変更しました。５章からの物です）２章はおまけのようなものなので読み飛ばしてもストーリー自体には差し支えありません。超展開満載、作者の自己満足です↑この２つが重要
※オリカが出ますし、主人公がリアルファイト的な意味で異常、切り札の効果がチートです。苦手な方は戻るをクリックしてください。
※タグをいろいろ変更しました。

※2月2日、タイトル変更。第122部、第3章までのタイトル『神々が動かす遊戯王GX～神々が望む者～』123部、第4章より変更。

最後に1つだけ。オリカのアイデア常時募集中です。投稿してくれるとうれしいです。

いろいろ書きましたが、楽しめればそれでよしな小説です。

プロローグと主人公設定（前書き）

※この作品は、現在進行形で厨二病の作者の妄想の塊であり、オリカが出ます。そういったものが苦手な方は見ないことをお勧めします。

プロローグと主人公設定

ああ、暇だな。人間界をただただ見ているのももう飽きた。

「ゼウス、いつものメンバーを集めろ」

「わかりました」

～数分後～

「おお、リョウ。また出掛けるのか？何千年ぶりだろうな」

「今回は楽しめるのだろうな？」

「ま、俺はいつものように悪戯するだけだけどな」

「リョウ、今度はどこの世界に行くの？」

「同時にしゃべらないでくれ。行く世界は遊戯王ＧＸだ。ゼウス、いつものように頼むぞ」

「わかっています。お気をつけて」

「ああ」

こうして、遊戯王ＧＸの世界に旅立った。

主人公

名前　リョウ

性別　―（男でもないし女でもない。が、顔は男であり、人格も男である。男性、女性特有の身体的特養は存在しない）

年齢　？（本人が数えてない。が、最高神の中でも最も長く生きている）

誕生日　不明

身長　１９０センチ

体重　６５キロ

性格　好戦的な面がある。

究極神を使う神。普段は神界から人間界を眺めているだけだが暇になるとオーディンらを連れて人間界に出かける。
容姿はカイザーの髪を黒くして、ヘルカイザーのときの服を完全に黒にした感じ。
（既婚者。スクルドと）
イメージＣＶはカイザー。この小説の中で、最も多く形態変化するのはきっとこのリョウである。

使用デッキ　究極神

ヒロイン

名前　スクルド

年齢　？

性別　女

誕生日　？

身長　１７５センチ

体重　？

スリーサイズ　？？？

性格　ドジな面がある。

大昔はワルキューレとして戦っていたが、力を持った人間の策にはまり
それ以降戦う力を失った。それゆえか、力を持つ人間に対し恐怖感を抱いている。
リョウとつき合っている。戦う力はないが、デュエルぐらいはできる。
容姿は、「時の女神のいたずら」というカードのイラストの女神。
（女神スクルドの託宣と同じ。イラストはこっちの方がタッチ的に慣れることができるかも）
（既婚者。リョウと）
イメージＣＶは明るい女の人（想像にお任せします）

その他仲間

名前　オーディン

年齢　？

誕生日　？

性別　―

身長　２メートル１０センチ

体重　７０キロ

性格　５Ｄ’ｓのホセ

容姿はチームラグナロクのハラルド
イメージＣＶはハラルド

役目はいわゆるまとめ役で、主人公サイドがケンカしたとき、その場にいれば仲裁に入る。

名前　トール

年齢　？

誕生日　？

身長　１メートル９５センチ

体重　６７．５キロ

性格　ジャック・アトラス（ときどき傲慢なところが）

容姿はチームラグナロクのドラガン

イメージＣＶはドラガン

名前　ロキ

年齢　？

誕生日　？

身長　１メートル８５センチ

体重　６３キロ

性格　チームラグナロクのブレイブ＋闇バクラ÷２と思っていたけどルチアーノ

容姿は現在はチームラグナロクのブレイブ

性格と見た目のギャップが激しい。
どうやら、変身魔法を常に使っているようで、声も変わるらしい。
イメージＣＶはブレイブ・

第２章の２話から見た目が機械になっていないルチアーノを大きくしたバージョンになった。
笑い声はルチアーノそのもので、性格も似ている。この形態になってからはＣＶはルチアーノになった。
変身解除後のこの形態の身長は、１５７ｃｍで、体重４３キロ。登場するオリジナルキャラクターの中でも、ダントツで身長が低い。

第1話　入学試験（前書き）

今回は入学試験です。
1月11日、微修正しました。

第1話　入学試験

今日は入学試験だ。
ゼウスがいろいろとやっておいてくれたので、何も問題はない。

「さて、そろそろいくか」

余談だが、スクルドは入学はしない。が、一緒にいる。

「受験番号1番、神帝リョウ」

「はい。よろしくお願いします」

こういう場所では印象が大事だとゼウスに言われた。

「「デュエル」」

「先攻は俺がもらいます。ドロー」

・・・・ん？これは・・・

「カードを3枚伏せてターン終了」

リョウ
手札3
伏せカード3
モンスター0

「どうした?手札事故かい?」

「やっていればわかる」

「そうか。では私のターン。ドロー・・・わたしはゴブリンエリート部隊を召喚!ゴブ「トラップ発動!激流葬!」なに!?っくカードを1枚伏せてターンエンド」

試験官
手札4
伏せカード1

「エンドフェイズに速攻魔法、終焉の焔を2枚発動。黒焔トークンを4体特殊召喚。そして俺のターンドロー。プリーステスオーム召喚。効果発動、闇属性モンスターを生贄にすることで、1体につき800ダメージを与える。俺は黒焔トークン4体とプリーステス・オーム自身を生贄に捧げる」

「なに!?うわあああああ」

「ありがとうございました」

・・・まあこんなものか。お、もうオーディンたちも終わっているようだな。

十代サイド

あいつ、すげぇぇぇぇ！！
試験官の先生を1ターンで倒した！
デュエルアカデミアに入ったら、まずはあいつとデュエルしよう。

十代サイドアウト

明日香サイド

なんなの？一体？姿も亮に似てるとは思ったけど、ワンターンキルまでするなんて
一体何者？まあいいわ。デュエルアカデミアに入ればわかることだし。

明日香サイドアウト

はやて・フェイト・なのはサイド

「すごいね。あの人」

「そうやね」

「もしかしたらあの人が今回の予言にあった・・・」

「ま、なんにしろ、マークしとくことに越したことはないやろ」

「そうだね」

三人娘サイドアウト

万丈目サイド

なんだあいつは！1ターンキルだと！
おのれぇぇぇぇ・・・つぶしてやる・・・

万丈目サイドアウト

第1話　入学試験（後書き）

入学試験でした。

第2話　接触（前書き）

万丈目との回です。

第2話　接触

今日は、いよいよデュエルアカデミアに入学する日だ。
しかし・・・船って気持ち悪いな。飛んだ方が速い。しかしそんな事をすれば
他の人間に見られてしまうだろう。それは避けなければならない。

～3時間後～

「ふう、ようやく付いたな・・・さて、ブルー寮はどこだ？」

「こっちだ、リョウ」

「そうか。すまん、オーディン」

「気にするな」

そう、俺たちは全員、なぜかブルー寮だったのだ。しかも相部屋。
まあ、その方が気楽でいいけど。

「さ、荷物も片付けたし、校舎を見に行くか」

「あ、待ってリョウ。わたしも」

「いいのか？スクルド。力を持つ力を持つがいたとしても」

「リョウがいるから大丈夫」

「そうか」

「ここはブルー生徒のデュエル場だ。レッドが勝手に使うな！」

「別にいいじゃねえかよ。誰のものって決まってるわけでもないんだしさ」

デュエル場に行くと、こんな会話が聞こえてきた。
何かごたごたしているうちに終わったようだが。

「まあいいか。いくぞ」

「ああ」

デュエル場は予想以上に大きかった。

「これなら満足できそうだ」

「あの、すみません」

いきなり声をかけられた。

三人娘サイド

「ねえ、はやてちゃん。あの人って・・・」

「そうやね。今のうちに接触しとこか」

「うん」

そう言って話がまとまったので話しかける。

三人娘サイドアウト

「ん？何の用だ？」

「ひっ！」

・・・スクルドが恐怖したか・・・ということは・・・まあいい

「いえ、デュエルしていただけませんか？」

・・・まぁ、そのぐらいならいいだろう。

「いいぞ」

「ありがとうございます」

「「デュエル」」

高町ｖｓリョウ

「先攻は私がもらいます。ドロー・・・わたしは神の居城ヴァルハラを発動！

効果でアテナを特殊召喚！さらに、死皇帝の陵墓を発動。２０００ＬＰ払って
光神機轟龍（ライトニングギア）を召喚！カードを伏せてターンエンドです」

なのは
手札１
フィールド
死皇帝の陵墓　轟龍　アテナ　ヴァルハラ
伏せカード１
ＬＰ２０００

「俺のターンドロー」

この状況では・・・しかたあるまい

「俺はデビルズ・サンクチュアリを発動！このカードは俺のフィールド上にメタルデビルトークンを１体特殊召喚する。さらに幻銃士を召喚。効果によって自分のフィールド上のモンスターの数まで銃士トークンを特殊召喚する。特殊召喚するのは１体だ。さらに・・・俺のフィールド上のモンスター３体と俺のライフ半分を生贄に捧げ・・・
降臨せよ！究極神オベリスク！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「キャアアアア！地震！？・・・・・・あなたのモンスターはどこにいるの？リョウ君」

「外だ」

「!!っでも、トラップ発動!奈落の落とし穴!このカードは相手が召喚・反転召喚・特殊召喚した攻撃力１５００以上のモンスターを破壊して、ゲームから除外する!」

「無駄だ!究極神オベリスクは罠の効果を受けない!」

「そんな・・・」

「究極神オベリスクの攻撃力は８０００ポイント!一撃で葬ってやる。いくぞ・・・

究極神オベリスクでアテナを攻撃!ゴッド・アルティメット・ディストラクション!」

「キャアアアア」

なのは

ＬＰ２０００→０

なのはサイド

そんな・・・たった1撃で負けるなんて・・・・・・・・

「「なのは（ちゃん）!!」」

「大丈夫?なのは?」

「うん・・・」

でも・・・あの衝撃（ダメージ）は一体・・・?

「とりあえず戻ろう？なのは」

「うん」

なのはサイドアウト

・・・ふん。まさかこんなに早く神を使うことになるとはな。なかなか楽しめそうだ。

クロノサイド

「やっぱり彼が予言にあった究極の力を持つもの・・・」

「うん。多分そうだと思うよ。クロノ」

「じゃあ、彼を連れて帰れば任務完了だね」

サイドアウト

第2話　接触（後書き）

なのはたちの容姿はＳＳのときのなのはさん達です。
究極神の効果は、まだ明かしません。
次回はタイミング的には十代ｖｓ万丈目です。

第3話　随分と早くマークしてきたな。だが、オレは出ない。前編（前書き）

タイミング的には十代ｖｓ万丈目ですが、今回はオーディンたちがリリカル軍の誰かと戦います。
あと、少し書き方変えました

第3話　随分と早くマークしてきたな。だが、オレは出ない。前編

リョウサイド

あのデュエルが終わった後、俺たちは今寮に帰り自室で話している。

「やはり彼女たちが本来この世界にいないもので間違いないんだな？」

「ああ、ゼウスにも連絡したが、やはりそうらしい」

彼女たちとは、なのは、はやて、フェイトのことである。

「人間のテクノロジーは怖いね。アハハハハハ」

「ロキ、笑うのはいいが、潰しには行くなよ？楽しみが減る」

「わかってるよ。リョウ」

「さて、スクルドの話だと十代と万丈目が戦うのは今日らしいな・・・」

プルルルル

ケータイがなる。

「ん？誰だこんな時間にっ・・・！！」

まさかもう目星をつけられるとはな・・・

『お話したいことがあります。よければ今夜１１時に女子寮の森に来てください　高町なのは』

「どうするの？リョウ」

「面白い。オーディン、お前たちがいけ」

「なぜだ？」

「俺が出るほどのことではないというあてつけだ」

「そういうことならいいだろう」

サイドアウト

はやてサイド

「来てくれるかな？リョウ」

「どうやろな？向こうが警戒しているなら来ないやろな」

そう話しているうちに３つの影が見えた。

「え？３人？」

「どういうことかな？わたしたちはリョウ君を呼んだんだけど？」

「アハハハハハ。リョウからの伝言。俺が出る必要ないってさ」

やられた。やっぱり警戒されてるこれじゃあうまくいかへん

「だが、もう一つ伝言があってな。我ら３人を倒すことができれば会ってやると言っていた」

そういうことか。そんなら・・・

「その勝負、受けて立つで。けどどう戦うんや？１ずつ戦っていたら時間がなくなる」

「ふん。３対３の勝ち抜き勝負だ」

※ルールはＷＲＧＰと同じです

「そんならなのはちゃん、フェイトちゃん、わたしの順や。そっちは？」

「俺、トール、オーディンの順だ」

「いくよ・・・ロキ君」

「「デュエル」」

ロキサイド

「先攻は俺だ。ドロー！」

ん？・・・これなら・・・ま、相手には悪いけど早々に退場していただこう。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

ロキサイドアウト

なのはサイド

え？モンスターを召喚しないの？

まあ、いいか。

「わたしのターンドロー！・・・わたｓ「トラップ発動！エンドオブフォース。このカードは自分の手札をすべて捨てて、1枚につき、お互いに８００ダメージを受ける！」っそんな！？」

また1ターンキルされちゃうの？

「キャアアアアア」

「うわあああああああ・・・なんてな」

なのは・ロキ
ＬＰ４０００→０

なんで？ロキ君のライフは０のはず・・・なのになんでまだ続いてるの？

サイドアウト

ロキサイド

やっぱり驚いてるな。この反応がおもしれぇ！

「確かにライフは０さ。だが・・・」

そういうと、墓地から魔法カードが１枚出てきた。

「こいつの効果が発動したのさ。リバースオブタイム。こいつは墓地へ送られたターン内に自分のライフが０になった場合、自分のライフを４０００にしてデュエルを続行する。そしてデッキから１枚選んで残し、他をすべてゲームから除外する。」

「そんな！！」

「というわけで、早いとこ次の奴と変わってくれ」

「わかったよ。頑張って、フェイトちゃん」

「うん」

「「デュエル」」

「おっと、お前たちのターンは終了しているから俺のターンからな。ドロー。
俺はカードを伏せてターンエンド」

サイドアウト

ロキ
手札０
フィールド
伏せカード１

ＮＯサイド

「わたしのターンです。ドロー」

このままターンエンドすればわたしは勝てる。でも・・・あの伏せ

カード・・・
だけど、うかつに動くよりカはいいかな。

「カードを2枚伏せてターンエンドです」

フェイト
手札4
フィールド
伏せカード2

ッチ・・・

「俺はデッキからドローできないからトールにかわるぜ。任せたぞ。トール」

「わかっている。しかし我のターンは終了している。そちらのターンだ」

「わたしのターンです。ドロー」

よし、これならいける!

「わたしはBF―蒼炎のシュラを召喚!さらに、チューナーモンスター、BF―疾風のゲイルを特殊召喚!」

「なに!?チューナーだと!?」

チューナーはまだこの時代ではないはず・・・管理局とやらは時まで超えるようになったか・・・

「さらにわたしはＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚！３体でダイレクトアタック！」

「手札のバトルフェーダーを特殊召喚！直接攻撃宣言時に特殊召喚され、バトルフェイズを終了させる！」

「ターンエンドです」

フェイト
手札２
フィールド
ゲイル、ブラスト、シュラ
伏せカード２

「我のターン！我は手札のトラゴエディア、闇の侯爵ベリアル、ダークリエイターの３体を墓地に送り、モンタージュ・ドラゴンを特殊召喚！このカードの攻撃力は特殊召喚時に捨てられたモンスターのレベルの合計×３００！よって攻撃力は・・・」

モンタージュ・ドラゴン　攻撃力７８００

「攻撃力７８００！？（でも、わたしの伏せカードはミラーフォース・・・これなら大丈夫！）」

「さらに我はハリケーンを発動！フィールド上の魔法トラップカードを全て手札に戻す！」

「そんな・・・！」

「いくぞ！我はモンタージュ・ドラゴンで疾風のゲイルを攻撃！パ

ワーコラージュ！」

攻撃がゲイルに向かう

「「フェイトちゃん！」」

第3話　随分と早くマークしてきたな。だが、オレは出ない。前編（後書き）

こんなところで切ってごめんなさい。
後編に続く。

随分と早くマークしてきたな。　だが、オレは出ない。　後編（前書き）

後編です。

随分と早くマークしてきたな。　だが、オレは出ない。　後編

フェイトサイド

「っく、手札の魔法カード、オーバーウィンドの効果発動！このカードは相手ターンでも手札から発動できる！ＢＦが受ける戦闘ダメージを０にする。その後、デッキから１枚ドロー」

ふぅ…何とか防いだ…

サイドアウト

ＮＯサイド

まさかそんなカードを持っていたとは…やるな。

「ターンエンド」

トール
手札１
フィールド
モンタージュ・ドラゴン
ロキの残した伏せカード１

二人とも…すごい

わたしは1ターンで倒されちゃったのに…

「わたしのターン、ドロー、わたしはゲイルの効果でモンタージュドラゴンの攻撃力を半分にする！」

「ッチ…」

モンタージュ・ドラゴン　攻撃力７８００→３９００

このターンで…倒す！

「わたしは手札から魔法カード、ブラックフェザーストームを発動！このターンＢＦが与えるダメージは2倍になる！」

「なんだと！？」

「さらに、ゲイルを生贄にささげてＢＦ－暁のシロッコを召喚！このカードの効果でシュラにシュラ以外のＢＦと名のついたモンスターの攻撃力を収束する！」

シュラ　攻撃力１８００→５５００

「シュラでモンタージュ・ドラゴンに攻撃！」

「手札の暗黒の巨兵の効果発動…墓地の3体のモンスターとフィールド上のレベル８モンスターを除外しさらにデッキの上から2枚墓地に送り特殊召喚」

「なっ！？相手ターンにモンスターを召喚！？」

「特殊召喚された暗黒の巨兵の攻撃力はこのカードの特殊召喚時に除外された闇属性モンスターの攻撃力の合計となる！そしてこのカードの特殊召喚成功時にこのカードを除外し、フィールド上のカードを全て墓地へ送り、互いに１枚につき１０００ポイントのダメージを受ける」

「キャアアアア」

フェイト・トール
ＬＰ４０００→０

「わたしの番やね…」

まさかこの２人がやられてまうなんて少しも考えとらんかった。

「ふん、わたしの番か。」

この威圧感…はっきり言って怖い…でも

「降参するわけにはいかん！ここまで頑張ってくれたなのはちゃん、フェイトちゃんのためにも！」

「ほう…わたしの前で堂々としていられる人間がいるとはな…」

「「デュエル」」

はやて・オーディンＬＰ４０００

「わたしのターン！ドロー！魔法発動！命の受け継ぎ！このカード

はデッキのレベル1モンスターを特殊召喚する。その後、このデュエル中に失われたライフポイントの合計分、自分のライフを回復する！」

「そんなバカな！」

このデュエル中に失われたライフポイントの合計は１６０００…反則やろ！

「わたしが召喚するのはグランド・コア…そしてライフを１６００ポイント回復する！さらに魔法カード、死者への手向けを発動し、手札を1枚捨ててグランド・コアを破壊し、破壊されたグランド・コアの効果によってデッキから機皇帝グランエル∞、グランエルT、グランエルA、グランエルG、グランエルCを特殊召喚。機皇帝グランエル∞の攻撃力は自分のライフと同じになる！」

機皇帝グランエル∞　攻撃力？→２００００

「「はやて（ちゃん！！」」

「我らの力を思い知るがよい！機皇帝グランエル∞でダイレクトアタック！グランド・スローター・キャノン！」

「きゃあああああ」

はやてＬＰ４０００→－１６０００

「……帰るぞ。トール、ロキ」

「ちぇ～～～おいしいとこだけ持っていきやがって」

「だが、我らの勝利に変わりはない。」

リョウサイド

お、帰ってきたな。

「帰ったぞ」

「お疲れ。どうだった？」

「聞いてよリョウ～～～オーディンがいいとこばっかり持っていっちゃてさ～～～」

「そうかそうか。でも勝ったんだろ？ならいいさ」

サイドアウト

三人娘サイド

「ここまでこっぴどくやられるなんて…」

「甘く見てたね」

「うん。でも次こそは絶対勝って、お話してもらうんだから！」

随分と早くマークしてきたな。　だが、オレは出ない。　後編（後書き）

ごめんなさい。どうしてもグランエルでとどめを刺したかったんです。
リリカルファンの皆様、本当にごめんなさい
次回は月1テストです。

第４話　月１試験　神召喚！（前書き）

今回はリョウが本気を出します。理由は…自分の彼女のためです
※□内はテレパシー的なものでの会話です。リリカル３人娘は聞くことができません

第４話　月１試験　神召喚！

今日は確か月１試験だったな。さて行くか。
試験会場には１０分前についた。時間になって試験が始まった。

［オーディン、ここはどうなるんだ？］

［ここはこうなってこうしてからこうなるのだ］

［サンキュー］

そう、リョウは戦いの神であり、知識がそこまであるわけではない。
オーディンに教えてもらわないと、おそらく３０点取れるか取れないかぐらいだろう。

「やべえ、遅れた」

「十代君、早くするにゃ終わってしまうにゃ」

途中、こんなこともあったけどテストは無事終わった。
いや…終わってはなかったな次は実技テストか。

行くか…

「行くぞ、スクルド」

「うん」

購買で待っていたスクルドを連れてデュエル場に行く。が…

「ねえ、そこの美人さん。神帝なんかよりもボクと付き合わないかい？」

「何だお前は？」

「お前になんか話しかけていない。ボクが話しかけているのはそこの美人さんだ」

「お断りします。もう私はリョウと付き合っているので」

スクルドは、基本的に人間に対し敬語になる。あまり関わりたくないらしい。

「そんなこといわずにさ～～～」

スクルドの言うことなど少しも聞かず、強引に引っ張る。

ドカッ

面倒だが、力を加減して蹴る。

「ギャ！なにするんだ」

「スクルドに手を出さないでもらおう」

「っく！覚えてろ！デュエルでつぶしてやる！」

「やれるものならやってみろ」

とそこで

「田中悪尾君と神帝リョウ君はすぐに外のデュエル場に来るノーね」

「ふふふ。まさか相手がこのボクだなんて君は不幸だねぇ～」

「うるさい、早く始めるぞ」

「「デュエル」」

田中・リョウＬＰ４０００

「先攻は俺だ。ドロー…2つ宣言してやる。お前は俺にダメージを与えることができずに負ける。
もうひとつは、お前のチャンスはあと2ターンだということ」

「はぁ?何言っちゃってんの?その言葉お前にそのまま返してやるよ」

「ふっ。やってみればわかる。俺はデビルズサンクチュアリを発動。メタルデビルトークンを特殊召喚。さらに、幻銃士を召喚。効果で銃士トークンを2体特殊召喚!俺のライフ半分と銃士トークン2体と幻銃士を生贄に捧げ・・・降臨せよ!究極神オシリス!」

ドゴゴゴゴゴゴ

「うわあああああ!何だ?地震?お前のモンスターはどこだ?」

「お前の目は節穴か?海の方を見るがいい」

そこには全長7．5キロはあるであろう巨大な赤い龍がいた。

「う…うわあああああああ…な、なんだあれは!!」

まわりにいる生徒たちも驚く。

「究極神オシリスの攻撃力は手札×２０００ポイントだ。そして先攻に攻撃は許されていない。
ターンエンドだ。言っておくがいまさら逃げられんぞ?」

リョウ
ＬＰ２０００
手札３
フィールド
究極神オシリス

「く…ボクのターンドロー……きたっ!ライトニングボルテックス発動!手札を1枚捨てて、相手の表側表示モンスターをすべて破壊する!これで究極神オシリスは破壊される!ボクの勝ちだ~」

「究極神オシリスは魔法の効果を受けない。よってライトニングボルテックスは無効だ」

「そ、そんな・・・・・モンスターをセットしてターンエンド」

田中
ＬＰ４０００
手札３
フィールド
セットモンスター１

ざわざわ・・・生徒たちも騒然とする。まあ当り前だろうな。

「俺のターン！ドロー。俺は幻銃士を召喚！銃士トークン２体を特殊召喚。３体のモンスターとライフ半分を生贄に捧げ降臨せよ・・・究極神オベリスク！」

ゴゴゴゴゴゴゴ

「ま、また・・・」

究極神オシリスのよりも少し離れた場所に、身長５キロぐらいの巨人が出現した。

究極神オシリス　攻撃力８０００→４０００

究極神オベリスク　攻撃力８０００

「究極神オベリスクで伏せモンスターを攻撃！ゴッド・アルティメット・ディストラクション！」

「メタモルポットの効果発動・・・互いに手札をすべて捨て、５枚ドローする・・・・・・」

「究極神オシリスで攻撃！アルティメットサンダーフォース！」

「手札のバトルフェーダーを特殊召喚する・・・・・・」

「ターンエンド」

リョウ

ＬＰ１０００
手札５
フィールド
究極神オシリス
究極神オベリスク

「ボクのターン・・・・・ドロー・・・・・フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒこれでボクにも勝つチャンスはあるぞ！モンスターセット！カードセット！ターンエンド。ボクが勝ったらスクルドちゃんは渡してもらうぞ神帝！」

田中
ＬＰ４０００
フィールド
セットモンスター１
伏せカード１

「勝てたらな。ラストターン！ドロー！！俺は幻銃士を召喚！効果で銃士トークン２体を特殊召喚する。」

「（フヒヒどんなカードを出しても無駄だぁ～～～ボクのセットモンスターはデスコアラ。伏せカードは神の宣告。これだけあれば負けることはないぞぉぉぉ）」

「３体のモンスターとライフ半分を生贄に！降臨せよ最強の神！究極神帝ラー！！」
すると、天から全長１０キロほどの巨大な金の龍が出現した。

「無駄だぁぁぁ！トラップ発動、神の宣告！このｋ「究極神帝ラーの効果、究極神が２体存在する場合、相手の効果はすべて無効にな

る。」

「そんなバカな・・・く、サ、サレンｄ「逃がさないと言ったはずだ。究極神帝が存在するとき、互いにサレンダーすることはできない」ひ、ひでぇ！」

究極神帝ラー　攻撃力∞

「究極神帝ラーの効果発動！１ターンに１ｄ「まて、リョウ。それを放てば全ての世界どころか神界まで消滅するぞ！！」問題ない。このデュエルディスクは学校支給のディスクだ。俺のオリジナルディスクではない。「ならいいが・・・」待たせたな。１ターンに１度、相手のカードをすべてゲームから除外し、∞のダメージを与える！ゴッド・アルティメット・ノヴァ！」

瞬間、ラーの口から超巨大な火球が出現し、巨大化していく。
そして次の瞬間、全ての世界と神界が炎につつまれた。
ソリッドビジョンなので、これといった影響はない。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

田中ＬＰ４０００→－∞

「もうスクルドにかからないでもらおう」

その後、リョウはたくさんの質問攻めにあった。

クロノサイド

炎が巨大化し、どんどん広がっていたころ次元のはざまでも

「なんだこの炎は・・・・・うわぁぁぁぁ・・・ってあれなんともないぞ・・・あっお茶がこぼれてる！」

・・・あながち影響がないとは言えなかった。

第４話　月１試験　神召喚！（後書き）

はい、神召喚の回でした。次回はこれまでに出たオリカをいったんまとめたいと思います。

オリカまとめ（前書き）

まだそこまで多くはないですが、たまってしまうとまとめる気が起きそうにないので今のうちにまとめておこうと思います。
今回の会話は、基本的にロキと作者です。

オリカまとめ

エンドオブフォース
通常罠
効果
手札をすべて捨てることで発動。
互いに捨てた手札1枚につき８００ダメージ受ける。

「ライフ４０００でこれはひどいと思うぞ」

まあでも、チームカタストロフも同じようなカード使ってたし。
「それもそうか」

リバースオブタイム
通常魔法
このカードが墓地へ送られたターン内に自分のライフが0になった場合、ライフを４０００にしてデュエルを続行する。その後、デッキから1枚選択し他のカードをすべて除外する。

「ひでぇ・・・・・」
お前が使ったカードだろ。
「そりゃあそうだけどさ」
それに1ターンしか生き延びられないぞ。

オーバーウィンド
通常魔法
このターンＢＦと名のつくカードは戦闘ダメージを受けず、破壊さ

れない。
このカードが墓地へ送られたとき、デッキからカードを1枚ドローする。
このカードは相手ターンでも手札から発動できる。

まあまあかな。
「どこがだよ!?普通にひでぇだろ」
そんなにひどいかな?
リョウ「ひどいよ」
ああ、そう・・・ごめんなさい

ブラックフェザーストーム
通常魔法
このターンＢＦと名のつくモンスターが相手に与える戦闘ダメージは2倍になる。

「オイコラ作者・・・」
わかってるよ・・・これはさすがにやりすぎたと思ってるよ。

暗黒の巨兵
レベル１２　攻撃力?　守備力０　闇属性　悪魔族
効果
通常召喚できない。
相手の攻撃宣言時に墓地のモンスター3体とフィールド上のレベル８モンスター1体を除外し、デッキの上から2枚墓地に送った場合のみ特殊召喚できる。このカードの攻撃力は、特殊召喚時に除外し

た闇属性モンスターの攻撃力の合計となる。このカードの特殊召喚成功時、このカードを除外することでフィールド上のカードを全て墓地へ送る。その後、互いに送った枚数×１０００ポイントのダメージを受ける。

「前半の効果はともかくとして、後半なんだよ・・・混沌帝龍もびっくりだよ・・・」
ご都合主義のパワーだ。

命の受け継ぎ
通常魔法
デッキからレベル１のモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚できる。その後、このデュエル中に失われたライフポイントの合計分、自分のライフを回復する。エンドフェイズに、自分は１００００ポイントのダメージを受ける。

「これはグランエルと組み合わせるとひどいカードだな」
うん。普通に使ったら相当条件きついと思うよ。

究極神オシリス
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力Ｘ０００　守備力Ｘ０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻守は自分の手札×２０００ポイントになる。このカードは魔法・モンスター効果を受けず、罠の効果を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法でフィールドを離れた場合、エンドフェイズに特殊召喚される。相手がモンスターを召喚・特殊召喚

した場合、攻撃力・守備力に２０００ポイントのダメージを与える（超過ダメージ０）。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

「こ・れ・は・ひ・ど・い　対抗できるのなくね？」
いや、結構あるよ。オネストとかオネストとかアバターとかなにより魔法の筒使われたら大抵死ねる
「アバター召喚する暇ないだろ。それにそれぐらいしかないじゃねーか」
まあね。

姿はただ巨大化したオシリスではなく、赤い雷をまとっていたり、体のトゲがさらに鋭くなっていたりします。

究極神オベリスク
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力８０００　守備力８０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠・モンスター効果を受けず、魔法の効果を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法でフィールドを離れた場合、エンドフェイズに特殊召喚される。このカード以外のモンスター２体を生贄に捧げることでこのターンこのカードは相手モンスターすべてに攻撃できる。この効果は相手ターンでも発動できる。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

姿は、腕などの部分に青い鎧を着て、巨大化したオベリスク。

「相手ターンに生贄にする意味ってあるのか？」

ただのリリースエスケープ。

「あ、そう。これはそこそこ対抗できそうじゃないか？」

まあそうだな。

究極神帝ラー

レベル１５　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞

通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在するときのみ戦闘への参加が可能になり、効果も適用される。このカードはいかなる効果も受けない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果はすべて無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

姿は、巨大化したラーだが、あまりにも熱いためか、体の色が金よりも白に近い。

「いくらなんでもひどすぎだろ。ところで、相手のカードの効果はすべて無効になる。ってあるけど、これって手札とか墓地のカードも無効になるの？」

うん。

「じゃあ、相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える。っていうののカードすべてってどゆこと？」

要はデッキ、手札、墓地、フィールド、エクストラデッキ全てのこと。

「うわ、これなんて無理ゲー？」

まあほとんど出番はないけどね。ゴッド・アルティメット・ノヴァ（最後の効果）の炎は赤ではなく白だよ。ほとんど光にしか見えないだろうけど。

「リアルファイトは？」

まだ当分先だろうね。

「他の世界は？」

近いうちに1度行くって決めてあるよ。ミッドチルダに。

まあ、間違いなくリアルファイトだろうけど。

「介入してなくね？」

うっ・・・・・そろそろ介入するよ。

オリカまとめ（後書き）

こんな感じになりました。ちなみに究極神ですが、普段はフレイバーテキストのラー・オシリス・オベリスクです。なので、デュエル中以外は効果を見たりできません。

第5話　ｖｓタイタン　十代？引っこんでろ！相手は俺だ！（前書き）

今回は微糖分回です。

第5話　vsタイタン　十代?引っこんでろ!相手は俺だ!

リョウサイド

今俺達は廃寮に向かっている。
なぜかというと、それは数時間前にさかのぼる。

~回想~

ふぅ・・・実技授業を除けばやっぱり暇だな~。
やっぱり面白くなるのはゾンビ編ぐらいからか?

「お~い。リョウ。」

「どうしたロキ?」

「面白いもの見つけたんだ。来てくれよ」

「ああ、いいぞ」

「次の授業はどうするのかな?神帝君?」

「だれだって・・・天上院か」

「いい加減名前で呼んでくれない?」

「断る。それと次の授業は放っておく」

「成績落ちるわよ？」

「構わん」

歩くこと十数分
突然目の前に怪しい館が現れた。これが面白いものか。

「どう？リョウ？すげえ面白そうじゃね？」

「夜なら面白そうだが昼ではな・・・」

「なら夜来ようぜ」

「そうするか」

～回想終了～

今はもう真夜中だ。先生に見つかれば確実に退学だ。
それでもお構いなしに進んでいく。

バキッ

「キャアアアアアア」

「スクルド。このくらいでおびえてどうするんだ」

「だって・・・だって・・・ぐすっ」

まあ無理もないか。神界に夜なんて暗い時間はない。常に昼だしな。
それにスクルドは力を失った後は人間界に来たことはほとんどない。

「そうきつく抱きつかれても身動きが取れん。というわけで失礼」

「きゃっ／／／」

「おい、リョウ。頼むから俺たちの前で堂々とお姫様だっこするのやめてくれ」

「なんで？」

「まあ、いつものことではないか、ロキ」

「その通りだ。お前が慣れればよいではないか」

「トールもオーディンもひでぇ・・・」

「それにこれならまだましな方だろう？」

「え？そうなの」

「ああ。我も長い間こいつらを見てきたが、これならまだまだ軽い方だ」

そう。リョウとスクルドにとっては当たり前である。もっともスク

ルドはいまだに慣れ切ってはいないようだが。

「まあ、こうして話しているうちについたし」

さて・・・入るとするk「きゃあああああああ」

「今のは？」

「ん？リョウ達じゃねえか。どうしたんだこんなところで」

「それはこちらのセリフだ、十代。お前こそなぜここに（まあ知ってるけどね）？」

「大徳寺先生に教えてもらった。んで、帰ろうと思ってたら明日香の悲鳴が聞こえたから戻ってきた」

「ちなみに俺たちがここにいるのは昼間にロキがここを見つけたから来たんだ」

「って、こんな余裕ぶって話している場合じゃねえや、いくぞ、翔」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

返事がない。ただの石像のようだ。

「翔、翔！」

「っは！ごめん兄貴！」（これぐらいで砂糖吐くなんて・・・僕ど

れだけ悲しいんだろう）」

リョウは今もスクルドをお姫様だっこしていたのだった。
しばらく歩く。すると・・・

「待っていたぞ、遊城十代！」

そう聞こえたかと思うと、目の前には全身真っ黒な服を着て、仮面まで付けている男が一人いた。

「明日香を返せ！」

「この女にはお前をおびき寄せるえさになってもらった。返してほしければ、私と闇のデュエルをしろ！勝ったら返してやる」

「闇のデュエルだと！？」

闇のデュエルねぇ・・・

［おい、ロキ。こいつの言ってる闇のゲームってのは確かインチキじゃなかったか？］

［ああ。そうだよ。でも最終的には本物の闇のゲームになって、タイタンはいなくなっちゃうけどね。アハハハハハ］

「十代、引っ込め。こいつの相手は俺だ」

［ちょっと！リョウ！どうしたのさ］

［この人間に興味を持った。生かしてみる］

「なに?私はお前とデュエルする必要はない。だが・・・良いだろう。そこまで言うなら相手をしてやる」

「「デュエル」」

サイドアウト

ギャラリーサイド

「闇のデュエルってなんだよ?」

「十代、そんなことぐらいは知っとこうよ。闇のデュエルは負けた方の命が闇に食われるゲームだよ。簡単にいえばね」

「へぇ～って、リョウやばいじゃん」

「リョウなら大丈夫だよ（最高神だしね）」

「始まったッスよ」

サイドアウト

リョウサイド

「俺の先攻、ドロー。（この手札ではできることが少ない。ならば）俺はモンスターをセットし、さらにカードを5枚セット！ターンエンド」

リョウ
手札０
フィールド
セットモンスター１
伏せカード５

「事故でも起こしたか。私のターン！ドロー。フィールド魔法、パンディモニウム－悪魔の巣窟－発動！さらｎ「サイクロン発動。パンディモニウムを破壊！」くそぉ！ならば私はモンスターを伏せてターンエンドだ」

タイタン
手札４
フィールド
セットモンスター１

カードを伏せないのか・・・ッチ。もう少し楽しみたかったが仕方あるまい。

「俺のターンドロー。俺はモンスターを反転召喚！メタモルポット！こいつの効果で互いに手札をすべて捨てて、５枚ドローする。そして魔法発動！デビルズ・サンクチュアリ！こいつの効果でメタルデビル・トークン１体を特殊召喚する。２体のモンスターを生贄にトラゴエディア召喚！こいつの攻撃力は手札×６００ポイント、俺

の手札は４枚。よって攻撃力は２４００になる。さらに激流葬発動！フィールド上のモンスターをすべて破壊！」

十代サイド
はぁ？リョウ何やってんだ？自分のモンスターをわざと破壊するなんて・・・メタモルポットの時でもよかっただろ。
サイドアウト

「そして俺の手札にあるこのモンスターは俺のモンスターがカード効果で破壊されたときのみ特殊召喚できる！いでよ、機皇帝ワイゼル∞！さらに伏せカードオープン、リビングデッドの呼び声発動。効果でトラゴエディア復活！」

「なぁにぃ！？」

「ふん。闇のゲームを見せる前に終わってしまうとはな。機皇帝ワイゼルとトラゴエディアでダイレクトアタック！」

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ」

タイタン
ＬＰ４０００→１３００

「まあ、こんなものか。さて天上院は返してもらうぞ。十代、連れて行け」

「おう！」

「さて、タイタンだったか？もう行くがいい。俺は別にあいつらがどうなろうと知ったことではなかったがな。ではな」

ヒュオン！一瞬でリョウ達は消えた。いや、瞬間移動したのだ。

「なかなか楽しかったぞ、ロキ」

「あっそ。あんなに簡単に終わらせちゃって、全然楽しくなかったよ」

次は一体何が起こるんだったっけか？

ああ、制裁デュエルか。

第5話　ｖｓタイタン　十代？引っこんでろ！相手は俺だ！（後書き）

リョウｖｓタイタンでした。別に微糖分でも何でもなかったかな？
次回は制裁デュエル！

第６話　動き出す管理局！制裁デュエルの相手はこいつらなのか　前編（前書き）

今回から少しずつ管理局が動いてきます。

第6話　動き出す管理局！制裁デュエルの相手はこいつらなのか　前編

あの日の翌日。

クロノス教諭に廃寮に入ったことがバレて呼び出され、本当なら退学のところを制裁タッグデュエルとして処分すると言われた。なので、今はだれがだれと組むか考えている。

「なぁリョウ？シンクロ使っていいよな？」

「まあ・・・良いんじゃないか？」

「よーーし。ならこれをこうして機皇帝入れて送りつけて・・・・・・」

「我はできればオーディンと組みたいのだが・・・」

「デッキの相性はどうなんだよ？」

「わたしのデッキをトールに合わせればよいのではないか？」

「しかしグランエルは捨てがたいな・・・・・・」

「リョウはどうするんだ？やはり究極神で・・・」

「いや、今回は俺もシンクロを使う」

「スクルド。相手が誰だか見てくれないか？」

「うん。いいよ」

スクルドは未来予知ができる。相手が誰だかわかるのだ。

「えーと、三人娘たちだね」

「1人足りなくないか？」

「うーん・・・どうやらまた勝ち抜きでやるみたい。1人は余るからよくわかんないや」

「そうか、スクルド。ありがとう」

そう言ってスクルドに金のりんごを渡す。

「どういたしまして」

スクルドは笑顔で金のリンゴをほおばる。

「3対3か。ならロキ、トール、俺の順で行くとしよう」

「わたしはどうするのだ？」

「わからん」

わかるわけないだろう。オーディン。

「そうか。では早速神界からカードを持ってくるとしよう」

そういってオーディンが呪文を唱える。すると・・・

ドゴォォォォン

ブルー寮の前には巨大なカードの石板があった。当然、周りには生徒が殺到している。

クロノサイド

あの石板からロストロギア反応がある！急いで回収に行ってもらわなくては・・・

「聞こえるか？はやて」

「なんや？クロノ君」

「ブルー寮の前にある石板からロストロギア反応があった。急いで回収してくれ」

「わかった、ほないくで？フェイトちゃん、なのはちゃん」

「「うん」」

サイドアウト

「さて、早くしないと時空管理局が来てしまうだろうからな」

そう言って、何とか最前列に出た俺は、石板に手をかざす。すると、石板が壊れ、中からデッキがいくつか出てきた。デッキを取って、寮に戻る。

～1分後～

「おそかったね」

「うん。もうすでに回収されてた」

「でも、これでリョウ君たちは、ロストロギア所持で連行できる。これなら、結果オーライや」

「うん」

寮に戻って時間を待つ。途中、タッグデュエルとか言っておきながら勝ち抜きかよ、という疑問も出てきたが、スルーした。

翌日・・・

いよいよ今日か。

「行くぞ、お前たち」

「ああ」

「わかっている」

「腕が鳴る」

「リョウ。がんばって」

「わかっている。必ず勝つさ」

十代達のタッグデュエルは、原作通り終わった。

「ひさしぶりやな。リョウ君」

「・・・・・・・・・・。」

「あなたたちはすでにロストロギア所持の疑いがかかっています。
このデュエルが終わったらついてきてもらいます」

「お話、聞かせてもらうよ」

「ふん。遺言はそれだけか？ならば行くぞ」

「「デュエル」」

ロキｖｓなのは
ＬＰ４０００

ロキサイド

「俺の先攻ドロー！・・・アハハハハハハハハ！！！カードを３枚伏せてターンエンド！」

ロキ
手札３
フィールド
伏せカード３

「（・・・・・）わたしのターンドｒ「トラップ発動！ヘル・バインド！このカードが場に存在する限り、相手の場のモンスターの攻撃力は１５００ポイントダウンし、効果が無効になる！ただし、相手はスタンバイフェイズごとに１０００ポイントのライフを払うことで、エンドフェイズまでこのカードの効果を無効にできる！」っく・・・（やっぱりいきなり罠か・・・）私はモンスターをセット。さらにカードを２枚伏せてターンエンドだよ」

ロキ
フィールド
伏せカード２
ヘル・バインド

なのは
手札３
フィールド
伏せモンスター１
伏せカード２

「エンドフェイズにトラップ発動！柽梧の精霊！このカードは自分フィールド上に柽梧の精霊トークンを３体特殊召喚する。（レベル

1　攻守０　1体　レベル２　攻守０　1体　レベル３　攻守０　1体）このトークンが俺のエンドフェイズに存在する場合、俺は１体につき1回、以降のバトルフェイズを封じられる。そして俺のターン！俺はレベル１の桎梏の精霊トークンを生贄に捧げ、レベル５チューナー極星霊デックアールヴを召喚！」

「「「「「チューナーモンスター？？」」」」」

多くの生徒は驚いた。無理もない。見たことのないカテゴリのカードが出てきたのだから。

「いくぜ！レベル２の桎梏の精霊トークンとレベル３の桎梏の精霊トークンにレベル５の極星霊デックアールヴをチューニング！星界より生まれし気まぐれなる神よ、絶対の力を我らに示し世界を笑え！シンクロ召喚！光臨せよ、極神皇ロキ！」

「「「「「シンクロモンスター？？？」」」」」

やはり驚くのも無理はない。

「さらにトラップ発動！ロキの秘策！このカードは、自分の場に神属性のモンスターが特殊召喚されたときに発動。手札が7枚になるようにカードをドローする。そして手札の魔法カード、二重召喚を発動。このターンもう1度通常召喚できる。俺は、デコイ・ドールを召喚。デコイドールの効果発動！自分フィールド上のレベル１０シンクロモンスター1体を選択。このカードを破壊し、エクストラデッキから選択したシンクロモンスターと同名のカードをシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する！いでよ、極神皇ロキ！そして、俺の場のモンスターが破壊されたことで手札の機皇帝スキエル∞を特殊召喚！強制転移発動。極神皇ロキと、高町に伏せモンスターを交換

！」

（何をするつもりなの？ロキ君・・・・・・ん？あのモンスター・・・確か機皇帝って）

「機皇帝スキエル∞の効果発動！1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を吸収する。極神皇ロキを吸収！」

（！？だからロキ君はわざと私に極神皇を・・・・・・）

ロキ
手札４
フィールド
極神皇ロキ
機皇帝スキエル∞
＋極神皇ロキ
伏せモンスター１
ヘル・バインド
伏せカード１

「極神皇ロキでダイレクトアタック！ヴァニティーバレット！！」

「トラップ発動！聖なるバリアーミラーフォースー！」

「やった！これでロキの場は全滅、次のターンでなのはがどうにかすれば・・・」

「極神皇ロキの効果発動！攻撃宣言時、相手の発動した魔法、罠の効果を無効にして破壊する！」

「きゃあああああ（そんな効果があったなんて・・・でも・・・・！！）」

なのはＬＰ４０００→７００

「さらに機皇帝スキエルでダイレクトアタック！」

「きゃあああああ（なんでこんな衝撃（ダメージ）が！？）」

ＬＰ７００→－４８００

「ト、トラップ・・・発・・・動・・・永続罠・・フューチャーホープ・・・デッキから１枚選択して・・・フィールド上にセットする・・・」

なのは→フェイトＬＰ４０００
手札５
フィールド
フューチャーホープ
？？？（フューチャーホープで伏せたカード）

「なのは！！なのは！！大丈夫？？」

「うん・・・大丈夫・・・だよ。少しきつかったけど…がんばって。フェイトちゃん」

「うん」

「ハハハハハハハハハハ！恐怖を感じずに出てこれるなんてね」

少しだけ挑発する。怒らせれば、未知の力を発揮するのが人間だ。

「絶対、許さない！」

第6話　動き出す管理局！制裁デュエルの相手はこいつらなのか　前編（後書き）

次回に続く

リリカルファンの皆様ごめんなさい。作者は決して決して3人娘のことが嫌いなわけではありません。ただ、時空管理局があきらめるくらいには深手を負わせないと、こんな状態が続いてしまうので・・・・

動き出す管理局！制裁デュエルの相手はこいつらなのか　後編　（前書き）

後編です。リリカル勢もかなり強いデッキにはしました。オリカだらけですが・・・

ロキサイド

「絶対、許さない」

絶対許さない、か。アハッ、上等じゃん

「「デュエル」」

「お前もあいつと同じようにしてあげるよ。アハハハハハ」

「黙れ、私のターン！魔法カード、オーバーサモン発動。このカードはデッキの上から3枚目のカードの種類を当てる。当たった場合、デッキからモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚できる！私が宣言するのはモンスターカード」

1枚目、2枚目、3枚目・・・モンスターカード。

「当たりです。デッキから閃光の雷神を特殊召喚する。効果発動、デッキから1枚ドローしてその種類によって効果が決まる！ドロー。引いたカードはモンスターカード、よって戦闘する相手モンスターの効果を無効にし、攻撃力を１０００ポイント下げる。さらにこのカードはモンスター効果を受けない！「だが、ヘル・バインドの効果により攻撃力は１５００ポイントダウンし、効果は無効になる。」閃光の雷神の効果は無効化されない！「なに！？」いきます！閃光の雷神で極神皇ロキを攻撃！プラズマ・ジャッジメント！」

閃光の雷神　攻撃力３０００
極神皇ロキ　攻撃力３３００→２３００

「うわぁぁぁぁぁぁぁ・・・な、なんだこの衝撃は！！？」

というか、口調が変わったり、いつも通りになったり…感情の変化が激しいのか？

ロキＬＰ４０００→３３００

「まだだ！閃光の雷神がモンスターを破壊したとき、そのもともとの攻撃力分のダメージを与える！」

「なにぃ！？うわあああぁぁぁぁぁ」

ロキが４メートルほど吹き飛ぶ。

ロキＬＰ３３００→０
フィールド
機皇帝スキエル∞
＋極神皇ロキ
伏せカード１

「ぐ・・・あ・・・だ、だがエンドフェイズに極神皇ロキが復活する・・・効果でトラップを１枚手札に加える・・・意味はないけどね」

ロキ→トールＬＰ４０００
フィールド
極神皇ロキ

機皇帝スキエル∞
＋極神皇ロキ
伏せカード１

サイドアウト

トールサイド

まさかダメージが現実化するとはな。しかもロキがここまでダメージを負った・・・油断するわけにはいかん！

「「デュエル」」

「我のターンドロー。我は魔法カード、極星の輝きを発動！その効果で、デッキからレベル３の極星獣を２体特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚した極星獣の効果は発動しない。極星獣タングリスニ２体を特殊召喚する！さらにチューナーモンスター極星獣グルファクシを召喚、レベル３の極星獣タングリスニ２体と、レベル４の極星獣グルファクシをチューニング！星界の扉が開くとき、古(いにしえ)の戦神(いくさがみ)がその魔鎚を振り上げん。大地を揺るがし轟く雷鳴とともに現れよ。シンクロ召喚！光臨せよ、極神皇トール！」

極神皇トール　攻撃力　３５００

「さらにトラップ発動、ミョルニルの魔槌！このターン、極神と名のついたモンスター１体は２回攻撃ができる。我は、極神皇トールに２回攻撃させる。さらに破壊したモンスター１体につき１０００ポイントのダメージを与える！そして収縮発動。閃光の雷神の攻撃

力を半分にする。いくぞ、極神皇トールで、閃光の雷神を攻撃！サンダーパイル！」

ドガァァァァン！！

デュエルアカデミアのステージを、巨大な衝撃と轟音が包む。

「きゃあああ」

フェイトＬＰ４０００→１０００

「この痛みはなに？・・・」

「ハハハハハハ！極神皇トールでもう一度攻撃！サンダーパイル！」

ドオォォォォン

フェイトが吹き飛ばされる。

フェイトＬＰ１０００→－２５００

「うう・・・フューチャーホープの効果でデッキから1枚選択して伏せる・・・」

フェイト↓はやて

フィールド

フューチャーホープ

？？？

？？？

３人目か・・・この前よりか強くなっているはず・・・

「「デュエル」」

「わたしのターンドロー！フューチャーホープの効果発動！このカードを含めてこのカードの効果でフィールドに伏せたカードを全て墓地へ送り、魔法・罠・モンスターカードがそろっていたら、エクストラデッキから召喚条件を無視してモンスター1体を特殊召喚できる！私はシンクロモンスター極帝王エンフェルスを特殊召喚する！」

極帝王エンフェルス　攻撃力　？

「攻撃力が決まっていないだと！？」

「このカードの攻撃力は、デッキの上から5枚墓地へ送り、送られたモンスターの攻撃力の合計分になる」

「バカな！！」

「送られたのは、Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン2体とＳｉｎスターダスト・ドラゴン2体、あとは魔法カードやね」

極帝王エンフェルス　攻撃力　１５０００

「攻撃力１５０００だと！？」

「極帝王エンフェルスで、機皇帝スキエル∞に攻撃！エターナル・フレア！」

「ぬおぉぉぉぉぉぉ！！」

クッ…相性を無視してまで、攻撃力の高いモンスターをデッキに投入するとは…リョウならば確実に否定するなだろう。

トールＬＰ４０００→－５５００
フィールド
極神皇ロキ、トール

「く・・・すまない、リョウ。我の不覚だ・・・」

「気にするな。大した問題ではない」

トール→リョウＬＰ４０００

「ここで退学になるのはごめんなのでな」

「そんなこと知ったこっちゃない・・・このデュエルに勝って、ついてきてもらうで」

「ふん。俺を・・・いや、俺たちを倒せたらな」

「「デュエル」」

「俺のターンドロー・・・（まずいな。究極神でも純粋な戦闘ではかなわない・・・まだ機皇帝も来ていない・・・）俺はカードを３枚伏せる。極神皇２体を守備表示にしてターンエンド」

「わたしのターン、ドロー。極帝王エンフェルスで、極神皇トールを攻撃！エターナル・フレア！」

「ふん。意味のないことw「それはどうやろな?」なにっ!?「エンフェルスがモンスターを破壊したとき、相手にそのモンスターの攻撃力分のダメージを与える」ぐあっ・・・っく・・・「カードを１枚伏せてターンエンドや」エンドフェイズ、極神皇トールは蘇る。そして８００ダメージを与える。「きゃあっ」

はやて
手札６
フィールド
極帝王エンフェルス
伏せカード１
ＬＰ３２００

リョウ
手札３
フィールド
極神皇ロキ、トール
伏せカード３
ＬＰ５００

「ち・・・まさかここまでとは・・・ならば・・・・・」

そう言って俺は目を瞑る。そしてあけると、右目の本来白い部分が黒に、そして眼は左上半分を赤、左下半分を青、右半分が金色の∞の形になっていた。正直、ワンターンキルはしたくないが、ここで負けてもかなり面倒だ。歴史を改ざんするのも気が引けるしな。

「ここまで俺が本気になったのは久しぶりだな。行くぞ!お前に、次のターンはない!エンドフェイズ続行、終焉の焔発動!黒焔トー

クン2体を特殊召喚！そして俺のターンドロー！！俺はライフ半分と黒焔トークン2体と極神皇トールを生贄に究極神オシリス召喚！さらに、伏せカードオープン、デビルズサンクチュアリ×2、メタルデビルトークン2体を特殊召喚！俺のライフ半分と極神皇ロキ、メタルデビルトークン2体を生贄に、究極神オベリスク召喚！」

「そこまで出せたことはほめてあげる。だけど、1ターンで3体の究極神をそろえるのはさすがに不可能や！」

「ふん、俺も甘く見られたものだな。幻銃士召喚、銃士トークン2体を特殊召喚！」

「ま、まさか1ターン目のドローで神がすべてくるなんて・・・いったいどれだけ低い確率や・・・」

「3体の銃士とライフ半分を生贄に！降臨せよ、究極神帝ラー！！」

「まさかほんとにうちの次のターンが来ないなんてな・・・完敗や」

「究極神帝ラーで極帝王エンフェルスを攻撃！ジェノサイド・ゴッド・ブレイズ！」

「きゃあああああああ」

はやてＬＰ－∞

「勝者、チームリョウなノーネ。素晴らしいデュエルだったので、オーディン君のデュエルは免除なノーネ」

「・・・・・俺じゃなくてオーディン出せばよかった・・・・・・

」

「八神。勝ったのは我らだ。ついては行かないからな」

「・・・・・・・任務失敗やね」

動き出す管理局！制裁デュエルの相手はこいつらなのか　後編　（後書き）

後編でした。何この１キルゲー・・・

トールｖｓロキ　行き先決めでケンカ（前書き）

しょうもない理由でケンカを始めたようです

トールｖｓロキ　行き先決めでケンカ

リョウサイド

「海馬ランドだ！！」

「いいや、ドミノ町だ！！」

「いいや海馬ランドだ！！」

「いい加減にしろ、ドミノ町だと言っているだろう」

・・・なんでこんなことになっているんだ？

「いったいどうしたのだ？」

ナイス質問。オーディン。
スクルドとオレは何が何だか分からないからな。

「ぬ。オーディンか。聞いてくれ、ロキとともに出かけようとしているのだが、ドミノ町に行きたいというのに、ロキが聞かぬのだ」

「なにいってるんだ。聞いてくれないのはトールの方だろ！？海馬ランドで実物の社長を見ることは今しかできないんだ」

「武藤遊戯に会えるのも今しかないのだ！！」

「そんなの神の鏡を使って探せよ、社長は今日しかいないんだぞ」

「貴様こそ、直接本社に行って会えばよいではないか」

「許可取らないと会えないだろ！」

まあ、当然そうだな。

「一人で行けばよいだろう」

その通りだよ、オーディン。

「「1人ではつまらん！！」」

あほじゃなかろうか、こいつらは

「こうなったら」

「そうだな。貴様に言うことを聞いてもらうには決闘（やる）しかないだろうな」

「・・・もう馬鹿馬鹿しくなってきた。せっかくの休日なのに・・・スクルド、食事に行こう」

「うん♪」

そう言って腕に抱きついてくるスクルド。ああ、癒される。それに比べてこいつらときたら・・・普段は聞きわけがいいのにな。こういうことになると、決まってケンカするのがこの2人だ。

サイドアウト

オーディンサイド

・・・リョウ達も行ってしまったな。わたしはどうしたものか。

「「オーディン、立会人になってくれ」」

リョウめ、これを予知してスクルドとともに食事に行きおったな。

「・・・ふぅ、しかたあるまい」

2人の新デッキを見るにはちょうど良い機会だ。

「「デュエル」」

「忘れてないと思うけど、これは神々のデュエルだよ、トール。無傷で済むなんて思ってないよね」

「当然だ。神々の決闘では何が起こるかわからんからな」

こ奴らはわたしの前でここを砂漠にするつもりか。

「まて。普通のディスクでやれ。ここを砂漠にしたら、あとでリョウが怖いからな」

リョウの怒りはまずい。世界がいくつか吹き飛ぶだろう。

「ちぇ。ならしかたないね」

そう言ってディスクを学校支給の物にするロキとトール。これでいい。

「我の先攻ドロー、我は未来融合－フューチャーフュージョン発動。デッキから5体のドラゴン族を墓地へ送り、2回目の我のスタンバイフェイズにＦＧＤ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を特殊召喚する。さらに死者蘇生を発動し、墓地のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを復活。効果発動。1ターンに1度、手札または墓地のドラゴン族モンスターを1体、特殊召喚できる。我は青氷の白夜龍（ブルーアイス・ホワイトナイツドラゴン）を特殊召喚する。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

トールＬＰ４０００
手札３
フィールド
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
青氷の白夜龍
未来融合－フューチャーフュージョン（ＦＧＤ）
伏せカード１

「相変わらずのパワーバカだね。トール。君はそういうデッキしかないの？」

「早くしろ、お前のターンだ」

「ちぇ、無視かよ」

トールにはあまり挑発は効かないからな。

「俺のターンドロー・・・（アハハハハハ・・・これで俺の勝ちは決まったね・・・）モンスターをセットして、さらにカードを３枚セット。ターンエンドだよ」

ロキも相変わらずのトラップ戦術だな・・・

ロキ
手札２
フィールド
伏せモンスター１
伏せカード３
ＬＰ４０００

「我のターン！我は大寒波を発動！！」

「なにぃぃ！？（大寒波だと！？まったくもって予想外だ・・・）」

「さらに、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果により、墓地に存在するマテリアルドラゴンを特殊召喚する」

「おっと。バトルフェイズに入る前に手札のエフェクトヴェーラーの効果で、このカードを墓地に捨てて、このターンマテリアルドラゴンの効果を無効にするよ」

「ちっ。まあいい。レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで、伏せモンスターを攻撃！ダークネス・メタル・フレア！」

ロキのあの余裕・・・おそらくあのモンスターに秘策があるな。トールの不注意だ。

「アッハハハハハハハ！！！ひっかかったね！」

「どういうことだ？」こういうことだよ！！トールが攻撃したこのモンスターはダイスポットだ！」

「！！しまった！」

「こいつの効果はお互いサイコロを一回ずつ振るんだ。相手より小さい目が出たプレイヤーは、相手の出た目×５００ポイントダメージを受ける。ただし、６の目に負けたプレイヤーは６０００ポイントダメージを受けるんだ。引き分けの場合はやり直すけどね。」

ほう・・・ロキの奴まさか自分の異常な運を利用してギャンブルカードを使うとは・・・それほど海馬ランドに行きたいのだな。わたしも驚いたぞ。

「ほらトール。サイコロを振りなよ」

「くっ、わかっている。・・・出た目は５だ」

「じゃあ俺だね。・・・・・出た目は６だ！！アハハハハハハ！６０００ポイントのダメージだ！」

「ぐあああああああ」

トールＬＰ４０００→－２０００

「これで海馬ランドに決定♪」

「くそっ。しかたあるまい。約束は約束だ。海馬ランドにいくぞ」

これで一件落着なのだろう。

サイドアウト

～数分後～
ロキサイド

「着いたね。トール」

「ああ。では早速入るとしよう」

近くに瞬間移動して歩いてきたので、時間はほとんどかかっていない。

「ちょうど昼時だな。何か食べるか？」

「トール。君は戦いの神の1人のはずなのになんで1日3食もたべるんだ？」

戦いの神は基本的に1カ月に1回食事をとれば十分だ。

「さあな」

「ふーん。でも、先に社長に会いに行ってからだよ、すいません、お姉さん。海馬社長はどこですか？」

俺は受付のお姉さんにそう聞く。

「申し訳ありません、お客様。社長は１０分ほど前に急用ができたとかでお帰りになられました」

そ・・・そんな・・・ひどい。ひどすぎる。俺の苦労はなんだったんだ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・

・・・俺の本能が言っている。後ろを見ずに今すぐ逃げろと。よし、そうしよう。

ロキは逃げ出した。▼

ガシッ▼

しかし掴まれてしまった。逃げられない！▼

「ト、トール？なななななにかな？」

「フッフッフ。そんなにあわてるな。そんなひどいことをするはずがないだろう」

「だ、だよね～よかった」

「痛いのは一瞬だけだ、安心しろ。ロキ」

「全然よくねぇし！安心できねぇし！」

「いつものことだろう。ハアアアアアアアアア！！！極雷の

鉄鎚（サンダーパイル）！！！」

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！」

ロキの断末魔が海馬ランドに響いた。

サイドアウト

「ん？」

「どうしたの？リョウ♪」

「いや、ロキの声が聞こえた気がしただけだ」

トールｖｓロキ　行き先決めでケンカ（後書き）

普段はこんなことはありません。
たまーにたまーにあるだけです。
最後のトールの怒りは当然ですね。

オリカまとめ2（前書き）

オリカまとめ第2弾です。
ちなみに、今回から1人称がリョウが「オレ」でロキが「俺」になります。
理由は、なんとなく似合っているのと、紛らわしいからです

オリカまとめ2

ヘル・バインド
永続罠
このカードがフィールド上に表側表示で存在している限り、相手フィールド上のモンスターの効果はすべて無効になり、攻撃力が１５００ポイントダウンする。スタンバイフェイズごとに相手は１０００ポイントのライフを支払うことで、エンドフェイズまでこのカードの効果を無効にできる。エンドフェイズ時にこのカードが墓地に存在している時、手札を2枚捨てることで、このカードを墓地から発動することができる。

「おい作者」
なに？
「なに？じゃないよ。なんだよこのインチキカード」
いやだってさ。
「はぁ。もういいよ」

桎梏の精霊
通常罠
このカードはエンドフェイズ時のみ発動することができる。自分フィールド上に桎梏の精霊トークン（レベル1攻守０　レベル2攻守０　レベル3攻守０　闇属性　天使族）を各1体特殊召喚する。自分のエンドフェイズにこのトークンが存在している場合、1体につき1回、以降の自分のバトルフェイズをスキップする。

「デメリットは重いけど一気に3体召喚は強いね。レベルもバラバラで、シンクロのレベル調整にぴったりだし。実際、使いやすかったしね」

それはお前のデッキがそうゆうデッキだったからだろ。

デコイドール
レベル４　攻守０　地属性　機械族
自分フィールド上に存在するレベル１０のシンクロモンスター１体を選択して発動する。このカードを破壊し、エクストラデッキから選択したシンクロモンスターと同名のシンクロモンスターをシンクロ召喚扱いとして特殊召喚できる。

破壊と特殊召喚は同時処理です。
「だからスキエルを出せたんだな」

フューチャーホープ
永続罠
デッキから1枚選択して、魔法・罠ゾーンにセットする。この効果は1ターンに1度しか発動できない。このカードとこのカードの効果で伏せたカードをすべて墓地へ送る。墓地へ送ったカードの種類が3種類そろっていた場合、エクストラデッキからモンスター1体を正規の召喚扱いとして特殊召喚できる。

「強いの？」
効果は強いけど3ターンもこのカードがフィールドに残っているとは考えにくいね。

極帝王エンフェルス
レベル１２　攻撃力？　守備力０
チューナー2体＋チューナー以外のモンスター3体
このカードのシンクロ召喚成功時、デッキの上から5枚墓地へ送る。このカードの攻撃力は、この効果で墓地へ送られたモンスターの攻撃力の合計となる。このカードが戦闘によって相手モンスターを破

壊した場合、その元々の攻撃力分のダメージを与える。このカードは相手の魔法・罠・モンスターの効果では破壊・除外されず、コントロールも変更されない。

「召喚条件難しいね。というか、場に出たこのカードを戦闘以外の方法で除去る事できるの？」
ブリュでおｋ。
「夢がないね」
うるさいな。

オーバーサモン
通常魔法
デッキの上から3番目のカードの種類を当てる。当たった場合、デッキからモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚することができる。この効果によって特殊召喚されたモンスターが、効果によってフィールドを離れた場合、自分は２０００００ポイントのダメージを受ける。めくったカードはデッキに戻してシャッフルする。

「当たればかなり強いよね」
召喚条件が難しくてもどうしても使いたい！っていうモンスターがいたら助かるかもね。究極完全態グレート・モスとか。
「そんなの誰も召喚しないよ」
いや、いるでしょ１人ぐらい。

閃光の雷神
レベル１０
光属性　雷族　攻撃力３０００　守備力３０００
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する雷族モンスターのレベル合計が１０の場合のみ特殊召喚できる。このカードの効果は無効化されない。このカードの特殊召喚に成功したとき、デ

ッキからカードを1枚ドローし、その種類によって効果を得る。
●モンスターカード：このカードが戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にし、攻撃力を１０００ポイントダウンする。このカードはモンスター効果を受けない。
●魔法カード：このカードは魔法カードの効果を受けない。また、1ターンに2度まで相手の発動した魔法、または相手フィールド上で効果が適用されている魔法カードの効果を無効にし、破壊できる。
●罠カード：このカードは罠の効果を受けない。相手が罠カードを発動したとき、その効果を無効にし、相手のライフを半分にする。この効果が適用される度に、このカードの攻撃力は８００ポイントダウンする。

「これは強かった。あんな大口叩いておきながら、まさか自分のターンが来る前にやられるとは思ってなかったから」
正直、このカードの召喚条件、サンダードラゴン様があればすぐに満たせるんだよね。

極星の輝き
通常魔法
自分のデッキからチューナー以外の「極星」と名のついたレベル４以下のモンスター2体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は発動しない。この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊され、自分は破壊されたモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。

「トールはレベル3の極星獣って言ってなかった？」
まあ、トールのデッキは極星獣しか入ってないし。

「前回よりかは自重したね」
まあね。ちなみに、ここで紹介していないオリカはアニメで使われ

ています。

オリカまとめ2（後書き）

オリカまとめ2でした。
次回は　　が登場します。え？名前が見えない。誰が登場するのかって？
そりゃああの人でしょう。

第7話　ｖｓ空気&十代　なんで俺まで巻き込むのさ・・・というか十代、乱入しすぎ

今回はついに三沢（エアーマン）が登場！
みなさん、拍手でお迎えください。
今回リョウが使うのは、フルモンスターです。

第7話　ｖｓ空気&十代　なんで俺まで巻き込むのさ・・・というか十代、乱入

リョウサイド

朝から万丈目がうるさい。いったいなんだというんだ。スクルドが起きたらどうするんだ。

「う～ん・・・いったい何？」

・・・噂をすればなんとやらか。

「すまないスクルド。万丈目が騒がしいな。少し様子を見に行くか」

「別にいいよ。リョウ」

［おい、オーディン。今日は何かあったっけ？］

［今日は万丈目と・・・あれ、誰だったかな？ウォータードラゴンの人間がデュエルする日だ］

［ああ、そうか］

そういえばそんなこともあったな。

そうこうしているうちに、デュエル場についた。デュエル場では既にデュエルも最後の方だった。

「ウォータードラゴンで、ヘルバーナーを攻撃！アクア・パニッシ

ヤー！！」

「うあああああああああ」

万丈目ＬＰ０

と、一件落着かと思ったら、三沢がこちらを見た。

サイドアウト

三沢サイド

あれは・・・確か今現在この学園で最強と言われている神帝リョウ・・・面白い。せっかく会えたのも何かの縁だ。彼の実力を間近で見るのもいい。

「神帝君。ここで俺とデュエルしないか？」

サイドアウト

リョウサイド

・・・なるほど、そういうことか。まあいいだろう。そう思い、オレは一気にデュエル場にジャンプする。

「いいだろう。相手になってやる」

原作キャラとのデュエルって、初めてだったか？まあそんなことはどうでもいい。少しぐらいは楽しめるだろう。

「いくぞ！デュエｒ「ちょっと待った！」・・・・・なんだ十代」

十代サイド

お、三沢がリョウとデュエルするのか。オレまだあいつとデュエルしたことなかったな。よし、三沢の次に相手してもらおう。

「ちょっと待った！」「なんだ十代」

「次、俺の相手してくれよ」

サイドアウト

なるほどな・・・だが1回1回やっていてもな・・・こーゆうときは・・・

「いちいち1人ずつやるなど面倒だ。2人まとめてかかってこい！」

「「なに！？」」

普通の奴からみれば、2体1は圧倒的不利だろう。しかし、オレにとってはあまり関係ない。

三沢サイド

2人まとめてだと・・・あいつ、本気か？

「十代、どうする？」

「まあ、それでもいいか」

「そうか。ならいいだろ」

サイドアウト

ギャラリーサイド

おいおい、神帝の奴おかしくなったのか？

いや・・・でもあの神帝だ。あながちいい勝負になるかも・・・なら

「「「「「「「「「デュエル！デュエル！デュエル」」」」」」」」」

サイドアウト

デュエルコールが繰り返される。

「話はまとまったか？なら行くぞ！」

「「「デュエル」」」

リョウＬＰ４０００　十代ＬＰ４０００　三沢ＬＰ４０００

「先攻はオレだ。ドロー。ターンエンド」

リョウ
手札６
フィールド
カードなし

「神帝、カードを場に出さないのか？」

「見ていればわかる」

十代
手札３
フィールド
フレイムウィングマン
バブルマン
伏せカード１

「次は俺のターンだな。ドロー！バブルマンを守備表示で召喚！効果で２枚ドロー！さらに、融合発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！現れろ、フレイムウィングマン！カードを伏せてターンエンドだ。」

三沢
手札３

「よし、俺のターンだ。ドロー、ハイドロゲドンを召喚！カードを２枚伏せてターンエンド」

フィールド
ハイドロゲドン
伏せカード2

「オレのターン、ドロー。オレは手札の邪帝ガイウス、風帝ライザー、ヘルウェイ・パトロールの3体を捨てモンタージュドラゴンを特殊召喚。攻撃力は、捨てたモンスターのレベル合計×３００!よって攻撃力は４８００だ。さらに、墓地のヘルウェイ・パトロールの効果発動。このカードを除外し、手札の攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。バイサーショックを守備表示で特殊召喚!効果により、フィールド上に存在するセットされているカードを全て手札に戻す」

「なにい（ちくしょう、ドレインシールドが!モンタージュに狙われたらやばいぜ・・・）」

「くっ・・・（収縮とミラーフォースが・・・やるな・・・）」

「さらに墓地のガイウスとライザーを除外し、ダーク・シムルグを特殊召喚!ダークシムルグの効果によってお前たちはカードをセットすることはできない!」

「「くそっ」」

「いくぞ!ダークシムルグでフレイムウィングマンを攻撃」

「うわあ!フレイムウィングマン!」

「さらにモンタージュドラゴンでハイドロゲドンを攻撃する。パワーコラージュ!」

「うああ」

「ターンエンド」

三沢ＬＰ４０００→８００　十代ＬＰ４０００→３４００
手札５　手札４

リョウ
手札１
フィールド
ダークシムルグ
モンタージュドラゴン
バイサーショック

「俺のターンだ！ドロー！よし、強欲な壺を発動。２枚ドロー！クレイマンを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

十代
手札４
フィールド
クレイマン

「俺のターンだ。ドロー。オキシゲドンを召喚！収縮を発動！ダークシムルグの攻撃力をエンドフェイズまで半分にする！オキシゲドンでダークシムルグを攻撃！」

「チッ・・・だが、オレが戦闘ダメージを受けたことで、手札のトラゴエディアを特殊召喚する。このカードはオレが戦闘ダメージを受けた時に手札から特殊召喚できる。そして、こいつの攻撃力と守

備力は、自分の手札×６００ポイントの数値になる。もっとも、オレの手札は０だから攻守は０だがな」

「カードを１枚伏せてターンエンドだ」

リョウＬＰ４０００→３５５０
フィールド
モンタージュドラゴン
トラゴエディア
バイサーショック

三沢
手札３
フィールド
オキシゲドン
伏せカード１

「オレのターンドロー。・・・ん？来たな。３体のモンスターを生贄に捧げ、邪神アバター召喚！」

「なに（見たこともないカードだ・・・どんな効果があるんだ？）？」

「確かあのモンスターは・・・」

「邪神アバター効果発動。召喚ターンより相手ターンで数え２ターン、相手は魔法・罠を発動できない！さらにこのカードの攻守はフィールド上に存在する攻撃力の最も高いモンスター＋１００の数値になる！」

「なんだって！（融合が使えない・・・それに攻撃力の決定方法ずるいだろ！）」

「やはりか・・・」

「邪神アバターでオキシゲドンを攻撃！ダークネス・オキシ・ストリーム！」

「うわあ」

「ターンエンド」

三沢ＬＰ８００→７００
フィールド
伏せカード１

「俺のターンだ！！」

次回に続く

第7話　ｖｓ空気&十代　なんで俺まで巻き込むのさ・・・というか十代、乱入

次回、後半。お楽しみに！
三沢のデッキ内容がほとんど分からないので、ちょっとガチになってます。

ｖｓ空気＆十代　なんで俺まで巻き込むのさ・・・というか十代、乱入するな

後編です。三沢君があまり活躍できませんでした。ごめんなさい。

ｖｓ空気＆十代　なんで俺まで巻き込むのさ・・・というか十代、乱入するな

リョウサイド

「俺のターンだ！ドロー・・・（融合が封じられているのはまずい・・・どうにかしないと・・・）フレンドッグを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

十代
手札４
フィールド
フレンドッグ
クレイマン

「くっ・・・俺のターンドロー。俺はグリズリーマザーを守備表示で召喚する。ターンエンドだ」

三沢
手札３
フィールド
グリズリーマザー
伏せカード１

「次の三沢のターン終了時までお前たちは魔法・罠を発動することはできんぞ。オレのターンドロー。オレはモンスターをセットする。邪神アバターでグリズリーマザーを攻撃」

「グリズリーマザーの効果発動！デッｋ「説明は不要だ」グリズリ

マザーをデッキから特殊召喚」

「ターンエンド」

リョウ
手札０
フィールド
邪神アバター
伏せモンスター１

「俺のターン、ドロー・・・バーストレディを召喚！バーストレディで、伏せモンスターを攻撃！バースト・ファイヤー！」

「破壊されたキラートマトの効果発動。デッキからメタボ・サッカーを特殊召喚する」

「ターンエンド」

十代
手札４
フィールド
クレイマン
フレンドッグ
バーストレディ

「俺のターンドロー。グリズリーマザーを守備表示に変更。ターンエンド」

「このエンドフェイズ、邪神アバターの効果終了」

これで奴らは魔法・罠が使えるようになった。少々面倒だな。

三沢
手札４
グリズリーマザー
伏せカード１

しかし、予想以上に食らいついてくるな・・・面白い。ここまで骨のあるデュエルは実に久しぶりだ。

「オレのターン！メタボ・サッカーを生贄に、邪帝ガイウス召喚。効果発動！生贄召喚成功時、フィールド上のカード１枚を除外。除外したカードが闇属性だった場合、１０００ポイントダメージを与える。さらにこの効果にメタボ・サッカーの効果をチェーンし、メタボトークン３体を特殊召喚する。そして邪帝ガイウスの効果処理。オレが除外するのは、ガイウス自身だ！よってお前たちに１０００ポイントのダメージ！」

「うわあああああ」

「ターンエンド」

三沢ＬＰ７００→－３００

十代ＬＰ３４００→２４００

「三沢！！俺のターンだ！ドロー！よし、融合発動！手札のワイルドマンと、ネクロダークマンを融合して、ネクロイド・シャーマンを融合召喚、効果発動！特殊召喚成功時に相手モンスター１体を破壊しその後相手の墓地からモンスター１体を相手フィールド上に特

殊召喚する！邪神アバターを破壊！」

「ちっ・・・ここまでやるとは・・・」

「リョウの墓地から、メタボ・サッカーを特殊召喚！ネクロイド・シャーマンでメタボ・サッカーを攻撃！」

「おのれ・・・」

「ターンエンドだ」

十代
手札２
フィールド
フレンドッグ
バーストレディ
クレイマン
ネクロイド・シャーマン

リョウＬＰ３５５０→２４５０
フィールド
メタボトークン３

ちっ・・・ここまでくらいついてくるとは微塵にも考えていなかった・・・世界状況が変わってしまう恐れがあるが、まあいいだろう。

「オレのターン・・・ドロー・・・オレは、メタボトークン３体を生贄に幻魔皇ラビエルを特殊召喚する！幻魔皇ラビエルで、バーストレディを攻撃！天界蹂躙拳（てんかいじゅうりんけん）」

「うわあああああああ」

十代ＬＰ２４００→－４００

「ここまで食らいついてきたのは（人間の中では）お前たちが初めてだ・・・じゃあな」

サイドアウト

十代サイド

・・・くっそおおおお！２体１だったのに、負けちまった・・・

「でも、楽しいデュエルだったぜ」

「ああ、そうだな、俺はもう寮に戻って次のデッキを考えるよ」

三沢も行っちまったし、俺も次の相手を探そう。

サイドアウト

リョウサイド

オレが究極神のデッキを使っていないとはいえ、あそこまで押され

るとはな。こうでなくてはこの世界に来た意味がない。やはり楽しめそうだ。ＳＡＬに介入する必要はないな。

「今帰ったぞ・・・スクルド・・・いないのか？」

・・・ん？手紙？

『お嬢さんはあずかった。返してほしければ、ロストロギアを持ってミッドチルダに来い。　時空管理局』

ほうそうか。オレへの挑戦状だな・・・いいだろう。もうすぐ冬休みだ。オレに挑んだことを後悔させてやる。だが、お嬢さんと来てタメ口か。

「ね、ねえトール。なんかリョウが怖いんだけど・・・」

「わ、我もだ」

「どうしたのだ二人とｍ・・・リョ、リョウいったいどうしたのだ？」

「お前たちか・・・オレに挑戦したおろかものを潰しに行く」

「き、気をつけて、リョウ」

「ああ、わかってる」

ｖｓ空気＆十代　なんで俺まで巻き込むのさ・・・というか十代、乱入するな

次回、『ミッドチルダの大戦争』

第8話　ミッドチルダの大戦争（前書き）

今回はリアルファイトです。
リョウ＞＞＞＞＞＞＞超えられない壁＞＞＞＞＞時空管理局です。
なのはさん達は、デュエルアカデミアにいるためこの戦闘には参加しません。
スクルドをさらったのは、別の部隊です。

※デュエルはありません！

第8話　ミッドチルダの大戦争

リョウサイド

オレはデュエルアカデミアの森の中で自分の剣を構える。刃の部分が3メートルはあるであろう大剣だ。ただし、今は1メートルほどの長さになっている。空間移動のために空間を切るときはこの長さになる。

「はあっ！！」

空間が切れる。そして入る。

［おいゼウス、聞こえるか？］

［はい。久しぶりですね、リョウ］

［挨拶はいい。ある世界の主要組織をぶっ潰すけど、いいな？］

［わかりました。後のことはわたしに任せて、思う存分暴れてくるとよいでしょう］

［よし。では行ってくる］

オレが出たのは海の上だった。そこにはすでに・・・

「時空管理局だ！神帝リョウだな？今すぐにすべてのロストロギア

を渡し、武装を解除して投降しろ！」

お出迎えの準備は万全というわけか。しかも、魔法魔法言っているはずの管理局が、自ら違法とした質量兵器を使用するとはな。

「なら持ってみろよ」

そう言って究極神のカードを手に取らせる。すると・・・

「ぎゃあああああああああああ！！！」

神の力に人間が耐えられるわけがない。とたんに管理局員は消滅してしまった。

「ハハハハハハハハ！このオレに挑戦したことを後悔させてやる！」

そう言って、特異な形のディスクを創り、デッキをセットする。ディスク本体は、非常にコンパクトであり、ライフカウンターもかなり小さめのサイズであり、動きの邪魔にはならない。カードを召喚する部分は、黒いエネルギーのようなもので創られていた。といっても、ディスクそのものの色も黒だが。

「行くぞ！はぁっ！」

光速で剣を振る。斬撃が飛び、管理局員が真っ二つになる。

「貴様！！」

管理局員の放った砲撃がオレに直撃する。が、

「この程度か」

直撃したはずなのに、傷どころか、服すら汚れていない。
その後、オレはデッキからカードを5枚引く。そして、ディスクの手札置きに手札を扇形にしてセットする。そのあとに、カードを1枚手に取り、ディスクの黒い部分に、カードをセットする。

「デビルズサンクチュアリ発動！」

すると、メタルデビルトークンが現実化し、出現した。

「さらに幻銃士を召喚し、銃士が2体特殊召喚される」

「くっ・・・このっ」

そういって、管理局員はメタルデビルトークンに攻撃を仕掛ける。
しかし・・・

「うわあああああ」

メタルデビルトークンは破壊されたが、ダメージを受けたのは管理局員であった。当然だ。メタルデビルトークンが受けるダメージは、相手が受けるのだ。

「ふん。この程度でこのオレに挑むとは・・・がっかりだ・・・3体のモンスターとライフ半分を生贄に究極神オシリス召喚！」

ディスクに表示されているよくわからない形の文字が変化する。おそらく、８０００から４０００になったのだろう。

「くらえ！アルティメットサンダーフォース！」

「「「よっ・・・よけろおおおおお」」」

天空より降り注いだ雷砲が管理局員めがけて飛び、それを管理局員がかろうじてよける。その雷は、かなり離れているであろう大陸に着弾した。すると次の瞬間、着弾場所から爆発を起こし、大陸が消滅した。そしてそのあとに、超巨大な赤い龍・・・究極神オシリスが降りてくる。管理局の戦艦すらもアリに見えそうだ。

「「「た、退避、退避ーーーー」」」

管理局員が逃げ出すが、ケンカを売ってきた相手を逃してやるわけがない。

「アルティメットサンダーフォース！」

再び、オシリスの口から極太の雷砲が放たれる。何千もの管理局員が、一瞬にして消滅した。
エンドフェイズまでのターン処理を終えると次のカードがドローできる。

「ドロー」

その後、オレはミッドチルダ首都、クラナガンへと向かう。スクルドは地上本部にいるはずだ。

「エクス、カリバー！！」

「！！なにいっ」

一瞬反応が遅れ、直撃を受けた。だが、ダメージは少ししか負っていない。

「転生者（トリッパー）達か・・・」

オレは実際に転生するものに会うわけではない。そこらへんの処理は、すべて残っている４人、ゼウス、アテナ、ウルズ、ヴェルザンディが行うのだ。目の前にいるトリッパー達が、オレのことを知る由もない。フレイヤもいるが、あまり仕事はしない。というより回ってこない。

「転生させてもらった身でありながら、神に牙を向くとはな」

「神でも何でも、俺たちはこの世界を守るだけだ！あいつらの帰るべき場所を！」

フッ・・・あいつらとはおそらく高町達のことだな。その心意気は認めてやろう。

だが、我には譲れぬものがある。こいつらには悪いが、管理局は潰させてもらう。

もちろん、スクルドを取り返した後で、ゼウスに修復魔法を使ってもらうが。

「やって・・・みろお！」

次のカードを引く。そのあとに大剣を振るう。不可視の速度で何度も剣を振り、その斬撃は転生者達をとらえる。だが、転生者達もよけきれはしないものの、まだ軽傷で済んでいた。

「幻銃士召喚！銃士トークン2体を特殊召喚！さらに、ライフ半分と3体のモンスターを生贄に究極神オベリスクを特殊召喚！」

しかし戦況は一変する。呼び出されたオベリスクにより、周りの艦隊や局員が葬られていく。

インフィニティ・アイを使えば、オレの戦力はさらに増大する。が、スクルドまで潰してしまっては、元も子もない。オレはスクルドを助けに来たんだ。もっとも、オレが全力を出しても、究極神よりかは戦力は下だが。平常時のオレには超巨大な大陸を一撃でぶっとばすのは、多少つらい。

「エクス、カリバーーーーー！！」

転生者の1人が、究極神に全力で攻撃をたたきこむ。しかし、

「グオォォォォォォ・・・」

究極神は攻撃をものともせず、反撃する。

その隙に、スクルドのいる地上本部に向かう。

「ゴッド・アルティメット・ディストラクション！！」

オベリスクが拳からエネルギー波を放つ。ミッドチルダの半分ほどが消し飛んだ。

［ゼウス、あとでぶっ飛ばした管理局員と管理局以外の人間と建物、大陸は転生者含め蘇らせておけ。さすがに転生者達が浮かばれない］

［はい］

管理局の建物と管理局員を復活させないのは、再起の時間をかけさせるためだ。
もっとも、復活させない管理局員は、上層部と呼ばれる場所にいる奴らだけだが。
そしてオレは地上本部に突入する。

「そこまでだ、ＥＸ級次元犯罪者、神帝リョウ！！」

「神を犯罪者呼ばわりだと？言っておくが、オレたち神々にとっては人間の法は微塵も犯罪とは思えんものばかりなのでな」

そう言って、その局員を切り伏せる。実際そうだ。神々の犯罪は、世界を滅ぼした単位でようやく換算される。最高神界（リョウ達）は、その限りではないが。

～数十分後～

「ようやく見つけたぞ、スクルド」

「リョウ・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい」

「気にするな。帰るぞ」

そう言ってスクルドを連れ、外に出る。早くしなければ、増援が来る。

「アルティメットサンダーフォース」

管理局地上本部と、次元のはざまにある本局が消し飛んだ。
これでいくら時間軸がずれていたとしても、１週間はかかるはずだ。
そして、オレ達は、ＧＸの世界に帰った。

第8話　ミッドチルダの大戦争（後書き）

戦闘描写ってものすごく難しいですね。
みなさんが書けるのがすごいと思いました。
文才が欲しいです。
次回はテニス男（ナンパ男）の回です。

第9話　青春のデュエルテニス　は？テニス？させてあげると思ってるの？（前

今回はあのテニスの人とのデュエルです。
すいません。名前忘れました。

第9話　青春のデュエルテニス　は？テニス？させてあげると思ってるの？

リョウサイド

今日は体育の授業で野球をやるらしい。野球って何だ？ああ、ああいうふうに投げてきた玉を打ち返せばいいんだな？

「ハァァァァァァ！！」

勢いよく打ち返す。あれ？見えなくなってしまったな。少しやりすぎたか？よく見ると観客の顔が引き攣っている。オレの番がくると必ずホームランになってしまうので、それを見かねた教諭がオレを観客席の方に移動させる。・・・もっとやりたかったんだがな。代わりにテニスというものをやりに行こう。

「お疲れ様、リョウ」

「スクルｄ「ボクのためにわざわざ持ってきてくれたのかい？」おい貴様・・・」

「ん？なんだい君は？僕とこの女の子との仲を邪魔するのかい？」

「黙れ、人（神）の彼女に勝手に手を出すな」

「（リョウ・・・そこまでわたしのことを／／／）」

スクルドが赤くなっていろいろ考えているようだが、深く考えすぎ

だと思う。我の勘違いという可能性もあるが。

「いやいや、君の彼女って誰が決めたんだい？」

だめだ・・・こいつ、早く何とかしないと。埒が明かない。そう思い黙ってディスクを構える。当然だが、学校支給のディスクだ。すると相手もわかったようで、ディスクを構える。

「行くよ。君と僕で、彼女のフィアンセの座をかけて！！」

こいつ、物理的にメてやろうか。勝手にナンパしておいて、さらにフィアンセだと？

「言っておくが、オレが負けてもスクルドは自分自身の意思がある。オレに勝ったからといって、勝手に思い込むなよ」

「「デュエル」」

「先攻はオレだ。ドロー！魔法カード、コストダウン発動。手札１枚をコストにして、手札のすべてのモンスターレベルを2下げる。そして、レベルが４になったホルスの黒炎竜ＬＶ６を召喚。さらにレベルアップ発動。いでよ、ホルスの黒炎竜ＬＶ８！」

「な、なんだって～～～」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札１
フィールド

ホルスの黒炎竜ＬＶ８
伏せカード１

「ぼ、僕のターン・・・ドロー」

こいつ、明らかに最初とは違いやる気がなくなっている。そうか。こいつのデッキは魔法主体なんだな。お察しします。

「僕はメガ・サンダーボールを守備表示で召喚する。カードを１枚伏せてターンエンド（伏せカードはミラーフォース。これでＬＶ８を破壊できれば・・・）」

テニス部長
手札４
フィールド
メガ・サンダーボール
伏せカード１

「エンドフェイズにトラップ発動。王宮のお触れ。このカード以外の罠の効果はすべて無効になる。」

「そ、そんな～～～」

普段は絶対にこんな手段を取らない。だが、インフィニティ・アイを使って、伏せカードを見てみる。ミラーフォースか。残念でした。

「オレのターン、ドロー。ホルスの黒炎竜ＬＶ４を召喚。魔法カード、レベルアップ発動。来い、ホルスの黒炎竜ＬＶ６！ホルスの黒炎竜ＬＶ６で、メガ・サンダーボールを攻撃。さらにＬＶ８でダイレクトアタック」

「うわあああああ」

部長ＬＰ４０００→１０００
フィールド
伏せカード１

「ターンエンド」

リョウ
手札０
フィールド
ホルスの黒炎竜ＬＶ６、ＬＶ８
王宮のお触れ

「・・・・・僕のターンドロー・・・はぁ。メガ・サンダーボールを守備表示で召喚。ターンエンド」

あ～あ。もう諦めきってるよ。つまらんな。

「オレのターン。ホルスの黒炎竜ＬＶ６でメガ・サンダーボールを攻撃。そしてＬＶ８でダイレクトアタック」

部長ＬＰ１０００→－２０００

「僕が負けるなんて・・・うわあああああああああああああああん」

あ、〆る間もなく逃げられた。まあいいだろう。

スクルドサイド

・・・リョウが勝ったけど、フィアンセだなんて／／／
わたしはうれしいけど、でもいくらリョウがわたしのこと好きでいてくれてもそこまでは嫌なんだろうな・・・少し悲しい。既に結婚済みなのはいいけど、半ば強引に私からしたようなものだし…

サイドアウト

なんでスクルドは顔が赤くなった後に悲しそうな顔になるんだ？赤くなった理由は分かっても、悲しそうになった理由が理解できない。そんなことは今はいい。フィアンセか・・・オレはいいけどスクルドは既に結婚済みなのも含め、そこまで気に入ってくれてはいないだろうな・・・

「とりあえず、行こうか？スクルド」

「う、うん・・・」

～３０分後、部屋にて～

「ーーーーーーーーということがあったんだロキ。なんで悲しそうになったのか分からないか？」

スクルドは今は疲れ寝ている。なので、こういう相談をするのは今しかない。

ロキサイド

・・・はぁ。聞いてあきれるね。リョウ、君は神界でもトップの人気でモテモテなんだよ？スクルドが考えることなんていたって簡単。自分が釣り合っていないと思ってるに違いない。個人的には、もういい加減くっつけよって思うんだよなあ。でも、ここで教えちゃったらなぁ・・・ごまかそう。

ロキはまだ、この2人が結婚済みだということを知らない。この2人は確かに見た目はまだ結婚なんかしていない身なりだろうが、神界の中で最も長く生きている神々だ。

「自分で考えなよ。俺にはわからない」

サイドアウト

そっけない返事が返ってきたな。だが、しかたないだろう。

「そうか。まあいい。こんな相談のために時間を潰して悪かったな」

「良いよ。別に」

「そう言ってくれると助かる」

ロキでもわからないか。やはりこんな問題、オレだけで解決すべきなのだろう。

・・・次は確か、卵パン騒動だったな。介入する必要はないが、そ

の次の武藤遊戯のデッキとは戦おう。

第9話　青春のデュエルテニス　は？テニス？させてあげると思ってるの？（後

スクルドは次の日にはまたいつものように接しているでしょう。でも、頭の片隅には置いておくと思います。次回はＶＳ遊戯デッキです。

第１０話　ｖｓ遊戯デッキ！　粉砕☆玉砕☆大喝采（前書き）

遊戯デッキと戦います。粉砕☆玉砕☆大喝采！！　ワハハハハハハ

第１０話　ｖｓ遊戯デッキ！　粉砕☆玉砕☆大喝采

リョウサイド

「リョウ、今日は武藤遊戯のデッキが展示される日だよ」

「ああ、そういえばそんなこともあったな。整理券もらいに行くか」

「その必要はないよ。もう俺がもらってあるから」

「ありがとう」

今日は遊戯デッキを展示する日。確か神楽坂に盗まれて十代が勝って取り戻したんだろう。だが、今回も十代にやらせてやるつもりはない。

～～～～その夜～～～～

「よし、そろそろ行くか」

「アハッ、そうだね」

「スクルド、どうする？行くか？」

「え？わ、私？もちろん行くよ。リョウと一緒だし♪」

「じゃあいくぞ」

しばらく歩いて海岸に来ると・・・

「うわあああああああああ」

やはり丸藤の悲鳴か。

「どうした、翔」

思った以上に十代が早かったな。

「すごい。この俺がこんなに強くなってる！」

・・・なんだこいつ。強いのはお前じゃなくて、デッキだろ。

「神楽坂！？」

三沢、久しぶりだな。いろいろと。

「早くデッキを返せ！騒ぎが大きくなる前に！」

「断る」

ほう。神楽坂、度胸あるな。退学の危機すらあるというのに。

「なら、俺とデュエルして、俺が勝ったらデッキを返せ！」

「いいだｒ「待て十代。デュエルするのはこのオレだ」お前は神帝！オレの相手はお前で決まりだ！」

「え～～俺だって遊戯さんのデッキとデュエルしたいのに・・・」

「ここをお前に譲るわけにはいかん」

無意識のうちに十代に理由をすりこませる。

「そういうことならまあいいぜ・・・」

「「デュエル！！」」

「オレのターンドロー。オレはチューナーモンスター、伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）を守備表示で召喚。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「久しぶりに見たな、チューナーモンスター。どんな効果があるんだろうか？」

三沢、自分の出番稼いで偉いぞ。オレはお前のことを多少なりとも気に入っているからな。

リョウ
手札4
フィールド
伝説の白石
伏せカード1

「俺のターンドロー！俺は熟練の黒魔術師を召喚！攻撃だ！」

「トラップ発動、ツイン・ボルテックス。相手の攻撃宣言時に、自分のモンスター1体と相手モンスター1体を破壊する」

「させるか！速攻魔法、ディメンション・マジック！熟練の黒魔術師を生贄に、ブラックマジシャン召喚！！さらにディメンション・マジックのもう一つの効果で、伝説の白石を破壊！」

「伝説の白石の効果発動。このカードが墓地へ送られたとき、デッキから青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）を手札に加える」

「ばかな！ブルーアイズは海馬瀬戸の持つ3枚のみのはず！なぜお前が持っている！？」

「さあ、なんでだろうな？ククククク」

「くっ・・・ブラックマジシャンでダイレクトアタック！黒・魔・導（ブラック・マジ・ック）！」

「ちっ」

リョウＬＰ４０００→１５００

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

神楽坂
手札２
フィールド
ブラックマジシャン
伏せカード１

「オレのターン。オレは手札の沼地の魔神王の効果発動。こいつを手札から捨て、デッキから融合を手札に加える。融合発動！3体の

ブルーアイズを融合し、現れろ！青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）！！」

「なっ！？ブルーアイズだけではなく、アルティメットまで！？」

「ハハハハハハハハハハ！！アルティメット・ドラゴンで、ブラックマジシャンを攻撃！アルティメット・バースト！！！」

「させるか、トラップ発動！聖なるバリアー ミラーフォース ー！」

「ああ、アルティメットが破壊されちゃう！」

丸藤、お前はどうしてそう心配性なんだ。

「速攻魔法、融合解除。アルティメットの融合を解除し、3体の青眼（ブルーアイズ）を特殊召喚」

「くそぅ」

「馬の骨の対価を発動。オレのフィールド上に存在する、効果モンスター以外のモンスター1体を墓地に送り、2枚ドローする。カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「リョウ、今のプレイングを見たら、海馬社長めちゃくちゃ怒ると思うよ」

ロキが思わずツッコミを入れた。

当然だ。青眼が「馬の骨」と称されてしまった事になるのだから。

「どうでもいいことだ」

オレはそう返す。オレには関係ない。

リョウ
手札０
フィールド
青眼２
伏せカード２

「オレのターン！強欲な壺を発動。２枚ドロー！！魔術の呪文書をブラックマジシャンに装備！攻撃力７００ポイントアップ！ブルーアイズに攻撃！黒・魔・導（ブラック・マジック）！」

「ちっ、ブルーアイズが・・・」

「ターンエンド」

神楽坂
手札３
フィールド
ブラック・マジシャン
＋魔術の呪文書

「オレのターン！オレは強欲な壺を発動、２枚ドロー。闇の量産工場を発動し、墓地の青眼２体を手札に加える。さらに伏せカードオープン、トレードイン。手札のレベル８モンスターカオス・ソルジャーを墓地へ送り、２枚ドロー。そして、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）発動！フィールドまたは墓地から、素材を除外し、ドラゴン族の融合モンスター１体を特殊召喚する！」

「バカな！？お前のフィールドと墓地では、アルティメットは出せ

ないぞ！」

「誰がアルティメットを出すといった？墓地の、沼地の魔神王と、カオス・ソルジャーを融合！降臨せよ、究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）！！」

カオスソルジャーが乗ったアルティメットドラゴンが現れる。

「攻撃力５０００だと！！」

「それだけではない。オレのフィールド上の、他のドラゴン族モンスター１体につき、さらに５００ポイント攻撃力が上がる。よって、攻撃力は５５００だ。行け、究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）！ブラックマジシャンを攻撃！ギャラクシー・クラッシャー！！」

「うあああああ、ブ、ブラックマジシャン・・・！！だが、魔術の呪文書の効果で１０００ポイントライフが回復する」

神楽坂ＬＰ４０００→１７００→２７００

「さらに、ブルーアイズでダイレクトアタック！滅びのバーストストリーム！！」

「手札のクリボーを捨てて、ダメージを０にする。ありがとう、相棒。さすが俺が数千枚の中から選んだカードだぜ」

「「「「「いや、違うでしょう」」」」」

鋭いツッコミだな。クリボーも困った顔をしてるしな。

「それにしてもすごい。２人とも、まったく譲らない」

「ああ、俺も遊戯さんのデッキと戦いたかったぜ」

「2人のタクティクスは常人の物ではないわね」

「まあ、そこはリョウだからね。何をするかなんて俺にもわからないよ。アーハッハハハハ」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札2
フィールド
究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）
伏せカード1

「俺のターンドロー！手札断殺発動。互いに手札を2枚捨て、2枚ドローする。・・・きたぜ。ワタポンを特殊召喚！ワタポンを生贄にブラックマジシャン・ガールを守備表示で召喚！」

「かわいい・・・ぼく、彼女のことだけは応援しちゃおうかな～」

「なにいってるんだ・・・」

「だって、今夜限りの恋かもしれないんスよ」

「まあそれはそうだけどね。アハハハハ」

神楽坂
手札0
フィールド

ブラックマジシャン・ガール

「オレのターン、ドロー。オレはカードを伏せる。さらに、命削りの宝札発動。自分の手札が5枚になるようドローし、5ターン後、手札を全て墓地に置く。5枚ドローだ。魔法発動、闇の量産工場。再び2体の青眼(ブルーアイズ)を手札に加える。伏せたカードを発動!融合!今再び降臨せよ、青眼(ブルーアイズ)の究極竜(アルティメット・ドラゴン)!!カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「え?攻撃しないんスか?」

「どうした?この程度か?武藤遊戯のデッキは?だとしたらがっかりだ」

とどめをさすのは青眼だ。究極竜ではない。

リョウ
手札2
フィールド
究極竜騎士(マスター・オブ・ドラゴンナイト)
青眼の究極竜(ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン)
伏せカード2

「くっ・・・俺のターン、ドロー・・・!!天よりの宝札!互いに手札が6枚になるようにドローする。俺は6枚ドロー。「オレは4枚だ」さらに、死者蘇生発動!ブラックマジシャンを復活!千本ナイフ(サウザンド)を発動!究極竜騎士(マスター・オブ・ドラゴンナイト)を破壊!」

「やるな・・・」

「速攻魔法、光と闇の洗礼!ブラックマジシャンを生贄に、混沌の

黒魔術師を特殊召喚する！効果で墓地の魔法カード1枚を手札に加える！天よりの宝札を手札に！もう1度発動し、4枚ドロー！！」

「神楽坂の奴、よくあそこまで他人のデッキを扱うことができるな・・・」

「そして、墓地の光属性と闇属性のモンスターを除外！」

「なに！？」

「そんなカード・・・いや、あった！それが入ってるか入ってないかで、勝敗がきまるほど巨大な力があるカードだ。1枚はその凶悪な効果故禁止になったカードの混沌帝龍（カオスエンペラードラゴン）－終焉の使者－、もう1枚は禁止カードにこそなってないが、それと対をなすカード、カオス・ソルジャー－開闢の使者－だ」

「その通り！いでよ！カオスソルジャー－開闢の使者－！！」

でてきたな・・・こいつを待ってたんだ・・・こいつを倒し、そのうえでとどめを刺してやる！

だが、一つだけ訂正すれば、光と闇のモンスターを除外し特殊召喚するのはこの2体だけではない。カオス・ソーサラーもいる。

「効果発動！このターンこのカードの攻撃を封じる代わりに、相手モンスター1体を除外する！究極竜（アルティメット・ドラゴン）を除外！カードを1枚伏せてターンエンド」

神楽坂
手札４
フィールド

カオスソルジャー―開闢の使者―
混沌の黒魔術師

「フフフフフ・・・ハハハハハハハハハハハ」

「なにがおかしい？」

「いや、おかしいのではない。ここまで楽しめた(互角だった)デュエルは今までほとんどなかったのでな」

オレが本気を出すと、たとえそれがどんなデッキでも簡単に倒されてしまう。無論、究極神抜きでもだ。ここまでオレ相手に渡り合える奴は久しぶりだ。

「行くぞ！ラストターン！ドロー！！オレは装備魔法、Ｄ・Ｄ・Ｒを発動。手札１枚をコストに、ゲームから除外されているオレのモンスター１体を特殊召喚する！いでよ、究極竜(アルティメット・ドラゴン)！！アルティメット・ドラゴンで、カオスソルジャー―開闢の使者―を攻撃！そして、融合解除発動！現れろ！３体の青眼(ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン)の白龍！！滅びのバーストストリーム！３連打ァァ！！！」

「ぐあああああ」

神楽坂ＬＰ２７００→１２００→１０００→－５０００

「強靭・無敵・最強！粉砕・玉砕・大喝采！ハハハハハハハハハハハハ！！！！！」

「リョウ・・・ノリノリだね♪」

「そうだね。あそこまで楽しそうにしているリョウを見たのはかなり久しぶりだよ」

「やっぱり、俺に才能はないのか・・・」

「いや、そうでもないさ」

そう言って現れたのは、リョウに瓜二つの男、アカデミアのカイザー、丸藤亮だった。

「俺たちも、一足早くデッキを見ようとして行ったら、デッキがなくなっていた。止めようとしたが、二度と見れないと思ったからな。それに、見ていたのは俺達だけではないようだ」

神楽坂はそう言われ周りを見る。すると・・・

「すごいデュエルだったぞ、神楽坂!!」

「お前、見直したぜ」

「とてもいい勉強になったよ」

フ・・・これでいいのだろう。そう思い戻ろうとすると

「神帝君、すごかったですね」

「校長先生・・・」

何か用でもあるというのか?ブルーアイズについて聞かれたらかなり面倒だ。

「あのデュエルは、本当に見事だったノーネ。感動して、泣きそうになったノーネ」

「そうだ、神帝もすごかったぞ！」

「あんなにたくさんの伝説のモンスターたちを見れたんだ。ありがとう」

「次は俺とデュエルしてくれ、神帝」

考えすぎか。

「・・・先生、少し相談があります。今回のデュエルを見れなかった生徒もいたことでしょう。ですので、明日、もう1度神楽坂とオレで、正式なデュエルをさせてもらえないでしょうか？」

「そういうことなら、喜んで。私も最初から見ていたわけではありませんからね」

「ありがとうございます」

～～～次の日～～～

デュエル場は、フリーデュエルではアカデミア始まって以来の満席だった。

デュエルはリョウの勝ちだったが、両者ともに互角の戦いを見せ、会場は白熱していた。

ブルーアイズとブラックマジシャンが戦うその場面を生で見れたことも相まって、会場は歓声に包まれた。リョウと神楽坂は、そのあとに次々にデュエルを申し込んできた生徒や先生とデュエルし続け、その夜は神楽坂は疲れて寝たという。リョウは戦いの神であるため、このぐらいでは疲れない。

このデュエルの神楽坂の勝利数が多く、オベリスクブルー入りが決まったりもした。

リョウはなぜブルーアイズを持っているのか、という質問がたくさん来て、困ったりもしたが、「ペガサスに作ってもらった」という返答で返した。海馬とペガサスにも連絡し、そういうことにしてもらった。今度社長自らデュエルを挑みにくるそうだが。

第１０話　ｖｓ遊戯デッキ！　粉砕☆玉砕☆大喝采（後書き）

いかがでしたか？ｖｓ遊戯デッキ。
神楽坂は、以降も出続けたりします。個人的に気に入っていたりするので。
次回、社長ｖｓ神帝リョウ　お楽しみに！

第１１話　社長ｖｓ神帝リョウ　前編　～青眼の対立～（前書き）

社長とリョウがデュエルします。前編は青眼ｖｓ青眼です。

第11話　社長ｖｓ神帝リョウ　前編　～青眼の対立～

リョウサイド

・・・なんでオレの体が動かない??・・・すぅすぅ・・・

そうか、スクルドか。スクルドの腕をどかして、起きる。

【神帝リョウ君。今すぐに校長室に来てください。お客様がお見えになっています】

館内放送が聞こえる。オレに客人?まあいいか。

歩くと時間がかかるので、瞬間移動する。客人を待たせるのは好きではない。

「ふぅん。早かったな」

・・・そうか、この人か。そういえば来るとか言ってたな。

～～回想～～

「海馬瀬戸だな?」

「誰だ貴様は」

「信じないとは思うが、神だ。と、そんなことはどうでもいい。オレはブルーアイズを持っている」

そう言って見せる。すると・・・

「どうやら、神であるというのは本当のことらしいな。でなければ青眼を持っていることの説明がつかん。それで、なんのようだ？」

「ブルーアイズをデュエルアカデミアで自由に使っていいか聞きたいだけだ」

「ふぅん。勝手にしろ。・・・明日、この俺自らデュエルアカデミアに行く。そこで俺とデュエルしろ！どちらがよりブルーアイズにふさわしいか勝負だ」

「わかった。待っているぞ。海馬」

～～回想終了～～

今思えば、非現実的なことを信じないはずの海馬が信じたのは、どのような風の吹き回しだろうか。

「待っていたぞ。では行くとしようか」

そしてオレ達はデュエル場につく。

「「「「「ワアアアアアアア」」」」」

・・・なんで満席なんだ？このことは誰にも言ってなかったはず・・・

「わたしがいったのだ」

オーディン、なぜそんなことをする・・・

「名勝負を皆にも見せてやりたいと思っただけだ」

心を読むな。しかも、名勝負になるかどうかなどわからない。

「まあいいさ、ところで海馬、オレにはいくつかデッキがある。ブルーアイズ戦が俺の敗北で終わったら、オレの最強のデッキとデュエルしないか？」

「ふぅん。面白い。そのデュエル、受けて立つ！」

「そうこなくてはな」

「「デュエル」」

「先攻は俺がもらうぞ。ドロー！ブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚！カードを2枚伏せターンエンド！」

海馬
手札3
フィールド
ブラッド・ヴォルス
伏せカード2

「オレのターン！オレは融合を発動！手札の沼地の魔神王とカオスソルジャーを融合し、いでよ、究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）！究極竜騎士でブラッドヴォルスを攻撃！ギャラクシー・クラッシャー！！」

「収縮発動！ブラッド・ヴォルスの攻撃力を半分にする！さらに、死のデッキ破壊ウイルスを発動！」

「！！なんだとっ！！」

「死のデッキ破壊ウイルスは、貴様の手札とフィールド上の攻撃力１５００以上のモンスターをすべて破壊する。その後、相手ターンで数えて3ターン、相手がドローしたカードすべてを確認し、１５００以上のモンスターをすべて破壊する」

「くっ（さすがにまずい・・・）オレは手札のブルーアイズ2体も破壊されている・・・カードを1枚伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札０
フィールド
伏せカード１

海馬
手札３
フィールド
無し

「俺のターン！ドロー！フフフフハハ・・・ハーハッハッハッハ。融合発動！手札の3体のブルーアイズを融合！これぞ青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）だ！！くらえ！！アルティメット・バースト！！」

「トラップ発動、正統なる血統！ブルーアイズを攻撃表示で特殊召喚！」

「ならばブルーアイズに攻撃だ！」

「ぐあっ・・・」

リョウＬＰ４０００→２５００

くそ・・・まずいな・・・

「ターンエンド」

海馬
手札０
フィールド
青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）

「オレの・・・ターン・・・ドロー。よし！天よりの宝札発動！互いに手札が６枚になるようにドローする！互いに手札は０！よって６枚ドロー！「だが、死のデッキ破壊ウイルスの効果で、１５００以上のモンスターを破壊する！」オレの手札には、カオス・ソルジャーと青眼の２枚だ。そして龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動し、墓地のカオスソルジャーと沼地の魔神王を除外し、来い！究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）！！」

なんかオレもチートドローだな・・・ロキの運が移ったか？

「もう１枚龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動し、墓地の３体の青眼を融合し、青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）を守備表示で召喚！」

守備で出したのは、次のターンのため・・・このカードで返り討ち、もしくは相殺するための・・・

「カードを伏せ、究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）で青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）を攻撃！ギャラクシー・クラッシャー！！」

「くっ・・・俺の究極竜（アルティメット・ドラゴン）が・・・」

海馬ＬＰ４０００→３０００
手札６

リョウ
手札０
フィールド
青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）
究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）
伏せカード２

「俺のターンドロー。俺は、死者蘇生を発動！よみがえれ、アルティメット・ドラゴン！さらにアルティメットを生贄に捧げ、手札から特殊召喚！」

「なに・・・？（あの召喚条件は・・・確か）」

「全てを消し去る光の龍！青眼の光龍（ブルーアイズ・シャイニング・ドラゴン）！このカードの攻撃力は、自分の墓地のドラゴン族モンスター１体につき３００ポイントアップする。よって攻撃力は４２００。だが、手札抹殺発動！手札をすべて捨て、その枚数分だけドローする！今ので墓地に送られたのはすべてドラゴン族モンスターだ。攻撃力が５４００になる！行け！相手のアルティメットを粉砕するのだ、シャイニング・バースト！！」

「させるものか！トラップ発動！デストラクト・ポーション！アル

ティメットを破壊し、４５００ポイントライフを回復する」

「ならば究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）に攻撃！」

「ちっ」

「カードを２枚伏せターンエンド」

リョウＬＰ２５００→７０００→６６００

海馬
手札２
フィールド
青眼の光龍（ブルーアイズ・シャイニング・ドラゴン）
伏せカード２

生徒たちは、既にデュエルに魅入っていた。

「オレのターン・・・ドロー・・・ドローしたのは攻撃力２８００の光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）。よって破壊される。だが、効果発動！このカードが破壊され墓地へ送られたとき、オレのフィールド上のすべてのカードを破壊し、墓地からモンスター１体を特殊召喚する。こい、青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）！これがオレにできる最大の手段。ターンエンドだ」

リョウ
手札０
フィールド
青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）

「ブルーアイズで俺に挑みここまでもったことをほめてやる。だが

！ブルーアイズの真の主はこの俺をおいてほかにはいない！俺のターン！伏せカードオープン、魂の開放！俺の墓地の青眼（ブルーアイズ）3体を除外！」

「青眼の光龍（ブルーアイズ・シャイニング・ドラゴン）　攻撃力５４００→４５００

「青眼の光龍（ブルーアイズ・シャイニング・ドラゴン）でお前の究極竜（アルティメット・ドラゴン）に攻撃！シャイニング・バースト！」

「迎え討て！アルティメット・ドラゴン！アルティメット・バースト！！」

「「ぐあああああ」」

「だが、まだ俺のバトルフェイズは終わっていない！トラップ発動！異次元からの帰還！帰還せよ！３体のブルーアイズ！くらえ！バーストストリーム！」

「うおおおおおおおおおおおお」

リョウＬＰ６６００→－２４００

・・・わあああああああああああああ！！！！！

生徒から歓声が上がり、拍手も鳴りだす。

生徒サイド

・・・あの神帝が負けた・・・すげぇ！すげぇよ！いくら神帝の奴が究極神を使ってないとはいえ、あの神帝を倒したんだ！やっぱり

海馬さんは強い！

サイドアウト

バカな・・・オレが負けた？

「そんなバカな・・・・・・！！」

「ワハハハハハハハハ！！粉砕☆玉砕☆大喝采！！」

「1戦目は海馬瀬戸さんの勝利ナノーネ。2戦目まで、少し休憩するーノ」

生徒サイド

え？2戦目？よくわからないけど、いい勝負にはなりそうだ。

サイドアウト

第１１話　社長ｖｓ神帝リョウ　前編　～青眼の対立～（後書き）

どうでしたか？リョウの初敗北。やっぱり、真の主には勝てませんでしたね。
次回『社長ｖｓ神帝リョウ　後編　究極神召喚！』お楽しみに！・・・
・たぶん、デュエル自体は長くならないと思います。なにしろ、チートカードですから。

社長ｖｓ神帝リョウ　後編　究極神召喚！（前書き）

このデュエルの行方は・・・大いなる蟹の味噌汁

社長ｖｓ神帝リョウ　後編　究極神召喚！

リョウサイド

［ゼウス、もしかしたら、当たりかもしれない］

［そうですか・・・久しぶりですね。当たりが出るのは］

［ああ。ま、それもこのデュエルの究極神帝のとどめでわかることだ］

「待たせたな、海馬。行くぞ！」

「ふぅん。行くぞ！」

「「デュエル」」

「オレの先攻ドロー。カードを2枚伏せる。ターンエンド」

リョウ
手札４
フィールド
伏せカード２

「俺のターンドロー！ふぅん、融合を発動！いでよ、アルティメット・ドラゴン！」

「トラップ発動、激流葬！モンスターがフィールド上に召喚・反転召喚・特殊召喚されたときに発動。フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

「おのれぇぇぇぇ・・・ターンエンド！」

「速攻魔法、終焉の焔。黒焔トークン2体を特殊召喚。そしてオレのターン、ドロー。デビルズ・サンクチュアリを発動。メタルデビルトークンを1体特殊召喚。3体のモンスターと、ライフ半分を生贄に降臨せよ、究極神オシリス！ターンエンドだ」

リョウＬＰ４０００→２０００
手札３
フィールド
究極神オシリス

「なぜ攻撃をしない！？」

「ここでとどめを刺せば、このデュエルの意味がなくなる。海馬、お前の前にいるのはさっきの一人の男ではない。神だ！」

厳密には男ではないがな。

「ふぅん、その言葉、後悔させてやる。俺のターンドロー。死者蘇生を発動！アルティメットを守備表示で特殊召喚！」

「究極神オシリス、効果発動。極雷砲！相手モンスターが召喚・特殊召喚したモンスターの攻守を２０００ポイントダウンさせる」

「くっ、俺のアルティメットが・・・ターンエンド！」

海馬
手札２
フィールド
青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）

「オレのターン。幻銃士を召喚！効果発動、２体の銃士トークンを特殊召喚！３体のモンスターとライフ半分を生贄に降臨せよ！究極神オベリスク！！ターンエンド！」

リョウＬＰ２０００→１０００
手札２
フィールド
究極神オシリス
究極神オベリスク

「くっ・・・どこだ？お前のモンスターはどこにいる？」

「すぐそばの上空に浮いているさ」

「・・・俺のターンドロー。カードを１枚伏せターンエンド」

海馬
手札２
フィールド
青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）
伏せカード１

「オレのターンドロー！オレは「速攻魔法、死者への供物！フィールド上のモンスターを１体破壊し、次の俺のターンのドローフェイ

ズをスキップする。究極神オベリスクを破壊！」おのれ・・・」

生徒サイド

究極神オベリスクを倒したのか？
へぇ。魔法は効くんだ。
などと会話が聞こえる。が次の瞬間、その希望は打ち砕かれる。

サイドアウト

「エンドフェイズに破壊された究極神オベリスクの効果発動。戦闘以外でフィールドを離れた場合、エンドフェイズに特殊召喚される！」

生徒たちからも希望の色が消えたな。当り前か。一瞬でも効果で葬れると思った神が、エンドフェイズに何事もなかったかのように復活したのだから。

リョウ
手札３
フィールド
究極神オベリスク
究極神オシリス

「俺のターン・・・カードを１枚伏せターンエンド」

海馬
手札１
フィールド
青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）
伏せカード１

「ラストターン！ドロー！幻銃士を召喚！効果により、銃士トークン２体を特殊召喚！３体のモンスターとライフ半分を生贄に降臨せよ！絶対なる究極神の王！究極神帝ラー！！！」

ガアアアアアアア

デュエル場は屋内だというのに、まぶしいぐらいの白い光が轟音とともにが立ち込める。それは、究極神帝が降臨したあかしでもある。究極神帝は、あまりにも温度が高いため、金色ではなく、白いラーなのだ。

「究極神帝ラーの効果発動！１ターンに１度、相手のカードすべてを除外し∞のダメージを与える！！」

「なんだと」

と、言うが早いか、究極神帝が白い光・・・もとい、白い火炎の球体を膨張させている。

「この前の全世界が包まれたあの光は、お前の仕業だったのか！！
「訂正するとあれは光ではない。炎だ」うわあああああぁぁぁぁぁぁ」

海馬ＬＰ４０００→－∞

サイドアウト

海馬サイド

「・・・どこだここは・・・」

海馬は、目が覚めたとき天高くそびえ、上が果てしなく続いているだろう塔の前にいた。

「非現実的だが、仕方ない」

そういって、海馬は塔に入る。すると、一瞬で屋上の祭壇の前にワープした。祭壇の上には1つの箱が置かれている。海馬は迷わずにあけた。無意識のうちに自分の頭に流れてきた声に従って。すると中には・・・

「このカードは・・・なぜこんなところに」

箱の中にあったのは、数々の青眼の関連カードと、1枚の白いカード。

サイドアウト

リョウサイド

そろそろか・・・。海馬が目を覚ました。

「今のはなんだ?説明しろ!」

「その前に、白いカードは手に入れたな?」

「ああ」

「その力は、お前の可能性だ」

「そんなオカルト紛いの話を信じろというのか!」

「信じる信じないは海馬の勝手だ。」

「まあいい。だが、他のカードについては、礼を言っておくぞ」

「気にするな。こちらの好きでやったことだ」

そういうと、海馬は帰ってしまった。

社長ｖｓ神帝リョウ　後編　究極神召喚！（後書き）

社長ｖｓ神帝リョウでした。最後のは異次元世界編で役に立つ時が来るかな？

第１２話　ｖｓレイ　人違いだ・・・オレは丸藤ではない（前書き）

レイｖｓリョウです。
モンスターの攻撃力を表示するようにしました。
リョウが鬼だと思われてもしょうがないと思ってしまいました。

第12話　vsレイ　人違いだ・・・オレは丸藤ではない

リョウサイド

トールＬＰ０

「ぐわあああああああ」

まあ、こんなものだろう。

「すまないな、トール」

「いやかまわん。我も楽しめたからな」

新しいデッキも完成したしな。

「！！そこにいるのは誰だ！！極雷（サンダー）の砲撃（カノン）！！」

「待て、トール！！」

そう言うが早いか、砲の軌道をずらし、空に向ける。

「きゃああ」

「ん・・・？人間？すまなかった」

「トール、むやみやたらに攻撃を仕掛けるのはやめろ」

「すまない」

「わかればいい」

「・・・!!亮様!!」

「リョウ・・・様?お前は誰だ」

「・・・忘れたの?」

「ああ、そういうことか。お前が探しているのは丸藤亮だな?」

「はい」

「オレは丸藤ではない。名前はリョウだが」

「・・・・・・・・・・」

この人間、何を考えこんでいる?

「デュエルしてください」

「なぜ?」

「亮様に似てるから」

おい・・・

「理不尽だな」

だが、ここで逃げれば最高神以前に戦いの神の名がすたる。

「だが、そのデュエル受けて立つ。２分後にブルー寮前に来い」

調整したデッキを試すいい機会だ。

～～２分後～～

「お～～い、レイ。見つけたぞ」

なぜ十代がここに来る・・・まあどうでもいい。と思ったらいつものメンバーも付いてきた。お前たちはいつも一緒に行動しているとでもいうのか？

「「デュエル」」

「ボクのターンドロー。恋する乙女を攻撃表示で召喚。ターンエンド」

レイ
手札５
フィールド
恋する乙女　攻撃力４００

「オレのターン、ドロー。オレの墓地にモンスターが存在しないときガーディアン・エアトスを手札から特殊召喚できる。さらにディープ・ダイバーを召喚！カードを２枚伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札２
フィールド
ガーディアン・エアトス　攻撃力２５００
ディープ・ダイバー　攻撃力１０００
伏せカード２

「攻撃しないの？」

「そいつの効果を知らないとでも思ったか？」

まんまと敵の罠にはまりに行くなど冗談ではない。

「うう・・・ボクのターンドロー。装備魔法、ハッピーマリッジ装備！「サイクロン発動。ハッピーマリッジを破壊」うう・・・ターンエンド」

レイ
手札５
フィールド
恋する乙女　攻撃力　４００

「オレのターン。カードを伏せる。ターンエンド」

リョウ
手札２
フィールド
ガーディアン・エアトス　攻撃力　２５００
ディープ・ダイバー　攻撃力　１０００
伏せカード３

「ボクのターン。ドロー。カードを伏せｔ「サイクロン発動」ううう・・・ターンエンド」

レイ
手札５
フィールド
恋する乙女　攻撃力　４００

「オレのターンドロー。クリッターを召喚。激流葬を発動し、フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

「そんな・・・恋する乙女が・・・」

「さらにクリッターの効果により、デッキから幻銃士を手札に加える。この効果にチェーンし、手札の機皇帝ワイゼル∞を特殊召喚！伏せカードオープン、死者蘇生、ガーディアン・エアトスを特殊召喚！行くぞ！機皇帝ワイゼル∞とガーディアン・エアトスでダイレクトアタック！」

「きゃあああ」

レイＬＰ４０００→１０００

「こんなものだろう」

「大人げないぞ、リョウ」

「なら手加減しろとでも言うのか？十代」

「う・・・そうじゃないけどさ・・・もっと楽しそうにデュエルしろよ」

「ふん、オレは十分楽しめたぞ」

「リョウはそのデッキを使ってる時は基本本気だからね。まあ、惨敗するのは仕方ないよ。アハハハ」

このデュエルを早く終わらせた目的はもう一つある。時間が来るまでにレイをカイザーと合わせるためだ。

「レイ・・・だったか？カイザーなら灯台にいるはずだ。早く行け。日が暮れる」

～～～灯台～～～

「亮様・・・ボクは亮様のことが好きです――――――――――」

「お前の気持ちは嬉しいが、今の俺にはデュエルがすべてなんだ」

「そうですか・・・」

～～～次の日～～～

「さようなら～～～十代様～～～～」

「な、なんで俺？」

「アハハハハハハハ。十代、人気だね」

まあ、もっとも何もしてないはずの十代を好きになる理由がわからんがな。

・・・ああ、あの時のデュエルのレイをかばう言葉か。そういう意味では万事解決ということでいいだろう。

第１２話　ｖｓレイ　人違いだ・・・オレは丸藤ではない（後書き）

レイｖｓリョウでした。
ものすごくグダグダになってしまい申し訳ありません。

第１３話　ｖｓ十代　交流デュエル代表決め第１戦（前書き）

ｖｓ十代です。１対１でデュエルするのは初めてですね。

第１３話　ｖｓ十代　交流デュエル代表決め第１戦

リョウサイド

今日の授業も終わったし、帰って休むか。

『遊城十代君、三沢大地君、神帝リョウ君、高町なのはさん、フェイト・Ｔ・ハラオウンさん、八神はやてさん、トール君は、今すぐに校長室に来てください』

・・・今日は何かあったか？ああ、交流デュエル代表生徒決めか。

さて、行くとしよう。

「君達には、ノース校との交流試合に出てほしいのです。出ることができるのは一人ですから、デュエルで勝ち残ったものに出場していただきます」

「すっげぇ！！他のデュエルアカデミアの強い奴とデュエルできるなんて、楽しみだぜ！」

「ドロップアウトボーイには無理なノーネ」

「そんなことやってみなきゃ分からないだろ」

「対戦相手はどうなってるんですか？校長先生」

「今からトーナメント形式で決めます。くじを引いてください」

そういえばロキとオーディンはなぜ呼ばれないんだ？

結果

シード　三沢

第１戦　神帝ｖｓ遊城

第２戦　トールｖｓ八神

第３戦　高町ｖｓテスタロッサ

「第１戦は１０分に始まります。デュエル場に来てください」

～～～１０分後～～～

「「デュエル」」

「リョウ、楽しいデュエルにしようぜ！」

「貴様は何ターンの間俺の前に立っていられるかな？」

観客はほぼ満席だ。なぜ俺がデュエルするとこうなるのだろうか？

「リョウ～頑張って～♪」

スクルドもいるから悪いところは見せられんな。

「オレの先攻！ドロー。オレは手札の天魔神ノーレラスを捨て、ダーク・グレファーを特殊召喚！効果によって、手札の堕天使ゼラートを捨て、デッキから闇の侯爵ベリアルを墓地へ！ファントム・オブ・カオスを召喚。効果発動。１ターンに１度、墓地の効果モンスターを除外し、エンドフェイズまでモンスター名と効果、攻撃力を得る。オレは天魔神ノーレラスを除外。ノーレラスの効果発動！１０００ポイントのライフをコストに、互いのフィールド上と手札のカードを全て墓地に送る！！」

これを十代には防ぐことはできないはずだ。

「なにぃ！！？」

「そして、自分はカードを１枚ドローする！ターンエンド」

リョウＬＰ４０００→３０００
手札１
フィールド
無し

「俺のターンドロー！ミラクルフュージョン発動！」

「なんだと！？」

バカな・・・このタイミングでミラクルフュージョンだと！？やはり主人公補正は恐ろしいな。

「墓地のクレイマン、バーストレディ、フェザーマン、バブルマンを融合！現れろ、Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー！！エリクシーラーの効果！除外されたカードをすべてデッキに戻してシャッフルす

る。エリクシーラーでダイレクトアタック！フュージョニスト・マジスタリー！！」

「ぐあああああああああああ」

リョウＬＰ３０００→１００

墓地に４種類も素材がそろっていただと・・・！？

「だが、手札の冥府の使者ゴーズの効果発動！特殊召喚し、カイエントークンを特殊召喚！このトークンの攻撃力と守備力は、受けた戦闘ダメージと同じになる！」

「なんだって！？・・・ターンエンドだ」

十代
手札０
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー　攻撃力　２９００

リョウ
手札０
フィールド
冥府の使者ゴーズ＆カイエン　攻撃力２７００＆２９００

「オレのターン！カイエンでエリクシーラーを攻撃！さらにゴーズでダイレクトアタック！」

「うわあああああ」

十代ＬＰ４０００→１３００

「カードを伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札０
フィールド
冥府の使者ゴーズ　攻撃力　２７００
伏せカード１

「俺のターンドロー！強欲な壺を発動！デッキから2枚ドロー！さらに、バブルマンを守備表示で特殊召喚！2枚ドロー」

やはり恐ろしい奴だ・・・なぜここでそんなカードが引ける？

「フレンドッグを守備表示で召喚して、カードをセット。ターンエンドだ。リョウ、俺今、すごくわくわくしてるぜ！！」

「その絶望的状況の中で心が折れないとはな。人間にしては恐ろしい精神力だ」

呆れを通り越して笑えて来るぞ。

十代
手札１
フィールド
バブルマン　守備力　１２００
フレンドッグ　守備力　１２００
伏せカード１

「オレのターン！ドロー！！十代、このデッキ相手にここまで渡り合ったことをほめてやる。」

だがここまでだ。このターンで決める！

「オレはゴーズを生贄に闇のデッキ破壊ウイルス発動！このカードは自分フィールド上に存在する攻撃力２５００以上の闇属性モンスター１体を生贄にして発動する。魔法か罠を宣言し、相手の伏せカードを見て、宣言した種類のカードがあった場合破壊！さらに相手のターンで数え３ターンの間、相手がドローしたカードを確認し、宣言した種類のカードだった場合すべて破壊する！」

「なっ！？」

「オレが宣言するのはトラップカード！お前の伏せカードを見せてもらう！」

そう言ってインフィニティ・アイで確認する。

「その伏せカードはトラップカード、ドレインシールド！破壊だ！」

「なんで俺の伏せカードがわかったんだ？俺まだ見せてないぞ」

「そんなことはどうでもいい。オレのフィールド上にモンスターが０で、なおかつ墓地に５体以上の闇属性モンスターが存在するとき、ダーク・クリエイターを特殊召喚する！効果発動！１ターンに１度、墓地の闇属性モンスター１体を除外し、墓地の闇属性モンスター１体を特殊召喚できる。オレが特殊召喚するのはファントム・オブ・カオス！！効果により、墓地のダーク・クリエイターをコピーし、効果発動。闇の侯爵ベリアルを特殊召喚！！」

これを耐えることができるかな？

「ありゃりゃ。十代大丈夫かな？まあ無理だろうけどね。アハハハハ」

「ダーク・クリエイターで、フレンドッグを攻撃！ダーク・バレット！」

「くうっ・・・フレンドッグの効果発動！戦闘で破壊され墓地へ送られたとき、融合とＥ・ＨＥＲＯ１体を手札に加える！俺が手札に加えるのは、バブルマン！」

「だが、ファントム・オブ・カオスでバブルマンを攻撃！ダーク・バレット！これで終わりだ！闇の侯爵ベリアルでダイレクトアタック！」

「墓地のネクロガードナーを除外して、攻撃を１度だけ無効にする！」

いつの間に・・・！！最初のノーレラスの時か！！

「ターンエンド」

「やるね、十代。リョウの猛攻をここまで回避しきった奴は今まで指で数えるほどしかいないしね。アハハハハハハ」

リョウ
手札０
フィールド

ダーク・クリエイター　攻撃力　２３００
闇の侯爵ベリアル　攻撃力　２８００
ファントム・オブ・カオス　攻撃力２３００→０

まさかここまでオレの攻撃を凌ぐとはな。予想をはるかに上回ってきた。面白い。

「俺のターンドロー」

「ドローしたカードは魔法カード、戦士の生還か」

「（なんでわかるんだ？）戦士の生還を発動。クレイマンを手札に加える。融合発動！バブルマンとクレイマンを融合！マッドボールマンを守備表示で融合召喚。ターンエンドだ。リョウ、お前のモンスターじゃマッドボールマンを倒すことはできないぜ」

十代
手札１
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン　守備力　３０００

攻撃力ならな。

「ラストターン、ドロー！！オレはダーク・クリエイターの効果を発動。来い、堕天使ゼラート！！」

「そいつじゃあ、まだ攻撃力が足りないぞ」

そんなに戦闘してほしいのか？だが、オレは甘くない。

「ゼラートの効果発動！手札の闇属性モンスター1体をコストにすることで、相手フィールド上のモンスターすべてを破壊する！ジェノサイド・ブレイク！！」

「なにぃ～～～～！！？」

「とどめだ！ゼラートでダイレクトアタック！！」

「うわあああああ」

十代ＬＰ１３００→－１５００

「負けちまった・・・でも楽しかったぜ、リョウ」

「ここまでオレのデュエルについてこれるとはな・・・オレはもう行くぞ」

そう言ってオレはデュエル場を出た。

～～～～～１０分後～～～～～

「第２戦、開始ナノーネ！」

ワアアアアアアアアア！！

歓声が聞こえる。

・・・・・・・。

勝者は高町か。トールが負けるとは考えにくい。なら、オレが決勝

で戦うのはトールだな。

第１３話　ｖｓ十代　交流デュエル代表決め第１戦（後書き）

十代ｖｓリョウでした。多少十代の相手をするのが面倒なようです。
基本クールですからね。
次回は三沢ｖｓリョウです。お楽しみに！

第１４話　三沢ｖｓリョウ　アンチデッキの罠！（前書き）

三沢君はリョウ相手にアンチデッキを持ってきたようです。

第１４話　三沢ｖｓリョウ　アンチデッキの罠！

リョウサイド

八神とトールのデュエルも終わったか。やはり勝ったのはトールだな。大抵のテクニカルデッキとパワーデッキではトールのドラゴンデッキに勝つことは難しいからな。・・・あれは本当にドラゴンデッキなのか？

『三沢君と神帝君はすぐにデュエル場に来てください』

・・・オレの番か。もう少しデッキ調整をしたかったが仕方あるまい。

「この前の借りを返す！」

「やってみな」

「「デュエル」」

「先攻はもらう。ドロー。俺はコストダウンを発動。手札１枚をコストにして、手札のモンスターレベルを２つ下げる。レベル４になった虚無魔人（ヴァニティー・デビル）を召喚！」

「なんだと！？（奴はオレに対しアンチデッキで挑んでというのか・・・くっ・・・だが、特殊召喚を止めたぐらいでは今回の俺のデッキを止めることはできん！）」カードを２枚伏せてターンエンド」

三沢
手札１
フィールド
虚無魔人（ヴァニティー・デビル）　攻撃力　２４００
伏せカード２

「オレのターン！「この瞬間トラップ発動！威嚇する咆哮！このターン相手は攻撃宣言できない！」ちっ・・・チューナーモンスター、ＢＦ－疾風のゲイルを召喚！効果により、虚無魔人（ヴァニティー・デビル）の攻守を半分にする！」

「なに！！」

「カードを１枚伏せてターンエンド」

リョウ
手札４
フィールド
ＢＦ－疾風のゲイル　攻撃力　１３００
虚無魔人（ヴァニティー・デビル）　攻撃力　２４００→１２００

「俺のターンだ。ドロー！永続魔法、カイザーコロシアム！このカードが存在する限り、相手のモンスターの数は俺のモンスターの数を超えることはできない！」

「くっ（面倒なカードだ・・・）」

「ライオウを召喚！ライオウでＢＦ－疾風のゲイルを攻撃！」

「させるものか！トラップ発動、ゴッドバードアタック！鳥獣族モンスター1体を生贄にして発動、フィールド上のカード2枚を破壊！虚無魔人（ヴァニティー・デビル）とライオウを破壊する！」

「ばかな・・・カードを1枚伏せターンエンド」

三沢
手札０
フィールド
カイザーコロシアム
伏せカード１

「オレのターンドロー（早く決めなければまずいな）。ＢＦ－蒼炎のシュラを召喚。さらにオレのフィールドにＢＦが存在することで、手札の黒槍のブラストを特殊召喚！２体でダイレクトアタック！」

「トラップ発動、攻撃の無力化」

「・・・カードを1枚伏せターンエンド」

リョウ
手札２
フィールド
ＢＦ－蒼炎のシュラ　攻撃力　１８００
ＢＦ－黒槍のブラスト　攻撃力　１７００
伏せカード１

「俺のターンドロー。墓地のライオウと虚無魔人（ヴァニティー・デビル）を除外して、カオス・ソーサラーを特殊召喚！」

「（なんというガチデッキ・・・）」カオス・ソーサラーの効果発動！このターンのこのカードの攻撃を放棄する代わりに相手モンスター１体を除外する。除外するのはＢＦ－蒼炎のシュラ！カオス・ディメンション！ターンエンド」

三沢
手札０
フィールド
カオス・ソーサラー　攻撃力　２３００
カイザーコロシアム

「まずいな・・・（このターンで決めなければ、次のターンモンスターが来ない保証はない。それが特殊召喚を封じるモンスターだったら終わりだ・・・）オレの・・・ターン、ドロー・・・！！」

十代に主人公補正のチートドローとか言っていたが、人のことを言えんな。

「オレはスワローズ・ネストを発動！自分の鳥獣族モンスター１体を生贄に、デッキから同じレベルの鳥獣族モンスター１体を特殊召喚する。ブラストを生贄に、デッキからシュラを特殊召喚する。ＢＦ－蒼炎のシュラでカオスソーサラーを攻撃！」

「攻撃力の低いモンスターで攻撃だと！？自滅する気か？」

「誰がそんなことを！ダメージステップに手札のＢＦ－月影のカルートの効果発動！このカードを手札から捨てることで、エンドフェイズまでＢＦ１体の攻撃力を１４００ポイントアップする！」

「な！」

「カオス・ソーサラー撃破！」

よし、これでカオス・ソーサラーは消えた。

三沢ＬＰ４０００→３１００

「シュラの効果発動！このカードが戦闘で相手モンスターを破壊し、墓地へ送った時、デッキから攻撃力１５００以下のＢＦ１体を特殊召喚できる！来い！ＢＦ－そよ風のブリーズ！バトルフェイズは続行中だ。ブリーズでダイレクトアタック！」

「うわあああ」

三沢ＬＰ３１００→２０００

そろそろゲームエンドだな。

「メインフェイズ２に入る。レベル４、蒼炎のシュラにレベル３、そよ風のブリーズをチューニング！！黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！ＢＦ－アーマード・ウィング！！」

「これがシンクロ召喚か！近くで見るのは初めてだ！」

そんなに興奮することではないだろう。何度か見たものを間近で見て、驚く理由がオレには理解できない。

「ターンエンド」

リョウ

手札１
フィールド
ＢＦ－アーマード・ウィング　攻撃力　２５００

「俺のターンドロー・・・モンスターを裏守備で召喚してターンエンドだ（このモンスターはマシュマロン。これで次のターンを凌ぐことができれば、何とかできるかもしれん）」

三沢
手札０
フィールド
伏せモンスター１

「オレのターンドロー。三沢。このターンで終わらせてやる」

「なに！？（どうやって終わらすつもりだ！？）」

「いでよ、ＢＦ－極北のブリザード！！こいつの召喚に成功したとき、墓地のレベル４以下のＢＦ１体を守備表示で特殊召喚する。来い、ブラスト！レベル４のブラストに、レベル２のブリザードをチューニング！漆黒の力！大いなる翼に宿りて、神風（しんぷう）を巻きおこせ！シンクロ召喚！吹きすさべ！ＢＦ－アームズ・ウィング！！」

「もう１体のシンクロモンスターだと！」

「アームズウィングが守備表示モンスターを攻撃するとき、攻撃力を５００ポイントアップする。そして、守備力を攻撃力が超えた分、貫通ダメージを与える！！」

「そんな・・・！」

「行け、アームズウィング！ブラック・チャージ！！」

「うわあああああああああああ」

三沢ＬＰ２０００→１３００

「くそっ・・・対リョウの専用デッキまで作ってきたのに・・・また１から研究しなおしだ！」

まだオレのデッキを研究するのか・・・同じデッキをいつも使うわけではないのだからあまり意味はないと思うが・・・

「勝者、シニョールリョウ！！」

ワアアアアアアアア・・・・・！！

「きゃあああああ」

高町ＬＰ０

「同時に決着がついたノーネ！勝者、シニョールトール！！」

ワアアアアアアア・・・・！！

・・・・・やはりトールか・・・厄介な奴だ。

「決勝戦は３０分後に始まります。３０分後にデュエル場に来てください」

３０分か・・・トールがどのデッキで来るかはわからん。だが一筋

縄ではいかないだろう。

「リョウ、お疲れ様♪」

「スクルド・・・いつからそこで待ってた？」

「デュエルが始まった後から」

「そんなに気を遣わなくてもいいぞ」

「いいの。私の好きでやってるんだから」

「さっきからなんでそんなに機嫌がいいんだ？何かいいことでもあったのか？」

「そりゃあリョウが勝ったんだもん。うれしくないわけないじゃん♪」

「ハハ。ありがとう」

第１４話　三沢ｖｓリョウ　アンチデッキの罠！（後書き）

ｖｓ三沢でした。ＢＦは強いですね。
次回　代表決め決勝戦！トールｖｓリョウ　神々の戦い！
お楽しみに

第１５話　代表決め決定戦　トールｖｓリョウ　神々の戦い！（前書き）

神々の戦いです。今回のトールのデッキは、「三極神」です。
究極神と極神が戦う時が来ました。戦闘フェイズはほとんど行いません。

第１５話　代表決め決定戦　トールｖｓリョウ　神々の戦い！

リョウサイド

いよいよか。トール、貴様を全力で叩き潰す！

「デュエル開始ナノーネ！！」

明日香サイド

「十代も翔君も、彼らの戦いをしっかりと見ておくのよ」

「わかってるって」

「どうしたんスか？いきなりそんな真剣な表情になって・・・」

「どちらも神のカードを操るデュエリストよ。とてもすごい戦いになるはず。見ておいて損はないわ」

サイドアウト

三沢サイド

いよいよ始まったか。どんな激しい戦いになるんだ・・・

「この場にいるだけではっきりとわかるぜ。あいつらのすさまじいまでの力が」

「そうだな、神楽坂。彼らの戦いをしっかりと見よう」

サイドアウト

校長サイド

「彼らがどんな戦いを見せてくれるのか、非常に楽しみですね。クロノス先生」

「そうなノーネ。とくにリョウ君がするデュエル～は、毎回鳥肌が立ってしまうノ～ネ」

サイドアウト

リリカルサイド

「はじまったね」

「そうやな。・・・もう管理局からは彼らを追うなと言われている

以上、普通に接することができる。もっとも、彼らはまだ私達や管理局のこと、許してくれてないやろうけど。いや、許してもらうのは無理なのかもしれへんな」

「そんなことはないよ。一生懸命仲直りしようとすれば、絶対仲良くなれるはずだよ。はやて」

「そうやな。いまは彼らの戦いを見届けよう」

「「うん」」

サイドアウト

オーディン・ロキサイド

ついにはじまったか。このデュエルの行方は、大いなる神のみぞ知る。

「あーーーははははははははは。これはすごい見ものだね。リョウ達、戦闘の神が本気でデュエルするところなんて、そうは見れないよ」

「ふむ。そうだな。わたしも長いこと彼らとともに生きてきたが、本気で戦ったのを見たのはほんの数回だ。とくにリョウは、デュエルでなくとも本気で戦うことはほとんどない。もっともすでにこの世界に来てからは何度か本気でやっているがな」

「その本気って、究極神帝ラーのことだよね？」

「その通りだ」

サイドアウト

「いくぞぉ！！我の全力を思い知れ！！神帝リョウ！！！」

「ハハハハハハハハハハ！！！勝つのはオレだ！全力をぶつけて来い！それをオレが上回り、貴様を完膚なきまでにたたきつぶしてやる！！！」

「「デュエル！！！」」

「我の先攻！！ドロー！！強欲な壺を発動！２枚ドロー！極星天ヴァルキュリア召喚！！手札を２枚墓地へ送り、エインヘリアル・トークン２体を特殊召喚！レベル４のエインヘリアル・トークン２体と、レベル２の極星天ヴァルキュリアをチューニング！！北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！！シンクロ召喚！天地神明を統べよ、最高神！極神聖帝オーディン！！そして神々の黄昏を発動！極神聖帝オーディンを貴様のフィールド上に移す！「なんだと！？（いったい何をするつもりだ！！？）」極星の輝き発動！デッキから極星獣タングリスニを２体、特殊召喚！お前の場にシンクロモンスターが存在することで、手札の極星獣グルファクシを特殊召喚！レベル３の極星獣タングリスニ２体に、レベル４の極星獣グルファクシをチューニング！！星界の扉が開くとき、古の戦神（いにしえのいくさがみ）がその魔鎚を振り上げん。大地を揺るがし轟く雷鳴とともに現れよ！シンクロ召喚！光臨せよ！極神

皇トール!!カードを1枚伏せターンエンドだ!これが我の全力だ!!!」

トール
手札０
フィールド
極神皇トール
伏せカード１

１ターンで２体の極神をそろえただと!?ならばこちらも全身全霊を持って貴様を叩き潰すまで!!

「行くぞ!幻銃士を召喚!効果により、銃士トークン２体を特殊召喚!銃士トークン２体と幻銃士、オレのライフ半分を生贄に!永き時を超え、世界創世の時よりの神がここに降臨する!究極の神よ、全ての時を震撼させよ!究極神オシリス!!カードを伏せ、究極神オシリスで、極神皇トールを攻撃!アルティメットサンダーフォース!!」

「うあああああああ」

トールＬＰ４０００→１５００

「極神聖帝オーディンでダイレクトアタック!ヘヴンズ・ジャッジメント!」

「させん!トラップ発動!ドレインシールド!攻撃を無効にし、攻撃力分だけライフを回復する!」

「・・・やるな」

まさかそんなカードがデッキに入っているとは・・・しかし、なぜオシリスの攻撃時に使わなかったんだ？

トールＬＰ１５００→５５００

「ターンエンド」

「エンドフェイズ時に神々の黄昏の効果発動！オーディンを破壊し、お前のモンスターをすべて除外する！」

「究極神オシリスは魔法の効果を受けない！」

「だがオーディンは返してもらう。エンドフェイズに、極神皇トールと極神聖帝オーディンがよみがえる！トールの効果により８００ダメージを与え、オーディンの効果で１枚ドロー！」

「ぐあぁっ・・・チイッ・・・だが、２体の極神はオシリスの効果により攻守２０００ポイントダウンする！」

リョウＬＰ４０００→２０００→１２００
手札３
フィールド
究極神オシリス　攻撃力　６０００
伏せカード１

「我のターン！ドロー！２体の神を守備表示に変更！ターン終了だ！」

トール

手札２
フィールド
極神聖帝オーディン　守備力　１５００
極神皇トール　守備力　８００

「オレのターン！ドロー！伏せカード、ダーク・バースト発動！墓地の幻銃士を手札に加える！ターンエンド」

このターンは動けない・・・下手に動けばトールの８００ダメージで焼き尽くされてしまう・・・ＬＰ４０００のデュエルではやはり究極神は背水の陣か。

リョウ
手札５
フィールド
究極神オシリス　攻撃力　１００００

「我のターン！ドロー！極星霊リョースアールヴを召喚！このカードの召喚に成功したときに、自分フィールド上のモンスター１体を選択。選択したモンスターとこのカードのレベルの合計以下のレベルの『極星』と名のつくモンスター１体を手札から特殊召喚する。極星霊デックアールヴを特殊召喚！さらにデビルズ・サンクチュアリを発動！メタルデビル・トークンを特殊召喚！レベル１のメタルデビル・トークンとレベル４の極星霊リョースアールヴに、レベル５の極星霊デックアールヴをチューニング！！星界より生まれし気まぐれなる神よ、絶対の力を我に示し世界を笑え！シンクロ召喚！光臨せよ！極神皇ロキ！」

「だが、オシリスの効果により攻守２０００ポイントダウン！」

「わかっている。ターンエンド」

トール
手札０
フィールド
極神聖帝オーディン　守備力　１５００
極神皇トール　守備力　８００
極神皇ロキ　守備力　１０００

3体の極神がそろったか。こちらも2体目の神を降臨させるとしよう。

「オレのターン!ドロー。幻銃士を召喚!銃士トークン2体を特殊召喚。銃士トークン2体と幻銃士、オレのライフ半分を生贄に!永き時を超え、世界創世の時よりの神がここに降臨する!究極の神よ全ての空間を震撼させよ!究極神オベリスク!!ターンエンド」

リョウ
手札４
フィールド
究極神オシリス　攻撃力８０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

これでまたトールは攻撃の手を封じられたはず・・・

「我のターン!・・・!!どちらのライフが先につきるかな?カードを1枚伏せターンエンド」

・・・・・どういうことだ?あの伏せカードに何かあるとでもいうのか?

トール
手札０
フィールド
極神聖帝オーディン　守備力１５００
極神皇トール　守備力８００
極神皇ロキ　守備力１０００
伏せカード１

「オレのターン、ドロー」

「この瞬間、トラップ発動！」

なに！？

「ギャラルホルン！３ターン後に我の場の神をすべて除外し、その攻撃力の合計、つまり４８００ポイントのダメージをお前に与える！」

「なんだと！」

さっきのセリフはこのことだったのか。つまり3ターンの間にオレが究極神帝ラーを特殊召喚するか、それとも3ターンが経過し、オレのライフが０になるか、ということか。

「ターンエンド」

リョウ
手札５
フィールド

究極神オシリス　攻撃力　１００００
究極神オベリスク　攻撃力　８０００

「我のターン！このエンドフェイズに、ギャラルホルンのカウンターは１となる！ターンエンド」

トール
手札１
フィールド
極神聖帝オーディン　守備力１５００
極神皇トール　守備力８００
極神皇ロキ　守備力１０００
ギャラルホルン
＋１

「オレのターン、ドロー」

くそ、究極神帝は来ない・・・

「ターンエンド」

リョウ
手札６
フィールド
究極神オシリス　攻撃力　１２０００
究極神オベリスク　攻撃力　８０００

「我のターン！ドロー！このエンドフェイズ、ギャラルホルンのカウンターは２となる！ターンエンド。このお前のドローで、このデュエルの勝敗のすべてが決まる。勝負の行方は、次のお前のカード

だけが知っている！」

トール
手札２
フィールド
極神聖帝オーディン　守備力１５００
極神皇トール　守備力８００
極神皇ロキ　守備力１０００
ギャラルホルン
＋２

このまま究極神帝を引けなければオレの負け・・・

「どうした？ドローしないのか？」

ここまで来てこの最高神、いや戦いの神、神帝リョウが敗北！？・・・・・否！！そんなことあるはずがない！このドローは必ず究極神帝なのだから・・・

「オレのターーーーーーーンッ！！！・・・・・・・・・・・・・・・！！トール、オレの勝利だ！幻銃士を召喚！！銃士トークン２体を特殊召喚！銃士トークン２体と幻銃士、オレのライフ半分を生贄に捧げ！永き時を超え、世界創世の時よりの神がここに降臨する！究極の神よ！いまここに究極の終焉をもたらせ！究極神帝ラー！！究極神帝ラーの効果発動！１ターンに１度相手のカードをすべてゲームから除外し∞のダメージを与える！ゴッド・アルティメット・ノヴァ！！！」

白い光炎の球体がすべてを包み込み破壊していく。

「うわあああああああああああああああああああ」

トールＬＰ５５００→－∞

「勝者、シニョールリョウ！！」

ワアアアアアアアアアアアアアア！！！！

今までにないぐらいの歓声が響き渡る。

「我の負けか・・・やはり究極神には勝てなかったか」

「いや、オレがあそこで究極神帝を引けていなければお前の勝ちだった。楽しかったぞ。トール」

「ああ、我もだ」

「「フフフフ・・・・ハハハハハハハハハハハハ！！」」

生徒サイド

「思った通りすごいデュエルだったね」

「攻撃こそあまりしてなかったけど、あの逆転は見ごたえがあったよ」

「神の姿・・・外だったら見れたんだろうなあ・・・少し残念だよ」

サイドアウト

「では、交流試合には、神帝君に出ていただきます」

「頑張るノーネ」

「期待にこたえられるようにします」

・・・・・・・ん？あれは・・・

「スクルドか」

「やったね、リョウ♪」

「ああ、そうだな。しかし疲れた。何か食べに行こうか」

「うん♪」

いつものように腕に抱きついてくる。

「これが一番だな」

・・・この笑顔と世界の楽しみがあればオレは満足だ。

「リョウ、早く早く♪」

「おいおい、そんなに引っ張らないでくれ」

その食事後に一緒に寝ているリョウとスクルドを見て砂糖を吐いたロキがいたのはまた別の話。
後に聞いた話では、リョウはスクルドをベッドに移し、その後屋根の上で寝ていたはずなのだが、いつの間にかスクルドの隣で寝ていたらしい。

第１５話　代表決め決定戦　トールｖｓリョウ　神々の戦い！（後書き）

もっとガチガチの戦闘を楽しみにしていた方には申し訳ありません
でした。でも、後悔はしてません。そんなに戦闘を行うと、一撃で
勝負が決まりかねませんから。
次回　万丈目サンダ―！
お楽しみに！

第１６話　万丈目サンダー！（前書き）

一！十！百！千！万丈目サンダー！サンダー！万丈目サンダー！！

第16話　万丈目サンダー！

リョウサイド

いよいよか・・・

「来たみたいだよ？リョウ」

海の底から潜水艦が上がってくる。わざわざご丁寧なことだ。こんなものを用意してくるとは。

「よくあの程度の船で来れるものだな」

トール。いろいろ突っ込むところが違う。あの船は人間の作った中では強度的にかなり強い方だ。

「来たな。ノース校！デュエルアカデミア代表！神帝リョウだ！お前たちの代表は誰だ！」

「俺だ」

「ん？万丈目か。どういう経路で貴様がそちら側にいるのかはわからん。だが、オレに挑んでくるというのなら貴様を叩き潰すまで！」

「お前、万丈目さんを着やすく呼ぶな」

「俺の名前は！」

「「「「「「「万丈目サンダー！！」」」」」」」」」」

「一！十！百！千！」

「「「「「「「「万丈目サンダー！！サンダー！サンダー！！万丈目サンダー！！」」」」」」」」」」

「ずいぶんと熱い人望だな、万丈目。いや、万丈目サンダー。どれほどの進化をしたのか、見せてみろ！」

ここまでの人望、これほどの短期間で集めたお前の今の実力は決して半端なものではないはずだ。

「準！」

ん？なんだあれは？

「兄さん達！どうしてここへ？」

兄さん？確か兄弟のことだったか？

「もちろん、お前が勝利するところを観にきたのだ」

ずいぶんなプレッシャーだな。こんなテレビというものだったか？を呼んできて。それにあの2人の人間、既に万丈目の勝利を確定している。

～～控室・万丈目サイド～～

「兄さん達、何をしに来たんだ」

「お前の顔を全国に見せ、万丈目グループの力を見せつけるためだ！準！お前は兄弟の落ちこぼれ、負けることは許さん！」

くそっ！こんな・・・

「ここには、俺達が金に物を言わせて集めたカードが詰まっている。このカードで最強のデッキを作り必ず勝つのだ！万丈目グループに泥を塗るなよ準！」

こんなカードは使いたくない・・・俺は自分のデッキで勝つんだ！

～～控室・サイドアウト～～

「わたしの顔～が全国に移ってるノーネ。ものすごく緊張するノ～ネ」

「ハハハハハハ！行くぞ、万丈目！いや、万丈目サンダー！貴様の力を見せてみろ！」

「お前こそ、腰をぬかすがいい！」

「生徒の紹介をしまス～ノ。デュエルアカデミア本校代表、神帝リョウ君！対するは「説明はいらん！俺の名は自分で告げる！お前たち、覚えているか。退学したと思い笑っていた奴、清々したと思っていた奴！知らないなら聞かせてやる！俺の名は！一！十！百！千

！」

「「「「「「「「「万丈目サンダー！！」」」」」」」」」

「俺の名は！」

「「「「「「「「「万丈目サンダー！！」」」」」」」」」

この短期間で何をしたというのだ、万丈目。

「いくぞ、リョウ！このデュエル、負けるわけにはいかない！」

何が貴様をここまで追い詰めているのかは知っている。だが、ここで勝ちを譲るほど神は優しくない。

「お前は何ターン俺の前に立っていられるだろうな？」

「「デュエル！！」」

「俺のターンドロー。仮面竜（マスクド・ドラゴン）を召喚し、カードを1枚伏せターンエンド」

仮面竜。・・・ドラゴンデッキ。それもアームド・ドラゴン。

万丈目
手札４
フィールド
仮面竜　攻撃力１４００
伏せカード１

「オレのターン！いくぞ万丈目！オレは切り込み隊長を召喚！効果によって、手札のレベル４以下のモンスター１体を手札から特殊召喚できる。コアキメイル・ベルグザークを攻撃表示で特殊召喚！バトルだ！コアキメイル・ベルグザークで、仮面竜を攻撃！」

万丈目ＬＰ４０００→３４００

「クッ、だが、この瞬間仮面竜の効果発動！デッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスター１体を特殊召喚する。来い、仮面竜！守備表示だ」

「コアキメイル・ベルグザーク効果発動！このカードが相手モンスターを破壊し墓地へ送った場合、もう１度続けて攻撃できる」

守備表示で特殊召喚したのはいい判断だ。

「バカな！レベル４で攻撃力２０００の上に２回攻撃だと！？」

万丈目の言うことも分からなくはない。確かにハイスペックではある。

「２回目の攻撃だ」

コアキメイル・ベルグザークが再び仮面竜を斬る。

「だが、効果発動、仮面竜をデッキから特殊召喚」

普通の奴ならここで追加攻撃するだろう。だがオレはそう簡単にはいかんぞ。

「カードを1枚伏せターンエンド」

攻撃など次のターンで十分。

「なにっ？攻撃しないのか？」

「それで効果を発動し、キーカードを呼ぶことなどわかりきったこと。そう安易な攻撃は仕掛けない。戦いの神をなめるな。エンドフェイズに、コアキメイル・ベルグザークの効果発動。手札のコアキメイルの鋼核を捨てるか、戦士族モンスターを見せなければ破壊される。手札の異次元の女戦士を見せる」

リョウ
手札３
フィールド
コアキメイル・ベルグザーク　攻撃力２０００
切り込み隊長　攻撃力１２００
伏せカード１

万丈目サイド

・・・動きを読まれた。だが、攻撃されなくてもされても結局は同じこと！

「俺のターンドロー」

視線とプレッシャーが重い。だが、勝つんだ！落ちこぼれなどと呼ばれないために。

「仮面竜を生贄にアームド・ドラゴンＬＶ５を召喚！レベルアップを発動！ＬＶモンスターをレベルアップする！来い！！アームド・ドラゴンＬＶ７！」

これが今の俺の切り札、アームドドラゴンＬＶ７！リョウ、お前でもこれを攻略するなど普通のデッキでは不可能だ！

サイドアウト

切り札を出してきたか。

「アームド・ドラゴンＬＶ７の効果発動！手札のモンスターを１体捨て、その攻撃力以下の相手モンスターをすべて破壊する。俺が捨てるのはアームド・ドラゴンＬＶ５だ！ジェノサイド・カッター！」

まあ、よくやった方だろうな。オレが人間なら、おそらくこのプレッシャーには耐えられまい。

「あんなカード、俺は渡してないぞ」

「なに！？」

「準・・！！」

万丈目の兄弟・・・あわてているな。だが、あそこまで人望を集めた人間がそう簡単にふざけた誘いには乗るとは思えん。当然のことだ。

「ＬＶ７でダイレクトアタック！アームド・ヴァニッシャー！！」

「ち・・・やるな。このオレをここまで追い詰めるとは」

正直、期待以上だ。だから人間は面白い。

リョウＬＰ４０００→１２００

「ターンエンド」

万丈目
手札２
フィールド
アームド・ドラゴンＬＶ７　攻撃力２８００

「オレのターン！永続魔法発動、一族の結束！俺の墓地に存在する元々の種族が１種類のみの場合、オレのフィールド上に存在するその種族のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする！」

「くっ！１枚で８００ポイントだと！」

「貴様のデッキだったら、もっと効果を最大限に発揮できただろうな。伏せカードを発動。戦士の生還。墓地の戦士族を１体手札に加える。コアキメイル・ベルグザークを加えるぞ。そして召喚。アームド・ドラゴンＬＶ７と相打ち！」

「な！？相打ちだと！？」

何か不思議なことか？

「まあいい、カードを1枚伏せターンエンド」

リョウ
手札2
フィールド
伏せカード1

「エンドフェイズに、リビングデッドの呼び声発動！現れろ、アームド・ドラゴンＬＶ5！そしてドロー！これでとどめだ！ダイレクトアタック！アームド・バスター！」

単調な攻撃は死を招く。そのぐらいは考えてみろ。オレが何の策もなしにフィールドをあけるわけがない。

「トラップ発動！次元幽閉。攻撃モンスター1体をゲームから除外する」

「除外だと！？（除外から戻すカードは俺の今のデッキには入ってない・・・）」

ここまで精神が持っただけでも上出来だ。万丈目サンダー。

「ターンエンドだ・・・クソォッ・・・」

万丈目
手札3
フィールド
リビングデッドの呼び声

「オレのターン！・・・ここまでオレのペースに食い下がったこと、ほめてやる。切り込み隊長召喚、効果で異次元の女戦士を特殊召喚。ダイレクトアタック！」

「カットだカット～」

「させないよ。アハハハハハハハハハハハ」

ロキ、お前の特徴的な笑い声も全国にながれてるぞ。

「うわあああああああああああ」

万丈目ＬＰ３４００→１４００→－９００

「準、お前、なんで渡したカードを使わなかった！」

「俺は・・・自分のデッキで勝ちたかったんだ」

「だからお前は落ちこぼれなのだ！」

・・・こいつらは、〆る。見るに堪えん。

「・・・・・・貴様ら、万丈目の兄だな？」

「なんだお前は？」

「オレとデュエルしろ。オレとのデュエルでここまで持った万丈目を罵倒するなど、このオレが許さん。直々に制裁を加えてやる」

「調子に乗るなよ！いいだろう。お前の調子に乗った顔が、絶望に

変わる瞬間をテレビに流してやる。これで名誉挽回すればいい」

なるほど、名誉挽回か。まあ、さらに名誉とやらが堕落するだろうがな。

「オレが今所持しているデッキは5個。どれとやる?」

「3番目のデッキだ」

こいつら、終わったな。

「シャッフルの権利を与えてやるが、どうする?」

「遠慮なく」

そんなことをしても無駄だがな。

「まとめて2人でかかってこい」

「「「デュエル」」」

「なんか大変なことになったノーネ」

・・・この手札なら、オレの勝ちだな。

「オレの先攻ドロー。強欲な壺を発動。2枚ドロー。天使の施し発動。3枚ドローし2枚捨てる。もう1枚発動。さらに手札断殺発動。互いに2枚捨て、2枚ドローする。1ターンも持たなかった貴様らの方が、万丈目よりはるかに各下だな」

「「なに！？」」

「万丈目をバカにするぐらいだからどれほど強いのかと思えば、この程度とは。お前たちよりも万丈目の方がはるかに格上だ。１ターンでこのオレが勝利する手札をよこすぐらいだからな。いでよ、エクゾディア！！」

「「なんだと！！？」」

「カットだ～～」

「だからさせないって。アハハハハハハハハハハ」

「エクゾード・フレイム！！」

「「うわあああああああ」」

万丈目・兄ＬＰ０
万丈目・弟ＬＰ０

「ハハハハハハハハハハ！！グループにより泥を塗ったのは貴様らの方だったな」

「「クソッ」」

「これでわかったか！万丈目がどれほど強かったか。どれほど人望があったか」

「「「「「「「万丈目サンダー！！！！！！」」」」」」」

「・・・帰るぞ、正司！」

「あ、兄者」

～～～１０分後～～～

「表彰式を行います～ノ」

万丈目はデュエルアカデミアに残るようだ。物語を激しく動かすことはあまりやっていないはずだから当たり前か。

「ご褒美を渡すのはミス・デュエルアカデミア！！」

だれだ？それ。というか、そんなものあったのか？

「悪魔（かいぶつ）だよ、リョウ。見ごたえあるよ～～～アハハハハハハハハハハ」

ロキがここまで言うのなら相当なんだろうな。いろいろな意味で。

というか、心を読むな。

というと、ミス・デュエルアカデミアなる人物が出てきた。・・・

購買部の・・・何て名前だったか？

「では、鮫島校長はこちらに・・・」

・・・・・キスか。だが、オレとしてはそんなにうれしくないと思う。

「ああ、スクルドがいるからか」

いや、違うな。なぜだ？

「ビジュアル的にじゃない？スクルドは歩いてたら１０人の男が全員振りかえるぐらいかわいいんだよ？それに比べたら怪物だよ。あれは」

ああそうか。・・・って、心を読むな。

～～～～表彰式終了～～～～

「万丈目君は、３ヶ月の欠席で、オシリスレッドからなのにゃ～」

「そんな！こんなやつらと一緒なのか・・・」

そういうことを言っていたが、帰る。

港からだと、ブルー寮は遠いな。

「リョウお帰り。そしておめでとう！！・・・・・・／／／／／／／」

成程。ロキが言ってたことが絶対に間違いではなかったと確信した。スクルドがなにをしてきたのかは想像に任せる。

「ハハハ。ありがとう、スクルド」

「ルン♪」

「もうなれちゃった。それに、よく考えたらそんな砂糖を吐くようなカップルじゃなくて、ちゃんとした健全なカップルだしね」

ロキは、窓の外から見ていて、こうつぶやいた。

第１６話　万丈目サンダー！（後書き）

万丈目サンダーでした。すごい人望ですよね。サンダー。

第１７話　真の究極神覚醒（前書き）

究極神が覚醒します。最初の相手は・・・

第17話　真の究極神覚醒

リョウサイド

今日は異次元に飛ばされる日だ。だが、介入はしない。この世界に、いやこのGXのこの平行世界に来たもう一つの目的を果たす日が来た。それは、究極神が世界を創ったときに残した、3枚の白い、神の力が封じられたカードを探すためだ。どこにあるかは『神の鏡』でもわからなかった。手当たり次第に探すしかないだろう。だが、見当が付いていない？と聞かれれば、いや、見当は付いてる、と答えるだろう。・・・さて、行くか。

リリカルサイド

私たちがこの世界に来たのは3つの目的がある。1つは、究極の力を持つものの保護。この任務は、既に管理局からやめろという命令が出ているので、続けることはできない。2つ目は、この世界の状況を3年～7年間の時をかけてかけて調べること。時の流れが歪んでいて、戻る時間を好きな時間に設定できるから、本来こっちの世界に来た次の日に設定して帰ることもできる。不思議な力が観測されてるこの世界では、何が起こるか分からないから。そして、これが最後の任務。『究極のロストロギア』を見つけ、封印して持ち帰ること。3枚の白いカードらしい。そして昨日、ようやくそのカードがある場所が分かった。この任務を果たせば、少しは気が楽になる。

サイドアウト

やはりここだな。
ここは、アカデミアにある火山の火口。よし、始めるか。・・・ん？あれはまさか、管理局！早くしなければ！！オレは、溶岩を吹き飛ばす。すると、階段の形をした岩が螺旋状に連なっている。早くいこう。奴らに見つかると、面倒だ。

リリカルサイド

火山の火口に行くと、遠目でよくわからなかったけど、リョウ君らしき人がいた。彼はあわてて、火口に入っていったみたい。あれが目的なら、早く追わなきゃ！そう思って、私たちも足を速める。

サイドアウト

火口の最下層につくと、巨大な金の扉があった。この中に、究極神の真の力が眠っている。そう考えると、楽しみだ。早く開けよう。
オレは自分が生まれた時より頭の中に刻み込まれている呪文を唱える。すると、オレを待っていたかのように、その巨大な扉が開く。
「ハハハハハハ！！ついにこの時が来た！」
オレが扉をくぐると、扉はしまった。

リリカルサイド

一足遅かったらしい。私たちが来たころにはもう、扉は1度開いてしまっていたみたい。魔法で壊してみようと、なのはがスターライト・ブレイカーを撃ったけど、扉は全く壊れる気配がない。リョウが出てきたときに仕掛けるしかない。

サイドアウト

「すごい・・・なんだこの部屋は」

扉の中には、一面真っ白で、何も見えないようだ。

「あれが、カードの入っている箱か」

そう呟き、カードの入っているであろうはこの前まで行った。

「拝ませてもらうぞ」

箱を開ける。すると、今にも吹き飛ばされそうなほど強力な力が噴き出す。

「こ・・・これほどとは・・・究極神は一体どれほどのパワーアップを果たすというのだ。まあそんなことはやってみればわかる」

究極神を取り出し、かざす。

ゴオオオオオオオオッ

「うおおおおおお！！」

オレは少なくとも１０メートルは吹き飛ばされた。

世界サイド

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・・

「うわああ、地震だ！！」

「た、助けてくれ」

「メ、メガネが！！」

サイドアウト

ゼウスサイド

「ものすごい力がここまで伝わってきますね。フレイア」

「そうですね。あれほどの力を持った究極神があの攻撃を放ったら、

今までの究極神の攻撃でしたら神界と我ら神々はよみがえることが何度でも出来ましたが神界・・・いいえ、それだけではありませんね。ありとあらゆる世界、平行世界、空間、時、次元が破壊しつくされ、再起不能になるでしょう。おそらく、そのあとに残るのは何もない。『無』というものすら残らないでしょう」

「あなたはそこまでと考えますか。いえ、間違ってはいませんね。いまだって、力は膨れ上がっている。ほかの世界に影響を及ぼすほどに・・・ですが、一つだけ間違っていますよ。フレイア」

「え？」

「あれを放った後には、リョウと究極神が残ります。彼らが存在している限りは、世界は蘇ります。究極神がその意志を見せればですが・・・まあ、スクルドがいる限りは、リョウには実体化した究極神のあれを放つことなど出来そうにありませんがね」

「・・・・・そうですね」

サイドアウト

リョウサイド

「これが究極神の真の力！すごい！！」

白いカードは砕け散り、究極神のカードもいつもと変わらないが、オレでも計り知れないほどの力が眠っているのは分かる。

「ここにはもう用がない。行くか」

そう言葉を残し、部屋を出る。

・・・・・・・・・・・・。いるだろうとは思っていたが、既に構えているとは。

「リョウ君？部屋の中で手に入れたもの、渡してくれへん？」

いまさら渡すとでも思っているのか。

「断る」

「そんなら」

「ハハハハハ。良いだろう。デュエルだ！！」

「「デュエル」」

「私のターンや！ドロー！永続魔法、守護の結界～アルティメット・サンクチュアリ～発動！私のモンスターへの魔法・罠・モンスター効果は無効になる！さらに、このカードの発動に成功したとき、自分の手札を５枚捨てることで、手札またはデッキからレベル１０のモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚できる。邪神アバター召喚！ターンエンドや。究極神はモンスター効果を『受けない』けど、邪神アバターは効果を与えてるわけじゃない。よって攻撃力は、１００ポイント上回る」

はやて
手札０

フィールド
邪神アバター　攻撃力１００
守護の結界～アルティメット・サンクチュアリ～

それはどうだろうな？覚醒した究極神の効果はその程度のモンスターでは止められんぞ。

「オレのターン。モンスターを伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札５
フィールド
伏せモンスター１

「私のターン。邪神アバターで裏守備モンスターに攻撃や！」

ディープ・ダイバー　攻撃力１０００　守備力１１００
邪神アバター　攻撃力１００→１１００

「残念だったな。攻撃力と守備力は互角だ」

「ターンエンドや」

はやて
手札１
フィールド
邪神アバター　攻撃力１１００
守護の結界～アルティメット・サンクチュアリ～

「オレのターン。幻銃士を召喚する。効果で銃士トークンを２体を

特殊召喚！銃士トークン２体と幻銃士、ライフ半分を生贄に！降臨せよ、究極神オシリス！！」

究極神オシリス　攻撃力８０００

「でも、邪神アバターはそれを１００ポイント上回る！」

邪神アバター　攻撃力１１００→攻撃力１１００

「なんで上がらんのや！」

「オレが何の対策も講じずにオシリスを召喚するわけがないだろう。食らえ！アルティメット・サンダーフォース！！」

「きゃあああああああ！」

はやてＬＰ４０００→－２９００

「ふ、普通のディスクのはずなのになんでこんな衝撃が来るんや！」

バカな！？確かにオレが使ったのは普通のディスクだ・・・究極神は対戦相手にいつも以上の威力の攻撃をぶつけているのか！！だが幸い、受けるのは対戦相手のみのようだし、物理的被害はない。それに、命に危険があるほどじゃない。ならまだ大丈夫だろう。

「オレの力を手に入れるのはあきらめろ。お前たちのためにもな」

「また失敗や・・・」

これが真の究極神・・・！！すごい！

第１７話　真の究極神覚醒（後書き）

覚醒しました、究極神。効果は次回明かします。

究極神の新効果（前書き）

今回は説明会です。

究極神の新効果

究極神オシリス　旧テキスト

究極神オシリス
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力Ｘ０００　守備力Ｘ０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻守は自分の手札×２０００ポイントになる。このカードは魔法・モンスター効果を受けず、罠の効果を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法でフィールドを離れた場合、エンドフェイズに特殊召喚される。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、攻撃力・守備力に２０００ポイントのダメージを与える（超過ダメージ０）。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

新テキスト
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力Ｘ０００　守備力Ｘ０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻守は自分の手札×２０００ポイントになる。このカードは魔法・モンスター効果に影響されず、罠の効果の影響を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフを半分生贄に捧げ特殊召喚される。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、攻撃力・守備力を２０００ポイントダウンする。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１

以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されず、他のカードの効果の影響を受けない。

姿は全長7．５キロ→７５キロになった旧究極神オシリス

究極神オベリスク　旧テキスト

究極神オベリスク
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力８０００　守備力８０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠・モンスター効果を受けず、魔法の効果を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法でフィールドを離れた場合、エンドフェイズに特殊召喚される。このカード以外のモンスター２体を生贄に捧げることでこのターンこのカードは相手モンスターすべてに攻撃できる。この効果は相手ターンでも発動できる。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

新テキスト
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力８０００　守備力８０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠・モンスター効果に影響されず、魔法の効果の影響を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフ半分を生贄に捧げ特殊召喚される。このカード以外のモンスター２体を生

贄に捧げることでこのターンこのカードは相手モンスターすべてに攻撃できる。この効果は相手ターンでも発動できる。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されず、他のカードの効果の影響を受けない。

姿は、身長５キロ→５０キロになった旧究極神オベリスク

究極神帝ラー　旧テキスト

究極神帝ラー
レベル１５　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在するときのみ戦闘への参加が可能になり、効果も適用される。このカードはいかなる効果も受けない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果はすべて無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

新テキスト
究極神帝ラー
レベル１５　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。このカ

ードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在するときのみ攻撃が可能になり、効果も適用される。このカードは戦闘では破壊されない。このカードはいかなる効果にも影響されない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果はすべて無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は無効化されず、他のカードの効果の影響を受けない。

姿は全長１０キロ↓１００キロになった旧究極神帝ラー

「何が変わったの？」
いきなり出てくるなよ、ロキ！
「まあいいじゃん。で、何が変わったの？」
効果を『受けない』が『影響を受けない・されない』になった。
「具体的に言うと？」
たとえば、『受けない』だと、ラヴァ・ゴーレムなんかの生贄にされるんだよ。でも、『影響を受けない・されない』なら。
「ああ、生贄にできないと」
そういうこと。あとアバターなんかの効果にも影響されないから、攻撃力を超えられる心配はないね。他にはオネストなんかにも影響されないから、捨ててもアップ値は０になるよ。
「うわあ・・・・・」
でも、ディメンションウォールとか、アマゾネスの剣士はまずいけど。
「『モンスター』『カード』って書いてある効果の影響は受けないってことだね？」
ほとんどそういうことになるかなあ。ちなみに、コストの影響も受

けないから。
「ところでさ、身長、全長めちゃくちゃ大きくない？ラーに至っては熱圏に突入してるよ？見えるの？」
神召喚時に、空気が非常に澄むから、遠く召喚される神の全長を目がいい人なら見れるよ。
「前々から気になってたけど白く輝くラーって観れるの？まぶしくない？」
いくら白く輝くって言っても、目がくらんで見えなくなるほどじゃないし、輪郭の部分は少し金色だからみえるよ。眼が赤いから目立つし。
「ゴッド・アルティメット・ノヴァの光は？」
別に目はくらまないし。それに、あれは炎だから。温度が高いほど色が変わって、赤、金色、白の順になるから。それにあれは温度が高いなんてもんじゃないよ。全部破壊するんだから。
「時を破壊するってどうよ？」
神だし。
「そろそろセブンスターズ編だよね」
うん。三幻魔の効果を魔改造するよ。セブンスターズ編は作者的にかなり楽しみだったし。
「魔改造やめようよ」
いやだってそのぐらいしないと相手にならないじゃん。
「ネタバレだよ」
あ。

究極神の新効果（後書き）

次回からはいよいよセブンスターズ編です。作者的にはもっと早い段階で入ろうと思ってたんですが、遊んで書いてるうちにこんなのびてしまいました。１１月８日　効果を少し変更しました。というか、書き忘れてました。
ごめんなさい。

祝！5万ＰＶ！！（前書き）

記念回です。２つデッキ内容をさらそうと思います。

祝！5万ＰＶ！！

「いきなりこんなところに呼び出してどうした作者」

５万ＰＶ記念だよ。

「へ？５万？こんな駄文が？」

駄文って言わないで・・・凹むから。文才がないのは分かってるんだよ。

「で？何やるのさ？作者さん？」

デッキを公開しようと思う。レシピはほとんど作者のデッキだけど。

「ああ、そう。勝手にやってよ」

冷たいな。まあいいや。

究極神

デッキ枚数４０枚

モンスター１９枚

究極神帝ラー　×１

究極神オベリスク　×１

究極神オシリス　×１

機皇帝ワイゼル∞　×１

ガーディアン・エアトス　×1
トラゴエディア　×1
究極封印神エクゾディオス　×3
幻銃士　×3
ディープ・ダイバー　×3
クリッター　×1
終焉の精霊　×1
ネクロフェイス　×1
メタモルポット　×1

魔法15枚
封印の黄金櫃　×2
デビルズ・サンクチュアリ　×2
死者蘇生　×1
死者転生　×3
ダーク・バースト　×3
サイクロン　×2
終焉の焔　×2

罠6枚
聖なるバリア―ミラーフィース―　×1
激流葬　×1
リビングデッドの呼び声　×1
レインボー・ライフ　×3

「・・・もしかしてさ、友人との対戦で究極神使ってる？」

・・・・・・俺はいい友人を持ったな。

「やめなよ」

ほっといて。

「実際回るのか？これ」

不思議と回るよ。

「ふ～ん」

つ、次行こう。

闇属性

デッキ４０枚

モンスター３０枚

ダーク・クリエイター　×３

ダーク・アームド・ドラゴン　×１

堕天使ゼラート　×３

闇の侯爵ベリアル　×１

冥府の使者ゴーズ　×１

天魔神ノーレラス　×２

Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ　×３

ダーク・シムルグ　×１

軍神ガープ　×１

死霊騎士デスカリバー・ナイト　×２

ダーク・グレファー　×３

終末の騎士　×２

ファントム・オブ・カオス　×３

クリッター　×１

ネクロ・ガードナー　×１
バトル・フェーダー　×２

魔法８枚
トレード・イン　×３
名推理　×１
闇の誘惑　×１
手札抹殺　×１
悪夢再び　×１
クイズ　×１

罠２枚
闇次元の開放　×２

「こんなデッキとはやりたくない」

ロキがそんなこと言うなんて珍しいな。

「それにしてもまあこんな高いカードを次から次へと・・・」

いや、パックで当たったのが半分以上だからそんなにお金はかかってないよ。

「ああ、そう」

基本的にはノーレラス→ファンカス→ぶっぱっていう流れだよ。

「きついな」

でも、特殊召喚止められるとそのまま完封っていうパターンもあっ

たし、次のターンにインフェルニティ・デーモンひかれてＯＴＬってなったこともあるしね。

「お前のまわりどんな鬼畜デッキが流行してるのさ」

ＢＦ、インフェル、ライロとかかな。

「これでよく勝てるな」

がんばってるよ。それにちゃんとテーマデッキもあるし。

「楽しそうだな」

そうだね。

祝！5万ＰＶ！！（後書き）

２つ公開しました。
・・・構築のアドバイスが欲しかったりします。

第１８話　セブンスターズ編開幕！！（前書き）

いよいよセブンスターズです。

第１８話　セブンスターズ編開幕！！

リョウサイド

今日はとうとうこの日か。と、思っていると校長室に呼ばれたので行く。
そこにいたのはオレ達神々グループ、リリカルグループ、原作キャラグループだった。

「校長、用事とはなんですか？」

知ってはいるが、聞いておく。

「・・・・・三幻魔のカード、です」

「それがどうかしたのですか？」

「この島に古の時代から伝わる、３枚のカードです。そもそもデュエルアカデミアは、その封印場所の上に立っている」

「「「「「「「「「「えええ～～～～！！！」」」」」」」」」」

神々以外のグループは驚く。

「すごそうなカードだな」

「そしてそのカードの封印を解こうとしている者たちが挑戦してきました」

「つまり我らでそいつらを殲滅(せんめつ)すればよいのだな?」

「しかしどうやって封印を解くんだ?」

「これが三幻魔の封印を支えている、七星門の7つの門を破るといわれる門の鍵です」

「それでオレたちにどうしろと?」

「この7つのカギを守っていただきたいのです」

「人数が多いぞ。さらに言えば、どうやって守るんだ?」

守る方法は知っている。聞いておかなければ、変だと思われるだろう。

「当然、デュエルです。デュエルで勝たなければ、七星門の鍵を奪うことはできない。これもこの島に伝わる約束事です。我こそは、と思うものは、鍵を取ってください」

「おもしれぇ!やってやるぜ」

原作メンバーが鍵を取っていく。

「アハハハハハハ!!」

突然、ロキが笑う。

「そう次々と取って行かないでよ。俺達もやりたいんだから」

「しかし、鍵は7つしかありません」

「アハハハハハ。こういう時こそ・・・」

そう言い、ロキはディスクを構える。

「デュエルか」

「そうだよ、リョウ。君もやりたいんでしょ」

「そのために学園に来たようなものだし」

「まあな」

「確かに、強い奴が守るべきではある」

「そういうなら、行こうよ」

「いいだろう」

「まあ、オレからだな」

「そうだね。リョウは一番楽しみにしてたしね」

当然だ。こういったイベントを楽しむために来たのだ。楽しまずして神界になど帰れん。

「じゃあ、相手は俺だな」

「「デュエル」」

「十代、さすがにオレが勝手に勝負を挑んで、勝ったら十代にメリットがない、なんてのはこちらの気が済まない。オレに勝ったら・・・これをやろう」

そうしてオレが取りだしたのはＥ・ＨＥＲＯエアーマン。値段的な意味では満足してくれるはずだ。

「いいのか？へへ、悪いなぁ」

「そんなこと言ってもお前が勝つと決まったわけじゃない。もう始めろ」

「悪い悪い。ドロー。バブルマンを守備表示で召喚！2枚ドロー。ターンエンドだ」

十代
手札６
フィールド
バブルマン　守備力１２００

「オレのターン！ガトリング・オーガを召喚！」

「リョウ・・・いくらなんでもひどすぎだよ」

ロキの言うこともわかる。だが、これればかりは譲れない。

「ロキ、オレはここで負けるわけにはいかん」

「まあ、そういうと思ったけどね。アハハハハ」

「カードを４枚伏せてガトリングオーガの効果発動！オレの伏せカードを１枚墓地へ送るたびに、８００ポイントダメージを与える。４枚墓地に」

「うわあああああああ！！・・・危なかったぁ。後１枚あったら終わってたぜ」

十代ＬＰ４０００→８００

原作キャラサイド

「なんだあの効果は！！状況によっては先攻１ターンキルさえできるぞ！！」

「めちゃくちゃよ！」

「やはり恐ろしい奴だ、神帝は。デッキは時に違うが、そのすべてが強力だ」

「ペペロンチーノ！！」

・・・最後のは意味が理解できん。

サイドアウト

「ターンエンド」

リョウ
手札１
フィールド
ガトリング・オーガ　攻撃力８００

「俺のターンドロー！融合発動！スパークマンとクレイマンを融合して、来い！サンダージャイアント！その効果で、１ターンに１度このカードより元々の攻撃力が低いモンスター１体を破壊する。ヴェイパー・スパーク！」

「チイッ・・・」

「バブルマンを攻撃表示に変更！２体でダイレクトアタック！」

「・・・・・・・・」

リョウＬＰ４０００→８００

「ターンエンドだ」

十代
手札４
フィールド
サンダージャイアント　攻撃力２４００
バブルマン　攻撃力８００

「オレのターン。ヘルウェイ・パトロール召喚。バブルマンを攻撃」

「うわあああ」

十代ＬＰ８００→０

「鍵を渡してもらうぞ、十代」

「わかってるよ。ホラ」

「確かに。ではな」

「ちょっと待ってくれ」

「なんだ？」

「夜、お前の部屋行ってもいいか？」

「・・・・・（どういうことだ？）勝手にしろ」

「サンキューな」

サイドアウト

ロキサイド

アハハハハハハハ！！さすがリョウ。１ターンキルしなくてもえげつないね。

「次は俺の番だよ?相手は・・・そうだね。お前だぁッ!!」

そう言ってカードを1枚投げる。白紙のカードだ。

「わ、私!?いいわ、始めましょう」

「デュエル!」

「デュエルだぁ!!」

「私のターン!融合を発動して、サイバーブレイダーを召喚!ターンエンドよ」

明日香
手札3
フィールド
サイバー・ブレイダー　攻撃力2100

「俺のターン!!アハハハハハ!!フィールド魔法発動!!死皇帝の陵墓!このカードはライフを1000の倍数支払うことで、1000ポイントなら1体、2000ポイントなら2体生贄のモンスターを召喚できる!!2000ポイントのライフを払い!いでよ!!地縛神Ａｓｌｌａ　Ｐｉｓｃｕ(アスラ・ピスク)!!」

すると、モニターに外の様子が表示され、高層ビルぐらいの高さはあるであろう巨大なハチドリが現れる。しかし、魂は生贄に捧げていない。

「でも、サイバーブレイダーは相手モンスターが1体のみの場合、

戦闘では破壊されない！」

「アハハハハハハハハハ！！そんなことはわかってるんだよ！！地縛神Ａｓｌｌａ　Ｐｉｓｃｕはダイレクトアタックができる！！」

「攻撃力２５００でダイレクトアタックですって！？」

この世界では考えられないよね。アハハハ。

「食らえ！アスラピスクのダイレクトアタック！」

「きゃあああああああ」

明日香ＬＰ４０００→１５００

「ターンエンドだ！アハハハ！あきらめたらどうなの？」

ロキ
手札４
フィールド
地縛神Ａｓｌｌａ　Ｐｉｓｃｕ　攻撃力２５００

「誰があきらめるものですか！私のターン！機械天使の儀式を発動！レベル合計が８になるように生贄に捧げ、来なさい！サイバー・エンジェル－茶吉尼（だきに）－！！茶吉尼の効果！召喚時に相手モンスター１体を破壊！私が破壊するのは当然アスラピスク！！」

アスラピスクが倒れ、地に還る。

「クククク・・・アハハハハハハ！！この瞬間、アスラピスクの効果発動ぉーー！！」

地に沈む衝撃が明日香のモンスターを襲う。

「な、なに！？なんなの！？」

「アスラピスクが自分の効果以外でフィールドを離れた時・・・相手フィールド上に存在する表側表示モンスターをすべて破壊する」

「なんですって！？」

「そして、破壊したモンスター1体につき、８００ポイントのダメージを与える」

「きゃあああ」

明日香ＬＰ１５００→１００

「鍵は渡してもらうよ。アハハハハハハハ」

これで俺も参加決定♪

サイドアウト

リョウサイド

ロキも満足したことだし、戻るか。

「少し待ってください、みなさん。たった今、偽造のカギが完成しました。これを鍵を持っていない皆さんは持っておいてください。もしかしたら役に立つでしょう」

「校長、一応それをオレにも」

「はい、わかいました」

カミューラ戦で大いに役立つだろう。

～～～～その夜～～～～

ピンポーン・・・

来たな。十代。

「来たぜ、リョウ」

「何の用だ?十代」

「いや、これを受け取ってほしくてさ」

それは、何かのかけらのようだった。

「これは?」

これが何なのかは知っている。

「闇のアイテムってものらしい。かけらだけど」

「一応受け取っておく」

「ああ」

その瞬間部屋が光に包まれ、オレと十代はどこかへ飛ばされた。

第１８話　セブンスターズ編開幕！！（後書き）

次回、ダークネスＶＳリョウ　レッドアイズＶＳブルーアイズ！

第19話　ダークネスvsリョウ　レッドアイズvsブルーアイズ（前書き）

セブンスターズの一人、吹雪との戦いです。

第19話　ダークネスvsリョウ　レッドアイズvsブルーアイズ

リョウサイド

「ここは・・・火山だと!?」

アカデミア火山の火口だった。

「あっちい!!」

十代も・・・

「ここはどこ??」

「熱いっス」

「だるいんだな～」

なぜあいつらもここに?というか丸藤とあれ・・・あいつなんだっけ?デスコアラ（仮）でいいか。なんであいつらは変な結界の中にいるんだ?天上院だけはこの足場にいるが。

「ようこそ」

「セブンスターズの1人だな?」

「そうだ。セブンスターズの1人、ダークネス。貴様が俺の相手だ、黒き男よ」

「黒き男ではない。我が名はリョウ。行くぞ！」

「貴様のカギを奪う。闇のゲームで」

「「デュエル」」

「俺のターンドロー。言っておくが、時間とともにあの光の膜は消える。黒竜の雛を召喚、効果発動。このカードを墓地へ送り、手札の真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラック・ドラゴン）を特殊召喚する！さらに黒炎弾を発動。相手に２４００ポイントのダメージを与える」

リョウＬＰ４０００→１６００

「・・・・・」

「ターンエンド」

ダークネス
手札３
フィールド
真紅眼の黒竜　攻撃力２４００

「オレのターンドロー。古のルール発動。いでよ！青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）！レッドアイズに攻撃！滅びのバーストストリーム！」

ダークネスＬＰ４０００→３４００

ブルーアイズがバーストストリームを放ち、レッドアイズを消滅させる。

「うわあっ」

「カードを伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札３
フィールド
青眼の白龍　攻撃力３０００
伏せカード１

「俺のターン！死者蘇生を発動。よみがえれ！レッドアイズ！」

溶岩の中から再びレッドアイズがその咆哮とともに姿を現す。

ダークネスドラゴンか・・・しかし、それだけでは攻撃力は３０００、青眼と相打ちにするのがやっとの数値だ。さらに青眼には進化体が存在する。その程度では青眼を葬り去ることはできない。そうするつもりだ、ダークネス。

「レッドアイズを生贄に、真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を特殊召喚！さらにボマー・ドラゴンを召喚「なにっ！？（そんなカードがあったな。確かあのカードは自爆特攻したとき、戦闘ダメージを０にする。そして戦闘したモンスターを破壊する）面倒なモンスターを・・・」ボマー・ドラゴンでブルーアイズを攻撃。ダイナマイト・クラッシュ！」

「ブルーアイズが・・・」

「さらにダークネス・ドラゴンでダイレクトアタック！ダークネス・ギガ・フレイム！」

「くっ・・・ダメージが重い・・・闇のデュエルというだけあるな」

リョウＬＰ１６００→５６００→２３００

「なぜ!?」

「伏せカードを発動した。体力増強剤スーパーＺ。２０００以上のダメージを受ける時、ダメージ適用直前に発動。４０００ポイント回復する。その後にダメージ計算を行う。よってオレのライフはまだ２３００ポイント残る」

「ターンエンドだ」

ダークネス
手札２
フィールド
真紅眼の闇竜　攻撃力３３００

ここまでやってくれた恨み・・・倍にして返してやる。

「オレのターン。死者蘇生発動。来い、ブルーアイズ!!さらに魔法カード、滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）発動。相手のモンスターすべてを破壊」

「なにっ!?ダークネスドラゴンが!!」

「このターンブルーアイズは攻撃できないが、貴様に次のターンは与えない。融合発動!!いでよ、アルティメット・ドラゴン!さらにアルティメットを生贄に青眼の光龍（ブルーアイズ・シャイニング・ドラゴン）を特殊召喚!貴様の闇を消し去ってやる。シャイニングバースト!!」

「うわあああああああああ」

ダークネスＬＰ３４００→１９００

「ん？このカードは・・・」

ダークネスの仮面か。どうでもいいな。

「この光は？」

その瞬間、強い光が辺りを包み、次の瞬間には火山のふもとにいた。

「に、兄さん！」

「兄さん？」

「この人はわたしのお兄さん、天上院吹雪よ」

「えっ！？」

そうか、こいつは吹雪だったな。

「こいつはオレが連れていく」

そう言いながら、オレは吹雪を抱えて保健室に瞬間移動した。かなり便利な能力だ。

「先生。１人、重傷人がいます。お願いします」

「！！早く寝かせて！！」

そう言われ、吹雪をベッドに投げる。そして、先生がよそ見をしているうちにオレは消える。

「神帝君これを・・・あれ？」

「面倒事に巻き込まれすぎるのは好きじゃない、人助けをしにこの世界に来たわけではないのでな」

「リョウ！？どうしたの？その怪我？」

「大したことじゃない」

「動かないで」

そういうと、スクルドが治癒魔法をオレにかける。

「そんなものを使うほど重くはないぞ」

「でも、もしものことがあったら・・・・・」

そんな顔しないでくれ。もしものことなんてありはしない。一応自然治癒力は神々の中でも最高クラスだぞ。

「悪かった。ありがとう」

「うん」

吹雪は大丈夫か？まあいいか。

第１９話　ダークネスｖｓリョウ　レッドアイズｖｓブルーアイズ（後書き）

次回、リョウｖｓカミューラ　スクルド・・・すまない。

第２０話　リョウｖｓカミューラ　スクルド…少しの間、任せる（前書き）

ＢＧＭ：カミューラのテーマ

第２０話　リョウｖｓカミューラ　スクルド…少しの間、任せる

リョウサイド

「ボーイ・・・光のデュエルを・・・」

「俺にも好みがあるのでな」

２人とも原作通りに倒れたな。オレの番か。

「あなた・・・人間じゃないわね」

「ご明察。オレは人間じゃない。最高神、神帝リョウ」

消えに行く者に名乗る名前など持ち合わせてはいないが、冥土の土産にはいいだろう。

「あなたの魂一つでヴァンパイア一族は復活できるわね」

「お前の物になどならん。オレは、オレであり続ける！今も、これからも永遠にな！！」

「その自信、打ち砕いてあげるわ！」

「リョウ・・・頑張って・・・」

「「デュエル！！」」

「私のターン！ヴァンパイア・レディを召喚。カードを伏せターンエンドよ」

カミューラ
手札４
フィールド
ヴァンパイア・レディ　攻撃力１５５０
伏せカード１

「オレのターン」

奴は１ターンで倒さなければ・・・まずい！！

「デビルズ・サンクチュアリを発動！さらに幻銃士を召喚！銃士トークン２体を特殊召喚。メタルデビル・トークンと銃士トークン２体、ライフ半分を生贄に！降臨せよ、究極神オベリスク！！究極神オベリスクでヴァンパイア・レディを攻撃！「トラップ発動！」究極神オベリスクは、相手の罠の効果の影響を受けない！「それはどうかしらね。強制終了！」しまった！！」

「ヴァンパイア・レディを墓地に送り、バトルフェイズを終了！」

これでは・・・カイザーの二の舞・・・

「く・・・カードを１枚伏せ、ターン終了」

リョウ
手札２
フィールド
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターン。幻魔の扉を発動!!!これを無効にするなら、スクルドの魂と引き換えよ!!」

やはり・・・きたか・・・だが!

「スクルド!!これを・・・頼む!」

オレは不可視のスピードでスクルドに鍵を投げる。トールがそれを鉄槌で止め、スクルドの手に乗る。
トールはオレが必ず復活すると確信しているので、なにも困惑しない。

「リョウ!!やめて!私なんかのために、そこまでする必要ない!!」

「そうはいかない!次の者がこいつを倒せば、オレの意識は目覚める。しかし、一度幻魔の扉に吸い込まれれば、お前だとそこで終わりだ!」

「っ・・・でもっ・・・でもっ・・・」

お前を失うようなことをオレがすることはできない。お前の姉妹との約束でもあるし、オレ自身誓ったことだ。

「待たせたな。究極神オベリスクは、相手の魔法カードの効果の影響を発動ターンのみ有効とする」

「そう!よってオベリスクは破壊!私のフィールドに特殊召喚!幻銃士に攻撃!!」

「うおおおおおおおおおおお！！」

リョウＬＰ２０００→－４９００

「敗者は鍵を奪われ、魂を人形に封印される」

「フフフフ・・・ただでとらわれると思うなよ・・・」

「なんですって！？」

「とりこまれるのは魂のみ！肉体は渡さん！はあああああああ！！」

魔力を放ち、肉体だけはこの場に残す。神の肉体は、魂が離れると消滅する。しかし、わずかな魔力と神力を使い、肉体を保存することはできる。これで魂の器は残る。

サイドアウト

カミューラサイド

・・・肉体なんかどうでもいいわ。人形の姿がそのままだけど。

「鍵はもらうわよ」

私は鍵をつかみ取る。これは・・・偽物！？

「どういうこと!?」

ハハハハハハハハハハハ!!理不尽な効果のカードを使われて、おとなしく鍵を渡すとでも思ったのか!!貴様ごときに本来負けるはずがないのだ。人質を取られてなければな!そんなに鍵が欲しければ、オレを開放してもう1度戦うんだな!ハハハハハハ!!

「人形風情が・・・!!」

やられた。なら本物の鍵は?

「スクルド!!これを・・・頼む!」

あの時か!!くそっ。あんな一瞬でこんな芸当を・・・

「まあいいわ。他の鍵を手に入れた後で、もう一度お前を潰せばいい。魂の抜けた肉体などいらない!!持って帰りなさい!!」

「お前は俺が潰してあげるよ!楽しみに待ってな!アハハハハハハハハ。こんなになっちゃってさ、リョウ。まあ、少し休んでなよ」

「もうすぐ、次の招待状を用意するわ。アハハハハ!アハハハハハハ」

サイドアウト

ロキサイド

「スクルド・・・戻るよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「スクルド・・・・・・・・・・」

「うん・・・・・・・・・・」

こんな状態の彼女は見ていたくない。俺が見たいのは、いつものリョウと楽しそうにしているスクルドだ。・・・あのヴァンパイアは俺が潰す。いくらリョウが自らやったことでも、これはあのヴァンパイアが悪い。

～～～3時間後、深夜2時～～～

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前が連れて帰ってきた時からずっとあんな調子だ」

スクルドは今、暗い顔をしてリョウの前に座り、黙りこんでいる。

「リョウ・・・これ、借りるよ」

俺は、リョウのデッキを借りる。それも究極神を。

「ロキ・・・だめだよ・・・行っちゃ・・・」

「アハハ！俺があの程度のクズに負けるわけないじゃん。それに、リョウのデッキはお守りだ。倒すのはあくまで俺のデッキだよ。スクルドは俺を甘く見過ぎてる」

「油断はするなよ、ロキ。リョウもあの卑怯な手にやられているのだ。わたしもあの状況では、リョウと同じ道をたどるしかないだろうからな」

「卑怯さなら俺の方が数倍上だよ。ヴァンパイアの魂の器はもう集め終わってるからね。あのクズが人質を取るんなら、こっちも同じ手段で行けばいいんだよ。これでフェアだし。アハハハハ」

まあリョウは鍵を偽物にすり替えてるから、フェアじゃないと言えばフェアじゃないけど。

「ん？あれは・・・アハッ♪偵察ごくろうさま。じゃあね」

そういって窓の外にいる蝙蝠を焼き尽くす。

「こんな手段とってくるなんて、上等！」

さあ、準備しようか。ヴァンパイア狩りの準備を。

サイドアウト

第２０話　リョウｖｓカミューラ　スクルド…少しの間、任せる（後書き）

次回、ロキｖｓカミューラ　ロキの怒りに触れしものの末路

第２１話　ロキｖｓカミューラ　ロキの怒りに触れしものの末路（前書き）

今回はロキが邪道です。ここまで切れさせたのはカミューラが２人目です。

第２１話　ロキｖｓカミューラ　ロキの怒りに触れしものの末路

ロキサイド

相変わらず趣味悪いね。この城。俺だってもう少しセンスあるよ。

「ようこそ。今回はあなたがお相手なのね」

「正直お前ごときじゃ俺の相手になるかどうかわからないけどね。アハハハハハ」

「すぐにその言葉、後悔させてあげる」

「「デュエル」」

「俺のターンなんだけど、少し説明しておいてあげるよ」

俺は青い球体をいくつか取り出す。

「それは！！」

「わかってると思うけど、これはヴァンパイアの魂だよ。俺がダメージを与えれば１００ポイントにつき１個。俺がダメージを受けたら１００ポイントにつき１個、この魂を焼き尽くしてあげるよ」

「やめろ！」

「やだね。リョウをあんな卑怯な手段で倒しておいて、そんなこと

せがんだって、やめてあげるほど神は甘くないんだよ!!」

「あいつの魂なら返す!だからやめろ!!」

「もう遅いよ。いまさら返したところでね。頑張れば失う魂は４０個で済むから、頑張ってね～♪」

「クソッ!ヴァンパイアを全滅させたのはお前だったのか!?」

「違うよ。俺はただ魂を集めただけ。肉体を失ってさまよってる魂を集めるなんて、赤子の手をひねるより簡単だよ。ちなみにお前が勝てたら、４０人を除いてヴァンパイアをよみがえらせてあげるよ。言い忘れてたけど、幻魔の扉でギャラリーを人質にとるような真似したら、すぐに魂を破壊するから」

「クッ・・・」

「んじゃ始めるよ。ドロー。カードを5枚伏せてターンエンド」

ロキ
手札1
伏せカード5

このデッキに勝てるアンデットデッキがあったら見てみたいな。

「私のターン!魔法カード、悪魔の囁き!相手のフィールド上にモンスターがいないとき、相手はデッキからモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。そして、そのモンスターがフィールドを離れた時、２０００ポイントのダメージを与える!さあ、召喚しなさい!」

幻魔の扉とのコンボかな?させないけど。

「じゃあ俺は邪神ドレッド・ルートを特殊召喚するよ」

「幻魔のとびｒ「この時を待ってたよ!カウンタートラップ、神の宣告!」な!?」

「幻魔の扉を無効にする!でも、コストである自分の魂はきっちり払ってもらうよ」

「なら、強欲な壺を発動!」

「精霊の鏡。俺が2枚ドロー」

「このっ・・・だったらミイラの呼び声「サイクロン発動」くうぅ・・・ヴァンパイア・レディを召喚」

「奈落の落とし穴発動。破壊してゲームから除外」

「・・・・・カードを伏せてターンエンド」

カミューラ
手札０
フィールド
伏せカード１

「俺のターン。よかったじゃん。ライフを半分支払った分だけ潰す魂が減ったよ。もっとも、お前にとどめを刺せばヴァンパイア一族は本当に全滅するけど。っと、こんなことはどうでもいいんだ。デ

ュエルを続行する。サイクロンはつｄ「それにチェーンして、威嚇する咆哮を発動！このターン相手は攻撃宣言できない」がんばるね。どうせ１ターンしか生き延びられないのに。アハハハハハ！ターンエンドだ」

もう何をしても遅いけどね。アハハハハハハハ

ロキ
手札１
フィールド
邪神ドレッド・ルート　攻撃力４０００

「私のターン、ドロー。モンスターを伏せて、ターンエンドよ」

カミューラ
手札０
フィールド
伏せモンスター１

まだ戦うんだ。そんなにヴァンパイア一族を復活させたいのかな？よし、このターンでとどめを刺せなかったら、ゼウスに頼んでおいてあげよう。仲間のために他人の命を捧げるなんて、人間でもあまりやらないしね。

「俺のターン。装備魔法、メテオ・ストライクを装備する。ドレッドルートは貫通能力を得る。伏せモンスターに攻撃！フィアーズ・ノックダウン！！」

「あああああっ！！」

カミューラＬＰ４０００→１００
フィールド
魂を削る死霊　守備力２００→１００

・・・本当に生き残れるなんてね。ゾンビマスターだと思ったから調子にのっちゃった。

［ゼウス、聞こえる？］

［珍しいですね、ロキから私に直接会話を送ってくるなんて］

［まぁね。今から魂をいくつか送るから、この世界のどこでもいいから静かな場所に肉体を与えて生かしておいてね］

［ロキの口からそんな言葉が聞けるとは思ってもみませんでした。あなたは今まで滅ぼす側だったのに］

［アハハハハハ。間違っちゃいないけど、ひどいね。ま、よろしく］

［わかりました］

我ながら本当に珍しいことをやったなぁ。だから気まぐれの神なんて言われるんだ。

「ターンエンド」

ロキ

手札１
フィールド
邪神ドレッド・ルート　攻撃力４０００
＋メテオ・ストライク

「私のターンドロー・・・サレンダーするわ」

「へ？」

なにいってんの、こいつ？

「このままダメージを受けずにライフを０にする方法はこれしかなかったから、魂は返しておくわよ」

へえ。考えたね。俺もそんなは思いつかなかったよ。

「ふ～ん。じゃあもうどこへなりとも行きなよ。確か、世界のどこかにある、１日じゅう暗い場所に行けば、多分いいものが見つかるよ」

そういえば、幻魔の扉のコストはどうしたんだろう。まあいいか。
そんなことといちいち気にしてたらこっちが持たない。

「期待せずに行ってみるわ」

「そうしなよ。アハハハハハハハハハ！！」

「ギャラリーさ～ん。早くここを出ないと、城が崩れるよ～」

「「「「！！早く出よう！」」」」

「じゃあね～ばいば～い。アハハハハハハ」

俺は寮に瞬間移動する。

サイドアウト

リョウサイド

・・・まあ、こんなものだったのだろう。本当は、あの時に力ずくで逃れることもできたが、そんなことをすれば時間と空間が揺れて、大変なことになってしまうからな。

「リョウ！！」

「うおああ！？スクルド！！？」

そうだったな・・・スクルドはオレのせいで暗い顔をしていたんだっけ？

「すまない。スクルド。オレは・・・」

「いいよ・・・無事戻ってきてくれたから・・・あ！これ・・・」

スクルドが取りだしたのは鍵だった。しかし、受け取った直後、スクルドが抱きついて（？）くる。

「ううぅ・・・・」

「悪かった、スクルド。心配をかけたな・・・・・・・・」

そういって、泣きやむまでなだめる。今回ばかりは、本当に心配をかけた。人間との大戦以来じゃなかったか？

ロキサイド

・・・・・・もう少し外で時間つぶしてくればよかった・・・あの2人はどうしてああなのかな・・・でも、スクルドが笑顔になったからいいのかな？

というか、自分でどうにかできるんだったら最初からどうにかしてほしかったね。

サイドアウト

「・・・いま、十代達には全て話し終えたところだ」

「そうか。しかしリョウ、本当なら逃げられていたのではないのか？」

「そんなことしたら、世界が大変なことになるだろう」

「そうだった・・・わたしもとうとうボケてきたか・・・」

「誤魔化そうったってそうはいかん。今でも十分現役だし、知識を求め続けているだろう」

「やはり最高神には冗談が通じないのだな」

「そんな縁起の悪い冗談を言うな。本当になったらどうするつもりだ」

「少なくとも、生きている長さ的に先にボケるのはお前ではないか、リョウ」

「オレは戦いの神だ。ボケなど来ない」

「そうだったな」

「「・・・・・・。ハハハハハ・・ハハハハハハハハ！！」」

それからしばらく、オレ達は笑い続けた。

「あれ・・・スクルド？？」

「気付かなかったか？お前に頭を預けて寝てるだろう」

「ああ、本当だ。こんなところで寝たら風邪をひくだろう」

スクルドをお姫様だっこして、ベッドに運ぶ。生憎、オレはこの運び方しかしたことがないから、これ以外できそうにない。

～～～深夜３時～～～

・・・・・・・・・あれ?オレのデッキはどこだ?

そのあと、ロキがあわてて返しに来て、少し怒られたのはまた別の話。

リョウいわく、『オレ以外の奴が究極神を持っていると、たとえ神でもその影響力に耐えられなくなることがある』らしい。

第２１話　ロキｖｓカミューラ　ロキの怒りに触れしものの末路（後書き）

ロキｖｓカミューラでした。ロキも少し甘かったですね。魂を消す、と言っておきながら、結局消すどころか、復活させましたしね。
次回、２２話、風邪を引いたリョウ
お楽しみに！

第２２話　風邪を引いたリョウ　～過去のスクルド&リョウ～（前書き）

リョウが風邪をひきました。サブタイトルが予告と少し変更になりました。
今回はほとんどがリョウの思い出です。タイミングは、十代たちがカイバーマンと戦う時期です。

第２２話　風邪を引いたリョウ　～過去のスクルド&リョウ～

リョウサイド

・・・数時間前までバカ騒ぎしていたのが災いしたらしい。風邪をひいたようだ。

「最高神なのに・・・」

「さ、最高神でも風邪をひくことはあるよ、リョウ。それに、私にベッドを貸していたから風邪ひいたんだから、私のせいだよ」

「勝手にバカ騒ぎしたのはオレだ、スクルドには一切の責任がない。・・・暇だから出かけてくる」

「だめだよ、リョウ。安静にしてなきゃ」

・・・スクルドにこんな心配そうな顔をされ、こんなことを言われれば動けるはずがない。ずいぶんとスクルドに甘くなったものだ。いつからだ・・・こんな甘くなったのは・・・

～～～回想～～～

「うわあああああん」

「調子乗るな、スクルド！」

「やっちまえ」

「！！待て、離れろ！！」

ドゴォォォォォン！！

「やっぱり化け物だ・・・うわぁぁあああぁああ！！」

「私は・・・化け物？・・・ぐすっ」

そうか・・・当時のスクルドはこんなだったな。当時のスクルドは強いとは言えないが、それなりの戦闘力を持っていた。だいたい５兆年ぐらい前だったかな？我ら最初期の神々が誕生してから間もないころだ。五兆年というのは、人間界換算で計算した場合の日数であり、実際の神界に時の流れは存在しない。

当時にスクルドの身長は１４０前後だろう。大した力も持っていないと言われ、それでノルンの役目をやっているスクルドはいじめられていた。

「いつもいつも調子に乗りやがって！！ノルンの役目はお前なんかにはふさわしくない！！」

「やめろ！！」

「なんだ・・・今いいとこｒ！！最高神様！！」

「最高神・・・様？」

「その程度のことで重要な役目を追っている彼女を罵倒するのなら、

このオレが本当の力の差というものを見せつけてやろうか！！」

「お、お許しを・・・最高神様！！」

「もういけ。お前たちの顔など見たくない。お前たちと同じ世界にいるというだけでイラつく！！」

「ヒィィィィ」

「戦う力すら持っていないクズどもめ・・・ん？ああ、悪かった。驚かせたな」

「い、いいえ。こちらこそ見苦しいところをお見せして申し訳ありません」

「そんなに丁寧にしないでくれ。そういうのは好きじゃないんだ」

「しかし・・・」

「いいんだ。ところでお前、名は？」

「スクルドです」

「だから丁寧にしないでくれ」

「わ、わかり・・・わかったよ。ところで、君の名前は？」

「リョウだ。神は神帝リョウと呼ぶけど。そんなことはいい。家まで送って行こう」

まだ当時の神界はそんなにたくさん神や天使がいたわけではない。
人間界も発展途上だ。

「お、神帝様、今日はかわいい方をお連れですね。もしかして・・・
春が来ましたか？」

「（かわいいって／／／／）」

「よしてくれ、そんなんじゃない」

「（・・・少し残念・・・そう思うのは私は一目見たときに好きに
なったからかな？）」

スクルドに聞こえないように話す。

（いまのところはな）

（今のところ、ですか。惚れたんですか？）

（・・・・・・まあな／／／）

（神帝様もかわいいところがあるじゃないですか）

（ほっといてくれ）

「じゃあな」

「はい。お幸せに」

「よ、よせ！！・・・行くぞ、スクルド」

「え?あ、うん」

「フフッ」・・・こんなこともあったな。

「どうしたのさ?リョウ。急に笑って」

「ろ、ロキ!?い、いや、なんでもない」

「絶対にそんなことないって。顔赤いよ?熱上がったんじゃない?スクルd「ま、待て、本当に何でもないんだ!頼むから今はスクルドを呼ばないでくれ!!」・・・そう?ならいいけど」

「「ロキ、少しこっちに来い」」

「なに?オーディンにトール」

「今、リョウは多分思い出に浸っている」

「だから邪魔をするな」

「思い出?思い出って?」

「ああ、お前はまだ生まれてなかったな。スクルドとの出会いだ」

「へぇ。聞かせてよ」

「いいだろう。しかし、我とオーディンから聞いたというなよ」

「そんなことわかってるよ」

当時のリョウの身長は１４５センチぐらいだった。スクルドと殆ど変わらない。

「スクルドー。いるか～？」

「「ほら、来たよ、スクルド」」

「わ、わかってるよ・・・／／／／今行く～」

「よ、よう／／／とりあえず、行こう」

「う、うん／／／」

手をつないで出かける。つなぐのはスクルドの方からだが。リョウはこんな度胸はなかったためというより、そんなことをするのを知らなかったために、自然とこういう形になる。

「やあ、リョウ。今日もデートかい？」

「いいね～」

皆、微笑ましいものを見る目で見てくる。スクルドを罵倒していた奴らですら、こういうことを本心で言ってくるのだ。多少からかいの意が含まれているが、罵倒は完全になくなったころの話だ。

ちなみに、今の２人は神界にある店の店主と、散歩をしている知り合いだ。

「あ、店主、黄金のリンゴジュース１つ」

「あいよ」

「ほら、スクルド、飲みな」

「いいの？お金・・・」

「そんなこと気にするな。つまらなくなる」

「じゃあ、一緒に飲もうよ」

「！！ななな、何言ってんだ！！」

「いや、だから、一緒に飲もうよって。すいません。ストローもう一本」

「ハイハイ♪ただいま♪」

「ほら、リョウ」

「わかったよ（スクルド、狙ってやってるのか、天然なのか・・・）」

「リョウ、ちょっとむこう向いてて」

「ん？ああ、わかった」

「・・・・・・・・もういいよ～」

「ああ、って、ないじゃん。りんごジュース」

「あはははは♪ひっかかった♪」

「ひっかかったって、スクルド・・・・・・」

「あ、ごめん・・・どうしてもやってみたくて、だから・・・ごめんなさい」

「クッ・・・ククククク・・・ハハハハハハハハ!!このぐらいで怒るわけないだろ」

「よかった～」

「さ、行こうか?ごちそうさまでした」

・・・・・こんなこともあったな。見事にしてやられた。楽しかったな。そりゃあ今も楽しいけどな。

「まってよ～リョウ～」

「追いついてみろよ」

「追いつけないよ～～ぐすっ」

「!!ああ・・悪かった!!オレが悪かった!だから泣かないでくれ」」

そう言ってスクルドに近づく。

「あはっ♪つっかま～えた♪」

スクルドが抱きついてくる。

「あ。って、抱きつくなよ！恥ずかしい！」

「え～いいじゃん。暖かいし／／／」

そういえばスクルドは意外とアプローチは積極的だったな。ああ、今もか。

（ちょっとオーディン、トール。リョウ、なんか危ないよ？）

（きっと今思い出してるのはデートの日々だな）

（普通、思い出しただけであんな赤くなる？）

（リョウは当時、全然耐性がなかったからな。今もないが）

（え？今もないの？その割にはずいぶんいちゃいちゃしてるじゃん）

（あれは恥ずかしさを表面上に出してないだけだ。スクルドは演技がうまくないから、隠すことができない。だからそういうふうに見えるんだろう。もっとも、リョウはすでにある程度割り切っているがな）

「さて、そろそろ帰るか」

「うん・・・・・・・」

「そんな顔するな。会えなくなるってわけじゃないんだから」

「そうだけど・・・あ、そうだ！」

「どうした？」

「泊まりに行っていい？」

「・・・・・・・・・なに言ってるんだよ。自分の言ってることわかってるのか？」

「だから、泊まりに行ってもいいかって・・・ダメ？」

上目づかい・・・だが、この程度で落ちればオレの威厳が・・・

「家族に聞いて来い」

無理だ。あの顔には勝てない。究極神を使っても勝てそうにない。

～～～１０分後（過去の中で）～～～

「リョウ～～～、はあ・・・はあ・・・。やっと着いた。泊まってもいいって」

「そうか。なら行くぞ」

「うん♪」

２０分ほど歩く。

「着いたぞ」

「うわああ・・・」

そこにあったのは、頂上が見える気配のない途方もない高さを誇る塔。

「入るぞ」

中に入ると、中央の床が動き、頂上に向かいすごいスピードで登る。

「今帰ったぞ」

「遅かったですね。リョウ。楽しんできましたか？」

「それが――――――――――――――――――――というわけでだな」

「いいですよ。あなたの部屋なら」

「はぁ？余っていた部屋、あるだろ」

「あなたは客人を別の部屋に連れて行き、１人にするつもりですか？」

「うっ・・・分かったよ。行くぞ、スクルド」

「うわあああ・・・広ーーーーい♪」

「ま、最高神だからな。仮にも。料理が菓子しかできないから台所はあまり使ったことがないな」

「なら、私が作るよ」

「できるのか？」

「少しね♪」

そして運ばれてきた料理は・・・

「これのどこが少しなんだ？」

どうみても人間界の金１０万では食べれそうにない高級な料理の数々。

「自信なかったから・・・」

「まあいい。いただくぞ」

「召し上がれ」

口にした瞬間、別の世界が広がる。（良い意味で）

ああ、スクルドの料理、あの1回しか食べてないけど忘れてないな。しかし自分から頼むのも変だしな・・・。もう1度食べたい・・・

「リョウ～ご飯できたよ～」

「本当！？」

ラッキー。

（オーディン。リョウ、なんで急に機嫌よくなったのさ）

（スクルドの料理が食べられるからだろう。感想を聞いたが、良い意味で次元が違うらしい）

（・・・ちょっと食べてくる）

「スクルド、いただくぞ」

「うん♪」

「リョウ、俺にも一口・・・って、なんじゃこりゃあああああ！！そんな高級食材、どこから手に入れたの！？！？」

「え？冷蔵庫の中にあった材料を使っただけだよ」

「・・・アレ、おかしいな・・・冷蔵庫の中には高級食材は何一つ入ってなかったはずだよ？」

「普通の材料だよ」

「すごすぎだろ！！一口頂戴」

「いいぞ」

「ありがとう！！リョウ・・・うますぎる！！」

正直、気絶しそうだ。

「ごちそうさま」

「うん。片付けておくから休んでいいよ」

（結婚しなよ・・・リョウ、スクルド）

（ロキ、何勘違いしてるんだ。もうとっくの昔にしたぞ。あの2人は）

（え?そうなの?でも、キャラ設定のところじゃ付き合っているとしか）

（メタ発言はよせ。そんなところは我らの力でいくらでも変えられる）

・・・・・眠いな。思い出に浸るのはこのぐらいにして、もう寝よう。

サイドアウト

～～～～～3時間後～～～～～

スクルドサイド

ふあああああぁあ。眠くなっちゃった。そういえば、リョウ、私が風邪をひいたって聞いたとき、光速の2倍の速さで来てくれたんだっけ。

「スクルド!?大丈夫か!!??」

「うん。少しめまいがしただけだよ」

「ああ、よかった」

アハッ♪あの時のリョウの焦った顔、かっこよかったな。今もかっこいいけど。・・・もう寝よう。眠すぎる。「リョウ、隣入るよ?・・・やっぱり暖かい・・・変わらないなあ」

そういって、リョウを抱き枕にして寝る。

サイドアウト

ロキサイド

・・・・・・・・・・普通、風邪ひいてる人の隣で寝る?・・・普通じゃないからいいのか。

オーディン・トールサイド

「やはりいつもの2人だな」

「ああ、そうだな。安心した」

この2人がケンカしたところはいまだに見たことがない。

サイドアウト

ちなみに、次の日スクルドに風邪が移ったのは言うまでもない。

第２２話　風邪を引いたリョウ　～過去のスクルド&リョウ～（後書き）

※作者の力（ご都合主義）で、設定が少し変わりました。
５万ＰＶのデッキ内容も少し変わりました。
終焉の精霊×２↓×１
ネクロフェイス×０↓×１

思い出話でした。砂糖製造の過去ですね。分かります
ス「違うよ!ちゃんとした思い出だよ」
なぜ出てきた?
ス「作者さんが変な勘違いしないように」
ひでぇ・・・

神の仕事（前書き）

番外編ではありません。本編の途中の出来事です。でも本編の話には入りません。

・・・矛盾しまくってごめんなさい。作者の頭では、どう言っていいのかわかりません。

神の仕事

リョウサイド

今は神界にいる。なぜこうなったのかは2時間ほど前にさかのぼる。

〜〜〜回想〜〜〜

「リョウ〜、ゼウス様が呼んでるよ〜」

「ああ、今行く」

「何の用だ？ゼウス」

「少し神界に来てくれませんか？」

「・・・分かった」

〜〜〜回想終了〜〜〜

「で？なんで呼んだのだゼウス？」

「人間の数が増えたので、リストを作りました。最高神として、目を通しておいてください」

「わかった」

リストを受け取り、目を通す。

～～3時間後～～

「お茶をどうぞ」

「ああ、すまない」

お茶を受け取ろうとしたが・・・

「うおっ！！」

「ああ～～～～～名簿が～～～～！！」

お茶をこぼして、名簿が濡れてしまった。

「この人の名前、完全に濡れて破けましたね・・・」

「・・・見なかったことにしよう」

「だめでしょう。明らかにすぐに死んでこちらに来ますよ」

「オレがチート能力とやらを与えるのか？やったことないが」

「大丈夫です。あなたに謝ってはもらいますが、見ていてもらうだけですので」

「そうか」

程なくして、一人の男がやってきた。

「ここは？」

男サイド

・・・ここはどこだ？確か鉄柱が倒れてきて潰されたはず。

「天国か？」

「違う」

声がかけられた方を向いてみると、一人の男が立っていた。

「誰だ？」

「最高神だ。こちら側のミスでお前を殺してしまった」

こいつは今何て言った？

「ふざけんなぁぁ！！」

「すまなかったな。だから、チート能力をつけて好きな世界に飛ばしてやる」

まじで！？

「じゃありりなのの世界に」

「わかった（あの世界は後いくつ平行世界のストックがあったかな？・・・1兆個か。ならいいだろう。足りなかったらまた作ればいい話でもあるからな）。で、能力は？」

「魔力ＭＡＸ，身体能力ＭＡＸ、俺の知ってるアニメの技全部使えるようにして送ってくれ」

「わかった。ゼウス」

「はい。じゃあ始めますよ」

そうゼウスと呼ばれた奴が言うと、俺の足元に穴ができた。

「じゃあな、せいぜいがんばれ。連絡したいときはお前の行く世界で言う『念話』と同じ要領で声をかけろ。あと、年は5歳から、無印の４年前からスタートだ」

「覚えてろぉぉぉぉ」

俺は穴に落ちながら、そう叫んだ。

サイドアウト

「一応言われたとおりにしたぞ。・・・あの程度の能力で満足する

とはな」

「まあ、人間からすればあれで十分チートなんでしょう」

「そんなものか。オレなら全力の１％も使わずに勝てるな。あの程度なら」

「そうでしょうね」

本当にあの程度で満足するとはな。残念だが、オレの相手にはならん。

「スクルドが待ってるからもう行くぞ」

「わかりました・・・！！ちょっと待ってください」

「なんだ？」

「デバイスと呼ばれる武器を渡すのを忘れました。なので、あのものが行った４年後のＡ，ｓと呼ばれるものが始まるときに行って、これを渡してきてください」

そういうのはお前の役目だろう。そもそもなぜ４年後なんだ？

「なんでオレなんだ」

「私は残りの仕事がありますので」

そういうことなら仕方がない。

［スクルド、聞こえるか］

［あ、リョウ？どうしたの？］

［少し帰りが遅くなる。すまない］

［え～～。分かった。なるべく早く帰ってきてね］

［ああ］

「じゃあ行ってくる」

～～～A，sの世界～～～

健也サイド（転生者の男）

・・・デバイスなしでここまで戦っているが、さすがにやたらと能力は知られたくない。が、これは少々厳しい。今俺はヴォルケンズ４人を相手にしている。なのはたちを守るために。・・・さすがにきつくなってきたな・・・。

・・・ん？あの光は・・・？

サイドアウト

・・・見つけたぞ。交戦中か。少しぐらい手を出してもいいか。

「見つけたぞ。転生者。ゼウスが渡し損ねたデバイスだ。受け取れ」

デバイスを投げる。

シグナムサイド

なんだあの男は!?計り知れない魔力の上に、魔力とは違う力、さらには血の匂いを感じる・・・

「待て、ヴィータ!!」

ヴィータがいきなり突っ込んだ。あいつは、あの男はまずい!

サイドアウト

「ほう。不意打ちとはな。だが、その程度のスピードで不意打ちを仕掛けても、止まって見えるぞ。ハアアアアア!!」

剣を取り出し、腹の部分で殴りつける。

「うわあああああ!!・・・コノヤロー!!」

単純に突っ込んでくるとは・・・そんなことをすれば格好の的だ。

「ギガント・シュラーク！」

鉄鎚が巨大化した・・・なるほど。力押しの魔法か。しかし、

「はあああああああ！！」

体から少しだけ力を開放する。

「うわっ！！」

それだけで、鉄鎚が押し返される。

「おい、待て！あいつは俺の相手だ」

「少し休んでろ、転生者。オレは少し暴れたい。そこのチビ！その程度の下級魔法でオレを倒そうなどと本当に思っているのか！」

「これが下級魔法だと！？なめんなあああああ！！」

「本当の上級魔法っていうのはな・・・こういうものをいうんだよ！！天より生まれし隕石よ！眼前の敵をうち砕け！」

そう唱えると、結界の外の空間に大穴があき、そこから巨大な隕石が降ってくる。それは結界をいともたやすく破り、あの赤いチビにまっすぐ向かう。

「うあああああああ！！」

「ヴィータ！！」

一応殺さない程度にしておいたから命に別状はないだろう。

「何やってんだよお前！」

「なにって・・・降りかかった火の粉を潰しただけだが？」

あ、逃げられたな。惜しい。

「あんなの受けたら死ぬだろ！」

「加減はした。それに寸前で仲間に連れてかれたから大丈夫だ。多分」

「はあ・・・もういいから帰れ。これ以上お前が暴れるとｋ「健也君。その人誰？」はぁ・・・俺をこの世界に飛ばした奴だ」

「飛ばしたのはオレじゃないだろ」

「時空管理局嘱託魔導師、フェイト・テスタロッサです。お話したいことがあるので、ついてきてもらえますか？」

「断る」

そんなものにつきあってられるか。スクルドが待ってるんだ。

「即答！？」

「オレには用事が「お願いします、お話聞かせてください！」だから断ると言っているだろう」

「それなら、私と戦ってください！勝ったら、ついてきてもらいます」

「なのは無茶だ！こいつにだけは勝負を挑むな！一瞬で負ける！」

「健也だったか？はそういってるぞ」

「やってみなくちゃ分からない！」

やってみなくてもわかるが、少し痛い目にあわせなければわからんな。

「いいだろう。そこまで言うならやってやる。１０秒後にスタートだ」

「１０…９…８…７…」

フェイトがカウントダウンを始める。０になった瞬間がお前の終わりだ、高町。

「６…５…４…３…２…１…スタート！」

シュッ！！

「ｒ「終わりだ」！？っ・・・・・・」

瞬間移動で後ろに回り込み、首を打つ。

「今度こそ帰る。もう邪魔はするなよ」

剣で空間を斬ってその中に入り、一瞬でブルー寮の前につく。・・・・
プラシドみたいだ。

「スクルド～帰ったぞ～」

「お帰り。遅かったね。ちょっとさびしかったよ・・・」

「悪かったな。少し邪魔が入った」

「ならいいよ。リョウもちゃんと帰ってきてくれたし♪」

サイドアウト

健也の世界のアースラサイド

～おまけ～

「彼にはぜひ時空管理局に入ってほしかったですね・・・」

無駄だ、あの神が人間の組織なんかに協力するわけがない。

「あの男がいれば、将来の管理局も大丈夫だっただろう・・・それだけに本当に残念だ。なのはを一瞬で倒すほどの技と力・・・ぜひ欲しかったな」

クロノ。そんなこと言ったら消されるぞ。・・・それにしても、こ

のデバイス、すごい力だ。魔力をいくら消費しても、すぐに回復する。神が作っただけあるな。

神の仕事（後書き）

リョウの仕事でした。後半はあまり関係有りませんでした。でも、どのくらいリョウが強いか、なんとなくわかっていただけたと思います。圧倒的な力とスピードで相手に何もさせずに倒す。これがリョウの戦闘スタイルです。

第２３話　リョウｖｓタニヤ（前書き）

今回は殴り合いのデュエルです。三沢はすでにやられた後です。
タニヤのデッキも改造しました。あれだと相手にならないので・・・

第２３話　リョウｖｓタニヤ

リョウサイド

三沢が３人目のセブンスターズにやられた。集中しないからそうなるんだ。・・・あのタニヤとかいう女、人間ではないな。インフィニティ・アイは虎の姿をとらえている。おそらく本当の姿なのだろう。最初に生徒たちがいないと思ったら、こんなものを造っていたのか。究極神は使えんな。せっかく造ったであろうコロシアムが壊れる。・・・とりあえず、始めるか。だがその前に、聞くことがある。

「おい、タニヤといったな。貴様、なぜセブンスターズになった？」

「セブンスターズになれば、強い男と戦うことができると思ったからだ。お前はずいぶん強そうだな」

「生憎だが、オレは男でも女でもない。性別という概念のない存在だ」

ただ強い男を求めるならもっと別の方法もあっただろう。

「すまない。嫌な事を聞いたな」

「構わない。行くぞ！」

「「デュエル」」

「私のターン。フィールド魔法、アマゾネスの里を発動。このカー

ドがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在するアマゾネスの攻撃力は２００ポイントアップする。また、アマゾネスと名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、そのアマゾネスのレベル以下のアマゾネスと名のついたモンスター１体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。ただし、この効果は１ターンに１度しか使用できない。さらにアマゾネスの剣士を召喚。
ターンエンド」

タニヤ
手札×４
フィールド
アマゾネスの剣士　攻撃力１７００
アマゾネスの里

「オレのターンドロー！ニュート召喚。ニュートでアマゾネスの剣士を攻撃」

「アマゾネスの剣士の効果により、戦闘ダメージは相手が受ける。
さらに、アマゾネスの里の効果により、デッキからアマゾネスの聖戦士を特殊召喚する！」

リョウＬＰ４０００↓３８００

「カードを１枚伏せターンエンド」

リョウ
手札×４
フィールド
ニュート　攻撃力１９００

伏せカード×１

「私のターン。ドロー、アマゾネスの格闘戦士を召喚！アマゾネスの里の効果により、攻撃力２００ポイントアップだ！さらに、アマゾネスの聖戦士は自分フィールド上のアマゾネス１体につき、攻撃力が１００ポイントアップする。アマゾネスの聖戦士で、ニュートを攻撃」

「させるか！速攻魔法、突進！ニュートの攻撃力をエンドフェイズまで７００ポイントアップする」

「くっ・・・」

タニヤＬＰ４０００→３５００

「ターンエンド」

タニヤ
手札×４
フィールド
アマゾネスの格闘戦士　攻撃力１７００
アマゾネスの里

「オレのターン！オレはサファイアドラゴンを召喚。アマゾネスの格闘戦士を攻撃！」

「アマゾネスの格闘戦士の効果により、私へのダメージは０になる。さらに、アマゾネスの里の効果で、デッキからアマゾネスの聖戦士を特殊召喚！」

「ちっ・・・カードを1枚伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札×３
フィールド
ニュート　攻撃力１９００
サファイアドラゴン　攻撃力１９００
伏せカード×１

「私のターン。私は、アマゾネスペット虎（タイガー）を召喚！！このカードは自分フィールドのアマゾネス1体につき攻撃力が４００ポイントアップする。さらに、アマゾネスの里の効果で２００ポイントアップだ。そして、このカードが表側表示で存在するとき、相手は他のアマゾネスに攻撃することはできない！」

「だが、このタイミングでトラップを発動する。威嚇する咆哮。このターン、相手は攻撃宣言できない」

「ならばターンエンドだ」

タニヤ
手札×４
フィールド
アマゾネスペット虎　攻撃力２１００
アマゾネスの聖戦士　攻撃力２１００
アマゾネスの里

「オレのターン！オレは装備魔法、魔界の足枷をアマゾネスペット虎に装備する」

巨大な足枷が、アマゾネスペット虎の足にはまる。

「このカードを装備したモンスターの攻撃力は１００になり、攻撃ができなくなる」

「なんだと！？」

「ニュートでアマゾネスペット虎を攻撃！」

「くうぅ・・・アマゾネスの里の効果で、デッキからアマゾネスペット虎を特殊召喚する！」

「またか・・・厄介な」

タニヤＬＰ３５００→１７００

「カードを１枚伏せてターンエンドだ」

リョウ
手札×２
フィールド
ニュート　攻撃力１９００
サファイアドラゴン　攻撃力１９００
伏せカード×１

「私のターンドロー！来たか！アマゾネスの聖戦士を生贄にアマゾネス女王（クイーン）を召喚する！アマゾネスの里の効果で攻撃力２００ポイントアップ。アマゾネス女王の効果によって、自分フィールド上のアマゾネスは、戦闘では破壊されない！「なにっ！？（このデッキで効果破壊ができるカードは少ない・・・まずいな）だが、トラップ

発動、和睦の使者。このターン相手から受けるダメージを０にし、オレのモンスターは戦闘では破壊されない」ターンエンドだ」

タニヤ
手札×４
フィールド
アマゾネス女王　攻撃力２６００
アマゾネスペット虎　攻撃力２１００
アマゾネスの里

・・・奴の場にはフィールドから離さなければ他のアマゾネスへの攻撃を封じる虎とアマゾネスを戦闘破壊から守る女王がそろっている・・・この状況を打破するには・・・

「オレのターン！サイクロン発動。アマゾネスの里を破壊！」

「くっ、アマゾネスの里が・・・」

「さらに、月の書を発動。アマゾネス女王を裏側守備表示にする！」

「なっ！！」

「まだだ！サファイアドラゴンで、アマゾネスペット虎を攻撃！」

タニヤＬＰ１７００→１３００

「ターンエンド」

リョウ
手札×１

フィールド
ニュート　攻撃力１９００
サファイアドラゴン　攻撃力１９００

「私のターン！アマゾネス女王を反転召喚！さらに、アマゾネスの格闘戦士を召喚。アマゾネス女王でサファイアドラゴンを攻撃！」

「チィッ・・・」

リョウＬＰ３８００→３３００

「カードを１枚伏せターンエンドだ」

タニヤ
手札×３
フィールド
アマゾネス女王　攻撃力２４００
アマゾネスの格闘戦士　攻撃力１５００
伏せカード×１

「オレのターン！モンスターを伏せ、ターンエンド」

リョウ
手札×１
フィールド
ニュート　攻撃力１９００
伏せモンスター×１

「私のターン！アマゾネスの剣士を召喚！アマゾネスの剣士で、ニュートに攻撃！戦闘ダメージはお前に受けてもらう」

リョウＬＰ３３００→２９００

「小癪な手を・・・」

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

タニヤ
手札×２
フィールド
アマゾネス女王　攻撃力２４００
アマゾネスの格闘戦士　攻撃力１５００
アマゾネスの剣士　攻撃力１５００
伏せカード×２

「オレのターン！」

このデュエルも終わりか。もう少し楽しんでいたかったがな。

「ニュートと伏せモンスターを生贄に捧げいでよ、破壊竜ガンドラ！！」

「なに！？ガンドラだと！！」

「ガンドラは召喚ターンのエンドフェイズの破壊される。だが、ライフを半分払うことで、フィールド上のこのカード以外のカードをすべて破壊し、ゲームから除外する！そして、破壊したカードの枚数×３００ポイント攻撃力を上げる！行け、破壊竜ガンドラ！！デストロイ・ギガ・レイズ！！」

「うわあああああ！！・・・私の、アマゾネス達が！！」

リョウＬＰ２９００→１４５０
破壊竜ガンドラ　攻撃力０→１５００

「破壊竜ガンドラでダイレクトアタック！」

タニヤＬＰ１３００→－２００

「久々に楽しめたぞ、リョウ。皆も、縁があったらまた会おう！！」

「気高い女（トラ）だったな。さて、行くか」

「リョウ君はやっぱり強いっスね」

「このデッキはまだ発展途上だ。改良のやり甲斐がある」

「あれで発展途上なの！？（どれだけ強いのよ、リョウは・・・もしかしたら、亮よりも・・・）」

「オレはもう帰るぞ。じゃあな」

～～～ブルー寮～～～

「アハハハハハハハハ！！ガンドラで決着がついたんだ。リョウにしては珍しいね。魔法、罠を少ししか使わないなんて」

「お前に言われたくはない、ロキ。お前の方こそえげつないデッキ

が多いだろう」

「そりゃあ俺の趣味だもん」

何て悪趣味な奴だ。スクルドが震えてるぞ。

「さて、今日もデッキ改造するか」

オレは、机の上にカードを並べ始めた。

第２３話　リョウｖｓタニヤ（後書き）

タニヤｖｓリョウでした。殆ど小細工のないデュエルで、作者もすっきりしました。

～～～作者のどうでもいい日記～～～

今日の友人とのデュエル結果

究極神　２勝３敗

植物　３勝１敗

闇　４勝２敗

ドラゴン　２勝０敗

裏サイバー　１勝３敗

表サイバー　２勝２敗

という結果でした。

友人のデッキは、ＢＦ、ライロ、インフェルニティ、ガスタ、次元帝などです。

第２４話　タナトスｖｓロキ　ソリティアの力（前書き）

海の商人タナトスと声が大きいことにイラついたロキがデュエルします。

見やすくなるように他の作者様の書き方も見習って努力してみましたが、そんなに見やすくはなってないかもしれません。

第２４話　タナトスｖｓロキ　ソリティアの力

ロキサイド

今日は主に俺視点で行くよ。…誰に話してるんだろう。まあいいや。
たった今アカデミアに巨大な船が来たところだ。なんか男の人間が
現れたんだけど…何をしに来たのかな？

「だっちゅーの！！」

ギュイ～～～～～～ン

…うるさい。とにかくうるさいって言う言葉が一番合うね。
マイクの音量下げてよ。

「なんだなんだ？」

「うるさいっス」

今回ばかりは同意だよ。十代、丸藤弟。

「リョウ。少しだけあの人のところに行っていいよね？」

「（ああ、怒ってるな。止めたらとばっちりが飛んでくる）手荒な
ことはするなよ」

「わかってるよ」

俺は勢いをつけて跳躍

２０メートルは離れた船に飛び乗った。

「何の用でここに来たのかな？」

「ここには三幻魔のカードがあるって聞いてきたんだっちゅ～の！」

「その三幻魔に何の用かな？」

「三幻魔が欲しいんだっちゅ～の！金はいくらでも出すから売ってくれっちゅ～の」

この人の口癖何とかならないかな。

そうだ、いいこと思いついた。

「なら俺とデュエルしようよ。勝てば三幻魔はただであげる。でも、俺が勝ったらおとなしく帰ってもらうよ。どうする？」

「そのデュエル、受けて立つっちゅ～の！

だが、一つ条件があるっちゅ～の。」

「その条件て何さ？」

「俺が勝ったら、お前にも俺についてきてもらうっちゅ～の」

ずいぶんと度胸のある条件だね。

俺を人間が飼いならせるわけないのに。

「いいよ。じゃあちょっと待っててね。デッキ持ってくるから」

再び陸地に向かってジャンプする。

生徒が眼を丸くして驚くけど無視だ。
リョウの元まで黙って行く。

「リョウ。あのデッキ貸してよ」

「あれを使うのか！？だがあれは、制限改定前の一番ひどい状態のデッキだぞ」

「いいよ。少し痛い目にあわせてあげるから」

「（もう止められないな）」

リョウは黙って懐からデッキを取り出して俺の手の上に乗せた。

「じゃあ行って来るよ」

再びジャンプ。さすがに疲れるな。

「待たせたね。始めようか」

さて、シンクロモンスターはっと…
トリシューラ3枚、ミストウォーム1枚、ゴヨウ・ガーディアン1枚…
これだけあれば十分だね。
1ターンで葬ってあげるよ。

「「デュエル」」

「先攻はあげるよ」

これで受け取ってくれれば…
タナトスは終わりだね。アハハハ

「遠慮なくもらうっちゅ～の。ドロー！
フィールド魔法、伝説の都アトランティスを発動するっちゅ～の
この効果で、手札とフィールドの水属性モンスターのレベルが
１下がり、攻撃力が２００ポイントアップだっちゅ～の」

良いカード持ってるじゃん。
なんで幻魔なんか欲しがるのさ。
…それよりもどこで三幻魔の存在を知ったのかな？

「さらに、ギガ・ガガギゴを召喚して、ターンエンドだっちゅ～の」

タナトス
手札×４
フィールド
ギガ・ガガギゴ　攻撃力２６５０

GXのアニメキャラにしては強い方だね。
この手札だから、残念だけど１ターンで終わるけど。

「じゃあ、俺のターンだね。アハハハハ！！
魔法カード、おろかな埋葬を発動。
この効果でデッキからモンスターを１体墓地に送る！この効果で、
デッキからインフェルニティ・ネクロマンサーを墓地へ送るよ。
さらに永続魔法、インフェルニティガンを発動。
このカードは１ターンに１度、手札のインフェルニティを１体墓地
へ送ることができる。そして、手札が０の時にこのカードを墓地へ
送ることで、墓地のインフェルニティを２体まで特殊召喚できる。

この効果で手札のインフェルニティ・デーモンを墓地へ送るよ」

「……ロキの奴1ターンキルもといソリティアか……
タナトスもかわいそうに」

リョウ、俺が負けたら連れてかれるんだよ？
分かって言ってるのかな。

「まあいいか。とりあえず、手札のインフェルニティ・デストロイヤーを捨てて、ダーク・グレファーを特殊召喚！
効果で、手札の闇属性モンスターを1体、墓地に送ることでデッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。
この効果で、手札のインフェルニティ・ビートルを捨てて、デッキからゾンビ・キャリアを墓地に送るよ」

ここまで準備すればいいだろう。
イッツ・ショータイム！！

「インフェルニティガンの効果発動！！このカードを墓地に送って、墓地のインフェルニティを2体まで特殊召喚できる。
インフェルニティ・ネクロマンサーとインフェルニティ・デーモンを特殊召喚する！
デーモンの効果で、デッキからインフェルニティと名のついたカードを1枚手札に加えることができるんだ。
アハハハハハ！！
俺が加えるのはインフェルニティ・ガン！」

タナトス、先に謝っておくよ。ごめん。

「カードを伏せてネクロマンサーの効果発動！手札が0の時、1タ

ーンに1度、墓地のインフェルニティネクロマンサー以外のインフェルニティを特殊召喚できる！
チューナーモンスター、インフェルニティ・ビートルを特殊召喚するよ」

「チューナー？？なんだそりゃ」

「見ていればわかるよ。とりあえず、ビートルの効果発動。
手札が0の時にこのカードを墓地へ送り、デッキから同名カードを2体まで特殊召喚する。
この効果でビートルを2体特殊召喚するよ。
ダークグレファーにチューナーモンスター、インフェルニティ・ビートルをチューニング！
来い、ゴヨウガーディアン！」

「シンクロ召喚！？そりゃあなんだ！？」

まあ説明してあげてもいいか。この時代だと一生見れない可能性もあるし。

「シンクロ召喚は、チューナーとそれ以外のモンスターのレベル合計で召喚されるモンスターが決まる召喚だ。
とりあえず、デュエルを続行するよ。アハハハ！
インフェルニティ・デーモンとインフェルニティ・ネクロマンサーに、インフェルニティ・ビートルをチューニング！
全てを吹き飛ばせ！ミスト・ウォーム！ミスト・ウォームの効果発動！シンクロ召喚成功時に、相手フィールド上のカードを3枚まで手札に戻すことができる！
俺が戻すのは、ギガ・ガガギゴと、アトランティスだ！」

ミスト・ウォームの衝撃波にアトランティスとギガ・ガガギゴが吹き飛ばされる。

「アハハハハハハ！！まだ終わってないよ。インフェルイティ・ガンを発動！このカードを墓地へ送って、デーモンとネクロマンサーを特殊召喚！
デーモンの効果で、インフェルニティガンを手札に加える。
手札に加えたインフェルニティ・ガンを伏せて、ネクロマンサーの効果発動、蘇生するのは、ビートルだ！
インフェルニティ・デーモンとインフェルニティ・ネクロマンサーに、インフェルニティ・ビートルをチューニング！
氷結の封印解かれし時、絶対零度の龍が蘇る！その冷気で全てを凍らせろ！シンクロ召喚、氷結界の龍トリシューラ！！
トリシューラの効果発動、シンクロ召喚に成功したとき、相手の手札、フィールド上、墓地からそれぞれ1枚ずつ除外できる！
……まあ、お前の墓地とフィールドにカードはないから、手札だけだけどね。
今回はここまでにしておいてあげるよ。3体のモンスターで、ダイレクトアターーック！！アハハハハハハハハ！！」

「のわ～～～～～！！」

タナトスLP4000→－3000

「約束通り、帰ってもらうよ」

「わかってるっちゅ～の」

そう言い残して、ジャンプする。
船が出てった。…帰ったみたいだね。

「リョウ、返すよ」

「ああ」

リョウは俺からデッキを受け取ると、懐にしまった。
あの中、どうなってるのかな？いくらものを入れてもあふれて出てきた記憶がないんだけど。

サイドアウト

リョウサイド

……あのデッキはあまり使うべきじゃないな。
対戦相手が途中で何やってるか分からないって顔になる。

「リョウ、早く戻ろうよ」

「ああ、すまんロキ。今行く」

帰ったらもう寝よう。寝なくてもいいが、スクルドを心配させたくはないからな。

第２４話　タナトスｖｓロキ　ソリティアの力（後書き）

書き方を変えて挑戦してみました。
インフェルニティは鬼畜ですね。まさにソリティアです。
制限改定でマシにはなりましたが。

第２５話　アビドス３世ｖｓリョウ　低レベルモンスターの恐怖（前書き）

黒蠍盗掘団は、リョウが出る幕ではないので、デュエルは省略します。

第25話　アビドス3世ｖｓリョウ　低レベルモンスターの恐怖

リョウサイド

今日は七星門の鍵を守るためと称して首領（ドン）ザルーグがやってきた。

「というわけで、鍵は身につけているよりも、隠しておいた方がよいでしょう」

どういうわけかは知らないが、オレの場合は隠しておくよりも持っておいた方がいい。

「あなたは隠しておかないのですか？」

「隠すよりも、自分で持っていた方が安全なのでな」

「でも、この人の言う通り、隠しておけば盗まれたりすられたり、なんていうことはないはずよ」

「では問おう、天上院。仮に隠して、もしそれが空き巣などに盗まれたらどうやって犯人を見つけるんだ？」

「う…それは……」

「確かに証拠から探すこともできる。だが、そんなことをしていれば、時間がかかり過ぎる。
それにオレは、襲いかかられても撃退するだけの力がある。剣も持っているしな」

このぐらいは普通の装備だ。
だが、人間が無理にこんなものを持つ必要はない。
そういう意味では、隠すのは人間にとっては安全だ。
しかし、今目の前にいるのは人間ではなく精霊、どのような力を持っているかなど人間にはわかるまい。
……こいつ、いや、廊下にいる奴なども含めこいつらはそんな大したことないがな。

「銃刀法違反だろう、神帝」

人間の法など聞いていられるか。

「知らん。それに剣だけではない」

オレが作った銃を改造（アサルトライフル）したガトリングも持っている。
使用する弾丸は神力を封じ込めた神の弾丸（ゴッド・ブレッド）と呼ばれるものだ。

「まだ何か持ってるのか？」

「まあな。それを使わなくても、普通に撃退はできる。
マイディスクを使えばオレ1人で戦うわけではなくなる。
……話がずれたな」

「まあリョウはいいとしても、他のメンバーは隠しておこう」

「いや、俺もいいや。
襲いかかってくる前に、罠にはまって終わるだろうしね。
アハハハハハハ！！」

そして皆がそれぞれの部屋に隠した。

その時に万丈目がカードを一緒に入れてるのを見たが、おそらく精霊だな。

「じゃあ、今日はもう帰らせてもらう」

「ああ、じゃあな」

～～～その夜～～～

部屋の明かりを消し、ドアの傍に立って剣を構える。

ガチャッ……バタン。

今だ!!

「何の用だ?」

剣を首にあてて、尋問する。

「しまった!!」

「昼間の刑事か。鍵を盗みに来たのか?」

「ち、違う!君たちは鍵を隠してなかったから、心配になって様子を見に来たんだ」

「なら、その首にぶら下がってるのは何かな?盗むならもっとうまくやりなよ。せっかく罠を仕掛けたのに…使う場面がなくなっちゃったじゃん」

ロキがそんなことを言ってる間に、鍵を持っていたメンバーを呼ぶ。

〜〜〜数分後〜〜〜

「鍵を盗んだのはお前たちか！」

「なにもまだ我らがやったと、証拠が挙がったわけではない！決めつけるな！」

「いや、証拠はある。こいつらだ」

「こいつだよ、万丈目の兄貴」

「まちがいないぜ〜」

「なるほど、精霊か」

「クッ……こうなったら！」

そう言ったと思うと、５人は変装を解いた。

「「「「「我ら、黒蠍盗掘団！！」」」」」

「で、どうするんだ？」

「こうなった以上、デュエルだ！」

「なら俺が相手をしてやる」

「お前ら、オレはやることがあるからもう戻るぞ。じゃあな」

寮に戻ってくる。さてと、新しいデッキを作るか。

～～～翌日～～～

黒蠍盗掘団は、万丈目が倒したらしい。
そのあとに精霊になって部屋にいるそうだ。
……万丈目は一体、何体の精霊を連れているんだ？

「今日はアビドスか。十代の鍵をオレが奪ってしまった以上、戦うのはオレだな」

「リョウ、頑張ってね」

「ああ、わかってる。しかし、一つ気になるのはタイタンの件だ。生かしておいたから、いったい誰が来るんだろうな？」

スクルドに未来を見てもらうこともできる。
だが、あの術は神力が殆どない今のスクルドには、負担がかかり過ぎる。
…やはりだめだ。そんな真似したくない。

「気にすることないよ。リョウはやりたいようにやればいいんだから」

スクルドはこう言ってくれるが、巻き込みたくはない。
殺される可能性だってあるのだ。

「スクルドがいなければそうしてるさ」

「じゃあ私帰るよ…」

「待て、冗談だ冗談!!本気にするな!!!」

こんなのウソに決まってるだろ!!

「あはははは!!分かってるよ。
やっぱりあの頃からちっとも変わらないね」

……またやられた。
今まで何度もあっただろう。
いい加減に学習しろ、オレ。

「というかなんであの頃のことを思い出すんだよ。
オレにとっては恥ずかしい思い出でしかないぞ」

「え～…私といて楽しくなかったの?」

「そうは言ってないだろ…そもそも楽しくなかったら、今お前と一緒にいるわけがない」

一緒にいて楽しくない奴と好きでいる奴がいたら、拝見したい。

「……／／／／／／」

「そろそろだな。スクルド、しっかりつかまってろ」

「え?きゃああ!」

光に包まれ、飛ばされた。

…ここは？
船の上か。玉座に誰か居るな。オレの周りには原作メンバーもいる。

「余はセブンスターズの一人、アビドス３世」

「あの、生涯無敗って言われた…」

「なるほど。貴様がオレの相手か。
生涯無敗の伝説なら、今日ここで終わりだ」

「「デュエル」」

「余のターン。ドロー。
ヌビアガードを守備表示で召喚。
カードを１枚伏せターンエンド」

アビドス３世
手札×４
フィールド
ヌビアガード　守備力５００
伏せカード×１

あんな雑魚、なぜデッキに入ってるんだ？
今回はオレの言えたことではないが…まあいい。

「オレのターン！ドロー。
オレは海皇の長槍兵を召喚」

「リョウはなぜあんな雑魚を？」

「きっと神帝のことだ、何かあるのだろう」

「ヌビアガードを攻撃！」

「余のヌビアガードは守備表示、ダメージはない」

「カードを２枚伏せターンエンｄ「永続罠発動！第１の棺！効果により、第２の棺をデッキからフィールドに発動する」…今度こそターンエンドだ」

リョウ
手札×３
フィールド
海皇の長槍兵　攻撃力１４００
伏せカード×２

「余のターンドロー。
おろかな埋葬を発動。この効果により、デッキからモンスターカードを１枚墓地へ送る。
余はマーダーサーカス・ゾンビを墓地へ送る。
そして王家の守護者を守備表示で召喚し、ターンエンド」

アビドス３世
手札×３
フィールド
王家の守護者　守備力０
第１の棺
第２の棺

「オレのターン。
オレはメガ・サンダーボールを召喚。
ターンエンドだ」

リョウ
手札×３
フィールド
海皇の長槍兵　攻撃力１４００
メガ・サンダーボール　攻撃力７５０
伏せカード×２

「第３の棺を発動１そして、この３つの棺を墓地に送り、スピリッツ・オブ・ファラオを特殊召喚する！
スピリッツ・オブ・ファラオの効果発動！自分の墓地のレベル２以下のアンデット族通常モンスターを４体まで特殊召喚できる。
余が特殊召喚するのは、マーダーサーカス・ゾンビだ！
余のターンドロー。スピリッツ・オブ・ファラオでメガ・サンダーボールを攻撃！」

どうして皆そんな単調な攻撃を仕掛けてくるんだ？
理解に苦しむ。スクルドだってそんなことはしない。
…ドジってプレイングミスをすることはあるけど。

「トラップ発動！永続罠、窮鼠の進撃！オレのフィールド上のレベル３以下の通常モンスターが戦闘を行う時、１００の倍数のライフを支払い発動する。
払った数値分、戦闘する相手モンスターの攻撃力をダウンする！オレが払うのは１８００ポイントだ！「なんだと！？」よってスピリッツ・オブ・ファラオの攻撃力が１８００ポイントダウンし、７００になる！」

「余のスピリッツ・オブ・ファラオが！」

リョウＬＰ４０００→２２００
アビドス３世ＬＰ４０００→３９５０

「単調な攻撃をするからこうなる。
少しは警戒したらどうだ？」

「クッ…ターンエンド」

アビドス３世
手札×４
フィールド
王家の守護者　守備力８００
マーダーサーカス・ゾンビ　攻撃力１３５０

「オレのターン！ドロー。
オレは魔の試着部屋を発動。ライフを８００払い、デッキの上から４枚めくる。レベル３以下の通常モンスターをすべて特殊召喚し、残りのカードをデッキに戻し、シャッフルする。
出たモンスターは、海皇の長槍兵、スカゴブリン、マーダーサーカス・ゾンビの３体だ。
そして、弱肉一色を発動！このカードはオレのフィールドにレベル２以下の通常モンスターが５体存在する場合のみ発動できる。
互いの手札と、フィールドのカードをオレのモンスターを除き全て墓地へ送る！「なに！？」５体の雑魚でダイレクトアタック！」

「うわあああああ」

アビドス3世LP3950→3200→1800→400→0→−1350

「余は楽しかったぞ」

「そうか。それはよかった」

「ともに冥界に行かんか？」

「断る。オレには、生涯の仲を約束したものがいる」

「そうか。残念だ。もしお前たちの誰かが死んでしまったら、デュエルしよう！

……ではな」

光が視界を包む。

「スクルド？」

部屋につき、あたりを見回すがスクルドがいない…

「きゃああ！」

「グハッ！！」

……スクルドが降ってきた。痛い。

「リョウ、大丈夫？ごめんね…」

「ああ、大丈夫だから、どいてくれ」

「ご、ごめんね」

…ものすごく軽かったな。

第２５話　アビドス３世ｖｓリョウ　低レベルモンスターの恐怖（後書き）

リョウｖｓアビドス３世でした。黒蠍は、リョウが出るわけにもいかないので、会話のみで終了しました。

次回、６人目のセブンスターズ出現！リョウの怒り　究極神の裁き

第２６話　６人目のセブンスターズ出現！　究極神の裁き（前書き）

６人目のセブンスターズ出現です。

第２６話　６人目のセブンスターズ出現！　究極神の裁き

リョウサイド

最近はめっきり静かだな。セブンスターズの動きが見えない。
…それにしても６人目は誰だ？

「静かだね、リョウ。いい加減暇になってきたんだけど
次のセブンスターズはいつ現れるのさ」

「オレに聞くな。分かるわけがない」

「そうだけどさ……」

「……お出ましのようだ、ロキ」

ここまで接近を許していたとはな。
正直ここまで知らない間に接近を許した敵は今までいない。

「お前が６人目のセブンスターズか。
アハハハハハ！そんな堅苦しい恰好で来るなんてずいぶんとご丁寧だね。
時空管理局！！」

なに！？６人目は管理局の手下だと！

「ということは狙いはおそらくオレとロキ。
上等だ。オレが貴様を潰してやる」

「まあ待ってよ、リョウ。
先に俺にやらせてよ。ちょっと俺も頭に来たからさ」
奴に実力は未知数、ならばオレが出るべきではある。
が、ロキはおそらく聞くまい。

「わかった」

「さすがリョウ。器が大きいね」

「相談は済んだか？時空管理局執務官カズマが
６人目のセブンスターズとしてお前たちを逮捕する」

「やってみなよ。貧弱な時空管理局が！アハハハハ」

「「デュエル」」

「私が先攻をもらう！ドロー」

どんなデッキかな？管理局ごときがそんなレベルの高いデッキを使
ってくるとは思えないけど。

「ライオウ召喚。
ターンエンドだ」

カズマ
手札×５
フィールド
ライオウ　攻撃力１９００

ライオウ!?なんで管理局風情が…!

「俺のターン!モンスターをセットして、ターンエンドだ」

ロキ
手札×５
フィールド
伏せモンスター×１

「私のターンだ!ランサー・デーモンを召喚!ライオウでセットモンスターに攻撃!
この瞬間にランサー・デーモンの効果発動!
戦闘するモンスターに貫通能力を与える!」

「!!……バカな!?この衝撃は…まさか!」

「これはデバイスのディスクで、殺傷設定だ。
伏せモンスターはマシュマロンか。私も１０００ポイントのダメージだな」

ロキＬＰ４０００→２６００
カズマＬＰ４０００→３０００

まさかデバイスのデュエルディスクとは…
そうか、高町たちのディスクの構造を知り、デバイスにしたのか。
…高速処理が必要だからストレージではあるようだな。
あのロキが一撃で…殺傷設定でもあそこまでひどくはないはず…
!モンスターの攻撃がリアルになるのか!
だとすれば、ダイレクトアタックはまずい!

「ターンエンドだ」

カズマ
手札×５
フィールド
ライオウ　攻撃力１９００
ランサー・デーモン　攻撃力１６００

「クッ…俺のターン！！
俺はマシュマロンを生贄に堕天使ディザイア召喚！
こいつはレベル１０だが、天使族の生贄１体で召喚できる。
ディザイアでランサー・デーモンを攻撃！」

カズマＬＰ３０００→１６００

「さらにディザイアの効果発動！攻撃力を１０００ポイント下げ、
相手のモンスター１体を墓地へ送る！
ライオウを墓地に送る！
ターンエンドだ」

「まさか私のモンスターが１ターンで消されるとは…」

ロキ
手札×５
フィールド
堕天使ディザイア　攻撃力２０００

「私のターン！！…ここで終わりだ！
ジェスター・コンフィを特殊召喚！
このカードは表側攻撃表示で特殊召喚できる！

さらにジェスター・コンフィを生贄に邪帝ガイウスを召喚「な、なにぃ！！？」！ガイウスの効果発動、召喚時にフィールド上のカードを1枚除外し、それが闇属性なら、１０００ポイントのダメージを与える！
堕天使ディザイアを除外し、１０００ポイントのダメージだ！」

「うわあああ…クッ…そんな…管理局ごときが…！！」

ロキＬＰ２６００→１６００

「邪帝ガイウスでダイレクトアタック！」

「そんなバカなーーーーー！！うわあああああ」

ロキＬＰ１６００→－８００

「次元犯罪者ロキ、逮捕する！」

「逮捕なら、オレを倒してからにしてもらおう」

「まあいい。結果は変わらない。いくぞ」

「「デュエル！」」

オレはインフィニティ・アイを起動する。
神を究極神として召喚するために必要だからだ。

「貴様は潰す。オレの手で！オレのターン！
オレはモンスターを1体伏せる！
ターンエンドだ」

リョウ
手札×５
フィールド
伏せモンスター×１

「私のターン、ドロー。
私は、ライオウを召喚！攻撃だ」

「ディープ・ダイバーの効果発動。バトルフェイズ終了時にデッキからモンスターカードを選択し、デッキの一番上に置く。
オレが選択するのはこれだ！」

オシリスの天空竜を見せる。
実際はオシリスの天空竜ではないが。

「来るか…報告を受けていた究極のロストロギアが！」

「ロストロギア？そんなゴミクズと一緒にするな！！」

「クッ…ロストロギアをゴミクズ呼ばわりだと！
……ターンエンドだ」

カズマ
手札×５
フィールド
ライオウ　攻撃力１９００

「オレのターン！オレは墓地のモンスターをすべてデッキに戻し、
究極封印神エクゾディオスを特殊召喚！

このカードは自分の墓地のモンスターカードをすべてデッキに戻すことでのみ特殊召喚できる。
さらに幻銃士を召喚。幻銃士の効果発動！召喚または反転召喚に成功したとき、自分フィールド上のモンスターの数まで銃士トークンを特殊召喚できる！
オレは2体の銃士トークンを特殊召喚する！
さらに、幻銃士と銃士トークン、オレのライフ半分を生贄に捧げ、降臨せよ！究極神オシリス！！」

リョウＬＰ４０００→２０００

「これが…究極神オシリス……」

「究極神オシリスの攻撃力と守備力は手札×２０００ポイントになる！
オレの手札は3枚、よって究極神オシリスの攻撃力は６０００ポイントだ！」

「だが、ライオウの効果発動！このカードを墓地へ送り、特殊召喚されたモンスターを破壊する！」

「ハハハハハ！！究極神にそんな小細工は通用しない！
究極神オシリスはモンスター効果に影響されない！」

「なんだと！！？」

「安心しろ。オレはターンエンドだ」

リョウ
手札×３

フィールド
究極神オシリス　攻撃力６０００

「なぜだ！？」

「貴様は切り札で倒す。それだけだ」

「（それが切り札ではないのか）クッ…私のターン。
私はモンスターを伏せ、さらにライオウを守備表示に変更。
ターンエンドだ」

カズマ
手札×５
フィールド
ライオウ　守備力８００
伏せモンスター×１

「オレのターン！オレは幻銃士を召喚！特殊召喚するトークンは１体だ！
さらに、究極封印神エクゾディオス、銃士トークン、幻銃士の３体とライフ半分を生贄に！降臨せよ、究極神オベリスク！！
オベリスクで伏せモンスターを攻撃！！ゴッド・アルティメット・ディストラクション！」

「デス・コアラの効果発動！相手の手札１枚につき、４００ダメージを与える！」

「なんだと！！ぐあああ！…効果ダメージたったの８００でここまで…」

リョウＬＰ２０００→１０００→２００

「だが、オシリスでライオウを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！！」

「クッ…この衝撃は…なんだ！！」

「神の攻撃、そのぐらいは当たり前だ。
ターンエンド」

リョウ
手札×２
フィールド
究極神オシリス　攻撃力４０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターン！（神の攻撃…周りには被害が出てないからおそらく私だけにダメージがある…直撃はまずい！なんとしても避けなければ…）私はカードを１枚伏せターン終了だ」

カズマ
手札５
フィールド
伏せカード×１

「万策尽きたか？オレのターン！…運がいいな。
ターンエンドだ」

究極神帝は来なかったか。

リョウ
手札×３
フィールド
究極神オシリス　攻撃力６０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターン！私は、ライトニング・ボルテックスを発動する！手札を１枚捨て、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターをすべて破壊する！」

「究極神オベリスクが…！だが、オシリスは魔法効果に影響されない！」

「クソッ…モンスターを伏せターンエンド」

カズマ
手札３
フィールド
伏せモンスター×１
伏せカード×１

「エンドフェイズに究極神オベリスクの効果発動！オレのライフ半分を生贄に特殊召喚される！再び降臨せよ、究極神オベリスク！！」

リョウＬＰ２００→１００

「バカな…」

「何か仕掛けてくると思ったら破壊で終わりか。

少しはましな作戦を立ててから来い！！
もう少し足掻いて見せろ、時空管理局執務官」

「オレのターン！！……ん？もう終わりか。
もう少し足掻け、とか言っておきながら終わりの時が来たようだ」

「なに！！？（クッ…例え刺し違えても、こいつらだけは逮捕する！！）」

「もう逃げられんぞ。幻銃士を召喚！効果により、2体の銃士トークンが特殊召喚される。
3体のモンスターとライフ半分を生贄に捧げ、降臨せよ、最強の神、究極神帝ラー！！」

天より白い輝きを放つ巨大な龍が出現する。
まるで夜が昼になったようだ。

「カウンタートラップ、昇天の黒角笛（ブラックホーン）！特殊召喚を無効にし破壊する！！」

「究極神帝ラーの効果、究極神が2体そろっているとき、相手の効果はすべて無効になる」

「なっ！」

「究極神帝ラーの効果発動。1ターンに1度、相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える！」

「クッ…直撃は避ける！！」

「ゴッド・アルティメット・ノヴァ！！」

ラーが巨大な白い炎の塊を放つ。それはすごい速さでさらに巨大化していく。

ん？あいつ…逃げたな。どこに逃げても無駄だというのに。

「うわあああああああああああああ！！」

カズマＬＰ４０００→－∞

声から察するに、４キロは逃げたか。

２秒で４キロ…時空管理局にも少しは骨のある奴がいるらしいな。

いや…実際はラーとの距離は２０キロは離れている。

まあ、全ての世界から最も次元距離の遠い神界に逃げられたとしても１分寿命が延びるだけだがな。

「起きろ、ロキ。戻るぞ」

「ううう…」

しかたがない。

オレはそう思い、ロキを担いで寮に戻った。

第２６話　６人目のセブンスターズ出現！　究極神の裁き（後書き）

リョウの怒りです。デュエル構成がなんかワンパターンになってしまい申し訳ありません。作者が馬鹿なせいです。本当にごめんなさい。

第２７話　学園祭　相談（前書き）

学園祭です。予定では３～６話ぐらいです。

第27話　学園祭　相談

サイドリョウ

～～学園祭2日前～～

今部屋にカイザーが来ている。

「何の用だ？」

「学園祭の催し物を決めてほしいんだ」

なぜオレ達なんだ。他にも聞くべき奴はたくさんいるはずだ。

「なんでわたしたちなのだ？」

「他の奴らに聞いても無駄なだけだ」

成程、他のブルー連中はくだらないことしか言わないらしい。

「なら、前に高町達とやった3対3の勝ち抜き戦でいいだろう」

ああ、あれか。

「俺のワンマンショーでいいでしょ」

「お前はアホか」

「アホって…まあいいや」

「ところで、レッドやイエローは何をやるんだ？」

レッドがなにをやるかは知っている。

が、イエローは何をやるんだ？

「イエローは『デュエル屋台』というものをやるらしい。

屋台は普通なんだが、注文後に店員とマッチデュエルをして

1回勝てば半額、2回勝てばタダになるというものらしい」

「赤字にはならないのか？」

「その店員は、下手なブルーよりも強いらしい。

それに、2連続負けたら5割増しだからな。

それでも人気はあるみたいだがな」

成程。なら赤字にはならないな。

「だが、全寮が同じ日にやって、見回り切れるのか？」

「大丈夫だ。2～3日続けて行う」

「で、ブルーは何をやればいいのさ？」

それを迷ってるんだ。ロキ。

「スクルドは何かないか？」

「え！？わ、私？う～ん…」

「前から気になってたんだが神帝。
お前とスクルドはどういう関係なんだ？」

「夫婦だよ、カイザー」

「……」

カイザーは黙った。当り前といえば当たり前だ。

「で、何かないか？スクルド」

「う～ん…トールの言ったやつでいいと思うよ」

「ならオレもそれでいい」

「よし。何を出すかは決まったな」

「しかし、デュエルだけではだめだろう。
やはり何らかの食事処も…」

「だれが作るんだ？オーディン」

「適人、いや、適女神がいるだろう」

「スクルドか？
あまり負担をかけさせたくないんだが…」

「私はいいよ」

「いいのか？スクルド」

「リョウが学園祭が終わった後に私の手料理食べてくれるなら♪」

「わかった。やってくれ」

むしろこちらからお願いしたいくらいだ。
スクルドの手料理は良い意味で次元が違う。

「しかし、スクルド1人では負担がかかる。
ウエイトレスも何人か用意して、我も前半は手伝おう」

「よしやってくれ」

トールもスクルドほどではないが料理がうまい。
平凡な食材のはずなのに、なんで高級料理になって出てくるんだ？
オレは神のはずなのに、この疑問が解けたことは1度もない。

「リョウも、お菓子についてなら人のこと言えないよ。
（リョウは異常だ。お菓子作りならどこの世界を探してもリョウほどの腕を持つ存在なんかありはしない）」

なんでロキは毎回俺の考えてることが分かるんだ？

「よし。そうしよう。
で、次は看板なんだが」

「そんな物まで作るのか？」

かなり凝ってるな。

「一応催し物だからな。
で、どうする？」

「わたしに意見がある」

オーディンが自分から最初に意見を言うなんて珍しいな。
いつもは最終判決を下すことがほとんどなのに。

「表紙に何らかの絵を入れ、パンフレットにするというのはどうだ？」

「それはいいな。ぜひそうしよう。
表紙はどうする？」

「やっぱり究極神でしょ」

「ロキ、あんなものどうやって納めきるんだ？」

「あ……」

オシリス・オベリスクならともかく、ラーなんて巨大すぎていくら縮小しても全身を納めきれないぞ。

「やはりサイバーエンド・ドラゴンだろう。今年でカイザーは最後だからな」

「よし。そうしよう。カイザーもいいな？」

「ああ。そう言ってくれると嬉しいな」

「次は1ページ目だな。どうする？」

1ページ目は重要だ。神界でも催し物をやるときは、パンフレットを作り、表紙と1ページ目がものを言う、ということがしれている。

「そりゃあ俺のカットイン…」

バキッ！

「何をふざけているロキ。我のカットインに決まって…」

バキッ！ドカッ！！

「いやいやここはわたしのカットイン…」

バキッ！ドカッ！！ドカアアアアン！！！

「お前たちはバカか！そんなものを載せてどうするんだ！！」

こいつらはあほじゃなかろうか。

ちなみに、ロキを殴ったのはトール。
トールを殴って蹴ったのはオーディン。
オーディンを殴って蹴って爆撃したのはオレだ。
まとめ役のオーディンがこんなことをしてどうするよ。

「いや、カットインは入れよう」

「は？……入れるのかよ？」

カイザーがこの案を受け入れたのは驚いた。

「俺の意見も捨てたもんじゃないでしょ！アハハハハ！！」

「黙れ、キチアーノもといロキ」

「キチアーノって何さ！！？」

「で？誰を入れるんだ？」

「無視なの？ねぇ？」

「やはりカイザー…」

「ねぇってば！！」

「うるさいロキ。向こうに行って遊んでろ」

「ちょっと！！俺子どもじゃないよ！！」

「なら少しは自重しろ…」

「わかったよ…」

まったく。毎回毎回祭りごとになるとハイテンションになる。
それでこちらがどれだけ迷惑を被ったことか。

「俺か…なぜだ？」

「ブルーの看板はカイザーだろう」

「ならばリョウでもいいではないか」

「？なんでオレなんだ？」

「知らないのか？お前は学園でもかなりの人気を誇ってるんだぞ？」

「知らんな。聞いたこともない。
そもそも究極神を使ったデュエルはいつも幻銃士のワンパターンだろう」

「それでも人気なんだ」

「だが、カイザーの方が売れるだろう」

「そこまで言うならカイザーでいいだろう」

「よし。では2ページ目は？」

「目次だろう」

「なら3ページ目は？」

「地図と詳細表示だ。迷われたら困るからな」

ブルーのカス連中のせいで、レッドやイエローがブルー寮に遊びに来たことは殆どない。
というか、見下してる割には実力は5分と5分だろう。
攻撃力に頼ったデュエルばかりしているから三沢や神楽坂のようなテクニシャンに負けるんだ。

見下してる暇があるなら、デッキ構築を見直せ。
もっと友好的にしたらどうなんだ。

「４ページ目」

「っていうかさ。ページ数は？」

「あ……」

「アハハハハハ！！決まってなかったの？
ダメダメじゃん！アハハハハハハハハ！」

「どうする？カイザー」

「だいたい１０ページ前後でまとめよう」

「よし。で、４ページ目だったな。
特別デュエルのルールと各デュエリスト、デュエル場配置だ」

「確かに必要だな。
５ページ目はどうする？」

「レストランのメニューだろう」

「なら６ページ目は？」

「そうだな…こういうのはどうだ？
連続で勝った数に応じてプレゼントを設ける。
そのリストだ」

「それはいいな。そうしよう。
しかし商品はどうするんだ？」

「５連続と４連続は神帝リョウ、丸藤亮とのデュエル。
２人にはそれぞれ、１軍を使ってもらう。
３連続は…ああ、これにしよう。レアカードパック。
我が作っておく。
２連続は…カードくじ。
１回は、ジュース１杯だな。
勝てなかったら、参加賞としてティッシュだ」

「なんか商品のギャップが激しいな。
特に１回と参加賞なんか福引きのはずれくじだろう。
というか、究極神て…ワンパターン戦をさせるつもりか」

「いや、それでいいだろう。載せておこう。
７ページ目は？」

「スタンプカードでいいだろう。連勝の証の」

「成程。そうしよう」

「これ以上は載せることがない。
裏表紙にしよう」

「これこそ究極神で飾るべきじゃない？」

「わかった…そこまで言うならどうにかしてみよう」

「やった！」

「で～ここはこうして～」

「成程成程」

こんなふうにして、あっという間に夜になってしまった。

第２７話　学園祭　相談（後書き）

学園祭編です。ブルーとイエローの催し物も描写するので、セブンスターズ編の続きは少し先です。

第２８話　学園祭　レッド（前書き）

学園祭です。レッド→イエロー→ブルーの準でやる予定です。
学園祭が２～３日続く時点でもう原作が崩壊してます…
リョウがオリカデッキを使います。

第２８話　学園祭　レッド

リョウサイド

今日はついに学園祭だ。準備はブルーはあまりやることがなかったので楽だった。
オレは賞品の一つなので、出番はめったにないだろう、ということで、自由行動の許可が出ている。
なので、今カイザーと一緒にレッドの催し物を見に行こうとしている。

「しかしカイザー、なぜレッドなんだ?今まで見に行ったことなかったんだろう?」

「見に行ったことがないからこそ、だ」

「ほう。……しかし遠いな。
なぜこんな方に宿舎を建てたのだ?」

「さあな」

「見えてきたぞ。
なんか騒がしいな?」

レッドの盛り上がりは熱いを通り越して異常だった。

「ん?カイザーにリョウじゃねえか」

「十代か。その格好は何のモンスターだ?」

「いや、よくわかんなくなっちまって…あはは」

「相手は誰…ブラック・マジシャン・ガール？
（あれは本物の精霊だな…何が目的できたのだろうか？
…修行が面倒になったか、暇を持て余したから楽しみに来たのだろうが…）」

「あれは誰のコスプレだ？」

「さあな。少なくともトメさんじゃないぜ」

「そんなことは見ればわかる
どう見間違えればあれがトメさんになるんだ」

「まあいい。相手を待たせるのは失礼だぞ。十代」

「ああ、そうだった。ごめんごめん」

「気にしなくていいよ！行っくよ～」

「「デュエル」」

「しかし、十代はこのブーイングをものともしないのだな」

「ただ単に空気が読めてないだけなのか、それとも…」

「ちょっと待ってろ、カイザー、デッキ持ってくる」

「なぜだ？」

「あの娘、こちらを見た。おそらく、次は…ということなのだろう」

「成程な」

オレはデッキを取りに戻る。
使うのは…これにしよう。

「待たせたな」

「いや。ちょうど終わったところだ」

「そうか」

「あの…そこの人、私とデュエルしませんか？
（あの人から途方もない力を感じる…楽しくなりそう！）」

「いいだろう。だが、オレは今３つのデッキを所有している。
どのデッキとの勝負を望む？」

「真ん中のデッキでお願いしま～す」

「これか…
（このデッキだと…勝率は７０％程度か）」

「行くぞ！！」

「「デュエル」」

「先攻はオレがもらう。ドローだ。

…オレは魔法カード、神の城を発動。
このカードは、手札を2枚捨てることで、デッキから「神」と名のついたカードを2枚手札に加える。
オレが加えるのは、神の剣と神の盾だ」

「見たことないカードだな。
次俺とデュエルしてくれ～リョウ～」

「残念だが、学園祭中は無理そうだ。オレも賞品の一つだからな。
そこまでデュエルしたければ、ブルーの催しものまで来い！十代！」

「わかったーーーー絶対行くーーー」

歓声が大きいので、いつも以上の声を出さなければ聞こえない。

「そしてオレは、神の騎士を召喚する。
神の騎士に、神の剣と神の盾を装備する。
神の剣を装備したモンスターの攻撃力は３００ポイントアップする。
神の盾を装備したモンスターは、戦闘では破壊されず、対象をとらない魔法・罠・モンスター効果を受けなくなる」

「うっわあ～～強いカードだな～」

「「汚いぞ神帝！お前も十代同様ブラマジガールをいたぶるのか」」

「「「「そうだそうだ！！」」」」

「負けるのはごめんなのでな。
ターンエンドだ」

リョウ
手札×２
フィールド
神の騎士　攻撃力２１００
＋神の剣
＋神の盾

「私のターン！マジシャンズ・ヴァルキリアを召喚するよ！
さらに魔法カード、二重召喚（デュアルサモン）発動！
もう１体のマジシャンズ・ヴァルキリアを召喚するね！
ターンエンドだよ」

「「「いいぞ～ブラマジガールー！！」」」

ＢＭＧ（ブラック・マジシャン・ガール）
手札×３
フィールド
マジシャンズ・ヴァルキリア×２　攻撃力１６００

「オレのターン！ドロー。
オレは神の戦士を召喚！このカードの召喚に成功した時、デッキから「神」と名のついたカードを１枚手札に加える。
オレが加えるのは神軍の司令官だ。
そしてこのカードがデッキから手札に加わった時、自分フィールドのモンスター１体を破壊することで特殊召喚できる。
神の戦士を破壊し、神軍の司令官を特殊召喚！このカードがこのカードの効果によって特殊召喚に成功した時、デッキから１枚ドローし、そのカードによってこのカードの効果を決める。
オレが引いたのは魔法カードだ。
よってこのカードは、対象を取る魔法の効果を受けず、手札を１枚

コストにすることで、魔法の発動を無効にし破壊する！「あちゃ～…これで魔法を使えなくなっちゃった」このカードの召喚・特殊召喚に成功したターン、オレはバトルフェイズを行えない。もっとも、元からヴァルキリアロックで攻撃はできないがな。ターンエンド」

リョウ
手札×３
フィールド
神の騎士　攻撃力２１００
＋神の剣
＋神の盾
神軍の司令官　攻撃力２５００

「私のターン！魔法カード、マジシャンズ・クロス発動！」

「手札のカードを１枚捨て、無効にする」

「まだまだ！もう１枚！」

「同じく（クッ…これは捨てられない…）」

「黒魔術のカーテンを発動！」

ＢＭＧＬＰ４０００→２０００

「なに！？（入っているというのか！ブラックマジシャン！）」

「来て、お師匠様！」

カーテンから威厳のある魔術師が現れる。
ブラックマジシャン。サポートカードの多い、現在では恐ろしいレベルのレアカード。
そういえばトールのやつが用意していたな。

「ブラックマジシャン…かっこいい！！
さすが遊戯さんのカード！」

周りからも、十代に限らず歓声が上がる。

「ブラックマジシャンで、神の騎士を攻撃！黒（ブラック）・魔（マジック）・導！」

「だが、戦闘では破壊されない！」

「でもダメージは通るよ！」

「チッ…」

リョウＬＰ４０００→３６００

「ターンエンドだよ」

ＢＭＧ
手札×１
フィールド
マジシャンズ・ヴァルキリア×２　攻撃力１６００
ブラックマジシャン　攻撃力２５００

「オレのターン！
オレは２体のモンスターを生贄に捧げ、神の将軍ジェネラルを召喚！

このカードの召喚に成功した時、デッキからカードを2枚ドローする。ドローしたカードにより効果を決定する。ただし、このターン魔法・罠カードを使用することはできなくなる。ドロー！
オレが引いたのは魔法カードとモンスターカードだ。
よって、モンスターカードの効果により、1ターンに1度、相手モンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にできる。
魔法カードの効果により、このカードが攻撃宣言する時、相手はダメージステップ終了まで魔法・罠・モンスター効果を発動できない！」

「ええっ！！？」

「「「「「「「「「神帝～～～～～ふざけるな～～～～」」」」」」」」」

「知らん。このデッキの将軍を出しただけだ」

「それが切り札か～すっご～い！！」

「（…切り札ではないのだがな）オレは神の将軍ジェネラルの効果により、マジシャンズ・ヴァルキリアの効果を無効にする！
ジェネラルで、マジシャンズ・ヴァルキリアを攻撃！ゴッドブレード・ジャッジメント！！」

「きゃああ！」

ＢＭＧＬＰ２０００→６００

「ターンエンド」

リョウ

手札×５
フィールド
神の将軍ジェネラル　攻撃力３０００

「私のターンドロー！強欲な壺を発動！デッキから2枚ドローするよ。
ごめんね…マジシャンズ・ヴァルキリアを生贄に！ブラックマジシャン・ガールを召喚！
そして魔法カード、ユニオン・アタックを発動。このターン、攻撃力４５００で1体のモンスターとして攻撃できる！
行け～！ブラック・バーニング・マジック！！」

「「「「「うお～～～いいぞ～～～～～」」」」」

「クッ…ジェネラルが…だが、ユニオンアタックの効果で、オレへのダメージは０になる」

「ターンエンドだよ」

ＢＭＧ
手札×１
フィールド
ブラックマジシャン　攻撃力２５００
ブラックマジシャン・ガール　攻撃力２０００

「それがお前の全力か」

「そうだよ」

「なら、それに応え、オレも本気を出そう。

オレのターン！オレは墓地の神の騎士、神の戦士、神軍の司令官を除外し、さらに手札５枚を捨て、いでよ！神軍の元帥ゴッド・オブ・マーシャル！
マーシャルでブラックマジシャンを攻撃！オメガブラスター！！」

「きゃあああ！！」

ＢＭＧＬＰ６００↓ー９００

「とっても楽しかったよ！ありがとう」

「そうか。ではな」

「うん！」

このデッキはまだ改良できるな。
次はイエローの催しものを見に行くとしよう。

第２８話　学園祭　レッド（後書き）

オリカデッキ…考えるのが難しいですね。
次回、学園祭　イエロー

第２９話　学園祭　イエロー（前書き）

イエローです。デュエルメインになります。

第29話　学園祭　イエロー

リョウサイド

～～レッド見物から1時間後～～

今イエローの催しものの場所に着いたところだ。
それまでは、一旦寮に戻り、デッキ調整をしていたところだ。
……しかしいろいろなものがあるな。
人間界では定番の焼きそばやたこ焼きから、ロシアンルーレットなんていう変わり種もある。

「よう、神帝！」

声がかけられたほうへ向いてみる。

「ん？神楽坂…お前、なんでイエローにいるんだ？
オベリスクブルーになったはずだろう？」

「手伝いできたのさ。今俺は担当がフリーだからな」

「成程な。しかしそれではお前が何も見れなくなるぞ」

「いや、俺はもう全部見た」

「早いな」

「ところで、やっていかないか？ロシアンルーレット」

「お、いいな。やってくか」

「よし、じゃあ代金もらう前にデュエルな」

「そうだったな」

「初めて作った俺だけのデッキ…頼むぜ！」

「「デュエル」」

「オレのターン。ドロー。
オレはカードを2枚伏せる。
ターンエンド」

リョウ
手札×４
フィールド
伏せカード×２

「俺のターン！ドロー！
俺はアメーバを召喚！」

「なんだと！？（まずい。ライフは神界と違い８０００じゃない。４０００しかないんだぞ！）」

「そしてシエンの間者を発動！自分のモンスター1体をエンドフェイズまで相手のフィールド上に移す！」

「うおおおおお！！」

リョウＬＰ４０００→２０００

「カードを１枚伏せてターンエンド」

神楽坂
手札×３
フィールド
アメーバ　攻撃力３００
伏せカード×１

「オレのターン…ドロー。
（まずい。おそらくやつはまだアメーバを手札に持っているはず…）
だが！オレは伏せカードを発動！手札抹殺！
互いに手札をすべて捨て、捨てた枚数分ドローする！
よってオレは５枚ドローだ」

「俺は３枚だな」

「（あの余裕の表情…おそらくアメーバではなくても何か切り札を引いたな）
そして、死霊騎士デスカリバー・ナイトを召喚する！
デスカリバー・ナイトでアメーバを攻撃！」

「うあっ…」

神楽坂ＬＰ４０００→２４００

「ターンエンド」

リョウ

手札×４
フィールド
死霊騎士デスカリバー・ナイト　攻撃力１９００

「俺のターンだ。
アメーバを召喚！強制転移を発動！
デスカリバー・ナイトとアメーバを入れ替え、効果はつｄ…なぜだ！？」

「デスカリバー・ナイトにはモンスター効果がある。
モンスター効果が発動した時、強制的にこのカードを生贄にしてその効果と発動を無効にし破壊する」

先に効果ぐらいは読もうな。
デッキは良くなったけど詰めが甘い。

「でも、これで終わりじゃないぜ！
死者蘇生を発動！アメーバを復活！！
そして、シエンの間者を発動するぜ！！」

「なんだと！？グアアアア！！」

リョウＬＰ２０００→０

「こんな…バカな…！！」

「へへっ」

ここまでの戦術…やはり初めて見たときから思ったが恐ろしい人間だ。

下手な天使や神よりも戦術においては上だろう。

「だが、まだ2回目がある。デュエルだ！」

「来い！リョウ！！」

「「デュエル」」

「負けたオレから先攻をもらう。ドロー。
オレはワイズ・コアを守備表示で召喚！
カードを1枚伏せてターンエンド」

リョウ
手札×４
フィールド
ワイズ・コア　守備力０
伏せカード×１

「俺のターンだな。ドローだ。
俺はクリッターを攻撃表示で召喚！」

「トラップ発動！激流葬！
このカードはモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に発動。
フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「俺のクリッターが！だけどモンスター効果発動！
デッキから攻撃力１５００以下のモンスター1体を手札に加える！
俺が加えるのは、封印されし者の右腕だ！」

「しまった！エクゾディアか！だが、こちらもモンスター効果発動。
デッキから機皇帝ワイゼル∞、ワイゼルT（トップ）、ワイゼルA（アタック）、ワイゼルG（ガード）、ワイゼルC（キャリア）を特殊召喚する！
合体しろ！機皇帝ワイゼル！！」

「なんだそのモンスターは！？」

「機皇帝…シンクロキラーだ」

「…ターンエンド（シンクロモンスターって、前に高町たちも使ってたあれだよな？）」

神楽坂
手札×６
フィールド
なし

奴の手札には少なくとも１枚はエクゾディアパーツがある。
それに、神楽坂のことだ。手札に何らかの策があるはず。
……ならば！

「オレのターン！ドロー。
オレは魔法カード、トラップ・ブースターを発動！
手札を１枚コストにすることで、手札から罠カードを１枚発動する！
オレが発動するのは永続罠虚無空間（ヴァニティー・スペース）だ。
このカードがフィールドにある限り、特殊召喚ができない！」

「なんだって！！（バトルフェーダーが意味をなさない！）」

「さらに速効魔法、リミッター解除発動！機皇帝ワイゼル∞の攻撃

力は、２倍になる。
よって、攻撃力は５０００！機皇帝ワイゼルでダイレクトアタック！」

「うわあああああ！！」

神楽坂ＬＰ４０００→－１０００

「早かったな」

「まあ、初手が良かったからな。
手札には何枚パーツがあったんだ？」

「へへ…」

笑いながら見せてくる。
…！！！４枚だと！

「なんて引き運だ（オレでもそこまでチートと呼ばれるレベルではないのだぞ…）
。
しかし、いくつもデッキを持っているようだな」

「まあ、頑張ったからな。４個くらいかな」

原作キャラがこんなにたくさん持っていいのか？
…ん？何か他にたくさん持っていた奴がいたような気がするが…
まあ気のせいだな。

「さあ、最後の１回だ」

「わかった」

「「デュエル！！」」

「負けた俺から先攻だ。ドロー。
お…このデッキか。
ライトロードパラディン　ジェインを召喚」

「なに！！？？」

ライトロードだと！！この世界にはないはずなのになぜだ！

［ゼウス、どういうことだ！］

［申し訳ありません。この前整理していたら神界から落としてしまって…スクルドが］

［スクルドが？何でスクルドにやらせたんだよ！
ああいうことやらせるとドジるのは今までの年月で十分わかってるだろ］

［すいません…］

スクルドか。納得した。
やばいな。このデッキじゃ勝てそうにない。
半額止まりか。

「ターンエンド。ジェインの効果でデッキから2枚墓地へ送る」

神楽坂
手札×５
フィールド
ライトロードパラディン　ジェイン　攻撃力１８００

「オレのターン。ドロー！
オレは幻銃士を召喚する。効果で銃士トークンを特殊召喚！
魔法カード、ナチュラル・チューン発動！銃士トークンをチューナーとして扱う。
レベル４の幻銃士に、レベル４の銃士トークンをチューニング！
王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！爆炎よりいでよ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「す、すげえ…」

「ジェインに攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！！」

さすがに迫力があるな。かなり熱そうだ。

「うわああ！クッ…」

神楽坂ＬＰ４０００→２８００

「俺のターン。
俺はライトロードサモナー　ルミナスを召喚するぜ！
こいつの効果で、１ターンに１度手札１枚をコストに、墓地のレベル４以下のライトロード１体を特殊召喚できる！
来い、ジェイン！
さらに光の援軍発動！デッキの上から３枚墓地へ送り、デッキからレベル４以下のライトロード１体を手札に加える。

俺が加えるのはライトロードエンジェル　ケルビム！
そしてソーラー・エクスチェンジを発動！
手札のライトロード1枚を捨て、デッキから2枚ドローした後、デッキの上から2枚墓地へ送る！
……わりいな。リョウ。このターンでけりをつけるぜ！」
やはり来たか。裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）…

「俺の墓地にライトロードが４種類以上存在する場合、このカードを手札から特殊召喚できる！俺の墓地にいるのはライコウ、ジェイン、ウォルフ、グラゴニスだ！
いでよ！ジャッジメント・ドラグーン！！」

天から神々しい光とともに巨大な龍が姿を現す。
…神楽坂がここまでやってくるとは。正直甘く見すぎていた…

「効果発動！１０００ポイントのライフを払い、このカード以外のカードをすべて破壊する！ジャッジメント・ブレイク！
さらに、死者蘇生を発動！グラゴニスを復活させるぜ。
こいつの攻撃力は墓地のライトロードの種類×３００ポイントアップするんだ。
よって１２００ポイントアップして３２００だ！
グラゴニスとジャッジメント・ドラグーンでダイレクトアタック！！」

「グウアアアアア！！」

リョウＬＰ４０００→８００→－２２００

「じゃあ、１回勝ったから半額な」

成程。これなら赤字にはならないはずだ。

「さて、ロシアンルーレットスタートだ！
交互にトリガーを引いて、コルク栓が出てきたら負けだ。
最後までリョウに出なかったら、これをプレゼントする」

Ｅ・ＨＥＲＯプリズマーだった。

「昨日落ちてたの拾った」

拾ったの賞品にするってどうなんだ？
まあいいか。すごく高価なものだし。

「じゃあオレ５回連続でやるわ」

「はあ！？いいのかよ」

「自信あるからな」

バンッ…バンッ…バンッ…バンッ…バンッ…

「ほらな」

神楽坂は空いた口がふさがらないようだ。

「じゃあ、これはもらってくぞ」

「あ、ああ。もってけ」

受け取った後は寮に戻った。
果たして明日のブルーのメイン、3対3勝ちぬきデュエルは5連勝できるやつなんかいるのか？

第２９話　学園祭　イエロー（後書き）

レッドデーモンズのセリフは、別に「我が魂」というわけではないので変更しました。

第３０話　学園祭　ブルー（前書き）

学園祭ブルーです。リリカルグループも出ますし、原作キャラグループも出ます。

◇の中はリリカルグループの念話です。リョウたちは傍受ができます。

第３０話　学園祭　ブルー

リョウサイド

～～次の日～～

ようやくオレの出番か。
デッキも究極神はアンデットに幻銃士、トラゴエディア、ネクロフェイス、ファントム・オブ・カオスその他を加えたオリジナリティのあるデッキにはなっている。
だが、まだ１度も実戦では試していない。多分デッキ性能そのものは格段に上がったはずだ。
……しかし、なぜこんなにたくさんの生徒がブルーを訪れるんだ？

「やっぱりパンフレットの押しが大きかったみたいだね。アハハハハ！！」

「まあ、あれだけ凝ったデザインにしたのだから、そうでなくては困るがな」

「む。あちらでも決着がついたようだ」

「変わったルールでもあるからな。珍しがった生徒もいるのだろう」

「お前たちは何でオレの考えてることが分かるんだ？
まあいい。しかし、チームワークや連携も重要になってくるデュエルだからな。
オレも最初見たときに教師たちが参加してるのには驚いたぞ」

「ん？あれは…」

「フェザーマンでとどめだ！」

「うわあああああ」

ブルー３人組ＬＰ０
チーム十代ＷＩＮ

あいつら…もう３連勝か。奴らのデッキテーマはバラバラのはず…
なぜ勝つことができるんだ？

「極帝皇エンフェルスでとどめや！」

「うわあああ」

イエロー３人組ＬＰ０
チームリリカルＷＩＮ

あいつらは３人のデッキ相性がいいからわかるが…
それにしてもあいつらは４連勝か…侮れないな。

「ではリョウ。我らはチームリリカルとのデュエルがあるからまたあとでな」

「お前たちが相手なのか。オレも見に行こう」

「アハハハハ！！どのくらい持ってくれるのかな～～～♪」

「では、打ち合わせ通り、我が最初に、次がロキ、最後にオーディ

ンだ」

「フ…わたしに任せておけばよいものを。
だが、作戦通りにいくぞ」

「分かってるよ。でも、分かっててもつまんないよね～」

「しかたあるまい。我らとて、負けるわけにはいかんのだ。
ブルーのメンツもあるし、なにより我のプライドがあるからな」

「トールのプライドなんて塵よりも軽いよ」

「ロキ…」

トールは極雷の鉄鎚を構えたな。ロキがからかったんだろう。
相変わらず仲のいい奴らだ。
「わ～～ごめんごめんトール！
時間もあるからもういくよ！」

「ふん。次に言ったら…極雷砲撃つぞ」

「待たせたな」

「「「……」」」

「そう堅くするな。別に命をかけているわけではないのだからな」

「このデュエルに勝って、リョウ君との勝負に勝てれば、『究極神』
について話が聞けるから、ここで負けるわけにはいかんのや！」

「アハハハハハハハハハハハハ！！」

「何がおかしいのかな？ロキくん」

「何って…こんなときにも仕事って…アハハハハハ！」

「当り前です。仕事で来てるんですから」

「アハハハハハハハ！！わかった、わかったよ。まあリョウが負けることは無いと思うけど、仮に勝っても自分の生い立ちの秘密やこの世界の真理を話すとは思えないよ」

「この世界の真理ってなんや！」

「アハハハハ！これ以上人間に話すと面倒なことになるから答えるわけにはいかないね！」

「私たちはロキ君たちを捕まえたいとは思ってない！だから話してくれへんか？」

「人間ごときが神を従えることができるとでも思ってんの？話すわけないじゃん」

「ロキ、そのぐらいにしておけ。人間よ。そこまで言うのなら少しだけ教えてやる」

「いいのかよ！？オーディン！」

「わたしは3番目の権力をもつ神だ。このぐらいなら問題ない。人間よ。1度しか言わないからよく聞いておくがいい。

この世界は『究極神』によってもたらされた世界だ。
なぜ創ったかは理解できないがな。
『究極神』の消滅はこの世界やあらゆる時や次元の終焉を意味する」

「「「！！！！！」」」

「なら、尚更管理局で調べないと…」

「オーディン。もう何を言っても無駄なようだ。
……無駄話はここまでだ。行くぞ」

「「デュエル！」」

トールサイド

「行くぞ！我のターン！
我はカードを1枚伏せ、さらにスカイ・コアを守備表示で召喚！
ターンエンドだ！」

トール
手札×4
フィールド
スカイ・コア　守備力0
伏せカード×1

「私のターンドロー！
私はシャインエンジェルを召喚！スカイ・コアを攻撃！」

「スカイ・コアは1ターンに1度戦闘では破壊されない！」

「ターンエンドだよ」

なのは
手札×５
フィールド
シャインエンジェル　攻撃力１４００

「我のターン！我は永続魔法、ライフ・エクスプロージョンを発動！我が受けるダメージを半分にし、その数値分だけこのカードにエクスプロージョンカウンターを１つ置く！５ターン後にこのカードを破壊する！
我はスカイ・コアを攻撃表示に変更！シャインエンジェルに攻撃だ！そしてライフ・エクスプロージョンの効果により、ダメージを半分にする。受けたダメージは７００。よってもう半分の７００ポイントがこのカードのカウンターになる。
ターンエンドだ」

トールＬＰ４０００→３３００
手札×４
フィールド
スカイ・コア　攻撃力０
ライフ・エクスプロージョン
＋エクスプロージョンカウンター×７００
伏せカード×１

「私のターンドロー！
私はサイクロンを発動！ライフ・エクスプロージョンを破壊！」

「させるものか！！カウンタートラップ、デストラクション・ガード！

カードを破壊する効果を無効にし、フィールド上のカードを1枚破壊する！
我はサイクロンの効果を無効にし、スカイ・コアを破壊！」

ここまでは作戦通りだ。
ライフ・エクスプロージョンにはもう1つ効果がある…

「スカイ・コアの効果発動！デッキ・手札・墓地から機皇帝スキエル∞、スキエルT、スキエルA、スキエルG、スキエルCを特殊召喚！
合体せよ！機皇帝スキエル！」

スキエルが合体する。
やはり初期パーツでは…そこまで強くは無い。

「デュナミス・ヴァルキリアを召喚して、カードセット。
ターンエンド」

なのは
手札×４
フィールド
デュナミス・ヴァルキリア　攻撃力１８００
シャインエンジェル　攻撃力１４００
伏せカード×１

「我のターン！ドロー。
我は魔法カード、反逆のシンクロを発動！
我のエクストラデッキから、シンクロモンスター1体を召喚条件を無視して相手のフィールドに特殊召喚する！
我は極神聖帝オーディンを貴様のフィールドに特殊召喚！

機皇帝スキエルの効果発動！１ターンに１度、相手のシンクロモンスター１体を吸収する。
極神聖帝オーディンを吸収！攻撃力４０００ポイントアップだ！」

「やるね…」

機皇帝スキエルの攻撃力は６２００…。
攻撃すれば一撃で倒せる！

「機皇帝スキエルでシャインエンジェルを攻撃！」

「トラップを発動するよ！魔法の筒！」

「しまった！うおおお！」

トールＬＰ３３００→２００

「クッ…だが、ライフ・エクスプロージョンにカウンターが乗る！
カードを１枚伏せターンエンド！」

トール
手札×３
フィールド
機皇帝スキエル∞　攻撃力６２００
＋極神聖帝オーディン
ライフ・エクスプロージョン
＋エクスプロージョンカウンター×３８００

「私のターン！ドロー。
私は手札１枚をコストにライトニング・ボルテックスを発動！

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターをすべて破壊！」

「な、なに！ライトニング・ボルテックスだと！？」

これでは我の機皇帝が…

「さらに、シャインエンジェルでダイレクトアタック！」

「うわあああ！！だ、だがエクスプロージョンカウンターを７００個置く！」

トールＬＰ２００→－５００

エクスプロージョンカウンター×４５００

「アハハハハハ！いい負けっぷりだったよトール！

まあ、俺に任せて後は休んでな。

後、預けたデッキ返せ！アレを使うから」

「分かった」

サイドアウト

ロキサイド

「待たせたね。次は俺だ！アハハハハハ」

「「デュエル」」

…さてと。俺の場にはライフ・エクスプロージョンがあるだけか。

仕方ないな。少し早いけど使うか。

「俺のターン。ドロー！
俺はライフ・エクスプロージョンの効果発動！このカードのエクスプロージョンカウンターをすべて取り除き、デッキまたはエクストラデッキから、取り除いたカウンターの数以下の攻撃力を持つモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する！そして、攻撃力がカウンターの数に満たなければ、その数値分ライフを回復する！その後このカードを破壊！
俺が特殊召喚するのはＡ・Ｏ・Ｊディサイシブ・アームズ（アーリー・オブ・ジャスティス）だ！そして１２００ポイントライフを回復する！
ディサイシブ・アームズの効果発動！相手のフィールド上に光属性モンスターが存在する時、１ターンに１度３つの効果から１つを選択して発動できる。
３つ目の効果を発動！手札をすべて捨てて、相手の手札を確認し、その中の光属性モンスターを墓地へ送る！」

「そ、そんな！！」

でも、ディサイシブ・アームズの効果はこれだけじゃない。

「さらに、捨てた光属性モンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える！
お前が捨てた光属性モンスターは大天使クリスティアとオネストか。なら３９００ポイントのダメージだ！」

「！！」

なのはＬＰ４０００→１００

「ディサイシブ・アームズでデュナミス・ヴァルキリアを攻撃！デ

ィサイシブ・キャノン！」

「きゃあああああ！」

なのはＬＰ１００↓－１４００

〈お願い。フェイトちゃん〉

〈わかってるよ。なのは〉

「いきます」

「「デュエル」」

「私のターンドロー。

私はカードを1枚伏せて、ターンエンドです」

フェイト

手札×５

フィールド

なし

「（モンスターを出さない？まあいいか。どうせ勝つのは俺だし）

俺のターンドロー！

ディサイシブ・アームズでダイレクトアタック！ディサイシブ・キャノン！」

「手札のバトルフェーダーを特殊召喚します」

「こざかしいね。

俺はこれでターンエンド」

ロキ
手札×１
フィールド
Ａ・Ｏ・Ｊディサイシブ・アームズ　攻撃力３３００

「私のターン。
バトルフェーダーを生贄にして、邪帝ガイウスを召喚！」

邪帝ガイウス！やばい！

「ガイウスの効果発動！フィールド上のカードを１枚ゲームから除外して、闇属性モンスターだった場合、１０００ポイントのダメージを与える。
私が除外するのはディサイシブ・アームズ！１０００ポイントのダメージです！」

「…」

まさかディサイシブ・アームズがやられるなんてね。
しょうがないな。ここまでかな。

「邪帝ガイウスでダイレクトアタック！」

「チッ…」

ロキＬＰ４０００→３０００→６００

ライフは６００。手札も１枚。

だけど、これだけあればサポートはできる！

「ターンエンドです」

フェイト
手札×４
フィールド
邪帝ガイウス　攻撃力２４００
伏せカード×１

「俺のターン。カードを2枚伏せて、ターンエンド」

［俺にやれることはやった。後は頼むよオーディン］

［わかった。後は任せておけ］

「私のターンドロー！
邪帝ガイウスでダイレクトアタック！」

「うわあああああ！！」

ロキＬＰ６００→－１８００

サイドアウト

「わたしの番だな」

「「デュエル」」

「わたしのターン！ドロー！
わたしは伏せカードを発動！オーバーライフ・リカバリー！自分フィールドにモンスターがいない時、手札をすべて捨てることで、捨てたカード1枚につき２０００ポイントのライフを回復する。
よってわたしのライフは１２０００ポイント回復し、１６０００となる！
さらにトラップ発動。オーバーゲイン！相手の手札を1枚ランダムに選択しその種類を当てる。当たった場合、そのカードを除外し、エクストラデッキからモンスターを1体召喚条件を無視して特殊召喚する。その後自分のライフを半分にする！
お前の左から2番目のカードを選択。そのカードはモンスターカードだ」

「当たりです」

やはりか。あの性格からして、先に手を打ち、相手を仕留めるタイプ。
手札に魔法、罠は無いだろう。

「そのカードを除外し、エクストラデッキのF・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を特殊召喚する。
さらに墓地のアビリティ・ブレイカーの効果発動。
このカードをデッキに戻し、このターンの相手の魔法・罠・モンスター効果を無効にする！」

「なっ！？効果を無効に！？」

やはりあのカードは罠か。
これで何の気兼ねもなく攻撃できる。

「F・G・Dで邪帝ガイウスを攻撃！そしてダメージステップに墓地のダブル・アサルトの効果発動。
このカードをゲームから除外することで、この戦闘で発生するダメージが2倍になる！」

「そ、そんなことって…きゃあああああああ」

フェイトLP4000→－1200

オーディン
LP160000→80000
手札×0
フィールド
F・G・D

「待て、フェイトといったな。前回とは違うはずだが、ダメージは無いか？」

「大丈夫です。でも、なぜ？」

「仮にわたしたちに勝ったとしてもけがをしていてはリョウは本気では戦わないだろう。リョウはそういう存在だ。誰かれ構わず戦いを挑んでいるわけではない」

「そういうことですか。…ありがとうございます」

「礼などいい。リョウのために聞いたことだ。早く代われ」

「頼むよ。はやて」

「任せときって。前回と違って、ずいぶん楽しめてるみたいやからな。2人とも」

「「ハハハ…」」

「さあ、行くで！」

「「デュエル」」

…あの娘のデッキはあまり見たことがないな。
まだどんな戦術を繰り出してくるかは謎だ。
だが、これだけは言える。奴は強い。
わたしの考えが正しければ、このターンで終わるだろう。
なら、後はリョウに任せよう。リョウなら大丈夫だ。

「私のターン！
私は、堕天使の嘆きを発動！手札の堕天使1枚を捨てて、そのモンスターと同名のモンスターをデッキから召喚条件を無視して特殊召喚する！
手札の堕天使スペルビアを捨てて、デッキのスペルビアを特殊召喚！
さらに、堕天使の欲望を発動！手札の堕天使を捨てることで、墓地の堕天使を特殊召喚できる！
私は、ゼラートを捨てて、スペルビアを墓地から特殊召喚！スペルビアの効果発動！
スペルビアが墓地から特殊召喚された場合、墓地の天使族モンスター1体を特殊召喚できる！私は今墓地に送ったゼラートを特殊召喚！
ゼラートの効果発動！手札の闇属性モンスター1体を捨てることで、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「むう…」

やはり終わったか。

「3体のモンスターでダイレクトアタック！！」

「むううううううう」

オーディンＬＰ８０００→５１００→２２００→－６００

「このわたしが人間に負けるとは…
これも時の運なのだろう。さあ行け。リョウのもとへ。
奴も5連勝するものがいなくてさぞ退屈していることだろう」

……行ったか。リョウのデッキはかなりの改良が施されている…
墓地と除外を利用し、究極神を手札に加え召喚する…恐ろしい戦術だ。

第３０話　学園祭　ブルー（後書き）

リリカルｖｓ神々でした。はやては強いですね。
オリカを使わなくても勝たせるつもりでしたが、アイディアが浮かんできてしまったので出しました。

第３１話　学園祭　ブルー　リョウＶＳリリカル（前書き）

リリカル陣ＶＳリョウです。

第３１話　学園祭　ブルー　リョウｖｓリリカル

リョウサイド

……来たか。オーディンたちが負けたのは驚いたが、オレが暇じゃなくなるからいいだろう。

「リョウ君…」

「どうした？そんな浮かない顔をして。いつも通り『話を聞かせてもらう』とか『究極神をよこせ』といって構えたらどうだ？」

「そんなこと……！」

「言えないよ」

「ハハハハハ！事情を知った途端にこれか！オレをがっかりさせるなよ！我が最強の神が貴様らを葬り去ってくれる！デュエルだ！」

「やるしか…ないんか？」

「学園祭だぞ？遠慮するなよ」

「くっ…」

「「デュエル」」

「先攻はオレがもらう。ドロー！オレはターンエンドだ！」

リョウ
ＬＰ１２０００
手札×６
フィールド
なし

「私のターンだね。ドロー…
私はシャインエンジェルを召喚するよ。
シャインエンジェルでダイレクトアタック！」

リョウＬＰ１２０００→１０６００

「手札のトラゴエディアの効果発動！
戦闘ダメージを受けたとき、手札から特殊召喚できる！そしてこのカードの攻撃力と守備力は、手札×６００ポイントになる。
よって攻撃力は３０００ポイント！」

「ターンエンドだよ」

なのは
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
シャインエンジェル　攻撃力１４００

フフ…このまま押し切って高町には退場してもらう。

「いくぞ。オレのターン！

オレはトラゴエディアの効果を発動！手札のモンスターを1枚捨て、相手のフィールド上に存在する捨てたモンスターと同じレベルのモンスター1体のコントロールを得る。
手札の幻銃士を捨て、シャインエンジェルのコントロールを得る！
バトルだ！シャインエンジェルとトラゴエディアで、ダイレクトアタック！」

「うっ…」

なのはＬＰ４０００→２６００→－４００

「この程度か！貴様の力は！オーディンたちとのデュエルで見せた本気はどこへ行った！
この程度ではあるまい！見せてみろお前たちの本気を！！」

「いいんだね？リョウ」

「手加減をすれば一撃で終わる。覚悟を決めろ」

「分かったよ」

リョウ
ＬＰ１０６００
手札×５
フィールド
トラゴエディア　攻撃力３０００
シャインエンジェル　攻撃力１４００

「「デュエル」」

「私のターン！
私はＢＦ－暁のシロッコを召喚１さらに、自分のフィールドにＢＦがいることで手札のゲイルを特殊召喚するよ！
ゲイルの効果発動！トラゴエディアの攻撃力を半分にする！
シロッコでトラゴエディアを攻撃するよ！」

「やればできるではないか」

だが足りん。こんなものでは満足できない！
究極神の出る幕はまだない！

「カードを１枚伏せてターンエンド」

フェイト
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ＢＦ－暁のシロッコ　攻撃力２０００
ＢＦ－疾風のゲイル　攻撃力１３００
伏せカード×１

「オレのターン！……！！」

早いな、究極神。
だが、まだ召喚するわけにはいかない。
ワンサイドゲームは最後の一人だけで十分だ！

「オレは死者蘇生を発動する。墓地のトラゴエディアを特殊召喚！
トラゴエディアでシロッコを攻撃！」

「くっ」

フェイトＬＰ４０００→３０００

「オレのバトルフェイズはまだ終わってない。
シャインエンジェルでゲイルを攻撃！」

フェイトＬＰ３０００→２９００

やはりデュエルはこうでなくてはならない。
つまらん勝負など、やっても無駄！
何のためにこの世界に来たのかがわからん！

「ターンエンド」

リョウ
ＬＰ１０６００
手札×５
フィールド
トラゴエディア　攻撃力３０００
シャインエンジェル　攻撃力１４００

「私のターン！私はライトニング・ボルテックスを発動！
相手のフィールドの表側表示モンスターをすべて破壊する！」

…やるじゃないか。

「そしてＢＦ－蒼炎のシュラを召喚！ダイレクトアタック！」

リョウＬＰ１０６００→８８００

「ターンエンド」

フェイト
ＬＰ２９００
手札×２
フィールド
伏せカード×１

「オレのターン！
ようやく戦う気になったようだな。
…チッ、ターンエンドだ」

リョウ
ＬＰ８８００
手札×６
フィールド
なし

くそ、ミラーフォースはだめだ…

「私のターン！ドロー！
私は黒槍のブラストを特殊召喚！
ブラストとシュラでダイレクトアタック！」

「ッ！！」

リョウＬＰ８８００→５３００

「私はカードを伏せてターンエンド」

フェイト
ＬＰ２９００
手札×２

ようやくこの時が来た…。

「オレのターン！
見せてやろう！究極神を！
クラスター・ペンデュラムを召喚！効果発動。
召喚時に、相手のモンスターの数までペンデュラム・トークンを特殊召喚する！
２体のペンデュラム・トークンを特殊召喚！
３体のペンデュラムとライフ半分を生贄に降臨せよ！究極神オシリス！」

リョウＬＰ５３００→２６５０
究極神オシリス　攻撃力１００００

「ハハハハハハハハ！究極神オシリスでブラストを攻撃！
アルティメット・サンダフォース！」

「トラップ発動！聖なるバリアー ミラーフォース ー！」

「なんだと！？だが、究極神オシリスの効果発動！
エンドフェイズに、戦闘以外でフィールドを離れていた場合、いかなる場合でもオレのライフ半分を生贄に特殊召喚する！
舞い戻れ！究極神オシリス！ターンエンドだ」

リョウ

ＬＰ１３２５
手札×５
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１００００

「私のターン！ドロー！
私はブラックフェザー・インパクトを発動！このターンのバトルフェイズをスキップして、自分のフィールド上のＢＦ１体につき６００ポイントのダメージを与える！」

「貴様…」

リョウＬＰ１３２５→１２５

「シュラとブラストを守備表示にしてターンエンドです」

フェイト
ＬＰ２９００
手札×２
フィールド
ＢＦ－蒼炎のシュラ　守備力１２００
ＢＦ－黒槍のブラスト　守備力８００

「オレのターン。ドロー。究極神オシリスの攻撃力２０００ポイントアップ！
究極神オシリスでブラストを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「きゃあああ！」

クッ…毎ターンモンスターを召喚されては埒が明かない！

「ターンエンド！」

リョウ
ＬＰ１２５
手札×６
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１２０００

「私のターン！ドロー！
ＢＦ－銀盾のミストラルを守備表示で召喚！」

「だが、オシリスの効果により攻守ともに２０００ポイントダウンだ」

ＢＦ－銀盾のミストラル　守備力１８００→０

「…ターンエンド！」

フェイト
ＬＰ２９００
手札×２
フィールド
ＢＦ－蒼炎のシュラ　守備力１２００
ＢＦ－銀盾のミストラル　守備力０

「オレのターン！ドロー！
……こいつだ！幻銃士召喚！効果により銃士トークン２体を特殊召喚する！

カードを1枚伏せてターンエンド」

リョウ
ＬＰ１２５
手札×５
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１００００
幻銃士　攻撃力１１００
銃士トークン×２　守備力５００

「私のターンドロー！
私はレベル４の蒼炎のシュラに、レベル２の銀盾のミストラルをチューニング！
漆黒の力！大いなる翼に宿りて、神風を巻きおこせ！シンクロ召喚！吹きすさべ、ＢＦ－アームズ・ウィング！」

「攻守２０００ポイントダウンだ！極雷弾！」

ＢＦ－アームズ・ウィング　攻撃力２３００→３００

「でも、アームズウィングは攻撃時に５００ポイント攻撃力が上がり、貫通能力を得る！
アームズウィングで銃士トークンを攻撃！ブラック・チャージ！」

「トラップ発動！聖なるバリア－ミラーフォース－！！
このカードの効果でアームズウィングを破壊する！」

「しまった！！」

フェイト

ＬＰ２９００
手札×３
フィールド
なし

「オレのターン！究極神オシリスのダイレクトアタック！アルティメット・サンダーフォース！」

「きゃあああああ！」

フェイトＬＰ２９００→－９１００

「くっ…」

「惜しかったな。ミラーフォースさえなければお前の勝ちだったぞ」

「フェイトちゃん、大丈夫や。後はうちに任しとき！」

「頼むよ。はやて」

「行くで！」

「「デュエル」」

「私のターン！
（リョウ君の場には攻撃力１２０００の神が1体…後は次の神の召喚の布石がある）
私は神の居城－ヴァルハラを発動！この効果で、手札の堕天使アスモディウスを守備表示で特殊召喚する！ターンエンドや！」

「だが、アスモディウスの攻守はオシリスの効果により２０００ポイントダウンする」

堕天使アスモディウス　守備力２５００→５００

「そんなことわかってる！」

はやて
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
堕天使アスモディウス　守備力５００
神の居城－ヴァルハラ

「オレのターン！幻銃士の効果発動！
このターン、銃士の攻撃を放棄することで、銃士１体につき３００ポイントのダメージを与える！」

「うっ！」

はやてＬＰ４０００→３１００

「３体の銃士とライフ半分を生贄に降臨せよ！究極神オベリスク！」

リョウＬＰ１２５→６３
究極神オシリス　攻撃力１４０００→１２０００

「究極神オベリスクでアスモディウスを攻撃！ゴッド・アルティメット・ディストラクション！」

だが、アスモディウスには効果があったな。

「アスモディウスの効果発動！アスモトークンとディウストークンを特殊召喚！」

「オシリスの効果により攻守２０００ポイントダウン！」

アスモトークン　守備力１３００→０
ディウストークン　守備力１２００→０

「でも、トークンにも効果はある！
アスモトークンは戦闘で破壊されず、ディウストークンは効果では破壊されない！」

「そんなことは知っている。だが、その程度の攻撃力しか持たない堕天使で神に勝てると思ってるのか？」

「当たり前や！（アレさえひければ…！！）」

「切り札を引こうとしても無駄なだけだ。
究極神に勝てるカードなど存在しない！」

「やってみなきゃ分からへん！」

「ならやって見せろ！カードを伏せてターンエンド」

リョウ
ＬＰ６３
手札×５
フィールド

究極神オシリス　攻撃力１００００
究極神オベリスク　攻撃力８０００
伏せカード×１

「私のターン！ドロー…来た！
私は魔法カード、天使の裁きを発動！自分のモンスター2体を生贄にして、相手のモンスター1体を破壊！その攻撃力分のダメージを与える！オベリスクを破壊する！」

「ここで切り札を引くのは正直予想外だった。
トラップ発動！デストラクト・ポーション！オシリスを破壊し、攻撃力分のライフを回復する！
よって１００００ポイント回復し、８０００ダメージを受ける！」

リョウＬＰ６３→１００６３→２０６３

「そ、そんな…このカードを発動したターン、召喚はできない。
ターンエンドや」

「蘇れ！オシリス、オベリスク！」

リョウＬＰ２０６３→１０３２→５１６

はやて
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
アスモトークン　守備力０
ディウストークン　守備力０

「オレのターン！クラスター・ペンデュラム召喚！ペンデュラム・トークンを2体特殊召喚！
そして3体のペンデュラムとライフ半分を生贄に！降臨せよ！究極神帝ラー！
ラーの効果により相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える！ゴッド・アルティメット・ノヴァ！」

「きゃあああああああ」

はやてＬＰ４０００→－∞

「楽しかったで」

「ああ、オレもだ」

次は十代達か。さあ、究極神にどう立ち向かってくるというのだ！
十代！

第３１話　学園祭　ブルー　リョウｖｓリリカル（後書き）

最後の方が雑になってしまいました

第３２話　学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　前編（前）

学園祭編ラストデュエルです。
長くなりそうなので２～３話に分けることにしました。

第３２話　学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　前編

リョウサイド

いよいよこの時が来たな。

……ん？こんなときにゼウスから通信？

［ゼウス、いきなり何の用だ］

［これをあなたにと思いましてね］

［…ゼロ・フォース。確かにこれは強力だ。

しかしこれを入れるとなるとデッキ構成を変えなければならん］

［それでも入れておけば大いに役に立ってくれるでしょう］

［お前がそこまで言うのならそうなのだろうな。

分かった。入れておく］

［分かりました］

成程な。確かに今の構成よりは強力になるか。

「十代、少し待て。デッキ内容を変える」

そう言って、十代が返答する間もなくデッキの内容を入れ替える。

「もう終わった」

「え？今言ったばかりじゃん」

「このぐらいの作業、時間をかける必要がない。
さあ、行くぞ！５連勝した実力は伊達ではないはずだ！」

「おう！」

「「デュエル」」

「さて、最初は俺だな。ドローだ。
俺は…そうだな。死霊騎士デスカリバー・ナイトを召喚してターンエンドだ」

三沢
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
死霊騎士デスカリバー・ナイト　攻撃力１９００

…デスカリバー・ナイト。あのデッキは闇属性のビートなのかそれとも…

「オレのターン！
オレはこれでターンエンド」

リョウ
ＬＰ１２０００
手札×６
フィールド
なし

「俺のターンだな。
デスカリバー・ナイトでダイレクトアタック！」

「手札のバトルフェーダーを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる！」

「やるな。ターンエンドだ」

三沢
ＬＰ４０００
手札×６
フィールド
死霊騎士デスカリバー・ナイト　攻撃力１９００

デスカリバー・ナイト…かなり邪魔だな。
これでは幻銃士とクラスター・ペンデュラムの効果が妨害されてしまう。
少し早いとは思うが、出番だな。

「オレのターン！
オレはカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

リョウ
ＬＰ１２０００
手札×４
フィールド
バトルフェーダー　守備力０
伏せカード×２

これでいい。後は何も妨害されなければ…

「俺のターンだ。ドロー。
俺はスナイプ・ストーカーを召喚する」

スナイプ・ストーカー…ここでやるべきか。

「残念だが三沢。攻撃はさせんぞ。
トラップ発動、強制脱出装置！」

「なに!?だが、優先権によって、１回だけなら使うことができる！」

「誰がスナイプ・ストーカーを対象にするといった?オレが戻すのはバトルフェーダーだ!
そしてこのカードの効果によって特殊召喚されていたこのカードがフィールドを離れる場合、除外される!
オレのモンスターが除外されたことによって、さらにこのカードが発動する。トラップカード、ゼロ・フォース。自分のモンスターが除外された時、フィールド上のモンスターの攻撃力は０になる。
よってデスカリバー・ナイトとスナイプ・ストーカーの攻撃力が０になる」

死霊騎士デスカリバー・ナイト　攻撃力１９００→０
スナイプ・ストーカー　攻撃力１５００→０

「なに!?」

「うまいな」

「さすがにリョウだね」

「しかし、あのゼロ・フォースというカードは見たことがないな」

「ゼウスがリョウに渡したんだろう」

「成程。納得」

「くそ…攻撃力が０では攻撃しても無駄…ターンエンド」

三沢
ＬＰ４０００
手札×６
フィールド
死霊騎士デスカリバー・ナイト　攻撃力０
スナイプ・ストーカー　攻撃力０

「三沢君…焦ってるわね」

「三沢、落ち着いていけ！」

「オレのターン！ドロー！
オレはクリッターを召喚する！
クリッターでデスカリバー・ナイトを攻撃！」

「デスカリバー・ナイトが！」

三沢ＬＰ４０００→３０００

「そしてカードを１枚伏せてターンエンド」

リョウ
リョウ
ＬＰ１２０００
手札×３
フィールド
クリッター　攻撃力１０００
伏せカード×１

「よし、俺のターンだ。
スナイプ・ストーカーの効果で、手札のネクロ・ガードナーを捨てて、クリッターを対象にする！
サイコロを振って、１か６以外なら破壊！…出た目は１だ。
破壊は失敗だ。だが、スナイプ・ストーカーの効果は１ターンに何度でも行うことができる！
もう一度手札を捨てて発動だ！…よし、出た目は４！クリッターを破壊！」

「クリッターの効果発動！デッキからクラスター・ペンデュラムを手札に加える！」

「俺はクリッターを召喚！」

「お前もか…」

「クリッターでダイレクトアタックだ！」

リョウＬＰ１２０００→１１０００

クリッター…奴のデッキは闇属性か。

ならアレを墓地へ送るのは得策ではない。

「ターンエンド」

三沢
ＬＰ３０００
手札×４
フィールド
スナイプ・ストーカー　攻撃力０
クリッター　攻撃力１０００

「オレのターン！オレはカードを１枚伏せターンエンド！」

リョウ
ＬＰ１１０００
手札×４
フィールド
伏せカード×１

「俺のターンだな」

「お前のスタンバイフェイズにトラップを発動！
おジャマトリオ！この効果により、お前のフィールドにおジャマトークンを3体特殊召喚する。
このトークンは生贄召喚の生贄にはできない」

「俺のフィールドが…くそ！
なら、クリッターとスナイプ・ストーカーを生贄に闇よりいでし絶望を召喚！
クリッターの効果でクリボーを手札に加える！

闇より出でし絶望でダイレクトアタック！」

「クッ…まあいい。
オレのフィールドにカードがない時にダメージを受けた時、手札の冥府の使者ゴーズを特殊召喚する！
ゴーズの効果発動。この時受けたダメージの種類により効果が決定する。
戦闘ダメージの効果により、受けた戦闘ダメージと同じ数値の攻守を持つ冥府の使者カイエントークンを特殊召喚する。カイエントークンの攻撃力は２８００だ」

リョウＬＰ１１０００→８２００
冥府の使者ゴーズ　攻撃力２７００
冥府の使者カイエントークン　攻撃力２８００

「しまった！」

ここまで、多少狂いはあったがいい流れだな。
神が来ない時点で多少雲行きが怪しいがな。

「くそ…俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

三沢
ＬＰ３０００
手札×３
フィールド
おジャマトークン×３　守備力１０００
闇よりいでし絶望　攻撃力２８００
伏せカード×２

「オレのターン！ドロー！…三沢。神を拝ませてやる。
オレはクラスター・ペンデュラムを召喚！この効果により、相手のフィールドのモンスターの数までペンデュラム・トークンを特殊召喚できる。
オレは２体のペンデュラム・トークンを特殊召喚。
３体のペンデュラムとライフ半分を生贄に！究極神オベリスク召喚！」

リョウＬＰ８２００→４１００

「究極神オベリスクで闇より出でし絶望を攻撃！ゴッド・エクス・バースト！」

「ト、トラップ発動！ガード・ブロック！ダメージを０にして１枚ドローする！」

…ガード・ブロックは神には影響しない罠…無効にはならない。

「ターンエンドだ」

リョウ
ＬＰ４１００
手札×２
フィールド
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「俺のターン…（くそ！神攻略のカギは俺のデッキには用意されていない…）
俺は魔法カード、強欲な壺を発動。２枚ドロー！
…よし！ゴブリン暗殺部隊を召喚！このカードはダイレクトアタッ

クができる！」

「なにっ！？（ダイレクトアタックだと！？…しかもあのカードはゴブリン。ならば攻撃後に守備表示になるのは確実！）」

「ダイレクトアタックだ！」

リョウＬＰ４１００→２８００

「小癪な…」

だが、次のターンも攻撃表示にはできないはずだ。
なら、次のターンに破壊すればいい。

「ターンエンドだ」

三沢
ＬＰ３０００
手札×４
フィールド
おジャマトークン×３　守備力１０００
ゴブリン暗殺部隊　守備力０
伏せカード×１

「オレのターン！オレはクラスター・ペンデュラムを召喚！
クラスター・ペンデュラムの効果により、３体のペンデュラム・トークンを特殊召喚する！
究極神オベリスクの効果発動。２体のモンスターを生贄に捧げることで、このターン相手モンスターすべてに攻撃できる！オレは２体のペンデュラム・トークンを生贄に捧げ、このターンオベリスクで

全体攻撃を行う！」

「なに！？」

「喰らえ！ゴッド・ジェノサイド・エナジー！」

「くうっ…」

三沢ＬＰ３０００→２１００

「何で俺のライフが！？」

「おジャマトリオの効果だ。トークンが破壊された場合、１体につき３００ポイントのダメージを与える！」

もっとも、これでクラスター・ペンデュラムがあまり役に立たなくなるがな。

「カードを１枚伏せターンエンド」

リョウ
ＬＰ２８００
手札×１
フィールド
究極神オベリスク　攻撃力８０００
クラスター・ペンデュラム　攻撃力１００
ペンデュラム・トークン　守備力０
伏せカード×１

「俺のターン！（神帝のフィールドには攻撃表示のクラスター・ペ

ンデュラムがいる。アレを攻撃すればこのデュエル俺の勝ちだ！）
俺は闇王プロメティスを召喚！このカードの召喚時に自分の墓地の闇属性モンスターを除外する！そして1枚につきエンドフェイズまでこのカードの攻撃力を４００ポイントアップする！
俺が除外するのは7体！よって攻撃力は４０００になる！
闇王プロメティスでクラスター・ペンデュラムを攻撃！」

「正直そいつが召喚された時は焦ったぞ。だが、トラップ発動！強制脱出装置！クラスター・ペンデュラムを手札に戻す！」

「なに！なら、ペンデュラム・トークンに攻撃だ！」

「…」

こいつが破壊されてもオレへのダメージは０。
無意味なことを…

「ターンエンドだ」

三沢
ＬＰ２１００
手札×４
フィールド
闇王プロメティス　攻撃力４０００→１２００
伏せカード×１

「オレのターン！ドロー！
究極神オベリスク！プロメティスを粉砕せよ！ゴッド・エクス・バースト！」

「まだだ！速効魔法発動！蜃気楼の筒（ミラージュ・シリンダー）！自分のモンスターが攻撃対象になった時に発動！１０００ポイントダメージを与える！」

この期に及んでまだあがいてくるか…！

三沢だけでこれだけのライフを失った…おのれ…

「うわあああああ！」

三沢ＬＰ２１００→－４７００

リョウＬＰ２８００→１８００

「次は私ね。よろしく」

「「デュエル」」

第３２話　学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　前編（後

次回は明日香ｖｓリョウです。
遅くなってすいません。

学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　中編（前書き）

明日香ｖｓリョウです。かなり頑張りました（明日香が）

学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　中編

リョウサイド

「「デュエル」」

「私のターンドロー！
私は融合を発動！手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合して、サイバー・ブレイダーを守備表示で融合召喚！このカードの効果により、相手のモンスターが1体のみの場合戦闘では破壊されず、2体の場合は攻撃力が倍になり、3体の場合は相手の効果を無効にする！」

サイバー・ブレイダー…天上院のエースモンスター…3番目の効果は究極神には関係ないが2つ目と1つ目は面倒だな。

「カードを1枚伏せてターンエンドよ」

明日香
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
サイバー・ブレイダー　守備力８００
伏せカード×１

「オレのターン。オレはこのターン何もせずにターンエンドだ」

リョウ
ＬＰ２８００

手札×４
フィールド
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターン！私は魔法カード、強欲な壺を発動！２枚ドロー！
さらにカードを１枚伏せターンエンドよ！」

明日香
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
サイバー・ブレイダー　守備力８００
伏せカード×１

防戦一方だな。このまま究極神帝が来るまで耐えればあるいは…

「オレのターン！…！天上院！その身で神の力を味わえ！
幻銃士を召喚！その効果により銃士トークンを２体特殊召喚する！
３体の銃士とライフ半分を生贄に捧げ、降臨せよ！究極神オシリス！
究極神オシリスの攻撃力と守備力はコントローラーの手札×２００
０ポイントの数値になる！」

リョウＬＰ２８００→１４００
究極神オシリス　攻撃力Ｘ０００→６０００

「でも、サイバー・ブレイダーの攻撃力も倍になる！」

「だが、これで戦闘で破壊できる。
究極神オシリスで、サイバー・ブレイダーを攻撃！アルティメット・
サンダーフォース！」

「トラップ発動！威嚇する咆哮！相手はこのターン攻撃宣言できない！」

究極神オベリスクではなく、オレに直に効果を及ぼすカードか。やるな。

「ターンエンド」

リョウ
ＬＰ１４００
手札×３
フィールド
究極神オシリス　攻撃力６０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターン！ようやく神を倒せるわね」

「なに！？」

バカな！？神を倒すなど…

「私は速効魔法、収縮を究極神オベリスクを対象に発動！エンドフェイズまで元々の攻守を半分にする！」

「なに！？オベリスクの攻守を下げるだと！」

しまった！今のサイバー・ブレイダーの攻撃力は４２００．
そしてオベリスクの攻撃力は半分になり４０００…

「サイバー・ブレイダーを攻撃表示に変更して、オベリスクに攻撃！」

「うおおおおおおお！！！！！バカな！！究極神が戦闘で倒されるだとぉぉぉ！？」

リョウＬＰ１４００→１２００

「カードを１枚伏せてターンエンドよ」

明日香
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
サイバー・ブレイダー　攻撃力２１００

究極神が戦闘で倒されるとは…だが、オシリスは残っている。
そしてこのターン。オシリスの攻撃力は８０００に上がる。
一撃で沈めてやる。

「オレのターン！ドロー！！
この瞬間。オシリスの攻撃力が８０００になる！
オシリスでサイバー・ブレイダーを攻撃！雷の海に沈め！アルティメット・サンダーフォース！」

「トラップ発動！攻撃の無力化！相手の攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了させる！」

「チッ…生き延びたか。だが、それも１ターン寿命が延びたに過ぎない！

次のターンに今度こそとどめを刺してやる。
ターンエンドだ！」

リョウ
ＬＰ１２００
手札×４
フィールド
究極神オシリス　攻撃力８０００

「私のターン！ドローよ！
私はサイバー・ブレイダーを守備表示に変更するわ！
ターンエンドよ」

明日香
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
サイバー・ブレイダー　守備力８００

「オレのターン！フフフ…ハハハハハ！もう一度究極神の力を思い知れ！
死者転生を発動！手札１枚をコストにして、墓地からオベリスクの巨神兵を手札に加える！
さらにダーク・バースト発動！墓地の攻撃力１５００以下の闇属性モンスター…幻銃士を手札に加える！
幻銃士を召喚！その効果で銃士トークン２体を特殊召喚する。
３体の銃士とライフ半分を生贄に！再度降臨せよ！究極神オベリスク！」

リョウＬＰ１２００→６００

究極神オシリス　攻撃力１００００→４０００

「究極神オベリスクでサイバー・ブレイダーを攻撃！ゴッド・エクス・バースト！」

「きゃああ！」

「まだだ！究極神オシリスでダイレクトアタック！アルティメット・サンダーフォース！」

「手札からバトルフェーダーを特殊召喚！」

バトルフェーダー…？なぜこの時代にあるのだ？
まあそんな些細なことはどうでもいい。
これで天上院に神に対抗する術は無いはず。

「ターンエンド」

リョウ
ＬＰ６００
手札×２
フィールド
究極神オシリス　攻撃力４０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「天上院。早く何とかしないと、究極神帝が降臨するぞ」

「クッ…私のターンドロー！…！
私はサイバーチュチュを召喚する！フィールド上のこのカードの攻撃力が、他のモンスターよりも最も低い場合、ダイレクトアタック

ができる！
サイバーチュチュでダイレクトアタック！」

「チッ…させるものか！手札のバトルフェーダーを特殊召喚する！」

危なかった…さすがにダイレクトアタックは面倒だ。

「ターンエンドよ」

明日香
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
サイバーチュチュ　攻撃力１０００
バトルフェーダー　守備力０

「ハハハハハ！オレのターン！
究極神オベリスクよ！サイバーチュチュを葬れ！ゴッド・エクス・バースト！」

「きゃあああああ」

明日香ＬＰ４０００→－３０００

「・・十代、後は頼むわよ」

「おう、任しとけ！
へへ、リョウ。お前とのデュエル、楽しみにしてたぜ」

「その威勢、どこまで持つかな？」

「「デュエル」」

学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　中編（後書き）

明日香だけ微妙に短くなてしまいました。デュエルの内容上、頑張れば損失も大きいし、失敗すれば一撃で終わってしまうので仕方がありません。
十代も短くなるかも…

学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　後編（前書き）

後編です。予告通り、十代とのデュエルは短くなってしまいました。

学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　後編

リョウサイド

「「デュエル」」

リョウＬＰ６００
十代ＬＰ４０００

ようやく３人目か。前の２人でライフがかなり減っている…
早めに決着をつけなければ負ける！
だが、十代が召喚または特殊召喚したモンスターは攻守ともに２００ポイントダウンする。
そう迂闊には動けないはずだ。

「俺のターンドロー！俺はバブルマンを守備表示で召喚！効果で２枚ドローするぜ！」

「だが、オシリスの効果で攻守２０００ポイントダウンだ」

Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン　守備力１２００→０

「まだだ！融合を発動！手札のフェザーマンと、バブルマンを融合！来い！Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ！」

なっ！？アブソルートＺＥＲＯだと！なぜ十代が持っているんだ！
だが、アブソルートＺＥＲＯの効果では究極神は倒せない。それに…

「攻守が２０００ポイントダウンする」

Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　守備力２０００→０

オシリスの効果により攻守がダウンする。
ならばなぜ召喚した？

「カードを２枚伏せてターンエンドだ」

十代
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　守備力０
伏せカード×２

「オレのターン！ドロー！この瞬間、オシリスの攻守がアップ！」

究極神オシリス　攻撃力４０００→６０００

「オシリスでアブソルートＺＥＲＯを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「トラップ発動！ヒーローバリア！オシリスの攻撃を無効にする！」

「ならばオベリスクで攻撃！ゴッド・エクス・バースト！」

「速効魔法、融合解除！アブソルートＺＥＲＯの融合を解除だ！」

「フェザーマンに攻撃続行」

「うわあ！フェザーマン！」

成程な。このためにわざわざ融合したのか。

「ターンエンド」

リョウ
ＬＰ６００
手札×３
フィールド
究極神オシリス　攻撃力６０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「俺のターンだ！ドロー！
俺はカードを２枚伏せてターンエンド」

十代
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン　守備力０
伏せカード×２

「オレのターンだな。ドロー！オシリスでフェザーマンを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「くうっ…」

「とどめだ！究極神オベリスクの攻撃！ゴッド・エクス・バースト！」

「トラップ発動、ヒーロー見参！俺の手札は2枚だ！」

「右のカードを選択」

十代のことだ。おそらくは両方ともモンスター…

「フレンドックを守備表示で召喚！」

「攻撃を続行する！」

「ぐあっ…フレンドッグの効果発動！墓地の融合とＥ・ＨＥＲＯバブルマンを手札に加える！」

またバブルマンか。あれだけの戦略をこのプレッシャーの中で披露するとは…

「ターンエンドだ」

リョウ
ＬＰ６００
手札×４
フィールド
究極神オシリス　攻撃力８０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「俺のターンドロー！バブルマンを召喚して2枚ドローだ！」

「攻守ダウンだ」

Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン　守備力１２００→０

「わかってる！強欲な壺を発動してさらに２枚ドロー！
Ｅ・ＨＥＲＯレディ・オブ・ファイアを守備表示で召喚！」

また本来持っていないはずのカード…
そしてあのカードはエンドフェイズにＥ・ＨＥＲＯ１体につき２００ポイントダメージを与える。

「レディ・オブ・ファイアの効果で４００ダメージを与えるぜ！
それでターンエンドだ」

「……」

リョウＬＰ６００→２００

十代
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン　守備力０
Ｅ・ＨＥＲＯレディ・オブ・ファイア　守備力０

このターン、レディ・オブ・ファイアを破壊しなければ負ける。
しかし、破壊することができるのは確実だ。
その後の十代の手札に何があるか…何かしらのバーンがあれば間違いなくオレのライフは０になる。
…考えても無駄だ。いかなる敵も圧倒的な力で叩き潰す。それがオレの戦い。
それ以外の戦い方などありはしない！

「オレのターン！オレは究極神オベリスクでレディ・オブ・ファイアを攻撃！ゴッド・エクス・バースト！」

「うあっ…」

「さらに究極神オシリスでバブルマンを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「俺のフィールドががら空きに…」

「カードを1枚伏せターンエンド」

リョウ
ＬＰ６００
手札×４
フィールド
究極神オシリス　攻撃力８０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００
伏せカード×１

「俺のターンだ！…へへ、悪いなリョウ！俺の勝ちだ！魔法カード発動！戦士の生還！レディ・オブ・ファイアを手札に戻すぜ！
そして召喚！これでターンエンｄ…」

「そうはさせん！強制脱出装置により、レディ・オブ・ファイアを手札に戻す！
勝負を焦ったのがお前の敗因だ。十代」

十代
ＬＰ４０００
手札×６
フィールド
なし

「そ、そんな…」

「オレのラストターン！ドロー！幻銃士を召喚！効果で銃士トークン２体を特殊召喚し、３体の銃士とオレのライフ半分を生贄に捧げ、降臨せよ！究極神帝ラー！！
究極神帝ラーの効果発動。１ターンに１度相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える！ゴッド・アルティメット・ノヴァ！！」

「うわあああああああああ！！」

十代ＬＰ４０００→－∞

「十代。これで気が済んだか？」

「ああ。負けちまって、ものすごく疲れたけど、楽しかったぜ」

「そうか」

「「「「「「「わあああああ！！いいデュエルだったぞーー！」」」」」」」

「十代。皆がお前のデュエルを認めた。
この３対３の勝ち抜きデュエルの最後の将としてその栄光をたたえる」

～～～３０分後～～～

「ブルーの催しものもようやくすべてが終わったな」

「ああ。しかし、結局５連勝で来たのはリリカルグループと十代グループだけだったがな」

「ま、俺はそれなりに挑戦者をつぶしてて楽しかったけどね」

まあ、確かに５連勝するのは難しかっただろう。
しかし、４連勝したグループはいくつかあったな。
カイザーはその挑戦者すべてを叩き伏せていたな。
３連勝のグループも結構いただろう。用意したパックが結局残らなかったからな。

「そういえばトール。レアパックの中に何を入れたんだ？」

「たしかＴｈｅアトモスフィアとメタル・リフレクト・スライムと打ち出の小槌、それからブラックマジシャンや処刑人マキュラ、それから…」

「もういい。２連勝の賞品ってジュースだったな。
具体的には何があったんだ？」

「えーとね…唐辛子１００％ジュースと、青汁、それから野菜ジュースにトマトジュース、ほうじ茶に緑茶なんかかな」

「いろいろおかしいだろ。参加賞よりもいろいろな意味でかわいそうだ」

何でこんな罰ゲームでしか出てこないようなジュースしか用意しないんだ？
特に唐辛子１００％ジュースって人間の味覚じゃ厳しいだろ。

「ああ、そうだった。リョウ。お前がデュエルしている間にゼウスから預かっていたものがあった。これだ」

「これは…オレのＤ－ホイール…」

ラーの形を再現しており、走るのではなく浮遊して移動する。立って乗る。
一世界内での瞬間移動機能。普段は分速１００キロで走る。コントロールはハンドルではなく、乗っている者の意思で動かす。最高２人乗りだ。
デュエルディスクは腕に付けたままデュエルを行うことができる。というよりはその方法しかない。つまり、スピードワールド２をセットする必要もない。ライディングデュエルの時はセットするが。

「そのチートホイールよく持ってきてくれたね」

「持ってきた理由は我にも分からん。なにしろ、オーディンですら分からないのだからな」

確かになぜ持ってきたのかは謎だ。何か起こるのか？

学園祭ブルー　最終決戦　三沢＆明日香＆十代ｖｓリョウ　後編（後書き）

十代の敗因は、「勝ち急いだから」何かとアニメにあるシーンです。
ライトジャスティスが来るまで待っていれば、勝ててたと思います。
…サイクロンでいいか。

本当にどうでもいいんですけど、六武の門が強すぎる…見たくないし使われたくもない。それに持ってない。あとフリッグのリンゴが綺麗すぎる…それに使えなくはないし、効果はそれなりにいいと思います。

第３３話　襲撃者（前書き）

一応、これも学園祭編の１つです。

第３３話　襲撃者

リョウサイド

今日は学園祭の後ということで、休みらしい。
しかし暇だな。

「リョウ、暇そうだね」

「まあな。やることがないわけだからな」

「じゃあさ、せっかくＤ－ホイールがあるんだから町に行かない？」

「何か町でやりたいことでもあるのか？」

「うん。ちょっとね」

「隠し事をしないお前がそんなことを言うとは珍しいな。
いいぞ。行こう」

「♪」

本当に珍しいな。何か悪いものでも食べたのか？
というか、隠し事をオレに対してするのは初めてじゃないか？

～～３０分後～～

「ほら乗れ。行くぞ」

「ちょっと待って…届かない…」

「仕方ないな、ほら」

手を差し伸べる。スクルドの手をつかむと、そのまま引っ張り上げた。

「しっかりつかまってろ。落ちるなよ」

「大丈夫♪」

～～～～～

「行ったな」

「そうだね。スクルド、しっかりやれるかなぁ～」

「まあ、プレゼントを渡すぐらい、いくらスクルドでもできるはず…」

～～～～～

まだか。意外と地球というのは広いらしいな。

少しスピードを上げるか。

「スクルド。スピードを上げる。つかまってろ」

「わかった～」

さてと、さすがにこれだけスピードを上げればあと３０秒ほどで着

くはず…
お、陸地が見えてきたな。

「よし、着いたぞ」

ここは…港か。人間がいなくてよかったな。
空飛ぶバイクなんていや、龍の形だから見間違えるか。
それでも龍がいるなんて知ったら大騒ぎになるだろうが。

「どこに行きたいんだ?」

「えっ!?（あ、考えてなかった…どうしよう…考えてないなんて言ったら怒られるかもしれないし、最悪嫌われるかも…）」

「もしかして考えてなかったのか?」

「そ、そんなことないよ!」

「じゃあどこ行くんだ?」

考えてないのが顔に書かれている。
何で正直に言わないんだ?

「そ、その…ごめん、考えてなかった…」

「気にするな?じゃあ適当に散歩しようか」

「怒らないの?」

はぁ?

「なんで怒らなきゃいけないんだ？」

「だって半ば無理やり連れてきてもらったのに考えてないなんて誰だって怒るよ」

「いや、別に怒る必要ないしな。……というかこんな重い話はしてられん。こんなこと話してるぐらいなら早く行こう。適当に歩いていればどこか目につく場所があるだろう」

こいつはそんなことを気にしてたのか。

「ん？あの店…」

そこにあったのは1件のカードショップ。

だが、神界の地図ではこんな場所にカードショップなどなかったはず…

どういうことだ？

「ククククク…」

！！なにっ！？

「キャアアア！！」

「むう…ここはどこだ？」

「ここは店の中だ」

「貴様…何者だ」

「魔界参謀といえば分かるかな？」

「！！バカな！貴様らはトールが潰したはずだ！」

「神が何度でも蘇るように我ら悪魔もまた蘇る」

「トールは封印を施さなかったとでもいうのか！？」

「いや。確かに奴は我らに封印を施した。
だが、最近感じるこの巨大な力が我らの封印を解いた」

巨大な力…
いや…そんなはずは…

「で、その魔界参謀が何の用だ？」

「当然魂をかけた闇のデュエルです」

「このオレに闇のデュエルで挑むとはずいぶん好戦的な参謀だな？」

「ええ。よくそう言われますよ」

「まあいい。行くぞ！」

「ちょっと待って。リョウ、これを持って行って」

「これは…！おい、これ！！」

「いいの。ほんとはプレゼントだったんだけど、リョウが危ないなら…」

「だから今日誘ったのか…」

「…」

「最初から渡せばよかったはずだが…」

「でも、渡したことなんかなかったから普通に渡したらリョウは満足しないだろうって思って」

「そんなことは無い。だが、最高の戦力だ。ありがとう、スクルド」

「負けないで、リョウ」

「「デュエル」」

「では、私のターンから始めさせていただきますドロー。私は魔界兵を召喚してターンエンドです」

参謀
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
魔界兵　攻撃力０

「攻撃力０…その程度の雑魚に何ができる」

「見てればわかりますよ」

「…まあいい。オレのターン！
オレは魔法カード、女神の予知夢を発動。
このカードの効果により、デッキの上から3番目のカードを確認する。
そしてそして3ターン後にそのカードをドローした場合、魔法・罠なら発動条件とコストを無視して手札から発動できる。モンスターなら召喚条件を無視して特殊召喚する。この効果で神の召喚条件を無視することはできない。
カードを2枚伏せ、神界の門番ヘイムダルを召喚する。
ターンエンド

リョウ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
神の門番ヘイムダル　攻撃力１８００
伏せカード×２

あのモンスター…攻撃力0を攻撃表示で出すなら明らかに何かしらの効果があるはずだ。

「私のターンです。スタンバイフェイズに魔界兵の効果を発動します。
手札を1枚捨てることで、デッキから『魔界』と名のついたカードを1枚手札に加え、その後このカードを破壊します。
私は手札の魔界兵を捨ててデッキから魔界諜報ヘルズを手札に加えます。
私は魔界諜報ヘルズを召喚。その効果により、召喚時に相手の伏せカードを確認します」

「チッ…」

舌打ちをしながら伏せカードを見せる。ミラーフォースと奈落の落とし穴だ。

「魔界諜報ヘルズのもう一つの効果を発動します。このカードを生贄にすることで、相手の手札1枚を選択して、種類を当てます。当たった場合、相手の伏せカード1枚のコントロールを得ます。右側の手札を選択。そのカードは魔法カード！」

「当たりだ。魔法カード」

まさか伏せカードのピーピングにコントロール奪取とはな。かなり厄介な効果だ。

「あなたのミラーフォースをいただきます。これでターンエンド」

参謀
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
伏せカード×１

「オレのターンドロー！オレは永続魔法、ヒミンビョルグを発動する。
このカードはフィールドにヘイムダルが存在する場合のみ発動できる。ヘイムダルの攻撃力が２００ポイントアップする。さらに、ヘイムダルがフィールドを離れた場合、デッキからチューナー1体とチューナー以外のモンスター2体を特殊召喚する。この効果で特殊

召喚したモンスターは生贄にはできない。そしてこのカードがフィールドを離れた時、オレは手札・デッキ・墓地・フィールドのヘイムダルをすべて除外する。
行くぞ！ヘイムダルでダイレクトアタック！ギャラルブラスト！」

「むううぅ！……なかなかやりますね」

参謀ＬＰ８０００→６０００

クッ…やはりミラーフォースは使ってこないか…

「ターンエンドだ！」

リョウ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
神の門番ヘイムダル　攻撃力２０００
ヒミンビョルグ　永続
伏せカード×１

「私のターンです。ドロー。
私は墓地の３体の攻撃力０の『魔界』３体をゲームから除外して魔界兵長レイズを特殊召喚します。魔界兵長レイズの特殊召喚時に相手はトラップの発動はできません。
魔界兵長レイズの効果発動。１ターンに１度、デッキ・手札・墓地・除外ゾーンより、魔界兵か魔界諜報１体を特殊召喚できます。
私は除外ゾーンの魔界兵を守備表示で特殊召喚します。
魔界兵長レイズで神の門番ヘイムダルを攻撃！」

「ぐあああああ！」

リョウＬＰ８０００→７２００

「この瞬間、ヒミンビョルグの効果発動！オレはデッキからチューナーモンスター極星神将バルドル、さらにスリュムとウァズヴァールを特殊召喚する！
ただし、その後のデッキシャッフルはしなくてもいい！よってオレはシャッフルしない！」

ここでシャッフルをすれば女神の予知夢の効果の意味がなくなってしまう…

「ターンエンド」

参謀
ＬＰ６０００
手札×５
フィールド
魔界兵長レイズ　攻撃力２８００
魔界兵　守備力０
伏せカード×１

「オレのターン！ドロー！
レベル３のスリュムとレベル４のウァズヴァールに、レベル３の極星神将バルドルをチューニング！北辰の空にありき全知全能を司る王よ！今こそ星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚！
天地神明を統べよ、最高神、極神聖帝オーディン！
極星神将バルドルは『極星天』『極星獣』『極星霊』として扱うことができる！さらに、このカードが『極神』と名のついたシンクロ

モンスターの素材になった場合、そのモンスターは相手の魔法・罠・モンスター効果を受けなくなる！究極神に勝ることができないレベルの耐性ではあるがそれでも強力な耐性だ！
極神聖帝オーディンで魔界兵長レイズを攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「ぎゃあああああ」

参謀ＬＰ６０００→４８００

どうやらリアルダメージは自分だけではなく相手も受けるらしいな。

「ターンエンド」

リョウ
ＬＰ７２００
手札×３
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
ヒミンビョルグ
伏せカード×１

「私のターンです。ドロー。
私は魔界兵の効果を発動して、手札１枚をコストにデッキから魔界知将ノーレージを手札に加えます。
そして私は手札を２枚捨て、さらに魔界兵を生贄に捧げ魔界知将ノーレージを特殊召喚します。
ノーレージの効果発動。特殊召喚時に相手のフィールドのモンスター１体の攻撃力によって効果が決まります。
あなたのフィールドには攻撃力４０００の極神聖帝オーディンが１

体。
ノーレージの効果は、１ターンに１度、戦闘を放棄することで相手に２０００ポイントダメージを与えることができます」

「２０００ポイントだと！？うおおおお！！」

リョウＬＰ７２００→５２００

「ターンエンドです」

参謀
ＬＰ４８００
手札×３
フィールド
魔界知将ノーレージ　攻撃力１０００
伏せカード×１

おのれ…参謀のくせしてよくやりやがる…

「オレのターン！ドロー！オレは女神の予知夢の効果でドローした終わりの始まりを発動！デッキから3枚ドロー！
オーディンよ！魔界の知将を葬り去れ！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

これで３０００ダメージ…次のターンでダイレクトアタックを決めればオレの勝利だ！

「この瞬間、魔界知将ノーレージの効果発動。
手札の『魔界』と名のついたモンスター1体を守備表示で特殊召喚し、攻撃対象をそのモンスターにする！

私は魔界剣士を守備表示で特殊召喚！」

「なんだと！ならば魔界剣士に攻撃だ！」

魔界剣士は守備表示。ダメージこそ通らないが、それでも手札を削り、ジリ貧に追い込むことはできる。

「ターンエンド」

リョウ
ＬＰ５２００
手札×６
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
ヒミンビョルグ
伏せカード×１

「私のターンドロー。
私は魔法カード、魔界禁書を発動。自分の『魔界』と名のついたカードの効果によって相手にダメージを与える時、このターンのみ、その数値は倍になる！
魔界知将ノーレージの効果を発動！４０００ポイントのダメージ！」

「ぐあああ！！」

リョウＬＰ５２００→１２００

…４０００のリアルダメージ…とてつもなく苦しいな。

「この次のターンであなたのライフは０。いいかげんにあきらめた

らどうですか？」

「黙れ、参謀ごときが図に乗るな。貴様ごときにこのオレのプライドなど理解できはしない。ましてや自らの大切なものの前で膝を折るなど冗談じゃない！」

「そうですか。最終警告だったのですが、残念です。ターンエンド」

参謀
ＬＰ４８００
手札×２
フィールド
魔界知将ノーレージ　攻撃力１０００
伏せカード×１

「オレのターン！ドロー！！
スクルド…お前…」

「リョウ…それが、本当の私からのプレゼントだよ。
たった一枚だけど…」

「その１枚はこの窮地を覆すことができるほどに強い力だ。
礼を言うぞ。ありがとう」

「うん」

「魔法カード発動！！スクルドの救済！このカードは手札を１枚捨てることで発動する！相手に８００ポイントダメージを与える！そして、その後デッキの上から５番目のカードの種類を当てる。当たった場合、相手フィールド上のカードの効果をすべて無効にしてゲ

ームから除外する！ただし、外れた場合、オレのライフは０になる！オレが宣言するのは…モンスターカードだ！！」

スクルドがオレを敗北に導くことなどないはずだ。
当然結果は…

「モ…モンスターカード…そんな、わ、私のフィールドが…私の知将が…
う…うわあああああああああ！！」

「行くぞ！極神聖帝オーディンでダイレクトアタック！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「ぎゃあああああああああ」

参謀ＬＰ４０００→０

このデュエルは闇のゲーム…敗者は魂を闇に食われる。

「た、助けてくれえぇぇぇぇ！！！」

そういった時にはもう遅く、闇にのまれてしまった。

「……スクルド。帰ろうか」

「…うん」

こうしてオレ達は寮に戻った。
魔界軍…奴らが復活した影響はおそらく…
いや、考えても仕方がない。どうあれいずれ直面するのだから。

第３３話　襲撃者（後書き）

いろいろ伏線を張ってしまいました。全部回収できるかわかりません。ごめんなさい。

第３４話　模擬戦という名のワンサイドゲーム（前書き）

リアルファイト回です。本編には直接の関係はありません。

第３４話　模擬戦という名のワンサイドゲーム

リョウサイド

今は先日襲撃してきた魔界軍について話をしている。

「…というわけだ」

「魔界軍だと！？確か我が数千年前に１度潰したはずだ！」

「だが、復活した。理由も大体見当が付いている」

「成程。アレか」

「まだ推測だがな。だが、ぞれが本当なら、いつも通りにはいかん。場合によっては、オレもアレを使う必要がある」

「アレを出すのか！？しかしそれでは…」

「スクルドには悪いと思っているがな。
もっとも、スクルドはそんなこと微塵にも思ってないようだがな」

「もちろん♪それにアレもかっこいいと思うよ」

アレがかっこいい…ね。まあ、この姿よりかはランクアップするか？

「わたしも神の鏡を使って調べてみたが、何も映らない。
やはりリョウのアレも本気で考えておくべきだろう」

「ところでさ、アレって何？」

ああ、ロキは見たことがなかったな。

「その時が来るまでは知らなくていい。
だが、これだけは言っておく。今のリョウとは比べ物にならないほど強い、と」

もっとも、どんなに戦力を上げても究極神を倒すことはできないがな。一捻りされておしまいだ。
究極神と戦う機会は無いけど。

「しかし、デッキにもいくつか問題がある。まずは無駄が多い。
究極神を召喚するにあたり、その『無駄』はどうにかしなければならない」

「その無駄って何さ？」

「それを探しているんだ」

そう。『無駄』があるのはわかってる。だが、その『無駄』がなんなのかが理解できないのだ。

「まあ、デッキについてはこのぐらいでいいだろう」

「だが、アレを使えば三極神は弱体化する。それでもいいのか？」

「弱体化といってもそんな大した問題ではない。大丈夫だ」

「そうか。ならいい」

フッ…

!!?これは…

「結界!?」

「しかし、なぜ?」

「……おそらく、あれだろう」

「……あれか。また迷惑な」

「スターライト・ブレイカー!!」

「…我が止めて来よう」

「オレも行こう。トール1人にやらせるとこの学園が吹き飛びそうだ」

~~1分後~~

「こんな場所で何をしている…我が鉄鎚の裁きを受けたいのか?」

「トール、違うだろう」

「ウソッ!?結界張ったのに!」

「あの程度で結界か。笑わせる」

「なっ！？」

「む、お前たちはハラオウンたちから聞いていた…」

見たことのないピンクの髪の毛の騎士がいた。いや、現れた。

…訂正だ。以前、並行世界で見たことがあったな。名前は確か…シグナム。

「貴様は何者だ？」

「トール、オレが説明してやる。
時空管理局特別捜査官シグナムだ」

「なぜ私のことを！？」

「神の鏡を使えば楽な話だ。
あらゆるものの居場所、その人物の過去、未来全てを見ることができる」

だが、神の鏡の使い方はこれだけではない。その人物と話したり、物資の受け渡しもできる。

「ところでお前たちはできるようだな。
私と模擬戦を…」

「我かリョウのことか？やめておけ。死ぬぞ。我らは非殺傷設定などという生ぬるいものは持ち合わせていない」

「いや、オレはあるぞ。…ディスクだが。前のやつから奪った」

だいぶ前に襲ってきた管理局院のディスクを保管しておいた。
さりげなく便利だ。

「なら模擬戦をしよう」

「いいだろう。だが、手加減はしないぞ」

「それでいい」

「さてと、どうするかな」

そうつぶやくと、シグナムはいきなり切りかかってきた。
それを素手でつかんで止める。そしてそのまま押し返す。

「なっ!?」

シグナムは驚きの声を上げる。当然だ。ハラオウンと同じぐらいの
実力を持つはずなのに、その剣がいとも簡単に止められたのだから。

「トール、ミョルニルを貸せ」

「了解した」

ミョルニルを投げて渡してくる。
自分の得物ではないから、あまりしっくりこない。

「くらえ!サンダーパイル!!」

大威力の鉄鎚を振りかざす。その衝撃波がシグナムを襲う。

「ううっ！！…ハァッ！」

シグナムはかろうじて衝撃波を四散させた。

「これはどうかな！？」

今度はミョルニルで殴りかかる。

「ハハハハハ！これを受け止めるとはな！」

「クッ…うわあああああ！」

当然受け止めきれるわけがなく、直撃とはいかないが、ヒットする。

「非殺傷ではないからな。ただでは済まないはず…大丈夫か？」

「ハアアアアッ！」

「！！」

しまったな…

「チイイッ…」

直撃を受ける前に瞬間移動する。

直撃を受けても何ともないが、この程度の攻撃をくらえば、トールに笑われる。

「……今のは焦ったぞ。だが残念だったな」

「な、なに!?」

「せっかくだ。とどめは、戦いの最中に仕込んでおいたこいつで刺してやる。
レベル４の極星霊リョースアールヴと、極星將テュールに、レベル２の極星天ヴァルキュリアをチューニング!北辰の空にありき、全知全能を司る王よ!今こそ、星界の神々を束ねその威光を示せ!シンクロ召喚!天地神明を統べよ!最高神、極神聖帝オーディン!」

現れたのは、デュエルアカデミアの何倍もの身長のある老人。
始めてみるシグナムは当然驚きを隠すことなどできない。

「極神聖帝オーディンの効果発動!インフルエンス・オブ・ルーン!」

オーディンが手に持っているグングニルを振りかざす。すると、その先端が光った。

「クッ…紫電一閃　!」

シグナムは、自分の持つ強力な魔法でオーディンに攻撃を仕掛ける。
が、

「なに!?届かない!どういうことだ!」

「インフルエンス・オブ・ルーン。それは、オーディンの魔法と罠の効果への耐性。よってオーディンに魔法は通じない」

魔導師にとっては絶望的な状況だ。自分の得意な戦い方が、真正面から通じないのだ。

「極神聖帝オーディンの攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

オーディンがグングニルを天にかざす。
その直後、巨大な雷がシグナムに直撃する。

「うわあああああ！」

シグナムが気絶した。
非殺傷のディスクだから、多分大丈夫だろう。

「ではな。オレ達は戻らせてもらう」

しかし、バトルマニアか。仲間たちは大変だろうな。
まあ、オレ達の中にもオレを含めてバトルマニアが2人いるが。

第３４話　模擬戦という名のワンサイドゲーム（後書き）

なんか微妙に短くなってしまいました。
やっぱりデュエルの方が長く書けるかなぁ…

第３５話　最後のセブンスターズ（前書き）

ＶＳアムナエルです。デッキタイプのこともあるのでグダグダになってしまいました。

第35話　最後のセブンスターズ

リョウサイド

……神が、星界の三極神がうずいている。不吉の前兆か。
だが、究極神が反応していないところを見れば、そこまで強力な力は持っていないようだな。

「リョウ…」

「分かっている。三極神からの知らせを受けたばかりだ」

「どうやら7人目が現れたみたいだね。アハハハハ」

ロキも分かっていたか。
しかし、この感じ…錬金術師か。

「しかし目的はリョウではないようだな」

「やはり他の鍵を持つ者のところへ行ったか」

相手は錬金術師。人間にしてはかなりレベルが高い術者だ。
おそらく他の者たちでは勝つことはできない。

「だが、時間のたたないうちににお前のところに来るぞ」

「そんなことは分かっている。相手のデッキ内容を把握しているのだったら、アンチデッキで戦ったほうがいいだろう」

「それはそうだが、それはお前が一番嫌う戦術ではないか」

「今回は仕方がない、負けて余計なものを開放させても面倒なだけだ」

「それは分かっているが…しかしどちらにせよ解放されるのは知っているはずだ」

「知っている。だが、余計な力を与えようとは思わない」

負けても勝っても復活することは承知している。だが、負ければその分のエネルギーが幻魔に与えられるのも分かっている。
ならば多少我慢してでも、アンチデッキで戦い、勝ったほうがいい。
幻魔の力は侮れない。三幻神に匹敵するほどの力…おそらくは三極神と同等、いや、それ以上と考えていい。

「どうやら、お前だけになったようだな」

「ああ。今の叫び声…ここから４００m。そして叫び声は万丈目。すでに天上院は負けていたか」

しかし、あのデッキは除外デッキ。
たとえアンチデッキでも負ける可能性はある。

「ではな。もうオレは行くぞ」

「気をつけろ。相手は人間の中ではかなりレベルが高い。下手をすれば上級天使と同等かもしれん」

…上級天使と同等…人間の中でそれほどの実力…

しかし、実力者であってもデッキの内容が駄目ではその実力も発揮できはしない。

「貴様が最後のセブンスターズか」

「そうだ」

「ならば何も話すことなどない。行くぞ！」

「「デュエル」」

「先攻は私だ。ドロー。
カードを1枚伏せる。さらに、異次元の戦士を召喚する！
ターンエンドだ」

アムナエル
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
異次元の戦士　攻撃力１２００
伏せカード×１

「オレのターン！ドロー！
オレはカードを3枚伏せる！さらに、モンスターをセットする。
ターンエンド」

リョウ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド

セットモンスター×１
伏せカード×３

「私のターン！私は伏せカードを発動！マクロコスモス！このカードがフィールド上に表側表示で存在している限り、墓地へ送られるカードは除外される！そしてこのカードの発動時にデッキから原子太陽ヘリオスを特殊召喚できる！来い、ヘリオス！」

ヘリオスか…あのモンスターは除外されているモンスターの数×１００ポイント攻守がアップするモンスター…。だが！

「永続トラップ発動。王宮の鉄壁！このカードが表側表示で存在する限り、カードは除外できない」

「なに！？だが、ヘリオスは召喚できる！
そして原子太陽ヘリオスを生贄にヘリオス・デュオ・メギストスを特殊召喚！
異次元の戦士で、伏せモンスターを攻撃！」

「伏せモンスターはクリッターだ。よってデッキから極星獣タングリスニを手札に加える！」

「ターンエンド」

マクロコスモス…アレはこの世界では発動条件があったはず…
だが、そんな些細なことはどうでもいい。現に神がこの世界に介入しているのだ。何が起きても不思議ではない。

アムナエル
ＬＰ４０００

手札×４
フィールド
異次元の戦士　攻撃力１２００
ヘリオス・デュオ・メギストス　守備力０
マクロコスモス

「オレのターン！
オレは神の桎梏グレイプニルを発動。デッキから『極星』と名のついたモンスターカードを１枚手札に加える。オレは極星天ヴァルキュリアを手札に加える。
さらに伏せカード発動！ハリケーン！フィールドの魔法と罠をすべて手札に戻す！
そして極星天ヴァルキュリア召喚！相手フィールドにモンスターが存在し、自分のフィールドにこのカード以外のカードがない時、手札の『極星』モンスター２体をゲームから除外することで、エインヘリアル・トークン２体を特殊召喚！
レベル４のエインヘリアル・トークン２体に、レベル２の極星天ヴァルキュリアをチューニング！」

「シンクロ召喚か」

「それを知っているということなら説明する必要はないな？先生」

「なっ！」

動揺…やはり大徳寺だったか。ここは介入しても変わらないのだな。

「ククククク…北辰の空にありき、全知全能を司る王よ！今こそ星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚！天地神明を統べよ！最高神、極神聖帝オーディン！」

極神聖帝オーディンが降臨した今、アムナエルにはなすすべなどないはず…
だが、あの余裕は何だ？
……まあ攻撃すればわかることだ。仮にオーディンが破壊されたところで、エンドフェイズに再び光臨する。

「極神聖帝オーディンよ、目障りな戦士を葬り去れ！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「ぐううううう！」

アムナエルＬＰ４０００→１２００

「（まずい…たったの一撃で一気にライフが減ってしまった…私の時間は残り少ない。早くしなければ）」

「カードを1枚伏せターンエンドだ」

リョウ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
伏せカード×１

「私のターン！ドロー！」

「悪いがこのタイミングで永続トラップを発動する。王宮の鉄壁！」

「クッ…私はヘリオス・デュオ・メギストスを生贄にヘリオス・トリス・メギストスを守備表示で特殊召喚する！
……ターンエンドだ」

アムナエル
ＬＰ１２００
手札×５
フィールド
ヘリオス・トリス・メギストス　守備力０

「オレのターン！
極神聖帝オーディンでヘリオス・トリス・メギストスを攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

オーディンの槍に何の抵抗もせずヘリオス・トリス・メギストスは破壊された。
……思い出した！あのカードは破壊しても何度でも攻撃力と守備力を上昇させ復活するモンスター！そしてアムナエルのは戦闘だけでなく効果破壊にも対応している！

「クッ…ターンエンドだ」

「エンドフェイズにヘリオス・トリス・メギストスの効果発動！攻撃力と守備力を５００ポイント上昇させ特殊召喚する！」

リョウ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００

王宮の鉄壁

ヘリオス・トリス・メギストス　攻守０→５００

「私のターン！ドロー！
私は速効魔法、トラップ・ブースターを発動！手札１枚をコストにし、手札のトラップカード１枚を発動する！私は永続トラップ、スピリット・バリアを発動！このカードが存在している限り、私のフィールドにモンスターがいる場合、戦闘ダメージを０にする！
ヘリオス・トリス・メギストスで極神聖帝オーディンを攻撃！フェニックス・プロミネンス！」

これではヘリオス・トリス・メギストスの攻撃力が上がってしまう…
アンチデッキとはいえ、何枚か除外妨害のカードを突っ込んだだけだ。
やはり完全なアンチデッキなど使えん。しかし、除外を妨害してもここまで喰らいついてくるか…

「そしてカードを１枚伏せ、私のターンのエンドフェイズにヘリオス・トリス・メギストスを復活！攻守が５００ポイントアップだ！」

アムナエル
ＬＰ１２００
手札×３
フィールド
ヘリオス・トリス・メギストス　攻撃力１０００
スピリット・バリア
伏せカード×１

ク…やはり攻撃力は直前の攻撃力に５００ポイントを足した数値か…

「オレのターン！…よし！
オレは極星獣グルファクシを召喚！」

「トラップ発動！奈落の落とし穴！除外はできないが破壊はできる！」

奈落の落とし穴…あんな強力罠を…

「貴様…ターンエンド」

リョウ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
王宮の鉄壁

「私のターン！行け！ヘリオス・トリス・メギストス！極神聖帝オーディンを攻撃！
そしてカードを1枚伏せエンドフェイズ、ヘリオス・トリス・メギストスの効果により攻守を５００ポイントアップし特殊召喚する！」

アムナエル
ＬＰ１２００
手札×３
フィールド
ヘリオス・トリス・メギストス　攻撃力１５００
スピリット・バリア
伏せカード×１

「オレのターン！ドロー！
オレは極星獣タングリスニを召喚して、ヘリオス・トリス・メギストスに自爆特攻を行う！」

リョウＬＰ４０００→３７００

「そしてタングリスニの効果発動！極星獣トークン２体を特殊召喚する！
さらにメインフェイズ２に移行！死者蘇生を発動し、極星獣グルファクシを特殊召喚！
レベル３の極星獣トークン２体と、レベル４の極星獣グルファクシをチューニング！
星界の扉が開くとき、古に戦神（いくさがみ）がその魔槌を振り上げん！大地を揺るがし、轟く雷鳴と共に現れよ！シンクロ召喚！光臨せよ！極神皇トール！
…これでオレのフィールドには高攻撃力を誇るモンスターが２体。
お前のヘリオス・トリス・メギストス１体では防ぎきることはできん！ターンエンド」

リョウ
ＬＰ３７００
手札×２
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇トール　攻撃力３５００
王宮の鉄壁

「私のターン！ドロー！私はモンスターをセット！
ヘリオス・トリス・メギストスで極神聖帝オーディンを攻撃！」

クッ…これでまた攻撃力が上がる…こんなもつれたデュエルいつまでもやってられん！

「ターンエンド」

アムナエル
ＬＰ１２００
手札×３
フィールド
ヘリオス・トリス・メギストス　攻撃力２０００
セットモンスター×１
スピリット・バリア
伏せカード×１

「オレのターン！ドロー！
オレは極神皇トールの効果を発動！エンドフェイズまで相手モンスターの効果を無効にしてその効果を吸収する！エフェクトアブソーバー！」

「なっ！私のヘリオスが…」

ヘリオス・トリス・メギストス　攻撃力２０００→０

「極神皇トールでセットモンスターを攻撃！サンダーパイル！」

セットモンスターは…マシュマロン…おのれ…

リョウＬＰ３７００→２７００

「カードを2枚伏せターンエンド。
宣言してやる。アムナエル。貴様の命はあと3ターンだ」

「どういうことだ！」

リョウ
ＬＰ２７００
手札×１
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇トール　攻撃力３５００
王宮の鉄壁
伏せカード×１

「見ればわかる」

「クッ…私のターンドロー！」

「この瞬間永続トラップ、ギャラルホルン発動！オレの3回目のエンドフェイズに『極神』と名のつくモンスターをすべてゲームから除外しその攻撃力分のダメージを与える！」

「なっ！？だ、だがトラップ発動、マクロコスモス！」

「意味は無いぞ」

「それはどうかな！？速効魔法、グランドクロス！フィールド上のモンスターをすべて破壊し、３００ポイントダメージを与える！」

リョウＬＰ２７００→２４００

「ほう。ずいぶん食らいついてくるな」

「当り前だ。私の悲願はもうすぐ果たされるのだ！ターンエンド」

「だが、オーディンとトールは復活する！」

「なんだと！？」

「そしてトールの効果により８００ポイントダメージを与え、オーディンの効果で１枚ドロー！」

アムナエル
ＬＰ４００
手札×３
フィールド
ヘリオス・トリス・メギストス　攻撃力２５００
マシュマロン　守備力５００
マクロコスモス

「オレのターン！ドロー！
オレは極星霊ドヴェルグ召喚！このカードが召喚に成功したターン、もう１体極星を召喚できる！オレは極星霊リョースアールヴを召喚し、その効果を発動。トールのレベル以下のモンスターを手札から特殊召喚する！いでよ、極星霊デックアールヴ！
そしてレベル１の極星霊ドヴェルグとレベル４の極星霊リョースアールヴに、レベル５の極星霊デックアールヴをチューニング！星界より生まれしきまぐれなる神よ！絶対の力を我らに示し世界を笑え！シンクロ召喚！極神皇ロキ！

オレは攻撃せずにターンを終了する。だが、ギャラルホルンのカウンターが1になる！」

リョウ
ＬＰ２４００
手札×３
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇トール　攻撃力３５００
極神皇ロキ　攻撃力３３００
王宮の鉄壁
ギャラルホルン
＋カウンター×１

やはり三極神も三幻神同様戦いの中で力を増していく。
アレをするためには強力な神力が必要…
暫く三極神デッキで戦ってきたからな。そろそろ十分な頃合いだろう。
ギャラルホルンを待つ必要もあるまい。

「私のターンドロー！…ヘリオスでロキを攻撃！
…ターンエンドだ」

アムナエル
ＬＰ４００
手札×４
フィールド
ヘリオス・トリス・メギストス　攻撃力３０００
マシュマロン　守備力５００
マクロコスモス

「オレのターン！
オレは極神皇トールの効果を発動する！相手モンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にし、その効果を得る！
マシュマロンの効果を奪う！エフェクト・アブソーバー！
そして極神皇トールでマシュマロンを攻撃！サンダーパイル！
極神皇ロキでヘリオス・トリス・メギストスを攻撃！ヴァニティー・バレット！
とどめだ！極神聖帝オーディンでダイレクトアタック！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

アムナエルＬＰ４００→－３６００

「……ク…私の悲願が…」

「とりあえず、こいつは渡してもらう」

アムナエルの持っていた魔導書を奪い、ページを開ける。
すると、光がいくつか飛んで行った。
これで天上院と万丈目も戻っているだろう。

「おい、アムナエル…？」

振り向いたときにはすでに姿がなかった。
猫が走っていくのが見えたが…成程、そういうことか。

「戻ったぞ。さすがに王宮の鉄壁1枚で積むとは思っていなかったな。
それよりも、三極神が頃合いだ」

「そうか。これで準備はできたな。後はアレの覚醒を待つだけ…」

ついにか。何もなければいいがな。

第３５話　最後のセブンスターズ（後書き）

次回はいよいよ幻魔との戦いです。
ですがその前にオリカをまとめたいと思います。

オリカまとめ3（前書き）

学園祭編で出てきたオリカのまとめです。

オリカまとめ3

神の城
通常魔法カード
手札を2枚捨て発動する。デッキから『神』と名のついたカードを2枚手札に加える。

神の騎士
通常モンスター　レベル3　光属性　戦士族
攻撃力1800　守備力1700

神の剣
装備魔法
『神』と名のついたモンスターにのみ装備可能。
攻撃力を300ポイントアップする。

神の盾
装備魔法
神の剣を装備しているモンスターにのみ装備可能。
戦闘では破壊されず、対象を取らない魔法・罠・モンスター効果を受けない。

神の戦士
効果モンスター　光属性　戦士族
攻撃力1800　守備力0
このカードの召喚に成功した時、デッキから『神』と名のついたカードを1枚手札に加える。

神軍の司令官

効果モンスター　レベル６　光属性　戦士族
攻撃力２５００　守備力２０００
このカードは通常召喚できない。自分のデッキからこのカードが手札に加えられた時、自分フィールド上のモンスター１体を破壊した場合に特殊召喚できる。このカードの特殊召喚に成功したターン、自分はバトルフェイズを行うことはできない。このカードが特殊召喚に成功した時、デッキからカードを１枚ドローし、そのカードの種類によって以下の効果を得る
●魔法カード：このカードは対象を取る魔法カードの効果を受けない。手札のカードを１枚捨てることで、魔法カードの発動と効果を無効にし破壊する。
●罠カード：このカードは対象を取る罠カードの効果を受けない。自分の墓地のカードを１枚除外することで、罠カードの発動と効果を無効にし破壊する。
●モンスター：このカードは対象を取るモンスターの効果を受けない。デッキの１番上のカードを１枚墓地へ送ることで、モンスター効果の発動と効果を無効にし破壊する。

神の将軍ジェネラル
効果モンスター　レベル８　神属性　戦士族
攻撃力３０００　守備力２５００
このカードの召喚に成功した時、できからカードを２枚ドローする。ドローしたカードの種類によって以下の効果を得る。
●魔法カード：このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了まで魔法・罠カードを発動できない。
●罠カード：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、バトルフェイズ中に相手が発動したモンスターの効果を無効にする。
●モンスターカード：１ターンに１度、相手モンスター１体の効果をエンドフェイズまで無効にできる。

神軍の元帥　ゴッド・オブ・マーシャル
効果モンスター　レベル１０　神属性　天使族
攻撃力４０００　守備力４０００
このカードは通常召喚できない。自分の墓地の『神』と名のついたモンスター3体をゲームから除外し、手札を5枚捨てた場合のみ特殊召喚できる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンで相手が発動したカードの効果を無効にする。相手ドローフェイズに1度、カードの種類を宣言する。宣言した種類の相手のカードの効果はこのターン中無効になる。

ライフ・エクスプロージョン
永続魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、コントローラーが受けるダメージを半分にする。このカードのコントローラーがダメージを受けた時、そのダメージ1ポイントにつき1個このカードにエクスプロージョン・カウンターを置く。
このカードのエクスプロージョン・カウンターをすべて取り除くことで、自分のデッキまたはエクストラデッキからモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。この効果で特殊召喚するモンスターは正規の召喚条件で特殊召喚した扱いになる。取り除いたカウンターの数より特殊召喚したモンスターの攻撃力が低かった場合、その数値分だけライフを回復する。この効果の処理後、このカードを破壊する。

デストラクション・ガード
カウンタートラップ
カードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし、フィールド上のカードを1枚破壊する。

反逆のシンクロ
通常魔法
自分のエクストラデッキからモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを正規の召喚扱いとして相手のフィールド上に特殊召喚する。

オーバーライフ・リカバリー
通常魔法
自分フィールド上にモンスターが存在しない時のみ発動できる。手札をすべて捨て、1枚につき自分のライフポイントを2000ポイント回復する。

オーバーゲイン
通常罠
相手の手札を1枚ランダムに選択し、その種類を当てる。当たった場合、そのカードをゲームから除外し、エクストラデッキからモンスター1体を正規の召喚扱いで特殊召喚する。外れた場合、自分の墓地のカードをすべて除外する。このカードの効果処理後、自分のライフを半分にする。

アビリティ・ブレイカー
通常魔法
デッキからカードを1枚ドローする。
墓地に存在するこのカードをデッキに戻すことで、このターンの相手の魔法・罠・モンスター効果を無効にする。

ダブル・アサルト
通常魔法
自分フィールド上に存在するレベル4以下のモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターはこのターン2回攻撃ができる。

ダメージステップ時に墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで、この戦闘で発生するダメージは倍になる。

堕天使の嘆き
通常魔法
手札の『堕天使』と名のついたモンスター1体を捨てて発動する。捨てたモンスターと同名のモンスター1体を自分のデッキから召喚条件を無視して特殊召喚する。

堕天使の欲望
通常魔法
手札の『堕天使』と名のついたモンスター1体を捨てて発動する。自分の墓地に存在する『堕天使』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

天使の裁き
通常魔法
このカードはトラップカードとして扱うことができる。自分フィールド上のモンスター2体を生贄にして発動する。相手のモンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える。このカードが相手のカードの効果によって無効化された時、自分のライフを５０００にする。

魔界兵
効果モンスター　闇属性　悪魔族
攻撃力０　守備力０
自分のスタンバイフェイズにこのカードが表側表示で存在する時、手札を1枚捨てて発動する。自分のデッキから『魔界』と名のついたカード1枚を手札に加え、このカードを破壊する。

女神の予知夢
通常魔法
自分のデッキの上から3番目のカードを互いに確認する。この時デッキはシャッフルしない。3ターン後の自分のドローフェイズにドローしたカードを確認し、そのカードだった場合、魔法・罠カードの場合発動条件とコストを無視して発動できる。モンスターカードだった場合、召喚条件を無視して正規の召喚として特殊召喚する。

神の門番ヘイムダル
通常モンスター　レベル４　光属性　天使族
攻撃力１８００　守備力１２００

魔界諜報ヘルズ
効果モンスター　レベル４　闇属性　悪魔族
攻撃力０　守備力０
このカードの召喚に成功した時、相手のフィールド上にセットされているカードを全て確認する。このカードを生贄に捧げることで、相手の手札を1枚選択し、その種類を当てる。当たった場合、相手フィールド上にセットされているカード1枚のコントロールを得る。

ヒミンビョルグ
永続魔法
このカードがフィールド上に表側表示で存在している限り、『神の門番ヘイムダル』の攻撃力が２００ポイントアップする。このカードの効果以外で自分フィールド上に存在する『神の門番ヘイムダル』がフィールドを離れた時、デッキからチューナーモンスター1体とチューナー以外のモンスター2体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは生贄にはできない。このカードがフィールドを離れたとき、デッキ・手札・墓地・フィールドに存在する『神の門番ヘイムダル』をすべてゲームから除外する。

魔界兵長レイズ
効果モンスター　レベル６　闇属性　悪魔族
攻撃力２８００　守備力２８００
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する攻撃力０の『魔界』と名のついたモンスター３体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚できる。このカードの特殊召喚時、相手は罠カードを発動できない。１ターンに１度、手札・デッキ・墓地・除外ゾーンの『魔界兵』または『魔界諜報ヘルズ』１体を特殊召喚できる。

極星神将バルドル
効果モンスター　レベル３　光属性　天使族
攻撃力１０００　守備力５００
このカードは『極星天』『極星霊』『極星獣』チューナーとして扱うことができる。
このカードが『極神』と名のついたモンスターのシンクロ素材になった場合、そのシンクロモンスター１体は魔法・罠・モンスター効果を受けない。

スリュム
効果モンスター　レベル３　光属性　天使族
攻撃力１５００　守備力１５００
通常召喚されたこのカードがシンクロ素材になった場合、デッキからカードを２枚ドローすることができる。

ウァズヴァール
効果モンスター　レベル４　闇属性　天使族
攻撃力４００　守備力５００
通常召喚されたこのカードは戦闘と効果によって破壊されない。

魔界知将ノーレージ
効果モンスター　レベル１０　闇属性　悪魔族
攻撃力１０００　守備力４０００
このカードは通常召喚できない。自分の手札２枚と、自分フィールド上に存在する『魔界』と名のついたモンスター１体を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。このカードの特殊召喚成功時に相手モンスター１体を選択する。そのモンスターの攻撃力によって以下の効果を得る。
●１～９９９：１ターンに１度、相手のフィールド上に存在するカードを１枚破壊することができる。
●１０００～１９９９：１ターンに１度、相手モンスター１体を選択する。選択したモンスターの攻撃力分ライフを回復する。この効果を発動するターンこのカードは攻撃できない。
●２０００～２９９９；１ターンに１度、デッキからカードを１枚ドローできる。
●３０００～３９９９；１ターンに１度、自分のメインフェイズに発動できる。エンドフェイズ終了時まで、相手のカードの効果を無効にする。
●４０００以上；１ターンに１度、このカードが攻撃表示の場合、相手に２０００ポイントのダメージを与えることができる。また、このカードが攻撃対象になった時、手札の『魔界』と名のついたモンスター１体を特殊召喚し、そのモンスターに攻撃対象を変更することができる。

魔界剣士
通常モンスター　レベル４　闇属性　悪魔族
攻撃力０　守備力２４００

魔界禁書
通常魔法

このターン、『魔界』と名のついたカードの効果によって発生するダメージは2倍になる。

スクルドの救済
通常魔法
手札を1枚捨てて発動する。相手に８００ポイントのダメージを与え、デッキの上から5番目のカードの種類を当てる。当たった場合、相手フィールド上のカードの効果をすべて無効にしてゲームから除外する。外れた場合、自分のライフは0になる。この効果で除外されたカードの効果はこのデュエル中使用することはできない。

オリカまとめ3（後書き）

こんな感じです。
次回は短いと思います。
プロローグ並みに短いと思います。

第３６話　ディスペア降臨！（前書き）

リョウ達が言ってたアレが出ます。
挿入ＢＧＭ　アポリアのテーマ

第３６話　ディスペア降臨！

リョウサイド

……そろそろかな？さっき万丈目の叫び声が聞こえたしな。

「行くぞ…」

「ああ」

「わかっている」

「準備はできている」

ついにこの時が来た…三幻魔と戦う時が。

場所に着くと、すでにそこにはリリカル組と原作組がそろっていた。

くぼみの中央には何かの台座が開いて、３枚のカードが浮いている。

「アレが３幻魔か。ずいぶんと強力な力だな。人間界にここまで強大な力を持つカードがあるとはな。こんな力を持つカードは人間界には三幻神しかなかったと思うがな」

三幻魔に近づく。次の瞬間…

「それをお前たちに渡すわけにはいかんな」

空からロボットが降ってきた。なかには老人がいる。

そんなことを確認しているうちに三幻魔は取られてしまった。

「…影丸理事長！」

校長はアレが誰か知っているらしいな。ああ、オレ達も知ってるか。

と、一人でそんなことを考えてるうちに話が進んでいった。

「三幻魔復活の儀式を行う」

「ならばこのカイザー丸藤亮が相手だ！」

「いや、ここは万丈目サンダーが！」

そんなにあれと戦いたいのか？

「駄目だ。私の相手は貴様だ。遊城十代！精霊とのかかわりを深く持つお前こそが適任なのだ」

……

「「デュエル！」」

「エリクシーラーでとどめだ！」

「ぬおおおおお！！」

……

三幻魔が封印されようとする。出番は無かったか。

「それを封印させるわけにはいかんな」

！！！！！アレは！

「久しぶりだな。雷神トール」

「貴様は…魔界将軍バルゲルト…」

「悪いが三幻魔はもらう」

そういうが早いか、三幻魔は光を放ちバルゲルトのデッキに入った。

「三幻魔よ！その真の力を開放せよ！」

三幻魔が再度強い輝きを放つ。

「さあ、闇のゲームだ。最高神」

「貴様がオレの相手だと？笑わせる」

「まて、リョウ！三幻魔から異常なまでの邪気を感じる！今のままでは…」

「……確かにそうだな。事情が変わった。行くぞ！」

三極神を取りだす。

「神力を秘めた聖なるカードよ！わが身に宿り、絶対の力を与えよ！」

三極神の光…神力がオレの中に入ってくる。やはり何度もデュエル

で使っただけあって強い力だ。
究極神によって創られたオレでは究極神の力を吸収することはできない。

「な…なんだその姿は!!神帝リョウ!」

「……我が名はディスペア!!」

その瞬間、ディスペアから強大な力があふれた。

第３６話　ディスペア降臨！（後書き）

次回はディスペアの設定です

ディスペア設定　（前書き）

設定です。ここに書き加えた場合は、最新話のあとがきに更新したことを報告します。※現在の最終更新日２０１１年１月５日

ディスペア設定

名前　神皇帝ディスペア

年齢　？

性別　無

誕生日　？

身長　２ｍ

体重　５０キロ

性格　好戦的

デッキは究極神。見た目はアポリアの額にある緑の結晶を取り除き、髪の毛の色を黒にしたもの。服は変身前と同じヘルカイザー仕様。１人称は『我』。リアルファイトはチート能力持ち転生者が束になっても勝てない。リアルファイトにせよデュエルにせよとにかく強い。スクルドは元の状態よりもこっちの方が好みらしい。頭の後ろにある輪は取り除かれている。一度この状態になると、余程のことがない限り元には戻れない。

オリジナルディスクは前に使用してたものに、オートシャッフルとオートサーチ、リアル化の機能が付いている。機械ではなく神力によって創られたディスク。

イメージＣＶはアポリア（プラシドでもある）

６７話より、頭の後ろにある輪が現れ、その輪が唯一究極神を召喚することのできる固有ディスクになった。このディスクは遊戯王５

D，s第１４１話のアポリアのディスクの緑色のエネルギー（？）部分が黒い神力になり、ディスクは右腕に装備する。装備すると言っても、アポリアのようにディスクはすぐそばに浮いている。さらにデッキをセットする場所がディスクの左側にあり、手札の置き場もある。当然オートシャッフル＆オートサーチ。

※服装の色は後に胸の結晶を左が青、右が赤、真中が白金で、それ以外の服の場所がすべて黒になります。（服のデザイン自体はアポリアと同じ）

ディスペア設定　（後書き）

かなりめちゃくちゃな強さですね。（設定が）

第３７話　三幻魔ｖｓ究極神　前編（前書き）

三幻魔は魔改造されていませんが…

第３７話　三幻魔ｖｓ究極神　前編

「……我が名はディスペア。神皇帝ディスペア」

「何がどうなったんだ？リョウが変身しちまった…」

「へ、へえ…これが『アレ』って言っていたやつか。すごいね」

「……もう逃げられんぞ。魔界将軍」

「クッ…ならば貴様を葬ってから脱出するとしよう」

「「デュエル」」

「我のターン。
我はカードを２枚伏せてターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
伏せカード×２

「私のターン！私は罠カードを３枚伏せる！３枚の罠カードを墓地へ送り、降臨せよ！神炎皇ウリア！
ウリアの攻撃力は自分の墓地の罠カード１枚につき１０００ポイントアップする。よって攻撃力は３０００だ！さらにウリアの効果を発動！１ターンに１度、相手の伏せカード１枚を破壊できる！トラップ・ディストラクション！」

我の死者転生が…

「ウリアでダイレクトアタック！ハイパー・ブレイズ！」

「……トラップ発動。フリッグのリンゴ。我のフィールドにモンスターが存在しない時にダメージを受けた場合、その数値分回復し、回復した数値分の攻守を持つ『邪精トークン』１体を特殊召喚する。我が受けたダメージは３０００．よって３０００ポイント回復し、攻守３０００の『邪精トークン』を特殊召喚する」

ディスペアＬＰ４０００→１０００→４０００
邪精トークン　攻守０→３０００

「おのれ…破壊する方を間違えたか…ターンエンド」

バルゲルト
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
神炎皇ウリア　攻撃力３０００

「我のターン。
我は邪精トークンで神炎皇ウリアを攻撃」

ウリアと相打ちに持ち込む。

「サイバー・ヴァリーを召喚してターン終了」

ディスペア

ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
サイバー・ヴァリー　攻撃力０

「ちょ、ちょっとオーディン！リョウ…じゃなかった、ディスペアピンチじゃないか！」

「むう…」

「私のターン！ドロー！
私は手札の罠カード１枚を墓地へ送り、神炎皇ウリアを墓地から特殊召喚！
さらに幻銃士を召喚！このカードの召喚または反転召喚に成功した時、自分フィールド上のモンスターの数まで銃士トークンを特殊召喚する！よって銃士トークンを２体特殊召喚！さらに３体の悪魔族モンスターを生贄に幻魔皇ラビエルを特殊召喚！
行くぞ！ウリアでサイバー・ヴァリーを攻撃！ハイパー・ブレイズ！」

「サイバー・ヴァリーの効果発動。このカードを除外し、バトルフェイズを終了。カードを１枚ドローする」

「ターンエンドだ」

バルゲルト
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
幻魔皇ラビエル　攻撃力４０００

神炎皇ウリア　攻撃力４０００

「我のターン！我はクラスター・ペンデュラムを召喚する！この効果によって相手のモンスターの数までペンデュラム・トークンを特殊召喚できる。２体のペンデュラムを特殊召喚！３体のモンスターとライフ半分を生贄に降臨せよ！究極神オシリス！
攻撃力・守備力は手札×２０００ポイント！よって８０００だ！」

「幻魔皇ラビエルの効果により幻魔トークンを守備表示で特殊召喚！」

オシリスの効果で攻守が２０００ポイント下がる。
あんなザコが下がったところで特に意味は無いが…

「フハハハハハ！究極神オシリスで幻魔皇ラビエルを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！！」

「デッキに存在する魔法カード、幻魔の加護の効果発動！幻魔が戦闘を行う時、戦闘ダメージを０にして、モンスターの破壊を無効にする！ただし、デッキからこのカードを発動した場合、相手はカードを１枚ドローできる」

「回避したか…我はカードを１枚伏せターン終了」

ディスペア
ＬＰ２０００
手札×４
フィールド
究極神オシリス　攻撃力６０００
伏せカード×１

「私のターン！強欲な壺を発動！２枚ドロー！
トライアングル・フォースを発動！このカードの発動に成功した時、デッキから同名カードを２枚まで発動できる！２枚発動！３枚の魔法カードを墓地へ送り降雷皇ハモンを特殊召喚！」

「究極神オシリスの効果発動。相手が召喚または特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力と守備力を２０００ポイントダウンする」

「わ、私のハモンが！！…ターンエンドだ」

バルゲルト
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
幻魔皇ラビエル　攻撃力４０００
降雷皇ハモン　攻撃力２０００
神炎皇ウリア　攻撃力４０００
幻魔トークン　守備力０

三幻魔を揃えたか…だが、その程度の攻撃力では究極神に勝つことなどできはしない。

「我のターン！ドロー。
我は究極神オシリスで降雷皇ハモンを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「デッキに存在するトラップカード、幻魔の咆哮を墓地に送り、効果発動！幻魔が攻撃対象になった時、エンドフェイズまでその幻魔に他の幻魔の攻撃力をプラスする！」

降雷皇ハモン　攻撃力２０００→１１０００

「！！！我の究極神オシリスの攻撃力と逆転しただと！？」

ディスペアＬＰ２０００→１０００

「クッ…究極神が戦闘で倒されるとは…これではエンドフェイズに復活できない…我はターンを終了する！」

ディスペア
ＬＰ１０００
手札×５
フィールド
無

「私のターン！とどめだ！攻撃力５０００の神炎皇ウリアでダイレクトアタック！ハイパー・ブレイズ！ハハハハハ！これで私の勝利だ！」

「そう簡単に我に勝てるとでも思っているのか？手札のバトルフェーダーを守備表示で特殊召喚する。そしてバトルフェイズを終了させる」

「幻魔の攻撃をかわしただと！？…くそっ、ターンエンド」

バルゲルト
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド

幻魔皇ラビエル　攻撃力４０００
降雷皇ハモン　攻撃力２０００
神炎皇ウリア　攻撃力５０００
幻魔トークン　守備力０

「オーディン！ディスペアは大丈夫なのかよ！！」

「ロキ、黙って見ておけ。我はディスペアを信じる。元がリョウなのだ。大丈夫だろう」

「トールの言うとおりだ。わたしもディスペアの実力は知らない。見ておくことしかできないのだ…」

「ディスペア…」

「我のターン！我は幻銃士を召喚する。こいつの効果により銃士トークンを１体特殊召喚する。３体のモンスターとライフ半分を生贄に捧げ降臨せよ、究極神オベリスク！
究極神オベリスクで神炎皇ウリアを攻撃！ゴッド・エクス・バースト！」

「ぐわあああああ…ううっ…ま、まさか究極神の一撃、ここまでとは…幻魔が盾になったというのに…」

バルゲルトＬＰ４０００→１０００

「我は死者転生を発動する。手札１枚を捨て、墓地に存在するオシリスの天空竜を手札に加える。
我のターンは終了だ」

ディスペア
ＬＰ５００
手札×２
フィールド
究極神オベリスク　攻撃力８０００

……幻魔の咆哮を発動しなかった…？デッキにはないのか？

「私のターン…手札の罠カード１枚を墓地へ送り、神炎皇ウリアを守備表示で特殊召喚！
さらに２体の幻魔を守備表示にしてターンエンド！」

幻魔を守備表示にした…つまりデッキから発動できるカードは無い。

バルゲルト
ＬＰ１０００
手札×２
フィールド
幻魔皇ラビエル　守備力４０００
降雷皇ハモン　守備力２０００
神炎皇ウリア　守備力０
幻魔トークン　守備力０

「我のターン！…（幻魔をいとも簡単に守備表示にした…対抗策がないのか？それとも…）
我は究極神オベリスクで幻魔トークンを攻撃する！ゴッド・エクス・バースト！」

幻魔トークンにはさすがに何も使わないか…
…本当に何も無いというのか？

「我はこれでターンを終了！」

ディスペア
ＬＰ５００
手札×３
フィールド
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターンドロー！
私は魔法カード、究極進化を発動！相手はカードを2枚ドローする。
ターンエンド」

バルゲルト
ＬＰ１０００
手札×２
フィールド
幻魔皇ラビエル　守備力４０００
降雷皇ハモン　守備力２０００
神炎皇ウリア　守備力０

「それだけか？」

「どうかな？後でわかる」

究極進化を確認する。だが、カードには確かにそれしか書かれてない。

「……我のターンドロー！！
我はクラスター・ペンデュラムを守備表示で召喚！効果発動！ペン

デュラム・トークン3体を特殊召喚する！3体のペンデュラム・トークンとライフ半分を生贄に捧げ、再度降臨せよ！究極神オシリス！」

ディスペアLP500→250

「我はターンを終了する！」

ディスペア
LP250
手札×4
フィールド
究極神オシリス　攻撃力8000
究極神オベリスク　攻撃力8000

「私のターン！私はフィールド魔法、失楽園を発動！このカードがフィールド上に存在する場合、1ターンに1度、自分フィールド上に『神炎皇ウリア』『降雷皇ハモン』『幻魔皇ラビエル』が存在する時、2枚ドローできる！よって2枚ドロー！カードを1枚伏せてターンエンド！」

バルゲルト
LP1000
手札×3
フィールド
幻魔皇ラビエル　守備力4000
降雷皇ハモン　守備力2000
神炎皇ウリア　守備力0
伏せカード×1

……奴はさっきから全然行動を起こさない…何もないのか？

「我のターン！我はクリッターを召喚！
そして究極神オベリスクの効果発動！クリッターとクラスター・ペンデュラムを生贄に捧げ、このターン相手モンスターすべてに攻撃できる！そして、クリッターの効果によりデッキからサイバー・ヴァリーを手札に加える！くらえ！ゴッド・ジェノサイド・エナジー！」

「ト、トラップ発動！聖なるバリアー ミラーフォース ー！」

「究極神オベリスクはトラップの効果の影響を受けない！
…オシリスはエンドフェイズにライフを半分にして特殊召喚される！」

「そ、そんな！！」

「よし、ディスペアが三幻魔を破壊したぞ！」

「これでディスペアの勝利は決まったね！」

「エンドフェイズ、究極神オシリスが復活！」

ディスペアＬＰ２５０→１２５

「この瞬間、墓地の究極進化と三幻魔を除外し、効果発動」

「！そのカードには相手は2枚ドローするとしか書かれてないはずだ」

「このカードの効果ではない。このターン戦闘によって破壊された三幻魔と墓地に存在するこの究極進化を除外することで、デッキから究極幻魔ー絶望の天帝ーを特殊召喚する」

ディスペア
ＬＰ１２５
手札×５
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１００００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

究極幻魔……だと？

第３７話　三幻魔ｖｓ究極神　前編（後書き）

次回、後編に続く。

三幻魔ｖｓ究極神　後編（前書き）

後編です。

三幻魔ｖｓ究極神　後編

「究極幻魔だと？」

空から三幻魔の面影が僅かに残っている三幻魔の翼を掛け合わせたような翼をもつ人型のモンスターが降りてくる。

「そうだ。これこそ我ら魔界軍が永い時をかけて見つけた究極の力！究極幻魔召喚時に自分の墓地の悪魔族と三幻魔以外のモンスター全てと魔法カードをすべて除外する！
究極幻魔はこのカードが効果の範囲内にある魔法・罠・モンスター効果を無効にし、戦闘によっては破壊されない。
さらに、このカードが存在する限り、自分への戦闘ダメージを０にする！
究極幻魔を生贄に捧げることはできない！そして究極幻魔の攻撃力は自分フィールド上にこのカード以外のモンスターが存在しない時のみアップする…」

究極幻魔－絶望の天帝－　攻撃力１３０００

「攻撃力１３０００…だが、我の究極神オシリスの効果は無効にされない！よって２０００ポイントダウン！」

「些細な問題だ。
ただし、幻魔の召喚に成功した次のターンはスキップされる。よってお前のターンだ」

バルゲルト

ＬＰ１０００
手札×３
フィールド
究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力１１０００

「我のターンドロー！究極神オベリスクを守備表示に変更。
究極神オシリスで究極幻魔を攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「究極幻魔の第２の能力を発動！神炎皇ウリアが自分の墓地に存在する時、自分の墓地のカードを１枚除外することで、このカードが戦闘を行うことによって発生する超過ダメージを０にする！私は墓地の幻銃士を除外！」

「ターン終了」

ディスペア
ＬＰ１２５
手札×６
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１２０００
究極神オベリスク　守備力８０００

「私のターン！この瞬間、究極幻魔の第３の能力を発動！
ドローしたカードを墓地へ送ることができる！私は今ドローした亜空間物質転送装置を墓地へ送る！究極幻魔の攻撃力は墓地の罠カード×１０００＋三幻魔の元々の攻撃力の合計！よって１２０００ポイントにアップする！
究極幻魔で究極神オベリスクを攻撃！アルティメット・エンド！！」

究極幻魔の拳から強大な力が放たれ、究極神オベリスクは倒された。

「クッ…我が究極神が…」

「私はこれでターンを終了します」

バルゲルト
ＬＰ１０００
手札×３
フィールド
究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力１２０００

「我のターン！我は究極神オシリスで究極幻魔を攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「私の墓地の亜空間物質転送装置を除外してダメージを０にする！」

「カードを１枚伏せ我のターンは終了する」

ディスペア
ＬＰ１２５
手札×６
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１２０００
伏せカード×１

「私のターン…クッ…ターンエンド」

バルゲルト
ＬＰ１０００

手札×４
フィールド
究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力１１０００

「我のターン！
我は伏せカードを発動！鳳凰神の羽根！手札を1枚捨て、墓地のオベリスクの巨神兵をデッキトップに戻す！
究極神オシリスで究極幻魔を攻撃！アルティメット・サンダーフォース」

「私は墓地の天罰を除外してダメージを０にする…」

なぜ守備表示にしなかった?そうすれば何も攻撃力を削る必要はなかったはず…

「我はこれでターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ１２５
手札×６
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１２０００

「私のターン！私はドローしたモンスターカード、ネクロ・ガードナーを墓地へ送る」

「だが、究極神はモンスターの効果の影響を一切受けない。そんなものではどうすることもできはしない！」

「そんなことは分かっている！ターンエンド！」

バルゲルト
ＬＰ１０００
手札×４
フィールド
究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力１１０００

「我のターン！我はモンスターをセットする！
究極神オシリスで究極幻魔を攻撃！」

「墓地のネクロ・ガードナーをゲームから除外してダメージを０にする」

…トラップでも、幻魔でもないモンスターを除外することで攻撃力減少を避けたか。

「我のターンは終了だ」

ディスペア
ＬＰ１２５
手札×６
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１２０００
セットモンスター×１

「私のターン！ドローしたカードは墓地に送らない！
私は究極幻魔でセットモンスターを攻撃！アルティメット・エンド！」

「セットモンスターはディープ・ダイバーだ。よってバトルフェイ

ズ終了時、デッキからモンスターカードを1枚選択し、デッキトップに置く。
我は幻銃士をデッキトップに置く！」

「私はこれでターンエンド」

バルゲルト
ＬＰ１０００
手札×５
フィールド
究極幻魔－絶望の天帝－　攻撃力１１０００

「我のターン！…我は魔法カード、ダークバーストを発動！自分の墓地から攻撃力１５００以下の闇属性モンスター1体を手札に加える！
我はクリッターを手札に加え、モンスターをセットする。
究極神オシリスで究極幻魔を攻撃！」

「クッ…私は墓地のリビングデッドの呼び声を除外してダメージを０にする…」

「ターン終了だ」

これで究極幻魔の攻撃力は１００００。バルゲルトが次のターン、罠を墓地に送ったとしてもその攻撃力は１１０００ポイント。究極神オシリスには届かない。…そして次のターン…ククククク…

ディスペア
ＬＰ１２５
手札×６

フィールド
究極神オシリス　攻撃力１２０００
セットモンスター×１

「私のターン！ドローした激流葬を墓地に送る！私は究極幻魔でセットモンスターを攻撃！アルティメット・エンド！」

「破壊されたクリッターの効果発動。デッキから攻撃力１５００以下のモンスター、バトルフェーダーを手札に加える！」

「私のターンは終了だ」

バルゲルト
ＬＰ１０００
手札×５
フィールド
究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力１１０００

「我のターン！我は究極神オシリスで究極幻魔を攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「墓地のトラップカード、激流葬を除外してダメージを０にする！」

「ではメインフェイズ２、我は幻銃士を召喚！幻銃士の効果で銃士トークン２体を特殊召喚する！３体の銃士とライフ半分を生贄に究極神オベリスクを特殊召喚！
我はこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ６３

手札×６
究極神オシリス　攻撃力１２０００
究極神オベリスク　守備力８０００

「私のターン！ドローしたカードは墓地へは送らない！（なぜもう一度究極神オベリスクを召喚したのかはわからん…だが、ディスペア…奴の目は明らかに攻撃を誘っている…攻撃はできない…）私は…ターンエンドだ」

ククククク…やはり攻撃してこなかったな…これでいい。

バルゲルト
ＬＰ１０００
手札×６
フィールド
究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力１００００

「我のターン！…フハハハハハ！我はトーチ・トークン2体を我のフィールドに特殊召喚し、トーチ・ゴーレムを貴様のフィールドに特殊召喚する！」

「な！トーチ・ゴーレムだと！これでは究極幻魔の攻撃力が…」

究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力１００００→０

「究極幻魔の攻撃力は、貴様のフィールドに究極幻魔1体のみが存在する時のみ上がる。トーチ・ゴーレムが召喚された今、究極幻魔の攻撃力は０だ！」

「す、すげえ…さすがリョウ…じゃなかった。ディスペア…」

「見事な戦術だな」
「これで逆転できるね！アハハハハ！！」

「我は究極神オシリスで、究極幻魔を攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「クッ…私は墓地のトラップカードを1枚除外しダメージを0にする…」

「まだだ！究極神オベリスクで、究極幻魔を攻撃！ゴッド・エクス・バースト！」

「トラップカードを除外してダメージを0にする！」

「我はこれでターンエンド！」

ディスペア
ＬＰ６３
手札×５
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１００００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「わ、私のターン！私は手札抹殺を発動！互いに手札をすべて捨て、捨てた枚数分ドローする！
私の墓地送られたトラップカードは3枚！トーチ・ゴーレムを守備表示にしてターンエンド」

バルゲルト
ＬＰ１０００

手札×5
フィールド
究極幻魔ー絶望の天帝ー　攻撃力0

「我のターン！…手札抹殺で墓地のカードを増やし、攻撃を防ぐつもりだったのだろうが、その手札抹殺は貴様を葬る究極の力を我が手に加えた」

「なに！？どういうことだ！」

「そのままの意味だ。我はクラスター・ペンデュラムを召喚！クラスター・ペンデュラムの効果により、ペンデュラム・トークン2体を特殊召喚する！
そして3体のペンデュラムと我がライフ半分を生贄に降臨せよ！究極神帝ラー！」

「こ、攻撃力…∞（むげんだい）…」

「究極神帝ラーで究極幻魔を攻撃！ゴッド・インフィニティー・フレア！」

「わ、私は究極幻魔の効果を…発動しない！！？？」

「究極神帝ラーの効果だ。究極神オシリスと究極神オベリスクが存在している場合、相手の効果は無効になる。
神の前に小細工など通用しない！我に立ちふさがったことを後悔するがいい！」

「う、うわあああああああああ！！！」

バルゲルトＬＰ１０００→－∞

「う…ぐ…ま、魔界神万歳！！…グハッ！！」

「やったーーーー！ディスペアが勝ったぞーーーー！！」

「さすが元リョウ。すごかったね」

「うむ。苦戦はしたがな」

「これは私が責任を持って封印しましょう。もう誰の手にも渡らないように…」

こうして三幻魔戦は終わりを告げた。

「ディスペア、やったね♪」

「スクルド…いいのか？このままで」

「こっちの方が私は好きだな♪」

「そうか」

～～～一週間後～～～

「我がカイザーとデュエル？」

「そうだ。カイザーは十代とディスペア。お前を選んだらしい」

「成程。ならば我は三極神を使っていいな？」

「だが、アレはお前が変身する時に…」

「弱体化はしている。が、あまり変わらないから我には何も問題ない」

「それならいいか」

カイザー…我を相手にどのくらいできるのか見せてもらおう。

三幻魔ｖｓ究極神　後編（後書き）

ときどきありますね。このいつ動くか分からないようなデュエルが。
完全にドロー運が勝負を分ける時もあります。アドバンテージで勝利することもあります。今回は、どちらも重要な回だったと思います。
最後にラーの効果を使わずに攻撃したのは周りに被害を出さないためです。あんな効果使ったら闇のゲームなので次元が壊れます。
ディスペアは究極神もですが、三極神も気に入ってます。究極神の方がより気に入ってますが。
作者としてもディスペアと同じかな…そしてロキのイラスト…どんまい。個人的にはいいと思ってますが。

あと、主人公組にもっとたくさんのデッキを使わせたいのですが、作者のバカ頭ではそこまでいいデッキが思い浮かびません。
なので、何かいいデッキがあったら、気軽に書いてください。
お願いします。

第３８話　ディスペアｖｓカイザー　三極神デッキ…？三極神デッキはどこへ行った

カイザーとディスペアのデュエルです。
作者も書いてるうちによくわからなくなってしまいました。
楽しんでいたたければ幸いです。

第３８話　ディスペアｖｓカイザー　三極神デッキ…？三極神デッキはどこへ行った？

「では、これより卒業デュエルを開始致します！」

「「「「「わあああああ！」」」」」

「それでは在校生代表、遊城十代君。
卒業生代表、丸藤亮君。デュエル場に上がってください」

「カイザー！今度こそ俺が勝つぜ！」

「フ…」

どうやら我がデュエルすることはデュエルアカデミアの者たちは知らないようだな。
…丸藤め。ここでサプライズをするとは、意外な一面があったものだ。
こちらは三極神デッキの最終調整をしておくとしよう。…む？三極神デッキがないな…どこへ行った？

ロキサイド

…まあいいよね。ディスペアは最近ずっと三極神を使ってたわけだし、少しぐらい違うデッキを使ってもらわないと面白くないからね。

「こんなことをして、後でディスペアに怒られるぞ」

「大丈夫だよ。さて、ディスペアは何のデッキ使うのかな？アハハハハハ！！」

「さあな。ディスペアのことだ。何をするかはスクルドぐらいしかわからんだろう」

「何でスクルドならわかるのさ？」

「…今までの時の中で、ディスペアと最も長く共にいたものはスクルドだ」

「へえ。そうだったんだ」

サイドアウト

しかたがない。今ここにあるのはこの３つか。
ならこれで行くとしよう。
…これでは高攻撃力モンスターが出てくれば瞬殺されてしまう。
少し改造しておくか。……これでいいだろう。

「トラップ発動！ファイナル・フュージョン！お互いの融合モンスターの攻撃力の合計分のダメージを互いのプレイヤーはうける！！」

カイザー＆十代　ＬＰ０

「「あはははははは！」」

引きわけか…

「では、ここでもう一人の対戦者に登場していただきます。

ディスペア君！」

「おい？ディスペアなんてやついたか？」

「さあ？でも、転校生ってこともあるぞ」

「転校生をカイザーが相手なんてないだろう」

「一体どんな奴なんだ？」

やはり知らない奴のほうが多いか。
当り前だな。まだこの姿になってからアカデミアの生徒とはあまり会ってない。
だがそんなことはどうでもいい。我に挑戦したものを叩き潰すのみ！

「カイザー丸藤。貴様を完膚なきまでに潰してやる」

「面白い！やってみろ」

「「デュエル！」」

「我の先攻！ドロー。我は幻銃士を召喚！
幻銃士の効果を発動し、銃士トークン1体を特殊召喚する！
さらに魔法カード、ナチュラル・チューンを発動。このカードは自分のフィールド上に存在する通常モンスター1体を選択し、そのモンスターをチューナーとして扱う。銃士トークン、いや、トークンはすべて通常モンスター扱い。よって銃士トークンをチューナーとして扱う！
王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！来い、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

これで次のターン…丸藤がこのモンスターを破壊できなければ、我が切り札が降臨する…

「我はカードを1枚伏せターン終了」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻撃力３０００
伏せカード×１

「俺のターン！ドロー。俺はパワー・ボンドを発動！手札の3体のサイバー・ドラゴンを融合し、いでよ！サイバー・エンド・ドラゴン！
パワー・ボンドの効果で融合召喚したモンスターの攻撃力は倍になる！
サイバー・エンド・ドラゴンでレッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「そう簡単に我に攻撃を通すことなどできはしない！
トラップ発動！攻撃の無力化！相手の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する」

このまま何もしなければ奴はパワー・ボンドによるダメージ、４００ポイントを受け自滅する。
だが、このまま自滅するほど丸藤もバカではないだろう。

「サイバー・ジラフを召喚。このカードを生贄にすることで、この

ターンの効果ダメージを0にする！これでパワー・ボンドによるダメージは受けない！カードを1枚伏せターンエンドだ！」

カイザー
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
サイバー・エンド・ドラゴン　攻撃力８０００
伏せカード×１

サイバー・エンド・ドラゴン…攻撃力だけなら究極神オベリスクと互角…

「我のターン！ドロー。自分フィールド上にレベル8以上のシンクロモンスターが存在する時、手札のチューナーモンスター、クリエイト・リゾネーターを特殊召喚できる」

～～～神サイド～～～

「成程。ディスペアはあのデッキでデュエルしてるんだ。よくあんな未調整のデッキ使ってデュエルする気になったよね」

「そんなことないよ。ディスペアはデュエル前に調整してたよ」

「何で知ってるのさスクルド？」

「勘♪」

「勘って…そんな当てにならないもの…」

「ロキよ。スクルドの勘は甘く見ない方がいい。今まで一度もその勘が外れたことは無い」

「えっ！？」

「もっとも、外したことがないのはディスペアのことだけだがな」

「……」

～～～サイドアウト～～～

「そして我はチューナーモンスター、レッド・ノヴァを特殊召喚する！
このカードは自分のフィールド上にレッド・デーモンズ・ドラゴンが存在する時に特殊召喚できる！」

「だが、シンクロモンスターはチューナーが1体でなければシンクロ召喚できないんじゃないのか？」

「それはどうかな？我にはそのような常識などない！
レベル８のレッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル３、クリエイト・リゾネーターとレベル１、レッド・ノヴァをダブルチューニング！」

～～～リリカルサイド～～～

「ダブルチューニング！？」

「ディスペア君、戦術がより攻撃的になったなぁ」

「でも、ダブルチューニングなんて私達でも知らないよ？」

「そんならクロノ君辺りにでも聞いてみよか」

～～～サイドアウト～～～

「王者と悪魔、今ここに交わる！荒ぶる魂よ！天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚！いでよ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！？だが、サイバーエンドの方が攻撃力は上だ！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン効果発動。自分の墓地のチューナーモンスター1体につきその攻撃力を５００ポイントアップする。我の墓地のチューナーは2体。攻撃力は１０００ポイントアップ！カードを1枚伏せターンを終了する！」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力４５００
伏せカード×１

「俺のターン！ドロー、サイバー・エンド・ドラゴンでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果発動。相手の攻撃宣言時にこのカードをゲームから除外することで、その攻撃を無効にする！」

「なに!?ならば俺はカードを1枚伏せターンエンドだ」

カイザー
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
サイバー・エンド・ドラゴン　攻撃力８０００
伏せカード×２

「我のターン!」

丸藤のフィールドには伏せカードが2枚…その内1枚は明らかにリミッター解除。
もう1枚は…ミラーフォースか激流葬…?

「我は伏せカードを発動する。針虫の巣窟!このカードの効果により、自分のデッキの上からカードを5枚墓地へ送る。
我の墓地に送られたのはチューナーモンスター、ヘル・セキュリティ2体、ダーク・リゾネーター、バリア・リゾネーター、ゾンビ・キャリアの5体!攻撃力２５００ポイントアップ!」

～～～原作主人公組サイド～～～

「5枚の内全部がチューナーモンスター!?ディスペア君のデッキはどんなデッキなんスか!?」

「分からねえ。けど、あのデッキも楽しそうだな～」

「兄貴、そればっかりッス」

「いいじゃんか」

「でも、亮のサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力は８０００。
ディスペアのスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは攻撃力７０００。
まだサイバー・エンド・ドラゴンには届かない…」

「カイザーもディスペアも、どっちもすごいノーネ」

～～～サイドアウト～～～

「まだ我のターンは終わっていない。
我はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを除外！
手札の異次元の精霊を守備表示で特殊召喚する！この効果で除外したモンスターは次のスタンバイフェイズに戻る。
我はこれでターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
異次元の精霊　守備力１００

「俺のターン！」

「このスタンバイフェイズに、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは我のフィールドに戻ってくる！」

「俺はサイバー・エンド・ドラゴンで異次元の精霊を攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「無駄だ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果発動！エンドフェイズまでゲームから除外し、モンスター1体の攻撃を無効にする！」

無駄なことを…スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果は自身が対象になったときだけではない。相手の攻撃宣言ならば、その攻撃がどのモンスターを対象にしようとも無効化できる。

「ターンエンド」

カイザー
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
サイバー・エンド・ドラゴン　攻撃力８０００
伏せカード×２

…スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は７０００…これではサイバー・エンド・ドラゴンに勝つことはできない…

「我のターン！強欲な壺を発動！２枚ドロー！
魔法カード、デュアル・サモン発動！このターン我は２回通常召喚できる！
我はサイバー・ヴァリーを召喚！
サイバー・ヴァリーの第２の能力を発動！異次元の精霊とこのカードを除外し、２枚ドロー！
さらに手札の―Ｄ・Ｄ・Ｒ《ディファレント・ディメンション・リバイバル》を発動する。
手札１枚をコストに、除外された自分のモンスター１体を特殊召喚

できる。
手札のチューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを捨て、異次元の精霊を特殊召喚！
我はマッド・リローダーを召喚！
レベル１のマッド・リローダーに、レベル１の異次元の精霊をチューニング！集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚、希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン！」

「シンクロチューナー！？なんだそれは？」

「シンクロチューナーモンスターはアクセルシンクロ召喚に必要なチューナーのことだ。
フォーミュラ・シンクロンの効果発動。シンクロ召喚成功時、デッキからカードを１枚ドローできる」

「（よくはわからないが、止めておいた方がよさそうだ）俺はカウンタートラップ、昇天の黒角笛を発動！相手モンスターの特殊召喚を無効にし、破壊する！」

ここで潰しに来たか…これではドローができない…だが、これでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は８５００。
サイバー・エンド・ドラゴンを叩き潰すには十分な数値だ。
そしてリミッター解除はおそらくない。
奴は今カウンタートラップを使った。それも条件がかなり限定されたカウンターを。
その状況で、仮に我が何もせずにスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンで攻撃し、リミッター解除を発動して失敗すればサイバー・エンド・ドラゴンを失うことになる。そうすれば通常召喚によって一気にライフが削られる。次のカウンターが必ず決められる神の宣告などの

汎用カウンターならともかく、この状況ではリミッター解除は無い。

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！バーニング・ソウル！」

「！！！うおおおぉぉっ！！」

カイザー　ＬＰ４０００→３５００

「我はこれでターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力８５００

「俺のターン！…強欲な壺を発動！デッキからカードを2枚ドローする。
俺はサイバー・ヴァリーを召喚してターンエンドだ」

このタイミングで強欲な壺…こいつも十代と同じか。

カイザー
ＬＰ３５００
手札×１
フィールド
サイバー・ヴァリー　攻撃力０
伏せカード×１

「我のターン！我はカードを1枚伏せる。
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでサイバー・ヴァリーを攻撃！バーニング・ソウル！」

「サイバー・ヴァリーの第1の効果発動！このカードを除外し、バトルフェイズを終了し、カードを1枚ドローする！」

「我はターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力８５００
伏せカード×１

「俺のターンドロー！（…よし、いける！）
俺はサイバネティック・フュージョン・サポートを発動！墓地の機械族融合モンスターの融合素材を除外し、このターン融合素材とすることができる！パワー・ボンド発動！いでよ！サイバー・エンド・ドラゴン！パワー・ボンドの効果により、攻撃力は倍！
さらに魔法カード、サイバー・エンド・フォースを発動！このカードは自分フィールド上に『サイバー・エンド・ドラゴン』が存在する時に発動できる！相手はカードを1枚ドローする！このターン、自分フィールド上のサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を１０００ポイントアップし、相手モンスターの効果を1度だけ無効にできる！そして相手モンスターを破壊した場合、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力の2倍のダメージを与える！
行け！サイバー・エンド・ドラゴン！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「カイザー。よくここまで我についてこれたな。だが…我もここで負けるわけにはいかない！トラップ発動！バーニング・リボーン！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを生贄に捧げ、レッド・デーモンズ・ドラゴンを特殊召喚！」

「な！？自ら強力なモンスターを墓地に送っただと！なら、レッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！」

「まだだ！バーニング・リボーンにはもう１つの効果がある。手札のチューナーモンスターとこのカードを墓地へ送り、この効果で生贄に捧げたシンクロモンスター…スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを特殊召喚できる！
カオスエンドマスターよ！バーニング・リボーンとレッド・デーモンズ・ドラゴンと共にスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン召喚の礎となれ！いでよ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！
手札のチューナーが墓地へ送られたことにより、攻撃力は９０００！」

「……俺の負けか。だが、サイバー・エンド・ドラゴン！！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに攻撃！！エターナル・エヴォリューション・バースト！！！」

負けと分かっていても、我がスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを倒しに来たか。
……見事だ。

カイザーＬＰ３５００→－５００

「……カイザー、見事だった。…バーニング・リボーンがなければ

お前の勝利だった」

「そんなことは無い。俺の負けだ。…頑張れよ！在校生！」

「ハハハハハ！お前こそ！」

「「ハハハハハハハハハハ！！……！！」」

「勝者！シニョールディスペア！！」

「「「「「ワアアアアアアアア！！！」」」」」

～～～原作主人公組サイド～～～

「凄かったッスね。お兄さんとディスペア君のデュエル」

「ええ。亮もきっと満足してるはずよ」

「凄かったぜ～2人とも～！！」

～～～サイドアウト～～～

～～～リリカルサイド～～～

「嵐のようにあっという間やったなぁ…」

「そうだね。ディスペア君、あんなモンスター持ってるとは思わなかったけど」

「でも、2人ともとても楽しそうだったね」

「「うん」」

～～～サイドアウト～～～

「カイザー。縁があればまた会う時もあるだろう。…お前にこれを渡しておこうと思う。…卒業祝いのつもりだ。気にするな」

「……！！…わかった。ありがたくもらっておく」

さて、寮に戻るか。

「ディスペア～！！」

「スクルドか。いつもここで待つのは結構だが、暇だろう」

「そんなことないよ。さ、戻ろ♪」

「ああ」

……あ。

「ロキ。三極神を返してもらう」

「な、何でわかったのさ！？」

「お前の顔を見ればすぐにわかる」

「…ごめん。悪かった」

「気にするな。別にいいさ」

……我を、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを倒すとは…カイザー亮。

面白い人間だ。究極神でも一筋縄ではいかないだろう。

第３８話　ディスペアｖｓカイザー　三極神デッキ…？三極神デッキはどこへ行った

お互いに手札の消費が激しすぎるデュエリストです。迂闊に動けばすぐに決着がついたことでしょう。

第３９話　大自然の力（前書き）

新しいカイザーを決めます。
対戦相手は…なんでこの人にしたんだろう…

第３９話　大自然の力

「なに？我が？」

「ああ、そうだ。クロノス教諭に呼ばれている」

…我は何もふざけたことはしていないはずだ。

「分かった。行ってくるとしよう」

～～～校長室～～～

「クロノス教諭」

「おお、来てくれたノーネ。
実はディスペア君に頼みがあるのーネ」

「我に頼み？」

「そうなノーネ。デュエルアカデミアには、丸藤君というカイザーがいたノーネ。
でも、彼は卒業してプロの世界に行きましたーノ。
そこで、君にカイザーの称号を受け継いでほしいと思ってたーノ」

「わかった」

「ですが、カイザーの称号を受け取るのにはもう１人相応しい人物がいるのです。
なので、その人とデュエルをして、勝ったら受け継いでもらうとい

う形になるのですが…お願いできますか」

「…その相手はどこに？」

「すでにデュエル場で待機しています」

「ならば逃げるわけにはいかんな」

～～～デュエル場～～～

…なぜ会場が満員なのだ…いや、いつものことか。

「貴様が我の相手だったのか…固定砲台」

「私、固定砲台じゃないもん！」

「貴様の戦術は固定砲台だろう。砲撃連発の悪魔よ」

「悪魔でもないもん！」

「…こんな戯言はどうでもいい。
カイザーの継承候補者よ。我としてはそんなものどうでもいいが、
この舞台に立った以上全力で貴様を叩き潰す！
行くぞ！」

「「デュエル！」」

「我のターン！
我は二重召喚（デュアルサモン）を発動！このターン我は2回の通常召喚ができる！
そして切り込み隊長を召喚する！このカードの効果により、手札の

レベル４以下のモンスター１体を特殊召喚できる。
我は極星獣グルファクシを特殊召喚！
レベル３の切り込み隊長にレベル４の極星獣グルファクシをチューニング！
シンクロ召喚！いでよ！ナチュル・ランドオルス！
まだ我には通常召喚権が残っている。
もう一体切り込み隊長を召喚し、効果を発動！手札からＸ－セイバー　エアベルンを特殊召喚！
レベル３の切り込み隊長にレベル３のＸ－セイバー　エアベルンをチューニング！
シンクロ召喚！来い、ナチュル・パルキオン！
我のターンはこれで終了だ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
ナチュル・ランドオルス　攻撃力２３５０
ナチュル・パルキオン　攻撃力２５００

「私のターン！…よし！
私は光神機（ライトニングギア）－桜火を召喚！
桜火でランドオルスを攻撃！」

「……」

ディスペアＬＰ４０００→３９５０

ランドオルスが１ターンで倒されたか。
だが、こんなものは必要経費だ。問題ない。

「私はカードを1枚伏せてターンエンドだよ」

なのは
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
伏せカード×１

「我のターン！……。
我はロックストーン・ウォリアーを召喚。
ナチュル・パルキオンでダイレクトアタック！」

「トラップ発動！リビングデッドの呼び声！
光神機－桜火を特殊召喚！」

「攻撃続行！」

「きゃあ！」

なのはＬＰ４０００→３９００

「まだだ！ロックストーン・ウォリアーでダイレクトアタック！」

「くうっ…」

なのはＬＰ３９００→２１００

「我はこれでターン終了」

ディスペア
ＬＰ３９５０
手札×１
フィールド
ナチュル・パルキオン　攻撃力２５００
ロックストーン・ウォリアー　攻撃力１８００

「私のターン！私は永続魔法、神の居城－ヴァルハラを発動！１ターンに１度、自分のフィールド上にモンスターがいない時、手札の天使族モンスター１体を特殊召喚できる！
ヴァルハラの効果で、アテナを特殊召喚！
さらにシャインエンジェルを召喚！まだだよ！アテナの効果を発動！自分のフィールド上に存在する天使族モンスターを墓地に送って、墓地の天使族モンスターを特殊召喚できる！
シャインエンジェルを墓地に送って、光神機－桜火を特殊召喚！アテナのもう１つの効果を発動！天使族が召喚、特殊召喚に成功した時、６００ダメージを与える」

「ク…」

ディスペアＬＰ３９５０→３３５０

「行くよ！アテナでナチュル・パルキオンを攻撃！」

「我のパルキオンが…！」

ディスペアＬＰ３３５０→３２５０

…パルキオンが潰された…このままではまずい。

「光神機－桜火でロックストーン・ウォリアーを攻撃！」

「ロックストーン・ウォリアーの効果により、我へのダメージは０になる」

「私はこれでターンエンドだよ」

なのは
ＬＰ２１００
手札×２
フィールド
アテナ　攻撃力２６００
光神機－桜火　攻撃力２４００

「我のターン」

…我のフィールドにはカードがない…それに対し、高町のフィールドにはアテナと桜火の2体。
その攻撃力の合計は５０００。直接攻撃を受ければ敗北する…だが！我にもまだ手は残っている。

「我は強欲な壺を発動！デッキから2枚ドロー！魔法カード、死者蘇生！ロックストーン・ウォリアーを特殊召喚！さらにチューナーモンスター、ナチュル・チェリーを召喚！
レベル４のロックストーン・ウォリアーにレベル１のナチュル・チェリーをチューニング！来い！ナチュル・ビースト！」

これで全ての布石が揃った…！

「でも、攻撃力ならアテナの方が上！」

「まだだ！魔法カード発動！ミラクルシンクロフュージョン！このカードは自分の墓地とフィールドから融合素材をゲームから除外し、シンクロモンスターを素材とする融合モンスター1体を融合召喚する！

我は、ナチュル・ビースト、ナチュル・パルキオン！そしてナチュル・ランドオルスを除外！いでよ！ナチュル・フォース・トリプル！ナチュル・フォース・トリプルが存在する時、1ターンに1度、デッキの上から2枚墓地へ送ることができる。送った場合、そのターン、相手の魔法カードの効果を全て無効にする。

墓地のカードを2枚除外することで、そのターン、相手の罠カードの効果を全て無効にする。

手札を1枚捨てることで、そのターン、相手のモンスター効果をすべて無効にする！

この効果は相手のターンでも発動可能だ」

「そんな！！」

「これじゃあなのはちゃんのカードの効果は全部封じられたのと同じや！」

「なのは…」

「さすがディスペア。まさかたったの2ターンで切り札を呼び出すなんてね。アハハハハハ！」

「あれがフィールドに出た今、高町に勝つ手段は無いだろう。ディスペアめ。我とはまた違う意味のパワーデッキを…」

「恐ろしいパワーだな。たった1枚のカードで全てのカードの効果を無効にするのだ。相手にとっては絶望でしかない」

「それでも俺にとっては究極神を相手にすることよりかはよっぽど楽だね」
「「否定はできんな」」

「我はナチュル・フォース・トリプルの効果により、デッキの上から2枚墓地へ送り、墓地から2枚除外する！よってこのターン、高町…貴様の魔法と罠の効果は無効だ！
行くぞ！ナチュル・フォース・トリプルでアテナを攻撃！ナチュラル・フォース！」

「きゃああ！」

なのはＬＰ２１００→１２００

「ターン終了」

ディスペア
ＬＰ３２５０
手札×０
フィールド
ナチュル・フォース・トリプル　攻撃力３５００

「私のターン！！」

「この瞬間、ナチュル・フォース・トリプルの効果を発動！デッキの上から2枚墓地へ送り、墓地からカードを2枚除外する！」

「くっ…（でも、モンスター効果は無効にされてない…）
私はシャインエンジェルを守備表示で召喚！ターンエンドだよ」

なのは
ＬＰ１２００
手札×２
フィールド
シャインエンジェル　守備力８００

「我のターン！我はナチュル・フォース・トリプルの３つの効果全てを発動！
このターン、貴様の魔法・罠・モンスター効果は無効になる。
ナチュル・フォース・トリプルの攻撃！ナチュラル・フォース！
…戦闘で撃破したシャインエンジェルの効果はデッキから攻撃力１５００以下の光属性モンスターを特殊召喚する。だが、シャインエンジェルの効果はナチュル・フォース・トリプルの効果によって無効になっている」

「くっ…」

だが、我の手札は０。次の高町のターン、我はモンスターの効果を無効にすることはできない…

「我はこれでターンを終了」

ディスペア
ＬＰ３２５０
手札×０
フィールド
ナチュル・フォース・トリプル　攻撃力３５００

「私のターン！」

「この瞬間、ナチュル・フォース・トリプルの効果発動。
デッキの上から2枚墓地へ送り、墓地のカードを2枚除外する。
このターン貴様の魔法・罠の効果は無効になる」

「……私はコーリング・ノヴァを守備表示で召喚してターンエンド」

なのは
ＬＰ１２００
手札×２
フィールド
コーリング・ノヴァ　守備力８００

「我のターン！我はナチュル・フォース・トリプルでコーリング・ノヴァを攻撃！ナチュラル・フォース！」

「え！？効果を無効にしないの！？」
「ディスペア…何を考えている…」

「コーリング・ノヴァの効果発動！デッキからジェルエンデュオを特殊召喚！」

ジェルエンデュオ…あのモンスターは戦闘では倒せない。
だが、ナチュル・フォース・トリプルの効果を使用すれば、戦闘での破壊も可能になり、２体分の生贄としても扱うことができなくなる。
…しかし、ここで不用意に無効にすれば、墓穴を掘るのは確実…
そして天使族にはナチュル・フォース・トリプルに元々の攻撃力で

勝利できる2体生贄のモンスターは存在しない。…ここはモンスター効果は無効にせず様子を見る！

「我のターンは終了だ」

ディスペア
ＬＰ３２５０
手札×１
フィールド
ナチュル・フォース・トリプル　攻撃力３５００

「私のターン！」

「デッキの上から2枚墓地へ送り、墓地から2枚除外し、ナチュル・フォース・トリプルの効果を発動！
このターン、貴様の魔法・罠の効果を無効にする！」

「私はジェルエンデュオの効果で、光属性・天使族のモンスターの生け贄にする時、2体分の生け贄にする！
召喚！―Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ（ザ・スプレンディッド・ヴィーナス）！」

「バカな！ＶＥＮＵＳだと！？」

これでは魔法・罠の効果は無効にならない！

「さらに魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動！手札を1枚捨てて、相手のフィールドに表側表示で存在するモンスターをすべて破壊する！」

「何!?」

これでは我のフィールドががら空き…ＶＥＮＵＳの攻撃をまともに受けてしまう!

「ＶＥＮＵＳでダイレクトアタック!ホーリー・フェザー・シャワー!」

「うおおおおお!!」

ディスペアＬＰ３２５０→４５０

「私はこれでターンエンド!次にディスペア君が何もしなければＶＥＮＵＳのダイレクトアタックで私の勝ちだよ!」

なのは
ＬＰ１２００
手札×０
フィールド
Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ　攻撃力２８００

「我のターン!……!!
ラストターンだ!我は魔法カード、二重魔法（ダブル・マジック）を発動!
手札の魔法カード１枚を捨てることで、相手の墓地から魔法カードを１枚選択し、自分のカードとして使用できる!」

「でも、なのはの墓地にあるのは、ディスペアにとってこのフィールドを逆転できるようなカードではないはずだよ」

「せやなぁ…」

「我が選択するのは、死者蘇生！！」

「し、死者蘇生！？なのは、そんなカード使ってなかったよ！？…あ！！」

「あのときや…あのときしかあらへん！」

『ライトニング・ボルテックスを発動！手札を１枚捨てて…！！』

「そう。貴様がライトニング・ボルテックスのコストとして捨てた手札。
それが死者蘇生！そして我が蘇生させるのは当然！ナチュル・フォース・トリプルだ！
さらに墓地のスキル・サクセサーを２枚ゲームから除外し、攻撃力を１６００ポイントアップ！
ナチュル・フォース・トリプルでヴィーナスを攻撃！ナチュナル・フォース！！」

「！！きゃあああ！！」

なのはＬＰ１２００→－６００

「勝者！！ＮＥＷカイザーディスペア！！」

「「「「わあああああ！！」」」」

「アハハハハハハ！あの状況でよく逆転できたね」

「……高町なのは。貴様の強さ、見せてもらった。ではな」

～～～ブルー寮～～～

「来たな。新カイザー」

「何が新しいカイザーだ。我にとってはどうでもいい」

「ディスペア、あの融合モンスターはどこで手に入れたのさ？」

「知らんな。いつの間にか持っていた」

「ふ～ん」

…我があそこまで追い詰められるのは予想外だった。
あと１０００ポイントは残ると思っていたが…
面白くなってきたな。

第３９話　大自然の力（後書き）

オチがうまく書けない…

第４０話　奪われた三極神　機皇創世（前書き）

今回は微（？）チート回です。
まあ、チートかどうかは人それぞれの見方で決まりますので、飽くまで作者的に、ということにしてください。

第４０話　奪われた三極神　機皇創世

「なに!?三極神が盗まれただと!!」

「ああ。朝、金庫を開けたら無くなっていた。
魔界軍の者ではない。奴らなら金庫ごと持っていくはずだからな」

「ならこの学園の生徒ということで間違いないな」

「ああ。デッキも根こそぎ三極神だけ持っていかれている。
究極神が残っていたのが不思議なくらいだ」

「究極神が残っているのは当たり前だ。我が持っているんだからな」

「?? ではここにあるのは何だ?」

「当然我が作った偽物だ。究極神はコピーできなかったからな。
別の並行世界に行って三幻神をいただいてきた」

「……」

だが、三極神が入っていたこの金庫、パスワードが人間界の文字ではないはずだから
我ら神々以外に開けるなど生半可なことではないはずだが…

「しかたがあるまい。神の鏡を使おう」

「アレを使うのか」

「でなければ三極神はずっと無くなったままではないか」

「…そうだな。使ってくれ」

「うむ。……出たぞ。
オベリスクブルー2年、毒島孝司。
オベリスクブルー2年、中島智弘。
オベリスクブルー2年、田中安男の3人だ」

「ならば我が制裁を、いや絶望を与えてくるとしよう。
ある意味では究極神よりも深い絶望を…」

「あ。ディスペアのスイッチ入った。もう止められないね。アハハハハ」

～～～放送室～～～

『オベリスクブルー2年、毒島孝司。
オベリスクブルー2年、中島智弘。
オベリスクブルー2年、田中安男。
以上3名は今すぐにデュエル場に来い！
来ない場合、校長権限で退学にする』

「校長権限って…ディスペアそんなの持ってたっけ？」

「校長に事情を話し、許可は取ってある」

「手が早いね」

「我はそんなミスを犯すほどバカではない。行くぞ」

～～～デュエル場～～～

…勝手に人のデッキを盗む腰抜け共だから来ないと思っていたが、来るとはな。

「逃げ出さずにきたことは褒めてやる。三極神は返してもらうぞ」

「やだね。俺たちの手にあるんだからもう俺らの物さ！そんなに欲しいなら、ディスペア！お前のカードを全てかけてデュエルだ！デュエルの方式は3人の勝ち抜きデュエル！だが、お前は一人しかいないからな。ライフ12000でデュエルしてもらう！」

「面白い。ゴミしてはいい度胸だ。いいだろう。我が相手をしてやる」

「「デュエル！」」

「先攻は我だ！我はワイズ・コアを守備表示で召喚し、カードを1枚伏せる。これで我のターンは終了」

ディスペア
LP12000
手札×4
フィールド
ワイズ・コア　守備力0
伏せカード×1

「よーし！俺のターンドロー！…見せてやるぞ！俺の神の力を！
サイクロン発動！伏せカードを破壊！」

「甘い！トラップ発動！ボム・ブラスト！
このターン戦闘を行っていない我の機械族モンスターを3体まで破壊し、1体につき４００ポイントダメージを与える。
ワイズ・コアを破壊し！４００ダメージ」

「痛くもかゆくもないね」

毒島ＬＰ４０００→３６００

「狙いはこっちだ。ワイズ・コアが効果で破壊された時、デッキから機皇帝ワイゼル∞、ワイゼルＴ、ワイゼルＡ、ワイゼルＧ、ワイゼルＣを特殊召喚する！
合体しろ！機皇帝ワイゼル！」

機皇帝がフィールドに出た今、自分から三極神を召喚することなどないはず…

「ならモンスターをセットしてターンエンドだ！」

毒島
ＬＰ３６００
手札×４
フィールド
セットモンスター×１

「我のターン！我は機皇帝ワイゼルで伏せモンスターを攻撃！」

「極星獣タングリスニが破壊された時、極星獣トークン2体を特殊召喚する！」

「カードを2枚伏せターン終了」

ディスペア
ＬＰ１２０００
手札×３
フィールド
機皇帝ワイゼル∞　攻撃力２５００
ワイゼルＴ　攻撃力５００
ワイゼルＡ　攻撃力１２００
ワイゼルＧ　守備力１２００
ワイゼルＣ　攻撃力８００
伏せカード×２

「俺のターンドロー！ふはははは！！見せてやる！星界の神の力を！
極星獣グルファクシを召喚！レベル３の極星獣トークン2体に、レベル４の極星獣グルファクシをチューニング！いでよ！極神皇トール！
極神皇トールの効果発動！相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする！エフェクト・アブソーバー！
さらに二重召喚を発動して、モンスターをセット。
極神皇トールで機皇帝ワイゼルを攻撃！サンダーパイル！」

「……」

ディスペアＬＰ１２０００→８５００

ぬるい。ぬるすぎる。これがあの星界の神の一撃か！！
やはりあの程度のゴミでは星界の神の力を操ることなどできはしないか。

「トールの一撃が重すぎて声も出ないかい？ターンエンドだよ」

毒島
ＬＰ３６００
手札×３
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
セットモンスター×１

「我のターン！
我はモンスターを1体伏せ、さらにカードを1枚セット。
ターン終了」

ディスペア
ＬＰ８５００
手札×２
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×３

「俺のターン！ドローだ！
極神皇トールで伏せモンスターを攻撃！サンダーパイル！」

セットモンスターはカードガンナー。

「こいつの効果でカードを1枚ドローする」
引いたカード…グランド・コア…

「俺は伏せモンスターをオープン！メタモルポットだ。
いいカードを引いたみたいだが、それは墓地に捨ててもらうぜ。
ハハハハハハ！もう打つ手なんて残ってないだろう！サレンダーしな！」

「貴様のようなゴミに対し、我がサレンダーをする必要などない！」

「生意気な口ききやがって！下級生め！カードを2枚セットしてターンエンド」

毒島
ＬＰ３６００
手札×４
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
メタモルポット　攻撃力７００
伏せカード×２

「我のターン！永続罠発動！！無限牢！
このカードの効果で、手札1枚を捨てることで墓地のモンスター1体を魔法・罠ゾーンに魔法カード扱いとしてセットできる。
我は手札を3枚捨て墓地のワイズ・コア、スカイ・コア、グランド・コアをセット！
無限牢の第2の効果を発動！このカードを墓地へ送り、セットしたモンスターを手札に戻す！」

「そんなザコを戻してなんになる！トールの攻撃力の前では無意味だ！」

所詮攻撃力判断しかできないゴミだな。
やはり星界の三極神を持っていても宝の持ち腐れか。

「我はトラップカードを発動！機皇創世！手札に存在するワイズ・コア、スカイ・コア、グランド・コアの３枚を墓地へ送り、デッキまたは手札から機皇神マシニクル∞（インフィニティーキュービック）を特殊召喚する！
３つの絶望よ！新たなる最強の力を降臨させよ！いでよ！機皇神マシニクル∞！！」

「な！なんだそのモンスターは！」

「聞かなくても分かる。
機皇神マシニクルの効果発動。
１ターンに１度、相手のシンクロモンスター１体を吸収し、その元々の攻撃力分、機皇神マシニクルの攻撃力をアップする！
我は極神皇トールを吸収！！」

機皇帝マシニクル∞　攻撃力４０００→７５００

「行け！機皇神マシニクルでメタモルポットを攻撃！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！！」

「さ、サイクロン発動！極神皇トールを破壊！うわあああああ」

毒島ＬＰ３６００→３００

「い、痛い…」

「機皇神の力を思い知ったか！ハハハハハハハ！！
我はこれでターン終了」

ディスペア
ＬＰ８５００
手札×３
フィールド
機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００

「お、俺のターン…ドロー！
フヒヒヒヒヒ！！地割れ発動だ！
消えろ！機皇神マシニクル！」

「機皇神マシニクルの効果発動。墓地の機皇帝のパーツをゲームから除外することで、このカードの破壊を無効にする。
我はワイゼルＧを除外し、機皇神マシニクルの破壊を無効にする」

「そ、そんな…た、ターンエンド」

毒島
ＬＰ３００
手札×４
フィールド
伏せカード×１

「我のターン！行け、機皇神マシニクル！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！！」

「うわあああああああ！」

毒島ＬＰ３００→－３７００

「と、トラップ発動…リビングデッドの呼び声！
極神皇トールを蘇生！……」バタッ…

「ぶ、毒島！くそ…俺が相手だ！」

「「デュエル」」

「俺のターン、ドロー。
俺は極星霊ドヴェルグを召喚！ドヴェルグの効果でこのターンもう１体極星を召喚できる！
極星霊リョースアールヴを召喚する。
リョースアールヴの効果でトールを選択！手札からレベル１０以下の極星モンスターを特殊召喚できる！
極星霊デックアールヴを特殊召喚！
レベル１の極星霊ドヴェルグと、レベル４の極星霊リョースアールヴに、レベル５の極星霊デックアールヴをチューニング！！シンクロ召喚！いでよ、極神皇ロキ！
…俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ…」

中島
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
＋リビングデッドの呼び声
極神皇ロキ　攻撃力３３００

伏せカード×２

「我のターン！
機皇神マシニクル！極神皇トールを吸収！」

機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００→７５００

「さらに手札に存在するグランエルＴ５を捨て、その効果を機皇神マシニクルは得る！
効果発動！極神皇ロキを吸収！」

機皇神マシニクル∞　攻撃力７５００→１０８００

「な！？１ターンに２体もシンクロモンスターを吸収！？」

「我が捨てたグランエルＴ５の効果だ。１ターンに１度、シンクロモンスター１体を吸収する。
機皇神マシニクルでダイレクトアタック！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！！」

「トラップ発動！攻撃の無力化！」

「ならば我のエンドフェイズに機皇神マシニクルの効果を発動！装備しているシンクロモンスターを墓地に送り、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！
我は極神皇トールを墓地に送る！３５００ポイントのダメージを喰らえ！！」

「ぎゃあああああああ」

中島ＬＰ４０００→５００

装備したモンスターを墓地へ送るのは1ターンに1度、1体まで…
残念だがこのターンでとどめを刺すことはできんな。

ディスペア
ＬＰ８５００
手札×４
フィールド
機皇神マシニクル∞　攻撃力７３００

「お、俺のターン！サイクロンで極神皇ロキを破壊する！
モンスターをセットしてターンエンドだ…」

中島
ＬＰ５００
手札×０
フィールド
セットモンスター×１

「我のターン！我は魔法カード、機皇束縛を発動！相手のエクストラデッキからシンクロモンスター1体を墓地へ送る！極神聖帝オーディンを墓地へ送る！
そして機皇束縛の第2の効果発動！手札をすべて捨てることで、相手の墓地のシンクロモンスターを5体まで選択し、機皇神マシニクルに装備する！
我は貴様の墓地から極神皇トール、極神皇ロキ、極神聖帝オーディンを機皇神マシニクルに装備！」

機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００→１４８００

「さらに機皇神マシニクルの効果発動！手札のワイゼルＡ５を墓地に送る！
ワイゼルＡ５の効果により、攻撃時、相手の罠を１度だけ無効にする。そして守備力を攻撃力が超えていれば、２倍の貫通ダメージを与える！
機皇神マシニクルで伏せモンスターを攻撃！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「う、うあああああああ」

伏せモンスター：極星獣タングリスニ　守備力８００

中島ＬＰ５００→－２７５００

「きょ、極星獣タングリスニが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、極星獣トークン２体を特殊召喚する…グッ…」ドサッ…

「な、中島まで…クッ…」

「「デュエル」」

「お、俺のターン…！
俺は大嵐を発動！三極神を破壊するぜ！
さらに速効魔法、神々の帰還を発動！このターン破壊された三極神を俺のフィールドに特殊召喚する！
まだだ！魔法カード、神々の黄昏！自分の『極神』と名のついたモンスターを１体相手のフィールドに移し、次の相手ターンのエンドフェイズにその『極神』を破壊して相手フィールド上のカードをすべて除外する！

俺は極神皇ロキをお前のフィールドに移すぜ！
トールとオーディンを守備表示に変更してターンエンド」

田中
手札×３
フィールド
極神聖帝オーディン　守備力３５００
極神皇トール　守備力２８００

「我のターン！機皇神マシニクルの効果発動！極神聖帝オーディンを吸収！」

機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００→８０００

「さらに極神皇ロキを攻撃表示に変更！
極神皇ロキで極神皇トールを攻撃！ヴァニティー・バレット！
これで最後だ。機皇神マシニクルでダイレクトアタック！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「させるか！手札のバトルフェーダーを特殊召喚して、バトルフェイズを終了する！
これでお前にはターンエンドしかない！そしてこのエンドフェイズ、神々の黄昏の効果で機皇神マシニクルを除外し、次のターン三極神を復活させればそれで終わりだ！」

「お前に次のターンがあるとでも思っているのか？」

「え！？」

「魔法カード発動。時の女神の悪戯！再び我のバトルフェイズに入

る！」

「は、反則だろ！そんなカード！！」

「勝手に我の持ち物を盗み出し、我が物顔で使った貴様に言われたくは無いな。
機皇神マシニクル∞でダイレクトアタック！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝」

田中ＬＰ４０００→－４０００

「三極神は我に返してもらう」

相手が使っていたデッキと三極神をデュエルディスクから外し、ホルダーに入れる。

「「「ヒィィィ！！ごめんなさい～～もうしません～～～～！！」」」

いつの間にか起きていた３人が小悪党のセリフを吐き捨て走って逃げていく。

……やはりゴミはゴミか。

放っておいてももう何もしてこないはずだ。

三極神は取り返したのだから、文句は無いはずだ。

第４０話　奪われた三極神　機皇創世（後書き）

会話が多くなりましたね。まあ、デュエルですから仕方のないことではありますし、何を今更、ということもありますし。しばらくは多分こんな感じで日常を描くと思います。２期に入るのはもう少し先ということで。

ちなみに今回のブルー生徒が金庫を開けた方法ですが、偶然開いた、ということになってます。

いつの間にか１５万アクセス超えてましたね。

呼んでくださっている方々、本当にありがとうございます。

……記念の話作ってない…

Ｒｙｕ様、感想ありがとうございます。

第４１話　スクルドｖｓロキ　人の大事なものを取ってからかっている子供の図

スクルドがデュエルするのは初めてですね。
今回はＬＰ８０００デュエルです。

第４１話　スクルドｖｓロキ　人の大事なものを取ってからかっている子供の図

「ロキ、返してよ！」

「無理」

「お願い！」

「無理」

「…グスッ…」

…何でこんなことになってるんだ？
ロキが持っているのは…ペンダント？

「スクルド、あのペンダントは？」

「グスッ…あれは…私の…宝物だよ…」

「（ゲッ！！？泣いた…どうしよう…あ、そうだ！）」

…成程。ロキがスクルドのペンダントを取って、それでスクルドが泣いてるのか。

「ロキ、スクルドを泣かすなよ」

「あ、トール！トールからも言ってよ！」

「何があったんだ？」

「ロキが私のペンダントを…」

「ああ、前にディスペアかr…」

「我がどうかしたのか？」

我が何か関係あったか？

「な、何でもないよ！」

「ああ、そうだ！なら、俺とデュエルしたら返してあげるよ！」

ああ、成程。スクルドは分かってないみたいだが、『デュエルする』のであり、『デュエルに勝つ』必要は無いんだな。

ロキも泣くのは予想外だったみたいだな。

…女神の宝を取ってる時点でどうかと思うがな。

「その約束、忘れないでよ！」

「（ロキの奴め。わたしの留守中に悪戯を…それもスクルドが最も大切にしているペンダントを…全く。呆れた奴だ）」

…ロキがスクルドに悪戯をするのは珍しいことではない。

そしてスクルドが身につけている飾りを取っていくのも珍しいことではない。

…もちろん後で返すが。

しかし、あの超金属製ペンダントを取ったのは初めてで、『ディスペアから初めてもらった手作りの物』を取られたスクルドからすれ

ば、泣くのも仕方がないことである。…しかしなぜディスペアは何も言わないのだ？自らの嫁が泣いているというのに…。
…それどころか黙って見守っている？なぜ？
さらに言えば、自分が好きな者にあげたものを忘れるってどうよ。

「「デュエル」」

「先攻はもらうよ。ドロー……私はモンスターをセットしてターンエンドだよ」

スクルド
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
セットモンスター×１

「俺のターン！スクルド、引っ込み思案な性格がデュエルにも出てるよ。アハハハハ！
俺は…そうだね。こいつにしよう。
スナイプ・ストーカーを召喚！効果を発動！手札を１枚捨て、フィールドのカードを１枚選択。サイコロを振り、出た目が１か６以外ならそのカードを破壊する！
俺は伏せモンスターを選択。…出た目は３だ！よって伏せモンスターは破壊！
スナイプ・ストーカーでダイレクトアタック！」

「きゃああ」

スクルドＬＰ８０００→６５００

「これでターンエンド」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
スナイプ・ストーカー　攻撃力１５００

「うう…私のターン…魔法カード、女神の選択を発動するよ。
私は3番目の効果を選択して、手札を5枚捨てて7枚ドローするよ。
…私は戦女神－ヴァルキュリアを召喚して、効果を発動。
このカードを生贄にすることでデッキから永続魔法、ユグドラシルを発動するよ。
ユグドラシルの効果発動！デッキから永続魔法、ルーンの刻みを発動するよ。
ルーンの刻みの効果発動！フィールドにユグドラシルが存在する時、1ターンに1度、相手の光属性、神属性以外のモンスターを破壊して、その攻撃力の2倍のダメージを与える！
スナイプ・ストーカーを破壊！」

「はぁ！！？（なんだそりゃ！？めちゃくちゃじゃん！スクルド普通に強いじゃん！やばい、甘く見てた…まぁ、負けるつもりは無いけどね）」

ロキＬＰ８０００→５０００

スクルド…あのコンボか。ロキも驚いてるな。2倍のダメージなど、通常、反則に近いほどのダメージだからな。…反則といえばあったな。未来の人間界で作られたカードの中に反則クラスの能力を持ったやつが…なんだったか？ああ、黒い爆撃機か。

「まだだよ！フィールド魔法、アースガルズを発動！自分のフィールドにユグドラシルとルーンの刻みが存在している場合、１ターンに１度、自分のフィールドにモンスターがいない時、デッキから戦士族か獣族か天使族モンスター１体を特殊召喚できる！
私は死女神ヘルを特殊召喚！
ヘルの効果発動、１ターンに１度墓地からモンスター１体を選択し、召喚制約と条件を無視して自分フィールドに特殊召喚できる！
私は邪神狼フェンリルを特殊召喚！」

死女神ヘル　攻撃力２５００
邪神狼フェンリル　攻撃力３０００

…スクルドのデッキ…黒いな。（神話的な意味で）
というよりもあのカードの出所の方が気になるな。

「行くよ！ヘルでダイレクトアタック！」

ロキＬＰ５０００→２５００

「そしてフェンリルでダイレクトアタック！これでどう！？」

「墓地のネクロ・ガードナーの効果発動。このカードを除外して、相手の攻撃を１度だけ無効にする」

「…ターンエンドだよ」

スクルド
ＬＰ６５００
手札×５

フィールド
死女神ヘル　攻撃力２５００
邪神狼フェンリル　攻撃力３０００

「俺のターン！…よし、俺は魔法カード、暗黒の大暴走を発動！
自分の墓地に存在するモンスターを１体除外し、その後に自分の墓地にカードがない場合、手札のレベル８以上の闇属性モンスターを３体まで特殊召喚できる！
俺は堕天使ゼラート、堕天使スペルビア、堕天使アスモディウスを特殊召喚！
さらに堕天使ゼラートの効果を発動！手札の堕天使ゼロを捨て、スクルドのモンスターをすべて破壊！」

「！！そ、そんな…」

「さらに手札から捨てられた堕天使ゼロの効果発動。このカードをフィールドに特殊召喚する！」

堕天使ゼロ　攻撃力４０００

「総攻撃だ！喰らえ、スクルド！」

スクルドＬＰ６５００→－６２００

「……ほら、ペンダント」

「え？どうして…」

「俺は『デュエルに勝ったら』なんて言ってないぞ。『デュエルしたら』とは言ったけどね。

ただスクルドの実力が見たかったんだけど、泣くなんて思わなくてさ。…ごめん」

「…うん」

成程。ロキはスクルドと戦ったことがなかったからな。
戦う力を失ってもデッキの強さは変わらないしな。
…ロキも泣いたのは予想外だったのか…まあ、スクルドは昔からあれだからな。

「…思い出した。我がここに来たのはスクルドに用があったからだった」

「え？私に？」

「ああ。これを渡しに来たんだ」

「なにこれ？」

「まあ開けてみろ」

「こ、これって…これ、手に入れるのすごく難しいんじゃなかったの！？」

「確かに難しかったがな、この前、プレゼントもらったのを返していなかったからな」

「…ありがとう！」

渡したのは特殊加工されている特殊魔法石のネックレスだ。

前にスクルドが神界でこれの写真をずっと眺めていたのを見ていたから、今回のプレゼントのお返しはこれでいいだろう、と思った。
…そんな大事そうに持たなくても、逃げたりしないぞ。
…だが、原石を手に入れるのはそこまで難しくは無かったが、加工に骨が折れた。まさか２００回も失敗するとは…

…まあ、喜んでくれてなによりだ。一時は、喜んでくれなかったらどうしようか？なんてことを考えていたからな。

「スクルド…ちょっと見せてよ」

「そんなこと言ってまた取るんでしょ。ダメ」

「頼むよ。それにこんなところで取ったらディスペアになにかされるか分からないんだから取るわけないだろ！」

「ダメ♪」

…随分幸せな顔してるな。そんなにうれしかったか？

「それはそうだろう。自分が一番好きなものから手作りの物をもらって嬉しくない者などいないだろう」

「オーディン、考えていることを読むな」

「お前が鈍いからだ。他人…というか他神から見ても分かるぞ。あんなこれ以上ないくらいの笑顔を見て分からないお前の方が不思議だ」

そうか？いつも何かやるとあの笑顔だがな…

「なんだこいつは…万年新婚夫婦め…あんなかわいい女神と…畜生」

「ロキ、貴様も我が心を読むのか…いや、もう何を言っても聞くまい」

「ロキ、お前嫉妬してるのか？お前らしくもない。
ちなみに我はそういうことにあまり興味がないからどうでもいいと思うがな」

「そんなわけあるか！嫉妬なんてするわけないだろ」

第４１話　スクルドｖｓロキ　人の大事なものを取ってからかっている子供の図

…あれ？短くなったな…

もう少しデュエルを長引かせる予定だったのですが、早く終わってしまいました。

ディスペアはあんな口調や態度になっても、スクルドには態度を変えずに接しますね。…なんと甘い奴だ。

第４２話　ディスペアｖｓはやて　そんなにこれが食べたいか。ならばデュエルだ

ネタ回です。デュエルは真面目ですがね。

第４２話　ディスペアｖｓはやて　そんなにこれが食べたいか。ならばデュエルだ

…長期休暇は本当に何も起きんな。
我にとってはかなり暇だ。
久しぶりに購買の方にでも行くか。
…決して料理がないからではない。
寧ろ、毎日料理をしてくれる女神がいるのだから、空腹になるなんてことは殆どない。

「お、珍しいね。ディスペア君がここにくるなんて」

声をかけてきたのは購買部の店員。…名前など覚えていない。

「まあな。たまにはこういう日もある」

…誰が相手だろうと態度は変えない。見た目からすれば明らかに店員の方が年をとっているだろうが、我の方がはるかに長く生きている。
それに、最高神ともあろうものが人間に態度を変えるなど、他の神に知れたら笑われる。
……いまスクルドには態度変えてるだろうと思ったやつはここに来い。

「ドローパンか。我はまだ1度も試していなかったな。試してみるか」

一つ適当に取る。その後、インフィニティ・アイを使い、パンの中身を調べ、1つしかないという黄金の卵パンを取ろうとしたが…

ガシッ…

「ん?…なんだ八神か。これは我が取ったのだ。我がもらうぞ」

「何言ってんねん。私の方が先に取った」

「いいや、我だ」

「私や。フェイトちゃんとなのはちゃんだって見てたやろ?」

「「いや、ちょっと見てなかった」」

「ひどっ!…まあええ。ここはデュエルアカデミアや」

「成程。我とデュエルをするというのか」

「その通りや!ちょっと店員さん、このパン、キープよろしく」

「あいよ」

ガヤガヤ…

「なんだなんだ?」

「どうやら新カイザーがデュエルするらしいぞ」

「へえ。見ものだな。まあ、究極神を使うんだったら１００％カイザーの勝ちだろうけど、こんな場所で究極神を使うわけがないからな」

「そうだな。ここでカイザーが負けても仕方がないか」

「貴様など究極神を使うまでもない」

「そんなことがいつまで言えるやろなぁ」

「「デュエル」」

「先攻は我だ。ドロー。我は魔法カード、オーバーテクノロジーを発動。
デッキまたは墓地から機械族のモンスター1体を手札に加える。
我はデッキからスフィア・ボム　球体時限爆弾を手札に加える。
そしてモンスターをセットしターン終了」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
セットモンスター×１

「私のターンや！…私は魔法カード、シールドクラッシュを発動！
球体時限爆弾は破壊させてもらうで！」

「この瞬間破壊されたクリッターの効果発動。
我はデッキからブラック・ボンバーを手札に加える」

「時限爆弾じゃない！？すっかり思い込まされてた…
でも、これで直接攻撃ができる！

私は永続魔法、神の居城－ヴァルハラを発動する！
ヴァルハラの効果で、手札の堕天使スペルビアを特殊召喚するで！
スペルビアでダイレクトアタックや！」

「……」

ディスペア　ＬＰ４０００→１１００

「ターンエンドや」

はやて
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
堕天使スペルビア　攻撃力２９００
神の居城－ヴァルハラ

「我のターン！…我は魔法カード、レベル・ボムを発動。手札のモンスターカード１枚を墓地へ送り、墓地へ送ったモンスターのレベル×２００ポイントのダメージを与える。
我はスフィア・ボムを墓地へ送り、八神はやて。貴様に８００ポイントのダメージを与える」

「きゃっ」

はやて　ＬＰ４０００→３２００

「さらに我はブラック・ボンバーを召喚する。
ブラック・ボンバーの召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４の闇属性で機械族のモンスター１体を特殊召喚する。

我はスフィア・ボムを特殊召喚！レベル４のスフィア・ボム　球体時限爆弾に、レベル３のブラック・ボンバーをチューニング！冷たい炎が世界のすべてを包み込む。漆黒の花よ、開け！咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

「初めて見るシンクロモンスターやな。
でも、攻撃力は２４００。堕天使スペルビアの方が高い」

「我はブラック・ローズ・ドラゴンの特殊効果を使用する。
このカードのシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードをすべて破壊する！ブラック・ローズ・ガイル！」

「召喚時にフィールドのカードを全部破壊！？反則やろ！」

「反則も何もあったものではない。制限されていないのだからな
……我はカードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

ディスペア
ＬＰ１１００
手札×３
フィールド
伏せカード×１

「私のターンや！私は手札のヘカテリスを捨てて、デッキからヴァルハラを手札に加えて発動！
ヴァルハラの効果で、手札のアテナを特殊召喚するで！
アテナでダイレクトアタック！これで決まりや！」

「トラップ発動！ドレイン・シールド。このカードは相手の攻撃宣言時に発動し、その攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の

ライフを回復する」

ディスペア　ＬＰ１１００→３７００

「あかん！ダメージを与えるどころか、回復まで…
私はカードを伏せてターンエンドや」

はやて
ＬＰ３２００
手札×２
フィールド
アテナ　攻撃力２６００
神の居城－ヴァルハラ
伏せカード×１

「我のターン。我はサイバー・ドラゴンを特殊召喚する。
さらに魔法カード、エヴォリューション・バーストを発動し、このターンサイバー・ドラゴンの攻撃を放棄することで相手フィールド上のカードを１枚破壊する。
我はヴァルハラを破壊する」

「ヴァルハラを！？（くう…アテナを破壊すると思ったけど、そうはいかへんか）」

「我はカードを１枚伏せターン終了」

ディスペア
ＬＰ３７００
手札×１
フィールド

サイバー・ドラゴン　攻撃力２１００
伏せカード×１

「私のターンや！…魔法カード、おろかな埋葬を発動！このカードの効果で、デッキからモンスターを１体、墓地へ送る。私が墓地へ送るのは、Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳや！
さらに、ヘカテリスを召喚！
天使族モンスターの召喚に成功したから、アテナの効果発動！６００ポイントのダメージを与える！
アテナの効果を発動！自分のフィールド上の天使族モンスター１体を墓地へ送り、『アテナ』以外の天使族モンスターを墓地から特殊召喚する！
ヘカテリスを墓地へ送って、堕天使スペルビアを特殊召喚！スペルビアの効果で、ＶＥＮＵＳを特殊召喚！アテナの効果で１２００ポイントのダメージや」

ディスペア　ＬＰ３７００→１９００

…アテナの効果ダメージのみで１８００ポイントも削られてしまったか…

「アテナでサイバー・ドラゴンを攻撃！」

「そう簡単に攻撃が通ると思うなよ！トラップ発動！サイバネティック・オーバーブーストを発動！自分フィールド上に存在する、サイバー・ドラゴンが攻撃対象になった時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する。そしてその後、デッキ・手札・墓地からサイバー・ドラゴンを２体まで特殊召喚し、デッキから速効魔法１枚を手札に加える。
我はリミッター解除を手札に加える」

「でも、ＶＥＮＵＳの効果で天使族モンスター以外のモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする！…他にすることも無いし、ターンエンドや」

サイバー・ドラゴン×３　攻撃力２１００→１６００

はやて
ＬＰ３２００
手札×１
フィールド
堕天使スペルビア　攻撃力２９００
Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ　攻撃力２８００
アテナ　攻撃力２６００

「我のターン！我はサイバー・フェニックスを召喚！
さらに速効魔法、リミッター解除発動！このターンのエンドフェイズに、我のフィールドに存在するこのカードの効果を受けた機械族モンスターは破壊される。が、攻撃力が倍になる！」

サイバー・ドラゴン×３　攻撃力１６００→３２００
サイバー・フェニックス　攻撃力７００→１４００

「行くぞ！サイバー・ドラゴンでＶＥＮＵＳを攻撃！エヴォリューション・バースト！」

「くっ…」

はやて　ＬＰ３２００→２８００

「そして、ＶＥＮＵＳが存在しなくなったことにより、我のモンスターの攻撃力が戻る！」

サイバー・ドラゴン×３　攻撃力３２００→３７００
サイバー・フェニックス　攻撃力１４００→１９００

「サイバー・ドラゴン2体目で、スペルビアを攻撃！エヴォリューション・バースト」

「トラップ発動！天使の復活！このカードはこのターン墓地へ送られたレベル８の天使族モンスター１体を特殊召喚する！ＶＥＮＵＳを特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン×３　攻撃力３７００→３２００
サイバー・フェニックス　攻撃力１９００→１４００

「ならば攻撃対象をＶＥＮＵＳに変更！」

「痛っ！」

はやて　ＬＰ２８００→２５００

「再び攻撃力が戻る」

サイバー・ドラゴン×３　攻撃力３２００→３７００
サイバー・フェニックス　攻撃力１４００→１９００

「サイバー・ドラゴン3体目で、スペルビアを攻撃！エヴォリューション・バースト」

「きゃあ」

はやて　ＬＰ２５００→１７００

「サイバー・フェニックスでアテナを攻撃！」

「自爆特攻！？どうして！？」

ディスペア　ＬＰ１９００→１２００

「サイバー・フェニックスの効果発動。カードを１枚ドロー。カードを１枚伏せ、我のターンは終了。そして機械族モンスターはすべて破壊される」

ディスペア
ＬＰ１２００
手札×１
フィールド
伏せカード×１

…この伏せカードはカウンタートラップ、マシン・ブラスター。相手のレベル８以下のモンスターの召喚・特殊召喚時に発動し、そのモンスターの特殊召喚を無効にして破壊する。さらに、自分の墓地の機械族モンスターを任意枚数除外することで、除外した枚数分、フィールド上のカードを破壊する。そして破壊した枚数×１枚ドローする。

…次のターンはまだ大丈夫だ。

「私のターンや！…強欲な壺を発動して、２枚ドロー。

…死者蘇生を発動！堕天使スペルビアを特殊召喚！

さらにスペルビアの効果でＶＥＮＵＳを特殊召喚！」

「悪いがアテナの効果は適用させない。トラップ発動！マシン・ブラスター！墓地のサイバー・フェニックスとブラック・ボンバーを除外し、ＶＥＮＵＳの特殊召喚を無効にし、スペルビアとアテナを破壊！そして我は２枚ドロー」

「なら、このカードを伏せてターンエンドや」

はやて
ＬＰ１７００
手札×１
フィールド
伏せカード×１

「我のターン！我はパワー・ボンドを発動し、サイバネティック・フュージョンサポートをチェーン！３体のサイバー・ドラゴンをゲームから除外し、来い！サイバー・エンド・ドラゴン！！パワー・ボンドの効果によって、攻撃力が倍になる。サイバー・エンド・ドラゴンでダイレクトアタック！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「これを待ってたんや！トラップ発動！天使の置き土産！自分の墓地に天使族モンスターが５体以上存在する場合に墓地の天使族モンスターを全てゲームから除外して発動！相手の攻撃力２０００以上のモンスターをすべて破壊し、その攻撃力の合計の２倍のダメージを与える！」

「そんなバカな！！我が、負けた！？」

ディスペア　ＬＰ１２００→－１４８００

「さあ、約束は約束や。パンは私がもらうで」

「…持って行け」

1度食べてみたかったのだが…神界にも滅多に出回らないのに…黄金の卵…

「「はやて（ちゃん）」」

「すごいよ!あのディスペアに勝ったんだよ!?はやて!!」

「そうだよ!はやてちゃん、あのディスペア君に勝ったんだよ!すごいすごい!」

「そ、そうやな。…さてと、中身は…大当たりや!黄金の卵パンや!(もしかしてディスペア君、分かってたんか?だとしたら、少し悪い気もするなぁ…まあでも、デュエルには勝ったんやから、ええよね)

パクッ……美味しい…」

第４２話　ディスペアｖｓはやて　そんなにこれが食べたいか。ならばデュエルだ！

黄金の卵って、いったいどんな味なんでしょうね。
主人公が真剣勝負（？）をして負けたのは今回が初めてですね。

主人公のイメージＣＶは、アポリアさんです。
スクルドは…明るいイメージの人ですね（想像にお任せします）
オーディン、トール、ロキはハラルドとドラガンとブレイブです。
今になって思い出しました。主人公設定に書いておきます。

第43話　ディスペアｖｓ三沢　…デジャヴだな。

～～～三沢サイド～～～

…究極神に対抗するためには…ダメだ！有効なカードなんかない…特にあの究極神帝ラー…あれが出てきた瞬間、相手は完全な敗北を迎える…なら、その前の出てくる2体の究極神をどうにかしなければならない。

…だが、戦闘以外の方法でフィールドを離れると、いかなる場合でもフィールドに戻ってくる…クソッ！！あんなカード、どうやって対抗しろというんだ！

……いや、その前に三極神だ。あれはまだ何とかなりそうだが、それでも破壊したターンのエンドフェイズに対応するチューナーを除外すれば特殊召喚される…この前のブルー3人組の時に聞いていてよかった。効果を知らないよりかは、ずっとアドバンテージがある。とりあえず、購買部に行ってパックを買ってから決めよう。

～～～サイドアウト～～～

「すいません、このパックを全部ください」

「このパックを全てもらう」

……今度はお前か。三沢大地…

「三沢大地。貴様、これを我に譲渡する気は…？」

「ない」

「ならば何も言う必要は無い。こちらも譲渡する気は無い。
そしてここはデュエルアカデミアだ。ならば…」

「デュエルか」

「そうだ。行くぞ！」

「調整前だったんだが、まあいいだろう」

「「デュエル」」

「先攻は俺だ。ドロー。…俺は…そうだな。
モンスターをセットして、カードをセット。
ターンエンドだ」

三沢
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×１

「我のターン！我は正義の味方　カイバーマンを召喚。
そしてこのカードを生贄に捧げ、手札の『青眼の白龍』１体を特殊召喚する！
いでよ！青眼の白龍！！
ブルーアイズで伏せモンスターを攻撃！滅びのバーストストリーム！」

「破壊された素早いモモンガの効果を発動する。

ライフを１０００ポイント回復し、デッキから素早いモモンガを２体まで特殊召喚できる。
俺は２体の素早いモモンガをセットする」

「……我はカードを１枚伏せターンを終了」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
青眼の白龍　攻撃力３０００
伏せカード×１

「よし、俺のターンだ。
まずは２体の素早いモモンガを反転召喚する。
そしておとぼけオポッサムを召喚する。おとぼけオポッサムの効果を発動。
相手フィールド上にこのカードの攻撃力よりも攻撃力の高いモンスターが存在する時、このカードを破壊することができる。そしてこの効果で破壊したこのカードは自分のスタンバイフェイズに特殊召喚できる！
さらに、獣族モンスターが破壊されたことにより１０００ライフを支払い、森の番人グリーン・バブーンを特殊召喚する！」

「だが、攻撃力は２６００、我がブルーアイズには及ばない！」

「永続トラップを発動！ビーストライザー！自分フィールド上の獣族か、獣戦士族のモンスターを墓地へ送ることで、自分フィールド上の獣族か獣戦士族モンスターの攻撃力は、墓地送ったモンスターの攻撃力分アップする！グリーン・バブーンを墓地へ送って素早い

モモンガの攻撃力を２６００ポイントアップ！」

…そうか！たとえモモンガが効果で破壊されてもグリーン・バブーンを特殊召喚できる。
随分と良く考えられたコンボだな…

「素早いモモンガでブルーアイズを攻撃だ！」

ディスペア　ＬＰ４０００→３４００

「ブルーアイズが…だが！我はこのカードを発動する！
速効魔法、ブルーアイズ・リボーン！
我がブルーアイズが戦闘によって破壊された時、デッキ・手札・墓地・除外ゾーンに存在する『青眼』と名のついた光属性・ドラゴン族のモンスターを特殊召喚できる！
我は墓地とデッキから3体のブルーアイズを特殊召喚する！ただし、次のターン、この3体のブルーアイズは融合素材にできず、生け贄にもできない！」

「3体のブルーアイズが揃ってしまった…くそっ！
……ターン…エンドだ」

三沢
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
素早いモモンガ　攻撃力１０００
素早いモモンガ　攻撃力３６００
ビーストライザー

「我のターン！魔法カード発動！滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）！
自分のフィールド上に『青眼の白龍』が存在している時、このターンブルーアイズの攻撃を放棄し、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「なに！？ならばグリーン・バブーンの効果を発動！
１０００ライフ支払い、墓地のこのカードを特殊召喚する！」

「我はカードを1枚伏せターン終了」

ディスペア
ＬＰ３４００
手札×２
フィールド
青眼の白龍×３　攻撃力３０００
伏せカード×１

「俺のターンだ。…俺はジェネティック・ワーウルフを召喚してビーストライザーの効果を発動。
グリーン・バブーンを墓地へ送り、攻撃力を２６００ポイントアップ！
行け！ジェネティック・ワーウルフ！ブルーアイズを攻撃だ！」

「トラップ発動！青眼の裁き（ブルーアイズ・ジャッジメント）！
我のフィールドに3体のブルーアイズが揃っている時、相手フィールド上のカードをすべて破壊する！」

「なっ！？くそっ…なんて効果だ…
だが、グリーン・バブーンの効果を発動！ライフ１０００ポイントを支払い、墓地からこのカードを特殊召喚！

……カードを1枚伏せてターンエンド」

三沢
ＬＰ３０００
手札×３
フィールド
森の番人グリーン・バブーン　攻撃力２６００
伏せカード×１

「我のターン！…我は魔法カード、青眼の救済を発動する。
自分フィールド上の『青眼の白龍』『青眼の究極竜』『青眼の光龍』
1体につき、デッキからカードを1枚ドローする。
我のフィールドにはブルーアイズが3体。よって3枚ドロー！
そして融合を発動！我は3体のブルーアイズを融合させる！いでよ
！青眼の究極竜！
さらにアルティメット・ドラゴンを生贄に捧げ、手札から青眼の光
龍を特殊召喚する！
さらに魔法カードを発動！シャイニング・フォース！
自分フィールド上に『青眼の光龍』が存在する場合、自分の墓地に
存在するブルーアイズと名のついたモンスターの攻撃力の合計分だ
け、このカードの攻撃力をアップする！
我の墓地にはブルーアイズが3体とアルティメットが1体。攻撃力
は１３５００ポイントアップし、１７７００になる！」

「い、１７７００だって！？ならば速効魔法、ラストフォース！
自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、墓地へ送る。
その後、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、そ
の攻撃力を0にし、下げた数値分のダメージを与える！
俺はグリーン・バブーンを墓地へ送り、シャイニング・ドラゴンの
攻撃力を0にして１７７００ポイントのダメージを与える！」

「ハハハハハハハハハハ！ブルーアイズ・シャイニング・ドラゴンの効果発動！このカードを対象にする魔法・罠・モンスターの効果を無効にすることができる！シャイニング・フレア！さらにシャイニング・ドラゴンでダイレクトアタック！シャイニング・バースト！」

「うわあああああ」

三沢　ＬＰ３０００→－１４７００

…前回とは違って勝利できたな。

「三沢、これは我がもらっていくぞ」

「ああ……」

～～～ブルー寮～～～

「ロキ、手に入れてきたぞ」

「待ってました！さて、何が当たるのかなぁ～？」

……これは…

「ロキ、これははずれじゃないのか？」

「……ｏｒｚ」

我があれだけ苦労したというのに…

第４３話　ディスペアｖｓ三沢　…デジャヴだな。（後書き）

序盤がかなり強引な展開になってしまいました…まあデュエル脳ですから仕方がないということで…

第４４話　ＧＯＤＤａｙｓ　１（前書き）

やってしまった…でも、後悔はしません。

第４４話　ＧＯＤＤａｙｓ　１

「ねえ。ディスペア」

「なんだ？」

「このタイトルって…すごく嫌な予感しかしないんだけど…たとえば、ヤンデレヒロインに鉈で首を切られたりとか…」

「随分とリアルだな」

「なんかそんな気がした。というか、なんでこんなタイトルなの？」

「作者が突然この話を思いついたらしい」

「作者って何？」

「さあな。我にもわからん。
ちなみに言っておくが、殺されるかそうでないかはいつでも当人の行動次第だ。
もっとも、神だからな。首を斬られたぐらいで死ぬとは思わないが…」

第４４話　ＧＯＤＤａｙｓ　１

「ディスペア。いつからデュエルアカデミアは再開するのだ？」

「今は人間界で言う６月だからな。後４カ月といったところか」

「…暇だな。そういえばどうやらオーディンが、この世界の日本の、…確か千葉県という場所に別荘を作ったらしい。そちらで過ごさないか？」

「貴様は毎日砂浜に行きたいだけではないのか？」

「へえ。ロリ○ンだね。トール」

「お前たち…」

「わわっ、冗談だよ！だからそんなもの振りまわすな！」

「次言ったらロキ、貴様の命は無いぞ」

「え？ディスペアは？ディスペアはいいの？！」

「ディスペアは『毎日行きたいだけではないのか？』と聞いてきただけではないか」

「う…」

「まあ、向こうで過ごそうがこっちで過ごそうが同じだがな。しかし、せっかくオーディンが作ったのだ。我は行こうと思う」

なにしろスクルドがオーディンと真っ先に行ってしまったからな。このまま我が行かなかったら、スクルドはともかく、フレイアがうるさい。

「ん。なら俺も～」

「しかたがない。我も行くか」

～～～別荘～～～

「オーディン。これはどうやって作ったのだ？
こんな豪邸が建つような平地ではなかったはずだ。
しかも、ここは海岸のすぐそばだ。明らかに土地代もバカにならなかっただろう」

「…ディスペア。金はお前の口座から引かせてもらった。
平地は、消滅魔法で作った」

そんなものをこんなところで使うな。人間が巻き込まれたらどうするつもりだ。

「……まあいい。いくらだ」

「……土地代で1億」

「人間の世界で1億あったら、かなりいい暮らしができるんだよな？」

「……ああ。そうだ」

「土地、高くないか？」

「しかたがないだろう」

「では次の質問だ。建物はいくらだ？」

「0円」

「何が起きたらそうなる」

0円の物件だと？オーディンは何を言ってるんだ。
そんな建物、明らかにいわくつきだろう。

「わたしが創造魔法を使って創った」

「勝手に使うな」

そんな上級魔法を人間界でそんなもののためだけに使うんじゃない。

「とりあえず、入るとするか」

……なんだここは？どこの宮殿だ。
明らかに見せたことがないはずの我の居城の内部をまねているな。

「オーディン。我の城の内部をなぜ知っている」

「…スクルドに教えてもらったのだ」

「…スクルドならまあいいか」

「そんなことより、早く海へ行かないか？」

「…誰もいないぞ。というか、まだ6月だ。いるわけがない。
せめて、あと1カ月待て」

「…しかたがあるまい」

～～～デュエルアカデミア～～～

「あれ?ディスペア君たち、いないね」

「そうやなぁ。確かに昨日まではいたんやけど…」

「とりあえず、もう少し探してみようよ」

「何でいないんやろなぁ…すこしだけミッドを案内してあげたかったんやけど…」

「う～ん…本当にどこ行ったんだろうね?ブルー寮の部屋を見てみたけど、ガラガラになってたし…」

少しぐらいお詫びさせてもらわないと、こっちの気が済まないよ…

～～～サイドアウト～～～

「ディスペア、まだバトルロワイヤルやったことないね」

「いきなりどうしたんだロキ。そんなことやらなくてもいいだろう」

「いや、一度もやったことなかったし、この前十代達がやってたからやってみたくて」

「まあいいか。手加減はしないぞ」

「したらディスペアの負けだよ」

話の直後にオーディンとトールをテレパシーのようなもので呼び、理由も伝える。
2人は分かったと言い、こちらに来る。

～～～数分後、砂浜～～～

「「「「デュエル」」」」

「我のターン！我はローンファイア・ブロッサムを召喚し効果を発動！」

「ゲッ！植物！？ディスペア、ひどい」

「ロキ、手加減するなと言ったのは貴様だろう。
このカードを生贄にし、デッキから植物族モンスター1体を特殊召喚する！
我はギガプラントを特殊召喚！
さらに装備魔法、スーペルヴィスを装備し、デュアル扱いにする！
ギガプラントの効果発動！1ターンに1度、自分の手札または墓地の植物族モンスター1体を特殊召喚できる！
我はローンファイア・ブロッサムを特殊召喚し、効果を発動！
ローンファイア・ブロッサムを生贄にデッキから椿姫ティタニアルを特殊召喚する。
我はカードを1枚伏せターン終了」

ディスペア
LP8000
手札×2

フィールド
椿姫ティタニアル　攻撃力２８００
ギガプラント　攻撃力２４００
＋スーペルヴィス
伏せカード×１

「俺のターン！…そうだね。
俺は手札を1枚捨てて、ＴＨＥトリッキーを特殊召喚！
さらに、ナイトエンド・ソーサラーを召喚！
レベル５のＴＨＥトリッキーにレベル2にナイトエンド・ソーサラーをチューニング！シンクロ召喚！現れろ、アーカナイト・マジシャン！
アーカナイト・マジシャンの効果発動！特殊召喚時に、このカードに魔力カウンターを2つ置く。そして、このカードの攻撃力は、このカードに乗っている魔力カウンターの数×１０００ポイントアップする！
さらに魔法カードを発動！ブースト・マジック！自分の墓地のブースト・マジックを1枚除外して発動！自分のフィールド上に存在する魔力カウンターを乗せることのできるカードに、魔力カウンターを５つ置く！
これでアーカナイト・マジシャンの魔力カウンターは7つ。よって攻撃力は７４００だ！
ま、1順目は誰も攻撃できないからこのあたりでターンエンドかな」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
アーカナイト・マジシャン　攻撃力７４００
＋魔力カウンター×７

アーカナイト・マジシャン…確かあのモンスターはフィールド上の魔力カウンターを1つ取り除くたびに、カードを1枚破壊する。…早めに潰さないと拙いな。ロキのことだ、おそらく、さらに魔力カウンターを乗せるカードを用意しているはず…

「我のターン！我はバイス・ドラゴンを特殊召喚する！この効果で特殊召喚に成功した時、このカードの攻守は半分になる！さらにダーク・リゾネーターを召喚！」

「うっわあ。バイスリゾネーターかよ。レモン？」

「レッドデーモンズを今召喚したところで、格好の的になるだけ！我はレベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！シンクロ召喚！深き闇より出でよ、ダークエンド・ドラゴン！」

「はぁ！？ダークエンド！？空気読もうよ…」

「知らんな。お前こそ空気も読まずにいきなり攻撃力７４００の破壊効果持ちのモンスターを召喚しているではないか。ダークエンド・ドラゴンの効果発動！攻守を５００ポイントダウンし、相手フィールド上のモンスター1体を墓地へ送る！我はロキのアーカナイト・マジシャンを墓地へ送る！」

トールも本気か…まあ、ここで椿姫ティタニアルの効果を発動してもよかったが、アーカナイト・マジシャンは墓地へ送られた方が都合がいい。

「攻撃は許されていない。ターンエンド」

トール
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
ダークエンド・ドラゴン　攻撃力２１００

「わたしのターン。わたしは魔法カード、ダーク・ボムを発動！デッキからレベル８以上の闇属性モンスター１体を手札に加える。
わたしはトーチ・ゴーレムを手札に加える。
速効魔法、禁じられた聖杯を発動。椿姫ティタニアルの効果をエンドフェイズまで無効にし、攻撃力を４００ポイントアップさせる。
さらに魔法カード、風の恵みを発動。手札の風属性モンスターを１枚墓地へ送り、カードを３枚ドローする。
手札から捨てられた風の先導者の効果を発動。このカードが魔法カードのコストとして墓地へ送られた場合、デッキから攻撃力１５００以下の風属性モンスター１体を手札に加える。
私は、Ｔｈｅ　アトモスフィアを手札に加える」

オーディンめ…１ターン目から攻撃力４０００のモンスターを特殊召喚しようというのか…面倒なデッキだな。

「わたしのターンはまだ終わっていない。
わたしの場にトーチトークンを２体攻撃表示で特殊召喚し、トーチ・ゴーレムをトールのフィールドに特殊召喚する。
さらに、墓地の風の先導者と、トーチトークン２体をゲームから除外し、Ｔｈｅ　アトモスフィアを特殊召喚する！
Ｔｈｅ　アトモスフィアの効果を発動。１ターンに１度、１体のみこのカードに相手フィールド上のモンスター１体をこのカードに装備する。そして、装備したモンスターの攻撃力分、このカードの攻

撃力をアップする。
わたしはトールのフィールドのトーチ・ゴーレムを吸収する！
これにより、アトモスフィアの攻撃力は３０００ポイントアップし、４０００になる！
…攻撃はできない。わたしはターンを終了する」

オーディン
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
Ｔｈｅ　アトモスフィア　攻撃力４０００
＋トーチ・ゴーレム

「我のターン！我はギガプラントでダークエンド・ドラゴンを攻撃！」

「くっ！よくも！」

トール　ＬＰ８０００→７７００

「さらに椿姫ティタニアルでロキにダイレクトアタック！」

「ひ、ひどくない！？」

ロキ　ＬＰ８０００→５２００

「メインフェイズ２、ギガプラントの効果を発動！
墓地のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚し、効果発動！
このカードを生贄にデッキから、プチトマボーを特殊召喚！
レベル６のギガプラントにレベル２のプチトマボーをチューニング

！シンクロ召喚！来い、ギガンテック・ファイター！
ギガンテック・ファイターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた場合、自信を含める墓地の戦士族モンスター１体を特殊召喚できる！まだだ！墓地に送られたスーペルヴィスの効果発動！我の墓地の通常モンスター１体を特殊召喚する！
我の墓地には通常モンスター扱いになっているギガプラントを特殊召喚！
我はまだ通常召喚を行っていない！ギガプラントをデュアル召喚！
ギガプラントの効果を発動し、墓地のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚！
ローンファイア・ブロッサムを生贄にし、デッキからギガプラントを守備表示で特殊召喚！
…我のバトルフェイズは終了している。これでターン終了」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
ギガンテック・ファイター　守備力１０００
椿姫ティタニアル　攻撃力２８００
ギガプラント（デュアル）　守備力１２００
ギガプラント　守備力１２００
伏せカード×１

「俺のターン！俺は魔法カード、マジシャンズ・エクストラ・リボーンを発動！このカードは、俺の墓地の魔力カウンターが乗せることのできる魔法使い族の融合またはシンクロモンスター１体を召喚制約および条件を無視して特殊召喚する！復活しろ！アーカナイト・マジシャン！
この効果で特殊召喚されたモンスターに魔力カウンターを３つまで

置く。
当然、アーカナイト・マジシャンに３つ置く！
アーカナイト・マジシャンで椿姫ティタニアルを攻撃！」

「我のティタニアルが…」

ディスペア　ＬＰ８０００→７４００

「アーカナイト・マジシャンの効果発動！このカードに乗っている魔力カウンターを１つ取り除くことで、フィールド上のカードを１枚破壊する！
魔力カウンターを１つ取り除き、オーディンのアトモスフィアを破壊！」

「ク…アトモスフィアがやられたか…」

「これでターンエンドだ！アハハハハハ！」

ロキ
ＬＰ５２００
手札×２
フィールド
アーカナイト・マジシャン　攻撃力２４００
＋魔力カウンター×２

「我のターン！我はダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚する！」

「はぁ！！？ダムド！？」

「トールめ…闇属性の切り札を…」

「わたしの場はがら空き…まずいな」

「さらに魔法カードを発動！星屑のきらめき！自分の墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター１体を選択して発動する！そのモンスターと同じレベルになるように墓地のモンスターを除外し、選択したシンクロモンスター１体を特殊召喚する！
墓地のバイス・ドラゴンとダーク・リゾネーターを除外し、蘇れ！ダークエンド・ドラゴン！」

「ダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚した挙句、ダークエンド・ドラゴンを復活させただと！？」

まずい…我のフィールドには今ティタニアルがいない…これではダークエンド・ドラゴンの効果を無効にすることができない…

「ダークエンド・ドラゴンの効果を発動！攻撃力と守備力を５００ポイントダウンし、ギガンテック・ファイターを墓地へ送る！」

ク…やはりか。しかし、トールは今一つだけミスを犯した。攻撃してから下げればよかったものを攻撃をする前に攻守をダウンさせた。

「ダーク・アームド・ドラゴンでアーカナイト・マジシャンを攻撃！」

「ぐうぅ！」

ロキ　ＬＰ５２００→４８００

「ダークエンド・ドラゴンでオーディンにダイレクトアタック！ダ

ーク・フォッグ！」

「むうぅ！」

オーディン　ＬＰ８０００→５９００

「我はターンエンドだ」

トール
ＬＰ７７００
手札×３
フィールド
ダーク・アームド・ドラゴン　攻撃力２８００
ダークエンド・ドラゴン　攻撃力２１００

「わたしのターン！わたしは復活の翼を発動。自分の墓地に存在するモンスターが風属性モンスターのみの場合、自分の墓地のモンスター１体を特殊召喚する！
わたしはアトモスフィアを復活！
アトモスフィアの効果を発動！１ターンに１度、相手モンスター１体を吸収する！
わたしはダーク・アームド・ドラゴンを吸収！攻撃力を２８００ポイントアップ！
アトモスフィアでダークエンド・ドラゴンを攻撃！」

「うおぉっ！」

トール　ＬＰ７７００→６０００

「わたしはこれでターン終了」

オーディン
ＬＰ５９００
手札×５
フィールド
Ｔｈｅ　アトモスフィア　攻撃力３８００
＋ダーク・アームド・ドラゴン

「我のターン！我はギガプラントの効果によりローンファイア・ブロッサムを墓地から特殊召喚！
ローンファイア・ブロッサムを生贄に効果発動！デッキからギガプラントを特殊召喚！……ようやくお前たちと同じクラスのモンスターを召喚できるぞ！
魔法カード発動！バイオ・フュージョン！
自分フィールド上に存在する『ギガプラント』３体を融合し、『テラプラント』１体を特殊召喚する！いでよ！テラプラント！」

「で、でっけ～～～～！あんな巨大なモンスター、究極神以外じゃ見たことないぞ！」

「ただし、バイオ・フュージョンの発動ターン、我は攻撃ができない。
テラプラントの効果発動。１ターンに１度、手札・デッキ・墓地から植物族モンスターを１体ずつ特殊召喚できる！
墓地からギガプラント、手札からプチトマボー、デッキからロードポイズンを特殊召喚する！
レベル４のロードポイズンとレベル６のギガプラントに、レベル２のプチトマボーをチューニング！光臨せよ！アルティメット・プラント！」

ディスペア
ＬＰ７６００
手札×２
フィールド
アルティメット・プラント　攻撃力４０００
テラプラント　攻撃力３８００
伏せカード×１

「俺のターン！」

テラプラントは効果で破壊することはできない…仮に墓地へ送ってもエンドフェイズに自分の墓地の植物族モンスター３体をゲームから除外し特殊召喚できる…。
そしてアルティメット・プラントは墓地の植物族モンスター１体をデッキに戻すことで相手の魔法・罠・モンスターの効果を無効にする…そして墓地へ送っても植物族チューナー１体を墓地から除外し復活できる…何かヤヴァイの出てきちゃったなぁ…俺の手札は３枚…

「とりあえず俺は、永続魔法、超魔力結界を発動。
発動時に手札を全て墓地に送る。俺が送ったのはゲイジャドウと創世の預言者だ。
このカードの効果は相手の効果によっては無効化されない。さらに、効果終了の間までこのカードを破壊することもできない。自分の墓地に魔法使い族モンスターが１体送られるごとに、このカードに超魔力カウンターを１個置く。そして超魔力カウンターを１個取り除くことで相手のバトルフェイズを終了することができる！そして１ターンに１度、デッキの魔法使い族モンスター１体を墓地に送ることができる！
超魔力結界の効果でデッキから魔導戦士ブレイカーを墓地へ送る！
これでターンエンド」

ロキ
ＬＰ４８００
手札×２
フィールド
超魔力結界
＋超魔力カウンター×６

「我のターン！我は魔法カード、ヘルカーニバルを発動！手札の闇属性モンスター１体を特殊召喚し、その後墓地から闇属性モンスター１体を除外する！手札のディファレント・ディメンション・ダークネスを特殊召喚し、墓地のダークエンド・ドラゴンをゲームから除外する！
ディファレント・ディメンション・ダークネスの効果を発動。このカードを生贄にすることで、ゲームから除外されている闇属性モンスター１体を召喚制約と条件を無視して特殊召喚する！
いでよ！ダークエンド・ドラゴン！」

「またかよ…」

ダークエンド・ドラゴン…しかし、これではディスペアのモンスターを葬ることはできない…しかし、手がないわけではない。

「魔法カード、ダークネス・オーバーヒート発動。このカードはエンドフェイズまで闇属性モンスター１体の攻撃力を倍にする。エンドフェイズ、選択した闇属性モンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。このカードは相手の効果では無効にできない。
我はダークエンド・ドラゴンの攻撃力を倍にする！」

ダークエンド・ドラゴン　攻撃力２６００→５２００

「ダークエンド・ドラゴンでアトモスフィアを攻撃！ダーク・フォッグ！」

「く…またしても…」

オーディン　ＬＰ５９００→５５００

「我はこれでターンエンドだ。そしてダークエンド・ドラゴンの元々の攻撃力分、つまり２６００ポイントのダメージを受ける」

トール
ＬＰ３４００
手札×０
フィールド
ダークエンド・ドラゴン　攻撃力２６００

「わたしのターン。わたしは魔法カード、オーバーウィンドを発動。自分のフィールド上にカードがない場合、自分の墓地の風属性モンスター１体を特殊召喚する。
わたしはアトモスフィアを特殊召喚。アトモスフィアの効果を発動。
わたしはアルティメット・プラントを吸収する！」

「させるとでも思っているのか！アルティメット・プラントの効果発動！
墓地の植物族モンスター１体をデッキに戻し、相手が発動した魔法・罠・モンスターの効果を無効にし、破壊する！」

「それを待っていたぞ。手札の風の宣告者の効果を発動！自分の風属性モンスターが破壊される効果が発動した時、このカードをゲー

ムから除外することで、その発動と効果を無効にする！破壊はしないため、アルティメット・プラントは吸収できる」

Ｔｈｅ　アトモスフィア　攻撃力１０００→５０００

「行くぞ！アトモスフィアでロキにダイレクトアタック！」

「じょ、冗談じゃない！超魔力結界の効果で超魔力カウンターを１個取り除きバトルフェイズを終了させる！」

ひ、ひどい…何で俺ばっかりこんな狙われてるんだ！？

「わたしはこれでターン終了だ」

オーディン
ＬＰ５５００
手札×４
フィールド
Ｔｈｅ　アトモスフィア　攻撃力５０００
＋アルティメット・プラント

「我のターン！…我は狂植物の氾濫を発動！このターン、我の植物族モンスターの攻撃力は、我の墓地の存在する植物族モンスターの数×３００ポイントアップする！
ただし、この効果を受けた植物族モンスターはエンドフェイズに破壊される。
我の墓地には植物族モンスターが８体。攻撃力が２４００ポイントアップ！」

テラプラント　攻撃力３８００→６２００

「オーディン。我のアルティメット・プラントは返してもらうぞ。テラプラントで、アトモスフィアを攻撃！」

「ぐおおおお！」

オーディン　ＬＰ５５００→４３００

「エンドフェイズ、テラプラントは破壊され、テラプラントとアルティメット・プラントの効果発動！
テラプラントの効果により、墓地のティタニアル、ギガプラント、ロードポイズンを除外し、墓地から特殊召喚する！
さらに墓地のプチトマボーを除外し、アルティメット・プラントを特殊召喚する。
我のターンはこれで終了だ」

ディスペア
ＬＰ７６００
手札×３
フィールド
アルティメット・プラント　攻撃力４０００
テラプラント　攻撃力３８００

「俺のターン！とりあえず超魔力結界の効果でデッキから召喚僧サモンプリーストを墓地へ送る。
さらに魔法カード、禁呪～サッド・フォース～を発動！このカードは超魔力結界が存在する場合、超魔力カウンターを１個取り除くことで、効果を無効にされない！
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、相手のモンスター１体をゲームから除外し、プレイヤー全員にそのモンスターの攻

撃力分のダメージを与える！
俺はアルティメット・プラントを除外し、全員に４０００ポイントのダメージを与える！」

「な、なんだと！？」

アルティメット・プラントを除外するだと！？
これではアルティメット・プラントを蘇生させることができない！

「うおおおお！」

トール　ＬＰ３４００→－６００

「むううううぅ」

オーディン　ＬＰ４３００→３００

「クッ…」

ディスペア　ＬＰ７６００→３６００

「ぎゃあああ！」

ロキ　ＬＰ４８００→８００

トールのＬＰが尽きたか…
この状況で一番有利なのは間違いなく我だ。
次のターンで２人とも葬ってやる。

「ディスペア。悪いけどここで終わりだ！

魔法カード、禁呪～オール・エンド～を発動！
このターン、サッド・フォースの効果によって破壊したモンスターがレベル１０以上の場合、そのモンスターのコントローラーに、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！
ディスペア！！４０００ポイントのダメージを喰らえ！」

「な！なんだと！！ぐあああああ！！」

ディスペア　ＬＰ３６００→－４００

「これで俺のターンは終了」

ロキ
ＬＰ８００
手札×１
フィールド
超魔力結界
＋超魔力カウンター×５

「わたしのターン！…わたしは墓地のトーチ・ゴーレムとＴｈｅアトモスフィアを除外し、ダーク・シムルグを特殊召喚！
ダーク・シムルグで攻撃！」

「超魔力結界の効果を発動！カウンターを１つ取り除き、バトルフェイズを終了させる！」

「この瞬間、手札の暴走風の効果を発動！このターン、自分の風属性モンスターの攻撃が阻まれた場合、相手に２０００ポイントのダメージを与える！」

「なに!?負けるぐらいなら道連れだ!手札の禁呪～カウンターフォース～の効果発動!相手のカードによって自分のライフにダメージが発生する時、同じダメージを相手にも与える!」

「しまった!」

オーディン　ＬＰ３００→－１７００
ロキ　ＬＰ８００→－１２００

結局は引き分けか。ロキ…やはり最初に葬っておくべきだったな。

「しかし、まずいな。我らが暴れたせいで、砂浜が…」

ソリッドビジョンといえども、神の戦いだ。
周りに一切の被害が無いなど特別な対策をしない限りあり得ない。

ジー…

「!!サンダーパイル!」

「待てトール」

トールが技を放つよりも前に、その鉄鎚を止める。
視線を感じてはいる。だが、人間のものであり、我に、我らに殺気を向けているわけではない。

「なぜ止めた。ディスペア」

いくら神といえども、むやみやたらに攻撃を行い、人間を殺めるのは納得がいかない。

……もっとも、転生させるために目を付けた人間なら話は別だがな。

「今のは危険分子ではない」

「しかし、明らかに視線を…」

「多分人間の女だ。おそらくは、人間界で言う高校生あたりの者だな」

「デュエルアカデミアの者か？」

「いや、デュエルアカデミアの者ではない。
…我はこのあたりに住む高校生だと思うが…」

「むう。まあいいだろう。とりあえず戻るぞ」

「言われなくても分かっている。そもそも先に帰ろうとしていた我を止めたのはトールだろう」

「……すまない」

別に謝る必要は無いのだがな。
しかし、あの視線は一体…

第４４話　ＧＯＤＤａｙｓ　１（後書き）

修羅場が訪れるかもしれないし…

第４５話　ＧＯＤＤａｙｓ　２（前書き）

デュエルは後半です。
今回はロキの本当の姿が拝めます。
……大体の人がお分かりでしょうが。

第45話　GODDays　2

～～～6月中旬～～～

「しかし暑いな」

「まあ、そうだろう。我は人間界に慣れているが、お前たちはあまり来たことがないからな」

「でも、こう暑いと面倒になるよね～」

「…スクルドがいないな」

「ああ、我の部屋に行ったぞ。涼しいから、と言ってな」

「ディスペアの部屋って涼しかったっけ？」

部屋の隅には溶けることのない氷が置いてある。
そのせいで他の部屋よりかは涼しいのだろうな。

「まあ、他の部屋よりかは涼しいんじゃないか？」

「だったらこんな広間のソファーに座ってなくてもいいじゃん」

「我の部屋は冷房室ではない。そう簡単に入ろうとするな」

「じゃあ何でスクルドは入っていいのさ？」

「……」

「…まあいいや。ちょっと砂浜に行ってくる」

「待て、お前、その姿は変身後だろう？」

ロキはほとんど常にこの姿（ブレイブ）になっている。

このほうが、何かと便利らしい。

「だったらどうしたの？」

「変身は解いていけ」

「なんでさ！？」

「そんな派手な格好をしているよりかはましだ」

「ちぇ、わかったよ」

ロキは変身を解く。ちなみに容姿について言わせてらうと

身長１５７ｃｍ

体重４３キロ

高校生ぐらいの未改造ルチアーノになる。

…小学６年生にしか見えんな。

…未改造でもキチアーノだったが。

「じゃあ、僕は行ってくるね」

「……」

ああ、思い出した。一人称は本来『僕』だったな。

声もブレイブからルチアーノに変わっている。
……声変りはしないのか？まあ、神が声変りした、という話は聞いたことがないがな。

「まて、ロキ。何で変身していたのだ？」

「トール、それは聞くべきことじゃなくない？
まあ教えてあげるけど。
だってさ、トールとオーディンはドラガンとハラルドなのに、僕だけルチアーノってひどくない？」

「ああ、チームラグナロクのことか。
なにも気にすることではあるまい。
それにお前、ルチアーノは改造されてるんだぞ？」

「まあ、そうだけどさ。
じゃあ、今度こそ行ってくるね～バイバ～イ」

…完全なキチアーノだな。
あの姿、というか性格でもなぜ人間の女に好まれるのかが理解できない。

「それを言ったら、ディスペア。お前のことも言えないぞ」

「……我はもう突っ込まないぞ。
ついでに言えば、我にはもうスクルドがいる。
この前だって、人間の女から何か言われたが断らせてもらった」

「当り前だろう。仮にディスペアがそれを受け入れても、スクルドは何も言わないだろうがな」

「ああ。別に言い方をすれば、受け入れる理由がない」

「そうだろうな」

「ところで、ロキは大丈夫なのか？」

「どういう意味だ？」

「あの姿のロキは、見た目からして同年代の異性にモテる。…我が言うことでもないが、勝手に告白されなければいいが…」

「確かに、人間と神がつきあうなど掟に背くからな」

「掟？そんなものは作った覚えがないぞ」

「は？」

「トール。お前が言ってるのは、神界の掟のことだな？」

「そうだ」

「あれは正直言えば、我が創ったものではない。お前たち、つまりは我以外の最高神界で勝手にお前たちが創ったものだ」

我はあんなものを認めた覚えは無い。

恋愛にせよ、遊びにせよそんな掟などに縛られる必要などない。

「つまり、万が一ロキが告白されても…」

「そうだ。それを受け入れるかどうかは、掟など関係なくロキ自身で決めることだ」

「そうだったのか…では、あの掟は一体…？」

「あれはフレイアとゼウスが勝手に決めたものだ。我の耳にも入ってはきたが、却下した」

「そうか。なら、我も…」

「ああ、もしかしたら、人間と、ということもあり得る」

「…少し砂浜に行って来よう。ロキを見てくる」

「分かった。…何かあれば、我に伝えろ。すぐに行く」

「分かった」

～～～砂浜・トール～～～

む。ロキは…いたな。

……あれは誰だ？

「ロキ。戻ってこい。日が暮れる」

「あ、トール。…じゃあね。バイバ～イ」

「は、はい」

「あれは誰だ？ロキ」

「……ま○と○ね」

「……」

ああ、そういうことか。

［オーディン、少し聞きたいのだが…］

［む。トールか。なんだ？］

［ロキがま○と○ねと言っていたのだが、なぜあれがこの世界に存在するのだ？］

［…わかった。話そう。
実は、そろそろいくつかの次元が誕生する。
そこで、その衝撃を受け消滅させないために、その次元に近い世界を遠い世界と一時的に融合させたのだ］

［その誕生する次元とは一体何だ？］

［…そんな事を聞かれてもわたしにもわからない。
ディスペアなら知っているだろうが、そういったことはわたしたちにも話したことは無い］

［…わかった。切るぞ］

［む］

成程な。次元の誕生か。
…しかしよりにもよって融合したのはあの世界か…

「ロキ、綺麗なま○とか？」

「そうだったよ」

「そうか。なら我らもとばっちりを喰らうということは無いだろう」

神の影響力は半端ではない。なぜかは分からないが、世界を移動すれば、その世界の中心人物と深く関わることの方が多い。
我は関わりたいと思う世界とそうでない世界があるからな。
あの修羅場が生まれる世界に行きたいと思ったことは無い。
……ロキはそういう場を好んで行こうとするが…

～～～別荘～～～

「ん？帰ってきたか」

「ただいまディスペア」

「ああ。
…なにも言わなくていい。
オーディンから理由は聞いている。
…しかし厄介な世界が融合してきたようだな。
だが、世界が融合しても、世界同士の影響、つまり重要人物は会うことが無いらしい。
そこだけは問題ないな」

「そうだね」

「さてと、続きだ…これを入れればオーディンの召喚はしやすくなる。
しかしロキの召喚を捨てなければならん。
…3つのデッキに分けるか？」

「何一人で考えてんの？」

「ロキか。いや、このままでは三極神を召喚することが困難を極めるのでな。3つのデッキに分けるか、それか爆発力重視のデッキにするか迷っていたのだ」

「ならさ、これ抜いてこれ入れればいいんじゃない？」

「これを入れればこれが腐る」

「ふ～ん。だったらこれを3枚にして、これを1枚にすれば…」

「ああ、その手があったか。ロキ、感謝するぞ」

「礼を言われるほどのことじゃない。
ところで僕はお腹すいたんだけど…あるぇ？ディスペア？」

さて、そろそろスクルドに作ってもらうか。

「スクルド、時間だから頼む。ロキが腹がすいたそうだ」

「うん。わかった～♪」

…できるまでの間、トールとデュエルでもするか。

「む。ディスペア。ちょうどいいところにいたな。
試したいデッキがあるのだが、少し付き合ってくれないか？」

「…奇遇だな。我も同じことを思っていたところだ」

「なら、まだ日が完全に沈んでいない砂浜でやろうか」

「そうだな」

～～～砂浜～～～

…調整は完了している。後は完成度を試すのみだ。
……2人ほど人間がいるがまあ構うことは無いだろう。
トールはあからさまに関わりたくは無い、という顔をしているしな。

「行くぞ！」

「「デュエル」」

「我のターン！…我は極星獣ガルムを守備表示で召喚しターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
極星獣ガルム　守備力１９００

「我のターン！我はおろかな埋葬を発動し、デッキからスクラップ・ビーストを墓地へ送る！さらにスクラップ・キマイラを召喚し、効果を発動！
このカードの召喚に成功した時、墓地の『スクラップ』と名のついたチューナー１体を特殊召喚できる！
我はスクラップ・ビーストを特殊召喚する！
レベル４のスクラップ・キマイラにレベル４のスクラップ・ビーストをチューニング！シンクロ召喚！起動せよ！スクラップ・ドラゴン！」

スクラップ・ドラゴンか。確かあのカードは自分フィールド上のカード１枚と相手フィールド上のカード１枚を破壊することができるカード。
そしてあのカードが破壊された時、墓地の『スクラップ』と名のついたシンクロモンスター以外のモンスター１体を特殊召喚する。
……面倒だな。相性が悪い。

「さらに我はフィールド魔法、機皇城を発動し、スクラップ・ドラゴンの効果を発動！
我の機皇城とディスペアの極星獣ガルムを破壊する！
破壊された機皇城の効果が発動し、デッキから機皇帝ワイゼル∞を手札に加える」

あのワイゼルは…合体済み機皇帝か…

「スクラップ・ドラゴンでダイレクトアタックだ！」

「クッ…」

ディスペア　ＬＰ８０００→５２００

「我はターンエンドだ」

トール
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
スクラップ・ドラゴン　攻撃力２８００

「我のターン！…我は極星獣グルファクシを特殊召喚する。
このカードは相手のフィールドにシンクロモンスターが存在し、我のフィールドにモンスターが存在しない時、特殊召喚できる！
さらに極星獣タングリスニを召喚し、タングリスニでスクラップ・ドラゴンに自爆特攻を行う！」

ディスペア　ＬＰ５２００→３６００

「これでいい。極星獣タングリスニは戦闘で破壊され墓地へ送られた時、フィールドに極星獣トークン２体を特殊召喚できる。
レベル３の極星獣トークン２体にレベル４の極星獣グルファクシをチューニング！星界の扉が開く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん！大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ！シンクロ召喚！光臨せよ、極神皇トール！！
…我のバトルフェイズはすでに終了している。
カードを２枚伏せ、ターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ３６００
手札×２

フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×２

「我のターン！我はスクラップ・ゴブリンを召喚し、スクラップ・ドラゴンの効果を発動！極神皇トールとスクラップ・ゴブリンを破壊する！」

「カウンタートラップ発動！極神の裁き！自分フィールド上に『極神』と名のついたモンスターが存在する場合、相手が発動した魔法・罠・モンスター効果を無効にし破壊する！」

「ならばスクラップ・ドラゴンの効果に、機皇帝ワイゼルの効果をチェーンし、機皇帝ワイゼルを特殊召喚！さらにスクラップ・ドラゴンの効果により、スクラップ・キマイラを特殊召喚する！機皇帝ワイゼルは１ターンに１度、相手のシンクロモンスター１体を吸収することができる。我は極神皇トールを吸収する！」

「カウンタートラップ、極神の裁き！」

「なっ！？２枚目だと！」

「機皇帝ワイゼルは破壊させてもらうぞ」

「くっ…ターンエンドだ」

トール
ＬＰ８０００
手札×３

フィールド
スクラップ・キマイラ　攻撃力１７００

「我のターン！我は極神皇トールで、スクラップ・キマイラを攻撃！サンダーパイル！」

「くうっ…！！だが、手札のスクラップ・ガードの効果を発動し、スクラップ・キマイラの戦闘破壊を無効にし、手札のこのカードを除外する」

トール　ＬＰ８０００→６２００

「我はカードを２枚伏せターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ３６００
手札×１
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×２

「我のターン！我はスクラップ・キマイラを生贄に捧げ、スクラップ・ゴーレムを召喚！
スクラップ・ゴーレムの効果を発動。１ターンに１度、自分の墓地に存在する『スクラップ』と名のついたレベル４以下のモンスター１体を、自分か相手のフィールドに特殊召喚できる。
我は、スクラップ・ゴブリンを我のフィールドに特殊召喚する！
レベル５のスクラップ・ゴーレムにレベル３のスクラップ・ゴブリンをチューニング！いでよ！スクラップ・ドラゴン！」

「2体目か。…まあ、想定内だ」

「カードを1枚伏せ、スクラップ・ドラゴンの効果発動。
我の伏せカードと、極神皇トールを破壊する」

「トラップ発動！極星宝グングニル！自分の『極神』または『極星』と名のついたモンスターを除外し、フィールド上のカードを1枚破壊する。そして、この効果で除外したモンスターは、2回目の我のエンドフェイズに戻ってくる。
我は破壊対象になった極神皇トールを除外し、スクラップ・ドラゴンを破壊する！
さらに、貴様が選択した伏せカードもスクラップ・ドラゴンの効果が適用され、破壊される」

「なに！？またしても…ならばスクラップ・ドラゴンの効果により、墓地のスクラップ・ゴーレムを特殊召喚し、効果を発動！スクラップ・ゴーレムを特殊召喚する！
さらにスクラップ・ゴーレムの効果でスクラップ・ゴブリンを特殊召喚！
レベル5のスクラップ・ゴーレムにレベル3のスクラップ・ゴブリンをチューニング！シンクロ召喚、スクラップ・ドラゴン！」

1ターンにスクラップ・ドラゴンを2体シンクロ召喚するとは…
あのデッキ、かなりの強化と改造が施されているな…
いつものトールではない。『パワー』から『技』へ戦術が変わっている…

「スクラップ・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「グッ…ク…」

ディスペア　ＬＰ３６００→８００

「我はこれでターンエンドだ」

トール
ＬＰ６２００
手札×１
フィールド
スクラップ・ドラゴン　攻撃力２８００

「我のターン！トラップ発動！神の桎梏グレイプニル！このカードの効果で、デッキから『極星』モンスター１体を手札に加える。
我は極星天ヴァルキュリアを手札に加える。
そして極星天ヴァルキュリアを召喚し、効果発動。
このカードの召喚時、自分のフィールドにこのカード以外のカードが存在せず、相手のフィールドにモンスターが存在する場合、手札の『極星』と名のついたモンスター２体をゲームから除外し、エインヘリアル・トークン２体を特殊召喚する！
レベル４のエインヘリアル・トークン２体にレベル２の極星天ヴァルキュリアをチューニング！北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚、天地神明を統べよ、最高神！極神聖帝オーディン！！」

…トールは既に３体のスクラップ・ドラゴンを召喚している。
そして、仮にスクラップ・ドラゴンを破壊し、墓地のスクラップが蘇生し、次のターンスクラップ・ツイン・ドラゴンが出てきたとしても、我のフィールドのカードはオーディンのみ。１枚破壊し、２枚バウンスしなければならないスクラップ・ツインは効果を発動できない。ここは攻撃するべきだな。

「極神聖帝オーディンで、スクラップ・ドラゴンを攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「チイィッ！」

トール　ＬＰ６２００→５０００

「スクラップ・ドラゴンの効果により、墓地からスクラップ・ゴーレムを特殊召喚する！」

「我はこれでターンを終了する。次のターンのエンドフェイズに、極神皇トールは我のフィールドに戻る」

ディスペア
ＬＰ８００
手札×０
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００

「我のターン！我はスクラップ・ゴーレムの効果で、スクラップ・キマイラを蘇生させる！
そして、スクラップ・ゴーレムを生贄に、レベル５チューナー、スクラップ・ソルジャーを召喚！レベル４のスクラップ・キマイラにレベル５のスクラップ・ソルジャーをチューニング！シンクロ召喚、いでよ！スクラップ・ツイン・ドラゴン！」

「だが、効果は発動できず、攻撃力は３０００。
そんな状態で、我を倒すことなどできはしない！」

「くっ…ターンエンドだ」

トール
ＬＰ５０００
手札×２
フィールド
スクラップ・ツイン・ドラゴン　攻撃力３０００

「我のターン！我は極神聖帝オーディンの効果を発動！インフルエンス・オブ・ルーン！
極神聖帝オーディンでスクラップ・ツイン・ドラゴンを攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「スクラップ・ツイン・ドラゴン！！ぐああ！」

トール　ＬＰ５０００→４０００

「だが、スクラップ・ツイン・ドラゴンもスクラップ・ドラゴン同様、相手によって破壊された場合、墓地のスクラップを特殊召喚できる！
我はスクラップ・ゴブリンを守備表示で特殊召喚！」

「我のエンドフェイズ、極神皇トールが戻ってくる！」

ディスペア
ＬＰ８００
手札×１
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇トール　攻撃力３５００

「我のターンだ！我は死者蘇生を発動！蘇れ！スクラップ・ツイン・ドラゴン！」

「な！？死者蘇生だと！」

「ハハハハハ！スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果で、スクラップ・ゴブリンを破壊し、オーディンとトールをエクストラデッキに戻す！
スクラップ・ツイン・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「ぐあああああ！」

ディスペア　ＬＰ８００→－２２００

「我の勝ちだな」

「……クッ…やはりまだ改良の余地があるな」

「…確かにな。まあ、難しくは考えないことだ。もう飯もできている」

「わかった」

…しかたがない。部屋に戻るとしよう。
剣を取りだし、空間を切って別荘に帰る。
この光景を見ていたものがいることを忘れて…

「えっ！？あ、あの人、今…確かに消えちゃいましたよね！？」

「う、うん…」

「も、もしかしてあの平地に関係があるのでしょうか？」

「そんなの俺にもわからない…もう帰ろう、言葉（ことのは）」

「は、はい…」

別荘は人間には見えないように創られている。
つまり、この別荘が建っているところだけ、不自然に平らなのだ。
それは一夜にしてできていたため、この砂浜に来る人間の間では数々の噂が立っていた。

「ちょっと、見られちゃったんだよ、ディスペア！どうするのさ！？絶対すぐに広まって何か聞かれるよ！あいつら、大概は毎日会ってるみたいだし…」

「そんなことはなるようになる」

「そんなことより、飯が冷める。早くいただくぞ」

「…分かったよ」

…やはり美味いな。

「スクルド、我はもういくぞ」

「わかった～」

部屋に戻り、少し考える。

「…さすがに少し拙いかもしれん…」

第４５話　ＧＯＤＤａｙｓ　２（後書き）

今、深く関わるか、少しだけ関わって終わるか、関わらないか考え中です。
最後の選択肢はほとんどないと思いますが。

気づいたらユニークが１５０００超えてました。
ありがとうございます。

第４６話　ＧＯＤＤａｙｓ　３（前書き）

先に謝っておきます。ごめんなさい。
いろいろ改変してしまいました。
…ちなみに、原作を知らなくてもある程度は楽しめると思いますが、知っていれば今回ロキが殺った人が誰だかわかると思います。

第４６話　ＧＯＤＤａｙｓ　３

～～～７月５日～～～

「全く。ディスペアもディスペアだよ。
見られても反省の色をちっとも見せないなんて。
聞かれて答えるのがどれぐらい大変かちっともわかってない！」

「まあそういうな。ディスペアにはディスペアのやり方がある」

「ちぇ。一回実際に聞かれてみればいいんだ。慌てぶりが目に浮かぶよ。ひゃはははは！」

「誰の慌てぶりが目に見えるのだ？ロキ」

「ゲッ…」

全くロキは。確かに見られた我も我だがな。
しかし、まだ午前１０時か。やはり午前は何もない。
…砂浜にでも行くか。

～～～砂浜～～～

……やはり誰もいないか。

「む。ディスペアか」

誰もいないわけではなかったな。

「オーディンか。少し話してほしいことがある。融合した世界についてな」

「む？」

「融合した世界同士は、なにか関連性があるのか？」

「む。その質問をされたのは初めてだな。…関連性が全くと言っていいほどない世界同士を融合させているのだ」

「その理由は？」

「関連性がある世界同士を融合させると、世界のバランスが崩れる」

成程。確かに、世界同士の重要人物が会ってしまえば、世界は崩れるな。

…稀に関連性がある世界を融合させても何も影響が無いこともあるが…そんなのは本当に稀で、我もまだ2度ぐらいしか見たことが無い。

「だが、よりにもよってＧＸとＳｃｈｏｏｌ　ｄａｙｓか。正直言わせてもらうが、この世界に一度関わると2度とデュエルアカデミアに戻れる気がしない」

「……一つ訂正しよう。Ｓｃｈｏｏｌ　ｄａｙｓだけではない。……ＳｕｍｍｅｒＤａｙｓの方もだ」

「3つの世界が融合した例など聞いたことが無いぞ……ところで

先日、空間移動を見られた」

下手をすれば、主人公や重要人物に聞かれることすらある。
前にも別の世界で何度か聞かれたが、その全てがその世界の重要人物だった。
……おそらく、神の影響力に関係があるのだろうが…

「それにこの前、日本地図というものを見てみたのだが、この国の形が変わっているだろう」

「ディスペア。この国の形が変わってしまうのは仕方がないことだ。
そして一つだけ言っておく。
その世界の重要人物と関わってしまうのは、世界の修正力が働いているからだ」

「やはりか。…だが、今一番話しかけられそうなのは、我ではなくロキだがな」

なにしろこの話は女性中心…背が同じぐらいのロキが関わる可能性が一番高い。
…ロキから話しかけるパターンもあるな。あいつは昔からやたらと人間に話しかけたがる。

「まあ、そう難しく考える必要は無い。所詮は次元誕生までの数カ月、会うこともなくなる日はそう遠くない」

「……ならばもう1つ聞こう。
今、高町たちが来ているのは世界融合か？
世界の修正力か？」

「そのどちらでもない。人間の可能性が示したことだ」

「人間は侮るべきではないな」

「そうだな」

「我は少しデュエルアカデミアに行ってくる」

「なぜだ？」

「校長に帰るというのを忘れていた」

「そういえばそうだったな。頼むぞ」

剣で空間を切り、デュエルアカデミアに移動する。

「消えた…伊藤が言ってた通り…」

「ん？…あいつは確か…」

「…また見られたようだな」

「まあもういいけどね。ひゃはは」

でも、これ以上僕たちのことが広がるっていうのも癪だしね。
魔力なんかの特別要素がある世界じゃないし。
…少しぐらい釘を刺してもいいよね。

「お前か？最近ここにきてディスペアのことを見てたのは」

「…違う」

「そう。なら、あの瞬間移動を見て、それを広めた奴に言ってほしいね。
『これ以上はむやみやたらには広げるな』ってね」

「…ひとつ教えてほしいんだけど」

「ん？何を」

「名前」

「僕らの？それとも僕の？」

「あなたたちの」

「…まあいいか。あの背の高いのがオーディン。で、僕がロキ。剣を使って瞬間移動したのがディスペアだ。他に、トールとスクルドっていうのがいるけど、そんなことは関係ないな。
…もういいだろ」

「…名前、神様みたい」

「まあそうだしね」

「え…？」

一回じゃ理解できなかったのかな？

「だから本当に神だよ。
それにしても以外と反応薄かったね」

笑わないし、驚く反応も薄いね。
過去に何かあったのかな？
僕は生まれたのが以外と最近だからね。世界については知らないことの方が多い。
…失礼だけど、少し過去をのぞかせてもらおうかな。
……ふ～ん。そういうことか。見て後悔した。
この記憶にあった家系図の諸悪の根源は、僕直々にぶっ潰してやろう。
神々はそんなことのために人間を創ったんじゃないということを教えてやる。
…別に今の感情について関係あるようなことは無いね。

「まあいいや。じゃあね～バイバ～イ」

「あ、待って」

「何？」

僕だってそこまで暇じゃ…あるか。

「私の名前…」

…どうでもいいんだけど。どの世界でも主要人物の名前ぐらいは知ってるし。

「ロキのやつ…まさかいつものが発動したのか？」

ロキは並みの主人公補正を上回る、神界での通称、『ロキ補正』を持っている。
……フォローしておくと、ロキが鈍感でフラグ建築士なわけではない。血筋による恋愛フラグすら壊してしまうロキ特有の補正能力…多分、普段のデュエルの異常なまでの運のよさも、そこから来るのだろうな。
…さすがは悪戯と気まぐれの神だ。

「それがどうかしたの？」

「清浦刹那…」

「ふ～ん。ま、覚えていたら、声掛けるよ。じゃあね～。ほら、オーディン。そろそろ行くよ」

「……（別にフラグが立ったわけではなさそうだな。まあそれもそうだろう。
この世界は今更大幅な修正をしても無意味だ。
ロキがフラグ建築士といえど、この世界の運命はもう変えられない…変えるためにはもっと前…２０年ぐらい前なら変えられるはずだろう）」

変わった人間だね。魔力や瞬間移動など、俗に言う超能力を見たこともない世界の人間がなにも恐れずに話しかけてきて、名前まで聞くなんて。
人間って自分の知らない事や物を見ると拒絶するんじゃなかったっけ？

「…ロキ。今帰ったぞ」

「あ、ディスペア」

「もう少しで高町たちに見つかるところだった」

「ひゃはははは。お疲れ様」

［ロキ。疑問を抱えているところ失礼します。わたしの声が聞こえますね？］

［ん？フレイア？何の用？］

［今から新しいデッキを送りますので、受け取ってください］

［何でフレイアが？ゼウスじゃないの？］

［少しわけがありまして…宜しくお願いしますね］

［わかったー］

……お、来た来た。

…さてと、中身は…へえ。面白いデッキだね。

…相手は面白くないか。

「ねぇ、オーディン」

「む？」

「このデッキと戦ってよ」

「…今来たデッキか。いいだろう」

「「デュエル」」

「僕のターン！僕はカードを3枚伏せてターンエンド！」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
伏せカード×３

「わたしのターン。
わたしはフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動。生贄の数×１００ポイントのライフを払うことで、そのモンスターを生贄なしで通常召喚できる。
２０００ポイントのライフを払い、いでよ！ダーク・ホルス・ドラゴン！」

「ゲッ！？攻撃力３０００かよ」

「ダークホルスでダイレクトアタック！」

「トラップ発動！魔法の筒！相手の攻撃を無効にし、その攻撃力分のダメージを与える！」

「おおおおお！！」

オーディン　ＬＰ６０００→３０００

「さらにトラップ発動！永続トラップ、シモッチによる副作用。このカードがフィールドにある限り、回復はダメージに変わる！」

「ロキ…まさかそのデッキは…」

「ご明察。シモッチバーンだよ」

「…く、わたしのターンは終了だ」

オーディン
ＬＰ３０００
手札×４
フィールド
ダーク・ホルス・ドラゴン　攻撃力３０００

「僕のターン！僕はカードを2枚伏せてターンエンド！」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
シモッチによる副作用
伏せカード×３

「わたしのターン」

「ここで永続トラップ発動！真実の眼！このカードがある限り、相手の手札を公開する！そして相手スタンバイフェイズに手札に魔法カードがあれば、相手は１０００ライフ回復する！…オーディンの

手札には魔法カードないね」

「く…わたしはダーク・ホルス・ドラゴンでダイレクトアタックする」

「トラップ発動！攻撃の無力化！相手の攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了する！
ひゃはははは！残念だったねオーディン」

「わたしはターンを終了する…」

フレイアめ…わざとこのようなデッキをロキに渡したな…

オーディン
ＬＰ３０００
手札×５
フィールド
ダーク・ホルス・ドラゴン　攻撃力３０００

「オーディン。一つ言っておくよ。
どんなに力が強くても、当たらなきゃ意味がない。
逆に力が弱くても、それが一発一発しっかり入れば、それはいずれ大きなダメージになる」

「……稀に、力が強いうえに、必ず重い一撃を入れてくる奴もいるがな」

「……ま、まあ僕のターンだ。とりあえずカードをセットしてターンエンド！」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
シモッチによる副作用
伏せカード×３

「わたしのターン…」

「さてと、引いたカードは魔法カードだね。１０００ポイントのダメージを喰らえ！」

「むううう…」

オーディン　ＬＰ３０００→２０００

「わたしはダーク・ホルス・ドラゴンを生贄に捧げ、マテリアルドラゴンを召喚する！」

マテリアルドラゴンとシモッチによる副作用が同時に存在する場合、ダメージはダメージに、回復は回復に変わる。そしてロキのデッキはシモッチバーン、わたしのライフにダメージを与えるカードはもうほとんどない。

「そんなモンスターの召喚を許してあげると思ってたのかな？カウンタートラップ、神の宣告！…僕たちがこのカードを使うのはやっぱり違和感があるね。
ライフを半分払い、マテリアルドラゴンの召喚を無効にし、破壊する！」

「！！！」

「遊びもここまでにしよう。僕は午後からちょっと行きたいところがあるからね。
トラップ発動！ギフトカード！僕からのプレゼントだ！相手は３０００ライフポイント回復する！…といっても、３０００ダメージだけどね」

「ぐおおおおお…」

オーディン　ＬＰ２０００→－１０００

「まあ、こんなものか。じゃあ、オーディン。僕は少し殺ることがあるから」

字は間違ってない。さてと、行くか。

「オーディン。グングニルは借りていくよ」

「何に使うかは知らないが、あまり無意味なことはするな」

「分かってるよ。いでよ！機皇帝スキエル∞！
じゃ、行ってくるね～」

電車に乗っていくより、スキエルに乗って行った方が早いからね。

～～～某町・某所～～～

「ひゃはははははははは！！こんなところにいたんだ。探したよ」

「だ、だれだ！？」

「屑に名乗る名前なんてないよ。まあ、死神とでも思ってくれればいいかな。
ほんとは警察呼んでもよかったんだけど、面倒だから僕直々に裁きを下しに来たよ」

「お、俺は何もしてない！」

ま、この世界よりもひどい世界をいくつか見てきたりもしたけどね。
それにこの世界は今ここでこいつを殺しても、修正されるわけじゃない。
でも、僕としてはこういうミカン箱（人間）の中の腐ったミカンは処理しないと気が済まないからね。
実際、こいつのせいで不幸になってる人間が何人もいるわけだし。
オーディンには悪いけど、グングニルを少し汚すよ。

「答えなんか求めてないよ。
じゃあ、もう話すこともないし、これ以上被害を広めるわけにもいかないから逝ってきな！」

「う、うわあああ！」

……もうこの世界で起こったことは変えられないけど、こいつが創りだす未来は碌な未来じゃないからね。消しておいた方がいいだろう。
……下手をして、スクルドあたりにでも会ったら、…想像したくもない。

～～～砂浜～～～

「ディスペア」

「分かっている。ロキは、この世界の悲惨な運命の根源を葬りに行った」

「止めないのか」

「止めようとは思わん。プラス感情が殆ど無い我から見ても、気にくわないからな」

…スクルドと会ったら、などと考えると、怖気が走る。

「…一つだけ訂正させてもらう。お前はプラス感情がある。なければ、スクルドと、いや、わたしたちと共にいる理由などなくなるはずだ」

「…そうだったな。
ロキもそろそろ帰ってくる。
我は一足先に帰らせてもらう」

～～～某町某所～～～

「さてと、やりたいこともやったし、そろそろ帰るかな。
オーディンやディスペアも僕のことを待ってるだろうしね」

帰りはもちろんスキエルに乗る。人間に見られようが、構うことな

んかない。

「ひゃはははははははははは！」

第４６話　ＧＯＤＤａｙｓ　３（後書き）

ロキが受け取ったデッキはシモッチバーンです。
ロキはこういったえげつないデッキが大好きです。

１５０００ユニーク記念　宗教ｖｓ骸骨（前書き）

本編では絶対に使うことがないであろうネタデッキを使ってみました。

15000ユニーク記念　宗教ｖｓ骸骨

ある日のこと。

「……ん？頼んだ覚えのないデッキが来ているな。どこからだ？」

差出人：ヘイムダル

「ほう。ヘイムダルか。奴のことだ。くだらないデッキを送ってきたのだろうな」

そう言いながら、届いた2つのデッキを確認する。

……成程な、よし、トールとロキに使わせるとしよう。

「トール、ロキ。今からこの2つのデッキを使い、デュエルしてもらおう」

「なぜだ？」

「我もたまには観戦の立場にな…」

「ふ～ん。じゃ、僕はこっちね」

「では、我はこちらだな」

「「デュエル」」

「な、何だこれは!!」

「うっわ…中毒デッキか…ま、まあいいや。
僕のターン!僕は終末の騎士を召喚!このカードの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから闇属性のモンスター1体を墓地へ送ることができる!
僕は、モリンフェンを墓地へ送る!」

はあ、モリンフェンか…どうせこのデッキを送ってきたのはヘイムダルなんだろうな…

「僕はカードを2枚伏せてターンエンド」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
終末の騎士　攻撃力１４００
伏せカード×２

「我のターン!我はダーク・グレファーを召喚する!このカードは1ターンに1度、手札の闇属性モンスター1体を墓地へ送ることで、デッキの闇属性モンスター1体を墓地へ送ることができる!
我は手札のワイトキングを墓地へ送り、デッキのワイトを墓地へ送る!
ワイトキングは墓地で『ワイト』として扱う」

く、ワイトデッキだと!?これを送ってきたのは絶対にヘイムダルだな…

「さらに我は魔法カード、生者の書ー禁断の呪術を発動する！このカードは、自分の墓地のアンデット族モンスター1体を特殊召喚し、相手の墓地のモンスター1体を除外できる。我はワイトキングを守備表示で特殊召喚し、ロキ。お前の墓地に存在するモリンフェンを除外する！」

「な！こっちは宗教デッキだってのに、その教祖を除外！？」

「我はカードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

トール
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
ダーク・グレファー　攻撃力１７００
ワイトキング　守備力０
伏せカード×１

「僕のターン！僕はこのトラップを発動させる！闇次元の開放！このカードは、自分の除外されている闇属性モンスター1体を特殊召喚して、このカードを装備する！ただし、このカードがフィールドを離れると、この効果で特殊召喚したモンスターは除外されるけどね。
僕はモリンフェンを特殊召喚！
さらに魔法カード、団結の力をモリンフェンに装備！このカードは、装備モンスターを含めて自分のフィールドに表側表示で存在するモンスター1体につき、装備モンスターの攻撃力を８００ポイントアップさせる！
僕のフィールドに表側表示のモンスターは2体だ！攻撃力は１６０

０ポイントアップ！」

モリンフェン　攻撃力１５５０→３１５０

「モリンフェンでダーク・グレファーを攻撃！」

「ぐああ…」

トール　ＬＰ８０００→６５５０

「さらに終末の騎士でワイトキングを攻撃だ！」

「ワイトキングの効果発動！墓地のワイトをゲームから除外し、このカードを特殊召喚する！」

「まあいいや。ターンエンドだ！」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
モリンフェン　攻撃力３１５０
＋団結の力
＋闇次元の開放
終末の騎士　攻撃力１４００
伏せカード×１

「我のターン！我はワイトキングを攻撃表示に変更し、このトラップを発動させる！
針虫の巣窟！このカードは、我のデッキの上から５枚のカードを墓

地へ送る！
墓地へ送られたのは、ワイトメア、ワイト婦人、ワイト、ネクロ・ガードナー、ジャスティブレイクの５枚だ。
ワイトメア、ワイト婦人は墓地で『ワイト』として扱う！
ワイトキングの攻撃力は３０００になる！
さらにワイトキングを召喚！行くぞ、ロキ！
我は１体目のワイトキングで、終末の騎士を攻撃だ！」

「グウ…やるじゃん」

ロキ　ＬＰ８０００→６４００

「２体目のワイトキングで、攻撃力が下がったモリンフェンを攻撃！」

「ぐうううう！」

ロキ　ＬＰ６４００→５７５０

「我はこれでターンエンドだ」

トール
ＬＰ６５５０
手札×２
フィールド
ワイトキング×２　攻撃力３０００

「僕のターン！僕はこの伏せカードを発動！思い出のブランコ！自分の墓地の通常モンスター１体を特殊召喚する！来い！モリンフェン！

さらに装備魔法、戦線復活の代償を発動！このカードは、自分フィールド上の通常モンスター1体を墓地へ送ることで、相手、自分問わずに墓地のモンスター1体を特殊召喚する！
僕はモリンフェンを墓地に送って、トールの墓地からワイトを特殊召喚する！
トールの墓地からワイトが1体消えたから、ワイトキング2体の攻撃力は１０００ポイントダウンだ！
そして僕は、カオスエンドマスターを召喚！
行くよ！カオスエンドマスターでワイトキングを攻撃！」

「攻撃力の低いモンスターで攻撃だと！？自滅する気か！」

「トール、一つ忘れてるよ。カオスエンドマスターの属性は…」

「光…！！ロキ、まさか！」

「ダメージステップにオネストを捨てて、攻撃力をワイトキングの攻撃力分、つまり２０００ポイントアップだ！」

「うわあああ！…く、ワイトキングの効果は発動しない！
もう1体のワイトキングの攻撃力は１０００ポイントアップし、３０００になる！」

トール　ＬＰ６５５０→５０５０

「そしてカオスエンドマスターの効果発動！このカードが戦闘によってモンスターを破壊して墓地へ送った時、デッキからレベル５以上で攻撃力１６００以下のモンスター1体を特殊召喚できる！
僕が召喚するのは当然モリンフェンだ！
レベル５のモリンフェンに、レベル３のカオスエンドマスターをチ

ユーニング！シンクロ召喚、いでよ！ライトエンド・ドラゴン！
…僕はこれでターンエンド！」

ロキ
ＬＰ５７５０
手札×１
フィールド
ライトエンド・ドラゴン　攻撃力２６００
ワイト　守備力２００
＋戦線復活の代償

これでトールは次のターン、ワイトを攻撃してさらにワイトキングの攻撃力をアップさせに来る。ひゃははは！

「我のターン！我はワイトキングで、ワイトを攻撃する！」

「どうでもいいよ。こんなやつ」

「だが、これでワイトキングの攻撃力がさらに１０００ポイントアップだ」

ワイトキング　攻撃力３０００→４０００

「さらに我は手札からワイトメアを捨てて効果を発動する！ゲームから除外されているワイトを墓地に戻す！ワイトキングの攻撃力がさらにアップだ！」

ワイトキング　攻撃力４０００→６０００

「我はこれでターンエンドだ」

トール
ＬＰ５０５０
手札×２
フィールド
ワイトキング　攻撃力６０００

「ひゃはははは！僕のターン！僕は魔法カード、調和の宝札を発動！手札の攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナーモンスター１体を捨て、デッキから２枚ドローする！
僕は手札のガード・オブ・フルムベルを捨て、２枚ドロー！
……ひゃはははは！魔法カード発動！クロス・ソウル！このターン生贄にするモンスター１体を、相手モンスター１体で代用できる！」

「な！？クロス・ソウルだと！？」

「僕はワイトキングを生贄に、モリンフェンを召喚！
…もっとも、このクロス・ソウルを使ったターン、僕は攻撃できないけどね。
ターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ５７５０
手札×０
フィールド
ライトエンド・ドラゴン　攻撃力２６００
モリンフェン　攻撃力１５５０

「我のターン！…我は２枚めの生者の書－禁断の呪術を発動！

ワイトキングを特殊召喚し、消えろ！モリンフェン！」

「またモリンフェンを除外！？」

「ワイトキングでモリンフェンを攻撃！」

「ぐあああああ！」

ロキ　ＬＰ５７５０→３００

「我はこれでターンエンドだ。このエンドフェイズに、ワイトキングの攻撃力は６０００に戻る」

トール
ＬＰ５０５０
手札×２
フィールド
ワイトキング　攻撃力６０００

「僕のターン！…ひゃはははははは！！
僕は墓地の終末の騎士とカオスエンドマスターを除外する！
いでよ！カオス・ソーサラー！」

「か、カオス・ソーサラーだと！？どこがモリンフェンデッキだ、貴様～！」

「入ってたんだからしょうがないじゃん。
カオス・ソーサラーの効果発動！このターン、このカードの攻撃を放棄し、相手モンスター１体をゲームから除外できる！
僕はワイトキングをゲームから除外する！

ライトエンド・ドラゴンでダイレクトアタック！シャイニングサプリメイション！」

「うおおおお！」

トール　ＬＰ５０５０→２４５０

「僕はこれでターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ３００
手札×０
フィールド
ライトエンド・ドラゴン　攻撃力２６００
カオス・ソーサラー　攻撃力２３００

「我のターン！…我はモンスターを裏側守備表示でセットし、魔法カード発動！魂の解放！ロキ、貴様の墓地からモリンフェンを除外する！
……ターンエンドだ」

トール
ＬＰ２４５０
手札×２
フィールド
セットモンスター×１

「またしてもモリンフェンを…
僕のターン！僕はカオス・ソーサラーで、裏側表示モンスターを攻撃！

…ワイト婦人か。まあいいや。ライトエンド・ドラゴンでとどめだ！シャイニングサプリメイション！」

「まだだ！ネクロ・ガードナーを除外し、攻撃を無効にする！」

「チッ…カードを1枚伏せてターンエンド」

ロキ
ＬＰ３００
手札×０
フィールド
ライトエンド・ドラゴン　攻撃力２６００
カオス・ソーサラー　攻撃力２３００
伏せカード×１

「我のターン！我はワイト婦人を守備表示で召喚し、カードを1枚伏せる！これでターンエンドだ！」

トール
ＬＰ２４５０
手札×０
フィールド
ワイト婦人　守備力２２００
伏せカード×１

「僕のターン！僕はライトエンド・ドラゴンでワイト婦人を攻撃！」

「く…トラップ発動、自由解放！このカードは、自分のモンスターが戦闘で破壊された時、フィールド上に表側表示で存在するモンスター2体をデッキに戻す！

この効果により、我はライトエンド・ドラゴンとカオス・ソーサラーをデッキに戻す！」

「残念だね。トール。トラップ発動！異次元からの帰還！ライフを半分払い、除外された自分のモンスターを可能な限り特殊召喚する！」

「な、異次元からの帰還だと！？我が除外したのはモリンフェン２体…」

「その通りだ！来いモリンフェン！
モリンフェン２体でダイレクトアタック！！」

「ぐあああああああああああ！！」

トール　ＬＰ２４５０→－６５０

「ほう。こうなったか。
我の予想とは全然違う結果になったな」

「あ、ディスペア」

「我としては、ワイトデッキが勝つと思っていたのだが…やはり予想など当たるものではないな。スクルドの言ったとおりだった」

「でしょ」

「しかし、なぜスクルドはロキの使ったデッキが勝つと？」

「……てへっ♪」

「また未来視を使ったのか。あれは神力の消耗こそ少ないが、あまり多用するのは賛成できんな」

「まあいいじゃん。とりあえず、このデッキは返すよ」

「わかった」

～～～後日～～～

「ヘイムダル～～～～～！！！どこだーーーー！」

「ひゃはははははは！！出てこないと、君のこの城をぶっ壊すよーーーー！！」

「やめてくれえええええええええええ！！」

150000ユニーク記念　宗教ｖｓ骸骨（後書き）

モリンフェンシンクロビートと、ワイトデッキでした。
楽しんでいただけましたか?今回使ったデッキのレシピは、機会があれば載せようと思っています。

第４７話　ＧＯＤＤａｙｓ　４（前書き）

前半がなんかグダグダになってしまいました。
ちなみにロキは、日常だと普通の少年（？）です。
普段からキチアーノだとさすがに扱えない…

第47話　GODDays　4

～～～7月10日～～～

「ひゃはははははははははは！！」

「どうしたロキ？」

「たった今、余震が来たのさ」

「余震が来ただと…？ということは、この時系列からして後1～2カ月か」

「そうだね」

後1～2カ月…もしも2カ月ならデュエルアカデミアが始まる頃か。

「まあ、なにも異常が無ければの話だけどね。
じゃあ、僕は砂浜に行ってくるよ～」

～～～砂浜～～～

…伊藤誠か…朝から暇みたいだね。
……そうでもないか。前に会った…なんだっけ？
ああ、清浦が一緒にいるみたいだし。
……あれ？あいつバイトしてたよね？バイトは？まあいいか。

「朝から随分と仲よさそうだね。ひゃはは」

「あ、君は…」

「なんだ。清浦、知り合いか？」

「うん。前にちょっと」

「僕の名前はロキだ。一応宜しくと言っておくよ。ひゃはは」

「ああ、宜しく」

……ふ～ん。今の会話から察するに、まだ汚れてないか。
それとも、この前ちょっとやっちゃったし、呪いの血が少しは解けたのかな？

「そんなのどうでもいいか」

「ん？どうかしたの？」

「なんでもないよ。さてと、散歩でも行こうかな」

……確かに世界の景色が変わってるね。
ゆっくり歩いたのは初めてだから少し驚くね。
前に世界融合した時はどこだったかな？
ああ、メタル○アとモンスター○ンターだったかな？
どっちも行ったことないけど。

「ねぇねぇ。今の見た？」

「うん。ちっちゃくてかわいかったよね～」

……なんで僕はこんなに背が小さいんだ！！
女神の中でも最も背が低いスクルドでさえ１７０ｃｍなんだぞ！！

「どうしたの？君？迷子？」

……この中学生３人組め…怒ってもいいよね。

「迷子じゃない！それに僕はこれでも君たちより年は上だ！」

「マジ！？ごめんなさい！」

「まあいいよ。もう怒る気もなくしちゃったよ…じゃあね」

はあ。どうしてこうなんだ。
もう戻ろう。

「あれ？早かったね」

「…伊藤か。どいつもこいつも僕を小学生と勘違いするんだよ！…ん？」

あれって、隕石だよね？距離からして、あと１分かな。

「に、逃げろ、ほら、ロキも！」

「いや、僕は別にあんなのが直撃しただけじゃ死なないから」

「はあ！？」

「でも…」

それに、今から逃げてももう遅いしね。
もっとも、こいつらに死なれても困るからやりたくないけど止めよう。

「ぐうっ！？」

！！この隕石……明らかに自然のものじゃないな。
これはキツイな…さすがに…

「ジェノサイド・ブラスト！！」

ドカアアアアアアアン！！

「え？」

隕石が…爆発した？
…あれは…ディスペア！？

「ロキ、そんなもの相手に何を手こずっているんだ」

「うるさいな～今からぶっ壊すところだったんだよ～」

「それは悪かったな。我が出かけようとしたら、永い付き合いの友が隕石相手に苦労している様子だったからな。思わず助けてしまった…」

「…正直言うと、危なかった。サンキュー」

「フッ…まあいい。ロキ、その隕石の中、調べてみろ」

「これは…神の金属の原石!?」

「やはりな。どうりで硬かったはずだ」

「でも、何でこんなものが…」

「そんなことはあり得ない話ではない。
世界が融合すれば、なにが起ころうと別段不思議なことではない」

「ふ～ん」

しかし、まさか神の金属とはな。
世界が融合したぐらいでは生まれないはずなのだが…
……だが、これは使えるかもしれん。

「ロキ、これは持って帰るがいいか?」

「別にいいよ」

…少し重いな。大体１０００ｔ前後か。
これは少し面倒だ。しかたがない。我の剣を使うか。
久しぶりだな…

「ゴッドフォース・オーバードライヴ!」

「うわああ!なんだありゃ!?」

…人間がいることをすっかり忘れていたな。
よりにもよって主人公か。実に面倒だ。

「ロキ、説明は任せた」

「そこで振るの！？」

「ゴッド・ジャッジメント！」

ザシュウウウウウウウウン！！

「あるぇ？ディスペア？（；ω；、）」

神の金属が４つに割れた。これでようやく楽に持ち運べる。
…４往復しなければならないが。

～～～１分後～～～

さてと、運び終わったことだし、ロキの相手をしてやるか。

「ロキ、待たせたな」

「ディスペア遅いよ」

「すまない。１分もかかるとは思わなかった」

まさか時空ゲートが不安定だったとはな…

「説明は終わったか？ロキ」

「一応ね」

「……少し来てくれ、ロキ」

「いいよ～。……また後でね～バイバ～イ」

「ああ、またな～」

…そろそろ昼か。…時間的には問題ないな。

「ロキ、ここだ」

「これってさっきディスペアが運んでた神の金属だよね」

「そうだ。ロキ、これからお前にこの神の金属からエネルギーを抽出してもらう。
当然我もやるから、不平等なわけではない。
抽出したエネルギーは、お前たちのディスクの補強に使う。
…我のディスクは我が誕生した時、究極神の力に耐えられるようになっていたから、もう改造はできない」

「へえ。じゃ、もう始めるよ」

「ああ、やってくれ」

ディスペアはこんなのを運んでたのか。
耐えられないわけじゃないけど、すごいエネルギーだね…

「ロキ、もう少しだ」

そんなことは言われなくても分かってるよ…
……ようやく終わった…疲れたな…

「ロキ、戻っていいぞ。後の処理は我がやっておこう。
だが、ロキ。先にお前のディスクに入れておくぞ」

「わかった～」

すごいね。これ使ったら、下手な闇のゲームの数倍はリアルダメージが出そうだ。
…もう海に戻ろう。神界には海なんてないから、今のうちに見ておかないと。
デュエルアカデミアじゃ、十代達がうるさくて、見に行く暇がないからね。

「ん？昼時なのにまだ居たんだ。人間にしては珍しいね。
……ん？向こうで遊んでるあの子はお前の家族か？」

「そうだよ」

「ふ～ん…」

…とりあえず、せっかくサーフボード持ってきたし、やってみるか。

「イヤッッホォォォオオォオウ！」

…涼しいね。

「へえ、上手いな」

「僕は神だよ？」

「あはは、そうだったな」

……こいつ、本当に信じているのか、それとも子どもの戯言だと思ってるのか

…まあ、こいつになんと思われようとどうでもいいけどね。

もう昼過ぎか…何か事件が無いと、ここまですることが無いなんて思わなかった…

「ロキ、食事を持ってきたんだが、食べるか？」

「あ、ディスペア。これ、誰が作ったの？」

「当然スクルドだ。『ロキと2人で食べてきなよ♪』だそうだ」

「へえ。じゃあ遠慮なく頂こうかな」

「そうしろ。スクルドも喜ぶ」

「スクルドって、誰？」

「…お前は…清浦か。

スクルドはディスペアの妻だよ」

「…そう」

「ロキ、余計なことを言うな」

「だってそれ以外になんて説明すればいいんだよ」

「色々あるだろう。時の女神だとか、ノルン三姉妹だとか。人間世界の神話に置き換えて紹介すればいいだろう」

「…その発想は無かった」

「…話してしまったものは仕方がない。我も食事はまだだ。悪いがもらうぞ」

「ディスペアが持ってきてくれんたんだからいいに決まってるだろ」

～～～15分後～～～

「い、以外とボリュームあったね…」

「ロキ…無理して食べていたのか。もう食べられないのなら、我によこせばよかったものを…」

「だって美味しかったし…」

「そうか。…我は戻るぞ」

「僕はもう少し遊んで行くよ」

「……あまり遅くならないうちに帰ってこい。何故かは分からんが、スクルドが一番心配していたぞ」

「子供じゃないって伝えておいて」

「分かった」

……少し出掛けるか。

～～～別荘～～～

「…スクルドは？」

「む、ディスペアか。スクルドならお前の部屋に行ったぞ」

…やはりか。

「スクルド。これから少し海に出掛けようと思っているのだが、たまにはどうだ？」

「珍しいね。ディスペアから誘いに来てくれるなんて」

「嫌だったか？すまなかったな」

「そ、そんなことないよ！すぐ準備するから待ってて！」

「……わかった」

～～～数分後～～～

「さ、行こ♪」

……やっぱりスクルドは普通が一番だな。

～～～ドミノ町～～～

世界は融合したはずなのだが、主要都市は残っているものだな。

「今は3時か…ここには一応一度だけ来たことがあったな。

……まあ、その時はここはそんなに長くは寄らなかったがな」

「確かにそうだったよね。…あははは」

「どうした？」

「前にディスペアがさ、ここに連れてきてくれた時…」

「！！あれか」

「そうだよ」

そんなことを何故、今、思い出した。

全く大変だったな…まだこの世界には出回ってないシンクロモンスターカードをばら撒いてしまったからな。

あの時の騒動は、思い出したくない。この並行世界があの並行世界とは別でよかった。

まさか海馬が来るとは思わなかったからな。

「ディスペア、私少しだけ寄りたいところがあるんだけど」

「どこだ？」

「あのお店…なんだけど」

あの店は確か昨日ロキが持ってきた観光案内パンフレットに載っていた…

「　喫茶店Ｂ・Ｗ・Ｄ　７月１０日　午後3時オープン！

大特価！アルティメットパフェ４５００円↓３０００円！

本日限り、先着１００名様！

ブルーアイズマウンテン、１杯３０００円のところ、３杯セットで４５００円！先着５０名様限り！４セットまで。

さらに、デュエルキャンペーン実施中！勝利者にはサービスも！

社員一同、心よりお待ちしています！　」

……まあいいか。

「じゃあ行くぞ」

「ありがとう♪」

「いらっしゃいませ！2名様ですね？お煙草は吸われますか？」

「吸わない」

「かしこまりました。それではお席にご案内いたします」

窓際の席か。悪くないな。

「スクルド、眩しそうだな。代わってやる」

「あ、お願い…」

「それでは、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

「ディスペアは何にする？」

「ブルーアイズマウンテン１２杯。…3杯セットで４５００円のはずだから、１８０００円だな」

「そんなに使って大丈夫？」

「なにも問題ない。一応２００万ほど持ってきたからな」

「どこにそんなお金があったの？」

「…創造魔法だ」

神の魔法は人間とは違い、破壊魔法でも色々応用が利く。

創造魔法ともなれば、最高神クラスなら世界を１つ創れるほどだ。

「とりあえず…このアルティメットパフェを１つにするね」

「わかった」

ベルを鳴らして店員を呼ぶ。

「ご注文をお伺い致します」

「ブルーアイズマウンテン１２杯とアルティメットパフェ１つだ」

「かしこまりました」

しめて２１０００円か。

「お待たせしました。ブルーアイズマウンテン１２杯と、アルティメットパフェです。
ごゆっくりどうぞ」

……今の店員、プラ執事に似ていたな。

～～～１時間３０分後～～～

「すまないな、スクルド。時間をかけてしまった」

「別にいいよ。一緒にディスペアと過ごせたし」

「そうか…さて、行くか」

伝票をレジ係に渡す。

「合計で２１０００円になります…と本当は言うところなんですがね。

今、イベントデュエルというキャンペーンをやっていて、デュエルで削れたＬＰに応じて、割引をしてるんですよ。カードとデュエルディスクをお持ちであれば、キャンペーンに参加できますが、いかがなさいますか？」

「スクルド、時間をもう少しだけもらってもいいか？」

「いいよ。ディスペア、頑張ってね♪」

「ああ」

「では、御手数ですが、店の前の方までお越しください」

～～～店の前～～～

「行くぞ！」

「「デュエル！」」

ブルーアイズ関連商品の店…イメージアップのため、ガチデッキは使わないと思うが…

一応このデッキでもいいだろう。ここ最近は使ってないからな。戦

術を忘れると困る。

「では、私のターンです。ドロー。私は封魔の伝承者を召喚して、ターンを終了します」

プラ執事（仮）
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
封魔の伝承者　攻撃力１７００

「我のターン！我は幻銃士を召喚する！幻銃士の効果発動。このカードが召喚または反転召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するモンスターの数まで、攻守５００・闇属性・悪魔族の銃士トークンを特殊召喚できる。
我のフィールドにモンスターは幻銃士のみ。銃士トークンを１体、特殊召喚する。
さらに魔法カード、ナチュラル・チューンを発動！通常モンスター１体を選択し、そのモンスターをチューナーとして扱う！我は銃士トークンをチューナー扱いにする！」

「チューナー？聞いたことがありませんね…」

「まあ見ていろ。一生に１度、見れるか見れないかの光景だ。
レベル４の幻銃士に、レベル４の銃士トークンをチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚、いでよ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「し、シンクロ召喚！？驚きました。こんな召喚方法があったとは…」

周りにギャラリーが集まり始める。
……少し静かにしてくれないだろうか。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンで、封魔の伝承者を攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

「うわあああああ！」

プラ執事（仮）　ＬＰ４０００→２７００

「我はこれでターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻撃力３０００

「私のターンです。…私は2体目の封魔の伝承者を召喚します。封魔の伝承者の効果発動。召喚時、墓地の存在する封魔の伝承者1体につき、一つの属性を宣言します。
宣言した属性のモンスターに攻撃を行う場合、そのモンスターはダメージ計算を行わずに破壊します。
私の墓地には封魔の伝承者が1体存在しますので、闇属性を宣言します。
封魔の伝承者で、レッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃します」

「ク…」

「私はカードを1枚伏せてターンを終了します」

プラ執事（仮）
ＬＰ２７００
手札×４
フィールド
封魔の伝承者　攻撃力１７００　（闇属性破壊）
伏せカード×１

「我のターン！我は死者蘇生を発動し、レッド・デーモンズ・ドラゴンを復活！」

「この瞬間、このトラップカードを発動します。奈落の落とし穴！このカードは、相手が召喚・反転召喚・特殊召喚したモンスターの攻撃力が１５００以上であれば、そのモンスターを破壊し、ゲームから除外します！この効果で、特殊召喚されたレッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊し除外します！」

我のレッド・デーモンズ・ドラゴンが…
だが、これで終わりではない！

「まだだ！我はトライデント・ウォリアーを召喚！このカードの召喚時に、手札のレベル３のモンスター１体を特殊召喚できる！我はデルタフライを特殊召喚する！デルタフライの効果発動！１ターンに１度、このカード以外のモンスター１体を選択し、レベルを１つ上げる！我はトライデント・ウォリアーのレベルを１つ上げ、レベルを５にする！レベル５のトライデント・ウォリアーに、レベル３のデルタフライ

をチューニング！大いなる風に導かれた翼を見よ！シンクロ召喚！
響け、スターダスト・ドラゴン！
スターダスト・ドラゴンで封魔の伝承者を攻撃する！シューティング・ソニック！」

「ううー」

プラ執事（仮）　ＬＰ２７００→１９００

「我はこれでターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
スターダスト・ドラゴン　攻撃力２５００

「私のターンです。私は手札を１枚捨てて魔法カードを発動します。
ブラック・コア！このカードはフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を除外します。
私はスターダスト・ドラゴンを除外します！」

立て続けに２体のレベル８シンクロモンスターがあっさり除外された…
こいつ、強いな。

「さらに私は隼の騎士を召喚します。
隼の騎士でダイレクトアタック！」

「ク……」

ディスペア　ＬＰ４０００→３０００

「隼の騎士は、１ターンに２回攻撃ができます。
もう１度、隼の騎士でダイレクトアタック！」

「うぐ…」

ディスペア　ＬＰ３０００→２０００

「カードを１枚伏せ、ターンエンドです」

プラ執事（仮）
ＬＰ１９００
手札×１
フィールド
隼の騎士　攻撃力１０００
伏せカード×１

「でぃ、ディスペア、大丈夫？」

「心配するな。大丈夫だ。
我のターン！我はカードを２枚伏せ、ターンを終了する！」

ディスペア
ＬＰ２０００
手札×１
フィールド
伏せカード×２

「では、私のターンです。私は魔法カード、大嵐を発動します。フィールド上に存在する魔法・罠カードをすべて破壊します」

「トラップ発動！スターライト・ロード！自分フィールド上のカード2枚以上を破壊する効果が発動した時に発動する！その効果を無効にし破壊、エクストラデッキ、つまり融合デッキからスターダスト・ドラゴン1体を特殊召喚することができる！
いでよ！スターダスト・ドラゴン！！」

「これは困りましたね…私は隼の騎士を守備表示に変更してターンエンドです」

プラ執事（仮）
ＬＰ１９００
手札×１
フィールド
隼の騎士　守備力７００
伏せカード×１

「我のターン！我はチューナーモンスター、異次元の精霊を召喚する！
そして自分が召喚に成功したターン、手札のこのカードを特殊召喚することができる。来い、ワンショット・ブースター！
レベル1のワンショット・ブースターに、レベル1の異次元の精霊をチューニング！シンクロ召喚！シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン！
レベル8のスターダスト・ドラゴンにレベル2のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！アクセルシンクロ！来い、シューティング・スター・ドラゴン！」

「攻撃力３３００ですか…（この伏せカードはミラーフォース。残念ですが、シューティング・スター・ドラゴンは破壊させていただきますよ）これは少し拙いですね…」

「シューティング・スター・ドラゴンで隼の騎士を攻撃！スターダスト・ミラージュ！！」

「トラップ発動、ミラーフォース！残念ですが、シューティング・スター・ドラゴンは破壊です！」

「シューティング・スター・ドラゴンは１ターンに１度、カードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊できる！」

プラ執事（仮）　ＬＰ１９００→－４００

「私の負けですね。では、ダメージを換算して割引させていただきますね。
ダメージ４４００ポイントから、お客様の削られたライフ２０００ポイントを引かせて頂きまして、２４００円割引します。お会計は１８６００円です」

割引はそういう計算になるのか。
…もう少しオーバーキルをしておけばよかったな。
……まあいいか。代金はそんなに問題になる額ではない。
あまり欲を言うのも堕天使のようで癪に障る。

「ありがとうございました～」

……午後５時３０分か。

「スクルド、そろそろ帰るぞ」

「は～い」

あの店員…もしかすれば海馬より強いのではないか？
…む？究極神が疼いている…？最近使っていなかったからか。
我の好戦的性格は究極神にも影響してしまったようだな…。

～～～別荘～～～

「あ、ディスペアとスクルド！おかえり～」

「ああ」

「ただいま、ロキ」

「スクルド、やけに嬉しそうだね。ディスペアと何かあったの？」

「いつも通りだよ」

「はぁ…その『いつも通り』が甘いからなぁ…」

「ロキ、あの後何かあったか？」

「いや？あの2人が話してただけだったよ」

「……暇人だな」

まあ、そんなことは我にも言えることだがな。
……なにもないというのは本当につまらん。
…そろそろ何か起こらないのか？

第４７話　ＧＯＤＤａｙｓ　４（後書き）

いつもより長くなった…その上、グダグダになった…
本当にごめんなさい。

第４８話　ＧＯＤＤａｙｓ　５（前書き）

チート回です。
あれ？さらに長くなった？

第４８話　ＧＯＤＤａｙｓ　５

～～～７月２０日～～～

「機皇神マシニクル∞でロキを攻撃！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「うわあああああああ！」

ロキ　ＬＰ－２５００

「ちぇ～」

「まあこんなところだろうな」

「ふ～ん。ところでさ、最近思いついたんだけど、トーチ・ゴーレムとＢＦって合わない？」

やけに最近トーチ・ゴーレムが人気だな。

「無理だな。相性がいいところが全くと言って良い程見つからん」

「しょうがないからトーチテンペストでも作るか…」

トーチテンペストか。我が作った時は、テンペスト後のトーチ・ゴーレムの処理に困ったな。テンペスト後に抵抗できず、ストレート

負けしたこともあった。

「ディスペア、ちょっとトーチ・ゴーレム貸してよ」

「少し待っていろ。３枚ほどスペアがあったはずだ」

カードは、何故かはわからないが、創造魔法で創ることができない。おそらくは、元が究極神という究極の力であるため、最高神でもその力を超えることができない意味として、創れないのだろう。

……しかし、不定期とはいえ、いつの間にかカードが増えているのは戦略の幅が広がり有難いことだが。…だが、ゼウスのところまで取りに行かなければならないのは面倒だ。

「あったぞ、ロキ。持って行け」

「サンキュー！」

我もそろそろ究極神の改良時が来たようだな。

……ん？トーチ・ゴーレム？確か在庫は…よし、まだ後２枚残っている。

創世の預言者は…３枚ある。

しかし…このタイプではシンクロ召喚ができない。

確かＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄがどこかにあったな。

……後は強制脱出装置か。このあたりに２０枚ほどあったはずだが…後３枚か。

…当然か。オーディンたちには悪いが、３枚とも貰っていこう。

～～～２時間後～～～

「形にはなったな。ナチュラル・チューンを入れたかったが、スペースが無かったしな。
ロキ、少し試しにやってくれ」

「いいよ。トーチテンペストだけどいいよね？」

「構わん。行くぞ」

～～～砂浜・午後2時～～～

「「デュエル」」

同時に、インフィニティ・アイを使う。
究極神召喚には必須だ。

「僕のターン！僕はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

ロキ
LP8000
手札×5
フィールド
伏せカード×1

「我のターン！我は、我のフィールドにトーチトークン2体を特殊召喚し、トーチ・ゴーレムをお前のフィールドに攻撃表示で特殊召喚する！このターン、我は通常召喚できない！
我はカードを2枚伏せ、ターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
トーチトークン×２　攻撃力０
伏せカード×２

「僕のターン！ひゃはははは！僕のフィールドにトーチトークン２体を特殊召喚して、ディスペアのフィールドにトーチ・ゴーレムを攻撃表示で特殊召喚する。ま、このターンは通常召喚できないけどね。
トーチトークンでトーチ・ゴーレムを攻撃！」

「させん！２枚のトラップを発動させる！強制脱出装置！お前のフィールドと我のフィールドに存在するトーチ・ゴーレムを手札に戻させてもらうぞ」

「チッ…残念。僕はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
トーチトークン×２　攻撃力０
伏せカード×２

「我のターン！我は魔法カード、デビルズ・サンクチュアリを発動し、メタルデビル・トークン１体を攻撃表示で特殊召喚する。
トーチトークン２体とメタルデビル・トークンと、我のライフ半分

を生贄に捧げ、降臨せよ！究極神オシリス！我の手札は3枚。究極神オシリスの攻撃力は、６０００となる！
究極神オシリスで、トーチトークンを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「させないよ！トラップ発動、ドレインシールド！究極神オシリスの攻撃を無効にして、その攻撃力分、つまり６０００ポイントライフを回復する！」

ロキ　ＬＰ８０００→１４０００

「我のターンはこれで終了だ」

どれだけライフがあろうとも、究極神帝ラーが召喚された瞬間、相手の敗北は決定する。
ロキのライフがどれだけ回復しようが、なにも問題は無い。

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
究極神オシリス　攻撃力６０００

「僕のターン！」

ほんとに久しぶりに見たな。究極神。テラプラントを見た後に見ても、やっぱりあの大きさは異常だよね。…さっきまですごくいい天気だったのに、空が暗雲に包まれて雷が鳴ってるし。
……究極神オシリスへの魔法とモンスターの効果の影響は全てシャットアウトされてしまう…自爆特攻してもいいけど、ヘル・テンペ

ストを成功させたところでその後のオシリスの攻撃で僕のライフは尽きる。
トラップの効果の影響は発動ターンだけ。次のターン、グラヴィティ・バインドで防いでも、次のターンはもうグラヴィティ・バインドの影響を受けない。
さて、どうしようかな…

「ま、とりあえずトーチトークンを守備表示に変更。カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

ロキ
ＬＰ１４０００
手札×５
フィールド
トーチトークン　守備力０
伏せカード×２

「我のターン！我は究極神オシリスで、トーチトークンを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「ぐうう！」

「我はこれでターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
究極神オシリス　攻撃力８０００

「僕のターン！」

ま、次のターン、オシリスで直接攻撃されても、まだ僕のライフは残る。

……こんなことなら、魔法の筒を入れておけばよかったよ。

いや、そんなことしてもディスペアのことだ。３枚目の強制脱出装置を発動！とか言って、オシリスを逃がしてエンドフェイズに特殊召喚するだろうし。

「僕はこのカードを伏せてターンエンドだ！」

ロキ
ＬＰ１４０００
手札×５
フィールド
伏せカード×３

「我のターン！この瞬間、究極神オシリスの攻撃力は１００００になる！
究極神オシリスでロキにダイレクトアタック！アルティメット・サンダーフォース！」

「うわあああああああ」

ロキ　ＬＰ１４０００→４０００

「と、トラップ発動！フリッグのリンゴ！
自分のフィールドにモンスターが存在しない場合に戦闘ダメージを受けた場合、受けた戦闘ダメージ分だけライフを回復し、その後回復した数値と同じ攻守を持つ『邪精トークン』１体を特殊召喚する

！」

ロキ　ＬＰ４０００→１４０００

「だが、究極神オシリスの効果発動！相手がモンスターを召喚・特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力と守備力を２０００ポイントダウンさせる！」

邪精トークン　攻撃力１０００００→８０００

「我のターンは終了する」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１００００

「僕のターン！邪精トークンを守備表示に変更！カードを2枚伏せてターンエンド！」

ロキ
ＬＰ１４０００
手札×４
フィールド
邪精トークン　守備力８０００
伏せカード×４

「我のターン！究極神オシリスの攻撃力は１２０００になる」

ロキのフィールドには伏せカードが４枚…その内１枚は、最初のターンより伏せられ、使われることのなかったカード…おそらくヘル・テンペスト。
残りの３枚は…多分攻撃回避の魔法か罠カード…

「我は幻銃士を召喚！幻銃士の効果を発動し、銃士トークン２体を特殊召喚する！
幻銃士と銃士トークン２体を生贄に捧げ、降臨せよ！究極神オベリスク！！」

オシリスの攻撃力は８０００まで落ちた。
攻撃しても、邪精トークンは破壊できない。

「ターン終了」

ディスペア
ＬＰ２０００
手札×４
フィールド
究極神オシリス　攻撃力８０００
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「僕のターン！」

究極神オベリスクが出てくるのはちょっと早かったかな？
…天気が、空が青く染まってるね。
…決して晴れているわけじゃない。

「僕は装備魔法、光学迷彩アーマーを邪精トークンに装備する！
これで邪精トークンはダイレクトアタックできる！

邪精トークンを攻撃表示に変更してディスペアにダイレクトアタック！」

「手札のバトルフェーダーを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる。
残念だったな。ロキ」

「……僕はこれでターンエンド」

ロキ
ＬＰ１４０００
手札×４
フィールド
邪精トークン　攻撃力８０００
＋光学迷彩アーマー
伏せカード×４

まだだ、まだ次のディスペアのターンを耐え凌ぐことはできる！

「我のターン！我は我のフィールドにトーチトークン２体を特殊召喚し、ロキのフィールドにトーチ・ゴーレムを特殊召喚する！
バトルフェーダーとトーチトークン２体と我のライフ半分を生贄に、降臨せよ！究極神帝ラー！！」

……空が晴れ渡ったな…宇宙が見えるぐらいだ。
……人間の視力が２以上あれば、宇宙を見ることができるはず…
あ、ラーがまぶしいかな？でも、目は開けていられる程度だから、見れるか。

「究極神帝ラーの効果発動」

「ちょ、この世界には今、究極神帝ラーを見たことない人間がいるんだぞ！いきなりそんな効果を使ったらパニックに…」

「我は前にも何度かラーの効果を使っている。
どんな並行世界であろうとも、一度は見たことがあるはずだ」

そういえばそうだったね。
…オーディンの時空攻撃魔法でも異常なのに…別時空の世界までぶっ潰すとか異常を通り越しておかしい。
…現実逃避もここまでにしよう。

「ゴッド・アルティメット・ノヴァ」

見たくなかった。あんなのどこに逃げたって逃げられるわけないじゃん。
…今までにソリッドビジョンでアレを喰らったことがある人、その恐怖がわかったよ。
オーディンの話が本当だったら時空がどうたらこうたらなんてレベルの話じゃないしね。

「ぎゃあああああああああああ」

ロキ　ＬＰ１４０００→－∞

「あれ？ここは？」

「お前の部屋だ。、ロキ」

「あ、ディスペア…ってあれ!?2時間も気絶してたのか!?」

「当然だ。行かにソリッドビジョンといえど、神は神だ。……と、そんなことよりもう昼だ。スクルドが食事を作ってたから、行って来い」

「ディスペアは?」

「一足先に頂いた。冷めたら不味いわけではないが、スクルドに悪いからな」

「ふ~ん」

ん?この治癒魔法の跡は…スクルドかな?
全くお節介だな。そんなに酷いダメージを受けては無いのに…
まあ、上級神の最強技の数倍は痛かったけど。
痛かっただけで、ボロボロになったわけじゃないしね。

「スクルド~」

「あ、ロキ。ご飯できてるよ」

「んじゃいただくよ」

「うん」

これ…冷製スープだよね?ディスペア…冷めるも何もないじゃん。
いや…もしかして…

「ねえスクルド。ディスペアに出した食事は何だったの?」

「えーと…パスタだよ」

パスタ？ああ、スパゲッティのことか。
具は聞かない方がいいな。
絶対そっち食べたかったってなるし。

～～～２０分後～～～

「ごちそうさま～」

冷静スープだけじゃなかったな。
…いつも十分、というか異常に贅沢な食事のきがするんだよね。
材料もかなり贅沢だしなぁ…
とはいえ、人間界の食材じゃいくら美味しくても神界の食材ほどの美味しさは無いけど。
……スクルドが神界の食材で作った料理食べたことあるのは１回だけだしなぁ…ディスペアが羨ましいよ。

～～～ディスペアの部屋・玉座の間～～～

「……トーチ・ゴーレムは使えるからよしとしよう。
しかし、Ｂｌｏｏ－Ｄは必要ないか？」

「我的にはＢｌｏｏ－Ｄは必要ないな。
万が一、手札に究極神が複数枚来た時、それを引けば窮地に陥る」

「そうだな」

「わたしが思うのは、なぜディープ・ダイバーが入っているのかだ。確かにサーチ効果は使えなくもない。しかし、1体でも究極神が存在すれば、相手は攻撃表示でモンスターを召喚することなど殆どないだろう。そうなれば、ディープ・ダイバーは確実に使えなくなってしまう。
それを入れるよりかは、基本的にトークンを使う戦術なのだから、暴走闘君かナチュラル・チューンのどちらかを投入すればよいと思うが…」

「ディープ・ダイバーか。ならばこれを外したとして、ナチュラル・チューンか暴走闘君のどちらにするか…ん？これは捨て身の宝札か」

「使えなくはないが、不便だと思うぞ」

「そうか。…やはり無難にナチュラル・チューンを入れるべきか…」

「わたしにもう一つだけいいと思うカードがあるのだが…」

「それは何だ？」

「トークン復活祭というカードができた、と先日ゼウスから連絡を受けている」

「トークン復活祭…確か自分フィールド上のトークンをすべて破壊し、破壊した数までフィールド上のカードを破壊する魔法カード…これはいいな。これを投入しておこう」

「しかしディスペア。まだＢｌｏｏ－Ｄのスペースがあるぞ」

というより、ディスペアはなぜまだ見てもいないカードの効果を知っているのだ？

「Ｂｌｏｏ－Ｄのスペースか……どうしたものか…」

ドロー加速のカードは何かないのか…あったな。１体だけ。５枚ドローができるリバースモンスターが。

「これでリストは完成だ。
もう１時半か。早速行ってくる」

話していたほかにも、中身がいろいろ変ってしまったが…

「む。一応デッキは持って行っておけ」

「……そうだな」

デュエルはしなくても、固有ディスクを使えば移動手段にも使える。
……飛行可能なモンスターだけだが。

～～～リリカルサイド～～～

「確かこの辺りだったよね？」

「そやな」

確かにこの辺りに究極神が召喚されたと思ったんやけどなぁ…

「でも、映像が正しければ、神はあっちの方角を向いてたんだから、あっちに行けば何かあるかも…」

「フェイトちゃん冴えてるね。行ってみよう！」

「「うん」」

～～～海岸～～～

「多分この辺りだと思うよ」

「人がいるから聞いてみようよ。
すみませ～ん、この写真の人を見ませんでしたか？」

「ああ、この人ならさっき、向こうのほうに歩いて行きましたよ。
でも、この人に何か用があるんですか？」

「うん。ちょっとね。ありがとうございました！」

「どういたしまして」

～～～なのはたちが行ってから３０秒後ぐらい～～～

「ねえ、伊藤、教えちゃってよかったの？」

「いいんじゃないかな？別に悪そうな人たちじゃなかったし」

「そう…」

「多分この辺りにいると思うんだけど…あ、あれじゃない！？」

「そうやな。行くで！」

「うん！」

ようやく見つけたよ、ディスペア君！

～～～サイドアウト～～～

……面倒な奴らが来たな。
まさか究極神の召喚を頼りにここまで来るとは…
しかたがない。あまり起動させるべきではないが、固有ディスクを使うか。

「来い！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！」

……デュエル中ではないし、戦闘するわけでもないから普通にカードを置けば召喚できる。
戦闘する時などは、普通のデュエルと同じように生贄を揃えたりしなければならない。
普通に召喚しただけでは、攻撃ができないのだ。

「行け、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン」

「グオオオオオオオオ！！」

今奴らと話している時間は無い。
デッキに投入するためのカードを取りに、神界まで行かなければならないのだ。

「な、何で逃げるの～？」

飛行魔法まで使ってくるとは…
ならば…

「トラップ発動、閃光弾！」

カッ！！

「きゃああ！」

「め、目が…」

「ど、どうなってるんや！？」

今のうちだな。

「ハアッ！！」

ズバッ！

剣を構えて空間を斬る。

空間が裂けて、神界までの道ができる。

～～～神界～～～

「聞こえるか、オーディン、トール、ロキ」

神の鏡を使い3人に連絡を取る。

「聞こえているぞ」

「何の用だ？」

「サーフィンの途中で話しかけないで欲しいんだけど」

「すまんな、ロキ。しかし、お前たちに預けておくものが、いや、返しておくものがある。
星界の三極神はお前たちに返しておくぞ」

三極神は、我らが持つのは各1枚。
あとはラグナロクが持つのみだ。
…並行世界は幾つもある。結果的には、三極神はこの世に何枚もあることにはなる。

「なぜだ？」

「先程、高町たちに見つかった。お前たちが見つかったのなら、固有ディスクを使い三極神を召喚して逃げろ」

「ひゃはははははは！あいつら相手に逃げる必要なんてあるの？」

「今はこの世界から離れたくはない」

「そういうことか。わかった」

「切るぞ」

……これでいいだろう。

余程のことが無い限りは、捕まらないはずだ。

「ゼウス。実際に会うのは久しぶり…でもないか。まだ2年もたっていないからな」

「そうですね。一番合わない時間が長かったのは…ああ、１００年ですね」

「そうだったな。ところで…」

「はい。待っていましたよ。持って行って下さい」

「では遠慮なく」

成程な。前回よりかは使えるカードが揃っているな。

さて、すこしぐらいは土産を持って行ってやるとするか。

「ジェスター・コンフィは2枚しかないのか」

「申し訳ありませんが…」

「責めているわけではない」

…まあ、3枚投入しても手札で腐るか。
こいつはフィールドに1体しか表側表示で存在できないからな。
……クリッターを投入すればいいか。

「……今回はこれぐらいだろう。また何かあれば、連絡をよこしてくれ」

「分かりました」

……融合している世界に、さらに別の世界の人間が侵入してきて問題はなかったのか？
…下手をすれば、融合解除の時に高町たちはどちらかの世界に飛ばされるだろうな。
まあ、オーディン達は見つかっていないようだし、別に異常は特に何もなかったのだから良しとしよう。

第４８話　ＧＯＤＤａｙｓ　５（後書き）

おかしい。どうしてこうなった…もう少しコンパクトに話を纏めるつもりだったのですが…

第４９話　ＧＯＤＤａｙｓ　６（前書き）

異常に長くなってしまいました

第４９話　ＧＯＤＤａｙｓ　６

「今日も暇だね～」

「……言うな。我だって思っている。
正直に言って、ここに来た意味はあるのか？」

「さあ？でも、この世界の男女のギクシャクした関係を詳しく見られるのは楽しいと思うよ。
僕的には大歓迎だね。ひゃはははははははは」

「…悪趣味だな、ロキ」

「一言で突っ込み入れるのやめろよ、トール」

「本当の事だろう。数百年前にも、男に謝りに女が来たところで、女をいきなり落とし穴に掛けて…感動の場面が腹筋崩壊の場面になったのだぞ」

「そんなこと知らないね！それに、ディスペアだって普段からそんな黒い服ばかり着ていて、思い切り人間界で言う『怪しい人』じゃないか！」

「ロキ、我は黒い服が好みで着ているのだ」

「かと言って全身黒では、さすがに我もどうかと思うぞ…」

「トールにまでそう言われてはな…」

しかたがない。本当は『ディスペア』になった時に、服も変わったのだが、やはりこの服ではアンバランスか。
……これでいいだろう。

「これで文句は無いだろう」

今の我の服装は、アポリアの服の胸辺りの部分以外の色をやはりというべきか黒にし、胸のあたりにあった青い装飾を、我から見て左側を青、右側を赤、真ん中を金色が少しかかった白だ。
……つまり、究極神カラーと、同じ並び順だ。
究極神は我から見れば左がオベリスク、右がオシリス、中心がラーという並び順になる。

「いくらなんでも似合いすぎ…」

何事!?服ってそこまで印象変わるものだったっけ?

「ちなみにこの状態だと、あの服の時よりも固有ディスクの制御力が１００倍ほど良くなる。剣も振り回しやすいから、こちらの方がいいな」

まあ、究極神召喚には制御などというものは通じないから、究極神以外の現実化ということになるが。
剣は戦闘形態だと、３mになる。重力無視のあのコートを着ていては、満足に戦うことはできない。さらに言えば、前は細身の剣だった。が、この形態になってから、大剣になった。…この程度の大きさの方が戦いやすいがな。

「ていうか、ディスペアって手が大きかったんだ。

あのコート着ているとよくわからないね」

「…カードが小さく見えるな」

「言うな。少し気にしていることだ」

「トール、ロキ、ディスペア。緊急事態だ」

「何事だ、オーディン」

「魔界より、大軍が襲ってきた」

人間達にとっては、緊急事態だろうな。
だが、我らがこの世界にいたことが運のツキだ。

「すぐに行く。無理はするな。『問題は無い』なんて言う言葉が出る前に逃げろよ」

「なぜわたしがあのようなザコ相手に逃げなければならんのだ」

「…そうだったな。愚問だった」

オーディンは魔法の威力だけなら我といい勝負だ。
だが、やはり力の差というものがある。

～～～太平洋上空～～～

「フ…この程度のザコ、オーディン一人で十分だと思ったが…

どうやら、我が出たほうがよさそうだな」

「この…小賢しい！グングニルよ！！」

オーディンがグングニルを掲げた瞬間、その先端より光が放たれ、複数の下級悪魔が消し飛ぶ。

……この次元誕生までもう少し、という時期に来ないでほしいものだ。

「チッ…」

悪魔の攻撃が掠る。だが…

「来い、トラゴエディア！」

戦闘ダメージを受けたことになるので、トラゴエディアが召喚できる。

トーチ・ゴーレムなど召喚しても、相手に力を与えるだけ。

究極神を召喚するなら話は別だが、この程度の相手に召喚することはない。

「我も行くぞ。極雷砲（サンダーカノン）！」

…サンダーフォースのような雷の砲が、悪魔に直撃する。

「トールか。待機していてもよかったのだぞ？」

「お前たちばかり暴れるなど、認めるわけにはいかん」

「随分と余裕な口調だね。トール」

「ロキ、後ろだ！」

ロキに攻撃が当たる…と思いきや…

ドオオオオオオオン！！

「ひゃはははははははははは！！

単純思考のやつって助かるよ。ちょっと罠を仕掛けて置けば、勝手に引っ掛かって死んでくれるんだから」

「無用な心配だったな。…いい加減に我も少しは動くか。

喰らえ！ゴミ共が！インフィニティー・メテオ！」

瞬間、天空より巨大な隕石が悪魔の大軍を巻き込んで大爆発を起こした。

「うわ～～、核爆弾もびっくりの威力だよ。スクルドが見たら、泣きながらディスペアを止めそうだね」

……スクルドの性格からして可能性は0ではないな。

スクルドは我が我の魔法で自滅するとでも思っているのか？

「全く。あれでランクが中級の魔法なんだから、呆れるよ」

「あの程度（インフィニティークラス）で十分だろう。

アルティメットクラスの魔法など、惑星内では放てんぞ」

アルティメットクラスで最初に思いつくのは、やはりゴッド・アルティメット・ノヴァだろう。究極の時空殲滅魔法だ。アレを放てば

最後、究極神と我以外の文字通り全てが消滅する。
……実際には、我の魔法ではないな。
アルティメット・フレアあたりがアルティメットクラスの最下級魔法か。

「まあ、人間界で言えば魔法ランクは
アルティメット≧インフィニティー≧オメガってところだからね。
僕的には、インフィニティーが上だと思うんだけどね。∞って意味だし」

「∞は究極を超えることはできんぞ。
文字の意味で考えてみれば、そうなる」

「そもそも、こんな話をしている余裕などあったのか？」

「いっけね」

しかし、しつこい連中だな。

「極星天ヴァルキュリア召喚！手札を2枚除外し、エインヘリアル・トークン2体を特殊召喚する！レベル4のエインヘリアル・トークン2体に、レベル2の極星天ヴァルキュリアをチューニング！光臨せよ！極神聖帝オーディン！」

「オーディン、こいつら相手にそんな最上級モンスターを呼び出さなくてもいいだろう」

「そうでもないぞ。見ろ」

トールに指差された方を見る。
…悪魔族のシンクロモンスター軍か。
…面白い。

「カードを伏せ、発動！機皇創世！いでよ、機皇神マシニクル∞！」

頭の中で一通りのフェイズを終えれば、ターン終了となり次のカードをドローできる。

「な！？これでは我々のシンクロモンスター軍が…全滅する！」

「機皇神マシニクルよ、ゴミ共のシンクロモンスターを吸収せよ！」

機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００→８１４００

……全部吸収したらこうなった。
天刑王ブラック・ハイランダーが存在したはずなのになぜ奴らはシンクロ召喚できたのだろうか？…先に天刑王以外のシンクロモンスターを召喚していたのか。

「なんかやばそうだから、僕は先に帰るよ」

「ザ・キューブ・オブ・ディスペア！！」

ドカァァァァァァァァァン！！

巨大な爆音とともに、悪魔たちが消えていく。

「ディスペア！！やりすぎだ！」

「少し海水が蒸発しただけだろう」

「大陸１つ分の海水が蒸発したわ！」

…それはさすがにやりすぎたか。

「だが、機皇神マシニクルの攻撃力は８１４００だったのだから、このぐらいは仕方がない」

「そんなことを言ったら、攻撃力８０００で大陸をぶっ飛ばすアレはどう説明するのさ？」

「ロキか。いつの間に戻ってきた」

「今」

この会話に突っ込みを入れるためだけに来たのか。

わざわざ１５０ｋｍはある距離をわざわざ移動してきたのか…

訂正。スキエルに乗って楽して来ていた。

「わたしはいつまでもこんな上空に飛んでいたくは無いのだがな…」

「悪かったな、オーディン。では戻るか」

「そうだな。我もミョルニルを磨かなければならん」

武器の手入れか…我もそろそろするか。

～～～砂浜～～～

…ん？いつも朝から砂浜で寝っ転がっている奴がいないな…
まさか…春が来たのか？ロキの話では、仲は良かったらしいしな。
…ん？

「いたいた」

「……今日は厄日だな」

「ひどっ！ただ私たちは、ディスペア君達にミッドを案内してあげたいだけなんやけど…
っていうか、ディスペア君服変わったね」

「それが謝罪のつもりなら、デュエルしてもらった方がいいな。
服は新調した」

というか、できれば戦闘の時に気付いてほしかった…
帰ってきたと思った途端にこれだからな。

「何でデュエルなの？」

「今は他の世界には行きたいという気分ではない。
それに、正直言えばミッドチルダは過去に何度か行ったことがある。
仕事仕事と忙しいお前たちよりも、我の方がよく知っていると思うぞ」

「う…」

「まあ、ディスペアがデュエルって言ってるんだから、それでいい

じゃない」

テスタロッサだけはやけに聞きわけがいいな。
何かあったのか？

「じゃ、僕は案内してもらおうかな？」

「さすがロキ君や！」

「だって行ったことないし。ディスペアに案内してもらうのもいいけど、たまには人間と行くのもいいかもね。ディスペアとデュエルする奴以外の他2名、案内よろしく」

「OKや！」

「じゃ、先に行って待ってるよ。う～ん…クラナガンの中央広場で待ってるから、早めにね～」

ロキのやつ、案内人より先に行くとは…
まあでも、そういう奴だからな。

「まあいいか。我とやるのは誰だ？」

「じゃあ私」

「テスタロッサか。行くぞ！」

「「デュエル！」」

「我のターン！我は封印の黄金櫃を発動させる！このカードは我の

デッキからカードを1枚除外し、そのカードを2ターン後の我のスタンバイフェイズに手札に加える！
我はオシリスの天空竜を除外する！
そしてカードを1枚伏せ、我のフィールドにトーチトークン2体を特殊召喚し、テスタロッサ。貴様のフィールドにトーチ・ゴーレムを特殊召喚する！
さらに我は手札からジェスター・コンフィを攻撃表示で特殊召喚！
……まあこんなところだろう。ターン終了」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
オシリスの天空竜（残り２ターン）
フィールド
トーチトークン×２　攻撃力０
ジェスター・コンフィ　攻撃力０

「私のターン。とりあえず、トーチ・ゴーレムを攻撃表示に変更するね。
そして、ＢＦ－蒼炎のシュラを召喚するよ。
さらにＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚するよ！
トーチ・ゴーレムで、トーチトークンを攻撃！」

「トラップ発動！永続トラップ、ガリトラップ－ピクシーの輪－！
このカードがフィールドにある限り、相手は我の表側攻撃表示で存在する、最も攻撃力の低いモンスターを攻撃できない！」

「私はこれでターンエンド」

「このエンドフェイズ、ジェスター・コンフィの効果発動！

このカードがこのカードの効果によって特殊召喚されていた場合、相手のエンドフェイズに、相手の表側表示のモンスター1体と、このモンスターを手札に戻す！
我はトーチ・ゴーレムとこのカードを手札に戻す！」

フェイト
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
ＢＦ－蒼炎のシュラ　攻撃力１８００
ＢＦ－黒槍のブラスト　攻撃力１７００

「我のターン！オシリスは次の我のターンに手札に加える！
我は魔法発動！トークン復活祭！このカードは、我のフィールドに存在するトークンをすべて破壊し、その数までフィールド上のカードを破壊する！
我のトーチトークン2体を破壊し、シュラとブラストを破壊する！
我のフィールドにトーチトークン2体を特殊召喚し、テスタロッサのフィールドにトーチ・ゴーレムを特殊召喚する！そしてジェスター・コンフィを特殊召喚する。
我のターンはこれで終了」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
トーチトークン×２　攻撃力０
ジェスター・コンフィ　攻撃力０
ガリトラップ－ピクシーの輪－

「私のターン！……ＢＦ－極北のブリザードを召喚して、効果発動。このカードの召喚に成功した時、墓地のレベル４以下のＢＦを１体特殊召喚できる！
私は、シュラを特殊召喚するよ！
……カードを１枚伏せてターンエンドだよ」

「ジェスター・コンフィの効果により、トーチ・ゴーレムとこのカードは我の手札に戻す」

シンクロをすればよかったものを…ブリューナクを持っていないのか？

フェイト
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ＢＦ－極北のブリザード　攻撃力１３００
ＢＦ－蒼炎のシュラ　守備力１２００
伏せカード×１

「我のターン！究極神オシリスを手札に加える！
我は幻銃士を召喚する。幻銃士の効果により、銃士トークンを１体特殊召喚する！
魔法カード、ナチュラル・チューンを発動！銃士トークンをチューナー扱いとする！
レベル４の幻銃士にレベル４の銃士トークンをチューニング！シンクロ召喚！来い、スターダスト・ドラゴン！
スターダスト・ドラゴンで、ブリザードを攻撃！シューティング・ソニック！」

「（戦術を変えてきた！？）くっ…」

フェイト　ＬＰ４０００→３５００

「我はこれでターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
スターダスト・ドラゴン　攻撃力２５００
ガリトラップ－ピクシーの輪－

「私のターン！私はＢＦ－疾風のゲイルを特殊召喚する！」

…口調が変わってきたな。本気になったか…？

「ゲイルの効果を発動するよ！１ターンに１度、相手のフィールド上に存在するモンスター１体の攻撃力と守備力を半分にできる！ディスペアのスターダスト・ドラゴンの攻守を半分にする！」

スターダスト・ドラゴン　攻撃力２５００→１２５０

スターダストが…ゲイルよりも下に…

「さらにＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚！
蒼炎のシュラで、スターダスト・ドラゴンを攻撃！」

「ク…」

ディスペア　ＬＰ４０００→３４５０

「シュラの効果を発動！このコードが相手モンスターを戦闘によって破壊して墓地に送った場合、デッキから攻撃力１５００以下の『ＢＦ』と名のついたモンスター１体を特殊召喚できる！
私は、ＢＦ－大旆のヴァーユを特殊召喚するよ！
ゲイルでダイレクトアタック！」

「手札のバトルフェーダーの効果を発動！相手が直接攻撃を宣言した時、手札のこのカードを特殊召喚し、バトルフェイズを終了する！」

「やるね…私はカードを１枚伏せてターンエンドだよ」

フェイト
ＬＰ３５００
手札×１
フィールド
ＢＦ－蒼炎のシュラ　攻撃力１８００
ＢＦ－黒槍のブラスト　攻撃力１７００
ＢＦ－疾風のゲイル　攻撃力１３００
ＢＦ－大旆ヴァーユ　攻撃力８００
伏せカード×２

「我のターン！」

……大旆のヴァーユをフィールドに残す理由はただ１つ。
ゴッドバードアタックのコスト。

「トラップを発動！ゴッドバードアタック！大旆のヴァーユを生贄

にして、ディスペアのガリトラップ－ピクシーの輪－と、バトルフェーダーを破壊する！」

……もう1つの伏せカードは恐らく、攻撃反応型破壊トラップ。
先程発動しなかったのは、スターダスト・ドラゴンが存在していたから。
そして今引いたのは…オベリスクの巨神兵。いや、究極神オベリスク。
我の予想が当たっていれば、このターン、ゲイルの戦闘超過ダメージ６７００を受けてテスタロッサのライフは－３２００になる。
どちらにしても、召喚はするが…

「我は我のフィールドにトーチトークン2体を特殊召喚し、テスタロッサのフィールドにトーチ・ゴーレムを特殊召喚する。
さらにジェスター・コンフィを特殊召喚する！
3体のモンスターと我のライフ半分を生贄に捧げ、究極神オベリスクを特殊召喚する！」

「この瞬間、速効魔法を発動するよ。月の書！このカードの効果によって、究極神オベリスクを裏側守備表示にする！」

「だが、究極神オベリスクは魔法の影響は発動ターンしか有効にはならない！
我のエンドフェイズ、究極神オベリスクへの月の書の影響が消滅し、攻撃表示に戻る」

ディスペア
ＬＰ１７２５
手札×１
フィールド

究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターン！…実は楽しみにしてたんだ。究極神が召喚されるのを」

「勝てない相手を呼び出されて、それが楽しいだと？」

「うん。その『勝てない相手』をどうやって倒すか、ずっと考えてたんだ。

……パワー押ししか思いつけなかったけど」

パワー押ししか思いつけないのは仕方がないことだ。

究極神は、戦闘以外でフィールドを離れた場合、例え特殊召喚が封じられている状況でも、その効果に囚われず特殊召喚される。

「私はレベル４の黒槍のブラストに、レベル３の疾風のゲイルをチューニング！シンクロ召喚、ＢＦ－アーマード・ウィング！！」

アーマード・ウィング…戦闘によっては破壊されず、その超過ダメージを０にし、戦闘を行った相手モンスターに楔カウンターを置くモンスター。

そしてその楔カウンターを取り除くことで、エンドフェイズまでそのモンスターの攻守を０にする。

しかし防戦一方では、我の究極神帝ラーが降臨し、ライフを消滅させるのが先…

更に究極神にはモンスター効果の影響は通じない。

ラヴァ・ゴーレムも、ヴォルカニック・クイーンも無意味だ。

そしてまだテスタロッサのフィールドにはシュラがいる。

攻撃表示のままターンを終了すれば、オベリスクの一撃が待っている。

「さらに、チューナーモンスター、ＢＦ－東雲のコチを召喚！
レベル４の蒼炎のシュラに、レベル４の東雲のコチをチューニング！シンクロ召喚、ギガンテック・ファイター！」

ギガンテック・ファイター…あれは戦闘で破壊された時、あのカード自信を含め、墓地の戦士族モンスター１体を特殊召喚できる効果を持ったモンスター…さらに、自分・相手問わず、墓地の戦士族モンスター１体につき、その攻撃力を１００ポイントアップさせる。だが、所詮攻撃力２８００だ。究極神の敵ではない。

「私はこれでターンエンド」

フェイト
ＬＰ３５００
手札×１
フィールド
ＢＦ－アーマード・ウィング　攻撃力２５００
ギガンテック・ファイター　守備力１０００

「我のターン！」

ク…究極神は確かにモンスター効果の影響を受けない。
だが、基本的にはそのテキストに『相手モンスター』と記述されているカードの効果の影響を受けないのであって、『戦闘によっては破壊されない』という、究極神には関係のないカードの効果を無効にすることはできない…

「我はこのターン、なにもせずにターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ１７２５
手札×２
フィールド
究極神オベリスク　攻撃力８０００

「私のターン！」

少し何かを警戒して、オベリスクを守備表示にしてくれたら、ブラックフェザー・シュートが使えるんだけどな…
でも、このカードの効果がうまくいけば、このターンで倒せるかも…

「私は魔法カード、ブラックフェザー・メテオを発動！自分フィールド上に、レベル７以上の『ＢＦ』と名のついたモンスターが存在する場合そのモンスターを選択して、自分フィールド上に存在するモンスターのレベルの合計が８になるように除外して発動！
選択したモンスター以外のフィールド上に存在するカードをすべてゲームから除外して、相手に１５００ポイントのダメージを与える！」

「クッ…」

ディスペア　ＬＰ１７２５→２２５

「アーマード・ウィングでダイレクトアタック！」

これでどう！？

ディスペア　ＬＰ２２５→－２２７５

「え？通った……？」

「……成程な。テスタロッサ。貴様のおかげで、疑問が解けた」

「え！？ま、待って…って、もういない…」

～～～別荘～～～

「ディスペアが負けるとはな」

「トール、お前は本当にディスペアが負けたとでも思っているのか？」

「どういうことだ？オーディン」

「あの時、ディスペアの手札にはバトルフェーダーがあった」

「なんだと！！つまり、ディスペアはわざと負けたというのか！！」

「そういうわけではない。恐らくは、あのデュエル中に、なにか思いついたことがあったのだろう」

「だが、例え思いつきがあったとしても、ディスペアがわざと負けるなど…」

「むう…」

「ん？オーディンとトールか。一言もかけずに我の部屋に入るのは

感心しないな」

「すまん」

「分かればいい。…お前たちの考えていることは、分かっている。なぜ我が逆転できたのにもかかわらず敗北したのかだろう？」

「その通りだ。一体何があったというのだ？」

「……究極神の意思だ」

「何！」

「敗北しろ、と言っていたわけではない。ただ、今の状態のデッキで勝っても、エナジーが増えないらしい」

エナジーがある程度たまると、カードが生み出されるとゼウスが言っていた。

「つまり…」

「そうだ。簡単にいえば、デッキを強化しろということだ」

ここまで言えば、こいつらなら理解できる。

……べつに遠回しな言い方はしていない。

さて、強化するか。

第４９話　ＧＯＤＤａｙｓ　６（後書き）

２話に分けるべきでした。ごめんなさい。

第４９．５話　ＧＯＤＤａｙｓ　６　ロキサイド（前書き）

４９話で、ディスペアがフェイトとデュエルしていた時の、ロキの様子です。

第４９．５話　ＧＯＤＤａｙｓ　６　ロキサイド

「ふ～ん。ここがクラナガンか～」

今僕はクラナガンに来たところだ。

どうしてこうなったかは、前回を見て欲しい。

「随分と発展してるね。…でも、魔力を持つ人間が多い世界にしては、実際に使っている人間は少ないな」

それにしても遅い。なにやってるんだろう。

～～～２時間後、午前１１時～～～

時間軸がずれててよかったよ。あの世界からの直結ルートなら、時差が結構あるからね。

神界経由のルートだと、時差が完全になくなって、今頃夕方だろうからね。

……まだ来ないのかな？

「お待たせ～」

「僕を待たせるなんて、いい度胸じゃん」

「ごめんごめん。あの世界からこのミッドチルダまで、時間がかかるから遅れてもうた」

「いくら時間がかかっても、後３０分は早く来てほしいものだね。飛行魔法が使えるんだから、もっと早く来れたはずだろ？」

「それが、この世界だと魔法は無断で使えないんだよ」

はぁ？

「どゆこと？」

「管理局の法でね、勝手に魔法を行使しちゃいけない決まりになっているんだ」

なにそれ？人間の言う『自由』っていうものがなくなってんじゃん。

「キャアアアアアア！」

「「！？」」

「高町一等空尉！八神二佐！ちょうどよかった！指名手配中のＳＳランク魔導師が、クラナガンで無差別攻撃を行っています！逮捕にご協力ください！」

確かこの世界では、ＳＳ異常はデッド・オア・アライブだったな。……少しぐらい遊んでも、ディスペアは怒らないだろうし、いいよね。

「ロキ君はここで待ってて！ちょっと用事が入っちゃった」

「冗談じゃない。こんな面白そうなイベントに、置き去りにしないで欲しいね」

「面白そうって…すごく危険な人がいるんだよ！？」

「それがどうかした？」

「下手したら死んじゃうんだよ！？」

「五月蠅いな。僕は先に行くよ」

「ちょっと！…ああ、もう！」

「あ、高町。一応確認しておくけど、相手はデッド・オア・アライブだよね」

「そうだけど…」

「じゃ、殺してもいいか」

「こ、殺すって、相手はＳＳランクだよ！ロキ君でも勝てるか分からないよ。
それにどんな人でも、殺すなんて…」

こいつら、いくらなんでも甘すぎだろ。
救いの余地があるんなら、最初から犯罪者になんてならないって。

「……お前たちを見ていると、反吐が出るよ。
ほら、丁度お客様も来たことだし」

「どけぇ！」

「時空管理局機動六課の高町です！武装を解除して投降してください！」

「知るかそんなもの！喰らえ！」

へえ。人間といえど、この世界の基準でＳＳランクというだけはあるね。

砲撃魔法を溜めなしで撃てる辺りは評価できるよ。

でも、僕にとっては、ただのザコ程度だけど。

「所詮はＳＳといっても人間だしね」

そう言い、指１本で砲撃を四散させる。

「な！？お、お前は誰だ！」

「名前ぐらいは教えてあげるよ。僕の名前はロキ。よろしく。

……って言っても、数十秒後には、お前の意識なんてどこにもないけど。

僕の休日、というよりも楽しもうとしてた時間を潰した罪は大きいよ」

「うるせぇ！」

「危ないな。いきなり撃ってくるなんて、堕天使でも滅多にしないのに」

「なん…だと…？俺様の最大の一撃が…指１本で弾かれた！？」

「お前の力なんてこんなものだよ。

僕に勝つつもりなら、後１００倍は強くならないと。
僕も少しは技を見せないと、最大の一撃を見せてくれたのに失礼だしね。
無限地獄へ行ってきな！ナイトメア・ファントム！！」

～～～悪夢の中～～～

「な…なんだここは？確か俺はロキとかいう奴に…」

「ひゃはははははははははははははははは！！」

「うわあああ！な、何だ！お前は！？」

「何って、ロキさ。…ああ、君から見たら僕は巨大に見えるんだったね。
ここは…一言で言うと悪夢さ。僕がここから姿を消した瞬間、君は今までの悪夢を体験するのさ！」

「な！？」

「じゃあ、せいぜいがんばってね～。バイバ～イ」

まあ、あの程度の精神力じゃ、すぐにショック死するだろうけど。

「う、う…うわあああああああああああ！た、助けてくれぇぇぇ！！」

～～～現実世界～～～

「ろ、ロキ君…なにしたの？」

毎回魔法使うたびに聞かれても困るんだけど。
それでも、教えてあげないこともないけど。

「このカスを悪夢の中に閉じ込めてやっただけさ。
……もう３０秒ぐらい経つか。そろそろショック死するころだと思うけど…」

「今すぐ止めて！」

……少し遅かったみたいだね。

「もう遅い。後１０秒早ければ、鬱病で済んでいたのに…」

「そ、そんな…」

それに、あんなのを生かしておいたって、何の役にも立つわけがない。
無駄に食糧を消費していくだけなら、この場で消した方がいいだろう。

「……折角少しは暇つぶしになると思ってたのに…雰囲気が暗いから帰る」

「時空管理局員の者です。事情聴取をしたいのでご同行願います」

……こいつ、殺っちゃっていいかな？

「無理。帰る」

でも、高町の前でやると、殺しに慣れてない奴、というより、『殺す』なんて考えを持ってないから面倒だし、見逃して帰ろう。

「なら、申し訳ありませんが…」

管理局員がバインドをかけてくる。

「実力行使でついてきてもらいます」

「嫌だ」

力ずくでバインドを引きちぎる。

正直言って、緩すぎて力を入れる必要が無かった。

「今の僕は機嫌が悪いんだ。邪魔をするなら…生きて帰れないよ。

……ひゃはははははは！バイバ～イ」

ディスペア…お願いだから、少しだけ幸運を分けてよ…

僕の幸運は、デュエル関係とフラグじゃないと、殆ど発揮されないんだから。

第４９．５話　ＧＯＤＤａｙｓ　６　ロキサイド（後書き）

ロキは敵に対して容赦がないです。
さすがキチアーノ。

第５０話　ＧＯＤＤａｙｓ　７（前書き）

誠がロキに連れて行かれます。
ゲームのタイミングで言うと、最終話です。
ごめんなさい。誠の性格が崩壊しているかもしれません。
作者的には、そこまで崩壊はさせていないつもりなのですが…

第５０話　ＧＯＤＤａｙｓ　７

～～～砂浜、８月１０日～～～

「へえ。最近は来てないと思ったら、今日はいるんだ」

「ん？ロキ君…だったっけ？」

「……で、今日はいるんだ」

「まあね」

「しかも１人。清浦刹那にフラれちゃったのかな？ひゃはははは」

最近はいつも２人でいたしね。突然一緒にいなくなったのなら、フラれたと考えてもいいだろ。

「……」

じょ、冗談で言ってみただけなのに図星かよ。

「パリに行ったんだ。俺が悪いことしたんだけど…」

「自覚してるだけどっかの誰かよりはマシだね」

でも、いい雰囲気だと思ってたんだけど、パリに逃げられちゃった

んだ。
まあ、反省してるんだから、少しぐらいは手伝ってあげてもいいかな。

「なんで追いかけないのさ」

「お金が無いんだよ。俺まだ学生だよ」

「……僕が連れてってあげようか？」

「どうやって？」

「こうするのさ！機皇帝スキエル∞を召喚！」

移動スピードも速いし、安定する。
文句は無いはずだ。

「乗せてあげるよ」

「…ありがとう！」

ここからパリまで約2時間。
飛行機よりも早く飛べる。

「ただ、その格好でパリに連れていくわけにはいかないから、３０分で準備してきなよ。
３０分だけ待っていてあげるから。来なかったら、この話は無かったことにさせてもらうよ」

「……ああ！」

～～～１０分経過～～～

さすがにまだ来ないか。

「む。ロキか。こんな朝早くから、一体どうしたのだ」

「トールか。彼女にフラれて落ち込んで反省しているまだ純粋な男を、その反省に免じてパリに連れて行ってあげるのさ」

「そうか。気をつけて行って来い。我は戻ろう。
お前が消えた、とスクルドが心配していたから探しに来ただけなのでな。
女神に心配をかけるのは感心しないぞ」

「スクルドにはゴメンって言っておいて」

「そう伝えておこう」

～～～２０分経過～～～

伊藤は男のはずだよね？女でもないのに、何でこんなに準備に時間がかかってるんだろう？

～～～その頃、誠・カウントダウン開始より、１２分経過～～～

準備が終わり、約束の砂浜に向かっていたが…

「あ、誠君！」

「こ、心ちゃん！？」

こ、こんな時に…どうしよう！？

「ご、ごめん、今時間が無いからまた今度にしてよ！」

「ダメ！」

～～～話し中～～～

よ、ようやく逃げられた…もう時間が無い！

～～～２８分経過～～～

……来ないのかな？せっかく僕が連れて行ってあげようとしてたのに…

もう２９分３０秒だよ。…もう戻ろう。

「き、来たよ…はぁ…はぁ…」

……ずっと走ってきたんだ。誰かに捕まったのかな?

「よく来れたね。２９分５９秒。本当にギリギリだったよ。
僕は一刻も早く出発したいんだから、早く乗って」

「…ああ」

あ、しまったな…桂だっけ?の妹に見られた。
…ディスペアのこと言えないじゃん。
何で都合の悪い時ばっかりいるんだ。２１１１９９９よ。

(この数字の意味は、携帯で何かをやると分かると思います。
携帯電話を持っている方なら、1度は使ったことがある機能だと思います。by作者)

「しっかりつかまってなよ。落ちるから」

「は、速えぇ!!」

ここから約2時間。…人間にかかるGに、耐えられるかな?
まあ、そこまで酷いスピードじゃないし、耐えられるか。

〜〜〜1時間３０分後、パリ〜〜〜

「予定より早く着いたね。で、どこにいるのさ?」

「わからない…」

しょうがないな。こっそり持ち出しておいてよかったよ。神の鏡。
こいつの彼女の居場所を映せ！

「ふ～ん。意外と普通のホテルにいるんだ」

ここから…このスピードだと１０分ぐらいだね。

「伊藤。後１０分で着くから、台詞を考えて置きな」

「あ、ああ…」

こいつは返答の時はこれしか言えないのかな？
でも、この町ってなんか狭いね。
神界はこんな狭い所、どこを探してもないよ。

「あ、あれかな？台詞は考え終わったよな？」

「ま、まだ…」

「いつまでも飛んでいたくはないから早めにね。
見つかったら面倒だし」

「ご、ごめん」

～～～５分経過～～～

「まだ～？僕帰りたいんだけど」

「今、考え終わった」

「じゃあ行くよ……。

……久しぶりだね。清浦刹那」

「え!?ええ?なんで?」

「お前の忘れものだよ!!…ほら、降りろ」

「うわあ!」

「じゃあね～…あ、帰りの分の金はやるから、パスポート取って自分で帰りな～。

バイバ～イ」

……ちょっと面倒なことになったな。

「そこの未確認飛行物体、停止しなさい!

停止しない場合、攻撃します!!」

神の言葉は人間にはそれぞれの人種が使っている言語に聞こえる。

そして、神には人間の言葉はどんな言語でも神の言葉に変換されて聞こえる。

言語の違いは神には関係ない。

…この場合は、聞きたくなかったな。ミサイルなんかを撃ちこまれたら、例え機皇帝スキエルでも無事では済まないし。

でも、少しぐらいは挑発に乗ってやろう。このまま大人しく投降したって、逃がしてもらえないのは目に見えてる。逃がしてもらえなくても、力ずくで逃げられるけど。

「攻撃してみなよ！ひゃはははははは！」

「止まりなさい！…クッ、止むを得ない！」

そう言って、警官がミサイルを撃ってきた。

「こんな町中でミサイルを撃つなんて、住民に当たったらどうするのかな？ひゃはははは！」

警官も気づいたらしく、攻撃の手を止めた。

「ひゃはははは！ひゃはははははは！」

あ…広い場所に出たな。ヤバイ…

「うわっ！？」

いきなりミサイル飛ばすのかよ…もうスキエルじゃかわしきれないな。

「来い、ドライ・ドラグーン！！」

神界より、起動したドライ・ドラグーンが現れる。

僕専用の飛行する、翼を持つ赤い龍のイメージをしたＤ－ホイールだ。

大きさは大体、旅客機程度。

ちょっと前にディスペアがＤ－ホイールを改造したから、ディスペアのＤ－ホイールは実物大のラーの翼神竜ぐらいだった。

そのおかげで、僕のＤ－ホイールの方が大きかったのに、五分五分になってしまった。

ちなみに、神々には『3番目の龍』と呼ばれている。
……いい調子だ。スキエルの3倍ぐらい速く飛べる。
さすがに軍隊も驚いたらしく、唖然としている。

「バイバ～イ。ひゃはははははは！！」

ん？仲直りは済んだみたいだね。僕が手を貸した甲斐があったよ。

「ロキ、早く戻ってこい」

「いきなり僕のD－ホイールに通信を入れないでよ。
まだ起動チェックしてないんだから。壊れたら同じのを作ってもらうよ」

「すまん。しかし、我はディスペアから伝言を頼まれている」

「！！早く言って」

「では言うぞ。『ミッドチルダに、『神の塔』が出現した。我は少し見に行くから、スクルドを頼む』だそうだ。ちなみに、ミッドチルダは現在この世界に来ている高町たちがいたミッドチルダらしい」

「スクルドを頼むって…連れて行かなかったの？それと高町たちは？」

「それが、『あの組織（時空管理局）のことだ。どうせ既に立ち入り禁止エリアに指定している。我はそこに入るだろう、スクルドがいれば攻撃の的になる。スクルドを攻撃の的にすることなどできん。スクルドがいかに強力な防御魔法が使えたとしても、今のスクルドの神力では、とても防御魔法を長時間維持していられるものではない』と言って、

置いていった。高町たちは、お前がこの間戦闘した犯罪者の報告書の処理で追われている。
しかし、立ち入り禁止エリアにディスペア程の力を持つ者が入った瞬間、高町たちを含め、大軍で攻めてくることは間違いない」

「スクルドは？」

「……最後の最後まで私も連れて行け、と言っていた」

まあそうだろうね。でも、ディスペアはスクルドを危険な目には遭わせたくない。
……全く、呆れるよ。

「なるべく早く帰るから、ゲートを開けておいてよ」

「了解した」

～～～ミッドチルダ～～～

「神の塔はどこだ？」

アレは勝手に世界に配置するなと言ってあるはず。
人間が塔の中に入り、上がってくれば神界への侵入を許すことになる。
人間を神界に入れるわけにはいかない。前に一度人間が入って来た後、その人間が大軍を引き連れて攻め込んできた時があった。

「降臨せよ！究極神オシリス！」

3体の生け贄を捧げ、究極神の1体、究極神オシリスを召喚する。
究極神オシリスに乗り、塔のある方向に飛ぶ。

「待て、ここは今現在、時空管理局が調査中だ！」

「調査をされては困る。その塔は、我ら神々の世界へと続く神の塔。人間ごときが、入っていいものではない」

「隊長、今侵入者が現れました！巨大な龍に乗っています！」

「撃ち落とせ。調査中に襲撃を受けるわけにはいかん！」

「それが隊長、この侵入者、わけがわからないことを言っているのです！」

「なんだ？」

「その塔は神々の世界に続くもの……とかなんとか」

「では…この塔はアルハザードへの道か！」

「この世界の人間は、我らの世界のことを『アルハザード』というのか。
人間を神界に侵入させるわけにはいかない！塔ごと破壊してくれる！」

「させるものか！」

どうやらこの管理局員はかなりの実力があるようで、魔力弾の弾幕

を張ってくる。
しかし…

「なぜだ！なぜ届かない！！」

究極神オシリスが存在するだけで、その放出する巨大なエネルギーに魔力弾が掻き消されているのだ。

「アルティメット・サンダーフォース！」

これで塔は間違いなく破壊される。…！！アルティメット・サンダーフォースが軌道を変えた！！？
……こんなことができるのは、我が知る人間の中では数えるほどしかいない。
間違いなく、神より能力を与えられた転生者だ。

「お前達か…」

前にスクルド奪還を試みた時に対峙した転生者たちだった。

「そんな知ってるような口のきき方をされても、生憎、俺たちはお前のことなんて知らないぜ」

「お前たちはこの究極神オシリスを見て気付かないのか？」

「……！！まさか！」

「ようやく思い出したか。あのときは仮の姿で失礼したな。
これこそが我の真の姿だ」

「な!?あれで仮の姿!?」

「話はここまでだ。我の邪魔をするなら、前回と同じように、クラナガンごと消し去ってくれる!」

「なあ、神様」

「何だ」

「頼みがあるんだ。ここにいる局員の殆どが、上層部の管理局員、つまりは腐りきってる連中だ。だから…」

「消せというのだな?だったら逃げろ。究極神の攻撃は、どれほどの威力か分かっているはずだ」

「…!わかった」

神頼みとはな……まあ、どちらにしろここは消すつもりだ。

「幻銃士を召喚し、銃士トークン2体を特殊召喚する!3体のモンスターと我のライフ半分を生贄に、究極神オベリスク召喚!究極神よ、この塔を破壊せよ!ゴッド・エクス・バースト!!アルティメット・サンダーフォース!!!」

直後、2つの究極神が放った攻撃がこの周辺、数十キロを破壊しつくした。

「聞こえるか?オーディン。神の塔の破壊を完了した」

［よくやってくれたな。戻ってきてくれ］

［わかった］

……予想もしていないことが起こり始めている。
何か不吉の前兆なのか？次元誕生に何か関係があるとでもいうのか？
だが、どちらにせよ究極神がある限り、我の敗北はない。
…それでも、異常事態はないほうがいいがな。

第５０話　ＧＯＤＤａｙｓ　７（後書き）

ロキのＤ－ホイールが登場しました。
イメージは……オシリスの天空竜？
まあ、みなさんでご想像していただいて結構です。

２００００００アクセス記念！　宗教デッキと骸骨デッキのレシピ公開と3章冒頭

じつは結構前に２０万アクセスは超えていました。
でも、既に話を書き始めていたので、このタイミングになりました。
今回は、１５０００ユニーク記念で使ったデッキのレシピを公開しようと思います。
補足：ロキがモリンフェンを素材にしてライトエンドを出していましたが、アレは、本当はできません。作者のミスです。

２０００００アクセス記念！　宗教デッキと骸骨デッキのレシピ公開と3章冒頭

～～～モリンフェンデッキ～～～

エクストラデッキ　１４枚

Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ×１
氷結界の龍　トリシューラ×１
ミスト・ウォーム×１
スターダスト・ドラゴン×２
ダークエンド・ドラゴン×２
ギガンテック・ファイター×１
ブラック・ローズ・ドラゴン×３
氷結界の龍　ブリューナク×１
ゴヨウ・ガーディアン×１
Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル×１

デッキ　４０枚

モンスターカード　１５枚

カオス・ソーサラー×１
モリンフェン×３
終末の騎士×２
ダーク・グレファー×２
カオスエンドマスター×３
レベル・スティーラー×２

インフェルニティ・リベンジャー×１
ゾンビ・キャリア×１

魔法カード　１６枚

思い出のブランコ×２
召喚士のスキル×１
収縮×１
継承の印×１
増援×１
クロス・ソウル×２
戦線復活の代償×２
戦士の生還×２
ワン・フォー・ワン×１
シンクロキャンセル×１
月の書×２

罠カード　８枚

闇次元の解放×２
異次元からの帰還×１
正当なる血統×２
奈落の落とし穴×１
強制脱出装置×１
光の召集×１

ｖｓワイトデッキの時は使い、今乗せたレシピには書いていないカードがあります。
演出上しかたがないことでした。

～～～ワイトデッキ～～～

デッキ　４０枚

モンスターカード　２４枚

ダーク・アームド・ドラゴン×１
ワイトキング×３
ワイト婦人×３
ワイトメア×３
ワイト×３
終末の騎士×２
ダーク・グレファー×３
ゾンビ・マスター×２
ネクロ・ガードナー×１
ゴブリンゾンビ×２
クリッター×１

魔法カード　１１枚

生者の書ー禁断の呪術×３
死者蘇生×１
魂の解放×１
ワン・フォー・ワン×１
おろかな埋葬×１
闇の誘惑×１
光学迷彩アーマー×２
アームズ・ホール×２

罠カード　5枚

ジャスティブレイク×2
針虫の巣窟×2
リビングデッドの呼び声×1

このようになってます。例によって、演出の関係で入ってたり入ってなかったりなカードがあります。

「でも、これってモリンフェンデッキは全然回りそうにないんだけど」

「そうだな。ワイトキングはモンスターカードが多いと思うが…」

お前らいつの間に来たんだよ。

「最初から見てたよ」

「ロキと同じタイミングからいたな」

あ、そう。

「しかし、このようなデッキをロキは良く使いこなしたものだ」

まあ、ロキはデュエルにおいては運が最強だからね。

「まあ、ロキといえどもデッキ構築が悪ければ勝てんがな」

「あ、ディスペア」

「フ…作者がデッキを公開すると聞いてな。
しかし、この前我が見たときとレシピが変わっているな」

ああ、それはかくかくしかじか…というわけで。

「成程な。そう言っても、このデッキを送りつけてきたヘイムダルは…」

「……僕が城を潰しちゃったよ。今直してるって」

「……悪気はなかったんだ。ただ、ヘイムダルに1発入れたかっただけだ」

十分ひどいな、お前の鉄鎚喰らったらヘイムダルの命が危ないぞ。

「大丈夫だ。…ある程度手加減はしたしな」

ふ～ん。
さて、時間が無いからそろそろ終わりにしよう。

「ところでさ、デュエルアカデミアはいつ再開するの？」

あと2～3話ぐらいやったら入ろうと思ってるよ。
3章の1話目のネタばれをすると……

イヤッッホォォォオオォオウ！だよ。

２０００００アクセス記念！　宗教デッキと骸骨デッキのレシピ公開と3章冒頭

この小説で使われている、オリカの登場していないデッキは、ほとんどが作者のデッキのレシピをより改良したものです。
植物は作者のデッキからですが。

第５２話　ＧＯＤＤａｙｓ　Ｌａｓｔ　～前編～（前書き）

ＧＯＤｄａｙｓ編も、最終話です。
この話が終わったら、デュエルアカデミア第２期に入ります。

第52話　GODDays　Last　～前編～

～～～9月10日～～～

「デュエルアカデミア再開まであと3日…か」

「ああ。ロキ、準備はしておけよ？」

「わかってるよ。…じゃ、僕は砂浜に行ってくる」

「ああ」

～～～砂浜～～～

「……はぁ。どうしてこう、休みって言うのはあっという間に感じるんだろうね？

……といっても、僕たちは常に休みみたいなものか。ディスペアだけは何か目的が会って世界を回ってるっぽいけど」

…！！！！！ついにこの時が来たんだ。

「ロキ、来るぞ！！」

「わかってるよ！」

「お前たち、衝撃に備えろ！思っていた以上に、時空震は強い！！」

「「「「わかった！」」」」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

「う、うわあああああああ！」

「クッ…」

「ぬう…」

「うおおおおお！！」

もう少し、世界を遠くに移しておくべきだった…

まさかここまで時空震が響いてくるとは…時間が多少狂ったか？

「皆、無事か！？」

「わたしは大丈夫だ」

「私も…」

「我もだ」

……！！？ロキがいない！？

「どうやら、ロキは時空震に巻き込まれて、別の世界に飛ばされたらしい」

一番面倒なパターンだ。神の鏡による探査は、時空震直後には不可能。
さらに、我の時空移動もあと１０分は使用できない…
となると、使える手段はただ１つ。究極神だ。究極神だけは、いかなる場合でも安全に移動することができる。ロキが、仮にワームホールの中に投げ出されていた場合、神でも無事ではない。実際に数百年前に上級神の１人が、ワームホールに落ちて死んだ。

「今は躊躇している暇はない。いでよ!!究極神オベリスク、究極神オシリス、究極神帝ラー!」

３体ずつ生贄を捧げ、手早く究極神を召喚する。

「行くぞ!」

残った３人全員を乗せ、ワームホールの中に移動する。
…究極神を召喚していなければ、危なかったかもしれない。
異常なほどワームホールが不安定だ。

「ロキは…いないな」

「すると、どこか別の世界か」

「ゼウス、アテナ、フレイア。その他多数。聞こえるな?
ロキの探索をしてくれ!今の時空震によって、ロキだけが別世界に飛ばされた」

「わかりました。こちらでも探してみましょう」

神の鏡が使えるようになっていて助かった。
連絡は取れたが、やはり直接ロキを探すことはできなかった。

～～～その頃、ロキ～～～

「クッ…」

運悪く、知らない世界に飛ばされた。
侵略中だったらしい悪魔たちが襲いかかってきて、うざい。
その上に、1匹1匹が強い。

「喰らえぇ！」

「うわあっ！？」

クッ……肩をやられたな。暫くは使い物にならないか。

「よくもやりやがったな！！お前はぶっ潰す！！」

持っていた剣で、僕の肩に弾丸をぶち込んできた悪魔と、周辺にいた悪魔をまとめて真っ二つに斬る。

「はぁ…はぁ…どうだ！」

これで少しはこいつらの数も減ったはず…！？

「グ…アア！？？」

まさか、悪魔の中に超遠距離攻撃ができるやつがいるなんてね。
心臓部を撃ち抜かれるとは思ってなかった。
これは…ヤバイね。
でも、これぐらいは返させてもらうよ！

「グハァッ！！…魔界神、万歳！！」

僕にだって超遠距離攻撃ぐらいはできる。ざまあみろ…！！？

「！！？お前は……魔皇軍幹部の…」

その直後、僕に大槍が刺さってきた。見上げれば、そこには魔皇軍幹部の一人がいた。

「これで私も魔界神様より褒美が授けられるというもの。ハハハハハハハハ！！」

それだけ言うと、笑いながら飛び去ってしまった。
とどめだけ刺しに来るなんて…やっぱりやることが汚い。

「ク…最後の最後まで…本当にうざったい奴らだな…」

こんな奴らに殺されるなんて、情けない…ね。
……そろそろ、意識が飛んでいくな。
…ディスペア、ごめん。約束……果たせそうにないよ。

～～～その１０分後～～～

ゼウスより情報があったのはこの世界だな。
しかし、随分と暗い世界だな。
……ん？あれは…そんなバカな！！

「ろ……ロキ？」

「ロキ、しっかりしろ！」

「落ち着け、トール……」

「ふざけるな！！ここで落ち着いていられる程、我は冷静ではいられん！」

この大槍は…魔皇軍幹部の物か…
ロキは…戦っていたのか…

「ディスペア…ロキは…大丈夫だよね？」

「……」

「そ、そんな…」

ロキの鼓動は既に止まっている…これでは、我の魔法でも、スクルドの治癒魔法でも助けることはできない…

「ひとつだけ……ひとつだけ方法がある」

「！！それは本当か！オーディン！！」

「本当だ。…しかし、失敗すれば、ロキだけではない。

この方法を行使した者も死ぬ」

……失敗すれば、死ぬ。か…

「その方法を教えろ！早く！！」

「落ち着け、トール。…その方法は、死者に声をかけることだ」

「どういうことだ！？」

「普通の声で話しかけても何も起きない。
その死者に、直接語りかける強い言葉を、神力と共に注ぐのだ。
しかし、消費する神力は尋常なものではない。
失敗すれば、神力を全て失い、死に至る。
それでも…この方法を使うのか？」

「当然だ！こいつには、確かにさんざん迷惑をかけられた！騙されたこともあった！
しかし、それでも常に我らとともに存在した、唯一の存在！」

「その通りだ。確かにロキは、少しやり過ぎな部分があった。
だが、ロキと我にはあの日誓った約束がある。
『永遠の友でいよう』と誓った約束がな！」

「私だって、ロキにはたくさんの迷惑をかけられたけど、それでも楽しかった」

「わたしもその通りだ。下界の情報をまとめた記録を何度も紛失され、さらには勝手に遊びに行くという始末。ディスペアよりも酷かった。だが、決して神界の者は皆、ロキを責めなかった。最高神界

の者も、ロキのことを楽しげに見ていた。退屈な日々を、ロキはただ楽しませてくれたのだ。それだけで、わたし達の気がどれほど楽になったか。

……フフ…思い出を語るのはまた今度でもいいだろう。始めよう」

失敗するという気がしない。

寧ろ、絶対に成功する、と思っている。

「人数が多ければ多い程、負担も軽くなる。全員で連れ戻すぞ」

「ロキ、このまま死んでいいとでも思っているのか？
まだ我との約束を果たしてもらってはいないぞ」

「その通りだ。我もまだお前に借りを返してもらっていないぞ」

「このまま死んじゃったら、大好きないたずらもできないんだよ？
ロキは、あなたはそれでもいいの？」

「わたし達だけではない。神界の者達全員が、お前のことを大切に思っている」

「我には、いや我らにはお前が必要だ。お前の力や能力ではなく、お前という存在が必要なのだ。戻ってこい、ロキ」

神力が持って行かれる。人間を復活させるのは容易いことだ。
しかし、蘇生対象が神になると、わけが違う。
このままでは、我ら全員の神力が尽きてしまう…

「ロキ、我はまだお前との約束を果たしてもらっていない。
いや、お前が生きていることこそが、約束を果たしているというこ

とになる。
ここでその約束を破るというのか？」

「……君との約束……まだ果たしてなかったね」

「……どうやら、成功のようだな」

「ロキ…大丈夫か」

「大丈夫だよ。皆がどんな事を思ってたのか、よく聞けたよ。
……嬉しかった。ありがとう」

「この…心配掛けやがって！」

「痛い、痛いって！頼むからアイアンクローはやめて！！」

「ロキ…良かった」

「スクルド…ディスペアがいるのに抱きしめてこないでよ…ちょっと苦しいし、後でディスペアが怖いからさ…」

「ディスペアなら大丈夫だよ。優しいから♪
こんな時くらい『いいよ』って言ってくれるよ！」

「……勝手にしろ」

友の復活が嬉しいのはわかる。
だからこそ、我にはスクルドを止めることはできない。
多分友情から来ているものを、我には止められない。

「ところでロキ。この大槍は…」

「ふん。思い出しただけで腹が立つ！あいつをぶっ潰さなきゃ、僕の顔が立たないし、僕の気もおさまらない！！」

「なら、当然…」

「ロキを殺した者に、神々の裁きを下してやろう」

だが、今は究極神を使えない。
究極神は、何度も連続で召喚できるような存在ではない。
また、召喚できない時はもう一つある。
それは、究極神の所有者が、迷いを抱えている時だ。
迷っている者に、神は力を貸さない。その強大な力にのまれるからだ。

「それにしても、神力の消費が激しいな。
我もここまで持って行かれるとは思っていなかった」

「我もだ。やはり究極神召喚後は、少し辛いな」

「……聞け、お前達。今、ゼウスより連絡が来た。
ここより先、人間界単位で北の方角に２５００ｋｍの場所に、魔皇軍の砦がある。
……残念だが、本拠地は魔界にあるから、魔界神はいないがな。
それでも、砦を制圧しておけば、後に楽になることは間違いない。
わたしは今から潰しに行くことに賛成するが…
一応、神力を秘めた水晶も持ってきている。これを持ち、念じながら歩けば、全員同時に神力の回復もできる」

「ならば、選択肢は一つ」

この世界の魔皇軍の砦を、殲滅する。

第５２話　ＧＯＤＤａｙｓ　Ｌａｓｔ　～前編～（後書き）

今回はデュエルはありませんでした。
次回は、ロキが大暴れします。

ＧＯＤＤａｙｓ　Ｌａｓｔ　～後編～（前書き）

ＧＯＤＤａｙｓ編の最後です。
後半、話が少しずれますが気にしないでください。
作者の限界です。

「ここは通さん！！」

「フッ…」

ズバッ！！

「グアアアアア」

どうやら、侵攻中ということもあり、悪魔どもがうようよしている。
だが、所詮はゴミだ。我の相手にはならない。

「オーディン。スクルドには見せるなよ」

「わかっている」

スクルドはグロテスクな物がとにかく苦手で、少し見ただけで気を失う。
せっかくスクルドの愛用していた武器『時の杖』を持ってきたというのに…
この杖はスクルドでなければ扱うことができない。しかし、効果は強力な物ばかりで、『未来視』『絶対防御魔法』『高威力の上級魔法』『超回復魔法』という、チートな武器だ。
……扱うスクルドの神力が少ないため、殆ど使用できないが。
ちなみに杖の形状は、『時の女神の悪戯』を見ていただきたい。
当然だが、スクルドは時の悪戯をすることができる。過去には1度だけ、『明日』という日を『今日』にしたことがある。他にも多数

やったことはあるが、いずれもディスペアのことを想い、時を動かしたことだ。神々が多少怒っていたが、ディスペアが止めていたな。

「もう終わった？」

「少し待て」

その後、炎熱系の魔法で悪魔の亡骸を完全に消し墨にして、スクルドが大丈夫なようにする。

「行くぞ」

「ごめん…私のせいで、余計な力を使わせちゃって…」

「気にするな。それにスクルドには、最後に少しやってもらわなければならないことがある」

ある意味では、スクルドのやることが一番重要だ。

「……アレのようだな」

確かにそのようだ。１００ｋｍほど先に、巨大な城が見える。

……視力が良すぎるのも問題だな。

ディスペアになってから、異常にステータスが上がった。

「邪魔だ」

光速で剣を振るい、攻撃を仕掛けてくる悪魔を飛ばした斬撃で八つ裂きにする。

「やっぱり、ディスペアは異常だよ。
他の神々は光速で大剣を振るうなんてできないよ」

「我にはこれが当然だからな」

～～～砦・城門～～～

「改めてみると、随分贅沢だよね。これが今から壊せると思うと、楽しいよね。ひゃはははははははは！！」

「…遊びはここまでだ。行くぞ！」

「お先に！ひゃはははははははは」

ロキを追いかけ、砦の中に入る。

「出て来ーい！魔皇軍幹部～！ひゃーはははははははは！！」

ロキは笑いながら砦を壊していく。壁に風穴を開け、訓練室のような場所にいた悪魔たちを惨殺し、宝物庫を荒らす。

「ハハハハハハハハハハハハ！！サンダー・パイル！！」

トールも負けず劣らず、砦を破壊していく。
暫く進むと、巨大な扉が現れた。

「ここかな？こんな大層な扉、悪魔には必要ないんだよー！」

ロキは自分の剣から神力を放出し、扉を破壊した。

「来たか……死にぞこないめ」

「ひゃはははははは！僕が死にぞこない？笑わせる！」

「待て、ロキ。こいつは神界の裁きを下してやるべきだ」

「つまり、デュエルだよね。ほら！幹部、とっととディスクを構えろ！！

ディスペアの手を煩わせるまでもない！この僕がお前を消し去ってやるよ！」

「死にぞこないが、私を倒せると思うなよ！」

ひゃはははははは！こいつだけはぶっ潰す！！

「「デュエル」」

「私の…」

「僕のターン！」

「何！」

「お前に先攻なんか譲ってやらないよ。僕はカードを3枚伏せる！

モンスターを伏せてターンエンド！

当然だけど、僕が使っているのは僕の固有ディスクだ！ダメージは現実のものになる」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×３

「私のターン！このカードは相手フィールド上にのみモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる！バイス・ドラゴンを特殊召喚！
さらに、チューナーモンスター、ダーク・リペアラーを召喚！
レベル５のバイス・ドラゴンに、レベル２のダーク・リペアラーをチューニング！いでよ、デーモン・カオス・キング！
さらに、ダーク・リペアラーの効果発動。このカードが墓地へ送られた時、デッキの１番上のカードを確認し、デッキの一番上か一番下に戻す。…我は下に戻す。
デーモン・カオス・キングで伏せモンスターに攻撃を行う。喰らえ！」

「トラップ発動！攻撃の無力化！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる」

「ならば私はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

魔皇軍幹部
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
デーモン・カオス・キング　攻撃力２６００
伏せカード×１

「僕のターン！」

まだ僕達の機皇帝については、魔皇軍は知らないはずだ。
こいつの顔が絶望の色に染まるのが楽しみだ。

「僕は、スカイ・コアを召喚！ターンエンドだ！」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
スカイ・コア　攻撃力０
伏せカード×２

「私のターン！」

スカイ・コア…まだどこからも情報の入ってきていないモンスター…

「私は、デーモン・カオス・キングでスカイ・コアを攻撃する！」

その選択が大いなる間違いだということを、今教えてあげるよ！

「速効魔法発動！死者への供物！このカードは、僕の次のドローフェイズをスキップする代わりに、フィールド上で表側表示で存在するモンスター１体を破壊する！」

「なに！？これでは私のデーモン・カオス・キングが…」

「甘いんだよ！僕は、スカイ・コアを破壊！」

「自分のモンスターを破壊!?貴様、何のつもりだ!」

「スカイ・コアの効果発動!このカードが効果で破壊された時、自分フィールド上のモンスターをすべて破壊し、デッキ・手札・墓地から、機皇帝スキエル∞、スキエルT、スキエルA、スキエルG、スキエルCを特殊召喚できる!
合体しろ、機皇帝スキエル!
機皇帝スキエル∞の攻撃力は、全てのパーツの合計となる!!」

機皇帝スキエル∞　攻撃力２２００
スキエルT　攻撃力６００
スキエルA　攻撃力１０００
スキエルG　攻撃力２００
スキエルC　攻撃力４００

「ならば、デーモン・カオス・キングで機皇帝スキエル∞を攻撃する!」

「スキエルGの効果発動!1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃を無効にできる!!」

「私はこれでターンエンドだ」

魔皇軍幹部
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
デーモン・カオス・キング　攻撃力２６００
伏せカード×１

「僕のターン！ドローフェイズはスキップだ」

僕の伏せカードはゴースト・コンバート。機皇帝がいる時に、相手が発動した魔法・罠・モンスター効果を、自分の墓地の機械族モンスター１体を除外することで、発動と効果を無効にし破壊する。そしてこのカードを再びセットできる。

「機皇帝スキエルのモンスター効果！１ターンに１度、相手のシンクロモンスター１体を吸収する！デーモン・カオス・キングは頂くよ！」

「させん！トラップ発動、デストラクト・ポーション！デーモン・カオス・キングを破壊し、２６００ポイントのライフを回復する！」

やっぱり機皇帝のシンクロキラー能力を回避しに来たね。

「トラップ発動、ゴースト・コンバート！僕のフィールドに機皇帝が存在する場合、僕の墓地から機械族モンスター１体を除外して発動できる！相手が発動した魔法・罠・モンスター効果を無効にし、破壊する！そしてこのカードを再びセットする！
ひゃはははははははは！！残念だったね！」

機皇帝スキエル∞　攻撃力２２００→４８００

「まだだ！魔法カード、強欲な壺を発動してカードを２枚ドロー。手札から魔法カード、おろかな埋葬を発動！僕はデッキからモンスターカードを１枚選択して、墓地へ送る！
僕はデッキからカード・ガンナーを墓地へ送る！
さらに永続魔法、一族の結束を発動！僕の墓地にいる元々のモンス

ターの種族が1種類のみの場合、その種族のモンスターの攻撃力を８００ポイントアップする！僕の墓地にいるのは機械族だけ。そして機皇帝の種族も機械族だ！よって攻撃力が８００ポイントずつアップする！」

機皇帝スキエル∞　攻撃力４８００→５６００
スキエルＴ　攻撃力６００→１４００
スキエルＡ　攻撃力１０００→１８００
スキエルＧ　攻撃力２００→１０００
スキエルＣ　攻撃力４００→１２００

「さらに、機皇帝スキエル∞の効果発動！このカードの攻撃力は、パーツの攻撃力の合計になる！ひゃはははははははは！！」

機皇帝スキエル∞　攻撃力５６００→８８００

「行け！機皇帝スキエル！ダイレクトアタックだ！」

「うおおお！させるものか、バトルフェーダーを特殊召喚する！」

「何度も生き延びやがって！カードを伏せてターンエンド」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
機皇帝スキエル∞　攻撃力８８００
＋デーモン・カオス・キング
スキエルＴ　攻撃力１４００
スキエルＡ　攻撃力１８００

スキエルG　攻撃力１０００
スキエルC　攻撃力１２００
一族の結束
伏せカード×２

「私のターン！私は魔法カード、闇の誘惑を発動。デッキから2枚ドローし、その後手札から闇属性モンスター1体を除外する。
私は手札から、ダーク・シムルグを除外する。
さらに、サイクロンを発動し、一族の結束を破壊する。
カードを3枚伏せ、ターンエンドだ」

魔皇軍幹部
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
伏せカード×３

「僕のターン！僕は機皇帝スキエルで、ダイレクトアタックだ！」

「この瞬間、トラップカードを発動！闇の進化（ダークネス・レボリューション）！このカードの効果により、相手の攻撃力２０００以上のモンスターの直接攻撃を無効にし、その後デッキから攻撃力０の闇属性モンスター1体を特殊召喚する。このカードの発動時に攻撃宣言していたモンスターが闇属性以外の場合、このカードの発動と効果を無効にすることはできない！
私はデッキからＤＴ－カタストローグを特殊召喚する！」

「だ、ダークチューナー！？その力は随分前に僕自ら封印したはずだ！」

「フフフフ…私たちが復活したのとほぼ同時期、この力も蘇った。
トラップ発動、ダークネス・タイム・アクセラレーション！このカードは相手ターンに自分フィールド上に闇属性モンスターが特殊召喚された時、自分のターンのスタンバイフェイズに移行する。さらに、デッキからレベル１の闇属性モンスターを特殊召喚する。
私のスタンバイフェイズに移行し、デッキからマッド・リローダーを特殊召喚。
そしてこのカードのもう一つの効果。このカードをゲームから除外することで、自分フィールド上に存在するモンスター１体のレベルを３上げる。
私は、ＤＴ－カタストローグのレベルを３上げて、１３にする！
レベル１のマッド・リローダーに、レベル１３のＤＴ－カタストローグをチューニング！古より封印されし暗黒の力が今ここに蘇る！忌まわしき存在を消し去れ！ダークシンクロ！！冥界より出でよ、ダークフォース・ドラゴン！」

「ダークフォース……ドラゴン……」

「ダークフォース・ドラゴンの効果発動。このカードの特殊召喚成功時、相手フィールド上に存在するモンスター１体をゲームから除外し、そのモンスターの元々の攻撃力の２倍の数値分このカードの攻撃力をアップする。相手はこの効果を無効にすることはできない！私は機皇帝スキエル∞を除外する！」

「だが、スキエル本体の攻撃力は０だ！攻撃力アップはない」

「だが、機皇帝の本体が消えたことで、全てのパーツが消える。ゆけ！ダークフォース・ドラゴン！忌まわしき神に暗黒の鉄槌を下せ！」

「うわあああああああ！！」

ロキ　ＬＰ８０００→２０００

「ろ、ロキ！」

「来るなぁ！こいつは僕がぶっ潰す！」

こいつだけは僕が倒さなきゃ、僕がみんなに顔を合わせられない。

「私はこれでターンエンドだ。これで私の勝利は決まった。無駄に苦しみを味わうより、永遠の安息を受け入れたほうが身のためだぞ？」

「冗談じゃない！お前のエンドフェイズに、このトラップカードを発動！未来への架け橋！！機皇帝が相手の効果でフィールドを離れたターンのエンドフェイズ、デッキ・墓地・除外ゾーンから『ワイズ・コア』『スカイ・コア』『グランド・コア』を手札に加え、デッキから『機皇創世』を発動できる！
ディスペア、力を借りるよ。出でよ、機皇神マシニクル∞！！」

機皇帝と機皇神。僕らが『友』の約束をした時の、絆の証。
苦しい時はその３つの力を一つに。僕達の約束だ。

魔皇軍幹部
ＬＰ８０００
手札×１

フィールド
ダークフォース・ドラゴン　攻撃力６０００
伏せカード×１

「僕の……ターーーーーーーンッ！！」

……このカードなら！ダークシンクロモンスターを吸収できる！

「僕は魔法カード、永遠の絆を発動！このカードは、自分フィールド上に『機皇神マシニクル∞』が１体のみ存在する場合に発動できる！自分フィールド上のモンスターの攻撃力が、相手モンスターより低い場合、相手のフィールド上に存在するモンスター１体を選択する！選択したモンスターを、シンクロモンスターじゃなくても機皇神が吸収する！」

力を合わせても、一人じゃ勝てない。なら、相手をこちら側に引き込めばいい！

「わ、私の切り札…ダークフォース・ドラゴンが…」

機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００→１００００

「機皇神マシニクル∞で、お前にダイレクトアタック！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「トラップ発動！パーフェクト・ダークネス！相手のレベル１０以上のモンスターが攻撃してきた時、相手のモンスター１体を破壊し、デッキからカードを１０枚までドローできる！」

「ひゃはははははははは！機皇神マシニクルの効果発動！墓地か

らスキエルＡを除外し、マシニクルの破壊を無効にする！」

「バカな……――――――――――――――――――！！！

ぎゃあああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

魔皇軍幹部　ＬＰ８０００→－２０００

「お前みたいなザコに殺されたと思うと腹が立つ！消えろ！」

こいつが持っていた大槍を突き刺してやる。そうすると、砂のように散って消え去った。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ――――――――――

「城が崩れる！ロキ早くこっちへ来い！」

「わかってる！」

「スクルド、頼む！！」

「もちろん！」

スクルドは杖を立て、防御結界を創る。

やはりスクルドの防御結界が１番安定している。

「よし、もういいぞ」

「はぁ…はぁ…」

「！！スクルド、しっかりしろ！」

スクルドは神力を失いすぎて気を失ったらしい。
……ロキが、いや、オーディンとトールも我を見てきたため、スクルドはどうやら我が運ばなければならないらしい。
いつも通りだが、お姫様抱っこで連れて帰る。
一緒に出かけた時に、出かけた先でスクルドが眠った時、いつもこうしていた。
……後から聞いた話では、スクルドは寝たふりをしていたらしい。
理由は聞き出せなかったが…

～～～2時間後、砂浜～～～

「ディスペア。やはりここにいたか」

「……オーディンか。スクルドは？」

「眠っている。永遠の美貌とは、羨ましいものだな」

「お前も不老で寿命の無い命を持っているだろう」

「だが、わたしは男だ」

「性別なんてないだろう」

「そう言われれば、返す言葉はない。しかし、女神は女性だ。
わたし達には性別が無いというのに、女神にはなぜあるかが不思議だ」

「確かに女性ではある。しかし、その容姿は所詮見かけにすぎん」

「トール、いつからいた」

「今さっき来たところだ」

「確かに見かけだけだが、神の子を創るのなら、男性人格の神と女神と呼ばれる女性人格の神の互いの神力を合わせるだけだ。それに、容姿が見かけというのなら、我は最初から女神に惚れるなどしない。貴様のように、そういうふざけた行為に走り、明らかに人間の警察に捕まりそうなことなどしたくはないな」

「ディスペア！貴様、我がそんなことをするとでも思っているのか！」

「実を言うと、少し思っている。だから、いつスクルドが危険な目に遭うか心配でな」

「貴様～～～～！！」

まあ、実際には冗談だが。トールは男性人格ではなく、正真正銘の『男』だ。

スクルドは女性人格だが。

「待て、ふざけた話をするためにここへ来たのではないのだろう」

そうだったな。我がここに来たのは、明日のことについてだ。

「明日は、融合を解除する日だ。ロキには伝えてある。

ロキは、この休みの日にかかわった人間に、別れを告げに行くと言

っていた」

ロキはこの長期休暇の間に、GXと融合していたもう1つの世界の主人公に関わりを持っていた。ならば、ロキが別れを告げに行くのは不思議なことではない。
ただ、空気を読めないことを言えば、我々神は時空間を移動できるのだから、どこの世界にも行ける。

～～～翌日・最高神界、居城～～～

「始めるぞ」

「わかっている。今、始めたところだ」

世界の均衡を保たせつつ、世界を切り離していく。
少しでも間違えれば、その世界が消える。

～～～2時間後～～～

といっても、神界に時の流れは存在しない。

「終わったな」

「早くしなければ、始業式に間に合わんぞ」

「わかってる。僕は先に行かせてもらうよ」

「わかった。我は始業式には参加しない。トールとオーディン、ロキだけで参加してくれ」

「了解だ」

長期休暇は長かった。ようやく少しは暴れられる日常が戻ってきた。

ＧＯＤＤａｙｓ　Ｌａｓｔ　～後編～（後書き）

後編では、奇麗なロキを演じてみました。悪くないかも…
次回から第３章です。

第５３話　イヤッッホォォォオォォウ！（前書き）

※エドの性格が壊れているかもしれません。

第53話　イヤッツホォォォオオォオウ！

〜〜〜デュエルアカデミア入学式前日の夜、付近上空〜〜〜

「Are you ready?」

「うん！」

「GO！！」

この日、一人の男がスケボーのようなものに乗り…ヘリから飛び降りた。

「イヤッツホォォォオオォオウ！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ん？今、空から人間の声が……」

なんとかデュエルアカデミア開始の前日に来ることができた。
今の叫び声がエドなら、少し歴史がずれているということになる。
……というよりもツッコミを入れておこう。
英語に対して日本語で返すなよ！！神語（神の言葉）に対して人間の言葉で返してくるより不思議だな！

「じゃあね。ウルズ。ヴェルザンディーにもよろしく」

「スクルドも元気でね～」

スクルドは今、神界にいる姉に連絡を取っていたらしい。
久しぶりに遊びに行く～とか聞こえてきた気がしたが、気のせいであることを祈る。
あの2人の姉は、スクルドが我のことを想っていることを最初に気付き、色々な手段でくっつけようとした。正直、トラウマものだ。
3姉妹といっても、誰が姉で誰が妹なのか見当がつかない。
神々は身長で決めた。
スクルドが末っ子である理由だ。
神々の間でも、この3姉妹は人気があり、スクルドがいいとか、ヴェルザンディーが1番だ！とか、ウルズ万歳！とか時々聞こえてくる。
ヴェルザンディとウルズはともかく、スクルドは渡さない。

～～～翌日～～～

「では、今学期も皆さんにとって非常に有意義であることを――――――――――――」

「しかし、急にわたし達も入学式に出るなとは…どういう風の吹きまわしだ？
校長の長い話に付き合わなくて済むのはありがたいが」

「……エド・フェニックス、いや、斎王に目をつけられるのは面倒だ。
それにお前たちは身長が高い」

「成程な。しかし、直接我が叩き潰すのも悪くないと思うが…」

「少しは考えてみなよ。そんなことしたら、スクルドや僕たちだって危ないかもしれないだろ!?」

確かに、目をつけられて、人質を取られるのはごめんだ。それがスクルドなら尚のこと。

…既に究極神のデッキ調整は完了している。究極神さえ召喚できれば、敗北はないだろう。

その他にも、さまざまなタイプのデッキを作っておいた。

人質を取られても、固有ディスクを使いデュエルを行えば取り戻せるだろうが。

「……入学式は終わったようだな」

疲れきった顔をしている生徒が何人もいる。

ご丁寧なことに、高町たちも出席していたらしい。

「あ～ディスペア君達、こんなところにいたんだ～」

「なぜ貴様らは我らに関わろうとする?」

あれ程痛い目にあったはずだ。

「友達だから」

神と人間が友達…か。

「ひゃはははははははは!君達が僕達と友達?僕たちは神様だよ

？」

「でも、見た目的には身長が高いだけで、人間と同じじゃない」

「ひゃはははは。確かにね。でも、僕達にはスクルドを含め性別が無い。
あ、トールにはあったね」

「え？スクルドちゃん、女の子じゃないの？」

「……我から言わせてもらうと、容姿と性格は女だ。しかし、人間にはあり、我とロキ、オーディンも含め神にはないものがある。そういう意味では、性別が無いのだ。それが何かは自分で考えろ。我にはそれが人間の間で何というものなのかがわからない」

……ん？『天空の聖域』？エド・フェニックスか。
相手は恐らく十代。斎王に言われてデュエルを挑んだ、といったところだろう。

「我らはそろそろ戻らせてもらう。いつまでもここに立っていては、神界にいたころと何ら変わりないのでな」

「え？神界にいるときって、なにしてたの？」

「数億年の間、椅子に座り何の語らいもなく下界を見ているだけだった時があった」

「……ごめん」

「謝る必要などない。なにもそれだけしかないとは言っていない」

「ではな。我らはいい加減戻る」

～～～ブルー寮への道～～～

……ん？

「こんにちは。先輩」

エド・フェニックス。こんなところで会うとはな。

「ひゃはははははははは。こんにちは、後輩」

ロキが皮肉を込めたように言う。いいぞ、もっとやれ。

「せっかく出会えたのですから、これも運命。デュエルしませんか？」

「ひゃはははははははは！運命なんて信じるの？」

運命なんて神だけが知るもの。スクルドやディスペア、その他僕を含めて最高神クラスの神が知ってるだけだよ。

「まあいいや。遊んであげるよ」

「「デュエル」」

「僕のターン！僕は融合を発動！手札のＥ・ＨＥＲＯアイス・エッ

ジとＥ・ＨＥＲＯフェザーマンを融合！来い、Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ！」

「またＥ・ＨＥＲＯか。しかも見たことが無い…」

「さらに僕はＥ・ＨＥＲＯエアーマンを召喚！このカードが召喚に成功した時、２つの効果から１つを選んで使用できる。僕は１つ目の効果で、デッキから『ＨＥＲＯ』と名のついたモンスターカードを１枚手札に加えるよ。
僕はＥ・ＨＥＲＯフォレストマンを手札に加える。
カードを１枚伏せてターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　攻撃力２５００
Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン　攻撃力１８００
伏せカード×１

「僕のターン！」

フィールドにはＥ・ＨＥＲＯ…あの伏せカードはヒーローバリアか？

「僕はフィールド魔法、天空の聖域を発動！そしてゼラの戦士を召喚！
フィールドに天空の聖域が存在する時、ゼラの戦士１体を生贄に捧げることで、このモンスターを特殊召喚できる！来い！大天使ゼラート！
大天使ゼラートの効果発動。手札の光属性モンスター１体を墓地へ

送ることで、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「ひゃはははははははは！トラップ発動、亜空間物質転送装置！エンドフェイズまで自分フィールド上のモンスター1体をゲームから除外する。
僕はＥ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯを除外する！」

「でも、エアーマンは破壊ですよ。先輩」

「わかってるよ。でも、Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯの効果発動。
このカードがフィールド上を離れた場合、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「な！？」

「ひゃはははははははは！ゼラートには死んでもらうよ！」

「僕はカードを1枚伏せてターンエンドです」

エド・フェニックス
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
天空の聖域
伏せカード×１

「このエンドフェイズにアブソルートＺＥＲＯは僕のフィールドに戻ってくる！
ま、君みたいなザコ相手にこいつは必要ないだろうけどね。ひゃは

ははははは！
僕のターン！僕はカードを１枚セット。
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯでダイレクトアタックだ！ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ！！」

「うわあああああああ」

エド・フェニックス　ＬＰ４０００→１５００

「僕はこれでターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　攻撃力２５００
伏せカード×１

「僕のターン」

「トラップ発動！ナイトメア・デーモンズ！アブソルートＺＥＲＯを生贄にする！」

「な！？強力なモンスターを生贄に！？」

「ひゃはははははははははははは！このカードの効果は、自分フィールド上のモンスター１体を生贄に捧げることで、相手のフィールドに攻守２０００の『ナイトメア・デーモン・トークン』を３体特殊召喚するのさ！そして、このトークンが破壊された場合、そのコントローラーは１体につき８００ポイントのダメージを受ける！

さらにこの瞬間、アブソルートＺＥＲＯの効果発動！相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！ひゃはははははははははははは！！これでお前のライフは０だ！！」

「そ、そんな…この僕が１ポイントのダメージも与えられずに負けた？」

エド・フェニックス　ＬＰ１５００→－９００

「これで満足したかな？バイバ～イ」

「さすがだな。ロキ」

「当り前だよ。あんなザコにダメージを受けるなんて、冗談じゃない。
行くよ、ディスペア」

「クッ…（いくら試作デッキとはいえ、この僕がダメージを与えられずにＥ・ＨＥＲＯごときに負けた…その上、この僕をザコ呼ばわりだと！！）」

「フッ…」

試作デッキでなくとも、お前ではロキを倒すことなどできん。

～～～ディスペア達が去ってから間も経たない頃～～～

「！！？（さっき、あいつは、ディスペアとか言う奴は僕のことを

噛った？…）……くそおおおおお！」

今度は僕の本当のデッキで見返してやる！

第５３話　イヤッッホォォォオォォウ！（後書き）

サブタイほとんど関係ない…

第５４話　ティラノ剣山（前書き）

挿入ＢＧＭ

「究極の破壊をもたらせ、最強の地縛神！Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ！！」と「今再び５０００年の時を越え、冥府の扉が開く！我らが魂を新たなる世界の糧とするがいい！降臨せよ、地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ！！」から、『地縛神』

第５４話　ティラノ剣山

「……疼くな」

「へえ。そんなにそのカードは戦いたがってるんだ」

「少しは大人しくしていることができんのか？」

大人しくしていてくれれば苦労しない。
今疼いているのは、特殊な力を持ったアニメバージョンの地縛神だ。
しかし、フィールド魔法がなくなった途端に自壊するのと、地縛神１体のみの時にダイレクトアタックができない所がＯＣＧと同じだ。
せめて弱点を作ってやるべきだったはずだ。
一体何を考えてエナジーはこんな効果にしたのだろうか？
出番が殆どないため、不満を抱えているらしい。

「しかしディスペア。地縛神の効果は強力すぎる。下手をすれば、究極神に匹敵するぞ」

「究極神ならば、地縛神を攻撃することができる。モンスター効果の影響を全く受け付けないからな」

究極神は『相手』『モンスター』『カード』などの、究極神が少なからず関わるテキストが記述されているカードの効果の影響を受けない。
前に説明した時は、説明不足だったな。勘違いをした生徒が究極神に挑み、儚く散っていったのを覚えている。

「ディスペア。今、いい噂を聞いてきたんだけどさ」

「どんな噂だ？」

「弁慶がいるらしいんだよ。橋の上に」

……我の記憶の中で一致する人間は一人しかいない。
間違いなくティラノ剣山だ。
しかし、十代が倒すはずだが…

「ディスペア。『十代が倒す』って考えてるよね。
……十代と剣山、引き分けだったんだよ」

「何！」

歴史に狂いが生じたか。だが、これで我がデュエルできる。
地縛神を使う機会が来たな。

「悪いがディスペア。我にやらせてくれないか？」

「……条件付きだが、いいだろう。
条件はたったの１つだ。地縛神を使用する」

「了解した」

～～～橋～～～

「ここを通りたければ、デュエルディスクを差し出すドン！」

……どうやら十代は帰ったらしいな。
既に兄貴分というものにはなっているらしい。

「断る！我が貴様を倒し、デュエルディスクを奪い返す！」

「心意気はいいザウルス。ならデュエルだドン！」

「「デュエル」」

「我のターン！我は地縛大神官を守備表示で召喚！
このカードがフィールド上に存在する限り『地縛神』は自身の効果では破壊されない」

「地縛神？聞いたことないドン」

「すぐにわかる。地縛神の圧倒的な力が。
我はこれでターンエンドだ！」

トール
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
地縛大神官　守備力１９００

「俺のターンだドン！フィールド魔法『ジュラシック・ワールド』を発ドン！
恐竜族モンスターの攻撃力と守備力が、３００ポイントアップするザウルス！」

３００など微々たる数値。さらに、地縛神を攻撃対象にすることはできない。

「ハイパーハンマーヘッドを召喚！カードを1枚伏せてターンエンドだドン！」

剣山
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ハイパーハンマーヘッド　攻撃力１８００
ジュラシック・ワールド
伏せカード×１

「我のターン！我は魔法カード『名推理』を発動！相手はレベルを宣言し、我はデッキから通常召喚可能なモンスターが出るまで、デッキをめくり続ける。そして、出た通常召喚可能なモンスターのレベルが、相手の宣言したレベルのモンスターだった場合、そのモンスターを墓地へ送り、外れた場合そのモンスターを特殊召喚する！宣言しろ！剣山！」

「レベル８だドン！」

「ではめくるぞ。１枚目、魔法カード『地縛神の復活』２枚目、トラップカード『地縛神の咆哮』３枚目、通常召喚可能なモンスター『地縛神―Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ（ウィラコチャ　ラスカ）』！よって、地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａを特殊召喚する！究極の破壊をもたらせ、最強の地縛神！Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ！！」

空中に地縛神の心臓が現れる。魂を吸収する代わりに、神力を生贄に捧げる。
我の神力の１０分の１ほどが吸収された後、巨大なコンドルが姿を現す。

地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ　攻撃力１

「攻撃力たったの１！？何を考えているザウルス！」

「攻撃力が１ポイントあれば、貴様のライフを次のターン、丁度０にできる。
地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの効果発動！
我のバトルフェイズをスキップし、相手のライフを１にする！ポーラスター・オベイ！！」

剣山には悪いが、リアルダメージに耐えてもらおう。
仮にもメインキャラの一人、物語の上で必要な人間だ。
この程度で死にはしないだろう。

「うわあああああああああああ！」

剣山　ＬＰ４０００→１

～～～リリカルサイド～～～

「あのモンスターは…」

「きっと、ディスペア君達やな」

「あのさ、なのはもはやても気づいてないの？
……あのモンスターが現れた時に、ロストロギア観測機が壊れちゃったんだけど」

「「ええ～～～～！！」」

あのモンスター、ロストロギア反応があったの！？

～～～サイドアウト～～～

～～～ディスペア達サイド～～～

「地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ……トールはＷｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａを召喚したのか」

「でも、すごい力だよね。ここまで地縛神の波動がビンビン伝わってくるよ」

確かにそうだな。魔力や神力を持たない人間には何も感じられないだろうが、下級天使クラスなら近づくことさえままならないだろう。

～～～橋、トールサイド～～～

「我はこれでターンエンドだ」

トール
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ　攻撃力１
地縛大神官　守備力１９００

「Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの効果を教えておいてやろう。相手はＷｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａを攻撃することはできない。そして地縛神は相手に直接攻撃することができる。さらに相手の魔法・罠の効果を一切受け付けない！」

「そんなのめちゃくちゃだドン！勝てるわけないザウルス！！」

「ハハハハハハハハ！！なにをほざこうが、現実は変わることはない！
さあ、貴様のターンだ！１ポイントのライフは次のターン、たった１ポイントの攻撃で０になる」

「俺のターン、ドロー！俺は、魔法カード『大進化薬』を発ドン！このカードは自分フィールド上に存在する恐竜族モンスター１体を生贄に発動できる！３ターンの間、恐竜族モンスターの召喚に生贄は必要なくなるドン！俺はハイパーハンマーヘッドを生贄に、このカードを発ドン！
生贄なしで究極恐獣（アルティメット・ティラノ）を召喚するザウルス！！究極恐獣で、地縛大神官を攻撃するドン！
カードを１枚伏せて、ターンエンドだドン」

剣山

ＬＰ１
手札×１
フィールド
究極恐獣　攻撃力３０００
大進化薬
ジュラシック・ワールド
伏せカード×１

「我のターン！行け、地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ！剣山にダイレクトアタックだ！デス・シンギュラリティ！！」

「トラップ発ドン！」

「地縛神にトラップは効かないぞ！」

「『生存本能』！このカードは、自分の墓地の恐竜族モンスターを全て除外することで発動するザウルス！除外した恐竜族モンスター１体につき、ライフを４００ポイント回復するドン！」

剣山　ＬＰ１→４０１→４００

「あんまり痛くないドン」

攻撃力はたったの１だ。痛くなくて当たり前だろう。

「ほう。地縛神の攻撃を喰らい、生き延びたか。ターンエンドだ！」

トール
ＬＰ４０００
手札×６

フィールド
地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ　攻撃力１

「俺のターン！……これなら、地縛神を破壊できるドン！
速効魔法『サイクロン』を発ドン！ジュラシック・ワールドを破壊するザウルス！
地縛神はフィールド魔法が無ければ、生きていられないドン！」

「Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ！！」

地縛神が倒されただと！！

「行け、究極恐獣！トールにダイレクトアタック！アブソリュート・バイト！」

「うおおおおおおおお！」

トール　ＬＰ４０００→１０００

「どうだ！ターンエンドだドン！」

剣山
ＬＰ４００
手札×１
フィールド
究極恐獣　攻撃力３０００
大進化薬

「我のターン！我はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

トール
ＬＰ１０００
手札×４
フィールド
伏せカード×２

「俺のターン！俺は2体目の究極恐獣を召喚するドン！
1体目の究極恐獣で、ダイレクトアタック！アブソリュート・バイト！」

「トラップ発動『栄誉の贄』！自分のライフが３０００以下に場合に、相手が直接攻撃を宣言した時に発動できる。その攻撃を無効にし、自分フィールド上に『贄の石碑トークン』2体を特殊召喚し、デッキから『地縛神』と名のついたモンスター1体を手札に加える。我は地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを手札に加える！」

「ダイレクトアタックを無効にしてトークンを召喚した挙句、地縛神を手札に加える！？やってることがむちゃくちゃすぎるザウルス！」

「全ては貴様が攻撃を宣言した結果だ。今更覆すことなどできんぞ！」

「なら、2体目の究極恐獣で、贄の石碑トークンを攻撃するドン！」

「トラップ発動！カウンタートラップ『攻撃の無力化』。相手の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する！」

「ターンエンドだドン……このエンドフェイズに、大進化薬は墓地へ送られるザウルス」

剣山
ＬＰ４００
手札×１
フィールド
究極恐獣×２　攻撃力３０００

「我のターン！我はフィールド魔法『死皇帝の陵墓』を発動。そして、贄の石碑トークン2体を生贄に捧げる！今再び５０００年の時を越え、冥府の扉が開く！我らが魂を新たなる世界の糧とするがいい！降臨せよ、地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ！！」

再び地縛神の心臓が空中に現れ、神力を吸収していく。
吸収量は微々たるものだが、何度も召喚したいとは思わないな。

「行け！地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ！剣山にダイレクトアタック！」

「うわあああああああああ！」

剣山　ＬＰ４００→－１９００

地縛神の鼓動が止まった…これでしばらくは大丈夫だろう。
ディスペアも文句は言わないはずだ。

「ティラノ剣山。ディスクは返しておけ。また会おう」

そう言い残し、トールはブルー寮へと戻った。

第５４話　ティラノ剣山（後書き）

アニメの地縛神って、チートですね。作者が今回の話を書いてて一番思ったことです。

第５５話　新入生の歓迎会（前書き）

新入生の歓迎会です。
アニメではありませんでしたが、シンクロ召喚の説明もしなければならない、という意味も含めて書きました。

第５５話　新入生の歓迎会

「ディスペア。今日は歓迎会だよ？どうするの？」

「ロキか。アカデミアの生徒として新入生を迎え入れるべきではあるが…」

「スクルドと共に行けば嫉妬の視線で見られるし、一人で行けばカイザーがどうのと五月蠅いのだろう？」

「その通りだ。嫉妬をするぐらいなら、彼女の一人や二人ぐらい、作ったらどうだ」

「ディスペア。人間は主に性格と見た目で判断するんだけど、最近は見た目で判断する奴が多いからそう簡単には彼氏や彼女は作れないらしいよ」

そんなことを言えば、我もスクルドを見た目と性格で判断したようなものだが…
その内９０％は一目惚れというものらしいが。

「それに少しドジな一面がある女の子は一部に更に人気らしいね。ひゃはははははははは！」

スクルドのドジは…酷いぞ。いくら我のためとはいえ、持ってきた水を転んで零すなよ。これは一番軽い例だが。酷いものでは、我のためと言い、未来を見続けて気を失ったことすらある。あのときは

本気で焦ったな。
まあこれはまだ我もスクルドも出会ってから時間が立っていない頃の話だがな。

「それとさ。新入生ってシンクロ召喚を知らないよ」

それはしまったな。毎回説明するのは面倒だな。
大まかに説明すればいいな。

『ブルー寮の生徒に連絡するノーネ。5分後に、新入生の歓迎会を行うので、デッキを持参してホールに集まるノーネ』

「へえ。いい機会じゃん。歓迎デュエルの時に使えば、シンクロの説明は1回で済むと思うよ?」

「そうだな。悪いが三極神は預けてくれないか?」

「使うのだな?ならば持って行け。ディスペア」

オーディン、トール、ロキからそれぞれ三極神
『極神皇トール』『極神皇ロキ』『極神聖帝オーディン』
を預かる。特別なカードは1枚ずつしか生み出されない。
さらに欲しければ、並行世界を犠牲にしてカードを持ってこなければならない。
当然、物語の鍵が無くなった並行世界は原作ブレイク状態で、なにが起こるか分からなくなる。
もっと言えば、この三極神はオーディン、トール、ロキが誕生したのと同時に生まれたカードだ。並行世界で何枚も生まれている三極

神とは比べ物にならないほど力が強い。

「ディスペア、ディスペア。会場に着いたよ」

「む、すまない。少し考えことをしていた」

「お、カイザーじゃないか」

「ほんとだ！」

「本物だよ！スッゲー」

まだ我は何もしていないだろう。見た瞬間にそんなことを言われても困るだけだ。

「では、カイザーも会場に来たようなので、歓迎会を始めるノーネ」

ブルーの料理は相変わらず豪華だな。スクルドほどではないが。

ちなみにスクルドは部屋に置いてきてしまったので、少しご機嫌斜めだ。

～～～回想～～～

「えー！私もディスペアと一緒に行きたいよー！」

「だめだ、ディスペアが嫉妬の視線で見られれるだろう。

それにスクルド。新入生どもに狙われたらどうするつもりだ？」

「その時はディスペアが助けてくれるもん♪」

「却下だ」

「…もういいよ！グスッ…」

～～～回想終了～～～

はぁ…どうやって機嫌をとろうか…
我が今連れてくるのが一番早いのだろうが…

「あ、いたいた。見つけたよ、ディスペア」

「ん？ロキか…！！？スクルド！！？何故？」

「えへへ…ロキが連れてきてくれたんだ」

ロキ、余計な事をするな。スクルドの機嫌が戻ったのはいいが、どうしろというのだ。

「カイザーディスペア。ステージに上がって欲しいノーネ」

「…ではスクルド。また後でな」

「あ、うん！」

「ではこれより、新入生最優秀の松本秀樹君と、カイザーディスペア君による、エキシビジョンマッチを開始するノーネ！」

「「デュエル」」

「先攻は挑戦者の俺ですね。ドロー。
俺はゴブリン突撃部隊を召喚してカードを2枚伏せます。これでターンエンドです。
……先輩、ブルーの制服を着ないんですか？そんな黒い服で…」

「我の好みの問題だ。ましてや制服はサイズが合うものがない」

「そうですか…」

松本
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ゴブリン突撃部隊　攻撃力２３００
伏せカード×２

「我のターン。我はモンスターをセットし、カードを2枚伏せターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×２

「俺のターンです！ドロー。ニュートを攻撃表示で召喚して、ゴブ

リン突撃部隊で先輩のセットモンスターを攻撃！」

「極星獣タングリスニが戦闘によって破壊された時、自分フィールド上にレベル3、攻守0の『極星獣トークン』2体を特殊召喚する。さらに、我のフィールド上のモンスターが戦闘で破壊されたことにより、手札から極星獣タングニョ―ストを守備表示で特殊召喚する」

「なら、ニュートでタングニョーストを攻撃！」

「トラップ発動、極星宝グングニル！『極星』または『極神』と名のついたモンスターを2回目の我のエンドフェイズまでゲームから除外し、フィールド上のカードを1枚破壊する。
我は極星獣タングニョーストを除外し、ニュートを破壊する」

「ゴブリン突撃部隊は守備表示になります。ターンエンドです」

松本
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ゴブリン突撃部隊　守備力０
伏せカード×２

「我のターン。我はトラップカード『神の桎梏グレイプニル』を発動！デッキから『極星』と名のついたモンスターカード1枚を我の手札に加える。
我は極星獣グルファクシを手札に加える。そしてチューナーモンスター、極星獣グルファクシを召喚！」

「チューナー？」

「シンクロ召喚に必要なカテゴリーだ。シンクロ召喚は、例外を除いてチューナーモンスター1体とそれ以外のモンスター1体以上を墓地へ送り、そのレベルの合計と等しいシンクロモンスター1体をエクストラデッキ、いや融合デッキから特殊召喚する。
レベル3の極星獣トークン2体にレベル4の極星獣グルファクシをチューニング！星界の扉が開く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん！大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ！シンクロ召喚、光臨せよ！極神皇トール！」

「すっげぇ…本当の神みたいだ…」

「極神皇トールの効果発動。1ターンに1度、エンドフェイズまで相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果を無効にできる。エフェクト・アブソーバー！
そして極神皇トールでゴブリン突撃部隊を攻撃！サンダー・パイル！！」

「トラップ発動、聖なるバリア－ミラーフォース－！残念ですが、先輩のエースモンスターは破壊ですよ」

「まあいい。メインフェイズ2、我はカードを1枚伏せターン終了だ。
そしてこのエンドフェイスに、貴様の聖なるバリア－ミラーフォース－によって破壊された極神皇トールの効果が発動する！」

「なっ！？モンスター効果を無効にする効果の上に、さらに効果があるのか！」

「極神皇トールは、相手によって破壊されたターンのエンドフェイ

ズに自分の墓地に存在する『極星獣』と名のつくチューナーモンスター1体をゲームから除外することで特殊召喚できる。そしてこの効果で蘇生した時、相手プレイヤーに８００ポイントのダメージを与える。
我は極星獣グルファクシを除外し、トールを蘇生！８００ポイントのダメージを与える！」

「うわあああああ！」

松本　ＬＰ４０００→３２００

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×１

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード『地砕き』を発動！先輩のフィールドに存在する、守備力が最も高いモンスター1体を破壊する！極神皇トールを破壊だ！先輩の墓地にはもうグルファクシはいません。トールの復活はできませんよ」

「誰が破壊されると言った？速効魔法『最後の進軍』を発動する。このカードは自分フィールド上に存在する『極神』と名のついたモンスター1体を選択して発動する。エンドフェイズまで選択した極神の効果を無効にし、その代わりに魔法・罠の効果を受けない！
我は極神皇トールを選択する！トールの効果は無効になり、エンドフェイズまで魔法と罠の効果を受けない。よって、地砕きの効果は受けない」

「クソッ…僕はモンスターをセットしてターンエンドです」

松本
ＬＰ３２００
フィールド
ゴブリン突撃部隊　守備力０
セットモンスター×１
伏せカード×１

「我のターン。我は極星霊リョースアールヴを召喚。このカードが召喚に成功した時、自分フィールド上のモンスター1体を選択する。
我は極神皇トールを選択する。
そして選択したモンスターのレベル以下のレベルの『極星』と名のついたモンスターを手札から特殊召喚する。
我はレベル４の極星獣ガルムを特殊召喚！
極星獣ガルムで裏側守備表示モンスターを攻撃する」

「セットモンスターはアステカの石像！先輩はアステカの石像の効果で本来受ける反射ダメージの倍のダメージ、２４００ポイントを受けます！」

ディスペア　ＬＰ４０００↓１６００

「だが、ガルムにも効果がある。戦闘を行ったレベル４以下のモンスターを、ダメージ計算後に手札に戻す。よって、アステカの石像は手札に戻る」

「そ、そんな…」

「極星霊リョースアールヴでゴブリン突撃部隊を攻撃する」

「うわっ！」

「極神皇トールでダイレクトアタック！サンダー・パイル！」

「うわあああああああああああ！」

松本　ＬＰ３２００→－３００

「勝者、カイザーディスペア！！」

「「「「ワァァァァァァァ」」」」

「先輩、ありがとうございました！」

「フッ…」

～～～宴会会場～～～

「ディスペア、かっこよかったよ！」

「ハハッ、ありがとう、スクルド」

……早く部屋に戻らないと、嫉妬の視線が辛いな。

明日は丸藤亮とエド・フェニックスがプロリーグでデュエルする日だったな。

第５５話　新入生の歓迎会（後書き）

ディスペアは嫉妬の視線に相当参ったようです。
ちなみに、松本君は今後登場する予定がありません。

第５６話　丸藤ｖｓエド！　究極のサイバー！（前書き）

オリカ登場回です。久しぶりに考えて、ネーミングセンスの無さに作者は嘆きました。

第５６話　丸藤ｖｓエド！　究極のサイバー！

「早くしないと始まっちゃうよ。勝敗は決まってるけどね。ひゃーはははははは」

「勝敗が決まっている？何のことだ？我はエド・フェニックスに勝てるだけの力があると思うが？」

「え？」

あのカード……使うか？

まあ、仮にこのデュエルに勝利することができたとしても、ヘルカイザーには必ずなるが。

～～～プロリーグ～～～

「では、丸藤君。頑張ってくれ」

「はい。期待に応えられるよう、頑張ります」

負けても勝っても、相手をリスペクトする！それが俺のデュエルだ。しかし、このカードは俺に『勝て』と告げてくる…『勝ってリスペクトしろ』と。

「今ここに始まりました、プロリーグ！今回は、このカードだ！未だに１０連勝中の負けなし、期待の新人、丸藤亮！それに対し、こ

ちらもまた負けなしのエド・フェニックス！どちらかが勝ち、どちらかが負ける！果たしてどちらの連勝記録が消えてしまうのでしょうかー！」

「初めまして。丸藤先輩。尤も、プロの世界じゃあ僕の方が先輩ですけど」

「互いに良いデュエルにしよう」

「「デュエル！」」

「先攻は俺がもらう！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

亮
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
伏せカード×１

～～～デュエルアカデミア、レッド寮のモニター室～～～

「お兄さん、頑張って！」

「翔、心配すんなって！お前の兄さんは強いぞ」

「うん…そうだよね！お兄さん、頑張れー！！」

～～～ブルー寮、ディスペア達の部屋～～～

「やっぱりモニターが大きいっていいよね。どっちが勝つのかな～。ひゃはははははは」

丸藤亮。我が与えた究極の力を持つ『サイバー』のカード。その力に酔っていなければ、勝利は確実。しかし、その力にのみこまれ勝利に飢えれば、その力はお前に牙をむく。どちらの選択肢を取ったかは我にもわからないが…

～～～プロリーグ～～～

「僕のターン。僕はＥ・ＨＥＲＯフェザーマンを召喚。そして融合を発動！
フェザーマンとバースト・レディを融合し、来い！Ｅ・ＨＥＲＯフェニックスガイ！」

「なんとぉ！エド・フェニックスの真のデッキは、Ｅ・ＨＥＲＯだーー！」

～～～レッド寮モニター室～～～

「でも、あの融合素材だとフレイム・ウィングマンじゃないんスか？」

「ヒーローは、同じ融合素材でも様々な姿に変わることができるんだ」

「え！そうだったのか！？」

「十代、知らなかったのか…」

～～～プロリーグ～～～

「行け！フェニックスガイ！ダイレクトアタックだ！」

「トラップ発動『サイバー・ガード』！デッキから『サイバー・ドラゴン』と名のつくカードを1枚墓地へ送ることで、相手のバトルフェイズを終了し、カードを1枚ドローする！」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

エド
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯフェニックスガイ　攻撃力２１００
伏せカード×１

「俺のターン。俺は魔法カード『マシン・デストラクション・ドロー』を発動。手札から『サイバー』と名のついたカードを2枚破壊し、カードを4枚ドローする！
俺は手札の『サイバー・ドラゴン』と『サイバー・フェニックス』

を破壊して４枚ドロー。
魔法カード『禁断の技術』を発動。このカードは自分の墓地に『サイバー・ドラゴン』を含む機械族モンスターが３枚以上ある時発動できる！墓地から『サイバー』と名のついたカードを全て除外し、融合デッキから『サイバー・エンド・ドラゴン』または『サイバー・ツイン・ドラゴン』を、融合召喚扱いとして特殊召喚する！
俺は墓地のサイバー・ドラゴン２体とサイバー・フェニックスを除外し、サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚する！この効果で特殊召喚したモンスターはこのデュエル中、闇属性として扱う。
サイバー・エンド・ドラゴンで、フェニックスガイを攻撃。エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

「うあああ…！だが、フェニックスガイは戦闘では破壊されない！」

「だが、ダメージは受けてもらうぞ」

エド　ＬＰ４０００→２１００

「俺はカードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

亮
ＬＰ４０００
手札×６
フィールド
サイバー・エンド・ドラゴン（闇属性）　攻撃力４０００
伏せカード×１

「僕のターン。僕はＥ・ＨＥＲＯスパークマンを召喚！装備魔法、スパーク・ガンをスパークマンに装備し、効果発動！サイバー・エ

ンド・ドラゴンを守備表示に変更する！
そして魔法カード『融合』を発動し、フェニックスガイとスパークマンを融合。出でよ！Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フェニックスガイ！シャイニング・フェニックスガイは自分の墓地のＥ・ＨＥＲＯ１体につき、攻撃力を３００ポイント上げる。シャイニング・フェニックスガイでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！シャイニング・フィニッシュ！」

「……」

「僕はこれでターンエンド
自分のエースモンスターが倒されたというのに、なぜ笑っているんだ？丸藤先輩？」

エド
ＬＰ２１００
手札×０
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フェニックスガイ　攻撃力３７００

「速効魔法発動、『永久自立型機械製造技術（エターナル・テクノロジー）』……自分のサイバー・エンド・ドラゴンが戦闘によって破壊されたターンのエンドフェイズに発動できる。闇属性のサイバー・エンド・ドラゴンを墓地から除外し、デッキから『サイバー・ゴッド・ドラゴン』１体を特殊召喚する。出でよ！サイバー・ゴッド・ドラゴン！」

その瞬間、快晴だった空が曇り、天空よりプロリーグのドームの大きさを軽々超える巨大な機械龍が現れた――――――――――。

～～～レッド寮モニター室～～～

「あんなカード、お兄さんは持っていなかったはず…」

「それにサイバー・ゴッド・ドラゴンなんて名前のカード自体がなかった気がするが…」

「どういうこと!?亮はいつあんなモンスターを…」

～～～サイドアウト～～～

会場のモニターは外の様子を映しており、そこにはまぎれもないサイバー・ゴッド・ドラゴンの姿が映し出されている。

「サイバー・ゴッド・ドラゴンの効果発動。このカードの召喚に成功した時、俺のライフは０になる」

亮　ＬＰ４０００→０

「ライフが０!?それではお前の負けだぞ!」

「俺の負けはサイバー・ゴッド・ドラゴンがフィールドを離れた時に決定する。
だが、サイバー・ゴッド・ドラゴンの攻撃力は……」

サイバー・ゴッド・ドラゴン　攻撃力５００００

「攻撃力５００００だと！？」

「おおっと～！丸藤亮、切り札と思われていたサイバー・エンド・ドラゴンを超える最強の攻撃力を持つ切り札を召喚したー！エド・フェニックス、絶体絶命のピンチだー！！」

ＭＣが実況をする。
会場はそれにつられて、今までにない盛り上がりを見せる。

「カイザー！カイザー！カイザー！カイザー！」

「会場は丸藤の称号、カイザーコールで埋め尽くされたー！」

「俺のターンだ。魔法カード『絶対反射機能』発動。サイバー・ゴッド・ドラゴンを対象にする。このカードの効果を受けた機械族モンスターは、相手の魔法・罠・モンスター効果の対象にならず、カードの効果では破壊されない！
さらにリミッター解除を発動！このカードの効果により、サイバー・ゴッド・ドラゴンの攻撃力は２倍になり、１０００００となる！
行け！サイバー・ゴッド・ドラゴン！シャイニング・フェニックスガイを攻撃！ゴッド・エヴォリューション・バースト！」

「うわあああああああああ」

エド　ＬＰ２１００→－９４２００

「勝者、丸藤亮～～～～～～！！」

「「「「ワアアアアアアアアアアアアアア！！」」」」

「「「「カイザー、カイザー、カイザー、カイザーーーーーーーーーーーーーーーー」」」」

～～～ブルー寮モニター室～～～

「ディスペアが丸藤にあげていたのって、あのカードだったんだ。
ひゃーはははははははは」

「しかしこれではヘルカイザーにはなれんぞ」

「これからヘルカイザーにならせに行く。校長には伝えなくていい。
では、行ってくる」

要はエドに負けさせたくなかっただけだ。
目的を果たした今、もう『カイザー丸藤亮』でいる必要はない。
待っていろ、丸藤亮。

第５６話　丸藤ｖｓエド！　究極のサイバー！（後書き）

この小説で、∞を除いて最高攻撃力更新です。

第５７話　カイザーｖｓカイザー！　究極の機械対決（前書き）

今回はデュエルが２回あります。

第57話　カイザーvsカイザー！　究極の機械対決

～～～某町・某所～～～

この辺りに丸藤はいるはずだ。
探すとしよう。

「そこの背の高い人」

「我のことか」

いきなり黒服で黒い帽子をかぶった男に話しかけられた。
どうやら、スカウトマンのようだ。

「あなたは地下デュエルをやってみたくはありませんか？」

「……」

丸藤は負けていない。ついて行っても会えはしない。
だが、このまま断り逃げるのも癪に障る。なら、我のとる手段はただ一つ。

「デュエルしろ。我に勝利することができれば、地下デュエルとやらに付き合ってやる」

「ですが私はディスクもカードも持っていない。デュエルは代わり

の人にお願いしてよろしいですか？」

「勝手にしろ」

相手は……見たこともない男だ。身長は大体１８５ｃｍ程度か。
いかにもリアリストのような体つきをしている。
だが、ザコ相手に時間を潰している暇はない。１枚だけ究極神のデッキ内容を変更する。このデュエルが終わったら抜けばいい。抜くのは創世の預言者、入れるのはトライデント・ウォリアーだ。

「「デュエル」」

「我のターン」

手札に究極神はない。

「我はモンスターをセットしターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
セットモンスター×１

「俺のターン！切り込み隊長を召喚。効果で、ブラッド・ヴォルスを特殊召喚！行け、ブラッド・ヴォルス！奴のモンスターを粉砕しろ！」

セットモンスター『グローアップ・バルブ』が破壊される。
シンクロ召喚を何も知らない奴の前で使うのは面倒だが、究極神が

手札にない以上しかたがない。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。お前のターンだぜ」

攻撃してこないのか？まあいい。

男
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
ブラッド・ヴォルス　攻撃力１９００
切り込み隊長　攻撃力１２００
伏せカード×１

「我のターン。我はジェスター・コンフィを特殊召喚。ジェスター・コンフィは攻撃表示で特殊召喚できる。ジェスター・コンフィを手札に戻しチューナーモンスター、Ａ・ジェネクス・バードマン（アーリー）を特殊召喚する。Ａ・ジェネクス・バードマンは自分フィールド上のモンスター1体を手札に戻すことで特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドを離れる場合、ゲームから除外される。そして再びジェスター・コンフィを特殊召喚。さらにトライデント・ウォリアーを召喚。このカードの召喚に成功した時、手札のレベル3のモンスター1体を特殊召喚できる。我はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを特殊召喚」

「さっきから言っているチューナーモンスターってのはなんだ？」

「シンクロ召喚といわれる召喚方法に必要なモンスターだ」

説明は面倒だから省略する。どうせ1生に1度くらいしか見ること

はできないだろう。

「レベル４のトライデント・ウォリアーとレベル１のジェスター・コンフィに、レベル３のＡ・ジェネクス・バードマンをチューニング。王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚、いでよ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「これがシンクロ召喚か…しかも攻撃力３０００…（だが、このカードははさみ撃ち。攻撃してきた瞬間にドッカーンだ）」

「まだ我のメインフェイズは終わっていない。デッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地のレベル１チューナーモンスター、グローアップ・バルブを特殊召喚する。レベル８のレッド・デーモンズ・ドラゴンに、レベル１のグローアップ・バルブとレベル３のジャンク・シンクロンの２体のチューナーモンスターを、ダブルチューニング！王者と悪魔、今ここに交わる！あらぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚、いでよ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが召喚された瞬間、周辺が赤い光に包まれる。

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果発動。このカードの攻撃力は、墓地に存在するチューナーモンスター１体につき５００ポイントアップする。我の墓地に存在するチューナーモンスターはジャンク・シンクロン、グローアップ・バルブの２体。攻撃力は１０００ポイントアップし、４５００となる！
行け！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！切り込み隊長を攻撃。バーニング・ソウル！」

「ワハハハハ！トラップオープン、はさみ撃ち！俺の切り込み隊長とブラッド・ヴォルスを破壊し、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを破壊するぜ！」

2体のモンスターがスカーレッドにはさみ撃ちを仕掛ける。しかし、スカーレッドは破壊されずに、2体のモンスターだけが破壊されてしまった。

「な、なんでだ！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは相手の魔法・罠・モンスター効果では破壊されない。攻撃を続行する。ダイレクトアタックだ！バーニング・ソウル！」

「のわあああああああ！」

男　ＬＰ４０００→－５００

……ザコ相手に随分と時間を費やしてしまった。早く探さなければ…トライデント・ウォリアーを外し、再び創世の預言者をデッキに入れた。

～～～少し離れた場所～～～

「今日のギャラはこのぐらいだよ」

「ありがとうございます」

これで１１連勝…

「見つけたぞ。丸藤」

「お前は…ディスペア」

「プロで連勝記録をたたき出していると聞いてな。我とデュエルしないか？」

「もちろんだ。良いデュエルにしよう」

「「デュエル」」

「我の先攻、ドロー。我はサイバー・フェニックスを守備表示で召喚し、ターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×５
サイバー・フェニックス　守備力１６００

「俺のターン」

ディスペアのデッキは俺と同じサイバーデッキか。ディスペアもサイバー・ゴッド・ドラゴンを持っているのか？

「俺はサイバー・ドラゴンを特殊召喚！さらにサイバー・フェニックスを召喚。
サイバー・ドラゴンでサイバー・フェニックスを攻撃。エヴォリューション・バースト！」

「戦闘によって破壊されたサイバー・フェニックスの効果発動。デッキからカードを1枚ドローする」

ドローカードは…パワー・ボンド。デメリットが大きい分、見返りも大きい。
しかし、このデュエルでは発動する機会はないだろう。

「サイバー・フェニックスでダイレクトアタック！」

「ク…」

ディスペア　ＬＰ４０００→２８００

「俺はこれでターンエンドだ」

亮
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
サイバー・ドラゴン　攻撃力２１００
サイバー・フェニックス　攻撃力１２００

「我のターン。サイバー・ドラゴンを特殊召喚する。
魔法カード『サイバー・コピー』を発動。自分のサイバー・ドラゴンが特殊召喚に成功した時に発動できる。自分のデッキからサイバー・ドラゴンを2体まで特殊召喚できる。
我はデッキからサイバー・ドラゴン2体を特殊召喚する。
行くぞ！サイバー・ドラゴンでサイバー・フェニックスを攻撃！」

「サイバー・フェニックスの効果でカードを1枚ドロー」

亮　ＬＰ４０００→３１００

「2体目のサイバー・ドラゴンでサイバー・ドラゴンと相打ちにする！」

「何!?サイバー・ドラゴン！」

「3体目のサイバー・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「……」

反応一つ見せないか。さすがにこの程度のダメージに離れているようだな。さすがカイザーだ。

亮　ＬＰ３１００→１０００

「我はカードを1枚伏せターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ２８００
手札×４
フィールド
サイバー・ドラゴン×３　攻撃力２１００
伏せカード×１

「俺のターン。俺は手札を1枚捨て、魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動!相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターをすべて破壊する!これで決まりだ!」

「カウンタートラップ『ロスト・フュージョン』発動。自分フィールド上に存在する融合素材モンスターが効果によって破壊される場合、その破壊を無効にし、その融合素材モンスターを含む融合モンスターを、デッキ・手札・墓地・フィールドの素材モンスターをゲームから除外し融合召喚扱いとして特殊召喚する！ライトニング・ボルテックスの効果を無効にし、我のフィールド上の3体のサイバー・ドラゴンを除外！降臨せよ、サイバー・エンド・ドラゴン！」

「ライトニング・ボルテックスが裏目に出たか…ならば魔法カード『禁断の技術』を発動。墓地のサイバー・ドラゴンとサイバー・フェニックスと、ライトニング・ボルテックスのコストで墓地へ送ったサイバー・ジラフを除外し、出でよ！サイバー・エンド・ドラゴン！」

互いのフィールドにサイバー・エンド・ドラゴン……さあ、どう出る！？丸藤亮！

「サイバー・エンド・ドラゴンで、サイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

相打ちに持ち込んできたか…ならば奴の手札には必ずエターナル・テクノロジーがある。

「速効魔法『永久自立型機械製造技術』発動！サイバー・エンド・ドラゴンを除外！出でよ、サイバー・ゴッド・ドラゴン！バトルフェイズはまだ終了していない！行け、サイバー・ゴッド・ドラゴン！ゴッド・エヴォリューション・バースト！」

「ロスト・フュージョンのもう1つの効果を発動する。このカード

の効果によって召喚された融合モンスターがフィールドを離れたターン、我への戦闘ダメージを1度だけ0にし、カードを2枚ドローする」

丸藤のライフは既に0…フィールドには攻撃力5000のサイバー・ゴッド・ドラゴン。しかし丸藤はこのターン、我へのとどめを刺し損ねた。

「俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ」

亮
LP0
手札×0
フィールド
サイバー・ゴッド・ドラゴン　攻撃力50000
伏せカード×1

「我のターン！」

我の手札は7枚。フィールドにはカードが無い。さらに、基本融合素材であるサイバー・ドラゴンはゲームから除外されている。傍から見れば、絶望的な状況だろう。

「我は魔法カード『デストロイ・ドロー』を発動。自分フィールド上にカードが存在せず、相手フィールド上に攻撃力2000以上のモンスターが存在する場合、デッキからカードを5枚までドローできる。ただし、この効果でドローした枚数×1000ポイントのダメージをエンドフェイズに受ける。我は5枚ドローする！」

手札は11枚。そして、キーカードは揃った！

「我は魔法カード『失われた技術（ロスト・テクノロジー）』を発動。自分のサイバー・ドラゴンが3枚除外されている場合、その3枚をデッキに戻し、ゲームから除外されている『サイバー・ドラゴン』を融合素材とするモンスター1体を特殊召喚できる！
来い、サイバー・エンド・ドラゴン！」

「だが、サイバー・ゴッド・ドラゴンの攻撃力は５００００！サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力でははるかに及ばない！」

言われなくても分かっている。それに、我が攻撃力５００００を超えるカードを用意していないとでも思ったか？

「我は魔法カード『最後の技術（ファイナル・テクノロジー）』を発動！サイバー・エンド・ドラゴンを除外！出でよ！サイバー・ノヴァ・ドラゴン！」

サイバー・ノヴァ・ドラゴン…サイバー系最後のカード。超新星より生まれし究極の機械龍。

「サイバー・ノヴァ・ドラゴンの効果発動。このカードの攻撃力は、自分のライフの１０倍となる！」

サイバー・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力？→２８０００

「だが、それでも攻撃力はサイバー・ゴッド・ドラゴンの方が上だ！」

「速効魔法『リミッター解除』！攻撃力は2倍になり、５６０００となる！
サイバー・ノヴァ・ドラゴンで、サイバー・ゴッド・ドラゴンを攻

撃！ハイパー・ノヴァ・バースト！」

「速効魔法『決闘融合－バトル・フュージョン』！相手のモンスターの攻撃力分、自分のモンスターの攻撃力をアップする！攻撃力は１０６０００だ！」

「ハハハハハハハハハハハハハハハ！速効魔法『セカンドリミッター解除』！攻撃力を3倍にする！」

サイバー・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力５６０００→１６８０００

「まだだ！手札から『サイバー・フォース』を発動！サイバー・ゴッド・ドラゴンが戦闘を行う時、攻撃力を相手の攻撃力の2倍の数値分アップする！」

サイバー・ゴッド・ドラゴン　攻撃力１０６０００→３０２０００

攻撃力３０２０００…しかし丸藤。お前はタイミングを間違えた。最後に勝利するのは我だ！

「速効魔法『ファイナル・リミッター解除』！このターンのエンドフェイズに我の敗北が決定するが、機械族モンスターの攻撃力を５倍にする！」

サイバー・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力１６８０００→８４００００

攻撃力の差は５９８０００ポイント。

まあ、丸藤のライフポイントは既に０で、敗北はサイバー・ゴッド・ドラゴンがフィールドを離れた瞬間に決まる。

いくら攻撃力の差があろうと、サイバー・ゴッド・ドラゴンが破壊

されれば終わりだ。

「ぐあああああああああ！」

これでヘルカイザーの切欠は作った。

ん？もうこんな時間か。早く戻らなければ…

～～～ブルー寮～～～

「意外と早かったね。ディスペア」

今は深夜2時。……スクルドはもう寝てしまったか。

……サイバー・ゴッド・ドラゴンを回収するのを忘れたな。

まあ、放っておいてもヘルカイザー亮なら使うことは殆どないと思うが…

「ロキか。お前は起きていても不思議ではないな」

ロキは寝ること自体が稀だ。人間界に来てから、少なからず眠るようにはなったが。

「まあね。ところでディスペア。さっき連絡があったんだけど。あの2人が来るらしいよ」

あの2人…あの2人！！？来るのか！明日は厄日だな……。

第５７話　カイザーｖｓカイザー！　究極の機械対決（後書き）

『あの２人』とは…？

第５８話　北欧神話の三女神（前書き）

サブタイを見ればわかると思いますが、あの二人とは…あの２人のことです。登場させるにあたって最も悩んだのが性格です。作者のイメージではこんな感じになりました。

第５８話　北欧神話の三女神

～～～ブルー寮、ディスペア達の部屋。午前１０時～～～

そろそろか。３人揃うとなにが起こるか分からないからな。
前に揃った時は…ああ、神界の宝、レーヴァテインを破壊したんだっけ。
ドヴェルグがやたらと怒っていたのを思い出すな。

「「こんにちは～」」

来たか。だが、今のスクルドは神力が殆どない。それに我が『するな』といえば、素直に言うことを聞いてくれる。何か起こるならヴェルザンディとウルズが何かしたらだろう。

「あ、来たんだ」

「ロキ君、久しぶりだね」

ロキとウルズは仲が良い。しかし、ウルズの身長は１９０ｃｍを超える。自然にウルズがロキを見下ろす形になる。傍から見れば、人間で言う親子のようだ。
余談だが、最初期に誕生した神は『親』というものがなんなのか知らない。
当然それは我も例外ではない。未だに親が『人間にとっては大切なもの』程度にしか理解できない。

「で？何の用で来たんだっけ？」

「愛する妹が旦那と仲良くやれているか見に来たの♪」

「もう！ヴェルザンディ、からかわないでよ」

「そんなこと言っても、顔が真っ赤じゃ説得力無いよ？」

「ウルズも……」

「なんて、冗談よ。本当に来た理由はね…実を言うと、ただ単に会いたくなったから」

その程度の理由で時空移動魔法を行使してきたのか…スクルドに負けず劣らず行動力のある女神だな…

「全く、呆れるよ…」

ロキだけではなく、オーディンですら呆れ顔だ。トールはどこかに出かけているので今はいない。あと5分もすれば帰ってくるだろう。

「今帰ったｚ……なぜいるんだ？貴様ら」

カオスなタイミングで帰ってきたな。

「あ、トールさん」

「さんをつけるな！吐き気がする！」

そう言ってミョルニルを構える。

これ以上は見ていられん。

「まあ待て。２人の目的がどうでもいいことだということは分かった。
それにここにずっといても、何かが起こるわけではない。
……スクルド。久しぶりに会ったんだから、３人で話して来い。我は少し出掛ける」

ディスペア、離脱。

～～～ノルン三姉妹サイド～～～

「３人でここにいても何だし…散歩しよっか？」

「「うん」」

～～～森～～～

「ねぇねぇ。お姉さん達。僕とデートしない？」

いかにも不細工という言葉が似合うオベリスクブルーの生徒が現れた。

「はぁ……あんたなんかとデートしてる暇はないわ」

「そんなこと言わずにさぁ～。なら、僕とデュエルして勝ったら付き合ってよ～」

「そういうことならいいわ。スクルド、お願い」

「何で私なの!?（お願いディスペア。助けて…私今デッキ持ってないんだよ～）」

「だって一番強いのスクルドだし」

「そうそう」

「はぁ…ディスペア…」

「愛する神の名前を呼んでも、その人は遠く。かわいそうにね～」

「本当にかわいそうかな?」

「あ、ディスペア!」

「心配になってきてみたら、案の定こうだ。そこの豚。デュエルなら、我がやってやろう。それでどうだ?」

こいつは確か新1年生。我のことは恐らく知らないだろう。

「豚だと～!絶対に許さん!デュエルして勝ったうえでパパに言いつけてやる!」

「パパってなんだ?」

「「デュエル」」

「我のターン。我はフィールド魔法『神の世界』を発動。我のモンスターは相手の魔法・罠・モンスター効果では破壊・除外されず、コントロールも変更されない」

「な、なんだ！そんなカードずるいぞ！」

「黙れ、豚。他人の愛する者を横取りしようとした貴様の方がずるいわ！
我はモンスターを1体セットし、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
セットモンスター×１
神の世界

「ギャヒヒ！僕のターン。僕は激昂のミノタウロスを召喚。伏せモンスターに攻撃だ！」

「伏せモンスターはマシュマロン。我は貫通ダメージを受けるが、貴様には１０００ポイントのダメージを受けてもらう」

ディスペア　ＬＰ４０００→２８００
豚　ＬＰ４０００→３０００

このままでは我のマシュマロンはサンドバッグだな。
ならば次の手を打つとしよう。

「僕はこれでターンエンドだ。ギャヒヒ」

気持ちの悪い笑い方を…不愉快だ。

豚
ＬＰ３０００
手札×５
フィールド
激昂のミノタウロス　攻撃力１７００

「我のターン。我はマシュマロンを生贄に捧げ堕天使ディザイアを召喚する」

堕天使ディザイアはレベル１０だが天使族モンスター１体の生け贄により召喚できる。
さらに、１ターンに１度攻撃力を１０００ポイントダウンし、相手のモンスター１体を墓地へ送ることができる。

「さらに我は魔法カード『手札抹殺』を発動。互いに手札を全て捨て、捨てた枚数分カードをドローする」

「じゃあ僕は５枚捨てて５枚ドロー…ギャヒヒ！僕の勝ちは決まったも同然だね！」

「それは楽しみだな。我は３枚捨て３枚ドロー。我の墓地に天使族モンスターが４体のみの場合、手札からこのカードを特殊召喚できる。来い、大天使クリスティア！……クリスティアがこの効果によって特殊召喚された時、墓地から天使族モンスター１体を手札に加える。我はオネストを手札に加える」

もっとも、手札に加えてもこのターンでケリは付く。オネストを使

う時は来ないだろう。

「大天使クリスティアで激昂のミノタウロスを攻撃！やれ、クリスティア！」

「ぎゃあ！…よくも僕をこんな目に遭わせたな！」

豚　ＬＰ３０００→１９００

「堕天使ディザイアでダイレクトアタック！」

「手札からクリボーを捨ててダメージを０にさせてもらうよ！ギャヒヒヒヒヒ！」

チッ…とどめを刺し損ねたか。だが、クリスティアがいる限り特殊召喚は封じられている。奴の表情を見る限り、切り札は間違いなく特殊召喚モンスターだ。

「先に告げておこう。クリスティアがいる限り、互いのプレイヤーは特殊召喚ができないぞ」

「な！なんだって～！？！？」

奴の切り札は森の番人グリーン・バブーンだろう。しかし、攻撃力の面でも我の天使族モンスターには勝てなかったはずだ。ならば、ラッコアラかコアラッコが手札にある。破壊でも除外でも、コントロール奪取でもない攻撃力変動によって我の天使を倒すつもりだったのだろうが、それでもむだだ。

「我はターンエンドだ」

ディスペア
ＬＰ２８００
手札×３
フィールド
堕天使ディザイア　攻撃力３０００
大天使クリスティア　攻撃力２８００

「ぼ、僕のターン…僕は魔法カード『二重召喚』を発動…そして、コアラッコとラッコアラを召喚。ラッコアラの効果で、このカード以外に獣族モンスターがいる時、エンドフェイズまで獣族モンスター１体の攻撃力を１０００ポイントアップする。僕はラッコアラの攻撃力を１０００ポイントアップして、２２００にするよ。さらに、コアラッコの効果で、このカード以外に獣族モンスターが存在する時、相手フィールド上のモンスター１体の攻撃力をエンドフェイズまで０にすることができる。僕は大天使クリスティアの攻撃力を０にするよ。ギャヒヒヒ！大天使さえ葬れば、特殊召喚ができる！いけー！ラッコアラで、クリスティアを攻撃だ！」

「手札のオネストの効果発動。光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時、このカードを手札から墓地へ送り、エンドフェイズまで戦闘する光属性モンスターの攻撃力を戦闘する相手モンスターの攻撃力分アップする。我はもう１枚オネストを捨て、攻撃力を４４００にする」

豚のライフは１９００ポイント。クリスティアとラッコアラの攻撃力の差は２２００だ。

「ギャア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝」

豚　ＬＰ１９００→－３００

「覚えてろー！パパに言いつけてやる～～！」

「だから、パパってなんだ？」

「さすがディスペア様だね」

「いいよね～最高神と夫婦なんて～」

「もう！やめてよ！それに、ディスペアに私なんか釣り合ってるわけないじゃない！」

その割には『ディスペア』と呼び捨てで呼んでいるだろう。本当に釣り合っていないのなら、他の神々のように、『ディスペア様』と煩わしい呼び方をするはずだ。

「…我はもう行くぞ。二度とあんなカスに絡まれるなよ」

これ以上スクルド達の会話を聞いていたら、キリがない。

……災厄の種は尽きないものだな。

「ディスペア君。今失礼なこと考えてなかった？」

「災厄の種は尽きそうにないとな」

別に失礼なことでもないだろう。確かにこいつらのことで考えていたのだから『お前達が災厄の種だ』と言えば失礼だろう。しかし、我はこいつらの事を限定して言っているわけではない。それに、こいつら以外にも災厄の種が転がっているのは本当の話だ。

「まあええわ」

「待て！そちらには行かないでもらおう」

ノルン三姉妹とこいつらが会うのは面倒なことになりそうで嫌だ。

「何でや？」

「ノルン三姉妹がいるのだ。スクルドとその姉2人がな。どうしてもその方向に行くというなら、我を倒してから行ってもらおう」

「へぇ。スクルドちゃんの姉妹かあ。会ってみたいな」

「任しとき！私が勝って、会えるようにする！」

「「デュエル」」

早くしなければ…

「我のターン！ガトリング・オーガを召喚。カードを5枚セット！ガトリング・オーガの効果発動！伏せカードを1枚墓地へ送る度に、1枚につき８００ポイントのダメージを与える！全弾発射、ガトリングファイアー！」

「ちょっ…きゃあああああ！」

はやて　ＬＰ４０００→０

…先攻ワンターンキル…いくらなんでもそれはないやろ。

「約束は約束だ。どこか別のところに行ってもらう」

「わかったよ…会いたかったなぁ…」

会わせるわけにはいかない。スクルドはともかく、ヴェルザンディとウルズはスクルドが神力の大半を失ってからというもの、魔力などの力を持つ人間を嫌っている。最悪、戦闘をしかねない。我はデュエルアカデミアを灰にしたくはない。ここにはまだ、我が、いや、オーディン、トール、ロキも望むものがあるかもしれん。スクルドが望むかどうかはわからない。しかし、ここにいれば例えどれだけの時が流れようとも必ず我らの望むものは手に入るはずだ。

「ひゃはははははははははははははは！」

…ルチアーノ、もといロキの笑い声が聞こえる。

「うわあああああああああああ！」

成程。デュエルしては潰し、デュエルしては潰しのループか。今日は一体何人の生徒がロキに負けるのだろうな？確か今、ロキは５６連勝中だ。キーカードは例によって機皇帝スキエル。稀に違うデッキも使うようだが、ロキはスキエルがお気に入りらしい。

「もう昼か。どうしたものか」

スクルドは今姉妹との散歩中だ。スクルドを呼び、食事を作ってもらうのは悪いだろう。……ここはやはり、ドローパンか。ドローパンは、我が人間界に来てから気に入ったものの１つだ。中身がわからないというのがいい。ロキやトールに言えば、インフィニティ・

アイを使えば見れるだろ。と言われたが。

「これをもらうぞ」

「あいよ〜」

中身は…珍しいな。金の卵か。前回は食べ逃してしまい、機皇神マシニクルが倒されたのと同じくらい絶望したからな。

「これは…玉子焼きにした方がいいのではないか？」

今度金の卵を神界から持ってこよう。スクルドに料理してもらえば、美味くなるはず…

〜〜〜その夜〜〜〜

「じゃあまた会いましょうね〜」

「もう来なくていい」

ノルン三姉妹の長女と次女は神界に帰った。

「あるぇ？ウルズとあんまり話してなかったな…」

と、少しだけ落ち込んだ様子のロキがいた。

第５８話　北欧神話の三女神（後書き）

毎回思うんですけど、ルチアーノの笑い方って字で書くと実際どうなんでしょう?作者はどうにもならないのでそれっぽく書いていますが…気になる…

２００００ユニーク記念　フュージョンとリチュアル（前書き）

久しぶりにアクセス解析を見たら、２００００ユニークを越えてました。
この小説を読んでくださっている皆様のおかげです。これからもよろしくお願いします。

20000ユニーク記念　フュージョンとリチュアル

～～～某日・ブルー寮～～～

「ん？また頼んだ覚えのないデッキが届いているな」

差出人：フレイア

「……フレイア様からのデッキ…どんなのかな？」

「我には少なくとも、ふざけたデッキにしか思えんな。前例があるからな」

「……手紙があったよ」

スクルドの手から手紙を受け取り、読む。

“久しぶりですね。ディスペア様。あなたが人間界に行ってからというもの、私達は書類に追われる毎日で、以前の暇で楽な生活が嘘のようにどこかへ行ってしまいました。――――――――――。最後に、デッキを2つほど送ります。正直に言うと、これが渡したかっただけです。紙7枚分も書いた手紙ですが、用はこれだけです。後は殆ど愚痴です。こんな長い分を最後まで全部読んで、ご苦労様でしたｗｗｗ　ｂｙフレイア”

「スクルド。少しフレイアのところに行ってくる」

「ま、待って！ディスペア！お願いだから！そんな剣持って行かないで！」

スクルドが必死にしがみついて止めてくる。

「フレイアめ…スクルドに免じて、今回だけは見逃してやる」

「さすがはディスペアだな。スクルドに対してはどこまでも優しく、甘い奴よ」

「何と言った？トール」

「聞こえなかったのか？スクルドの対してはとことん甘いと言ったのだ」

「それは…自殺願望ということでいいのだな？」

今にもこの2人は互いの得物を構え、ぶつかりそうである。

「ま、待って、ディスペア！せっかくだから、このデッキを使ったらどう？」

スクルドがそう提案してくる。デッキの中身はまだ確認していないが…

「成程。それは面白い。トール、お前はどちらのデッキを取る？」

「左側だ」

「なら我は右側だな」

「「デュエル」」

「我のターン。我はマンジュ・ゴッドを召喚。このカードが召喚に成功した時、デッキから儀式魔法1枚か儀式モンスター1体を手札に加えることができる。我はこの効果により、儀式魔法『高等儀式術』を手札に加える。カードを1枚伏せ、ターン終了」

ディスペア
LP8000
手札×5
フィールド
マンジュ・ゴッド　攻撃力1400
伏せカード×1

「我のターン！魔法カード『融合賢者』発動！デッキから『融合』を1枚手札に加える。そして融合を発動！手札の沼地の魔神王と、カオス・ソルジャーを融合！現れろ！究極竜騎士！」

「融合デッキか…」

いきなり攻撃力5000のモンスターを召喚したか…

「行け！究極竜騎士！ギャラクシー・クラッシャー！」

「させるものか！トラップ発動『ドレインシールド』！究極竜騎士

の攻撃を無効にし、ライフを５０００ポイント回復する！」

ディスペア　ＬＰ８０００→１３０００

「ならば我はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

トール
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
究極竜騎士　攻撃力５０００
伏せカード×２

「我のターン！儀式魔法、高等儀式術を発動！デッキからキーメイスを墓地へ送り、出でよ！サクリファイス！」

「なっ！サクリファイスだと！？」

サクリファイス。レベル１で攻守がともに０の儀式モンスター。しかし、その能力は相手のモンスター１体を吸収し、その攻撃力を得る。さらに、サクリファイスの戦闘によって発生する自分へのダメージは、相手も受ける。

「サクリファイスの効果により、究極竜騎士を吸収！攻撃力５０００ポイントアップ！」

「バトルフェイズに入る前に、トラップを発動する！リビングデッドの呼び声の効果により、沼地の魔神王を特殊召喚する」

「攻撃力たったの５００のモンスターごときが、攻撃力５０００の

攻撃の壁になれるとでも思っているのか！サクリファイスの攻撃！」

「攻撃宣言時に速効魔法発動、超融合！手札を1枚捨て、サクリファイスと沼地の魔神王を融合！降臨せよ！サウザンド・アイズ・サクリファイス！」

サウザンド・アイズ・サクリファイス…フレイアめ…禁止・制限などお構いなしか。

あのモンスターがいる限り、互いにサウザンド・アイズ・サクリファイス以外のモンスターでの攻撃はできない。それどころか、表示形式の変更も封じられる。そして、超過ダメージを互いに受ける効果こそなくなったものの、引き継いだモンスター吸収能力。

「我はカードを3枚伏せ、ターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ１３０００
手札×１
フィールド
マンジュ・ゴッド　攻撃力１４００
伏せカード×３

「我のターン！サウザンド・アイズ・サクリファイスの効果発動！マンジュ・ゴッドを吸収する！」

サウザンド・アイズ・サクリファイス　攻撃力０↓１４００

「サウザンド・アイズ・サクリファイスでダイレクトアタックだ！」

「ク…」

ディスペア　ＬＰ１３０００→１１６００

「トラップ発動、ダメージ・コンデンサー！自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を１枚墓地へ送り、受けた数値以下の攻撃力を持つモンスターをデッキから特殊召喚する。
我は儀式魔人リリーサーを特殊召喚する！」

「我はこれでターンエンドだ！」

トール
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
サウザンド・アイズ・サクリファイス　攻撃力１４００
＋マンジュ・ゴッド

「我のターン！魔法カード『命削りの宝札』！手札が５枚になるまでカードをドローし、５ターン後に全ての手札を墓地へ送る。我の手札は０枚。よって５枚ドローだ。
儀式魔法、破滅の儀式を発動！場の儀式魔人リリーサーと、手札の儀式魔人プレサイダーを生贄に出でよ！破滅の魔王ガーランドルフ！ガーランドルフの効果発動。このカードの儀式召喚に成功した時、このカードの攻撃力以下の守備力を持つモンスターをすべて破壊する！そして、破壊したモンスター１体につき攻撃力を１００ポイントアップする。
この効果により、サウザンド・アイズ・サクリファイスを破壊！攻撃力が２６００にアップ！そしてリリーサーの効果により、お前はモンスターを特殊召喚できない！プレサイダーの効果により、ガーランドルフがモンスターを戦闘で破壊する度にカードを１枚ドロー

する」

トールのデッキは融合召喚が主体。融合召喚も特殊召喚の一種だ。よって、リリーサーの効果が適用された今、トールには勝つ手段が無い。

「絶望の闇に沈め！ガーランドルフでダイレクトアタック！」

「ぐあああああああああ！」

トール　ＬＰ８０００→５４００

クッ…さすがはディスペア…『絶望』というだけあるな。

「我はこれでターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ１１６００
手札×２
フィールド
破滅の魔王ガーランドルフ　攻撃力２６００
（リリーサー、プレサイダーの能力付き）
伏せカード×２

「我のターン！クッ……モンスターを伏せてターンエンドだ…」

トール
ＬＰ５４００
手札×１
フィールド

セットモンスター×１

「我のターン！……」

何故フレイアもヘイムダルも、デッキコンセプトを破壊するカードを投入する？いくら汎用性が高く、強力なカードでも、デッキコンセプトを壊したら意味が無いだろう。

「だが、まあいい。我は墓地のキーメイスとサクリファイスを除外する！いでよ、カオス・ソーサラー！」

「カオス・ソーサラーだと！！なぜそんなカードが儀式デッキに入っているのだ！！」

我は前もそのカードが原因で敗北したのだぞ！本当はヘイムダルもフレイアも、我をいじめたいだけではないのか！！？

「フレイアに聞け。さらに儀式魔法、救世の儀式を発動！墓地に存在するリリーサーとプレサイダーをゲームから除外し、救世の美神ノースウェムコを召喚。もっとも、このカードの効果は儀式の時に使ったのが『生贄』という手段ではないため発動できないがな。さらにトラップ発動、闇次元の解放。サクリファイスを攻撃表示で特殊召喚！効果により、裏側守備表示のモンスターを吸収する！ただし、攻撃力アップはしない。
３体のモンスターでダイレクトアタック！」

「カオス・ソーサラーなど二度と見たくないわーーーーーーーーーー！」

トール　ＬＰ５４００→３１００→５００→－２２００

〜〜〜後日〜〜〜〜

「フレイアーーーーー！！」

「キャアアアアア！」

トールがフレイアをミョルニルを振り回しながら追いかけていたそうだ。

２００００ユニーク記念　フュージョンとリチュアル（後書き）

本編ではこの組み合わせでデュエルする時が永遠に来ないと思いますので、今回デュエルしてみました。要望があればですが、この２つのデッキを本編に登場させてもいいと考えています。

第５９話　北欧の三戦車　前編（前書き）

前書きはただ一言。
ライディングデュエル、アクセラレーション！

第５９話　北欧の三戦車　前編

～～～デュエルアカデミア校舎前～～～

「あ～あ。今日も面倒だったね。ひゃはははは！」

全くだ。デュエル実技も、指定されたデッキではな。

「あ、ディスペア君」

「…高町か。いつもの２人はどうした？」

こいつらが３人共にいないとはな。珍しいこともあるものだ。

「え～と…Ｄ－ホイールって言う物を取りに行くって」

Ｄ－ホイールだと！？何故こいつらがそんなものを！？

「はやてちゃんが前に別の世界で任務を遂行してた時、お土産に持ってきたものなんだって言ってたよ」

「へぇ。Ｄ－ホイールか。そう言えばディスペア。僕達の北欧の三戦車もそろそろ出していい？ひゃはははははは」

北欧の三戦車…オーディン、トール、ロキの３人が持つＤ－ホイールをまとめてそう呼ぶ。

オーディンのＤ－ホイール『ルーン・オブ・ファーストウィング』
トールのＤ－ホイール『プレッシャー・オブ・セカンドウィング』
そしてロキのＤ－ホイール『ドライドラグーン・オブ・サードウィング』
北欧の三戦車は起動させると、空中に光のコースを創りだす。
オーディンのが金色の１つ首の龍を模したＤ－ホイール。トールのが２つ首の青い龍を模したＤ－ホイール。そしてロキのは３つ首の赤い龍を模したＤ－ホイールだ。動力は神力だが。いずれも、ハンドルなどは付いておらず、操縦者の意思で自らの手足のように動かせる。ディスクはディスペアのと同じように、セットする場所が存在せず、スタンディング・デュエルと同じように腕にはめる。ロキのは既にこの世界に持ってきている。
だが、北欧の三戦車と我のＤ－ホイールはどこの世界に放置しておいても、主の意思でどこからでもやってくる。

「北欧の三戦車？なにそれ？」

「僕達のＤ－ホイールの総称。僕のも含めて、北欧の三戦車って呼ぶんだ。まあ、人間達のＤ－ホイールより、遥かに性能が高いけどね。ひゃはははははははははは！」

「え？４戦車じゃないの？」

「ディスペアのは含めてないよ。僕らのより、遥かに性能が高すぎるし、最初に誕生したＤ－ホイールだし。なによりディスペアは北欧神話の神じゃないしね」

「む。こんなところにいたのか。探したぞ」

「あ、トール、オーディン。北欧の三戦車を揃えようと思ったんだ

けど、どう？」

「懐かしいな。北欧の三戦車か。わたしも久しぶりに、３台全てが揃うのを見たくなったな」

「じゃあ、決まりだね！」

「来い、プレッシャー・オブ・セカンドウィング！」

「来たれ、ルーン・オブ・ファーストウィング！」

「ひゃはははははははは！ドライドラグーン・オブ・サードウィングーー！！」

随分と久しぶりに見たが、北欧の三戦車：性能もかなり良かったはずだ。

「またこうして北欧の三戦車が揃うなんて、考えてもみなかったね！ひゃはははははははは！」

確かにかなり壮大だ。だが、我が思うのはなぜ３神竜ではなく、三戦車なのかだ。

「あ、そうだ。せっかくだから、ライディングデュエルやろうよ」

「本気で言ってるの？僕達と戦いたがる奴なんてどこを探してもいないのに」

「お、なんか凄そうなのが集まってるな～」

「あ、はやてちゃん、フェイトちゃん！」

「調整、終わったで～！これで気持ち良く走れるはずや！」

「で？どうするの？高町」

「やろうよ！ライディングデュエル」

「おもしろそうやな～やろうやろう！」

「じゃ、決まりだね。ここはやっぱり、3対3かな？」

「ディスペア君はどうするの？」

「我は観戦させてもらう。それに、我のD－ホイール…D－チャリオットは巨大すぎて、こんな場所では出せん」

「でも、ディスペアのは飛行タイプだったじゃん」

「ロキ、確かに飛行タイプだが、パニックにはさせたくない」

「ああ、そういうことか。じゃあ、僕達3人で行くよ！」

「「了解だ！」」

～～～数分後～～～

「「ライディングデュエル・アクセラレーション！！」」

「ひゃはははははは！起動しろ！ドライ・ドラグーン！」

「お願い、レイジング・ブレイブ！」

ドライ・ドラグーンが起動したことで、自動的にコースが書かれる。この上を三戦車は飛行するのだ。相手は相手で、一般コースがあればそれを走ることができるが、先攻をとれる第一コーナーは飛行できる三戦車が圧倒的に有利だ。

「は、速い…」

「北欧の戦車の力、見せてあげるよ！僕の先攻！僕は永続魔法『Ｈｓｐ（ハイパースピードスペル）ー機皇核』を発動」

「Ｈｓｐ!?なにそれ！？」

「ハイパースピードスペル。殆どのカードが発動条件であるスピードカウンターが必要ないんだ。機皇核の効果によって、デッキからスカイ・コアを魔法・罠ゾーンにセットする！そしてＨｓｐー機皇破棄を発動！デッキから『スキエル』『ワイゼル』『グランエル』のパーツと本体を各１種類墓地へ送ることができる！機皇帝スキエル∞、スキエルＴ、スキエルＡ、スキエルＧ、スキエルＣを墓地へ送る！そして機皇核の効果を発動！このカードの効果によってセットした機皇帝のコアを墓地へ送ることで、そのコアに記されているカードを墓地から特殊召喚できる！ただし、その後自分のエクストラデッキからシンクロモンスター１体を墓地へ送る！

僕は、機皇帝スキエル∞、スキエルＴ、スキエルＡ、スキエルＧ、スキエルＣを特殊召喚し、エクストラデッキから極神皇ロキを墓地へ送る！合体しろ、機皇帝スキエル！」

機皇帝スキエル∞　攻撃力0→2200

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×３
スピードカウンター×１
フィールド
機皇帝スキエル∞　攻撃力２２００
スキエルＴ　攻撃力６００
スキエルＡ　攻撃力１０００
スキエルＧ　守備力３００
スキエルＣ　攻撃力４００
Ｈｓｐ－機皇核
伏せカード×１

「私のターン！」

なのは　スピードカウンター　0→1
ロキ　スピードカウンター　1→2

「ドライ・ドラグーンが描くコースは複雑だから大変だよね。僕は飛行してるから関係ないけど。ひゃはははははははは！よそ見をすると落ちるよーー！ひゃーははははは！」

「く…きゃああ！危なかった…とりあえず私は、シャインエンジェルを召喚してターンエンド！」

なのは
ＬＰ４０００
手札×５
スピードカウンター×１
フィールド
シャインエンジェル　守備力８００

「ひゃはははははは！僕のターン！」

ロキ　スピードカウンター　２→３
なのは　スピードカウンター　１→２

「僕はＨｓｐ－機皇独立を発動！自分のスピードカウンターが０以上ある時、このターン、機皇帝はパーツも攻撃できる！スキエルＡで、シャインエンジェルを攻撃だ！」

「シャインエンジェルの効果で、デッキからシャインエンジェルを特殊召喚するよ！」

「機皇帝スキエルで、シャインエンジェルを攻撃！」

「きゃあああ！な、何！？何なの！？」

「ああ、気をつけてね。北欧の三戦車は、本来僕達の固有ディスクを使ってデュエルしていたんだ。そのせいもあって、ダメージが多少なりとも現実化するよ」

「そういうことは早く言ってよ！」

「ごめんごめん。ひゃはははははは」

なのは　ＬＰ４０００→３２００

「とりあえず、シャインエンジェルの効果で、オネストを特殊召喚！」

「げ！やばっ！…とりあえず、ターンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×３
スピードカウンター×３
フィールド
機皇帝スキエル∞　攻撃力２２００
スキエルＴ　攻撃力６００
スキエルＡ　攻撃力１０００
スキエルＧ　守備力３００
スキエルＣ　攻撃力４００
Ｈｓｐ－機皇核
伏せカード×１

「私のターン！」

ロキ　スピードカウンター　３→４
なのは　スピードカウンター　２→３

「オネストの効果で、このカードを手札に戻すよ！さらに、手札から速効魔法『禁じられた聖杯』を発動！このターン、スキエルＧの効果を無効にして、攻撃力を４００ポイントアップするよ！」

機皇帝スキエル∞　攻撃力２２００→２６００
スキエルＧの効果が無効！？やばい！

「そして、コーリング・ノヴァを召喚！コーリング・ノヴァで、機皇帝スキエルを攻撃！ダメージステップにオネストを捨てるよ！」

コーリング・ノヴァ　攻撃力１４００→４０００

「ぼ、僕の機皇帝が…！」

ロキ　ＬＰ４０００→２６００

「私はこれでターンエンド」

なのは
ＬＰ３２００
手札×４
スピードカウンター×３
フィールド
コーリング・ノヴァ　攻撃力１４００

「僕のターン」

ロキ　スピードカウンター　４→５
なのは　スピードカウンター　３→４

「僕は、トラップカード、無限牢を発動！」

「あ、あのカードって！」

無限牢の効果を使用して、手札のスキエルＣ５を墓地へ送って、スカイ・コアを魔法・罠ゾーンにセットする。

「今のうちに使っておこうかな。手札から『Ｕｓｐ（アルティメット・スピードスペル）一断ち切れない絆』を発動！僕のスピードカウンターが５個以上ある時、全て取り除いて発動！このデュエルでの、墓地の引き継ぎができる！ただし、その後にデッキ・手札・墓地から取り除いたスピードカウンターの数と同じレベルのモンスターカードを１枚除外する！僕は、極星霊デックアールヴを除外するよ！ひゃははは」

ロキ　スピードカウンター　５→０

これで、僕達の友の証、三極神と機皇帝がつながる！

「そして機皇核のもう１つの効果を発動！このカードを墓地へ送ることで、墓地から機皇帝のパーツを１枚除外し、互いに２０００ポイントのダメージを受ける！僕は墓地から、スキエルＣ５を除外する！ひゃはははははは！」

スキエルＣ５が除外されるのと同時に、機皇核からエネルギー弾が放たれ、ロキとなのはに当たる。

「キャアアアアア！」

ロキ　ＬＰ２６００→６００
なのは　ＬＰ３２００→１２００

「僕はこれでターンエンドだ」

ロキ
手札×２
スピードカウンター×０
フィールド
無限牢
スカイ・コア（魔法扱い）

「私のターン！」

なのは　スピードカウンター　４→５
ロキ　スピードカウンター　０→１

「コーリング・ノヴァでダイレクトアタック！」

「うわあああああ！」

ロキ　ＬＰ６００→－１４００

どうやら、ここまでみたいだね。でも、やることはやったし、大丈夫。ひゃはははははははは！

第５９話　北欧の三戦車　前編（後書き）

誤字、脱字やデュエル構成について問題があればご指摘ください。

北欧の三戦車　後編（前書き）

今回はなのはたちが強いです。新しい切り札を用意してきました。

北欧の三戦車　後編

「まさかこの僕が、１人も潰せずに落ちるなんてね」

全く。呆れるよ。

「北欧の戦車が１つ、ドライドラグーン・オブ・サードウィングも落ちたものだな」

「僕が落ちただけだ。僕の愛機は落ちてない。じゃあ、任せるよ」

僕のデュエルの腕が落ちただけ。決して僕の愛機の性能がダウンすることはない。いつもメンテナンスしてるんだ。

「了解した」

ロキ↓トール　ＬＰ０↓４０００
手札２↓５
スピードカウンター×１
フィールド
無限牢
スカイ・コア

「高町。次は我が相手だ！プレッシャー・オブ・セカンドウィング、起動！」

高町の走っていたコースがいきなり変わる。高町は何とか対応したか。

「ほう。突然のコース変更に対応できるとはな」

「そう簡単には落ちないよ！それにしても、随分と真っすぐなコースだね」

「我はコースから貴様を落とす必要などない。デュエルで倒す！これが我のスタイルだ！」

「「デュエル」」

高町のフィールドにはコーリング・ノヴァが1体存在するのみ。
畳みかけるのなら、今だ！

「我のターン！」

トール　スピードカウンター　1→2
なのは　スピードカウンター　5→6

「我は、Ｈｓｐ－機皇再生を発動！蘇れ！機皇帝スキエル∞！スキエルＴ！スキエルＡ！スキエルＧ！スキエルＣ！さらにＨｓｐ－機皇変換を発動！自分のスピードカウンターが0以上ある時、自分フィールド上の機皇帝を破壊し、デッキから別の機皇帝とその機皇帝の名前が含まれるパーツを各1種類特殊召喚できる！このカードが墓地へ送られた時、デッキから『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』のいずれかを墓地へ送る。
我は機皇帝スキエル∞を破壊し、機皇帝ワイゼル∞、ワイゼルＴ、ワイゼルＡ、ワイゼルＧ、ワイゼルＣを特殊召喚する！そして、デッキからワイズ・コアを墓地へ送る。
合体しろ！機皇帝ワイゼル！」

機皇帝ワイゼル∞　攻撃力0→2500

「機皇帝ワイゼル…」

「機皇帝ワイゼルでコーリング・ノヴァを攻撃！」

「きゃああ！」

高町は何とかD－ホイールを制御し、コースアウトを防ぐ。
そう来なくてはな。こちらも本気でデュエルする意味が無いからな。

「私はコーリング・ノヴァの効果で、2体目のオネストを特殊召喚するよ！」

なのは　LP1200→100

「メインフェイズ2、手札から『Hsp－極神星』を発動！自分のスピードカウンターが1個以上ある時、エクストラデッキから『極神皇トール』『極神皇ロキ』『極神聖帝オーディン』のいずれかを墓地へ送り、デッキまたは手札から『極星』と名のついたチューナーモンスター1体を除外する！
我は極神皇トールを墓地へ送り、極星獣グルファクシを除外する。
これでターンエンドだ！」

トール
LP4000
手札×3
フィールド
機皇帝ワイゼル∞　攻撃力2500

ワイゼルＴ　攻撃力５００
ワイゼルＡ　攻撃力１２００
ワイゼルＧ　守備力１２００
ワイゼルＣ　攻撃力８００

オネスト…手札から捨てることで、光属性モンスターの戦闘勝利を約束するカード…だが！我はロキと同じようには行かないぞ！

「私のターン！」

なのは　スピードカウンター　６→７
トール　スピードカウンター　２→３

～～～ＢＧＭ『星の輝き　スターライト・ブレイカー』～～～

「私は、オネストの効果を発動してオネストを手札に戻すよ！」

これで高町の手札にはオネストがいる。向こうから攻撃を仕掛けてくることは必至。

「さらに私は、レイジング・エンジェルを召喚！レイジング・エンジェルは、私のライフが１００ポイントの時のみ、手札を全て捨てて特殊召喚できる！」

天からレイジングハートを構えた、髪をおろしたなのはに天使の武装をさせたような巨大な天使が降臨する。

レイジング・エンジェル！？見たことが無いモンスター…恐らくあ

の天使は、高町の槍、レイジングハートを持った天使…高町の精霊！我らが絆、極神に匹敵する巨大な力を感じる…！

「バカな……精霊を見ることもできなかった人間が、精霊のカードを誕生させたというのか！」

レイジング・エンジェル　攻撃力４０００

「レイジング・エンジェルの効果！このカードの召喚に成功した時、墓地から天使族のレベル４モンスター１体を手札に戻すことができる！私は、オネストを手札に戻す！」

「だが、ワイゼルＧは攻撃された時、このカードに攻撃対象を変更できる！いくらオネストがあろうと、機皇帝の本体に攻撃はできない！」

「レイジング・エンジェルの第２の効果！このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを与える！」

貫通ダメージだと！？だが、レイジング・エンジェルの攻撃力は４０００！守備力１２００のワイゼルＧでもダメージは２８００ポイントで済み、ライフは残る！

「レイジング・エンジェルで、ワイゼルＧを攻撃！レイジング・エンジェルの第３の効果を発動！このカードの攻撃宣言時に、手札にある天使族モンスター１体を捨てることで、相手モンスター１体の攻撃力と守備力を０にする！オール・ブレイカー！」

貫通能力に加え、墓地の天使族モンスターを回収し、そのうえで相手の攻守を０にする…そんなカードがあるというのか！

「そして、レイジング・エンジェル第４の効果！このカードがモンスターを破壊した場合、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！シャイニング・ブレイカー！！」

レイジング・エンジェルが持つ槍から、巨大な光が放たれる。光は、トールとプレッシャー・オブ・セカンドウィングを包んだ。

「クッ…無限牢の効果発動！手札１枚を捨て、墓地からワイズ・コアをセット！――――――――――――うわあああああああああああああ！！」

その光が収まった後、プレッシャー・オブ・セカンドウィングが凄まじい轟音とともに爆発する。…形はまだ残っている。どうやら、装甲が破壊されたらしい。

トール　ＬＰ４０００→０

バカな……我が、既に一人と戦っているもの相手に…負けたというのか！…だが、このままクラッシュをするわけにはいかん！

「うおおおおおおお！」

「ト、トール、無茶だ！」

あのバカ！自らの神力の大半を使用して、Ｄ－ホイールを制御するなんて！このデュエルは別に命がかかってるわけじゃないのに、なにやってるんだ！！

「我は、いや、我らは負けん！北欧の三戦車が、敗北することなど

あってはならない！後は任せたぞーーーーー！オーディン！！」

「わかった。後はわたしに任せろ。北欧の三戦車の誇り、ここで失うことはあってはならない」

「ひゃはははははははは！そう言えばあったね、そんな伝説」

僕達3人の、ディスペアと出会った後も健在の、無敗伝説。

「…行ってくるとしよう。我らの誇りを守る。そのための作戦と準備はここまですべて予定通りだ。高町の精霊、レイジング・エンジェルを除けばな。
ルーン・オブ・ファースト・ウィング、起動！」

～～～ＢＧＭ終了～～～

空中に巨大な魔法陣が現れ、ルーン文字の羅列ができる。そこからルーン文字がつながり、1つのコースになった。かなり複雑なコースだ。我でもあのようなコース、走りたいとは思わない。
北欧の三戦車の誇り。我もそれがどこまで大事な物かは知らない。だが、トールが自らの力を開放してまでオーディンにつないだ。それだけの価値が、その誇りにはあるということか。しかし、高町1人に2人もやられてしまってはな。オーディンが3人抜きをしない限り、北欧の三戦車に勝利はない。待っているのは絶望だ。だが、この戦いに本当に我のカードである機皇神マシニクル∞キュービックなど出していいのか？

トール↓オーディン

ＬＰ０→４０００
墓地引き継ぎ
手札２→５
スピードカウンター×３
フィールド
無限牢
スカイ・コア
ワイズ・コア

「行くぞ。高町なのは！」

「「デュエル」」

「わたしのターン」

オーディン　スピードカウンター　３→４
なのは　スピードカウンター　７→８

「わたしは『Ｈｓｐ－ラスト・ピース』を発動。自分のスピードカウンターが３つ以上存在し、墓地に機皇帝の核が２種類ある時、デッキまたは手札から最後の核を墓地へ送る。わたしはデッキからグランド・コアを墓地へ送る。そしてこのターン、わたしは手札からトラップカードを１枚発動できる。さらに無限牢の効果を発動。手札からグランエルＣを墓地へ送り、グランド・コアをセット。無限牢の第２の効果により、このカードを墓地へ送り、このカードの効果によってセットされたカードを手札に戻す。よって、スカイ・コア、ワイズ・コア、グランド・コアを手札に戻す。Ｈｓｐ－ラスト・ピースの効果により、手札からトラップカード『機皇創世』を発動。手札の３つのコアを墓地へ送り、降臨せよ！機皇神マシニクル∞！！」

「攻撃力４０００…でも、それなら私のレイジング・エンジェルと相打ちだよ！」

「そう簡単にいくものか。手札から『Ｈｓｐ－エクストラ・フォース』を発動。自分のモンスター1体を選択し、エクストラデッキから選択したモンスターと同じ攻撃力のモンスター1体と、デッキからチューナーモンスター1体を除外し、選択したモンスターは2回攻撃できる。
わたしは機皇神マシニクルを選択し、デッキから極星天ヴァルキュリアを除外し、エクストラデッキから極神聖帝オーディンを墓地へ送る。これでこのターン、機皇神マシニクルの攻撃は2回行うことができる」

「それでも攻撃力は４０００のまま！私のレイジング・エンジェルと同じ攻撃力、相打ちだよ！」

「機皇神マシニクルで、レイジング・エンジェルを攻撃。ザ・キューブ・オブ・ディスペアー！」

「シャイニング・ブレイカー！」

確かにこのままでは相打ちだ。だが…我らの力（絆）はそう簡単には断ち切れない。

「キャアアアアアアア」

なのは　ＬＰ１００→－３９００

ほう。あの攻撃を喰らい、コースから落ちないとは…さすがは高町、

不屈の心。

オーディン
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００

「ど、どうして！？」

「機皇神マシニクルの効果、墓地から機皇帝のパーツを除外することで、破壊を無効にする。わたしはこの効果を使用し、墓地からワイゼルＴを除外したのだ。そしてダイレクトアタックが成功した」

「う…」

「でも、なのはは１人で２人も倒したんだよ！十分すごいよ！」

「気にすることなんてあらへん。ダメージのリアル化で、疲労がたまってるはずや。ゆっくり休んどいてな」

「うん。じゃあフェイトちゃん。後は任せるよ」

「任せといて！」

なのは↓フェイト
ＬＰ－３９００↓４０００
手札０↓５
スピードカウンター×８
フィールド

無し

「フェイト・Ｔ・ハラオウンとアサルトインパクト、行きます！」

「「デュエル」」

「私のターン、私はスピードワールドの効果で、スピードカウンターを7つ取り除いて、カードを1枚ドロー！」

フェイト　スピードカウンター　8→9→2
オーディン　スピードカウンター　4→5

「そして、ＢＦ－黒槍のブラストを召喚！さらに、黒槍のブラストがいるからＢＦ－疾風のゲイルを特殊召喚するよ！疾風のゲイルの効果発動、マシニクルの攻守を半分にする！」

「クッ…ディスペアの力であるマシニクルが…すまない…」

機皇神マシニクル∞　攻撃力４０００→２０００

謝らなくてもいい。我の機皇神マシニクルが足を引っ張ったことに謝るべきだろう。

「そしてＳｐ－ストーム・オブ・ラッシュを発動！自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、自分のＢＦ1体を選択して発動する。選択したＢＦ以外のＢＦ1体を生贄に捧げて、選択したモンスターの攻撃力を、このターンの間だけ選択したモンスターの攻撃力を相手フィールド上に存在する最も攻撃力の高いモンスター＋１００ポイントの数値にする！私は、ＢＦ－黒槍のブラストを生贄に、ゲイルの攻撃力を２１００ポイントにするよ！疾風のゲイルで、機皇神

マシニクルを攻撃！ブラック・スクラッチ！」

「…機皇神マシニクルの効果により、墓地のワイゼルＡを除外し、破壊を無効にする」

オーディン　ＬＰ４０００→４０００

「残念だけど、選択したモンスターはこのターン、相手にダメージを与えられない。でも、相手フィールド上にモンスターが存在する限り、続けて攻撃できるんだ！」

「何！！」

「ＢＦ－疾風のゲイルで、機皇神マシニクルを攻撃！」

「２回目の破壊は墓地のワイゼルＧを除外し無効、３回目はワイゼルＣ、４回目はスキエルＴ、５回目はスキエルＡ、６回目はスキエルＧ、７回目はスキエルＣ、８回目はグランエルＣ、クッ…」

機皇神マシニクルが倒されたか。だが、オーディンにダメージはない。

「私はカードを１枚伏せて、ターンエンド」

フェイト
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
ＢＦ－疾風のゲイル　攻撃力１３００
伏せカード×１

「わたしのターン」

オーディン　スピードカウンター　5→6
フェイト　スピードカウンター　2→3

「わたしは『Ｈｓｐ－機皇爆破』を発動。自分の『機皇』と名のついたモンスターが破壊された2ターンに内に発動できる。わたしの墓地の『機皇』と名のついたモンスターカードを全てゲームから除外し、相手の手札とフィールド上のカードと墓地のカードを全てゲームから除外する」

「そ、そんな！」

「だが、このカードを使用した場合、このターンの間わたしはモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚ができない。わたしはこれでターン終了だ」

オーディン
ＬＰ４０００
手札×２
スピードカウンター×６
フィールド
無し

「私のターン！」

フェイト　スピードカウンター　3→4
オーディン　スピードカウンター　6→7

今引いたのはフェザードロー…墓地の鳥獣族モンスターを1体除外して3枚ドローするカード…でも、このカードを使ったターンはモンスターを召喚できない。さらにこの効果で1枚もモンスターをドローできなかったら、私は２０００ポイントのダメージを受ける…それでも、なにもせずにターンエンドするよりかはいいよね。

「『Ｓｐ－フェザードロー』を発動！墓地からブラストを除外して、カードを3枚ドロー！引いたカードの中に、モンスターが無ければ私は２０００ポイントのダメージを受ける。でも、私はモンスターカード『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を引いたよ！」

一気に手札が3枚…そしてハラオウンの手札にはシュラがある。オーディンはどうするつもりだ？

「私はこれでターンエンド」

フェイト
ＬＰ４０００
手札×３
スピードカウンター×４
フィールド
無し

「わたしのターン」

オーディン　スピードカウンター　7→8
フェイト　スピードカウンター　４→５

む。このコースの最大の難所、５連続のヘアピンカーブか。わたしは飛行しているから関係ないが、テスタロッサはどうだ？

「くっ、あっ！キャアア！……あ、危なかったぁ…」

どうやら、落ちなかったようだな。あのまま落ちていれば、海に落下していた。

「わたしは『Ｕｓｐ－星界の秘術』を発動。自分のスピードカウンターを全て取り除き、自分の墓地に存在する『極神皇トール』『極神皇ロキ』『極神聖帝オーディン』の３体をシンクロ召喚扱いとして特殊召喚し、さらにゲームから除外されている『極星』と名のついたチューナーモンスターを全て墓地に戻す！このデュエル中、わたしのスピードカウンターは上がらなくなるがな」

オーディン　スピードカウンター　８→０

「な！三極神を復活！？いつの間に三極神を…！！」

～～～～～～～～～

『僕は、機皇帝スキエル∞、スキエルＴ、スキエルＡ、スキエルＧ、スキエルＣを特殊召喚し、エクストラデッキから極神皇ロキを墓地へ送る！合体しろ、機皇帝スキエル！』

『メインフェイズ２、手札から『Ｈｓｐ－極神星』を発動！自分のスピードカウンターが１個以上ある時、エクストラデッキから『極神皇トール』『極神皇ロキ』『極神聖帝オーディン』のいずれかを墓地へ送り、デッキまたは手札から『極星』と名のついたチューナーモンスター１体を除外する！我は極神皇トールを墓地へ送り、極

星獣グルファクシを除外する』

『わたしは機皇神マシニクルを選択し、デッキから極星天ヴァルキュリアを除外し、エクストラデッキから極神聖帝オーディンを墓地へ送る。これでこのターン、機皇神マシニクルの攻撃は2回行うことができる』

～～～～～～～～～

「あの時！」

「そうだ。わたし達は最初から、機皇帝が倒されることを予想していた。機皇神が破壊されたのは驚いたがな。星界の三極神よ！わたし達の勝利のために、降臨せよ！出でよ！極神皇トール！極神皇ロキ！極神聖帝オーディン！」

海が割れ、そこから極神皇トールが姿を現す。次に、次元が破られ、その狭間から極神皇ロキが現れる。そして最後に、天空より極神聖帝オーディンが光臨する。……全員が極神を墓地へ送っていたのは、このためだったのか。

「極神聖帝オーディンでダイレクトアタック！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「キャアアアアアアアア！！」

フェイト　ＬＰ４０００→０

オーディンの攻撃を直接喰らったか…テスタロッサは生きているか？……！！なんだ、あれは！？

「私のライフが０になったことで、手札のライトニング・エンジェルを特殊召喚できた」

ライトニング・エンジェル　攻撃力４０００

あれはテスタロッサの精霊…高町の精霊と同じく、テスタロッサの精霊も随分と本人に似ているな。バルディッシュを構え、髪をおろし、女神のような武装をしたテスタロッサだ。

「このライトニング・エンジェルは、私のライフが０になった時のみ、手札を全て捨てて特殊召喚できるんだ。このモンスターがフィールド上に存在している間は、私はライフが０でもデュエルを続けられる！ライトニング・エンジェルが特殊召喚された時、私はデッキから光属性の天使族モンスターを１枚手札に加えることができる。でも、私のデッキに光属性の天使族モンスターは入ってない」

「わたしはカードを１枚伏せてターン終了だ」

オーディン
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇ロキ　攻撃力３３００
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×１

「私のターン！ライトニング・エンジェルの効果で、私はドローできない」

オーディン　スピードカウンター　0→0
フェイト　スピードカウンター　5→6

「私は、ライトニング・エンジェルの効果を発動するよ！ライトニング・エンジェルの攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントダウンして、このターン、ライトニング・エンジェルはダイレクトアタックができる！」

攻撃力3000のダイレクトアタック…脅威だな。だが、オーディンのライフは4000ポイント。攻撃を受けても、まだ0にはならない。

「ライトニング・エンジェルでダイレクトアタック！ライトニング・スマッシャー！！」

「ぐおおおおおおおお！」

オーディン　LP4000→1000

くっ…これがテスタロッサの精霊…やってくれる！

「私はこれでターンエンドだよ」

私ができるのはここまでかな？

フェイト
LP0

手札×０
フィールド
ライトニング・エンジェル　攻撃力４０００

「わたしのターン」

オーディン　スピードカウンター　０→０
フェイト　スピードカウンター　６→７

「わたしは極神皇トールの効果を発動。エフェクト・アブソーバー！」

「あ！ライトニング・エンジェルが！」

「ライトニング・エンジェルの効果が無効になったことにより、お前の負けだ。テスタロッサ」

「うぅ…はやて、後は任せたよ！」

「よっしゃ！いっちょやるか！」

フェイト→はやて
ＬＰ０→４０００
手札０→５
フィールド
ライトニング・エンジェル　攻撃力４０００

オーディン
ＬＰ１０００
手札×３

スピードカウンター×０
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇ロキ　攻撃力３３００
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×１

「「デュエル！」」

「私のターン！」

はやて　スピードカウンター　７→８
オーディン　スピードカウンター　０→０

「私は『Ｓｐ一祝福の風』を発動！スピードカウンターが７個以上ある時、１つ取り除いてデッキから『堕天使』と名のついたモンスター１体を墓地へ送って、手札から送ったモンスターと同じレベルの光属性・天使族のモンスター１体を特殊召喚できる！私は堕天使スペルビアを墓地に送って、手札からＴｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳを特殊召喚や！」

はやて　スピードカウンター　８→７

「そうはさせん！カウントラップ『最高神の裁断』！極神聖帝オーディンがフィールドに存在する場合、相手が魔法・罠・モンスター効果を使用した時、または相手がモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時、それの発動または召喚を無効にして破壊する。わたしは祝福の風の発動と効果を無効にして破壊する。そして、このカードの発動後デッキまたは手札から『最高神の裁断』を２枚までセットする。この効果で伏せた最高神の裁断は、伏せたターンでも

発動できる」

「しゅ、祝福の風が！それに、カウンタートラップが増えた…なら！Ｓｐ－マジカル・リフレクション！残念やけど、このカードはカウンタートラップの効果で無効にすることはできへんよ！スピードカウンターが５つ以上ある時、次の相手ターン、相手は攻撃宣言時に、攻撃宣言したモンスターの攻撃力分のダメージを受ける！モンスターを１体セットして、ターンエンドや」

はやて
ＬＰ４０００
手札×３
スピードカウンター×７
フィールド
セットモンスター×１

「わたしのターン！」

オーディン　スピードカウンター　０→０
はやて　スピードカウンター　７→８

「わたしは極神聖帝オーディンの効果を発動！インフルエンス・オブ・ルーン！
極神聖帝オーディンで、セットモンスターを攻撃！ヘヴンズ・シャッジメント！」

「な！？そんなことをしたら、４０００ポイントのダメージを受けるよ！？」

「極神聖帝オーディンの効果（インフルエンス・オブ・ルーン）により、オーディンはエンドフェイズ

まで魔法・罠の効果を受けない！」

「でも、攻撃された堕天使エヴィーのリバース効果を発動！デッキからレベル８以上の光属性以外の天使族モンスター１体を手札に加える！
私はフォーリン・エンジェルを手札に加える！」

「極神皇ロキでダイレクトアタック！速効魔法、最後の進軍を発動。ロキの効果をエンドフェイズまで無効にすることで、魔法・罠の効果を受けない！」

「キャアアアアアアアア！！」

はやて　ＬＰ４０００→７００

「でも、オーディン君。君は今、大きな間違いを犯したんよ！光臨せよ！フォーリン・エンジェル！」

シュベルトクロイツを構え、髪留めを外し、堕天使のような黒い衣装を身にまとった八神だな。初代リィンフォースと呼ばれたあの女の衣装を長袖、ロングスカートにしたような感じだ。まさに堕天使（フォーリン・エンジェル）だ。

フォーリン・エンジェル　攻撃力４０００

「させん！カウンタートラップ、最高神の裁断！」

「フォーリン・エンジェルの効果！フォーリン・エンジェルの特殊召喚を無効にすることはできへん！フォーリン・エンジェルは自分が攻撃力３０００以上のダイレクトアタックを受けて、ライフが１

０００ポイント以下になった時に特殊召喚できる！そしてフォーリン・エンジェルの特殊召喚時、手札を全て捨て、私のライフを０にする！フォーリン・エンジェルがフィールドを離れた時、私は敗北する！」

「ならば極神皇トールの効果を発動！エフェクト・アブソーバー！」

「フォーリン・エンジェルの第２の効果！１ターンに１度、墓地のモンスターカードを１枚除外することで、このカードが受ける魔法・罠・モンスターの効果を１度だけ無効にできる！」

「『Ｈｓｐ－星界の神術』！！自分フィールド上に『極神皇トール』『極神皇ロキ』『極神聖帝オーディン』が揃っている時、相手フィールド上のカードをすべて破壊する！」

「フォーリン・エンジェル第３の効果！このカードは１ターンに１度、破壊されない！」

「クッ…わたしのターンは終了だ」

オーディン
ＬＰ１０００
手札×２
スピードカウンター×０
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇ロキ　攻撃力３３００
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×１

「私のターン！フォーリン・エンジェルの効果で、私はドローできない」

はやて　スピードカウンター　８→９

「でも、スピードワールド２の効果を使って、カードを１枚ドロー！」

はやて　スピードカウンター　９→２

「フォーリン・エンジェルで、極神皇ロキを攻撃！ヴァニティー・フィール！」

「クッ…」

オーディン　ＬＰ１０００→３００

「ターンエンドや」

「破壊された極神皇ロキの効果発動！デックアールヴを除外し、蘇る！そしてこの効果で蘇ったロキの効果により、墓地から最高神の裁断を手札に加える！」

はやて
ＬＰ０
手札×１
スピードカウンター×２
フィールド
フォーリン・エンジェル　攻撃力４０００

これで逆転のカードが引けなければ、わたしは負ける。そして、北欧の三戦車の伝説が終焉を迎える。だが、そんなことをするわけにはいかない！トールとロキのためにも！

「わたしのターン！……！！」

はやて　スピードカウンター　２→３
オーディン　スピードカウンター　０→０

「わたしは『Ｕｓｐ－星界の収束』を発動！自分のスピードカウンターが０の時、自分フィールドのトールとロキを除外して発動！その攻撃力を、オーディンに加える！」

極神聖帝オーディン　攻撃力４０００→１０８００

「最後の攻撃だ！極神聖帝オーディン！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「こ、ここまでやれたのに…キャアアアアアア！」

はやて　ＬＯＳＥ

～～～数分後～～～

「危なかったね、オーディン。ひゃはははははは！」

「まさかあんなカードがあるとはな。星界の三極神と同等の大きさだったぞ」

次は我と手合わせ願おうか。ハハハハハハハハハ！

北欧の三戦車　後編（後書き）

今回のなのはたちの切り札の効果は、明日載せます。

第６０話　十代ｖｓディスペア！（前書き）

前の話で使っていた3体のエンジェルモンスターの効果をあとがきに載せました。『明日載せる』とか勝手に言っておいて載せずにすいませんでした。

第６０話　十代ｖｓディスペア！

オーディンたちとあそこまで互角の勝負を繰り広げるデュエリストが、まさか我以外にもいたとはな。面白い。もう夜だから仕方がないが、明日、奴らに我との勝負を挑むとしよう。

～～～次の日～～～

さあ、行くとしよう。オーディン達と互角の勝負をしたのだ、悪いが我が戦いたくなった。

『あ～あ～。ディスペア君。校長がお呼びなノーネ』

……バッドタイミングだな。しかたが無い。

～～～校長室～～～

「何の用だ」

「実は、ディスペア君にデュエル申請書が来ているのです」

「相手は」

「遊城十代君です」

なぜ奴はいつも我が行動を起こす寸前に邪魔をする。

「拒否権は？」

「駄目です」

「なぜ？」

「わたしが見たいからです」

……。

「5分だ。5分時間をくれてやる。十代に用意しろと言え」

覚悟しろ、十代。

～～～5分後、デュエル場～～～

「楽しみだぜ！お前が新しいカイザーになってから、1度もデュエルしてなかったからな！」

「我が行動の妨げをした罪は重いぞ」

このデッキはそこまで威力があるわけでもない。固有ディスクを使っても大丈夫だな。

「「デュエル」」

「我のターン！我はカードを5枚伏せ、フィールド魔法『天空の聖域』を発動。ターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
天空の聖域
伏せカード×５

「俺のターンドロー！バブルマンを、攻撃表示で召喚！カードを2枚ドローするぜ！そう言えば、ディスペアのディスクって変わってるな。いつものアカデミアディスクじゃないのか？」

「このディスクは我の固有ディスクだ」

……1ターン目のバブルマン…

「ふ～ん。魔法カード、融合発動！」

「カウンタートラップ『マジック・ドレイン』！相手は手札から魔法カードを1枚墓地へ送り、このカードの効果を無効にできる。無効にしなかった場合、その魔法カードの発動と効果を無効にし破壊する！」

さあ、どうする！？魔法カードは十代のデッキのキーカード！それを封じれば、残るのは攻撃力の低い弱小ＨＥＲＯのみ！

「俺はマジック・ドレインの効果を無効にしない…」

手札に魔法カードが無いのか？それとも、そちらのカードの方が重要なのか？

「バブルマンで、ダイレクトアタック！」

「この程度、くれてやる」

ディスペア　ＬＰ４０００→３２００

「ターンエンドだ…」

融合を封じられた…しかもまだ、ディスペアの場には伏せカードが４枚も残ってる…！

十代
ＬＰ４０００
手札×６
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン　攻撃力８００

「我のターン！豊穣のアルテミスを召喚する。そしてカウンタートラップ『エンジェル・ブラスト』発動！このカードは自分フィールド上に光属性の天使族モンスターが特殊召喚された時のみ発動できる。デッキからカードを２枚ドロー。豊穣のアルテミスの効果により、カウンタートラップが発動した場合、カードを１枚ドローする。よって我はカードを３枚ドロー。カードを２枚伏せ、豊穣のアルテミスでバブルマンを攻撃！」

「うわっ！…なんだ！？」

リアルダメージに驚いているようだな。だが、今通ったのは８００ダメージ。普通のディスクで、攻撃力３０００のダイレクトアタックを決めたのと同程度のはずだ。

十代　ＬＰ４０００→３２００

「我はこれでターン終了。十代、このカウンタートラップデッキ相手に、どこまで自分の戦術を通すことができるか楽しみだな？」

ディスペア
ＬＰ３２００
手札×１
フィールド
豊穣のアルテミス　攻撃力１６００
天空の聖域
伏せカード×５

「くっ…やるな、ディスペア！俺のターンドロー！…よし。強欲な壺を発動」

「カウンタートラップ、マジック・ジャマー。手札を１枚コストにして、魔法カードの発動と効果を無効にし破壊する。アルテミスの効果により、カードを１枚ドロー」

「なら、スパークマンを召喚！すまない、スパークマン。アルテミスを攻撃！」

「カウンタートラップ『攻撃の無力化』。攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了。カードを１枚ドローする」

「くそっ…ターンエンドだ…」

強えぇ…ディスペアはことごとく俺の戦術をズタズタにしてくる…

十代
ＬＰ３２００
手札×５
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン　攻撃力１６００

「我のターン。我は2体目のアルテミスを召喚。カードを1枚伏せる。
行け、アルテミス！1体目はスパークマンと相打ちにする！2体目のアルテミスで十代にダイレクトアタック！」

「うわあああああああ!?な、なんなんだ…このダメージはッ!?」

十代　ＬＰ３２００→１６００

悪いが十代。我の固有ディスクは他の神々の固有ディスクと違い、使用しなければ神力を蓄積できない。神力無き固有ディスクなど、役には立たない。我の固有ディスクはこの『ディスペア』になった時に、満タンまでたまっていた神力がすべてなくなってしまった。これでは究極神を実体化させることができない。少しだが、お前の体力を神力へと変換してもらっていくぞ。

「魔法カード『死者蘇生』蘇生させるのはアルテミス！我のターンはこれで終了」

ディスペア
ＬＰ３２００
手札×０
フィールド
豊穣のアルテミス×２　攻撃力１６００
天空の聖域
伏せカード×４

「俺のターンドロー！」

相棒！来てくれたのか！それにしても、さっきから受けているこのダメージは何なんだ！？…まさか、あのディスクか！？

表情が変わった…ドローカードは恐らく奴の精霊、ハネクリボー。

「くっ…融合発動！」

「ハハハハハ！カウントラップ『神罰』！天空の聖域が存在する時のみ発動できるカウントラップだ。相手が発動した魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊する」

「クソッ！またか！」

それでいい。真剣にデュエルすれば、それだけ神力が蓄積する。だが十代。万が一倒れても、治療はしておくから安心しろ。

「アルテミスの効果で２枚ドローする。それで終わりか？十代。わざわざデュエル申請書など届け出て置きながらこの程度では、我の怒りは収まらんぞ。お前がこのタイミングでデュエル申請書を提出

したせいで、我は今日やろうとしていたことができなくなっているのだからな」

本来ならばチームリリカルエンジェルス（我命名）とデュエルしていたはずなのだからな。

「それは悪かったけどさ…でも、まだまだ終わらないぜ！魔法カード『戦士の生還』！」

「カウントラップ『神罰』2枚目だ！」

「またかよ！」

「アルテミスの効果で、2枚ドロー」

～～～観客席、チームリリカルエンジェルス～～～

「えげつないデッキやなぁ…ディスペア君」

「でも、ディスペアが今日やろうとしてた事って、何なんだろう？」

「わからないけど…神様のやることだからね…」

突然『世界を破壊する！』とか言ってもおかしくないしなぁ…

～～～サイドアウト～～～

「なら、『サイクロン』発動！聖域を破壊！」

「何！？」

聖域が…今我のフィールドに伏せられているのは『盗賊の七つ道具』と『神の警告』。魔法カードを無効にすることはできない…3枚目の神罰は腐るな。

「俺はモンスターをセットして、ターンエンドだ」

十代
ＬＰ１６００
手札×２
フィールド
セットモンスター×１

ここまでやっておいて、ターンエンドか。我の手札はアルテミスの効果で４枚になっている。そしてこのドローで5枚。我の伏せるカウンタートラップが増えただけだ。

「我のターン！カードを3枚伏せる！そして、アルテミスで伏せモンスターを攻撃！喰らえ！」

「ハネクリボーが破壊されたターン、俺へのダメージは０になる！サンキュー、ハネクリボー」

「クリクリ～」

「ならば我はこれでターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ３２００
手札×２
フィールド
豊穣のアルテミス×２
伏せカード×５

「俺のターンだ！ドロー。…あーーっ！何で伏せカードが切れないんだよ～」

「我の今回のデッキはカウンタートラップがデッキの大半を占めるデッキ、パーミッションだ。このデッキの最大の弱点であるカウンタートラップの枯渇さえなければ、大抵のデッキはつぶれる」

Ｅ・ＨＥＲＯは融合しなければ始まらない。カウンタートラップは強大な敵のはずだ。

「俺は『天よりの宝札』を発動！」

「勝手にしろ。我は４枚ドローする」

「俺も４枚だな。そして魔法カード『ミラクル・フュージョン』発動！」

「そうはさせん！カウンタートラップ『八式対魔法多重結界』！手札からテラ・フォーミングを捨て、ミラクル・フュージョンの発動と効果を無効にし破壊する！アルテミスの効果で２枚ドロー」

「なら、『天使の施し』を発動！」

「カウンタートラップ『魔宮の賄賂』！相手の魔法・罠の効果を無効にして破壊、カードを1枚ドローさせる！我はアルテミスの効果で、2枚ドロー！」

「なら、1枚ドローだ！まだまだ行くぜ！2枚目のミラクル・フュージョン発動！」

「発動するカードはない…」

「墓地のバブルマンと、ハネクリボーを融合！来い、Ｅ・ＨＥＲＯ Ｔｈｅ シャイニング！」

「シャイニングだと！！？」

なぜ十代がシャイニングを所有している！？

［どういうことだ！？ゼウス！］

［それはわたしにもわかりません。ただ一つ言うのならあなた達がその世界へ行ったことが原因と捉えていいでしょう］

［そういうことか。イレギュラーというのは常に我ら神々の行動を妨げる…］

「シャイニングの効果！除外されているＥ・ＨＥＲＯ1体につき、攻撃力が３００ポイントアップ。攻撃力は２８００だ！行け！シャイニング！」

「チッ…カウンタートラップ『攻撃の無力化』！攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了、カードを2枚ドロー」

「なら、メインフェイズ2に融合を発動！手札のバブルマンとクレイマンを融合し現れろ！Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ！」

今度はアブソルートＺＥＲＯか…面倒な効果を持ったＥ・ＨＥＲＯ…

「さらに魔法カード『融合回収（フュージョン・リカバリー）』を発動！墓地のバブルマンと、融合を手札に加える。そしてもう一度融合を発動だ！フィールドのアブソルートＺＥＲＯと手札のバブルマンを融合！アブソルートＺＥＲＯを特殊召喚！融合素材にされたアブソルートＺＥＲＯの効果で、ディスペアのフィールドのモンスターをすべて破壊するぜ！」

「させるものか！カウンタートラップ『天罰』！手札を1枚捨て、相手のモンスター効果を無効にする。アルテミスの効果で、2枚ドロー」

「駄目だったか。ターンエンドだ」

十代
ＬＰ１６００
手札×１
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング　攻撃力２８００
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　攻撃力２５００

「我のターン。我はアルテミス1体を生贄に捧げ、堕天使ディザイアを召喚。堕天使ディザイアはレベル１０の最上級モンスターだが

天使族モンスター1体の生け贄で通常召喚できる。カードを4枚セット。アルテミスを守備表示に変更し、月の書を発動。アブソルートZEROを守備表示にする。堕天使ディザイアでシャイニングを攻撃」

「うあぁっ！…だけど、シャイニングの効果が発動するぜ！除外されたE・HERO…E・HEROバブルマンを手札に加える！」

十代　LP1600→1400

「メインフェイズ2に移行。堕天使ディザイアの効果を発動し、攻撃力を1000ポイントダウン。裏側表示のアブソルートZEROを墓地へ送る」

「アブソルートZEROの効果…何で発動しないんだ！？」

「アブソルートZEROの特殊能力は、フィールドを離れた時に発動する強力な効果だ。しかし、その効果は裏側表示でフィールドを離れた場合、発動することはない」

「そうだったのか…！クソッ…」

「我はカードを1枚伏せ、ターン終了」

ディスペア
LP3200
手札×5
フィールド
堕天使ディザイア　攻撃力2000
豊穣のアルテミス　守備力1700

伏せカード×5

「俺のターン…」

俺の強力なE・HEROは破壊されちまった…もう…勝てない…

「どうした？十代。戦う意思が無いのならサレンダーしろ。我が求めるのは戦う意思がある心強きもののみ！」

「そうだ…」

俺はまだ負けてなんかいない！最後の最後まで、自分のデッキを信じるぜ！

「ドロー！」

それでいい。戦う意思無きものなど潰しても暇つぶしにすらならん。

「魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』発動！」

「させはしない。カウンタートラップ『魔宮の賄賂』。相手の魔法・罠カードの効果を無効にし破壊。相手は1枚ドローする」

「なら遠慮なくドローするぜ！…よし！バブルマンを召喚！2枚ドロー。カードを2枚伏せ、魔法発動『命削りの宝札』！」

「カウンターカードはない」

「なら、5枚ドローだ！伏せた魔法カード『融合回収』を発動する！墓地からアブソルートZEROと融合を手札に加えるぜ！さらに

伏せたカード『ハリケーン』を発動！フィールド上の魔法・罠カードを全て手札に戻す！」

「何ッ！……クッ…」

「融合を発動！手札のクレイマンと、フィールドのバブルマンを融合し現れろ！アブソルートＺＥＲＯ！」

ク…カウンタートラップは全て手札に戻された…このターン、我は奴の攻撃を全て通してしまう…

「さらにＥ・ＨＥＲＯエアーマンを召喚。こいつの効果で、デッキから『ＨＥＲＯ』を１体手札に加える！俺が加えるのは、バーストレディだ！最後の融合を発動！エアーマンと、バーストレディを融合！現れろ！Ｅ・ＨＥＲＯ　ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）！」

バカな……！

「ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯの効果発動！融合召喚時に、相手フィールド上のモンスターの攻撃力を半分にする！」

堕天使ディザイア　攻撃力２０００→１０００
豊穣のアルテミス　攻撃力１６００→８００

「だが！我のアルテミスは守備表示！十代、このターンで我のライフを０にすることは不可能だ！」

「それはどうかな？３枚目のミラクル・フュージョンを発動！墓地のエアーマンと、フィールドのアブソルートＺＥＲＯを融合！来い、アブソルートＺＥＲＯ！」

「我のモンスターが全滅しただと！！」

「行け！アブソルートＺＥＲＯ！ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ！」

「ぐあああああああああ！」

ディスペア　ＬＰ３２００→１７００

ここまで来て…敗北！？あと１４００ポイントのライフが奪えずに…

「ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯでダイレクトアタックだ！」

「バカな！？我が…イレギュラー以外の存在に敗北するというのか！！ぐあああああああああああ！」

ディスペア　ＬＰ１７００→－１１００

「しょ、勝者、遊城十代！」

「「「「「ワアアアアアアアアアア！！」」」」」

クッ…カイザーの称号などどうでもいい。我が…敗北だと！？我の戦術にミスはなかったはず…

「クッ…十代！この借りはいずれ返してやる！今はカイザーの称号、貴様に預ける！」

～～～ブルー寮～～～

「ひゃはははははははははは！まさかディスペアが負けるなんて、思いもしなかったよ！」

「十代はあのようなＥ・ＨＥＲＯは持っていなかったはず…」

「わたしも調べてみたが、やはり本来は持っていない。我ら神々の影響が強いのだ」

神々の影響力…そんなことでこの我が負けたというのか。冗談では済まさん。いいだろう、十代。その本来手に入れることのなかった力…その力の真の姿をこの目で確かめてやる。

第６０話　十代ｖｓディスペア！（後書き）

前の話で使ったエンジェルの効果です。

レイジング・エンジェル　レベル１０　神属性　天使族　効果モンスター　攻撃力４０００　守備力４０００
このカードは通常召喚できない。自分のライフが１００ポイントの時に、手札をすべて捨てた場合のみ特殊召喚できる。このカードはフィールド上に存在する限り、光属性としても扱う。このカードの特殊召喚に成功したとき墓地のレベル４の光属性・天使族モンスター１体を手札に加えることができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、守備力を攻撃力が超えていればその数値分だけ相手にダメージを与える。また、このカードの攻撃宣言時に手札の天使族モンスター１体を捨てることで、攻撃対象のモンスターの攻撃力と守備力を０にする。このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、相手フィールド上に存在するモンスターをすべて破壊する。

ライトニング・エンジェル　レベル１０　神属性　天使族　効果モンスター　攻撃力４０００　守備力４０００
このカードは通常召喚できない。自分のライフが０になった時、手札をすべて捨てた場合のみ特殊召喚できる。このカードがフィールド上に存在する限り、コントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在する限り、このカードは光属性としても扱う。このカードの特殊召喚に成功したとき、デッキから光属性・天使族のモンスター１体を手札に加えることができる。このカードがフィールド上に存在する限り、コントローラーはドローフェイズにカードをドローできない。このカードの攻撃力をエンドフェイズ終

了時まで１０００ポイントダウンして発動する。このカードはこのターン、相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

フォーリン・エンジェル　レベル１０　神属性　天使族　効果モンスター　攻撃力４０００　守備力４０００
このカードは通常召喚できない。３０００ポイント以上の直接攻撃を受けて自分のライフが１０００ポイント以下になった時、手札をすべて捨てた場合のみ特殊召喚できる。このカードの特殊召喚に成功したとき、自分のライフは０になる。このカードの特殊召喚を無効にすることはできない。このカードがフィールド上に存在する限り、このカードは闇属性としても扱う。１ターンに１度、自分の墓地のモンスター１体をゲームから除外することでこのターン、このカードが受ける魔法・罠・モンスター効果を１度だけ無効にする。このカードは１ターンに１度、破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、コントローラーは敗北にならない。

こんな感じです。３体とも、なのは・フェイト・はやての精霊であり、切り札という設定で行きます。

第６１話　十代ｖｓディスペア！リベンジデスマッチ！（前書き）

最近風邪がひどくなってきた…のどが痛いです。

第６１話　十代ｖｓディスペア！リベンジデスマッチ！

我が十代に敗北して１週間。十代の名はデュエルアカデミア全体に知れ渡り、新しいカイザーとして名を馳せていた。本人にその気は全くないらしい。

「人間が我々神々の影響力によって進化するというのならば、その進化の証を潰す」

進化の種を潰すのは我ら神々の未来のため。前にも１度、進化しすぎた人間どもが我ら神々の世界に侵攻してきた。その時の戦争で、神々の世界は崩壊寸前まで追い込まれた。

～～～デュエル場～～～

「十代。我とデュエルしろ。カイザーの称号、返してもらうぞ」

カイザーの称号などどうでもいいが…理由をくっつけるには最適だ。

「いいぜ！」

「行くぞ！リベンジデスマッチだ！」

「「デュエル」」

「我のターン！カードを1枚伏せ、幻銃士を召喚する。幻銃士の効果により召喚に成功した時、自分フィールド上のモンスターの数まで銃士トークンを特殊召喚できる。この効果によって我は銃士トークン1体を特殊召喚する。ターン終了」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
幻銃士　攻撃力１１００
銃士トークン　攻撃力５００
伏せカード×１

「俺のターンだ！まずはバブルマンを召喚して2枚ドロー！」

1つ覚えのバブルマンか。勝手にドローするがいい。

「融合を発動して、バブルマンとクレイマンを融合！現れろ、アブソルートＺＥＲＯ！」

「トラップ発動、ガリトラップ－ピクシーの輪－！このカードが発動している限り、我のフィールド上に攻撃表示のモンスターが2体以上存在すれば相手は攻撃力が一番低いモンスターを攻撃することはできない。十代、攻撃できるのは幻銃士だけだ」

「なら、アブソルートＺＥＲＯで幻銃士を攻撃だ！」

「この程度は想定内。くれてやる」

ディスペア　ＬＰ４０００→２６００

「ターンエンドだ」

十代
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　攻撃力２５００

「我のターン！ジェスター・コンフィを特殊召喚する！さらに、ジェスター・コンフィを手札に戻し、Ａ・ジェネクス・バードマンを特殊召喚する。レベル４の銃士トークンに、レベル３のＡ・ジェネクス・バードマンをチューニング！シンクロ召喚、現れよ！エンシェント・フェアリー・ドラゴン！」

「始めてみるシンクロモンスターだな…守備力３０００か。アブソルートＺＥＲＯじゃ倒せないな」

「エンシェント・フェアリー・ドラゴンの効果発動。このターンのバトルフェイズを放棄することで、手札からレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚できる。
我はこの効果を使用し、手札からレベル３のチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを特殊召喚する。
そしてレベル１のチューナーモンスター、グローアップ・バルブを召喚！」

「え？チューナーモンスターが２体？」

「レベル７のエンシェント・フェアリー・ドラゴンに、レベル１のグローアップ・バルブをチューニング！シンクロ召喚、レッド・デ

ーモンズ・ドラゴン！
そして今墓地に送られたグローアップ・バルブの効果を発動。デュエル中に1度だけデッキの1番上のカードを1枚墓地に送ることで、墓地のこのカードを特殊召喚する。来い、グローアップ・バルブ！」

墓地に送られたカードは…オシリスの天空竜…

「チューナーモンスターがまた2体…でも、ディスペアのフィールドにはレッド・デーモンズ・ドラゴンしかいないぞ…？」

「ハハハハハハハハハハ！！レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル1のグローアップ・バルブとレベル3のジャンク・シンクロンをダブルチューニング！」

「ダブルチューニング？何だそれ？」

「王者と悪魔、今ここに交わる！あらぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚！出でよ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！！？すげえ！俺も欲しい～～～！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果発動！このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在するチューナーモンスター1体につき５００ポイントアップする！
我の墓地にはジャンク・シンクロンとグローアップ・バルブの2体！攻撃力は１０００ポイントアップし、４５００ポイントになる！
……このターン、我はバトルフェイズを行うことはできない。ターンエンドだ」

ディスペア
ＬＰ２６００
手札×２
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力４５００
ガリトラップ―ピクシーの輪―

「俺のターン！Ｅ・ＨＥＲＯエアーマンを召喚するぜ！効果でデッキから、スパークマンを手札に加える！そして融合を発動！エアーマンとスパークマンを融合してＥ・ＨＥＲＯ　ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯを融合召喚！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は半分になるぜ！タウン・バースト！」

「手札からエフェクト・ヴェーラーの効果を発動！相手のメインフェイズ時にこのカードを手札から墓地に送ることで、相手フィールド上に存在するモンスター１体の効果をエンドフェイズまで無効にする。
我はエフェクト・ヴェーラーを墓地へ送り、Ｅ・ＨＥＲＯ　ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯの効果を無効にする。よって、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻守は半分にはならない！そして墓地にチューナーモンスターが送られたことで、攻撃力が５００ポイントアップ！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力４５００→５０００

「ターンエンドだ！」

十代
ＬＰ４０００

手札×４
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　攻撃力２５００
Ｅ・ＨＥＲＯ　ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ　攻撃力２８００

「我のターン！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでアブソルートＺＥＲＯを攻撃！バーニング・ソウル！」

「ま、またこの衝撃か！？……でもこの瞬間、アブソルートＺＥＲＯの効果発動！相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

十代　ＬＰ４０００→１５００

アブソルートＺＥＲＯが残した吹雪がスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを包む。そして吹雪が止むと…

「な、なんでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが残ってるんだ！？」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは何事もなかったかのように存在していた。

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン第２の特殊効果。このカードは相手の魔法・罠・モンスター効果では破壊されない！よって、アブソルートＺＥＲＯの効果は不発！」

十代のデッキは基本的に戦闘を行うモンスターが多い。その中で破壊効果を持つのはごくわずかだ。当然十代には除外やバウンスができるカードはないだろう。仮に既に鬼畜モグラを持っていたとしても、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン第３の特殊能力によって逃げることができる。つまり、十代にスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

を倒す手段はない。十代、貴様はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンのダイレクトアタックを喰らって立っていられるか？我に進化の証を見せてみろ！

「くっ…破壊できずに攻撃力が５０００もあるモンスターをどうやって倒せって言うんだよ！」

倒す手段はあるはずだ。でも、そんなカードが俺のデッキにあったか？

「お前がスカーレッドを葬れずにいる間、究極神降臨の準備は進んでいる。早くスカーレッドを倒し我のライフを０にしなければ、攻略不可能の究極の力が我のフィールドに降臨するぞ？」

「なっ！？究極神！？」

ディスペアはあんな召喚の難しいモンスターととてつもなく重い究極神を１つのデッキに纏めてんのか！

……究極神は降臨させないつもりだ。ディスクに神力が満ちれば、究極神を召喚したとしても神力が減ることはなくなるが、神力がたまっていないディスクで究極神を召喚すれば、莫大な神力が失われてしまう。何より、神力が少ししかなくても、究極神の攻撃は絶大な威力を誇る。究極神の攻撃で十代が死ぬのは避けなければならないからな。

「我はこれでターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ２６００

手札×２
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力５０００
ガリトラップ―ピクシーの輪―

「俺のターンだ！ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯを守備表示に変更！
フレンドッグを守備表示で召喚してターンエンドだ」

十代
ＬＰ１５００
手札×４
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯ　ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ　守備力２２００
フレンドッグ　守備力１２００

「我のターン！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯを攻撃！バーニング・ソウル！」

「ぐあああっ！ＴＯＲＮＡＤＯが！」

「カードを１枚伏せターン終了」

ディスペア
ＬＰ２６００
手札×２
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力５０００
ガリトラップ―ピクシーの輪―
伏せカード×１

「俺のターン！…へへ、ディスペア！このカードなら、スカーレッドを倒せるぜ！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを倒すだと？

「ミラクルフュージョン発動！墓地のクレイマンとスパークマンを融合！現れろ！Ｅ・ＨＥＲＯガイア！」

ガイアか。残念だが十代。そのカードでスカーレッドを倒すことはできない。

「ガイアの効果を発動だ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力を半分にして、その数値分ガイアの攻撃力をアップ！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻撃力５０００→２５００
Ｅ・ＨＥＲＯガイア　攻撃力２２００→４７００

「フレンドッグを攻撃表示に変更！ガイアでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを攻撃だ！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン第３の特殊能力を発動！このカードをエンドフェイズゲームから除外し、ガイアの攻撃を無効にする！」

「しまった！！……なら、フレンドッグでダイレクトアタックだ！」

「痛くも痒くもない！」

ディスペア　ＬＰ２６００→１８００

「ターンエンドだ…」

十代
ＬＰ１５００
手札×４
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯガイア　攻撃力２２００
フレンドッグ　攻撃力８００

「この瞬間、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンはフィールドに戻る！我のターン！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでガイアを攻撃！バーニング・ソウル！」

「うわあああああああああああ！！！」

十代　ＬＰ１５００→－１３００

スカーレッドでダイレクトアタックはできなかったか。残念だな。しかし、これで固有ディスクの神力がＭＡＸになった。感謝するぞ、十代。これでチームリリカルエンジェルスと万全の態勢でデュエルができる。

第６１話　十代ｖｓディスペア！リベンジデスマッチ！（後書き）

いい加減にクオリティーを上げたい…誰か、助けて～！

第６１話　プライドのライディング・デュエル　ディスペア究極体（笑）　チート

ようやくディスペアとリリカルズとのデュエルが書けました。
今回は特殊ルールで、ディスペア→なのは→フェイト→はやての順でターンが回っていきます。簡単に言うと、ゴドウィン超官戦とほぼ同じルールです。

最近作者が思ったこと←ＺＥＸＡＬについて

・エクシーズ召喚って何!?

・かっとビングって…どうせすぐ慣れる（洗脳される）だろうけど…

・あれ?ゴッズで終わりじゃなかったの?ファンとしてはすげぇうれしい…が←

・新主人公の髪型って…海老?誰がモデルなの?

第６１話　プライドのライディング・デュエル　ディスペア究極体（笑）　チート

～～～海岸～～～

「見つけたぞ」

「あ、ディスペア君。何の用？」

「我とライディング・デュエルをしてもらおう。先日の我の仲間との互角の戦い…それをみて我は久しぶりに正しき心を持つ人間の進化の証を見てみたくなった」

正しき心を持つ人間は聖なる精霊に、悪しき心を持つ人間には邪悪な精霊が憑く。こいつらは間違いなく聖なる精霊の所持者。そして聖なる精霊の所持者ならば、我らが望むものをその力で見つけることができるかもしれん。…たった１回のデュエルで見つかるとは思っていないがな。

「よくわからないけど、デュエルすればいいんだよね。ちょっと待ってて」

～～～１０分後～～～

なのはたちはそれぞれのＤ－ホイールを持ってきた。ディスペアはラー型のＤ－ホイールではなく……

「随分と大きいＤ－ホイールだね…」

黒い３つ首の龍をかたどったＤ－ホイールだった。

「名付けて『ブラック・トリシューラ号』だ」

アポリアが合体した通称『トリシューラ号（笑）』を黒く塗ったものだ。これの製作には２カ月かかった。……当然だが『あの機能（笑）』もある。アニメでは『イケメン』が一瞬で『絶望野郎』になったあの機能だ。

「行くぞ！ライディングデュエル、アクセラレーション！」

～～～ＢＧＭ；アポリアのテーマ（三皇帝が合体する時に使われたＢＧＭ）～～～

ブラック・トリシューラ号からコースが神力を具現化して創られる。なのはたちのＤ－ホイール全てとブラック・トリシューラ号を比べても、ブラック・トリシューラ号の方が大きい。コースの幅は、高速道路の下りと上りを合わせたぐらいだ。

「「「「デュエル！」」」」

「我のターン！！ハアァッ！」

ディスペア　スピードカウンター　０→１
はやて　スピードカウンター　０→０
フェイト　スピードカウンター　０→０

なのは　スピードカウンター　0→0

「「「え！！？」」」

何でディスペア君はいきなりＤ－ホイールからジャンプしたの！？

「ハハハハハハハハハハ！」

「「「えええええええええええええええ！」」」

ディスペア君の足が1本にくっついて、コードにつながれてＤ－ホイールと合体（？）しちゃった…どういうこと！！？

「めちゃくちゃやな…名付けて『ディスペア究極体』やろか？」

「はやて…色々間違ってるから…」

「というか、なんでだろう…笑える…」

笑っちゃいけないはずなんだけど、どうしても笑えてくる…それにしても、黒い服のディスペア君と黒いＤ－ホイール…何故かあってる…

～～～ＢＧＭ終了～～～

「我は極星獣タングリスニを守備表示で召喚する。カードを2枚伏せ、ターン終了だ」

ディスペア
ＬＰ１２０００
手札×３
スピードカウンター×１
フィールド
極星獣タングリスニ　守備力８００
伏せカード×２

このデッキの三極神は、オーディン達のものではない。十代とデュエルした時に得た神力があまりに大きすぎて暴走し生まれたものだ。当然強大な力を誇るためカードパワーは三幻神に匹敵する。

「まずは私のターン！私はシャインエンジェルを召喚して、カードを１枚セット。ターンエンド！」

ディスペア　スピードカウンター　１→２
はやて　スピードカウンター　０→１
フェイト　スピードカウンター　０→１
なのは　スピードカウンター　０→１

なのは
ＬＰ４０００
手札×４
スピードカウンター×２
フィールド
シャインエンジェル　攻撃力１４００
伏せカード×１

「私のターン！」

ディスペア　スピードカウンター　２→３
はやて　スピードカウンター　１→２
フェイト　スピードカウンター　１→２
なのは　スピードカウンター　１→２

「私はＢＦ－疾風のゲイルを召喚するよ！さらに、手札から黒槍のブラストを特殊召喚！レベル４のブラストに、レベル３のゲイルをチューニング！シンクロ召喚、力を貸して、ＢＦ－アーマード・ウィング！ターンエンド」

フェイト
ＬＰ４０００
手札×４
スピードカウンター×３
フィールド
ＢＦ－アーマード・ウィング　攻撃力２５００

「私のターンやね」

ディスペア　スピードカウンター　３→４
はやて　スピードカウンター　２→３
フェイト　スピードカウンター　２→３
なのは　スピードカウンター　２→３

「私は堕天使ヘイトリッドを守備表示で召喚する！ヘイトリッドが召喚に成功した時、デッキからカードを１枚ドローすることができるんや！ドロー！…後はカードを１枚伏せ、ターンエンドや」

はやて
ＬＰ４０００

手札×５
フィールド
堕天使ヘイトリッド　守備力１００
伏せカード×１

「我のターン！」

ディスペア　スピードカウンター　４→５
はやて　スピードカウンター　３→４
フェイト　スピードカウンター　３→４
なのは　スピードカウンター　３→４

「我はタングリスニを攻撃表示に変更！タングリスニでシャインエンジェルに自爆特攻する！」

ディスペア　ＬＰ１２０００→１１８００

「タングリスニの効果発動。レベル３の極星獣トークン２体を特殊召喚する！
メインフェイズ２に移行。我は極星獣グルファクシを召喚。レベル３の極星獣トークン２体にレベル４の極星獣グルファクシをチューニング！星界の扉が開く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん。大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ！星界の三極神、その１つ！光臨せよ、極神皇トール！」

「現れた…」

「星界の三極神の１体…」

「極神皇トール…でも、ディスペア君の墓地にはグルファクシは１

体だけ…復活は1回しかできへん！」

「本当にそうかな？この星界の三極神の誕生は、我も予想をしていなかった。これは、我が『ディスペア』になる前の三極神と同じ効果だ」

この三極神の復活にコストは必要ない。そして、三極神の効果はトールが相手のモンスター効果をすべて無効、ロキがバトルフェイズ中の魔法・罠を無効にして破壊するという変化が無いのに対し、オーディンは相手・自分ターンともに星界の三極神すべてに魔法・罠への耐性を持たせる、アニメ効果だ。

「ってことは…そんな！」

「そうだ。星界の三極神の復活に、コストは必要ない。我はこれでターン終了」

ディスペア
ＬＰ１１８００
手札×３
スピードカウンター×５
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×２

「私のターン！」

ディスペア　スピードカウンター　５→６
はやて　スピードカウンター　４→５
フェイト　スピードカウンター　４→５

なのは　スピードカウンター　４↓５

「シャインエンジェルで、極神皇トールを攻撃！」

「だが攻撃力はトールの方が上だ！」

「ダメージステップに、オネストの効果を発動！」

「させん！カウンタートラップ『神々の重圧（ゴッド・プレッシャー）』！フィールド上に神属性モンスターが存在する時、神属性モンスター１体を選択して発動。相手が発動した魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊！そして、選択した神属性モンスターの効果を発動できる。我はオネストの効果を無効にし、トールの『相手に８００ダメージを与える』効果を使用する！」

青白い色の雷が３人を襲う。

「「「キャアアアアアア！」」」

はやて＆フェイト＆なのは　ＬＰ４０００↓３２００

「そしてシャインエンジェルの攻撃は続行する。極神皇トールよ、迎え討て！サンダー・パイル！」

トールが持っている鉄鎚で、シャインエンジェルを殴る。凄まじいまでの衝撃波が発生し、高町がバランスを大きく崩す。

「「「なのは（ちゃん）！！」」」

なのは　ＬＰ３２００↓１１００

「だ、大丈夫！シャインエンジェルの効果発動、デッキから救世の使者を特殊召喚！」

救世の使者…？何だ…あのカードは？

「救世の使者の効果発動、特殊召喚に成功した時１０００ポイントライフを払って、デッキから『レイジング・エンジェル』を手札に加える！その後、救世の使者は破壊されるけど…これで、私の切り札を召喚できるよ！手札を全て捨てて、レイジング・エンジェルを特殊召喚！」

成程。間近で見るとますます巨大な天使だ。それも高町に瓜二つの。レイジング・ハートを構えているのが、相手の恐怖心を煽るだろうな。

「レイジング・エンジェルの１つ目の効果を使って、墓地からオネストを手札に加えるよ！私はこれでターンエンド！」

なのは
ＬＰ１００
手札×４
スピードカウンター×５
フィールド
レイジング・エンジェル　攻撃力４０００
伏せカード×１

「私のターン！」

ディスペア　スピードカウンター　６→７

はやて　スピードカウンター　5→6
フェイト　スピードカウンター　5→6
なのは　スピードカウンター　5→6

「アーマード・ウィングで、極神皇トールを攻撃！楔カウンターを、トールに置くよ！」

楔カウンター…このカウンターを取り除くことで、取り除かれたモンスターの攻守をエンドフェイズまで0にする。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド！」

フェイト
LP3200
手札×4
スピードカウンター×6
フィールド
BF－アーマード・ウィング　攻撃力2500
伏せカード×1

「私のターンや！」

ディスペア　スピードカウンター　7→8
はやて　スピードカウンター　6→7
フェイト　スピードカウンター　6→7
なのは　スピードカウンター　6→7

「この瞬間、私のトラップカード『楔解除』を発動！楔カウンターが乗っているモンスター1体を選択してそのモンスターに乗っている楔カウンターを外し、エンドフェイズまで攻撃力と守備力を0に

する！」

「ナイスフォローや！フェイトちゃん！」

極神皇トール　攻撃力３５００→０
　　守備力２８００→０

「行くで！堕天使ヘイトリッドを攻撃表示に変更！」

堕天使ヘイトリッド　守備力１００→攻撃力１００

「堕天使ヘイトリッドで、極神皇トールを攻撃！ヘイトリッド・スピア！」

「攻撃力の低いモンスターで攻撃力がせっかく０になっているトールを倒すとはな」

ディスペア　ＬＰ１１８００→１１７００

「この瞬間、ヘイトリッドの効果発動や！ヘイトリッドが自分よりも元々の攻撃力が高いモンスターを戦闘で破壊した場合、デッキから『堕天使アブフォレンス』１体を特殊召喚できる！来て、アブフォレンス！」

堕天使アブフォレンス　攻撃力３４００

「アブフォレンスでダイレクトアタック！アブフォレンス・オブ・カーズ！」

「クッ…」

ディスペア　ＬＰ１１７００→８３００

「そしてアブフォレンスの効果発動！相手にダメージを与えた時、自分フィールド上の『堕天使』と名のついたモンスター１体を破壊することで、カードを２枚ドローする！私はヘイトリッドを破壊して、２枚ドローや！
カードを２枚伏せて、ターンエンド！」

はやて
ＬＰ３２００
手札×６
スピードカウンター×６
フィールド
堕天使アブフォレンス　攻撃力３４００
伏せカード×２

「この瞬間、このターン破壊された極神皇トールを蘇生する！」

海が割れて、底からトールが雷を纏い現れる。

「トールの効果により８００ポイントのダメージを受けてもらうぞ！リリカルエンジェルス！」

「これじゃあなのはちゃんのライフが！」

「トラップ発動、レイジング・フォース！自分フィールド上の『レイジング・エンジェル』１体を対象にして発動、対象にした『レイ

ジング・エンジェル』がいる限り、私は敗北にはならない！」

レイジング・フォースから放たれた桃色の光がレイジング・エンジェルを包む。

成程。考えたな、高町。『敗北にならない』効果はあくまで『レイジング・フォース』の効果だ。つまり、例えトールの効果を使用して効果を無効にしたとしても敗北にはならない。

だが、トールの効果は受けてもらう。

「「「キャアアアア！」」」

いくら高速道路程の幅があるとはいえ、トールの雷をよけるのはこの幅では容易ではない。

なのは　ＬＰ１００→０

はやて＆フェイト　ＬＰ３２００→２４００

「我のターン！」

ディスペア　スピードカウンター　７→８

はやて　スピードカウンター　６→７

フェイト　スピードカウンター　６→７

なのは　スピードカウンター　６→７

「我はスピードワールド２の効果を使用する。スピードカウンターを７つ取り除き、カードを１枚ドロー」

ディスペア　スピードカウンター　８→１

これで我の手札は5枚。

「さらにトラップ発動『神の桎梏グレイプニル』。デッキから『極星霊デックアールヴ』を手札に加える」

自動でデックアールヴを手札に加えた後、固有ディスクがオートシャッフルをする。先程から3回ほどヘアピンカーブが来ているが、リリカルエンジェルスは難なくクリアしている。ロキのコースで散々思い知ったようだな。

「そして極星霊ドヴェルグを召喚。このカードが召喚に成功したターン、我はもう1体『極星』と名のついたモンスターを召喚できる。我は極星霊リョースアールヴを召喚。このカードの召喚に成功した時、自分のフィールド上に表側表示で存在するこのカード以外のモンスター1体を選択し、手札から選択したモンスターのレベル以下の『極星』と名のついたモンスターを特殊召喚できる。我は極神皇トールを選択し、手札からレベル5チューナーモンスター、極星霊デックアールヴを特殊召喚する。レベル1の極星霊ドヴェルグとレベル4の極星霊リョースアールヴに、レベル5の極星霊デックアールヴをチューニング。星界より生まれしきまぐれなる神よ、絶対の力を我らに示し世界を喰え！星界の神、その1つ、光臨せよ！極神皇ロキ！！」

「来た…」

「第二の神…」

「極神皇……ロキ…」

攻撃力は3300…堕天使アブフォレンスの方が僅かに攻撃力は上

やけど…でも、ディスペア君のフィールドにはアブフォレンスの攻撃力をさらに１００ポイント上回る極神皇トールがいる…

「まずは極神皇トールの効果を発動。エフェクト・アブソーバー！」

トールが雷を集め、アーマード・ウィングとアブフォレンス、そしてレイジング・エンジェルに放つ。雷を受けたモンスターは、効果を失ったようで多少苦しそうだ。

「極神皇ロキよ！目障りな装甲の鳥を粉砕せよ！ヴァニティー・バレット！」

「うっ…くっ…！！」

三極神の攻撃はどうやらモンスターを通してでもかなり伝わっているようだな。だが究極神ではないだけ感謝するのだな。

フェイト　ＬＰ２４００→１６００

「極神皇トールよ！堕天使に神の鉄槌を振りおろせ！サンダー・パイル！」

「くううっ！」

はやて　ＬＰ２４００→２３００

「この瞬間、アブフォレンスの効果発動、このカードが相手のモンスターの攻撃によって破壊された時、相手フィールド上のカードをすべて破壊して、破壊したモンスターの数×１５００ポイントのダメージを与える！フォーリン・レジスタンス！」

「うおおおおおおおお！？」

ブラック・トリシューラ号が僅かによろめく。

ディスペア　ＬＰ８３００→５３００

我のブラック・トリシューラ号の装甲の一部が砕けた…神力を失うのは避けたいところだが、欠陥があるのも危険だ。少し神力を放つと、砕けた装甲は一瞬で直った。

「エンドフェイズに墓地の極神皇トールと極神皇ロキの効果発動。トールの効果で８００ポイントダメージを与え、ロキの効果で墓地からトラップカード『神々の重圧』を手札に加える！」

「そう何度も雷の直撃は喰らわないよ！」

……トールの雷が回避されたか。高町はレイジング・エンジェルの槍で防がれているのか。

はやて　ＬＰ２３００→１５００

フェイト　ＬＰ１６００→８００

ディスペア

ＬＰ５３００

手札×４

フィールド

極神皇ロキ　攻撃力３３００

極神皇トール　攻撃力３５００

「私のターン！」

ディスペア　スピードカウンター　１→２
はやて　スピードカウンター　７→８
フェイト　スピードカウンター　７→８
なのは　スピードカウンター　７→８

「レイジング・エンジェルで、極神皇ロキを攻撃！攻撃宣言時にオネストを捨てて、ロキの攻撃力を０にするよ！シャイニング・ブレイカー！」

「ぐあああああああああああ！」

ディスペア　ＬＰ５３００→１３００

「「ナイス（や）、なのは（ちゃん）！！」」

「クッ…このまま素直にダメージを通すと思うな！手札の『極星の守護者』の効果、自分の『極神』が相手モンスターの攻撃よってフィールドを離れた場合、手札のこのモンスターを墓地へ送って発動。我が受けた戦闘ダメージ以下の攻撃力の『極星』モンスター１体をデッキから特殊召喚する。そして、この効果によって特殊召喚されたモンスターは次の我のエンドフェイズまでフィールドを離れず、超過ダメージを０にする！
我はデッキから『極星天ヴァルキュリア』を守備表示で特殊召喚する！」

これで次のターン、星界の三極神最強のオーディンが光臨する。

「なら、メインフェイズ２にスピードカウンターを７つ取り除いて、

1枚ドロー！ターンエンドだよ」

なのは
ＬＰ０
手札×２
スピードカウンター　８→１
フィールド
レイジング・エンジェル　攻撃力４０００

「私のターン」

ディスペア　スピードカウンター　２→３
はやて　スピードカウンター　８→９
フェイト　スピードカウンター　８→９
なのは　スピードカウンター　１→２

「私はスピードワールド２の効果で、スピードカウンターを７つ取り除いて１枚ドロー！」

フェイト　スピードカウンター　９→２

私の手札は６枚。でも、まだ私の切り札は来てない…それなら！

「手札から『Ｓｐ－エンジェル・バトン』発動！スピードカウンターが２つ以上ある時、２枚ドローしてから手札を１枚捨てる」

よし、来た！

「私はＢＦ－蒼炎のシュラを召喚！そして『Ｓｐ－ブラック・ターボ』発動！手札の『ＢＦ』を１体墓地に送って、エンドフェイズま

でその攻撃力分、自分フィールド上に存在する全てのＢＦの攻撃力をアップできる！
私は手札のＢＦ－漆黒のエルフェンを墓地に送って、シュラの攻撃力を４０００にするよ！」

「攻撃力４０００だと！？ならば手札より『極星の宣告者』の効果発動！このカードを手札から捨て、自分の『極神』と名のついた神１体を選択する！選択したモンスターによって発生する自分への超過ダメージはこのターンのみ０になる！
我は極神皇ロキを選択！よってこのターン、ロキから受ける超過ダメージは０だ！」

「それなら『Ｓｐ－オーバーフェザー』を発動するよ！自分のスピードカウンターが２つ以上ある時、自分の『ＢＦ』１体を選択して発動、選択したモンスターがこのターン相手に与えるダメージは倍になる！
ＢＦ－蒼炎のシュラで、極神皇トールに攻撃！」

「クゥッ…！」

ディスペア　ＬＰ１３００→３００

「さらに、シュラの効果を発動するよ。シュラが相手のモンスターを戦闘で破壊した時、デッキから攻撃力１５００以下の『ＢＦ』と名のついたオンスター１体を特殊召喚できる。
私はＢＦ－そよ風のブリーズを特殊召喚！メインフェイズ２に入って、レベル４のシュラにレベル３のブリーズをチューニング！シンクロ召喚、ＢＦ－アーマード・ウィング！
私はカードを１枚伏せてターンエンドだよ」

「エンドフェイズにこのターン破壊された極神皇トールの効果発動！トールを復活し、相手に８００ポイントのダメージを与える！テスタロッサ、これで貴様のライフは０だ！ハハハハハハハハハ！」

「「くっ…」」

はやて　ＬＰ１５００→７００
フェイト　ＬＰ８００→０

「この瞬間、手札からライトニング・エンジェルを特殊召喚するよ！このモンスターは、自分のライフが０になった時に自分の手札を全て捨てて特殊召喚できる！さらに、ライトニング・エンジェルがいる限り、私は敗北にならない！」

フェイト
ＬＰ０
手札×０
スピードカウンター×２
フィールド
ライトニング・エンジェル　攻撃力４０００
ＢＦ－アーマード・ウィング　攻撃力２５００
伏せカード×１

「ＯＫや！フェイトちゃん！私のターン！」

ディスペア　スピードカウンター　３→４
はやて　スピードカウンター　９→１０
フェイト　スピードカウンター　２→３
なのは　スピードカウンター　２→３

「私はスピードワールド2の効果を使って、1枚ドローや」

はやて　スピードカウンター　10→3

ククククク…スピードワールド2のダメージ効果を使えば、我を倒せていたかもしれないのにな…まあどの道、我の手札に『極星龍バルボロス』がある限りは倒せないがな。

「私は堕天使グラッジを召喚！このカードが召喚に成功した時、このカードが召喚するまでに相手が私に与えた効果ダメージ分、私のライフを回復して、その数値分だけダメージを与える！
私が今まで受けた効果ダメージは２４００ポイント、だから２４００ポイント回復して２４００ポイントのダメージを与える！グラッジ・バーン！」

「手札から『極星龍バルボロス』の効果を発動。自分フィールド上に神が存在する時に手札を全て捨てることで、このターン自分が受ける効果ダメージは3倍の回復量になって回復に変わり、相手に効果ダメージを与える場合は4倍になる！
我が受ける効果ダメージは３２００ポイント、よって回復に変換され3倍の９６００ポイント回復する」

ディスペア　ＬＰ３００→９９００
はやて　ＬＰ７００→３９００

「そ、そんな！」

「3倍…！？」

「そ、そんなのインチキやろ！」

「ハハハハハハハハ！インチキだろうがなんだろうが、効果は効果だ。それなら貴様らの切り札も、十分『インチキ』に値するだろう！！それに、このカードごときでインチキと呼ぶなら、究極神は一体何だ？」

ライフが０になっても死なないなど、通常ではありえない話だ。

「そして、バルボロスの効果はまだある。このカードの効果を発動した時に捨てた手札の中に１枚でも『極星』と名のついたカードがあれば、カードを２枚ドローする。
我が捨てたカードは『極星宝レーヴァテイン』。よって２枚ドロー」

「……私は手札から『Ｓｐ－堕天使の進撃』を発動、手札を全て捨てて、デッキから『堕天使』と名のついたカードを１枚手札に加える。
私が加えるのは『Ｓｐ－堕天使再臨』、そして発動！自分のスピードカウンターが３つの時、デッキからカードを１枚ドローし、それが堕天使ならさらに２枚ドローする！
……私がドローしたのは堕天使パジスタンス、よってさらに２枚ドローや！」

よし、来たで！私の切り札が！

「そして手札からトラップカード『彷徨える堕天使』を発動！このカードは自分フィールド上にレベル４以下の堕天使がいれば、手札から発動できるんや！相手モンスター１体を選択して破壊、その後自分フィールド上に存在する『堕天使』と名のつくモンスターをすべて破壊してその攻撃力の合計分、自分のライフを回復する！さらにこのカードが墓地へ送られた時、デッキからトラップカードを１

枚セットするんや。
極神皇トールを破壊して堕天使をすべて破壊！破壊した堕天使の攻撃力分回復や！破壊されたのは堕天使グラッジだけ、だから１００ポイント回復、さらにデッキからカードを１枚セット」

はやて　ＬＰ３９００→４０００

「私はこれでターンエンド」

「極神皇トールが復活し、８００ポイントの４倍、３２００ポイントのダメージが八神、貴様を襲う！」

「くっ…ううっ…」

はやて　ＬＰ４０００→８００

「でも、この瞬間を待ってた！手札を全て捨て、フォーリン・エンジェルを特殊召喚！」

来たか…八神はやて最強のモンスター、フォーリン・エンジェル。感じるぞ…精霊程度の存在でありながら、神に匹敵する力を。だが、フォーリン・エンジェルの特殊召喚をした時、八神のライフは０になる。

はやて
ＬＰ０
手札×０
フィールド
フォーリン・エンジェル　攻撃力４０００
伏せカード×１

「我のターン！」

～～～ＢＧＭ；光と闇～～～

ディスペア　スピードカウンター　４→５
はやて　スピードカウンター　３→４
フェイト　スピードカウンター　３→４
なのは　スピードカウンター　３→４

「我は２０００ポイントのダメージを受け、魔法カード『極星侵攻』を発動する！このカードは、発動時に自分のフィールド上に『極神皇トール』または『極神皇ロキ』がそんｘ材しなければ無効になる。デッキからレベル４以下の『極星』と名のついたモンスターを３体まで特殊召喚できる。
我はデッキから『極星獣ガルム』と『極星霊リョースアールヴ』を特殊召喚する！
レベル４の極星獣ガルムと極星霊リョースアールヴに、レベル２の極星天ヴァルキュリアをチューニング！北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚、天地神明を統べよ！古より伝わりし神話の最高神、その絶対の力を解き放て！極神聖帝オーディン！」

「極神聖帝オーディン……」

「攻撃力４０００……」

「私達の切り札と同じ攻撃力…」

「極神皇トールの効果を発動！テスタロッサ、お前には退場してもらう！エフェクト・アブソーバー！」

「そうはさせないよ！トラップカード『ライトニング・フィールド』！自分フィールド上の『ライトニング・エンジェル』が相手のカード効果を受けるときに発動できる！ライトニング・エンジェルの直接攻撃の効果を使えなくする代わりに、敗北にならない効果は無効にはならない！」

「こっちもトラップ発動や！『フォーリン・フィールド』！このカードの発動時に自分の『フォーリン・エンジェル』を選択する！対象になったフォーリン・エンジェルは、フィールド上に存在する限り相手のカード効果によっては効果を無効にされない！」

「クッ……ならばロキとトールを守備表示に変更！行け、オーディン！レイジング・エンジェルを攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！これで終わりだ、高町なのは！」

「くっ…シャイニング・ブレイカー！」

オーディンがグングニルで、レイジング・エンジェルがレイジング・ハートに魔力（？）を纏わせ、互いを突き刺しにかかる。

「きゃあああああああああああ！」

「ぐあああああああああああ！」

ククククク……これでレイジング・エンジェルは倒した。

「後はお願い！はやてちゃん、フェイトちゃん！」

「「わかった！」」

なのは　ＬＯＳＥ

「我のエンドフェイズに、極神聖帝オーディンは蘇る！」

天より神々しい光と共に、オーディンが光臨する。

「そしてこの効果によって特殊召喚されたオーディンの効果発動、デッキからカードを１枚ドローする」

……。

ディスペア
ＬＰ７９００
手札×３
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇ロキ　攻撃力３３００
極神皇トール　攻撃力３５００

クッ…今の戦闘の衝撃でブラック・トリシューラ号の装甲が…神力は使用したくないが、仕方が無い…

「！！」

ディスペアのＤ－ホイールの装甲が壊れてたのに…光が包んだら直った…？

「今はそれどころじゃない…私のターン、ライトニング・エンジェルの効果でドローはできない」

ディスペア　スピードカウンター　5→6
はやて　スピードカウンター　4→5
フェイト　スピードカウンター　4→5

「私は墓地からトラップカード『ライトニング・アックス』の効果を発動！このターン、ライトニング・エンジェルは2回攻撃できる。さらに、攻撃が倍になるよ！」

8000ポイントのダイレクトアタックか…これを受ければ我のライフは一700だ。しかし、勝負を急ぐのは敗北の原因だぞ？

「ライトニング・エンジェルのダイレクトアタック！ツインライトニング・スマッシャー！」

「組織の人間に教わらなかったのか？テスタロッサ。『勝負を急げば敗北する』と。手札からトラップカード『極星の雷』を発動。このカードは自分フィールド上に星界の三極神が揃っている時、手札から発動できる。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、その攻撃力分のダメージを与え、そのモンスターを破壊する。このカードの効果は、三極神が揃っている限り無効にすることはできない」

三極神が空に攻撃を放つ。天空から雷が降り注ぎ、ライトニング・エンジェルを破壊した。

「キャアアアアアアアア！」

バランスを崩したか…このままでは海に落ちるな。……ん!?ライトニング・エンジェルがまだ残っている?

「ありがとう、ライトニング・エンジェル…」

ライトニング・エンジェルが落下したテスタロッサとＤ－ホイールを回収したか。精霊がこの世界で実体化できるとはな。

フェイト　ＬＯＳＥ

「私のターンや!」

フェイトちゃんとなのはちゃんのためにも、ここで負けるわけにはいかへん!

ディスペア　スピードカウンター　6→7
はやて　スピードカウンター　5→6

「墓地の『堕天使アニヒレイション』の効果発動!このカードをゲームから除外して、このターンフォーリン・エンジェルの攻撃力を２０００ポイントアップ!さらに、相手モンスター全体に攻撃して、攻撃力が守備力を超えていればその分ダメージを与える!」

フォーリン・エンジェル　攻撃力４０００→６０００

これを全て受ければ我のライフは８２００ポイントのダメージを受け敗北する。成程。戦艦のレイジング・エンジェル、先手必勝のライトニング・エンジェル、殲滅のフォーリン・エンジェルか。だが八神。１ターンそれが早ければ、我は敗北していた。

「フォーリン・エンジェルで全体攻撃！フォーリン・オブ・ラグナロク！」

「手札から『極星神フリッグ』の効果発動。このターン、『極神』によって発生するダメージは相手が受ける。また、極神が相手に与えるダメージは倍になる！そして、極神を攻撃対象にしたモンスターはゲームから除外される！」

天空から女神が現れ、フォーリン・エンジェルの攻撃を容易く跳ね返す。攻撃がフォーリン・エンジェルに直撃する。

～～～ＢＧＭ終了～～～

「キャアアアアアアア！」

はやて　ＬＯＳＥ

我の勝利が決まると同時に、合体を解除して陸地に着いた。

「八神。１ターン早ければ、我が敗北していた」

「惜しい…もうちょっとだったのになぁ…」

「なんか管理局の訓練を思い出すよね」

「うんうん。分かる」

「何の話か理解できないが、これだけは言っておく。我のブラック・

トリシューラ号を2度も破壊した人間はお前達が初めてだ」

「ディスペア…1つ聞きたいんだけど…合体した意味ってあるの？」

「アレをしないとトリシューラ号のデュエル中の修復ができないからな」

「そうだったんだ…」

～～～どこか森の中～～～

「そこのあなた。わたしとデュエルしていただけませんか？」

「僕にデュエル？ひゃはははははは！面白い！」

「私の名前は斎王琢磨です」

「僕の名はロキ。ひゃはははははは！」

ついに現れたね。斎王。まあまだ十代とエドが戦ってすらいないから、僕に偶然目をつけてきただけかな？他の生徒が光の結社に洗脳されちゃっても面倒だし、僕がひねり潰してあげるよ。

「「デュエル！！」」

第６１話　プライドのライディング・デュエル　ディスペア究極体（笑）　チー

ＺＥＸＡＬ…個人的には楽しみです。でも、対象年齢引き下げたな

…

第６２話　ロキｖｓ斎王　明かされる第一の望むもの（前書き）

今回はディスペア達が望むものの１つ目が明かされます。意外とわかってた人も多いかも…？

※変更点　ロキの『僕のターン』→『僕のタァーン』

第６２話　ロキｖｓ斎王　明かされる第一の望むもの

「先攻は譲ってあげるよ」

「では遠慮なく。わたしのターンドロー。わたしはアルカナフォースＶＩＩ－ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴを召喚！ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴの効果発動！」

「説明しなくていいよ。ストップだ」

「な！？（なぜアルカナフォースの効果を知っている！？まさか！わたしの占いに出てきた…あのカードの…）…逆位置の効果によって、このモンスターはあなたのフィールドに移ります」

バカな…！絶対に正位置になるはずなのに…

「ひゃはははははは！遠慮なく頂くよ！」

僕に運命力なんか使ったって、勝てるわけないんだよ！君の運命力ごときじゃ、僕の運を超えるなんてできない。

「わたしはカードを１枚伏せ、ターンエンドです」

斎王
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド

伏せカード×１

「僕のタァーン！カードを3枚伏せ、僕はＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴを生贄にして魔法カード『生死の分かれ目』を発動！互いにコイントスをして、表が出ればデッキからレベル４のモンスター1体を特殊召喚できる。でも、外れた場合このカードのコストとして生け贄に捧げたモンスターの攻撃力分のダメージを受ける！さぁ、コイントスしなよ」

１０円玉を投げて斎王に渡す。

「では…」

先程のは偶然だったはず！今度こそ表だ！

「な！！裏！？」

なぜだ！なぜ当たらない！？

「ひゃはははははははは！１７００ポイントのダメージを受けてもらうよ！」

「クッ…」

斎王　ＬＰ４０００→２３００

「じゃあ僕の番だね。１０円玉返してよ」

１０円玉を受け取ってコイントスをする。結果は当然表だ。

「表だから、デッキからレベル４の『無敗の賭博師』をデッキから特殊召喚する！
無敗の賭博師の効果発動！このカードが魔法カードの効果で特殊召喚に成功した場合、コイントスをするんだ。表が出れば僕は手札が７枚になるまでドローしてお前は手札を全て墓地へ送る。裏が出ればお前は手札が７枚になるようにドローして僕は手札を全て捨てる。行くよ！」

指ではじいたコインが空中を舞い、手に戻ってくる。結果は当然…表。

「じゃあ、僕は５枚ドロー。そして斎王。お前には手札を全て捨ててもらうよ！」

「クッ…」

「なんで運が自分の味方をしないのか不思議そうだね。ひゃはははは！お前は普段からそんなに運が良かったのか？ひゃーはははははは！カードを２枚伏せてターンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
無敗の賭博師　守備力２００
伏せカード×５

「わ、わたしのターン…」

「この瞬間、３枚のトラップを発動するよ！ひゃはははははは！

運命の分かれ道3枚！このカードは互いにコイントスをして、表が出ればライフを２０００回復して、裏が出れば２０００ポイントのダメージを受ける！ほら、コイントスしなよ」

「では…表、表、裏です。よってわたしのライフは２０００ポイント回復」

斎王　ＬＰ２３００→４３００

へぇ。それなりに運はあるじゃん。

「じゃあ僕だね！…ひゃはははは！3枚とも表だ！」

ロキ　ＬＰ４０００→１００００

1回も裏が出ないのはラッキーだったね。僕でも1回は裏が出ることが多いしね。

「ライフが…１００００…わたしはアルカナフォースＩＩＩ－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳを召喚！」

「ストップ」

「表です。あなたが通常召喚する度、手札からアルカナフォースを1体特殊召喚できる」

「でも、お前の手札はない。僕が通常召喚しても、特殊召喚はできないよ？ひゃはははははは」

「それなら伏せカードを発動、『アルカナリボーン』。墓地から『

アルカナフォース』と名のついたモンスターを1体手札に加え、それがレベル7以上のアルカナフォースであればもう1枚手札に加えます。わたしが手札に加えるのはレベル7の『アルカナフォースXVIII－THE　MOON』！よって墓地から『アルカナフォースVII－THE　CHARIOTを手札に加えます。
そして、THE　EMPRESSで無敗の賭博師を攻撃。EMPRESSブレッシング！」

「この瞬間トラップ発動『最後の賭け』。自分フィールド上に『賭博』と名のついたモンスターがいるときに相手が攻撃宣言した場合、コイントスを1回行う。表が出れば、そのモンスターと相手の手札すべてを墓地に送る！外れなら、僕の手札を全て捨てる。……へぇ。裏か。じゃ、僕は手札を全て捨てるよ」

攻撃が阻止されず、無敗の賭博師が破壊された。

「わたしはこれでターンエンドです」

斎王
LP4300
手札×2
フィールド
アルカナフォースIII－THE　EMPRESS　攻撃力1300

「僕のタァーン！…魔法カード『命賭け』を発動。コイントスをして、表が出れば僕はカードを5枚ドローする。でも、裏が出れば僕は4000ポイントのダメージを受ける。……結果は表だ。5枚ドローするよ。……ひゃはははは！そろそろこのデュエルも終わりだね！魔法カード『天命の時』を発動！墓地からギャンブルカードを任意の枚数取り除いて発動する！僕は墓地の『運命の分かれ道』

3枚と『無敗の賭博師』、それから『命賭け』を除外するよ。除外した後にコイントスをして、表が出れば除外した枚数×１５００相手にダメージを与える。裏が出れば、除外した枚数×１０００ポイントのダメージを受ける！」

ロキと名乗ったものがコインをはじく。随分と長い時のように感じるが、それは気のせいだろう。

「……表だ。斎王、お前には７５００ポイントのダメージを受けてもらうよ！ひゃーーーははははははは！」

「うおあああああああ！」

斎王　ＬＰ４３００→－３２００

「相手が悪かったね、斎王。もっと別のやつにデュエルを挑めば、勝てていたのかもしれないけどね。縁が会ったらまた会おうね～。ひゃはははははははは！」

…もう夜か。ディスペアも高町たちとのデュエルが終わった頃かな？

～～～その頃、トール～～～

「うわあああああ！」

ブルー生徒　ＬＰ－１００００

「フン！骨のない奴め」

傲慢なブルー1年ごときが、我に勝てるはずが無いだろう！
……ん？

「なんだあの光は…？」

トールが見た光は森の中に入って行った。

～～～森の中、斎王～～～

あのロキという生徒…まるでわたしの運命力が通じなかった…どうなっている？

「あの光は…！」

破滅の光が斎王の中に入る。破滅の光の力が増大する…光が収まると…

「フフフフフ。これでわたしの運命力はさらに上がる」

～～～ブルー寮、ディスペア達の部屋～～～

「あ、ディスペア」

「スクルドか。オーディンの姿が見えんな」

「オーディンなら確か部屋にこもって呪文を唱え…」

スクルドが言いかけた時にとなりの部屋からまばゆい光が放たれ、爆発した。

「スクルド！ぐあああああ！」

スクルドを抱きかかえ、背を向けて爆発からスクルドを守る。

「でぃ、ディスペア！大丈夫！？」

「大丈夫だ。しかしなぜ爆発など…それよりスクルド、怪我はないな？」

「私は大丈夫だけど…ディスペア、背中！」

ディスペアの背には爆発をもろに受けた跡があった。

「この程度、なにも支障はない。放っておけば治る」

しかしスクルドは、治癒魔法を使う。

「神力を無駄遣いするな。お前、辛いだろう？」

「ディスペアのためなら大丈夫」

……尽くしてくれるのはいいが、もう少しいうことを聞いて欲しい。

「大丈夫か？スクルド、ディスペア」

「オーディン、貴様何をやっていたのだ」

「これを見ろ」

「これは…」

オーディンが見せてきたのは、神々の言葉で記された1枚の白いカード。とてつもない力を感じる。たったの1枚で、三幻魔を超えるパワーだ。

「この学園で今まで溜まってきた神力を使い、できたものだ。持っていれば、神力が回復し続ける」

「ではこれが…」

「いや、これではまだスクルドの神力を取り戻したとは言えない」

我ら神々が望むものの1つは、スクルドが神力を取り戻すことだ。スクルドは今まで、神力が無くなってからというもの長い間辛い思いをしてきたはずだ。時を動かすこともできなくなったしな。

「あの…いいよ。私のためにそんなことしなくても…」

スクルドが完全に神力を取り戻せば、スクルドが無理をする必要はもうなくなる。普通に魔法を行使できるようになる。

「スクルド、我らはお前の神力を取り戻させるのも目的の1つだが、まだ望むものはある。そのためにはスクルドに神力を取り戻してもらわなければならないのだ。お前に無理をさせることなど、我にはできない」

「でも…そのためにディスペア達が命を賭けてるんでしょ?…私にはそれが辛いよ…」

確かに神力収集は生半可ではない。少し間違えれば、我ら最高神クラスの神でも命を落とす。

「まあ、このような重い話はあまりしたくない。とりあえず、これを持っておけ」

「うん…」

成程。しかしこれで、また1歩大きく進んだな。とにかくデュエルをすれば神力は集まる。それを繰り返していけば、いつかは我らが望むものが手に入る。そういうことか。道は長いが、気長にやっていこう。

第６２話　ロキｖｓ斎王　明かされる第一の望むもの（後書き）

次回は時系列的にエドと十代がデュエルして十代が負ける辺りの話です。

第６３話　ディスペアｖｓエド・フェニックス　運命排除！（前書き）

ディスペアとエドのデュエルです。
注意！かなりエドの性格が変わっていると思われます！

第６３話　ディスペアｖｓエド・フェニックス　運命排除！

～～～デュエルアカデミア校舎・エドｖｓ十代、（ＢＧＭ：運命のテーマ（仮）終盤）～～～

「分かったような口をきくな、十代！むかつくんだよ！お前みたいに、格好や憧れだけでヒーローを使ってるやつが！これで最後だ！プレデター・オブ・ドレッドノート！！」

「……っ…！」

十代　ＬＰ０

「「「十代！！」」」

「兄貴！」

……十代はしばらく再起不能か。

「ひゃはははははは。これで暫く十代がデュエルをすることはないね」

「そうだな。だが、我を手招きしているようだな。エド・フェニックス」

「ゑ？」

～～～エドサイド～～～

あいつは僕のことを鼻で笑ったディスペアとかいう男…ちょうどいい！今ここであの時の屈辱を晴らしてやる！…だが…

～～～エド・回想～～～

「エド。ディスペアという男にはデュエルを挑むな」

「何故だ！？斎王！」

「ディスペアという男を占ってみたが、突然タロットカードが燃え尽きてしまったのだ。恐らくその男は運命に囚われない。デュエルを挑むのはやめるのだ」

「くっ…僕は絶対にディスペアに勝つ！」

「エド！」

～～～回想終了～～～

くそ…僕がこいつに負けるなんてありえない！

～～～サイドアウト～～～

「エド・フェニックス。どうやら我との勝負を望んでいるようだな？」

「そうだ！あの時の屈辱をここで晴らしてやる！」

屈辱を晴らす…か。面白い。

「いいだろう。デュエルだ！」

破滅の光ごと神力に変換してもらってやろう。

「「デュエル！」」

「僕の先攻！…来い、Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ！ダイヤモンドガイのエフェクトで、デッキを１枚めくる。通常魔法なら、次のターンに発動できる！
僕が引いたのは通常魔法『デステニー・ドロー』。次のターンに発動できる。ターンエンドだ」

エド
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ　攻撃力１４００

「我のターン。我は魔法カード『封印の黄金櫃』を発動し、デッキからオシリスの天空竜を除外！」

「なっ!?オシリスの天空竜だと!!?何故お前が持ってるんだ!」

「フン…ジェスター・コンフィを特殊召喚。さらにエフェクト・ヴェーラーを召喚し、カードを伏せる。ターンエンド」

「(ディスペア…Q.『なぜ持ってるんだ!』に対してA.『フン…ジェスター・コンフィを特殊召喚』って…)」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
オシリスの天空竜(残り2ターン)
フィールド
ジェスター・コンフィ　攻撃力０
エフェクト・ヴェーラー　攻撃力０
伏せカード×１

「僕のターンだ!」

奴の場には攻撃力０のザコモンスターが2体…何を考えているんだ?

「デステニー・ドローのエフェクトで2枚ドロー!」

そしてなぜ奴が世界最強の三幻神のカードを持っている?

「Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイを召喚する!行け、ダイハードガイ!ザコモンスターを粉砕しろ!」

「攻撃力の低いモンスターをザコ呼ばわりしてると、そのザコに涙

を見るぞ。トラップ発動、永続トラップ『ガリトラップ－ピクシーの輪－』。このカードが我のフィールドで表側表示で存在する限り、我のフィールド上に攻撃表示のモンスターが2体以上存在する場合相手は攻撃力の一番低いモンスターへの攻撃はできない。我のフィールドにいるモンスターは全て攻撃力0だ。よって、貴様は攻撃することができない」

「姑息な…カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「このエンドフェイズ、ジェスター・コンフィの効果が発動。このカードがジェスター・コンフィ自身の効果によって特殊召喚されていた場合、相手のエンドフェイズにこのカードと相手のフィールドに存在するモンスター1体を手札に戻す。我が戻すのはD－HEROダイハードガイだ」

「くっ…エンドフェイズに僕の手札が7枚以上あるから手札のD－HEROディスクガイを墓地へ送る」

強い…奴が召喚しているのは攻撃力を持たないモンスターだぞ！そんな奴になぜ僕は苦戦を強いられているんだ！

エド
LP4000
手札×6
フィールド
D－HEROダイヤモンドガイ　攻撃力1400
伏せカード×2

……D－HEROディスクガイ…確かあのカードは墓地からの特殊召喚に成功した時に2枚ドローできるカード。

「我のターン。次のターン、オシリスの天空竜を我の手札に加える」

「お前のスタンバイフェイズに、この永続トラップを発動！『リビングデッドの呼び声』！ディスクガイを墓地から特殊召喚する！そしてディスクガイのエフェクトを発動！このカードが墓地から特殊召喚された時、デッキからカードを2枚ドローする」

1枚はリビングデッドの呼び声だったか。だが、エド・フェニックスは仮にもこの世界ではプロデュエリストだ。弱小モンスターを攻撃表示でフィールドに残すわけがない。つまりあの伏せカードは十中八九『Ｄ－シールド』。攻撃表示のＤ－ＨＥＲＯに装備し、その表示形式を守備表示に変更。戦闘では破壊されなくなるカードだ。だが、真偽は不明だ。攻撃するに越したことはない。

「我は幻銃士を召喚。幻銃士の効果発動、召喚成功時に自分フィールド上に存在するモンスターの数まで銃士トークンを特殊召喚できる。

この効果により、我は銃士トークン2体を特殊召喚する。

レベル4の銃士トークン2体に、レベル1のエフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

銃士トークン2体が1つの緑の輪をくぐり、8つの星になる。

「何が起こっている!?ディスペア！何をするつもりだ！」

「シンクロ召喚、フィールドを荒らせ！ミスト・ウォーム！」

「シンクロ……召喚…！？」

「ミスト・ウォームの効果発動。シンクロ召喚成功時、相手フィールド上に存在するカードを3枚まで手札に戻すことができる」

「何!?3枚だと!!」

僕のフィールドにカードは4枚…しかし、ディスペアは絶対にリビングデッドの呼び声を戻すことはしないだろう…

「我が戻すのは、D－HEROディスクガイとD－HEROダイヤモンドガイ、その伏せカードだ!」

ミスト・ウォームが強風を巻き起こし、3枚のカードが吹き飛ばされエドの手札に戻った。

「僕のフィールドはがら空き…」

「ミスト・ウォームでダイレクトアタック!ミスト・インパクト!」

「うわあああああッ…!」

エド　LP4000→1500

どうやら神のカードは召喚する必要はなさそうだ。こちらとしてはありがたい。1年生どもはまだゴッドカードの存在を知らないからな。

「我はジェスター・コンフィを特殊召喚し、ターンエンド」

ディスペア
LP4000

手札×２
オシリスの天空竜（残り１ターン）
フィールド
ミスト・ウォーム　攻撃力２５００
幻銃士　攻撃力１１００
ジェスター・コンフィ　攻撃力０
ガリトラップ―ピクシーの輪―

「僕のターン！」

くそッ…こいつ、前に戦ったロキとかいう奴よりも強いじゃないか…！

「僕は魔法カード『Ｄ－スピリッツ』を発動する。僕のフィールドにモンスターがいない時、手札から『Ｄ－ＨＥＲＯ』１体を特殊召喚できる。再びダイヤモンドガイを召喚、エフェクト発動！…引いたカードはＤ－ＨＥＲＯデビルガイだ。デッキの一番下に戻す…Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイを召喚。
ダイヤモンドガイで幻銃士を攻撃だ！ダイヤモンド・ブロー！」

「チッ…ノーダメージで勝利するつもりだったのだがな」

ディスペア　ＬＰ４０００→３７００

クッ…どこまでもなめやがって…！

「カードを３枚伏せターンエンド」

「エンドフェイズにジェスター・コンフィの効果発動。ダイハードガイとこのカードを手札に戻す」

あのピエロ…むかつくんだよ！

エド
ＬＰ１５００
手札×６
フィールド
Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ　攻撃力１４００
リビングデッドの呼び声
伏せカード×３

「我のターン。この瞬間、除外されたオシリスの天空竜を手札に加える」

クッ…とうとう奴の手札に神のカードが加わってしまった…

「我はクラスター・ペンデュエラムを召喚する。クラスター・ペンデュラムの召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターの数まで自分フィールド上に攻守０のペンデュラム・トークンを特殊召喚できる。貴様のフィールドに存在するモンスターは１体。よって、ペンデュラム・トークンを１体、攻撃表示で特殊召喚する。我のフィールド上に存在するモンスター３体を生贄に捧げ、降臨せよ！」

「ひゃはははは！とうとう神の降臨だね！」

「オシリスの天空竜！」

「！！？え！？なんで究極神オシリスじゃないのさ！？」

「ロキよ。究極神召喚には、自分のライフ半分と自分のモンスター３体に加え、召喚者の
神力が必要になる。ディスペアの場合は神力が無限にあるから問題ないが、オシリスの天空竜のまま召喚したのは恐らく、手の内を明かすのはまだ早いと判断したためだろう」

「ふ～ん…つまんないなぁ…せっかくエド・フェニックスが絶望に沈んでいくところを見れると思ったのに…というか、究極神って三幻神状態で特殊召喚できたんだ。通常の三幻神は通常召喚だったはずだけど」

「まあ、そういうな。ロキ。ディスペア自身の判断だ。我らに手出しはできない。斎王に目をつけられれば面倒なことにもなる」

オシリスの天空竜の降臨で、１年生が騒ぎ出す。しかし、２年、３年生はディスペアの究極神を見たことがあるのでそこまで大きな反応は見せない。ちなみに、夜なのに生徒がデュエル場にいるのは、校長が呼んだからだ。

「オシリスの天空竜の攻撃力と守備力は、我の手札×１０００ポイントとなる」

オシリスの天空竜　攻撃力Ｘ０００→３０００

「攻撃力３０００だと！」

「オシリスの天空竜で、ダイヤモンドガイを攻撃する。超電導波サンダーフォース！」

「させるか！トラップ発動『Ｄ－シールド』！Ｄ－ＨＥＲＯ１体の装備カードとなり、守備表示にして、戦闘では破壊されない！」

サンダーフォースがダイヤモンドガイに直撃するが、ダイヤモンドガイは守りの耐性のまま生き残っていた。

「フッ…そのぐらいはしてもらわなくてはな」

でなければ、我がデュエルに応じた意味が無い。

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ３７００
手札×３
フィールド
オシリスの天空竜　攻撃力３０００
ガリトラップ－ピクシーの輪－

「僕のターン。ダイヤモンドガイのエフェクト発動！…引いたカードは天使の施しだ。
僕は魔法カード『ミスフォーチュン』を発動。このカードのエフェクトにより、オシリスの天空竜の攻撃力の半分の数値分、ダメージを受けてもらう！」

「ク…」

ディスペア　ＬＰ３７００→２２００

オシリスの攻撃力アップが『元々の攻撃力』だったのが災いしたか…

「僕はＤ－ＨＥＲＯディスクガイを守備表示で召喚！」

「この瞬間オシリスの特殊能力発動。召雷弾！相手がモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚した時、そのモンスターが攻撃表示なら攻撃力、守備表示なら守備力を２０００ポイント下げる。そして、この効果によって攻撃力か守備力が０になったモンスターは破壊される」

「なっ！？」

召雷弾に耐えきれずに、ディスクガイが爆発した。

さすがにエド・フェニックスもオシリスの効果は知らなかったようだな。

「ターンエンドだ」

エド

ＬＰ１５００

手札×６

フィールド

Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ　攻撃力１４００

＋Ｄ－シールド

伏せカード×２

「我のターン」

オシリスの天空竜　攻撃力３０００→４０００
手札４枚でようやく４０００か…

「我はジェスター・コンフィを特殊召喚し、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ２２００
手札×３
フィールド
オシリスの天空竜　攻撃力３０００
ジェスター・コンフィ　攻撃力０
ガリトラップ―ピクシーの輪―

「ヒッヒャッヒャッヒャッヒャ！もうあいつに打つ手はなさそうだね！」

「……そうだな」

「僕のターン！」

どうする…？神の効果で、攻撃力、守備力が低いＤ－ＨＥＲＯはすぐに破壊されてしまう…さらに、むかつくピエロのエフェクトでこのターンのエンドフェイズに僕のモンスターは手札に戻ってしまう…

「くそっ…僕はターンエンドだ！」

「ジェスター・コンフィの効果発動。Ｄ－シールドを装備しているダイヤモンドガイとコンフィを手札に戻す」

「僕の手札は８枚…２枚捨てる…」

エド
ＬＰ１５００
手札×６
フィールド
伏せカード×２

「ハハハハハハ！エド・フェニックス。勝負を仕掛けて着て置きながら敗北するとは、屈辱を晴らすどころか更なる屈辱だな？オシリスの天空竜でダイレクトアタック。超電導波サンダーフォース」

「うわあああああああああ！」

エド　ＬＰ１５００→－３５００

斎王…君の言っていたことは間違ってなかったな…

「ヒャッハハハハハハハハ！結局何の抵抗もできずにエドが負けちゃったんだ。ねぇ、オーディン、トール？……あるぇ？オーディン、トール？」

先に帰っちゃったの？

「消えろ、ザコが」

「ク…くそおおお！」

……やはり手札5枚でようやく攻撃力５０００ではな…

～～～某所～～～

エドが負けた…言ったはずだぞエド！ディスペアには挑むなと！

～～～サイドアウト～～～

もう深夜か。

「ヒャッハハハハハハ！圧勝だったね、ディスペア」

「ロキ…先に戻っていなかったのか？」

「だって、オーディンもトールも僕を置いて先に帰っちゃうんだもん」

すでに泣いているかのような声で言うなロキ。まるで我がお前を泣かせたようではないか。

勘違いをした一部の生徒がこちらを見てくる。視線がかなり痛い。

……！！

「ディスペア…」

「分かっている」

神力を固めたナイフを5本ほど森の中に投げ込む。

「ぎゃあああああああああ！」

叫び声が聞こえ、何かが倒れる。

「……こいつは？」

「毒島」

掠らせる程度でよかったな。

「何の用だ？」

「グヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒッハハハハハハァァア…へへへへへ」

「ディスペア…こいつ、様子がおかしいよ。僕から見ても明らかにキ〇ガイだね」

そんなことは1目見ればわかる。こいつの眼は明らかに洗脳されている目だ。そして白い制服…エドの次は斎王の刺客か。我の周りには災難が絶えないようだな。

「光の結社…まさか最初に入るのが万丈目ではなかったとはな」

「グヒヒヒヒ。ディスペア～へへッ！僕とデュエルしろ～」

「お前ほど深く洗脳された奴を開放するのは…骨が折れるな。悪いが、究極神を使わせてもらうぞ」

普段なら、適当なデッキでデュエルするだろう。しかし、こいつの洗脳の深さは半端なものではない。適当なデッキで勝っても、洗脳を解くことはできない。

「「デュエル」」

第６３話　ディスペアｖｓエド・フェニックス　運命排除！（後書き）

次回の時系列だと、吹雪ｖ明日香のデュエルの話です。

第６４話　ｅｎｅｍｙ’ｓ　ｖｉｃｔｏｒｙ　ｉｓ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ（前

今回のタッグデュエルはタッグフォースルールではありません。
ライフは共有で８０００ポイント。
フィールドは別。
墓地は共有です。
味方をモンスターで庇うことができます。

※今回は、グループ視点だけの変更（例：～～～リリカルサイド～～～）の場合は４行の間隔をあけます。その代わりに～～～●●●サイド～～～という表示を消します。これでわかりにくかったら、次回からは元に戻します。

第６４話　ｅｎｅｍｙ，ｓ　ｖｉｃｔｏｒｙ　ｉｓ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ

「グヘヘヘ！デュエル！」

「ヒャッハハハハハハ！光の結社ごときがディスペアに挑むなんてね」

「僕の先攻…ヘヘ！僕は光の騎士を攻撃表示で召喚…カードを1枚伏せてターンエンドだ。ヒヒヒヒ…」

毒島
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
光の騎士　攻撃力１５００
伏せカード×１

聞いたこともないカード…

「あ！ディスペア！」

「何故ここにいる？テスタロッサ・ハラオウン」

「ここで突っ込んでいる時じゃないんだけど、名前で呼んでくれないかな！？」

「断る。早く要件を言え。こっちはこいつの相手で忙しいのだから

な」

「え！？もしかして、もうデュエル始まってる！？」

「当然だ。邪魔な豚が、我の前に立ちふさがったのだからな。降りかかる火の粉は払う」

「気をつけて！ダメージが現実になるうえに、負けるとその生徒みたいになっちゃうから！」

何を当然のことを言っている。そもそもこの程度の闇のゲームの力で、我を洗脳できると思ったら大間違いだ。

「そんなことは知っている。用がそれだけなら帰れ。我のターン！」

「毒島、しっかりやっているようだな」

「だが毒島。1人で3人も相手をするのは大変だろう。後の2人は俺達がやってやる」

「さあ、そこの女、デュエルだ！」

「そこのチビもだ！」

「チビだと！お前は絶対、ぶっ潰す！」

「ちょ、ちょっとロキ！」

「気安く僕の名前を呼ぶな！今の僕は機嫌が悪いんだ。不用意に話しかけたら…。さあ、ゴミ人間！行くぞ！」

「え？私も逃げられない！？」

「お前には強制的にデュエルしてもらうぞ、金髪女」

「くっ…」

「……テスタロッサ。今回だけ僕と手を組め。こいつらをぶっ潰さなきゃ、僕の気が収まらない！」

「う、うん…」

「「「デュエル」」」　「ヒャハハハハハハハハハ！」

面倒だな。テスタロッサはともかく、ロキは大丈夫だろうから問題はない。

「我はジェスター・コンフィを特殊召喚する。そして手札のこのカードは、魔法使い族モンスター1体の生け贄で召喚できる。来い！ブリザード・プリンセス！」

氷の氷球を持った氷の世界の姫が現れる。そして、召喚されたと同時にブリザード・プリンセスから放たれた吹雪が、毒島の伏せカードを凍らした。

「ブリザード・プリンセスの生贄召喚に成功したターン、相手は魔法・罠カードの発動をすることはできない。ブリザード・プリンセスで、光の騎士を攻撃する」

「ぐわあああ！……グへヘッ！光の騎士の効果発動。このカードが戦闘破壊され墓地へ送られた時、デッキからレベル６以下の闇属性モンスターを特殊召喚できる。フへへへへ、僕が召喚するのは光の使者だ！」

毒島　ＬＰ４０００→２７００

チィッ…リクルーターか…

「僕のタァーン！僕はカードを１枚伏せてスカイ・コアを召喚！ターンエンド！」

ロキ
合計ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
スカイ・コア　守備力０
伏せカード×１

「俺のターン。斎王様の命令だ。お前には光の結社に入ってもらう」

「キッヒャッハハハハハハ！誰が入るか！バーカ！だからお前は

ダメなんだよ」

「光の結社をバカにするな！俺は光の騎士を召喚！」

「トラップ発動『激流葬』！フィールド上にモンスターが召喚・特殊召喚・反転召喚された時、フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「自分のモンスターを破壊するだと！！？」

「ヒャッハッハハハハハハ！効果によって破壊されたスカイ・コアの効果発動！デッキ・手札から機皇帝スキエル∞、スキエルＴ、スキエルＡ、スキエルＧ、スキエルＣを特殊召喚する！泣いて謝ったってもう遅いよ！機皇帝スキエルの効果、発動！」

スキエルがパーツと合体する。

機皇帝スキエル∞　攻撃力０→２２００

「俺はターンエンドだ…」

ホワイト寮生徒Ａ
合計ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
なし

「私のターン…ＢＦ－逆風のガストを特殊召喚するよ！このカードは自分フィールド上にカードが無い時、手札から特殊召喚できる！さらにＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚！そして、ＢＦ－東雲のコ

チを召喚！レベル４のブラストに、レベル４のコチをチューニング！シンクロ召喚！ギガンテック・ファイター！ギガンテック・ファイターの攻撃力は、全ての墓地の戦士族モンスター１体につき１００ポイントアップする！私はカードを１枚伏せてターンエンドだよ」

フェイト
合計ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
ギガンテック・ファイター　攻撃力２９００
ＢＦ－逆風のガスト　守備力１４００
伏せカード×１

「俺のターン！俺は光の守護者を召喚する！カードを１枚伏せて、ターンエンドだ！」

「この瞬間、私のトラップカード『ゴッドバードアタック』を発動！ガストを生贄にして、光の守護者と伏せカードを破壊！」

「なにぃっ！？」

ホワイト寮生徒Ｂ
合計ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
無し

「我はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ブリザード・プリンセス　攻撃力２８００
伏せカード×１

「グヒヒヒヒヒ！僕のターン。伏せカードオープン『サンダー・ブレイク』。手札を1枚捨てて、ブリザード・プリンセスを破壊だ～！」

クッ…

「さらに光の使者を生贄に、ライトニング・スピアーを召喚だ！このカードは『光』と名のついた闇属性モンスター1体の生け贄で召喚できる。グヘヘヘヘ！行け～！ライトニング・スピアーでダイレクトアタック！ライトニングスパイラル！」

「チッ…トラップ発動『フリッグのリンゴ』、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合に攻撃を受けた時、受けたダメージを回復し、その数値と同じ攻守を持つ『邪精トークン』1体を特殊召喚できる。我が受けたダメージは３０００ポイント。よって３０００ポイント回復し、攻守３０００の邪精トークンを特殊召喚する」

「な、なんだって！！？…くそ、ターンエンドだ」

どうやら嗤う余裕はなくなったようだな。清々する。

毒島
ＬＰ２７００
手札×３
フィールド
ライトニング・スピアー　攻撃力３０００

「我のターン！我は魔法カード『ダーク・バースト』を発動し、墓地からジェスター・コンフィを手札に加える。そして、我のフィールドにトーチトークン体を特殊召喚し、貴様のフィールドにトーチ・ゴーレムを守備表示で特殊召喚する。
我のフィールド上に存在するトーチトークン2体と邪精トークン、我のライフ半分を生贄に捧げ降臨せよ！究極神オシリス！究極神オシリスの攻撃力と守備力は、我の手札×２０００ポイントの数値になる。よって攻撃力は４０００だ。
究極神オシリスで、ライトニング・スピアーを攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

「ギャア〝ア〝ア〝ア〝ア〝」

毒島　ＬＰ２７００→１７００

「ターンエンドだ。我の究極神を貴様ごときが倒すなど不可能！」

奴の残りライフは１７００ポイント…しかし、究極神が存在する限り、自分フィールド上のレベル１１以下のモンスターは攻撃ができない…つまり、次の神が来るまで、我はオシリスでしか攻撃できない…モンスターが切れなければ、ずっとこのデュエルは止まったままだ。

ディスペア

ＬＰ２０００
手札×２
フィールド
究極神オシリス　攻撃力４０００

「ヒャッハハハハハ！僕のタァーン！機皇帝スキエル∞で生徒Ａにダイレクトアタックだぁーーー！」

「うわあああああああ！」

ホワイト寮生徒Ａ　合計ＬＰ８０００→５８００

「ヒャーハハハハハハ！！カードを3枚伏せて、ターンエンド！もうお前に打つ手はない、さっさとしねぇぇぇぇぇぇぇ！」

ロキ
合計ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
機皇帝スキエル∞　攻撃力２２００
スキエルＴ　攻撃力４００
スキエルＡ　攻撃力１０００
スキエルＧ　攻撃力２００
スキエルＣ　攻撃力６００
伏せカード×２

「お、俺のターン…来たぁぁ！斎王様より授けられたカード！永続

魔法『虚無天輪』発動！」

「虚無天輪？何かやばそうなのでてきちゃったよ」

「ロキも知らないの？」

「僕があんなカード知るわけないだろ。そういうテスタロッサこそ、巨大な組織の一員なのに知らないんだ」

「うぅ……」

全く。組織って使えないね。神の鏡でも察知できなかったんだから、分からなくて当然だけど。

「虚無天輪の効果によって、墓地から光の騎士と光の守護者を除外して、手札の光の王を特殊召喚するぜ！そしてこのカードがフィールド上に存在している限り、俺達は自分のターンのスタンバイフェイズに手札から『光』と名のついた闇属性モンスター1体を特殊召喚できる」

毎ターンの特殊召喚効果か。さすがにまずいかな。

「トラップオープン『機皇波動』！自分フィールド上に『機皇帝ワイゼル∞』『機皇帝スキエル∞』『機皇帝グランエル∞』『機皇神マシニクル∞』の内1体でもいるとき発動！このターン相手は機皇帝または機皇神に攻撃しなければならない！そして、その攻撃で機皇帝の本体が倒されなかった時、相手フィールド上のカードを全てゲームから除外する！ヒャッハハハハハハハハ！せっかく召喚したのに残念だったね」

僕のフィールドには機皇帝スキエル∞がいる。そして、スキエルGは1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃を無効にできる。そして生徒Aのフィールドにはモンスターが1体。確実に除去できる！

「光の王で、機皇帝スキエル∞を攻撃だ！」

「スキエルGの効果、発動！1ターンに1度相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「ハハハハハ！光の王の効果発動！光の王が攻撃する時に相手が魔法・罠・モンスター効果を発動した場合、その効果を無効にする！」

「なにぃ！？き、機皇帝スキエルが！」

ロキ　合計ＬＰ８０００→７４００

「そして光の王のもう1つの効果によって、相手モンスターを戦闘で破壊した時３０００ポイントのダメージを与える！」

３０００ポイント！？冗談じゃないね！８０００ポイントだからまだどうにかなるけど、４０００ポイントでそれは嫌だ。

「そうはいくかよ！カウンタートラップ『機皇反響』！相手からダメージを受ける場合、そのダメージを無効にして墓地から機皇帝１体とその機皇帝の名前が含まれるパーツを可能な限り特殊召喚する！そして無効にしたダメージ分だけ機皇帝の本体の攻撃力をアップする！ヒャッハッハッハハハハハハハ！機皇帝スキエルの攻撃力を５２００ポイントにして特殊召喚する！今度こそお前に打つ手はない！ヒャッハッハハハハハハハ！」

「ターンエンドだ…」

これでは斎王様の命令を果たすことができない…

生徒Ａ
合計ＬＰ５８００
手札×４
フィールド
光の王　攻撃力２８００

「私のターン！」

ロキのフィールドには攻撃力が５２００になってる機皇帝スキエルがいる…。敵だと強いけど、味方だと頼もしくて頼りになるな。私のフィールドには攻撃力が今は２８００に戻ったギガンテック・ファイター1体だけ…手札も今ドローしたカードを加えて3枚…絶対足手まといだ…

「テスタロッサ。深く考えているぐらいなら、早くこいつらを倒してくれないかな?僕は早く部屋に戻って、トールと話がしたいんだけど」

部屋に帰ってトールと何を話そうかな～?それともトランプでもやろうかな～?ヒャッハハッハハハハ！

「その倒す方法を考えてるの！どうしてロキはそんなに余裕そうなの！?もしかしたら負けちゃうかもしれないんだよ?」

「ヒャッハッハハハハハッハハ！負ける?僕が?ヒヒャー！僕が負けてる未来なんて、想像もできないね！僕の頭に浮かんでるのは、

今僕に勝負を挑んできてるバカが倒れてるところだけだよ」

「だから、どこからそんな自信がわいてくるの!?」

私の気も知らないで…

「最初から『負けるかもしれない』なんて考えて勝負するぐらいなら、こんな暇つぶしにもならないクズとのデュエル僕はしていないんだよ!」

「「く、クズだと～!!」」

「黙れ、クズ!斎王様斎王様煩いんだよ!挙句の果てには僕を『チビ』なんて呼びやがって!僕がチビならお前達はクズなんだよ!テスタロッサもそんな負けるだのなんだの言ってる暇があったら、勝って帰ってからの事を考えろ!お前は僕と組んでるんだ!負けるわけが無いんだよ!」

「……うん!」

そっか。ロキは自分が負けることを考えていない。それどころか帰ってから自分の仲間と何を話すかを考えてるんだ。絶対に自分の日常が壊れるなんて思ってない。

「フン…」

ようやく本気になったみたいだね。これで僕も、心置きなくこいつらをぶっ潰せる。

「トラップ発動『機皇極砲』!このターン、相手フィールド上のモ

ンスターカードがフィールドを離れた時、機皇帝本体の攻撃力分のダメージを与える！ヒャッハッハハハハハハハ！テスタロッサ、とどめは任せるよ！」

「うん！ギガンテック・ファイターで、光の王を攻撃！」

「くっ…光の王が…」

「ヒャッハッハハハハハハ！機皇極砲の効果で、お前達に５２００ポイントのダメージを与える！」

機皇帝スキエルが砲撃を放つ。

「「うわあああああああ」」

ホワイト寮生徒Ａ＆Ｂ　合計ＬＰ５８００→６００

「だ、だが俺達のライフはまだ残っている！次のターン、俺が斎王様からもらったカードを引けば、俺達の勝利だ！」

「キヒャッヒャッヒャ！テスタロッサが光の王と相打ちに持ち込んだモンスターには効果があるんだよ！」

「このカードが戦闘で破壊された時、墓地の戦士族モンスター１体を特殊召喚できる！私は、ギガンテック・ファイターを特殊召喚！ギガンテック・ファイターでダイレクトアタック！」

「「うわあああああああああ！」」

ホワイト寮生徒Ａ＆Ｂ　合計ＬＰ６００→－２２００

よし、ロキの方は勝ったようだな。

「ヒヒッ！僕のターン。モンスターをセットして、ターンエンド」

毒島
ＬＰ１７００
手札×３
フィールド
セットモンスター×１

「我のターン。……ん？どうやら神は貴様など相手にしていないようだな。幻銃士を召喚。幻銃士の効果により銃士トークン２体を特殊召喚する。
そして３体の銃士と我がライフの半分を生贄に捧げる！降臨せよ！究極神オベリスク！
究極神オベリスクで伏せモンスターを攻撃する！ゴッド・エクス・バースト！」

「ぎゃあああああ！」

「究極神オシリスのダイレクトアタック！アルティメット・サンダーフォース！」

「ギャア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〜〜〜〜〜！！」

毒島　ＬＰ１７００→－３００

これでどうだ？

「う～ん…僕は一体…」

どうやら、洗脳は解除できたようだな。

「ヒィィィィ！でぃ、ディスペア～～～！た、助けて～！」

……。洗脳を解除してやる必要はなかったな。寧ろずっとあのままの方が良かっただろう。

「ディスペアも終わったんだ。僕達の方も何とか洗脳は解除できたよ」

「そうか……」

「じゃあテスタロッサ。僕達は帰るからね」

「あ、ま、待って！」

そう言った時にはもうロキ達は寮に瞬間移動しちゃったみたい。

……お礼ぐらい言わせてよ…

第６４話　ｅｎｅｍｙ’ｓ　ｖｉｃｔｏｒｙ　ｉｓ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ（後

やっぱり～～～●●●～～～の書き方に戻そうと思います。というよりも、状況で判断して使い分けることにします。

第６５話　ロキの墓参り（前書き）

もうシリアスなんて書きたくない…でも、シリアスな場面はこれからたくさん出てくることになると思います…はぁ。

ＢＧＭ『キサラ』が思ってた以上に合ったのには焦った。

今回はデュエルなしです。

第６５話　ロキの墓参り

～～～ブルー寮、ロキサイド～～～

……そう言えば、今日だったね。だからこんな鮮明に思い出すんだ。

「ディスペア。僕は少し出掛けてくるよ。夜までには帰るから。」

「……そう言えば、今日だったな」

「うん。じゃあ、行ってくる。」

「行って来い。」

～～～森～～～

……この辺りなら、大丈夫かな？

「あ、ロキ！」

…大丈夫じゃないな。

「何の用かな？テスタロッサ…」

「き、昨日のお礼をしに来たんだけど…」

「悪いけど、今は時間が無いんだ。僕はこれから神界に行かなきゃならないからね。」

「どうして？」

遠慮が無いね。まあ、遠慮が無い人間は嫌いじゃないけどね。

「……僕は言いたくない。ついてくるならいいよ。」

そう言って、僕はゲートを開く。

「ついて行っていいの？」

「僕は人間にそこまで気を許したわけじゃない。でも、神に『名前で呼んで』とか言ってくる人間も珍しいし面白いから。僕はもう行く。つかまってないとゲートの中で落ちるよ？」

「う、うん…」

人間を連れていくのは本当はまずいんだけど、まあいいか。

～～～神界・ロキの城～～～

「さ、着いたよ。早く手を放してくれないかな？いつまでも肩につかまってられると、歩けないんだ。」

「ご、ごめん…」

ううう…私、絶対迷惑だよね？

「あ、ロキ様！…に、人間！？ロキ様、どういうことですか！？」

「僕の客人だ。人間の中では、最も安全な部類のやつだから安心しろ。」

全く。こいつらはいつまで人間に対してビビってるんだ。

「テスタロッサ。少し準備するから、ついてきなよ。部屋は用意させる」

「え？このお城ってもしかして…」

「僕の城だ。」

「では、テスタロッサ様。お部屋を用意いたしますので、ついてきて下さい。」

召使いの下級天使がテスタロッサを案内する。

～～～ロキの城・玉座の間～～～

「僕の荷物、用意しておいてね、キース。」

「承りました。では１０分ほど後に、１回の大広間でお待ち下さい。

」

「ああ、分かった。……いるんだろ?テスタロッサ。隠れてないで出てきなよ。」

「な、何でわかったの!?」

ここは僕の城だ。自分の城の中で、どこにだれがいるかなんて、すぐ分かる。

「お前の魔力が駄々漏れだから」

適当に言って誤魔化す。魔力は漏れていないけど、自分の知らない所にいる人間は慌てるから、判断が遅れる。

〜〜〜10分後〜〜〜

「ロキ様。準備完了です。」

「よし、これだけあればいいだろう。」

僕が持っているのは花束とダイヤモンドだ。

「それ、どうするの?」

「テスタロッサ。僕は言いたくないと言ったよね?黙ってついてきなよ。途中で何か気になるような声をかけて聞いてくれていいけど」

「う、うん…」

どうしよう…流されてついてきちゃったけど、明らかに迷惑だしなぁ…

～～～神界・街道～～～

「あの、ロキ？あれは何？」

「あの木のことかな？あれは黄金のリンゴがなる木だよ。そろそろ食べごろじゃないかな？１つ食べる？」

「あ、うん。お願い。」

僕は高さが５０ｍはある木を、跳んで登る。

「せっかくだから、僕も食べようかな」

良く熟れた黄金のリンゴを2つ取って、少し離れたところにいるテスタロッサのところに戻る。黄金のリンゴは、熟れれば熟れるほど金の光が増す。

「食べるのに抵抗があるんだけど…頂きます。」

……こんなにおいしい物食べたことない…例えるなら、５つ星レストランのステーキよりおいしい。

「さ、食べたら行くよ。…あ、高町と八神にも持ってく？」

「あ、お願い」

もう1回木を登って、2つもぎ取る。

「ところで、神界っていつもこんなに暖かいの？」

「神界には季節も時の流れもないんだ。ディスペアの持ってる究極神の力で時が止まってる。だから僕達神々は死ぬことはないんだ。元々生まれた時から、不老不死だけど」

ある程度まで成長すると、老化はしなくなる。僕はずっとこの身長のままらしい。神々にも老化をしなくなるまでの成長には個人差がある。

「へぇ…時の流れが無いってこと昼と夜はどうなるの？」

「昼と夜なんてあるわけないだろ。僕は最初に人間界に行った時、すごく寒いうえに暗かったから、正直怖かったよ。人間はどうしてこんな暗い所で過ごせるんだ？って思ったしね。

……さ、休憩はこのぐらいにして、もう行くよ」

～～～神界、花畑～～～

「綺麗だね」

「まあ、こういう自然の物質は時が流れてるからね。いつかは枯れ

て、また咲くよ。時が流れてないのは神々だけだ。…テスタロッサ。あまりここにいない方がいいよ。神界の影響力は、人間にとってはものすごいものだ。人間界単位でせいぜい2日。それ以上いると、君の時は永遠に止まる。」

「そうなんだ…」

そう言えばロキ、いつもみたいに笑わないな…どうしたんだろう?

「……あ、この花…」

「この花がどうしたの?」

この花は…セレナが好きだった…貰って行こう。
僕はその花を取って、無言のまま歩きだす。

……聞いちゃいけないことだったのかな?

「さあ、着いたよ」

「ここって…お墓?」

「ああ、そうだよ。……。」

僕は自分のかつての恋人だった人間の墓の前に行く。

「久しぶりだね、セレナ。…人間界の時間では、3年ぶりくらいかな?」

僕は花束ととってきた1本の花、それからダイヤモンドを置く。

「ロキ…このお墓って…」

「…もう話してもいいかな。この墓は、僕が今までで唯一恋をした人間の墓だよ。……そういえばセレナは、君によく似てたね。外見といい、性格といい…ネガティブに考えるところなんか特にそっくりだね。…まあ、僕は何度もこのことを忘れようとしたんだけどね。この日になると、思い出すんだ…」

〜〜〜ブルー寮、神サイド〜〜〜

「では、ロキは我と会う前はまだあのような性格ではなかったと？」

「そうだ。我はロキと最も長い間共にいた。セレナが死ぬまでは、ロキは人間に対して嫌悪や憎悪などは一切抱いておらず、あのような笑い方はしなかった」

つまり、ロキはこの日のみ以前のロキの性格に戻るのか。……そして、次の日にはそれを忘れている。そして、この日が来ればまた思い出す。……。

〜〜〜サイドアウト〜〜〜

……あのとき、僕が後少し強ければ…こんなことにはならなかった。

〜〜〜回想〜〜〜

「ロキ、逃げて！」

「ふざけるな！僕に君を残して逃げろというのか！」

「ハッハッハッハッハッハ！その命、貰い受ける！」

「キャアアアアアアア！」

〜〜〜回想終了〜〜〜

あの狂った堕天使は、僕の前の城を粉々にした挙句、セレナの命を奪っていった。

「……」

「テスタロッサ。お前が暗くなる理由なんかないはずだ。」

その堕天使は、未だに見つけることができない。神の鏡にすら映らない…正直、今の僕の力でも勝てるか分からない。神はその神力で操ることのできるデッキのレベルが決まってくる。僕は、最高神クラスには届かない。だから、三極神を一斉に召喚することもできないし、特殊な力を持ったカードを操れるわけじゃない。僕が三極神や特殊なカードを操れるのは、僕の固有ディスクのおかげだ。僕の固有ディスクには、セレナが遺してくれた力が宿っている。

「そんなことないよ…」

「同情なら、やめてくれる？僕は惨めなのが大嫌いなんだ……もう行こう、用は済んだ。」

「同情じゃないよ！」

「！」

「同情なんかじゃない…」

……それを聞いて、僕の片目から水が流れる。

「へぇ。まだ残ってたんだ。あの時、全部流して枯れちゃったはずなんだけどな」

「それはロキの本当の想い…だと思う」

結局曖昧なのか。でも、間違ってはいないのかな？けど、それを認めれば今の僕は僕ではなくなる。

「僕はもう恋なんて感情、とうの昔に捨てた。僕に残ってるのは、ディスペア達という仲間と他人を見下して嘲笑する、残虐な感情だけだ。」

それに僕は、最後の最後まで僕自身の心をセレナに伝えていない。今の僕には到底伝える資格なんてない。

「セレナの魂は、天国で生きている。でも、僕は天国に入ることは許されない。入ることが許されるのは、最高神クラスの神々だけだ。

たとえディスペアが『入っていい』と言っても、入ることはできない。」

「でも、ディスペア達の1人でもいなくなったら、ロキは悲しくないの？」

「さあね。僕がまだそう思えるのなら、僕にはまだ心という物が残っているのかもね。でも、明日になれば僕は今日の墓参りを忘れてる。来年の今日になればまた思い出す。その繰り返しだ。……こんなことを話しているうちに、ゲートに着いたよ。今はきっと夕方ぐらいだ。」

戸惑っているテスタロッサの手をつかんで、ゲートに入る。

～～～デュエルアカデミア・森～～～

「さ、僕はもう帰るよ。リンゴは忘れずに届けてあげなよ。じゃあね。」

「あ、ろ、ロキ！」

またいなくなった…私にはロキの事が良く分かる…大切な人を失った悲しみは、人間でも神様でも同じなんだ。

……僕は絶対にあの堕天使を許さない。例えセレナが仇を望んでいなくても、僕のけじめとしてあの堕天使を倒す。

「あ、お礼してない…」

第６５話　ロキの墓参り（後書き）

最近会話文が多すぎてこれを『小説』と呼んでいいのか分からなくなってきました。小説って会話文が少ないものですよね？少なくとも作者の今までの見解ではそうなのですが…それだと会話文の多い作者様に失礼ですし…どうなんでしょう？

第６６話　真実の想い（前書き）

所々おかしくなった気がする…まあ、広い心で読んでいただけたら幸いです。

第６６話　真実の想い

～～～ブルー寮・ロキサイド～～～

「クッ……うわあああああああ！……ハァ…ハァ……なんだ夢か」

僕が見ていた夢は…セレナか。……セレナって…一体誰なんだ…？

…つい最近、そのセレナという女に縁がある場所に行った気がする

……ダメだ、思い出せない。

「ロキか。随分とうなされていたようだな？」

「なんだ、オーディンか。忌々しい夢を見ていたんだよ」

「……自分の心を忘れるというのか」

「それが僕の選択した道だ。例えオーディンでも、僕の選んだ道は変えられないよ。……もう僕は、何を忘れたのかすら思い出せなくなった」

「お前は、本当になぜテスタロッサとどこへ行ったのか分からないのか？」

「しつこいよ。本当にわからないんだ。…ヒャッハッハハハハハハ…皮肉なものだよね。自分の死んだ恋人と瓜二つの人間と一緒に、どこかに出かけるなんて」

でも、本当にどこに出かけていたんだ?覚えているのは…金のリンゴと花束だけ…花束?なんで僕は花束なんか持ってるんだ?

「クッ…僕は少し夜風に当たってくる。まだ11時だからね」

「気をつけるのだぞ?」

そんなことは言われなくても分かってる。僕は返事をしないで部屋から出る。

~~~ブルー寮、屋根の上・ディスペアサイド~~~

……あれはロキ?どこへ行く?ロキには悪いが、尾行させてもらおう。

ロキが夜中に外に出るのは珍しいことではない。しかしあの表情…

~~~森の中・ロキサイド~~~

今僕は間違いなく1人だ。ディスペアは夜はいつもどこかへ行く。スクルドと一緒にいるのは最近は昼間だけだ。オーディンはいつも何やってるか分からないし、トールは毎日デュエルの日々。

「ヒャッハハハハハハハ!」

悩んでるのは僕だけか。できればディスペア達に相談したいところだけど、こんなくだらないことで毎回相談なんかしていられない。ディスペア達に迷惑がかかるだけだ。

「こんな時間にどうしたの？」

「最近お前とよく会うね。もしかして狙ってるのかな？テスタロッサ。」

まあ、狙われようが告白されようが興味ない。断るだけだ。

「ち、違うよ！」

「ふ～ん。でも、僕はお前に話したいことがあるんだ。僕は1度だけお前と出かけた。でも僕は、どこに出かけたか憶えてない。お前は一体僕と一緒にどこに行った？」

「本当に覚えてないの？……その…お墓だよ」

「…墓？」

その単語を聞いた瞬間、頭の中に知らない記憶が流れ込んでくる。そして、僕の中に知らない『何か』が、いや、元は知っていたけれど、今は忘れている『何か』が僕の中に蘇ってくる。しかし、それは僕の今所持しているカードに吸い込まれてしまった。

「クッ…冗談じゃない！僕は…僕は墓になんて行っていない！デュエルだ、テスタロッサ！墓になんか行っていないことを証明してやる！」

「ロキ…分かった！」

これがロキにできる私からのお礼。ロキの苦しみと悲しみを少しでも和らげる！これだけが、今の私にできるロキへのお礼！

悩みがあるのなら、我に相談すればいい物を…ロキはなぜ我に、我らに相談をしない？それほどまでに深い何かがあるのか？

「「デュエル」」

「ヒャッハハハハハハハ！僕のタァーン！僕は魔法カード『感情破棄』を発動！このカードは自分の手札を3枚捨てて、デッキから『過去の忘却』を手札に加える！そして魔法カード『過去の忘却』を発動させる！このカードは過去の出会い…つまり、墓地のモンスターカードを3枚除外して発動できる！デッキから『虚無龍（ヴァニティー・ドラゴン）』を特殊召喚する！ヒャーッハハハハハハハ！」

「……。」

これが今のロキの心の象徴…我にはこの禍々しい龍がどれほどの悲しみと苦しみを抱いているかが分かる。究極神すらも共鳴するほどの悲しみ…ロキは一体何を思い苦しんでいるというのだ？……テスタロッサのあの表情…テスタロッサはロキがなぜ苦しんでいるか分かっているのか？

「これが今のロキの想いなんだね。でも、それは本当の想いじゃなくて、まやかしの想いなんだよ？」

「ヒャーッハハハハハハ！この僕がまやかしに惑わされてる？この虚無龍は、今の、ディスペア達がいない時の、たった１人ぼっちの時の僕の本当の心だ！

虚無龍の効果、発動！自分の手札を全て捨てることで、デッキから『未来の欲望』を手札に加える！そしてこのカードをセットして、僕はターンエンド！」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
虚無龍　攻撃力３０００
伏せカード×１

想いが無い力はとても脆いんだよ、ロキ！

「私のターン！私はＢＦ－疾風のゲイルを召喚するよ！ゲイルの効果を発動！虚無龍の攻守を半分にするよ！」

「キヒャッハハハハ！虚無龍の効果発動！デッキからモンスターカードを１枚除外して、このカードが受ける魔法・罠・モンスター効果を無効にする！」

……あれが虚無龍…これから無数にある『出会い』をすて、『自らの脆い心を守る』…あのカードには、ロキの負の感情が積み重ねら

れている…今更あのカードを葬ったところで、ロキの性格が昔に戻るわけではないだろう。しかし、負の感情を晴らしてやることはできる。そして、あのカードを倒せなければロキは墓参りの記憶の輪廻から解放されることはない。……あのカードを出してデュエルするのは何か切欠があった時のみ。テスタロッサがその切欠を創ってくれたようだな。

「それなら私は、ＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚！黒槍のブラストで、虚無龍を攻撃！ブラック・スパイラル！」

「ヒャッハッハハハハ！虚無龍の効果発動！デッキから魔法または罠カードを１枚除外することで、このカードへの攻撃宣言を無効にする！僕はデッキから『悲しみの弾丸』を除外！これで虚無龍への攻撃は無効だ！ヒャッハハハハハ！残念だったね」

くっ…攻撃が通らない…まるで、今のロキの心みたいに…自分以外のすべてをシャットアウトしてくる…

虚無龍か。あのモンスターを倒すのには、骨が折れるな。例え三極神でもそう簡単には倒せまい。

「私はカードを１枚伏せてターンエンド」

フェイト
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド

ＢＦ－黒槍のブラスト　攻撃力１７００
ＢＦ－疾風のゲイル　攻撃力１３００
伏せカード×１

「僕のターン！僕は手札から魔法カード『虚無感』を発動！自分の墓地のカードを全て除外して、虚無龍の攻撃力を１０００ポイントアップだ！そして墓地に送られたこのカードは除外される」

虚無龍　攻撃力３０００→４０００

「虚無龍でゲイルを攻撃！ヴァニティー・ブレス！」

「きゃあああああ！」

フェイト　ＬＰ４０００→１３００

「ヒャーハハハハハ！」

「くっ…トラップ発動『ブラックフェザー・インパクト』！ロキ、このカードの効果を無効にすることはできないよ！このカードは私のフィールド上に『ＢＦ』と名のついたモンスターが２体以上存在して、相手の攻撃で攻撃力が一番低い『ＢＦ』が戦闘で破壊された時だけ発動できるんだ！
相手フィールド上のモンスター１体を選択して、戦闘破壊扱いで破壊する。さらに、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「そうはさせない！この瞬間、速効魔法『未来の欲望』を発動！このカードは自分フィールド上と手札、墓地にこのカードと虚無龍だけが存在する時のみ発動できる！虚無龍がフィールドを離れるとき、

その虚無龍を破壊して除外する！そしてデッキから『記憶の龍　メモリーズ・ドラグーン』を特殊召喚する！」

ロキは虚無龍以外にもまだあのようなモンスターを…あのモンスターをフィールドから離すことができれば、ロキの空白の時間は戻ってくるようだな。

「ク…セレナ…！」

テスタロッサ、頼むぞ。記憶の龍を倒し、ロキの記憶を取り戻してやってくれ。ロキにとってはつらい記憶だろうが、それでも必要なものだ。我には最近のロキは見るに堪えなかった。

「ぼ、僕はこれでターンエンド…テスタロッサ…こいつを、記憶の龍を倒してくれ…何か、思い出せそうなんだ…！」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
記憶の龍　メモリーズ・ドラグーン　攻撃力５０００

「私の…ターンッ！…！ロキ、行くよ！私は永続魔法『黒い旋風』を発動するよ！そして、ブラストを生贄にしてＢＦ－暁のシロッコを召喚！黒い旋風の効果発動！『ＢＦ』の通常召喚に成功した時、そのモンスターよりも攻撃力の低い『ＢＦ』１体を手札に加える！

私が加えるのは2枚目のブラスト！そして魔法カード『死者蘇生』を発動して、墓地から黒槍のブラストを特殊召喚するよ。さらに手札から黒槍のブラストを特殊召喚！
最後に、暁のシロッコの効果を発動！ブラストに、他のＢＦの攻撃力を加算する！これでブラストの攻撃力は５４００！ＢＦ－黒槍のブラストで記憶の龍　メモリーズ・ドラグーンを攻撃！ブラック・スパイラル！」

「…メモリーズ・ドラグーンは、フィールドを離れた時、そのコントローラーに５０００ポイントのダメージを与える。…テスタロッサ、礼を言うよ。全部思い出せた。今までの墓参りの時のことも全部…僕は、悲しみのあまり感情を忘れようとしていたんだ…」

「……ロキ。悲しみに捕われてはならない」

「ディスペア！？いつからそこに！？」

「最初からずっといた…テスタロッサ、ロキを闇から解放してくれたこと、今回は感謝する」

「ううん。これで私も、あの時のお礼ができたから」

「ヒャッハハハハハ！……まだお礼とか言ってたんだ。僕としては、墓参りの時にすでにしてもらったつもりなんだけどね」

性格は戻らないんだ…。

「…すまなかった…ロキ。そこまで深い負の感情に縛られていたというのに、相談に乗ってやれなかった」

「気にすることなんてないよ。元々僕から言ってなかったしね。…まあ、次から何かあったら必ず言うよ」

……是非そうしてくれ。我らは永遠の友。相談に乗れない方が我らにとっては悲しいことだ。

「…さあ、帰るぞ、ロキ」

我が起こしておいたオーディンとトールが待っているだろうからな。

第６６話　真実の想い（後書き）

ようやく、第１のシリアスから抜けられた…たった２話なのにここまでつらいとは思わなかった…難しさで。

第６７話　月１試験２　明日香ｖｓオーディン（前書き）

月１試験の２回目です。ちなみに今まではずっとモブキャラとデュエルをしたことになってます。

第67話　月1試験2　明日香ｖｓオーディン

～～～デュエルアカデミア校舎・デュエル場～～～

「オーディン、お前の実技テストはまだか？」

「わたしはまだだ。しかしディスペア、その輪は一体どうした？」

わたしが言ったのは、アポリアが付けていたあの輪のことだ。ディスペアはあの輪は持っていなかったはずだが…

「我が前に、究極神を召喚した直後に現れた。この輪は何故か外すことができない」

それは大変だな。だが、それはディスペアが完全に究極神を使いこなしているのと同意義だ。自らを創った3体の究極神を逆に使いこなすとはな。ちなみに、輪の色は白金だ。ディスペアの殆どの部分が黒いのと、背が高いため、かなり目立つだろう。

「我の実技は終わったから、帰らせてもらうぞ。スクルドの機嫌を損ねたくはないのでな」

さすがは究極神とスクルド至上主義だ。

『天上院明日香さんとオーディン君、デュエル場に上がって下さい』

ようやくわたしの番か。

「わたしの相手がお前とはな。少し驚いた」

「まさか私があなた達の1人とデュエルすることになるなんて思わなかったわ」

「「デュエル」」

「わたしのターン。わたしはグランド・コアを守備表示で召喚。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

オーディン
LP4000
手札×4
フィールド
グランド・コア　守備力0
伏せカード×1

「私のターンドロー！」

あのモンスターは確か、効果で破壊されるとデッキと手札、墓地から5体のモンスターを特殊召喚できる。それなら、戦闘で破壊すればいい！

「私はブレード・スケーターを攻撃表示で召喚！ブレード・スケーターでグランド・コアを攻撃！アクセル・スライサー！」

「グランド・コアの効果発動。このカードは1ターンに1度、戦闘では破壊されない」

しまった！そんな効果があったなんて…

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドよ」

明日香
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
ブレード・スケーター　攻撃力１４００
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは魔法カード『希望の未来』を発動。このカードが発動されてからわたしのスタンバイフェイズで数え3ターン内に、わたしの墓地からモンスターが特殊召喚された場合、わたしはカードを2枚ドローする。3ターン内に墓地からモンスターが特殊召喚されなかった場合、わたしは墓地のモンスターカードを1枚手札に加えることができる。
さらにわたしはカードガンナーを守備表示で召喚する」

「カードガンナー！？」

あのカードは十代が使っていた…自分のデッキからカードを3枚で墓地に送って、エンドフェイズまで1枚につき攻撃力を５００ポイントアップさせるモンスター…でも、オーディンは守備表示で召喚した…

「カードガンナーの効果を発動。わたしのデッキの上から3枚を墓地へ送り、エンドフェイズまで攻撃力を１５００ポイントアップ」

なんでオーディンは守備表示なのに効果を発動したの！？

送られたのは『ボム・ブラスト』『ツイン・ボルテックス』『聖なるバリアー ミラーフォース ー』の３枚…しかし何故驚く？わたしは何か驚くようなことをしたか？

「わたしはカードを１枚伏せ、ターンエンド」

オーディン
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
グランド・コア　守備力０
カードガンナー　守備力４００
伏せカード×２

「私のターン！」

オーディンのフィールドには１ターンに１度戦闘で破壊されず、効果で破壊された場合５体のモンスターを特殊召喚するグランド・コアと、破壊された時にカードを１枚ドローできるカードガンナーがいる…

「私はエトワール・サイバーを召喚！ブレード・スケーターとエトワール・サイバーでグランド・コアを攻撃！」

「わたしのグランド・コアを戦闘で破壊するとは…やるな。だが、トラップ発動。永続トラップ『リミット・リバース』。このカードは自分の墓地の攻撃力１０００以下のモンスター１体を攻撃表示で復活させる。そしてそのモンスターが守備表示になった時、そのモ

ンスターを破壊する。
わたしの墓地からモンスターが蘇生したことで希望の未来の効果が発動し、わたしはカードを2枚ドローする」

「私はこれでターンエンドよ」

明日香
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
ブレード・スケーター　攻撃力１４００
エトワール・サイバー　攻撃力１２００
伏せカード×１

これじゃあグランド・コアを守備表示にするだけで破壊されて、モンスターが特殊召喚されてしまう…私はあのモンスターの効果で特殊召喚されるモンスターがどんな効果を持っているのか知らない…一体どんな効果を持っているのかしら？

「わたしのターン。わたしはグランド・コアを守備表示に変更。そしてリミット・リバースの効果によって、グランド・コアが破壊され、効果を発動。自分フィールド上のモンスターをすべて破壊し、デッキ・手札から『機皇帝グランエル∞』『グランエルＴ』『グランエルＡ』『グランエルＧ』『グランエルＣ』を特殊召喚する。合体せよ、機皇帝グランエル！」

カードガンナーが破壊され、機皇帝グランエルとパーツが現れる。
そして、機皇帝グランエルがパーツと合体した。

「カードガンナーの効果により私はカードを1枚ドロー。機皇帝グ

ランエルの攻撃力・守備力は自分のライフと同じになる！」

機皇帝グランエル∞　攻撃力０→４０００

「こ…攻撃力４０００ですって…！？」

「機皇帝グランエルで、ブレード・スケーターを攻撃。グランド・スローター・キャノン！」

「と、トラップ発動『ガードブロック』！ダメージを０にして、カードを１枚ドロー！」

わたしの機皇帝グランエルの攻撃をかわすとは…ならば！

「わたしはこの伏せカードを発動させる。トラップカード『インフィニティ・スローター』。このターン機皇帝本体の攻撃が無効にされたかしなかった場合、その機皇帝のパーツの攻撃力の合計分相手にダメージを与える。

わたしの機皇帝グランエルのパーツの攻撃力の合計は３０００ポイント。よって天上院明日香！貴様に３０００ポイントのダメージを与える！」

「きゃあああああああ！」

明日香　ＬＰ４０００→１０００

こ、効果ダメージで３０００ポイントもダメージを与えるなんて…

３０００ポイントなんて、あの青眼の白龍の攻撃力と同じなのに…

「わたしはカードを２枚伏せターンエンドだ」

オーディン
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
機皇帝グランエル∞　攻撃力４０００
グランエルＴ　攻撃力５００
グランエルＡ　攻撃力１３００
グランエルＧ　守備力１０００
グランエルＣ　攻撃力７００
伏せカード×２

「私のターンドロー！」

私のライフはわずか１０００ポイント…それに対して、オーディンのライフは４０００ポイント。しかも、攻撃力４０００の機皇帝グランエルまでいる。でも、その攻撃力はオーディンのライフと同じ。オーディンのライフを削れば、グランエルの攻撃力もダウンする。

「私はエトワール・サイバーでグランエルＴを攻撃よ」

「トラップ発動『自爆機皇』。機皇帝のパーツが攻撃対象になった時に発動できる。その戦闘のダメージ計算後、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

「なっ！？」

オーディン　ＬＰ４０００→３１００
機皇帝グランエル∞　攻撃力４０００→３１００

グランエルTが自爆して、ブレード・スケーターを巻き込んで消えた。

「それなら私はサイバー・ジムナティクスを攻撃表示で召喚する」

「天上院、先に言っておいてやる。機皇帝グランエルを効果の対象にすることはできないぞ」

…もっと早く言って欲しかったわね。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

明日香
ＬＰ１０００
手札×３
フィールド
サイバー・ジムナティクス　攻撃力８００
伏せカード×２

「わたしのターン。わたしは機皇帝グランエルで、サイバー・ジムナティクスを攻撃！グランド・スローター・キャノン！」

「トラップ発動『ドゥーブル・パッセ』！機皇帝グランエルの攻撃をダイレクトアタックにして、サイバー・ジムナティクスでダイレクトアタックする！」

説明が違うような気がするが…アニメ補正というものか？

「そして私はもう1つの伏せカード『ダメージ・ゲイン』を発動させる！ダメージ・ゲインは相手のダイレクトアタックで受けるダメ

ージを０にして、無効にしたダメージ１０００ポイントにつきカードを１枚ドローする。私が無効にしたのは３１００ポイント。だから３枚ドロー。さあ、サイバー・ジムナティクスの攻撃を受けてもらうわ！」

「この程度、どうということはない」

オーディン　ＬＰ３１００→２３００
機皇帝グランエル∞　攻撃力３１００→２３００

不思議だな。月１試験ごときで、わたしがここまで真剣にデュエルするとはな。

「そろそろ終幕と行こうではないか。魔法発動『機皇終焉』。自分フィールド上の機皇帝とそのパーツを破壊し、１枚につき３００ポイントのダメージを与える！」

機皇帝が大爆発を起こして、明日香を巻き込んだ。

「そ、そんな…きゃあああああああ」

明日香　ＬＰ１０００→－１２００

こ、効果ダメージだけで負けた…強い…十代も強いけど、この人たちは十代の比じゃない。

～～～その頃、ブルー寮・ディスペア達の部屋～～～

「フフフフフフフフ…」

第６７話　月１試験２　明日香ｖｓオーディン（後書き）

明日香のデッキがいまいちわからないのでいろいろ改変してしまった…後悔はしていない。それよりも、性格をぶっ壊してしまっていないか心配です。

第６８話　最悪のクリスマス　～地縛リスマス～（前書き）

クリスマスはＢＡＤにしてしまいましたが、お正月はＧＯＯＤにします。
葦切様、投稿していただいたオリカは次回辺りに使わせていただきます。今回は執筆の合間に投稿していただきましたので、デュエル内容を変更することができませんでした。

第６８話　最悪のクリスマス　～地縛リスマス～

「ふざけるな！もう１度言え！」

「だから、地縛神が盗まれたのだ。ディスペア」

「そんなことがあってたまるものか！盗まれた地縛神は、実際に人間の魂を吸収する特殊な地縛神なのだぞ！」

そもそも、何故地縛神をただテーブルの上に放置しておいたのだ！

「ヒャーハハハハハ！今日はクリスマスなのにね。地縛神が出てくるとか、アニメそのまんまじゃん」

「黙れ、ロキ。そんな悠長なことを言ってはいられんのだ！急いで探しに向かうぞ！」

召喚されれば、学園の人間の殆どの魂が地縛神に奪われる。そして、我々が所持する地縛神は、吸収した魂を解放することはない。運の悪いことに、パーティーは外で行っているところもある。つまり、見られる可能性がある。さらに地縛神の心臓部に近ければ近い程吸収される人間の魂は多くなる。そして、この島の大きさでは、この島全体が吸収範囲だ。

～～～イエロー寮の森～～～

「これさえあれば、社長に、海馬瀬人に復讐できる！」

「残念だが、そうはいかんぞ」

「なっ！？」

「悪いが、地縛神は返してもらう」

「そうはいかない、俺はこのカードで海馬に復讐するんだ…研究所所長の俺を、一気に一般社員まで格下げしたあの男に！」

「ふぅん。それは貴様がその程度の屑だったという証拠だ」

「海馬！丁度いい、このカードの力でお前を葬ってやる！」

「ふぅん。貴様ごとき、この俺の足元にも及ばないということを教えてやる！」

「待て海馬、悪いが、デュエルは我としてもらう」

「何故だ！」

「奴は、いま青眼を遥かに超えるパワーを持つ暗黒の邪神…『地縛神』を持っている。地縛神をブルーアイズで倒すことは恐らくできはしない」

「邪魔をするな！なら、お前から片付けてやる！」

「「デュエル」」

…奴のデッキには地縛神が眠っている…召喚される前に決着をつけなければ…

「我のターン！我は極星獣タングリスニを守備表示で召喚する。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
極星獣タングリスニ　ＤＥＦ８００
伏せカード×１

「俺のターン。俺はダブルコストンを攻撃表示で召喚！ダブルコストンで極星獣タングリスニを攻撃だ！」

「極星獣タングリスニが戦闘によって破壊された場合、フィールド上にレベル3の極星獣トークンを2体特殊召喚する。さらにトラップ発動『極星宝レーヴァテイン』。このターン、モンスターを戦闘で破壊したモンスター1体を選択し、そのモンスターを破壊する。そしてこのカードの発動に対し魔法・罠・モンスター効果は発動できない」

「ダブルコストンが…ならカードを2枚伏せてターンエンドだ」

ＫＣ社員
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
伏せカード×２

「我のターン！我はチューナーモンスター、極星獣グルファクシを召喚する！」

「させるかよ！トラップ発動『落とし穴』！攻撃力１０００以上のモンスターが召喚された時、そのモンスターを破壊する！残念だったな！」

こいつ、シンクロ召喚を知っているな。さすがに研究所所長だっただけのことはあるか。だが、グルファクシを葬ったぐらいでいい気になるなよ。

……ん？奴のデッキから7枚の反応？地縛神か。

「う、うわあああ、な、何だこれは！？」

バカな…7枚の地縛神の力が共鳴している…あのカードは…

「8枚目の…地縛神だと？」

我が見たのは、7枚の地縛神が円形に並び、その中心にカードが誕生した光景。そして、地縛神は再びデッキに戻った。

「そうか、そういうことか！これで俺は誰にも負けない！ハハハハハ！」

「クッ…地縛神の召喚などさせはしない！魔法カード『死者蘇生』を発動！蘇れ、極星獣グルファクシ！レベル３の極星獣トークン２体に、レベル４の極星獣グルファクシをチューニング！光臨せよ！星界の神の１体、極神皇トール！」

オーディン達は新たな三極神の存在を知っている。驚いたのは社員だけだった。海馬はデュエルディスクの記録を通して知っているらしい。

「極神皇トールでダイレクトアタック。サンダー・パイル！」

サンダー・パイルは阻まれることなく直撃した。その瞬間、轟音が鳴り響いた。

「うわあああああ！…なんでこんな痛みが！？」

KC社員　LP４０００→５００

「ターンエンドだ」

ディスペア
LP４０００
手札×３
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００

「俺のターン！俺は伏せカードのリビングデッドの呼び声を発動して、ダブルコストンを復活！さらにフィールド魔法『地縛神の聖地』を発動する」

地縛神の聖地…？そんなカード我らは所持していなかったはず…先程の現象が起こった時、誕生したカードは１枚ではなかったのか？

「どうしたの？さっき大きな音がしたけど…？」

こんな時にリリカルエンジェルスか…！我ら神々は自分の魂を守ることができても、他の人間の魂を守るのはせいぜい3～4人が限度…それどころか、今現在デュエルを続行している我は魂の防御などままならない。

「ディスペア…と、ロキに、みんな…一体、何やってるの？」

「な、何で来たんだ、お前ら！」

「ろ、ロキ？どうしてそんなに慌ててるの？」

「行くぞ！ダブルコストンを2体分の生け贄にして、降臨せよ！地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ！」

地縛神の心臓が空中に現れ、鼓動を始める。

「！！？」

「早く逃げろ、お前ら！」

このままじゃこいつらが吸収される…僕としては避けたいね。少なくともテスタロッサには恩がある。

「これが…地縛神…」

「そんなことを言っていないで海馬、お前も逃げろ！」

いよいよ吸収が始まった。もう逃げても無駄だ。

「ク…ここまでか？」

その時…

「……え？」

「どういうこと？」

「私達のエンジェルが…ディスクも通してないのに召喚された？」

「俺の白いカードも…」

はやて、フェイト、なのはの天使が現れ、そして海馬の持つ白いカードが強く光った。そして、地縛神は魂を吸収せずに召喚された。

だが、デュエルはまだ続いている。ディスペア、地縛神を取り戻してくれ。

「地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕの召喚に成功したことで、フィールド魔法『地縛神の聖地』の効果が発動する。召喚された地縛神の攻撃力分のライフを回復する。そして、地縛神の聖地は地縛神がいる限りフィールドを離れることはなく、効果を無効にすることもできない！」

ＫＣ社員　ＬＰ５００→３５００

クッ…文字通り地縛神の聖地か…実質ライディングデュエル同様、地縛神は無敵に近い性能を誇る。

「行け、地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ！ダイレクトアタックだ！」

やはり来るか！

「ええ？攻撃力３０００でダイレクトアタック！？フェイトちゃんの切り札と同じレベルの性能だよ！？」

「高町、地縛神はその程度じゃないんだ。フィールド魔法が無ければエンドフェイズに破壊されるけど、フィールド魔法がある限り地縛神は魔法と罠の効果を受けず、相手モンスターに攻撃されない。さらに、それぞれの地縛神に特有の効果がある」

「そ、そんな…」

次の瞬間、Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕの巨大な手がディスペアを叩きつける。

「――――――――――――――――――！」

ディスペア　ＬＰ４０００→１０００

高町たちは一瞬目をふさいだ。

「そんなことでビビってたら、自分達の任務も果たせないよ」

「ロキ君、仲間がやられたんだよ！？」

「君の眼はおかしいのかな？良く見てみなよ。最高神の王が、あの程度でやられると思う？」

砂煙がはれると、そこには無傷のディスペアが何事もなかったかのように立っていた。

「ふん。この程度で、我を倒せるとでも思ったのか？」

ディスペアの輪が光っているっことはディスペアはアレを使ったんだ。ヒャーッハハハハハ！アレを使えば、究極神以外のどんな攻撃も効かないからね。

「スクルド、結界を張っといて。僕達に被害が来たらたまらないからね」

「うん！」

スクルドは時の杖を構えて防御結界を創った。

「私達がやってもいいのに」

「君達３人の力を合わせても、スクルドの防御力を超えるなんてできないよ。オーディンだって超えることができないんだから」

スクルドの防御魔法なら、ディスペアの結界魔法と同等の防御力を誇る。まあ、ディスペアのあの輪の防御力には遥かに及ばないけど。

「ターンエンドだ」

ＫＣ社員
ＬＰ３５００
手札×２
フィールド
地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ　攻撃力３０００
地縛神の聖地

「我のターン。我は極神皇トールの効果を使用する。相手フィールド上のモンスターの効果を、エンドフェイズまで無効にする！エフェクト・アブソーバー！！」

「なっ！？Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕが…」

「行け、極神皇トール！Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕを粉砕せよ！サンダー・パイル！」

トールの鉄鎚が、Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕの頭に直撃して、Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕは地に沈んだ。

ＫＣ社員　ＬＰ３５００→３０００

「我はカードを1枚伏せターンエンド。いくら地縛神を召喚しようが、極神皇トールの前には無意味！」

ディスペア
ＬＰ１０００
手札×３
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×１

「俺のターンドロー！…俺は永続魔法『地縛結界』を発動するぜ！このカードは手札の地縛神を召喚する時、その地縛神の攻撃力分のライフを払うことで、その地縛神を生贄なしで召喚できる！」

成程。死皇帝の陵墓は発動できないからな。さらに、地縛神の聖地

とのコンボにより実質ノーコストで地縛神を召喚できる。

「さらに永続魔法『地縛蘇生』を発動。このカードの発動時に、手札を全て捨て、デッキから『地縛神』と名のついたモンスターを3体墓地へ送る。俺が送るのは『地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ』と『地縛神Ｃｃａｒａｙｈｕａ』と『地縛神Ｃｕｓｉｌｌｕ』だ。このカードがフィールド上に存在する限り、自分のフィールド上にモンスターが存在せず相手フィールドにのみカードがある場合、1ターンに1度墓地から地縛神1体を通常召喚扱いで特殊召喚できる。さらに、地縛蘇生がある場合、ドローする代わりにデッキからレベル10の『地縛神』を1体か『地縛』と名のついた魔法・罠カードを手札に加えることができる」

これで、奴のフィールドから地縛神が途切れることが無くなったか。一体何の地縛神を蘇生させるつもりだ？

「俺は地縛蘇生の効果で地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを通常召喚扱いで特殊召喚する！さらに、地縛神の聖地の効果で、ライフを2500ポイント回復するぜ！」

Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ…手札コストの時に落ちていたか。

ＫＣ社員　ＬＰ3000→5500

地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕは自身の効果以外でフィールドを離れた時、相手フィールド上の表側表示モンスターをすべて破壊し、1体につき800ポイントのダメージを与える効果がある。さて、どうしたものか。

「行け、地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ！ダイレクトアタックだ！」

「トラップ発動『極神結界』。自分フィールド上に星界の三極神が1体でも存在すれば、このターンのバトルフェイズを終了し、自分のライフを星界の三極神の合計値分回復する。よって我のライフは３５００ポイント回復する」

ディスペア　ＬＰ１０００→４５００

「ちっ。ターンエンドだ」

ＫＣ社員
ＬＰ５５００
手札×０
フィールド
地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ　攻撃力２５００
地縛蘇生
地縛結界
地縛神の聖地

「我のターン、我は魔法カード『極神輪』を発動する。このターン、星界の三極神が1体でもシンクロ召喚された場合、我はその星界の神の攻撃力分のライフを回復する。
そして、極星天ヴァルキュリアを召喚。このカードの召喚に成功した時、手札を2枚墓地へ送りレベル4、攻守１０００の『エインヘリアル・トークン』２体を特殊召喚する」

５Ｄ’ｓ版のヴァルキュリア、組み込んでおいて正解だったな。

「レベル4のエインヘリアル・トークン2体に、レベル2の極星天ヴァルキュリアをチューニング！シンクロ召喚！光臨せよ、古より

伝わりし神話の最高神、極神聖帝オーディン！」

地縛神は高層ビルぐらいの大きさがある。しかし、極神聖帝オーディンは山よりも高い身長を誇る。地縛神が小さく見えるほどに高い。

「極神聖帝オーディンのシンクロ召喚に成功したことで極神輪の効果が発動し、我はライフを４０００ポイント回復する」

ディスペア　ＬＰ４５００→８５００

「凄い…」

「ロキも十分すごいけど、ディスペアは…違う。次元が違う。私たちみたいに、善と悪が分かれている力じゃない…あれは『良い事』や『悪い事』なんて物を知らない、純粋な力だと思う」

「まあ、納得やな。究極神なんて、明らかに善悪関係なく破壊してるしなぁ…」

「ヒャハハハハ。僕達の王はあの程度じゃ負けない。君達３人のエンジェルなら、まあいい所まで持って行けるとは思うけど。というか、その言い方だと僕が神じゃないみたいじゃん」

そういえばテスタロッサは、前に１度だけディスペアのリアルファイトを見たことがあったね。その時のディスペアは究極神で敵を一掃しちゃったけど。相手の顔が絶望の果てにたどり着いてたな。でも、なんでテスタロッサはディスペアの力の本質がわかったんだろう？

「ロキ君と同じくらいの実力を持つ人が、私達の世界には3人いるんだ」

ああ、転生者の事か。まあ力を与えたのがゼウスだから、僕と同じくらいの力があっても不思議じゃないね。それでも、神の補正が効く僕の方が有利だけど。

「我は極神皇トールの効果を発動し、地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕの効果を無効にする。
極神聖帝オーディンで、Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

オーディンが放った雷がＡｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを焼き尽くし、Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕは塵になって消えた。

ＫＣ社員　ＬＰ５５００→４０００

「この瞬間、Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕの効果発動だ！」

だが、その塵がトールとオーディンに向かって飛び、2体を破壊した。

「Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕがフィールドを離れた時、相手フィールドの表側表示モンスターをすべて破壊して、1体につき８００ポイントのダメージを与える！」

ディスペア　ＬＰ８５００→６９００

我は輪の力を使って、自分の周りに球体のバリアを創った。この輪の力は究極神の力、この究極の防御壁を地縛神ごときが突破できるわけが無い。

「我のエンドフェイズ、破壊されたトールとオーディンは蘇る」

「な、なんだと!?」

まあ、初めて見た人間の第一の感想はその反応だろうな。

「さらに、この効果で復活した場合、トールは相手に８００ポイントのダメージを与え、オーディンの効果で我はデッキからカードを１枚ドローする」

「ぐわあああ!」

ＫＣ社員　ＬＰ４０００→３２００

ディスペア
ＬＰ６９００
手札×１
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇トール　攻撃力３５００

「俺のターン、地縛蘇生の効果でデッキから永続魔法『地縛治癒』を手札に加え、発動!このカードは自分の手札が０の時に地縛神の召喚に成功した場合、その地縛神の攻撃力か守備力分のライフを回復して、デッキから地縛神を１体墓地へ送れる」

またライフ回復の永続魔法か。しかし、地縛神を墓地へ送る意味はあるのか？地縛神はフィールドに１体しか存在できない。必然的に、何体墓地へ送ったところで蘇生できるのは１体になる。

「俺は地縛蘇生の効果で地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを特殊召喚！そして、地縛聖域と地縛治癒の効果でライフを５０００ポイント回復する！」

ＫＣ社員　ＬＰ３２００→８２００

「さらに、地縛治癒のもう１つの効果でデッキから地縛神Ｕｒｕを墓地へ送る！」

これで奴のデッキに残るのは地縛神Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａともう１体の地縛神…

「地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕでダイレクトアタックだ！」

Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕが巨大な翼をはばたかせて衝撃波で攻撃してくるが、衝撃波は我のバリアによって弾かれた。しかし、何故Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕなのだ？Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａを召喚し、我のライフを１にするという選択肢もあるはずだ。

ディスペア　ＬＰ６９００→４４００

「俺はこれでターンエンド」

ＫＣ社員
ＬＰ８２００

手札×０
フィールド
地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ　攻撃力２５００
地縛蘇生
地縛治癒
地縛結界
地縛神の聖地

「我のターン。魔法カード『極星壁』を発動する。このターン、我のフィールド銃に存在する星界の三極神は、相手の効果では破壊・除外されなくなる。
極神皇トールの効果を発動し、Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕの効果を無効にする。
極神皇トールで地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを攻撃。サンダー・パイル！」

「ぎゃあああああ！」

ＫＣ社員　ＬＰ８２００→７２００

Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕが塵を飛ばしてくるが、トールとオーディンの周りにバリアが現れ弾かれた。

「オーディンでダイレクトアタック！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

オーディンがグングニルで社員を突き刺した。しかし、社員は何とかギリギリのところで回避した。…衝撃は受けたようだが。

ＫＣ社員　ＬＰ７２００→３２００

「我はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４４００
手札×０
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×１

「俺のターン、ドローの代わりにデッキから永続魔法『地縛洗礼』を手札に加えて発動する！このカードが発動した時、ライフを１００ポイント回復し、デッキから『地縛神』１体を手札に加える。俺が加えるのは当然…8体目の地縛神！」

ＫＣ社員　ＬＰ３２００→４２００

「そして地縛蘇生の効果により、地縛神Ｕｒｕを召喚！ライフを６０００ポイント回復する」

ＫＣ社員　ＬＰ４２００→１０２００

ライフポイントが１００００を超えたか。だが、いくらライフがあろうと相手のライフを0にしなければ勝利は来ない。デッキ切れになるまでには必ず決着がつく。

「行くぞ！俺はフィールドと墓地から7種類の地縛神を除外し、フィールド上の『地縛』と名のついたカード5枚を墓地へ送り、１０００ポイントのライフを払う！」

KC社員　LP10200→200

10000ポイントのライフを払い、地縛神を除外するだと!?

「出でよ!地縛神スカーレッド・ノヴァ!」

スカーレッド……ノヴァ…だと?

地縛神スカーレッド・ノヴァ　攻撃力?

「地縛神スカーレッド・ノヴァの攻撃力は、常に相手のライフと同じ数値になる!」

地縛神スカーレッド・ノヴァ　攻撃力?→4400

「そして、スカーレッド・ノヴァはダイレクトアタックができる!」

「!!させるものか!トラップ発動『極星陣』!自分フィールド上の神1体を破壊し、相手のバトルフェイズを終了する!我は極神皇トールを破壊する!」

これでトールはエンドフェイズに蘇り、800ポイントのダメージを与える。これで我の勝利だ。

「ターンエンド」

「この瞬間極神皇トールが蘇生し、貴様に800ポイントのダメージを与える!これで終わりだ!」

「地縛神スカーレッド・ノヴァの効果発動。自分へのダメージを0

にする！」

ＫＣ社員
ＬＰ２００
手札×０
フィールド
地縛神スカーレッド・ノヴァ　攻撃力４４００

「我の…ターン。我は極神皇トールの効果を発動する！」

「地縛神スカーレッド・ノヴァの効果発動だ！スカーレッド・ノヴァが相手の効果を受けるとき、代わりに俺のライフを半分にできる！」

ＫＣ社員　ＬＰ２００→１００

「クッ」

ならばこれが最後の賭けだ…

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４４００
手札×０
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×１

「俺のターンだ。その伏せカードは怪しいからな。地縛神スカーレッド・ノヴァの効果を発動！1ターンに1度、相手フィールド上のカードを1枚、手札を捨てることで破壊できる！俺はその伏せカードを破壊」

「……かかったな。この瞬間、この伏せカード『極神の罠』の効果が発動する。このカードが破壊された時、自分フィールド上の星界の三極神を全て除外し、1体につき2500ポイントのダメージを与える。地縛神は我に返してもらうぞ」

星界の三極神（二極神）が次元のかなたに消え、その衝撃がKC社員を襲った。

「ぐううううあああああああ！」

KC社員　LP100→－4900

「俺は…うわあああああああああああ！」

逃げたな。ちょうどいい。地縛神は落としていったからな。

「ディスペア、やったね♪」

「ああ、スクルドもわざわざご苦労だったな」

「そんなことないよ。私は大丈夫」

ようやく片付いたか。学園が大騒ぎにならないうちに戻るとしよう。

第６８話　最悪のクリスマス　～地縛リスマス～（後書き）

なんというｇｄｇｄ…
次回こそは頑張ります。

第６９話　共闘！リリカルエンジェルス（前書き）

今回からストーリーがガン無視になります。まあ、このストーリーが終わったら、時系列的にクロノスｖｓナポレオン辺りのところから再開します。

第69話　共闘！リリカルエンジェルス

～～～ブルー寮・ディスペア達の部屋～～～

「最近、悪魔達の動きが活発になってきているそうだ」

「成程な。ならば、我らもこの世界での目的を果たしたら、別の世界に行くことになりそうだ」

「特に、魔力などがある世界は狙われやすい」

「ヒャーハハハハハハ！テスタロッサ達の世界危ないじゃん。ヒャハハハ！」

「私もさっきウルズから聞いてきたんだけど、ディスペアを倒すための何かが魔界で動き始めてるって…」

「そんなことは些細な問題、今の我が負けることなど殆どあり得ない」

確かに我を倒すための準備がどのようなものなのかは気になる。しかし、そんなものは現れてからたたきつぶせばいいだけの事。

『ディスペア君、助けて欲しいことがあるんだけど…』

突然高町から神の鏡での連絡が入る。前にロキがテスタロッサに渡

したものだ。

『なんだ？早く言ってもらおう』

『私達の切り札の『三天使』が盗まれちゃって…取り返してほしいんだけど…ダメかな？』

『カードの管理ぐらい自分で徹底しないからそうなるのだ。本来なら自分でやれ、というところだが、今我は暇だ。手伝ってやろう』

『ありがとう！じゃあ、今からそっちに行くね』

そう言った途端に通信は切れた。

「ロキ、どう思う？」

「多分悪魔の連中だと思うけどね。悪魔が復活して一番大変なのは僕達神々だからね。殆ど無限に近い数の世界を一つ一つ回って悪魔を封印しなきゃならないんだから」

全くだ。ある程度は人間だけで倒すことはできるが、中級の悪魔が出てきたら大抵の人間はやられる。

～～～5分後～～～

「お待たせ～」

「そんな軽いノリで大丈夫なのか？八神」

「ディスペア君達が協力してくれるんやから、解決したも同然や☆」

「他力本願乙」

「ロキ、相手にしているだけ無駄だ。高町、テスタロッサ、行くぞ」

「「え？ああ、うん…（（はやてちゃんどんまい））」」

～～～別世界・陸地～～～

反応だとこの辺りなんだがな。

「あ、あれ見て！」

高町が指さした方を見上げる。すると、そこには無数の悪魔が飛んでいた。

「へえ、やりがいありそうじゃん。久しぶりに、暴れようかな？」

「好きにしろ、ロキ。ただし、世界を壊すなよ？」

「そんなことわかってるよ。ヒャーッハハハハハ！」

多数の悪魔が向かってくるが、高町たちが迎撃する。しかし、それでは迎撃しきれずに我の方に悪魔が向かってくる。

「キーッヒャヒャハハハハ！最高神を殺せば、望みの願いがかな

うぜ～！」

そう言って剣を振りおろしてくる。

「ディスペア君！」

ディスペア君は無防備…！私のディバインバスターじゃ間に合わない！

「……落ちろ」

ドシャァァァァァァ！

「ギャアアアアアアア」

……！？今何が起こったの！？悪魔がディスペア君に剣を振りおろしかけたところで、いきなり悪魔が地面に落とされた！？

「その程度の単調な攻撃で我にダメージを与えることができるとでも思ったのか？直線攻撃など、我の重力操作魔法で簡単につぶせる」

重力操作魔法！？私達の世界の最強って呼ばれてる3人も使えないのに！？

「まあ、相手が悪かったな」

「ヒィィィィ！ゆ、許してくれ！」

「1度剣を向けた相手に許してくれだと?笑わせる」

ザンッッ!

「ギャアアアア!」

私は目をふさいだ。見たら多分、トラウマになると思う。

「なのは!危ない!」

なのはに向かって悪魔が…このままじゃ…

「全く、世話が焼けるね」

「え?…ロキ、君?」

ロキの腕には剣が2本刺さっていた。だが、ロキは…

「戦場で目をふさぐようなら、戦場になんか出てこない方がいいよ。それに、死体の真っ二つなんてよくある話だしね」

そう言いながら、何ともなさそうな顔で刺さっていた剣を抜いて砕いた。そして、その悪魔はロキの爆発魔法で消えた。

「確かにそうだな」

そういいながら我は固有ディスクで召喚した幻銃士で足止めをして、それを突破してくる敵は剣で斬る。

「みんな！私の魔法陣から急いで逃げて！」

「！！スクルドの合図だ。急いで離れるぞ」

「「「！？分かった！」」」

その次の瞬間……

ドオォォォォォォン！

轟音とともに、魔法陣の内側に雷が隙間なく降り注ぐ。

「だが、スクルドの神力はそろそろ限界…これ以上は我らだけで倒す」

「その通りだな。我の鉄鎚もいい加減敵を倒さなければ調子が衰えるからな」

「究極神…召喚するか？」

「究極神…」

ディスペア君が持つ最強のカード…僅かだけど、時空管理局の無限書庫にも情報があった。1体でも強力な力を持つけど、その最強の『究極神帝』が2体の究極神と共に現れた時、空間、時間、次元…ありとあらゆる存在を、一瞬のうちに消滅させる力を持ってる…でも、召喚には3体の生命と召喚者の命の半分が犠牲になる…はやて

ちゃん曰く『ＲＰＧで言うなら無理ゲー』。

「いや、究極神形態で召喚する必要はない。アレで十分だろう」

「そうか？ならば魔法発動『おろかな埋葬』。デッキから『ラーの翼神竜』を墓地へ送り、魔法カード『死者蘇生』を発動！蘇れ！ラーの翼神竜！」

究極神帝ラーと比べれば、エベレストと蟻くらいの差がありそうだけど、それでもあのラーの翼神竜…管理局基準でＥＸランクの魔力がある…

「ラーの翼神竜の効果を発動。ライフ１０００ポイントを生贄に捧げ、行け！ゴッド・フェニックス！」

炎の不死鳥が悪魔の密集地帯に向かう。回避が間に合うはずもなく、炎によって悪魔達は燃え尽きた。

「ヒャーッハハハハハハ！どうやら親玉のお出ましのようだね！」

ロキが指を刺した方向から、７ｍはある悪魔が向かってきた。

「グフフフフ。いかにも。この魔皇軍の中将の１人、ジースが貴様らを葬ってやる。そこの３人から頂いたこのカードを使ってな」

「あ、あれは！」

「私達のエンジェル！」

「このカードはデュエルをしなければ帰ってこないぞ？つまりわた

しをデュエル以外で倒してもこのカードが灰になるだけ。そしてこのカードはお前たちの精神とリンクしている！」

成程。つまりあの3枚のカードの消滅は高町たちの死を意味する。

「面白い。我が相手をしてやる」

「最高神の王か。ちょうどいい。お前をここで葬って、魔王様から褒美を頂く！」

固有ディスクを構える。すると、カードをセットする場所が無かったところに、黒いエネルギーでセットする場所が作られる。

「「デュエル」」

「では我から行かせてもらう。ドロー」

手札は悪くないが、グルファクシがいないな。ここは新しく入れたこのカードでどうにかするとしよう。

「我は極星獣タングリスニを守備表示で召喚する。カードを2枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
極星獣タングリスニ　守備力８００
伏せカード×２

「え？ライフが８０００？４０００じゃないの？」

「テスタロッサ。僕達神々の間では、ライフの基本値は８０００なんだよ。だから、悪魔と僕達神が戦うときは、ライフが８０００なんだ」

「ふ～ん…」

「わたしのターン。わたしは闇の兵士を攻撃表示で召喚。闇の兵士で極星獣タングリスニを攻撃する。ダークネス・スピア！」

「だが、極星獣タングリスニが戦闘破壊された時、フィールド上にレベル３の極星獣トークン２体を特殊召喚する。さらに２枚のトラップを発動。『神の桎梏グレイプニル』。このカードは１枚につき１体、デッキから『極星』と名のつくモンスターカード１枚を手札に加える。我が加えるのは極星霊リョースアールヴと極星霊ドヴェルグだ」

「わたしはカードを１枚伏せ、ターンを終了する」

「ほう。中将の割には前に襲ってきた将軍よりも強いんだな」

「何を勘違いしておる。前にお前たちのところに襲撃したやつは少将。わたしよりも下の位だ」

…どうやら、魔皇軍は我ら神々よりも圧倒的に兵力が高いらしいな。

ジース
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
闇の兵士　攻撃力２０００
伏せカード×１

「我のターン」

早速だが、力を貸してもらおう、頼むぞ。

「魔法発動『おろかな埋葬』。このカードはデッキからモンスターカードを1枚墓地へ送ることができる。
我はこの効果によって極星霊デックアールヴを墓地へ送る。
さらに魔法発動『光臨への備え』！このターン、我はバトルフェイズを放棄するが、ライフを１０００ポイント支払い、デッキおよび墓地から『極星』と名のつくチューナーを1体ずつ特殊召喚する！
我はデッキから『極星獣グルファクシ』を特殊召喚し、墓地から『極星霊デックアールヴ』を特殊召喚する！
レベル３の極星獣トークン２体に、レベル４の極星獣グルファクシをチューニング！星界の扉が開く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん！大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ！シンクロ召喚、星界の三極神、その１つ！極神皇トール！」

「グフフフフ。現れたな、神のカード。極神皇トール」

「だが、我はまだ通常召喚をしていない。極星霊リョースアールヴを召喚し、効果発動。このカードの召喚に成功した時、自分のフィールド上のモンスター1体を選択し、手札から選択したモンスター

のレベル以下の『極星』モンスター1体を特殊召喚する！
我は極神皇トールを選択し、手札から極星霊ドヴェルグを特殊召喚する！」

「チューナーに2体のモンスター…レベル合計は１０！まさか！」

「そのまさかだ。レベル1の極星霊ドヴェルグとレベル４の極星霊リョースアールヴに、レベル５の極星霊デックアールヴをチューニング！星界より生まれしきまぐれなる神よ。絶対の力を我らに示し世界を喰え！シンクロ召喚！星界の三極神、その１つ！極神皇ロキ！」

「1ターンで2体の神を召喚したか。ならばこの瞬間、闇の兵士の効果発動！相手が1ターンに2体以上のシンクロモンスターをフィールド上に特殊召喚したターン、このカードを生贄に捧げることでデッキから『魔皇帝ディアボロス』を特殊召喚する！
現れろ！魔皇帝ディアボロス！」

「空が…黒く染まってく…？」

「これはまずいね」

魔皇帝ディアボロス…僕の城の古文書に載っていた伝説のドラゴン…

「フン。魔皇帝ディアボロスの攻撃力は３２００だ。我の星界の三極神に戦闘で勝利することはできないぞ？」

「フフフフ。その心配は無用だ。魔皇帝ディアボロスは召喚したターン、攻撃力が４０００になる」

攻撃力４０００…だが！

「極神皇トールの効果を発動。エフェクト・アブソーバー！」

これで攻撃力は３２００になる！

「魔皇帝ディアボロスの効果発動。ディアボロスは召喚ターン、相手の魔法・罠・モンスターの効果を受けない。グフフフフフ、残念だったな」

ちっ…トールの効果が通用しないか。

「我はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ７０００
手札×０
フィールド
極神皇トール　攻撃力３５００
極神皇ロキ　攻撃力３３００

「でも、どうしてディスペア君は究極神を使わないの？」

「そうだよ。使えば簡単に勝てるはずじゃあ…」

「君達も少しは察して欲しいね。今ディスペアが付けているディスクは、ディスペアの固有ディスクで召喚するモンスターや発動するカードの効果が現実になるんだ。君達人間にとってはただのカードゲームかもしれないけど、僕達が持っているカードとディスクは君達人間が持っているのとは違う。召喚術と同じだと考えてもらっていい。そんな現実化する状況で究極神を召喚したら、僕達神はともかく君達人間は強力な衝撃で一瞬にして塵になる。本当なら究極神を使ってるんだ。ディスペアに感謝しなよ」

それを聞くと、想像したのか顔が青くなった。

「わたしのターン。グフフフ、ゆくぞ。魔皇帝ディアボロスで極神皇ロキを攻撃。デス・ディアボロス・バースト！」

攻撃力の低いモンスターで攻撃してくるだと？面白い。

「迎撃しろ、ロキ！ヴァニティー・バレット！」

2つの攻撃が衝突して流れ弾がなのはたちの方に向かう。

「我の防御を見くびらないでもらおう。アルティメット・フォース！」

その瞬間、輪が光って我の後ろに透明な壁が創られる。流れ弾はそれにぶつかって消滅した。

「これがうわさに聞く究極神の力か」

「へえ。あのバリアーの名前アルティメット・フォースって言うんだ」

「どこにも神の防御壁という証拠が入ってないな」

「何言ってんのトール？アルティメットって時点で究極神帝の恐怖がよみがえってくるだろ？」

「（余程痛かったんだな。ゴッド・アルティメット・ノヴァ…しかも普通のディスクで喰らってこの怯えよう…一体どれほどの激痛なんだろうか？）」

「２人とも間違ってるぞ。わたしが聞いた話ではアルティメット・フォースはバリアーの名前ではなく、あの力で攻撃・防御ともにこなすそうだ」

かなり便利な力だね。しかもその源は究極神…ディスペアに勝てるやつがいたら教えてくれよ。

「魔皇帝ディアボロスは破壊された。１００ポイントだが、ダメージは受けてもらう」

ジース　ＬＰ８０００→７９００

「フン。だが、これで魔皇帝ディアボロスの効果が発動される…魔

皇帝ディアボロスが破壊された時、手札を全て捨てデッキまたは手札から、神属性のモンスター1体を召喚条件と制約を無視して、特殊召喚する！現れろ！レイジング・エンジェル！」

「何ッ！」

空が黒く染まり、かつて美しかった女神は、その姿を黒く染めて降臨した。目は赤くなり、構えていたレイジング・ハートは黒いオーラを纏っている。

「グフフフフ。分かっているな？このモンスターを倒すということは、そこの魔法使いの女の死を意味するぞ」

クッ…これではレイジング・エンジェルを葬ることができない…そしてレイジング・エンジェルの攻撃力は４０００…しかも、その効果には貫通能力がある…さらに、レイジング・エンジェルが我のモンスターを破壊した場合、我の他のモンスターはすべて破壊される。

「そ、そんな…これじゃあディスペア君には打つ手が無いやないか！」

「卑怯だよ！なのはの命を人質にとってディスペアを倒そうだなんて！」

「…私のせいで…ディスペア君は…」

残念だけど、戦場ではこういう手段が常識なんだ…卑怯も何もない。僕達神と違って、悪魔は勝利すればいいだけ。邪悪な力と聖なる力

じゃ、その本質が違うんだ。

「お前ら、確かにディスペアが今追い詰められているのはお前らがカードを盗まれたからだよ。でも、ディスペアはそれを決して恨んでない」

前にも、スクルドで似たようなことがあったしね。あの時のディスペア、いや、リョウの慌てよう、凄かったし…まさか敵が一瞬で灰になるとは思わなかったね。まあ、今のスクルドは戦えるから足手まといにはならないけど。

「だが、ディスペアが危険なのは本当の話だ。一体どうする？ディスペア…」

「レイジング・エンジェルで極神皇ロキを攻撃する！ジェノサイド・ブレイカー！」

黒い女神から放たれた砲撃は、神を2体とも葬り去った。

「クッ…アルティメット・フォース！」

今度は球体上のバリアだ。防げるのが我1人分だが、その代わりに防御力は防御形態の中でも最も堅い。

ディスペア　ＬＰ７０００→６３００

「グフフフフ…レイジング・エンジェルの効果によって、貴様のモンスターはすべて破壊される」

堕ちた女神が我に語りかけてくる…『助けて欲しい』と…ならば我は『神』としてではなく、『ディスペア』としてその願いを聞き入れてやる。

「トラップ発動『救世の光臨』！我の三極神が2体以上破壊されたターン、デッキから『極星』と名のつくチューナー以外のモンスターを2体特殊召喚する！

現れろ、極星霊リョースアールヴ！極星獣ガルム！

さらにトラップ発動『極星の奇跡』！デッキからカードを1枚ドローする。それが『極星』と名のつくチューナーだった場合は特殊召喚できる。さらに、特殊召喚した際に『極神』と名のつくモンスターのシンクロ召喚が可能な場合はシンクロ召喚できる！ドロー！…我がドローしたのは極星天ヴァルキュリア！特殊召喚し、レベル4の極星獣ガルムと極星霊リョースアールヴに、レベル2の極星天ヴァルキュリアをチューニング！北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！今こそ星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚！天地神明を統べよ！星界の最高神！極神聖帝オーディン！！」

「きゃあああああああ！」

「さすがに固有ディスクだと…衝撃も強いね」

「スクルド、大丈夫か！？」

「な、なんとか…」

攻撃力は４０００ポイント…だが、レイジング・エンジェルは倒せない…！

「オーッホッホッホ！ジース、いつまで油を売っているのかしら？」

「！！」

「貴様は…」

「あら、随分と久しぶりね、リョウ…いや、今はディスペアだったかしら？」

「ミーティア…魔皇軍最高幹部の１人がこんなところに何の用だ？」

「いえいえ。無様に負けるであろうジースの様子を見に来ただけですわ」

「黙れミーティア！わたしが負けるはず無いだろう！」

「人質を取るバカって大体負けますのよ」

「ええい！黙れ！わたしはこれでターンエンドだ！」

「このエンドフェイズ、破壊されたロキとトールが復活する！そして、貴様に８００ポイントダメージを与え、我は墓地から『神の桎梏グレイプニル』を手札に加える！」

ジース
ＬＰ７１００

手札×０
フィールド
レイジング・エンジェル　攻撃力４０００

「我のターン…！我は魔法カード『極星の宝札』を発動！自分フィールド上の『極星』または『極神』と名のつくモンスター１体につき、カードを２枚ドローする！我のフィールドには三極神がいる。よって６枚ドロー。そしてカードを２枚伏せる」

オーディンならばレイジング・エンジェルを倒すことはできる。しかし倒せば高町の命が…ならば！高町、お前の精神力に賭ける！

「我はさらにカードを２枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ６３００
手札×３
フィールド
極神聖帝オーディン　攻撃力４０００
極神皇ロキ　攻撃力３３００
極神皇トール　攻撃力３５００
伏せカード×４

「グフフフフ、ミーティアよ。この状況でこのわたしが負けるはずが無いだろう。
わたしのターン！レイジング・エンジェルよ！極神皇ロキを攻撃せよ！ジャノサイド・ブレイカー！」

「高町！お前の精神力に賭けるぞ！トラップ発動『星界の裁き』！相手モンスターが神を攻撃対象に選択した時、その相手モンスター

の攻撃を無効にし、攻撃を無効にしたモンスターの攻撃力と攻撃対象に選択されたモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

ロキとレイジング・エンジェルの攻撃が互いのモンスターに激突した。

「キャアアアアアア！」

「なのは！しっかりして！」

高町、お前が耐えないと、ディスペアが頑張った意味が無いんだ。攻撃が止んだ…高町は…耐えてくれたみたいだね。

「ぐううわあああああああああ！」

ジース　ＬＰ７１００→－２００

「ほら。やっぱり負けたじゃない」

「た、助けて…くれ」

「そうね。とりあえず、このカードはあたしが城まで持って行くわ。あなたはディスペアに殺されなさい☆」

「まっ、待ってくれ…死にたくない、死にたくないぃィィィ！ギャアアアアアアアアアア！」

ジースにとどめを刺したのはいいが、カードはミーティアに持って行かれてしまった…恐らく奴が向かったのはこの先にある魔皇軍の城…しかし、わざわざ真正面から行くしか方法が無いからな…あの城は確か、正面以外が全てバリアーに囲まれていた。バリアーを壊すことは簡単だが、その後の集中砲火が高町たちには耐えられまい…

「そう言えばディスペア君、魔皇軍って何？」

「あ、それ私もまだ聞いてない。ディスペア、教えてよ」

「仕方が無い。スクルドも高町も、１度しか言わないからよく聞いておけ。
魔皇軍は、暗黒神を神と崇め、１００人の最高幹部からなる巨大な軍勢だ。ありとあらゆるパラレルワールドや世界に侵攻してその世界を征服し、さらには次元融合をさせようとしている」

「ディスペア…次元融合って…何？」

「次元融合とは、別々の世界やパラレルワールドを融合させることだ。我ら神々も、次元誕生の時を予知すると行う。しかし、それをなにもない時に行えば、世界が反発を起こし、最悪の場合消滅する」

消滅しなくても、別々の世界が混ざっているからな。たとえばドラゴ○ボールとガン○ムが混ざったら、大変なのは容易に想像できる。そして悪魔達は、融合させた世界をさらに自分達の者にしようと徹底的に暴力を加える。まあ、高町たちがいる世界にある時空管理局など比にもならないほど強力な軍勢だ。我も１度、窮地に立たされ本当に『ゴッド・アルティメット・ノヴァ』を放ったことがあるからな。世界と神々を創造するのは、究極神と我だけでは難しいこと

だった。

「そして、神あるところ悪魔ありで、神が何度封印されようと復活するように、悪魔も同じく復活する。その魂を完全に消し去っても、暗黒神がいる限りは悪魔が消えることはない」

「な、なんかスケールが大きい話やなぁ…」

スケールが大きいなどというレベルの話ではない。

「でも、私達のカードは盗られたまま…やっぱり取り返しに行かないと！」

「我らも悪魔の拠点は1つでも潰しておきたいのでな。同行させてもらう」

暫くはアカデミアには戻れないだろう。だが、時間操作がある。空白の時はどうにでもなるだろう。

第６９話　共闘！リリカルエンジェルス（後書き）

今回エンジェルが倒されるとなのはが死ぬのは、現実化するディスクでデュエルしたからです。リアル化したエンジェルが倒されたら、精神リンクがあるのでなのはの精神がぶっ壊れます。
次回も多分リアルファイトありです。
今回使用したオリカ『光臨への備え』は葦切様から投稿していただいたものです。葦切様、ありがとうございました。

誤字、脱字などありましたら、ご指摘ください。

第７０話　ミーティアｖｓディスペア　絶望のフィナーレ！　（前書き）

次回からデュエルアカデミアに復帰です。ネタバレですが今日のファイブディーズ…アポリア、今度はトリシューラ号じゃなくてフィールド魔法と合体か。普通にしてたらイケメンなんだから合体しなくていいだろ。

第７０話　ミーティアｖｓディスペア　絶望のフィナーレ！

～～～悪魔の城から１００ｋｍ地点～～～

「どう?ディスペア、見える?」

「ああ、よく見える」

今現在、インフィニティー・アイを使用して悪魔城の様子を見ている。

「めちゃくちゃな視力やなぁ…」

「ではロキ、城周りの様子を言うから、よく聞いてくれ」

「オッケ～」

「城の上空には１０００体ほどのザコがいる。城門前に上級クラスの悪魔が４体、そしてここから５０ｋｍの地点に２０００体ほどの魔皇軍が構えている。内２０体は中級クラスだな」

「じゃあ、でかいの打ち上げていくよ。ヒャーッハハハハハハハハ！」

僕は固有ディスクを構えてカードを5枚引く。

「オーディン、転送魔法の準備よろしく」

「了承した」

「僕はフィールド魔法『死皇帝の陵墓』発動。２０００ライフを支払い、Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮを召喚」

巨大な機械のモンスターが現れる。

「さらにリミッター解除を発動。ＳＡＴＵＲＮの攻撃力が５６００になる。さ、オーディン、頼むよ」

オーディンがＳＡＴＵＲＮを悪魔城の上空に転送する。リミッター解除の効果でＳＡＴＵＲＮが破壊されてＳＡＴＵＲＮの効果である、効果破壊されると互いにその攻撃力分、つまり５６００ポイントのダメージを受ける効果が発動し、大爆発を起こす。ＲＰＧ風に表示すると…

ザコＡに５６００のダメージ！
ザコＢに５６００のダメージ！
ザコＣに５６００のダメージ！
ザコＤに５６００のダメージ！
ザコＡＢＣＤを倒した。

こんな感じだ。実際はもっと多くのザコが巻き込まれただろう。…ん？

「好都合だな。５０ｋｍ地点のクズが、半分ほど城に戻って行ったぞ」

「まあ、ここからでもよくきのこ雲が見えるからね」

「うっわあああ…」

「はやて…あれって質量兵器じゃないの？」

「どっちにしても、倒したんやからええやないか」

ロキは固有ディスクを収める。

「まあ、飛んで行ったらすぐにばれるから、結局歩かないといけないけどね」

「えっ？この距離を歩くの？」

「何言ってんの？当たり前じゃん」

この後、口論があったのはカットしよう。

～～～２５ｋｍ地点・森～～～

「やれやれ…悪魔だけじゃなくて、獣までいるとは思わなかったよ」

「それは同感だな。だが、獣程度なら高町たちでも倒せる。スクルドも多少だが剣が使える。仮に悪魔が来ても、下級クラスならどうにでもなるだろう」

「でも、私できれば剣は使いたくないんだけど…」

「だが、魔法ばかり使っていれば神力が尽きる。ある程度は剣で済ませてくれ」

「ディスペアがそう言うならいいけど…」

スクルドが使っているのは宝剣レーヴァテインだ。杖で殴っていたのでは埒が明かないので、剣を使ってもらうことにした。スクルドは血を見るのが好きではないから、剣を使いたがらないが。

～～～その頃、魔皇軍の城～～～

「ホッホッホッホ。この3枚のカードからあふれる魔力…利用し甲斐がありそうでたまりませんわ～」

「（うっわあ…相変わらず気持ち悪い性格としゃべり方だな…どこかの世界のＳＬＢでぶっ飛ばされたメガネみたいだ…）」

「（まあ、そう言うな、これでも最高幹部の1人、愚痴を言ったら俺らが消されるぞ）」

「そこ、コソコソ何を話してるのかしら?」

「「な、なんでもありません!」」

～～～３０ｋｍ地点～～～

そろそろ悪魔の数が増えてきたな。これ以上1体1体相手にしていたのでは体力が消耗するだけだ。

「４５ｋｍ地点まで低空飛行するぞ。見つからないようにしろ」

「最初からそうすればよかったんじゃあ…」

「バァーカ。最初にでかい花火を撃っておいて、一気に飛んでハチの巣になりたいのかよ。少なくとも僕は堅実にいく質だからね。不用意に攻めるのが大嫌いなんだ」

ロキは罠にかかるのが1番嫌いだからな。

…よし、そろそろ４５ｋｍ地点か。

「……骨がありそうだね」

目の前…目の前と言っても５ｋｍ先だが、そこにいるのは約１０００体の悪魔。

「そうだな」

「お前達。一気に突撃する。暴れていいぞ」

「よし、ようやく我の出番のようだな。一足先に行かせてもらう」

「神が来たぞお！放てえ！」

悪魔は次々と砲撃を放ってくる。

「そんなものが我に通用するとでも思っているのか？サンダーパイル！」

「ギャアアアアアアア！」

ド派手な出だしだな。我もやらせてもらおう。

「アルティメット・フォース」

創りだしたのは巨大な火球。デュエルアカデミアの校舎ぐらいはあるだろうか？
それを悪魔の密集地に向けて放つ。

「ギャアアアアアア！」

「グワアアアア」

「情けない奴らだ！この程度の炎も防げないとはな」

多少は骨があるのがいるようだな。面倒な悪魔は…

「ジェスター・コンフィを特殊召喚し、生贄に捧げる。来い！ブリザード・プリンセス！」

カードで片付ける。召喚、発動するカードにもよるが一番手っ取り早く、強力な方法だ。攻撃力は２８００、あの程度の中級悪魔ならこれで十分だ。

「グハハハハハ！がら空きだぞ！最高神の王よ！」

「誰ががら空きだと？貴様の方が隙だらけだ。塵と化すがいい」

ほんの一瞬の間に、恐らく１０万回は斬っただろうか。悪魔は完全に塵と化した。それをさらに炎で燃やして塵すらも残らなくする。

「さすがディスペア。そんな３ｍもある大剣を一瞬で１０万回以上振るなんて、とても最高神のレベルじゃないよね」

まあ、元が戦闘の神だからな。

「ディバインバスターーー！」

「高町達もまあまあやるレベルだよね。中級の悪魔と互角に戦える人間なんて、そうはいないからね」

確かにそうだな。我が今まで見てきた人間の中で、悪魔と互角に戦うことができたのは数えるほどしかいない。

「ちっ、ザコが！お前なんかに用はないんだよ！」

「ロキ、そろそろ撃つ。あいつらを早く引かせろ」

「オーケー。みんな聞こえたよね？聞こえてないなら知らないけど、早く引いた方がいいよ」

僕がそう言うと、一斉に全員が引いた。

「させるかよおおお！」

悪魔の1人が、ディスペアに斬りかかる。

「そんな剣で、我の腕を斬り落とせるとでも思ったか？」

ディスペアは、腕で剣を受け止めていた。何の防御も、魔法も使用せずに。

「ようやく撃てるか。詠唱が必要な魔法は、時間がかかるから面倒だ。まとめて消えるがいい！ジェノサイド・メテオ！」

巨大な隕石が悪魔達を巻き込んで大爆発を起こす。そして煙が消え去った時には悪魔達はいなかった。

「大技を使ったからな。増援が来るまでに城に行くぞ」

すぐに飛行して城に向かう。だが、一向に増援は来ない。

そして、暫く経つともう城の前まで来た。

「誘っているのか？あの幹部は？」

「そうじゃないかな？でも、内部工作は無理そうだから、ここは正面突破しかないよ」

「分かっている。行くぞ！」

「スターライト・ブレイカー！！」

高町のＳＬＢで、巨大な城門を吹き飛ばす。これでしばらく、高町は戦闘を行うことはできない。

「オーッホッホッホ。待っていたわよ」

「ほう。幹部自ら、大広間で待っているとはな。悪魔にしては堂々としているではないか」

「当然よ。このわたくしが、最高神ごときに劣るはずがありませんから。さあ、命をかけたデュエルを楽しみましょう？」

「フッ。そんなことを言っていられるのは今のうちだけだ。我は人間のように生易しくない。無情の神として貴様のライフを０にする」

互いに固有ディスクを構える。すると、ディスペアの足元には黒く禍々しい魔法陣が、ミーティアの足元には白金の神々しい魔法陣が浮かび上がる。

「魔法陣は貴様のライフその物。ライフが０になれば、その魔法陣が消滅し貴様は死ぬ」

「それはお前も同じことよ」

「「デュエル」」

「我のターン」

……ロキ達は周りの悪魔の殲滅に行ったか。早速だが、機皇帝を借りるぞ。

「『スカイ・コア』を守備表示で召喚する。カードを１枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
スカイ・コア　守備力０
伏せカード×１

「わたくしのターン」

あのカードは報告にあったモンスターですわね。効果で破壊された時、機皇帝というモンスターを特殊召喚できる。そして、機皇帝はシンクロモンスターを吸収できる。オホホホホ！でも、何体もシンクロモンスターを並べれば、勝利できますのよ。

「わたくしは、チューナーモンスター『ダークネス・アサシン』を攻撃表示で召喚いたしますわ。さらに魔法カード『ダークネス・チューン』を発動。このターン、フィールド上のチューナーと手札の素材でシンクロ召喚を行えますわ。手札のレベル４モンスター『スナイプ・ストーカー』にフィールドのレベル４チューナー『ダークネス・アサシン』をチューニング。暗黒の世界より、高貴なる悪魔が復活する。その姿を現しなさい！シンクロ召喚、『ダークネス・サモナー』！
この『ダークネス・サモナー』のシンクロ召喚に成功した時、わたくしはエクストラデッキからシンクロモンスター１体をシンクロ召喚として特殊召喚できますわ。
わたくしはレベル１０の『エンドレス・ペイン』をシンクロ召喚しますわ。そして『エンドレス・ペイン』の効果発動。相手はデッキからモンスター２体を特殊召喚しますわ。その代わりにわたくしはデッキからレベル１０以上の効果モンスター１体を特殊召喚いたします。わたくしはデッキから『ハイパー・デビル』を特殊召喚しま

すわ」

「ならば我は『ワイズ・コア』と『グランド・コア』を守備表示で特殊召喚する。そして、手札の魔法カード『アトミック・エクスプロージョン』の効果を発動する。このカードはフィールド上に機皇帝のコアが3枚存在する時、この3枚のコアを破壊し、1枚につき1000ポイントのダメージを与える」

「クッ…神ごときがなめた真似をしてくれますわね」

ミーティア　LP8000→5000

神ごとき…か。ならば我が、その神の力を持って貴様を無に帰してやろう。究極の絶望と共に！

「さらに、我は『グランド・コア』、『ワイズ・コア』、『スカイ・コア』の順でチェーンを積み、効果を発動。『スカイ・コア』の効果により手札・デッキ・墓地から『機皇帝スキエル∞』『スキエルT』『スキエルA』『スキエルG』『スキエルC』を特殊召喚。次に、『ワイズ・コア』の効果発動。我のフィールド上のモンスターをすべて破壊し、デッキ・手札から『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルT』『ワイゼルA』『ワイゼルG』『ワイゼルC』を特殊召喚。最後に『グランド・コア』の効果発動。我のモンスターをすべて破壊し、デッキ・手札より『機皇帝グランエル∞』『グランエルA』『グランエルG』『グランエルC』『グランエルT』を特殊召喚する！合体しろ、機皇帝グランエル！」

「オホホホホ。何度も自分のフィールド上のモンスターを一掃して、バカじゃないかしら？まあ、最終的にモンスターを1体残せたようですけど」

わたくしのモンスターは全て攻撃力３０００ポイント。そう簡単には超えられませんわよ。

「機皇帝グランエルの効果により、攻撃力と守備力は我のライフと同じになる。よってその攻撃力は…」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ０↓８０００

「こ、攻撃力８０００!!?なんということでしょう!?」

～～～リリカル&神サイド～～～

「ザコのくせに僕に触れるなぁぁ!」

「ギャアアアアア!」

「さすがに、キリが無いよ…魔力が、尽きそう…」

「私もちょっときついなぁ…」

「お前達、この程度で疲れてどうする!サンダーパイル!」

「大体テスタロッサ、最初から防御を無視した露出度の高いその格好で戦うことが僕には信じられないね。そんな薄い鎧じゃ、君達人間の体なんて悪魔達にとって下級神を葬るより簡単なんだから。ひょっとして、誘ってるの?だとしたら無駄だよ。悪魔達はおろか、僕たちだってつられないよ?」

僕はもともと防御型の戦いが得意だから、トールみたいなパワー押しができる味方がいるといいコンビになるけど…テスタロッサ達３人の中には、防御型の戦いをする奴がいない。防御してくれる味方がいないのに、単独で防御を無視して突っ込むなんて自殺行為だ。

「そ、そんなんじゃないよ！」

でも、はっきり言われると悲しいな…はぁ…

「ため息をついている間があったら少しは戦ってくれないかな？彼氏いない歴＝年齢」

「ロキに言われたくな……ごめん」

「お前が気にすることじゃ無い。僕の判断と、実力が足りなかったせいでセレナは死んだ。僕が悪魔達と戦うのは復讐じゃない。力が足りなかったかつての僕と決別するためなんだからね」

「お喋りをしている暇があったら戦え！我１人では素早い悪魔を倒すのは多少骨が折れる！ロキ、素早い敵の処理はお前の専売特許だろう！」

クッ…このような時に、そんなシリアスな話をするな！戦意が喪失する！

「まあ、ディスペアの方が速いけどね。ハァァァァァッ！」

でも、そのディスペアが今はいない。テスタロッサ達３人を除けば、一番弱いのは僕だ。パワー押しには弱い僕が処理できるのは、おの

ずと決まってくる。さ、テスタロッサ達も少しは本気を出してくれるみたいだから僕も頑張らないとね。

「ギャアアアアア！」

～～～ディスペア＆ミーティアサイド～～～

「我が機皇帝グランエルの攻撃力と守備力は８０００ポイント。さあ、どうする？」

「わたくしは『エンドレス・ペイン』で『グランエルＡ』を攻撃しますわ。ペインズ・フレアー！」

「チッ…」

ディスペア　ＬＰ８０００→６３００
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ８０００→６３００

「さらに、『ダークネス・サモナー』で『グランエルＴ』を攻撃いたしますわ」

「……」

ディスペア　ＬＰ６３００→３８００
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ６３００→３８００

「そして最後に『ハイパー・デビル』で『グランエルＣ』を攻撃しますわ」

「……」

ディスペア　ＬＰ３８００→１５００
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ３８００→１５００

「オホホホホホホ。お前のフィールドにいるのは、攻撃力たった１５００のザコモンスターとそのパーツだけ。それでわたくしに勝てるはずがありませんわ。カードを１枚伏せ、ターンを終了いたしますわ」

ミーティア
ＬＰ５０００
手札×２
フィールド
ダークネス・サモナー　ＡＴＫ３０００
エンドレス・ペイン　ＡＴＫ３０００
ハイパー・デビル　ＡＴＫ３０００
伏せカード×１

「我のターン。貴様に絶望のフィナーレを聞かせてやろう。生きているのが嫌になるほどの絶望のフィナーレをな。魔法カード『死者への供物』を発動。この効果により、『機皇帝グランエル∞』を破壊する。『グランエルＧ』は本体が存在しなくなったために破壊される。
そして魔法カード『機皇回収』を発動する。このカードは自分の墓地の『機皇帝ワイゼル∞』『機皇帝スキエル∞』『機皇帝グランエル∞』を除外し、墓地から『ワイズ・コア』『スカイ・コア』『グランド・コア』を手札に加える。
魔法カード『絶望の最終楽章（フィナーレ）』を発動。手札より3体の機皇帝のコ

アを除外し『機皇神マシニクル∞（インフィニティー・キュービック）』を特殊召喚する。この効果によって特殊召喚したマシニクルはこのターン、3体までシンクロモンスターを吸収できる」

「な、なんですって!!?」

「我は貴様の『ダークネス・サモナー』と『エンドレス・ペイン』を吸収する」

機皇神マシニクル∞　ＡＴＫ４０００→１００００

「さらにトラップカード『インフィニティ・チェンジ』を発動。このカードは装備カードとなり、我のフィールドの『機皇』と名のついたモンスター1体に装備する。このカードを装備したモンスターはシンクロモンスターを吸収できなくなるが、効果モンスターを吸収できる」

「そ、そんな…このわたくしが…負けるというの!?」

「マシニクルの効果発動。『ハイパー・デビル』を吸収する」

機皇神マシニクル∞　ＡＴＫ１００００→１３０００

「い、いや…わたくしはまだ死にたくありませんの…1ターン、1ターンだけ待って!」

「機皇神マシニクル∞でダイレクトアタック。フィナーレ・オブ・ディスペア!」

「い、いやあああああああああ!」

ミーティア　ＬＰ５０００→－８０００

ミーティアの足元にあった我の魔法陣が収束する。

「い、いや…ギャアアアアアア！」

ふざけた断末魔と共に悪魔が消える。我に勝負を挑み、情けを求めるなど無駄なこと。我は我に敵対する者に対し、一切の情を抱かない。

悪魔が消えた場所に、３枚のカードが落ちる。

「これは返してもらうぞ。神聖なる力はお前達悪魔が持っていい力ではない」

「ま、ディスペアは聖でも邪でもないけどね。ヒャハハハハ」

「ロキか」

「こっちは片付いたよ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…！！

「ミーティアが消えたことで城が崩れ始めた。お前達は先に行け。我は少しやることがある。スクルド、辛いとは思うが、防御魔法で結界を創り脱出しろ」

「うん！ディスペアも、気をつけてね！」

～～～スクルド達が脱出し、城が完全に崩れた後～～～

「ディスペア、大丈夫かな…」

なのはたちは返してもらったカードを見つめていた。スクルドは崩れた城の方を見ている。

ドオオォォォォォォォォォォン！！

城の瓦礫が一気に吹き飛び、中からディスペアが機皇神マシニクルに掴まって出てくる。

「待たせたな」

「何をやっていたのだ？ディスペア」

「これだ。我は城が崩れる寸前に、巨大な神力の反応を感じた」

その奥にあったものは、巨大な神力を封じ込めた水晶玉。

「この神力…懐かしい感じがする…」

「当然だ。この中に封じ込められているのはかつてのスクルドの神力に他ならない」

前の戦争の時にスクルドは人間の罠にかかったと思い込んでいたようだが、どうやらそれは変身したミーティアの罠だったらしい。
一通り話した後、我は水晶玉を割る。神力がスクルドに戻り、時の杖の宝玉の色が、灰色から赤に戻った。

「これで我が望むものの1つが手に入った。それも、大きな回り道をせずにな」

「これで、一件落着やな！」

「お前は何もしていないだろう、八神はやて」

「な！失礼やな～。これでも何体も悪魔を倒してたんやで？」

「へえ、僕にはただ悪魔を蹴り飛ばして、宝物庫を荒らしていたようにしか見えなかったけどね」

全く。1人だけまともに戦いに参加せずに宝物庫を見つけて宝を頂いていただけのくせに。

「……どうやら、面倒なことになった。次元転移魔法が使用できない」

「そ、そんな！帰れないってこと？」

「いや、帰る手段はある。だが、お前達がいるから、究極神の召喚ができない」

「それなら、私に考えがあるよ」

「スクルド？」

「ほら」

スクルドが防御結界を張る。以前使っていたものとは比べ物にならないほど強固な結界だ。これならば、究極神召喚の衝撃に耐えることができるだろう。

「よし、降臨せよ！究極神オシリス！」

オシリスが巨大な衝撃と共に召喚される。スクルドの防御結界によって、衝撃は全く来なかったらしい。

～～～デュエルアカデミア・海岸～～～

「やっと戻って来れたね」

「あんな世界、もうこりごりや」

「……どうやら災難はまだ終わらないようだな」

見ると、レッド寮の前でクロノスとナポレオンがデュエルを始めようとしていた。

第７０話　ミーティアｖｓディスペア　絶望のフィナーレ！　（後書き）

誤字・脱字がありましたらご指摘ください。

今回のオリカ、インフィニティ・チェンジは葦切様から投稿いただいたものです。ありがとうございました。

第７１話　ホワイト寮からの撤退（前書き）

今回はデュエルがありますが、中断します。そして、いつものことながらｇｄｇｄです。

第71話　ホワイト寮からの撤退

～～～デュエルアカデミア・レッド寮～～～

「なぜこんなことになっているのかご説明願おう。クロノス臨時校長とナポレオン教頭」

「レッド寮はミカン箱の腐ったミカンと同じなのでアール！だから壊すべきなのでアール！」

「そうはいかないノーネ。彼らもまた、デュエルアカデミアの一員なノーネ！」

そういえば、こんなことを言っていたな。我はくだらないと思い、無視していたが。一番苦労するのは、レッド寮を立て直す大工だ。そのぐらいは考えてみたらどうなんだ？

「でぃ、ディスペア！ブルー寮が、白く塗られようとしてるよ！」

一足先に帰ったスクルドが戻ってきて、そう言った。

「……本当に我の周りには災難が絶えないな」

～～～ブルー寮～～～

「お前はディスペア！もうお前のいる場所はない！今日からここは…ぎゃああ！」

「ゴミは黙っていろ。次に何かほざくようなら…斬る」

「ヒィィィィ！」

「ま、待て、ここから先に行かせるわけには…グアアア！」

「洗脳されたゴミは黙っていろ。我に敵対するというのなら、今ここで片付けてやるがどうする？」

固有ディスクを構える。ホワイト生徒もディスクを構えた。

「我に敵対するというのか？面白い。我の先攻ドロー。…エクゾディア召喚」

「な、なんだって！ぎゃあああああ！」

ホワイト生徒　ＬＰ－∞

ホワイト生徒はエクゾードフレイムをかわしたが、服に炎が燃え移り叫びながら池に飛び込んだ。

「なっ！？ソリッドビジョンじゃないのか！」

「我のデュエルはそんな甘いものではない。我が道を阻むのなら、貴様らの命をかけることになるぞ？」

「まあ、待ちたまえ」

そう言い、斎王が目の前に出てくる。

「お前は引っ込んでな！ヒャーッハハハハ！」

「うわあああああ！」

ロキが斎王の腹を殴り飛ばす。斎王は思い切り吹き飛び、壁に激突した。

「さ、斎王様！」

ホワイト生徒が何人か駆けつけるが、それを無視して寮の中に入る。ロキ、リアルファイトはこの世界でしていいものなのか問い詰めたいところだぞ。

「どうやら、我らの部屋はまだ無事のようだな。オーディンが森の奥に人間には見えない城を創ったはずだ。荷物を持って行くぞ」

～～～数分後、森の奥深く～～～

「こんなところに坂などあったか？」

「そんなことよりも坂の先をみなよ、ディスペア」

「これは…ビフレスト？」

坂の先にかかっていたのは虹の橋ビフレストだった。どうやら、家を創るのは断念したようで、帰る際には毎回我ら最高神の居城に戻れということらしい。ロキを含め、最高神は全て同じ城で暮らしている。城自体は我の城だが。

「でも、わざわざビフレストなんか架けたら、最近なにかと僕達の近くにいる3人について来いって言ってるようなものだよね」

「確かにそうだな。だが、あの3人が来たところでなにも危険などあるまい」

そんな会話をしながら、橋を渡る。とはいってもロキは機皇帝スキエルに、我は青眼の究極竜に乗って直接扉まで飛んでいるが。

～～～その頃、リリカルサイド～～～

「ね、ねえ、あれ見て！」

「アレって…橋？でも、どうして空中に橋が？」

「そんなの行ってみれば分かることや！とりあえず行ってみよ！」

「「うん」」

～～～サイドアウト～～～

「なんだ、やっぱりついてきたんだ」

あいつらはもう橋を登り始めてるのか。

「ついてこられても、さすがに我らの城に入れるわけにはいかないからな。橋は消すぞ」

ビフレストを消せば、扉も消える。そうすれば、飛行魔法を使えても、神ではない高町達に我らの世界に来る手段はない。

「オッケー」

アルティメット・フォースを使用し、ビフレストを消す。

「ね、ねえ、なのは、はやて！橋が消えてくよ！」

「もっと早く飛ぶんや！」

もうディスペア君達は扉の中に入った。早くしないと、扉が消えちゃう！

「飛び込もう！」

フェイトちゃんの掛け声で、私達は扉に飛び込んだ。

～～～神界・扉の出口～～～

「ちぇっ。間にあったか。でも、要はディスペアの城に来させなければいいんだ。あいつらはディスペアの城の場所は知らない。早く行こう」

「分かっている。つかまれ、ロキ」

ロキが我につかまったのと同時に、瞬間移動する。

「あれ?誰もいないよ?」

「ここは多分…」

前にロキに1度だけ連れてこられた…リンゴの木の下…なら!

「あっちの方に歩いて行けば、ロキの城があるはずだよ」

「何で知ってるの?随分と仲良しだね?フェイトちゃん」

「というか、ロキ君、城なんて持ってたんやな」

〜〜〜30分後〜〜〜

「ここがロキの城だよ」

「これはこれはテスタロッサ様。ロキ様にご用事ですか?申し訳ありませんがロキ様は今現在、ディスペア様の城で暮らしておりますので、この城にはおりません」

「ディスペア君のお城ってどこにあるんですか？」

「それがわたしも知らないのです。一部の上級神が知っているはずですが…確かこの神界の中心にある塔を登り、そこを出ると最高神界という世界がありまして、その最高神界のどこかにある、という話を聞いたことがあります」

「ありがとうございます！」

～～～最高神界・ディスペアの城～～～

「相変わらずバカでかい城だよね。僕を含めたディスペア以外の最高神の城の大きさの合計と同じくらいの大きさはあるよね」

「まあ、どんなに巨大な城を創ったところで、全てをリセットする力があるのもまた事実。それを使えば、この城も一瞬で消えさるだろう。創るのは時間がかかるが、壊すのは一瞬だ」

つまり、どんなに凄いと思われるものを創ったとしても、壊れるときはあっという間に壊れるということだ。

「でも、その力はディスペアが持ってるんだから、ディスペアが放たない限りは幸せな生活がここでできるはずだよ？」

「スクルドか」

……ディスペアは絶対スクルドが死んだら撃つよね。ゴッド・アルティメット・ノヴァ。

「……どうやら、招いた覚えのない者が3人、最高神界に侵入しようとしているようだな」

「ここまで追いかけてくるなんて、さすがだね。どうせ僕の城の執事に聞いたんだろうけど」

「……」

あれ程この場所は言うなと言ったはずだ、ロキ。だが、来てしまったのは仕方が無い。門番にどうにかさせよう。

さらに突破された時のために、我はもう1つの固有ディスクを展開する。輪を広げて創ったものだ（ファイブディーズ第141話『絶望のデュエル！起動要塞フォルテシモ』のアポリア参照。ただし緑色の部分は黒で、ディスクは腕に沿って浮いている）。究極神はなぜかこのディスクでないと召喚できなくなった。まあ、浮いているわけだから腕につけるよりも軽く、さらにはデッキ、手札を置く場所もあるからこちらの方がいいと思うが。

～～～最高神界の門～～～

「ここは最高神界、最高神の王、ディスペア様が暮らす城への門だ。お前達人間が通っていい場所ではない」

「今すぐに引き返せ。引き返さないのなら…」

「「「ううぅ…」」」

困ったな…私達はディスペア君に会いたいだけなんだけど…

「…人間、たった今、ディスペア様より連絡が来た。入っていいそうだ」

「さっすがディスペア君や！」

〜〜〜サイドアウト〜〜〜

「……来たな。お前たち、何の用だ」

「それが…ただ虹色の橋が架かってて、扉があったから入ったんだけど…」

全く。人間が通った神の扉は神界から作るのには時間がかかる。神の扉を通して神界に入った人間は神の扉からでなければ時の流れの差に圧縮されて死ぬ。

「本来ならここで切り捨てるところだが、お前たちを殺しても我の後味が悪すぎる。ここで我とデュエルしろ。お前達が勝てば神界の時間で1か月、あの世界の時間で1日の間だけ泊めてやる。どうだ？ただし、ここに泊まることになった場合、お前達は永遠に年を取らなくなってしまう。人間としての当り前の道である『死』を寿命で迎えることはできなくなるぞ？良く考えてから決めるんだな」

「でも、このままでも飢え死にするよね？」

「まあ、そうだろうな。死んでも骨ぐらいは拾ってやるから安心し

ろ」

神という立場は面倒だな。

「…受けるよ。年を取らなくなるのはアレだけど、ここで死んじゃうのなんかもっといやだ」

「まあ、正確には年はとるが見た目や声、寿命などの変化が無くなるだけだがな。各プレイヤーのライフは４０００ポイント。我のターンは貴様ら3人の後に回ってくる。異存はないな？」

「「「「デュエル」」」」

「我の先攻」

カードを6枚ドローし、固有ディスクの左端に置く。常に持っている必要が無いのでかなり便利だ。

「我はフィールド魔法『絶望の城』を発動する」

どこまでも綺麗だった一面の花畑が、荒れ果てた庭に変わり、何百年もの時が経過したような城が現れた。

「『絶望の城』の効果発動。このカードの発動時にこのカード以外に我のフィールドにカードが無い場合、デッキから闇属性モンスター1体を手札に加える。

我のフィールド上に『絶望の城』以外のカードはない。よってデッキから『ワイズ・コア』を手札に加える」

「あのカードは…」

「機皇帝の召喚に必須のモンスターカード…」

「さらに、手札よりトラップカード『無情の砲撃』を発動する」

「手札からトラップカード!?」

「このカードは、我のフィールド上に『絶望の城』がある場合、手札から発動できる。手札のモンスターカードを1枚墓地へ送り、そのレベルの４００倍のダメージを相手プレイヤーに与える。手札より『機皇兵スキエルアイン』を捨て、そのレベルの４００倍、つまり１６００ポイントのダメージを…テスタロッサ！貴様に与える」

「きゃあああ！」

フェイト　ＬＰ４０００→２４００

「さらに『機皇兵グランエルアイン』を召喚する。我がモンスターを召喚に成功したことにより、フィールド魔法『絶望の城』の効果が発動。我は召喚したモンスターの攻撃力の半分のダメージを受ける代わりに、カードを1枚ドローする。そして『絶望の城』のもう1つの効果を発動。我がドローしたカードを相手に見せ、それがレベル４以下のモンスターだった場合、特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚する場合は『絶望の城』の効果を使うことはできない。

我は『機皇兵グランエルアイン』の攻撃力の半分、８００ポイントのダメージを受け、カードを1枚ドロー……ドローしたカードは『機皇兵ワイゼルアイン』。よって特殊召喚する。

我はこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ３２００
手札×３
フィールド
機皇兵グランエルアイン　ＡＴＫ１６００
機皇兵ワイゼルアイン　ＡＴＫ１８００
絶望の城

「私のターン！私はシャインエンジェルを召喚するよ！」

かかったな。

「絶望の城の効果発動。相手がモンスターを召喚した時、相手は自分フィールド上のカードの枚数の２００倍のダメージを受ける」

高町のフィールドにはシャインエンジェル１枚のみ。与えられるダメージは２００だが…その２００ポイントは思った以上に大きい数値だ。

「くっ…」

なのは　ＬＰ４０００→３８００

「カードを２枚伏せて、ターンエンド」

なのは
ＬＰ３８００
手札×３
フィールド
シャインエンジェル　ＡＴＫ１４００

伏せカード×２

「私のターン、ドロー！」

ディスペアのフィールド魔法『絶望の城』の効果でモンスターを召喚すればするほどダメージを受ける…それはディスペアも同じだけど…

「私はＢＦ－暁のシロッコを召喚するよ！このカードは相手フィールド上にのみモンスターが存在する場合、生贄なしで召喚できる！」

「『絶望の城』の効果発動。テスタロッサ、お前のフィールドにカードは１枚。２００ポイントのダメージを与える」

フェイト　ＬＰ２４００→２２００

テスタロッサのデッキは『ＢＦ』。フィールド上には複数のモンスターが召喚される。だがそれは『絶望の城』に前では仇になったな。

「さらにＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚するよ」

フェイト　ＬＰ２２００→１８００

「私はカードを１枚伏せてターンエンド」

フェイト
ＬＰ１８００
手札×３
フィールド
ＢＦ－暁のシロッコ　ＡＴＫ２０００

ＢＦ－黒槍のブラスト　ＡＴＫ１７００
伏せカード×１

「私のターンやな」

……さて、どうしようかな…

「とりあえず私は『堕天使ゼルク』を守備表示で召喚」

「『絶望の城』の効果により、２００ポイントのダメージを与える」

「２００ポイントでも意外と…痛いもんやな」

はやて　ＬＰ４０００→３８００

だが、八神のモンスターは殆どが召喚時に効果を発揮する。恐らくあの堕天使も例外ではない。

「『堕天使ゼルク』の効果発動や！召喚成功時に手札を１枚捨てて、手札の『堕天使』と名のついたモンスター１体を特殊召喚できる！私は手札の『堕天使エヴィー』を捨てて、『堕天使ゼラート』を特殊召喚！」

堕天使ゼラート…その効果は手札の闇属性モンスター１体をコストに、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する。しかし、その効果を使用すればそのターンのエンドフェイズにゼラートは破壊される。しかし次の我のターンまで、全員攻撃はできない。ここで効果を使用すれば、ゼラートは無駄死にだ。

「だが、『絶望の城』の効果により４００ポイントのダメージを受

けてもらう」

はやて　ＬＰ３８００→３４００

「私はこれで…ターンエンドや」

はやて
ＬＰ３４００
手札×３
フィールド
堕天使ゼラート　ＡＴＫ２８００
堕天使ゼルク　ＤＥＦ１５００

「我のターン……」

ディスペア　ＬＰ３２００→０

「「「え？…どうして」」」

どうしてディスペア君は…サレンダーを…？

「神界に来て、間もないお前達はこの空間でデュエルをするには体に負担がかかり過ぎる。お前達の顔色を見ていれば分かることだ」

やはり人間では神界でデュエルするのは無理だったか。

「ロキ、こいつらを適当な部屋に連れて行け」

「はいはい」

「…ディスペア君、最初から勝つつもりなんてなかったんじゃあ…」

「あまり勘違いをするなよ？我は貴様らが戦闘可能であれば、容赦なく叩き潰していたところだ」

「と、とにかくありがとう…」

～～～歩くこと１０分・ディスペアの城～～～

「これ、本当にお城？どう考えても大きさがおかしいよね？」

「そうだな。最高神全員の城の合計ぐらいの大きさだ。部屋自体はそれなりにあるから自由に使え。こちらの時間で１カ月の間人間界には戻れないが、実際には１日だ。心配はするな」

「でも、君達の時間は止まっちゃうからね。まあ、時の流れが無いっていう点だけなら君達も神になったのかな？」

「だが、これもお前達が選択した道、今更後戻りはできない」

「…私はええよ」

「「私も」」

意外と落ち込まないんだ。メンタルはそれなりに強いみたいだね。

「だが、これだけは覚えておけ。お前達は寿命では死ねなくなった。これは、生涯を共に歩み続けるものを見つけたとしても、そう長い

間は一緒にいることはできないということだ。人間の寿命はせいぜい８０～１００年がいいところだ。しかし、お前達は寿命が無い、つまりは無限の時を生きなければならない。自分より若いものが先に死んでいく。それだけは頭に叩き込んでおけ」

だが、顔を見る限りは後悔はしていないようだな。なら、これでよしとするか。こいつらなら、果てしないときの中で絶望を味わうこともないだろう。

「ま、今日はゆっくり休みなよ。何か質問があるなら、後で聞いてあげるよ。ずっと明るいから寝ようとしても寝られないと思うけど。スクルドやウルズ、ヴェルザンディーはもう寝ちゃったけどね。人間界の時間だと夜中だからね」

予想外の出来事が起きた今日は、なんとか無事に終えることができた。

第７１話　ホワイト寮からの撤退（後書き）

次回、お正月記念

第７２話　元旦デュエル！（前書き）

今回は短いです。でも、暗い話ではありません。

第７２話　元旦デュエル！

～～～ディスペアの城～～～

「あけましておめでとう♪」

「スクルド、何を言っているのだ？」

「今日はお正月だよ？」

「人間界ではな。神界では明日だろう」

「まあ、そう冷たくしなくてもいいんじゃない？」

「そうそう。私達もそれを言いに来たんだし」

「「あけましておめでとう！」」

「ウルズとヴェルザンディーか」

「「今日はこんなお年玉を持ってきたよ」」

※イリアステルの合体シーン集のＤＶＤ

「これ、お年玉なのか？」

「落とし玉だよね。どっちかって言うと」

「まあ、一応もらっておこう」

「今日は本編では一度も出てない俺も登場だ！」

「帰れ」

「ちょっｗおまｗｗ」

やってきたのは番外編でしか姿を現したことが無いヘイムダルだ。

「俺が持ってきたのはデッキだ！さあディスペア、俺とデュエルしろ！」

「結局いつも通りデュエルかよ」

「まあ、ロキの言うことにも一理あるが、いいだろう。いつものことだ」

「「デュエル」」

「俺のターンだ！俺は魔法カード『お年玉』を発動」

……お年玉？

「このカードの効果で、相手はカードを3枚ドローするか、ライフを２０００回復する！」

「ならば我は3枚ドローする」

「そして速効魔法『強制没収』を発動する！このカードは相手が『お年玉』の効果でドローした時、そのカードを俺の手札に加える！」

「……」

「ね、ねえ、ロキ…何かディスペアが怖いんだけど…」

「す、スクルドもそう思うんだ。……ヘイムダル、死んでも骨は拾ってあげるよ」

「へえ～『オシリスの天空竜』に『オベリスクの巨神兵』に『ラーの翼神竜』か。ありがたくもらうよ。カードを2枚伏せて、ターンエンド」

ヘイムダル
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
伏せカード×２

「我のターン。『ジェスター・コンフィ』を特殊召喚する。そしてこのモンスターを生贄に『ブリザード・プリンセス』を召喚。こいつの召喚に成功したターン、相手は魔法・トラップの発動はできない。『ブリザード・プリンセス』でダイレクトアタック」

ヘイムダル　ＬＰ８０００→５２００

「いってえええええええ！ちょっｗ手加減頼む」

「手加減ってなんだ？」

「そ、それってブ○リーじゃん」

「カードを２枚伏せてターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
ブリザード・プリンセス　ＡＴＫ２８００
伏せカード×２

「俺のターン！魔法カード『おみくじ』を発動！相手は俺の手札の中からランダムに１枚選ぶんだ！モンスターカードなら大吉、カードを２枚ドローする。魔法カードなら吉、墓地のモンスターカードを１枚手札に加えられる。トラップカードなら凶、手札を全て捨てて捨てたカードの数だけ自分フィールド上のカードを破壊する！」

こいつ、バカじゃないだろうか？手札の内の３枚はモンスターカードだということが確定しているんだぞ？

「我は右から２番目のカードを選択する」

「…『ラーの翼神竜』だ。２枚ドローしていいぜ」

カードを２枚ドローする。『ブリザード・プリンセス』の２枚目と

『激流葬』か。

「俺はこの伏せカードを発動する！トラップカード『兎の悪戯』！相手の手札を１枚ランダムに選択して、そのカードをデッキに戻してシャッフルさせる！俺はそのカードを選択する！」

ちっ。『幻銃士』が持って行かれた…

「さらに伏せカード発動！速効魔法『年賀状』！自分の手札のモンスターカードを１枚相手の手札に加えることで、俺の手札からモンスター１体を特殊召喚できる！俺はディスペアの手札に『ラーの翼神竜』を移して、手札から『ビフレストの門番ヘイムダル』を特殊召喚！」

アレは奴の化身…ビフレストの門番…攻撃力は３０００、そしてその効果は召喚時に相手の手札を全て墓地へ送る。

「ヘイムダルの効果発動！相手の手札を全て墓地へ送る！」

ことごとく我の手札を削りに…しかもあのデッキ…ヘイムダルの化身のカード以外はふざけたカードばかりだ。

「さあいくぜ！ヘイムダルで『ブリザード・プリンセス』を攻撃！ギャラルホルン・バーン！」

「……」

ディスペア　ＬＰ８０００→７８００

「相変わらずリアルダメージでも何の反応もない…お前は痛みを感

じてないのか？」

「……」

「おい、返事しろよ。ターンエンド」

ヘイムダル
ＬＰ５２００
手札×３
フィールド
ビフレストの門番ヘイムダル　ＡＴＫ３０００

「我のターン。……魔法発動『死者蘇生』」

「ゲッ！！それは！」

「我が蘇生させるのは当然『ラーの翼神竜』！」

ディスクの墓地から炎の柱が上がり、ラーの翼神竜が姿を現した。
ラーの翼神竜を墓地へ送ることがどれほどの恐怖か分かっているはずだ。

「究極神帝じゃないのかよ！？」

「我が神はその時に応じて姿を変える。ラーの翼神竜の効果発動。ライフを１ポイント残し、払った数値分ラーの攻撃力をアップする。我がライフは７８００ポイント。よってライフを７７９９ポイント払い、ラーの攻撃力を７７９９にする！そしてこのターン、相手モンスター全てと相手プレイヤーに攻撃することができる！喰らえ！ゴッド・ブレイズ・キャノン！！」

「ぎゃあああああああああ！！」

ヘイムダル　ＬＰ５２００→－７３９８

「フン。少しデッキを見せろ」

……『富士』『鷹』『茄子』…『謹賀新年』『鏡餅』『お雑煮』…
…『兎年』『三段おせち』。

「ふざけているのか！」

「まあそう言わないでくれよ。頑張って何とか戦えるレベルになるまで強化してきたんだからさ」

「だが、お前の敗因は余計なカードを墓地へ送ってしまったことだ。とりあえず、我が神は返してもらうぞ」

早くカードをヘイムダルの手から離さなければ精神が崩壊する可能性がある。

「ああ、ほらよ」

「まあ、デッキのコンセプト自体は今日のこの日にちょうど良かっただろうな」

「そりゃあよかった。じゃあ俺はもう帰るわ。ビフレストの警備しなきゃいけないからな」

「ああ」

「色々予想外の事が起こったけど、私、スクルドとディスペアから２０１０年のまとめの一言を言わせてもらいます！」

「「みなさん、よいお年を！！」」

第７２話　元旦デュエル！（後書き）

作者もおみくじを引きました。大吉でしたよ！去年が凶だったからよかったです。

第７３話　邪神セト強襲　前編（前書き）

※神話崩壊です。俺の中のイメージではこんなんじゃない！という方はご注意を！

第７３話　邪神セト強襲　前編

～～～ディスペアの城～～～

「やれやれ。いつまでたっても起きないなんて、仕事のやり過ぎなんだよ。早く起きろ。食事の用意ができてるから」

「う～ん…」

「ご、ご飯？」

「そういえばここ、ディスペア君のお城やったなぁ…」

～～～大食堂～～～

「うっわあ…すごい…」

「広いね…機動六課の食堂の何倍あるんだろう？」

「そしてこのご飯のクオリティーの高さ…信じられへん」

「早く食べなよ？冷めるよ」

「「「い、いただきます」」」

～～～ディスペアの城・玉座～～～

「……」

「どうしたの？ディスペア」

「…スクルド、城の周りの神力を探知してみろ」

「うん……！！これって！！」

「この神力は間違いなく…邪神…セト…強力な力を持つが、その力は『邪』に属する者。いかなる神話にも属することのない地に一体何の用だ？」

その次の瞬間――――――――――――――――――――。

ドオオオオオオオオオオン！！

城門が爆破された。

～～～大食堂～～～

「な、何だ！？」

ディスペアかな?僕の食事中に暴れないで欲しいね。

「この城にいるもの全員、聞こえるな」

城の中全体にディスペアの声が響く。念話で話しかけてるね。

「襲撃者だ。我はこれから迎撃に出る。各自、自分で判断して行動しろ」

全く。どうしてこーゆー面倒な連中が後を絶たないんだ。

〜〜〜ディスペア城・1階大広間〜〜〜

「邪神セト。そこで止まってもらおう」

「ん?てめぇはディスペア…ちょうどいい。俺はお前を殺しに来たんだ」

「その理由を聞こうか?」

「俺が最高神になるためさ!てめえらを蹴落としてな!」

「フン。貴様の兄オシリスが気の毒だな。お前のようなやつにバラバラに殺されたとは」

まあ、あいつもあいつで神には不向きだったがな。

「まあいい。我を蹴落とし、最高神の王になりたければ…」

「ああ、わかってるぜ…」

「「デュエル」」

互いの足元に魔法陣が出現する。

「我らはデュエルと一体化した。命は数値化し、ライフが０になれば命も０になる」

「いつものことじゃねぇか」

「我の先攻。『マッド・リローダー』召喚。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
マッド・リローダー　攻撃力０

「俺のターンだ！『邪神獣ケルベロス』を召喚！やれ、ケルベロス。ザコモンスターを粉砕しろ！」

「戦闘破壊された『マッド・リローダー』の効果発動。手札を２枚墓地へ送り、カードを２枚ドローする」

ディスペア　ＬＰ８０００→６５００

「俺はカードを２枚伏せてターン終了だ」

邪神セト
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
邪神獣ケルベロス　ＡＴＫ１５００
伏せカード×２

「我のターン。手札から魔法カード『悪夢再び』を発動する。このカードの効果によって、墓地の守備力０の闇属性モンスター2体…『ジェスター・コンフィ』と『マッド・リローダー』を手札に加える」

「ザコモンスターばっかだな。よくそんなんで今まで最高神の王として君臨できたな」

「我はカードを1枚伏せる。そして『トーチトークン』2体を攻撃表示で特殊召喚し、貴様のフィールドに『トーチ・ゴーレム』を攻撃表示で特殊召喚する。『ジェスター・コンフィ』を攻撃表示で特殊召喚し、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ６５００
手札×４
フィールド
ジェスター・コンフィ　攻撃力０
トーチトークン×２　攻撃力０
伏せカード×１

「俺のターン！『邪神獣ゼガル』召喚！こいつの効果によって、デ

ッキから自分フィールド上の『邪神』と名のついたモンスターの合計分のレベルを持つ『邪神獣』１体を手札に加える」

セトのフィールドにいるのはレベル４の邪神獣が２体…デッキから手札に加えることができるのはレベル８の邪神獣…

「俺はデッキから『邪神獣ガリウス』を手札に加える！そしてこいつは、俺のフィールドの『邪神獣』２体を生贄にして特殊召喚ができる！『邪神獣ケルベロス』と『邪神獣ゼガル』を生贄に『邪神獣ガリウス』を特殊召喚する！」

「トラップカードオープン『ガリトラップ－ピクシーの輪－』。我のフィールド上に攻撃表示モンスターが２体以上存在する場合、相手は攻撃力が最も低いモンスターを攻撃することはできない」

我のフィールド上に存在するのは攻撃力０のモンスターが３体。よってセトは攻撃することはできない。

「チッ…面倒だな。ターンエンドだ」

「『ジェスター・コンフィ』の効果発動。『ジェスター・コンフィ』自身の効果によって特殊召喚されていた場合、相手のエンドフェイズにこのカードと相手フィールド上の表側表示モンスター１体、『トーチ・ゴーレム』を手札に戻す」

セト
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
邪神獣ガリウス　攻撃力２８００

伏せカード×２

「我のターン」

邪神獣ガリウス…カードには何も効果が書かれていないが、我がインフィニティー・アイにはその効果が見えるぞ。１ターンに１度、相手がモンスターを特殊召喚した時、そのモンスターを破壊して攻撃力分のダメージを与える。さらに相手ターンに１度、相手が効果を使用・適用した時、それを無効にして相手に３０００ポイントのダメージを与える。しかし、邪神獣ガリウスがゲームから除外された場合、コントローラーは相手のライフと同じ数値のダメージを受ける。

「我は『ジェスター・コンフィ』を特殊召喚する。そして、『ジェスター・コンフィ』を生贄に捧げ、『ブリザード・プリンセス』を召喚。このカードはレベル８の最上級モンスターだが、魔法使い族モンスター１体の生け贄によって召喚できる。そして、このカードの召喚に成功したターン、相手は魔法・罠カードの発動はできない」

「邪神獣ガリウスの効果を発動するぜ！こいつがいるときに相手が効果を使用した場合、その効果を無効にして３０００ポイントのダメージを与えるのさ！喰らいやがれ、エフェクト・コンデンサー！」

ディスペア　ＬＰ８０００→５０００

「どうだ？３０００ダメージの味はよォ！」

「我は３体のモンスターとライフの半分を生贄に捧げる」

ディスペア　ＬＰ５０００→２５００

「降臨せよ！究極神オシリス！！」

最高神界ならば究極神召喚の衝撃波は耐えられる。召喚の衝撃波はな。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

「な、なんだぁ！！？最高神界で地震か？珍しいな」

「セト、貴様の後ろを見るがいい」

「後ろ…！！！な、なんだこれは！こんな巨大な…モンスターが…」

「我が神、『究極神オシリス』。その攻撃力は手札１枚につき２００ポイントアップする」

究極神オシリス　ＡＴＫＸ０００→８０００

「こ、攻撃力８０００！？ざけんじゃねェ！」

「我は『究極神オシリス』で『邪神獣ガリウス』を攻撃！アルティメット・サンダーフォース！」

オシリスの口から巨大な雷砲が打ち出され、ガリウスに直撃した。

そして、雷砲が消えた時にはガリウスは既に消滅していた。

「トラップ発動『邪神饗宴』！邪神獣が戦闘によって破壊される場

合、そのダメージを回復にする！」

邪神セト　ＬＰ８０００→１３２００

「くそ！こんなのにどうやって勝てって言うんだよ！！」

「希望は潰えたか？…ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ２５００
手札×４
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ８０００
ガリトラップ―ピクシーの輪―

「お、俺のターン！トラップ発動『邪結界』！俺の『邪神』が相手の攻撃で破壊された次のターンに発動できる！手札またはデッキから『邪神』１体を特殊召喚できる！来い！『邪神狼ハーヴェル』！」

ハーヴェル…やはり効果は書かれていない…我の究極神と同じか。カードにはフレイバーテキストしか書いていないが、特殊な効果を持っている…。

ハーヴェルは相手のターンに１度、相手がライフを払った場合その数値分だけ自分のライフを回復する…そしてハーヴェルが相手のモンスターを破壊した場合、そのレベル×５００ポイントのダメージを与える。

「『究極神オシリス』の効果発動。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、そのモンスターの攻撃力・守備力を２０００ポイントダウンする。サンダー・プレッシャー！」

「フン。速効魔法発動『邪神の遠吠え』！俺の邪神狼の攻撃力か守備力が変化した場合、同じ数値分だけ俺のライフを回復し、回復した数値分対象の邪神狼の攻撃力をアップする！さらにこいつは、発動後もフィールドに残り続ける！
つまり、俺はライフを２０００ポイント回復して、ハーヴェルの攻撃力が２０００ポイントアップするんだよ！残念だったな」

邪神狼ハーヴェル　ＡＴＫ２５００→５００→２５００
邪神セト　ＬＰ１３２００→１５２００

「……」

「つまんねぇな！少しは反応しやがれ！」

「……（晩飯なに食べよう？）」

「痛みを感じない絶望野郎め！カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

邪神セト
ＬＰ１５２００
手札×２
フィールド
邪神狼ハーヴェル　ＡＴＫ２５００
伏せカード×１

「我のターン」

究極神オシリス　ＡＴＫ８０００→１００００

「オシリスよ！攻撃力たった２５００のザコを粉砕しろ！アルティメット・サンダーフォース！！」

「ギャアアアアアアアア！痛ぇ…うおおおおおおおお！」

邪神セト　ＬＰ１５２００→７７００

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ２５００
手札×５
フィールド
究極神オシリス　攻撃力１００００
ガリトラップ―ピクシーの輪―

「俺のターン！……こいつがあればなんとかなるぜ！魔法カード『邪神の施し』発動！墓地から『邪神』と名のついたモンスター１体を除外して、手札が５枚になるようにドローする！
俺は『邪神狼ハーヴェル』を除外して、３枚ドローだ！さらに伏せカードオープン！『邪神闇臨』！前のターンに互いのプレイヤーが受けたダメージの合計が５０００以上の場合デッキからレベル１２の『邪神』と名のついたモンスターを１体特殊召喚する！
闇臨せよ！『邪神王デスゲイオン』！」

天から闇の光と共に巨大な黒い髪・服・杖を装備した人型のモンスターが現れた。

「『邪神王デスゲイオン』の元々の攻撃力は、前のターンで互いのプレイヤーが失ったライフと同じ数値＋２０００ポイントの数値に

なる！」

邪神王デスゲイオン　ＡＴＫ？↓９５００

「だが、『究極神オシリス』の効果発動。サンダー・プレッシャー！」

邪神王デスゲイオン　ＡＴＫ９５００↓７５００

「『邪神王デスゲイオン』の効果発動…こいつの元々の攻撃力が変化した場合、その数値分だけ相手にダメージを与える！ダメージ・フィール！」

ディスペア　ＬＰ２５００↓５００

「へっ！さすがに痛みが無くても、神力が減っているのが分かるぜ！俺の足元にあるてめぇが創った結界の光が弱まってるからなぁ！俺はデスゲイオンのもう１つの効果を発動するぜ！１ターンに１度、手札の枚数×１０００ポイントのライフを回復できる！俺の手札は５枚、だから５０００ポイント回復する！」

邪神セト　ＬＰ７７００↓１２７００

「ターンエンドだ！」

邪神セト
ＬＰ１２７００
手札×５
フィールド
邪神王デスゲイオン　ＡＴＫ７５００

「我のターン」

究極神オシリス　ＡＴＫ１００００→１２０００

「我は『究極神オシリス』でデスゲイオンを攻撃する！」

「デスゲイオンの効果発動だ。こいつが攻撃または効果を受けるとき、手札1枚を捨てることでこいつをエンドフェイズまで除外する！」

「ならばダイレクトアタックだ」

「ギャアアアアアアアアアアア！！」

邪神セト　ＬＰ１２７００→７００

「メインフェイズ2に移行。我は『幻銃士』を召喚する。『幻銃士』の召喚に成功した時、我のフィールド上に存在するモンスターの数まで『銃士トークン』を特殊召喚できる。
我のフィールド上にモンスターは2体。よって2体の『銃士トークン』を特殊召喚する。
この3体の銃士と我のライフ半分を生贄に捧げる。降臨せよ、『究極神オベリスク』」

ディスペア　ＬＰ５００→２５０

究極神オシリス　ＡＴＫ１２０００→８０００

「なんだと！？」

何故ディスペアはメインフェイズ1の時にオベリスクを召喚し攻撃しなかった!?デスゲイオンの効果は強制発動だ。それなら俺を倒せたはずだ!

「てめぇ、なめてるのか!」

「……ターンエンド（晩飯は海老フライにしようかな）」

「返事をしやがれ!このエンドフェイズにデスゲイオンはフィールドに戻る!」

ディスペア
ＬＰ２５０
手札×４
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ８０００
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００

「俺のターン!魔法カード『邪神の宝札』発動!手札と墓地に存在する『邪神』と名のついたモンスターカードを全て除外し、その攻撃力の合計の１０００ポイントにつき1枚ドローする!俺が除外した『邪神』の攻撃力の合計は１３６００ポイント。１３枚ドローだ!そしてデスゲイオンの効果によって手札1枚につきライフを１００ポイント回復する。
俺の手札は１３枚。だから１３０００ポイント回復する!」

邪神セト　ＬＰ７００→１３７００

「神の前ではライフがどれだけあろうとそれは無いに等しい。例えライフが１００万ポイントあろうが我の最強の神の効果で貴様のラ

イフは０になるのだ」

「へっ！黙りやがれ。そいつが出てくる前にてめぇのライフを０にすりゃあいい話だ。てめぇのライフはたったの２５０ポイントなんだぜ？」

そのたったの２５０ポイントを削れずに我に敵対したものは敗北するのだ。

「てめぇが次のターン、俺のライフを０にできなければてめぇの負けだ。俺の手札には召喚時に５００ポイントのダメージを与える『邪神獣バニングル』がいるんだよ！カードを３枚伏せてターンエンド。手札を４枚捨てるぜ」

邪神の宝札の効果を使用したターンは『邪神』と名のついたモンスターを召喚することはできねぇ。だがこのターンを耐え凌げばディスペアは死んで、晴れてこの俺が最高神の頂点に立つんだよ！

邪神セト
ＬＰ１３７００
手札×６
フィールド
邪神王デスゲイオン　ＡＴＫ７５００
伏せカード×３

「我のターン。悪いが貴様にはここで死んでもらう。『ジェスター・コンフィ』を特殊召喚する。さらに『クラスター・ペンデュラム』召喚。

『クラスター・ペンデュラム』の召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターの数まで『ペンデュラム・トークン』を特殊召喚

する。貴様のフィールドには『邪神王デスゲイオン』1体のみ。我のフィールドに『ペンデュラム・トークン』1体を特殊召喚する。『ジェスター・コンフィ』『クラスター・ペンデュラム』『ペンデュラム・トークン』の3体と我のライフ半分…125ポイントを生贄に捧げ、『究極神帝ラー』を特殊召喚する」

「な…なんだってんだこの光は…」

「『究極神帝ラー』で『邪神王デスゲイオン』を攻撃する。インフィニティー・ゴッド・ブレイズ」

「ぐわあああああああああああ!!」

邪神セト　LP13700→－∞

これでセトは死んだはず……

「へへへへへへへへへ…残念だったなぁ…」

「……」

「てめぇのライフが少なかったおかげで、結界を敗れたのさ。俺を葬りたければ、もう1度デュエルするしかねェぜ？まあ俺が勝てばテメェは死ぬけどな。スクルドの事を考えたらやめるべきじゃねェのか？」

「…スクルドには悪いが、このデュエルは受けさせてもらう」

「…ディスペア、それなら私もやるよ…」

「スクルド…何故ここに？」

「心配になってきてみたら…」

「……頼む。今の我1人ではこいつを抑えることはできない。だが、スクルドと2人なら止められるだろう」

「…うん！」

「「デュエル」」

ディスペア　LP125

「なんだと！？」

「ど、どうして！？」

「へへへへへへ。てめぇのライフはそのままだ。…ハアアアアアアアアア！」

次の瞬間、邪神セトは漆黒の龍に姿を変えた。デュエルディスクとカードは浮いている。

「今度はテメェが絶望を味わう番だ。ディスペアよォ？」

「クッ……」

第７３話　邪神セト強襲　前編（後書き）

スクルドの固有ディスクは時の杖を横に浮かせて、そこから扇状に深い青色の神力が広がっています。色のイメージでは一言で言うと『守りの色』です。守りが得意なので。

邪神セト強襲　後編（前書き）

後編です。私なりに頑張りました。

邪神セト強襲　後編

～～～ディスペア城１階大広間～～～

「ライフ…１２５ポイント…」

「へッへへへへへ…だがここでデュエルするには狭いなァ？場所を移させてもらうぜ」

セトは外に移動した。それを追いかけてスクルドと我も外に出る。

「先攻は俺がもらうぜ？ドロー」

「ディスペア…１２５ポイントじゃ…」

「我は問題ない。１２５ポイントあればセトを倒すには十分だ」

「随分となめた口をきいてくれるじゃねェか。
俺はフィールド魔法『ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ』を発動」

……『自分だけのフィールド』か。このどこまでも暗いフィールドは恐らくセトの心情そのもの…絶望も希望もない。言葉にするならただ純粋な闇のフィールド。聖なる力も邪悪な力も関係ない、我と似ている。…これでもう夕飯を考える余裕はない。

「このフィールド魔法の発動時に3枚のカード名を宣言する。このカードがフィールドを離れても宣言したカードを相手はデュエル中にフィールドに出すことはできない！俺は『究極神オシリス』『究

極神オベリスク』『究極神帝ラー』を宣言！」

…残念だが、このデッキは究極神ではないぞ。そもそも、オベリスクとオシリスを宣言された時点で、究極神帝ラーを指定する意味はなくなる。

「さらに1ターンに1度、相手に１０００ポイントのダメージを与えることができる。死ね、ディスペア！」

「なんだと！！？」

我の手札には対抗手段が無い…

「させない！私は手札から速効魔法『エフェクト・キュア』を発動！このカードは相手ターンでも手札から発動できる…相手から受けるダメージを０にして、その数値の２倍のライフを回復する」

ディスペア　ＬＰ１２５→２１２５

「すまない、スクルド」

「ディスペア、私がどうにかするから安心して本気でやって！」

「ちっ…ターンエンド」

邪神セト
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ

「我のターン。魔法カード『絶対星』発動。ライフを２０００ポイントまで払い、デッキより払った数値５００ポイントにつき1枚墓地へ送る。我はライフを５２５ポイント払い、デッキから『極星霊ドヴェルグ』を墓地へ送る。そしてこのターン、払った数値よりも低い効果ダメージを無効にする。
さらにライフ１０００ポイントをコストに魔法カード『光臨への備え』を発動。バトルフェイズを放棄し、デッキからチューナーの『極星』モンスター1体を特殊召喚し、墓地からチューナー以外の『極星』モンスター1体を特殊召喚する。まあ、もっとも最初のターンで攻撃することはできないがな」

「あれ？効果変わった？」

「…チッ…（ディスペアのやつ…一体いつデッキを変えた！？）」

「我にもわからないが、効果が変わっている。ご都合主義だろう。デッキより『極星霊デックアールヴ』を特殊召喚し、墓地より『極星霊ドヴェルグ』を特殊召喚する。そして手札から『極星霊リョースアールヴ』召喚。リョースアールヴの効果は使用しない。レベル１の『極星霊ドヴェルグ』とレベル４の『極星霊リョースアールヴ』に、レベル５の『極星霊デックアールヴ』をチューニング！星界より生まれしきまぐれなる神よ、絶対の力を我らに示し世界を喰え！シンクロ召喚！極神皇ロキ！……カードを3枚伏せターンエンド」

ディスペア
ＬＰ６００
手札×０
フィールド
極神皇ロキ　ＡＴＫ３３００

伏せカード×３

「私のターン」

「我はこの速効魔法を発動させる。『ロキの気まぐれ』！このカードは我のフィールドに『極神皇ロキ』が存在する時のみ発動できる。このカードの効果によりデッキからトラップカードを発動する。我は『神の桎梏グレイプニル』を発動させ、デッキから『極星天ヴァルキュリア』を手札に加える。さらにトラップカード『極星の救済』。自分フィールド上の三極神１体につき、カードを２枚ドローする。
我のフィールドには『極神皇ロキ』１体のみ。よって２枚ドロー」

「私は魔法カード『女神の祈り』を発動するよ。このカードの効果でデッキから永続魔法カードを１枚発動できる。私はデッキから『時の女神の結界』を発動！相手が攻撃する場合、その攻撃は私への直接攻撃になる」

「す、スクルド！！そんなことをすればお前が…！」

スクルドは首を横に振った。

「……スクルド」

「ヘッ！ディスペアを守るために自分の身を削り先に死にゆくか！なら望み通りにしてやるよ！フィールド魔法『ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ』の効果発動！相手ターンに１度、相手がデッキからフィールド上にカードを出した場合、相手のライフの半分のダメージを与える！」

「キャアアアアアアアアアア！」

スクルド　ＬＰ８０００→４０００

「スクルド！！セト、貴様ァ！！」

「ハーッハッハッハッハッハッハッハッ！どっちが先に死ぬか楽しみだなぁ！！」

「私は…大丈夫…」

口ではそう言っているが、見た目が既に満身創痍だ。早く決着をつけなければスクルドがもたない…。

「そして『ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ』の効果により、与えた数値分のライフを回復する。ハハハハハハハハ！」

邪神セト　ＬＰ８０００→１２０００

「カードを2枚伏せて、ターンエンド…」

スクルド
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
時の女神の結界
伏せカード×２

「俺の…ターーン！！フィールド魔法『ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ』の効果により、ドローする代わりにデッキからレベル４以下の

『邪神』と名のつくカードを手札に加える。
俺は『邪神龍オウガン』を手札に加える。さらに『ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ』の効果により、ディスペアに１０００ポイントのダメージを与える！今度こそ死ぬがいい、ディスペア！」

「トラップ発動、永続トラップ『時の女神の祭壇』！このカードがある限り、私達への効果ダメージは０になる！そして、その数値分だけライフを回復する！」

ディスペア　ＬＰ６００→１６００

「チッ。『邪神龍オウガン』召喚！オウガンでスクルドにダイレクトアタックだ！喰らいやがれ！」

「くっ…うう…」

防御壁を張ってやり過ごしているようだが、ライフは減る…我には何もできないというのか！？

スクルド　ＬＰ４０００→３０００

「俺は手札から魔法カード『邪神の鉄鎚』を発動するぜ！フィールド上に『邪神』と名のついたモンスターが存在する場合、手札からレベル４以下の『邪神』と名のつくモンスター１体を特殊召喚してこのターン…もう１度バトルフェイズを行えるんだよ！！」

「なんだと！？」

「そ、そんな…」

もう1度バトルフェイズだと!?これではスクルドのライフが…!!

「俺は手札から『邪神狼ハルベルト』を特殊召喚する!やれ!ハルベルト、オウガン!スクルドにダイレクトアタック!」

「永続トラップ発動…『時の女神の願い』…キャアアアアア!」

スクルド　ＬＰ３０００→０

「スクルド!!…セト……貴様あああああああああああ!!」

「ハッ!簡単に死んじまったな…面白くもなんともない…ぜ?」

「はぁ…はぁ…」

スクルド　ＬＰ０→１

「な、何故だ!?テメェのライフは…」

「……この…『時の女神の願い』の効果…で、私のライフは…『時の女神の祭壇』と『時の女神の結界』が…ある限り、１ポイント残る…ディスペアだけは、絶対に殺らせない!たとえ私の体が、魂が燃え尽きても」

「スクルド…もういい、そこまでして我の盾にならなくてもいい…お前だけでも逃げろ…これ以上攻撃を受け続ければ、お前の身体がもたないぞ…」

「ヘッ!今更このデュエルから逃げようったってそうはいかねェぞ!逃げようとした瞬間、俺の創った結界が大爆発を起こしてディス

ペアはどうなるか分からねェが…まあ少なくともスクルドは防御壁ごと粉砕して木っ端微塵だろうな」

どこまでも卑怯な奴め…

「貴様…そこまでして最高神になりたいか？」

「ああもちろん。最高神になれば毎日がやりたい放題だ。上級神に使用が許されてる魔法はせいぜいインフィニティークラスだ。でも、最高神になればアルティメットクラスの魔法を遠慮なくぶっ放すことができるんだからよ！それに誰も俺には逆らえねェ。夢みたいな世界じゃねェか」

「そんなことのために…ディスペアを殺そうとして、こんなデュエルまで仕掛けて…」

「ハッ！非情になれない甘い女神が何を言うか！戦いってのは勝てばいいんだよ。ターンエンドだ！ディスペア、さっさとドローかサレンダーしやがれ！サレンダーすりゃあ、スクルドの命は助けてやるよ」

邪神セト
ＬＰ１２０００
手札×３
フィールド
邪神狼ハルベルト　ＡＴＫ２０００
邪神龍オウガン　ＡＴＫ１０００
ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ

サレンダーすれば…スクルドの命だけは助かる…勝ち目が無いこの

状況では、せめてスクルドだけでも…

「ディスペア、ダメ！こんなところであきらめないで！私は…ディスペアがいない世界で1人で生きていくなんて嫌だよ…だから！勝って、生き延びようよ！」

「！！…そうだな。危うく絶望に負けるところだった…まだ我らは負けてはいない。ドロー」

「ハッ！おろかな選択を…ならば望み通り、この俺様が2人とも地獄に送ってやるぜ！」

ま、もっともディスペアがサレンダーしたところでスクルドを助けるつもりはなかったけどな。

……地獄に行くのはセト、貴様だ。

「伏せカードオープン、『極神の奇跡』。自分フィールド上に『極神』が1体のみ存在する場合、ライフを1ポイント残るように払い、エクストラデッキから『極神』1体を召喚条件を無視してシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。この効果によって特殊召喚したモンスターはこのターン、相手のカードの効果を受けない」

ディスペア　ＬＰ６００→１

「これでテメェらのライフは2人合わせてもたったの2ポイントだ。そんなんでこの俺に勝てるとでも思ってるのかァ？」

我らが勝利できるかはこの賭けが成功するかしないかで決まる。頼むぞ、スクルドがここまでやったのだ…我がここで躓いてどうする

！！

「星界の扉が開く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん。大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ！光臨せよ、『極神皇トール』！！さらに我は手札から『極星天ヴァルキュリア』を召喚！『極星天ヴァルキュリア』の召喚に成功した時、手札２枚を墓地へ送り『エインヘリアル・トークン』２体を守備表示で特殊召喚する。レベル４の『エインヘリアル・トークン』２体と『レベル２の極星天ヴァルキュリア』をチューニング！北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！今こそ、星界の神々を束ねその威光を示せ！シンクロ召喚、天地神明を統べよ。最高神『極神聖帝オーディン』！！」

このターンで決着をつける！

「速効魔法『極神の力』！このカードは自分の『極神』１体を選択しこのターン、選択した極神以外のモンスターの攻撃を封じる。その代わりに、選択した『極神』以外のモンスターの元々の攻撃力を選択したモンスターに加える！
我は『極神皇トール』を選択！」

極神皇トール　ＡＴＫ３５００→１０８００

「さらに極神皇トールの効果によって貴様のモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする。エフェクト・アブソーバー！」

「それがテメェの限界か？残念だが、その程度じゃあ俺のライフを０にすることはできねェぞ」

「限界？そんなもの我は知らないな。墓地から『極神の奇跡』を除外し、最後の効果を発動。このターン、『極神の奇跡』の効果で召

喚した神は3回の攻撃ができる！」

「な、なんだと！テメェ、またインチキ効果か！！いい加減にしやがれ！！」

「『極神皇トール』で3回の攻撃を行う！！サンダーパイル・フォース！」

「ぐわあああああああああ！！」

邪神セト　ＬＰ１２０００→７１００→３２００→１

バカな！？何故1ポイント残っている！！？我の攻撃は確かに3回とも直撃したはずだ！

「へへへへへへへへへへ…フィールド魔法『ｍｙ　ｏｎｌｙ　ｆｉｅｌｄ』の最後の効果を発動したのさ…こいつを墓地へ送ることで、俺のライフが0になった場合、1ポイントだけ残し…受けたダメージと同じ攻守を持つ『邪神帝龍ヘルドラグーン』を特殊召喚できる！」

我がこのターンに与えた戦闘ダメージは……

邪神帝龍ヘルドラグーン　ＡＴＫ？→１３２００

…１３２００ポイント…

「ハーッハハハハハハハハ！これでテメェらに勝つ手段は無くなったぜェ？」

ここまでか…手札は０…伏せカードもない…三極神の攻撃力はヘルドラグーンには通用しない…

「どうだ？絶望の味はよォ。次のターン、ヘルドラグーンの攻撃を受けてスクルドが生きていられるか楽しみだなァ？」

死んだらそいつのライフは強制的に０になる仕組みだ…俺の勝利は確実。スクルドが死ねば、俺の手札にある魔法カード『邪神波動』の効果によってヘルドラグーンの攻撃力…１３２００ポイント分のダメージがディスペアに与えられ、ディスペアも死ぬ。

「クッ…ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１
手札×０
フィールド
極神聖帝オーディン　ＡＴＫ４０００
極神皇ロキ　ＡＴＫ３３００
極神皇トール　ＡＴＫ３５００

「私のターン…カードを１枚伏せて、ターンエンド」

スクルド
ＬＰ１
手札×２
フィールド
時の女神の祭壇
時の女神の結界
時の女神の願い

伏せカード×１

「俺のラストターン！死ね！時の女神スクルド！！『邪神帝龍ヘルドラグーン』でスクルドにダイレクトアタック！！エンド・オブ・ライフ！この炎を、ライフがたった１ポイントしかない神に、それも生まれつき身体の弱い女神に耐えきれるものか！」

「スクルドはお前に負けるほど弱くは無いさ」

「私は、そのたったの１ポイントの命を信じる！トラップカード『時の女神の最期』！相手の攻撃で私のライフが０になる場合、相手プレイヤーも同じ数値のダメージを受ける…」

「ハッ！テメェら、絶望の中で気がふれたか！」

「絶望なんて知らない！」

これでスクルドが耐えきれなければスクルドは死んでしまう…だが我もスクルドの生きる力を信じる。たった１ポイントの命を。

「貴様が我に与えた絶望…そんなものか！我が名はディスペア！敵対する全ての者に絶望を与える者。その程度では我にとっての絶望には値しない！」

「うおおおおおっ……ぐわあああああああああああ！」

「くっ…うぅっ……キャアアアアアアア！！」

邪神セト　ＬＰ１↓０
スクルド　ＬＰ？

どうなった!?ああは言ったもののスクルドの身体は生まれつき弱い…

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…」

スクルド　ＬＰ１

「スクルド!!」

倒れそうになるスクルドを支える。

「へへへへへへ…」

…バカな…まだ立ち上がってくるというのか…

「そ、そんな…」

「スクルドよォ!テメェごときに俺が倒されるわけがねェだろォォ!……ウグッ!!…ぐあああああ!」

そう言い残した後、魔法陣が収束しセトは消えた。

「スクルドが本気になって、お前を倒せないわけがないだろう」

「……ディスペア、セトを倒したんだよね?」

「……（コクリ）」

返事をした後、スクルドは気を失った。

「やっぱり、無理がたたったね」

「ロキ、いたのなら助けてくれてもよかったんじゃないのか？」

「僕の力じゃ君達の結界の中には入れなかったんだ。悪かったね」

「なら、スクルドを部屋に運んでくれないか？」

「いいけど、その間に僕がもらっちゃうかもよ？スクルドを」

「…我が運ぼう」

時の杖を浮かせて、スクルドをお姫様抱っこで運ぶ。この運び方が1番負担がかからず、なおかつ慣れている。実際に姫だから運び方も間違っていないはずだ。

ロキは冗談で言ったのだろうが、万が一ということもあり得る。

「ちぇ、残念」

軽く本気だったけどね。セレナに怒られそうだけど。いや、セレナなら怒らずに茶化すところかな？

「…身体の弱いスクルドにはやはりこのデュエルはつらかったか…我1人で戦うべきだったな」

「…そんなことないよ」

「起きたのか」

「一緒に戦えて、私は嬉しかったよ。まともに一緒に戦ったのは今回が初めてだから」

結局私は役に立てなかったけど…

「…もう休め。これ以上の負担は避けるべきだ」

スクルドを部屋のベッドに寝かして、部屋を出た。

邪神セト強襲　後編（後書き）

今回のオリカ、『極神の力』と『ロキの気まぐれ』はユタ様から投稿していただいたものです。ありがとうございました。また、『光臨への備え』の効果はこちらが投稿していただいた効果をそのまま発動したものです。葦切様、前回は効果を変更してしまってすみませんでした。

第７４話　神界の日常　（前書き）

なんというｇｄｇｄ…けれどこれでも頑張った。暖かい目で見てください

第７４話　神界の日常

～～～最高神界・ディスペア城～～～

「ねぇ、ディスペア。せっかく神界に戻ってきたんだし、今日ぐらい一緒に出かけようよ」

「キッヒャッヒャ。怪我はもういいのかい？ディスペアは邪神セト戦から２時間で回復してたからちょーびっくりだったけど、君はまだなんじゃないの？」

「でも、下界に戻ったら一緒にいること…あまりできなくなっちゃうし…」

「……わかった。そこまで言うのなら行こうか」

神界で一緒にスクルドと出かけるのは…何百年ぶりだ？

「ロキ、行ってくるから、高町たちの事は任せるぞ」

「なんでだよ」

「慣れているだろう」

～～～神界～～～

「ん？あの木は…確か…」

～～～幼少期・回想～～～

「ほら、早く登ってこいよ」

「えー、登れないよー…」

「ほら、手を貸してやるから」

「う、うん…」

登ったと思った次の瞬間…

「キャア！」

「！！うおお！？」

木から落ちた。

「「……あはははははははは」」

～～～回想終了～～～

まだ我ら最高神が生まれて間もないころにスクルドと登ったことがあるな。落ちたが。

「スクルド、あの木の上に登ってみないか？」
「登れないよ～。私昔から木のぼりなんて…」
「手を貸してやる」
「うん…」
今回は登れた。
「あっ…この木って…」
「思い出したか？」
「あの時は落ちたんだっけ」
「…そうだな。で、こういった時に決まって冷やかしに来るのがヘイムダルだったな」
「やぁ、ラブラブだね。幼少期のころに街中で平気で1つのジュースを2人で飲んでたり間接キスなんて気にもせずにアイス食べてたバカップルのお二人さん」
噂をすればなぜかビフレストのある場所にいるはずなのにやってくる。それがヘイムダルクオリティー。神界の定番というか常識だ。毎回どうやって現れるのか不思議に思う。
「ヘイムダルか。ビフレストの見張りはどうした」

「…ヘイムダル最低」（バカップルはほんとのことだったけど）

「ｏｒｚ…ちょっと首吊って死んで来る」

ああ、ヘイムダルはスクルドに気があったな。今でもあるのか？

「まあ、少し最低と言われたくらいで首なんか吊るな。ホルスやアテナ、ゼウスに迷惑するだけだ」

「最低って言われて落ち込まない方がおかしいだろ！ディスペア、お前スクルドに最低って言われたら絶対落ち込むだろ！立ち直れないだろ！絶望するだろ！」

「……（明後日の方向を向く）」

「聞こえないふりするなよ…」

「私、ディスペアのこと最低なんて言わないもん」

「さすが幼馴染、よく互いのことを理解してるよ。俺はビフレストに戻るわ。買い物も終わったし。じゃあな」

「……結局あいつは何をしに来た？」

そもそもあいつは番外編以外は出番が無いのではなかったのか？

メタ発言はやめろよ　ｂｙヘイムダル

「…冷やかしに来たんじゃない？」

今何か電波が飛んできたみたいだけど…こんなことでディスペアに相談するのも迷惑だからやめておこう。

「…我らも行くとしよう。降りるぞ」

「え？あ、うん…って、きゃああ！」

「え？グッ！？」

我が木の下に降りた途端、スクルドが落ちてきた。つまり、今我はスクルドの下敷きだ。

「……」

私が急いでディスペアの上から降りるとディスペアが起きて黙って私のほうに歩いてくる。

「ご、ごめん…そ、そんなつもりじゃなくて……っ！！」

腰が抜けたらしくて、起き上がれない。何かされると思って目をつぶったけど、いつまでたっても何も来ない。

「…大丈夫か？」

「え？」

「木の上から落ちただろう？大丈夫かと聞いてるのだがな」

何で目をつぶった？

「う、うん…大丈夫だけど…」

怒らないの？と聞こうとしたけど、やめた。

「どこが大丈夫なのか聞きたいな。腰を抜かしているだろう……」

「……／／／」

ディスペアがいきなり私を持ちあげる…お姫様抱っこ、やめてくれないかな…恥ずかしい…嫌じゃないけど…それに、腰を抜かしたのは木から落ちたからじゃないし…

～～～2時間後・神界の町～～～

我は神界に来ると必ず行く喫茶店に行く。店とはいっても、今の神界では金は必要ない。だいぶ昔は必要な時期もあったが、無意味だと思ってやめたそうだ。

「お、久しぶりですねぇ、ディスペア様」

「そうだな」

「相変わらず新婚気分バリバリのようで」

「違う」

「これは残念。神界で最も仲の良い夫婦がとうとう…」

「そうも言ってない。スクルドは少し怪我をしてしまってな…新婚気分かどうかはスクルドに言ってくれ」

「どうなんですか？スクルド様」

「すう…すう…」

「静かにしてくれ、悪いが寝てしまったようだ」

どうやら抱きかかえられて移動している間に、睡魔に襲われてしまったらしい。昔からそうだな。お姫様抱っこで運ぶと何故か寝ている。

「しかしいいですなあ、ディスペア様はかわいい上に優しい女神さまが奥さんで…わたしは昨日妻に拾った白いカードを渡したら『もっと使えるものを拾ってきなさいよ！』と言われましてね。スクルド様なら絶対にこんなことは言わないでしょうし」

少し考えてみる。スクルドの場合は受け取るどころか遠慮するだろう。それよりもその白いカードの方が気になるが。

「ん…うぅ…？？？」

スクルドが起きたらしく、辺りをキョロキョロと見回す。

「え？何で私お姫様抱っこされてるの！？」

忘れてるのかよ。

「キャアア！」

慌てて降りようとしたのだろうが、腕から落ちた。

「いたたたた…」

「（さすが昔からの天然のドジっ子）」↑店のマスター

「ほら、立て」

「／／／うん」

「（キッヒャッヒャ。バレないように追いかけてきたけどこれはすごいレア映像だね。『神の記憶玉』はどこにやったっけ？早く保存しなきゃ）」

「マスター、いつもの茶とケーキ２つずつ」

「ああ、そう言えばそう言う店でしたね、ここ。少し待ってて下さい」

マスターは店の奥に入っていった。そして、少し時間がたつと紅茶とケーキとクッキーを持ってきた。

「む？なぜクッキーがあるんだ？我は茶とケーキと言ったはずだが」

「いえいえ、久しぶりに仲のいい２人を見れて安心しましたのでね、サービスですよ」

「ではもらうとしよう」

「あ、ありがとうございます」

「（ケーキを食べるディスペア…シュールだ…これも保存っと）」

～～～３０分後～～～

「そろそろ行くか」

「…うん…（ぐすっ）…」

「なぜ泣く？」

「どうして楽しい時間はこんなに短いんだろうって思って…」

「……」

声をかけてやることができなくなった。確かにこれからは辛い戦いが続くだろう。我も絶対に生きていられるという保証はない。考えたくはないが、この手でスクルドを殺めてしまう可能性すらある。そう考えれば、スクルドは神界で平和に暮らすべきだが…

「我はスクルドの意思を尊重しよう。これからは辛い戦いが続くこともある。それでも、我らについてくるか？」

「私は…私は…ディスペアについて行く！」

「…わかった。まあ、アカデミアに戻るまでの時間はまだまだある。それまでの間は共にいることのできる時間もある」

その間にはなるべくスクルドと一緒にいよう。

～～～ディスペア城～～～

帰り道には特に何もなかった。

「今帰ったぞ」

「ディスペア、お帰り」

「ロキ、我の留守中に何かあったか？」

「特に何もなかったよ」

「そうか」

明日は何をしようか？スクルドと相談しよう。

第７４話　神界の日常　（後書き）

楽しい時間って短く感じますよね。作者だけかもしれませんが。

作者「ヘイムダル、ちょっとこい」

ヘム「なんだよ？っつうか、ヘムって何だ」

作者「いちいちヘイムダルって入力するのメンドいから」

ヘム「オイ」

作者「それよりもお前、出番は番外編だけだろうが！なんで出てきたよ」

ヘム「俺は出番が欲しいんだよ！」

作者「番外編で思い切り活躍してるだろうが！…ボコられキャラで」

ヘム「そんな役いらんわ！」

追記：ディスペアの主人公設定に固有ディスクについて書き足しました。よければどうぞ。

第７５話　トールｖｓラミエル　前編（前書き）

例によって神話崩壊です。ラミエルのイメージはこんなんじゃない！という方はご注意を。

第７５話　トールｖｓラミエル　前編

～～～ディスペア城・玉座～～～

「スクルド、怪我は治ったか？」

玉座に座っているスクルドに向かって言う。トールが『ディスペアが王ならばスクルドは王妃だな』と言って、スクルドの分の玉座も作ったのだ。ちなみに、他の最高神もこの城に住んではいるが、個人で部屋を与えてあり、そこで過ごしている。玉座の件については、誰も文句を言わなかったので我とスクルドが座っている。座ると言っても、我は足を組んで頬杖をついた状態だが。普通の王の座り方は何故か気に入らない。

「ディスペアのおかげで治ったよ」

「我は何もしていないぞ？」

何かしたと言えば昨日一緒に出かけたぐらいではないか？

「一緒にいるだけで意味があるよ」

「それはよかった」

コツ…コツ…コツ

いきなり階段を上がってくる足音が聞こえた。

「ディスペア…少し探して欲しい人物がいるのだが」

「ん？オーディンか。一体誰を探すというのだ？」

「ラミエルを探して欲しい。理由は、昔トールがデュエルを挑み、惨敗したのだが、それはラミエルが手札の幻覚を見せて敗北に追い込んだということが分かった。それに激怒したトールがもう1度戦うといったのだ」

「成程な。少しだけ待っていろ」

しかし我の記憶が正しければラミエルはそんなことをするような者ではなかったはずだ…？

「終わったぞ。どうやら今現在、下界にいるらしい」

ラミエルのいる世界と場所を示した地図を渡す。

「すまないな。邪魔をした」

「気にするな。友の頼みならば断る理由は無い」

～～～トールの部屋～～～

「トール、場所が分かったぞ。これを持って行け」

そういってオーディンが我に渡したのは地図と『極神聖帝オーディン』『極神皇ロキ』のカード。

「……行ってくる」

ラミエル、お前は一体なぜあんなことを？お前はそんなことをするようなやつではなかった。お前に一体何があったというのだ？

～～～人間界・某所～～～

随分と機械仕掛けの建物が多いな…ここは一体何の世界だ？

「そこのあなた、止まりなさい」

「む？人間か…なんのようだ？」

「いきなりここに現れて、怪しく思わないのが異常です。抵抗せずについてきて下さい」

「我には今時間が無い。捕まえるというのなら、貴様を倒すまで」

我はミョルニルを構える。今ここで時間をつぶすわけにはいかない。

「！！」

人間の女は一瞬反応を見せたが、捕まえようとしてくる。正直言っ

て、ロキなら捕まえられかねない強さだ。

「ちっ…面倒な。悪いが少し痛い目を見てもらう！サンダーカノン！」

雷の弾丸をミョルニルで撃ちだしぶつける。直撃したのか、相手は気絶した。その後すぐに、空間の一部が裂けて、中からディスペアが出てくる。

「こんな世界は知らない…」

「ディスペア！？なぜここに？」

「その地図を渡したときは何も違和感がなかった。スクルドが幻術を払わなければ、分からなかっただろう」

あの程度の幻術にだまされるとは、我も堕ちたものだな。

「……幻術を払った。これで正確に見えるはずだ」

周りを見ると、先程のような機械仕掛けの建物は無く、巨大なジャングルの中だった。

「人間の女は獣だったのか」

「機皇神龍アステリスク召喚！トール、このジャングルを抜けるのには時間がかかり過ぎる。今では地図も意味が無い。アステリスクに乗って移動する」

「わかった」

アステリスクに乗る。するとアステリスクが浮上する。

「それにしても、随分と巨大なジャングルだな」

遥か彼方までもジャングルが続いている。この広すぎる世界のどこかにラミエルはいる。

「そうだな。アステリスクで移動しても、それなりに時間がかかる」

「スクルドはどうした？一緒じゃないのか？」

いつも必ず一緒にいるはずだが…？

「さすがにこの世界がジャングルだらけと聞いたときは連れてくる気がしなかった。熱帯林の中で汗をかくのも気持ちのいいものではないからな」

「…神って汗かくのか？」

「…あ。……ま、まあ迷っても帰ることができなくなるからな」

スクルドは時空間移動魔法が使用できない。我とはぐれれば、確実に帰ることができなくなる。

「それは確かにな」

話していると、目の前にドーム状の闇に覆われた場所が現れた。試しにインフィニティー・ネメシス・ストリームをぶつけてみたが、まるで効果が無い。

「やはりダメか」

「どうする？このままでは入れんぞ？」

「どうやらこの中に瞬間移動することもできないようだ」

剣で空間を斬ってみたが、中には入れなかった。

「やはりここはいつもの通り究極神で強行突破…」

「中の空間ごと潰すつもりかお前は。我にいい考えがある」

「聞こうか」

トールが何をするのかを話してきた。

「本当に成功するのか？」

失敗すれば木っ端みじんだぞ？

「大丈夫だ。ハァァァッ！！」

トールはミョルニルで闇の結界を叩きつけた。すると、闇の結界がガラスのように砕け散った。その空間の中にあったのは、外見はいかにも荒れ果てた城だった。

「これは…城？」

「そのようだな。だが、外見はもはや誰かが住んでいるというよう

なものではないな」

トールの言うことはもっともだが、とりあえず城門を開けて入る。

「待ってたよ、トール。フフフフ…」

いきなり上の方から声が聞こえる。

「…ラミエル…ディスペア、我と奴の勝負に手を出すなよ」

「そんなことは分かっている」

～～～荒れ果てた城最上階・玉座～～～

「久しぶりだねトール。わたしに一体何の用かな?」

「貴様にデュエルを挑みに来た」

あの時のデュエル…幻術で我は敗北させられた。その借りを返しに来たのだ。

「へぇ。あの時のこと、解かったんだ。バレないようにしたつもりだったんだけどな」

それとも、トールのとなりにいる奴かオーディンのおかげかな?それにしても、あいつ誰?

「まあいいや。せっかく来てもらったんだし、やってあげるよ」

わざわざ遠くから来てくれたんだから、今回ぐらいは小細工なしでやってみるかな？

「「デュエル」」

「じゃあこちらから行かせてもらうとしよう。ドロー」

ラミエル…以前の奴のデッキは神話の天使デッキ…さあ、どう出る？

「フィールド魔法『オレイカルコスの結界』発動」

謎の文字が書かれたフィールド魔法がラミエルの持っている杖の宝玉に入った。どうやらあの杖がラミエルのデュエルディスクのようだ。それよりも…

「オレイカルコスだと！？」

発動したこの結界から出ることはできない…一時期ディスペアを除いて我ら最高神すら危機感を覚えた暗黒のフィールド魔法…

「フフフフフ…このフィールドで君を闇の底に葬ってあげるよ」

この深い闇より生まれし邪悪なフィールド魔法でね。

第７５話　トールｖｓラミエル　前編（後書き）

アステリスク…あの効果のままならそれなりに使えるカードのはず…
あと、レイアウトを変更してみました。

トールｖｓラミエル　後編（前書き）

後編ですね。前書きに書くことが特にないという…

トールｖｓラミエル　後編

～～～荒れ果てた城～～～

「オレイカルコスの…結界…」

「このフィールドで敗北すれば、魂を吸収されるなんて生易しいものじゃなくて死ぬからね。わたしか君のどちらかが死ぬ。これは『オレイカルコスの結界』によって決められた運命だ。わたしは魔法カード『オレイカルコスの断罪』を発動。わたしのフィールドに『オレイカルコスの結界』が存在する時、相手に１５００ポイントのダメージを与える」

「先攻でダメージだと…クッ…」

トール　ＬＰ８０００→６５００

オレイカルコスのカードは闇より生まれしカード…その効果はディスペアでも知らない。一体奴はどのような効果のカードを使ってくる！？

「わたしはこれでターン終了。さあトール、君のターンだ」

ラミエル
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
オレイカルコスの結界

「我のターン」

オレイカルコスの結界…あのフィールド魔法がある限りラミエルは魔法・罠ゾーンにもモンスターが召喚できる…さらに、ラミエルのモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。そして、魔法・罠ゾーンのモンスターはモンスターゾーンにモンスターがいない時にしか攻撃できず、オレイカルコスの結界は魔法・罠・モンスター効果を受けない。

「我はカードを1枚伏せる！『極星獣グルファクシ』召喚！グルファクシでダイレクトアタックだ！」

「フッ、そんな攻撃が簡単に通るわけないだろう？手札から『オレイカルコス・ガーディアン』を特殊召喚する。このモンスターは相手の攻撃宣言時に手札から守備表示で特殊召喚できる。まあ、ガーディアンは『オレイカルコスの結界』がなかったら除外されるけどね」

守備力は２０００…グルファクシでは倒せない。

「カードをもう1枚伏せ、ターンエンド」

トール
ＬＰ６５００
手札×３
フィールド
極星獣グルファクシ　ＡＴＫ１６００
伏せカード×２

「わたしのターン」

天使と神では圧倒的に力に差がある。この力の差を埋めているのは、このオレイカルコスの力だ。

「わたしはフィールド魔法『オレイカルコス・デウテロス』を発動する！通常フィールド魔法は１枚発動されれば古い物が破壊されるが、デウテロスは同時に発動することができる。そして、デウテロスの効果によりわたしは１ターンに１度、わたしのフィールド上のモンスター１体につき５００ポイントライフを回復する。この効果を使用し、わたしはライフを５００ポイント回復する」

オレイカルコス第２の結界が発動し、ラミエルのライフが５００ポイント回復した。

「わたしは『オレイカルコス・ガーディアン』を攻撃表示に変更して、極星獣グルファクシを攻撃しよう」

「チィッ…トラップ発動『神の桎梏グレイプニル』！デッキから『極星獣タングニョースト』を手札に加える！そして、このカードは自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊された時に特殊召喚できる！我は『極星獣タングニョースト』を守備表示で特殊召喚する！」

トール　ＬＰ６５００→６４００

「わたしはこれでターンを終了しよう」

ラミエル
ＬＰ８５００

手札×３
フィールド
オレイカルコス・ガーディアン　ＡＴＫ１７００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス

「我のターン！我は『極星獣タングニョースト』を攻撃表示に変更する！タングニョーストが守備表示から攻撃表示になった場合、デッキから『極星獣』を１体特殊召喚することができる！現れろ、『極星獣グルファクシ』！さらに『クリッター』召喚！」

「へえ、３体のモンスターにチューナーか。君があの時よりも成長したのは分かったよ。でも、並のシンクロモンスターじゃわたしのライフを０にすることはできないぞ？」

「フン、勝手に言っていろ。レベル３の『極星獣グルファクシ』と『クリッター』に、レベル４の『極星獣グルファクシ』をチューニング！星界の扉が開く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん。大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ！シンクロ召喚、光臨せよ、『極神皇トール』！」

光と共に、極神皇トールが鉄槌を持って現れる。ちなみに今トールが使っている三極神は、効果が弱体化している方の三極神だ。我が貸すと言っても、全く聞かずに受け取らなかった。

「これはすごいね。さすがのわたしも一筋縄では倒せそうにない」

「墓地に送られた『クリッター』の効果が発動。こいつがフィールドから墓地へ行った時、デッキから攻撃力１５００以下のモンスター１体を手札に加える。我は『極星天ヴァルキュリア』を手札に加

える。さらにトラップ発動『トールの襲撃』。我の場に『極神皇トール』がいるとき、相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

「くっ…なかなかやるね」

ラミエル　ＬＰ８５００→７５００

「行くぞ！『極神皇トール』で『オレイカルコス・ガーディアン』を攻撃！サンダー・パイル！」

極神皇トールがその鉄槌でオレイカルコス・ガーディアンを叩き潰した。

「うわあああああああっ！！」

ラミエル　ＬＰ７５００→５２００

「さすがに痛かったな…『オレイカルコス・ガーディアン』の効果発動。このカードが戦闘で墓地へ送られた場合、手札からレベル４以下の『オレイカルコス』と名のつくモンスター１体を特殊召喚できる。

わたしは「オレイカルコス・ウォーリアー」を特殊召喚する」。

ああ、トールのとなりにいるやつ、どこかで見たことあると思ったら最高神の王、ディスペアだったんだ。トールに勝ててもさすがにあいつには勝てないかな？空間移動魔法の準備だけはしておくか。

効果を使わなかったのは『オレイカルコス・ウォーリアー』を特殊召喚するためだ。『オレイカルコス・ガーディアン』は戦闘で破壊された時のみ効果が発動するモンスターだからね。

「我はこれでターンエンドだ！」

トール
ＬＰ６４００
手札×４
フィールド
極神皇トール　ＡＴＫ３５００

「わたしのターンだな」

トールのフィールドにはわたしが未だかつて見たことのない強力なシンクロモンスター…正直言って、神かなんかの力が宿ってるように思える。

「わたしはフィールド魔法『オレイカルコス・トリトス』を発動。このカードもフィールド魔法だが、前のフィールド魔法を破壊することなく使用できる」

オレイカルコス第３の結界が張られる。確か効果は、コントローラーのモンスターには相手の魔法・罠の効果が効かなくなる効果だ。

「そして魔法カード『オレイカルコスの魔術書』を発動する。この魔法カードの効果で、わたしは『オレイカルコス』と名のつくフィールド魔法１枚につき、カードを１枚ドローする。わたしのフィールドには『オレイカルコスの結界』『オレイカルコス・デウテロス』『オレイカルコス・トリトス』がある。よって３枚ドローだ」

さらに、ラミエルはデウテロスの効果によりライフを５００回復した。

ラミエル　ＬＰ５２００→５７００

「わたしはフィールド魔法『オレイカルコス・フォルス』を発動する！」

「何！？」

「バカな！」

オレイカルコスは３重結界のはず…！

「フフフフ…『オレイカルコス・フォルス』の効果によって、わたしのフィールドのモンスターは相手のモンスター効果を受けなくなる。さらに、モンスターカードゾーンに存在する『オレイカルコス』と名のつくモンスターの攻撃力は７００ポイントアップする。当然、オレイカルコスの３重結界が破壊されることは無い」

オレイカルコス・ウォーリアー　ＡＴＫ２１００→２８００

これで奴のモンスターカードゾーンのオレイカルコスモンスターの攻撃力は１２００ポイント上昇する…

「まあそれでも、君のモンスターには勝てないからね。わたしはこれでターン終了だ」

ラミエル
ＬＰ５７００
手札×３

フィールド
オレイカルコス・ウォーリアー　ＡＴＫ２８００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス
オレイカルコス・トリトス
オレイカルコス・フォルス

「我のターンだ！」

奴のフィールドにはオレイカルコスの４重結界…

「行け！『極神皇トール』！『オレイカルコス・ウォーリアー』を攻撃！サンダー・パイル」

「ぐううっ！『オレイカルコス・ウォーリアー』の効果発動…このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られたとき、デッキから１枚ドローする…」

ラミエル　ＬＰ５７００→５０００

「我はカードを１枚伏せターンエンドだ」

トール
ＬＰ６４００
手札×４
フィールド
極神皇トール　ＡＴＫ３５００
伏せカード×１

「わたしのターンだな。わたしは最後のフィールド魔法『オレイカ

ルコス・ラスティス』を発動する！」

オレイカルコス第５の結界が張られる。結界の規模はかなりの物だ。

「『オレイカルコス・ラスティス』…当然、オレイカルコスの４重結界が無くなることは無い。わたしのフィールドのモンスターの攻撃力は８００ポイントアップし、１ターンに１度、わたしは墓地から『オレイカルコス』と名のつくモンスター１体を特殊召喚することができる。わたしは『オレイカルコス・ウォーリアー』を特殊召喚しよう」

オレイカルコス・ウォーリアー　ＡＴＫ１６００→３６００

「攻撃力が神を上回っただと！？」

「『オレイカルコス・ウォーリアー』で『極神皇トール』を攻撃する。オレイカルコス・スピアー！」

「ぐあああっ！？たった１００ポイントでこの衝撃だと！？」

トール　ＬＰ６４００→６３００

「オレイカルコスの５重結界の力を甘く見ないほうがいいと思うが…まあいい。わたしは『オレイカルコス・ブレイカー』を守備表示で召喚。『オレイカルコス・デウテロス』の効果によって、わたしのライフは１０００ポイント回復する」

ラミエル　ＬＰ５０００→６０００

ラミエルのライフは６０００ポイント。さらにラミエルのモンスタ

ーの攻撃力は２０００ポイントアップする。トールのモンスターでは『極神聖帝オーディン』でようやく勝利がかなうレベルだろう。

「わたしはこれでターン終了だ」

「ならば貴様のエンドフェイズに、墓地から『極星獣グルファクシ』を除外し、『極神皇トール』を復活！そして、８００ポイントのダメージを与える」

ラミエル
ＬＰ５２００
手札×３
フィールド
オレイカルコス・ウォーリアー　ＡＴＫ３６００
オレイカルコス・ブレイカー　ＤＥＦ２２００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス
オレイカルコス・トリトス
オレイカルコス・フォルス
オレイカルコス・ラスティス

「我のターンだ！伏せカードオープン、『天界の煌めき』！手札を１枚捨て、デッキと手札から、レベル４以下の『極星』２体を特殊召喚する！ただし、この効果によって特殊召喚したモンスターが破壊された場合、我は１体につき２０００ポイントのダメージを受ける！

現れろ『極星獣ガルム』！『極星霊リョースアールヴ』！さらに『極星天ヴァルキュリア』召喚！レベル４の『極星獣ガルム』と『極星霊リョースアールヴ』にレベル２の『極星天ヴァルキュリア』をチューニング！北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！今こそ、

星界の神々を束ねその威光を示せ！シンクロ召喚、天地神明を統べよ！最高神、極神聖帝オーディン！」

「へえ、これがうわさに聞く最強のシンクロモンスターか。でも、思っていたより強くはなさそうだね」

まあ当然だろうな。この三極神の力は、前にディスペアが吸収している。

「オーディンの効果発動！エンドフェイズまで、魔法・罠の効果を受けない！
さらに魔法カード、『オーディンの知識』を発動！自分フィールド上に『極神聖帝オーディン』が存在する時、墓地とデッキからカードを1枚手札に加える！
我は墓地から『星界の魔法陣』を手札に加え、デッキから『ロキの気まぐれ』を手札に加える。
さらに、墓地から手札に加わった魔法カード『星界の魔法陣』の効果が発動、このカードは墓地から手札に加えられたときにのみ発動できる。エクストラデッキから『極神聖帝オーディン』『極神皇トール』『極神皇ロキ』のいずれかを、シンクロ召喚扱いで特殊召喚する！光臨せよ、『極神皇ロキ』！」

「三極神を揃えたか。だが、わたしのフィールドには『オレイカルコス・ブレイカー』がいる。このモンスターは、相手の攻撃対象になった時にこのカードを破壊し、バトルフェイズを終了させる効果がある」

「フン。手札より魔法カード『ロキの気まぐれ』発動。我のフィールドに『極神皇ロキ』が存在する時、デッキからトラップカードを発動できる。我は『絶対力』を発動。このターン、三極神は同時に

ダイレクトアタックできる！三極神でラミエルにダイレクトアタック！」

「フフフ…ハハハハハ！君は今、わたしの最後の罠にかかった！『オレイカルコス・ラスティス』の効果発動！相手モンスターが攻撃してきた時、わたしの場にモンスターがいれば、その戦闘ダメージは相手が受ける！」

「な、なんだと！！ぐあああああああああああっ！！」

トール　ＬＰ６３００→－４５００

バカな！？あの状況からトールが敗北しただと！？

「フフフフフフ…ここで君をオレイカルコスの力で殺してもいい所だけど、今日はわざわざ遠い場所から来てくれたし、君の強さも見れたからね。今回だけは見逃してあげるよ。次に戦うときは、容赦しないからね。また会おう」

ラミエルは突然その場から消えてしまった。

「クッ…我の力が、天使であるラミエルに劣るというのか…！」

そうではない。素で戦えば、天使は神力を放つ最高神には近付くことさえ困難なはずだ。この力の差を埋めているのは紛れもなくオレイカルコスの５重結界。

「今は身を引くぞ、トール」

「クッ…仕方があるまい」

～～～ディスペア城～～～

「オレイカルコスの５重結界…」

「またなんか凄そうなのが出てきたなぁ」

「八神、すごそうなんてレベルではない。最高神と天使の力の差を埋めるほどの力…トールがここまでけがを負うとは…わたしも聞いたときは驚いたぞ」

「まあ、お前達人間に天使がオレイカルコスを使うなんてありえないと思うけどね。ヒャーッハハハハ！」

天使は人間相手に本気を出すことが滅多にない。基本的に人間を見下している奴の方が多いからね。それよりも僕は、オレイカルコスのカードの出所が気になったかな。絶対に偶然なんかじゃないと思うんだけど…

「ラミエルが本当に邪悪な力に染まったのか、それともオレイカルコスの力に封じ込められているのか確かめる必要がある。次に戦うときは今回のような失敗はしない」

それに、最高神に匹敵する巨大な力、無視するわけにはいかん。

トールｖｓラミエル　後編（後書き）

今回のオリカ『トールの襲撃』『オーディンの知識』はユタ様から投稿していただいたものです。ありがとうございました！

第７６話　黒き羽根に宿りし神（前書き）

今回からディスペアの究極神デッキのベースが変わります。なぜかというと前のデッキではロック系のデッキになってしまい、デュエルが進行しないからです。
だからと言ってこんなデッキにしなくてもよかっただろ、という方もいらっしゃるかと思います。でも、私なりに考えた結果です。どうか暖かい目で見てくださるようお願いいたします。ただ、今回の設定上普段からこのデッキを使うわけではありません。ちなみに、フェイトとかぶるのでフェイトのデッキは別の物に変更する予定です。

第７６話　黒き羽根に宿りし神

～～～ディスペア城～～～

「何？デッキが機能しない？」

「その通りだ。どうやら、究極神はこのデッキの力では抑えきれないらしい」

「まあ、基本がレベル１のモンスターだからね…」

「それならここに開発中だったデッキがあるが…」

渡されたデッキの内容を確認する。

「これはブラックフェザーではないか。確かに大量展開はできるが、下級モンスターばかりでは究極神の力には…」

その次の瞬間、神はこのＢＦデッキに入り込んで行った。

「こんなことが…」

今まで神自らデッキに入るということは全くなかった。一体…？

「このＢＦデッキは、ただのＢＦではない。各パラレルワールドから集めた特殊な力を持つ白いカードと普段よりも強力な力が利用さ

れ生まれたＢＦを融合させたものだ」

つまり、このデッキのパワーを神は認めたということか。

「そろそろフィニッシャーが足りないあのデッキでは辛いだろう」

否定はできんな。攻撃力は究極神を除けば最大４２００、基本値だけなら２８００だ。それを除くモンスターの攻撃力は殆どが１５００以下。魔のデッキ破壊ウイルスを受ければ、致命傷になる。

「ではこのデッキをもらうとしよう」

※内容

ラーの翼神竜×１　オシリスの天空竜×１　オベリスクの巨神兵×１　ＢＦ－暁のシロッコ×２　ＢＦ－蒼炎のシュラ×３　ＢＦ－黒槍のブラスト×３　ＢＦ－月影のカルート×３　ＢＦ－疾風のゲイル×１　ＢＦ－極北のブリザード×３　ＢＦ－熱風のギブリ×１　ＢＦ－銀盾のミストラル×１　ＢＦ－空風のジン×１

封印の黄金櫃×２　黒い旋風×１　闇の誘惑×１　スワローズ・ネスト×１　貪欲な壺×３　悪夢再び×３　ダーク・バースト×３　黒羽の宝札×１　ゴッドバードアタック×３　激流葬×１　フリッグのリンゴ×１

「だがいくつか質問させてもらう。悪夢再びはブリザードが入って

いるから良しとしよう。フリッグのリンゴが入っているのはなぜだ？」

「お気に入りだから。ちなみに抜くと、デッキのパワーバランスが崩壊するぞ？」

「……では精鋭のゼピュロスが入っていないとはどういうことだ？」

「え？究極神のライフコストきついのに入れるのか？」

「……」

何も言い返せんな。さて、試しに行くか。

「最後に一つだけ注意しておこう。そのカードは1枚1枚が強力な力を持つカードだ。よって、アカデミアで支給されたディスクで召喚した場合にも現実のダメージは発生する。それだけは覚えておけ」

オーディンの注意を頭に入れ、部屋を出る。

～～～ディスペア城・5階～～～

「ロキ、このデッキを試すのに合っている奴を知らないか？」

「じゃあ僕が相手になってあげるよ」

「では10分後、外で待っているぞ」

「ＯＫ」

～～～１０分後・ディスペア城の庭～～～

何故かは知らないが、今現在城にいる全ての者がこの戦いを見ようとしている。

「「デュエル」」

「先攻は僕がもらうよ。僕のタァーン！…とりあえずこのモンスターをセットしてタァーンエンド」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
セットモンスター×１

「我のターン…」

ちっ…まるでこのデッキの戦略が理解できない…とりあえずは普通に攻めるか。

「我は『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚する。そしてセットモンスターに攻撃を行う」

「僕のセットモンスターは『カードガンナー』だ。破壊されたから

1枚ドローさせてもらうよ」

「『ＢＦ－蒼炎のシュラ』効果発動。このカードが相手モンスターを破壊し、墓地へ送った時デッキから攻撃力１５００以下の『ＢＦ』と名のつくモンスター1体を特殊召喚できる。我は『ＢＦ－空風のジン』を特殊召喚する」

「へぇ」

ディスペアお得意の『マススキル』か。初めて使うデッキや魔法でも完全に使いこなすチートスキルだ。

「いいな～神様は。レアカード好きなだけ使えて」

「八神、神になどならない方がいい…我らのように自由行動ができる神ならともかく、場合によっては数えきれないほどの時を椅子にただ座って過ごすことすらあるのだからな」

「う…」

「メインフェイズ2に移行。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド

ＢＦ－蒼炎のシュラ　ＡＴＫ１８００
ＢＦ－空風のジン　ＡＴＫ６００
伏せカード×１

「ヒャッハハハハハ！僕のタァーン！僕はスカイ・コアを守備表示で召喚する！カードを１枚伏せてタァーンエンド！」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
スカイ・コア×１　ＤＥＦ０
伏せカード×１

さあディスペア…そのゴッドバードアタックで破壊してみなよ。僕の機皇帝がディスペア、君を叩き潰すからね。ヒャーッハッハハハハハハ！

「我のターン。……『ＢＦ－月影のカルート』召喚！行くぞ、ロキ！我が最強の神の力を見るがいい！！３体のモンスターと我のライフ半分を生贄に…『究極神オシリス』召喚！！」

究極神オシリス　ＡＴＫ？→６０００

「さすがに神だけあるね…召喚の衝撃に耐えるだけで随分と神力を持って行かれたよ」

「それは悪かったな。我はこれでターンエンドだ」

「あれ?何でディスペア君は攻撃しないんや?強力なモンスターがいるんやから攻撃してもおかしくないやろ」

「『スカイ・コア』には1ターンに1度戦闘では破壊されない効果がある。攻撃しても意味が無い。そして、もう1つだけ付け加えておくと究極神はモンスターではないぞ」

「ふ~ん…」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ６０００
伏せカード×１

「僕の…タァーン!」

ディスペアのフィールド上のレベル１１以下のモンスターは、究極神の能力で攻撃できない。そして僕のフィールドには戦闘で破壊されない『スカイ・コア』…2体目の神が出てこない限りは安全だけど…あの伏せカードは９９%『ゴッドバードアタック』…とりあえず様子を見るかな?

「トラップ発動!『インフィニティー・デスサイズ』!僕の場にこのカード以外の魔法・罠カードが無い時のみ発動できる!相手フィールド上の魔法・罠カードをすべて破壊する!キッヒャッヒャ!!」

「……」

破壊されたカードは…！？悪夢再び！？

「大方ゴッドバードアタックと読んでいたのだろうが、それは大いなる間違いだ」

今の我に浅はかな戦術は通用しない！

「僕はこれでターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
スカイ・コア　ＤＥＦ０

「我のターン」

ロキ、『スカイ・コア』は確かに１ターンに１度戦闘では破壊されない。そして我のフィールド上のレベル１１以下のモンスターは、究極神の能力によって攻撃ができない。だが、我のレベル１２以上のカードは神だけではない。

「我は『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚する。このモンスターの召喚に成功した時、墓地からレベル４以下の『ＢＦ』と名のつくモンスター１体を特殊召喚できる。

我は『ＢＦ－月影のカルート』を特殊召喚する。さらに、我のフィールドに『ＢＦ』と名のつくモンスターが存在することにより手札

から『ＢＦ－疾風のゲイル』を特殊召喚する！
レベル３の『ＢＦ－月影のカルート』にレベル２の『ＢＦ－極北のブリザード』をチューニング…シンクロ召喚、『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』！さらに『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』にレベル３の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング！来い！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

「レッド・デーモンズ？」

ディスペアのデッキにはレベル１２のカードは神だけじゃない！すっかり忘れてた…『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』…

「我はこれでターンエンド」

どうやらロキも気づいたようだな。だが、ロキの機皇帝デッキの中にある除去カードは全てが『機皇帝』が存在する時のみ発動できるカードだ。

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ４０００
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

「僕のタァーン！」

さて、負けるのも癪だし、そろそろウルズと約束した時間だから終わりにしようかな？ウルズ待ってるだろうな。

「僕は魔法カード『インフィニティー・ファイナル』を発動。機皇帝のコアか機皇帝が存在する時、僕のフィールド上のモンスターの攻撃力の合計を相手フィールド上のモンスターの攻撃力の合計から引いて、その数値を僕のライフが上回っていた場合、相手モンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える！」

「究極神オシリスは魔法カードの効果の影響を一切受けない！よってダメージは３０００ポイントのみだ！」

ディスペア　ＬＰ４０００→１０００

「カードを1枚伏せてタァーンエンド！」

「我のターン！」

「悪いけどディスペア、僕には用事があるから、ここら辺で終わらせてもらうよ！トラップ発動『自爆スイッチ』！自分と相手のライフに７０００ポイント以上の差がある時、互いのライフを０にする！ヒャッハハハハハハハ！」

ウルズとの約束もあるけど…正直言ってライフをさっさと０にしたのは究極神の攻撃を受けたくなかったからだ。あんな攻撃をまともに受けたら、僕の身体がもたない。対戦相手になるって言ったのは僕だけど、それだけは勘弁してほしい。…後で自爆スイッチはデッキから外しておこう。こんな使いにくいカードはこのデッキには入れられない。

ディスペア＆ロキ　ＬＰ０

…ロキの奴め、究極神の召喚を見越してこのようなトラップを…だ

が、あの魔法カード『インフィニティー・ファイナル』は1度使えばデッキから消えるはず…一種の切り札を今のデュエルで使ってよかったのか？

～～～ディスペア城・7階～～～

階段を上っていると、突然カードが1枚落ちてきた。

「…名もない白いカード…」

そのカードは何も書かれていないイラスト部分が白いカードだった。カードの種類としてはシンクロモンスターに入るらしい。……このカードは一体…？

第７６話　黒き羽根に宿りし神（後書き）

ディスペアのＢＦは、神召喚のためによりモンスター（サルベージ含む）の数を増やしたものです。究極神以外のオリカは、このＢＦデッキでは出ません。（作者のデッキだから）

300000アクセス記念！（前書き）

今回のネタは一言で言うと『アキさんと遊星』です。ええ、予想がつく方の方が多いですとも。

３００００００アクセス記念！

～～～ディスペア城・１０階、玉座～～～

「ん？見覚えのない小包が来てるな。開けてみるとしよう」

「ディスペア…これって、デッキだよね？」

「そのようだな」

「手紙があるよ。読んでみるね」

“拝啓　ディスペア様、スクルド様。～～～その後３枚分の手紙が続く～～～例によって、俺からデッキを送りますのでデュエルしてみてください。　ヘイムダル”

「敬語のヘイムダルは違和感あるな…ん？手紙はどこへやった？」

「あ、あれ？持ってたんだけど…」

「まあいいか。たまには我らでデュエルするか？」

「……」

ディスペアと…

「うん、やろう！」

「「デュエル」」

「我の先攻、『キラー・トマト』召喚！カードを2枚伏せてターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
キラー・トマト　ＡＴＫ１４００
伏せカード×２

「私のターン……」

「スクルド、遠慮はいらない。本気で来い！」

「じゃあ、装備魔法『魔界の足枷』を『キラー・トマト』に装備するよ。装備モンスターの攻撃力と守備力は１００ポイントになるんだ」

「なんだと！？」

「さらに『夜薔薇の騎士（ナイトローズ・ナイト）』を召喚して、効果発動。手札から『返り咲く薔薇の大輪（イバル・ローズ）』を特殊召喚するよ。レベル４の『返り咲く薔薇の大輪』にレベル３の『夜薔薇の騎士』をチューニング！シンクロ召喚、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！装備魔法『憎悪の棘（リバ）』を『ブラック・ローズ・ドラゴン』に装備」

ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００→３０００

「……」

分かったぞ、このデッキの正体が。キラー・トマトで呼ぶのは『ユベル』だろう。で、スクルドの『ブラック・ローズ・ドラゴン』でボコボコにすると。多分スクルドの手札には『レインボー・ヴェール』があるに違いない。
なんだこのデッキは!?ふざけるなヘイムダル!!

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』で『キラー・トマト』を攻撃するよ。『憎悪の棘』の効果で、『キラー・トマト』は戦闘では破壊されないよ」

「ぐあああああ!」

ディスペア　ＬＰ８０００→５１００

キラー・トマト　ＡＴＫ１００→０　ＤＥＦ１００→０

「カードを1枚伏せてターンエンド」

スクルド
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
＋憎悪の棘
伏せカード×１

「我のターン、チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を守備表示で召喚…」

ブリューナクで一掃してくれる！

「永続トラップオープン！『虚無空間（ヴァニティー・スペース）』！」

「な！…キラー・トマトを守備表示に変更する」

虚無空間はフィールド上に存在する限り特殊召喚ができなくなる永続トラップ、そしてこのデッキには除去手段がネフティスの鳳凰神とユベル第二形態しかない！

我の伏せカードはヘイト・バスターと亜空間物質転送装置、役に立たん！

「ターンエンドだ」

ディスペア
ＬＰ５１００
手札×３
フィールド
キラー・トマト　ＤＥＦ０
＋魔界の足枷
ゾンビキャリア　ＤＥＦ２００
伏せカード×２

「私のターン！私は『ブラック・ローズ・ドラゴン』で『キラー・トマト』を攻撃！ブラックローズ・フレア！」

「うおおおおお！？」

ディスペア　ＬＰ５１００→２１００

クッ…スクルドにこんな真似をさせるとは…ヘイムダルめ…
絶望を与える側の我が絶望を与えられている…！！

「私はカードを1枚伏せてターンエンドだよ」

スクルド
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
＋憎悪の棘
虚無空間
伏せカード×１

「我のターン！…！」

まだ隠し玉が残っていたか！

「魔法カード『ブラック・ホール』発動！フィールド上のモンスターをすべて破壊する！！」

これでフィールド上のモンスターはすべて破壊される！

「カウンタートラップオープン！『神の宣告』！」

「バカなあああああああ！！？」

神が神に宣告されるだと…！？

「ならば『グレイブ・スクワーマー』を攻撃表示で召喚！カードを２枚伏せターンエンド」

ディスペア
ＬＰ２１００
手札×０
フィールド
キラー・トマト　ＤＥＦ０
＋魔界の足枷
ゾンビキャリア　ＤＥＦ２００
グレイブ・スクワーマー　ＡＴＫ０
伏せカード×４

「私のターン」

「スタンバイフェイズにトラップ発動『バトルマニア』！このターン、相手の守備モンスターは攻撃表示となり、攻撃しなければならない！さらに２枚のトラップをオープン！『亜空間物質転送装置』！『キラー・トマト』と『ゾンビキャリア』を除外！」

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』で『グレイブ・スクワーマー』を攻撃！ブラックローズ・フレア！」

「この時を待っていた！トラップ発動『ヘイト・バスター』！相手モンスターの攻撃対象に悪魔族が選択された時、そのモンスターと攻撃モンスターを破壊！そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

これによりカードが墓地へ送られることで『虚無空間』も消える！

「速攻魔法『我が身を盾に』！ライフを１５００ポイント払って、モンスターを破壊する効果を無効にして破壊する！」

スクルド　ＬＰ４０００→２５００

「ふ、ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁ！！ぐあああああああああああああ！！」

ディスペア　ＬＰ２１００→－９００

「やぁ、ディスペア、Ｍな君は最高だったよ。フフファハハハ…やばい、腹が痛い、ギャッハハハハハハ！（　＾∀＾）」

その後、スクルドの手札を見てみる。『レインボー・ヴェール』。

「ヘイムダル、死にたいようだな」

「わぁぁあ、待て、ほんの出来心だったんだ、スクルドがＳになってディスペアをボコボコにした図を写真に収めて置きたかっただけなんだ！…あっ！⊂（＾～＾。Д。）⊃」

口が滑った…俺オワタ…

「ディスペア、ＳとＭってなぁに？」

「スクルド、お前はこの世の汚れを知らない方がいい。健全なままで生きろ」

「う、うん…」

「さて、ヘイムダル。少し向こうへ行くぞ」

「わあああああああああああ、悪かった、許してくれ、頼む！」

その後…

「ぎゃあああああああああああああああ！！」

おぞましい叫び声が聞こえた。

「ディスペア…一体何やってるんだろう…？」

3000000アクセス記念！（後書き）

作者「よう。ヘム」

ヘム「……」

ヘイムダルは見る限りボコボコだ。

作者「よかったじゃないか、出番あったぞ。もちろんネタキャラ兼ボコられキャラだが」

ヘム「もう嫌だ…ｏｒｚ」

※ディスペアサイドの神々は基本的に放送禁止用語やＳＭなどの言葉と意味を知りません。ディスペアがＳＭの意味を知っていたのは前に人間から教わったからです。それ以外は知りません。

第77話　アカデミアへ復帰（前書き）

アカデミアに戻ります。始業式の校長の話がやたらと長かった…もう嫌だ…

第77話　アカデミアへ復帰

～～～ディスペア城10階・玉座の間～～～

「今言ったとおり、デュエルアカデミアに続くビフレスト及び神の扉の調整が完了した。いつでも行けるぞ」

「へぇ、ようやくか。待ちくたびれたよ」

「ただし、前にも言ったとおり時の流れが違う。ここでは1カ月過ごしたが、向こうではまだ1日しかたっていない」

その注意を聞くと、みんな神の扉に入っていった。

～～～デュエルアカデミア～～～

ホワイト寮はとても入ることのできる状況ではない。我らはどこに行こうか？……いい場所がある。

～～～校長室～～～

「というわけで、暫くここを使わせてもらうぞ？」

「ＯＫなノーネ」

今オーディンが校長室の整備を変えた。具体的に言えば、校長室のソファーの前にどう考えても大きいサイズのテーブルを創った。冷蔵庫などの基本的な物はとなりの部屋にあったから良しとする。クロノスの許可を取るのには時間がかからなかった。ナポレオンが最後まで反発していたが、トールが黙らせた。当然だが、デュエルで、だ。

ちなみに、ここに来る前にスクルドの装備が少し変わっている。頭の上に宝石をちりばめた金のティアラをつけている。スクルドの神力で付けているので、スクルドが神力を解かない限り取れることは無い。ティアラの詳しい見た目は、チームラグナロクのブレイブが付けていたものを思い出すといい。

「そういえばそれ、どっから持ってきたの？」

ロキがスクルドのティアラを指さして言う。

「これ？…ディスペアからもらったんだよ♪」

創るのに２０日かかった。創造魔法では記憶がはっきりしないから材料を集めて創った。

あくまで作ったではなく創った。前にどこかの人間界に行った時にこのティアラを欲しそうに見ていたが、どの世界だったか忘れてしまい、創ることにしたのだ。

「ふ～ん…よかったね」

ディスペア、こんな高価そうなものを…しかもディスペアの事だか

らわざわざ材料を自分で集めに行ったんだろうな…呆れるね。いくら自分の好きな人のためでも、ここまでするのは珍しい…人間にも見せてやりたいよ。

「とりあえずテレビでも見るか。神界のテレビはテレビと言っても神の鏡で見ているものだからな」

現状を知るには人間界のテレビを見たほうが早いだろう。

…やはり1日しかたっていない。

「…特にやることもないな」

「今はジェネックスの開催中なノーネ。参加すればいいノーネ」

そう言えばそうだったな。とりあえず相手を探しに行くか。

～～～デュエルアカデミア校舎前～～～

何故か道に不自然なゴミ箱が落ちている。

「……」

蓋を斬る。

「うわあああああ！何でバレたんスか！？」

「やはりな。我とデュエ…」

途端に丸藤は逃げ出した。あのスピードなら１００ｍ１０秒で行けるのでは？

「おい、そこの黒服を着た肩幅の広い奴、俺とデュエルしろ！」

話しかけてきたのは白い制服を着た生徒だ。

「フン、面白い」

「「デュエル」」

「我の先攻。『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚する！」

安心しろ、リアルダメージの手加減はしてやるさ。前のロキとのデュエルでは実力がよくわからなかったからな。こいつに実験台になってもらおう。

「さらに、我のフィールド上に『ＢＦ』と名のつくモンスターが存在することによって手札から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚する。カードを1枚伏せ…ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ＢＦ－蒼炎のシュラ　ＡＴＫ１８００
ＢＦ－黒槍のブラスト　ＡＴＫ１７００
伏せカード×１

「よし、俺のターンドロー！『ゴブリン突撃部隊』召喚。さらに装

備魔法『デーモンの斧』を装備！そして速効魔法『サイクロン』で伏せカードを破壊する！」

「トラップ発動『ゴッドバードアタック』。『ＢＦ－黒槍のブラスト』を生贄に捧げ、『デーモンの斧』と『ゴブリン突撃部隊』を破壊する」

「なにぃぃ！！？……クソォッ！ターンエンド…」

ホワイト生徒
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
無し

「我のターン」

ライフ４０００ではこんなものか。

「『ＢＦ－疾風のゲイル』召喚。我は『ＢＦ－蒼炎のシュラ』でダイレクトアタックを行う」

「うわあああああっ！？…ッ、なんだこの衝撃は！？だが、このターンをしのげば俺の勝ちだ！」

「『ＢＦ－疾風のゲイル』でダイレクトアタック」

「だが、これでも俺のライフは残る！」

「ダメージステップ時、手札より『ＢＦ－月影のカルート』を捨て、

ゲイルの攻撃力を１４００ポイントアップさせる」

ＢＦ－疾風のゲイル　ＡＴＫ１３００→２７００

「そ、そんな…！」

ホワイト生徒　ＬＰ２２００→－５００

「くそ…ずるいぞ！１ターンに何体もモンスターを召喚して攻撃してくるなんて…！」

「ハハハハハハハハハ！！初手から攻撃力３３００のモンスターを出してきた奴に言われたくは無いな」

ホワイト生徒はメダルを２０枚ほどこちらに投げて、走り去った。

「このメダルを集め、ジェネックス優勝特権を手に入れるのも悪くは無いな」

「キッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ。ディスペア、たった１０枚じゃ優勝なんて無理だね。せめて僕ぐらいにはいかないと」

ロキは１５０枚ほどのメダルを見せてくる。まだこの世界に戻ってきてから数時間しかたっていないのにだ。

「このメダルは全部で５００枚程度だったはずだが…？」

「ディスペア、メダルは全部で１０００枚あるよ。僕達が来たから、倍になったみたいだね」

１０００枚か。面倒な数だな。

「じゃあ、僕はこの辺で戻らせてもらうよ。さすがに疲れたからね」

最高で１５０回デュエルしているわけだからな。当然だろう。

「我も戻るか」

～～～校長室～～～

「スクルドがいないな…？」

「スクルドは今風呂だ」

「ではロキは…？」

「知らないな」

～～～ロキサイド～～～

風呂が１つしかないとか勘弁してほしいよね。ディスペアやオーディン、スクルドみたいに生まれた時から永遠に自分の体が汚れない魔法がかかってればいいのに。

「まあ、文句言ってもしょうがないか…」

僕は風呂の扉をあける。

「！！え！？？？？」

「！？キャアアアアアアアアアア！！！」

～～～校長室サイド～～～

「ああ、やっちまったな」

「ロキ、風呂の扉を開けたな…」

「嫌な予感しかしないノーネ」

「ロキのバカァァァァァァ！ディスペアにだってまだ見られたことないのに！！」

「ちょ、ちょっと待て、僕はわざと開けたわけじゃない！（そ、それに『まだ』って超遠回しに見て欲しいってことじゃない！？）」

そもそも、君は別に風呂に入る必要ないだろ！？体が汚れることが絶対にないんだから！何で入ってるんだ！？と、そんなことを言う暇などない。

「わぁぁ、僕が悪かった、何も見てないから！」

本当に何も見てないんだ僕は！

「わかったから早く閉めて！」

バタン！

はぁ…はぁ…全く、酷い目に遭った。性別の無い僕やディスペアから言わせてもらえば別に女の子の裸なんか見たって何も思わないよ…

「もうレッド寮の風呂で済ませよう」

～～～１０分後、校長室～～～

「よし、我はロイヤルストレートフラッシュだ」

「なっ！！？…我は４カードだ」

「わたしは…フルハウスか」

「ストレートフラッシュなノーネ」

「私は…ううぅ…ノーペア…」

「おい、デュエルしろよ」

おもわずツッコんだ。レッド寮の風呂から戻ってきたらトランプや

ってたから。

「スクルド、さっきは悪かったね」

「戻ってきたか…」

「もういいよ、気にしてないから」

「ところで、何で髪をおろしてるの？」

スクルドは基本的にツインテールだったはず。風呂に入ったすぐ後なら分かるけど、既に乾いている。

「だってお風呂に入った後だったし…」

「それだけじゃなさそうだね」

そう言うと…

「……／／／」

顔が赤くなった。

「我としてはこのほうがいいと思っただけだ。まあどの髪型にするかはスクルドの自由だがな」

やっぱりね。確かにこのほうがティアラもよく似合ってるし良いと思う。お嬢さまから元気な女の子になったような感じだ。普通は逆だろうけど、スクルドの場合はそうなる。

「ロキ…黙ってじっと見てるな」

もはや我の声も届かなくなったらしい。

「……僕はもう休むよ」

そう言うと、ロキはそっけなく部屋に入ってしまった。

「私はまだ起きてる…」

「我は寝ないぞ？」

「うん、わかってるけど…」

その次の朝、ロキがソファーで肩を寄り添いあって寝ているディスペアとスクルドを発見した。

「ディスペア…寝ないとか言ってたのに…ティアラ1つ作るのにどんだけ疲れてたんだよ」

でもこのティアラの材料は最高神ですら下手すれば死ぬ危険な世界でしか採れないから、疲れていてもしょうがないか。それにしても、ディスペアがここまで疲れるってどんな世界なんだろ？

第７７話　アカデミアへ復帰（後書き）

これからスクルドはティアラ装備、髪をおろしている設定で行きます。
ディスペアはこのティアラの材料を採ってくるために死ぬ可能性のある危険な世界に行ってきました。

第７８話　ロキｖｓ万丈目ホワイトサンダー（前書き）

万丈目ホワイトサンダーはロキを怒らせたようです。

第７８話　ロキｖｓ万丈目ホワイトサンダー

～～～校長室～～～

「我は『ＢＦ－暁のシロッコ』の効果により、『ＢＦ－黒槍のブラスト』の攻撃力を５１００ポイントアップし、『古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）』を攻撃する。ブラック・スパイラル！」

「マンマミ～～～～ヤ～～～～～！」

クロノス　ＬＰ０

「約束通り、このパンを貰っていく」

「食べたかったノーネ…」

今我が取ったパンは、スクルドの作ったパンだ。種類は５種類あるが、各２個しかないために取り合いになることがある。そう言う時に役に立つのがデュエルだ。我は別に何も食べたり飲まなくても生きていくことはできるが、せっかく作ってもらったのだから食べる。

「さっきから見ないがスクルドはどこへ行った？姿が見えないが…」

「何？」

スクルドが消えた？

～～～温泉施設の近くの砂浜～～～

「……」

そこには、１人で立っている女神の姿があった。昨日まではツインテールだった髪を今はおろし、愛する者からもらった宝石がはまっている黄金のティアラをつけ、その髪は風になびいている。

「ディスペアも誘えばよかったな…」

この砂浜は私のお気に入りの場所。風が涼しくて落ち着く。神界に砂浜や海はないから、見れるのは人間界だけ。

「我がどうかしたのか？」

「ディスペア！」

「珍しいな。スクルドが我に何も言わずに外に出かけるのは」

いつもは必ず一言残していくのだが。

「うん…でも、どうしてここにいるってわかったの？」

「勘…というのは冗談だ。一体どのくらいお前と共に過ごしていると思っているのだ？スクルドの考えることなど手に取るように分かる」

「……クスッ、確かにね」

気づいたら、1時間もずっと立ってた。

「……戻るか？」

「うん、戻ろう」

～～～デュエル場・ロキサイド～～～

「きゃあああああ！」

天上院は負けちゃったみたいだね。まあ当然と言えば当然だけど。それよりもあの白い制服、どこから落ちてきたのか非常に気になるね。

「キッヒャッヒャ。光の結社のクズども、今更僕から逃げようなんて思ってないよね？」

天上院とのデュエルの前に相手してやるって言ったのはこの万丈目だからね、このまま逃げたら学園に弱者としてうわさを流すところだよ。

「当然だ！お前こそ今更逃げようなんて思ってないだろうな！チビ」

「……僕が一番気にしていることを…お前は絶対、ぶっ潰してやる！」

腕につけていた支給ディスクを投げ捨て、固有ディスク（首の後ろについてる輪のようなアレ。ルチアーノ参照）を展開する。僕の禁句を言ったこいつは絶対に痛い目にあわせてやる！

「「デュエル」」

「俺のｔ」

「僕のタァーン！僕は『スカイ・コア』を守備表示で召喚する！カードを3枚伏せて、タァーンエンドォ！」

「なっ…」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
スカイ・コア　ＤＥＦ０
伏せカード×３

「くそ…俺のターンドロー！『アームド・ドラゴンＬＶ３』召喚だ！」

「トラップ発動、『激流葬』！モンスターが召喚された時、フィールド上のモンスターをすべて破壊する～！そして効果によって破壊された『スカイ・コア』の効果、発動ォ！デッキ・手札・墓地から『機皇帝スキエル∞』『スキエルＴ』『スキエルＡ』『スキエルＧ』『スキエルＣ』を特殊召喚する！合体しろ、機皇帝スキエル！」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００

「くそ…カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

万丈目Ｗ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
伏せカード×２

「僕の…タァーン！！永続魔法発動ォ！『一族の結束』！このカードがフィールド上に存在し、僕の墓地のモンスターの元々の種族が１種類のみの場合、僕のフィールド上のその種族のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする～！！」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００→６２００
スキエルＴ　ＡＴＫ４００→１２００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００→１８００
スキエルＧ　ＡＴＫ２００→１０００
スキエルＣ　ＡＴＫ６００→１４００

「機皇帝スキエルでダイレクトアタックだァァァ！」

「トラップ発動『攻撃の無力化』！モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する」

「チッ、カスのくせに生意気じゃん。タァーンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×２

フィールド
機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ６２００
スキエルＴ　ＡＴＫ１２００
スキエルＡ　ＡＴＫ１８００
スキエルＧ　ＡＴＫ１０００
スキエルＣ　ＡＴＫ１４００
一族の結束
伏せカード×２

「俺のターン、ドロー！ドローフェイズに永続トラップ『リビングデッドの呼び声』を発動！蘇れ、『アームド・ドラゴンＬＶ３』！スタンバイフェイズにこのカードを墓地へ送り『アームド・ドラゴンＬＶ５』を特殊召喚する！さらに魔法カード『レベルアップ！』発動！『アームド・ドラゴンＬＶ５』は『アームド・ドラゴンＬＶ７』に進化する！
そして『アームド・ドラゴンＬＶ７』を生贄に捧げ、『アームド・ドラゴンＬＶ１０』を特殊召喚する！」

「１ターンでアームド・ドラゴンを最高レベルにしたんだ。クズにしては上出来じゃん、ほめてあげるよ、ヒャーッハッハハハハハハハ！」

だけど攻撃力３０００のパワーバカじゃ僕を倒すなんてできないよ？

「『アームド・ドラゴンＬＶ１０』の効果発動！手札を１枚捨てることで相手フィールド上の表側表示モンスターをすべて破壊する！」

「最上級のモンスター破壊効果…だからお前はダメなんだよ。トラップ発動『インフィニティー・ウォール』！このターン、効果による破壊を無効にする！ヒャッハハハハハハ！残念だったね！」

「ならば装備魔法『白のヴェール』を『アームド・ドラゴンＬＶ１０』に装備する！装備モンスターが戦闘を行う時、バトルフェイズ中に相手の魔法・罠カードの効果はすべて無効になる！神聖なる白の力を得た今、お前の伏せカードなど無意味だ！行け、『アームド・ドラゴンＬＶ１０』！『スキエルＧ』を攻撃だ！アームド・ビッグ・ホワイト・バニッシャー！」

「性懲りもなく攻撃かよ。単純な奴って行動がみんな同じだから死ぬんだよね。『スキエルＧ』の効果発動ォ！１ターンに１度、相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「バカな！？」

万丈目
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
アームド・ドラゴンＬＶ１０　ＡＴＫ３０００
＋白のヴェール

「僕の……タァーン！！」

万丈目はもう既にやることが無いから僕のターンに移る。

「光の結社なんて言っても、所詮は自分の進む道を失ったクズの集まり、僕に勝てるわけが無いんだよォ！僕を怒らせたことを後悔させてやる！トラップ発動『インフィニティー・チェンジ』！このカードを『機皇帝スキエル∞』に装備！このカードを装備した機皇帝は、シンクロモンスターを吸収できなくなるが、代わりに効果モン

スターを吸収できるんだよ！『アームド・ドラゴンＬＶ１０』を装備する～！」

スキエルがアームド・ドラゴンＬＶ１０を吸収した。

「キッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ！『アームド・ドラゴンＬＶ１０』は確かに頂いたぜ！」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ６２００→９２００

「さらに伏せカードオープン！『リミッター解除』！エンドフェイズに僕のフィールド上のこのカードの効果を受けた機械族モンスターをすべて破壊するが、このターン、僕の機械族モンスターの攻撃力は倍になる！」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ９２００→１６８００
スキエルＴ　ＡＴＫ１２００→２４００
スキエルＡ　ＡＴＫ１８００→３６００
スキエルＧ　ＡＴＫ１０００→２０００
スキエルＣ　ＡＴＫ１４００→２８００

「攻撃力…１６８００！？」

「『機皇帝スキエル∞』で万丈目にダイレクトアタックゥゥゥゥ！ヒャーーーッハハハハハハハハハ！！」

「うわあああああああ」

万丈目　ＬＰ４０００→－１２８００

万丈目は機皇帝スキエルの砲撃をモロに食らって後ろの壁に叩きつけられた。叩きつけられた後もしばらく砲撃が撃たれ続け、止んだ後はボロボロになった万丈目が倒れていた。

「黒だったらここまでボコボコにはしなかったけど、白いのがたくさんいると調子乗ってむかつくからね」

寧ろこのくらいで済ましたんだから感謝して欲しいね。そう思いながら、僕はデュエル場を後にした。

第７８話　ロキｖｓ万丈目ホワイトサンダー（後書き）

今回はロキをキレさせてみました。機皇帝スキエルの砲撃をリアルダメージで５分間くらい続けることになります。

第７９話　迫りくる魔の手（前書き）

今回は２つのサイドでデュエルします。１つは決着がつきますが。

第７９話　迫りくる魔の手

～～～校長室～～～

「というわけでだな、このＢＦデッキが回らないのだが…」

今我はオーディンにＢＦデッキについて相談している。

「ではゼピュロスを入れると？一応用意はしておいたが、ダメージについてはいいのだな？」

「４００ポイント程度どうということは無い」

「では渡そう。入れておけ」

オーディンはカードを４枚渡してきた…４枚？

※『黒羽の宝札』→『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』
『悪夢再び』×３→『鳳凰神の羽根』×１『魔法石の採掘』×２

「これならば除去された『黒い旋風』と使用済みの『貪欲な壺』を回収できるだろう。モンスター切れが起きれば神の召喚はできない、上手く使え」

「最初から用意できているなら渡して欲しかったな」

「そうもいかない、完成したのはついさっきだ」

それならば仕方が無いな。

「…スクルドは？」

「知らないな…」

「まあ、探しに行くか」

城で拾った名も無き白いカードを渡してある。我がもっていても意味が無いと判断したうえでスクルドに渡した。

～～～森の中・スクルドサイド～～～

「あれ？どっちから来たんだっけ…？」

迷っちゃった…ディスペア、助けて～…

「そこのお嬢さん、わたしとデュエルしませんか？」

そう言って私の前に現れたのは額に2つの宝石（？）みたいなのをつけた男の人。髪は長い。

「あなたの名前は…？」

「斎王琢磨です」

「！！あなたがディスペアが言ってた…！？身体が動かない！？」

「このデュエルから逃げることはできません。わたしを倒さない限り…」

「くっ…」

私は固有ディスクを構える。

「変わったディスクですね。杖を浮かせてディスクにするとは」

「「デュエル」」

今私が使っているのは私の神力で使える最高のデッキ…これ以上のレベルのデッキは私には使えない。…ディスペア、私に勇気（ちから）を貸して！

「私の先攻、『夜薔薇の騎士』を召喚！このカードが召喚に成功した時、手札からレベル４以下の植物族モンスター『返り咲く薔薇の大輪』を特殊召喚！
レベル４の『返り咲く薔薇の大輪』にレベル３の『夜薔薇の騎士』をチューニング！シンクロ召喚、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！カードを２枚伏せて、ターンエンド」

スクルド
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００
伏せカード×２

「わたしのターン。『アルカナフォースＩＩＩ－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』を召喚。さあ、ストップの掛け声をどうぞ」

カードが回りだす。

「ストップ」

カードは正位置で止まる。

「正位置の効果として、あなたがモンスターの通常召喚をした時、わたしは手札から『アルカナフォース』と名のつくモンスターを特殊召喚できる。カードを2枚伏せ、ターンを終了します」

斎王
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
アルカナフォースＩＩＩ－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ　ＡＴＫ１３００
伏せカード×２

「私のターン！」

「トラップカード発動『アルカナブレイク』。正位置ならばあなたのフィールド上のカードをすべて破壊し、逆位置ならばわたしはカードを1枚ドローする。ただし、正位置で止まった場合、次のターンにわたしがあなたに与えるダメージは半分になる」

「ストップ…」

カードは正位置で止まった。
ブラック・ローズ・ドラゴンと伏せカードが爆発した。

「くうっ……私は『ローンファイア・ブロッサム』を召喚、効果発動！このカードを生贄にして、デッキから『椿姫ティタニアル』を特殊召喚」

「あなたがモンスターを通常召喚したことにより、手札から『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』を特殊召喚。さあ、ストップの宣言を」

「ストップ」

「当然正位置。わたしのエンドフェイズにわたしのフィールド上のモンスター2体を墓地へ送ることで、相手のターンをスキップする」

「！！」

相手ターンをスキップ！？

「ターンエンド」

スクルド
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
椿姫ティタニアル　ＡＴＫ２８００

「わたしのターン、『黄泉ガエル』を守備表示で召喚し、『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』で、『椿姫ティタニアル』

を攻撃！さらに『アルカナフォースＩＩＩ－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』でダイレクトアタック」

「キャアアアア！」

どうして…衝撃が…？斎王が付けているのは、支給ディスクなのに…

スクルド　ＬＰ４０００→３２００

「そして、エンドフェイズに『黄泉ガエル』と『アルカナフォースＩＩＩ－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』を墓地へ送り、再びわたしのターンになる。伏せカードがあることにより、『黄泉ガエル』は復活しない。『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』でダイレクトアタック！！」

「……ッッ！！」

スクルド　ＬＰ３２００→１００

「わたしはこれでターン終了」

斎王
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　ＡＴＫ３１００
伏せカード×１

～～～ディスペアサイド～～～

どこだ…どこへ行った!?神の鏡で探知できないということは、どう考えても何かあった…!

「そこのお前、デュエルだ!」

「クッ…こんな時に…」

「「デュエル」」

「我の先攻、『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚する!カードを2枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ＢＦ－蒼炎のシュラ　ＡＴＫ１８００
伏せカード×２

「俺のターンだ!『ジェネティック・ワーウルフ』召喚、攻撃だ!」

「ダメージステップに手札から『ＢＦ－月影のカルート』を墓地へ送り、『ＢＦ－蒼炎のシュラ』の攻撃力を１４００ポイントアップ」

ＢＦ－蒼炎のシュラ　ＡＴＫ１８００→３２００

「うわああっ!」

イエロー生徒　ＬＰ４０００→２８００

「さらに、シュラが相手モンスターを戦闘で破壊し墓地へ送った時、デッキから攻撃力１５００の『ＢＦ』、『ＢＦ－疾風のゲイル』を特殊召喚する！」

「カードを１枚伏せてターンエンドだ」

イエロー生徒
ＬＰ２８００
手札×４
フィールド
伏せカード×１

「我のターン、永続魔法『黒い旋風』発動！『ＢＦ』の召喚に成功した時、デッキから召喚した『ＢＦ』の攻撃力以下の『ＢＦ』１体を手札に加える！
『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を生贄に捧げ、『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚！『黒い旋風』の効果により『ＢＦ－空風のジン』を手札に加える！
レベル５の『ＢＦ－暁のシロッコ』にレベル３の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング！降臨せよ、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！我はこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
伏せカード×２

「俺のターン、ドロー！モンスターをセットして、カードを1枚セット。ターンエンドだぜ！」

前のターンで俺を攻撃しなかったのは俺にとっては残念だな。伏せカードは聖なるバリアー ミラーフォースー だからな。

イエロー生徒
ＬＰ２８００
手札×３
セットモンスター×１
伏せカード×２

「我のターン！魔法カード『ダーク・バースト』により墓地から『ＢＦー疾風のゲイル』を手札に加える。そして『ＢＦー空風のジン』を召喚し、フィールド上にゲイル以外の『ＢＦ』が存在することにより手札から『ＢＦー黒槍のブラスト』を特殊召喚する！そして手札より『ＢＦー黒槍のブラスト』を特殊召喚！
レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル３の『ＢＦー疾風のゲイル』とレベル１の『ＢＦー空風のジン』の２体のチューナーモンスターをダブルチューニング！王者と悪魔、今ここに交わる！あらぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚、出でよ！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は我の墓地のチューナー１体につき５００ポイントアップする。よってその攻撃力は４５００！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００↓４５００

「『ＢＦー黒槍のブラスト』を生贄に『ゴッドバードアタック』発動、お前の伏せモンスターと右側の伏せカードを破壊する！」

破壊されたのは『ペンギン・ソルジャー』と『炸裂装甲』だった。

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』でダイレクトアタックだ！バーニング・ソウル！」

「トラップ発動『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！」

「無駄だァ！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは聖なるバリアー ミラーフォース ーを突き破り、そのまま突進した。

「うわあああああああ！」

イエロー生徒　ＬＰ２８００→ー１７００

デュエルが終わり、イエロー生徒が去るとすぐに走る。

「スクルド、どこだ…！！？」

～～～斎王・スクルドサイド～～～

スクルド　ＬＰ１００

斎王　ＬＰ４０００

「くっ…」

「ふふふ…」

第７９話　迫りくる魔の手（後書き）

実際に魔法石の採掘に変えてみました。不思議なことにまわるまわる。

今日のファイブディーズ感想※ネタバレ注意

アポリアさん死んでしまった…気に入ってたのに…頼む、また回収されて生きててくれ！あと、紅蓮魔龍の壺は欲しいなぁ…（レモンがいるときに２枚ドローできる魔法カード）

第７９話　エターナル・ローズ・ドラゴン（前書き）

タイトルでネタバレだと思いましたが、後悔はしていない…

第７９話　エターナル・ローズ・ドラゴン

～～～森の中～～～

「わ、私のターン…」

腕が思うように動かない…

「私は…永続魔法『増草剤』を発動、このターン…通常召喚を放棄するけど墓地から植物族モンスター１体を特殊召喚できる…私は『椿姫ティタニアル』を特殊召喚…する…」

「随分と辛そうですね？このままサレンダーしてはどうですか？」

「サレンダーなんか…しない！私は最後まで戦う…『椿姫ティタニアル』で『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』を攻撃！」

これは多分…闇のゲーム、負けたらきっとディスペアの敵になる…それだけは何があっても嫌だ。

「おろかな！攻撃力はザ・ワールドの方が上！」

「ダメージステップに速効魔法『禁じられた聖杯』を発動！『椿姫ティタニアル』の効果をエンドフェイズまで無効にして、攻撃力を４００ポイントアップする！」

「バカな…わたしのアルカナフォースが…」

運命ではわたしのモンスターとライフは削られることなくわたしの勝利だったはず…！どういうことだ！？

斎王　ＬＰ４０００→３９００

「カードを1枚伏せて…ターンエンド」

スクルド
ＬＰ１００
手札×０
フィールド
椿姫ティタニアル　ＡＴＫ２８００
増草剤
伏せカード×１

「わたしのターン」

何故だ！なぜわたしのライフが削られた！？運命の知らせではわたしのライフが削られることは無かった…この小娘も運命の歯車を動かすというのかァ！

「ドローフェイズにトラップカード発動！『アルカナリバイブ』！わたしがストップを宣言し、正位置ならばわたしがモンスターを、逆位置ならば相手がモンスターを墓地から特殊召喚する！ストップだ！当然正位置ィ！」

カードは逆位置で止まった。

「そんなバカな！？」

「私は『ブラック・ローズ・ドラゴン』を墓地から攻撃表示で特殊召喚する！」

「ならば『アルカナリバイブ』のもう1つの効果を発動する。このターンの攻撃を放棄し、デッキからカードを1枚ドローする！さらにスタンバイフェイズにわたしのフィールドにモンスターがいないことにより、『黄泉ガエル』を特殊召喚！そして魔法カード『アルカナリベンジ』発動！わたしの『アルカナフォース』を破壊したモンスターが相手フィールド上に存在する場合、わたしは破壊された『アルカナフォース』を特殊召喚する！

『アルカナフォースXXI－THE　WORLD』召喚！ただし、『アルカナリベンジ』の効果によって特殊召喚された『アルカナフォース』の効果は無効になる」

またあのモンスターが出てきた…効果は無効になってるけど、攻撃力3100…わたしのモンスターじゃ…勝てない。

「わたしはカードを2枚伏せターン終了」

斎王
LP3900
手札×2
フィールド
アルカナフォースXXI－THE　WORLD　ATK3100
黄泉ガエル　DEF100
伏せカード×2

「私のターン…魔法カード『フレグランス・ストーム』を発動…』
椿姫ティタニアル』を破壊して1枚ドロー。ドローしたカードが植

物族モンスターなら、もう1枚ドローできる。
私がドローしたのは『フォーチュン・ローズ』、もう1枚ドロー！」

「この時を待っていたぁ！トラップカード発動！『アルカナエンド』！相手モンスターがフィールドを離れた場合、エンドフェイズにそのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！そしてこの効果によって発生するダメージは無効にすることはできない！ただし、相手はカードを1枚ドローできる！さあ、最後のカードを引くのだ！」

これが…私の最後のドロー…私は絶対に勝って、ディスペアのところに帰るんだ！！絶対！

「ッ…！ドロー！」

え…？こんなカード…私はデッキには入っていないはず…でも、わかる。

「私はチューナーモンスター『フォーチュン・ローズ』を召喚する！『フォーチュン・ローズ』の召喚に成功した時、手札から植物族のチューナー1体を手札から特殊召喚できる！私は『エボリューション・ローズ』を特殊召喚！」

私の未来が！

「レベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』にレベル4の『フォーチュン・ローズ』とレベル1の『エボリューション・ローズ』を、ダブルチューニング！運命はいくらでも変えることができる！シンクロ召喚！『エターナル・ローズ・ドラゴン』！！！」

スクルドがもっていた白紙のカードにテキストとイラストが浮かび

あがり、先程まで雨が降りそうだった空は晴れ渡り、遥か遠い天空より神々しい光を放つ黄金の薔薇の龍がアカデミアの島から離れた海の上に舞い降りる。その大きさは、デュエルアカデミアの島の大きさを遥かに上回る。

～～～ディスペアサイド～～～

「あの巨大なドラゴンは…！！究極神が光を放っている！？」

それではあのカードは究極神が世界を創造した時に創造した世界の暴走を抑えるために柱として放った希望の象徴の1枚、あの希望の力は必ずスクルドを勝利に導く。

希望の象徴の7枚のカードは誕生した瞬間に世界に散った。殆ど無限に近い数の世界に希望のカードは散って行った。それを探すことに永い間時間をかけていた。ようやく1枚目を見つけた…いや、スクルドが1枚目を目覚めさせた。あの白紙のカードが我らの最終目的、7枚の内の1枚だったとは…7枚のカードは相反する絶望のカードに対抗するための切り札だ。

～～～オーディン、ロキ、トールサイド～～～

「なんだ…？あれは…」

「ヒャッハハハハハハハ！あのカードからは究極神と同じ力を感じるよ。力の大きさこそ全然違うけどね」

「大いなる7つの柱の内の1つか…」

確か希望の7枚は何かを強く想ったときにのみ使用できるカード…スクルドはそこまで強く何かを想ったというのか…

～～～スクルド・斎王サイド～～～

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「攻撃力４０００だと…」

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果発動、墓地のモンスター1体を除外して、その攻撃力をこのカードの攻撃力に加算する！私は『椿姫ティタニアル』を除外！」

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→６８００

「ならばトラップカード発動ォ！『アルカナフォーチュン』！！相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える！！」

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果によって、このカードは相手のカードの効果では破壊・除外・コントロール変更されず、このカードを手札・デッキに戻す効果も受け付けない！！」

エターナル・ローズ・ドラゴンが咆哮をあげると、アルカナフォーチュンは砕け散った。

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』で『アルカナフォースＸＸＩ

―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』を攻撃！エターナル・ローズ・ストリーム！！」

巨大な白金の炎が斎王を包む。究極神帝ラーの攻撃と同じ色の炎だ。

「ぐぉおあああああああああ！！？…だがわたしのライフはまだ残っている！」

斎王　ＬＰ３９００→２００

このターンが終わればわたしの勝利、この小娘はわたしの手駒となってディスペアを襲うのだ！

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果発動！相手のモンスターを破壊した時、『エターナル・ローズ・ドラゴン』の攻撃力分のダメージを与える！」

エターナル・ローズ・ドラゴンは全身から波動を放った。

「バカなァァァァァァァ！！！？？」

斎王　ＬＰ２００→―６６００

炎が止むと、そこには既に斎王の姿は無かった。

～～～斎王サイド～～～

「囮のわたしがやられた！！？それもたかが小娘に…！」

わたしの分身はわたしの本来の力の８０％を再現しているというのに…！奴らはいったい何者なのだ…

～～～ディスペアサイド～～～

「スクルド、スクルド！」

「でぃ、ディスペア…さすがにちょっと、きつかったかな」

スクルドは力なく倒れこむ。

「……よくやってくれた」

スクルドを抱きかかえ、瞬間移動する。その後、どうやらたくさんの生徒がエターナル・ローズ・ドラゴンの攻撃が撃ち込まれたこの場所を訪れたらしい。

第７９話　エターナル・ローズ・ドラゴン（後書き）

今回の新たなスクルドの切り札、『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果です。

エターナル・ローズ・ドラゴン
シンクロモンスター　レベル１２　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『ブラック・ローズ・ドラゴン』＋レベル４の植物族チューナー１体＋『エボリューション・ローズ』
このカードは上記の素材でしかシンクロ召喚できず、このカードはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚できない。また、このカードの召喚条件を無視することもできない。このカードは相手のカードの効果では破壊・除外・コントロール変更されず、このカードをフィールドからエクストラデッキに戻すことはできない。１ターンに１度、墓地のモンスターカードを１枚除外する。このカードの攻撃力は除外したモンスターの攻撃力分アップする。このカードが相手モンスターを破壊した場合、このカードの攻撃力分のダメージを与える。このカードが戦闘によって破壊されたとき、フィールド上のカードをすべて破壊する。

『アルカナフォーチュン』は自分フィールド上にレベル７以上の『アルカナフォース』がいるときのみ発動できるカードです。

第８０話　無謀な挑戦者（前書き）

今回はかませの人たちに登場していただきました。驚異的なグダグダです。すいません、すいません。先に2回謝っておきます。今回のオリカ『ビフレストへの橋』と『最高神の神罰』は海馬コーポレーション様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました。あと、あとがきに少しお知らせがあるので読んでいってください。

第８０話　無謀な挑戦者

～～～スクルドｖｓ斎王から3日後、校長室～～～

「ディスペア君、お客様がいらしているノーネ」

「客だと？」

誰も呼んだ覚えは無いし、約束もしていない。だが、一応会うだけ会うとしよう。

～～～校舎前～～～

我の前に現れたのは人間の3人組だ。見たことも、会ったことなども1度もない。見た目は左の人間から、黒く長い髪をなびかせ、片目を隠している男、赤く逆立った髪でツリ目の男、青色の短めの髪で、剣を装備している男だ。

「わたし達はあなたと戦いに来た。最高神の王よ。あなたは悪魔との戦いを全然していない上に遊んでいる。もしこの戦いに我々が勝てば、究極神は我々に譲ってもらう」

「悪魔達の勢力が増したのはお前達人間のせいだということを分かっていないようだな」

悪魔達の勢力が増してきたのは人間が欲望を抑えずに、心の闇を増

大させたからだ。１人１人の心の闇なら小さいが、世界は並行世界や未来・過去の世界を含め数えきれないほど存在している。ゆえにその心の闇は巨大になり、悪魔達の力になった。そもそも、いきなり目の前に現れ究極神を奪っていくだと？どこの時空管理局バカだ。

「何！どういうことだ！！」

「その質問に応える必要はない。その勝負受けてやる。我の命…いや、この世界の存在そのものを意味する３体の究極神を我から奪うというならお前たちを完膚なきまでにたたきつぶすまでだ！」

「「「「デュエル」」」」

ディスペア　ＬＰ２４０００
アルベルト　ＬＰ８０００　（片目を黒い髪で隠した男）
ディコーズ　ＬＰ８０００　（赤い髪が逆立っている男）
ガレオン　ＬＰ８０００　（青髪で剣を装備している男）

ライフが８０００…ということは、この人間は全く別の世界から来たということか。

「先攻は我がもらう。我は『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚し、さらに手札から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚する。そして魔法カード『ビフレストへの橋』を発動。このカードは『究極神』召喚の生け贄を１体減らすことができる！行くぞ！シュラとブラスト、我のライフ半分を生贄に捧げ、『究極神オベリスク』を特殊召喚する！」

ディスペア　ＬＰ２４０００→１２０００

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１２０００
手札×１
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
伏せカード×１

「わたしのターン」

これが究極神。だが、攻撃力８０００ではわたし達の切り札には及ばない。

「わたしは『シャイニングパラディン』を召喚する。カードを４枚伏せ、ターンエンド」

アルベルト
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
シャイニングパラディン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×４

「俺だな。ドロー、『インフィニティー・ワイズ』を召喚する。カードを４枚伏せ、ターンエンド」

ディゴーズ
ＬＰ８０００
手札×１

フィールド
インフィニティー・ワイズ　ＡＴＫ１９００
伏せカード×４

「余のターン、『ブレイク・ソルジャー』召喚！魔法カード『インフィニティー・ポテンシャル』発動。場に存在する『インフィニティー・ワイズ』『シャイニングパラディン』『ブレイク・ソルジャー』を生贄に捧げ、余はデッキから『ブレイブソルジャー』を特殊召喚する！このモンスターは我々３人のフィールドにいるものとして扱う」

攻撃力…８０００ポイント、我が究極神オベリスクと互角…！だが、１ターン目で攻撃できない時に耐性なしの切り札を特殊召喚するなど、おろかな行為だ。

「さらに装備魔法『ゴッドバスター』を装備する！」

ブレイブソルジャー　ＡＴＫ８０００→８５００

「このターンはまだ攻撃できない。余はこれでターン終了だ」

ガレオン
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
ブレイブソルジャー　ＡＴＫ８５００
＋ゴッドバスター

ゴッドバスター…神属性以外のモンスターと戦闘を行う時、そのモンスターをゲームから除外する装備魔法か。

「我はこのターン…何もせずにターンを終了する」

ディスペア
ＬＰ１２０００
手札×２
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
伏せカード×１

「わたしのターン！ゆけ！『ブレイブソルジャー』よ！神を叩き潰せ！」

「そうはさせん！トラップ発動『最高神の神罰』！『究極神』が攻撃対象になった時、相手のモンスターをすべて破壊する！」

「なんだと！？我々の切り札が…！」

「愚か者！何をやっている！！」

「我々の切り札が消えてしまったではないか！」

やはりおろかな人間はおろかな人間か。仲間割れを起こす時点で悪魔と戦うなど笑わせる。

「お前達のようなものが悪魔と戦っても、仲間割れを起こし自滅することが目に見えるな」

「なにおう！？ターンエンド！」

アルベルト
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
伏せカード×４

「俺のターン！」

こんなやつと協力プレイなんかやってられるか！

「モンスターをセットしてターンエンド！」

ディゴーズ
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×４

「く…お前達、ケンカなどしている暇は無い！今はこの状況を何とかしなければならん！余のターン、カードを3枚伏せ、モンスターをセット、ターン終了」

ほう…あの男だけはそれなりに資質があるらしいな。

ガレオン
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
セットモンスター×１

伏せカード×３

「我の…ターン！我は『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚する。その効果によって、墓地から『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を守備表示で特殊召喚する！
さらに『ＢＦ－疾風のゲイル』を特殊召喚する！３体のモンスターと我がライフの半分を生贄に捧げ、『究極神オシリス』を特殊召喚する！」

究極神オシリス　ＡＴＫ０
ディスペア　ＬＰ１２０００→６０００

「攻撃力０の神など、怖くないぞ！」

「我はそこの人間が何のモンスターを伏せているのか分かっているからな。手札が０でも構わない。『究極神オベリスク』で、ガレオンの裏側表示モンスターを攻撃！ゴッド・エクス・バースト」

伏せモンスターはメタモルポット。予想通りだ。前のターン、奴はカードを３枚伏せた。それだけのカードを伏せるなら、１ターン前でもできたはず。それを先程のターンに伏せる理由はただ一つ。捨てるのがもったいないからだ。

究極神オシリス　ＡＴＫ０→１０００

「ならばこの瞬間速攻魔法発動、『デストロイ・カウンター』！このターン、攻撃宣言したモンスター１体を破壊する！消えろ！『究極神オベリスク』！」

究極神オベリスクは、青い光の粒子となって消えた。

「ならば『究極神オシリス』でガレオンにダイレクトアタックを行う。アルティメット・サンダーフォース！！」

「速攻魔法発動、『収縮』！」

「残念だが、『究極神オシリス』は魔法カードの影響を受けない。絶望に沈め！」

使っているのは普通のアカデミアディスクだ。多少なりとも痛いだろうが、命に別条はないだろう。

「ぬううおおあああああああああ！」

ガレオン　ＬＰ８０００→－２０００

司令官を葬れば、部下は混乱する。これで奴らは我に勝つのは困難…というよりも不可能だ。

「我のエンドフェイズにフィールドを離れた『究極神オベリスク』の効果が発動する！我のライフ半分を生贄に捧げフィールド上に特殊召喚する！」

ディスペア
ＬＰ３０００
手札×５
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
究極神オシリス　ＡＴＫ１００００

「くそっ！わたしのターン！モンスターを伏せ、ターンエンド…」

切り札を失った今、わたし達に勝つ手段は無い…だが、今ここでサレンダーをすれば神の怒りを買ってしまう…わたしの伏せカードは今は役に立たない。

アルベルト
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×４

「俺のターン！俺は魔法カード『デス・ブレイズ』発動！墓地からカードを１枚除外し、１０００ポイントダメージを与える！」

「フン」

こいつらのデッキは一体どうなっているのだ？

ディスペア　ＬＰ３０００→２０００

「俺はこれでターンエンドだ」

ディゴーズ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
伏せカード×４

やはりリーダーがいなければこいつらはまともに戦えないらしいな。これ以上グダグダやっても、小説的に面白くないだろうから幕を下ろしてやるか。さすがに攻撃力８５００のモンスターが召喚された時には、『最高神の神罰』があってよかったと思ったが。

「我のラストターン、我は『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚し、効果によって墓地から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚する。そして、『ダーク・バースト』発動。『ＢＦ－疾風のゲイル』を手札に加え、特殊召喚！」

かなり久しぶりの出番だな。

「３体のモンスターと我がライフ半分を生贄に捧げる！！」

ディスペア　ＬＰ２０００→１０００

「光臨せよ！！『究極神帝ラー』！！！」

究極神帝ラー　ＡＴＫ∞

「そ、そんな…攻撃力無限大…」

「させるか、カウンタートラップ『神の宣告』！…！？」

神の宣告が発動した瞬間燃え尽き、破壊された。

「『究極神帝ラー』がフィールド上に存在し、２体の究極神族のカードが揃っている場合、『究極神帝ラー』の効果が適用される。その１つの効果によって、『究極神帝ラー』の特殊召喚は無効にされない」

「！！」

それでも俺達のどっちかは生き残れる。最後まで戦ってせいぜい神の怒りを鎮めてやるさ。

「残念だが、次のターンは来ないぞ。『究極神帝ラー』の効果発動。1ターンに1度、相手のカードを全てゲームから除外し∞ポイントのダメージを与える。
神の怒りに触れよ！ゴッド・アルティメット・ノヴァ！！」

究極神帝ラーが巨大な白金の炎の球をチャージする。球のサイズはみるみる大きくなり、周り全てが白金に染まっていく。1分ほどたつと、炎も消えた。…ああ、また全ての世界が混乱するな…ゼウスがうるさいぞ…。

「じょ、冗談じゃねェ、あんなの喰らったら…サレンダーする！」

まだ炎が眼前に迫っている時にサレンダーをしようとするが…

「『究極神帝ラー』の効果によって、互いのプレイヤーにサレンダーは許されない」

アルベルト&ディゴーズ　ＬＰ－∞

目の前には先程までは威勢のよかった人間3人が倒れている。

「所詮はこの程度か」

「「「くっ…あんなカード…ずるいぞ…ッ！！？」」」

人間を強制的に元の世界に飛ばす。どうやって世界を移動したのか聞いておくべきだった。

ふざけた連中ではあったが、どうやって移動しているのかを知っておかなければこういったものが現れることが再びあるかもしれない。

第８０話　無謀な挑戦者（後書き）

お知らせです。書いていて思いました。『究極神のサポートがあったら（強さ的に）やばい』と。ですので、申し訳ありませんが究極神関連のオリカは控えてくださるとありがたいです。投稿していただいている立場でありながら、勝手にこのようなことを決めてしまい本当に申し訳ありません。特に今までに究極神関連のオリカを送ってくださった方、ごめんなさい。

あと、前回のエターナル・ローズ・ドラゴンの素材に誤りがありました。フォーチュン・ローズではなく、エボリューション・ローズです。

第８１話　除外デッキを粉砕せよ！（前書き）

最近遊戯王にはまりすぎてしまった…このままじゃ一生やめられない…どうすればいいんだ…

あとがきにお知らせがあります。

第８１話　除外デッキを粉砕せよ！

～～～校長室～～～

……。

「落ち着きなよ、ディスペア」

ディスペアはさっきから落ち着かない様子で座っている。

「誰が落ち着いていられるか！回復力の高いスクルドが未だに目を覚ましていないんだぞ！」

「そりゃあそうだけどさ。あのモンスターを召喚した後、スクルドの神力が削られていたんだから当たり前と言えば当たり前じゃん」

く…ロキの言うことはもっともだ。『エターナル・ローズ・ドラゴン』を召喚する以前のデュエルでスクルドの神力はだいぶ削られていた。召喚時の神力はあまり必要ないが、それまでに削られていた神力が多すぎる。

「心配するのも分かるけど、ここ最近全然休んでないディスペアが参っちゃうかもね。キッヒャッヒャ」

～～～トールサイド～～～

我は今デュエル場に来ている。ホワイトの生徒にデュエルを申し込まれたからだ。
このデュエルも負ければ洗脳されるところだが、ザコに我を洗脳することなどできない。叩きのめしてやろう。

「「デュエル」」

「先攻は俺だ！カードを2枚伏せ、『異次元の生還者』を召喚！ターンエンドだ」

ホワイト生徒
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
異次元の生還者　ＡＴＫ１８００
伏せカード×２

「我のターン！」

「へっ、永続トラップ『マクロコスモス』！墓地に行くカードは除外されるぜ！」

なんだと！？これではタングリスニの効果が発動できず、トールの復活もできない…！

「おのれ…カードを1枚伏せ、モンスターを伏せる！ターンエンド」

だが、このカードがあればどうとでもなる。

トール
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×１

「俺のターン！さあ行くぜ！俺は『異次元の生還者』を生贄に『邪帝ガイウス』を召喚するぜ！こいつが生贄召喚に成功した時、フィールド上のカードを１枚除外し、そいつが闇属性モンスターだった場合は１０００ポイントのダメージを与える！俺が除外するのはその伏せモンスターだ！」

「そうはさせん！トラップ発動、『異次元封鎖』！！このターン、カードは除外されない！」

伏せモンスターが異次元に飛ばされそうになったが、その空間の穴が閉じて吸い込まれることは無かった。

「ならば『邪帝ガイウス』で伏せモンスターを攻撃だ！」

「破壊されたのは『極星獣タングリスニ』だ。このカードは戦闘で破壊された時、『極星獣トークン』２体を特殊召喚する！」

フィールド上に極星獣トークンが現れる。

「ちっ、ターンエンド。このエンドフェイズに、除外された『異次元の生還者』は特殊召喚されるぜ」

ホワイト生徒

ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
邪帝ガイウス　ＡＴＫ２４００
異次元の生還者　ＡＴＫ１８００
マクロコスモス
伏せカード×１

「我のターン！」

手札にはグルファクシがいない…ならば！

「カードを2枚伏せる！ターンエンド」

トール
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
極星獣トークン×２　ＤＥＦ０
伏せカード×２

「手札事故か？俺のターン！行け、『邪帝ガイウス』！『極星獣トークン』を攻撃！」

「トラップ発動『神の桎梏グレイプニル』！デッキから『極星』と名のついたモンスター1体、『極星獣タングニョースト』を手札に加える！そして、我のモンスターが戦闘で破壊されたことによってこのカードはフィールド上に特殊召喚できる！」

「なら、『異次元の生還者』で『極星獣タングニョースト』を攻撃

！」

「甘い！速攻魔法『禁じられた聖槍』！『異次元の生還者』の攻撃力を８００ポイントダウンし、エンドフェイズまで魔法・罠カードの効果を受けない！」

異次元の生還者　ＡＴＫ１８００→１０００
極星獣タングニョースト　ＤＥＦ１１００

「チイッ…」

ホワイト生徒　ＬＰ４０００→３９００

「俺はこれでターンエンド！」

ホワイト生徒
ＬＰ３９００
手札×４
フィールド
邪帝ガイウス　ＡＴＫ２４００
異次元の生還者　ＡＴＫ１８００
マクロコスモス
伏せカード×１

「我のターン！『極星獣タングニョースト』を攻撃表示に変更！このモンスターが守備表示から攻撃表示に変わった時、デッキからレベル４以下の『極星獣』と名のつくモンスター１体を特殊召喚する！現れよ、『極星獣グルファクシ』！
レベル３の『極星獣トークン』と『極星獣タングニョースト』に、レベル４の『極星獣グルファクシ』をチューニング！星界の扉が開

く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん。大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ！シンクロ召喚、光臨せよ！『極神皇トール』！『極神皇トール』で『異次元の生還者』を攻撃！サンダー・パイル！」

鉄槌で生還者を叩きつけた。凄まじい轟音と共に生還者が砕け散る。

「ぐううわあああ！」

ホワイト生徒　ＬＰ３９００→２２００

「我はカードを2枚伏せてターンエンド！」

「エンドフェイズに『異次元の生還者』を守備表示で帰還させる！」

トール
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
極神皇トール　ＡＴＫ３５００
伏せカード×２

「俺のターン！…よし、伏せカードオープン、速攻魔法『グランドクロス』！『マクロコスモス』が存在する時、フィールド上のモンスターをすべて破壊し、３００ポイントのダメージを与える！」

これで極神皇トールを倒して、ダイレクトアタックを決める！

「させん！速攻魔法『最後の進軍』！このターン、我が神トールの効果を無効にし、エンドフェイズまで魔法・罠カードの効果を受け

なくする！」

空間が揺れて大爆発を起こすが、極神皇トールは何事もなかったかのようにその場に鉄槌を構えていた。

トール　ＬＰ４０００→３７００

「なら魔法カード『闇の誘惑』を発動。２枚ドローして手札から闇属性の『バトルフェーダー』を除外する。そして『デビルズ・サンクチュアリ』発動！この効果によって特殊召喚された『メタルデビル・トークン』を生贄に『風帝ライザー』を召喚！このカードの生贄召喚に成功した時、フィールド上のカード１枚をデッキの１番上に戻す！俺が戻すのは『極神皇トール』だ！」

暴風が吹き荒れ、極神皇トールがエクストラデッキに戻った。

「そして『風帝ライザー』でダイレクトアタック！」

「グウウウウゥ…！」

トール　ＬＰ３７００→１３００

「ターンエンドだ。エンドフェイズに『異次元の生還者』は帰還する」

次元の穴から生還者が再び現れた。

ホワイト生徒
ＬＰ２２００
手札×３

フィールド
風帝ライザー　ＡＴＫ２４００
異次元の生還者　ＡＴＫ１８００
マクロコスモス

「我のターン！我はトラップカード『異次元からの帰還』を発動！ライフを半分払い、除外された自分のモンスターを可能な限り特殊召喚する。来い、『極星獣グルファクシ』『極星獣タングリスニ』『極星獣タングニョースト』！そしてこの３体をシンクロ素材とし、再び『極神皇トール』をシンクロ召喚！『極神皇トール』で『異次元の生還者』を攻撃する。サンダー・パイル！」

「ぐううあああっ！」

ホワイト生徒　ＬＰ２２００→５００

ホワイト生徒が吹き飛んだ。

「我はカードを１枚伏せ、ターンエンド」

再び生還者が帰還した。正直言ってかなりしつこい。

トール
ＬＰ６５０
手札×２
フィールド
極神皇トール　ＡＴＫ３５００
伏せカード×１

「俺のターン！『異次元の生還者』を生贄に『邪帝ガイウス』召喚

！極神皇トールを除外する！」

「残念だったな。トラップ発動『トールの襲撃』！我のフィールドにトールがいるとき、１０００ポイントのダメージを与える！」

極神皇トールが鉄槌を振り、ホワイト生徒を叩きつける。傍から見ればかなり痛そうだ。

「あと、後少しだったのに……クソオオオオ！！」

ホワイト生徒　ＬＰ５００→－５００

確かに後少しだったな。このターン、トールの襲撃がなければ、ホワイト生徒の勝利だった。

「約束通りメダルは貰っていくぞ」

トールはホワイト生徒がもっていた3枚のメダルを取りその場を去った。

～～～トールのデュエル終了前、ロキサイド～～～

「機皇帝スキエルでダイレクトアタック！」

「うわあああああああ」

レッド生徒　ＬＰ４０００→－２２００

ようやく２００枚目だね。大物が見つからないからザコだけで済ませているけど、そろそろ来ないかな…。トールやディスペア、オーディンとはやりたくないけど。スクルドは植物デッキじゃなければどうにかなるしね。

「そこの者、我とデュエルしてもらおう」

現れたのは漆黒の仮面をつけて、邪悪なオーラを纏った生命体。

「お前、人間じゃないね」

「そなたには言われたくないな」

僕自身が僕に警告している。こいつは…ヤバイ。一瞬でも気を抜いたらやられる！

「くっ、仕方が無いな」

普段は封印しているデッキだけど、この際なにも文句は言えない。ここで使わずに負けるのも嫌だしね。勝っても神力をガリガリ持っていかれるからあまり使いたくないんだけどね。

「「デュエル」」

第８１話　除外デッキを粉砕せよ！（後書き）

今日はもしかしたらもう１話更新できるかもしれません。
ディスペアのデッキからスワローズ・ネストがなくなり、ブラック・ホールが入りました。
今回のオリカ『異次元封鎖』は通りすがりのデュエリスト様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました！
先程ゴールドシリーズを買ってきました。３パックです。ブラック・ホールとキメラテックフォートレスが当たりました！トリシューラが欲しかったのですが…ｏｒｚ

第８２話　力の解放（前書き）

今日２回目の更新です。
オリカを投稿してくださった皆様、今回は使用できていません…次回以降に必ず使用しますので待っていてください。

第８２話　力の解放

～～～ロキサイド～～～

僕の目の前にいるのは、永い間生きてきて見た生物の中でも最も危険な部類に入る生命体。

「先攻はわたしがもらう。ドロー。わたしは永続魔法『縛られた魂』を発動する。相手モンスターが召喚・特殊召喚・反転召喚・リバースした場合、そのモンスターは攻撃することはできない。そして相手は２０００ポイントのライフを払うことで攻撃できる。ただし、攻撃したモンスターは守備表示となりカード効果及びルールによって表示形式を変更できなくなる。ちなみにこのカードは相手の効果によっては破壊されず、手札・デッキにも戻されない」

くっ…通常召喚でもダメってことは僕はセットしたモンスターに攻撃されて、表側になったパターンでも攻撃ができないってわけか…。ライフは４０００ポイント、僕が攻撃できるのは実質１回だけ。

「わたしは永続魔法『縛られた魔術』を発動。相手は魔法カードを発動することはできず、効果は無効となる。このカードも破壊・除外されず戻すこともできない」

「そ、そんな…バカな！？」

魔法カードまで封じられた…だって！？

「わたしはこれでターンエンドだ。さあ、お前のターンだ。ロキ」

???
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
縛られた魂
縛られた魔術

「お前はなんで僕の名を知っている!?お前にはまだ名乗っていないぞ!」

「フッ、名乗らなくても分かるのだよ。わたしは人間以外の生命体を見れば、名前がわかる」

「そんな能力があってたまるか!僕のタァーン!」

あいつは僕に、常に殺気をぶつけてきている。正直言って暗殺者でもこの殺気を受ければそれだけで死んでしまうだろう。

「僕はチューナーモンスター『ダーク・リゾネーター』を守備表示で召喚する!カードを2枚伏せてタァーンエンド」

僕のこのデッキは圧倒的なパワーで押すレッド・デーモンズ・ドラゴンを使う。神界にもたった1枚しかない特殊な力を秘めたレッド・デーモンズ・ドラゴンだ。普段は攻撃力はそこまで高くなく、戦略で勝つデッキを使うけど、僕の本気はディスペアですらこのデッキだと１００％の実力を発揮することはできないパワーと戦略の結晶であるこのデッキだ。今は機皇帝シリーズをすべて持っているわけじゃない。こいつ相手にスキエルだけで挑んでもやられる。

ロキ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ダーク・リゾネーター　ＤＥＦ３００
伏せカード×２

「わたしのターンだ」

チューナーモンスター…シンクロ召喚を狙っているのか。

「わたしは『オメガ・クルセイダー』を召喚する。このカードが相手モンスターを攻撃する時、攻撃対象のモンスターの効果は無効になる。ただし、このモンスターの攻撃宣言時に相手はカードを１枚ドローする。
『オメガ・クルセイダー』で『ダークリゾネーター』を攻撃する！」

「クッ…」

「わたしはこれでターンエンドだ」

？？？
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
オメガ・クルセイダー　ＡＴＫ１５００
縛られた魂
縛られた魔術

「僕の…ターン！」

モンスターと魔法は封じられ、モンスターを召喚しても効果を無効にされて倒される。恐ろしいコンボだ。でも、オメガ・クルセイダーの攻撃力は１５００ポイント。決して高い数値じゃない。

「僕は相手のフィールド上にのみモンスターがいることで、手札から『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚し、トラップカード『リビングデッドの呼び声』を発動！『ダーク・リゾネーター』を特殊召喚する！レベル５の『サイバー・ドラゴン』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚、我が魂『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

僕が召喚したレッド・デーモンズ・ドラゴンは通常のレッド・デーモンズ・ドラゴンより大きい。神は生まれた時に『固有ディスク』のほかに『固有デッキ』または『固有カード』を所持していることがある。所有者だけが完璧に扱うことのできるデッキとカードだ。ディスペアの場合は『固有カード』で３体の究極神、僕達の場合はトールが『極神皇トール』オーディンが『極神聖帝オーディン』、僕がこのデッキと『機皇帝スキエル∞』と『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』『レッド・デーモンズ・ドラゴン』だ。トールとオーディンも固有デッキは持っているらしいけど、１度も見せてくれたことが無い。

「フッ、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』か。攻撃力は３０００ポイント、申し分ない」

「調子に乗るな！トラップカード『クリムゾン・フォース』！僕のフィールド上に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がいるとき、相手フィールド上のカードを１枚墓地へ送る！僕が墓地へ送るのは『

縛られた魔術』だ！」

魔法が使えないのは厳しい。ここは攻撃を捨てても、魔法封じを取り除くべきだ。

「そして魔法カード『紅蓮魔龍の壺』！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がいるとき、２枚ドローする！そして、僕のフィールド上に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がいることで、手札から『クリエイト・リゾネーター』と『レッド・ノヴァ』を特殊召喚する！レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル３の『クリエイト・リゾネーター』とレベル１の『レッド・ノヴァ』をダブルチューニング！王者と悪魔、今ここに交わる。あらぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！これが今の僕が扱うことのできる最高クラスのレベルのモンスターだ！このカードの攻撃力は僕の墓地のチューナーモンスター１体につき５００ポイントアップする。よってその攻撃力は…」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→５０００

「そのモンスターはお前達最高神の王の持ち物ではなかったのか？」

「このカードは１枚だけじゃない、ディスペアも持っているけど、この僕も持っている！行くぞ！ライフを２０００ポイント払って『オメガ・クルセイダー』を攻撃する！バーニング・ソウル！」

まあ、特殊な力を持つスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンはこの１枚のみだけどね。

「むううう！」

神力が弱くても神は神か。わたしは少しこいつを侮っていたようだな。

？？？　ＬＰ４０００→５００
ロキ　ＬＰ４０００→２０００

「タァーンエンド！」

ロキ
ＬＰ２０００
手札×３
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「わたしのターン、ドロー。…フッ、手札から『縛られた策略』フィールドから『縛られた魂』墓地から『縛られた魔術』の３枚を除外し、わたしは『冥界の神』を特殊召喚する！」

仮面の生命体がディスクにカードを置いた瞬間、人間なら立っていられないほど大きい地震が起こり、海が割れた。そして、その海の底から巨大な鎌を持ち、黒いマントを翻した人型のモンスターが姿を現した。その大きさは高層ビルに匹敵する。

「我が神は戦闘と効果によっては破壊されない！」

冥界の神　ＡＴＫ５０００

「我が神で『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃！エンド・オブ・デスサイズ！」

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』はゲームから除外することで相手モンスター1体の攻撃を無効にできる。ヒャッハハハハハ、残念だったね」

鎌は止まり、冥界の神の動きが止まる。

「わたしはこれでターンエンドだ」

我が神の起動効果が発動可能になるのは次のターンからだ。

「このエンドフェイズに『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』は帰還する！」

???
ＬＰ５００
手札×３
フィールド
冥界の神　ＡＴＫ５０００

「僕のタァーン！僕はカードを1枚伏せてタァーンエンド！」

何もできないことほどうざったい事もないね。

ロキ
ＬＰ２０００
手札×３
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは『冥界の神』の効果を発動する！我が神が攻撃する時、相手モンスターの効果を無効にすることができる！『冥界の神』で『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃！エンド・オブ・デスサイズ！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→３５００

「うわあああああ！」

ロキ　ＬＰ２０００→５００

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』撃破。この瞬間、我が神の効果によりお前は３５００ポイントのダメージを受ける。ダイレクト・デスサイズ！」

「そうはいかない！カウンタートラップ発動『スカーレッド・ノヴァ・バリア』！僕の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』がフィールドを離れたターン、手札の２枚を墓地へ送り、僕へのダメージは０になる！そして、この効果によって無効にしたダメージ１０００ポイントにつき１枚ドローする！
僕が無効にした数値は３５００ポイント、よって３枚ドロー！」

「フッ、我が神の前でまだ戦うか、おろかなる神よ！」

「僕はライフが０になるまで戦う。僕の魂のカードがある限り！手札からトラップカード『スカーレッド・ノヴァ・リバイバル』を発動！このカードは『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』がフィールドを離れたターンに発動できる！手札からチューナーモンスター『バリア・リゾネーター』を墓地へ送りフィールドを離れた『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』１体をエクストラデッキ・墓地・除外

ゾーンから特殊召喚する！超新星の力はまだ尽きていない！来い、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→６５００

「ターンエンド」

？？？
ＬＰ５００
手札×４
フィールド
冥界の神　ＡＴＫ５０００

「僕の…ターン！とどめだ！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『冥界の神』を攻撃！バーニング・ソウル！」

「わたしの神は絶対に負けはしない！敗北するのはお前のモンスターだ！我が『冥界の神』の効果発動！相手ターンに手札１枚を墓地へ送り、相手モンスターの攻撃力を０にして『冥界の神』の攻撃力を０にしたモンスターの数値分アップする！アブソーバー・デスサイズ！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５５００→０
冥界の神　ＡＴＫ５０００→１０５００

「僕はここで負けるわけにはいかない！まだ僕はけじめをつけていない、死ぬならけじめをつけてからだ！速攻魔法『エボリューション・スカーレッド』発動！」

「バカな…そのカードは…効果と名前が書かれていないだと！？」

『エボリューション・スカーレッド』が白く輝く。目を開けていられないほどの眩しい輝きが止むと、ロキの手には1枚の白いカードがつかまれていた。

「『エボリューション・スカーレッド』の効果によって、僕のバトルフェイズを終了！その後手札からチューナーモンスター2体を特殊召喚する！来い、『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』！『フォース・ノヴァ・フォーチュン』！」

2体のチューナーが特殊召喚された瞬間、ロキの手に握られていた白いカードにイラストと効果が現れる。

「レベル12の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』にレベル0の『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』とレベル0の『フォース・ノヴァ・フォーチュン』をダブルチューニング！大いなる超新星、今ここに新たなる姿を得て光臨する！新たなる究極の力よ、邪悪なる力を殲滅せよ！シンクロ召喚！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』！」

次の瞬間、天空に深紅色（クリムゾンカラー）の光が昇り、空が深紅色に染まる。

『グォォオオオォォオオオオ！！』

地球とその大気を揺らす鳴き声が響き、エターナル・ローズ・ドラゴン光臨の光景を思い出すように天空から深紅色の巨大龍が姿を現す。だが、エターナル・ローズ・ドラゴンが慈愛の黄金だったのに対し、この龍は力の深紅色だ。そしてその大きさは、エターナル・ローズ・ドラゴンと同等だ。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

現れたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの面影がある巨大龍は、冥界の神など簡単に叩き潰すことができると言わんばかりに見下している。

「だが攻撃力は４０００ポイント、それにバトルフェイズは終了している！我が神に勝利することなど不可能だ！」

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』がいる限り、メインフェイズ２終了後にもう１度バトルフェイズを行うことができる。そして、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は墓地のチューナーモンスター１体につき１０００ポイントアップする！僕の墓地のチューナーモンスターは８体だ。よって攻撃力は…」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→１２０００

「攻撃力１２０００だと！」

「ヒャーッハハハハハハ！喰らえ！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『冥界の神』を攻撃！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンはその身に白金の炎を纏い、突進した。

「く、『冥界の神』の効果によって手札１枚を墓地へ送り『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の攻撃力を０にし、『冥界の神』の攻撃力を１２０００ポイントアップする！どれだけのパワーがあ

ろうと我が神に勝つことはできないぞ！」

しかし、深紅色のバリアがアブソーバー・デスサイズをはじき返した。

「ヒャーッハハハハハ！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』は攻撃する時、相手の効果を封じる！」

冥界の神はクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの突進を受けて破壊された。光景としては象が蟻を踏みつぶすような感じだ。

「そ、そんな…バカな！わたしが、わたしの神が破れるというのか…！！」

仮面をつけた男は、白金の炎の中に消えて行った。

「…この僕が7つの力の内の1つを手に入れるなんて、思ってもみなかったね…」

今はクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンのカードは再び白に戻っている。

僕はデュエルが終わった後、すぐに校長室に移動して寝た。

第８２話　力の解放（後書き）

早いですが、７つのうちの２つ目を開放させました。でも残りの５つはこの小説の長さ的に考えてかなり先になりそうです。
今回の切り札『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果です。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン
レベル１２　神属性　ドラゴン族　シンクロモンスター　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００

『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』＋『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』＋『フォース・ノヴァ・フォーチュン』
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナー×１０００ポイントアップする。このカードが攻撃する場合、ダメージステップ終了時まで相手はカードの効果を発動・適用できない。このカードがコントローラーのフィールドを離れる場合、代わりにコントローラーの墓地のチューナー１体をゲームから除外することができる。この効果のスペルスピードは４として扱う。このカードがフィールドを離れた場合、自分の墓地から『レッド・デーモンズ・ドラゴン』１体を特殊召喚することができる。また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンのメインフェイズ２終了後、もう１度だけバトルフェイズを行うことができる。

見た目はエターナル・ローズ・ドラゴンと同じくらいの大きさの、クリムゾンカラーになり、体の鋭い部分がより鋭くなったスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンです。

第８３話　災難は絶えない（前書き）

ネタ切れです。なので思いついた話をすべてぶち込みました。同じようなネタが他の方の小説でもあったらすみません。

第８３話　災難は絶えない

～～～午前・森の中・ディスペアサイド～～～

我は今散歩に出ている。スクルドは校長室で楽しそうに何かしていたからおいてきた。

「……ん？」

歩いていると、目の前には倒れた人間の女が１人。格好を見れば一瞬でこの学校の生徒だとわかる。このまま放って行くのも後味が悪そうだから保健室に運んでおく。詳しい容姿は、茶髪のポニーテールで、見た目としては１０人通れば１０人とも振り返るであろう容姿だ。我には興味ないが。

～～～少女サイド～～～

ここは…保健室。

「目が覚めたのね」

「あ、鮎川先生…」

「あなた、森の中で倒れていたらしいわね。ディスペア君が言ってたわ」

「ディスペア君って誰ですか？」

「この人よ」

先生は私にデータベースの写真を見せる。…かっこいい。

よし、この人をゲットしよう！

そう思った私は早速この人を探すことにした。

～～～校長室～～～

ゾクッ！

「なんだ？今のは…」

「どうしたの？」

「一瞬寒気がした。『ブラック・ホール』禁止のフラグなのか…？」

「風邪ひいたの？」

「違うと思う」

何と言うか、また何か不幸なことを呼び込む前兆のようなものだ。

「とりあえず、外に行ってくる」

「気をつけるノーネ」

言い残して校長室を出た。クロノスは一応、教師としての役目を果たしている。
ちなみに、授業に出なくても怒られたり単位を下げられないのは、我らがどのような存在なのか知っているからだ。
とりあえず購買の方に行くとしよう。

～～～購買～～～

「こいつを1つもらおうか」

「あいよ」

勝ったのはカードパックだ。DPがたまり過ぎてしょうがないから時々買うことにしている。
買ったパックを開ける。というより、袋だけを魔法で燃やして中身を取り出す。『強制脱出装置』『ブラック・コア』『ゴブリンエリート部隊』『カオス・ソーサラー』『命削りの宝札（ウルレア）』だ。まずまずだな。

「あの、すみません！」

我にいきなり話しかけてきたのはさっき助けた人間の女だ。周りからは『あのミユキちゃんに声をかけられているだと！？くっそー！』などなど、さまざまな声が聞こえてくる。こいつ、そんなにいいか？

「何の用だ」

「さっきはありがとうございました！で、お礼がしたいので時間もらえないでしょうか？」

理解した。さっきの寒気はこの少女が原因だったのか。
しかし、こういったタイプは断ってもきりが無く、執拗に追いかけてくる可能性の方が高い。

「わかった、しかし我はそこまで暇ではない。なるべく短く頼む」

この少女…ミユキに連れられ、とりあえず外に出る。

～～～森の中～～～

周りには我とこの少女以外何もいない。それがわかったのか、少女はいきなり顔を近づけてきた。我はとりあえず身を引かせてかわす。

「ちょ、どうして離れるんですか！」

「当然だ。いきなり顔を近づけてきて何をするつもりだった」

「告白のキス」

「断る。もう我は空いていないからな」

油断も隙もない奴だ。1歩遅れたら危なかった。こいつは我に絶望を与えるつもりか。

「！それなら、私がその人とデュエルして、勝ったら私と付き合っ

て下さい！」

最も面倒なパターンが来た。こうなった奴は大体止められなくなる。そもそも、今の一言でそこまで理解するとは恐ろしい奴だな。さらに言えば、そう言った類の事をデュエルで決めるのか。

「デュエルしても無意味だぞ？我はお前が何をしようと心が動くことは無い」

一応釘をさすが。

「大丈夫です！デュエルが終わった頃には絶対私に惚れてますから」

恐ろしい自信だな。一体どこからくるのか。我は逆に絶対に惚れていないという自信がある。

～～～校長室～～～

「というわけでスクルド、頼む」

理由を隠すことなくすべてスクルドに伝える。

「もちろん」

ディスペアのためにも負けられない！

～～～１０分後、外のデュエル場～～～

「なんだなんだ？」

「どうやらカイザーを賭けて女2人がデュエルするらしいぜ？」

「おいおい、片方は既に嫁じゃねェか」

なぜ事情を知っているかは知らないが、生徒達が全員外のデュエル場に来ていた。

外のデュエル場は我らの扱う神の大きさが理由で作らせたのだ。

「「デュエル」」

絶対にディスペアは渡さない…！

「キッヒャッヒャ。なんか大変なことになってるね」

ディスペアの嫁のスクルドと一目ぼれの女のデュエルか。見ものだね。まあ、ディスペアはこのデュエルでどっちが勝っても上手く手をまわしてスクルドを選ぶだろうけど。あ～あ、この空気は入りにくいな。せっかく何か起こしてやろうと思ったんだけどな。

「私のターン！私は『ローンファイア・ブロッサム』を召喚して、効果を発動。デッキから『ギガプラント』を特殊召喚！装備魔法『スーペルヴィス』を装備して、デュアル召喚をした状態にするよ。そして『ギガプラント』がデュアル召喚している時、1ターンに1度手札または墓地から、昆虫族か植物族のモンスター1体を特殊召喚できる。私は墓地から『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚して効果を発動。もう1度このカードを生贄にして、デッキから

『エボリューション・ローズ』を特殊召喚！レベル６の『ギガプラント』にレベル１の『エボリューション・ローズ』をチューニング、シンクロ召喚！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！そして墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果発動。自分の墓地の通常モンスター１体を特殊召喚できる。デュアルモンスターは墓地では通常モンスターとして扱うから、『ギガプラント』を特殊召喚するよ。カードを１枚伏せてターンエンド」

スクルド
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００
ギガプラント　ＡＴＫ２４００
伏せカード×１

「あたしのターン」

へえ、あの一目惚れをした女の方は一人称が『あたし』なんだ。鏡を見ていた限りじゃディスペアの前だと『私』だったと思うんだけどね…。
とりあえず、僕はこの韓国ドラマ的な流れから逃げよう。

「あたしは『神獣王バルバロス』を召喚！生贄なしで召喚したこのモンスターの攻撃力は１９００になる！『神獣王バルバロス』で『ギガプラント』を攻撃！ダメージステップ時に手札から速効魔法『禁じられた聖杯』を発動して『神獣王バルバロス』の効果を無効にして、エンドフェイズまで攻撃力を４００ポイントアップする！トルネード・シェイパー！」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００→３４００
スクルド　ＬＰ４０００→３０００

「カードを２枚伏せてターンエンドよ。おとなしくディスペア君をあたしに譲ってくれないかしら？」

ミユキ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００
伏せカード×２

「私が渡しても、ディスペアは拒否すると思うけど…」

私は苦笑いしながら言う。最初から渡すつもりなんかないけれど。

「私のターン。私は魔法カード『死者転生』を使って手札を１枚捨てて、墓地から『エボリューション・ローズ』を手札に加える」

「今更そんなモンスターを手札に戻したところで、あなたに勝つ手段は無いわよ。サレンダーしたほうが恥をかかなくて済むわ。悪いことは言わないからサレンダーしなさい」

「……」

「あ…」

スクルドが静かになった…いや、普段から静かだけど何か違う。

「おわったな、あの女生徒」

「わたしが骨ぐらいは拾ってやろうか」

「え？え？どーゆーことなのさ？」

「要は怒ったということだ。スクルドは降参の強要が大嫌いでな」

スクルドはまだ戦えるうちに諦めることが大嫌いだ。来るぞ、エターナル・ローズ・ドラゴンが。

「成程ね」

「私は『フォーチュン・ローズ』を召喚して効果を発動。手札から植物族のチューナーモンスター1体を特殊召喚できる。私は手札に戻した『エボリューション・ローズ』を特殊召喚する。レベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』にレベル4の『フォーチュン・ローズ』とレベル1の『エボリューション・ローズ』をダブルチューニング！シンクロ召喚、私の希望『エターナル・ローズ・ドラゴン』！さらにトラップカード『エターナル・バリア』！私のフィールド上の『エターナル・ローズ・ドラゴン』が攻撃する時、相手はカードの効果を発動できなくなる」

「なっ！？（あたしのミラーフォースが機能しない！？それに…）

『エターナル・ローズ・ドラゴン』…あの時の巨大なドラゴンはあなたが操っていたというの!?」

あんな巨大なモンスターをこんな女が…!でも、あたしのライフはまだ４０００ポイント、このターン、１０００ポイントのダメージを受けたとしても、次のターンに死者蘇生でバルバロスを呼び戻して野生解放を使えば…!

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』で『神獣王バルバロス』を攻撃!エターナル・ローズ・ストリーム!」

「キャアアアア!」

ミユキ　ＬＰ４０００→３０００

「でも、あたしのライフはまだ残ってる…!」

これであたしの勝ちだ!

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果発動…相手モンスターを戦闘で破壊した場合、このカードの攻撃力…つまり４０００ポイントのダメージを与える。ローズ・オブ・レクイエム!」

眩しい光のかけらがミユキを襲う。

「そ、そんな…」

ミユキ　ＬＰ３０００→－１０００

「これで納得したか?人間、お前ではスクルドに勝つことはできな

い」

「スクルドって…あの北欧神話の…でも、あなたは北欧神話にはいなかったはず」

この人間、北欧神話を知ってたか…。この学園の資料室を見たが、北欧神話の資料は何一つなかったはずだが…？家にあるのか。

「我はどの神話にも属することのない神。それだけは話しておいてやる」

それを聞いた後、去っていく周りの人間には記憶操作をして今の話を忘れてもらった。このことはあまり学園には広めたくない。

「キッヒャッヒャ。絶望を与える者というだけはあるね、ディスペア」

恩をあだで返されたようなもんだから当たり前だとは思うけどね。今回はディスペア直々に絶望を与えたわけじゃないけど、それでもやり過ぎの部類かもね…。僕的には楽しかったけど。

「『愛すべきものを失った絶望』を知っているお前にはわかる話だと思うがな」

「今のでスクルドが負けてたら、ディスペアは愛すべきものを失うことになるわけだからね」

意外と重い話だったね。もっとも、絶望の仕方が全然違うけど。

第８３話　災難は絶えない（後書き）

今回のオリカ『エターナル・バリア』はユタ様から投稿いただいたものです。ありがとうございました。

第８４話　究極の機皇デッキ（前書き）

本日２度目の更新です。受験勉強やりながら書きました。
あと、今回機皇神マシニクル∞は３乗の記号を付けました。なので、
文字化けしてしまうかもしれません。

第８４話　究極の機皇デッキ

～～～校長室～～～

「失礼しまーす」

普通に校長室に入ってきたのは遊城十代とティラノ剣山、丸藤翔の３人だった。

「あれ？何でディスペア達がいるんだ？」

「今の我らはここに住んでいる。ブルー寮が占領されてしまったからな」

「ふ～ん」

「で、貴様らは一体何をしに来た？理由が無いならここへ来ることは無いはずだ」

我のとなりにいたトールが理由を聞く。

「ああ、ここならパソコンで自由に相手が探せるだろ？」

我がだいぶ前に神力でつないだ端末か。

「アレはもう使えんぞ。我が神力を切ってしまったからな。だが、相手ならここにいる。我でよければ相手をしてやろう」

「よし、相手してくれよ」

十代は何の躊躇もなくＯＫを出した。ちょうど完成したこのデッキを試すにはいい機会だ。

～～～デュエル場～～～

「我が機皇の力を受けるがいい！」

「「デュエル」」

「我の先攻！…フィールド魔法『機動要塞フォルテシモ』を発動する」

周りの風景が変わり、要塞のような場所になった。我がいるのは上の方で、十代を見下ろしている。合体はしない。

「『機動要塞フォルテシモ』の効果により、１ターンに１度、互いのプレイヤーは手札からレベル４以下の機械族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚できる」

「何だって！」

「出でよ、『機皇兵ワイゼル・アイン』！」

フォルテシモの奥にある出口が開き、そこから機皇帝ワイゼル∞を小さくしたような機械のモンスターが出現した。

「魔法カード『レベル・チェンジ』発動。手札を1枚墓地へ送り、このターン、自分のモンスターのレベルを変更することができる。我は『機皇兵ワイゼル・アイン』のレベルを１０に変更する。そして魔法カード『機皇戦線』発動。自分フィールド上の『機皇』と名のつくモンスター1体を生贄に捧げ、デッキから同じレベルの『機皇』と名のつくモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する！我はレベル１０の『機皇兵ワイゼル・アイン』を生贄に捧げ、デッキからレベル１０の『機皇神龍アステリスク』を特殊召喚する！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０
伏せカード×１
機動要塞フォルテシモ

「俺のターン、ドロー」

ディスペアのフィールドには攻撃力０のモンスターが1体だけ。チャンスだ！

「融合発動！手札からバーストレディとフェザーマンを融合して現れろ、マイフェイバリットヒーロー『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン』！行け、フレイム・ウィングマン！フレイム・シュート

！」

「トラップ発動『機皇神龍の咆哮』！攻撃力２０００以下の『機皇神龍アステリスク』が攻撃対象となった時、自分の墓地から機械族モンスター１体を効果を無効にして特殊召喚する」

でも、ディスペアの墓地にいるのは攻撃力１８００の機皇兵ワイゼル・アインだけのはず。

「我は『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する！」

「なっ！？いつの間に…！あの手札コストの時か！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０→４０００

「『機皇神龍アステリスク』の攻撃力は、我のフィールド上に存在する攻撃表示の機械族モンスターの攻撃力の合計となる。我が特殊召喚した『機皇神マシニクル∞？』の攻撃力は４０００、よってアステリスクの攻撃力も４０００になる。そして、相手はアステリスク以外の機械族モンスターを攻撃することはできない」

「攻撃は中止だ…カードを2枚伏せてターンエンド」

「『機動要塞フォルテシモ』の効果発動。機械族モンスターをコントロールしていないプレイヤーは自分のエンドフェイズに１００ポイントダメージを受ける」

「くっ」

どうする？いきなり攻撃力４０００のモンスターが2体も…さすが

は学園トップだぜ。

十代
ＬＰ３９００
手札×１
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン　ＡＴＫ２１００
伏せカード×２

「我のターン。我は『強欲な壺』を発動し、デッキから2枚ドロー。『機動要塞フォルテシモ』の効果によって、手札から『機皇兵グランエル・アイン』を特殊召喚する。さらに『機皇兵スキエル・アイン』を通常召喚。魔法カード『機皇帝の賜与』を発動。我のフィールド上の『機皇』と名のつくモンスター1体につき1枚ドローする。我のフィールドには4体の『機皇』モンスターがいる。よってカードを4枚ドロー」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ４０００→６８００

「一気にモンスターを揃えた…！」

しかも手札が4枚に増えてる！

「そして魔法カード『機皇召集』。我のフィールド上に『機皇』がいるとき、デッキから新たな『機皇』を特殊召喚する。我は2体目の『機皇兵ワイゼル・アイン』を特殊召喚」

マシニクルは1枚しかない。こういった切り札類のカードはものによるが1枚しか誕生しないようだ。

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ６８００→８６００

「極め付けだ。カードを1枚伏せ、魔法カード『ターン・スキップ』発動。このカードはデュエル中1度しか発動できないが、手札を全て捨てることでこのデュエル中、1ターンだけ相手のターンをスキップできる」

手札を全て…と言っても1枚だが捨てて発動する。

「そんな！」

何て強力なカードなんだ…

「行くぞ！『機皇神龍アステリスク』で『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン』を攻撃。インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「トラップ発動！『攻撃の無力化』！」

アステリスクの攻撃は時空の渦に飲み込まれた。

「ならば十代、お前のターンをスキップし、再び我のターンに移行する！」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ８６００
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００

機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００
機皇兵グランエル・アイン　ＡＴＫ１６００
機動要塞フォルテシモ
伏せカード×１

「ドロー。『機皇神龍アステリスク』でもう1度フレイム・ウィングマンを攻撃。インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「トラップ発動『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！」

アステリスクの攻撃が反射される。

「そうはさせん！『機皇神龍アステリスク』は自分フィールド上の機械族モンスター1体を墓地へ送ることで破壊をまぬがれる！我は『機皇神マシニクル∞？』を墓地へ送る！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ８６００→０

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０
機動要塞フォルテシモ
伏せカード×２

「俺のターン！ドロー。…『強欲な壺』の効果で、さらに2枚ドロ

ー！融合を発動して手札の『Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン』とフィールドの『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン』を融合！来い、『Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フレア・ウィングマン』！シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は自分の墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ』１体につき３００ポイントアップする！」

Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フレア・ウィングマン　ＡＴＫ２５００→３７００

「そして魔法カード『Ｈ－ヒートハート』の効果によって、シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力をさらに５００ポイントアップだ！」

Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フレア・ウィングマン　ＡＴＫ３７００→４２００

これであのトラップカードの効果でまた攻撃力が４０００になっても倒せる！そしてシャイニング・フレア・ウィングマンは戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！

「俺の勝ちだ！『Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フレア・ウィングマン』で『機皇神龍アステリスク』を攻撃！」

「我は絶対に負けはしない！トラップ発動『カオス・インフィニティ』！フィールド上の守備表示モンスターを全て攻撃表示に変更する！さらに、デッキと墓地から『機皇』モンスターを１体ずつ特殊召喚する！現れろ『機皇神マシニクル∞？』！『機皇兵ワイゼル・アイン』！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０→５８００

「くそっ！なら攻撃はやめる…」

「そうはいかない、トラップ発動『インフィニティー・トルネード』。相手は全てのモンスターで『機皇神龍アステリスク』を攻撃しなければならない！」

「なにぃ！？ぐあああ！」

十代　ＬＰ３９００→２３００

「くそ、『Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン』を守備表示で特殊召喚して２枚ドロー…カードを２枚伏せてターンエンドだ」

「『機動要塞フォルテシモ』の効果によって１００ポイントのダメージを受けてもらう」

レーザーが十代を襲った。

「ぐああ！」

十代
ＬＰ２２００
手札×０
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン　ＤＥＦ１２００
伏せカード×２

「我のターン。魔法カード『天よりの宝札』、互いに手札が６枚になるようにドローする！」

互いに手札は6枚になった。

「（よし、このターンを耐え凌げば次のターンで逆転できるぜ）」

「『機動要塞フォルテシモ』の効果によって、手札から『機皇兵グランエル・アイン』を特殊召喚し、『機皇兵スキエル・アイン』を通常召喚！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ５８００→８６００

「さらに魔法カード『機皇起動』！我のフィールド上で効果が無効になっている『機皇』モンスターがいるとき、そのモンスターの効果を有効にし、有効にしたモンスターの数×１０００ポイント自分フィールド上の『機皇神龍アステリスク』の攻撃力をアップする。我が有効にしたのは2体、『機皇神龍アステリスク』の攻撃力は２０００ポイントアップ！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ８６００→１０６００

「そして手札からトラップカード『機皇解放』発動。このカードは自分フィールド上に『機皇神』と名のつくモンスターがいる場合、手札から発動できる。自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで倍にする！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ１０６００→２１２００

「攻撃力…２１２００…」

前のカイザーよりもすげぇ…さすがは今のカイザーだぜ…！

「手札より魔法カード『トラップ・ブースター』発動！手札を１枚捨て、手札からトラップカード１枚を発動する！我は『インフィニティ・チェンジ』を発動し、『機皇神マシニクル∞？』に装備する！このカードを装備した『機皇』モンスターはシンクロモンスターを吸収できなくなるが、代わりに効果モンスターを吸収できる。我は『Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン』を吸収」

機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００→４８００
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ２１２００→２２０００

「行くぞ！『機皇神龍アステリスク』でダイレクトアタック！インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「させるか！トラップカード『ヒーロー見参』！」

「手札より速効魔法『機皇神の裁き』を発動！『機皇』モンスターが攻撃した時に相手がカードを発動した場合にのみ発動できる！そのカードの効果を無効にし、相手フィールド上の魔法・罠カードかモンスターカードをすべて破壊する！我は魔法・罠カードをすべて破壊する！」

「うわああ！？…また負けちまった…悔しいぃ、でも楽しかったぜ！…」

「インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

十代　ＬＰ２２００→－１９８００

～～～デュエル終了後の校長室～～～

「十代のやつ、メダル１００枚も持っていたのか」

もらったメダルを全てオーディンが数え終わった。

「ちぇ、大物近くにいたのか…残念」

「久しぶりに命をかけずに済むデュエルをしたな、ディスペア」

「ん？そう言えばそうだな。いつも負ければ死ぬデュエルの方が多いからな。その分だけ究極神の召喚も多くなり、毎回被害が大きい」

世界が１つぐらい壊れようと別に知ったことではない。しかし、固有ディスクで召喚した究極神の攻撃による世界の崩壊が多いのもまた事実だ。それに、究極神帝ラーの効果（ゴッド・アルティメット・ノヴァ）を使えば時空の全てのみならず最高神界まで完全に消え去るほどの威力がある。ゆえに固有ディスクで召喚した時は使えない。あの究極の効果、かなり気に入っているのだがな…。

「それなら究極神は控えればいいのに」

「我が切り札を使わないでデュエルしろと？無理な話だな」

切り札の入っていないデッキなど紙束同然、そんなデッキで戦う気にはなれない。

ロキは『ＢＦは全て切り札だろ』と思ったのか若干冷たい目をしていた。

第８４話　究極の機皇デッキ（後書き）

今回のオリカ『レベル・チェンジ』『ターン・スキップ』は仮面ライダーディケイド神様、『機皇神龍の咆哮』『機皇召集』はユタ様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました！

第８５話　未来からの訪問者（前書き）

今回も機皇パレードです。

最近思いついたろくでもない没ネタ。実現率０．０１％

○ディスペア死亡

←

○スクルドが誰かに持っていたティアラを渡す

←

○渡された人が主人公ｏｒスクルドが主人公

第85話　未来からの訪問者

～～～ある日の夜～～～

「キャア！？」

「どうした、スクルド！？」

スクルドがいきなり頭を抱えて苦しみだした。その青くどこまでも汚れ（けが）を知らない瞳は痛みのあまり涙目になっている。

「頭が…痛い…！誰か、誰かが未来からこの時代に来てる…！」

「この世界で未来から過去に移動できる力を持った者…」

スクルドにある未来から来たものを強制的に感知する能力か。未来を司る女神ゆえの能力だが、頭に激痛を伴う。これだけは我にもどうにもできない。歯痒いが、見ていることしかできないのだ。頭痛がする時間はかなり短いが、その痛みは万力で頭を締め付けられているような感覚だという。

「……」

「考え事？」

「ん？ああ…って、顔が近い、顔が」

顔をあげたら目の前に頭痛が治ったスクルドの顔があった。確実に

あと３ｍｍほどだろう。少し動けば距離はすぐに０になる。

「ね、私にも考えてること教えてよ♪」

だが、そんなことは微塵にも気にせずに笑顔で我に話しかける。幼少のころからそうだった。

「まあ、お前に隠し事をするのも嫌だからな。いいだろう」

とりあえず現段階で考えていることを全てスクルドに話した。まさか今話したことが次の日に的中するなど、その時は思っていなかった。

～～～次の日・スクルドサイド～～～

私は今、森の中を歩いている。すると、目の前には誰かを探している素振りをみせる男の子が一人いた。

「君、どうしたの？」

私はとりあえず男の子に話しかける。

「遊星達とはぐれちゃって…オレの仲間なんだけど…」

「キッヒャッヒャ、それで君は迷子になっちゃったんだ」

「お前はルチアーノ！」

「ルチアーノ？僕の名はロキだけど？まあいいや、お前の仲間なら海の方にいたよ」

その後この少年と少しだけ話をした。僕にはわけがわからなかったね。

「ありがと～、スクルド姉ちゃん、ロキ兄ちゃん」

～～～海・ディスペアサイド～～～

「まさか予想が本当に当たるとはな…」

「お前は誰だ？」

話しかけてきたのは金髪で長身の男、ジャック・アトラス。

「我が名はディスペア、最高神…といっても分からないな。とりあえず、デュエリストとは言っておこう」

「ほう。ならば俺とデュエルだ！」

「おい、ジャック！」

ジャック・アトラスを止めようとするのはＢＦ使いのクロウ。人間からすると見知らぬ人間に有無を言わさずデュエルを挑むのは神にとってはどうでもいいことだが無礼らしい。

「いや、相手になろう。もしも我に勝つことができれば、未来へ帰

してやる」

我が呼んだわけではないが、いつまでもこの時代に居られても困る。しかし、こいつらが帰るためには神力が必要だ。だから、神力を集めるためにデュエルする。

「それは本当か！」

「二言はない」

「「デュエル」」

「我のターン。……そうだな。『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃表示で召喚する。カードを１枚伏せターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×１

「そのカードは！」

機皇帝と似ている！こいつはイリアステルの仲間なのか！

「ならば容赦はしない！俺のターン、相手フィールド上にのみモンスターが存在する場合、手札から『バイス・ドラゴン』を特殊召喚する！ただし、攻守は半分になる！さらに『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を

見るがいい！シンクロ召喚、我が魂『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！
『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

シグナーの龍の一撃はさすがにザコとは違うか。

「くっ…」

ディスペア　ＬＰ４０００→２８００

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

ジャック
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
伏せカード×２

「我のターン…『機皇兵スキエル・アイン』を召喚する。さらに魔法カード『機皇召集』を発動、その効果によってデッキから『機皇兵グランエル・アイン』を特殊召喚する」

「やはりイリアステルの仲間か！貴様、何が狙いだ！」

「イリアステル？何の事だか我にはわからんな。我は『機皇兵グランエル・アイン』の効果を発動し、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の攻撃力を半分にする。グラビティー・プレッシャー」

レッド・デーモンズ・ドラゴンはグランエル・アインの効果を受けて、地面に降りた。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００→１５００

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！貴様ぁぁ！」

「伏せカードオープン『機皇帝の賜与』。このカードは我のフィールド上の『機皇』と名のつくモンスター１体につき１枚ドローする。よって２枚ドロー。フィールド魔法『機動要塞フォルテシモ』を発動する」

「何だ…このフィールド魔法は！？」

「このフィールド魔法の効果によって、互いに機械族モンスターをコントロールしていなければ自分のエンドフェイズに１００ポイントダメージを受ける。さらに、１ターンに１度、手札からレベル４以下の機械族モンスターを特殊召喚できる。

我はこの効果を発動し、手札から『機皇兵ワイゼル・アイン』を特殊召喚する。

まずは『機皇兵グランエル・アイン』で攻撃力が半分になった『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を攻撃する」

グランエル・アインは重力砲をレッド・デーモンズ・ドラゴンにぶつける。レッド・デーモンズ・ドラゴンは重力に耐えきれずに爆破した。

ジャック　ＬＰ４０００→３９００

「トラップ発動『レッド・シールド』！『レッド・デーモンズ・ド

ラゴン』がフィールドを離れた場合、このターン、俺への３０００以下のダメージは無効になる！」

見たことのないカードだな。まあ、些細なことを気にしても仕方が無いか。今までの反応を見て分かったことは、ジャック達がいた５Ｄ′ｓの時系列は、少なくともイリアステルの三皇帝と会った後だということだ。

「魔法カード『機皇指令』発動。このカードは自分フィールド上に『機皇』と名のつくモンスターが存在する時、デッキから『機皇』と名のついたモンスター1体を手札に加える。我はデッキから『機皇神龍アステリスク』を手札に加え、我のフィールド上に3体の『機皇』が存在することにより『機皇神龍アステリスク』を特殊召喚する！

『機皇神龍アステリスク』が存在する時、相手はこのカード以外の我の機械族モンスターを攻撃することはできず、アステリスクの攻撃力は我のフィールド上の機械族モンスターの攻撃力の合計となり、アステリスクが破壊される場合、代わりに我のフィールド上の機械族モンスター1体を墓地へ送ることができる。そして、シンクロ召喚したプレイヤーは１０００ポイントダメージを受ける」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０↓４６００

「我はこれでターンエンド」

今頃気づいたが、アポリアよりも先に我を見て、後でアポリアを見たら、間違いなく我と勘違いするだろうな。アポリアが使うモンスターの効果も教えてしまった。だが、モンスター効果を知ったところでジャック達のカードではそこまでしっかりした対策は打てないから大丈夫だ。

ディスペア
ＬＰ２８００
手札×２
フィールド
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ４６００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００
機皇兵グランエル・アイン　ＡＴＫ１６００

「俺のターン！トラップ発動『ロスト・スター・ディセント』！自分の墓地からシンクロモンスター１体を守備表示で特殊召喚する！現れろ『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！ただし、この効果によって特殊召喚したシンクロモンスターのレベルは１下がり、効果は無効になり、守備力は０になる！」

墓地からレッドデーモンズが舞い戻る。

「さらに、俺の場に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がいることにより、手札からチューナーモンスター『レッド・ノヴァ』を特殊召喚！そしてチューナーモンスター『トップ・ランナー』を召喚！魔法カード『クリムゾン・バリア』発動！このターン、俺へのダメージは０になる！
いくぞぉ！レベル７になった『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル１の『レッド・ノヴァ』とレベル４の『トップ・ランナー』の２体のチューナーモンスターをダブルチューニング！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが炎の輪をくぐる。そして、レッド・デーモンズ・ドラゴンは炎に包まれた。中の様子は外からは見えない。

「王者と悪魔、今ここに交わる！あらぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚、出でよ！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！」

炎の球体が爆発し、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが出現する。

「お前は2回のシンクロ召喚をした。よって、本来なら『機皇神龍アステリスク』の効果により、２０００ポイントのダメージを受けるところだが…この効果ダメージはお前が発動した『クリムゾン・バリア』の効果によって無効になる」

ついでに、エンドフェイズに発動する機動要塞フォルテシモの効果も無効になった。

「そうだ！そして、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は、自分の墓地のチューナーモンスター1体につき５００ポイントアップする！俺の墓地には『ダーク・リゾネーター』『レッド・ノヴァ』『トップ・ランナー』の3体！よって攻撃力は１５００ポイントアップし、５０００ポイントになる！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→５０００

さすがは本家のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン…パワーが違うな。

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『機皇神龍アステリスク』を攻撃！バーニング・ソウル！」

「『機皇神龍アステリスク』の効果発動、『機皇兵スキエル・アイン』を墓地へ送り、このカードの破壊を無効にする！」

「だがダメージは受けてもらう！」

「……」

ディスペア　ＬＰ２８００→２４００
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ４６００→３４００

「ターンエンドだ」

ジャック
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「我のターン。…装備魔法『ライフル・シューティング』。こいつを『機皇兵ワイゼル・アイン』に装備する。これを装備したモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンするが、ダイレクトアタックができる。『機皇兵ワイゼル・アイン』でダイレクトアタック！」

機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００→１３００
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ３４００→２９００

「くうっ！…小癪な！」

ジャック　ＬＰ４０００→２７００

「カードを２枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ２４００
手札×０
フィールド
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ２９００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１３００
＋ライフル・シューティング
機皇兵グランエル・アイン　ＡＴＫ１６００
機動要塞フォルテシモ
伏せカード×２

「俺のターン！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『機皇神龍アステリスク』を攻撃！バーニング・ソウル！」

「……」

もう神力は十分にたまった。そろそろ幕を下ろしてやろう。

ディスペア　ＬＰ２４００→３００

「『機皇神龍アステリスク』は『機皇兵ワイゼル・アイン』を墓地へ送り、破壊を無効にする。そしてトラップ発動『インフィニティ・サモン』。『機皇』と名のついたモンスターが戦闘を行い、我が２０００以上のダメージを受けた時、デッキからレベル１０の『機皇』１体を特殊召喚することができる。現れよ、『機皇神マシニクル∞？』！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ１６００→５６００

「バカな！？攻撃力５６００だと！」

「これが我の本気…お前の敗北で幕を下ろしてやろう」

「くっ…カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

ジャック
ＬＰ２７００
手札×０
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００
伏せカード×１

「我のターン！『機皇神マシニクル∞？』の効果発動！1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を吸収する！」

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の効果発動！エンドフェイズまでこのカードを除外し、相手モンスター1体の攻撃を封じる！」

あのスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンはフリーチェーンの除外か。

「ならば『機皇神龍アステリスク』でダイレクトアタック！インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

しかし、アステリスクの攻撃はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果によって弾き返された。

「『機皇神マシニクル∞？』でダイレクトアタック！ザ・キューブ・オブ・ディスペアー！」

「うおおおおおおお！」

ジャック　ＬＰ２７００→１３００

「フッ、まあこんなものか。本当なら勝利しなければ未来へ帰すことができなかったのだが、未来へ帰すための条件がバーニング・ソウルによってすべて整った」

思った以上のパワーが集まったからな。

「本当か！？」

「不動遊星、未来へ帰る前にこのカードを渡しておこう」

「『シューティング・スター・フォース』…？大切に使わせてもらう」

未来へ変える寸前に龍亜が来た。危うく１人返し忘れるところだったな。

…奴らがこの時代に来たのは、我らの力に惹かれたからなのか？

「…気にしても仕方が無いことだな」

ちなみに渡したカードには効果が書かれておらず、あのカードを発動するとクリア・マインドの力を利用して時を移動できる。もしかすると役に立つ時が来るかもしれない。

暫く浜辺に立っていたが、特にすることもなくなってしまったので、校長室に戻った。

第８５話　未来からの訪問者（後書き）

今回のオリカ『ライフル・シューティング』は仮面ライダーディケイド神様からご投稿いただいたものです。大した活躍をさせることができませんでした。すみません。投稿ありがとうございました。

第８６話　クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンｖｓライトニング・エンジェル

新しいデッキの考えが決まったので久しぶりに登場していただきました。

第８６話　クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンｖｓライトニング・エンジェル

～～～校長室～～～

「レベル８の『古代の機械巨人』にレベル２の『古代の調律機（アンティークギア・アトミック・ゴーレム）』をチューニングするノーネ。シンクロしょうか～ん、『古代の機械原子巨人』！」

古代の核巨人　ＡＴＫ４０００

「『古代の機械原子巨人』でダイレクトアタックなノーネ。アトミック・パウンド！」

「ちっ…」

ロキ　ＬＰ６５００→２５００

「僕のターン、『死者蘇生』で『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を復活して『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』を特殊召喚、『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を召喚。シンクロ召喚！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』でとどめだ、エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

「マンマミ～ア！」

クロノス　ＬＰ２３００→－２７００

今僕達はテーブルでデュエルディスクを使わずにデュエルしていた。ただの遊びみたいなものだ。ディスクを使うとモンスターが入りきらないので却下。

「まあ、こんなものかな」

「生徒に負けるナン～テ…あんまりなノーネ」

「我らは生徒であって生徒ではないぞ。人間に我らが負けることなど殆どない」

例外も存在するが、大抵の場合は敗北することは無い。そもそも学園に来たのは暇つぶしというのもあるが、その他の目的もある。そのうえで生徒になっておいた方が得だと思ったから入ったのであって、わざわざデュエルを学ぶ必要は我らにはない。

「まあ、このデュエルはロキに勝とうとする時点で間違えていたとは言っておこう」

なにしろ、初手を見ただけでロキの勝利が決まったと思ったくらいだ。いくらクロノスが強力なシンクロモンスターを召喚しても、今の手札では勝つことなどできなかっただろう。

「失礼します」

突然校長室の扉が開く。入ってきたのは今まで幾度も我らに接触してきた3人の内の1人、テスタロッサ・ハラオウンだ。

「やっぱり、ここにいたんだ。ロキ」

「キッヒャッヒャッヒャ。僕をご指名？一体何の用かな？くだらない用事なら断るよ？」

「私の新しいデッキの相手になってくれないかなって思って」

「そんなのは僕じゃなくてもいいはずだ。この学園には君の相手になってくれる奴がたくさんいるよ」

僕にしてみればどうしてなにも利益は無いのにデュエルしなきゃいけないんだ。自分の仲間にでも相手をしてもらったらどうなんだ。

「いや、皆相手にならなくて…」

今の一言で僕に多少火をつけてくれたな。相手にならない？それなら、そのデッキを粉砕してやろう。

「いいよ。ただし、利益が何もないのは嫌だからね、僕が勝ったら何か奢ってもらおうかな。君が勝ったら、何かひとつだけ願い事を聞いてあげるよ」

～～～外のデュエル場～～～

「ヒャーッハハハハハハハ！お前のデッキごとき、僕の神が粉砕するよ！」

「そう簡単にはいかないよ！」

「「デュエル」」

「僕のタァーン！」

初手は…『エキセントリック・ボーイ』『バイス・ドラゴン』『クリエイト・リゾネーター』『レッド・ノヴァ』『紅蓮魔龍の壺』『紅蓮魔龍の咆哮』…幸運だね。

「僕は『エキセントリック・ボーイ』を召喚。このカードをシンクロ素材にする場合、そのモンスターは手札のモンスター1体でなければならない。僕は手札のレベル5の『バイス・ドラゴン』にレベル3の『エキセントリック・ボーイ』をチューニング！来い『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

「いきなり攻撃力３０００のモンスターを召喚するなんて…」

さすがは神様…としか言えない。

「まあ、『エキセントリック・ボーイ』を素材にしたシンクロモンスターは効果が無効になって、フィールドを離れると除外されるけどね。魔法カード『紅蓮魔龍の壺』を発動。僕のフィールド上に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がいるとき、2枚ドローできる」

『紅蓮魔龍の導き』『ダーク・リゾネーター』…。

「僕は『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がフィールド上に居ることで手札から『クリエイト・リゾネーター』と『レッド・ノヴァ』を特殊召喚！レベル8の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル3の『クリエイト・リゾネーター』とレベル1の『レッド・ノヴァ』をチューニング！王者と悪魔、今ここに交わる！あらぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚！『スカーレッド・ノヴァ・

ドラゴン』！」

紅蓮の炎の中から悪魔の龍が出現した。

「こいつの攻撃力は、僕の墓地のチューナー1体につき５００ポイントアップする！ヒャーッハハハハハ！魔法カード『紅蓮魔龍の導き』を発動。僕のフィールド上に『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』がいることで、デッキからチューナーモンスター『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』を守備表示で特殊召喚する。『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』はカード効果によっては破壊されず、1ターンに1度戦闘でも破壊されないよ。カードを1枚伏せてタァーンエンド！」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００
スカーレッド・ノヴァ・フェアリー　ＤＥＦ０
伏せカード×１

「私のターン！まずは魔法カード『強欲な壺』で2枚ドローして『天使の施し』を発動、3枚ドローして2枚墓地へ送る」

ロキのフィールド上には伏せカードが1枚と攻撃力５０００のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン…でも、攻撃力５０００じゃ私には勝てない。

「私はフィールド魔法『魔法都市エンディミオン』を発動！」

「！！」

「さらに私は手札を１枚捨て『ＴＨＥトリッキー』を特殊召喚するよ。さらにこの効果で手札から捨てられた『魔轟神獣ケルベラル』を墓地から特殊召喚！」

間違いない…テスタロッサのデッキは…アーカナイト・マジシャンを使う魔法使い族！そして、必ずテスタロッサは自分の切り札も入れている！

「レベル５の『ＴＨＥトリッキー』にレベル２の『魔轟神獣ケルベラル』をチューニング！シンクロ召喚、『アーカナイト・マジシャン』！このカードのシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを２つ置く。そして、『アーカナイト・マジシャン』の攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンターの数×１０００ポイントアップする！」

アーカナイト・マジシャン　ＡＴＫ４００→２４００

「魔法カード『魔力掌握』発動。『アーカナイト・マジシャン』に魔力カウンターを１つ乗せて、魔法カードが発動したことで『魔法都市エンディミオン』に１つ魔力カウンターが乗る。そしてデッキから『魔力掌握』を手札に加える」

アーカナイト・マジシャン　ＡＴＫ２４００→３４００　ＭＣ×３
魔法都市エンディミオン　ＭＣ×１

攻撃力３４００…僕のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンには遥かに及ばない。

「私は『アーカナイト・マジシャン』の効果を使って『魔法都市エンディミオン』に乗っている魔力カウンターを1個取り除いて、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を破壊！」

魔法都市エンディミオン　ＭＣ1→0

アーカナイト・マジシャンがスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに魔力の弾丸をぶつけて爆発が起こる。そして…煙がはれる。

『グオオォォオオオ！』

「な、なんで…！？」

「ヒャーッハハハハハハ！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』は相手のカードの効果じゃ破壊されないんだよ！」

「それなら永続魔法『マジック・フリーズ』を発動！相手は魔法カードを発動できず、このカードが破壊された時デッキから魔法カード1枚を手札に加えることができるよ。『アーカナイト・マジシャン』で『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃！」

「！？」

アーカナイト・マジシャンの属性は光！それなら攻撃してきたのも理解できる！

「させるか！トラップカード『紅蓮魔龍の咆哮』！フィールド上の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』か『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』が攻撃対象にされた時、バトルフェイズを終了して、手札

のチューナーモンスター『ダーク・リゾネーター』を墓地へ送り、デッキからチューナーモンスター『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を手札に加える」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→５５００

キッヒャッヒャッヒャ…

「ターンエンドだよ」

な…なんでロキはさっきから笑っているんだろう…？

フェイト
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
アーカナイト・マジシャン　ＡＴＫ３４００　ＭＣ×３
魔法都市エンディミオン　ＭＣ０
マジック・フリーズ

「僕の……タァーン！ヒャッハハハハハハ！僕はチューナーモンスター『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を召喚」

フィールド上に青く燃えている炎の球体が現れた。

「レベル１２の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』に…」

「そんな…レベル１２のモンスターを…シンクロ素材に…？」

レベル１２を超えるモンスターなんて…いるはずがない。私がかつ

て見た中で最高だったのはレベル15だったけど、それはもう『モンスター』と呼べるものじゃなかった。でも、ロキから感じるこれは…明らかに限界を超えた力。

「レベル0の『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』と『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を…」

「チューナーのレベルが0!?」

そんなカード…見たこともないし、聞いたこともない。

「チューニング!」

バシュウウウウウン!

ロキの持つカードから深紅色の光が空に昇る。空が深紅色に染まり…

『グォォォオオオォォォオオ!!』

天地がその咆哮に震えた。私は間違いなく、かつてない恐怖を感じている…!

「究極神より誕生した7つの力…その1つが今ここに…限りなく長い時を経て封印を解かれ降臨する!シンクロ召喚!究極のシンクロモンスター!『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』!!」

『グォォォオオオォォォオオオ!!!』

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの咆哮が響き渡る。デュエルアカデミアの校舎や各寮の建物が揺れ、海には巨大な竜巻が出現し、空には深紅色の雷が鳴り響いている。

「僕の最強の神『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』…その攻撃力は僕の墓地のチューナーモンスター1体につき1000ポイントアップする」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ATK4000→10000

「こ、攻撃力100000…！」

『グルルルルルル…』

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『アーカナイト・マジシャン』を攻撃！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンは自分の身体に白金の炎を纏い、アーカナイト・マジシャンを攻撃した。

「ダメージステップに手札から…！？」

効果が使えない！？

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』が攻撃する時、相手はカードの効果を発動することはできない」

「！！」

フェイト　ＬＰ４０００→０

「それなら、私のライフが０になったことで、手札を全て捨てて『ライトニング・エンジェル』を特殊召喚！このカードの特殊召喚に成功したことで、デッキから『オネスト』を手札に加えるよ」

天からライトニング・エンジェルが舞い降り、自分よりもはるかに巨大なクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンを見上げている。対するクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンはライトニング・エンジェルの事を気にも留めておらず、倒すべき敵…フェイトをその眼で睨み続けている。

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』…さすがにディスペアの『究極神』から生まれたからか、炎の色は『究極神帝ラー』を引き継いでるんだ」

究極神帝ラーの効果を何度か見たことがあるし、強く記憶に残ってるからすぐにわかる。

「僕が聞いた話だとあくまで７つの力は『究極神帝ラー』から生まれたものだからね。けど、お前にこの神の龍を倒すことはできないよ」

たった攻撃力４０００の神に僕の神龍を倒すことなどできはしない。

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果発動！メインフェイズ２終了後、もう１度バトルフェイズを行うことができる！」

「そうはさせない！墓地から『ライトニング・ガードナー』を墓地へ送って効果発動！私のフィールドの『ライトニング・エンジェル』

は1ターンに1度だけ戦闘では破壊されず、効果を無効にされない！『ライトニング・ガードナー』の効果は無効にされないよ」

チッ…天使の施しで捨てていたか。このカードを使えばアレを倒せるけど…僕は魔法カードが使えない。このターンは破壊できないな。でも、次のターン2回の攻撃をライトニング・エンジェルにすれば破壊できる。

「ターンエンド！」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１００００

「私のターン、ドローは『ライトニング・エンジェル』の効果でできない」

一か八か…これにかける！

「『ライトニング・エンジェル』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃！ライトニング・スマッシャー！ダメージステップに『オネスト』を捨てて攻撃力を１００００ポイントアップ！」

ライトニング・エンジェル　ＡＴＫ４０００→１４０００

ドオオォォォォン！

互いの攻撃がぶつかり爆発する。暫く経つと、煙がはれた。

『グォォオオォォォォオオ！』

ロキ　ＬＰ４０００→１

「そ、そんな…どうして？」

「キッヒャッヒャ。手札からカウンタートラップ『紅蓮の生命』を発動した。このカードは『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』が僕のフィールド上に居るときのみ、手札から発動できる。このカードの効果によって、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』がいるときに自分のライフが０になる場合、１度だけ１ポイント残すことができる。そして、相手ターンに発動していた場合、相手のターンは強制的に終了する」

「でも、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』は倒したはず…」

「キッヒャッヒャ…『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』はこのカードがフィールドを離れる場合、代わりに自分の墓地のチューナーモンスター１体をゲームから除外できる。ちなみに、この効果はスペルスピード４だからどんなカードでもチェーンはできない。僕はこの効果で、墓地から『ダーク・リゾネーター』を除外した」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１００００→９００

「つまり…私の戦略は通じなかった…」

「まあ、以前よりもずっと良い線は行ってたけどね。この『紅蓮の生命』が無ければ君の勝ちだった。僕のタァーン！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果によって2度のバトルフェイズを行い、2回『ライトニング・エンジェル』を攻撃！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

前に比べたら、だいぶ強くなった。前は機皇帝でひとひねりだったしね。今は2，3ひねりしないと倒せないからね。人間の進化のスピードには呆れるよ。

フェイト　ＬＯＳＥ

第８６話　クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンｖｓライトニング・エンジェル

機皇関係の大半のカードの効果が判明しましたね。活動報告に書いておくので、よければどうぞ。

今回のオリカ『紅蓮魔龍の咆哮』『紅蓮魔龍の導き』はユタ様から、『マジック・フリーズ』は仮面ライダーディケイド神様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました。

第８７話　修学旅行行き先争奪戦（前書き）

いろいろおかしくなってしまいました。そして短いです。
※機皇シリーズのＯＣＧ効果が判明しましたが、基本的にアニメ効果でやっていきます。

第87話　修学旅行行き先争奪戦

～～～校長室～～～

「こんな長靴に用は無いのでアール！」

「そんなところにこそ用は無いノーネ」

「……」

「ノーネ」

「でアール！」

「……」

「絶対にここなノーネ！」

「いいや、ここでアール！」

「いい加減にしろ……お前達…」

さっきからうるさい奴らだ。どこの国だろうが大して変わらん。

「「悪かったノーネ（でアール）！！」」

「修学旅行の行き先ならば、斎王様が占いにより決めて下さった」

校長室に入ってきたのは万丈目と天上院を先頭にした光のナントカの連中だ。

「お前達も騒ぎに来たのか…？」

我が声を発したすぐ後、ナントカの連中は道を開けて、斎王が歩いてきた。

「新入生ということで、あまりでしゃばりたくは無いのですが…運命からわたしにお告げがありました（この男がディスペア…ついでに少し調べてみよう）」

……！わたしの力が弾き返された…この３つの力は一体何だ！？

「斎王琢磨、調子に乗るなよ。我の中に入ろうとするなど、おろかにもほどがある」

究極神の加護は我のあらゆる力を何倍にも増大させている。精神に入り込み、力の本質を調べ、洗脳しようとしても無駄な努力。

「貴様、斎王様になんという口のきき方を！」

連中の一人が殴りかかってくる。だが、その拳を受け止め握る。

「痛たたたた！離してくれ、頼む！」

後少し力を入れれば、こいつの拳は完全に骨が折れ、一生治らなくなる。

「フン」

その生徒の頭をもう片方の手でつかみ、握っていた手を離し投げ飛ばす。ぞの生徒は壁に激突してうずくまった。

「クズは引っ込んでおいたほうが身のためだよ」

ロキは既に万丈目の首筋に破滅の枝と呼ばれる神の武器レーヴァテインをいつでも振るうとができるように構え、万丈目を捕まえていた。

「い、いつの間に！」

「黙れ。せっかく気分よくテレビを見ていたのに。洗脳結社のくせに僕の邪魔をするなんて本当にいい度胸だよね」

ロキは万丈目の首に手刀を当て気絶させた。相変わらずこういう役目しかないのか…哀れだな。

「斎王、今すぐにこのクズどもを連れて帰ってもらおう。我は占い、運命など無駄なものは信じない。当然、そんなものを基にした修学旅行の行き先など変更させてもらう」

運命はスクルドが既に知っている。だが、それは知っておけばいくらでも変えられる無意味な物。修学旅行など興味ないが、運命がどうたらで決められた場所になど行きたくは無い。

「それでもなお、修学旅行の行き先が自分の希望通りになるようにしたいのならば、我とデュエルしてもらう」

「分かりました。あなたの挑戦を受けましょう」

「挑戦するのは我ではない、貴様だ。斎王琢磨」

「まあ待てよ、俺だって行きたいところがあるんだ。俺もデュエルするぜ」

「十代、我が勝てば修学旅行の行き先を決める権利はお前に譲渡してやろう。お前がデュエルに乱入すると、ロクなことが無い」

十代はその後何かいろいろうるさかったが無視して移動した。

～～～校舎内デュエル場～～～

「もう1度だけ言っておいてやる。斎王琢磨、お前が勝てば修学旅行の行き先はお前が決める。我が勝てば、行き先は十代が決める。二言は無い」

このデュエルを仕掛けたのにはもう1つ理由がある。斎王が我らの出現によって何らかの補正を受けているのならば、十代では相手にならない。より確実に勝利するためにこのデュエルを仕掛けたのだ。

「それでいいでしょう」

「「デュエル」」

「我のターン。我は『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚する。カー

ドを４枚伏せターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×４

「わたしのターン」

「永続トラップ発動『機皇障壁』さらに『機皇電磁波』」

「ならば『アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』を召喚し、速攻魔法カード『アルカナクレスト』を発動。召喚成功時の『アルカナフォース』の効果を無効にして…そのモンスターの攻撃力を１４００ポイントアップします」

アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ　ＡＴＫ１１００
↓２５００

「『アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃します」

「トラップ発動『機皇衝陣』。我の『機皇兵』が攻撃対象になった時、デッキからレベル４以上の『機皇』１体を特殊召喚する。現れろ『機皇兵スキエル・アイン』！」

「それならば『機皇兵スキエル・アイン』を攻撃！」

「永続トラップ『機皇障壁』の効果発動。１ターンに１度、我のフィールド上に『機皇』と名のつくモンスターが存在する場合、相手モンスターの効果または攻撃を無効にする」

スキエル・アインの前にバリアが現れ、ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮの攻撃は容易く遮られた。

「ターンエンド」

「このエンドフェイズに『機皇電磁波』の効果が発動する。墓地の『機皇』と名のついたカードを除外しない場合、このカードを破壊。我はコストを払わずに破壊し、『機皇電磁波』の第２の効果を発動する。『機皇障壁』を破壊し、デッキ・手札・墓地から『機皇神龍アステリスク』１体を特殊召喚し、『機皇電磁障壁』１枚を発動する。『機皇電磁障壁』は『機皇神龍アステリスク』が存在しなければ破壊されるが、１ターンに１度、手札から『機皇』と名のつくカードを１枚墓地へ送ることで相手のモンスターの攻撃または効果を無効にする。そして、墓地の『機皇』と名のつくカードを１枚除外することで、相手が発動した魔法・罠カードの効果を無効にして破壊する。

アステリスクの効果により、アステリスクの攻撃力は我のフィールド上の攻撃表示の機械族モンスターの合計となり、相手は『機皇神龍アステリスク』を除く我の機械族モンスターを攻撃対象にすることはできない」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０→３０００

斎王
ＬＰ４０００
手札×４

フィールド
アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ　ＡＴＫ２５００

「我のターン…伏せカードオープン『機皇帝の賜与』。このカードの効果によって、我のフィールドに存在する『機皇』モンスター１体につきカードを１枚ドロー」

デッキからカードを３枚ドローする。言い忘れていたが、これは究極神召喚の固有ディスクだ。斎王はこのデュエルの始まりに我に気付かれないように現実のダメージが発生するフィールドにしていた。インフィニティー・アイを起動していなければ気付かなかっただろう。
ちなみにディスクは左腕側に浮いている。右利きで手札置きを使うためには左側につける必要がある。

「『機皇兵グランエル・アイン』を召喚。アステリスクの攻撃力がさらにアップする」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ３０００→４６００

「『機皇兵グランエル・アイン』の効果発動。１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力または守備力を半分にする。我は『アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』の攻撃力を半分にする」

アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ　ＡＴＫ２５００→１２５０

「行くぞ。『機皇兵グランエル・アイン』で『アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』を攻撃。グラビティー・ブラスター

！」

斎王　ＬＰ４０００→３６５０

「『機皇兵スキエル・アイン』でダイレクトアタック！」

斎王　ＬＰ３６５０→２４５０

「続けて『機皇兵ワイゼル・アイン』でダイレクトアタック」

斎王　ＬＰ２４５０→６５０

「ここまでのようだな。大口をたたいたわりには、どうということは無かったな。『機皇神龍アステリスク』でダイレクトアタック！インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「わたしは手札から『アルカナフォースＸＩＶ－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』を手札から捨て、アステリスクからのダメージを０にする」

アステリスクの攻撃は透明なバリアに阻まれた。

「我はカードを2枚伏せる。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ４６００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００

機皇兵グランエル・アイン　ＡＴＫ１６００
機皇電磁障壁
伏せカード×２

「わたしのターン」

あの男のフィールドには毎ターン、わたしの攻撃か効果を無効にして破壊するカードがある。この状況は…やはりこのカードの誕生を待つべきだったか…！

「わたしは魔法カード『アルカナの十字架』を発動。わたしの手札から『アルカナフォース』と名のつくモンスター１体を特殊召喚することができる！」

「無効にはしない。特殊召喚するがいい」

口調が変わってきたな…表の顔が破滅の光に沈んだか？

「わたしは『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』を特殊召喚する！さあ、ストップを宣言するのだ！」

「ストップだ」

「当然…逆位置だと！？」

「……」

我相手に運命決定力など通用しない。このインフィニティー・アイの前では敵対する者の特殊な能力全てが無効になる。伊達に究極神の力を宿した眼ではない。

「逆位置の効果、それは我が毎ターン、墓地の一番上のカードを手札に加える」

「クッ…魔法カード『アルカナクラッシュ』！相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「忘れたか？墓地から『機皇帝の賜与』を除外し、『アルカナクラッシュ』を無効にし破壊する！」

「『アルカナトレジャー』発動！自分フィールド上に『アルカナフォース』と名のつくレベル7以上のモンスターが存在するときわたしはカードを3枚ドローする！」

手札が3枚になったか…無効にするものを間違えたな。

「魔法カード『アルカナバランス』！ゆけ！『アルカナフォースXXI－THE WORLD』で『機皇神龍アステリスク』を攻撃！」

次の瞬間、アステリスクは一瞬にして消えた。

「どういうことだ！？」

「『アルカナバランス』の効果によって、このターン『アルカナフォース』が攻撃対象にしたモンスターは破壊される！さらに、攻撃対象モンスターはダメージ計算時のみ効果を失うのだ」

「ならば…『機皇電磁障壁』最後の効果を発動させる。このカードが破壊されフィールドを離れた時、『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する！この効果で特殊召喚されたマシニクルは2ターンの間、

いかなる場合でも破壊されることは無い。そしてマシニクルの攻撃力は、アステリスクの攻撃力分アップする」

機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００→８６００

「攻撃力８６００だと！」

これが斎王…お前が選択した未来だ。お前は『アステリスクを破壊する』という未来を選択したが、その代償として『機皇神マシニクル∞？の召喚』という未来を同時に選択したのだ。この効果によって特殊召喚したマシニクルが与えるダメージは半分になるが…既に斎王にはこの状況を覆すことのできる切り札は無い。

「ターンエンドだ…！」

斎王
ＬＰ６５０
手札×２
フィールド
アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　ＡＴＫ３１００

「我のターン。『機皇神マシニクル∞？』で『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』を攻撃する！ザ・キューブ・オブ・ディスペアー！」

「ぐわあああああああ！」

斎王　ＬＰ６５０→－２１００

デュエルが終わったあとは十代が大声でドミノ町に行くと宣言し、

何事もなく終了した。ここで未来が変わるのは色々不都合が起こるかもしれなかったから我が相手をして正解だったな。

第87話　修学旅行行き先争奪戦（後書き）

ストーリーを進めました。修学旅行編に入りますが、どれぐらい長くなるかは考えていません…

今回のオリカ『機皇障壁』『機皇電磁波』『機皇電磁障壁』はユタ様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました。

第８８話　修学旅行初日（前書き）

しばらくは修学旅行の話をやると思います。
今回はデルタアクセルシンクロォォ！記念に、こちらでもやっつけ設定で出しました。ディスペアの３つ目のエースデッキの切り札です。
さらにまさかの人物がライディングデュエルをします。

第８８話　修学旅行初日

～～～デュエルアカデミア港～～～

「ところでディスペア。修学旅行って何？」

船に乗った後、我の手を握ったスクルドが聞いてくる。

「まずそこからか…とりあえず、普段は我ら2人だけかオーディン、トール、ロキも含めた5人で旅行して寝泊りするだろう？」

「うんうん」

「修学旅行というのは分かりやすく言えば、共に旅行して寝止まる者が通っている学校の人間になるということだな。当然、学校行事だから勉強という目的もあるな。さらに、集団行動である以上、我らが旅行している時のような勝手な行動はできない。次にメリットだが、学校側が勝手にプランを立てるために行き先の建物などの場所を知る必要が無いということだな。集団行動ゆえに恐らく迷って帰って来れなくなる奴もいないだろう。なにしろ我もよく知らないから詳しくは説明できない。すまないな」

「ううん。大体分かったよ。ありがと」

こんな出鱈目な説明で理解できたのか。

「スクルド、すまない…少し上の方に行く」

船はどうしても慣れない…これから3時間、お先真っ暗だ。

「??うん…」

首をかしげて答える。スクルドは我が船と飛行機に慣れていないのを知らない。

「最高神の王も形無しだね」

「……お前に、言われたくは…ない」

自分だって僅か1mm床から浮いているだろう…！どうやったらそんな器用なことができる?

「…少し寝る」

船の部屋の椅子を陣取って眠る。神々の船や我のD－ホイールなら何も問題が無いのになぜだ…やはり水の上に浮いて揺れているのがいけないのか?

～～～2時間後～～～

「ディスペア、ディスペア…」

「む…?スクルドか…何か用か?」

「用も何も、死んだみたいに寝てたから心配になっちゃって…ごめんね。…それに、なんか私も気持ち悪くなっちゃって…」

顔色が悪い。正直言って、我よりも酷い。杖でバランスを保ちながら立っている状態だ。

「仕方が無い…」

周りの視線を気にせずいつも通りお姫様抱っこで持ち上げる。我はもうだいぶ良くなったから大丈夫だ。

…ティアラをつけて髪をおろしているためか今までよりもずっと『お姫さま』に見える。ロキの言っていたことは間違っていなかったな…。

とりあえずはスクルドを連れたまま外に出る。人間界の空気は決してきれいというわけではないが、中よりも外のほうがきれいなのは確かだ。ちなみに神界では空気が存在しないため、人間が入ってきた場合は空気が無くとも生きていることができる魔法が自動でかかるようになっている。

外にずっと立っているうちにドミノ埠頭についた。

～～～ドミノ埠頭～～～

「下ろすぞ」

「うん」

スクルドをおろして立たせる。

『では、この修学旅行が～～～ノーネ。解散なノーネ』

クロノスの話が終わり、自由行動に移った。どうでもいいが、集団行動ではないのか？

「クロノス、我らはどこに泊まればいい」

「あなた達は、教師と同じホテルに泊まってもらいまスーノ」

つまり、生徒の中では最高ランクということだな。

「あなた達も、各自で楽しんでくるといいノーネ」

そう言ってクロノスやオーディン、トール、ロキの『北欧の三神』もどこかへ行ってしまったので、スクルドと2人で出かけることにした。

「ん…？手紙が引っ掛かっているな」

輪に手紙が巻きつけられているのを取って読む。

“僕達は3人で適当にやるから、2人だけの水入らずの時間を楽しみなよ。せっかくの夫婦なんだからそのぐらいはしないとね。ｂｙロキ”

「……マセガキめ」

「？？」

ディスペアの表情が変わった？何が書いてあったんだろう？

「行くぞ」

「あ、待ってよ～」

～～～ドミノ町、中央広場～～～

「ん？何故十代達がここにいる」

中央広場には十代達がいた。

「遊戯さんの家に行くんだけど…先にここを見ておこうかなって思ってな。そんなことよりデュエルしようぜ」

「デュエルは修学旅行中ぐらい適当に町の住民を誘ってやれ。我はスクルドと共に修学旅行を過ごすつもりなのでな。行くぞ、スクルド」

～～～ディスペアがスクルドを連れて行った直後～～～

「アニキ、今のセリフ聞いて何も思わないんスか？」

「いや、ものすごく仲いいな～って思うけど」

「ハァ～…」

～～～ドミノ町・海馬コーポレーション～～～

受けつけの黒い服を着た人間に話しかける。

「海馬瀬人はどこにいる？」

「社長は今現在、社長室にて客人との会話中でございます」

斎王の事か。海馬ランドの貸し切りについてだな。

その後数分すると、斎王が出て行くのが見えた。

「お前はディスペアか…一体何の用だ？」

「海馬、デュエルアカデミアの教師が宿泊するホテルの場所を教えてもらおう」

場所を聞くのを忘れていた上、唯一持って来ていた『神の鏡』はロキが持って行ってしまった。手紙には『そんなものがあったら邪魔になるだろ』と書かれていた。

「それなら、ここから見えるあの高い建物がそれだ」

「礼を言うぞ」

我は用もすんだので去ろうとする…が。

「待て。連れがいるところ悪いが、俺とデュエルしろ」

やはりそう来たか。

「そう言うだろうと思い、デッキは持ってきておいた」

「デュエルディスクは？」

「現実にダメージが発生するディスクならある」

そう言うと、海馬はどこからか取りだしたデュエルディスクを投げて渡してきた。それを持って海馬について行く。

～～～屋上・試験デュエル場～～～

「なかなかの広さだな」

驚いたのは既に海馬がＤ－ホイールを完成させていて、それで我をデュエルに誘ったことだ。つまり、ライディングデュエルだ。コースは屋上より始まり、海馬ランドまで続いて戻ってくるコースだ。海馬はＤ－ホイールやライディング・デュエルについては何も発表するつもりは無いらしい。

「ふぅん、文句はあるまい」

海馬はそう言って、青眼をモチーフにしたＤ－ホイールを、我はトリシューラ号を用意する。ちなみに今回は合体しない。改造して立てるようにした。もちろん操縦はハンドルなどは一切存在せず、自分の意思で動く。海馬の青眼号（？）もトリシューラ号並に大きい。

「「ライディングデュエル・アクセラレーション」」

「先攻は我がもらおう」

ディスペア　スピードカウンター０→１

「我は『極星獣タングリスニ』を召喚！カードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
スピードカウンター×１
フィールド
極星獣タングリスニ　ＡＴＫ１２００
伏せカード×１

「ふぅん。俺のターンドロー！俺は『ブラッド・ヴォルス』を召喚し、『極星獣タングリスニ』を攻撃する！」

海馬　スピードカウンター０→１
ディスペア　スピードカウンター１→２

ディスペア　ＬＰ４０００→３２００

「『極星獣タングリスニ』が戦闘で破壊されたことにより『極星獣トークン』２体を特殊召喚する」

「カードを１枚伏せターンエンドだ」

海馬
ＬＰ４０００

手札×４
スピードカウンター×１
フィールド
ブラッド・ヴォルス　ＡＴＫ１９００
伏せカード×１

「我のターン！」

ディスペア　スピードカウンター２→３
海馬　スピードカウンター１→２

「我はレベル２チューナー『ゾンビキャリア』を召喚する」

「来るか…シンクロ召喚！」

「レベル３の『極星獣トークン』２体にレベル２の『ゾンビキャリア』をチューニング。飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！さらに伏せカードオープン、『Ｈｓｐ－スタードロー』。自分のスピードカウンターが０以上あり、『スターダスト・ドラゴン』が存在する時、手札から１枚捨てデッキから２枚ドローする。手札より『Ｈｓｐ－アクセルサモン』発動。スピードカウンターが１個以上ある時、手札からレベル１のモンスター『レベル・スティーラー』を特殊召喚する」

「ふぅん、１ターンで上級モンスターを呼び出し、さらに壁モンスターを揃えたか」

「まだ終わっていないぞ。デッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地からレベル１チューナー『グローアップ・バルブ』を特殊召喚する。レベル１の『レベル・スティーラー』にレベル１の『グロー

アップ・バルブ』をチューニング。シンクロ召喚！来い、シンクロチューナーモンスター『スターソーサラー』！『スターソーサラー』が特殊召喚に成功した時、デッキからカードを１枚ドロー。カードを１枚伏せ、ターンエンド」

『スターソーサラー』の特殊召喚に成功したターン、バトルフェイズは行えず、アクセルシンクロは行うことができない。その代わりに相手は我のフィールドに存在するこのモンスターを攻撃対象にすることはできない。

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
スピードカウンター×３
フィールド
スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００
スターソーサラー　ＡＴＫ０
伏せカード×１

「ふぅん、俺のターン！」

海馬　スピードカウンター２→３
ディスペア　スピードカウンター３→４

「『Ｓｐ－ブルーアイズ・フォース』を発動する。このカードは、自分のスピードカウンターが２個以上ある時に発動可能。手札から『青眼の白龍』１体を特殊召喚するのだ！
ワハハハハハハ！我が最強のしもべ『青眼の白龍』召喚！」

「来たか…海馬最強のしもべ『青眼』…」

それにしても随分と嬉しそうだな。そんなにブルーアイズを召喚したことが嬉しいか？

「『青眼の白龍』で『スターダスト・ドラゴン』を攻撃ィ！滅びのバーストストリーム！」

「そうはさせない。トラップ発動『スターシールド』。『スターダスト・ドラゴン』が攻撃された時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる。ちなみに、このカードに対してチェーンすることはできないぞ」

バーストストリームはスターダストに当たることなく消えてしまった。

「おのれぇぇ！ターンエンドだ！」

海馬
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
スピードカウンター×３
青眼の白龍　ＡＴＫ３０００
ブラッド・ヴォルス　ＡＴＫ１９００
伏せカード×１

「我のターン」

ディスペア　スピードカウンター４→５
海馬　スピードカウンター３→４

「我は手札1枚をデッキの一番上に戻し、『ゾンビキャリア』を墓地から特殊召喚する。さらに、手札から『幻想の戦士（イリュージョン・ウォーリアー）』を召喚する。『幻想の戦士』の効果発動。1ターンに1度、エンドフェイズまでこのカードのレベルを0にすることができる！」

「何だと！」

レベル0！？そんなカードペガサスから届いたカードリストにはないぞ！

「限界が存在しないことを教えてやろう！レベル0の『幻想の戦士』にレベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング！シンクロ召喚『スターダスト・エンジェル』！」

「だが、そんなザコをいくら並べたところでブルーアイズには敵わんぞ…」

「確かにこいつの攻撃力は0だ。だが、これで我のフィールドのモンスターのレベルの合計は…」

「12！まさか…ザコモンスターをシンクロ素材にするというのか！」

「レベル8の『スターダスト・ドラゴン』とレベル2の『スターダスト・エンジェル』にレベル2の『スターソーサラー』をチューニング！無数の星よ、今ここに銀河となって降誕せよ！デルタアクセル！『ギャラクシー・スター・ドラゴン』！」

空は美しく星々が輝き、まるで本物の銀河のように見える。

ギャラクシー・スター・ドラゴンはエターナル・ローズ・ドラゴンやクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンのような巨体でもなければ希望の力の1体でもない。しかしその力は、7つの希望の力と互角だ。

ギャラクシー・スター・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「究極神以外に我に唯一もたらされたゼウスも知らない我の固有カード。それがこの『ギャラクシー・スター・ドラゴン』だ。『ギャラクシー・スター・ドラゴン』の効果発動。1ターンに1度、手札を1枚墓地へ送り、そのモンスター効果を使用することができる。我は手札より『ギャラクシー・ガンナー』を墓地へ送り、特殊召喚ターンのバトルフェイズに元々の攻撃力が倍になる効果を使う。『ギャラクシー・スター・ドラゴン』で『青眼の白龍』を攻撃する。ギャラクシー・ブラスターソニック！」

ギャラクシー・スター・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→８０００

「ふぅん。リバースカードオープン！『攻撃の無力化』！モンスターの攻撃を無効にし、バトルを終了する」

「エンドフェイズに『ギャラクシー・スター・ドラゴン』の効果発動。自分の手札にモンスターカードが無い場合、デッキまたは墓地からモンスターカード1枚を手札に加えることができる。我の手札にモンスターは無い。よって、デッキから『ＢＦ－疾風のゲイル』を手札に加える」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２

スピードカウンター×５
フィールド
ギャラクシー・スター・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「俺のターン、ドロー！」

海馬　スピードカウンター４→５
ディスペア　スピードカウンター５→６

ディスペアのフィールドにはオベリスクと同等の攻撃力を持つギャラクシー・スター・ドラゴンがいる。だが、俺の手札には既に最強モンスター召喚の布石が揃っているのだ！

「俺はチューナーモンスター『伝説の白石』を召喚する！さらにこのカードは自分フィールド上に『青眼の白龍』が存在する時に特殊召喚できる！レベル３チューナー『レジェンド・ドラゴン』を特殊召喚！俺のロードに立ちはだかるというのなら、全ての敵を粉砕するまでだ！レベル８の『青眼の白龍』にレベル１の『伝説の白石』とレベル３の『レジェンド・ドラゴン』をダブルチューニング！これがブルーアイズの新たな進化だ！『青眼の天龍（ブルーアイズ・スカイ・ドラゴン）』！」

確かに『天龍』と名乗るだけの事はあるな。青い眼光はその威圧感を遥かに増し、天空を覆いつくすように巨大な翼…。

青眼の天龍　ＡＴＫ４０００

「『青眼の天龍』で『ギャラクシー・スター・ドラゴン』を攻撃！スカイ・バースト！」

「だが、攻撃力は互角。さらに、『ギャラクシー・スター・ドラゴ

ン』には戦闘時に手札のモンスター1体を墓地へ送り、戦闘では破壊されなくなる効果がある！」

「ふぅん。俺のブルーアイズの前で、その場しのぎが通用すると思ったか！『青眼の天龍』はダメージステップ時のみ、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする！」

青眼の天龍　ＡＴＫ４０００→８０００

「くっ…初陣で敗北するだと！？ぐあああああああ！！」

ディスペア　ＬＰ４０００→０

トリシューラ号が屋上に戻ったところで止まる。

～～～屋上～～～

「ディスペアが…負けた…？」

スクルドは信じられないと言うような表情でいる。

「まあ、こんなこともある…我も決して負けなしというわけではないからな…」

「ふぅん。敗北せずして進化などあり得ん。全てのものは敗北を糧にして自らのロードを突き進むのだ！ワハハハハハハハ！」

「では海馬、我はそろそろ行かせてもらうぞ」

「ふぅん。良ければ車を用意してやるがどうする？こちらにも時間を取ってしまったという非があるからな」

スクルドはだいぶ疲れた顔をしている。ベッドで横になればすぐにでも寝そうなほど、眠そうな顔だ。

「…頼む」

「1階に行け。車の準備はできている」

その後、車でホテルまで届けてもらった。丁度6時半だ。トール、ロキ、オーディンも先に着いており、ロビーでくつろいでいた。スクルドは車の中で眠ってしまったので、部屋で寝かせた。初日から随分と派手な日だったな。先が思いやられるぞ…。

第８８話　修学旅行初日（後書き）

今回の切り札、『ギャラクシー・スター・ドラゴン』と『青眼の天龍』の効果です。

『ギャラクシー・スター・ドラゴン』
レベル１２　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『スターダスト・ドラゴン』＋『スターソーサラー』＋『スターダスト・エンジェル』
このカードは相手ターンでもシンクロ召喚できる。このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。このカードのシンクロ召喚時にカードの発動はできない。１ターンに１度、手札のモンスターカードを１枚墓地へ送ることで、そのモンスターの効果をエンドフェイズまで得る。また、このカードが戦闘を行う時手札からモンスターカードを１枚墓地へ送ることで、その戦闘では破壊されない。このカードがフィールドを離れる場合、このカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地からこのカードのシンクロ召喚に使用したモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する。この効果によってエクストラデッキに戻ったターン、『ギャラクシー・スター・ドラゴン』をシンクロ召喚することはできない。エンドフェイズに手札にモンスターカードが存在しない場合、デッキまたは墓地からモンスター１体を手札に加えることができる。

『青眼の天龍』
レベル１２　光属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『青眼の白龍』＋レベル１チューナー＋『レジェンド・ドラゴン』
このカードは上記のカードでしかシンクロ召喚できない。このカードが戦闘を行う場合、ダメージステップ時に戦闘を行う相手モンス

ターの攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする。このカードがフィールドから離れる場合、代わりに手札・デッキ・フィールド・エクストラデッキ・除外ゾーンからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送ることができる。このカードの効果を無効にすることはできず、このカードの効果を無効にするカードの効果が発動・適用した場合、その効果を無効にして破壊する。

第８９話　修学旅行２日目（前書き）

２日目です。今回は２回デュエルがあります。２回目はおまけのようなものですが…

第８９話　修学旅行２日目

～～～ホテル・ディスペアサイド～～～

「今日も自由行動とは…正気か？」

この修学旅行日程の殆どが自由行動に設定されている。修学旅行とは通常、集団行動をするものじゃないのか？少なくとも今まで見てきた人間界の学校はそうだったぞ。

「我が校は、自由な教育がモットーなノーネ」

「……つまり、希望によっては１日中ホテルの中に居てもいいと？」

「もちろんなノーネ」

大丈夫か、この学校は？確かに海馬の考えそうなことではあるが…。

「まあいい、とりあえず我はもう行くぞ」

今日はスクルドが寝ているから我１人で行動か…つまらん。

北欧の三神も出かけてしまったな。

～～～海馬コーポレーション～～～

暇になるとこの町では来る場所がここぐらいしかないな。
…ん？あれは武藤遊戯…今は旅に出ているという話だったが…面白い。

「武藤遊戯だな？」

まずは話しかける。

「そうですけど…あなたは？」

表か。裏はもういないから当たり前と言えば当たり前だな。

「我とデュエルしろ。今ここでお前を見かけて、デュエルキングの実力を見たくなった」

「わかりました…」

遊戯はデュエルディスクとデッキを用意する。さすがにデュエルが普通の世界だからか断ることはしないのだな。

「始めよう」

固有ディスクの模造品を展開する。昨日海馬と共同開発したものだ。黒い色や神力によって浮いたり、モンスターカードゾーンと魔法・罠ゾーンが現れるのは同じだが、現実のダメージが発生しない。デュエルアカデミアにもいつの間にか許可を取ったらしく、このディスクで通すことができる。今回はアポリアと同じように前の方にディスクを浮かせる。

「「デュエル！」」

「僕の先攻、ドロー！僕は『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃表示で召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

遊戯
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
マジシャンズ・ヴァルキリア　ＡＴＫ１６００
伏せカード×１

「我のターン」

魔法使いデッキか…？いや、テーマ性の殆どないよくわからない構築をしたデッキだった気がするな。

「我はお前のフィールドにのみモンスターが存在していることで手札から『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚する」

「いきなり攻撃力２１００のモンスター…！」

この人は…強い！

「さらにチューナーモンスター『ＢＦ－疾風のゲイル』を召喚する」

「チューナーモンスター？見たことのないカードだ…」

「チューナーモンスターとそれ以外のモンスターを墓地へ送り、そのモンスターのレベルの合計のシンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚する。これがシンクロ召喚だ。エクストラデッキ

は、お前達の言う融合デッキのことだ。
我は『ＢＦ－疾風のゲイル』の効果を発動し『マジシャンズ・ヴァルキリア』の攻撃力・守備力を半分にする」

マジシャンズ・ヴァルキリア　ＡＴＫ１６００→８００

「くっ…」

「行くぞ！レベル５の『サイバー・ドラゴン』にレベル３の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング。シンクロ召喚、現れよ『スターダスト・ドラゴン』！」

光の粒子は龍の姿をかたどり具現化され、スターダスト・ドラゴンが現れる。

「すごい…」

シンクロ召喚…こんなモンスター見たことない。

「『スターダスト・ドラゴン』で『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃！シューティング・ソニック」

遊戯　ＬＰ４０００→３１００

「『マジシャンズ・ヴァルキリア』！」

「カードを１枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００

手札×３
フィールド
スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００
伏せカード×１

「僕のターンだ！僕は魔法カード『古のルール』を発動する！このカードは手札からレベル５以上の通常モンスター１体を特殊召喚できる！現れよ『ブラック・マジシャン』！」

来たか…我が調べた限りかつて多くのデュエルをそのモンスターによって勝ちあがり、数々の大会に優秀な成績を残した武藤遊戯最強のモンスター。

「魔法カード発動、『千本（サウザンド）ナイフ』！フィールド上のモンスター１体を破壊する！」

「そうはさせない！『スターダスト・ドラゴン』の効果発動。このカードをエンドフェイズまで生贄に捧げ、相手が発動したフィールド上のカードを破壊する効果を無効にし破壊する！よって『千本ナイフ』は無効！」

スターダストの粒子がナイフを消し去った。

「『ブラック・マジシャン』でダイレクトアタックだ！ブラック・マジック！」

「トラップオープン『攻撃の無力化』。モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する」

「ターンエンド…」

「このエンドフェイズ、我の『スターダスト・ドラゴン』はフィールドに再び特殊召喚される」

僕の2段攻撃をかわして、そのうえでスターダスト・ドラゴンをフィールドに残した…少しでも気を抜いたら…やられる！

遊戯
ＬＰ３１００
手札×２
フィールド
ブラック・マジシャン　ＡＴＫ２５００
伏せカード×１

「我のターン」

武藤遊戯のフィールドにはエースモンスターブラック・マジシャンと伏せカードが1枚。我のフィールドにはスターダスト1体のみ。

「我は手札を1枚捨て『ワン・フォー・ワン』を発動。デッキからレベル1のモンスター『チューニング・サポーター』を特殊召喚。さらにデッキの一番上のカード1枚を墓地へ送り、『ワン・フォー・ワン』のコストで墓地へ送ったレベル1チューナー『グローアップ・バルブ』を特殊召喚する。レベル1の『チューニング・サポーター』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング。大いなる進化の天使よ、天空より舞い降りろ！シンクロ召喚！来い、『スターダスト・エンジェル』！」

空から星屑の粒子を具現化した天使が舞い降りた。

「『チューニング・サポーター』がシンクロ素材となったことにより、カードを1枚ドローし、『スターダスト・エンジェル』の効果を発動。このカードのシンクロ素材にしたモンスター1体を特殊召喚することができる。我は『チューニング・サポーター』を復活。さらに『異次元の精霊』を通常召喚する！」

「1ターンにこれだけのモンスターを召喚するなんて…」

「まだ終わっていない。レベル1の『チューニング・サポーター』にレベル1の『異次元の精霊』をチューニング！未知なる力の扉を開く最後の鍵よ！銀河の咆哮をあげるため、今ここに降臨せよ！シンクロ召喚、来い！シンクロチューナー『スターソーサラー』！」

チューニング・サポーターがシンクロ素材になったため、さらに1枚ドローする。

「シンクロチューナー…もしかしてさらにシンクロ召喚を！？」

「究極の境地にたどり着いた最後のシンクロ召喚の方法、トップ・クリア・マインド！」

神力使用で強引に超スピードの次元に穴をあけ、デルタアクセルシンクロを成功させる。

「レベル8のシンクロモンスター『スターダスト・ドラゴン』とレベル2のシンクロモンスター『スターダスト・エンジェル』にレベル2のシンクロチューナー『スターソーサラー』をチューニング！無数の星よ、今ここに銀河となって降誕せよ！デルタアクセル！『ギャラクシー・スター・ドラゴン』！！」

海馬とのデュエルの時と同じように、真昼の空はいきなり銀河になり、星々が収束しギャラクシー・スター・ドラゴンが誕生する。周りの人間は空を見上げて何が起きたか分からないという顔をしている。

「綺麗だ…」

この人は今まで僕が戦ってきた人の中で、一番強い。今僕はそう確信した。

「『ギャラクシー・スター・ドラゴン』がいるとき、手札から魔法カード『進化の礎』
を発動し、デッキと墓地からモンスターを1体ずつ特殊召喚する。現れろ『バイス・ドラゴン』！『ＢＦ－疾風のゲイル』！この効果によって特殊召喚したモンスターは効果が無効になり、レベル５以上の場合は攻撃力が５００ポイントダウン」

バイス・ドラゴン　ＡＴＫ２０００→１５００

「でも、片方はチューナーモンスター…」

デメリットを完全に消すことができる…！

「そう。レベル５の『バイス・ドラゴン』にレベル３の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング。来い、『ダークエンド・ドラゴン』！」

これでこの人のフィールドには攻撃力４０００のモンスターと２６００のモンスターが並んだ…。

「『ダークエンド・ドラゴン』効果発動。攻撃力・守備力を５００ポイントダウンし、相手モンスター１体を墓地へ送る」

闇の流れにブラックマジシャンは飲まれ、消えた。

「『ギャラクシー・スター・ドラゴン』効果発動。手札より『トップ・ランナー』を捨て、エンドフェイズまでその効果を得る」

ギャラクシー・スター・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→４６００
ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ２１００→２７００

「『ダークエンド・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

「トラップカードオープン！『魔法の筒』！相手モンスターの攻撃を跳ね返す！」

ディスペア　ＬＰ４０００→１３００

「『ギャラクシー・スター・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

「手札から『クリボー』を捨ててダメージを１度だけ０にする！」

このターンを耐え凌ぐとは…さすがにこの世界最強のデュエリストというだけのことはあるな。

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１３００
手札×１

フィールド
ギャラクシー・スター・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ２１００

「僕のターン、ドロー」

状況は良くない…僕のフィールドはがら空き、次のターンに彼が何かしたら僕にはもう勝つ手段は無い。

「僕はカードを2枚伏せて魔法カード『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする」

彼は5枚、僕は6枚だ。

「僕は伏せておいた魔法カード『死者蘇生』を発動！蘇れ『ブラック・マジシャン』！」

飽くまでブラック・マジシャンにこだわるか…！

「装備魔法『魔術の呪文書』を『ブラック・マジシャン』に装備！攻撃力７００ポイントアップ！」

ブラック・マジシャン　ＡＴＫ２５００→３２００

「『ブラック・マジシャン』で『ダークエンド・ドラゴン』を攻撃、ブラック・マジック！」

ディスペア　ＬＰ１３００→２００

「……」

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

遊戯
ＬＰ３１００
手札×３
フィールド
ブラック・マジシャン　ＡＴＫ３２００
＋魔術の呪文書
伏せカード×３

「我の……タァァァァン！」

奴のリバースカードは3枚…加えて、攻撃力３２００のブラック・マジシャン。だが、その程度ではこのターンを耐え凌ぐことはできないッ！

「我は『ギャラクシー・スター・ドラゴン』の効果により手札の『星屑の魔術師（ギャラクシー・マジシャン）』を墓地へ送る。そして、手札から墓地へ送られたこのカードの効果により1枚ドロー。魔法カード『ギャラクシー・ブラスター』発動。このターン『ギャラクシー・スター・ドラゴン』は2回攻撃できる！」

「！！！」

「『ギャラクシー・スター・ドラゴン』で『ブラック・マジシャン』を攻撃！ギャラクシー・ブラスターソニック！！」

「させない！リバースカードオープン『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！」

「手札より『銀河の抱擁』を発動。このターン、『スターダスト・ドラゴン』を素材としたシンクロモンスターは相手のカードの効果を受けない」

星々がギャラクシー・スター・ドラゴンに纏われ、輝く。

「しまった…！」

僕の伏せカードは、全て相手モンスターに関する効果を持ったカード…僕の負け…。

遊戯　ＬＰ３１００→２３００

「２回目の攻撃だ！ギャラクシー・ブレス！」

遊戯　ＬＰ２３００→－１７００

「とても楽しかったです！…えっと…」

「ディスペアだ。名乗るのを忘れていた」

ディスペア…さん？でいいよね。

「次にデュエルした時は負けませんよ」

「…わかった」

我のライフを２００ポイントまで追い込んできておいて、伏せカードはアレか。銀河の抱擁が無ければ負けていた。

その後は遊戯と別れ、今度は広場に向かった。

～～～ドミノ町広場～～～

「ヒョヒョヒョヒョヒョ！」

この耳障りな笑い声は…間違いないな。

「女王様の攻撃ィィィ！」

「うわあああああ！」

モブ　ＬＰ０

「約束通り、このカードは貰うよ」

「ううう…」

羽蛾と同じくらいの子供はカードを羽蛾に渡して去って行った。

「飛んで火に入る夏の虫野郎か」

「ひょ？誰だお前は？ひょっとして、この僕に挑戦しに来たのかい？」

「まあ、そんなところだな」

「負けたら、レアカードを1枚よこせよ」

「では我が勝ったらお前のデッキを頂こう」

「そんな大口をたたいたことを後悔させてやる！」

「「デュエル」」

「俺のターン、『代打バッター』召喚。さらに魔法カード『殺虫剤』の効果で『代打バッター』を破壊、効果発動！手札から『アルティメット・インセクトＬＶ７』を召喚！ターンエンドだ！」

最初のターンから最上級モンスターだ！こんな奴に俺が負けるはずないのさ。

ＨＡ☆ＧＡ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
アルティメット・インセクトＬＶ７　ＡＴＫ２６００

「我のターン」

おいおい、これじゃＭｅの（ｒｙ

「我は『機皇兵グランエル・アイン』を召喚し、効果発動。『アルティメット・インセクトＬＶ７』の攻撃力を半分にする」

「ひーん！俺様の昆虫が～！」

アルティメット・インセクトＬＶ７　ＡＴＫ２６００→１３００

「さらにフィールド魔法『機動要塞フォルテシモ』を発動し、効果によって手札から『機皇兵ワイゼル・アイン』を特殊召喚。魔法カード『機皇召集』発動、デッキから『機皇兵スキエル・アイン』を特殊召喚。さらに魔法カード『機皇帝の賜与』発動。我のフィールドの『機皇』１体につき１枚、つまり３枚ドローする。そして、我のフィールドに３体の『機皇』が存在することで『機皇神龍アステリスク』を手札から特殊召喚する。このカードの攻撃力は我の攻撃表示の機械族モンスターの合計となる」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０→４６００

「ひょ？」

「『機皇兵ワイゼル・アイン』で『アルティメット・インセクトＬＶ７』を攻撃。クォーク・カーブ」

ＨＡ☆ＧＡ　ＬＰ４０００→３５００

「『機皇兵スキエル・アイン』でダイレクトアタック、ツインパルス！」

「ひゃあああああ！」

ＨＡ☆ＧＡ　ＬＰ３５００→２３００

「『機皇兵グランエル・アイン』でダイレクトアタック、グラビティー・ブラスター！」

「うわあああああ！」

ＨＡ☆ＧＡ　ＬＰ２３００→７００

「最後に『機皇神龍アステリスク』でダイレクトアタック！インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「％☆？〇％△％＃＆@！！？」

ＨＡ☆ＧＡ　ＬＰ７００→－３９００

「約束通りデッキは貰っていくぞ」

使い手がアレでもデッキはデッキ、改良すれば昆虫は少なくとも良いレベルにはなるはずだ。早速ホテルに戻り、デッキ内容を少しばかりいじった。ちなみにこのデッキは後にロキに持って行かれた。不思議なことに我が去ってから３０分ほどで、再び昆虫デッキを使っているＨＡ☆ＧＡの姿が見つかったそうだ。

第８９話　修学旅行２日目（後書き）

ＨＡ☆ＧＡさんに頑張っていただきました。ええ、十分頑張っていただきましたとも。

今回のオリカ『進化の礎』はユタ様から、『星屑の魔術師』は海馬コーポレーション様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました！

300000ユニーク記念（前書き）

今回の前半の没ネタ集はおまけのようなものです。みなさんお待ちかね（？）ヘム登場！

30000ユニーク記念

ヘム「今回は俺の方から没ネタを大公開するぜ！（俺の活躍を）見てくれよな！」

～～～プロローグより～～～

「いつものメンバーを集めろ」

集まったのはスクルド、オーディン、ロキ、トールそして俺様ヘイムダル！

～～～～～

没理由：ヘムは足引っ張りそうだったから。

ヘム「ってオオオオイ！最初は俺もレギュラー化する予定あったのかよ！」

作者「あった。けど、理由の通りバイバイしました。次！」

ヘム「次だ！俺がいないのが残念だな」

～～～第１話より～～～

「先攻は俺がもらいます、ドロー」

…ん？これは…

「エクゾディアが揃ったのでオレの勝利です」

～～～～～

没理由：運が良いにもほどがある

ヘム「えええええええええええ！！？」

作者「これじゃあ…ね」

ヘム「つ…次だ次！」

～～～第１４話より～～～

「俺は虚無魔人を召喚！」

三沢の虚無魔人でディスペア（リョウ）の特殊召喚が不可能になったところから。

「オレのターン！魔法カード『地割れ』発動、虚無魔人を破壊！さらに手札から魔法カード『トラップ・ブースター』を発動し手札を１枚捨て、手札の罠カード『血の代償』を発動。『グリーン・ガジェット』を召喚し、効果でデッキから『レッド・ガジェット』を手札に加える。『血の代償』の効果により、手札から『レッド・ガジェット』を召喚しデッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加え『血の代償』の（ｒｙ」

以後ループ、総攻撃でさようなら

～～～～～～

没理由：ただでさえ出番が少ない三沢の出番がさらに減る。

ヘム「確かに出番が減るからな。これはダメだな。次だ次」

～～～第２１話より～～～

ロキは１枚も伏せていない設定で、カミューラの先攻で伏せカード１枚とモンスター１体、伏せカードは聖なるバリア－ミラーフォース－で。

「俺のターン！フィールド魔法『死皇帝の陵墓』！ライフを２００払い、『超古深海王シーラカンス』を召喚、手札を１枚捨てデッキから『レインボー・フィッシュ』『オイスター・マイスター』『

竜宮の白タウナギ』２体を特殊召喚。『レインボー・フィッシュ』に『竜宮の白タウナギ』をチューニング、来い！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！さらにレベル３の『オイスター・マイスター』にレベル４の『竜宮の白タウナギ』をチューニング、来い！『氷結界の龍グングニール』！手札を２枚墓地へ送り、お前のモンスターと伏せカードを破壊、３体のモンスターでダイレクトアタック！」

カミューラ　ＬＰ０

～～～～～

没理由：魂が救われるどころか全部消えるから

ヘム「えげつねぇ…」

作者「これだけはやっちゃいけないと思って急きょ変更」

ヘム「さあ、次行こう！」

～～～第２９話より～～～

デュエルが終わった後のロシアンルーレット

「じゃあ、５回連続でやるわ」

「はぁ！？いいのかよ」

「自信あるからな」

ここからです。

「それなら…引けよ、引き金を」

…ダァン！

「ば…かな…実弾だと？」

～～～～～～

没理由：まず学園に実弾があることがあり得ない。次に、どっかのリアリストを連想させるから

ヘム「さあ、次行こう」

～～～第４９．５話より～～～

ロキが先にクラナガンに着いた時。

「おい、そこのガキ、金よこせよ」

「…ガキって僕の事かな？」

「お前以外誰がいるってんだ！」

プッツン！

「…死ね」

その後はクラナガンが地獄絵図。

～～～～～～

没理由：観光どころじゃなくなる

ヘム「ロキはやっぱり恐ろしいな…（（（（；゜Д゜）））ガクガクブルブル」

作者「さあ、次だ」

～～～第５９話後編より～～～

トールのスタート直後。

「うおおおおおおお！！」

トールはＤ－ホイールと合体した！

～～～～～

没理由：トール（ドラガンの見た目）で合体は画的に無理

ヘム「今のところはこのぐらいだよね」

作者「…うん、まだあるにはあるけどどう描いていいか分からないからやめた」

「だが、このままではあまりにも短いな」

ディスペア登場。

「何しに来たんだよ、俺の出番が消えるだろ！」

「お前の出番が消えたところで気にする奴がいないから安心しろ」

「ｏｒｚ」

「しかし、このまま終わるのも少なすぎてダメだ、だからヘイムダル、我とデュエルしろ！」

「！よっしゃー！出番が増える！行くぜ」

「「デュエル」」

作者「（何このノリ）」

「俺のターン！まずは『おろかな埋葬』でデッキから『霊憑依魔法

騎士の指導者』を墓地へ送るぜ！」

「……」

見たことが無いカードだな。チューナーのようだが…？

「そして『憑依装着ーウィン』を召喚！」

霊使い…？まさか！

「墓地に居る『霊憑依魔法騎士の指導者』を特殊召喚！こいつは、フィールドに『霊使い』か『憑依装着』の名を持つモンスターがいるとき１ターンに１度だけ墓地から特殊召喚できる！さらにこいつは『霊使い』の素材になる時はレベル４、『憑依装着』の素材になる時はレベル２として扱い、墓地に居るときは神属性以外の全ての属性として扱える！

レベル４の『憑依装着ーウィン』にレベル２の『霊憑依魔法騎士の指導者』をチューニング！シンクロ召喚、来い！『風霊憑依魔法騎士　ウィン』！」

霊使いのシンクロモンスター…どんな効果を持っているのか…？

「こいつの攻撃力は、自分の墓地の風属性モンスター１体につき５００ポイントアップ！」

風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ１５００→２５００

「先攻は攻撃できないけど、『風霊憑依魔法騎士　ウィン』の効果で１ターンに１度、デッキからモンスターカード１枚を墓地へ送れる。俺が送るのは『霊憑依魔法騎士の指導者』だ！カードを１枚伏

せてターンエンド」

ヘイムダル
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ３０００
伏せカード×１

「我のターン」

未知の力を持ったシンクロモンスター…だが！

「我は『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。さらに魔法カード『機皇召集』を発動し、デッキから『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する！」

「ゲェッ！いきなり攻撃力４０００とか！」

「さらに『機皇神マシニクル∞？』の効果によって『風霊憑依魔法騎士　ウィン』を吸収する！」

「誰がさせるか！手札から『エフェクト・ヴェーラー』を墓地へ送り。このターン『機皇神マシニクル∞？』の効果を無効にする！」

「ならば『機皇神マシニクル∞？』で『風霊憑依魔法騎士　ウィン』を攻撃！」

これはかわせまい！

「トラップ発動『攻撃の無力化』！このカードは」

「説明はいらん。カードを1枚伏せターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×１

「俺のターン！『強欲な壺』でカードを2枚ドロー。俺は墓地から2体の『霊憑依魔法騎士の指導者』を特殊召喚！」

風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ３０００→２０００

「そして魔法カード『二重召喚』！このターン、2回の通常召喚ができるぜ！俺は『憑依装着エリア』と『憑依装着ヒータ』だ！レベル４の『憑依装着エリア』にレベル２の『霊憑依魔法騎士の指導者』をチューニング、シンクロ召喚！来い『水霊憑依魔法騎士　エリア』！このカードの攻撃力は墓地の水属性モンスター1体につき５００ポイントアップ！」

水霊憑依魔法騎士　エリア　ＡＴＫ１５００→２５００

「続いてレベル４の『憑依装着ヒータ』にレベル２の『霊憑依魔法騎士の指導者』をチューニング！来い『火霊憑依魔法騎士　ヒータ』！このカードの攻撃力は墓地の炎属性モンスター1体につき５００ポイントアップだ！」

水霊憑依魔法騎士　エリア　ＡＴＫ２０００→３０００
火霊憑依魔法騎士　ヒータ　ＡＴＫ１５００→３０００
風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ１５００→３０００

「さらに3体の効果でデッキから『風霊使いウィン』『火霊使いヒータ』『水霊使いエリア』を墓地へ送る」

水霊憑依魔法騎士　エリア　ＡＴＫ２５００→３５００
火霊憑依魔法騎士　ヒータ　ＡＴＫ２５００→３５００
風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ２５００→３５００

「ここからが本番だ！『水霊憑依魔法騎士　エリア』の効果発動！他の『霊憑依魔法騎士』がいるとき、相手の手札を確認して1枚墓地へ送る！」

ディスペアの手札：『機皇兵スキエル・アイン』『機皇兵グランエル・アイン』『機皇神龍アステリスク』

「『機皇神龍アステリスク』を墓地へ送ってもらうぜ」

我はアステリスクを墓地へ送る。

「次に『風霊憑依魔法騎士　ウィン』の効果発動！他に『霊憑依魔法騎士』がいるとき、相手のセットカードを手札に戻す！」

「トラップ発動『機皇解放』！エンドフェイズまで『機皇神マシニクル∞？』の攻撃力を倍にする」

機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００→８０００

「なら『火霊憑依魔法騎士　ヒータ』の効果発動！他に『霊憑依魔法騎士』がいるとき、1ターンに1度５００ダメージを与える」

ディスペア　ＬＰ４０００→３５００

「カードを1枚伏せて、『火霊憑依魔法騎士　ヒータ』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃してターンエンド」

ディスペア　ＬＰ３５００→１８００

ヘム
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
火霊憑依魔法騎士　ヒータ　ＡＴＫ３５００
水霊憑依魔法騎士　エリア　ＡＴＫ３５００
風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ３５００
伏せカード×１

「我のターン！『機皇神マシニクル∞？』の効果により『火霊憑依魔法騎士　ヒータ』を吸収する！」

「そうはいくか！トラップ発動『火霊術－紅』！『火霊憑依魔法騎士　ヒータ』を生贄に１５００ポイントのダメージを与える！」

ディスペア　ＬＰ１８００→３００

やはり炎属性は効果ダメージが豊富か…！

「ならば『機皇神マシニクル∞？』で『水霊憑依魔法騎士　エリア』を攻撃。ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「うわあああああ！」

ヘム　ＬＰ４０００→３５００

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８００
手札×２
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
伏せカード×１

「俺のターン！墓地の『火霊憑依魔法騎士　ヒータ』の効果発動！墓地の『火霊使いヒータ』を除外して、このカードを特殊召喚！『水霊憑依魔法騎士　エリア』も同じく『水霊使いエリア』を除外して特殊召喚！」

墓地復活の効果も兼ね備えているのか…！

「『火霊憑依魔法騎士　ヒータ』の効果で５００ダメージ、『水霊憑依魔法騎士　エリア』の効果で手札から『機皇兵グランエル・アイン』を墓地へ送ってもらうぜ」

「…トラップ発動『機皇機関』。フィールドに『機皇神』と名のつくカードがある時、デッキから『機皇神』１枚を選択し、手札に加える。そしてこのターン自分の『機皇神』は効果と戦闘によってフ

ィールドを離れることは無くなる。さらに、我へのダメージは０になる」

ディスペア　ＬＰ３００→３００

ディスペアは何を加えたんだ！？２枚目のアステリスクかマシニクルのどっちかだよな？

「さらに３体の効果でデッキから３体目の『霊憑依魔法騎士の指導者』と『憑依装着ヒータ』と『憑依装着エリア』を墓地へ送る」

火霊憑依魔法騎士　ヒータ　ＡＴＫ２５００→４０００
水霊憑依魔法騎士　エリア　ＡＴＫ２５００→４０００
風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ３０００→４５００

また攻撃力が上がった…そのうえ追加効果を持ち、倒しても復活する…厄介なシンクロモンスターだ。

「『闇霊使いダルク』召喚！さらに墓地から『霊憑依魔法騎士の指導者』を特殊召喚してチューニング！来い『闇霊憑依魔法騎士　ダルク』！このカードの攻撃力は墓地の闇属性モンスター１体につき５００ポイントアップ！」

闇霊憑依魔法騎士　ダルク　ＡＴＫ１５００→３５００

「ダルクの効果で１ターンに１度、他に『霊憑依魔法騎士』がいれば２枚ドローする。相手は魔法を見せることで無効にできるけどな」

ディスペアの手札には魔法カードは無いから、ドローを無効にすることはできない。

「さらに魔法カード『霊使いの祈願』を発動。墓地から『霊憑依魔法騎士の指導者』を手札に加えて、デッキから『光霊使いライナ』を手札に加える！カードを１枚伏せて、ターンエンド」

ヘム
ＬＰ３５００
手札×２
フィールド
火霊憑依魔法騎士　ヒータ　ＡＴＫ３５００
水霊憑依魔法騎士　エリア　ＡＴＫ３５００
風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ４０００
闇霊憑依魔法騎士　ダルク　ＡＴＫ３０００
伏せカード×１

「我のターン！」

「トラップ発動『霊憑依魔法騎士の集合』！手札から『光霊使いライナ』と『霊憑依魔法騎士の指導者』を捨ててシンクロ召喚！来い『光霊憑依魔法騎士　ライナ』！このカードの攻撃力は墓地の光属性モンスター１体につき５００ポイントアップだ！」

火霊憑依魔法騎士　ヒータ　ＡＴＫ３５００→４０００
水霊憑依魔法騎士　エリア　ＡＴＫ３５００→４０００
風霊憑依魔法騎士　ウィン　ＡＴＫ４０００→４５００
闇霊憑依魔法騎士　ダルク　ＡＴＫ３０００→３５００
光霊憑依魔法騎士　ライナ　ＡＴＫ１５００→３５００

これでとうとうディスペアに勝てるぞ！ヤッター、俺の時代だ！！

「ネタバレになるから使いたくなかったが…我は『機皇神マシニクル∞？』を生贄に捧げる」

「は？」

切り札を生贄に捧げる？

「究極召喚！『機皇神帝エクシニクル∞』！！」

「！！？！！？」

突然俺の目の前に全長５０ｋｍぐらいのかっこよすぎるロボットが現れたぜ！全長５０ｋｍとか信じらんねェだろ？でも、今目の前に居るんだぜ！

「『機皇神帝エクシニクル∞』の効果により特殊召喚成功時にデッキまたは手札から『機皇』と名のつくモンスターを墓地へ送る。我は『機皇兵ワイゼル・アイン』を墓地へ送る。さらに１ターンに１度、相手のシンクロモンスター１体を吸収する。『光霊憑依魔法騎士　ライナ』を吸収！」

「あああああ！俺の魔法騎士がああああ！」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ０↓８９００

「！！？」

どう考えても攻撃力の計算方式がおかしいな？一体どうなってるんだ！！？

「『機皇神帝エクシニクル∞』で『風霊憑依魔法騎士　ウィン』を攻撃！ディスペア・オブ・インフィニティーカノン！」

「ぎゃあああああああ！あともうちょっとで俺の時代だったのにいい！」

ヘム　ＬＰ３５００→１９００

～～～その後～～～

作者「今回はこんなところだ。ヘムも活躍できて黒こげになりながら喜んでたぞ」

ヘム「よろ…こんで、ねぇ…」

バタリ。

30000ユニーク記念（後書き）

今回のオリカの『霊憑依魔法騎士』シリーズはユタ様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました！
※エクシニクルの効果は本編で登場するまで明かすことができませんので、ご了承ください。

作者「よかったな、ヘム。大活躍だったじゃないか」

ヘム「なんで、こんな役ばっかりなんだ…俺の、時代…」

作者「それは来ない」

ヘム「…」バタリ

第９０話　修学旅行3日目（前書き）

お知らせです。感想を書いてくれている方の中には、オリカを投稿してくださる方がいらっしゃいます。そして、投稿していただいたオリカの中には少なからずレギュラー化したものもあります。なので、レギュラー化した（もしくはする予定の）カードは、その回のあとがきに載せます。ちなみに、レギュラー化したオリカをご投稿くださった方は、うちのロキを好き勝手に使っていただいてＯＫです（笑）。

あと、ディスペアの設定に少し書き加えました。

第９０話　修学旅行３日目

～～～ディスペアサイド～～～

「昨日のＨＡ☆ＧＡで１キルしてしまったからな…少しは手加減してやるべきだったか」

「ディスペアの好きなようにやったんだからいいじゃない」

声をかけてくるのはスクルド。北欧の三神は今日はホテルで待機するらしい。一体何をやっているのだ？

「ねえ、ディスペア。ロキから良いお店があるって聞いたんだけど、行ってみない？」

ロキの言う情報は間違えていたことが殆どないから信用して問題ないな。

「よし、行ってみるか」

～～～ドミノ町、商店街～～～

「ここだよ」

スクルドに連れられ店の前まで来る。見た目は普通の喫茶店だ。

ちなみに背が高い上に容姿が特異な我は明らかに周りから見ると浮

いている。
とりあえず店に入る。

「何があるのかな？」

スクルドはメニューを開く。人間の文字は神には神が使う文字として見えるから普通に読める。我もメニューを見る。

『コーヒー』『パフェ』類をすべて見て、『紅茶類…ダージリン、アップル、ピーチ…（その他）』ここまでは良かった。だが…『インフェルニ茶（ティー）』…。値段は、他の紅茶を２つ以上頼むことでのみ注文が可能になり、０円。ハンドレスで０円か。
そもそもこの時代でなぜインフェルニティーがあるのか気になって仕方が無い。

「ディスペア…」

「……頼んでみようか」

スクルドが目を輝かせていたので頼んでみることにした。

～～～数分後～～～

「ピーチティーとダージリン、インフェルニ茶２つになります」

伝票…１２００円。つまり、紅茶１杯６００円だ。人間の金持ちの来る店じゃないのかここは？

「さて、気になる味は…」

感想。最初に3つの素晴らしい味の体験で舌の味に残っていた他の紅茶の味をがら空きにし、次に紅茶の熱さと香りと色の3連打によって、舌と胃と嗅覚を除外された。ちなみに我は神だから食堂や胃なんてものは無い。普段は食べた後飲み込んだ時点で神力に変換される。飽くまで人間に例えた味の説明だ。

スクルドも満足したようだ。

「あ～おいしかった♪」

１２００円払って店を出る。如何に神といえど、さすがに逃げる気にはならない。

とりあえず、スクルドはホテルに戻っていった。再び我はフリーだ。

～～～ドミノ町、中央広場～～～

「ようやく見つけたぜ、最高神」

「！！！」

次の瞬間、我が片腕は斬り落とされていた――――――――――。

「貴様ら…一体何者だ…？」

片腕は斬られたままだ。周りに居る一般人は悲鳴を上げて逃げるものもいれば、気絶する者もいる。腕が斬り落とされてなお、血は流れていないのだから当たり前だ。

「冥府からお迎えに上がったぜ、最高神よォ！」

容姿は人間だが、中身は明らかに人間ではない。この2人は異質だ。

我が腕は人間界の刃物で斬り落とすことはできない…だが現にこいつらは我が片腕を切り落とした。

「フン…」

片腕を再生させる。

「やっぱ今のじゃダメか」

「当然。この程度で声一つあげるような我ではない。貴様らは一体何が目的で現れた？」

「言っただろ、冥府から迎えに来たってな」

「…だが、我をそう簡単に連れていけると思うなよ」

「ハハハハハ！だからお前には俺達とデュエルしてもらうぜ！死体でもいいみたいだからなぁ」

「覚悟！」

「「「デュエル」」」

ゴッドモーメント（固有ディスク2）を起動させる。ここでは究極神は使えない…ならば！

ディスペア　ＬＰ８０００
？？？１　ＬＰ８０００
？？？２　ＬＰ８０００

「ライフ８０００でいいのかよ？」

「お前達程度、これで十分」

この程度の悪魔にはこのデッキでいい。

「なめやがって！」

「我の先攻。『機皇兵ワイゼル・アイン』召喚！」

「お得意の機皇デッキか」

だが、そのデッキの内容は割れてるんだよ！機皇デッキ相手なら俺達でも何とかなる。

「手札から魔法カード『サモン・セメタリー』発動だ！こいつは、相手が召喚した時に発動できるのさ！カード名を一つ宣言し、そいつが相手のデッキ・手札にあれば墓地に送るんだ。俺は『機皇神龍アステリスク』を宣言するぜ！」

デッキからアステリスクを墓地へ送る。こいつらは我のデッキ内容を知っているらしい。

「さらに、墓地へ送ったのがモンスターなら、そのレベル×４００ポイントのダメージを与える！」

「何だと！！」

ディスペア　ＬＰ８０００→４０００

この痛みは今までの悪魔とのデュエルとはケタが違う。だが、こいつらから感じる邪気はせいぜい中級悪魔の物。どうなっている…？

「貴様…カードを２枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×２

「俺のターン！俺は『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚するぜ」

現れたのは闇の瘴気を纏った黒いサイバー・ドラゴンだ。

「先攻は攻撃できないが…俺はテメェの『機皇兵ワイゼル・アイン』と俺の『サイバー・ドラゴン』を墓地に送り！来やがれ『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』！！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン　ＡＴＫ０→２０００

「ワイゼル・アインが…」

「俺はこれでターンエンドだぜ」

？？？１
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
キメラテック・フォートレス・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「じゃあ、わたしのターンだな。わたしは『ブレイクス・ドラゴン』を召喚しよう。カードを２枚伏せ、ターンエンド」

？？？２
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
ブレイクス・ドラゴン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×２

「我のターン！『機皇兵グランエル・アイン』を召喚、効果発動。『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』の攻撃力を半分にする。グラビティー・プレッシャー」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン　ＡＴＫ２０００→１０００

「『機皇兵グランエル・アイン』で『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』を攻撃、グラビティー・ブラスター！」

「ちっ」

？？？１　ＬＰ８０００→７４００

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
機皇兵グランエル・アイン　ＡＴＫ１６００
伏せカード×２

「俺のターン！俺は2体目の『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚して、『機皇兵グランエル・アイン』を攻撃するぜ！」

「トラップ発動、『機皇共鳴』。我の『機皇』が戦闘する時、そのモンスターの攻撃力以下の『機皇』を手札・デッキ・墓地から特殊召喚する。来い『機皇神龍アステリスク』！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０→１６００

「それなら攻撃対象を『機皇神龍アステリスク』に変更するぜ！」

「トラップ発動『機皇衝陣』。『機皇』が攻撃対象になった時、デッキよりレベル４以上の『機皇』１体を特殊召喚する！光臨せよ、『機皇神マシニクル∞？』！」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ１６００→５６００

「俺はバトルフェイズを終了し、手札から『苦悩の選択』を発動！相手は自分フィールド上のカードを1枚選択し、それ以外のカードを全て墓地に送る！さあ、選びやがれ！」

「我は当然『機皇神マシニクル∞？』を選択する」

残りの2体は光の粒子となって消えた。

「少しは迷えよ…ターンエンド」

???1
LP7400
手札×4
フィールド
サイバー・ドラゴン　ATK2100

「わたしのターンだ。わたしは『リバイブドラゴン』を召喚。ターンエンド」

???2
LP8000
手札×3
フィールド
ブレイクス・ドラゴン　ATK1800
リバイブドラゴン　ATK1600
伏せカード×2

「我のターン!!」

このカードは…なぜ何も書かれていない…?

「…『機皇神マシニクル∞?』で『サイバー・ドラゴン』を攻撃する!」

「甘いぞ、最高神。わたしは伏せカード『ドラゴニック・リフレク

ション』を発動。わたしのドラゴン2体を生贄に捧げ、わたしはデッキからレベル1のドラゴン族モンスター『インフェルノドラゴン』を墓地へ送る。攻撃を無効にし、生贄に捧げた2体のドラゴンと墓地へ送ったドラゴンの攻撃力分のダメージを与える！」

ブレイクス・ドラゴン　ＡＴＫ１８００
リバイブドラゴン　ＡＴＫ１６００
インフェルノ・ドラゴン　ＡＴＫ７００

「ぐあああああああ！」

ディスペア　ＬＰ４０００→１００

「くっ、カードを3枚伏せてターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１００
手札×１
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
伏せカード×３

「さあ、そろそろ遊びは終わりだぁ！ドロー！『サイバー・ドラゴン』と『機皇神マシニクル∞？』を墓地に送り2体目の『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』を特殊召喚する！攻撃力は２０００だがな」

「我が『機皇神マシニクル∞？』を排除しただと！？」

「これで終わりだな。ダイレクトアタックだ！」

「そうはいかん！トラップ発動『機皇絶』！デッキから『機皇兵ワイゼル・アイン』を墓地へ送り、攻撃を無効にし、ターンを終了する！」

？？？１
ＬＰ７４００
手札×５
フィールド
キメラテック・フォートレス・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「そうだな、そろそろ終わりにしよう、わたしのターン。わたしは伏せカード『悪魔の計画』を発動。『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』を破壊」

「なっ！テメェ、何やってんだ！」

「そして、文字通り破壊されたモンスターのコントローラーの命を消滅させわたしのライフに８０００ポイント加える。君は最高神の切り札を葬った時点で用済みだ。用の済んだものは生きている必要もあるまい」

「ぐわあああああああああっ！？」

口調の荒い悪魔は、一瞬のうちに塵となって消えた。

？？？２　ＬＰ８０００→１６０００

「ハハハハハハ！わたしの名はイグザス！最高神よ、切り札を失った君に勝つ手段は無い！わたしは墓地の３体のドラゴン族モンスタ

ーを除外し『デット・ドラゴン』を特殊召喚する。こいつの攻撃力は除外した3体のドラゴンの合計だ」

デット・ドラゴン　ＡＴＫ０→３９００

「『デット・ドラゴン』でダイレクトアタックだ！君も用済みだ、最高神」

「トラップ発動『機皇崩壁』！デッキから『機皇兵スキエル・アイン』と『機皇兵グランエル・アイン』を墓地に送りバトルフェイズを終了！」

「まだやり残したことがあるようだね。カードを1枚伏せターンエンドだ」

イグザス
ＬＰ１６０００
手札×２
フィールド
デット・ドラゴン　ＡＴＫ３９００
伏せカード×１

「用済みだと…？用済みなのは貴様ら悪魔の方だ！我の……タァァァァンッ！」

強制的にインフィニティ・アイが覚醒した。だが、光は普段の通りではなく、∞の左側が青、右側が赤、そしてその中を白金の色で覆っている。どうやら、限界まで成長したようだ。すると、先程まで白いカードだったものが今ははっきりと見える。

「トラップ発動『機皇臨再』！このターンのみ『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する！」

「だが、攻撃力の差はたったの１００ポイント、それに手札にあるこのカードの効果を使用すれば返り討ちだ」

「『機皇神マシニクル∞？』を生贄に捧げる！」

「！！？」

切り札を生贄に捧げるだと！？

「光臨せよ！新たなる最強の機皇よ！『機皇神帝エクシニクル∞』！」

「な、何だあれは！」

わたしは海の方を見る。すると、緑色の無数の立方体でできた枠ができていた。

「……」

海上の沖合で、プログラムの構築が進み、構築が完了したところからロボットが具現化する。マシニクルが究極神オベリスクと同じ全長５０ｋｍになったと考えてもらって良い。変更点は、左腕が直接砲だったものが手が付いており、その腕に砲が装備されている。右手には巨大な剣を持っている。最後にはマシニクルにも付いていた翼が巨大化し、常に青い光の粒子を放っていることだ。

砲が具現化し、煙を噴き出す。

「『機皇神帝エクシニクル∞』、機動完了だ」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ０↓１２０００

「攻撃力１２０００だと！？」

「究極にして最後の機皇神…『機皇神帝エクシニクル∞』…その攻撃力は、我の墓地の『機皇』と名のついたモンスターの攻撃力の合計になる。我の墓地には『機皇兵ワイゼル・アイン』が２体、『機皇兵グランエル・アイン』が２体、『機皇兵スキエル・アイン』が１体、『機皇神マシニクル∞？』が１体、『機皇神龍アステリスク』が１体だ。

最強の機皇神『機皇神帝エクシニクル∞』で『デット・ドラゴン』を攻撃。インフィニティーディスペア・カノン！」

エクシニクルの砲から、巨大な青い光が放たれる。

「そうはいきませんよ。トラップ発動『ドラゴニック・バリア』。攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了。そして、わたしのスタンバイフェイズに攻撃を無効にしたモンスターを破壊し、その攻撃力分のダメージを与える！」

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１００
手札×１
フィールド
機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ１２０００

「わたしのターン、これで最後だ！死ね、ディスペア！」

エクシニクルは光に包まれ、大爆発を起こした。その爆風は、港にあった船や堤防が完全に粉々になるほどだ。

だが…エクシニクルは傷一つついてはおらず、心を持たずにただ標的をロックオンしており、砲はイグザスの方を向いている。

「なぜだ！？」

「『機皇神帝エクシニクル∞』の効果が発動した。このカードがフィールドを離れる場合、代わりに墓地の『機皇』と名のつくモンスター1体を手札に戻すことができるのだ。

我はこの効果によって『機皇神龍アステリスク』を手札に加え、破壊を阻止した」

「手札に戻すことでまぬがれるだと！？…くっ、対抗手段が…！『デット・ドラゴン』を守備表示に変更してターンエンド」

イグザス
ＬＰ１６０００
手札×３
フィールド
デット・ドラゴン　ＤＥＦ３９００

「我のターン、『機皇神帝エクシニクル∞』で『デット・ドラゴン』を攻撃。インフィニティーディスペア！」

「うわあああああ！？」

砲は一直線に飛んできて、デット・ドラゴンに当たった。周りのベンチや木が吹き飛んでしまった。

「さらに手札を1枚墓地へ送り、永続魔法『機皇方陣』を発動。『機皇』モンスターを効果の対象にすることはできない。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１００
手札×０
フィールド
機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ１２０００
機皇方陣

「わたしのターン…ターンエンドだ…」

イグザス
ＬＰ１６０００
手札×４
フィールド
なし

「我のターン、『機皇神帝エクシニクル∞』でダイレクトアタック！」

「ぐわあああああああああああああああ」

イグザス　ＬＰ１６０００→４０００

「お前の仕掛けた闇のデュエルの結果がこれだ。仲間を犠牲にして

いなければこうはならなかったかも知れんぞ?ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１００
手札×１
フィールド
機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ１２０００
機皇方陣

「わたしのターン…よし!『悪魔の星』を発動!『機皇神帝エクシニクル∞』を破壊!これで破壊されてくれれば、君の望みを一つ叶えよう!どうだ!?」

「我は『機皇神帝エクシニクル∞』の効果により墓地から『機皇神龍アステリスク』を手札に加える」

「なぜ!?願いがかなうのだよ!?」

「我が願いは平和な神界、それを叶える方法は貴様ら悪魔の殲滅のみ。我のターン、『機皇神帝エクシニクル∞』でダイレクトアタック!インフィニティーディスペア!」

「そ、そんな…わたしが用済みなのか…!」

イグザス　ＬＰ４０００→－８０００

「……神は悪魔に対して情を抱くことなどありはしない。ただお前たちを消すのみ」

簡単に協力者を裏切る悪魔など、心が腐った人間と同じ、生きてい

る資格などありはしない。

第９０話　修学旅行3日目（後書き）

今回の最強の機皇、機皇神帝エクシニクル∞の効果です。登場させるのはもっと後にするつもりでしたが、まだまだ沢山のオリカが待っている点では出番がなくならないうちに出すことにしました。

機皇神帝エクシニクル∞
レベル１２　神属性　機械族　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に表側表示で存在する『機皇神』と名のつくモンスター1体を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻撃力は、自分の墓地の『機皇』と名のつくモンスターの攻撃力の合計になる。1ターンに1度、相手フィールド上のシンクロモンスター1体をこのカードに装備する。このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの元々の攻撃力分アップする。このカードの特殊召喚に成功したとき、手札またはデッキから『機皇』と名のつくモンスター1体を墓地へ送ることができる。このカードの効果は無効化されず、このカードがフィールドを離れる場合、代わりに自分の墓地の『機皇』と名のつくモンスターカード1枚を手札に加えることができる。

現在レギュラー化している（もしくはすることが決定している）オリカとその作者様

『機皇召集』『紅蓮魔龍の導き』『トールの襲撃』『オーディンの知識』『ロキの気まぐれ』でユタ様、『異次元封鎖』で通りすがりのデュエリスト様、『インフィニティ・チェンジ』で葦切様です。
※万が一間違えていたらごめんなさい。ないとは思いますが…

第９１話　修学旅行４日目（前書き）

お待ちかね（？）トールの固有デッキが登場です！

第９１話　修学旅行４日目

～～～トールサイド～～～

「ではディスペア、行ってくる」

「行って来い。今日は我は大人しくしていよう」

「ディスペアがそんなこと言うなんて珍しいよね。キッヒャッヒャッヒャ」

何かおかしい物でも食べたのかな？

「やはりお前には言われたくないな」

こいつらには付き合ってられんな。

～～～ドミノ埠頭～～～

「さてと、どうするか…」

我一人と言うのは修学旅行では初めてだな。常にロキがついてきていたから、１人では何をするか悩む。

「お、暇そうやなぁ、トール君」

「…八神、なぜここにいる？」

「修学旅行やし、自由行動なんやからどこに居ても不思議じゃ無いやろ？」

それを言われると何も言い返せないな。ディスペアなら何かしら言うのだろうが…

「そんなことよりトール君、君は固有デッキって言う物は無いの？」

高町がいきなり聞いてくる。

「なぜ？」

「ロキ君もディスペア君も自分だけしか使ってないデッキみたいなのがあるからトール君にもあるのかなぁって」

他人にここまで深く追求する人間も珍しいな。

「ある」

「それなら私とデュエルしようよ」

今度はテスタロッサ。バトルマニアと言うのは本当らしい。

「えー、ずるいよ、フェイトちゃん」

「そうや、ここは誰か一人だけ…」

「その必要はない。お前達全員でかかってこい」

「「「え？いいの」」」

「ルールの説明をしよう。バトルロイヤルルールを採用し、各々のライフは４０００」

「え？トール君も４０００？」

「そうだ。そして、我のターンはお前達のターンの一番あとに回ってくる」

「でもそれじゃあ…」

「このデッキならばこの程度のハンデがちょうどいい。我のライフを１２０００にすればお前たちなど敵ではないからな」

「随分と言ってくれるやないか。この勝負受けるで！」

「「「「デュエル」」」」

「我のターン…我は『ＸＸ－セイバー　フラムナイト』を召喚。このカードがある限り、１度だけ攻撃を無効にする。カードを3枚伏せ、ターンエンド」

トール
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド

ＸＸ－セイバー　フラムナイト　ＡＴＫ１３００
伏せカード×３

「私のターン！私は『コーリング・ノヴァ』を召喚してターンエンド」

なのは
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
コーリング・ノヴァ　ＡＴＫ１４００

「私のターン！私は相手のフィールドにのみモンスターが存在することで、手札から『太陽の神官』を守備表示で特殊召喚！」

まだ、必要なカードが来てない。それならこれで時間を稼ぐ！

「ターンエンド」

フェイト
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
太陽の神官　ＤＥＦ２０００

「私のターンやね。私は『おろかな埋葬』を発動してデッキから『堕天使スペルビア』を墓地に送る。さらに、永続魔法『神の居城－ヴァルハラ』を発動、その効果で手札から『堕天使ゼラート』を特殊召喚！ターンエンドや」

はやて
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
堕天使ゼラート　ＡＴＫ２８００
神の居城－ヴァルハラ

「我のターン、トラップ発動『針虫の巣窟』。我のデッキの上から５枚墓地へ送る。
そして、『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を召喚」

カメレオンの突然変異したようなモンスターが現れた。

「このカードの召喚に成功したことで、墓地から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加える。そして、このカードは我の場に『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスターが２体以上いる時、手札から特殊召喚できる。現れろ『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』」

「ここまでは…」

「うん、ディスペア達なら当り前だけど…」

「あれだけ大きな口を叩いてたんや、何も作戦が無いわけがない…」

「我はトラップカード『ガトムズの緊急指令』を発動。フィールド上に『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスターがいる時、墓地から『Ｘ－セイバー』２体を特殊召喚する！現れよ『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』！」

「一気に２体…！」

「レベル3の『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』2体にレベル3の『ＸＸ－セイバー　フラムナイト』をチューニング。シンクロ召喚。『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』！」

「攻撃力３１００!?」

「それだけではない。ガトムズには自分フィールド上の『Ｘ－セイバー』1体を生贄に捧げるたびに相手の手札を1枚捨てさせる能力がある」

「ハンデス能力!?私とフェイトちゃんの手札は5枚…全部捨て切れるとは思えないけど…」

「我は『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果を発動。1ターンに1度、我の墓地からレベル4以下の『Ｘ－セイバー』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。我は『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚し、効果発動。墓地から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加える。そして『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』の効果により、『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を生贄に捧げ、高町の手札を1枚捨てる」

我は高町の真ん中のカードを選択し、高町はその手札を墓地に送った。

「そして、フィールド上に『Ｘ－セイバー』が2体以上いることにより、手札から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を特殊召喚。『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』の効果によって、効果を使用した『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を生贄に捧げ、八神の真ん中の手札を1枚墓地へ送る」

選択されたカードを墓地に送った。

「次に『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果によって墓地から『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚し、その効果によって墓地から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加える。そして、手札に加えたフォルトロールを特殊召喚」

「ま、まさかこれって！」

「そう、ハンデスの無限ループ…お前達の手札は1ターンで全て消える。

効果を使用した『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』と『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を生贄に捧げ、高町の手札2枚を墓地に送る。もう1体の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果により『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚し、墓地から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加え、自身の効果により特殊召喚。効果を使用済みの2体の『ＸＸ－セイバー』を生贄に高ｍ値の手札2枚を墓地に送る」

これで高町の手札は0、逆転の希望は消えた。

「再び『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果を使用し、『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚、墓地から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加え、特殊召喚する。効果を使用した2体の『ＸＸ－セイバー』を生贄にし、八神の手札を墓地に送る」

これで八神の手札も0だ。

「まだだ。『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果によって再

び『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚し、墓地の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加え特殊召喚。効果を使用した2体の『ＸＸ－セイバー』を生贄にテスタロッサの手札を2枚墓地に送る。そして、『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果により『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚し、墓地の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加え、特殊召喚し、効果を使用した2体の『ＸＸ－セイバー』を生贄にテスタロッサの手札を2枚墓地へ。『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果により墓地から『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚。効果によって墓地から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加え、特殊召喚する。最後に『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を生贄に、テスタロッサの最後の手札を墓地に送る」

「私達の手札が…1ターンで全部墓地に送られた…！」

「つ、強い」

「しかもトール君は、全くと言って良い程損失が無い…」

「お前達、その程度ではディスペアの究極の固有デッキには勝てんぞ」

「究極の…固有デッキ？」

しまった…また余計なことを言ってしまったな…『ＢＦ』は飽くまで究極の固有デッキを起動させないための最後の砦、ディスペアは周りには言っていないことを知っていたオーディンに他言しないように深く言われていたというのに…！

「聞かなかったことにしろ。『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』

の効果のよって墓地から『Ｘ－セイバー　パシウル』を特殊召喚。
レベル６の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』にレベル２の『Ｘ－セイバー　パシウル』をチューニング！来い！『ブラックフェザー・ドラゴン』！」

これでトール君のフィールドには攻撃力３１００と２８００のモンスターが並んだ。

「『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』で『堕天使ゼラート』を攻撃！インパクトスラッシャー！」

「クッ…！」

はやて　ＬＰ４０００→３７００

「『ブラックフェザー・ドラゴン』で『太陽の神官』を攻撃。ノーブル・ストリーム」

ダメージは無くとも、シンクロ素材は消しておいた方がいい。

「我はカードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

トール
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
ＸＸ－セイバー　ガトムズ　ＡＴＫ３１００
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
伏せカード×２

「私の…ターン」

今引いたカードはマシュマロン…今はこれで時間を稼ぐしかない。

「モンスターを1体伏せて、『コーリング・ノヴァ』を守備表示にする。ターンエンドだよ」

なのは
ＬＰ４０００
手札×０
コーリング・ノヴァ　ＤＥＦ８００
セットモンスター×１

「私のターン！」

私のフィールドにカードは無い。でも！

「『強欲な壺』を発動して2枚ドロー！私は魔法カード『死者蘇生』で墓地の『堕天使ゼラート』を特殊召喚！そして手札の『ゲイジャドウ』を捨ててトールのフィールドのモンスターをすべて破壊する！」

「ナイス！」

「ナイスや！」

「そうはさせん！カウンタートラップ『セイバーズ・カウンター』！『ＸＸ－セイバー』がいる時、相手の発動した効果を無効にし破壊する」

堕天使ゼラートが放った闇の波動は、ガトムズの剣に跳ね返され、ゼラート自身に当たり消滅した。

「ターン…エンド」

私の今の手札でできる最高の戦術が通用しなかった…。

フェイト
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
無し

「くっ…私のターンや。『神の居城－ヴァルハラ』の効果で手札の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を特殊召喚！これで、天使族以外のモンスターの攻守は５００ポイントダウンや！」

ＸＸ－セイバー　ガトムズ　ＡＴＫ３１００→２６００
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００→２３００

「いくで！『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』で『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』を攻撃！」

「フン」

トール　ＬＰ４０００→３８００

「ターンエンドや」

はやて

ＬＰ３７００
手札×０
フィールド
Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ　ＡＴＫ２８００
神の居城－ヴァルハラ

「我のターン。我は『強欲な壺』で2枚ドローし、『Ｘ－セイバー　エアベルン』を召喚。トラップカード『ガトムズの緊急指令』を発動する。『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』と『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚し、レイジグラの効果により墓地から『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を手札に加え、特殊召喚。『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果によって墓地から『ＸＸ－セイバー　フラムナイト』を特殊召喚する。レベル６の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』にレベル３の『Ｘ－セイバー　エアベルン』と『ＸＸ－セイバー　フラムナイト』をダブルチューニング！光臨せよ！『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』！」

ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ　ＡＴＫ３５００→３０００

「攻撃力が下がっても３０００！ＶＥＮＵＳじゃ勝てへん…」

「『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』で『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃。トリプルセイバースラッシュ！」

はやて　ＬＰ３７００→３５００

「ＶＥＮＵＳが…！」

「この瞬間『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』の効果発動。相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、相手フィールド上のモンスターを

すべて破壊する！エンドレス・セイバー！」

「私のモンスターが！」

「『ブラックフェザー・ドラゴン』で高町にダイレクトアタック、ノーブル・ストリーム！」

「きゃあああ！」

なのは　ＬＰ４０００→１２００

「『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』でテスタロッサにダイレクトアタック」

「クッ…！」

フェイト　ＬＰ４０００→９００

「終幕だ。魔法カード『リバイブバトル』！このターン、相手フィールド上から墓地に送られたモンスターを全てフィールドに戻し、このターン、もう１度バトルフェイズを行う」

「「「！！！」」」

ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ　ＡＴＫ３５００→３０００
ＸＸ－セイバー　ガトムズ　ＡＴＫ３１００→２６００
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００→２３００

「『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』で『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃！」

「うあああっ！」

はやて　ＬＰ３５００→３３００

「『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』の効果によりお前達のモンスターをすべて破壊。『ブラックフェザー・ドラゴン』で高町に、『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』でテスタロッサにダイレクトアタック！」

「「きゃあああ！」」

なのは　ＬＰ１２００→－１６００

フェイト　ＬＰ９００→－２３００

「最後だ。『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』最後の能力を発動。１ターンに１度、自分フィールド上の『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスターを生贄に捧げることで、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える。我は『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』を生贄に捧げる。ラスト・セイバー！」

「あれだけのハンデがありながら…ちっともライフを削れんかった…これが、固有デッキの、トール君の力…！」

それに…ディスペア君の最後の固有デッキはこれよりも強い…！多分、究極神召喚専用のデッキと考えても良いやろな…。

はやて　ＬＰ３３００→－２００

トール　Ｗｉｎ

第９１話　修学旅行４日目（後書き）

今回のトールのエースモンスター『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』の効果です。

『ＸＸＸ－セイバー　ガトムズ』
レベル１２　地属性　戦士族　ＡＴＫ３５００　ＤＥＦ３３００
『ＸＸ－セイバー』と名のついたモンスター＋『Ｘ－セイバー』と名のついたチューナー２体
このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊することができる。１ターンに１度、自分フィールド上の『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスター１体を生贄に捧げることで、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える。

第９２話　修学旅行５日目（前書き）

※究極神のテキストを少しアレンジしました。なので、あとがきに載せようと思います。

ファイブディーズの感想。

ブルーノオオオオオオオオオ！！（´；ω；`）ウッ…

第９２話　修学旅行５日目

～～～ホテル・ロキサイド～～～

「スクルドは今日どうする？」

「う～ん…ディスペアと出かけよっかな」

「聞いた僕がバカだった、勝手にして」

ちぇ、たまにはスクルドと出かけたかったのにな…別に深い意味は無いけど。

「みんな付き合い悪いなぁ…」

僕は少しだけ落ち込んだ。しょうがない、ファイブディーズ見よう。

～～～ディスペアサイド～～～

「ディスペア、一緒に行かない？」

今まさに出かけようとしていた我に声をかけてきたスクルド。

「構わないが…」

スクルドを連れて外に出る。移動手段は歩きだ。

～～～ドミノ町、繁華街～～～

「ねえディスペア、あのお店に寄って行こうよ」

スクルドが指さすのはドミノ町の中でトップクラスに値段が高いレストランだ。

「…まあ、いいだろう」

ロキにスクルドに甘すぎと言われる理由が理解できた気がする。

店の中の席に座り、メニューを開く。

「我はとくに食べたいものは無い。好きに頼め」

全部最低２０００円以上ということが分かった。金はいくらでもあるからいいが、本当にこの店は客が入ってくるのか？

暫く経った後……

「合計１３０００円になります」

「……スクルド、何食べた？」

「えっと…確かナントカグラタンだったと思うけど…美味しかったよ」

グラタンで１３０００円…我らには関係のないことだが恐ろしいな。
会計を済ませ、店を出る。そして、暫く歩いて行く。

「どうしたものか…」

スクルドがいたから１つ目の行き先を決めることができたが、もう
どこにも行きたい場所は無いぞ。

「ワイの勝ちやな！」

「竜崎にまで負けるなんて…！」

またこいつらか。無視して行こう。

「あーっ！お前はこの前の！」

そうはいかなかったか。

「ディスペア、知り合い？」

「やめてくれ、スクルド。あんなのと知り合いと言われるだけで死
にたくなる」

「何だとー！よし、リベンジだ！この俺とデュエルしろ！」

「ワイも協力するで！」

ここでさらに羽蛾に借りを作っておけば…フフフ…！

「ディスペア、私にもやらせて！」

「……勝手にしろ」

「「「「デュエル」」」」

「まずは私のターンからだね。私は『夜薔薇の騎士』を召喚して、効果で手札の『ギガント・セファロタス』を特殊召喚！レベル４の『ギガント・セファロタス』にレベル３の『夜薔薇の騎士』をチューニング、シンクロ召喚！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！…ターンエンド」

スクルド&ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００

「ヒョヒョヒョ、俺のターン！来い『アルティメット・インセクトＬＶ３』！」

フィールドには巨大な幼虫が現れた。

「キャアアアアアアア！」

ＨＡ☆ＧＡのデッキとスクルドの相性が悪すぎる…スクルドは幼虫系の虫がとにかく苦手だからな…。

「そして『レベルアップ！』を発動。『アルティメット・インセクトＬＶ３』を墓地に送り、デッキから『アルティメット・インセク

トＬＶ５』を特殊召喚する！ターンエンドだ」

ＨＡ☆ＧＡ＆竜崎
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
アルティメット・インセクトＬＶ５　ＡＴＫ２３００

「我のターン！…」

スクルドのフィールドにはブラック・ローズ・ドラゴン…ＨＡ☆ＧＡのフィールドにはアルティメット・インセクトＬＶ５がいる。ＬＶ５は次のターン、ＬＶ７に進化する…！

「我は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚する！さらに自分のモンスターが特殊召喚に成功したことにより、手札からチューナーモンスター『スタレント・リヴァイン』を特殊召喚。この効果によって特殊召喚した場合デッキからカードを１枚ドローする。
レベル５の『バイス・ドラゴン』にレベル３の『スタレント・リヴァイン』をチューニング。来い、『スターダスト・ドラゴン』！」

攻撃力は今のフィールドの中では最も高いが…２５００では次のターン、ＬＶ７となるアルティメット・インセクトの効果により１８００までダウンし、戦闘破壊される。だから攻撃力が足りないならばさらに進化させるのみ！

「墓地の『スタレント・リヴァイン』を除外し、効果発動！自分フィールド上にこのカードをシンクロ素材としたモンスターが存在する時、墓地のこのカードを除外し、手札からモンスター１体を特殊召喚する。『チューニング・サポーター』を特殊召喚。さらに手札

からチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を通常召喚。レベル1の『チューニング・サポーター』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング。シンクロ召喚！シンクロチューナー『リバインズ・スター』。『チューニング・サポーター』がシンクロ素材になったことで、カードを1枚ドローする。ターンエンド」

ディスペア&スクルド
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００
リバインズ・スター　ＡＴＫ１８００

「ワイのターンや！」

手札が悪い…ここは時間稼ぎや。

「モンスターセット！カードを1枚伏せて、ターンエンドや」

竜崎&ＨＡ☆ＧＡ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×１

「私のターン、私は『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果で、墓地から『ギガント・セファロタス』を除外して、そのセットモンスターを攻撃表示に変更！攻撃力を０にする！」

竜崎のセットモンスター『俊足のギラザウルス』が攻撃表示になり、棘に縛られた。

俊足のギラザウルス　ＡＴＫ１４００→０

「なんやて！？」

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』で『俊足のギラザウルス』を攻撃、ブラック・ローズ・フレア！」

「クウッ…」

竜崎＆ＨＡ☆ＧＡ　ＬＰ８０００→５６００

「なにしてるんだよバカ！」

「しゃーないやろ！」

「私はこれでターンエンド」

スクルド＆ディスペア
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００

「よし、俺のターン。このスタンバイフェイズに『アルティメット・インセクトＬＶ５』は進化する！ヒョヒョヒョヒョ、『アルティメット・インセクトＬＶ７』！こいつの効果でお前らのモンスターの攻撃力と守備力は７００ポイントダウンする」

ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００→１７００
スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００→１８００
リバインズ・スター　ＡＴＫ１８００→１１００

我とスクルドのモンスターの攻撃力が全て２０００を下回った…！

「さあ、ディスペア！俺の恨みを思い知れ！『アルティメット・インセクトＬＶ７』で『スターダスト・ドラゴン』を攻撃だ！」

「フン…レベル８の『スターダスト・ドラゴン』にレベル２の『リバインズ・スター』をチューニング！」

特別に見せてやる、我のアクセルシンクロを！本来ＨＡ☆ＧＡ相手にする必要はないが、２度と構ってこないように徹底的に力の差を見せつけてやろう。

「ひょ？」

「アクセルシンクロ、『ディメンション・スター・ドラゴン』！」

ディメンション・スター・ドラゴン　ＡＴＫ３２００→２５００

「それでもお前のモンスターの攻撃力は『アルティメット・インセクトＬＶ７』には届かない！攻撃対象を『ディメンション・スター・ドラゴン』に変更だ！」

ディスペア&スクルド　ＬＰ８０００→７９００

「『ディメンション・スター・ドラゴン』がフィールドを離れた場

合、墓地に存在するシンクロモンスター1体と、チューナーモンスター、それ以外のモンスターを各1体特殊召喚できる。蘇れ『スターダスト・ドラゴン』『グローアップ・バルブ』『チューニング・サポーター』！」

このぐらいしか使える効果が無いのが難点だが、それでも次のシンクロかアクセルシンクロにつなげられる。

スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００→１８００
グローアップ・バルブ　ＤＥＦ１００→０
チューニング・サポーター　ＤＥＦ３００→０

「だがそんなモンスターを召喚したところで俺の『アルティメット・インセクトＬＶ７』には敵わないんだよ！ターンエンド」

ＨＡ☆ＧＡ＆竜崎
ＬＰ５６００
手札×５
フィールド
アルティメット・インセクトＬＶ７　ＡＴＫ２６００

「我のターン。レベル1の『チューニング・サポーター』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング。来い、シンクロチューナー『スターソーサラー』！」

チューニング・サポーターがシンクロ素材になったことにより、我はデッキからカードを1枚ドローした。

「そしてデッキの1番上のカードを墓地へ送り『グローアップ・バルブ』を墓地から特殊召喚。さらに『レベル・スティーラー』を召

喚。レベル１の『レベル・スティーラー』にレベル１の『グローアップ・バルブ』をチューニング。シンクロ召喚『スターダスト・エンジェル』！」

「１ターンで２体もシンクロモンスターを特殊召喚した？それでも攻撃力は雑魚ばかり、俺様の敵じゃないんだよ。ひゃーっひゃっひゃ！俺の勝ちだ！」

「何を勘違いしている？」

「ひょ？」

「まだ、我のシンクロは終わっていない。レベル８のシンクロモンスター『スターダスト・ドラゴン』とレベル２のシンクロモンスター『スターダスト・エンジェル』にレベル２のシンクロチューナー『スターソーサラー』をチューニング！無数の星よ、銀河を創り無限の可能性を示せ！デルタアクセル！」

神力で時空の狭間に穴をあけ、光速の世界を創る。スターダスト・ドラゴンは光速の世界に飛び込み、世界を銀河に染めて姿を現した。

「『ギャラクシー・スター・ドラゴン』！」

ギャラクシー・スター・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→３３００

「攻撃力がダウンしても３３００！？」

「『ギャラクシー・スター・ドラゴン』効果発動。手札より『スナイプ・ストーカー』を墓地に送り、このターンその効果を使用できる。手札を１枚捨て、『アルティメット・インセクトＬＶ７』を選

択。サイコロを振り、1か6以外なら破壊する。……出た目は3、よって『アルティメット・インセクトLV7』を破壊」

「ひゃあああああああ！」

アルティメット・インセクトが破壊されたことで、攻撃力も元に戻る。

ギャラクシー・スター・ドラゴン　ATK3300→4000
ブラック・ローズ・ドラゴン　ATK1700→2400

「『ギャラクシー・スター・ドラゴン』でHA☆GAにダイレクトアタック。ギャラクシー・ブラスターソニック！」

「ぎゃあああああああああ！」

HA☆GA&竜崎　LP5600→1600

「人のこと言えないやないか！」

「何だと！お前が最初に協力するとか言って来ておきながら失敗するから言ったんだ！俺から勝負を始めたんだからお前に文句言われる筋合いはない」

「ターンエンド。やる気が無いのならサレンダーするがいい」

あまりスクルドを虫デッキの相手にはしたくないしな。

ディスペア&スクルド
LP7900

手札×３
フィールド
ギャラクシー・スター・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「ワイのターン！」

クッ…なにもできへん…

「ターンエンド…」

ＲＹＵ☆ＺＡＫＩ＆ＨＡ☆ＧＡ
ＬＰ１６００
手札×５
フィールド
伏せカード×１

「私のターン！『ブラック・ローズ・ドラゴン』でダイレクトアタック！ブラック・ローズ・フレア！」

「させんで！トラップ発動『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！」

「そうはさせない！速攻魔法『わが身を盾に』！ライフを１５００ポイント払って、『聖なるバリアー ミラーフォース ー』の効果を無効にする！」

「「あああああああああああ！」」

ＲＹＵ☆ＺＡＫＩ＆ＨＡ☆ＧＡ　ＬＰ１６００→ー８００

「その程度で恨みを思い知れとは…拍子抜けだな」

少しぐらい実力が上がったのか？と思い期待したのだが…損だったな。

「時間の無駄だったな。行こう、スクルド」

スクルドを連れて再び歩き出した。

～～～ホテル～～～

「ブルーノオオオオオオオオオオ！！」

ホテルに帰るとトールとロキがブルーノがどうのと騒いでいた。

第９２話　修学旅行５日目（後書き）

究極神オシリス
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力Ｘ０００　守備力Ｘ０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻守は自分の手札×２０００ポイントになる。このカードは魔法・モンスター効果に影響されず、罠の効果の影響を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフを半分生贄に捧げ特殊召喚される。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、攻撃力・守備力を２０００ポイントダウンする。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されず、他のカードの効果の影響を受けない。

←

究極神オシリス
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力Ｘ０００　守備力Ｘ０００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻撃力・守備力は自分の手札×２０００ポイントになる。このカードは魔法カード・モンスター効果の影響を受けず、罠カードの影響は発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフを半分生贄に捧げこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、そのモンスターの攻撃力・守備力を２０００ポイントダウンする。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特

殊召喚と効果はいかなる場合でも無効化されない。

究極神オベリスク
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力８０００　守備力８０００
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠・モンスター効果に影響されず、魔法の効果の影響を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフ半分を生贄に捧げ特殊召喚される。このカード以外のモンスター２体を生贄に捧げることでこのターンこのカードは相手モンスターすべてに攻撃できる。この効果は相手ターンでも発動できる。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されず、他のカードの効果の影響を受けない。

←

究極神オベリスク
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力８０００　守備力８０００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠カード・モンスター効果の影響を受けず、魔法カードの影響を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフ半分を生贄に捧げこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。自分または相手のターンに、このカード以外のモンスター２体を生贄に捧げることで、このターンこのカードが攻撃可能な場合、このカードは相手モンスターすべてに攻撃できる。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在す

るレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果はいかなる場合でも無効化されない。

究極神帝ラー
レベル１５　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在するときのみ攻撃が可能になり、効果も適用される。このカードは戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果はすべて無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードをすべて除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は無効化されず、他のカードの効果の影響を受けない。

←

究極神帝ラー
レベル１５　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在する時のみ効果が適用され、攻撃可能になる。このカードはいかなる効果の影響も受けず、戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果はすべて無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードを全て除外

し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果はいかなる場合でも無効化されない。このカードの効果のスペルスピードは∞として扱う。

テキスト的にアマゾネスの剣士などの効果も無意味となります。当然、ラー以外は魔法かトラップが効くので弱点がなくなったわけではありません。

※どうでもいいかもしれませんが、究極神帝ラーのみ、ディスペアがレベルアップしたのも兼ねて効果のモーション変更。
白金の炎を膨張させてすべてを飲み込んでいく→ラーの口に超大な神力が収束し、白金の大爆発を起こす。
攻撃の範囲は変更ありません。設定上、一瞬で文字通り全てを破壊します。

今回は竜崎に登場していただきました。

第９３話　修学旅行６日目　襲い来る魔（前書き）

今回は短めです。

今日の夕飯は鉄板焼きでした。大満足です。
それよりも早く遊戯王のサントラ３出ないかなぁ…待ちきれないです。
※作者は極度の遊戯王病です。大好きすぎて一生やめられないかもしれないくらいです。
最近の悩み：朝起きると首が痛い。後、パソコンに向かいっぱなしなのがいけないのか、肩も痛い。でも、小説を書くのと遊戯王が楽しくてやめられない。受験生なのに大丈夫か？

第９３話　修学旅行６日目　襲い来る魔

～～～ホテル・ディスペアサイド～～～

「ここは…どこだ？」

我は今知らない場所に居る。しかし、何故か懐かしい感じはする。

「グフフフフ、伝説のノルンの三姉妹は死に絶え、最高神共も今は貴様を残して逝った。そして神界も、我が手によって破壊した。お前はたったの１人で我と戦うのか」

アレは一体何だ？巨大な闇がしゃべっているのか…！？

「わたしは確かにノルン三姉妹を、最高神たちをこの手で殺めた」

あれは…我？一人称が『わたし』？そして…我と同じ姿をした奴がスクルドを、ノルン三姉妹を、最高神をこの手で殺した？どういうことだ…

「お前は愛するべきものを全てその手で殺めた。人間も神も天使も。既にお前に残っているのは深き絶望のみ。我が手によって死ぬが良い！」

「わたしにはまだ最後の手段が残っている。本当の最期の手段がな…究極神帝ラーの最後の特殊能力を発動する。ゴッド・アルティメット・ノヴァ！」

「貴様、世界をリセットするつもりか！ぐおおおおおおお！つ…ぎに会うときは――――――――――――――」

次の瞬間、視界は全てが白金の炎の大爆発にのまれた。

「……ッ！」

今のは…何だ？『わたし』？『我』の姿をしたあの者は『我』なのか？それとも…。

「…ディス…ペア？」

「スクルドか……」

「どうしたの？苦しそうだけど…？」

「何も問題は無い」

スクルドにこんな話をするのも気が引ける。しかし、先程からずっと漂っているこの違和感は一体何だ？

「ディスペア、それ…」

デッキからカードを3枚取り出す。カードの見た目自体は普通のラーの翼神竜で何も変わらないが、究極神の効果が僅かに変わっている。しかし、違和感の正体はこれではない。

「気負いすぎか…」

もう朝だ。どうやらソファーに座っているうちに少し眠ってしまっ

たらしい。

「……」

しかし、その時は気付かなかった。既に魔の手がそこまで迫っていたことに。そしてそれこそが違和感の正体だということに。

～～～2時間後、ドミノ町・郊外～～～

今はスクルドと共に歩いている。特に行き先も無い。

スッ…

「!?」

いきなりスクルドが我の首に持っていないはずの剣を押し当ててきた。

「何のつもりだ」

スクルドは返事を一切せずに、固有ディスクを構えた。

「……わかった」

この時ようやく気付いた。朝からあった違和感はこれのことだったのか。

「「デュエル」」

「私のターン…『返り咲く薔薇の大輪』を守備表示で召喚、ターンエンド」

スクルド
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
返り咲く薔薇の大輪　ＤＥＦ１３００

「我のターン。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×６
フィールド
なし

「私のターン！私はフィールド魔法『カオスパレス』を発動」

スクルドは、今まで使ったことのないカードを発動した。周りは一気に悪魔の巣窟という言葉がふさわしい場所になった。そして、スクルドの後ろには『カオスパレス』のカードが浮かび上がった。そのテキストは…

カオスパレス
フィールド魔法
このカードはフィールド上に存在する限り効果を無効にされず、フ

ィールドから離れない。自分フィールド上の植物族モンスターがフィールドを離れる場合、代わりにこのカードに『プラントカウンター』を１つ置く。このカードに『プラントカウンター』が８つ乗った場合、自分は２０００ポイントダメージを受け、その後『プラントカウンター』を全て取り除く。
このカードの発動中に敗北したプレイヤーは命を失う。

これでは攻撃ができない…。

「私は『返り咲く薔薇の大輪』を攻撃表示にしてディスペアにダイレクトアタックするよ」

ディスペア　ＬＰ８０００→６７００

「なにもしないの？ターンエンド」

スクルド
ＬＰ８０００
手札×６
フィールド
返り咲く薔薇の大輪　ＡＴＫ１３００
カオスパレス

「我のターン、エンドフェイズに手札が7枚以上あることにより、手札を１枚捨てターンエンド」

ディスペア
ＬＰ６７００
手札×６
フィールド

なし

「私のターン。遠慮しなくていいんだよ?ディスペア。『返り咲く薔薇の大輪』でダイレクトアタック」

ディスペア　ＬＰ６７００→５４００

「……」

「抵抗してくれなきゃつまんないよ。いつもは本気でやってくれるのに、今日は本気でデュエルしてくれないの?カードを1枚伏せてターンエンド」

ディスペア　ＬＰ５４００→４１００

スクルド
ＬＰ８０００
手札×６
フィールド
返り咲く薔薇の大輪　ＡＴＫ１３００
カオスパレス
伏せカード×１

「我のターン。魔法カード『機皇の施し』。手札から『機皇兵ワイゼル・アイン』と『機皇兵スキエル・アイン』を捨て、２枚ドローする。『機皇兵グランエル・アイン』を召喚」

「やっと本気になってくれたんだ。トラップ発動『デス・ソーン』。相手が召喚・反転召喚・特殊召喚した時、手札から1枚墓地に送ってそのモンスターの召喚を無効にして破壊する。本気になってくれ

たのはうれしいけど、もう遅いよ」

「今の一言で、ようやく判断できた」

「？」

「貴様、何者だ？」

「何おかしいこと言ってるの？私はスクルドだよ？ディスペア、疲れてるんじゃない」

「フン、茶番が下手だな。もう躊躇する必要もないか。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４１００
手札×５
フィールド
なし

そもそもこんなフィールド魔法を使う時点で怪しいと思っていたが、操られているというパターンもあるため、迂闊に攻撃することはできなかった。

「私のターン……信じてくれないんだ。じゃあ私は装備魔法『プラントシューター』を『返り咲く薔薇の大輪』に装備。攻撃力を倍にするよ。さらに、『キラー・トマト』を召喚して、２体のモンスターでダイレクトアタック。カードを１枚伏せてターンエンド。まあ、ディスペアの言うとおり私はスクルドじゃないけどね。今更本気を出したって遅いよ」

ディスペアのライフはわずか１００、この状況から私を倒すなんて絶対に無理だ。

ディスペア　ＬＰ４１００→１００

スクルド（？）
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
返り咲く薔薇の大輪　ＡＴＫ２６００
＋プラントシューター
キラー・トマト　ＡＴＫ１４００
カオスパレス

「我のターン」

我がライフは１００、手札は６枚。対して、奴の場には攻撃力が２６００の返り咲く薔薇の大輪とキラー・トマト。しかし、手札が６枚もあればそれで十分。

「我は『機皇兵グランエル・アイン』を召喚し、魔法カード『機皇召集』を発動。デッキから『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚。そして『機皇神マシニクル∞？』を生贄に捧げる！」

「え！？」

そんなカード、報告には無い…！

「究極の機皇、『機皇神帝エクシニクル∞』！」

遥か遠い場所に、無数の立方体によってプログラムが組まれ、読み込みが終了した場所から巨大なロボットが具現化する。起動完了し、腕に装備されている巨大な砲が煙を噴き上げた。

「『機皇神帝エクシニクル∞』、機動完了。このカードの攻撃力は我の墓地の『機皇』と名のつくモンスターの攻撃力の合計となる」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ０→１０４００

「それならトラップカード『奈落の落とし穴』を発動！『機皇神帝エクシニクル∞』を破壊！」

「『機皇神帝エクシニクル∞』の効果により、フィールドを離れる場合、代わりに自分の墓地の『機皇』１体を手札に加える。さらに、このカードの特殊召喚に成功したことで、今手札に加えた『機皇兵グランエル・アイン』を墓地に送る」

これでエクシニクルの攻撃力は１０４００のままだ。

「……」

確かに、今ディスペアのフィールドには攻撃力１００００を超えるモンスターがいる。でも、手札にあるこの『棘の道』を捨てれば、戦闘ダメージはディスペアが受けて、ディスペアは死ぬ。私の勝利は確定的だ。

「我は『機皇天』を発動。このターン、『機皇』が攻撃する場合、相手はカードの効果を使用することはできない。さらに、手札からトラップカードを発動できる！『インフィニティ・チェンジ』を発

動し、『機皇神帝エクシニクル∞』に装備！装備モンスターはシンクロモンスターを吸収できなくなるが、効果モンスターを吸収する！我は『返り咲く薔薇の大輪』を吸収」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ１０４００→１１７００

「そ、そんな！」

「忘れたわけではあるまいな？貴様が発動した『カオスパレス』最後の一文を」

「……！」

思い出したのか、スクルド（？）は顔を青ざめる。しかし、本物のスクルドなら我はすぐに助けに行くところだろうが、我を騙そうとした偽物を助けてやるほどやさしくない。限りない時を共に過ごしてきた我からよく見れば、こいつは全然別人のように見える。

「『機皇神帝エクシニクル∞』で『キラー・トマト』を攻撃。インフィニティーディスペア・カノン！」

機皇神帝エクシニクル∞が砲撃をキラー・トマトをロックオンして撃ちだす。そして、砲撃は阻まれることなくキラー・トマトを消滅させた。

「キャアアアアアアアアア！」

スクルド（？）　ＬＰ８０００→２３００

カオスパレスの光が、スクルド（？）を包んだ。光が止むと、既に

そこには何も残っていなかった。カオスパレスのカードは調べるために持ち帰ろうと思っていたところだが、消え去ってしまっては仕方が無い。我は、カオスパレスの回収を諦め、ホテルに戻った。
当然、スクルドがやたらと心配していたらしく、帰った途端に駆け寄ってきた。朝一緒に居たスクルドは本物だったようだが、出かける寸前に来たスクルドからは偽物だったという。

第９３話　修学旅行６日目　襲い来る魔（後書き）

負けたら死ぬフィールド魔法です。遊戯王ならば『いつものこと』で済まされてしまいそうですが…。
ディスペアは自分を騙そうとした者を助けるほど優しくはないです。さすがにそこまでお人よしなわけではありません。

ちょっとお知らせ。次の話の前書きから、作者の日常を書こうと思います。前書きにやることがなくなってきてしまったので…書けない日は書けませんがね…。

第９４話　修学旅行7日目　闇の襲撃（前書き）

今日の作者の出来事。

スリーブが欲しくて、１ｋｍほど離れた店に行ったのですが、それはなかった。なので、ゴールドシリーズを1パック買いました。
最後から2番目に、ゴールドレアで水属性シンクロが出てきたので、トリシュか！と思ったら、グングニールでした。
で、さらにスリーブを求めその店から３ｋｍほど離れた店へ。ありましたよ、スリーブ。これを購入して帰りました。これで機皇デッキには困りません。
今日使った移動手段：自転車・歩き

第９４話　修学旅行７日目　闇の襲撃

～～～ドミノ町沖・上空～～～

今、目の前に居るのは２体の悪魔。それも、一般の悪魔の中では最上級クラスだ。

なぜこうなったのか…それは今朝、ドミノ町広場に向かって歩いていた時に、今我がいる場所に超新星爆発かと思うほどの青白い爆発が起こり、巨大な龍が現れたからだ。それの正体を知るためにここに来たが、既に龍はその場には存在せず、２体の最上級悪魔がいたのだ。１体はいかにも力押しタイプの悪魔。そしてもう１体は、研究者のような身なりの悪魔だ。

「先日の我々の土産は気に入って下さったかな？」

「あの偽物は、お前達のものだったのか」

くだらない土産だ。

「クックックック…なかなかいい出来だと思ったのですがね…さすがに本物と同じ言動は無理でしたか」

「一体どのくらいの時を共にいると思っている？あの程度の偽物で、我のライフを０にすることができるならば、我はとっくの昔に死んでいる」

「まあ、それもそうですね」

最高神の中でもトップと言われるだけはありますね…だからこそ、暗黒神より直々にこの龍を預かってきたわけですが…。

「フン…最高神よ、貴様1人でここまで来たのは失敗だったな。お前は、我ら2人を相手にすることになる」

「そんなことは見ればわかる。だから、お前達は我1人で叩き潰す」

別に現実に戦闘で戦ってもいいが、そうして葬った悪魔は必ず蘇る。そういう理由もあり、我ら神は悪魔をデュエルで葬る。

「フフフフ…後悔しますよ?」

「後悔するかどうかは、やってみればわかる」

「「「デュエル」」」

「では、先攻はわたしが頂きましょう。いいですよね?スレイトス」

「勝手にしろ」

「では…わたしは『召喚僧サモンプリースト』を召喚します。このカードが召喚に成功した場合、このカードは守備表示になります」

サモンプリーストは守りの態勢に入った。

「そして、手札の魔法カード1枚を捨て、効果発動。デッキから、レベル4のモンスター1体を特殊召喚します。『召喚僧サモンプリースト』を特殊召喚し、再び効果を発動。手札から魔法カードを1

枚墓地に送り『レスキュー・キャット』を特殊召喚」

「！！」

あのカードは…！

「『レスキュー・キャット』のモンスター効果により、このカードを墓地に送りデッキからレベル３以下の獣族モンスター２体を特殊召喚。わたしは２体の『Ｘ－セイバー　エアベルン』を特殊召喚。そして、墓地の２枚の『クロス・リターン』を発動。この魔法カードは、墓地に２枚あってこそ効果を発揮する。この２枚をゲームから除外して、カードを３枚ドロー」

「手札を３枚も補充しただと…」

やはりこいつらは今までとは違う…実力が半端な物ではない。

「さあ、わたしの全力をお見せしましょう。レベル４の『召喚僧サモン・プリースト』にレベル３の『Ｘ－セイバー　エアベルン』をチューニング。黒き爆撃機よ、最高神を焼き尽くすため起動せよ。『ダーク・ダイブ・ボンバー』！さらにもう１体の『ダーク・ダイブ・ボンバー』をシンクロ召喚」

「……」

２体のダーク・ダイブ・ボンバー…あのモンスターは、自分フィールド上のモンスターを生贄に捧げることで、そのレベル１につき２００ポイントのダメージを与える。その効果の使用回数制限は無い。

「バトルロイヤルルールによって、互いに１ターン目は攻撃できま

せん。カードを2枚伏せてターンエンド」

リース
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
ダーク・ダイブ・ボンバー×２　ＡＴＫ２６００
伏せカード×２

「俺のターン。手札より『名推理』発動。相手はレベルを宣言し、俺はデッキの上からめくり、最初に出た通常召喚可能なモンスターのレベルが当たっていれば、そのカードは墓地に送り、外れていれば特殊召喚する」

「我が宣言するのはレベル８だ」

一番多いレベルのモンスターだ。大抵は４または８を宣言するところだろう。

「……最初に出たモンスターはレベル４の『ブラックドラグーン』。攻撃表示で特殊召喚する」

ブラックドラグーン　ＡＴＫ２０００

「攻撃力２０００か」

「しかし、『ブラックドラグーン』は攻撃される際、攻撃力を１００ポイントダウンさせる。お前のターンでは実質攻撃力１９００だ」

デメリットが限りなく少ないな。その上、闇属性のドラゴン族、サ

ポートは豊富か。

「俺はレベル５の『インフィニティドラグーン』を特殊召喚する。このカードは、自分フィールド上に闇属性のドラゴン族が存在する時、特殊召喚できるのだ。カードを１枚伏せ、ターンエンド」

スレイトス
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
ブラックドラグーン　ＡＴＫ２０００
インフィニティドラグーン　ＡＴＫ２２００
伏せカード×１

「我のターン！」

リースのフィールドには２体のダーク・ダイブ・ボンバー。そして、スレイトスのフィールドには２体の闇属性の効果不明のドラゴン族。しかし、ダーク・ダイブ・ボンバーを先に潰さなければ、確実にやられる。

「我は『ＢＦ－疾風のゲイル』を召喚する！このカードの効果により、『ダーク・ダイブ・ボンバー』１体の攻撃力・守備力を半分にする」

ダーク・ダイブ・ボンバー　ＡＴＫ２６００→１３００

「さらに、自分フィールド上に『ＢＦ－黒槍のブラスト』以外の『ＢＦ』が存在することにより、『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚する」

「かかりましたね。わたしはトラップカード『奈落の落とし穴』を発動。相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時、そのモンスターを破壊してゲームから除外します」

ブラストは、フィールド上に出現した瞬間に重力に潰され奈落の底に落ちた。

「カードを1枚伏せ、我はターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１６０００
手札×３
フィールド
ＢＦ－疾風のゲイル　ＡＴＫ１３００
伏せカード×１

「では、わたしのターンですね。わたしは魔法カード『ハーピィの羽根帚』を発動。相手フィールドの魔法・罠カードをすべて破壊する」

「簡単には行かないぞ。トラップ発動『ゴッドバードアタック』。『ＢＦ－疾風のゲイル』を生贄に2体の『ダーク・ダイブ・ボンバー』を破壊する」

禁止カードか。さすがに、生温くは無いな。

「ならばわたしはモンスターを伏せ、カードを4枚伏せます。これでターンエンド」

リース
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×４

「俺のターン！『ブラックドラグーン』と『インフィニティドラグーン』でダイレクトアタックだ！」

ディスペア　ＬＰ１６０００→１１８００

「カードを４枚伏せ、ターンエンド」

スレイトス
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
ブラックドラグーン　ＡＴＫ２０００
インフィニティドラグーン　ＡＴＫ２２００
伏せカード×５

「我のターン」

奴らは全ての手札を伏せ、あるいは召喚した。ならば、リースのフィールドのセットモンスター…あれはメタモルポット。

「カードを１枚伏せる。そして、『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚。このカードの召喚に成功した時、墓地からレベル４以下の『ＢＦ』１体を守備表示で特殊召喚できる。我は『ＢＦ－疾風のゲイル』

を守備表示で特殊召喚する。そして、手札から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚する。さあ行くぞ！3体のモンスターと、我のライフ半分を生贄に捧げる！」

ディスペア　ＬＰ１１８００→５９００

「光臨せよ！『究極神オベリスク』！」

青い光が究極神オベリスクを形作り、具現化した。それと同時に、希望の龍とは比べ物にならないほどの衝撃が発生する。

「きましたね…これが『究極神』…恐ろしい程の強大なパワーです」

だからこそ、前世でアレを喰らった暗黒神が最も危険視している神ですが…。

「『究極神オベリスク』で裏側表示のモンスターを攻撃！アルティメット・クラッシャー！」

オベリスクが裏側表示のモンスターを殴りつけた。メタモルポットは途端に砕け散ってしまった。

「『メタモルポット』の効果により、互いに手札を全て捨て、５枚ドローします」

手札は3人とも無い。よって、各5枚ドローした。

「ターンエンド」

ディスペア

ＬＰ５９００
手札×５
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
伏せカード×１

「わたしのターン」

さて…最高神のフィールドには究極神の１体…そして、わたしのフィールドには伏せカードが４枚と、手札が６枚。究極神を倒す手段はありません。

「モンスターを１体伏せます。これでターンエンド」

リース
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×４

「俺のターン」

リースは今は動けんか…仕方が無い、できれば俺とリースの力だけで勝ちたかったが、暗黒神のカードを使うか。

「俺はレベル３のチューナーモンスター『ダークノヴァドラゴン』を召喚」

「チューナー…」

奴の場のレベル合計は１２…来るか。

「レベル４の『インフィニティドラグーン』とレベル５の『ブラックドラグーン』に、レベル３の『ダークノヴァドラゴン』をチューニング！シンクロ召喚！暗黒神の絶望の力！今ここに具現化せよ！『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』！」

空が黒く染まり、黒い雷が降り注ぐ。黒い雲の上から、全長３０ｋｍはある漆黒の龍が現れた。

ダークネス・ディスペア・ドラグーン　ＡＴＫ４０００

「『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』は魔法・罠・モンスター効果を受ける時、代わりに俺の墓地のカードを１枚除外できる。この効果はスペルスピード４として扱うのだ。さらに、１ターンに１度、俺の墓地のモンスター１体をデッキに戻すことで、『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』はこのターン、ダイレクトアタックができる！そして『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』は戦闘では破壊されない！」

「バカな！」

攻撃力４０００で効果を受けず、戦闘では破壊されない、その上ダイレクトアタック可能だと！？

「俺は墓地から『ブラックドラグーン』をデッキに戻し『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』でディスペア、貴様にダイレクトアタックだ！インフィニティ・ダークネス・ブラスター！」

漆黒の龍は、無数の黒い炎の球を飛ばしてくる。

「クッ…」

直撃を受ければさすがにまずいので、回避する。

ディスペア　ＬＰ５９００→１９００

「俺はこれでターンエンド」

スレイトス
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
ダークネス・ディスペア・ドラグーン　ＡＴＫ４０００
伏せカード×５

「我のターン！まずは『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚し、墓地から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を復活！さらに魔法カード『ダーク・バースト』の効果により墓地から『ＢＦ－疾風のゲイル』を手札に加え、自身の効果によって特殊召喚する。そして、３体のモンスターと我がライフ半分を生贄に光臨せよ、『究極神オシリス』！」

「きましたか…第２の神が」

「究極神オシリスの攻撃力・守備力は手札×２０００ポイントの数値になる」

究極神オシリス　ＡＴＫＸ０００→６０００

「『究極神オベリスク』で『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』を攻撃！アルティメット・クラッシャー！」

「ぬあああああああああ！」

スレイトス　ＬＰ８０００→４０００

「続いて、『究極神オシリス』で『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』を攻撃。アルティメット・サンダーフォース！」

「むううううううう！」

スレイトス　ＬＰ４０００→２０００

「カードを１枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ１９００
手札×２
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ４０００
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
伏せカード×１

「わたしのターン」

我々の切り札が出た今、最高神のライフは既に１９００ポイント。
そして、次のスレイトスのターンで確実に最高神のライフは０になる。それならば…

「魔法カード『天の救済』。わたしはカードを2枚ドローし、相手はカードを1枚ドローします。エンドフェイズに1枚捨ててターンエンド」

リースは2枚、我は1枚ドローした。

リース
ＬＰ８０００
手札×６
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×４

「俺のターン！」

「トラップ発動『異次元の隙間』。我は闇属性を宣言しスレイトスの墓地から2体のモンスターを除外する」

「バカな！？最高神のデッキにはあのようなカードは入っていなかったはずだぞ！？」

「簡単なことだ。先程、カードを1枚落としてしまいデッキが３９枚だったから入れただけの事」

「運の良い奴め…『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』を守備表示に変更。ターンエンド」

スレイトス
ＬＰ２０００
手札×６

フィールド
ダークネス・ディスペア・ドラグーン　ＤＥＦ４０００
伏せカード×５

「我のターン…『貪欲な壺』を発動。墓地の『ＢＦ－極北のブリザード』２体『ＢＦ－黒槍のブラスト』２体、『ＢＦ－暁のシロッコ』をデッキに戻し、２枚ドローする。
さあ行くぞ！その程度の絶望の龍など、蹴散らしてくれる！
まずは『ブラック・ホール』を発動し、フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

「俺は『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』の効果により、墓地から１枚除外し効果を受けない」

よって、破壊されたのは究極神オベリスクとリースの裏側表示モンスターだ。

「我は『究極神オシリス』を生贄に捧げ『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚！」

「究極神を生贄にしてまでレベル５のモンスターを召喚しましたか…何と無駄な」

「フン、無駄かどうかはすぐにわかる。出でよ『ＢＦ－黒槍のブラスト』『ＢＦ－疾風のゲイル』！『ＢＦ－暁のシロッコ』の効果により、フィールド上の全ての『ＢＦ』の攻撃力を『ＢＦ－黒槍のブラスト』に加える」

ＢＦ－黒槍のブラスト　ＡＴＫ１７００→５０００

「『ＢＦ－黒槍のブラスト』で『ダークネス・ディスペア・ドラグーン』を攻撃！」

究極神を2体ともフィールドから消したのは、ブラストで攻撃するためだ。

「だが、この攻撃が通ろうとも、俺のライフはまだ残る！どちらにしろ次のターンで貴様のライフは０になるのだぞ！」

「ハハハハハハハ！手札より『ＢＦ－月影のカルート』を墓地へ送り、効果発動！」

ＢＦ－黒槍のブラスト　ＡＴＫ５０００→６４００

「ば…かな…暗黒神よ、あなたの命令、果たせずに終わります…申し訳ございません」

「スレイトス！スレイトォォォス！」

スレイトス　ＬＰ２０００→－４００

スレイトスと、ダークネス・ディスペア・ドラグーンは黒い塵と化して消えた。

「よくも…わたしの相棒を」

「襲撃してきたのはお前たちだ。そして、戦場で悲しみに浸っていればやられる。悪魔よ、これが絶望だ。お前達が知ることなく、人間達や我ら神々に嘲笑いながら与えてきた感情。ターンエンド。このエンドフェイズ、戦闘以外でフィールドを離れた我が究極神は、

我のライフ半分を生贄としてフィールドに戻る」

ディスペア
ＬＰ４７５
手札×０
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
究極神オシリス　ＤＥＦ０
ＢＦ－暁のシロッコ　ＡＴＫ２０００
ＢＦ－黒槍のブラスト　ＡＴＫ１７００
ＢＦ－疾風のゲイル　ＡＴＫ１３００

「わたしのターン…スタンバイフェイズに墓地から『キラー・スネーク』を手札に加える。スレイトス…わたしも今、君のもとへ行こう。魔法カード『最期の足掻き』を発動…このカードは、わたしの命を完全に消滅させる代わりに、特別な力が宿った相手のカードすべてを消し去る。わたしは暗黒神の命が果たせないのならば、せめてその障害になりうるものを取り除こう。わたしの主君のためにも。先に逝ったわたしの友、スレイトスのためにも」

「我の…ＢＦが…！！」

カードとリースが青い光に包まれ、昇華する。最後には、我の手に３枚のカードが握られていた。

「究極神を…消滅させることができませんでしたか…無念…くっ」

自らの命を燃やしつくし、暗黒神に仕えた…だと？

「リース、スレイトス。その名を、覚えておこう」

これはせめてもの手向け。最期まで主君に仕えた悪魔への。
我は、黙ってその場を立ち去った。

第９４話　修学旅行７日目　闇の襲撃（後書き）

悪魔にも主君に使えるという絶対の誓いを持ったやつがいます。ごく少数ですが。
たまにはこういった奴にも出てきてもらわないと、様々な思いなどが書きにくいので出てきてもらいました。禁止カードを使っていましたが。
そして、ディスペアのＢＦは本編で書かれたとおり道連れになりました。かなり先に、以前書いたディスペアの最後の固有デッキを覚醒させようと思います。それまでは機皇と銀河星龍が主体です。

第９５話　記憶とデッキ（前書き）

今回は短いうえに、デュエルもありません。でも、それなりに重要な回です。

今日の作者の出来事

築地と銀座と池袋を歩きました。特に変わったことはなかったです。

※作者の家は埼玉県です。ちなみに、１人で歩いてはいません。

第９５話　記憶とデッキ

～～～ディスペア・夢の中～～～

ここは以前見た夢よりも少し前の時間らしい。巨大な闇が我と同じ姿をしたものに、闇の波動を放つ。しかし、それは巨大な黒い羽根を持つ龍と、守護のオーラを放つ龍に阻まれた。

「フン、７つの希望など、我が力で粉砕してやろう！」

闇は再び砲撃を放つが、黄金の龍と深紅色の龍がブレス攻撃を放ち相殺させる。その龍を従えているのは、今の最高神たちとノルン三姉妹だ。

「まだ我の力に屈しないか、最高神アルアス」

「貴様に屈するぐらいなら、わたしは自滅する方を選ぶ」

「無駄なことを。消えろ！」

闇は巨大な砲撃をルシアスと呼ばれた我と同じ姿をした者に撃つ。アルアスは、それを大剣ではじいた。

「うわあああああああ！？」

が、それは深紅色の龍に当たり、それを従えていた神も同時に消えた。

「バカな…」

「フハハハハハ、希望の力は7つで1つ、1つでも散った今、そんなものは何の役にも立つことは無い！ハァアアァァ！」

アルアスに闇が向かう。アルアスは防御壁を張ったが、攻撃を防ぎきれず拡散した。そしてその攻撃は希望の龍に激突し、従えていた者も含めて消滅した。

その後、アルアスはついに膝をつく。

「ククククク、これで全ての神はお前を残して消えた。お前が殺したのだ！」

「わたしは…わたしが…？」

「そうだ。これでお前はたったの1人。アルアス、貴様は人間よりも多くの感情を持ち、どのような神よりも人間に近く、神に近く、そして悪魔にも近い。多くの感情を持つ貴様には、一体今どれほどの悲しみが貴様を襲っているか分かるだろう。感情を持ってはいるが、悲しみを感じるが、涙は一切流れない。多くの感情を持つからこそ貴様は膝を折ったのだ。それでも我と戦うと言うのか？」

ここで、白い光が視界を包み、目が覚めてしまった。

「ク…ここまでか」

一体これは何を意味しているというのだ…？とりあえず起きよう。

～～～ホテル～～～

「今日は我は最後の固有デッキの封印を解きに行く」

「え!?ディスペア、固有デッキあったの!?」

僕は全く聞いてない。

「ある。我が最後の固有デッキは、最高神界の極地に封印されている」

「神々の世界のランク付けでＥＸランクのあの『死の世界』に!?」

「そう。あの世界は迷いがあればすぐにとらわれ、囚われればそれが最期だ」

「いくらデッキのためでもそんなところに行く必要なんて…」

「スクルド、我は今日まで迷い続けて生きてきたことは無い。いかなる時でも自らの意思でここまで来た。ならば、今回も同じだ」

「…私も行く。ディスペア１人でそんなところに行って帰って来なくなったら、私は…」

「……迷いは捨てろ。迷いを捨てなければ、案内することはできない」

スクルドはしばらく考えた後、うなずいた。それを見て、我は神界への扉を開いた。

～～～最高神界・ディスペア城～～～

「さあ、いくぞ」

我の城の裏門を開け、極地に足を踏み入れる。ここまできたら、もう引き返すことはできない。

「我から離れるな。一度でも離れれば、二度と合流することはできない。さらに途中で、様々な幻想がお前を惑わしに来る。惑えば途端に死を迎える。これを覚えておけ」

～～～最高神界・極地～～～

猛吹雪の中を進む。すると、目の前に突然家が出現した。煙突からは湯気が噴き出し、家の中はものすごく暖かそうだ。

「スクルド、入れば終わりだ。このまま進むぞ」

「うん…」

スクルドはかなり眠そうだ。

「寝たいのなら眠ればいい。その間は我が運ぼう」

「ううん…大丈夫」

猛吹雪は勢いを止まることを知らずに吹き荒れる。さらに、無数の幻想が我らを誘惑する。

時には、ウルズやヴェルザンディーの幻想も出現し、スクルドを連れて行こうとする。それをインフィニティ・アイを使って追い払う。

暫く経つと、スクルドはついに眠ってしまい、我が運ぶことになった。

さらに吹雪の中を進む。次に出現した幻想は、幼少期のスクルドだ。

「もう疲れたでしょ?もう頑張らなくてもいいんだよ…今まで、必死に頑張ってきたんだから少しぐらい休んだ方がいいよ」

その幻想に我は答える。

「ここで休めば…最高神界はどうなる?人間達はどうなる?我に課せられた限りない時を生き続ける使命、それが果されることは無い。しかし、信じられる者がいる限り、我はその使命を果たし続けることはできる。我は信じる者のために今ここで立ち止まるわけにはいかない」

そう言うと、幻想は満足したように蜃気楼となって消えた。

次はヘイムダルだ。

「よう、ディスペア。確かに生き続けることがお前の使命かもしれないな。でも、見ず知らずの人間や神のために、お前が犠牲になることなんてないだろ?犠牲になるのをやめて、休めよ。俺が代わってやるぜ?」

「そうはいかん…我は犠牲になっているつもりはない。我は、我の信じた道を進んでいる。それだけのことだ」

ヘイムダルも蜃気楼となって消える。

もうすぐ、この第1の空間を抜ける。しかし、そこで再び何かが現れる。それは、我自身だった。

「貴様は自分を大切にしていない。スクルドが貴様をどれほど心配しているか分かっているのか？貴様が無茶をすればするほど、周りの神は身を削る思いで待っているのだぞ？」

「黙れ、そんなことはとっくの昔に分かりきっていることだ。そのうえで、我の仲間達は我を信じてくれているのだ」

これを言い終わり、進むと吹雪は止んだ。目の前には巨大な洞窟が出現した。我は迷うことなくその洞窟に入る。この洞窟は、自分の昔の記憶を引き出して誘惑してくる場所だ。かつてここに来た上級神は、自らの過去にとらわれ消滅してしまった。

洞窟の中に入ると、早速目の前が真っ暗になる。そして、常人ならば戻りたい、行きたいと思うほど懐かしい記憶の映像が流れる。

「試練にもならんな」

しかし、我は迷うことなどない。腕の中には、自分が最も大切に想っている者が眠っている。その暖かい体温を感じている限り、迷うことなどありはしない。そして、ついに洞窟を抜ける。

目の前に広がるのは、一面の湖。底は見えない。

「ここ…は？」

スクルドも丁度よく目が覚めたようだ。

「我が最後の固有デッキが封印された、神の湖だ。偽りのない心を持つ者のみが入ることを許される」

その試練は…目の前に広がる透明な道だ。

「行くぞ」

「え？この足場…大丈夫なの？」

「スクルド、言ったはずだ。ここを通ることができるのは偽りなき心。偽りがあれば、この道を疑い引き返す」

スクルドは意味を理解したようだ。

２人で道を進み、湖中央の島につく。すると島は沈み、透明な壁に包まれて沈む。この時間は、限りなく長く感じられた。

…島は止まる。目の前にあるのは、巨大な扉だ。そして、その前には３枚分のカードのと、謎の形をした台座。その台座に３枚の究極神をはめ込み、ゴッドモーメントを展開し、台座にかざす。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

扉は重い音を立てて開き、中から光があふれだす。目の前にあるのは、３７枚のカードの束。

「ついにこのデッキを使う時が来たか」

我が誕生してすぐ、この固有デッキはこの湖に封印された。それを使うまいとして今まで生きてきたが…仕方が無い。

我はデッキを手に取る。次の瞬間、周りは強力な閃光に包まれた――――。

～～～北欧の三神サイド～～～

「何だ!?」

僕達はいきなり光に包まれ、気絶した。

～～～ディスペア・スクルドサイド～～～

我らは閃光に包まれたのち、我がいつも見ている夢の空間に集められていた。そこには、今は我らのそばにはいない北欧の三神の姿もあった。

そして、我以外の者は今まで我が見た映像を見て。我の記憶の中に何かが流れ込んできた。それは、最近見ていた夢とそれの真実。しかし、今この記憶を語るわけにはいかないと、我が意識は警告する。その後、再び光に包まれ、気づいた時にはデッキを持っていた。

「い、今のは何?私達が真っ黒な何かに消されて…最後にディスペアがそれと戦ってたけど…」

「……」

「ねえ、ディスペア！」

スクルドは、いつもに比べて強気で言う。

「……あれは、我らの前世の記憶だ。我の前世の一人称は『わたし』、名前は『アルアス』だ。つまり、最後に暗黒神と戦ったのは我１人、お前達は…我が殺してしまった。我が…お前達にどう詫びればいいのか分からない」

警告を無視して、スクルドにそれだけを伝える。残念ながら、思い出したのはそれだけで、それ以外の事は何もわからない。いや、それ以前の記憶は、封印されてすらいなかったようだ。前世の我は最後の戦いだけを記憶の底に封印し、最後の固有デッキに触れた時に全てを思い出すようにしたらしい。

「…いいよ」

スクルドはただ一言、言った。

「確かに、戦いの中で私達は死んじゃったけど…今はこうして、一緒に生きてる。なら、いいじゃない」

「我を許すのか？」

「元から、許すも許さないもないよ。ディスペアのせいじゃないしね。この問題はここでおしまい。さあ、帰ってゆっくり休もう！」

スクルドはいつものように明るく、記憶の事など気にも留めていなかったようだ。

その後は、特殊な結界から最高神界の我の城まで移動し、さらに神の扉を開いてホテルに戻った。

オーディン達や、ウルズとヴェルザンディーからも映像について聞かれた。偽りなく話すと、気にも留めていないようで今まで通りの日常に戻った。

封印を解いたデッキに究極神を入れる。しかし、今はデッキは何も示さなかった。暫くすれば、使えるようになるらしい。

第９５話　記憶とデッキ（後書き）

ついに封印解除です。幾つかの遊戯王小説でも、主に敵役の方々が使っているデッキです。分かる人は分かるかも…デッキ公開前に内容が分かった方は、メッセージとして送ってください。正解でしたら、スクルドを好き勝手に使っていただいて結構です（笑）。デッキの内容を詳しく書く必要はありません。デッキの主力モンスターか、デッキの名前（図書館エクゾやダムドビート）でＯＫです。デッキ内容をいつ公開するかは決まっていません。期限は、そのデッキでデュエルする時です。

第９６話　修学旅行８日目（前書き）

今日の作者の出来事

学校で一日中腹が痛かったです…今も痛いです。多分、寒いからですね…。

あと、モリンフェンビート＆シンクロにブラック・ホールとゾンビキャリアを加えました。

それと、緑茶と紅茶とコーヒーがおいしいです。

第９６話　修学旅行８日目

～～～ホテル・ディスペアサイド～～～

あれ以来、夢は見なくなった。というよりも、眠ることが殆どなくなった。眠らなくても元から疲れることは稀にしか無い上に、寝ている間の時間が無駄だからだ。そんな無駄な時間を過ごしている間があるなら、何か別の事をする。

「ねえ、ディスペア」

「どうした？」

「修学旅行って、どのくらい続くの？」

確かにそうだな。原作では２，３日で終わったはずだが？

「予定では、２，３週間なノーネ。例年なら２，３日なのでスーノ。しかーし、今回は海馬コーポレーションが莫大な予算を用意してくれたノーネ」

海馬…恐らく青眼の進化でぶっ飛んだのだな。Ｄ－ホイールからヘルメットまでブルーアイズモデルだった時は、さすがにどうかと思った。

その後はしばらく雑談を続け、チェックアウトの時間が来たところ

で、いつも通りスクルドを連れて外に出る。

～～～ドミノ町・川～～～

ここはかつて、遊戯が初めて神と対峙した場所だ。レッドの連中のテントがあるのは納得がいく。

「よお、ディスペアじゃねえか」

オシリスレッドで話しかけてくるのは1人しかいない。

「十代か」

物怖じしない十代のみ。

「俺も一緒に言っていいか?翔達もどっかに行っちまってよ」

「…勝手にしろ」

十代に丸藤と剣山が付いていないのは珍しいな。
断る理由も特にないので、十代を連れていく。そして、商店街に入ろうとしたその時…

「ディスペアだな?」

目の前に現れたのは黒服とサングラスの男2人だ。

「お前が最強のカード『究極神』を持っているのは我々の調べで分

かっている。そのカードを言い値で買うと、わが社の社長の伝言を伝えに来た」

こういうタイプの奴は初めてだな。周りから見れば、黒服と背の高い男の会話。怪しがられるに決まっている。なので、周りには今、誰もいない。少し先を見れば、こちらを見ながらヒソヒソ話している主婦連中がいる。

「社長に伝えろ、売る気は無いと」

次の瞬間、1発の銃弾が向かってくる。銃弾程度のスピードと威力では話にならない。片手でつかみ、投げ返して銃口を詰まらせる。

「我々は社長にどんな手段を使っても手に入れろと言われている」

今度はミサイルランチャーを取り出してきた。商店街の中でそんなものを使うな。

「撃ちたいのならば撃つがいい」

その言葉を聞いた瞬間、ミサイルが飛んでくる。黒服は勝ち誇ったような顔をしていたが…

「やはり、話にならんな」

真っ二つに斬る。爆発する前に、2つともつかんで遠くに投げる。何もせずに喰らってもよかったが、十代が巻き込まれたら話にならないので投げ飛ばす。

「おい、お前ら！さっきから聞いてりゃ人のカードを勝手に持って

くだと！？」

十代が黒服に向かって言う。

「勝手ではない、言い値で買うと言っている」

「同じ事じゃねえか！ディスペアは断るっつってんのに、勝手に持って行こうとしてただろ！」

十代が今にも突っ込みそうだったので、手で制す。

「黒服、貴様らデッキは持っているな？」

「社長より預かっている」

ディスペアは好都合と思い、ゴッドモーメントを展開する。それに反応し、黒服もデュエルディスクを展開する。この世界ではこれが常識だから。ディスペアは黒服２人を１人で倒す気でいる。対して、黒服２人は勝つのが当たり前という顔をしている。

「「「デュエル」」」

「先攻は我がもらう」

初手はあまり良くない。しかし、何もできないわけではない。

「『極星獣タングリスニ』召喚。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００

手札×５
フィールド
極星獣タングリスニ　ＡＴＫ１２００

「わたしのターン」

黒服Ａ（仮）はデッキに手を伸ばした。そして、ドローしたカードを見ると口の端を吊り上げた。黒服にとっては、良いカードだったのだろう。

「わたしはチューナーモンスター『ダーク・リゾネーター』を召喚」

「チューナーだと！」

バカな…この世界でシンクロ召喚できるのは、高町達３人と、我らのみのはず…。
そのはずだが、目の前の黒服は現にチューナーモンスターを使用している…。

「さらに、手札から１枚捨て『ＴＨＥトリッキー』を特殊召喚」

レベルの合計は８、強力なシンクロモンスターが多数いる。

「レベル５の『ＴＨＥトリッキー』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』をチューニング。シンクロ召喚！現れろ『邪神ヴェントゥス』！」

現れたのは、掌に目が付いており、全身は全体的に灰色で血のように赤い髪をしており、目の部分は包帯で隠れている、闇の障気を散らす人型のモンスターだ。

邪神ヴェントゥス　ＡＴＫ２８００

「『邪神ヴェントゥス』の効果発動。カード名を一つ宣言し、相手のデッキと手札を確認し、そのカードが相手の手札・デッキにあれば墓地に送る。
わたしは『極星天ヴァルキュリア』を宣言」

我のデッキが１枚１枚空中を飛び、１枚だけ抜かれて残りは再びデッキセットに戻った。詳しく言うと、斎王が使用したカードサーチでカードが空中を飛んでいた時のような感じだ。

「フン…」

このデッキにはヴァルキュリアは３枚積んである。１枚ぐらい墓地に落ちたところで、なんら問題は無い。それよりも気になるのはあのカード…記憶の中には一切無いカードだが…あれほどの邪悪な気を放つカードならば、オーディンが見逃すはずは無いのだが？

「さらに『邪神ヴェントゥス』の効果発動。１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力を０にし、その分このカードの攻撃力をアップする。ただし、２回目以降に使う場合は前にアップしていた数値はリセットされる。わたしは『極星獣タングリスニ』を選択」

邪神ヴェントゥス　ＡＴＫ２８００→４０００
極星獣タングリスニ　ＡＴＫ１２００→０

邪神ヴェントゥスは黒いエネルギーをタングリスニに放ち、それに当たったタングリスニは衰弱していき、その分ヴェントゥスの瘴気が強くなる。

「ターンエンド」

黒服Ａ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
邪神ヴェントゥス　ＡＴＫ４０００

「わたしのターン」

黒服Ｂは、ドローの前に手札を1枚墓地に送った。

「手札から『邪神の虚像』を発動。ドローの前にこのカードを墓地に送ることで、ドロー枚数を2倍にする。よって、ドロー枚数は2枚」

ドロー増強カードか…あのカードもやはり記憶にない。

「わたしは永続魔法『邪神障壁』を発動。フィールド上に『邪神』と名のつくシンクロモンスターがいる限り、相手は攻撃できない」

黒服2人の前にバリアが現れ、常に黒い瘴気を放ち続けている。

「ターンエンド」

黒服Ｂ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド

邪神障壁

「我のターン」

邪神ヴェントゥスは攻撃力４０００、それに対しタングリスニは０…１ポイントでもあれば自爆特攻できるものを…

「我は『極星獣タングリスニ』を守備表示に変更する。さらに、モンスター１体をセットし、カードを１枚伏せる。ターンエンド」

だが、この伏せカードで邪神ヴェントゥスを葬ることはできる…！

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
極星獣タングリスニ　ＤＥＦ８００
セットモンスター×１
伏せカード×１

「わたしのターン」

黒服Ａは余裕の表情でカードを引く。勝利は決まっているとでも言いたいかのような顔だ。

「『邪神ヴェントゥス』で伏せモンスターを攻撃！邪神の断罪！」

ヴェントゥスが掌の眼から、紫色の光線を撃ってくる。

「トラップカードオープン『聖なるバリア－ミラーフォース－』。

『邪神ヴェントゥス』を破壊する」

ヴェントゥスの光線が、ミラーフォースに反射されてヴェントゥス自身に向かう。
これでヴェントゥスを葬り、次のターン、星界の神の1体オーディンを召喚すれば、黒服Aを倒すことができる。そして、今のところ邪神障壁しか使っていないBはその次のターンでどうとでもなる。

「『邪神障壁』効果発動。『邪神』と名のつくシンクロモンスターが効果でフィールドを離れる場合、代わりにこのカードを墓地に送り、バトルフェイズを終了する。
そして、『邪神ヴェントゥス』効果発動。『極星獣タングニョースト』を宣言」

デッキのタングニョーストが墓地に送られた。

「ターンエンド」

黒服A
LP4000
手札×4
フィールド
邪神ヴェントゥス　ATK4000

「わたしのターン。わたしは『邪兵リヴィンズ』を召喚」

黒い槍を持ち、翼をはやした人型の魔物が飛翔した。

「行け『邪兵リヴィンズ』！セットモンスターを攻撃」

「戦闘破壊された『クリッター』の効果発動。フィールドから墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを手札に加える。
我は『極星天ヴァルキュリア』を手札に加える」

デッキから自動で極星天ヴァルキュリアが出てくる。
それを手に取り、手札に加えた。

「ターンエンド」

黒服Ｂ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
邪兵リヴィンズ　ＡＴＫ１７００

「我のターン、そろそろ行くぞ！我は『極星天ヴァルキュリア』を召喚！
『極星天ヴァルキュリア』の召喚に成功した時、手札を2枚墓地に送り、我のフィールド上に『エインヘリアル・トークン』２体を守備表示で特殊召喚する。手札より『極星宝レーヴァテイン』と『ハリケーン』を捨て、『エインヘリアル・トークン』を特殊召喚！」

久しぶりだな…星界の神を召喚するのは。

「レベル４の『エインヘリアル・トークン』２体と、レベル２の『極星天ヴァルキュリア』をチューニング」

ヴァルキュリアが２つの輪を描き、エインヘリアル・トークンが輪の中に入り込み輪が高速回転する。

「北辰の空にありて、全知全能を司る王よ…今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚、天地神明を統べよ！最高神『極神聖帝オーディン』！！」

地震が起こり、遥か遠い大地の底から、巨大な槍を持った、山に匹敵する身長の人型の神が現れた。

「『極神聖帝オーディン』で『邪神ヴェントゥス』を攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

「わたしは『邪兵リヴィンズ』の効果発動。『邪神』と名のつくモンスターがフィールドを離れる場合、代わりにこのカードを除外できる。よって、『邪神ヴェントゥス』の破壊を無効にして、このカードを除外する」

オーディンの槍は次元の穴に入り込み、代わりに邪兵リヴィンズに突き刺さった。その後、ヴェントゥスの反撃で破壊された。

こいつら…強い。この邪神の力もあるだろうが、素でもある程度の強さは兼ね備えている。

「エンドフェイズに、破壊された『極神聖帝オーディン』は蘇る」

天から黄色い光と共に、神が降臨した。

「そして、この効果でオーディンが復活した時、１枚ドロー」

ドローしたカードを、魔法・罠ゾーンの下にある溝…手札置きに魔法・罠カードをセットするのと同じようにセットする。

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
極神聖帝オーディン　ＤＥＦ３５００
極星獣タングリスニ　ＤＥＦ８００

「わたしのターン。『邪神ヴェントゥス』の効果発動。『極神聖帝オーディン』を選択し、攻撃力を０にする。そして『邪神ヴェントゥス』の攻撃力を４０００ポイントアップ」

邪神ヴェントゥス　ＡＴＫ４０００→２８００→６８００
極神聖帝オーディン　ＡＴＫ４０００→０

「行け！『邪神ヴェントゥス』よ、神を葬り去れ！邪神の断罪！」

極神聖帝オーディンは、闇の砲撃に耐えきれずに消えた。

「そして、『邪神ヴェントゥス』の効果により『オーディンの知識』を宣言」

デッキからカードが１枚墓地に送られた。

「ターンエンド」

「エンドフェイズに『極神聖帝オーディン』が復活。その効果によって１枚ドロー」

黒服Ａ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
邪神ヴェントゥス　ＡＴＫ６８００

「わたしのターン」

黒服Ｂのドローしたカードから、闇の瘴気が発生した。

「ククククク…わたしは魔法カード『邪神幻想』を発動。フィールド上の『邪神』と名のつくモンスター１体を選択し、そのモンスターと同じ名前と、４つ低いレベルを持つトークン１体を特殊召喚する。現れろ『邪神ヴェントゥス』」

邪神ヴェントゥス　ＡＴＫ０　レベル８→４

「自分フィールド上に『邪神』と名のつくモンスターが存在する場合、手札からこのカードを特殊召喚できる。現れろ『ＤＴ－カオス・シェルス』を特殊召喚」

レベル…１２！

「レベル４の『邪神ヴェントゥス』にレベル１２の『ＤＴ－カオス・シェルス』をダークチューニング！深淵の闇より、魔の神が現れる。光なき世界へ！ダークシンクロ『邪神ネクロス』！」

街中から闇のエネルギーが集まり、それが収束していく。そして、黒い閃光が放たれ止むと、上空に巨大な闇の龍に乗り、邪悪なオー

ラを放っている剣を持ち、真っ黒な鎧と兜を装備して、怪しげな笑みを浮かべた口より上の顔が見えない戦士がいた。

邪神ネクロス　ＡＴＫ４０００

「あのモンスターは!?」

「私も見たこと無い…」

ディスペア…戦うなら気をつけて!私の意思が必死に訴えてくる…『逃げろ』って。

「何だ…?この感じは…」

あのモンスターが現れてから、急に力が入らなくなった。

「どうだ?我が社が開発した、邪神の意思を取り込んだカードの力は?」

邪神の意思をそのまま取り込んだ…?まさか!

「そう、このカードは生きている。そして、このカードによってとどめを刺された者はこの邪神の餌食となる」

「人間が…そんなカードを一体どこで…?どのような目的で使用している?」

この時代にはまだ、ダークシンクロモンスター以前にシンクロモンスターすら存在していないはずだ。

「ある時突然、我々が独自にデザインしていた特別な邪神のカードに、次元の裂け目より現れた闇が入り込んだ。我々はこのカードを処分しようと試みたが、いかなる手段を用いても、処分することはできなかった。しかし、究極神ならば！その力を邪神に取り込ませることでオーバーヒートさせて消滅させることができる。この結果は既に、成功確率９０％の数値を現している」

「クッ…」

つまり、邪神を処分するために究極神を利用しようとしているだと？

「お喋りはここまでだ。『邪神ネクロス』で『極星獣タングリスニ』を攻撃。『邪神ネクロス』が守備表示モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えていれば貫通ダメージを与える」

龍から飛び降りて、邪神の本体の戦士がタングリスニを斬りつけた。

「ぐあああ！」

ディスペア　ＬＰ４０００→８００

「くっ…『極星獣タングリスニ』は戦闘で破壊された時、『極星獣トークン』２体をフィールドに残す」

「ターンエンド」

黒服Ｂ
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
邪神ネクロス　ＡＴＫ４０００

「我のターン！」

邪神ネクロスの攻撃力は４０００…オーディンも４０００…だが、ネクロスにも何らかの効果はあるはず…ならば！

「望み通り、邪神を消してやろう！手札より『北欧の守護者』を墓地に送り、効果発動！このターン『邪神ネクロス』の効果を無効にする！」

「！！」

「『極神聖帝オーディン』で『邪神ネクロス』を攻撃！ダメージステップ時、『極神霊』を手札から墓地に送り、攻撃力４０００ポイントアップする！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

極神聖帝オーディン　ＡＴＫ４０００→８０００

「うわあああああ！」

黒服Ｂ　ＬＰ４０００→０

邪神のカードは、黒服Ｂが敗北した瞬間、燃え尽きて消えた。
しかし…

「何だ？」

黒服までもが動揺している。消えたはずの邪神ネクロスの闇のエネルギーが、邪神ヴェントゥスに乗り移ったのだ。

邪神ヴェントゥス　ＡＴＫ６８００→１０８００

「攻撃力…１０８００」

「デュ、デュエルディスクが手から離れない…！助けてくれぇぇ！」

邪神に縛り付けられているのか！早くしなければ邪神が人間に影響を及ぼす！

「手札から速攻魔法『北欧天』を発動！このターン攻撃を行った神属性のシンクロモンスター１体を選択し、選択したモンスターはこのターン、もう１度攻撃できる！

『極神聖帝オーディン』で『邪神ヴェントゥス』を攻撃！ダメージステップにもう１枚の『極神霊』を墓地に送り、攻撃力を１０８００ポイントアップする！」

極神聖帝オーディン　ＡＴＫ８０００→１８８００

「ぬわあああああ！」

黒服Ａ　ＬＰ４０００→－４０００

邪神のカードから離れた闇は、再び次元の狭間に逃げた。

その後、黒服２人は大慌てで撤退し、丸藤と剣山が合流した。

～～～おまけ～～～

その後、十代達とスクルドを連れて入ったレストランで…

「お会計１１８５００円になります」

「……」

第９６話　修学旅行８日目（後書き）

ディスペアのデッキのクイズの〆切りはもうしばらく先です。２，３日あとです。早ければ明日になってしまいますが、多分ないです。

第９７話　『我』と『わたし』の真実（前書き）

※今回は今までにないくらいの超展開です！

今日のファイブディーズの感想。

アポリアさんキターーーー！あんなボロボロで大丈夫なのか…そして、Ｚ－ＯＮＥ！お前は今までの仲間を『葬る』とか言っていいのか！

第97話　『我』と『わたし』の真実

～～～ホテル～～～

我はいつもの通り、ホテルでのチェックアウトを済ませ、外に出るつもりだった。つもりだったが…突然眩しい光が鋭い音と共に発生し、我だけ光に飲み込まれた。
そして…気がつくと…

～～～精霊世界～～～

我は精霊世界に居た。周囲は花畑で、レベル1のモンスターどもが戯れている。

「わたしの声が聞こえますね？」

聞こえてくるのは今まで聞いたことのない声。

「貴様…何者だ？」

「わたしはこの精霊世界の者です。名を『ユノ』」

「…そのユノが我に何の用だ？」

「まだ、ご自分の事を『我』と呼ぶのですね」

こいつは一体何を言っている?我は『我』だろう…それ以外になんと呼ぶ?

「あなたは記憶を取り戻したはず…それならば、『わたし』ではいけないのですか?あなたがご自分を『我』と呼び続けているのは、ご自分を責め続けているからだとわたしには感じられました」

「……1つだけ聞く。貴様はなぜ我が記憶を取り戻したことを知っている?」

「精霊世界を通して、見させていただきました。今現在精霊世界であなたの記憶を知らない者はいません。勝手に記憶を見たことを詫びます。しかし、世界を創造した神の精神が揺れれば世界に影響があるのもまた事実。精神を安定させ、あなたがあなた自身を責めることが無くなった時にこの世界から抜けることができます」

精霊程度の存在が随分大きく出てきたな…。今まで、一切神への干渉をしてこなかった精霊が、今になって自分の身の危険を感じて神に干渉を図ったか。

だが…精霊の力ではこの空間に我をとどめておくことなどできはしない。

「悪いが、茶番につき合っている暇は無い。帰らせてもらう」

剣で空間を切り裂く…が、空間が切れることは無かった。

「貴様…」

「言ったはずです…迷いを払わなければこの空間から抜け出すことはできません」

「…貴様の言う『迷い』を払う方法は？」

「この先にわたしの城があります。そこで、わたしとデュエルしましょう」

この精霊…我をここに閉じ込めたことを後悔させてやる。

～～～精霊の城～～～

巨大な城門が開く。我はそのまま中に入り、玉座の間に行く。

「貴様が我を閉じ込めた張本人か」

「いかにも」

我の前に居るのは、『ヴァイロン・オメガ』。直接話すことはできないらしく、テレパシーのようなもので意識に直接語りかけてくる。

「あなたの仲間は全員あなたを赦したはず…しかし、あなた自身はまだあなたを責め続けている。前世で、自分が最も愛している者を殺してしまったことで…仲間にこそその姿は見せていませんが、心の奥では深い悲しみに襲われている」

「黙れ、黙れ！！貴様に我の何がわかる…我は…我は…もう何も言うことは無い！デュエルだ！」

「仕方がありませんね…最高神、今のあなたがどれほど自分を責め、

苦しませ続けているか教えてあげましょう」

精霊『程度』など、少し前までのあなたなら決して言わなかったことです。それがあなたの焦りだということがこのデュエルでわかるでしょう。

「「デュエル」」

「先攻は我がもらう！我は『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚する！カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×１

「わたしのターン…わたしは、魔法カード『おろかな埋葬』を発動してデッキより『ダンディライオン』を墓地に送ります」

ダンディライオンが墓地に送られたことで効果が発動し、ヴァイロン・オメガのフィールドには2体の綿毛トークンが特殊召喚された。

「さらに、レベル４のチューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚」

スターダスト・ドラゴンを小さくしたような龍が墓地に送られたはずのダンディライオンを連れて召喚された。

「『デブリ・ドラゴン』の効果によって、このカードが召喚した時、墓地の攻撃力５００以下のモンスター１体を特殊召喚できます。わたしはこの効果で『ダンディライオン』を選択しました。わたしは、レベル１の『綿毛トークン』２体とレベル３の『ダンディライオン』に、レベル４の『デブリ・ドラゴン』をチューニング。凍てつく世界の最強の龍よ、敵対する者に裁きを下せ！シンクロ召喚『氷結界の龍トリシューラ』！」

トリシューラはシンクロ召喚され、具現化した瞬間にそれぞれの首から氷のブレスを吐き出し、我の手札の『機皇天輪』とフィールドの伏せカードを除外した。墓地のカードは何もなかったために除外されることは無かった。

「そして、墓地に送られた『ダンディライオン』の効果により、２体の『綿毛トークン』特殊召喚します。
そして、『氷結界の龍トリシューラ』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃。トリニティ・フリーズ！」

「この程度、くれてやる」

ディスペア　ＬＰ８０００→７１００

「わたしはこれでターンエンド」

ヴァイロン・オメガ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００
綿毛トークン×２　ＤＥＦ０

「我の…ターン！」

ヴァイロン・オメガのフィールドには、最強の氷結界の龍とザコモンスターが２体…。

「我は『機皇兵スキエル・アイン』を召喚！さらに魔法カード『機皇召集』を発動し、その効果によってデッキから『機皇神兵マシニクルアイン』を特殊召喚し、効果を発動！１ターンに１度、相手フィールド上のシンクロモンスター１体を吸収し、その攻撃力分、このカードの攻撃力をアップ！我は『氷結界の龍トリシューラ』を吸収！」

トリシューラは、機皇神マシニクル∞？をそのまま小さくしたかのようなモンスター、マシニクルアインに囚われた。

機皇神兵マシニクルアイン　ＡＴＫ２０００→４７００

「『機皇兵スキエル・アイン』で『綿毛トークン』を攻撃！ツインパルス！」

スキエル・アインの放った弾丸が綿毛トークンに当たり、綿毛トークンは爆発した。

「さらに、『機皇神兵マシニクルアイン』で『綿毛トークン』を攻撃！アイン・オブ・ディスペアー！」

マシニクルの砲撃により、２体目の綿毛トークンも破壊された。

「お前に我を倒すことなど、何があろうとできはしない！ターンエ

ンド」

ディスペア
ＬＰ７１００
手札×２
フィールド
機皇神兵マシニクルアイン　ＡＴＫ４７００
＋氷結界の龍トリシューラ
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００

「それならば、なぜあなたは焦っているのですか？」

「焦っている？何のことだ！？」

「ご自分の手を見ればわかります」

我は、自分の手を見る。手は震えていた。

「どういうことだ！？」

「それが、今のあなたの心の動きそのもの…焦りと迷いです。わたしのターン。わたしは魔法カード『ブラック・ホール』を発動し、フィールド上のモンスターをすべて破壊します」

機皇兵は重力に潰されて、粉々になり消滅した。

「機皇兵が…！」

「さらにわたしは魔法カード『死者蘇生』を発動。わたしが特殊召喚するのは当然『氷結界の龍トリシューラ』！」

墓地から再び３つ首の龍が吹雪を纏って現れた。

「そして速効魔法『トリニティ・フリーズ』を発動。わたしのフィールドに『氷結界の龍トリシューラ』がいる時に、トリシューラの効果を発動します」

「！！」

つまり我の墓地と手札からカードを１枚除外する…！

トリシューラが吹雪を吐き、墓地のマシニクルアインと手札の機動要塞フォルテシモが凍りつき除外された。

「またしても…」

「『氷結界の龍トリシューラ』でダイレクトアタック！ブリザード・オブ・ドライ！」

「ぐあああああ！？」

ディスペア　ＬＰ７１００→４４００

「カードを１枚伏せ、ターンエンドです」

ヴァイロン・オメガ
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００

伏せカード×１

「我の…ターン」

手札は３枚…そして、トリシューラを倒せるカードはこの１枚のみ。だが、ここで負けを認めるわけにはいかない…！

「『機皇兵グランエル・アイン』召喚！このカードの効果により『氷結界の龍トリシューラ』の攻撃力を半分にする！グラビティ・プレッシャー」

氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００→１３５０

「『機皇兵グランエル・アイン』で『氷結界の龍トリシューラ』を攻撃！」

「そう簡単には行きませんよ。速攻魔法『トリニティ・フリーズ』発動！わたしはあなたのフィールドの『機皇兵グランエル・アイン』と手札１枚と墓地の『機皇兵スキエル・アイン』を除外」

「くっ…」

「普段のあなたならば、もっと冷静で、軽率なミスは犯さないはずです。たとえば、先程の『機動要塞フォルテシモ』を発動して、効果を使用していればダメージは受けずに済んだはず」

「ターン…エンド」

ディスペア
ＬＰ４４００

手札×１
フィールド
なし

「わたしのターン…わたしは魔法カード『氷結界の龍陣』を発動します。このターン、『氷結界』と名のつくシンクロモンスター１体の攻撃力を４０００にする。
『氷結界の龍トリシューラ』でダイレクトアタック！」

「うおおおおおお！！」

ディスペア　ＬＰ４４００→４００

「まだだ！まだ我のライフは尽きていない！例えライフが尽きても貴様を倒す！」

「なぜ、１人で解決しようとするのですか？今までのあなたなら、このような状況になれば仲間に助けを求める選択をしたはずです」

「今の我は…わたしは…仲間に頼ろうとも、引き受けてくれるものなどいるわけが無い！」

「（ようやく、自分に素直になり始めましたね…）そんなことはありません。つい先日も、一緒に出かけていませんでしたか？」

「だが！それが同情だったらどうする！？」

「（感情の多い神と言うだけあってかなり複雑ですが…後少し…）そんなことはありません。いつだって、互いを信頼して生きてきたのでしょう？それがたった少しの過去の出来事で裏切るようなら、

それは仲間とは言えない…ですが、あなたの周りにいる神々は裏切っていない…いい加減に、自分を赦してやったらどうですか？」

「わたしにそんな資格などありはしない！できるのはその罪も背負って生きていくことだけ…」

「それならば、その罪は仲間との信頼と絆をさらに深めて償えばよいのでは？」

「……わたしは受け入れてもらえるのか？」

「（最後のひと押しですね）もちろん」

「……精霊、わたしの負けだ」

ディスペアは膝をついた。この状況、ディスペアにはデュエルでも心理でも勝ち目は無くなった。

「…ようやく、赦してくれましたね」

ヴァイロン・オメガはその姿を崩し、人型の生命体に形を変えた。

「…ゼウス？」

一瞬でこの空間は崩れ去り、見覚えのある最高神界の庭に居た。

「ディスペア…騙すような真似をして、申し訳ありませんでした。しかし、最近のあなたは見るに堪えなかった…この前に黒服の人間と戦った時も、神を出さなくても手札には勝利する手段がありました。しかし、あなたはそれに気づかなかった。いつものあなたなら

ば、必ず気づくはずなのに…そして、あなたの精神が揺らいでいることでこの神界全土で頻繁に地震が起きていました」

天変地異と思うほどの地震…それほどまでにディスペアの意識が揺らいでいた…。

「今の出来事は、既にオーディン達に伝わっています。一人称が変わっていても誰も驚きませんよ。

……そして、今までのあなたは死にました。今ここで、あなたは新しいあなたに生まれ変わりました。これから先、あなたはあなたの信じる道をひたすら進むとよいでしょう。困った時は、神界に居るわたしに連絡をください。いくらでも助けになりましょう」

「……」

結局わたしは全て見抜かれていたということか…。わたしはもう『我』ではない…本当の意味で『わたし』になった。

第９７話　『我』と『わたし』の真実（後書き）

あとがきでなんたらかんたら書くことは特にありませんが、これだけ。

『我』→『わたし』になりました。

今回のオリカ『機皇神兵マシニクルアイン』は通りすがりのデュエリスト様からご投稿いただいたものです！ありがとうございました！

今日のオリジナルカードの効果

『氷結界の龍陣』
速攻魔法
自分フィールド上の『氷結界の龍』と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで４０００にする。この効果を受けたモンスターはこのターン、相手のカードの効果によっては破壊・除外されず、エンドフェイズにエクストラデッキに戻る。

※もしも使用したい方がいれば、お好きにどうぞ。

次回予告『最後の固有デッキ』
※次話が投稿されたときがクイズの締め切りです。

第９８話　修学旅行最終日　最後の固有デッキ（前書き）

修学旅行編最後です。同時に、ディスペアのデッキのクイズも締め切りです。答えてくださったみなさん、ありがとうございました！

今回のディスペアのデッキの相手は、ボスキャラではありません。一般人です。

今日の作者の出来事

恵方巻を食べました。思った以上にお腹にたまりますね…。学校は、特に何もなくいつも通りでした。放課後に友人とデュエルしたことぐらいですね。１ｖｓ２のアポリアルール（作者が１人、友人が作者の弟と組んで２人）で、各々のライフは４０００、わたしのターンはお前達のターンの後回ってくるっていうのをやったんですが…２ターン目の友人のフィールド『ゴヨウ・ガーディアン』『Ａ・Ｏ・Ｊカタストル』。弟のフィールド『龍骨鬼』。作者のフィールド：無し。＼（＾ｏ＾）／

第９８話　修学旅行最終日　最後の固有デッキ

ディスペアは、今まで通りの言葉遣いで過ごしている。１つだけ変わったのは、一人称だ。
ディスペアは今まで自分を責め続けていたが、ゼウスの説得により解放され、その証として一人称が変わったのだ。

「わたしはこれから出かけてくる」

そして、スクルドは相変わらず…

「待って、私も行く♪」

ディスペアについて行く。一人称が変わったことについては何も思っていないようで、寧ろこっちの方がいい、という感じだ。

～～～ディスペアサイド～～～

修学旅行は今日で最後だ。せっかく人間界での初めての体験なので、今日は２人で思い出でも作ろうと思う。ロキ達も、３人で思い出を作ってくるそうだ。

「わたし達はどうする…？わたしは特に行きたい場所などは無い」

「じゃあ、一緒に散歩でもしよっか」

「結局、いつも通りか。まあ、わたしはスクルドがそう言うのならそれでいい」

断る理由もない。無理に断ればスクルドを悲しませる。

「おねぇさ～ん、今から俺らとあそばなぁ～い？」

スクルドに突然話しかけたのは、名前を書くと死ぬノートに名前を書かれ、1話しか出ていないはずなのに多分ものすごいインパクトを視聴者に与えたシブ〇クにとにかく似ている男とその取り巻きだった。

「お断りします」

スクルドが見た目からして怪しい人間を相手にするはずが無く、平然と断る。

「そんなこと言っちゃって～、ほんとは遊びたいんでしょ～？」

シ〇タクはスクルドに触れようとしたが…

「待て」

ディスペアがそれを見逃すはずもなく、手をはたいた。

「な、何だお前は！？」

シブ〇クの取り巻きたちは、ディスペアに一斉に殴りかかる。が…

「フン…」

光より速く動くことのできるディスペアにとって、そんな攻撃は止まって見える。一瞬のうちに全員を片づけてしまった。

「あとは、お前だけだ」

ディスペアはシブ〇クを見下しながら言う。しかし、シ〇タクも、ここで引くようなナンパ男ではなかった。

「なら俺とデュエルしろぉ！俺が勝ったら、この女は譲ってもらうぜ！」

この世界特有の勝負の付け方でディスペアに挑む。

「いいだろう」

ディスペアは、デッキをデュエルディスクにセットしようとするが…

「ディスペア、せっかくだしあのデッキを使ったら？」

スクルドは、ディスペアの最後の固有デッキを使うことを薦める。

「本番で初めて使うのは危険だから、こういう時に使って慣れたほうがいいと思うんだ」

「……そうだな」

わたしは最後の固有デッキを取り出し、ゴッドモーメントを展開してセットした。

この男は、バイクにセットしてあるデュエルディスクを展開した。
バイクにまたがったままデュエルするようだ。

「「デュエル」」

「まずは俺からだ！来い『戦士ダイ・グレファー』！カードを1枚伏せてターンエンド」

どうでもいいがこいつのディスク、かなり変わってるな…しかも浮いてるってどういうことだよ？

シブ○ク
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
戦士ダイ・グレファー　ＡＴＫ１７００
伏せカード×１

「わたしのターン…わたしはモンスターをセットする。さらにカードを3枚伏せ、ターンエンド」

ディスペアは表情1つ変えずにターンを終了した。

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×３

「俺のターン！」

シブ〇クはデッキからカードをドローした。そして、その次の瞬間…

「わたしはトラップカードをオープン。『フィッシャーチャージ』。わたしのセットモンスター『オイスターマイスター』を生贄に捧げ、お前の伏せカードを破壊」

シブ〇クの伏せカード『聖なるバリアー ミラーフォースー』が破壊され、墓地に送られた。

「さらに『フィッシャーチャージ』のもう1つの効果により、デッキからカードを1枚ドロー。その後、戦闘以外の方法でフィールドから墓地に送られた『オイスターマイスター』の効果により、フィールド上に攻守0の魚族の『オイスタートークン』1体を特殊召喚。もう1枚のトラップカードを発動『水霊術ー「葵」』。わたしは『オイスタートークン』を生贄に、お前の手札を確認し、1枚捨てる」

わたしは手札をまだ見せてもらっていないが、インフィニティ・アイで見えるので宣言する。

「手札にある『異次元の女戦士』を捨ててもらう」

「何で俺の手札が分かったんだ!?」

「わたしの眼にはお前の手札のカードが見える。もっとも、『水霊術ー「葵」』が消えた今、見ることはできないがな」

見ようと思えば普段から見ることができるが、そんなことをしなくてもわたしは負けない。

「気味が悪いな…俺は『戦士ダイ・グレファー』を召喚！」

「トラップカードオープン『激流葬』。モンスターが召喚された時発動。フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

フィールド上のモンスターは全て激しい水の流れに飲み込まれて破壊された。

「ターンエンド！」

シブ○ク
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
なし

「わたしのターン…わたしは魔法カード『強欲なウツボ』を発動。手札から2枚の水属性モンスター『オーシャンズ・オーパー』『深海王デビルシャーク』をデッキに戻し、３枚ドローする」

デッキがオートシャッフルされ、上から3枚ドローした。

「わたしは魔法カード『死者蘇生』を発動。お前の墓地から『異次元の女戦士』を特殊召喚する。さらに、墓地のモンスターカードを全てデッキに戻し、『究極封印神エクゾディオス』を守備表示で特殊召喚！」

「俺のモンスターとレベル１０のモンスターを特殊召喚？」

何をするつもりなんだ？

「わたしはこの2体のモンスターを生贄に捧げ、『超古深海王シーラカンス』を召喚！！」

ゴッドモーメントの力もあり、巨大な魚が空中に現実で実体化した。

「攻撃力２８００…！」

正直言って、今のシブ〇クの顔はものすごいインパクトを与えてくれるだろう。それぐらい驚いている。

「『超古深海王シーラカンス』効果発動。手札を1枚捨て、デッキから可能な限り魚族モンスターを特殊召喚する」

「なんだって～！」

「来い『オーシャンズ・オーパー』『オイスターマイスター』『光鱗のトビウオ』『深海王デビルシャーク』！ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、効果を失う。だが、『超古深海王シーラカンス』は攻撃できる。わたしは『超古深海王シーラカンス』でダイレクトアタック！スパイラル・ダイブ！」

シーラカンスはシブ〇クに突進した。現実のダメージが発生するため、シブ〇クのバイクにひびが入った。ちなみに、ひびが入ったことにシブ〇クは気付いていない。

「ぎゃあああああ！」

「わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ２８００
深海王デビルシャーク　ＡＴＫ１７００
オーシャンズ・オーパー　ＡＴＫ１５００
オイスターマイスター　ＡＴＫ１６００
光鱗のトビウオ　ＡＴＫ１７００

「俺のターン」

昔先輩に言われた…男を連れている女をナンパしない方がいいと。
今更思い出したって遅いんだよ！

「俺はモンスターをセットしてターンエンド…」

シブ◯ク
ＬＰ１２００
手札×３
フィールド
セットモンスター×１

「わたしのターン…わたしは『オーシャンズ・オーパー』『光鱗のトビウオ』『深海王デビルシャーク』の３体と、ライフ半分を生贄に捧げ、『究極神オベリスク』を特殊召喚！」

激しい揺れがこの地球という１つの星を襲う。

「どわあああああ！地震か！？」

海の中心に巨大な青い光の柱が昇り、その後の一瞬の青い閃光が止んだ時、そこには究極の力を持つ神が光臨していた。

究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
ディスペア　ＬＰ４０００→２０００

「『究極神オベリスク』で伏せモンスターを攻撃。アルティメット・クラッシャー」

伏せモンスター『メタモルポット』は神の攻撃によって破壊された。

「お前が伏せていたモンスター『メタモルポット』の効果はわたしにも有効だ。わたしは捨てるカードが無い。よって、無条件で５枚ドローする」

「俺は３枚捨てて５枚ドローだ」

「わたしはカードを１枚伏せてターンエンド」

ディスペア
ＬＰ２０００
手札×４
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ２８００
オイスターマイスター　ＡＴＫ１６００
伏せカード×１

「俺のターン…」

シブ〇クはデッキからカードをドローする寸前に、リストバンドから1枚加えた。その後、デッキからカードを1枚ドローした。

「俺は魔法カードを発動！『サンダー・ボルト』！相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！！」

サンダー・ボルトの効果によって、神を含めてディスペアのフィールドのモンスターがすべて破壊された。

「（これで女は俺のものだ！何して遊ぼうかな～？グヘヘヘヘ）俺は『異次元の女戦士』を召喚！喰らいやがれ、ダイレクトアタックだ！」

ディスペア　ＬＰ２０００→５００

しかし、ディスペアは表情一つ変えずにシブ〇クを睨んでいる。ディスペアには人間が考えていることが分かる。つまり、今シブ〇クが考えている卑猥なことも、カードをデッキ以外の場所から手札に加えたことも全てディスペアに筒抜けだ。

「ターンエンド！これで俺の勝ちだ～！」

「このエンドフェイズ、戦闘以外の方法によってフィールドを離れた『究極神オベリスク』の効果発動。ライフを半分払い、わたしのフィールドに再び特殊召喚する！」

ディスペア　ＬＰ５００→２５０

「！！？」

シブ〇ク
ＬＰ１２００
手札×５
フィールド
異次元の女戦士　ＡＴＫ１５００

「わたしのターン…わたしは『究極神オベリスク』で『異次元の女戦士』を攻撃する。アルティメット・クラッシャー！！」

「ぎゃあああああああ！？」

シブ〇クのバイクは大破し、デッキのカードが辺りに散らばった。『戦士ダイ・グレファー』が３枚、『二者一両損』が２枚、『強制転移』が１枚、その他女性モンスターと魔法・罠が多数。

「……行こう、スクルド」

ディスペアは何も言わずにスクルドを連れて帰る。これ以上スクルドにこんな光景を見せるわけにはいかない。シブ〇クの顔は、今現在、かのマリク・イシュタールと互角かそれ以上に凄まじいことになっていたからだ。

～～～港～～～

「もう、終わりなんだね」

私達は、荷物をまとめて…といっても、デュエルディスクとデッキ以外何も持ってこなかったけど、船に乗った。帰りの船は、行きとは違って気持ち悪くはならなかった。

「そうだな」

わたしにとっては、デュエルと出費だらけの長い修学旅行だったが。よく考えれば、ジェネックス大会もかなり早くはじまっているが、未だにメダルは1人の場所に集まらない。今さっき調べたインフィニティ・アイの情報では、ある程度重要な出来事であれば時が来るまでは待つしかないということになる。

…今までわたし達が生徒と戦っていた意味は一体何だったのか？ハンデがつくから全く意味が無いというわけではないが…少し不満だ。

「楽しかったな、ディスペア」

「十代、君はわたしについてきて食べ物をむさぼるように食べていただけだろう」

「まあ、修学旅行の出費、後3年間よろしく頼むぜ」

「3年間？」

わたしは気になったことを聞く。今、十代は2年生だ。ということは、後1年じゃないのか？

「なんだ？知らないのか。今期だけ、海馬社長が育成期間を延ばすって言ってたはずだぜ？なんでも、プロのレベルが落ちてきてるから早いところ優秀なデュエリストを育てなければならないとかで…

な」

口を挟んできたのは神楽坂だ。

「なんだと！！？」

思った以上に長い間、この学園に滞在しなければならないのか…ゼウス、やってくれたな。

「しかし、楽しみが増えたのもまた事実か…」

ならば今は納得しよう。それよりも、今は次に起こる出来事にどう介対応するかだ。わたしの最後の固有デッキは、究極神のパワーに耐えられるようにＢＦよりもさらにパワーが高い…使用する機会は選ばなければな…。

第９８話　修学旅行最終日　最後の固有デッキ（後書き）

明日は１日遅い節分を少しだけ載せて本編を進めます。

作者は最近『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』が切り札のデッキを作りました。『岩投げアタック』などで『磁石の戦士』を墓地の送ったのち、『闇の量産工場』で回収して『マグネット・バルキリオン』を出します。ダメ押しで『地球巨人ガイア・プレート』なども入っています。１度やられた『マグネット・バルキリオン』は普通に蘇生できるのでなかなか楽しいですね。

第９９話　５対１！？（前書き）

今日の作者の出来事

学校で驚異的なまでに頭が痛かったです。まあ、今は平気なんですがね…後２週間ほどで公立受験なので体調管理に気をつけようと思います。

第９９話　５対１！？

～～～ブルー寮・２月３日～～～

「鬼は～外、福は～内！」

「な、なんで我がこんなことを…」

「まあ、普段から恋人がいる者に嫉妬しているんだから自業自得だろう」

「オーディンまで…」

今、トールは鬼の仮面をかぶって十代達やその他の人間の豆撒きの的にされている。その頃、ディスペア達はと言うと…

「これが恵方巻か…どうやって食べろと？」

どう考えても一口サイズではない…一体どうやって食べればいいのか全く分からない。

「とりあえず、細かく分けて食べれば？」

「仕方が無い、そうするか…」

わたしは結局、この恵方巻を細かく分けて食べた。食べなければい

けない理由でもあるのか？

そして、次の日――――――――――――――――――――。

「ディスペア。お前を光の結社に迎え入れる。これは斎王様の命だ」

購買に居たわたしの目の前に現れたのは４人の取り巻きを連れた万丈目。斎王もよくあきらめないな。ちなみに、購買に来た理由は新しい雑誌を購入するためだ。定期的に発売される雑誌を読んでおけば、今後どのようにして動けばいいかある程度分かる。

「わたしを迎え入れたければデュエルでわたしに勝つことが必要だ。そして、わたしはわたしの最強のデッキでデュエルさせてもらう。命の保証はできない、それでもよければお前達の相手になってやろう」

「お前とのデュエルで命の保証が無いのはいつもの事だろう！それに俺達は５人だぞ！」

「５人同時にデュエルか。ならばデュエルのルールを説明する。各々のライフは４０００、わたしのターンはお前達５人のターンの後回ってくる。条件は圧倒的にわたしの不利だ。ただし、わたしは先攻をもらい、究極神を召喚する」

「（斎王様よりＢＦとシンクロ召喚の対策カードは頂いている…負ける要素は無い）いいだろう！」

わたしは万丈目の返事を聞いて神力を使い、５人全員を時空の穴に

放り込んで異空間に移動した。

移動した異空間には、１人分の足場しかない島が６つ空間に浮いている。空などに位置する空間は紫色で、青い雷が光っている。わたし達は各島に１人ずつ立っていた。

「ここはどこだ!?ディスペア！」

「ここはわたしが創りだした空間。ここならば、周りの被害を一切気にすること無くデュエルができる。島から落ちるほどの衝撃やダメージを受けても、島の正面以外の周りにはバリアが張ってある。落ちて死ぬことは無いから安心しろ。さあ、始めよう」

わたしはゴッドモーメントを起動した。

「「「「「デュエル」」」」」

「わたしのターン。わたしはモンスターを１体伏せる。さらにカードを１枚伏せてターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×１

「学園最強も大したことないな。最強なのは肩幅だけじゃねえの？俺のターンドロー！『ジェネティック・ワーウルフ』を召喚！攻撃力２０００だ！お前のザコモンスターじゃ倒せないな。ターンエン

ド」

ホワイトA
LP4000
手札×5
フィールド
ジェネティック・ワーウルフ　ATK2000

「俺のターンドロー！永続魔法『調律阻害』！シンクロ召喚はできないぜ！『マシュマロン』を守備表示で召喚してターンエンド！」

「……」

この人間はバカか？マシュマロンを守備表示で出すなど…。まあ、どちらにしろマシュマロンは次のわたしのターンが回ってくるときには残っていないが…。

ホワイトB
LP4000
手札×4
フィールド
マシュマロン　DEF500
調律阻害

「俺のターン！俺は『X－ヘッド・キャノン』を召喚！さらに永続魔法『前線基地』を発動し、1ターンに1度、手札のユニオンモンスター1体を特殊召喚できる！来い『Z－メタル・キャタピラー』！そして『Z－メタル・キャタピラー』を『X－ヘッド・キャノン』に装備！」

Ｘ－ヘッド・キャノン　ＡＴＫ１８００→２４００

「ターンエンドだ！」

万丈目
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
Ｘ－ヘッド・キャノン　ＡＴＫ２４００
＋Ｚ－メタル・キャタピラー
前線基地

万丈目は3番目か…わたしは最後かと思ったが…まあいい。

「俺のターン！俺は『天使の施し』を発動！3枚ドローして2枚墓地に送り、今捨てた『雷帝ザボルグ』と『邪帝ガイウス』を除外して、『カオス・ソーサラー』を特殊召喚する！ターンエンド！」

ホワイトＣ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
カオス・ソーサラー　ＡＴＫ２３００

「俺のターン！俺は『デコイ・ドラゴン』を召喚！」

「トラップカードオープン『激流葬』。モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

「！！」

全員のフィールドからモンスターが消え去った。そして、これは同時に精神攻撃の役目も果たす。仲間が揃えたモンスターを、自分が失敗したせいで破壊したという圧力に潰された今、奴はまともに戦うことはできない。

「ターン…エンド」

ホワイトDは、既に膝をつき、戦意を喪失している。

ホワイトD
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
なし

「わたしのターン。わたしは魔法カード『死者蘇生』を発動し、先程わたし自身の『激流葬』によって破壊された『ヒゲアンコウ』を特殊召喚する。そして、このカードは水属性モンスターを召喚する場合、ダブルコストモンスターとして使用することができる。わたしは『ヒゲアンコウ』を生贄に捧げ、手札より『超古深海王シーラカンス』を召喚する！」

厄介なのは４番目にターンが回ってきたあの生徒…恐らくこの５人の中では１番強い。

「わたしは『超古深海王シーラカンス』の効果発動。手札を１枚捨て、デッキから魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。わたしは『深海王デビルシャーク』『オーシャンズ・オーパー』『メタボ・

シャーク』『光鱗のトビウオ』を特殊召喚する！」

「くそ！俺達のモンスターをたった1枚のカードでまとめて片付けて、自分は5体も展開しただと…！？」

その上、デッキはＢＦじゃなくなっている…！これでは斎王様から預かったシンクロ対策カードがまるで役に立たない…！

「わたしは『オーシャンズ・オーパー』『メタボ・シャーク』『光鱗のトビウオ』の3体とわたしのライフを半分生贄に捧げ、『究極神オシリス』を特殊召喚する！！」

紫色だった異空間はいつの間にか少し赤に染まり、雷の色も赤に変わっていた。そして、時空の穴が開き、中から赤い光があふれ消えると、そこには全長７５ｋｍを誇る神が光臨していた。

究極神オシリス　ＡＴＫ０↓４０００

「わたしは『究極神オシリス』でお前にダイレクトアタックする。アルティメット・サンダーフォース！」

「ぐわあああああああああああああああ！！！」

ホワイトＣ　ＬＰ４０００↓０

超大な力を持った神の攻撃を受けたホワイトＣは、吹き飛ばされて足場の後ろに張られてあるバリアとの挟み撃ちにされ倒れた。そして、その生徒は強制的に保健室に移動させられた。

「早く治療しなければ、本当に死ぬぞ…攻撃の当たり具合からして、

持って1分…それ以上は絶望的だな。幸い、保健室にはわたしが前に置いてあった回復薬が置いてあるから心配は無いと思うがな。『究極神オシリス』の効果により、わたしのフィールド上に居るレベル11以下のモンスターは攻撃できない。ターンエンドだ」

ディスペア
LP2000
手札×2
フィールド
究極神オシリス　ATK4000
超古深海王シーラカンス　ATK2800
深海王デビルシャーク　DEF600

「俺のターン！俺は『ブラッド・ヴォルス』を召喚！」

「『究極神オシリス』の効果発動。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力・守備力を2000ポイントダウンする。サンダープレッシャー」

究極神の第1の口から巨大な雷の球が撃たれ、ブラッド・ヴォルスに当たった。

ブラッド・ヴォルス　ATK1900→0
DEF1200→0

「くそ…カードを1枚伏せてターンエンド…」

ホワイトA
LP4000
手札×4

ブラッド・ヴォルス　ＡＴＫ０
伏せカード×１

「俺のターン…」

ホワイトＢは既に戦う意欲が無い。神が召喚された時から諦めているようだ。

「ターンエンド…だ」

ホワイトＢ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
調律阻害

「ええい、お前らしっかりしろ！俺のターン！」

万丈目は半ばやけになってカードをドローし、ドローしたカードを見ると舌打ちをした。

「モンスターを伏せてターンエンドだ」

万丈目
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
セットモンスター×１
前線基地

「俺の……ターン！よし、魔法カード『ライトニング・ボルテックス』発動！手札1枚を捨て、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターをすべて破壊する！！」

雷がディスペアのフィールドに降り注ぎ、爆発した。煙がはれると、そこには無傷の神が残っていた。

「『究極神オシリス』は魔法カードの影響を受けない。よって、お前の発動した『ライトニング・ボルテックス』は無効になる」

「モンスターを1体伏せてターンエンドだ…」

ホワイトD
LP4000
手札×3
フィールド
セットモンスター×1

「わたしのターン」

究極神オシリス　ATK4000→6000

「わたしは魔法カード『封印の黄金櫃』を発動し、デッキから『オベリスクの巨神兵』を除外する。このカードの効果によって除外したカードは、わたしの2回目のスタンバイフェイズにわたしの手札に加わる」

究極神オシリス　ATK6000→4000

「バトル、わたしは『究極神オシリス』で攻撃力0になった『ブラ

ッド・ヴォルス』を攻撃。アルティメット・サンダーフォース」

「うわあああああああああああああ！！」

ホワイトA　LP4000→0

ホワイトAも、保健室に転移された。

「わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
LP2000
手札×2
フィールド
究極神オシリス　ATK4000
超古深海王シーラカンス　ATK2800

「俺のターン…！くそっ…ターンエンド」

万丈目
LP4000
手札×4
フィールド
セットモンスター×1
前線基地

～～～その頃、北欧の神サイド～～～

僕達は今、部屋でのんびりしていた。していたところだったんだけど…

「「「！！？」」」

突然、部屋が黒く染まって、僕達は別のどこかに時空転移させられた。

正方形の広い足場がある空間だ。僕達は今、この足場の上に立っている。広さは大体デュエルアカデミアの体育館ぐらいある。

「…時間稼ぎはもう十分だな」

そして、僕達の前に現れたのは、黒い輪を頭に浮かべ、真っ黒な翼をはやして、巨大な剣を持った『堕天使』だった――――――――――。

「「「……」」」

僕達はきっと、同じことを感じていたと思う。こいつは『ヤバイ』。でも、僕は正直言って楽しみにしている。こいつを叩き潰すことに。

「光の結社の人間の仕業に見せかけるために洗脳してディスペアを囮として襲わせ、ディスペアが戦っている隙だらけの内にわたしはお前たちを葬るためにここに来た。

この空間へと続く強制時空移動ゲートを作るための時間稼ぎは巧くいったようだ。そろそろディスペアの方も決着がついたころだろうからな、ディスペアに気付かれる前にお前たちをこの空間に引き込んだだけで上出来だ」

～～～ディスペアサイド～～～

わたしはあの後、究極神オベリスクを召喚して2人にとどめを刺した。しかし、わたしが部屋に戻ってくるとオーディン達はいなかった。スクルドは、今現在神界で三姉妹揃って雑談でもしているだろうから心配は無い。
そして、最も不可解なのがオーディン達が移動した神力の痕跡が全く見つからないということだ。

～～～サイドアウト～～～

「ダメだ、ディスペアは僕達がここに居ることに全く気付いていない！」

ディスペアが究極神を使ってこの場所を見つけてくれるまではどうにかして耐えるしかないか…！

「そう。お前達の神力の反応はこの空間に居る限り消滅する。そして、この空間から抜け出したければわたしとデュエルして勝つしかない」

「フン！要は我らで貴様を倒せばいいことだ！」

「その通りだ。ライフはわたしもお前達も８０００ポイント。そして、わたしのターンはお前達のターンの後に回ってくる。ハンディキャップは、このデュエルが闇のデュエルであることだけだ」

「トール、ロキ。行くぞ！」

「分かっている！」「ヒャッハッハッハハハ！久しぶりの大物だね！」

「「「「デュエル！！」」」」

デュエルが始まった途端、深い闇がフィールドを包み、僕達全員の足元に結界が張られた。

「わたしのターン。わたしはフィールド魔法『エターナル・ダークサンクチュアリ』を発動」

この広い足場の４隅に１つずつ邪悪なオーラを纏った黒い柱が現れ、柱から黒い光が隣り合う柱まで発射された。

「わたしが発動したこの『エターナル・ダークサンクチュアリ』の効果で、わたしのモンスターは相手のモンスター効果と魔法カードの効果を受けることは無い」

「効果耐性のフィールド…！」

「あのフィールド魔法の効果が効果耐性だけとは思えない…恐らく何かあるはずだ」

この堕天使の力は未知数…！それでも負けるわけにはいかない！

……次回に続く。

第９９話　５対１！？（後書き）

次回予告『エターナル・ダークサンクチュアリの恐怖』

今回のキーカード『エターナル・ダークサンクチュアリ』の効果を一部隠して載せます。

エターナル・ダークサンクチュアリ
フィールド魔法
このカードが発動している限り、自分がコントロールするモンスターは相手の魔法・モンスター効果を受けない。
・？？？
・？？？
このカードの発動中に敗北したプレイヤーは命を失う。

第１００話　エターナル・ダークサンクチュアリの恐怖（前書き）

最近、目だった出来事がないです。電球を取り換えたことくらいかな…昨日のご飯はチャーハンでした。

作者は三邪神デッキを組みました。まだ戦っていませんが。

第１００話　エターナル・ダークサンクチュアリの恐怖

～～～前回の状況・デュエル開始より１ターン目～～～

堕天使　手札×５　フィールド：エターナル・ダークサンクチュアリ
ロキ　手札×５　フィールド：無し
オーディン　手札×５　フィールド：無し
トール　手札×５　フィールド：無し

「エターナル・ダークサンクチュアリ…」

「このフィールド魔法が発動した今、お前たちはわたしから逃げることはできない。わたしは『堕天の使者』を召喚。このカードの召喚に成功した時、わたしはデッキからカードを１枚選択して墓地に送る。わたしは魔法カード『暗黒流転』を墓地に送ってターンエンド」

堕天使
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
堕天の使者　ＡＴＫ１０００
エターナル・ダークサンクチュアリ

「僕のタァーン！僕は『スカイ・コア』を召喚！そして魔法カード

『カオス・ブラスト』を発動！デッキの上から3枚墓地に送って、フィールド上のレベル４以下のモンスター1体を破壊する。僕は『スカイ・コア』を破壊！そして、『スカイ・コア』がカード効果で破壊されたことで、デッキ・手札・墓地から『機皇帝スキエル∞』『スキエルT』『スキエルA』『スキエルG』『スキエルC』を特殊召喚する！合体しろ、機皇帝スキエル！」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ０↓２２００
スキエルＴ　ＡＴＫ４００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００
スキエルＧ　ＡＴＫ２００
スキエルＣ　ＡＴＫ６００

機皇帝がパーツと合体し、龍のような形の青い機体となる。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００
スキエルＴ　ＡＴＫ４００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００
スキエルＧ　ＡＴＫ２００
スキエルＣ　ＡＴＫ６００
伏せカード×１

「エンドフェイズに『エターナル・ダークサンクチュアリ』効果発動」

「何!?」

エンドフェイズにフィールド魔法の効果発動だって!?

「相手フィールド上の最も攻撃力の高いモンスターの攻撃力分、わたしはライフを回復する」

堕天使　ＬＰ４０００→６２００

「クッ…わたしのターン!わたしはモンスターをセットし、ターンエンド」

ライフ回復のフィールド魔法…それならばわたしがモンスターを伏せることによって回復は回避できる。

オーディン
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
セットモンスター×１

「我のターン!我は『ワイズ・コア』を守備表示で召喚する!カードを１枚伏せ、ターンエンド!」

攻守０ならば回復はできまい…次のターンが勝負だ。

トール
ＬＰ４０００
手札×４

フィールド
ワイズ・コア　ＤＥＦ０
伏せカード×１

「フフフフ…わたしのターン。スタンバイフェイズにフィールド魔法『エターナル・ダークサンクチュアリ』の効果発動。わたしのライフ１０００ポイントにつき１つ、このカードに『エターナルダークカウンター』を１つ置く。わたしのライフは６２００、よって６個置く」

４隅の柱それぞれに、６つの輝きが灯る。かなり不気味な光景であることは間違いないだろう。

「わたしは『堕天ゼルク』を召喚。『堕天ゼルク』の召喚に成功した時、デッキから『堕天王ブルク』を、自分フィールド上のこのカードを含むモンスター２体を生贄に捧げることで特殊召喚できる。わたしは『堕天ゼルク』と『堕天の使者』を生贄に捧げ、デッキから『堕天王ブルク』を特殊召喚する！」

フィールドには黒い冠をかぶって黒い翼をはやした巨大な堕天使が姿を現した。

「『堕天王ブルク』の攻撃力と守備力は、召喚時の生け贄の攻撃力で決まる」

堕天王ブルク　ＡＴＫ＆ＤＥＦ　０→２８００

「さあ行くぞ！『堕天王ブルク』で『機皇帝スキエル∞』を攻撃する！」

堕天王ブルクの大剣から、黒い波動が放たれ、スキエルに向かう。しかし、スキエルは尻尾の方についている４本のコードを前に伸ばした。

「キッヒャッヒャ、『機皇帝スキエル∞』の効果発動！相手の攻撃を１ターンに１度だけ無効化することができる！この効果は本来無効にされるけど、手札から『機皇絶壁』を発動したことで有効となり、このカードは再び手札に戻る」

コードから緑色のエネルギー波が壁となって現れ、黒いエネルギーをはじき返した。

「厄介な効果だな…さすがは神と言ったところか。ターンエンド」

堕天使
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
堕天王ブルク　ＡＴＫ２８００
エターナル・ダークサンクチュアリ

「僕のターン！僕は永続魔法『一族の結束』を発動！このカードの効果で、僕のフィールド上の機械族モンスターの攻撃力は８００ポイントアップする」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００→６２００
スキエルＴ　ＡＴＫ４００→１２００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００→１８００
スキエルＧ　ＡＴＫ２００→１０００
スキエルＣ　ＡＴＫ６００→１４００

「『機皇帝スキエル∞』で『堕天王ブルク』を攻撃する！」

堕天使　ＬＰ６２００→２８００

「僕はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「エンドフェイズに、相手フィールドの一番攻撃力の高いモンスターの攻撃力分、わたしのライフが回復する」

黒い柱から放出された光が堕天使を包んだ。

堕天使　ＬＰ２８００→９０００

ロキ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ６２００
スキエルＴ　ＡＴＫ１２００
スキエルＡ　ＡＴＫ１８００
スキエルＧ　ＡＴＫ１０００
スキエルＣ　ＡＴＫ１４００
一族の結束
伏せカード×１

「わたしのターン…わたしは『グランド・コア』を召喚し、魔法カード『カオス・ブレーム』を発動。わたしの墓地に同名カードが存在しない時、攻撃力１０００以下のモンスター1体を破壊する。わたしはわたしの『グランド・コア』を破壊！『グランド・コア』が

カード効果で破壊された時、デッキ・手札・墓地から『機皇帝グランエル∞』『グランエルT』『グランエルA』『グランエルG』『グランエルC』を特殊召喚する、合体しろ機皇帝グランエル！」

グランエルが他のパーツと合体して、オレンジ色の巨大な機体となった。

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ０↓４０００

「機皇帝グランエルは、わたしのライフと同じ攻撃力・守備力になる。わたしのライフは４０００、よって攻撃力・守備力も４０００だ。

『機皇帝グランエル∞』でダイレクトアタック！グランド・スローター・キャノン！」

「この程度、エンドフェイズに回復するのだから問題ない」

堕天使はグランエルの放った砲撃を涼しげに受ける。現実化したダメージが堕天使を襲っているはずなのに、堕天使は余裕だ。

堕天使　ＬＰ９０００↓５０００

いくら攻撃を加えても、機皇帝の特性上エンドフェイズにライフが元通りになってしまう…だが、そうではない場合もある！

「わたしは速攻魔法『機皇衝波』を発動！機皇帝が戦闘ダメージを与えた時、その分だけダメージを与える！もう1度４０００ダメージを受けてもらう」

「ぬうわあああああ！」

堕天使　ＬＰ５０００→１０００

「わたしはこれでターンエンド、貴様のライフが４０００回復したとしても５０００、ライフは４０００ポイント減った」

「おのれ…神ごときが」

堕天使　ＬＰ１０００→５０００

オーディン
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ４０００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００

「我のターン！我は伏せていた魔法カード『核爆発』を発動。自分フィールド上の『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』を破壊し、１０００ポイントのダメージを与える。我は『ワイズ・コア』を破壊し、お前に１０００ダメージだ！」

「神ごときが生意気な…！！」

堕天使　ＬＰ５０００→４０００

「そして、効果によって破壊された『ワイズ・コア』の効果発動、

デッキ・手札・墓地から『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルT』『ワイゼルA』『ワイゼルG』『ワイゼルC』を特殊召喚する！合体しろ、機皇帝ワイゼル！」

機皇帝ワイゼルが他のパーツと合体して、青い光の粒子を出す人型の白い機体になった。

「行け、『機皇帝ワイゼル∞』で堕天使にダイレクトアタック！」

ワイゼルは右腕から光を放ち、堕天使にぶつけた。

「ぐわあああああ！」

堕天使　ＬＰ４０００→１５００

「我はこれでターンエンド！『エターナル・ダークサンクチュアリ』の効果で、貴様はライフを２５００ポイント回復する」

堕天使　ＬＰ１５００→４０００

トール
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００

「わたしのターン…『エターナル・ダークサンクチュアリ』の効果により、『エターナルダークカウンター』を４つ置く」

黒い柱に更に４つ…合計１０個の輝きが灯った。

～～～その頃、ディスペアサイド～～～

わたしは部屋で待機していた、しかし、突然窓ガラスが割れた。

「見つけたぞ、最高神…」

外から部屋に侵入してきたのは、強力な力を持つ上級の堕天使。数は１０…わたし１人では少々厳しいか…？

「堕天使か。わたしに何の用だ…」

「堕天神ヘル様の命令により、貴様を抹殺する。北欧の三神は、今現在最上級堕天使がデュエルして葬ろうとしている…！？グアアアァァ！」

ディスペアは堕天使の言葉を無視して大剣で斬りつけた。光よりも速く振られた剣は回避することができない。

「お前達の言うことなど、わたしの耳には入らんな…北欧の三神をカス１匹で倒すなど笑わせる」

ディスペアは、窓から飛んで海上に移動した。

「ここならば、自由に暴れられるだろう。さあ、構えろ」

わたしはゴッドモーメントを展開する。すると、堕天使の１人が剣を横に浮かせ、デッキをセットする。剣の刀身についていた、魔力でできている四角い穴のあいたものはデッキをセットするものだったのか…（一般のデュエルディスクのデッキをセットする場所の形です）。

「最高神、貴様は我が葬る」

「「デュエル！！」」

～～～サイドアウト～～～

「わたしは『堕天使ネメシス』を召喚」

今頃、堕天使がディスペアを襲っている…わたしはこのデュエルに敗北しようとも、この北欧の三神を別々の世界に飛ばし、時間を稼げばいい。今回の最終目的はディスペア抹殺。

「『堕天使ネメシス』で『機皇帝グランエル∞』を攻撃」

「バカな！『堕天使ネメシス』の攻撃力は０、グランエルは４０００！４０００ポイントのダメージを受けて自滅するつもりか！」

「クククククク…」

堕天使　ＬＰ４０００→０

堕天使のライフが０になった瞬間、『エターナル・ダークサンクチュアリ』の黒い光が堕天使を包んで消えた。

「き、消えた…？勝ったのか…？」

そして、トールがこの一言を言った次の瞬間、黒い光が渦巻いて、中から堕天使が出現した。

「ククククク…『エターナル・ダークサンクチュアリ』の最後の効果…『エターナルダークカウンター』が7個以上のっている時にわたしのライフが０になった場合、『エターナル・ダークサンクチュアリ』を破壊し、デッキ・手札・墓地からわたし自身…『堕天使ゼムスタ』を特殊召喚する！」

堕天使ゼムスタ自身がフィールドに召喚された。身長は１０m程ある。

「で、でかい…！」

「わたしの攻撃力は、『エターナル・ダークサンクチュアリ』のカウンターの１０００倍になる！」

堕天使ゼムスタ　ＡＴＫ？↓１００００

「そして、わたしのデッキ・手札・墓地・エクストラデッキのカードは全て除外され、わたしがフィールドを離れない限りわたしは敗北にならない」

堕天使ゼムスタのデュエルディスクは消滅し、カードは全て異次元

へと消えた。
そして、堕天使ゼムスタは機皇帝グランエルに殴りかかった。

「わたしは『機皇帝グランエル∞』を攻撃する！」

「そうはさせん、我はトラップカード『機皇帝の遺産』を発動！フィールドの『機皇』１体を選択し、その他のモンスターを全て墓地に送る。そして、選択したモンスターの攻撃力は、墓地に送ったモンスターの元々の攻撃力の合計分アップする！我は『機皇帝グランエル∞』を選択！そして、相手は選択した『機皇』しか攻撃できない」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ４０００→６２００→８７００

「くっ！？」

オーディン　ＬＰ４０００→２７００

「ほう、ターンエンドだ」

堕天使ゼムスタ
ＬＰ０
手札０
フィールド
堕天使ゼムスタ　ＡＴＫ１００００

「僕のタァーン！僕は魔法カード『機皇暗転』を発動！僕のフィールドに『機皇帝』が存在せず、墓地に存在する時、相手の墓地に存在するか除外されているカード１枚の効果を使用できる！
僕は除外された『暗黒流転』を使用！このカードの効果によって、

手札を全て捨てて、自分フィールド上のカードを全てデッキに戻してプレイヤーを1人選択、そのプレイヤーはデッキからカードを1枚選択して手札に加える！オーディン、頼むよ」

「分かった。わたしはデッキから『∞融合』を手札に加える」

「僕はこれでタァーンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
無し

「わたしのターン。わたしは魔法カード『∞融合』を発動。墓地から『機皇帝グランエル∞』『機皇帝スキエル∞』『機皇帝ワイゼル∞』を除外。現れろ『機皇帝クラフィリア∞』！」

次元の渦からフィールドに、巨大な黒い機体の、人型のロボットが出現した。右手に剣を持って、背中には翼があり、常に翼からジェット噴射をして浮遊している。

機皇帝クラフィリア∞　ＡＴＫ１００００

「『機皇帝クラフィリア∞』で『堕天使ゼムスタ』を攻撃。スローターインフィニティ・カノン！」

クラフィリア∞は、剣から光を撃ちだした。

「ぐわあああああああああ！わたしが…敗北…だと…」

堕天使は光に飲み込まれて消えた。そして…

「ようやく一休みできそうだね」

僕達は元いた部屋に戻れると思っただろう…しかし…突然紫色の光がこの空間を包んで、僕達はバラバラになって別の世界に飛ばされた――――――――――――。

次回に続く。

第１００話　エターナル・ダークサンクチュアリの恐怖（後書き）

次回『別々の世界で』

今回の切り札、堕天使ゼムスタと機皇帝クラフィリア∞とおまけの効果です。

『エターナル・ダークサンクチュアリ』
フィールド魔法
相手のエンドフェイズに、相手フィールド上に存在する最も攻撃力の高いモンスターの攻撃力分、自分はライフを回復する。自分がコントロールするモンスターは相手の魔法・モンスターの効果を受けない。
自分のスタンバイフェイズごとに、自分のライフ１０００ポイントにつき１つ、このカードに『エターナルダークカウンター』を１つ置く。自分のライフが０になった時、デッキ・手札・墓地・エクストラデッキのカードをすべて除外し、『堕天使ゼムスタ』１体を特殊召喚する。このカードの発動中に敗北したプレイヤーは命を失う。

『堕天使ゼムスタ』
レベル９　闇属性　天使族　ＡＴＫ？　ＤＥＦ？
このカードは通常召喚できない。『エターナル・ダークサンクチュアリ』の効果でのみ特殊召喚できる。このカードの攻撃力・守備力は『エターナル・ダークサンクチュアリ』に乗っていた『エターナルダークカウンター』の数×１０００ポイントの数値となる。このカードがフィールドを離れた場合、コントローラーは敗北し、命を失う。このカードは戦闘以外の方法ではフィールドを離れない。このカードの効果は無効化されない。

『機皇帝クラフィリア∞』
レベル１０　光属性　機械族　ＡＴＫ１００００００　ＤＥＦ１００００００
『機皇帝グランエル∞』＋『機皇帝スキエル∞』＋『機皇帝ワイゼル∞』
このカードは『∞融合』による融合召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。１ターンに１度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスターをすべてゲームから除外することができる。このカードはシンクロモンスターの効果を受けない。このカードの効果は無効化されない。

『∞融合』
魔法カード
自分と相手の墓地から『機皇帝』と名のつくモンスターを除外し、決められた融合モンスター１体を特殊召喚する。このターンこのカードの効果によって融合召喚されたモンスターはカードの効果を受けない。

主人公サイドのキャラクターの設定まとめ　※第４章からの状態（前書き）

書いていて思ったのですが、毎回キャラクターの設定が増えるたびにディスペアの設定とキャラクター設定のどちらにも書きこまなければならないのは迷惑なので、こちらにまとめました。これからはこちらの方に書き加えていきたいと思います。

主人公サイドのキャラクターの設定まとめ　※第４章からの状態

名前　ディスペア＝アルアス

性別　無し

年　不明

誕生日　不明

身長　２ｍ

体重　７５キロ

性格　好戦的　デュエルも基本的にはアグレッシブな戦術をとる。

一人称　『わたし』※女は私、男はわたしで分けています。性別がない場合も『わたし』です。ただし、ノルン三姉妹に限り『私』です。

見た目：アポリアの額の緑色の回路のようなものを取り除き、髪の色を黒にした感じ。そのほかの変更は無し。

服装：アポリアの服（？）の３つの青い結晶を、ディスペアから見て左側を青、真ん中を白金、右側を赤とした、究極神カラー。そのほかの、アポリアの白かった部分は全て黒。ただし、袖や足、手の部分には青と赤と白金のラインがある。アポリアと同じで、服＝身体。着替える必要もないし、誕生した時から自動的にかかっている魔法により、身体や髪が汚れることがない上、服は脱げないという

よりも着ておらず、この黒い服こそが本体。

デュエルディスク（固有ディスク）：名前は『ゴッドモーメント』。究極神を召喚できる、ディスペア唯一の固有ディスク。外見は基本的にはアポリアと同じ。変更点は、魔法・罠カードがセットすると５分の４は入る、奥行きの深い溝になったことと、輪そのものの大きさと太さがアポリアよりも大きくなっている。また、魔法・罠ゾーンの下にはもう１つ溝があり、そこを手札置きにできる点。さらに、神力によって右側にデッキをセットできる場所が創られている。墓地はデッキのセット場所の手前の溝。輪の溝の太さはカード４５枚分。また、モンスターカードゾーンは緑色のエネルギーだったが、黒い神力に変更。

備考：性別がないが外見が男であり、人格も男。基本的に食べた物は全て神力（人間で言う魔力）に変換されるため、トイレに行く必要なんかもない。ＣＶはアポリアさん。
切り札は最高神界を含めたすべての時空を完全に消滅させる力を持つ3体の『究極神』。。。また、アニメ効果の『機皇』シリーズや『星界の三極神』も使う。
体内には人間のような臓器は一切存在せず、心臓と同等の存在である、赤・青・白金の神の核が3つある。また、３つの核からはそれぞれ体中にケーブルが伸びており、神力を供給している。機械に近い。

究極神オシリス　全長７５ｋｍ　見た目は常に赤い神力を纏っている『オシリスの天空竜』
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力Ｘ０００　守備力Ｘ０００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻撃力・守備力は自分の手札×２０００ポイント

になる。このカードは魔法カード・モンスター効果の影響を受けず、罠カードの影響は発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ時にカードの効果を発動・適用することができない。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフを半分生贄に捧げこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、そのモンスターの攻撃力・守備力を２０００ポイントダウンする。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果はいかなる場合でも無効化されない。

攻撃名が『アルティメット・サンダーフォース』、攻守ダウンの効果名が『サンダー・プレッシャー』
前口上「神の鼓動、永き時を経て封印を解かん。究極の力よ、光臨せよ！『究極神オシリス』」
攻撃のモーションは、下の口から雷の砲撃を吐き出す。効果は上の口から雷の弾丸をぶつける。

究極神オベリスク　全長５０ｋｍ　見た目は常に青い神力をまとっている『オベリスクの巨神兵』
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力８０００　守備力８０００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠カード・モンスター効果の影響を受けず、魔法カードの影響を発動ターンのみ有効とする。このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ時にカードの効果を発動・適用することができない。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールドを離れた場合、エンドフェイズにいかなる場合でもライフ半分を生贄に捧げこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。自分また

は相手のターンに、このカード以外のモンスター2体を生贄に捧げることで、このターンこのカードが攻撃可能な場合、このカードは相手モンスターすべてに攻撃できる。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果はいかなる場合でも無効化されない。

攻撃名は『アルティメット・クラッシャー』、効果を使用した時の攻撃名が『ゴッド・ジェノサイド・エナジー』
前口上「あらぶる巨神、究極の力を以って我が敵を粉砕する！光臨せよ、『究極神オベリスク』！」
攻撃モーションは、拳に青い神力をまとって殴りつける。

究極神帝ラー　全長１００ｋｍ　見た目は常に白金の神力を纏っている『ラーの翼神竜』
レベル１２　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在する時のみ効果が適用され、攻撃可能になる。このカードはいかなる効果の影響も受けず、戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果はすべて無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、互いのプレイヤーはサレンダーできない。1ターンに1度、相手のカードを全て除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果はいかなる場合でも無効化されない。このカードの元々のレベルは∞として扱う。

攻撃名は『ゴッド・アルティメット・フレアー』、∞のダメージを

与える効果名が『ゴッド・アルティメット・ノヴァ』
前口上「限りなき力、究極の神々を束ねその全てを放つ！時空を滅せよ！『究極神帝ラー』！！」
ダメージ効果のモーションは、ラーの口に白金の神力が凝縮され、超爆発を起こす。攻撃のモーションは、巨大な炎を吐く。

名前　スクルド

年齢　？

性別　不明（前は女だったけど、女性人格、女性容姿で固定）

誕生日　？

身長　１７５センチ

体重　ものすごく軽い。

スリーサイズ　本人により削除。胸はそんなにない。

性格　ドジな面がある。

一人称『私』

見た目と服装：『女神スクルドの託宣』（遊戯王ＤＭオリジナルカード）参照。ウルズとヴェルザンディーも同様にそちらを参照してください。ただし、目の色は青に変更。ウルズ・ヴェルザンディーも細かい変更はあり。服装は色を多少変更しただけで、あとは同じ。髪はツインテールだったが、今は縛っておらず、ディスペアからも

らったティアラをつけている。ティアラについてはチームラグナロクの回想のブレイブがつけてたアレを思い出してくれるとありがたい。

デュエルディスク（固有ディスク）：自分が持っている時を操ることができる杖を、横にして浮かせ、青い神力を広げてディスクにする。手札置きはないが、オートシャッフルとオートサーチ。デッキは神力部分にセットする。

備考：ノルンの三姉妹の一人で、ディスペアの妻。告白はスクルドから。ディスペア同様、誕生の時よりかかっている魔法で、風呂などには（ｒｙ
食べた物はすぐに神力に変換されるため（ｒｙ
外見は女性だが、性別がない。人格も女性。
ＣＶは明るい女のひと。想像に任せます。
戦女神をやめてから、その無理がたたって体が弱くなってしまった。
切り札は『エターナル・ローズ・ドラゴン』。

エターナル・ローズ・ドラゴン
シンクロモンスター　レベル１２　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『ブラック・ローズ・ドラゴン』＋レベル４の植物族チューナー１体＋『エボリューション・ローズ』
このカードは上記の素材でしかシンクロ召喚できず、このカードはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚できない。また、このカードの召喚条件を無視することもできない。このカードは相手のカードの効果では破壊・除外・コントロール変更されず、このカードをフィールドからエクストラデッキに戻すことはできない。１ターンに１度、墓地のモンスターカードを１枚除外する。このカードの攻撃力は除外したモンスターの攻撃力分アップする。このカードが相手モ

ンスターを破壊した場合、このカードの攻撃力分のダメージを与える。このカードが戦闘によって破壊されたとき、フィールド上のカードをすべて破壊する。

攻撃名は『エターナル・ローズ・ストリーム』、ダメージを与える効果名が『エターナル・フレア・ストリーム』、フィールド上のカードをすべて破壊する効果名が『エンド・オブ・エターナル』

名前　オーディン

年齢　？

性別　無し

誕生日　？

身長　２メートル１０センチ

体重　７０キロ

性格　５Ｄ’ｓのホセ…つまり、トールとロキのまとめ役。

一人称　『わたし』

見た目と服装：ハラルド。チームラグナロク参照。ちなみに、髪の毛と眉毛は直結してない。

デュエルディスク（固有ディスク）：神力によって、完全にその場

で創りだす。デザインはその時々で自由に決められるが、基本的には遊戯王ＤＭで使われていたのと同じモデル。

備考：いろいろ省略。ディスペアで殆ど全部書き終わってしまった…ＣＶはハラルドさん。

切り札は不明、今現在は『極神聖帝オーディン』と『機皇帝グランエル∞』と『機皇帝クラフィリア∞』。

『機皇帝クラフィリア∞』

レベル１０　光属性　機械族　ＡＴＫ１００００　ＤＥＦ１００００

『機皇帝グランエル∞』＋『機皇帝スキエル∞』＋『機皇帝ワイゼル∞』

このカードは『∞融合』による融合召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。１ターンに１度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスターをすべてゲームから除外することができる。このカードはシンクロモンスターの効果を受けない。このカードの効果は無効化されない。

名前　トール

年齢　？

性別　男

誕生日　？

身長　１メートル９５センチ

体重　６７．５キロ

性格　ジャック・アトラス（ときどき傲慢なところが）

一人称『我』

見た目：チームラグナロクより、ドラガン。服装は基本的に一般的な私服に見えるが重装備。

デュエルディスク（固有ディスク）：自らの得物、ミョルニルを変形させてデュエルディスクにする。形は一般的な物に近い。

備考：ディスペア達と違って性別があるので、ディスペア達と違って男湯に入らないとぶっ飛ばされて警察行きになる。食べた物は（ｒｙ

モテないという不遇の神。

ＣＶはドラガンさん。

今現在の切り札は『極神皇トール』と『機皇帝ワイゼル∞』、『ＸＸ－セイバーオメガブラスター』、『ダークネス・ウィング・ドラゴン』。

『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』

レベル１０　地属性　戦士族　ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２５００

『ＸＸ－セイバー』と名のつくチューナー１体＋『ＸＸ－セイバー』と名のつくチューナー以外のモンスター２体

このカードは上記のカードでしかシンクロ召喚できない。このカードの攻撃力と守備力は、自分の墓地の『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスター１体につき１５００ポイントアップする。このカードを対象にする魔法・罠・モンスター効果を無効にし破壊する。このカードがフィールドを離れたターンのエンドフェイズ、墓地から『Ｘ

ーセイバー』と名のつくカードを2枚除外することで、このカードを自分フィールドに特殊召喚する。この効果によって特殊召喚に成功したとき、自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。1ターンに1度、墓地から『X－セイバー』と名のつくモンスター1体を除外することで、相手の手札を全て墓地に送る。

攻撃名は『ラスト・セイバー』ハンデス効果名は『ブラストハンデス』

ダークネス・ウィング・ドラゴン
レベル12　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『ブラックフェザー・ドラゴン』＋『エボリューション・フェザー』＋『レボリューション・ウィング』
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。1ターンに1度、相手のモンスター1体を除外することができる。このカードに黒翼カウンターを1つ置くことで、相手の発動・適用したカードの効果を無効にすることができる。この効果に対して魔法・罠・モンスター効果を発動することはできず、この効果はスペルスピード3として扱う。このカードに乗っている黒翼カウンター1つにつき、このカードの攻撃力と守備力は１０００ポイントダウンする。このカードは戦闘では破壊されない。1ターンに1度、自分のメインフェイズまたは相手のバトルフェイズ開始時に、このカードに乗っている黒翼カウンターをすべて取り除くことで、エンドフェイズまで相手フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力を0にする。

攻撃名は『ダークネス・ブレイズ・ストリーム』
相手モンスターの攻撃力を0にする効果名が『ダークネス・フォール』
前口上「黒き羽根、闇の翼に進化する！大いなる翼よ、その闇を以

って闇を払え！シンクロ召喚、７つの希望、その１つ！！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』！！」

名前　ロキ

年齢　？

性別　無し

誕生日　？

身長　１５７ｃｍ

体重　４３キロ

性格　ルチアーノ

一人称『僕』

見た目と服装：機械化されていないルチアーノ。普段からルチアーノが被っていたフードやマントを装備している。中の服はルチアーノと同じ、ライディングデュエル時は、ルチアーノは髪の毛の先に帽子のようなものをつけていたがロキはつけていない。

デュエルディスク（固有ディスク）：ルチアーノと同じ。ただし、緑色のエネルギーの部分は、白になっている。

備考：外見は男で、人格も男。性別がないの（ｒｙ

食べた物は（ｒｙ

ＣＶはルチアーノさん。
ノルン三姉妹のウルズと仲がいい。
切り札は『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』、『極神皇ロキ』、『機皇帝スキエル∞』。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン
レベル１２　神属性　ドラゴン族　シンクロモンスター　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』＋『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』＋『フォース・ノヴァ・フォーチュン』
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナー×１０００ポイントアップする。このカードが攻撃する場合、ダメージステップ終了時まで相手はカードの効果を発動・適用できない。このカードがコントローラーのフィールドを離れる場合、代わりにコントローラーの墓地のチューナー1体をゲームから除外することができる。この効果のスペルスピードは4として扱う。このカードがフィールドを離れた場合、自分の墓地から『レッド・デーモンズ・ドラゴン』1体を特殊召喚することができる。また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンのメインフェイズ2終了後、もう1度だけバトルフェイズを行うことができる。

攻撃名は『エクストリーム・クリムゾン・ソウル』

基本的なキャラクターはこんなところです。
ロキとスクルドの切り札の龍はそれぞれ全長４０ｋｍ前後となりま

す。
以下、希望によって追加したキャラクター達。希望を出していただければ書き加えます。

名前　ヘイムダル

性別　男

年齢　？

誕生日　人間時間で１月２３日

身長　１７８ｃｍ

体重　６０キロ

性格　リア充を茶化す、所謂自分が目立ちたがり屋で、他人の不幸を喜ぶタイプ。よほどのことであれば喜んだりはしない。

一人称『俺』

見た目：銀髪で紫色の目の、調子に乗りそうな顔。服は、中世ヨーロッパの貴族のような感じ。

デュエルディスク（固有ディスク）：ギャラルホルンを変形させてデュエルディスクにする。デッキの内容は基本的に『エロゲデッキ』と呼ばれる。

備考：性別があるので男湯に入らないと女性の方々にボコボコにさ

れて警察行きになる。本小説での、最強のネタキャラ。スクルドに昔というか今も恋心を抱いているが、茶化すたびに『最低』と言われて首を吊ろうとする。誰か止めてあげてくれ。最近ではスクルドもいいが、『世界は広い、自分のパートナーを探しに行く』と言って出掛けたので、番外編以外の出番はディスペア達がいる世界に偶然いたときのみとなる。

主人公サイドのキャラクターの設定まとめ　※第４章からの状態（後書き）

そのほか、『おいおい、こいつの紹介を詳しくしてくれ』というのがあったらどうぞ。書き込まさせていただきます。

第１０１話　別々の世界で（前書き）

作者の最近の出来事

今夜の晩飯は風呂吹き大根でした。あと、ストームオブラグナロクを４パック買ったのですが、欲しかったタングニョーストは作者のところには来てくれませんでしたｏｒｚでも、今日買ったスリーブは初期傷がほとんどなかったので満足です。

第１０１話　別々の世界で

～～～ロキサイド～～～

「うわあああああああああああ！」

ロキは空中からアスファルトの地面にたたきつけられた。その距離は１０ｋｍ。
常人ならば既に死んでいる。

「こ、ここは…？」

周りにはビルなどの建造物、そして多数の人間。

「おい、人が落ちてきたぞ…」

「でも、あんな高い所から落ちてきて生きているなんて…」

「骨が折れた…しょうがないなぁ…」

とりあえず僕は治療魔法を使いながら歩きだす。この世界のどこかに神力がつながっている場所があるはず…そこから神の門を創って通れば、神界を経由せずにディスペアのところに行ける。

「おい、あの子供、あの年で超高難度な回復魔法を使ってるぞ…」

「信じらんねェ…」

人間の言葉を無視してロキは歩き続ける。しかし、人間と言うのは未知の力を持つものを忌まわしく思うものであり…

「そこの子供、ちょっと来なさい」

同時に、自分達で解決できるならしてしまおうとする種族だ。

「来なければ撃つぞ！」

僕に向かって人間は銃を向ける。魔法と兵器を同時に使うってどんな世界だよ…

「好きにしなよ。そんなもので僕を殺せると思ったら大間違いだ」

治療も終わったので、瞬時に人間の持っていた銃を奪い取り、頭に突きつける。

「撃たれたくなかったら手をあげて、持っているもの全部落としてもらおうかな」

僕が忠告すると、人間は言うことを聞いて持っていたものを全て落とした。その中から僕は、食料を取った。その後、兵器などは全部レーヴァテインで斬って粉々にした。

「そ、それは…レーヴァテイン！」

人間は突然驚いて僕から離れた。

「レーヴァテインって…あの神話でロキが使ってた槍だよな？」

「あんな子供がその神話のロキ？まさかぁ」

「とりあえず人間、僕は君達に危害を加えるつもりはない。当然そっちが攻撃の意思を見せるならこっちにも考えがあるけどね」

人間達はそれを聞くと、いつも通りの日常に戻っていった。

「ほら、これは返してあげるよ」

僕は最後に１つだけ持っていた銃を警察に返すと、再び歩き出した。

～～～トールサイド～～～

「ぬあああああああああああ！？」

トールは上空から、ジャングルの大地にたたきつけられた。その距離、１５ｋｍだ。

「お、おのれ…あの堕天使め、ディスペアとの再会を遠ざけて時間稼ぎをするつもりか…」

この程度では怪我などしないからいいものの、ディスペアとの合流に時間がかかるのは問題だ。堕天使は最後に我らを別次元に飛ばした。普通ならば、元の空間に戻した方が早いはずだがあえて他の世界に飛ばした。ならば、ディスペアの方に戦力を集中させて襲撃した可能性が高い。

「この世界のどこかにゲートがある…ディスペアと合流するには一番の近道だ…」

トールもロキと同じように歩きだした。

～～～オーディンサイド～～～

「うおおおおおおおお！」

オーディンは、海に投げ出された。上空３０ｋｍ地点から、海にまっしぐらだ。その衝撃は凄まじい物で、波の無い海から巨大な波が発生したほどだ。

「くっ…わたしがこの程度で死ぬと思ったか…堕天使」

オーディンは海に激突する前にグングニルを突き立て、衝撃を僅かに和らげていた。

「陸地が無い…」

オーディンは陸地の無い世界に飛ばされた。その上、この世界にはゲートが無いため神界経由をするしかないのだ。オーディンはそれを理解すると、神界へと移動した。

～～～ディスペアサイド～～～

「わたしは『究極神帝ラー』で貴様にダイレクトアタックする！ゴッド・アルティメット・フレアー！」

「ぐわあああああああ！」

堕天使　ＬＰ－∞

堕天使はラーの攻撃によって宇宙に飛ばされて燃え尽きた。地上に攻撃が当たったら地球がシャレにならないことになるので仕方が無い。

「いい加減に貴様らの目的を教えてもらおうか？」

わたしの目の前に居る3匹の堕天使に問う。これで答えなければ、太陽よりも高い温度を誇る究極神帝ラーの攻撃で殲滅するだけだ。

「いいだろう…我々の計画は堕天使以外の全ての種族の殲滅…神や悪魔の存在も我々は認めない。そして、この計画は堕天神の決定によって実行に移されたのだ」

「それで、先に神を潰そうとしたのか。残念だが、究極神のいる神に先に攻撃を加えたのが運のツキだな」

そう、ディスペア達神々には、神の力を遥かに超える力を持つ『究極神』が存在する。堕天使達は、神を標的にした時点で既に計画の雲行きが怪しくなっていた。

～～～ロキサイド～～～

「ようやく、ゲートについたよ」

僕は今、ようやくゲートについたところだ。これでディスペアと合流できる。

「そこから先に行かせるわけにはいかんな」

突然声がして振り返る。そこには、堕天使の1匹がいた。

「来るころだと思っていたぞ、最高神ロキ」

「堕天使…ほんとにしつこいな」

僕は固有ディスクを構える。デュエル以外で倒しても魂がある限りは何度でも蘇る。それならデュエルで葬ればいいだけ。

「クックック…これはただのデュエルではない。来い、我がＤ－ホイール『クレスタ』！」

黒い羽根をかたどった巨大なＤ－ホイールが現れた。

「へえ、面白いね…でも、今僕の北欧の戦車は無くてね…だから、チーム北欧の戦車よりも、僕個人の、『ロキ』のＤ－ホイールで戦う。来い！」

僕の目の前に、スケボーのような形のＤ－ホイールが現れた。

「やっぱりこの感じだね。行くよ！」

「「ライディングデュエル・アクセラレーション」」

僕達がスピードワールド2をセットすると、突然周りの空間が変わって太陽の軌道上を走っていた。

「こ、これは一体!?」

「ハッハッハッハ…敗北した者は太陽に飲み込まれて消える…覚悟しろ!」

「僕にはちっとも命をかけないデュエルが無い…仕方が無いよね、セレナ…。僕のタァーン!」

ロキ　スピードカウンター　0→1

僕は『ダーク・リゾネーター』を守備表示で召喚して、ターンエンド!」

ロキ
LP8000
手札×5
スピードカウンター×1
フィールド
ダーク・リゾネーター　DEF300

「わたしのターン…わたしは『剣闘獣ラクエル』を召喚する!」

堕天使　スピードカウンター　0→1
ロキ　スピードカウンター　1→2

「剣闘……獣……！！」

「ラクエルで『ダーク・リゾネーター』を攻撃する」

ラクエルは、炎を纏った拳でダーク・リゾネーターを殴りつけた。
しかし、ダーク・リゾネーターは１ターンに１度戦闘では破壊されないモンスター。そのため、今の攻撃では破壊されなかった。

「バトルフェイズ終了時に『剣闘獣ラクエル』の効果により、このカードをデッキに戻し、デッキから『剣闘獣ダリウス』を特殊召喚する！カードを１枚伏せ、ターンエンド」

堕天使
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
スピードカウンター×１
剣闘獣ダリウス　ＡＴＫ１７００
伏せカード×１

「僕のタァーン！」

ロキ　スピードカウンター　２↓３
堕天使　スピードカウンター　１↓２

「僕は手札を１枚捨てて『ＴＨＥトリッキー』を特殊召喚！レベル５の『ＴＨＥトリッキー』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい。シンクロ召喚、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！

！」

悪魔龍が姿を現し、咆哮をあげる。

「そして魔法カード『Ｈｓｐ一紅蓮魔龍の壺』！スピードカウンターが０以上あり、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が存在する時、２枚ドロー」

「さすがは神…例えライディングデュエルでも普段のように魔法カードを使う…」

神には『Ｓｐ一』の上位互換として『Ｈｓｐ一』や『Ｕｓｐ一』がある。基本的にスピードカウンターを必要としないため、普段のようにデュエルすることができるのだ。

「魔法カード『Ｈｓｐ一クリムゾン・ヘル・ストライク』を発動。僕のフィールドに『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がいる時、相手フィールド上の表側表示モンスターをすべて破壊する。そして、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

「そうはさせない、トラップカード『和睦の使者』を発動。このターン、わたしが受けるダメージは０になる」

「へえ～…カードを２枚伏せてターンエンド」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
スピードカウンター×３
フィールド

レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
伏せカード×２

剣闘獣は戦闘を行えばデッキに戻り、例外を除いて戻した剣闘獣以外の剣闘獣をデッキから特殊召喚する。そして、剣闘獣の真価はこの効果によってデッキから特殊召喚された時に発揮する。そのため、戦闘で耐えるために和睦の使者や剣闘獣の闘器マニカなども有効だ。最近は攻撃を仕掛けてきたモンスターを返り討ちにすることができる収縮などの投入率が高いな。

……ディスペアの言ってたことだけど。

確か、特に注意しなきゃいけないのが魔法・罠を破壊し、『剣闘獣ガイザレス』の融合素材になる『剣闘獣ベストロウリィ』、墓地に送った切り札を除外する『剣闘獣レティアリィ』、『剣闘獣ラクエル』と２体の『剣闘獣』をデッキに戻すことで召喚でき、魔法・罠の効果を無効にする『剣闘獣ヘラクレイノス』、そしてモンスター効果をカウンターする『剣闘獣の戦車』だったかな？

「わたしのターン」

堕天使　スピードカウンター　２→３
ロキ　スピードカウンター　３→４

「わたしは『剣闘獣サムニテ』を召喚し、装備魔法『剣闘獣の闘器マニカ』を装備。装備モンスターは戦闘では破壊されなくなる。『剣闘獣サムニテ』で『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を攻撃」

「戦闘では破壊されなくても、ダメージは受けてもらうよ。返り討ちにしろ、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

堕天使　ＬＰ８０００→５６００

「この程度、何も問題は無い。わたしはバトルフェイズ終了時に『剣闘獣サムニテ』をデッキに戻し、デッキから『剣闘獣ムルミロ』を特殊召喚する！この時、墓地に送られる『剣闘獣の闘器マニカ』は手札に戻る。この効果によって特殊召喚した『剣闘獣ムルミロ』の効果によって『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を破壊する！」

「僕の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が…！」

「わたしは装備魔法『剣闘獣の闘器マニカ』を『剣闘獣ムルミロ』に装備してターンエンド」

堕天使
ＬＰ５６００
手札×３
スピードカウンター×３
フィールド
剣闘獣ムルミロ　ＤＥＦ４００
＋剣闘獣の闘器マニカ

「僕のタァーン！」

ロキ　スピードカウンター　４↓５
堕天使　スピードカウンター　３↓４

「僕は『Ｕｓｐ－死者蘇生』を発動。スピードカウンターが０以上ある時、墓地からモンスター１体を特殊召喚する！来い『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！さらに２枚目の『Ｈｓｐ－クリムゾン・ヘル・ストライク』を発動して、『剣闘獣ムルミロ』を破壊する！」

「わたしのフィールドががら空きに…」

「悪いね」

時間が無いから速攻で勝負を決めさせてもらうよ。今こうしている間にも、堕天使の軍勢がディスペアのところに行ってるんだからね。

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がいることにより、手札から『レッド・ノヴァ』と『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚！レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル１の『レッド・ノヴァ』とレベル３の『クリエイト・リゾネーター』をダブルチューニング！来い！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！こいつの攻撃力は自分の墓地のチューナー×５００ポイントアップ」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→５０００

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』でダイレクトアタック！バーニング・ソウル！」

「ぐうううううううう！！」

堕天使　ＬＰ５６００→６００

「さらにトラップ発動『バーニング・リボーン』！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を生贄にする！」

「なっ！？」

あのカードはロキの切り札のはず…それを自ら除外だと？

「来い『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

「！！」

しまった…レッド・デーモンズ・ドラゴンはバトルフェイズ中の特殊召喚…まだ攻撃権が残っている…！！

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』でダイレクトアタック！アブソリュート・パワー・フォース！！」

「むおおおおおおおお！！」

堕天使は、Ｄ－ホイールごと、自分が用意した舞台（ステージ）の太陽に落ちて消えた。

その後、ロキはすぐに神の門の前に戻されていた。ロキは、この扉を開けて、ディスペアのもとに向かった――――――――――――――――――――。

～～～ロキサイドアウト～～～

～～～トールサイド～～～

一方で、トールも神の門の前に到着していた。

「これで帰ることができるな…」

「ディスペアのもとに行かせるわけにはいかない」

「何者だ!?」

我の前には一人の堕天使が降りてきた。

「クックックック…ここを通りたければ俺とデュエルしてもらおう」

堕天使は相手が、神の中でも最強に近い力を持つ者だとわかって勝負を挑む。当然、戦いの神トールがこの勝負を放棄するわけが無く、固有ディスクを構えた。

「「デュエル」」

「我のターン!来い『Ｘ－セイバーエアベルン』!カードを４枚伏せ、ターンエンド」

トール
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
Ｘ－セイバーエアベルン　ＡＴＫ１６００
伏せカード×４

「俺のターン!来い、『魔導戦士ブレイカー』!こいつの召喚に成功した時、魔力カウンターを１つ乗せて攻撃力を３００ポイントアップする!」

「そうはさせん!カウンタートラップ『セイバー・ホール』!自分フィールド上に『Ｘ－セイバー』がいる時に相手がモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時、その召喚を無効にして破壊する!」

魔導戦士ブレイカーは、召喚された瞬間に時空の穴に落とされて消えた。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

堕天使
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
伏せカード×１

「我のターン！トラップ発動『針虫の巣窟』！デッキの上から5枚墓地に送る。そして、もう1枚のトラップ『ガトムズの緊急指令』を発動する。このカードは、フィールド上に『Ｘ－セイバー』がいる時、墓地から2体の『Ｘ－セイバー』を特殊召喚できる！来い『ＸＸ－セイバーレイジグラ』『Ｘ－セイバーガラハド』！そして、特殊召喚した『ＸＸ－セイバーレイジグラ』の効果で墓地から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を手札に加え、自分フィールド上に2体以上の『Ｘ－セイバー』がいることにより特殊召喚する！さらに『Ｘ－セイバーパシウル』を召喚。
レベル４の『Ｘ－セイバーガラハド』にレベル２の『Ｘ－セイバーパシウル』をチューニング、シンクロ召喚！現れろ『ＸＸ－セイバーヒュンレイ』！」

「そ、そのモンスターは…！」

「そう、『ＸＸ－セイバーヒュンレイ』のシンクロ召喚に成功した時、相手の魔法・罠カードを3枚まで破壊する！」

破壊されたのは『聖なるバリアーミラーフォースー』。我の読み通りだ。自分フィールド上ががら空きなのに、あの余裕な顔は絶対に何かある。だが、その『何か』も消し去った。

「まだ終わっていない。我は『ＸＸ－セイバーフォルトロール』の効果を使用し、墓地から『Ｘ－セイバーパシウル』を特殊召喚。レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』とレベル１の『ＸＸ－セイバーレイジグラ』に、レベル２の『Ｘ－セイバーパシウル』をチューニング。シンクロ召喚、『ＸＸ－セイバーガトムズ』！」

「１ターンでここまで展開しただと！？」

これが戦いの神の実力…だが、攻撃力の合計は７０００、俺のライフは０にはならない…そして、次のターン俺のライトニング・ボルテックスで奴のモンスターは全滅、そして俺のコンボが決まって勝ちだ。

「何を安心した顔をしている？トラップ発動『ガトムズの緊急指令』。来い『ＸＸ－セイバーガルセム』『Ｘ－セイバーガラハド』」

「そ、そんな…」

攻撃力の合計は…１１２００…

「悪いが、貴様のようなザコを相手にしている暇は無いのだ。ディスペアのもとに行くため、貴様には死んでもらう」

「ぐわあああああああああああ！？まだ…死にたく…ない」

堕天使　ＬＰ８０００→－３２００

「まだ死にたくない…か。最初から堕天神に魅入られた時点で、お前はこうなることが決定していたのだ…」

だが、後悔はするな。お前は、今まで堕天使であることに誇りを持って生きてきたはず…少しでも自分を誇れることができるのなら、その生き方は決して間違いではなかったということだ。

そして、トールもロキと同じタイミングで神の門を開け、ディスペアのもとに向かった――――。

～～～トールサイドアウト～～～

～～～オーディンサイド～～～

わたしは、たった今神界に到着した。

「スクルド、ウルズ、ヴェルザンディー、聞こえるな？」

「オーディン様…？」

「至急、ディスペアのもとに向かってくれ。ディスペアは今、堕天使の大軍と交戦中だ」

「「「！！！」」」

これで、ある程度の戦力は集められただろう…いや、これだけいれ

ば十分か。神界の門は既にヘイムダルが整備を完了しているはずだな…。

オーディンは、ビフレストの門を開け、ディスペアのもとに向かった――――――――。

～～～オーディンサイドアウト～～～

～～～ディスペアサイド～～～

「『邪帝ガイウス』召喚。効果により『機皇神マシニクル∞？」を除外」

「させん、『異次元封鎖』発動！このターン、カードを除外することはできない！わたしのターン、行け、『機皇神エクシニクル∞』！ダイレクトアタックだ」

「ぐあああああああ！」

これで、少しは減ってくれたか…？わたしはあの後、暫く堕天使と戦っていた。しかし、突然堕天使は大軍で攻めてきた。

「さすがに、余裕は無くなってきたな…」

だが…

「な、なんということだ…」

「あれだけいた堕天使の軍勢が、たったひとりの神によって４人にされてしまった…」

「だが、さすがに神も疲れている、このまま攻撃の手を休めなければ敗北は無い！行くぞ！」

堕天使は４人同時にディスペアに襲いかかる。

「うおおおおおおおお！！」

だが、ディスペアもそれでやられるような軟弱な神ではない。一瞬で切り返し、機皇神の一撃を入れる。残りの堕天使も、大剣で斬り裂く。デュエル以外で葬っても復活するが、それは堕天使の世界で復活し、さらに回復には長い時間がかかる。そのため、デュエルで無くともある程度は有効だ。

「はあ…はぁ…これで、全部か？」

しかし、ディスペアはこの時思わなかった。この一瞬の油断が、命取りになるということに。

「……！！」

次の瞬間、ディスペアの胸には１本の大剣が刺さっていた。そして、刺さったのと同時に神々も到着した。

『！！！』

当然、神々は驚きを隠すことなどできない。なぜなら、自分達が全

員束になっても勝てない最高神の胸には、その目の前に居る巨大な堕天使によって刺された1本の大剣が刺さっていたのだから。そして、その堕天使はディスペアならば絶対に敗北することなど無い下級の堕天使だったから。ディスペアは、意識を失い海へと落ちて行った――――――。

次回に続く。

第１０１話　別々の世界で（後書き）

次回『女神の怒り』

今回のオリカ『クリムゾン・ヘル・ストライク』はユタ様からご投稿いただいたものです。レギュラー化決定しました。ありがとうございます！そして、都合でスピードスペルに変えてしまいました。ごめんなさい。

誤字・脱字などありましたら報告ください。

第１０２話　女神の怒り（前書き）

作者の最近の出来事

夕飯の前にひぐらしのなく頃にを見ました。ああ、食事の前に見るんじゃなかった…『爪をはぎ取る道具です。』…（ Д ）。。。

今回は…作者が弾けました。とことんスクルドを黒くしてみた。それはもうひぐ○しのように（グロテスク的な意味で）…といっても、作者の文才ではそこまで表現ができているかなんてわかりませんが…。さらに言うと、今回はいろいろ混ざってオーバーヒートしています。意味不明なことになりかねませんので、ご注意ください。

第１０２話　女神の怒り

～～～海上～～～

「フフフフフ…ハハハハハハハハ！神を倒した今、我々に敗北は無い！」

堕天使はディスペアが死んだものと思い、士気を上げる。

「あ…ああ……」

「！！オーディン、トール！スクルドを抑えて！」

僕はトールとオーディンに言う。でも、それは１歩遅かった。

「うあああああああああああああああああ！！」

スクルドは、ディスペアのところに飛び、ディスペアの持っていた大剣を手に取る。そして、ディスペアの身体は僕達のところに転移された。

「無茶よ、スクルド！ディスペアの持っているその剣は１０ｔ、とても持てる重さじゃ…」

しかし、今のスクルドにはそんな言葉は届かない。純粋な青い目は、今はハイライトが失われている。ハイライトが失われた青い目は、全てを憎んでいるような目で堕天使を睨みつけていた。

「ハッ！女神ごときが！」

堕天使はスクルドに剣で斬りかかる。だが…

「うあああああああああ！！」

１０ｔもの重さがある大剣を、スクルドは全力で堕天使に斬りつける。当然、剣術など知らないので素人に等しい。

普段のスクルドなら、見ただけで泣き出しそうになるほど堕天使を八つ裂きにする。剣は、深紅の血の色に染まるが、そんなことをスクルドは気にしていない。今止めれば、確実に止めた者から斬られる。

「この…調子に乗るな！」

スクルドは堕天使の放った攻撃で吹き飛ばされるが…恐ろしいスピードですぐに空中で起き上がり、スクルドに攻撃を加えた堕天使を斬る。そして、堕天使の死体を普段は使わない極炎魔法で焼き尽くす。

「こんなの…スクルドじゃない…」

僕は、目の前に広がる光景に身を震わせていた。返り血が頬に付着しようとも気にせずに戦い続けるスクルドは、僕の目には鬼神のようにすら見えた。

今のスクルドの目には光が無い…完全に敵を滅することだけが目的の、悪魔達を倒した時のディスペアの目に近い。でも、それよりもきっと凶悪な目だろう…。

～～～スクルドサイド～～～

私がいるのは真っ暗な空間。どうして…？私は、何を…？ただ一つ思うのは、『怖い』。…このままだと、何かが無くなるような気がする。

「そんなことを気にする必要はない。さあ、目の前にいる敵を、ただひたすらに滅するのだ！」

あなたは…誰？

「私はもう1人の私とでも言っておく。ただし、実際にはリミッターのような存在…」

私は…何か失うの？あれ…あれ？私は、誰と話していて、誰が戦ってるの？

「そうなる前には再びリミッターをかけておいてやる」

その声が、私の言葉を無視して私の黒く染まりつつある心で響いた。
その声は、私の声そのもの。
その黒く染まりつつある心を、必死で制御しているのは、私の思い出にあるディスペアの言葉…。でも、長くは持ちそうにない。

～～～スクルドサイドアウト～～～

「もう、やめて…」

「ウルズ、ヴェルザンディー、見ない方がいい…」

僕は堕天使の攻撃を防ぎながらウルズとヴェルザンディーに言う。
これ以上は、僕も見ているのが辛い。正直言って、戦いなれていない者が見れば吐き気がすると思う。

「もうやめろ、スクルド！これ以上やったって、ディスペアは喜ばない！」

ロキはスクルドに向かって言う。しかし、スクルドからは何の返事も返って来ない。
敵を憎む眼でただ戦う戦女神の姿は、戦神トールでも戦慄するほどだ。

「う、うわあぁぁぁ！」

堕天使は既に、戦意を喪失して泣いて命を助けてくれと媚びる。
だが、一度目覚めた戦女神の血は止まることを知らない。そして、堕天使を斬りつけようとしたその時…

「そこまでだ、スクルド…」

ロキは自らの武器、レーヴァテインをディスペアの大剣にぶつけていた。
僕とスクルド以外のメンバーはディスペアを一旦陸においてから堕天使と戦っている。

「（僕から先に殺されるかもしれないけど…）これ以上は友として

君を放っておくわけにはいかない…」

「…そこをどきなさい、ロキ」

ツリ目に近いかもしれないハイライトを失った目つきでロキを睨んで、たった一言の冷たい言葉を投げかける。プレッシャーが半端な物ではない。

「嫌だね」

僕は全力で大剣を払いのけようとするが、大剣の重さが尋常なものじゃなく、払いのけられそうにない。言葉では大きなことを言ってるけど、ちょっと無理かな…。

ロキはだんだんと押されていく。

「（スクルドに、こんな力があったなんて…戦女神の力って凄まじいな…）」

そして、とうとうロキが押し負け、ロキに向かって剣が振られようとしたその時だった。

「……戦斧槍（ハルバードランス）？どうしてこんなものが…」

大剣には、神々の金属によって作られた最強を誇るハルバードとグングニルを合体させた武器…といっても柄の先端がグングニルになっているだけだが、ハルバードランスがぶつけられていた。

「わたしはこれ以上、君を放っておくわけにはいかない」

スクルドの暴走を止めようとしてるのは、先程まで意識が無かったディスペアだった。

「わたしは今、わたしの意思によっては動いていない…今、この身体を操っているのは今まさに機能を停止しようとしているわたしの第1の心臓の意思…だからロキ…スクルドの暴走をデュエルで止めろ…」

わたしの身体には3つの心臓がある。それぞれ、オシリスとオベリスクとラーが支配しており、機能を停止したとしても、1週間ほどで治る。しかし、その間は機能を停止した心臓によって体が不自由になる。

オシリスが司る心臓が機能を停止した時、歩くことができなくなる。

オベリスクが司る心臓が停止した時、戦うことができなくなる。

そして、ラーが司る心臓が停止した時、わたしは完全な死を迎える。

ただし、ラーの心臓を止めるには最初にオシリスとオベリスクの心臓を止める必要がある。

今現在わたしの身体を動かしているのは『究極神オシリス』の意思だ。『ディスペア』の意思は今は深い眠りについている。ただし、今ディスペアの身体が発した言葉の心は深く眠っている『ディスペア』のものだ。

「わたしの、『究極神オシリス』の意思は…じき停止する」

「…わかった。スクルド！デュエルだ！」

今のは全て、僕の心に直接聞こえてきた。知らないのはきっと僕だけだったのだろう。

ディスペア…ごめん！少しだけスクルドに痛みを与えてしまう僕を、許してくれ…。

「いいわよ」

味方が間違った行動をとるなら、力ずくで正す。

「「デュエル」」

～～～オーディンサイド～～～

「これで全部か…いや、１人残っていたか…」

わたし達は堕天使の撃退に成功した。しかし、まだ１人…闇に堕ちかけている女神が残っている…スクルドを頼んだぞ、ロキ！

～～～サイドアウト～～～

ディスペアは、再び意識を失って陸に倒れた。

あとは、闇に堕ちそうなスクルドを救うだけ。

「私のターン…私は『ロードポイズン』を召喚…ターンエンド」

スクルド
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
ロードポイズン　ＡＴＫ１５００

「僕のターン」

スクルドが喋る度に怖気が走る。
それほど、今のスクルドは怖い。

「僕は『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚…さらに、『ダーク・リゾネーター』を特殊召喚！」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』…ね。ロキ、まさかその程度で私を倒せると思ってるの？」

スクルドは不敵な笑みを浮かべてロキに言う。作画崩壊＝顔芸で例えるなら、マリクほどは行かないがなかなかのものだ。

「（周りを見失ったスクルドに言葉は効かない…やっぱり力ずくで目を覚まさせるしかない…でも、いくら周りが見えなくなったスクルドでもこんなことはしないはず…どうしてこれほど…ディスペアが倒れそうになったのは今までだってあったことなのに…）僕はレベル５の『サイバー・ドラゴン』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！僕はカードを１枚伏せて、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『ロードポイズン』を攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

「うあああああ！」

スクルド　ＬＰ４０００→２５００

「…ターンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
伏せカード×１

～～～スクルドサイド～～～

私はいつまでここに居るの？

「永遠にここにいればいい…」

嫌…私はもう、こんな暗いところには居たくない。

「黙れ、今は私が楽しんでいる…お前はもう少し我慢しろ…」

一体…あなたは何をしてるの？

「お前に言う必要はない…」

いい加減にして！私はディスペアのことが心配なんだよ！？こうしている間にも、死んじゃうかもしれないんだよ！

「優しいんだな…死にはしない。お前の愛する神は３つの心臓がある…究極神によって創られた３つの心臓が。３つとも同時に止まら

ない限り、死ぬことは無い」

～～～サイドアウト～～～

「邪魔が入ったがまあいい。私のターン！『夜薔薇の騎士』を召喚。『夜薔薇の騎士』の効果で手札より『キラー・トマト』を特殊召喚する。レベル４の『キラー・トマト』にレベル３の『夜薔薇の騎士』をチューニング。破壊の龍よ、憎しみのままに全てを破壊するがいい！シンクロ召喚、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』…！」

「ロキは当然知ってるだろうから、説明はしないよ。フィールド上のカードをすべて破壊する！ブラック・ローズ・ガイル！」

「バカな！」

スクルドなら、絶対に使うことのない第１の効果を、何の躊躇も無く…。

そして、次の瞬間、僕は信じられない物を見た。

「フフッ…」

スクルドは、スクルドであるはずの女神は口の片方を吊り上げ笑っていた。

「お前…一体誰だ？」

僕は、スクルドであるはずの女神に問いかける。

「アハハハハハ！気づかれてしまったようね…私は、スクルドであってスクルドではない…戦女神の意思たる存在よ」

前にちょっと私のデータをいじられて偽物を創られた時は、ぶっ殺してやろうとも思ったくらいだわ。

「そんな凶悪な戦女神がいてなるものか！」

「それがいるのよ。戦女神であったスクルドはもう死んだ。でも、死ぬ寸前に、戦女神だったスクルドは戦いと怒りの意思だけを残した。それが私。当然、他の優しかった感情も残そうとしたみたいだけど間にあわなかったみたいね。

私は『キラー・トマト』を守備表示で召喚して、カードを1枚伏せてターンエンド」

スクルド
ＬＰ２５００
手札×５
フィールド
キラー・トマト　ＤＥＦ１２００
伏せカード×１

「僕のターン！ひとつだけ聞く。お前を全力で潰しても、スクルドの身体は傷つかないんだな？」

「保障するわ。もう、こんな口調でいる必要もない。かかってこい、ロキ！私はまだ暴れたい。ここで消えるわけにはいかないよ！」

「僕は魔法カード『死者蘇生』の効果で『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を復活！」

「何度も言ってるはず…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』ごときじゃ、私を殺すことは、スクルドを取り戻すことはできない」

恐ろしいまでの覇気と殺気をロキにぶつけ、かつての戦女神は言う。

「分かってる！でも、お前はもう十分暴れた…だから、もう休め。『クリエイト・リゾネーター』と『レッド・ノヴァ』を特殊召喚する！さあ行くよ！レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル１の『レッド・ノヴァ』とレベル３の『クリエイト・リゾネーター』をチューニング。頼む、スクルドを助けるために力を貸してくれ！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！」

「す、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』…」

さすがに神ね。この娘（スクルド）の記憶を見ても、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは簡単に召喚してる…。

「分かってるよね？攻撃力は、墓地のチューナー×５００ポイントアップする。『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『キラー・トマト』を攻撃！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→５０００

「キラー・トマトは戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を特殊召喚する。私は『夜薔薇の騎士』を特殊召喚する」

守備表示だから、私はダメージを受けない。

「僕は、この時を待っていたんだ。『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』がお前のモンスターを破壊するこの時を。トラップ発動『クリムゾン・ヘル・フォース』！手札からチューナー1体を墓地に送って、次の僕のエンドフェイズまで『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の効果を無効にし、2度目の攻撃を可能にする！手札から『トラスト・ガーディアン』を墓地に送るよ。『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『夜薔薇の騎士』を攻撃！！これで最後だ…！」

「ちょっと驚いたふりをするだけで、安易にトラップを発動して追撃してくる…甘いわ。ディスペアならば、こうはいかないだろうけど。トラップ発動、『植物の加護』。私は植物族によって発生する戦闘ダメージを受けず、植物族モンスターを召喚する度にその攻撃力の半分、ライフを回復する」

本当にこれがあの知の神ロキか？随分と落ちたものだ…。

「僕はカードを伏せてタァーンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００
伏せカード×１

「私のターン！魔法発動『死者蘇生』。来い！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

「くっ…」

ブラック・ローズ・ドラゴン…ディスペアがこのスクルドを見たらどう思う?スクルドが、自分が…自分のもう1つの意思がこんなことをしたと知ればスクルドはどれだけ落ち込む?

「そして、『フォーチュン・ローズ』を召喚。このカードの召喚に成功した時、手札から植物族のチューナー1体を特殊召喚する。現れよ『エボリューション・ローズ』」

チューナー2体…そして…ブラック・ローズ・ドラゴン…そんな、まさか!

「ロキ、初めて戦うのがこんな時だなんて残念だね。もっと、正々堂々としたデュエルの時に戦いたかったのでしょうけど…レベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』に、レベル1の『エボリューション・ローズ』とレベル4の『フォーチュン・ローズ』をダブルチューニング。7つの希望は、決してお前達の味方とは限らないよ。シンクロ召喚!『エターナル・ローズ・ドラゴン』!」

エターナル・ローズ・ドラゴン…スクルドが従える7龍の1体…。本当なら、僕はいつものスクルドとのデュエルで見たかった…。

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果により、墓地から『ブラック・ローズ・ドラゴン』を除外して、その攻撃力を加算」

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→６４００

「消えろ!『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』!!エターナル・

ローズ・ストリーム！」

「悪いけど、顔芸相手に負けたくは無いからね。トラップオープン、『絶対防御の盾』。このカードは僕のライフを５００ポイント払って発動する。このカードがある限り、僕へのダメージは０になる。そして、僕の命は僕のエンドフェイズごとに８００ポイントずつ削られる。そして、削りきれなくなった時、僕の命は終焉を迎える」

「面白いカードを使うじゃないか…だが、お前の手札は０、フィールドにはその盾１枚。どうやったってお前には私に勝つ手段が無い。ターンエンド」

スクルド
ＬＰ２５００
手札×３
フィールド
エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ６４００
植物の加護

「僕のタァーン！」

植物の加護は植物族モンスターの戦闘でのみ効果が適用される。そして、エターナル・ローズ・ドラゴンはドラゴン族、植物の加護が適用されることも無い。

「僕はこのターン、何もせずにターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ２８００
手札×１

フィールド
絶対防御の盾

「私のターンね…」

あの邪魔な盾がある限り、ロキにダメージは与えられない。でも…

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』効果発動。墓地から『ロードポイズン』を除外して攻撃力を１５００アップ」

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ６４００→７９００

「まあ、後何ターン持つか楽しみね。ターンエンド」

スクルド
ＬＰ２５００
手札×４
フィールド
エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ７９００
植物の加護

「僕のタァーン！カードを１枚伏せてターンエンド。僕の命はさらに８００ポイント削られる」

この１枚だ。この１枚がカウンターされれば終わりだ。その上、僕は次のターンでクリムゾンスーパーノヴァ召喚のチューナーを引かなければ負ける…。

ロキ
ＬＰ２０００

手札×１
フィールド
伏せカード×１

「私のターン。随分と勝ち誇った顔をしてるじゃないか…上等だ。『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果により、墓地から『キラー・トマト』を除外。攻撃力に加算する」

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ７９００→９３００

「ターンエンド」

スクルド
ＬＰ２５００
手札×６
フィールド
エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ９３００
植物の加護

「僕の…ターン！」

「どうだ？引けたか？」

「ああ…来たよ。トラップ発動『リビングデッドの呼び声』。『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を復活。魔法カード『紅蓮魔龍の導き』を発動。デッキから『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を特殊召喚する。そして、特殊召喚に成功した『フォース・ノヴァ・フォーチュン』の効果で１枚ドロー。『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』を通常召喚。
レベル１２の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』にレベル０の

『フォース・ノヴァ・フォーチュン』と『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』をダブルチューニング！7つの希望は、間違えた使い方をしてはいけないということを、君に教えてあげるよ。シンクロ召喚、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』！！」

「来たな…『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』…」

私のは何の対抗手段も無い。そして、私はこのターン絶対にロキがキーカードを引くなんて思っていなかった。だから、対抗手段など無くても大丈夫だと思っていた。でも、ロキは引いた。

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は、墓地のチューナー×１０００ポイントアップ！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→１００００

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『エターナル・ローズ・ドラゴン』を攻撃！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

「うあああああああああ！！」

スクルド　ＬＰ２５００→１８００

「そして、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果により、メインフェイズ２終了時、もう１度バトルフェイズを行う！ダイレクトアタックだ！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

「ククククク…アハハハ…アーッハッハッハッハッハ！」

スクルド　ＬＰ１８００→－８２００

スクルドはクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの直接攻撃を受け、戦女神の人格は完全に消え去った。そして、スクルドが目を閉じる寸前に、ハイライトは戻っていた。

……次回に続く。

第１０２話　女神の怒り（後書き）

次回…予告しようと思ったのですが、サブタイが思いつかないのでやめときます。

今回のオリカ、『絶対防御の盾』は通りすがりのデュエリスト様、『クリムゾン・ヘル・フォース』『植物の加護』はユタ様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました！

第１０３話　再起動（前書き）

サブタイはこうなりました。今回は多分短めだと思います。

ファイブディーズの感想。

アポリアアアアアアア！！ＺＯＮＥ、お前は、お前はぁぁぁ！
気持ちの悪い顔の神ばっかり使いやがって！！効果もご都合主義の
塊じゃないかちくしょおおお！

第１０３話　再起動

～～～堕天使との戦闘の５日後～～～

「わたしは…？」

ディスペアは、校長室のソファで目を覚ました。そして、辺りを見回すと周りには誰もいないことが確認できた。そして、ずっと封印し続けてきたハルバードランスが出現していることも。

「くっ……！？」

ディスペアは、ソファから起き上がろうとして足を床につかせる。しかし、立つことはできなかった。

「そんなバカな…！！究極神オシリスが…停止している？」

わたしはデッキから３枚の神のカードを外して確認する。すると、『究極神オシリス』のみ黒く石化していた。そして、次の瞬間わたしは思い出した。昨日、立った一瞬の油断で下級の堕天使に大剣を刺されたことを。そして、それはわたしの心臓…『神の核』を砕いたことを。

「（どうする？歩けなければ時空転移で移動するか？しかし、そんなことをすれば生徒の目につくのは明らか、時空転移は却下だ）」

「ねえ、ディスペア」

「！！」

「何でそんなに驚くの？」

わたしに話しかけてきたのはスクルドだった。いつもの笑顔で自然に話しかけてきているようだ。どうやら、スクルドはアレを憶えていないらしい。わたしが5日間眠っていたこともさほど気にしてはいないようだ。

「何だ？」

「歩けないんでしょ？」

「……」

「だからね、ロキからこれを預かってきたの。神力で飛行できるよ」

ロキから預かってきたと言ってスクルドがわたしに渡した物は飛行型のＤ－ホイールだ。しかも、サイズは小さめなので屋内でも使用できる。形は翼を装備した普通のＤ－ホイールらしい。翼に神力を供給させて飛行するようだ。

「……わかった、借りよう」

わたしはほんの少しの距離のために時空転移を使う。歩けないことがこれほど不便など、今まで考えたことも無かった。

わたしはＤ－ホイールに乗ると、Ｄ－ホイールごと外に時空転移した。

幸い、生徒には見られていない。授業の時間帯のようだ。

［聞こえますか？ディスペア］

［ゼウスか。わたしに何か用か？］

［神界の神々での最高議会が臨時で開かれることになりました。歩けないのは重々承知ですが、どうか最高神界のあなたの城まで一度ご帰還願います］

これでゼウスは通信を切った。

わたしは、ゼウスの頼みを聞き、最高神界へと転移した。

～～～最高神界、ディスペア城、最高神の柱～～～

ここは、わたしの城にある最高議会を行うための柱。この柱の上にある椅子に座っている者のみが発言権を得ることができる。

「みなさん、静粛に…」

ゼウスが、自身を含め集まった５１名の最高神クラスの神々を黙らせる。

わたしは５０本の円形に並んだ柱の中央にある５１本目の柱に座る。

「では、これから臨時の最高議会を開きます。何か質問のある者は？」

「わたしから質問させてもらう」

「どうぞ、ディスペア」

「議題を教えてもらおう。わたしはまだ何も聞いていない」

「それは失礼いたしました。議題は、先日の悪魔と堕天使の襲撃についてです。この襲撃により、我々の世界である『神界』には、少しですが歪みができました。それで、その歪みを含む神界の一部を切り離し、それを永遠に封印するという話です。以上。他には？」

神々は皆黙っている。

「それでは、本題に入りましょう。何か発言をしたい者は？」

椅子に座っていたロキが挙手する。ロキは先日、正式に最高神として認められた。

「どうぞ、ロキ」

「封印する地域の範囲を教えてもらうよ」

「歪みより、人間界単位で半径１００ｋｍです。どれだけ封印の規模を小さくしても、これが限界です」

「でも、その地域の範囲内には普通の暮らしをしている神と天使がいるんだけど、どうするつもりかな？」

ロキの言うことはごもっともだ。その辺りの考えを聞かなければ、

賛成も反対も無い。

「移住していただきます。拒否した者には、共に消えていただきましょう」

ゼウスとは別の司会者?が言う。

「ふざけるな!彼らはその地域を今まで大切にして生きてきたんだぞ!その土地を僕達の勝手な判断で奪って、その挙句拒否した神や天使には消えてもらうだと!?」

「しかし、彼らは古くからの掟がどうのと大変うるさい種族…最高神さえも血族と、生まれで決めるべきと言っている…彼らだって十分勝手ですが?」

わたしも聞いたことはある。親族が認めた神々のみと結婚し、その最高神の子のみを次代の最高神にする考えを持った種族だ。彼らは、この考えに従わない神を最高神としては認めておらず、神々すら忌み嫌っている種族…。

「それに、そんな田舎ひとつ消したところで、中央都市に問題が無いのも事実。消える神や天使も、２０００名あまり…少し増えすぎた天使や神を処理するにはもってこいだと思いますがね。それに、あの種族が住む地域はいわくつきですし…」

「それは聞き捨てならないな。わたしはいわくつきにせよ種族がどうにせよ、差別をする必要はないと思うが…」

「最高神ディスペア、あなたはあの種族の過激派の行動をご覧になったことがありますか!?」

「当然。１度は中央都市を消されそうになったことがあるのも知っている。禁じられた呪術を用いて、一般の神や天使に呪いをかけて失踪させ、あたかも自殺をしたかのようにみせる呪術だな…多くの神や天使がその呪術にかかり、消えた。だが、それも１００億年前の話…今更どうということは無いだろう」

「ではあなたはあんな種族を許すとでも言うのですか！」

「その『あんな種族』でも自分達の意思に従い生きているだけ…それは我らと考え方が違うだけであり、間違いも正解も無い。どちらにせよ、あの種族が絡んでいなかったとしてわたしは神界の一部を切り離して封印など、賛成はしない。神界はわたしの世界でもある。わたしは自分の世界の一部と同類の者を見捨てて切り捨てるなど、したくない」

「確かにこの神界も最高神界も、あなたが創った！しかし、その神界にできた歪みより、悪魔が襲撃してくるかもしれないのだ！」

「誰が悪魔が襲撃してくると言った？別に、その歪みから悪魔が襲撃してくると決まったわけではないだろう」

「しかし…！」

「ちょっと待て、俺にも発言させろ」

突然声をあげたのは、虹の橋の門番であるヘイムダルだ。

「どうしたのですか？ヘイムダル」

「虹の橋の門番としての立場から言わせてもらうと、あの歪みから悪魔が出てくることはねぇな。歪みの向こうからは何も気配がしないから、人間界のどこかか、または異空間につながってるだけだ」

「だとしても！」

「それとも何だ？お前はその種族に何か恨みでもあるのか？」

「……ある」

「へえ～…」

「わたしも気になるところだな。話してもらおうか」

「わたしの恋人はその村に出かけ、『よそ者だから、自分達の意思に従わないから』という理由で殺したんだ！その禁じられた呪術でな！」

「……なぜ貴様の恋人はその村に行ったのか聞こうか？」

「わたしの彼女は…『必ず話し合えばわかりあえる』と言ってあの種族と話しに行ったのだ！わかったか、ディスペア！今のあなたのように、愛する者が生きているのとは違うのだ！わたしはあの種族のせいで孤独と絶望の日々を送ってきた！」

「……ゼウス、決闘権を渡してやれ。第２５柱は、それほどまでにその村の神ともども封印したいらしい。だから第２５柱が決めた相手とデュエルして、第２５柱が勝てばこの案は可決、しかし負ければ否決。これでどうだ？」

「……仕方がありませんね。他の神々もそれでよろしいでしょうか？」

誰一人として反対する者はいない。誰もが、間違っているとも正解だとも言えないのだ。なぜなら、それは個人の正義によるものだから。正義は、個人の見方で変わるから。だから、本来なら賛成する者でも反対する者でも何も言わない。賛成派は決闘権を渡された神に、反対派は選ばれる神に賭けている。

「わたしがデュエルを申し込むのは…あなただ！ディスペア！！」

「ほう…わたしを選ぶか。いいだろう」

わたしはゴッドモーメントを起動し、相手も固有ディスクを起動させた。

わたしは立てないため、座ったままデュエルする。しかし、決闘には1つだけルールがある。負けた者は、本来賭けている物に加えて、もう1つ勝者の言うことを聞かなければならない。ただし、それが過度な願いであれば拒否することができる。過度かどうか判断するのはゼウスだ。

「「デュエル」」

「わたしが勝った場合、このデュエルで発生する神力をわたしの足の回復のために使わせてもらう」

「ならばわたしが勝てば、ディスペア…あなたにその歪みを封印してもらう」

「互いに、拒否する理由はありませんね？」

「「無い」」

「それでは、始めて下さい」

「わたしのターン。わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×１

「わたしのターン！わたしは『女神の至言』を発動。わたしはデッキの上から3枚墓地に送り、その次のカードが、モンスターカードならば特殊召喚する！3枚墓地に送る。４枚目に出たのは『戦慄の女神ルナ』。特殊召喚する。
わたしは『戦慄の女神ルナ』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃する！ブレード乱舞！」

「トラップカードオープン『機皇衝陣』。『機皇』が攻撃対象に選択された時、デッキからレベル４以上の『機皇』１体を特殊召喚する。現れよ、『機皇神マシニクル∞？』！」

だが、攻撃は続行され、ワイゼル・アインは撃破された。

ディスペア　ＬＰ８０００→６８００

「さらに、『戦慄の女神ルナ』の効果発動！相手モンスターを破壊した場合、破壊したモンスターの攻撃力をこのカードに加える！」

戦慄の女神ルナ　ＡＴＫ３０００→４８００

「わたしはカードを１枚伏せてターンエンド」

最高神第２５柱
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
戦慄の女神ルナ　ＡＴＫ４８００
伏せカード×１

「わたしのターン」

あの女神…モンスターという感じがしない。どちらかと言えば、何らかの生命体がそのまま精霊化したような感じだ。

「１つ聞こう。お前のその女神は、恋人の魂ではないのか？」

「！！」

やはりか…強い想いを残したカードに自らの魂を封じこませ、永遠に想い人のそばにいる…だいぶ昔の女神が悲しみゆえにとった手段だ。

「『戦慄の女神ルナ』…か」

鎧を着ているが、緑色の髪に緑色の純粋な目…それでいて明るそう

な雰囲気だ。容姿もスクルドとどことなく似ている気がする。…スクルドならば、きっと気が合ったことだろう。なぜ『戦慄の女神』などと言う名前にしたのか…わたしには理解できない。

「わたしは『機皇神マシニクル∞？』を生贄に捧げる。光臨せよ！『機皇神帝エクシニクル∞』！」

プログラムが組まれ、読み込みが完了したところから具現化する。

「エクシニクル、起動完了。特殊召喚成功時に、デッキか手札から『機皇』１体を墓地に送る。

わたしはデッキから『機皇兵ワイゼル・アイン』を墓地に送る。そして、『機皇神帝エクシニクル∞』の攻撃力・守備力は自分の墓地の『機皇』と名のつくモンスターの攻撃力の合計となる」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ０→７６００

「さらに『機皇兵グランエル・アイン』を通常召喚する。１ターンに１度、『機皇兵グランエル・アイン』の効果により相手モンスター１体の攻撃力か守備力を、半分にすることができる。わたしは『戦慄の女神ルナ』の攻撃力を半分にする。グラビティー・プレッシャー」

グランエル・アインは重力砲をルナに向けて放った。しかし、重力砲は戦慄の女神ルナの目の前でかき消された。

「『戦慄の女神ルナ』の効果によって、ルナは戦闘で破壊されず、魔法・トラップ・モンスター効果を受けない」

死してなお、愛する者を守るか…！

「カードを1枚伏せる。わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ６８００
手札×２
フィールド
機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ７６００
機皇兵グランエル・アイン　ＡＴＫ１６００
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは『戦慄の女神ルナ』で『機皇兵グランエル・アイン』を攻撃する！ブレード乱舞！」

「トラップオープン、『機皇爆破』。『機皇兵グランエル・アイン』を破壊、その攻撃力の半分…８００ポイントダメージを与える」

「くっ…」

最高神第２５柱　ＬＰ８０００→７２００

「そして、『機皇神帝エクシニクル∞』の攻撃力がアップする」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ７６００→９２００

「わたしは『戦慄の女神ルナ』を守備表示に変更して、ターンエンド…」

最高神第２５柱
ＬＰ７２００

手札×４
フィールド
戦慄の女神ルナ　ＤＥＦ３０００
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは魔法カード『カオス・カーズ』を発動。相手モンスター1体をコストとして手札に戻し、その元々の攻撃力分のダメージをわたしは受ける。ただし、相手は自分フィールド上のモンスター1体の表示形式を変更することで、この効果を無効にできる」

「わたしは『戦慄の女神ルナ』を攻撃表示に…！」

「いいのだな？自分を最後まで守ってくれる希望の女神を自らの手で痛みの地獄にたたき落としても…」

これはわたしからの説得。ここで第２５柱が攻撃表示に変更すれば、ルナは機皇神帝エクシニクル∞の攻撃を直撃で食らうことになる。まだ第２５柱が憎しみの感情を持って、ルナの考えを尊重せずに葬ろうとするのならばルナを攻撃表示に変更して、自ら破滅する道を選ぶだろう。しかし、ルナを未だに想っているのならば手札に戻し、せめて痛みの地獄にたたき落とすことはしないはずだ。

「わたしは…約束をした…『必ずわたしが他種族との架け橋になる』と。わたしはいつから道を間違えたんだ…ディスペア…わたしは間違っていたようだ…わたしはせめてわたし自身の手でこのデュエルの負けを認めたい。許してくれるか？」

「…それでいい。このまま、お前がお前の女神をフィールドに残すようであれば、わたしはお前を完全に潰していた。お前は孤独でも

なければ絶望もしていない。支えになる女神は、常にお前と共にあっただろう？」

「……最高神ゼウス、わたしの負けです。この案は否決に…そして、わたしの神力を、ディスペアの回復のために差し出させて下さい」

「わかりました」

第２５柱とのデュエルで発生した神力がゼウスのもとに集められ、わたしはそれを受け取った。

元々５日間の間で殆ど治っていた究極神オシリスの心臓は、今ので『究極神オシリス』と共に完全なる復活を果たした。緊急の最高議会が終わると、神々は自分の城に帰って行った。最高神界にある建造物は、わたしの城のみ。だから神々は神界を日常の場としている。

わたしも用は済んだので、デュエルアカデミアに戻った。

しかし…

「来たぜ…最高神が」

「動けないらしいじゃないか…今の内に殺そうぜ！」

上級悪魔３体がわたしの前に現れた。耳の速さだけは褒めてやりたいところだ。

悪魔達は大剣を構えてわたしに斬りかかる。

「残念だが、わたしは既に回復している」

わたしはハルバードランスを出現させ、構える。大剣は、この前の

戦いで使い物にならなくなってしまったから。ハルバードランスと大剣がぶつかった時、大剣は刃を失ったようだ。

「ハァァァッ！」

悪魔の大剣を起動したゴッドモーメントで受け止め、ハルバードランスで斬りつける。

ゴッドモーメントの輪の太さは大体カード５０枚分、尋常じゃ無く硬いために斬ることはできない。

「わたしをデュエル以外で倒すことなどできはしない。お前たちでは、そのデュエルでもわたしには勝てないだろう」

わたしはその後、悪魔達を倒し、校長室のソファに戻った。

第１０３話　再起動（後書き）

次回予告『神ｖｓ神』

※キャラクター設定まとめのディスペアのゴッドモーメントについて、少しだけ書き足しました。

今回のオリカ『機皇爆破』はユタ様からご投稿いただいたものです。
ありがとうございました！

第１０４話　神ｖｓ神（前書き）

どうも。ネットワークが廃スペックになってしばらく投稿できませんでした。ごめんなさい。

作者の最近の出来事

…もうすぐ公立受験で勉強をしなければならないのにようつべでひぐらしを見ています…。

第１０４話　神ｖｓ神

～～～校長室～～～

今、校長室には久々に校長が帰ってきていた。理由は話してあるので、校長室に居てもいいことになっている。そして、もう1人の客人…デュエルモンスターズの生みの親、ペガサス・Ｊ・クロフォード。神のカード『ラーの翼神竜』について、盗んだ社員がいるらしく、それがこの島に逃げ込んだと言っている。

「わたしは、席を外した方がいいんじゃないか？」

わたしはこれ以上話を聞くわけにもいかないだろうと思い声をかける。だが…

「いえいえ、ディスペア君にも探して欲しいのです…『ラーの翼神竜』を盗んだ社員を…」

その後は、手掛かりとなる物は手に入ったわけでもなかったが、捜索が始まった。

～～～森・スクルドサイド～～～

私は今、生徒がいないのをいいことに、内緒で校長室を出て森の中

に居る。
ディスペアと一緒じゃなかったら、きっと校則違反で捕まっていたと思う。

「…あのモンスターは…」

私の眼に映りこんだのは、全身が金色のドラゴン…あれってもしかして…
その後、私の前には1人の男の人が現れた――――――――――。

～～～ディスペアサイド～～～

人探しというのはなかなか面倒なもので、特定の個人を見つけるだけなら『鏡』を使ってもいいが、ペガサスにいる今、使用は避けた方がいいだろう。

「キャアアアアアアアアアアアアア！」

「スクルド！！？」

「ディスペア、今の悲鳴！」

「そんなことは分かっている、行くぞ！」

「ＯＫ！」

わたし達は、急いで悲鳴が聞こえたほうへ向かった。

～～～森～～～

スクルド　ＬＰ０
フランツ　ＬＰ１

「ど、どういうことだ！？スクルドが負けたというのか…！しっかりしろ、スクルド！」

「暫くは目覚めないぞ…」

森の中から出てきた１人の男…フランツ。

「貴様がスクルドを…？」

「そうだ。このカードの力でな」

わたしに見せてきた１枚のカード…それは、デュエルモンスターズ界最強ともいわれる伝説の三幻神、その最高位に位置する『ラーの翼神竜』だ。

「…ロキ、スクルドを頼む」

ロキにスクルドを預ける。

「……あんな奴相手に手加減する必要なんてないよ、ディスペア」

「わかっている。フランツ…貴様はわたしの最強の力で葬り去ってやろう」

ゴッドモーメントを展開した。

「神の力がついている限りわたしは世界最強、負けるはずが無い！」

「1つだけ言っておくが『神縛りの塚』を発動する必要はない。わたしのデッキにある最強の力は三幻神をも封じ込める…だから一般人であっても神を操ることができる」

このくらいのハンデが無ければ勝負にならない。

「「デュエル」」

その後、ペガサスと十代が来て、十代が戦いたかったと駄々をこねた。しかし、わたしにはその言葉は耳に入らない。わたしの目的は、わたしの前にいるこの男を倒す。それだけだ。

「先攻はわたしだ。わたしは『深海王デビルシャーク』を召喚し、魔法カード『強欲なウツボ』を発動。手札より『竜宮の白タウナギ』と『深海のディーヴァ』をデッキに戻しシャッフル…その後、カードを3枚ドローする。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
深海王デビルシャーク　ＡＴＫ１７００
伏せカード×１

「わたしのターン。手札より『トラップ・ブースター』を発動し、手札を1枚捨てて手札からトラップカードを発動する。『血の代償』！さらに『ラーの使徒』を召喚。このカードの効果により、召喚時にデッキから同じカードを手札に加えることができる。そして、『血の代償』の効果によってもう2体の『ラーの使徒』を召喚する！これでわたしのフィールドには3体の生贄が揃った…！」

「トラップ発動。『激流葬』…フィールド上のモンスターをすべて破壊する。そして、『深海王デビルシャーク』は1ターンに1度、対象を取らないカードの効果では破壊されない」

3体の生贄は、たった1枚のトラップカードによってすべて破壊された。

「生贄は揃え直しだな…」

「それはどうかな?魔法カード『ライトニング・ボルテックス』！手札を1枚捨て、相手の表側表示モンスターをすべて破壊する！さらにわたしは魔法カード『命削りの宝札』を発動し、5枚ドロー！」

「そうか…」

あったな…ラーの翼神竜の能力…『1ターンKILL』…

「『死者蘇生』発動。蘇れ、『ラーの翼神竜』！このカードが墓地から特殊召喚された場合、ライフを1ポイントになるまで支払い、支払った分『ラーの翼神竜』の攻撃力・守備力をアップする！『ラーの翼神竜』でダイレクトアタックだ…ゴッド・ブレイズ・キャノン！」

フランツはラーの翼神竜と融合し、攻撃を仕掛けてくる。

ラーの翼神竜　ＡＴＫ?→３９９９

「…この程度か。神の力は…これほど軽いとは！」

ディスペアはラーの攻撃をハルバードランスを振り回してはじいた。

フランツ　ＬＰ４０００→１
ディスペア　ＬＰ４０００→１

「どうするつもりだ?貴様の盲信する『死者蘇生』によって特殊召喚された最強の神は、エンドフェイズに墓地に戻る。そうなれば貴様のフィールドはがら空きになり、次のターンわたしの攻撃によってライフは０…さらに、『深海王デビルシャーク』は対象を取らないカードの効果では１ターンに１度破壊されない…例え手札に『激流葬』『聖なるバリアー ミラーフォースー』があろうとも無駄なことだ」

「それはどうかな?速攻魔法『融合解除』！ラーとの融合を解除し、攻撃力分ライフを回復する」

ラーの翼神竜　ＡＴＫ３９９９→０
フランツ　ＬＰ１→４０００

「ほう…」

「カードを２枚伏せ、ターンエンド」

フランツ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
血の代償
伏せカード×２

「わたしのターン…わたしは魔法カード『死者蘇生』を発動。わたしは『深海王デビルシャーク』を特殊召喚する。さらに『深海のディーヴァ』を召喚し、効果を発動。『深海のディーヴァ』の召喚に成功した時、デッキからレベル３以下の海竜族モンスター１体を特殊召喚する。来い『深海のディーヴァ』！」

「１ターンで３体のモンスターを…！」

「わたしはわたしのフィールドのモンスターと、わたしのライフの半分を生贄に捧げる！」

ディスペア　ＬＰ１→１

わたしのライフは既に１…半分払うことはできないが、ノーコストになる。

「何！？神以外で３体の生贄だと…！その上、ライフを半分も…」

「フランツ…『ラーの翼神竜』など、わたしの敵ではないことを教えてやる。最強の神の力を見るがいい！光臨せよ『究極神オシリス』！」

「『究極神オシリス』…？」

「こんなカードは私も知りマセーン」

「『究極神』はオシリスとオベリスクと最高位のラーによって成り立つ文字通り天地神明をも創造する神…『究極神オシリス』の攻撃力と守備力はわたしの手札1枚につき2000ポイントアップする」

究極神オシリス　ＡＴＫ0→４０００

「攻撃力…４０００！」

「『究極神オシリス』でダイレクトアタック。アルティメット・サンダーフォース」

「させるものか！トラップカード『強制脱出装置』！『究極神オシリス』を手札に戻す！」

「ほう…オシリスの攻撃をかわしたか」

「これでお前は再び3体の生け贄を揃えなければならない！」

「それはどうかな？『究極神オシリス』効果発動。このカードが戦闘以外の方法でフィールドを離れた場合、エンドフェイズにわたしのライフを半分払い、特殊召喚される。
ライフを半分払い、手札から『究極神オシリス』を特殊召喚」

天から再び巨大な龍が赤い光と共に現れた。

「バカな…！」

ディスペア
ＬＰ１
手札×２
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ４０００

フランツは、固まってカードをドローしようとしない。

「さあどうした…？『ラーの翼神竜』は最強ではなかったのか？その力でペガサスを見返すのではなかったのか？」

「くっ…わたしのターン！魔法カード『魔法石の採掘』！手札を２枚捨て、『死者蘇生』を回収し再び発動！蘇れ『ラーの翼神竜』！」

「今更ラーなど召喚したところでどうすることもできはしない」

ゴッド・フェニックスを発動した時が、この男の絶望の時…！

「『ラーの翼神竜』の効果発動。ライフを１０００ポイント払い、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！ゴッド・フェニックス！！」

ラーの翼神竜は全身を炎に包み、ラーの翼神竜自身よりもはるかに巨大な究極神オシリスに突っ込んだ。しかし…

『グオオオオオオオオ！！』

究極神オシリスは、咆哮だけでラーの翼神竜の炎をかき消し、雷によってラーの翼神竜を撃退した。

「なっ…神の効果が…！」

「『究極神オシリス』は…トラップの効果を発動ターンのみ有効とし、魔法・モンスター効果の影響を一切受けない。たとえそれが最上位の神であろうとも、神を超えた神には無効となる。そして、エンドフェイズに特殊召喚されていた貴様の『ラーの翼神竜』は墓地に戻る。今度こそ終わりだ…」

「わたしは残りの手札を伏せてターンエンド…」

フランツ
ＬＰ３０００
手札×０
フィールド
血の代償
伏せカード×２

「わたしのターン…わたしは『究極神オシリス』でダイレクトアタック。アルティメット・サンダーフォース」

「と、トラップ発動！『聖なるバリア－ミラーフォース－』！」

究極神オシリスは反射された雷で破壊された。

「モンスターを1体伏せ、ターンエンド時に墓地から『究極神オシリス』を復活」

ディスペア
ＬＰ１
手札×２

フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ４０００
セットモンスター×１

「わたしのターン…」

「わたしのライフはたったの1ポイントだ。貴様のライフは３００ポイント…２９９９ポイントもの差がある…それだけの差があってそれでもわたしを倒すことができないのか？」

冷静に見れば、ライフでは圧倒的にフランツの有利。万人がそれを認めるだろう。例え、『火の粉』ですらディスペアのライフは尽きる。だが…

『グオオオオオオオオ』

ディスペアのフィールドには究極神オシリス、フランツのフィールドにはもはや役に立たない血の代償と、伏せカードが1枚。その伏せカードも、魔法カードであればオシリスには通じない。

「わたしは魔法カード『天よりの宝札』を発動…互いに手札が６枚になるようにドローする…！」

フランツはデッキから6枚ドローした。

「では、わたしは４枚ドローする」

究極神オシリス　ＡＴＫ４０００→１２０００

「攻撃力が…１２０００…！」

「このぐらいで驚いていては、『究極神帝ラー』の前では起きていることすらできないぞ」

「くっ…わたしは魔法カード『マジック・プランター』を発動…『血の代償』を墓地に送り、２枚ドロー。カードを３枚伏せ、魔法カード『デビルズ・サンクチュアリ』を発動。『メタルデビルトークン』を守備表示で特殊召喚。さらに『ヌビアガード』を守備表示で召喚。ターンエンド」

究極神オシリスの雷がヌビアガードに衝突し、ヌビアガードの攻守が２０００ポイントダウンした。

フランツ
ＬＰ３０００
手札×２
フィールド
ヌビアガード　ＤＥＦ０
メタルデビルトークン　ＤＥＦ０
伏せカード×４

「わたしのターン。わたしは伏せモンスター『ヒゲアンコウ』を２体分の生贄とし、手札から『超古深海王シーラカンス』を召喚。手札を１枚捨て、『超古深海王シーラカンス』の効果発動。デッキから、可能な限り魚族モンスターを特殊召喚する。わたしは『オイスターマイスター』２体と『光鱗のトビウオ』を特殊召喚！」

「また３体のモンスター…！」

「わたしは『オイスターマイスター』２体と『光鱗のトビウオ』、

わたしのライフ半分を生贄に捧げ、手札から『究極神オベリスク』を特殊召喚！！」

究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
究極神オシリス　ＡＴＫ８０００

「攻撃力８０００！？」

「まだだ。『オイスターマイスター』が戦闘以外でフィールドから墓地に送られた時、『オイスタートークン』を特殊召喚する。そして、墓地に送られた『オイスターマイスター』は２体。よって、２体のトークンを特殊召喚する」

「またしても３体…！まさか…」

「そう、そのまさかだ。『超古深海王シーラカンス』と『オイスタートークン』２体、わたしのライフ半分を生贄に捧げ、最後の神『究極神帝ラー』を特殊召喚する！！！」

究極神オシリス　ＡＴＫ６０００
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
究極神帝ラー　ＡＴＫ∞

「こ、攻撃力無限大…！」

「『究極神帝ラー』の効果により、究極神が３体フィールドに揃っている時、相手のカードの効果をすべて無効にする。さらに、『究極神帝ラー』は戦闘では破壊されず、いかなる効果にも影響されない。そして、１ターンに１度、相手のカードを全て除外し、相手に∞のダメージを与えることができる」

「そ、そんなバカな!?相手のカードを全て除外し、∞のダメージを与えるだと!」

「バトルだ。『究極神オシリス』で『ヌビアガード』を攻撃。アルティメット・サンダーフォース」

ヌビアガードは、一瞬にして破壊されてしまった。

「『究極神オベリスク』で『メタルデビルトークン』を攻撃。アルティメット・クラッシャー!」

メタルデビルトークンも、オベリスクの一撃で破壊された。

「さあ、覚悟はできたか?」

「こ、降参だ!サレンダーする」

「『究極神帝ラー』の効果によって、互いにサレンダーすることはできない。神の攻撃から逃れることはできないぞ」

「くっ…!」

「『究極神帝ラー』のダイレクトアタック!ゴッド・アルティメット・フレアー!」

巨大な火炎の砲撃が、フランツに向かい放たれる。
フランツは直撃だけは避けようと逃げるが、人間の足では大したスピードは出ない。
もっとも、ディスペアはわざと外したが…。それでも炎はフランツ

に掠った。

「ぐわあああああああああ！」

フランツ　ＬＰ３０００→－∞

一応ロキは、すぐに掠った部分に回復魔法をかけた。大した回復魔法ではないのでこのくらいが限度だが…。

～～～その後～～～

フランツはペガサスに連れられて帰った。

～～～校長室～～～

「あ、ディスペア」

「スクルドか…目が覚めたようだな」

「あ、あの人は…？」

スクルドは少しおびえた表情で言う。

「ディスペアが本気で倒したよ」

それに対し、ロキはどや顔で言う。

「……わたしは疲れた…少し購買に行ってくる」

その後、購買にて…

「これを1つもらおう」

「あいよ」

ディスペアはパックを1つ買って開けた。

『カクタス』『モリンフェン』『ツインテール』『コケ』『混沌帝龍－終焉の使者』

「……これが絶望か」

一方でロキが開けた未来の10枚入りパック…『氷結界の龍トリシューラ』『ゴヨウ・ガーディアン』『氷結界の龍ブリューナク』『ミスト・ウォーム』『A・O・Jカタストル』『ゾンビキャリア』『グローアップ・バルブ』『BF－疾風のゲイル』『魔轟神レイヴン』『霞の谷の戦士』

「♪」

第１０４話　神ｖｓ神（後書き）

次回「番外変　～ロキの逃げる頃に～」
※誤字にあらず。

ディスペアはロキを追いかけて雛見沢に迷い込むようです。
※作者が弾けてディスペアを暴れさせたかったんです。時系列はカオスです。ご注意ください。『ひぐらしを汚すんじゃねぇバカヤロウ』という方は飛ばしていただいても本編には差し支えありません。
…原作キャラは極力出しませんが…

番外変　～ロキの逃げる頃に～（前書き）

思ったよりディスペアを暴れさせることができませんでした。
あるぇ～？（・３・）どうしてこうなった…
カオス＆オリジナル設定ありです。要注意！

番外変　～ロキの逃げる頃に～

～～～夜の雛見沢～～～

ここは雛見沢。僕は、ディスペアと一緒にトールから逃げてきた。
理由はトールのクッキーを僕が食べてしまい、トールが怒ったから。
ディスペアは、理由なしにただ面白そうだからという理由だ。ちなみにこの世界は悪魔でも来ることは無い。危険度ＭＡＸの凶悪な世界だ。ただ、ここでも手に入れたい道具はあるから好都合と言えば好都合だ。でも、ここはさっきも言ったとおり危険度ＭＡＸ。

「ああ、早速僕達に死亡フラグがたったよ」

わたしはロキが指さした方向を見る。すると、金属バットで１人の人間が殴られているシーンを見てしまった。そして、運の悪い事に黙ってその場を立ち去ろうとしたが、木の枝を踏んでしまい、それに気づいた人間は口封じのためかわたし達を殺そうと狙ってくる。しかし、金属バットごときでわたしを殺すことなどできない。ロキはどうだか知らないが…。
最初にバットで狙われたのはわたしだ。食らってもいいが、癪に障るのでハルバードランス『アーティス』を盾にして防ぎ、カウンターの要領でハルバードランスを突き付ける。
しかし、錯乱状態の人間には牽制は通じなかった。

「…逃げるぞ、ロキ。正直、今は神々の影響力により殺しても死なない気がする」

「お、ＯＫ」

空を飛んでは人間に見られる可能性があるので、森の中を走って逃げる。
しかし、さすがは影響力による補正、異常に走るスピードが速い。
ところどころアーティスで金属バットを防ぎながら逃げなければならない。なんかカメラでわたし達の写真を撮っている男がいるが、早く逃げるか加勢して欲しいものだ。金属バットを砕かないのは、この後の物語的な展開を考えてのことだ。

「やれやれだな。危険度ＭＡＸは伊達ではないか」

わたしはゴッドモーメントを展開し、カードを1枚セットする。

「永続トラップ『スクリーン・オブ・レッド』」

バットを持った金髪の少年は、鏡に囲まれた。そして、わたしは後ろに回り込み、首の後ろをアーティスの柄で突き、気絶させた。

「ロキ、今の記憶を消せ」

「分かったよ」

僕もこれ以上覚えられているのも嫌だし…。
金属バットは少年のそばに置き、見えないように隠しておいた。

～～～次の日～～～

「結局、一晩明かしてしまったな」

「ふあぁ…しかもずっと起きたまま…体力的には人間よりの僕には辛い」

さっきから村人にやたらとみられているのもうざったい。確かに周りからは浮いてるけどさ…。

「おや、あんた達見ない顔だね。どこからきたんだい？」

田舎の人間は都会とは違う。人見知りなどせずに聞いてくる。

「…異世界より、探し物のために」

村人は『こいつ、頭おかしいんじゃないか』と言う眼差しを向けてくるが、事実は事実。

「ディスペア、歩くのも面倒になってきた～…腹も減った」

「…仕方があるまい、『機皇神龍アステリスク』召喚！乗れ、ロキ」

村人は目を丸くして腰を抜かした。

「サンキュー」

電線が無いため、アステリスクで低空飛行することができる。主人公サイドの目に留まらないようにするには歩くのが1番ではあるが、捕まらないようにするならこれが1番だ。ロキにとりあえず持っていたリンゴを渡して移動する。

「ん？あれは…」

ロキは何かに気付いたのか、ディスペアに何も言わずにアステリスクから降りて、どこかに飛んで行ってしまった。ロキが行ったのは、ゴミの山…鉈を持っている少女がいるが、ロキの探し物はそこにあるらしい。

その後…

「……ロキ？」

ディスペアがロキがいなくなったのに気づくのにはもう少し時間がかかった。

～～～ロキサイド～～～

「やっぱりここにあると思ったんだけどなぁ…？」

「どうしたのかな？かな？」

「ああ、ちょっと探し物…って、キミ誰？というか、なんで鉈なんか持ってんの？…まあ、名前も素性も知ってるから言わなくていいよ」

～～～ディスペアサイド～～～

「ロキが…消えた？」

まさか…いや、そんなはずが…仕方が無い、合図を出してみるか…。
アーティスの先端を空に向け、砲撃を放つ。これで見えてくれればいいが…。

～～～ロキサイド～～～

「ん?ディスペアの合図か。じゃあ、僕はそろそろ行くよ。興味深い話をありがとう」

僕はこの村の事についていろいろ教えてもらった。まあ、真実を知っている僕からすれば一部偽っている部分があるのもわかったけど。

「え?え?」

僕はきょとんとしている目の前の少女に別れを告げて飛び立った。
全く、ディスペアもすぐに僕に気付いてくれると思ったんだけどな…。

「『機皇帝スキエル∞』『スキエルT』『スキエルA』『スキエルG』『スキエルC』を召喚!合体しろ、機皇帝スキエル!」

ロキは、機皇帝スキエル∞を召喚して乗り、ディスペアのもとに向かった。

「やれやれ、疲れた。結局手に入れられたのはたった少しの神々の金属…まあ、レア物ではあるからラッキーかな」

～～～デュエルアカデミア・スクルドサイド～～～

「あ～あ…つまんないよ～」

なんで誰も相手してくれないんだろ…嫌われたのかな？

「それでも…いいか。一緒にいてくれるだけでも幸せだしね」

『スクルド、聞こえるな？』

突然、私にディスペアから神の鏡を通して連絡が来た。

『ディスペア！？どこにいるの！？』

『危険度ＭＡＸ、雛見沢。スクルドは危険なところに連れて来たくなかったのだが、そうもいかないらしい。悪いが、急いできて欲しい。残りの２人も呼んでくれ。怖ければ来なくていいと伝えてくれ』

『わかった！すぐにいく！』

やった！別に嫌われてたわけじゃなかった！

～～～ディスペアサイド～～～

「呼んでよかったの？」

「……」

正直、ノルン三姉妹…特にスクルドを呼ぶのはあまり納得できるものではなかった。なにしろ悪魔ですら来たがらない世界。下手をしたら、死んでしまう。

「ロキ。ノルンの得意な魔法は？」

「時間魔法だったと思うけど…それがどうかしたの？」

「この空間、おかしいと思わないか？まるで無数の並行世界が交差し、時空間の捻じれが生じている」

危険度ＭＡＸの理由はそれだ。無数の並行世界が交わって成り立っている世界など他には類を見ない。そして、並行世界が交わっているということは時空間に異常が起きているということ。究極神をテーブルに置いてきてしまった今、時空魔法を使用できる神が後３人は必要…。

「！！」

「この捻じれを抑えるほどの時空魔法を使用できる神は、わたしの中ではたったの３人…」

それがノルン三姉妹。時間魔法が得意な３人ならこの捻じれを一時的に直線的にすることができ、その間だけ他の世界へのゲートがつながる。

ちなみに、こうしないとわたし達が永遠に帰れない。先程も言ったとおり究極神はテーブルの上に置いてきてしまった。この時空間に

閉じ込められてしまった今、こうするしか方法が無い。

そして、暫く経った後、ノルン三姉妹が到着した。

「じゃあ、軽く説明するよ。今から指定する位置に、1人ずつ行ってそれぞれ隣り合う神のいるところに神力を送り込むんだ。これで結界を完成させて時空に穴をあけてこの空間から脱出する。これがその場所ね。各2ｋｍ程の距離だから少し大変だけどよろしく」

そして、ロキとノルン三姉妹が転移して行った後…

「オラこんな村嫌だーーーー！！」

1人の村人がどう考えても狂った顔芸で農地を耕す道具『くわ』を構えてディスペアに襲いかかってきた。

「！！」

ディスペアは慌ててインフィニティ・アイを起動し、アーティスの柄でくわを防ぐ。

しかし、狂った村人は1人だけではなかった。何人もの村人が来るって襲いかかってくる。

「さすがは危険度ＭＡＸ…神々の侵入をも許さないか…」

わたしのところに来たということは恐らくはスクルドやロキのところにも…戦闘力が元からそれなりにあるウルズとヴェルザンディーならともかく、スクルドとロキは昨日今日の労力で神力をある程度失っている…！素の戦闘は期待できないな。

［ロキ、急いでスクルドの援護に回ってくれ］

［今は無理だね。こっちも手が離せないんだ］

［スクルドは無事か？］

［今連絡したけど、大丈夫らしいよ。短剣と長剣で頑張ってるみたい］

［お前は大丈夫なのか？］

［僕がこの程度でやられるわけないじゃん。あ、それともう1つ。ウルズとヴェルザンディーは余裕らしいから問題ないって。じゃあね］

さすがにノルン三姉妹と言う肩書きは伊達じゃないか。
わたしの方が一番問題だったか。この数は明らかに異常だ。

「しかも殺していいわけではない…悪魔よりも質が悪い」

わたしはゴッドモーメントを起動する。

「人間相手に使う日が来るとはな。永続トラップ『スクリーン・オブ・レッド』発動」

わたしの周囲に鏡が現れ、村人は攻撃対象を見失って混乱する。
そして、４人から連絡が入り準備完了だとのこと。

「よし、行くぞ」

天空に撃ちあげた砲撃が合図だ。

「来たな」

神力の結合を確認し、中心で交差させる。後少しで結界は完成する。しかし、ここは危険度ＭＡＸの世界。そう簡単にはいかなかった。

「バカな…『スクリーン・オブ・レッド』が砕けた…だと？」

ライフカウンターを見ると、ライフは既に１０００ポイント。コストとして払うことのできるライフは既になかった。

「しまったな…」

結界の創造自体は手を使わなくてもできるので、この場から1歩も動かなければ問題ない。

だが、侵入者の排除に、この世界は主人公なる人物さえも使うらしい。

鉈を持った少女が常人ではありえない身体能力を駆使して襲ってくる。

「くっ…」

アーティスで薙ぎ払い、風を起こして吹き飛ばす。が、少女1人は吹き飛ばされなかった。

鉈を振りかざしてくる。わたしはアーティスの刃で鉈を砕こうとする。だが、反撃ついでなのか注射器を撃ちこんでくる。

「わたしに薬物など通用しない。ちぎれ飛べ！」

アーティスの刃で首を狙って振りかざす。しかし、空中にもかかわらず、少女は首を反らしてかわし、地面に背中から倒れ、信じられないスピードで起き上がる。

結界完成まであと2分…！村人も戻ってきた。

「クッ…オメガブラスター！」

アーティスの先端から神力の弾丸を放ち、空中で爆発させる。爆風が村人を吹き飛ばし、気絶させる。

「この…」

しかし、主人公サイドのこの少女は手を休めることが無い。

「『マシュマロン』を守備表示で召喚！」

鉈をマシュマロのようなモンスターが防ぐ。

マシュマロンは戦闘では破壊されないため、鉈で斬ろうとしても弾き返される。

「あと…1分」

マシュマロンを引っ込める。周りに従えているモンスターがいれば、結界が結合できなくなってしまう。

「ク…このわたしが押されている…」

冗談じゃない。人間にこのわたしが押されているなど…あと２０秒。

「わたしに…敗北の２文字は無い！」

ディスペアはアーティスで鉈の側面を殴りつけ、その衝撃を利用してレナを吹き飛ばした。

「あと…５秒」

しかし、その時突然金属バットが飛んできた。反応が遅れ、肩に当たる。

衝撃は相当のもので、怪我こそはしないものの…

「ぬうううううう！！」

ディスペアは後少しで後ずさりそうになる。

「クッ…うおおおおお！」

結界完成と同時にディスペアが動き、なんとか結界が起動した。

「うあああああああああ！」

わたし達５人は結界の光に巻き込まれ、気づけば見覚えのある部屋…校長室にいた。

「あ、危なかった。後少しで結界が砕けるところだった」

しかし、問題が１つ。

「オラこんな村嫌だーーー！」

1人だけ、憑いてきていた。※誤字にあらず。

この後、この村人には雛見沢に帰っていただきました。

ロキはトールから逃げていたが、トールはロキが危険度ＭＡＸの世界に逃げ込んだと聞くと呆れ顔だった。

ちなみに帰ってきた時は、わたしがスクルドの下敷きに、ロキがウルズの下敷きになっており、ヴェルザンディーだけは何事も無く普通に立って帰って来れた。

番外変　～ロキの逃げる頃に～（後書き）

次回『番外編　甘く苦い想い』

今日の名言『オラこんな村嫌だーーー！』

番外変…もっと長く書くつもりだったんですが、あまり深く入り込むと長すぎるのでまとめられるところをできるだけまとめてオリジナルの設定を加えました。

番外編　甘く苦い想い（前書き）

どうも。バレンタイン編です。
ちなみに作者は昨日ユベルデッキを組みました。まだ戦ってはいません。

今日の作者の出来事

みなさん、バレンタインはチョコレートをもらえましたか？
作者の脳にはこんなひとことが響いてきました。
『希望とは、幻想にすぎないのです』。…その言葉は見事的中、何ももらえませんでした。当り前と言えば当たり前ですがね…ｏｒｚ
義理チョコを期待したことすらおろかでした。ハッハッハッハッハ、トール。お前も道連れダァァァァ！

それと、時械神メタイオンの顔をどうにかしてください。夢に出てきて困っていますｗ

番外編　甘く苦い想い

～～～デュエルアカデミア・2月13日～～～

「はぁ…スクルド楽しそうだね」

スクルドはさっきからチョコレートを作っている。ちなみに、スクルドは料理は上手いけどお菓子作りは全然ダメだ。ディスペアはその逆で、料理が壊滅的だがお菓子作りができる。理由は昔、ノルン三姉妹の家に通っていた時期があり、毎日作って持って行っていたからだと言う。

「うん！ロキは楽しくないの？」

そんなの答えは1つに決まっている。

「君の手伝いなんかしてても面白くもなんともないね」

「ひどーい…また失敗した…どうしよう」

「ディスペアに手伝ってもらえば？」

僕はそう言うのはなぜか得意なディスペアに手伝ってもらえばいいと思って聞いてみる。

「ダメ！」

しかし、スクルドはいきなり声を大きくして拒否した。

「な、なんでいきなり怒鳴るんだよ」

「絶対秘密！明日がどういう日かロキは知ってるでしょ」

「ああ、だからチョコレートを作ってたんだ…すっかり忘れてた」

明日は２月１４日。人間界ではバレンタインデーだ。スクルドが人間界にいる時に、その特有の文化を楽しむのは昔からだ。神界ではそんな文化ないから新鮮らしい。

「ん？何かしているのか？スクルドとロキは」

「知らんな。だが、わたしすらも入れないからきっとディスペア、お前もダメだろう」

「……そうか。ところで、さっきから購買で女子が占拠しているんだが何故か知らないか？」

購買には男子生徒がほとんどいない。十代とその仲間ぐらいだ。

「それも知らんな」

本当は知っている。しかし、スクルドに口裏を合わせるように頼まれた。

ディスペア以外は明日がどういう日なのか知っている。ディスペアだけが知らないのは、スクルドと人間界に来た時以外は日々戦いに明け暮れていて人間界の文化を知らないからだ。ウルズは義理でロキに、フレイアはわたしに用意しているようだ。ヘイムダルすらも

ヴェルザンディーから義理でもらうそうだ。こうなると必然的にもらえないのは1人…

「明日こそ、明日こそ、明日こそ、明日こそ…」

念仏のように『明日こそ』と繰り返しているトールだけだ。明日ははじけるだろうから要注意だ。

「ううぅ〜……また失敗した」

「もう諦めなよ…僕が疲れたよ」

「ぜぇぇぇったいダメ！」

こんな感じで今日は過ぎて行ったらしい。

〜〜〜2月14日〜〜〜

「今日こそは今日こそは今日こそは今日こそは今日こそは今日こそは…」

「黙れトール。さっきから何が『今日こそは』なんだ？」

「はぁ…察してあげなよ、ディスペア。トールの病気だよ」

「成程」

いつも通り誰からかの告白を待っているのか。

「多分、ディスペアと僕たちじゃ考えてることがちょっと違うだろうけどね」

ディスペアはきっと『いつも通り告白を待ってる』と思ってるんだろうけど、今日のトールはチョコレートが欲しいらしい。

「???」

「ま、気にすることじゃないよ。僕はウルズが待ってるって言うからちょっと行ってくるね。正門前にいるらしいから」

こうして、ロキはディスペアの疑問顔など無視して正門に向かった。

その頃…

「ううぅ〜…ディスペア、おいしいって言ってくれるかな…？」

「何だ、まだ渡していなかったのか？赤くなってないで早く渡さないと、ディスペアは他の者からもらってしまうぞ」

「！！それはダメ！すぐに渡してきます！」

オーディンに言われ、スクルドは慌てて走り出した。

〜〜〜正門〜〜〜

「やれやれ、君も人間に影響されたのかな？」

「まあ、そんなところね。はいこれ、義理だけど」

「はっきり義理って言わなくてもいいじゃん。ありがたくもらっておくけどね。キッヒャッヒャ」

「ところで、ヘイムダルは？」

「ああ、ヴェルザンディーが義理で渡しに行ったわ。今頃大はしゃぎしてるんじゃないかしら？」

「（あのエロゲデッキ使いが、ヴェルザンディーからチョコレートをねぇ…キッヒャッヒャ）ふ～ん…まあいいや、後で感想を送ってあげるよ」

「待ってるわ。じゃあね、ロキ」

僕は、ウルズと別れた後、トールに会いに校長室に行った。

「ロキか、何の用だ？」

「エロゲデッキの使い手がチョコレートもらったってさ」

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！ヘイムダルがチョコレート！？何かの間違いだろう！」

「ん？チョコレートがどうかしたのか？」

「あ、ディスペア」

「で、チョコレートが何だと言うんだ。欲しいならここに1枚だけ板チョコがある」

テーブルに置いてあったチョコレートだ。

「そ、それは我が我のために買ったチョコレートだ…」

「うわっ、悲しい、悲しすぎるよトール。ヒャッハッハッハハハハ！」

「笑うなあああああああああああ！」

トールがロキにからかわれているところで、スクルドから携帯のメールが来た。先日、校長に渡されたものだ。『鏡ばかり使っていると怪しまれるから、生徒の前ではこれを使いなさい』ということだ。

『ディスペア、その…理由は聞かないで校舎の裏まで来てくれないかな？お願い！』

……スクルドが理由を話さないと言うなら別にいい。黙って行こう。

「理由、聞かないんだ」

「スクルドにせよ誰にせよ、友が理由は聞かないで欲しいと言うならわたしは聞かずに頼みを聞く。頼まれたことを実行するかどうかは別だがな」

「ふ～ん…で、行くんだ」

「まあ、幼少期からの付き合いだからな」

「（はぁ…少しは疑ったらどうなんだよ?信用し過ぎ。まあ今回も怪しい事じゃないけどね）」

～～～校舎裏～～～

「で、何の用だ?わたしを呼び出したということはきっと何かあるということだろう?」

「あ…うん」

スクルドは顔を赤くする。ディスペアは何のことか分かっていないので当然分からないという顔になる。

「これ、もらって欲しいんだけど…ダメ…かな?ダメならいいんだ」

「これは…?」

スクルドが渡してきたのは、赤い包装紙に包まれた綺麗な箱だ。

「じゃ、じゃあね!受け取ってくれてありがとう!」

スクルドはそれだけ言うと、顔を真っ赤にして走って行ってしまった。

わたしはスクルドが去った後、包装紙を開け、箱のふたも開ける。

すると、１枚の紙が出てきた。

“ディスペア、これからもよろしく！そんなに上手にできなかったけど、頑張って作ってみたんだ。だから食べられたら食べて。感想待ってるね！　ｂｙスクルド”

「スクルド…」

チョコレートの形も、多少歪んではいるが、そのチョコレートをみれば徹夜して作ったことがわかる。１つだけ食べてみる。

「……不思議だな」

味は、素材が素材だから市販の物と変わらないはずだが、全然違う。手作りのチョコレートは、本気の気持ちがこもっていた。ディスペアは、食べた後に…

「…いただくのが、もったいなかったな」

こう思った。『どんなに高級な物よりも、こっちのほうがずっと価値がある』と。

その感想は、当然。

「スクルド、美味かったぞ」

この一言だ。ディスペアは、最初から今日がどういう日なのか知っていたが、あえて何も言わずに過ごしていた。そうすることで、少しはスクルドの気が楽になるだろうと考えたからだ。当然、ロキに後で２月の１４日がどのような日か説明されるので初めて聞くふり

をしていた。

～～～トールサイド～～～

「誰か～～～～～～！義理でもいいから、くれ～～～～～～！」

叫びながら、板チョコを食べていた。

番外編　甘く苦い想い（後書き）

今回は短かったです。これぐらいしかネタがなかったのでした。あまりカオスにするとスクルドがかわいそうだし、パッとしていた方が分かりやすいので…。

※キャラ設定に多少書き加えました。書き加えたキャラ：ディスペア、スクルド、ヘイムダル。

第１０５話　フライングデュエル！アクセラレーション！！（前書き）

どうも。オーディンの固有デッキの１つ目が登場します。

最近の出来事

いよいよ受験です。まあ、落ちることは考えてませんが…そんなこと考えてたら本当に落ちちゃいますからねｗ

第１０５話　フライングデュエル！アクセラレーション！！

～～～オーディンサイド～～～

「これで、調整完了だ」

「何が？」

「わたしのルーン・オブ・ファーストウィングはもう使用不可のレベルまで酷使していた。だから、新しいＤ－ホイールを造った」

オーディン達の北欧の三戦車は、なのは達との戦いで既に限界を超えていたのだ。

「ふ～ん…そういえば、トールのも僕のもダメだったような気がする…後で造っておこう」

まあ、あり得ないほど長く使ってきたからもうお疲れだったみたいだね。

オーディンの新しいＤ－ホイールは、ハラルドの物に似ている。なんでＤ－ホイールまでそっくりにしたんだよ。

「では、さっそく試してくるとしよう」

～～～海岸～～～

「ディスペア…」

「ん？…オーディンか。そんなものを持って一体何をしに来た？」

オーディンは北欧の三戦車が壊れたことと、新しいＤ－ホイールを造り上げたことをディスペアに告げた。そして、相手をして欲しいという要求も。

「…いいだろう。準備しろ」

ディスペアに言われ、オーディンはセッティングを完了させる。すると、オーディンの神力がＤ－ホイールを通して具現化し、巨大な翼となった。

「ディスペア、お前のＤ－ホイールは？」

「わたしはこのままでいい。行くぞ、オーディン！」

「「ライディングデュエル、アクセラレーション！」」

「先に言っておくが、わたしは固有デッキを使用している。１つ目だがな」

「オーディンの固有デッキか」

それも１つ目…と言うことは、恐るべきパワー押しのデッキ。

「先攻はわたしがもらう」

ディスペア　スピードカウンター　０→１

この天空を自由に飛行し続けるオーディンのＤ－ホイールは、地上から見上げれば神々しい。だが、Ｄ－ホイールなどなくともわたしはこのまま戦える！

「わたしのターン、わたしは『機皇兵スキエル・アイン』を守備表示で召喚！カードを１枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
スピードカウンター×１
フィールド
機皇兵スキエル・アイン　ＤＥＦ１０００
伏せカード×１

「わたしのターン…ディスペア、このＤ－ホイールのデュエルディスクはわたしの固有ディスクだ。現実のダメージが発生する。今からでも遅くはない。万が一も考えＤ－ホイールに乗れ」

オーディン　スピードカウンター　０→１
ディスペア　スピードカウンター　１→２

「その必要はない。わたしはハルバードランス…アーティスがあればそれで十分」

「ならば遠慮はしないぞ。わたしは永続魔法『Ｈｓｐ－ＳｉｎＨＹＰＥＲＮＯＶＡ』を発動。このカードの効果により、発動時にデッ

キから『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』を除外し、『Ｓｉｎ』モンスターはフィールド上に1体しか存在できない効果は無効になり、このカードがフィールドを離れた場合、わたしのフィールドの『Ｓｉｎ』と名のつくモンスターをすべて破壊する。そして、このカードの名前は『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』として扱う。
さらに『Ｈｓｐ―おろかな埋葬』。スピードカウンターが0以上ある時、デッキからモンスターカードを1枚墓地に送る。わたしは『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』を墓地に送る。
『Ｓｉｎパラレル・ギア』を召喚する。このカードのシンクロ素材は、手札の『Ｓｉｎ』モンスター1体でなければならない。手札のレベル8『Ｓｉｎ青眼の白龍』にフィールドのレベル2『Ｓｉｎパラレル・ギア』をチューニング。シンクロ召喚、罪深き龍『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』」

「『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』…本来『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』が無ければ破壊されるが、『ＳｉｎＨＹＰＥＲＮＯＶＡ』は『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』として扱うため、『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』は自壊しない…」

Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンの攻撃力は、その召喚条件の軽さに割に４０００という破格の数値。そして、パラドクス・ドラゴンを葬った場合、オーディンが先程おろかな埋葬の効果によって墓地に送ったＳｉｎトゥルース・ドラゴンが召喚される…。迂闊には破壊できない。

「さらに、エクストラデッキから『サイバー・エンド・ドラゴン』を除外し、手札より『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』を特殊召喚。『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』の効果により、このカード以外のモンスターは攻撃できない。
『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』で守備表示の『機皇兵スキ

エル・アイン』を攻撃。エターナル・エヴォリューション・バースト」

機皇兵スキエル・アインに、３つの火炎弾が放たれた。
ディスペアは、スキエル・アインを貫いて自身に向かってきた火炎弾をバリアではじき返す。

「くっ…」

究極神の防御壁は…この程度の攻撃では傷１つつかないぞ、オーディン！

ディスペア　ＬＰ８０００→５０００

「な！『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』は貫通能力があるのか！」

「そうだ。お前達の持っている『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』は貫通能力を持っていることはないだろうが…わたしはカードを１枚伏せ、ターン終了だ」

オーディン
ＬＰ８０００
手札×０
スピードカウンター×１
フィールド
Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
ＳｉｎＨＹＰＥＲＮＯＶＡ
伏せカード×１

「わたしのターン！」

右腕に浮いているゴッドモーメントからカードを1枚ドローし、手札置きにセットする。この音速の中では、手に握っていたら吹き飛ばされる。

ディスペア　スピードカウンター　2→3
オーディン　スピードカウンター　1→2

「わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃表示で召喚。さらに手札より『Ｕｓｐ－機皇召集』発動。デッキより『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する。そして、『機皇神マシニクル∞？』は1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を吸収する。『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』を吸収する！」

「トラップ発動『Ｓｉｎ　Ｃｌａｗ　Ｓｔｒｅａｍ』。わたしのフィールドに『Ｓｉｎ』と名のつくモンスターが存在する場合、相手フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。わたしが破壊するのは『機皇神マシニクル∞？』だ」

機皇神マシニクル∞？は、無数の光弾によって破壊された。

「くっ…『機皇神マシニクル∞？』がここまで簡単に…ならば伏せカードオープン、トラップカード『機皇帝の起動』。自分フィールド上の『機皇』モンスターが破壊された時、手札またはデッキから『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』のいずれか1体を特殊召喚し、破壊する！わたしは『グランド・コア』を特殊召喚し破壊！
そして、このカードが効果によって破壊された時、自分フィールド

上のモンスターをすべて破壊し、デッキ・手札・墓地からレベル１の『機皇帝グランエル∞』『グランエルＴ』『グランエルＡ』『グランエルＧ』『グランエルＣ』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝グランエル！」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ５０００

「『機皇帝グランエル∞』の攻撃力と守備力はディスペア、お前のライフと同じになる」

５０００…わたしの切り札『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』と互角…。

「そう、そしてわたしのライフは５０００ポイント、機皇帝グランエルの攻撃力も５０００だ。『機皇帝グランエル∞』で『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』を攻撃。グランド・スローター・キャノン！」

グランエルは、赤い目でＳｉｎパラドクス・ドラゴンをロックオンし、巨大な砲撃を放った。

「やるな…」

オーディン　ＬＰ８０００→７０００

しかし、オーディンは笑っていた。ハラルドらしく悪い顔にしか見えない。ディスペアは、ただオーディンを睨んでいるのみ。

「わたしのフィールドに存在する『Ｓｉｎ』と名のついたモンスターが…戦闘または効果によって破壊された時、わたしのライフを半分払い、墓地または手札に存在する『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』

を特殊召喚する!!偽りなき、罪の真実…『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』!!」

オーディン　ＬＰ７０００→３５００
Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

遥か天空より、全身が黄色の巨大なドラゴンがその咆哮と共に姿を現す。

「だが、例え攻撃力が５０００あろうとも無駄な話だ。『グランエルＡ』の効果発動。戦闘で破壊したシンクロモンスターを吸収する。よって、『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』を吸収する!」

グランエルが次元に穴をあけ、墓地に送られたＳｉｎパラドクス・ドラゴンを無理やり吸収した。

「そして、吸収したシンクロモンスターの攻撃力分、攻撃力をアップする」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ５０００→９０００

「わたしはカードを2枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ５０００
手札×２
フィールド
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ９０００
＋Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン
グランエルＴ　ＡＴＫ５００

グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００
伏せカード×１

「わたしのターン」

オーディン　スピードカウンター　２→３
ディスペア　スピードカウンター　３→４

ディスペアのフィールドには、レベル１ながらも攻撃力９０００を備えている機皇帝グランエル∞がいる。それに対し、わたしのフィールドには攻撃力５０００のＳｉｎサイバース・ドラゴンと攻撃力４０００のＳｉｎサイバー・エンド・ドラゴン。しかし、Ｓｉｎトゥルース・ドラゴンは相手モンスターを戦闘で破壊した時、相手フィールド上の表側表示モンスターをすべて破壊する。だが…あの伏せカード。何か仕掛けているのか？それとも囮か？

「トラップ発動！『機皇輪廻』！わたしのフィールドに『機皇』が存在せず、墓地に『機皇帝』『機皇兵』『機皇神』が各１体以上存在する時、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「だが、『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』が効果によって破壊されたことで、ライフを半分払い墓地から『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』を特殊召喚する！」

オーディン　ＬＰ３５００→１７５０

「ほう…」

さすがにここでフィールドをがら空きにするような真似はしないか。

「わたしは『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』で『グランエルＴ』を攻撃！ジェノサイド・トゥルース！」

放たれたブレス攻撃は、機皇帝グランエルを飲み込んで大爆発を起こした。ディスペアはアーティスでブレス攻撃をガードし、素手で殴りつけてはじいた。

ディスペア　ＬＰ５０００→５００

「ほう…ブレス攻撃を素手で跳ね返すとは…」

しかし、機皇帝グランエルは破壊した。攻撃力９０００のモンスターがいなくなった今、恐らくディスペアに逆転の手はない。

「オーディン、君の考えていることはわたしにはわかっている。トラップカードオープン『機皇神化』。わたしのフィールド上に存在する『機皇』と名のついたモンスターが破壊されたターン、わたしはデッキから『機皇帝』と名のつくモンスターカードを１枚墓地に送り、墓地から『機皇神』と名のつくモンスター１体を特殊召喚する。その後、バトルフェイズを終了する。

わたしは、デッキから『機皇帝スキエル∞』を墓地に送り、墓地から『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する！君は『わたしに逆転の手はない』と考えているようだが、それは大いなる間違いだ」

「しかし、ディスペア。お前のフィールドのマシニクルは攻撃力４０００、わたしのＳｉｎトゥルース・ドラゴンには及ばない。わたしはカードを１枚伏せターンエンド」

オーディン
ＬＰ１７５０
手札×０
スピードカウンター×３
フィールド
Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン　ＡＴＫ５０００
ＳｉｎＨＹＰＥＲＮＯＶＡ
伏せカード×１

「わたしのターン」

ディスペア　スピードカウンター　４→５
オーディン　スピードカウンター　３→４

「わたしは『機皇神マシニクル∞？』を生け贄に捧げ、『機皇神帝エクシニクル∞』を特殊召喚する！」

「何！」

天空を飛行して戦っているが、それでもエクシニクルの胸のあたりの高さだ。地上４５ｋｍの高さでは、普通の人間ならば息苦しく、寒いだろう。

「『機皇神帝エクシニクル∞』、起動完了。特殊召喚時にデッキまたは手札から『機皇を１枚墓地に送る。わたしは、『機皇兵ワイゼル・アイン』を選択。そして、『機皇神帝エクシニクル∞』の攻撃力は、自分の墓地の『機皇』と名のつくモンスターの攻撃力の合計となる』

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ０→８８００

「『機皇神帝エクシニクル∞』で、『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』を攻撃。インフィニティーディスペア・カノン！」

「そうはいかない、トラップカード『Ｓｉｎ　Ｔｉｍｅ　Ｓｌｉｐ』！このターンのバトルフェイズを終了し、相手フィールド上のモンスターを全て手札に戻す！」

時間が逆戻りするかのように周りの風景がゆがみ、機皇神帝エクシニクル∞はチャージしていた砲撃をキャンセルした。

「『機皇神帝エクシニクル∞』の効果により、フィールドを離れる場合、代わりに墓地から『機皇』モンスター1体を手札に加えることができる。わたしは『機皇帝グランエル∞』を手札に加え、『機皇神帝エクシニクル∞』のバウンスを無効にする」

機皇神帝エクシニクル∞は、周りの空間のゆがみを波動を放って消し去った。

「わたしはこれでターンエンド。この程度でわたしを倒すことなどできはしない！」

ディスペア
ＬＰ５００
手札×２
スピードカウンター×５
フィールド
機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ８８００

「わたしのターン」

オーディン　スピードカウンター　４→５
ディスペア　スピードカウンター　５→６

「わたしは『Ｕｓｐ―ラストワールド』を発動。スピードカウンターを５つ取り除き、相手フィールド上のモンスターと墓地のカードを全てデッキに戻し、シャッフルする！さらに次のターン、相手がドローフェイズにドローしたカードがモンスターカードだった場合、相手は１０００ポイントのダメージを受ける」

オーディン　スピードカウンター　５→０

「何だと！！ならば『機皇神帝エクシニクル∞』の効果により、墓地から『機皇神マシニクル∞？』を手札に加え、バウンスを無効にする！さらに墓地からトラップカード『機皇輪廻』を除外し、もう１つの効果を発動！デッキから１枚ドローし、エンドフェイズに手札を１枚捨てる」

その後、ディスペアの墓地からカードが全て出てきた。ディスペアは、一握りでカードを全て掴み、デッキにセットした。

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ８８００→０

「『Ｕｓｐ―ラストワールド』を発動したターン、攻撃はできない。ターンエンド」

「エンドフェイズに『機皇輪廻』の効果により、手札から『機皇神マシニクル∞？』を墓地に送る…」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ０→４０００

オーディン
ＬＰ１７５０
手札×０
スピードカウンター×０
フィールド
Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「わたしのターン！」

ディスペア　スピードカウンター　６→７
オーディン　スピードカウンター　０→１

モンスターカードを引けば、ライフが５００しかないわたしは負ける…。

「…！！『Ｈｓｐ－機皇鏡』！」

「モンスターカードではなく、魔法カードだったか。だが…」

機皇神帝エクシニクル∞の攻撃力は４０００、Ｓｉｎトゥルース・ドラゴンの攻撃力は５０００、そして、手札にあるのは先程機皇輪廻の効果でドローしたカードと、その前から持っていたカード。さらに今ドローした『機皇鏡』。

「わたしは魔法カード『未来破壊』を発動し、手札の枚数分デッキからカードを墓地に送る。わたしの手札は2枚、よって2枚墓地に送る」

墓地に送られたのは『機皇帝グランエル∞』と『機皇帝スキエル∞』

…機皇神帝エクシニクル∞の攻撃力アップは望めない…。

「どうした？絶望したか？」

「まだだ、まだわたしには手が残っている！『Ｈｓｐ－機皇鏡』！墓地の『機皇』と名のつくモンスター1体につき、デッキの上から墓地に送る！わたしの墓地には3体の『機皇』がいる。よって3枚墓地に送る！」

1枚目『機皇帝ワイゼル∞』2枚目『機皇神龍アステリスク』…3枚目『機皇兵スキエル・アイン』

「！」

「『機皇兵スキエル・アイン』が墓地に送られたことで、『機皇神帝エクシニクル∞』の攻撃力がアップする！」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ４０００→５２００

「『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』を上回った…！」

「『機皇神帝エクシニクル∞』で『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』を攻撃！インフィニティーディスペア・カノン！」

「むううう！」

オーディン　ＬＰ１７５０→１５５０

「そして、オーディン…君が前のターンに発動した『Ｕｓｐ－ラストワールド』の効果を憶えているな？相手が自分のモンスターを戦

闘によって破壊した時、１度だけその攻撃力分のダメージを受ける。君には５０００ポイントのダメージを受けてもらうぞ」

「……」

オーディン　ＬＰ１５５０→－３４５０

オーディンのＤ－ホイールは、地上に着陸すると翼が消えた。ディスペアも後を追って地上に降りる。

「危なかったな。『機皇兵スキエル・アイン』が墓地に送られなければ君の勝ちだった」

「わたしの固有デッキが負けたのは、お前が初めてだ。今までは最悪、引き分けだったからな…」

そもそもこのデッキを使うことが少なかった。もう１つの固有デッキの方が出番はある。

「天空のデュエル、悪くなかった。…わたしは一足先に帰らせてもらう」

ディスペアは、先に校長室に戻った。

「……」

オーディンは、その後しばらく砂浜の風に当たっていた。

第１０５話　フライングデュエル！アクセラレーション！！（後書き）

次回『ジェネックス本番前夜』

オーディンの１つ目は『Ｓｉｎ』です。もう１つはかなり先になりそうです。

第１０６話　未来世界へ（前書き）

日常を書いてみました。やはり短いです…そしてごちゃごちゃですｏｒｚ

昨日のファイブディーズの感想

Ｚ－ＯＮＥは遊星だったのか！と、わざとらしく驚いて見ました。
そんなことよりもＭＣが神すぎる…あんた、漢だよ。

第１０６話　未来世界へ

わたしは、わたし達はいつもとは違い海岸にいた。それは、未来へ行くための準備のためだ。しかし、困ったことに今現在、未来へ行くための神の扉は使用できない。

「仕方が無い…５Ｄ′ｓは今頃チームラグナロクとのデュエル終了後のはず…しかし、この方法でいけばチームニューワールドとのデュエルは１日延期になる。それを覚悟で行くぞ」

「今更そんなこと気にしたってしょうがないだろ。僕達の事を知っている５Ｄ′ｓはこの時系列にしかいないんだから。１秒でもずれればもう僕達の事を知らないことになってる」

ロキの言うことはもっともだ。今更そんなことを気にしても仕方が無い。

（ＢＧＭ：プラシドの合体）

「『究極神オシリス』『究極神オベリスク』『究極神帝ラー』」

わたしはゴッドモーメントを起動し、３体の神を召喚した。
それぞれの神が、それぞれの色で形作られ具現化した。

（ＢＧＭ終了）

「相変わらず壮絶な光景だね…」

究極神は、その力によって時空の扉を開きわたし達は未来へ飛んだ。

～～～未来世界・チーム５Ｄ′　ｓサイド～～～

「さすがはブルーアイズマウンテン。勝利の後は味が違…うおおおおお！じ、地震か！？」

ジャックはブルーアイズマウンテンを飲んでいた。が、究極神出現の強い地震によってブルーアイズマウンテンはこぼれてしまった。周りの人間も、突然北の空が白金の色に染まったことに驚き見上げる。次に、東の空が赤く染まる。最後に、西の空が青く染まった。

そして、その中心より白い光の柱が現れ、ＰＯＰＰＯＴＩＭＥの前に俺達が前に遇ったことのあるディスペア達が現れた。

～～～サイドアウト～～～

どうやら無事に着いたようでなによりだ。

「ネオ・ドミノシティ住民のみなさん、ただいまの地震によってデュエルレーンが一部崩壊してしまいましたのでＷＲＧＰは１週間後に延期となります」

「どこが大丈夫なんだよ、どこが！」

「これでも十分問題ない方だろう。本当ならネオ・ドミノシティが消し飛ぶところだ」

時空間を飛んだ時に究極神の光臨の場所を海に移せたからよかったものの…何もしなければアーククレイドルなど関係なく物語が終わるところだった。

わたしはとりあえず周りを見回す。ここは多分、不動遊星が現在暮らしている住居の前だな。

「ん？ジャック・アトラス？」

わたしは喫茶店でコーヒーを飲んでいたジャック・アトラスを見つけ、声をかけた。

「お前達か」

「なぜ怒っている？」

ジャックは明らかにご機嫌斜めだ。

「お前達の召喚したアレのおかげでブルーアイズマウンテンが台無しになったのだ！」

ジャックが言う『アレ』とは当然今も空を覆い尽くす光を放ち続けている3体の究極神の事だ。

「つまり、わたしのせいでこうなったのか。それはすまない事をしたな…店主、ジャック・アトラスにブルーアイズマウンテンを箱ごと渡してくれ。代金はわたしが支払う」

「は、はいただいまー！」

店主は慌てて店の中に駆け込み、ブルーアイズマウンテンのダンボール箱をとってきた。

「お会計４５００００円になります」

ディスペアは代金を支払い、ジャックにブルーアイズマウンテンの箱を渡した。

「これで、無かったことにして欲しい。他に何か要求があるなら聞こう」

しかし、ジャックは返事をせずに涙ぐんでいた。どうやらそれほどブルーアイズマウンテンを箱で手に入れられたのが嬉しいらしい。

そして、ダンボールを渡した直後にＤ－ホイールに乗ったクロウ・ホーガンが現れた。

「あ、ジャックてめえ、それどうしたんだよ！」

「フン、ディスペアにもらったのだ！」

相変わらず傲慢な態度のジャックにクロウはため息をつく。

「悪いな、ジャックが迷惑をかけて…」

「気にするな。迷惑をかけたのはわたしの方だ。わたしが究極神を召喚したせいで、ジャック・アトラスは至福の時間を台無しにされ

てしまったようだからな」

「じゃああれはお前が召喚したっていうのかよ!?」

「そうだ。わたしのデュエルディスクを見ればわかると思うが…」

ディスペアは究極神を戻し、デッキを取り出した。

「お前達は何の用でこの世界に来たのだ?」

ジャックは突然ディスペアに聞く。ディスペアは、既にどこかへ行ってしまった北欧の三神はともかく、スクルドを少し退席させ答える。

「スクルドに何か買ってやろうと思ってここに来た。未来ならば品物が豊富だからな。前に2月の14日にチョコレートをもらった返しのようなものだ。3月にはもう1度返すらしいが」

「ジャックに見習わさせたいぜ」

「何だと!」

クロウとジャックのいつもの口論が始まったところで、遊星が帰ってきた。どうやらどこかの修理に行っていたらしい。

「お前達、本当は明日が決勝戦のはずなのに随分と余裕だな」

延期になったが。

「まあな。準備はできてるしな」

「俺の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』が機皇帝など粉砕してくれる！」

「これは頼もしいな。わたしはそろそろ行かせてもらうぞ。スクルドが拗ねてしまうのでな」

ディスペアは、一言５Ｄ′ｓに残し、スクルドを連れて街に出かけた。

～～～ネオ・ドミノシティ、繁華街～～～

「やはり過去とはレベルが違うな。これだけあれば、目的の物はありそうだ」

ディスペアは、とりあえず近くにあった喫茶店に入ることにした。

中に入ると…

「アキ姉ちゃんは何がいい？」

「そうね…紅茶かしら？」

「……」↑ディスペア

「楽しそうだね」

「お客様、何名様でしょうか？」

「あ、2人だよ」

スクルドが店員の質問に答えた。ディスペアは、黙って案内された奥の席に座る。ディスペアの座っている位置は、アキや龍可、龍亜からは見えない。…肩幅が広いせいで多少見えそうになったりするが。

ディスペアとスクルドは、紅茶を注文した。ディスペアは黙っていただけだが、スクルドが勝手に頼んだ。しかし、ディスペアは自分のミスに気付いた。自分の姿は龍亜達に見えなくても、スクルドの姿は見えてしまうのだ。そして…

「あ、スクルド姉ちゃん」

ですよねー…とディスペアは言葉には出さずにつぶやき、目を開けた。

「あ、龍可ちゃんと龍可君…あれ?どっちがどっちだっけ?」

「そのぐらいは外見で判断できるぞ。スクルド。服の赤いほうが龍可、青が龍亜だ」

「ああ、そうだったっけ?ごめんね」

龍可がスクルドに気にしていないと言い、龍亜はディスペア達に聞こえないようにアキに耳打ちする。

「アキ姉ちゃん、遊星とデートするならこの2人を見ておいた方が…」

「少年、君はわたし達に聞こえないように話したつもりだろうがわたしには君が今何を言ったか聞こえたぞ？」

「いっ！？」

「ディスペア、なんて言ってたの？」

スクルドは興味本位でディスペアに聞く。そんなに深い意味はない。しかし、ここで紅茶が来た。なので、とりあえずディスペアは取っ手に指をかけようとする。…が。

「……」

指が入らない。カップ程度の大きさではディスペアの指は取っ手には入らない。なので、取っ手をつまむことにした。そして、その時袖からカードが1枚落ちた。龍亜がそれを拾う。

「あ、これ落ちたよ」

龍亜はディスペアにカードを見てから渡して、

「『無限狂蝕』？見たことないカードだな…」

と言った。ちなみにアキと龍可は会計を済ませて、龍亜を待っている。

「当然だ。お前達人間の世界にはないカードだからな。もう行け、待たせているんだろう？」

龍亜はうなずいた後、走ってアキ達と店を出た。

「さて、少し休んだら行こうか？」

「うん」

その後、暫くしてディスペア達は喫茶店を出た。

「ようやく、目的が果たせそうだ」

ディスペアは目の前にある高級そうな装飾品の店に入った。

「たまには、着飾ってみたらどうだ？わたしと違い君は自由だ」

スクルドは、うなずいていくつかの装飾品を購入した。ディスペアはその間、ずっと立っていた。

「どう…かな？」

スクルドは首にネックレスを着けていた。

「…いいのではないか？それでよければ代金はわたしが出そう」

スクルドがうなずいたので、ディスペアはレジに代金を置いてスクルドを連れ、店を出た。

店を出ると、既に夕方だった。

「帰る足が無いな」

これ以上究極神を召喚して騒ぎを起こすわけにもいかないし、神の扉は現在使用不可能。そして、スクルドは神力が空になっている。

何かしら食べないと回復が遅れる。

「ん？」

ディスペアは、繁華街にある一軒の飲食店を見つけた。結構巨大だ。

『かに〇楽』

「ねえ、ディスペア。私、誰かに少し失礼な気がするんだけど、蟹が食べたいな」

「……」

絶対に誰に失礼か気付いているであろうスクルドを、ディスペアは少しジト目で見るが、タイミング悪く北欧の三神も来ていたので諦めて入ることにした。

が、ディスペアは入った途端にさらに驚いた。なぜなら…

「おいジャック！そんなにたくさん食うんじゃねぇ！」

遊星達がいたからだ。店に入ってトールがまず第一に言った一言は…

「金が無いんじゃなかったのか…」

これはもっともだ。普段から３０００円のコーヒー代を払い続けているはずなのにあるわけがない。

「他人の事情などどうでもいいだろう」

しかし、ディスペアはそれを一向に気にせずに案内された席に座る。

「とりあえず鍋」

「はい、かしこまりました」

ロキが席に着くと同時に注文した。どうやらロキは空腹らしい。あれだけの時間があったはずなのに何も食べなかったのかと聞くべきだろうが、誰もプライバシーには触れようとしない。悩んでいそうではないのでこういうことは聞かないのが暗黙の了解だ。

「今日は2人ともどうしてたの？」

「わたしとスクルドの事か？繁華街を回って買い物をしていただけだ」

「なんだ、つまんないの」

ちっとも面白くないなぁ…。

鍋も来たし食べよう。

～～～2時間後～～～

「お会計２４３０００円になります」

「……」

ディスペアは何とも言えない顔で目のハイライトを消した状態で代金をレジに置いた。目は言っていた。『５Ｄ′ｓとわたし達の人数

はそんなに変わらないはず…だが、この値段の差は一体何だ?』と。いくらお金に困らない神といえども、さすがにこれは酷いということだ。

「ディスペア、ご苦労さん」

ロキがわざとらしい口調で言ってくる。ディスペアは一瞬、アーティスで斬ってやろうかとすら考えた。

そして、ついに帰る時が来た。

「あれ?結局僕達は大会を一週間延期させに来ただけじゃない?」

その後、ディスペアは黙ったままゲートを開いて過去に帰った。

第１０６話　未来世界へ（後書き）

作者はファイブディーズのサントラ3を買いました。絆のテーマ（仮）が入っていなかったのはショックですが、カオス・インフィニティの時の曲（Ｚ－ＯＮＥのデュエル）が入っていたので満足です。

番外編　3月からの新禁止制限（前書き）

どうも。禁止制限の情報が来たので載せとこうと思います。１００％確実とは言い切れませんが、大体確定のようです。
ちなみに、エクシーズ召喚は素材を召喚するモンスターに重ねて、その素材を墓地に送ることで効果を発揮するようです。※修正。遊戯王様、情報の訂正ありがとうございました。

※今回は台本形式です。
イメージＢＧＭ：『アポリアの合体』

番外編　3月からの新禁止制限

禁止
ゴヨウ・ガーディアン
大寒波
マスドライバー

制限
オネスト
ダンディライオン
ＢＦ－月影のカルート
月の書
六武の門

準制限
カードガンナー
魂を削る死霊
オーバーロード・フュージョン
巨大化
大天使クリスティア
デブリ・ドラゴン
王家の生け贄
神の警告
ゴッドバードアタック

無制限
カオス・ソーサラー
終焉の王デミス
スナイプストーカー

氷結界の虎王ドゥローレン
封印の黄金櫃
スキルドレイン
血の代償

ディスペア「…………………ＢＦ、六武衆、クイックダンディ…そして光属性のモンスターよ。これが絶望だ。……ターンエンド」

ロキ「さ、黄金櫃集めとこ。ディスペア、３積みでしょ」

ディスペア「そうだな…究極神サーチには欠かせないな」

トール「スキルドレインと血の代償が無制限…だと！？どういうことだ！？」

ヘルカイザー「サイバー流強化ｋｔｋｔ」

スクルド「月の書が…またクリスティアが突破できなくなるよ…」

ロキ「スナスト無制限で僕の強化ｗ」

オーディン「マスドライバー…ネジネズミとのコンボで凶悪だったあれか。作者は一度として使ったことはなかったが」

ヘム「カードガンナー準制限でライロｋｔｋｔ」

ディスペア「だが、オネストは制限だぞ？」

ヘム「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！」

クロウ「カルートが…制限…ｏｒｚ」

ジャック「お前達は『ゴヨウ・ガーディアン』には触れないのか！
大地の騎士ガイアナイ（ｒｙ」

ロキ「デミスドーザー組んでくる」

ディスペア「神の警告はほとんど意味がないだろう…」

トール「とりあえず何の影響もなかったディスペア、お前は少し黙れ…」

番外編　3月からの新禁止制限（後書き）

どうでしょうか?作者は納得のいく部分もあれば、行かない部分もあります。
しかし、死者蘇生とブラックホールがそのままだったのでまあ良いかな?それと、カルートよりもブリザードをだな…おっと、誰か来たようだ。

４００００００アクセス記念（前書き）

どうも。今回は番外編なので、ＢＧＭを惜しみなく設定してみました。
※今回のヘイムダルは、悪いキャラです。奇麗なヘイムダルを期待していた方々、ごめんなさい。※綺麗×　奇麗○

最近の出来事
明日は、エクストリームビクトリーを箱で買ってきます。次回の話に、何が当たったか載せようと思います。あれ？最近と言うか未来の出来事だな…？

4000000アクセス記念

～～～神界・ビフレスト～～～

ヘイムダルは、いつもの通りに荷物を箱詰めしてディスペア達に送ろうとしていた。
しかし…

「ヘイムダル、これ以上、ふざけた荷物は送らせはしない」

「ゲッ！ディスペア！！」

ヘイムダルは、目の前に突如現れたディスペアに、腕をつかまれて時空間に引きずり込まれた。ヘイムダルは手を振りほどこうとするが、ディスペアは微動だにしない。

「ヘイムダル。荷物を送るくらいならば、お前自身が来ればいいだろう」

ディスペアは一言告げた。しかし、ヘイムダルはそうするわけにもいかない。ふざけたデッキを提供しようとしていたが、直接渡せばきっとボコボコにされると危惧していたからだ。だが、ディスペアに捕まってしまった以上逃れることはできない。
ヘイムダルは大人しく、デュエルアカデミアの外のデュエル場に連行された。

「うわあああああ、勘弁、勘弁！」

ヘイムダルは逃げようとするが、ロキが押さえていて逃げられなかった、
ロキは１つ提案をした。

「じゃあ、君が持ってきたデッキをディスペアが使って君とデュエルする。君は自由にデッキを選べばいい。もし君がディスペアに勝てたなら何もせずに帰してあげるよ。負けたら罰ゲームだけどね」

ヘイムダルは、表面上は困った表情をしていたが…その心情は。

「（よ～し…なら俺様の固有デッキでボコボコにしてやるぜ！）その勝負乗った！」

「よし、じゃあディスペア。ヘイムダルが持ってきたデッキから１つ選んでよ」

「……わかった」

ヘイムダルの事だ。恐らく、奴は自分自身の固有デッキを使ってくるはず。わたしはヘイムダルの固有デッキをの中身を知らない。なら、除去カードは多いほうがいい。これでいこう。

「わたしの準備は完了している。ヘイムダル。君の準備が完了すれば、いつでもスタートだ」

ヘイムダルはどや顔でＯＫと言った。

「「デュエル」」

「俺様の先攻！ドロー。俺は永続魔法『女神ウルドの裁断』『女神

ヴェルダンディーの導き』『女神スクルドの託宣』を発動する！」

「何だと！？？」

「はぁ（いくらエロゲデッキと言ってもこれは酷い…ディスペア、これじゃああの永続魔法を破壊できない）！！？」

「……ジークのお友達か」

「ジークって誰だ？まあいい、まずは『女神スクルドの託宣』の効果でディスペア！お前のデッキの上から3枚見て、それを好きな順番に入れ替える！」

ヘイムダルに3枚のカードの映像が映し出される。

「（『サイクロン』『ダブル・サイクロン』『ブラック・ホール』…）よし、順番は変更しない。さらに、『女神ウルドの裁断』『女神ヴェルダンディーの導き』の効果は発動しない。モンスターを1体伏せてターンエンド」

ヘイムダル
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
セットモンスター×１
女神スクルドの託宣
女神ヴェルダンディーの導き
女神ウルドの裁断

「わたしのターン」

ドローカードはサイクロン…そして、先程ヘイムダルはヴェルザンディーとウルズの効果を使用しなかった。ということは、残り2枚も魔法・トラップカードで間違いはない。

「わたしは速攻魔法『サイクロン』を発動。『女神ウルドの裁断』を破壊する！」

「なっ！？」

バカな？ディスペアがノルンのカードを破壊した！？

「さらに、『磁石の戦士α』を召喚する。『磁石の戦士α』で伏せモンスターを攻撃」

「わりぃな。伏せモンスターは『魂を削る死霊』だ。戦闘じゃ破壊されねェよ。残念だったな」

「あいつ、何かある度にどや顔するんだな…」

トールは既に呆れ顔だ。ロキは調子に乗るなと言う目でヘムの事を見ていた。

「フッ…わたしはカードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
磁石の戦士α　ＡＴＫ１４００

伏せカード×1

「俺のターン！俺は『異次元の女戦士』を召喚する！『異次元の女戦士』で『磁石の戦士α』を攻撃だ」

「トラップカードオープン『ジャスティブレイク』。通常モンスターが攻撃対象に選択された時、フィールド上の攻撃表示の通常モンスター以外のモンスターをすべて破壊する。ヘイムダル。わたしにその程度の戦略は通用しない」

フィールド上のα以外のモンスターが全て雷によって焼き尽くされた。

「くそ…ならば『女神スクルドの託宣』の効果！」

新しい1枚は…『岩投げアタック』か…。

「3番目のカードを一番上におけ！」

ディスペアは、言われた通りに3番目のカードを上に置き、再びデッキをセットした。

「ターンエンド」

ヘイムダル
LP8000
手札×2
フィールド
女神ヴェルダンディーの導き
女神スクルドの託宣

「わたしのターン。わたしはカードを1枚伏せ、『磁石の戦士β』を召喚。2体の『磁石の戦士』でダイレクトアタック」

「ぎゃあああああ！」

ヘイムダル　LP8000→4900

「ターンエンド」

『女神スクルドの託宣』がある限り、わたしの戦術は初手以外は全て見透かされている…。

ディスペア
LP8000
手札×3
フィールド
磁石の戦士α　ATK1400
磁石の戦士β　ATK1700
伏せカード×1

「俺のターン！俺は『女神スクルドの託宣』の効果を使う！」

……『死者蘇生』…

「変更はしない。モンスターを伏せ、ターンエンド」

ヘイムダル
LP4900
手札×2

フィールド
セットモンスター×1
女神ヴェルダンディーの導き
女神スクルドの託宣

「わたしのターン」

……サイクロンか。

「わたしは速攻魔法『サイクロン』を発動…」

「（ディスペアが破壊するのは間違いなくヴェルダンディーの導き。ディスペアが、如何に永続魔法といえども自分が愛する女神を破壊することなんてできないはずだぜ！）」

「『女神スクルドの託宣』を破壊する」

「ディスペア！！？」

「悪いが、スクルドの目は深い青。所詮はカードの精霊。本物とは似ても似つかない」

「しかも、表情の変化が無い女神なんてちっとも可愛くないしね。さらに外見的に言わせてもらうと今のスクルドはツインテールじゃないよ」

ロキがディスペアの言葉に1つ足して、ヘイムダルに返した。ちなみに、可愛くないというのは本音だ。ロキは表情の変化が無いのが好きではないようだ。喜

「…デュエルを続けよう。わたしはトラップカード『岩投げアタック』を発動し、デッキから『磁石の戦士γ』を墓地に送る。そしてヘイムダルに５００ポイントダメージを与える」

どこからともなく岩が飛んできて、ヘイムダルに直撃した。５００ポイントにしては随分と派手だ。

「いってえええええええええ！」

ヘイムダル　ＬＰ４９００→４４００

「『磁石の戦士α』でセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターは、『深淵の暗殺者』だ。こいつがリバースした時、フィールド上のモンスターを1体破壊するんだぜ。俺が破壊するのは『磁石の戦士β』だ！」

破壊される寸前に、深淵の暗殺者は磁石の戦士βの後ろに回り込んで相打ちに持ち込んだ。

「わたしは魔法カード『闇の量産工場』を発動し、墓地から『磁石の戦士β』と『磁石の戦士γ』を手札に加える」

「3体の磁石の戦士…まさか！」

「わたしは3体の『磁石の戦士』を生贄に捧げ、手札より『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』を特殊召喚する」

「来たよ。超重量級パワーバカ。ディスペア、こんなデッキを選んでたんだ」

最初の時点で分かってたけど。

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
磁石の戦士マグネット・バルキリオン　ＡＴＫ３５００

「俺のターン！」

まさかディスペアが平気でスクルドを破壊しに来るとは思わなかったぜ。

「だが…甘いぜ！最初からお前に貸したデッキが俺の固有デッキに勝てるわけないだろ！」

「何！？貴様、最初からそれを…！」

「敵を倒すには罠を張ってから。ロキが俺に教えてくれたことだぜ」

ディスペアはロキに目をやるが、ロキはそんなことを教えた憶えはないと首を横に振る。

「魔法発動！『ブラック・ホール』！フィールド上のモンスターをすべて破壊するぜ！」

「ぬううう！」

「さらに魔法カード『女神の神託』！手札を全て捨て、自分フィールド上のカードをすべて破壊し、墓地に『女神スクルドの託宣』『女神ヴェルダンディーの導き』『女神ウルドの裁断』が揃っている時、デッキから『女神』１体を特殊召喚する！」

「うっわぁ…さすがヘイムダル。そーゆーカードしか入ってないんだ…」

生まれた時に決定する固有デッキ…強いけど、中身がアレだからみんなに『エロゲデッキ』なんて呼ばれてる。

（ＢＧＭ：『Ｚ－ＯＮＥのテーマ』）

「ＢＧＭももったいない気がする…って、誰に言ってんだろ？」

「来い！『創世の女神レライア』！」

創世の女神レライア　ＡＴＫ４０００

「レライアでディスペアにダイレクトアタック！」

「ぬううううあああああ！」

ディスペアは、全身の力を惜しみなく使い、アーティスでレライアの光の光線をはじいた。

ディスペア　ＬＰ８０００→４０００

「ターンエンド。ディスペア、レライアはそのデッキじゃ倒せない

ぜ？レライアの効果で、お前がダメージを受けるたびにお前は手札とフィールドのカードを全てデッキに戻してシャッフルするんだ」

ヘイムダルは、明らかに勝ち誇った顔で言う。

ヘイムダル
ＬＰ４４００
手札×０
フィールド
創世の女神レライア　ＡＴＫ４０００

（ＢＧＭ終了）

「わたしの……タァァーン！」

……『無限狂蝕』！

（ＢＧＭ：イリアステルバトルモード）

「わたしは魔法カード『無限狂蝕』を発動！」

「そ、そんなカードデッキに入れた覚えはないぜ！？」

「当然だ。わたしは、デュエルが始まる前、デッキを確認していた時にこのカードをデッキに投入していた。『無限狂蝕』の効果によって、わたしのフィールドと手札にこのカード以外のカードが無い時、墓地のカードを全て除外し、除外した数だけドローする！わたしの墓地には９枚のカード。よって、わたしは９枚ドローする！ただし、わたしは次のわたしのターンのエンドフェイズに４０００ポイントのダメージを受ける」

「さらに、手札の『α』『β』『γ』を生贄に、マグネット・バルキリオンを召喚する。そして装備魔法『巨大化』。『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』に装備する」

磁石の戦士マグネット・バルキリオン　ＡＴＫ３５００→７０００

「さらに手札を1枚墓地に送り、魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動」

「無駄だぜ、『創世の女神レライア』は、相手のカードの効果では破壊・除外されない！」

「そんなことはわかっている。わたしは『ファントム・オブ・カオス』を召喚。今、『ライトニング・ボルテックス』の効果によって墓地に送られた『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』を除外し、その効果を発動。このカードを生贄にすることで、墓地に存在する『α』『β』『γ』を特殊召喚する」

「△※％＆？○●◎☆＄★＃？＊！！？」

「『磁石の戦士マグネット・バルキリオン』で『創世の女神レライア』を攻撃。マグネット・セイバー」

「◆≦≦？：≠△≧■§〒¶÷５！！」

ヘイムダル　ＬＰ４４００→１４００

「『磁石の戦士α』でとどめだ」

「ΦΨΩΓθ‡」

ヘイムダル　ＬＰ１４００→０

（ＢＧＭ終了）

～～～デュエル終了後～～～

「わ、悪かった！俺が悪かったから、暴力はダメだ、暴☆力☆反☆対！」

ディスペアは、ただ手を差し伸べた。

「え…？許してくれるのか？そうだよなー、俺達、仲いいもんなー」

ヘイムダルはやたらと笑顔で手をつかんだ。

「…罰ゲーム、忘れていないよな」

「へ？」

「恐怖の世界に逝って来い」※誤字にあらず

次の瞬間、ヘイムダルは時空の扉に放り込まれた。

「ディスペア…ヘイムダルをどこにやったの？」

「……雛見沢」

その後……

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！！」

時空の扉の奥から悲鳴が聞こえてきた。

４０００００アクセス記念（後書き）

次回『３５００００ユニーク記念』

※次回、ヘイムダルが出る可能性は５０％です。雛見沢で死ななければ出ます。

35000ユニーク記念　かっこいいヘイムダルの話（前書き）

今回は普段、旅をしているヘイムダルの話です。
雛見沢から無事に帰ってきたようなので、ヘイムダルメインの話ですw
※かなり短いです。ドロドロさせないために書いていたら短くなってしまいました。

エクストリームビクトリー購入数2箱。
結果：ジャンク・バーサーカー×2　TG－サイバーマジシャン×1　TG－レシプロ・ドラゴン・フライ×2　沈黙のサイコヴィザード×2　ライフ・ストリーム・ドラゴン×1　TG－ブレード・ガンナー×1　TG－ハルバード・キャノン×1　メンタルオーバーデーモン×2　BF－天狗風のヒレン×1

※この後、レシプロフライはパワーグラディエイターと、ジャンク・バーサーカーはグランエル・アイン3枚目との交換に飛んで行きました。ヒレンもその他もろもろと共にアステリスクの交換にレッツゴーしました。
あとは、ワンダーマジシャンがそろえばデルタアクセルできます。

最近の出来事
封印の黄金櫃が制限解除と聞いて、3枚目を買ってきました。
一足早くデッキに投入。
ちなみに、この小説も一足早く制限リストを更新します。
機皇デッキが完成しました。一族の結束強いです。
マシニクルとアステリスク、各種機皇帝は1枚ずつ。チューナーなんて入っていない。これがアポリアさんのデッキか！……マシニクルとアステリスク、いらねぇぇ…

３５０００ユニーク記念　かっこいいヘイムダルの話

～～～某街～～～

（ＢＧＭ：鬼柳京介ハーモニカＶｅｒ）

……俺はヘイムダル。ビフレストの門番という仕事を放り出して、自分の恋人を見つけるべく、旅をしている。おっと、今日もチャラい人間どもが、女の子をナンパしているようだ。これは、紳士として見逃すわけにはいかないぜ。

「おい、お前ら。女性に手を出すなんて、男として情けないぜ。もっとお手柔らかにしないとな」

「ああ？何だお前。やっちまえ！」

フッ…集団リンチなんて、俺には通用しないぜ。

「バカだな」

ヘイムダルは音速を超えてチャラ男達を一瞬で殴って片付けた。こういう時のヘイムダルは、戦闘力がデュエル・リアルファイト共に２０倍になる。

（ＢＧＭ終了）

「あ、ありがとう」

「当然のことだよ…って、スクルド！？やはり俺と君は運命の赤いいってえええええええええ！」

ヘイムダルは、スクルドの手を持って『俺と君は運命の赤い糸で結ばれている』と言いたかったようだが、ディスペアのゲンコツでそれは叶わなかった。

「なにが『運命の赤い糸』だ。そんなもの、この世のどこにもありはしない」

ディスペアは基本的に『運命』を信じないため、そんなもの、この世のどこにもあるわけがないと否定する。

「そんなことはない！必ずある！」

しかし、ヘイムダルは運命の赤い糸はあるはずと信じ込んでいる。

「少なくとも私はヘイムダルとは赤い糸なんてないと思うんだ」

「うわあああああああああああ！」

ヘイムダルは、スクルドのあまりにもストレートな痛恨の一撃を真に受け、頭を抱えた。

「す、スクルド、俺の事、そんなに嫌いか…ってあれ？」

ヘイムダルが頭をあげると、そこには知らないおばさんが立っているだけだった。

ヘイムダルは、トボトボと歩き始めた。そして、３０秒後。

「こんなことでくじけていてはダメだ！俺は天下のヘイムダル、例えスクルドがダメでも1人くらいはＯＫな人がいるはず！」

ヘイムダルは恐るべき速さで立ち直る。しかし、脳内にディスペアの言葉がフラッシュバックする。

『そんなもの、この世のどこにもありはしない』

「……ぐあああああああああ！！」

ヘイムダルは半ばあきらめた状態で歩いていた。
だが、神は再びヘイムダルにチャンスを与えた。

「姉ちゃん、今から食事行かない？」

「い、嫌です」

この光景を見たヘイムダルは、やはり助けに入る。

「やめないか！そんなにこの人を食事に連れて行きたかったら、この俺とデュエルだ！」

「あんだてめえは？いい度胸じゃねえか」

2人はデュエルディスクを展開した。

「「デュエル」」

（ＢＧＭ：５Ｄ′ｓのテーマ）

「俺のターン！俺は魔法カード『女神の選択肢』を発動する。俺はこのカードの２番目の効果で、デッキの上から５枚墓地に送って、お前のデッキの上から５枚を除外する！」

ナンパ男のデッキの上から、５枚が除外された。

「さらに、『女神の神託』を発動するぜ。１つ目の効果で、先攻での攻撃を可能にする！そして『戦女神アルテスト』を召喚！ダイレクトアタックだ！」

「ちっ、ふざけた真似しやがって！」

ナンパ男　ＬＰ４０００→２２００

「『戦女神アルテスト』が相手にダメージを与えた時、相手のデッキの上から３枚除外する！ターンエンド」

ヘイムダル
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
戦女神アルテスト　ＡＴＫ１８００

「俺のターン！俺は魔法カード『Ｄ・Ｄ・Ｒ』を発動し、手札を１枚捨てて『闇より出でし絶望』を召喚だ。さらに装備魔法『巨大化』を装備」

闇より出でし絶望　ＡＴＫ２８００→５６００

「行け！『戦女神アルテスト』を攻撃だ」

「やるじゃないか」

ヘイムダル　ＬＰ４０００→２００

「てめえのライフはあと２００、もうおしまいだな。ターンエンド」

ナンパ男
ＬＰ２２００
手札×３
フィールド
闇より出でし絶望　ＡＴＫ１４００
＋巨大化
＋Ｄ・Ｄ・Ｒ

「俺のターン。俺は『聖賢の宝札』を発動。相手の除外されたカード２枚につき１枚ドローする。俺は、３枚ドローする。さらに『女神の断罪』を発動するぜ。相手フィールド上に攻撃力２５００以上のモンスターがいる時、デッキから攻撃力４０００の『女神』１体を特殊召喚できる。来い！『聖女神ウル』！このカードの攻撃力は、相手の除外されたカード１枚につき５００ポイントアップ！」

聖女神ウル　ＡＴＫ４０００→７５００

「『聖女神ウル』で『闇より出でし絶望』を攻撃する！そして『聖女神ウル』が相手モンスターを戦闘で破壊した時、相手の除外されたカード１枚につき、１０００ポイントのダメージを与える！セイントストリーム！」

「ギャアアアアアアアア！」

ナンパ男　ＬＰ２２００→－９４００

「もう2度と女性に手を出すなよ！」

「ひ、ひぃぃぃぃぃぃぃぃ」

ナンパ男は俺の活躍で逃げだした。

「あ、ありがとうございます！」

「いえいえ、とんでもない。当たり前のことをしただけですよ」

ヘイムダルは軽く歯を光らせながら笑顔で言った。確実に心の中で『よし、フラグは立てた』を思ったはずだ。しかし…

「おお、こんなところにいたのか？」

「あ、ヒロキ！待ってたわ」

「ところで、この人は？」

「私がナンパされていたところを助けてくれたのよ」

「そうなのか。おかげで助かりました、ありがとうございます」

「へ？…あ、いえいえ（またしても…またしても…ｏｒｚ）」

ヘイムダルが立てたフラグの強度は殆どが割り箸1本程度。少なす

ぎる確率だ。
ヘイムダルは諦めた状態で歩き続けた。

俺は、一体どれほどの時間歩いただろう。１２時間、いや、１５時間は歩いた。
しかし、フラグを何本立ててもすぐに折れる。
だが俺はあきらめない。『運命の赤い糸』と言う名の希望がある限り。

俺は今日も、パートナー…もとい運命の人を探し求めて歩き続ける。

……終わり。

35000ユニーク記念　かっこいいヘイムダルの話（後書き）

これが日常のヘイムダルの姿ですｗ
割り箸1本程度の強度しかないフラグがそう簡単に成功するはずがありません…。

第１０７話　ジェネックス初日　前編（前書き）

久しぶりのデュエルがこれだよ！…という作者の叫び。ｏｒｚ

※キャラ設定に切り札の詳細を載せました。
究極神オシリスと究極神オベリスクには、『このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ時にカードの効果を発動・適用できない』が加わっています。あまりにも紛らわしく、分かりにくいので効果を加えました。究極神帝ラーは加えても意味がないので加えませんでしたが…

第１０７話　ジェネックス初日　前編

～～～校長室～～～

「今日から、本当のジェネックスが開催されるノーネ。あなた達にも、ぜひ参加してもらいたいノーネ。この通りなノーネ」

クロノスは、今日が本当のジェネックスの開催日だと告げ、土下座をして参加してほしいと言ってきた。

「クロノス、頭を上げろ。そんなことをしなくても、元から参加するつもりだ」

ディスペアは椅子に座ったまま言う。ディスペアがこの世界に来た理由の８割は暇つぶしであり、断る理由がどこにもない。
ディスペアとロキは今までのジェネックスのシミュレーションで、数多くのメダルを獲得しており、最初からある程度のハンデがあるため優位に立てる。それを断るのはもったいないとロキが言っていたので、ディスペアも参加することにした。

「しかし、シンクロ召喚が使用できないのは辛いな。わたしは使用することが無いだろうから構わないが…特にスクルドがな…」

スクルドのデッキの切り札はシンクロモンスター。ジェネックス参加者のプロデュエリストの殆どがシンクロ召喚を知らないため、使用するのは難しい。

「それについては心配ないノーネ。海馬コーポレーションが、既にジェネックスに参加するプロデュエリストには告げているノーネ」

どうやら海馬は先に手を打っていたらしい。わたし達が気をつけなければならないのは、イレギュラーのみとなる。

「開催は午後1時からなノーネ。後30分だから、デッキを調整しておくと良いノーネ」

クロノスに言われ、デッキを見る。特に変更する点はない。オーディンとトールは何か入れ変えているようだ。

スクルドが手伝って欲しいと言うので、多少手伝う。しかし、あまり役には立てそうにない。試しにデュエルしてみる。結果としてはわたしの勝利だが、なかなかのバランスになったと思う。

～～～デュエルアカデミア、校舎前～～～

校長が屋上に立って、ジェネックス開催の宣言をする。わたし達は白いドームの上に立っていた。生徒たちと共に立っていると、どうしても目立つ。

「ようやくスタートか」

「でも、この世界はデュエルアカデミアに5～6年いなくちゃいけないからね。一体こういうイベントが後何回おこることやら…ま、僕は早速潰しに行ってくるよ」

ロキは言いたいことを全て言って、飛んで行った。

「スクルド、わたし達は共に行くか、別行動をとるか…どうする？」

「もちろん、一緒！」

スクルドの返事を聞き、スクルドをお姫様抱っこで抱えて飛び降りる。周りの生徒は当然驚いていた。

「さあ、行くか」

スクルドをおろして歩き始める。周りの生徒は、逃げるようにしてその場を離れた。生徒の間では現カイザーとデュエルする＝死という解釈のようだ。

～～～森の中～～～

「ディスペア、森の中が好きだね」

「そう言うわけではないが…相手は森の中にいることの方が多いだろうからな」

わたしはは、森が好きなわけではない。相手を探すには絶好の場所だと理解しているだけだ。ちなみにスクルドは、１人でジャングルや遺跡などに行くことを好まない。理由は『怖いから』だそうだ。

突然、草むらが音を立てる。

「キャア！？」

スクルドは考え事をしていたようだが、その突然の音に驚き、ディスペアにしがみついた。
しかし、草むらの中から出てきたのはイエローの生徒。ディスペアを確認すると、デュエルディスクを構えた。

「わたしとスクルド、どちらを相手にする？」

「……カイザーだ」

イエロー生徒は、少し考えた後、ディスペアを選んだ。ディスペアは、デュエルディスクを展開した。

「「デュエル」」

「わたしの先攻。手札から『封印の黄金櫃』を3枚発動。デッキからカードを3枚選択し除外。2ターン後に手札に加える。わたしはデッキから『オシリスの天空竜』『オベリスクの巨神兵』『ラーの翼神竜』を選択」

3枚の神はデッキから取り除かれた。

「『光鱗のトビウオ』を通常召喚。わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
究極神　残り2ターン
フィールド

光鱗のトビウオ　ＡＴＫ１７００

「俺のターン！俺は『カードガンナー』を召喚して、効果を発動。デッキの上からカードを３枚墓地に送る。そして、エンドフェイズまで攻撃力を１枚につき５００ポイントアップする」

カードガンナー　ＡＴＫ４００→１９００

ディスペアはインフィニティ・アイを起動して送られたカードを確認した。

『ネクロ・ガードナー』『死霊騎士デスカリバー・ナイト』『異次元の女戦士』だ。

「『カードガンナー』で『光鱗のトビウオ』を攻撃！」

ディスペア　ＬＰ４０００→３８００

「ターンエンド」

イエロー生徒
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
カードガンナー　ＡＴＫ４００

「わたしのターン」

イエロー生徒の墓地には、ネクロ・ガードナーがいる。

「ディスペア、頑張って…！」

スクルドが心配そうに言うが、ディスペアは余裕の表情で返す。

「わたしはカードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ３８００
手札×２
究極神　残り１ターン
フィールド
伏せカード×１

「俺のターン…」

ディスペアは、イエロー生徒を威圧する目で見る。そのプレッシャーは、実際に睨まれた者にしか分からない。イエロー生徒の威勢の良さは、どこかに消えうせた。

「（次のターン、カイザーの最強の神がくる…なら、ここで攻撃表示にして残しておいたらやられるのは必至！）『カードガンナー』を守備表示に変更！さらに、『異次元の戦士』を守備表示で召喚！ターンエンド」

イエロー生徒
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
カードガンナー　ＤＥＦ４００
異次元の女戦士　ＤＥＦ１６００

「わたしのターン。この瞬間、わたしが2ターン前に除外した『オシリスの天空竜』『オベリスクの巨神兵』『ラーの翼神竜』はわたしの手札に加わる。『メタボ・シャーク』を召喚。伏せカードオープン、『大波小波』。このカードはわたしのフィールド上の水属性モンスターをすべて破壊し、破壊した数まで手札に存在する水属性モンスターを特殊召喚する」

「なっ！？」

「そう。わたしは先程のターン…君に攻撃されれば負けていた。わたしが破壊した水属性モンスターの数は1体。よって手札から水属性モンスター1体を特殊召喚する。現れろ、『超古深海王シーラカンス』」

ディスペアはブラフを伏せ、プレッシャーを与えることで相手を怯えさせて攻撃を止めた。だが、仮に攻撃されたとしてとどめを刺されなかった場合、フィールド上には攻撃表示のモンスターが存在することになる。そうなれば、高い攻撃力を誇る究極神の一撃により、ライフは0になる。ここまで考え、イエロー生徒は守備を固めることを選択した。

…その選択肢は間違いだったわけだが。

「『超古深海王シーラカンス』の効果発動。手札より『ヒゲアンコウ』を捨て、デッキから『深海王デビルシャーク』『光鱗のトビウオ』『オイスターマイスター』2体を特殊召喚する。『オイスターマイスター』2体と『光鱗のトビウオ』、わたしのライフ半分を生贄に捧げ、『究極神オシリス』を特殊召喚する」

世界が一瞬、赤い光に包まれ、光が収まると天空には赤い雷を纏った全長７５ｋｍの巨大な龍が出現していた。

「ソリッドビジョンであることに感謝するがいい。本来ならば神の攻撃を受けて生きている人間など存在するはずが無いのだからな。２体の『オイスターマイスター』が戦闘以外の方法によって墓地に送られたことで、『オイスタートークン』を2体特殊召喚する。『深海王デビルシャーク』と『オイスタートークン』２体、わたしのライフ半分を生贄に捧げ、『究極神オベリスク』を特殊召喚！！」

今度は青い光が世界を染め、全長５０ｋｍの神が、イエロー生徒を見据えていた。

「『究極神オシリス』の攻撃力は、わたしの手札１枚につき２０００ポイントアップする」

究極神オシリス　ＡＴＫ０→２０００

「『究極神オシリス』で『カードガンナー』を攻撃。『究極神オシリス』が戦闘を行う時、相手はダメージステップ時にカードの効果を発動・適用できない。アルティメット・サンダーフォース」

カードガンナーは巨大な雷で破壊され、イエロー生徒はカードガンナーの効果で１枚ドローした。

「さらに、『究極神オベリスク』で『異次元の戦士』を攻撃。ダメージステップでのカードの効果の発動および適用はできないぞ。アルティメット・クラッシャー！わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ９５０
手札×１

フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ２０００
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ２８００

「お、俺のターン…」

なぜだ!?何故さっきのターンに攻撃しなかった!?カイザーのプレッシャーにやられた…でも、そんなのは言い訳にしかならない。もう、俺の敗北は決定した…。

「手札が7枚あるので、1枚捨ててターンエンド」

イエロー生徒
ＬＰ４０００
手札×６
フィールド
無し

（ＢＧＭ：Ｚ－ＯＮＥのバトル）

「わたしのターン!わたしは『超古深海王シーラカンス』の効果によって、手札を1枚墓地に送りデッキから『メタボ・シャーク』と『ヒゲアンコウ』を特殊召喚。
『超古深海王シーラカンス』『メタボ・シャーク』『ヒゲアンコウ』の３体と、わたしのライフ半分を生贄に捧げ、『究極神帝ラー』を特殊召喚する!!」

全長１００ｋｍを誇る、白金の龍が、白金の炎とともに現れる。

「『究極神帝ラー』の効果発動。相手のカードを全て除外し、∞のダメージを与える！ゴッド・アルティメット・ノヴァ！」

究極神帝ラーは、白金の炎を溜め、凝縮させた。そして次の瞬間、白金の大爆発によってイエロー生徒のカードが全て除外され、ライフは一気に0になり、悲鳴をあげる間もなく吹き飛ばされた。

イエロー生徒　ＬＰ－∞

ディスペアは、気絶したイエロー生徒を保健室に運び、メダルを取った。

ディスペアは再び、スクルドを連れて外に出て、歩き始めた。

その後…

「うわあああああああああああ！」

生徒の叫び声が聞こえた。ディスペアとスクルドは、叫び声の聞こえたほうへ向かった。

第１０７話　ジェネックス初日　前編（後書き）

次回『ジェネックス初日　後編』

多少のネタバレ。次回にデュエルするのはスクルドとロキです。

ジェネックス初日　後編（前書き）

後編です。

最近の出来事

今日は友人とデュエルしました。その時の出来事です。

作者：ＬＰ１９００　手札：『機皇神マシニクル∞』　フィールド：無し

友人：フィールド『スターダスト・ドラゴン』『Ａ・Ｏ・Ｊカタストル』

そして、作者のターン。

引いたカード：『機皇神龍アステリスク』

作者『……』

ジェネックス初日　後編

（ＢＧＭ：イリアステルバトルモード）

わたし達は、叫び声の聞こえたほうに向かった。

「ど、どういうことだ！？」

わたし達が向かった場所に広がっていた光景は、多数の倒れている生徒の中心に１人の人間がいたところだ。

「やっぱこの程度のカスじゃ相手になんねェな」

服の色はブルー。目の色は赤。髪は黒。かなり美形の男子生徒が立っていた。ディスペアは、倒れている生徒を見回した。その数、２０人。常人ならばこの短時間でこれほどの人数を倒すことはできない。

そして、黒髪のブルー生徒はスクルドを睨み、デュエルディスクを構えた。明らかに他の人間とは雰囲気が違う。常人を犬と例えるならば、この人間は狼だ。

「スクルドが狙いか…！そうはいかない」

ディスペアがスクルドの代わりに戦おうとするが、スクルドがそれを止めた。

「頼ってばかりじゃ全然ダメ。私が指名されたんだから私が戦う」

スクルドは、ディスペアに渡されたデュエルディスクを展開した。

海馬に作らせた特製の浮遊デュエルディスクだ。

「……君は体が弱い。助けが必要になったら言うといい」

長時間のデュエルには耐えられないだろう。

「…うん」

（ＢＧＭ終了）

「「デュエル」」

「私の先攻！私は魔法カード『おろかな埋葬』を発動して、デッキから『キラー・トマト』を墓地に送るよ。さらに、『ブルーローズ・ドラゴン』を召喚して、ターンエンド」

スクルド
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
ブルーローズ・ドラゴン　ＡＴＫ１６００

「ドロー。『魔導戦士ブレイカー』召喚。このカードの召喚時に、このカードに魔力カウンターを１つ置き、攻撃力を３００ポイントアップ」

少年は、うつろな目でカードを１枚引き、デュエルディスクに１枚

セットした。

魔導戦士ブレイカー　ＡＴＫ１６００→１９００

「バトル。『魔導戦士ブレイカー』で『ブルーローズ・ドラゴン』を攻撃」

スクルド　ＬＰ４０００→３７００

「『ブルーローズ・ドラゴン』が破壊された時、私は墓地の『ブラック・ローズ・ドラゴン』か植物族モンスターを特殊召喚できる！私は、『キラー・トマト』を特殊召喚するよ」

「『おろかな埋葬』はそのためだったか。カードを2枚伏せ、ターンエンド」

ブルー生徒
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
魔導戦士ブレイカー　ＡＴＫ１９００
＋魔力カウンター×１
伏せカード×２

「私のターン」

この男の子のフィールドには、攻撃力１９００の魔導戦士ブレイカーがいる…。でも！

「私は『夜薔薇の騎士』を召喚！レベル４の『キラー・トマト』に

レベル３の『夜薔薇の騎士』をチューニング！薔薇の大輪を咲かせ現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

来たな。スクルドのエース、ブラック・ローズ・ドラゴン。もっとも、第１の効果以外は植物族デッキでなければ意味を成さない。さらに、今ブルー生徒のフィールドには守備表示モンスターは存在せず、伏せカードは『次元幽閉』。どうする？スクルド。

「フィールド魔法『植物の楽園』発動。１ターンに１度、レベル４以下の手札から植物族モンスター１体を特殊召喚できる。さらに、植物族モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功する度、『フラワーカウンター』を１つ乗せて、『フラワーカウンター』１つにつき、植物族モンスターの攻撃力を１００ポイントアップする！私は手札から『ボタニカル・ライオ』を攻撃表示で特殊召喚。そして、『植物の楽園』に『フラワーカウンター』を１つ置くよ」

ボタニカル・ライオ　ＡＴＫ１６００→１９００→２０００

ボタニカル・ライオは自身の効果により、自分フィールド上の植物族モンスター１体につき３００ポイントアップする。攻撃力の合計は４４００だが…彼の伏せカードの内１枚は『次元幽閉』。もう１枚は『くず鉄のかかし』。

「私は『ボタニカル・ライオ』で『魔導戦士ブレイカー』を攻撃するよ」

「……トラップ発動『くず鉄のかかし』」

ブルー生徒　ＬＰ４０００→３９００

「それなら『ブラック・ローズ・ドラゴン』でダイレクトアタック！ブラック・ローズ・フレアー！」

「甘い。トラップ発動『次元幽閉』。相手の攻撃モンスター1体を除外する」

「そんな！」

ブラック・ローズ・ドラゴンは次元の渦に飲み込まれ消えた。スクルドは、驚愕の顔を隠せない。だが、わたしの知っているスクルドはこの程度で負けはしない。

「私は……ターンエンド」

スクルド
ＬＰ３７００
手札×２
フィールド
ボタニカル・ライオ　ＡＴＫ２０００
植物の楽園
＋フラワーカウンター×１

「ドロー。『魔導戦士ブレイカー』の効果発動。魔力カウンターを1つ取り除き、『植物の楽園』を破壊する。さらに、『魔導戦士ブレイカー』を生贄に捧げ『雷帝ザボルグ』を召喚。このカードが生贄召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を破壊する。『ボタニカル・ライオ』を破壊。デス・サンダー」

まずいな。スクルドのフィールドには何もない。さらに、魔導戦士ブレイカーは闇属性、雷帝ザボルグは光属性。スクルドがザボルグ

を倒したとしても、あの人間はカオスモンスターを特殊召喚するだろう。

「『雷帝ザボルグ』でダイレクトアタック。ローリング・サンダー」

「ううぅ…」

スクルド　ＬＰ３７００→１３００

さすがに身体の弱いスクルドにはより衝撃を増したこのソリッドビジョンの一撃は辛いか…？

「スクルド、わたしが行くか？」

「だ、大丈夫。私はまだ戦える」

「…ターンエンド」

ブルー生徒
ＬＰ３９００
手札×２
フィールド
雷帝ザボルグ　ＡＴＫ２４００

「私のターン…」

私の手札は３枚。フィールドにカードは無い。さらに、雷帝ザボルグを倒せるカードも無い…。

「スクルド…君はここで終わるのか？わたしの知る君は、途中で諦

めることが大嫌いだったはずだ」

そんなことを言われても…？あれ、このカード…？

～～～ロキサイド～～～

「ちっ、どいつもこいつも骨が無いなぁ…持っているメダルも少ないから当然と言えば当然だけどね…？」

僕の目の前には、イエローの制服を着た生徒が現れ、デュエルディスクを構えた。

「僕とやるの？」

「お願いします！強い人とデュエルしたかったんです！」

「キッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ、面白い」

「「デュエル」」

「僕の先攻。僕は『スカイ・コア』を守備表示で召喚。魔法カード『ブラック・ホール』。この効果で、フィールド上のモンスターをすべて破壊する！

そして、『スカイ・コア』が効果によって破壊されたことでデッキ・手札・墓地から『機皇帝スキエル∞』『スキエルＴ』『スキエルＡ』『スキエルＧ』『スキエルＣ』を特殊召喚する！合体しろ、機皇帝スキエル！」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００
スキエルＴ　ＡＴＫ４００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００
スキエルＧ　ＡＴＫ２００
スキエルＣ　ＡＴＫ６００

「僕はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００
スキエルＴ　ＡＴＫ４００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００
スキエルＧ　ＡＴＫ２００
スキエルＣ　ＡＴＫ６００
伏せカード×１

「俺のターン！俺は相手フィールド上に同じ属性のモンスターが２体以上いることで、手札から『神禽王アレクトール』を特殊召喚する！このカードの効果によって1ターンに1度、フィールド上のカード1枚の効果を無効にできる！」

「残念だけど、『機皇帝スキエル∞』はカード効果の対象にならない。アレクトールの効果は効かないよ」

「誰が『機皇帝スキエル∞』を対象にすると言った？俺が選択するのは『スキエルＧ』！」

「！！」

しまった！スキエルGは1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。そしてその攻撃力はわずか２００、効果を失った今、役に立たない！

「『神禽王アレクトール』で『機皇帝スキエル∞』を攻撃。フェザーストリーム・ブラスト！」

ロキ　ＬＰ４０００→３８００

「くっ…『機皇帝スキエル∞』がフィールドを離れたことで、パーツは破壊される…」

僕の機皇帝がたったの1ターンで破壊された…でもまだだ、まだ僕には手が残っている。

「トラップ発動！『インフィニティ・スカイ』！『機皇帝スキエル∞』が破壊された場合、デッキから『スカイ・コア』を特殊召喚できる！現れろ、『スカイ・コア』」

機皇帝は墓地からも復活できる。スカイ・コアを3枚積んでおけば、最低でも3回の召喚が期待できる！

「ターンエンド」

イエロー生徒
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド

神禽王アレクトール　ＡＴＫ２４００

「僕のタァーン！僕は魔法カード『カオス・エフェクト』を発動。僕の墓地から『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』の内いずれか１枚を除外し、墓地の魔法カード１枚の効果を使うことができる！墓地の『スカイ・コア』を除外、『ブラック・ホール』の効果を使用する。フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

フィールド上に黒い穴が現れ、全てのモンスターが吸い込まれ破壊された。

「なっ！？」

「そして『スカイ・コア』の効果で再び『機皇帝スキエル∞』『スキエルＴ』『スキエルＡ』『スキエルＧ』『スキエルＣ』を特殊召喚する！『機皇帝スキエル∞』でダイレクトアタック！そして、ダメージステップに『リミッター解除』を発動。機械族モンスターの攻撃力を倍にする！」

僕の機皇帝を破壊したことは褒めてあげるよ。でも、相手が悪かったね。現在僕が負ける可能性があるのは、希望の力を所持しているスクルドと究極神を自在に操るディスペアだけだ。

「うわあああああああ！」

イエロー生徒　ＬＰ４０００→－４００

全く、他に比べたらレベルは高かったけど、まだ足りないな。ディスペアとスクルドはきっと、善戦なんだろうけど。

～～～ディスペアサイド～～～

スクルドのフィールドはがら空き、手札は3枚。しかし、先程まで諦めていたスクルドの目は、今は真剣だ。

「私は魔法カード『次元旋律』を発動！除外された自分のモンスター1体を、特殊召喚できる！『ブラック・ローズ・ドラゴン』を特殊召喚！そして、この効果によって特殊召喚したモンスターのレベル分、自分のデッキからカードを墓地へ送る！」

私の勝敗は、これにかかってる！ディスペアが見てる前で負けたくない。

「まだ、手は残っていたか」

スクルドはデッキから7枚のカードを1枚ずつ確認しながら墓地に送った。

そして、最後のカードを見た時、スクルドの目つきが変わった。

「デッキの一番上からカードを1枚墓地に送って、『グローアップ・バルブ』を特殊召喚！そして魔法カード『超栄養太陽』を発動！『グローアップ・バルブ』を生贄にして、デッキから『エボリューション・ローズ』を特殊召喚して、その効果で1枚ドロー！」

これに、このデュエルの勝敗を託す。

「……！『フォーチュン・ローズ』を召喚！レベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』にレベル1の『エボリューション・ローズ』と

レベル４の『フォーチュン・ローズ』をダブルチューニング！無限に連なった歴史の中を生きてきた黄金の薔薇…シンクロ召喚！『エターナル・ローズ・ドラゴン』！！」

「…これが『エターナル・ローズ・ドラゴン』。噂の龍か」

「あんまり噂はながさないで欲しいな…『エターナル・ローズ・ドラゴン』で『雷帝ザボルグ』を攻撃！エターナル・ローズ・ストリーム！」

「フン…」

ブルー生徒　ＬＰ３９００→２３００

「さらに、『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果で４０００ポイントのダメージを与える！エターナル・フレア・ストリーム！」

ブルー生徒　ＬＰ２３００→－１７００

ブルー生徒はうつろな目のまま、何の反応も見せずに敗北した。

「なるほど。これが究極の龍の力…楽しめた」

それだけ言い残して、ブルー生徒は去った。

「……」

わたしとスクルドはしばらく、ブルー生徒が去っていった方向を怪訝な眼差しで見ていた。

……次回に続く。

ジェネックス初日　後編（後書き）

次回『ジェネックス２日目』

今回のオリカ『植物の楽園』はユタ様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました！

第１０８話　ジェネックス2日目（前書き）

どうも。今回は遊戯王ＤＭ１９５話で海馬にフルボッコにされたあの方に登場していただきました。

今日のファイブディーズの感想。
女の時械神も結構いるんだ…とりあえず、今のところ一番キモいのはメタイオンで決定かな?そんなことよりも時械神は明らかに１１体目がいると思うんだ。名前も知っているけれど効果が気になる…
今回登場した時械神の主な効果：攻撃後に相手の魔法・罠ゾーンのカードを全部デッキに戻す。
攻撃後に相手モンスターをすべてデッキに戻し、1体につき５００ダメージを与える。メタイオンとは何だったのか。
攻撃後、ライフを４０００まで回復する。さらにデッキに戻った時手札が5枚になるようドローする。ヒノカグツチとは何だったのか。
ライフ・ストリーム・ドラゴンとは何だったのか。やることが全然違うから差別化はできるかもしれないですが…時械神、強ぇぇぇぇぇ！

第１０８話　ジェネックス２日目

～～～校長室～～～

「…と言うわけだ、頼んだぞ。ディスペア」

「了解した。海馬、もう１度聞くが容赦なく葬っていいのだな？」

「ふぅん。ネズミは全力を持って排除しろ」

「…わかった」

ディスペアは珍しく、朝から海馬瀬人と連絡を取っていた。海馬によると、デュエルアカデミアに性懲りもなく『ピンク頭のネズミ』が入り込んだそうだ。当然、誰だか分かる人もいるだろう。

「また面倒なのが来たね。エロゲデッキの使い手はヘイムダルだけで十分だってのに」

「……そうだな」

ディスペアは少し考えた後に笑みを浮かべてうなずいた。

「ねえ、エロゲデッキって何？」

「スクルド、君は知らなくて良いよ。人間界には表の面もあれば裏の面もある」

ロキは適当に話を反らした。ノルン三姉妹はこういうことを一切知らないため、たまに話が噛み合わなくなる時もある。

「これが海馬が寄こしたデュエルアカデミアのメインコンピュータとその経路による海馬コーポレーションへのルートだ。ここにアクセスするためにはデュエルアカデミアの中央コンピュータ室に行かなければならない。各ルートを見張っておいてもらいたい。懲りないネズミを見つけ出したら、わたしに連絡しろ」

オーディンはメインの一本道に、トールは非常口に、ロキは地下排水口に。スクルドとディスペアは、メインコンピュータ室に行った。

～～～メインコンピュータ室～～～

数々のコードやケーブルとモニターがある。

「ほう…わたしにはよくわからないが、人間には重要な物なのだろうな」

と、スクルドと入るが、スクルドはケーブルに足を引っ掛けて転んだ。

「いたたたたたた……！？」

スクルドは立とうとしたが、足首を抑えたままだった。運の悪い事に捻挫したようだ。

「……仕方が無いな」

ディスペアはスクルドを持ちあげ、椅子も無いので左肩の上に座らせた。

「すまないが、これで我慢してくれ。椅子が無いから仕方が無い」

スクルドは靴を脱いで落ちないようにしがみつく。

「しっかりつかまっていろ。わたしの勘が正しければ、そろそろネズミが来るころだ」

ディスペアがオーディン達を別の通路に行かせたのは、自分の手でジークフリードを葬るため。依頼されたからには自分自身で解決するというプライドがある。

「ここがメインコンピュータ室…」

丁度いいタイミングで、海馬の言っていた『ピンク頭のネズミ』がやってきた。

「貴様が海馬の言っていた『ピンク頭のネズミ』か。待っていたぞ、ジークフリード・フォン・シュレイダー」

しかし、ジークは返事をすることなくメインコンピュータに触れようとした。しかし、メインコンピュータは起動しなかった。

「わたしとメインコンピュータは直結している。それを起動させたければわたしを倒すしかない」

ジークは顔を顰めてディスペアを睨み、その後ディスペアの肩の上に座っている女神スクルドを見て少し驚いた表情をする。どうやら、自分の持っているカードのイラストにそっくりな女がいることに驚愕したようだ。その後は再びディスペアを睨みつけ、デュエルディスクを展開した。

「それでいい。何故お前が海馬コーポレーションのデュエルディスクを持っているかは知らないが…」

「わたしには君の戯言に付き合っている暇はない」

「「デュエル」」

「わたしのターン。わたしは『スカイ・コア』を守備表示で召喚する。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
スカイ・コア　ＤＥＦ０
伏せカード×１

「わたしのターン。まずは『強欲な壺』で2枚ドロー。わたしは魔法カード『Ｗａｌｋｕｒｅｎ　Ｒｉｔｔ』を発動！手札の『ワルキューレ』を全て特殊召喚する！
現れよ『ワルキューレ・ツヴァイト』『ワルキューレ・ドリット』『ワルキューレ・アルテスト』！」

「成程な…」

ロキがああいうだけある。強さはともかく、色々な意味で酷いデッキだ。

「『ワルキューレ・ツヴァイト』のモンスター効果発動！召喚時に相手モンスター1体を破壊する！」

光の粒子がスカイ・コアに降り注ぎ破壊された。しかし…

「『スカイ・コア』の効果発動。このカードがカードの効果によって破壊された時、デッキ・手札・墓地よりレベル1の『機皇帝スキエル∞』『スキエルT』『スキエルA』『スキエルG』『スキエルC』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝スキエル」

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００
スキエルＴ　ＡＴＫ４００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００
スキエルＧ　ＤＥＦ３００
スキエルＣ　ＡＴＫ６００

「何！」

「フッ…お前はこのターンでわたしを倒すつもりだったようだが、機皇帝スキエルの召喚は大きな誤算だったようだな。お前が発動した『Ｗａｌｋｕｒｅｎ　Ｒｉｔｔ』の効果によって、特殊召喚された『ワルキューレ』は全てデッキに戻る」

「…手札から『ワルキューレの抱擁』発動」

「『機皇帝スキエル∞』は効果の対象にならない。破壊したければ

パーツのみだ」

「くっ…『ワルキューレ・アルテスト』を守備表示に変更し、『スキエルC』を破壊する。『ニーベルングの財宝』を発動。『ニーベルングの指輪』を…」

「おのれ…『スキエルT』に装備する！」

スキエルの首の部分に銀のルーン文字が刻まれた指輪がはめられる。装備モンスターはコントローラーのコントロールを受け付けなくなる効果だ。もっとも、スキエルTは元から攻撃はできない上に効果もデメリット以外は無いので、装備されたところで何も問題が無い。

「さらにカードを5枚ドロー。手札より永続魔法『女神ウルドの裁断』『女神ヴェルダンディーの導き』『女神スクルドの託宣』を発動する」

「！！」

「でぃ、ディスペア…あのカードって…」

「何も言うな。君が気にすることは何もない」

「未来を司る女神スクルドよ。来るべき未来をわたしに示せ！」

ディスペアの肩に座っているスクルドは複雑な表情になる。カードとはいえ自分自身がディスペアの敵になっていることが気に入らないらしい。

「デッキの上から3枚見て、好きな順番に戻す…その程度では、わ

たしを倒すことなどできないぞ？」

わたしはデッキの上から3枚を取り出し、見せながら言う。何枚除外されようと同じ事。こいつではわたしに勝つことはできない。

「3番目のカードを1番上におけ。さらに『女神ヴェルダンディーの導き』の効果により、デッキの一番上のカードの種類を当てる。当たった場合、カードは裏側表示でフィールドにセットされる。わたしが宣言するのは『モンスターカード』」

「……『機皇神龍アステリスク』…」

「そして、過去を司る女神ウルドがそのカードを裁断する。ヴァルハラに旅立て『機皇神龍アステリスク』！」

アステリスクは光に包まれて消滅した。

「ターンエンド」

ジーク
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
女神ウルドの裁断
女神ヴェルダンディーの導き
女神スクルドの託宣

「ヴァルハラなどと笑わせる。わたしのターン。お前の発動した『ニーベルングの指輪』の効果により2枚ドローし、モンスターカードがあれば1枚捨てる。わたしは『グランエルＡ』を墓地に送る。

トラップ発動『機皇暴発』。機皇帝のパーツを破壊し、デッキからカードを2枚ドローする。『スキエルT』を破壊し、2枚ドロー。装備対象を失った『ニーベルングの指輪』は墓地に送られる。わたしは『ワイズ・コア』を召喚する。そして手札より魔法カード『インフィニティ・リバース』を発動。フィールド上のカードをすべて破壊する！」

三姉妹と機皇はすべて破壊された。しかし、ワイズ・コアが破壊されたことによって…

「『ワイズ・コア』がカード効果で破壊された時、デッキ・手札・墓地からレベル1の『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルT』『ワイゼルA』『ワイゼルG』『ワイゼルC』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝ワイゼル」

機皇帝ワイゼル∞　ATK2500
ワイゼルT　ATK500
ワイゼルA　ATK1200
ワイゼルG　DEF1200
ワイゼルC　ATK800

「またしても…」

「安心しろ。『インフィニティ・リバース』を使用したターン、『機皇』モンスターは攻撃できない。わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
LP4000
手札×5
フィールド

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００

奴の女神コンボは消えた。そして没落貴族の手札はこのターンのドローで４枚になるが…攻撃力の低いワルキューレでは機皇帝ワイゼルを倒すことはできない。どう出る？

「わたしのターン！『ワルキューレ・ツヴァイト』召喚。その効果により、『ワイゼルＡ』を破壊」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００→１３００

「さらに、魔法カード『ワルキューレの制裁』を発動。このターン『ワイゼルＧ』の効果を無効にする。そして、『ワルキューレ・ツヴァイト』で『機皇帝ワイゼル∞』を攻撃」

ディスペア　ＬＰ４０００→３７００

「『ワイゼルＴ』『ワイゼルＧ』『ワイゼルＣ』は機皇帝の本体がフィールドに存在しない場合破壊される。もっとも、『ワイゼルＧ』は効果を失っているため、破壊されるのはエンドフェイズだが…手札よりトラップ発動『絶望のモーメント』。わたしの『機皇』モンスターが破壊された時に発動できる。デッキの上から5枚墓地に送り、デッキ・手札・墓地から『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』のいずれか1体を特殊召喚する。わたしは、『グランド・コア』を特殊召喚」

「…カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ワイゼルGは、効果を取り戻して破壊された。これでディスペアのフィールドにはグランド・コアが1体。

ジーク
LP4000
手札×2
フィールド
ワルキューレ・ツヴァイト　ATK1600
伏せカード×1

「わたしのターン。わたしは永続魔法『機皇整備』を発動。1ターンに1度、墓地から『機皇』モンスター1体の効果を無効にし、わたしのフィールドに特殊召喚することができる。現れろ、『機皇神マシニクル∞？』！」

機皇神マシニクル∞？　ATK4000

ディスペアは、ニーベルングの指輪の効果でこのカードを墓地に送っていた。ジークは完全に効果を逆手に取られていることになる。

「攻撃力4000…！」

「お前が『ニーベルングの指輪』を発動してくれたからだ。『機皇神マシニクル∞？』で『ワルキューレ・ツヴァイト』を攻撃。ザ・キューブ・オブ・ディスペア」

機皇神マシニクルが狭い部屋の中で砲撃のチャージを開始する。ディスペアがゴッドモーメントを起動しなくてよかったと、スクルド

は思っていた。

「させるものか。トラップ発動『ヴォータンの裁き』。デッキの一番上のカードと手札1枚を入れ替え、デッキをシャッフルしバトルフェイズを終了する」

ジークはお得意のカウンタートラップでディスペアの攻撃を無効にする。しかし、明らかにジークの顔には焦りの色が浮かんでいる。攻撃力４０００は、この世界で1回直接攻撃を受ければ0になる。神々の８０００とはわけが違うのだ。

「わたしは魔法カード『インフィニティ・ブラスター』を発動。わたしのフィールド上に存在する全てのモンスターを破壊し、手札を全てデッキに戻し新たにカードを5枚ドローする」

メインコンピュータ室の中央で赤い爆発が起こり、ディスペアのモンスターはすべて破壊された。

「カードを5枚ドロー。そして、効果破壊された『グランド・コア』のモンスター効果により、デッキ・手札・墓地からレベル1の『機皇帝グランエル∞』『グランエルT』『グランエルA』『グランエルG』『グランエルC』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝グランエル」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ３７００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００

「『機皇帝グランエル∞』の攻撃力は自分のライフと同じになる。機皇帝と機皇神を全て召喚させた人間はお前が初めてだ。カードを1枚伏せてターンエンド」

ディスペア
ＬＰ３７００
手札×４
フィールド
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ３７００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００
伏せカード×１

没落貴族は確実に焦っている…もう少しでわたしの勝利だ。

「わたしのターン！わたしは魔法カード『世界の終末－ラグナロク』を発動！手札とデッキのワルキューレを全て墓地に送り、相手フィールド上のカードをすべて破壊する！」

無数の光弾が機皇帝グランエルを襲い、粉々に破壊された。

「没落貴族よ…ここまでのようだな。わたしは速攻魔法『機皇神の賜与』を発動する。墓地に『機皇帝グランエル∞』『機皇帝スキエル∞』『機皇帝グランエル∞』『機皇神マシニクル∞？』が揃っている時に発動。デッキから『機皇神』と名のつくカード1枚を手札に加え、強制的に相手ターンを終了させる」

ディスペアはデッキを空中にばらまき、その中から1枚を手に取り、

宙に舞っているカードを再び一握りでつかんで戻した。

「何っ！？」

ジーク
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
ワルキューレ・ツヴァイト　ＡＴＫ１６００

「わたしのターン。永続魔法『機皇整備』の効果により墓地から『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する。そして、フィールドの『機皇神マシニクル∞？』を生贄に捧げ、手札より『機皇神帝エクシニクル∞』を特殊召喚する！」

デュエルアカデミア校舎外にエクシニクルが召喚され、メインコンピュータ室のモニターで映し出される。

「『機皇神帝エクシニクル∞』、起動完了。攻撃力はわたしの墓地の『機皇』モンスターの合計となる」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ０→８６００

「こ、攻撃力８６００だと…」

「お前にわたしを倒せるわけが無い。所詮お前に運命は味方しない。『機皇神帝エクシニクル∞』で『ワルキューレ・ツヴァイト』を攻撃。インフィニティディスペア・カノン！」

「うあああああああああああああああああああ！」

没落貴族　ＬＰ４０００↓－３０００

「わたしを倒せなかった今、メインコンピュータの起動はできない。お前がここにいても意味のない事…すぐに帰るが良い」

ディスペアは、スクルドを抱えたままジークの姿を一切見ずに立ち去った。メインコンピュータには人間には理解不能な時限式パスワードを入力したため、少なくとも一週間先まではディスペアにしか起動できない。

だが、問題はこの後だった。

～～～校長室～～～

スクルドはまともに歩けない状態だった。スクルドが使用できる回復魔法は、『意図的にやられた傷を回復する』魔法のみであるため、自然のけがである『捻挫』は治せない。

ディスペアは回復魔法を元から使用できないし、全てのけがを治せるロキは今はいない。

トールとオーディンも回復魔法は使用できない。スクルドが時々ドジるのは周知のことだが、捻挫というケースは初めてだった。

「本当に大丈夫か？かなりつらそうだが…？」

「こ、このくらいどうってことないよ。ディスペアに迷惑なんかかけたくないし…何とかする…ッ！」

スクルドは無理して立ち上がろうとするが立てずに倒れ、ディスペアに支えられた。今まで捻挫などしたことが無いため、かなりの苦痛のようだ。運が悪く、重い捻挫らしい。

「君がわたしに迷惑をかけたことなど1度も無い」

それに、スクルドは今、裸足でありとても外を歩けるような状態じゃない。

日焼けと言うものを知らなさそうな…実際にいくら日光に当たっても日焼けはしないが、白い肌が紫色に腫れているのを見るのは痛々しい。

「じゃあ…その、水を持ってきて欲しいんだけど…喉が乾いちゃって」

ディスペアはコップに水を入れスクルドに渡した。

「暫くすればロキも戻る。そうすれば回復できるだろう」

「相変わらずスクルドには甘いのだな…ディスペア」

「黙れトール。君は恋人がいる者に対して嫉妬するくらいなら早く自分も恋人を探せ」

「ほう…？そうやって自分の恋人だけ甘やかすのだな…？」

ディスペアは黙ってアーティスを構え、トールもミョルニルを構えた。が、ディスペアはすぐにアーティスを消した。

「わたしは怪我をした女神のいる部屋で戦いなどしたくない」

それがスクルドなら尚更だ。

「……それもそうだな。すまなかった」

この後、暫くしてからロキが戻り、スクルドの捻挫を治した。
ちなみにその後、スクルドは水を運んでいる時に転んで頭から水をかぶった。

第１０８話　ジェネックス２日目（後書き）

次回『ジェネックス３日目』

ドジな面を見せたスクルドの回でした。デュエル？没落貴族が勝てるわけが（ｒｙ

2013

第１０９話　ジェネックス3日目（前書き）

今回のデュエルはおまけのようなものです。トールの新しい切り札が判明しますが。
さらに、今回は短いです。
最近の出来事
公立高校に受かりました。良かったです。しばらくは気楽に過ごせそうです…。
機皇帝のデッキに、各機皇帝が2積みになってさらにマシニクルが出しやすくなったぜ！マシニクルさんなかなか使えます。

2014

第１０９話　ジェネックス３日目

～～～校長室～～～

「……４０℃か。熱だな」

スクルドが差し出した体温計を見る。表示は人間単位で４０℃だ。ちなみに、スクルドの平均体温は人間単位で３６℃。昨日、頭から水をかぶったからなのか？

「僕はもう協力するのは嫌だよ。年中魔法ばっかり使っていたらちっとも進歩できないからね。たまには自力でどうにかしてくれよ、キッヒャッヒャッヒャッヒャ」

ロキはスクルドの熱を治すのを拒む。当然それはロキの意思であるため、ディスペアはそれを受け入れる。無理矢理やらせようとすることは絶対にしない。

「クロノス。今日、わたしとスクルドはジェネックスに参加できない。わたしは看病のためにここに残る」

「分かったノーネ。校長に伝えておくノーネ」

「……うぅ～、寒いよ～」

「悪寒か…何か温かいものはないか？とりあえずは湯を沸かそう。少しだけ待っていてくれ」

ディスペアはボウル1杯の水を用意すると、水に手をかざした。そして、10秒経つと湯が沸いていた。

「あまりこういうことはしたくないが、スクルドのためなら仕方あるまい…」

ディスペアはリビングに置いてあったハーブを使用してハーブティーを作り、スクルドに渡した。

「こんなものしかできなかったが許して欲しい」

「あ、ありがとう…」

スクルドは時々咳をする。

「わたしは少し食料を買ってくる。留守にするが、大丈夫だな?」

「うん」

ディスペアはスクルドの返事を聞いて、スクルドの頭に手を軽く乗せてから部屋を出た。スクルドは手を乗せられた場所を触ってみる。特に何も変わったことはない。

暫くすると、ディスペアは病人でも食べられそうな軽いものを持ってきた。うどんとおかゆだ。どっちも炭水化物だ。

「これでよければ食べてくれ。病人は神力が減少している。何か食べれば回復は早まる…と言いたいところだがこの状態では食べられないか?」

元から身体が弱いスクルドが病気と言うことは、余計に体力が落ちているということだ。常人ならばまだ何か食べようとすれば食べられるだろうが、そうはいかない。
だが、そこは女神。無理にでも起きて食べる。

「……無理はするなよ。わたしはずっとここに座っているから何か要望があったら言ってくれ」

ディスペアは、スクルドの寝ているベッドの横に椅子を創り、そこに座って目をつぶった。起きてはいるが、神力の回復に集中しているという証だ。

～～～その頃、トールサイド～～～

「我は『ＸＸＸ－セイバー・オメガブラスター』でダイレクトアタック。ラスト・セイバー」

「うわあああああああ！」

ブルー生徒　ＬＰ－１０５００

これで３０枚目…やはりザコ相手ではそう集まることはないか。
だが、そんな我の前にちょうどいい相手が現れた。

「あなたもデュエルアカデミアの生徒ですか。わたしが葬って差し上げましょう」

プロデュエリストだ。既にデュエルディスクを展開している。

「フン、プロデュエリストごときが我の相手になるものか」

「「デュエル」」

「まずは我から行かせてもらう。ドロー、我は『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を召喚する。カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

トール
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
ＸＸ－セイバーフラムナイト　ＡＴＫ１４００
伏せカード×１

「わたしのターンです。わたしは『神獣王バルバロス』を召喚し、『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を攻撃です」

「そんな単純な攻撃は通用しない。我は『ＸＸ－セイバーフラムナイト』の効果を発動。１度だけ相手の攻撃を無効にする！」

神獣王バルバロス…スキルドレインか？禁じられた聖杯か？それとも…

「ターンエンド」

プロ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド

神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００

バカな…何も伏せない？何か策があるのか？ただ単にバカなだけか？

「我のターン。我は『ＸＸ－セイバーレイジグラ』を召喚する。そして、２体以上の『Ｘ－セイバー』が存在することで『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する！レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』とレベル１の『ＸＸ－セイバーレイジグラ』にレベル３の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング。限りなき力の封印を解き放て！シンクロ召喚『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』！」

ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター　ＡＴＫ２５００

「このカードの攻撃力は、自分の墓地の『Ｘ－セイバー』１体につき１５００ポイントアップする。我の墓地には３体、よって攻撃力は４５００ポイントアップする」

ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター　ＡＴＫ２５００→７０００

「こ、攻撃力７０００！？」

「それだけではない。『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』は、自分の墓地から『Ｘ－セイバー』を名のつくカードを１枚除外することで、相手の手札を全て墓地に送ることができるのだ。この効果を使用する必要はないがな。『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』で『神獣王バルバロス』を攻撃。ラスト・セイバー！」

「せ、生徒ごときにこのわたしが負ける…！？うわあああああ！」

プロ　ＬＰ４０００→－２１００

「生徒ごとき…か。ならば我から言わせてもらえばその『生徒ごとき』に負けたお前はカスと言うことになるがな。とりあえず、大会規定によってメダルは全て頂いて行くぞ。これが無ければ強い奴は見向きもしないそうなのでな」

１５枚…所詮はこの程度か。バルバロスを使用する上でスキルドレインも禁じられた聖杯も無いなら、素早く3体の生け贄を揃えるギミックを仕込むべきだろう。

～～～校長室～～～

「寒いよ～…何か温かいもの…、ない？」

ディスペアは目を開け、とりあえずスクルドの額に手を当ててみる。全く熱が下がる気配が無い。

「むぅ…やはり下がらんか。…茶とリンゴだ」

ディスペアは、そっけないようにスクルドに茶とリンゴを渡す。実を言うとかなり心配しているが。

「ありがとう…」

「礼はいらない。わたしは頼まれたことをしただけだ」

ディスペアは一言そう告げると再び目をつぶった。

スクルドはそんなディスペアを見て、少しだけ笑って茶を飲む。

そして暫く経った後、ウルズとヴェルザンディーがやってきた。ディスペアがあらかじめスクルドが風邪を引いたと言ったら、慌てて準備してきたのだ。

「本当に来るとはな」

「そりゃあそうよ。妹が風邪で寝込んでいるのに、姉が来ないわけにいかないでしょ？」

ちなみに、ノルン三姉妹が神の中で最も位の高いディスペアに馴れ馴れしく話しているのはディスペア自身の要望だからだ。幼少期の頃に様付けで呼ばれ、妙に遠い距離を感じるからと呼び捨てで呼ぶように言った。

「で、わたしはもう部屋から出ていいか？」

「ダメに決まってるでしょ？スクルドがさびしがるわよ？ディスペア依存症なのに」

わたしはそんな病名聞いたことないぞ。

「スクルドはわたしに依存などしていないと思うが？」

こういうところでディスペアは鈍い。周りの存在…主にスクルドが、どれだけ自分を大切に想っているのか理解していないのだ。だから平気で無茶をするし、スクルドをかばうためなら命を犠牲にすることもいとわない。

「これは重症ね。恋愛については何も鈍くないのにこういうところはほんとに鈍いんだから呆れるわ」

ヴェルザンディーはそう言いながら3枚のカードを取り出してディスペアに渡した。

「フレイア様からよ。そろそろそれを使ってもいいころなんじゃないかってね」

「フレイアから…？『機皇神帝龍エクスブルム』『機皇降誕』『機皇神帝フィニシクル∞？』…ついに封印が解かれたか」

究極神とまではいかないが、デュエルモンスターズ界最強と言われた『三幻神』を軽く退けるだけの力を持つ最強の『機皇神帝』。究極神を使わなくても強大な力を操れるようになったのはうれしいことだ。ちなみに大きさは『機皇神帝龍エクスブルム』が１０ｋｍ、『機皇神帝フィニシクル∞？』が１５ｋｍと、割と小回りが利く大きさである。

「わたしの固有デッキは内容が時々変わっているからな…シーラカンスは今現在『伝説の都アトランティス』軸になっているぞ…」

究極神に加え『深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）』…恐ろしい程のパワー押しのデッキになっている。これでは『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』やトールのデッキと変わらない。

「へえ、アトランティスかぁ…昔、行ったことがあったわね。今も時空移動で行けるけど。美しい都よ」

「ほう…今度、風邪が治ったスクルドと共に行ってくるとしよう。

……さっきからスクルドの声がしないな？」

ディスペアがスクルドを見ると、スクルドは静かに寝息を立てて寝ていた。

「このかわいい顔が時々憎らしく思えてくるわね…何1人で楽して遊んでるのよ！みたいな。私達も別に仕事をしているわけじゃないけれども、退屈しなさそうでいいわね」

「そうね。私達もあなた達と一緒にいれば退屈しないでしょうね。毎日ただ家で暮らしているって言うのも、もう飽きたわ」

どうやらこの姉妹はもう普通の生活に飽きてしまったらしい。

「お前達さえよければわたしは構わないがな。寧ろ、さらなる退屈しのぎになりそうだ」

女神がスクルド1人では、スクルドが息苦しいだろうしな。それに、スクルドの力が戻り、真実を知った今、ウルズとヴェルザンディーが人間に対して恨みを持っているはずもない。

「そうだな。我も退屈しなさそうだ」

「僕もだね。ウルズがいるならだけど」

「お前達、いつの間に？」

「「たった今」」

「さ、後はオーディンだけだね」

ロキとトールは笑いながらオーディンを見る。

「……好きにすると良い」

オーディンは半ばあきらめた状態でＯＫの返事を出した。

「というわけだ。わたし達はいつでもお前たちを迎え入れよう」

ウルズとヴェルザンディーは、きょとんとした顔で立っていた。
すぐに我に返ると。

「「じゃあ…宜しくお願いします！」」

わたし達の望んだ返事が返ってきた。スクルドの熱は、この後夜に治った。さらに、ウルズとヴェルザンディーが一緒に暮らすことになると聞いて、喜んでいた。

……次回に続く。

第１０９話　ジェネックス3日目（後書き）

ノルン三姉妹を全員レギュラー化しました、最初からレギュラーにするつもりだったのですが、機皇神帝のカードを渡すという機会も含めて今回で正式にレギュラー化することにしました。今後もよろしくお願いします。そして、いないとは思いますがノルン三姉妹がレギュラー化したことでヘムのレギュラー化を期待した方々…ヘムは天地がひっくり返る程度ではレギュラー化しません…。今のところ予定もありません。

今回のトールのエースモンスターである『ＸＸ－セイバーオメガブラスター』の効果です。トールのキャラクター設定の方にも載せておきます。

ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター
レベル１０　地属性　戦士族　ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２５００
『ＸＸ－セイバー』と名のつくチューナー１体＋『ＸＸ－セイバー』と名のつくチューナー以外のモンスター２体
このカードは上記のカードでしかシンクロ召喚できない。このカードの攻撃力と守備力は、自分の墓地の『ＸＸ－セイバー』と名のつくモンスター１体につき１５００ポイントアップする。このカードを対象にする魔法・罠・モンスター効果を無効にし破壊する。このカードがフィールドを離れたターンのエンドフェイズ、墓地から『ＸＸ－セイバー』と名のつくカードを２枚除外することで、このカードを自分フィールドに特殊召喚する。この効果によって特殊召喚に成功したとき、自分のデッキの上からカードを３枚墓地に送る。１ターンに１度、墓地から『ＸＸ－セイバー』と名のつくモンスター１体を除外することで、相手の手札を全て墓地に送る。

※ウルズとヴェルザンディーのキャラクター設定は、要望があれば載せます。

第１１０話　ジェネックス４日目（前書き）

今回のタッグデュエルは、最後の人から攻撃可能になります。

今日の出来事

アンコール上映を見てきました。男性よりも女性の方が多いとはどういうことだ！？

あと、マシニクルの２枚目が手に入りました。マシニクルキター！

2027

第１１０話　ジェネックス４日目

～～～校長室～～～

「人間界ってちょっと寒いわね」

「それはそうだろうな、神界の方が暖かいだろう」

「でも、やっぱり退屈しないわね。あ、揃った。ストレートフラッシュよ」↑ウルズ

「私は４カードね」↑ヴェルザンディー

「あ、珍しくロイヤルストレートフラッシュが揃ってる」↑スクルド

「わたしは最後の手札の入れ替えをする。……『ダイヤの６』…！！」↑ディスペア

ディスペアはテーブルにカードを表向きで置く。ノーペアだ。

「ディスペア、ノルン相手だと弱いね。そしてデュエルしろよ」

ロキは前にもこんなツッコミを入れてきた気がする。

「次、何やる？」

ウルズが訊く。こういう役はいつもウルズだ。

「う〜ん…あ、ババ抜き！」

ヴェルザンディーが返す。

スクルドは当然賛成する。何この息ぴったりな三姉妹。

「わたしは抜けてもいいか？」

ウルズとヴェルザンディーはともかく、スクルドがさびしそうな顔をする。

……頼むから抜けさせてくれないか？全然デュエルをしていないのだが…。

「…後1回だけだ」

仕方が無いのでこれが最後という条件を付けて参加する。

……結果についてはお察し下さい。

〜〜〜森〜〜〜

スクルドを連れて森に来た。ウルズとヴェルザンディーは基本、部屋で談笑しているらしい。たまにロキも加わるそうだ。

「君はあの2人と一緒じゃなくていいのか？」

「私はディスペアと一緒の方がいいかな…」

結局いつも通りと言うことだ。

暫くすると、わたし達の目には2人組のホワイト生徒が現れた。どうやら、2人で同盟を組んで戦っているらしい。大会規定にも反則としては載っていないので、賢い戦術だ。そして、その2人はかなり息があっている。負ける気はないらしく、デュエルディスクを展開してきた。

「面白い。こちらも2人だ、タッグデュエルで良いか？」

「もちろん構わない。デュエルだ！」

「「「「デュエル」」」」

「わたしの先攻。わたしは手札より永続魔法『機皇整備』を発動する。このカードの効果により、1ターンに1度墓地から『機皇』モンスター1体の効果を無効にして特殊召喚することができる。『機皇兵スキエル・アイン』を召喚し魔法カード『起爆兵』を発動する。デッキの上から3枚墓地に送り、自分フィールド上の機械族モンスター1体を破壊。相手にそのモンスターの攻撃力の半分ダメージを与える。わたしが破壊するのは『機皇兵スキエル・アイン』、６００ポイントのダメージを受けてもらう！」

ホワイト生徒2人は、この程度は構わないという顔でダメージを受けた。

ホワイト生徒コンビ　ＬＰ８０００→７４００

「さらに『機皇整備』の効果により、墓地から『機皇神マシニクル∞？』の効果を無効にして守備表示で特殊召喚する。ターンエンド」

ディスペア

ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＤＥＦ４０００
機皇整備

「俺のターンドロー、『おろかな騎士』を召喚。このカードの召喚に成功した時、全てのプレイヤーはデッキからカードを1枚墓地に送ることができる！」

ディスペアは『機皇兵ワイゼル・アイン』、スクルドは『グローアップ・バルブ』、おろかな騎士を召喚したホワイト生徒Ａ（ダイキ）は『堕天使ゼラート』、ホワイト生徒Ｂ（カズヤ）は『時花の魔女－フルール・ド・ソルシエール』を墓地に送った。

「そして魔法カード『宝札の代償』。デッキから2枚ドローする代わりに、相手は墓地からモンスター1体を特殊召喚できる。召喚しろ、ダイキ」

「サンキュー、俺は墓地から『時花の魔女－フルール・ド・ソルシエール』を特殊召喚する！」

「わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を特殊召喚する」

「私は『グローアップ・バルブ』を守備表示で特殊召喚！」

「『時花の魔女－フルール・ド・ソルシエール』の効果発動！このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、相手の墓地からモンスター1体を特殊召喚できる。俺はカイザーの墓地から『機皇兵グランエル・アイン』を特殊召喚するぜ。エンドフェイズに破壊されるけど

な」

……恐ろしい程相性のいいタッグだな。ここまで相性のいいタッグは数えるほどしか見たことが無いぞ。いくら機皇神といえども、油断をすればやられる。

「スクルド…このデュエル、油断はできないぞ。こいつらは生半可な実力ではない」

スクルドは黙ってうなずいた。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

ダイキ
ＬＰ７４００
手札×５
フィールド
おろかな騎士　ＡＴＫ１８００
伏せカード×１

「私のターン。私は『グローアップ・バルブ』を生贄にして、『ギガプラント』を特殊召喚。そして、『グローアップ・バルブ』の効果でデッキの一番上のカード1枚を墓地に送って、このカードを特殊召喚する。レベル６の『ギガプラント』にレベル１の『グローアップ・バルブ』をチューニング！シンクロ召喚、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

「これが『ブラック・ローズ・ドラゴン』か。かっこいいな」

「まだだよ。手札から魔法カード『死者蘇生』を発動して、『エボ

リューション・ローズ』を特殊召喚。『エボリューション・ローズ』の特殊召喚に成功した時、デッキから1枚ドローできる。そして、『フォーチュン・ローズ』を召喚」

1ターン目から『エターナル・ローズ・ドラゴン』か。スクルドは本気だな。

「レベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』にレベル4の『フォーチュン・ローズ』とレベル1の『エボリューション・ローズ』をチューニング。聖なる炎の光、悠久の世界を照らす！未来の扉を開け！シンクロ召喚、『エターナル・ローズ・ドラゴン』！」

何度見ても神々しい光を放つ究極の龍の1体が遥か天空より姿を現した。

「私は墓地の『ギガプラント』を除外して、『エターナル・ローズ・ドラゴン』の攻撃力を2400ポイントアップする！ターンエンドだよ」

スクルド
LP8000
手札×4
フィールド
エターナル・ローズ・ドラゴン　ATK6400

これで3人の1ターン目が終わったことになる。1ターン目の最後のプレイヤーは攻撃ができる。私とディスペアのフィールドには、攻撃力4000を超えるモンスターがいる…多分大丈夫だとは思うけど…。

「俺のターン。魔法カード『フォース』を発動。『エターナル・ローズ・ドラゴン』の攻撃力を半分にして、『時花の魔女－フルール・ド・ソルシエール』の攻撃力を３２００ポイントアップさせる」

「そ、そんな！」

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ６４００→３２００
時花の魔女－フルール・ド・ソルシエール　ＡＴＫ２９００→６１００

「『時花の魔女－フルール・ド・ソルシエール』で『エターナル・ローズ・ドラゴン』を攻撃だ！」

スクルド　ＬＰ８０００→５１００

エターナル・ローズ・ドラゴンは死ぬ間際に自爆し、フィールド上のカードを全て巻き込んで消えた。当然、ディスペアのフィールドのカードも。

「そんな…そんな…」

また、また足を引っ張った。これで何度目だろう？何回足を引っ張れが気が済むんだろう？

「スクルド…わたし達はまだ負けていない。わたしは手札からトラップカード『フレアブラスト』を発動。デッキまたは墓地からモンスター１体を特殊召喚し、そのモンスターを破壊する。『グランド・コア』を召喚。そして『グランド・コア』が破壊されたことにより、デッキ・手札・墓地からレベル１の『機皇帝グランエル∞』『グランエルＴ』『グランエルＡ』『グランエルＧ』『グランエルＣ』を

特殊召喚する。合体しろ、機皇帝グランエル！」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ５１００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００

「何だって！？」

突然現れた攻撃力５１００のモンスターに、臨機応変に対処することができるはずが無い。カズヤの手札には、機皇帝グランエルを倒すカードは無かった。

「ハッハハハハハハハ！これで貴様らに勝ち目はない。『フレアブラスト』のもう１つの効果を発動し、破壊されたモンスターのレベルの３００倍のダメージを与える」

炎の球が１つカズヤとダイキに当たった。

カズヤ　ＬＰ７４００→７１００

「くそ…モンスターをセット、さらにカードを伏せてターンエンド」

カズヤ
ＬＰ７１００
手札×３
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×１

「わたしのターン。永続魔法『機皇連召』発動。わたしのモンスターがカード効果で破壊され墓地に送られた時、デッキまたは手札から『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』のいずれか1体を特殊召喚し、破壊することができる。このカードは相手のカードの効果によっては破壊・除外されず、効果も無効にされない。『機皇帝グランエル∞』でセットモンスターを攻撃。グランド・スローター・キャノン」

破壊されたのはメタモルポットだった。互いのプレイヤーは全ての手札を捨て、カードを5枚ドローする効果を持つ。全員手札を入れ替えた。その後、ダイキはかなり余裕の表情になった。

～～～その頃、校長室・ウルズ＆ロキ～～～

「で、ここでコーヒーを飲んでたんだけど、値段がびっくりでね。とりあえず『スターダスト・ドラゴン』を攻撃表示のままターンエンド」

「へぇ～…楽しそうね。じゃあ『デブリ・ドラゴン』と『ダンディライオン』と『綿毛トークン』2体をシンクロ素材にして『氷結界の龍トリシューラ』を召喚して、『スターダスト・ドラゴン』と墓地の『グローアップ・バルブ』と手札1枚を除外してダイレクトアタック」

「２７００ダメージか…きついな。それにトリシューラとかやる気なくすわ～…」

「そう言えばこの前、ヴェルザンディーが階段から落ちて、一日中動けなかったのよ。ターンエンド」

「うわ…痛そう…『Ｄ－ＨＥＲＯディアボリック・ガイ』を除外してデッキから同名カードを特殊召喚して、『ゾンビキャリア』を召喚して『レッド・デーモンズ・ドラゴン』をシンクロ召喚してトリシューラを攻撃」

「次のターンまでトリシューラが残っていれば勝てたのに…でね、フレイア様がお見舞いに来てくれたのよね」

「へえ、あのフレイアがね…」

ロキとウルズは、校長室で最近あったことなどを話しながら、テーブルでデュエルをしていた。かなり平和だ。

～～～サイドアウト～～～

「わたしはカードを2枚伏せ、ターンエンドッ！！」

ディスペア
ＬＰ５１００
手札×３
フィールド
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ５１００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００

グランエルC　ATK700
機皇連召
伏せカード×2

「俺のターン。魔法カード『ライトニング・ボルテックス』！手札を1枚捨てて、相手フィールド上の表側表示モンスターをすべて破壊する！」

無数の雷が空から降り注ぎ、機皇帝グランエルを破壊した。しかし、攻撃力5100のモンスターを失ってもディスペアは涼しい顔でいる。

「『機皇連召』効果発動。デッキから『スカイ・コア』を特殊召喚し、破壊する。そしてこのカードが効果によって破壊された時、デッキ・手札・墓地からレベル1の『機皇帝スキエル∞』『スキエルT』『スキエルA』『スキエルG』『スキエルC』を特殊召喚する。合体せよ、機皇帝スキエル！」

機皇帝スキエル∞　ATK2200
スキエルT　ATK400
スキエルA　ATK1000
スキエルG　DEF300
スキエルC　ATK600

グランエルとスキエルじゃ攻撃力が違いすぎるよ…ディスペア、一体何を考えてるの…？

「魔法カード『死者蘇生』！現れろ、ゼラート！」

再び堕天使ゼラートを召喚したな…スキエルが破壊される。だが…

「『堕天使ゼラート』の効果発動！手札の闇属性モンスター『ダーク・ホルス・ドラゴン』を墓地に送って、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「わたしのフィールド上のモンスターがカード効果によって破壊され墓地に送られたことで、『機皇連召』を発動し、デッキから『ワイズ・コア』を特殊召喚し、破壊する。そして『ワイズ・コア』がカード効果によって破壊された時、デッキ・手札・墓地からレベル１の『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルＴ』『ワイゼルＡ』『ワイゼルＧ』『ワイゼルＣ』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝ワイゼル！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００

これでもう、ディスペアのデッキには『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』が無くなっちゃった…ワイゼルが破壊されたらどうしよう…。

「さらに『ダーク・クリエイター』を墓地に送り、機皇帝ワイゼルを破壊するぜ！」

ほ、ほんとに破壊されちゃったよ…！？

「フッフフ…ハッハハハハハ！お前が機皇帝を全て倒してくれたことで、ようやくこのカードの発動条件を満たすことができた。礼

を言うぞ。速攻魔法発動！『機皇降誕』！！このカードは…わたしの墓地に『機皇帝スキエル∞』『機皇帝ワイゼル∞』『機皇帝グランエル∞』『機皇神マシニクル∞？』が存在する時に発動できる…この４体をゲームから除外し、デッキ・手札・墓地より『機皇神帝フィニシクル∞？』を特殊召喚する！光臨せよ！『機皇神帝フィニシクル∞？』！！」

機体は機皇神マシニクルをベースにした、全長１５ｋｍのマシニクルの白い部分が黒くなったロボットがプログラムを構築して具現化した。最大の違いは、常に雷を纏っているところだ。

「『機皇神帝フィニシクル∞？』の効果発動。このカードの特殊召喚時に、互いのプレイヤーのフィールド・墓地・除外ゾーンに存在するシンクロモンスターを全てこのカードに装備し、その攻撃力分このカードの攻撃力をアップする！スクルド、『ブラック・ローズ・ドラゴン』と『エターナル・ローズ・ドラゴン』を借りるぞ」

「……うん！」

機皇神帝フィニシクル∞？　ＡＴＫ５０００→１１４００

「「こ、攻撃力１１４００ぅ！？」」

「さらにトラップカードオープン『マジック・エンチャンター』。魔法カード名を１つ宣言し、そのカードが互いのプレイヤーの手札またはデッキにあった場合、そのカードを使用できる。わたしは『時の女神の悪戯』を宣言！」

スクルドはデッキから宣言された『時の女神の悪戯』を取り出して墓地に送った。このカードの効果により、１ターンスキップし、自

分のバトルフェイズにすることができる。つまり、『機皇神帝フィニシクル∞？』は攻撃可能になる。

「くらえ、『機皇神帝フィニシクル∞？』の攻撃！ハイパーディスペア・インフィニティ！」

機皇神帝フィニシクル∞？は、砲撃をホワイト生徒2人に向かって撃ち、その後その砲撃をブーストした。堕天使ゼラートが一瞬だけ壁になったが、すぐに破壊されて直撃した。

「「ぐあああああああああ！！」」

ホワイト2人　ＬＰ７１００→－１５００

デュエルに勝利はしたが、スクルドの顔は晴れない。ディスペアの足を引っ張ったと思って、深く責任を感じているからだ。

それに気付いたディスペアは、スクルドの肩に軽く手を置く。

「スクルドがそんなに気負いすることはない。わたしが何の対策もせずにマシニクルを召喚し、スクルドの全てを任せてしまったのが悪かった」

それでも、スクルドの顔は晴れない。ディスペアは続けて言った。

「わたしはスクルドと共に戦えたことで満足している。１人ではつまらなかっただろうからな」

エターナル・ローズが破壊されなければ、『フレアブラスト』は発動できなかった。あのカードはフィールド上にモンスターが存在しない時のみ手札から発動できるトラップカードだからな。

「でも…！」

「これ以上気にするなら、わたしは君と戦わない方がいいということになる。スクルドがわたしと戦うのが嫌ならばこのまま気にするがいい。わたしは君が足を引っ張ったなんて考えてはいないぞ」

スクルドは、ディスペアが言った言葉で、ようやくいつも通りの明るさを取り戻した。スクルドは最近、ロクな目にあっていないと思っていたが、ディスペアが一緒にいただけでよかったと思った。やはりディスペア依存症だ。

～～～その頃、校長室～～～

「じゃあミスト・ウォームを召喚してトリシューラを召喚してダイレクトアタックするわ」

ロキ　ＬＰ０

「うわ～…もうやりたくない…」

ロキはロキで、ウルズにやられて滅入っているようだった。

第１１０話　ジェネックス４日目（後書き）

今回はいろいろグダグダでしたね…反省します。ちょっと焦って書いたのも原因かもしれません。

次回『ジェネックス５日目』

今回のオリカ『機皇整備』はユタ様からご投稿いただいたものです。ありがとうございました！前回は書き忘れてしまいました。申し訳ありません。

第１１１話　ジェネックス５日目　鳥頭はともかく男尊女卑は許さないでござる

※ディスペアがお怒りになられたようです。
※２：今回の話の前半にはネタが多少あります。後半はスーパーフルボッコタイムです。

最近の出来事
Ｓｉｎサイバーエンドを機皇に突っ込んだ結果、機皇帝が召喚しやすくなりました。フィールド魔法?そんなもの採用したら機皇帝が活躍しなくなるだろう?

第１１１話　ジェネックス５日目　鳥頭はともかく男尊女卑は許さないでござる

～～～校長室～～～

今日はいつもと違い、朝から光の結社が校長室に入り込んできた。狙いはわたしとノルン、ロキ。トールとオーディンは不在だ。

「また返り討ちにされに来たのか？お前達もよく飽きないな…」

大人数で攻め込んできた割には、喋るのは万丈目と天上院のみ。他は一体何のために来た？

「黙れ、お前のマグレも今日で終わりだ！この万丈目ホワイトサンダーが貴様を倒す！」

その後、後ろにいる生徒が『ホワイトサンダー』と叫ぶ。ノルンとロキは耳を押さえて聞かないようにしている。特にウルズとヴェルザンディーは、露骨に嫌そうな顔をする。スクルドは顔をひきつらせている。

「……貴様ら、スクルドのそばで騒ぐな。スクルドは騒々しいのが嫌いなようなのでな」

ディスペアは椅子から立ち、アーティスの先端を万丈目に突きつけた。身長が遥かに違うため、ディスペアが万丈目を見下しているように見える。

「その勝負、受けてやる。わたしの構築途中だった『六武衆』のテストには丁度いい」

その後、ディスペアはデュエル場に移動し、万丈目と向き合い、ゴッドモーメントを展開した。光の結社相手には容赦をするつもりが無いようだ。

「俺が勝ったら、究極神を頂いて行くぞ。斎王様のご命令でな」

「わたしが勝利したら、貴様のデッキはわたしがもらう」

究極神と万丈目のデッキでは割に合わないが…まあいいだろう。わたしの狙いは万丈目のデッキにある1枚のカードだからな…。

「「デュエル」」

「まずはわたしから行かせてもらう。わたしは永続魔法『六武の門』を発動。『六武衆』と名のつくモンスターの召喚に成功する度に『六武の門』に『武士道カウンター』を2つ置く。そして『六武の門』は『武士道カウンター』を取り除いた数によって効果を決める。わたしは『六武衆ーニサシ』を召喚。『六武の門』に『武士道カウンター』を2つ置き、フィールド上に『六武衆』が存在することにより手札から『真六武衆ーキザン』を特殊召喚する。これで『六武の門』のカウンターは4つ。わたしは4つのカウンターを取り除き、『六武の門』の第2の効果を発動。デッキから『六武衆』と名のつくモンスター1体を手札に加える」

ディスペアはオートサーチにより出てきたカードを取り出して手札置きにセットした。

「わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
六武衆ーニサシ　ＡＴＫ１４００
真六武衆ーキザン　ＡＴＫ１８００
六武の門

「ナメやがって！俺のターン。俺は『アームド・ドラゴンＬＶ３』を召喚！」

オレンジ色の小さい竜が現れた。

「フッ…性懲りもなく『アームド・ドラゴン』か」

「黙れ、魔法カード『レベルアップ！』進化しろ、『アームド・ドラゴンＬＶ３』！」

アームド・ドラゴンＬＶ３が墓地に送られ、万丈目のデッキから『アームド・ドラゴンＬＶ５』が特殊召喚された。ディスペアは表情１つ変えず、万丈目を見据えていた。

「さらに装備魔法『ミスト・ボディ』を装備する。装備モンスターは戦闘では破壊されない」

「そんなものただの気休めでしかない。わたしを相手にその程度の戦術で倒すことはできないぞ？」

「『アームド・ドラゴンＬＶ５』で『真六武衆－キザン』を攻撃だ！」

ディスペア　ＬＰ４０００→３５００

「ターンエンド」

万丈目
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
アームド・ドラゴンＬＶ５　ＡＴＫ２４００
＋ミスト・ボディ

「わたしのターン！わたしは先程手札に加えた、『六武衆－ヤリザ』を召喚する。さらに『六武の門』にカウンターを２つ乗せる」

「ディスペア、『ヤリザ』殿を入れてたんだ…」

「『ヤリザ』がどうかしたの？ロキ」

「いや、なんで『ヤリザ』殿なんか入れるスペースがデッキにあるのか不思議に思ってね」

ディスペアがデッキにヤリザ殿を入れた理由は２つ。
１つ目は六武の門が制限になり、スペースが余ったから。もう１つ

はネタだ。

「わたしのフィールド上に2体以上の『六武衆』が存在することにより、手札から『大将軍－紫炎』を特殊召喚する！」

大将軍－紫炎は六武衆ではないため六武の門にカウンターは乗らない。

「わたしのフィールド上に『六武衆』と名のつくモンスターが存在することにより、手札から『六武衆の師範』を特殊召喚。『六武の門』のカウンターは４つ。この４つを取り除き、墓地から『真六武衆－キザン』を手札に戻し、その効果によって特殊召喚する」

再び六武の門にカウンターが２つ乗った。わたしのフィールド上には既に５体のモンスターが揃っている。そして真六武衆－キザンは、六武衆が２体以上存在する時、その攻撃力・守備力を３００ポイントアップさせる。よって攻撃力は２１００だ。

「だが『アームド・ドラゴンＬＶ５』は戦闘では破壊されないぞ」

「そんなことはわかっている。だが、『六武衆－ヤリザ』はわたしのフィールド上に他の『六武衆』が存在する場合、ダイレクトアタックできる。そして装備魔法『団結の力』を『六武衆－ヤリザ』に装備、攻撃力４０００ポイントアップする！」

六武衆－ヤリザ　ＡＴＫ１０００→５０００

「ば、バカな!?攻撃力５０００だと！」

「絶望を知れ。『六武衆－ヤリザ』で万丈目にダイレクトアタック

！」

ヤリザ殿は手に持った槍で、万丈目を一突きした。現実のダメージが発生し、万丈目は吹き飛ばされて床にたたきつけられた。日ごろの光の結社のうるさい騒ぎに対するディスペアの怒りがこもっていたのかもしれない。もっともディスペア自身はうるさいのは何とも思っていなく、スクルドが迷惑そうにしているのを見ていただけだが。

「うわあああああああああ！」

万丈目　ＬＰ４０００→－１０００

「つまらん…」

ディスペアは大会規定のメダルは取らず、万丈目のデッキから『白のヴェール』を取り出して破り去った。

「お前達の言う『神聖なる白きヴェール』は約束通り、わたしが戦利品としてもらう」

「もらうも何も破っちゃったじゃん」

ロキが口をはさむ。

「わたしには必要ない」

ディスペアはゴッドモーメントを輪にして頭の後ろに戻し、デュエル場を去る。ホワイト生徒は、未だに唖然として倒れた万丈目を見ていた。どうやら、絶対に勝てると言う自信があったらしい。ちな

みに、万丈目は白のヴェールを失ったが洗脳は解けなかった。ディスペアは最初から解こうとはしていなかったが。

その後、ディスペアは購買にスクルドを連れて行った。しかし、そこには学園の中でも有名な男尊女卑の生徒がいた。女子は入れるはずがなく、入ってしまったスクルドはその生徒に目をつけられた。ディスペアは前からその生徒の事は聞いていた。

「何で女がこんなところにいるんだよ」

明らかに挑発した顔でスクルドに怒鳴る。

「ダメなの？」

スクルドは平然と聞き返す。だが、男子生徒は聞く耳を持たずに出て行こうとしないスクルドを殴ろうとした。スクルドは殴られることを覚悟して目をつぶった。

…が、その痛みはいつまでたってもやって来ない。スクルドが恐る恐る目を開けると、手をつかんで転げまわって痛がっている生徒が目に入った。その生徒はスクルドを殴ろうとしたが、ディスペアがアーティスを取り出して盾にしたのを本気で殴ってしまったのだ。金属を殴って手が痛まないはずが無い。

「男尊女卑か。貴様はつまらない差別が好きだな」

「く、くっそ！女なんか男の言うことだけ聞いてりゃいいじゃねえか…お前はそれの何が不満なんだってんだ！？」

「黙れ、ゲスが。吐き気がする。不満なのは貴様のこの世のものとは思えない醜い顔だ。仲間がいないから差別か。臆病者のゲスには

丁度いい方法だろうな」

ディスペアの挑発と罵倒に、その生徒は怒りをあらわにして殴りかかった。
その拳は、ディスペアの腹の部分にクリーンヒットした。

「どうだ！？」

「……軽い」

ディスペアはゴミを見るような目でその生徒を見下してから、

「このくらいはしなければ、わたしには通用しない」

「……ッッ！！」

殴りつけた。当然本気を出せば全身の骨が折れて死んでしまうので手加減はする。だが、スクルドを、スクルドのみならず女性を罵倒したこの生徒に対して、ディスペアはかなり怒っていた。当然の話だ。自分の恋人をバカにされる、差別されるなど怒らない方がおかしい。

「…貴様は万死に値する」

ディスペアは納得のいく方法でこの生徒を処け…ゲフンゲフン、懲らしめようとしていた。ちなみに、今のディスペアは半端ではないプレッシャーをこの生徒にぶつけている。

暫くしてから手の痛みが引いたその生徒はデュエルディスクにデッキをセットした。女の味方をするやつに負けるはずが無いと言う顔

だ。

「このわたしが貴様を潰してやる」

ディスペアはドスのきいた声で言った。

スクルドは少し下がってデュエルを見ることにした。確実に怒っているディスペアを多少怖いと思いながら。

「「デュエル」」

「わたしの先攻。フィールド魔法『伝説の都アトランティス』を発動する。このフィールド魔法がある限り、手札とフィールド上の水属性のモンスターのレベルは１つ下がり、攻撃力と守備力は２００ポイントアップする。そしてこのカードのカード名は『海』として扱う」

フィールドが水中のような感じになった。いや、実際に水中だ。ゴッドモーメントの力でカードが現実化している。…水中とは言っても息はできるが。

「制服が濡れるのは仕方が無いと思え。貴様が次に目覚める時には乾いている」

ディスペアは実際には服を着ていないようなものの上、生まれつきかかっている魔法によって、身体が濡れたり、汚れることが無い。

「『深海王デビルシャーク』を召喚。カードを１枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
深海王デビルシャーク　ＡＴＫ１９００
伝説の都アトランティス
伏せカード×１

「俺のターン！俺は『古のルール』を発動して手札から『フロストザウルス』を特殊召喚だ！」

フロストザウルス　ＡＴＫ２６００→２８００
レベル６→５

フロストザウルスは水属性、アトランティスの効果によって攻撃力が２００ポイントアップしてレベルが１つ下がる。

「トラップカードオープン、『フィッシャーチャージ』。『深海王デビルシャーク』を生贄に捧げ、『フロストザウルス』を破壊する」

コバンザメがフロストザウルスを攻撃して倒した。

「『フィッシャーチャージ』の効果によってデッキからカードを１枚ドロー」

「く、くそ、ターンエンド！」

ブルー生徒
ＬＰ４０００
手札×４

フィールド
無し

「わたしの…タァァーン！わたしはわたしの墓地に存在するモンスターカードを全てデッキに戻し、『究極封印神エクゾディオス』を特殊召喚する。さらに『究極封印神エクゾディオス』を生贄に、手札からアトランティスの効果によってレベルが7から6になっている『超古深海王シーラカンス』を召喚する。このカードの効果によって手札を1枚捨て、効果を無効にしてデッキから魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。現れろ『オイスターマイスター』『光鱗のトビウオ』『メタボ・シャーク』『ヒゲアンコウ』。この効果によって特殊召喚したモンスターは攻撃できない。攻撃力３０００の『超古深海王シーラカンス』でダイレクトアタック」

「うぎゃあああああああああ！」

ブルー生徒　ＬＰ４０００→１０００

現実のダメージを実際に受けているため、恐ろしい痛みが全身を襲う。

「わたしはこれでターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ３０００
ヒゲアンコウ　ＤＥＦ１８００

光鱗のトビウオ　ＡＴＫ１７００
メタボ・シャーク　ＡＴＫ２０００
オイスターマイスター　ＡＴＫ１８００
伝説の都アトランティス

「俺のターン！魔法カード『サンダー・ボルト』！相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

しかし、オイスターマイスターが効果でフィールドを離れたためにオイスタートークンが守備表示で特殊召喚された。

「禁止カードか」

ディスペアは何とも思っていないような顔でブルー生徒を見る。

「要は勝てばいいんだよ！『スペース・マンボウ』を召喚！」

スペース・マンボウ　ＡＴＫ１７００→１９００

「『オイスタートークン』を攻撃、カードを1枚伏せてターンエンド」

ブルー生徒
ＬＰ１０００
手札×３
フィールド
スペース・マンボウ　ＡＴＫ１９００
伏せカード×１

「わたしのターン。魔法カード『死者蘇生』を発動し、墓地から『

超古深海王シーラカンス』を特殊召喚する。さらにその効果によって手札を1枚捨て、デッキから『メタボ・シャーク』『ヒゲアンコウ』『深海王デビルシャーク』『光鱗のトビウオ』を特殊召喚する」

「へへッ、トラップ発動『激流葬』！悪いがフィールド上のモンスターはすべて破壊だ」

巨大な波に全てのモンスターがのまれて消えた。

「……11体だ」

「何？」

「わたしの墓地に存在する魚族・海竜族・水族モンスターの数だ。わたしは手札より、レベルが5から4になっている『深海の怒り』を召喚する」

深海の怒り　ＡＴＫ０

「攻撃力０？ばっかじゃねーの？」

かなり余裕そうな表情を見せるブルー生徒だが、その直後に恐怖に染まることになる。

「このカードの攻撃力は、わたしの墓地の魚族・海竜族・水族モンスター1体につき５００ポイントアップする。さらに『伝説の都アトランティス』の効果によってさらに２００ポイントアップ」

深海の怒り　ＡＴＫ０↓５７００

「こ、攻撃力５７００ぅぅぅ！？」

「『深海の怒り』でダイレクトアタック。ポセイドン・パニッシャー」

「ぐぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！」

ブルー生徒　ＬＰ１０００→－４７００

ダイレクトアタックを受けたブルー生徒はアカデミアの校舎の壁を破って外まで飛んで行った。ちなみにこの生徒が目を覚ましたのは、一週間後のことだった。生徒の間では『ディスペアを怒らせたら死ぬ』という一種の教訓のようなものが作られた。

「少しでも実力に期待したわたしがおろかだった」

その後すぐにこの生徒が倒されたことが学園内に広まり、女子には平和が訪れたとか。

……次回に続く。

第１１１話　ジェネックス５日目　鳥頭はともかく男尊女卑は許さないでござる

ちなみに作者は男尊女卑は許しません。かわいい子を差別するなんて一体どういう（ｒｙ

※３：ディスペアの設定（固有ディスクについて）を、分かりやすくなるように新しくまとめました。分かりやすくなったかどうかは分かりませんがね…。

第１１２話　ジェネックス６日目（前書き）

※究極神帝ラーのレベルと効果を変更したので、キャラクター設定を見てください。余計ですが、攻撃名と効果名を載せてみました。

今回は短いですが、次回は長くなりそうです。

最近の出来事
特に面白いことはないですね…サイバーエンドが欲しいです。

※作者はこの前の大会で相手のライフを『機皇神マシニクル∞』で１００にした次のターンに、逆転されて負けました。そもそも大会でマシニクルってどういうことなの…？

第１１２話　ジェネックス６日目

「『究極神帝ラー』の効果発動。１ターンに１度、相手のカードを全て除外し∞のダメージを与える。ゴッド・アルティメット・ノヴァ」

全長１００ｋｍの黄金の竜が、口に白金の炎を溜めて大爆発を起こした。その瞬間、時空の最も深い空間…最高神界の極地まで、白金の超爆発が奔る。…ソリッドビジョンだから実害はないが、一瞬全てが見えなくなるのでとんだ大迷惑である。

「うわあああああああああああああ！」

イエロー生徒　ＬＰ－∞

「……３枚か」

わたしはイエロー生徒とデュエルを行い勝利し、大会規定のメダルを手に入れた。３枚ではやはり話にならない。ちなみに先程のラーの効果は当然、デュエルアカデミアの支給ディスクで召喚したものだ。

「また究極神を何の躊躇もなく使ってる…ゼウスが後でうるさいよ？」

「ゼウス？放っておけ」

ロキは空にいる黄金の竜…『究極神帝ラー』を見上げて言った。
ディスペアはそれに対して『放っておけ』の一言で返す。

「ディスペア、メダル何枚？僕は一応３００枚集めたんだけど…」

「わたしは今のところ７０枚…ノルンがトランプから離してくれなくてな…」

このままでは周りの生徒にどう考えても授業に参加していないのに成績が危なくないのを不審に思われる…この大会でどうにかしなければ。

「それは…どうしようもないね」

ノルンが遊びに誘ってくれるのはうれしいけど、なかなか抜けられないからな～…。ディスペアがたったの７０枚しか集められないのもよくわかる。

「あ、そうそう。これに誰が何枚メダルを持ってるか載ってるから、ピンポイントで狙って戦えば？」

ロキはディスペアに、生徒のメダル枚数が記録される記録装置を渡した。校長室のデータベースからパクｒ…拝借したものだ。

「便利だな」

ディスペアはそれを受けっとってリストに目を通す。そして、多くのメダルを持つ生徒を見つけると、その生徒がいる場所に向かった。

「…ディスペアも忙しいね」

ロキは、やれやれと言った様子でディスペアの去って行った道を見た。

～～～ホワイト寮前～～～

ディスペアの狙いは、メダルを１５０枚持っているホワイトの生徒だ。その生徒は斎王の命令で偶然にもディスペアを狙っており、ホワイト寮前で今、デュエルディスクを展開していた。

「斎王様の命令により、お前を光の結社に迎え入れる」

ホワイト生徒の見た目は、青目で金髪の整った顔立ちだ。

「御託はいい。始めよう」

「「デュエル」」

「わたしのターン。わたしはフィールド魔法『伝説の都アトランティス』を発動。このカードの効果により、手札とフィールド上の水属性モンスターのレベルは１つ下がり、攻撃力と守備力が２００ポイントアップする。『メタボ・シャーク』を攻撃表示で召喚。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド

メタボ・シャーク　ＡＴＫ２０００
伝説の都アトランティス

「俺のターン。俺は『魂を削る死霊』を守備表示で召喚する。さらにカードを１枚伏せて、ターンエンドだ」

ホワイト生徒は手早く自分のターンを終わらせて、余裕の表情で構える。

ホワイト生徒
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
魂を削る死霊　ＤＥＦ２００
伏せカード×１

「わたしのターン」

魂を削る死霊を戦闘で破壊することはできない。だが、効果の対象になった時に破壊される弱点を持っている…。

「『メタボ・シャーク』を生贄に捧げ、手札から『超古深海王シーラカンス』を召喚する。手札を１枚捨て効果発動。デッキからレベル４以下の魚族モンスターをモンスター効果と攻撃を封じて可能な限り特殊召喚する。わたしは『オイスターマイスター』２体と『ヒゲアンコウ』、『光鱗のトビウオ』を特殊召喚する。わたしは『オイスター・マイスター』２体と『ヒゲアンコウ』、わたしのライフ半分を生贄に捧げる！神の鼓動、永き時を経て封印を解かん。究極の力よ、光臨せよ！『究極神オシリス』！」

突然時空の裂け目から現れた赤い光の塊が巨大な龍を形作り、究極神オシリスになった。

「『究極神オシリス』の攻撃力と守備力はわたしの手札×２０００ポイントアップする。わたしの手札は２枚、よって攻撃力は４０００となる」

究極神オシリス　ＡＴＫＸ０００→４０００

「戦闘以外の方法によりフィールドを離れた２体の『オイスター・マイスター』の効果により、わたしのフィールドに『オイスタートークン』２体を守備表示で特殊召喚する。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ２０００
手札×２
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ４０００
超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ３０００
光鱗のトビウオ　ＡＴＫ１７００
オイスタートークン×２　ＤＥＦ２００
伝説の都アトランティス

「俺のターンだ、ドロー。…『強欲な壺』で２枚ドロー。魔法カード『革命』を発動！相手の手札×２００ポイントダメージを与える！」

ディスペア　ＬＰ２０００→１６００

「バーンカード…」

まずい。究極神のライフコストはライフ半分、バーンカードや直接攻撃モンスターは究極神の弱点だ。

「魔法カード『火の粉』、２００ポイントのダメージを与える」

ディスペア　ＬＰ１６００→１４００

「……」

火の粉？なぜ火の粉？

「ひ、ひとつだけ聞く。何故『火の粉』を入れている？」

「何故だと？知らないのか。このカードでとどめを刺せば、ボーナスがもらえるんだぞ？」

「……聞いたわたしが愚かだった、デュエルを続けろ」

ディスペアは頭を抱えた。まさか『火の粉ボーナス』を狙っている生徒がいるとは思わなかったし、そんなボーナスの存在も知らなかったからだ。そしてディスペアは何を思ったのか、このホワイト生徒の今までの決まり手を閲覧した。……総デュエル数１２０回、火の粉ボーナス獲得数１１５回。つまり、１２０回中１１５回火の粉でとどめをさしていることになる。所持ＤＰは２５００ＤＰだ。

「？？？…俺はこれでターンエンド」

ホワイト生徒
ＬＰ４０００

手札×４
フィールド
魂を削る死霊　ＤＥＦ２００
伏せカード×１

「わたしのターン！わたしは２体の『オイスタートークン』と『光鱗のトビウオ』、ライフ半分を生贄に捧げる！あらぶる巨神、究極の力を以って我が敵を粉砕する！光臨せよ、『究極神オベリスク』！」

ディスペアのフィールド上には２体の『究極神』が揃った。後１体…最強の神の光臨で決まる。２体の神では『魂を削る死霊』は倒せない。

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ７００
手札×２
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ４０００
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ３０００
伝説の都アトランティス

「俺のターン！」

ホワイト生徒は、ゆっくりとカードを見る。このドローに賭けているつもりらしい。

「…くそっ、魔法カード『火あぶりの刑』！相手に６００ポイントのダメージを与える！」

ディスペア　ＬＰ７００→１００

ディスペアのライフは残り１００、ホワイト生徒はまだ４０００だ。しかし、大概のデュエルではよくある事だろう。ライフが１００になった主人公が負けることはない…所謂『鉄壁』だ。

「ターンエンド」

ディスペアは次の俺のターン、俺がバーンカードをドローすればライフが尽きる。そうなれば斎王様の命令を果たせたことになる。覚悟しろ、ディスペア。お前の命はここまでだ！

ホワイト生徒
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
魂を削る死霊　ＤＥＦ２００
伏せカード×１

「わたしの……ターン！」

……！

（ＢＧＭ：Ｚ－ＯＮＥのバトル）

「『超古深海王シーラカンス』効果発動、手札を１枚捨て『深海王デビルシャーク』『メタボ・シャーク』を特殊召喚！」

ディスペアのフィールドに相手を絶望の底にたたき落とす神を降臨させるための生け贄が揃った。

「『超古深海王シーラカンス』『深海王デビルシャーク』『メタボ・シャーク』の3体とライフ半分を生贄に捧げる！」

3体のモンスターとライフ半分のエネルギーが、天空に昇り時空の狭間に消えた。その後、時空の裂け目が開く。

「限りなき力、究極の神々を束ねその全てを放つ！時空を滅せよ！『究極神帝ラー』！！」

時空の狭間から金色の光が巨大な竜を形作り、さらに強い閃光が奔った。閃光が消えると、そこには全長１００ｋｍの白金の神力を纏った究極神帝ラーが光臨していた。

「なっ！？あり得ない…この絶望的な状況の中、最後の神を引き当てるなんて…！」

その時、生徒のポケットから一枚の紙の切れ端がディスペアのところに飛んできて、ディスペアはそれを掴んだ。ディスペアはそれを大まかに見た後、

「『究極神帝ラー』の効果発動。相手のカードを全て除外し∞のダメージを当てる。ゴッド・アルティメット・ノヴァ！」

「――――――――――――――ッ！！」

ホワイト生徒　ＬＰ４０００→－∞

「……この紙の切れ端をどこで手に入れた？」

ディスペアはメダルをホワイト生徒の懐からつかみ取ってホワイト生徒に訊いた。

「この前、怪しい服装をした男が俺の目の前に現れてこれをよこしたんだ。『この場所に来い』って言ってな…明日行くつもりだったんだ」

紙にはこう書かれていた。

“ ここに来れば、永遠の幸せが手に入ります！あなたも是非どうぞ！若い高校生の方限定です！　『ドミノ町　ＸＸ－ＡＫ－△△』　ｂｙ　ＵＲＥＩＭＡＲ”

手紙には人間を惹きつける幻覚の魔力が纏わりついている。これを渡されたら行ってしまうだろう。

「名前は…ユレイマー？……！！違う！」

これが本当にそうなら、ここに行った人間は死んでいる。単純なネーミングだが、人間程度なら魔力で騙すことができる。

ディスペアは、校長室に戻ると急いでトールとスクルドを呼んだ。

……次回に続く。

第１１２話　ジェネックス６日目（後書き）

次回『オレイカルコスの決戦！』

前後編になるか１話完結になるかわかりません。

第１１３話　オレイカルコスの決戦！（前書き）

１話で終わらせました。バッドエンドにするのが苦手なもので、こんな形で終わらせてしまいました。なので、多少ギクシャクしているところがあると思いますが、分かってください。よろしくお願いします。
今回は珍しく長いです。

おとといのファイブディーズの感想
成程、クェーサードラゴン登場でしたか。あれだけやって４０００…マシニクル様よりも使いにくい…しかし、効果をテキストを見て予想して見た限りではなかなかのものですので、どこぞの神ネオスほどひどくはないと思います。

第113話　オレイカルコスの決戦！

校長室で、トールとスクルドに今回の真犯人と作戦を説明する。

そして…

「む～…苦しいよ～…ディスペア、私こんなの着たくないよ～…」

スクルドは一般の女子高生が着ているような制服を着ていた。デュエルアカデミアの生徒と言うことがバレたら面倒だし、女神スクルドであるとバレたらすぐにこの手紙の差出人に殺される。しかし、この場所に行くためには高校生でなければならない。そこで、普段は神力を完全に封印でき、なおかつルックスの良いスクルドがまずは行き、ある程度時間が経過して敵が油断したところに突入する。獲物を追い詰めた獣は、かならず寸前のところで油断する。そこでしとめると言うわけだ。

「すまないスクルド。しかし今回はこうしなければならないのだ」

スクルドは渋々うなずいた。

「でも、その役って私達でもいいわよね?」

ウルズとヴェルザンディーが言う。しかし、いくらなんでもそれは無理がある。

「何を言っている?自分の身長を考えろ。お前達は背が高すぎる。すぐに高校生ではないとわかるだろう」

スクルドも身長１７５ｃｍなので、微妙なところではあるが。時々このくらい背が高い女性はいるので問題ない。

「後はオーディンが創ったドミノ高校の生徒手帳だ。本物と同じように創ってある」

「うん」

「あと、１つだけ注意してほしい。これから向こうに潜入する間、君は神力を使えない上に力も無い、『本当の人間』に最も近い状態になる。攻撃されても抵抗の手段が無いから、身の危険を感じたらすぐに外に逃げろ」

ディスペアは手短に説明して、出発の準備を完了させた。

「奴の神力の探査範囲は広くない。１０ｋｍほど離れた場所に移動するぞ」

スクルドは、転移後に作戦のメモをもう１度見る。

『スクルドは一足先に敵の本拠地に潜入、油断させたところでディスペア、トールが突入。トールはこの手紙の差出人との決着を、ディスペアはその部下を倒す。ドミノ町の捜査網を調べた限りではアジトの規模は、地上は狭いが地下は非常に広く、何重にも結界が張ってある。敵人数はザコを含めおよそ２００名』

「……」

この作戦、絶対に無茶だと思うんだ。

「わたし達がスクルドのそばにいれば、この作戦は台無しだ。よって、アジトの２００メートル地点から1人で行ってもらう。わたしは空から常に見ているから安心しろ」

そう言うとディスペアは空に飛び立って姿を消した。スクルドは仕方が無いので歩き始める。

「う～…これ、スカートだっけ？…足が寒いよ～…」

スクルドは丈の短いスカートなんて履いたことが無い。周りの女子高生は寒そうになどしていないが、気温の暖かい神界で過ごしてきたスクルドにとって、この格好で夜の外を歩くのは寒すぎた。

「む～…」

私は家から追い出されたような気分で、ついにアジトにたどり着いた。すぐに外にいた男の人に連れられて、お店（？）の中に入った。

「では、暫くここで待っていてくださいね」

私を個室に連れて椅子に座らせた後、男の人は部屋から出て行ってしまった。しかも鍵をかけて。つまり、ここは完全な密室。窓も無い。あるのは、部屋の隅にあるパイプだけ。

［スクルド、わたしだ。そっちはどうなっている？］

［う～ん…まだ何とも言えないよ…男の人が私を個室に連れて、その後出て行ったきり。鍵は閉められちゃった］

「その部屋には他に何かないのか？」

「えっと…パイプが１本あるよ。眠りガスを出しているみたい」

神に人間の作った有害物質は通用しない。それは身体の弱いスクルドでも同じだ。

「敵は油断しているように見えるか？」

「今のところは大丈夫みたいだよ。あ、男の人が来たから眠っているふりをするね」

男はスクルドが眠っていると判断すると、その場から連れ出した。そして、スクルドは念話でＯＫの合図を出す。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

それと同時にトールが正面の入口をミョルニルで殴り飛ばして、男の頭に当てる。当たり所が悪かったのか、ご臨終なされた。ディスペアは、男の腕から落ちるスクルドをキャッチして、建物の奥の方から向かってくる男達をアーティスの斬撃を飛ばして斬る。

「『機皇神マシニクル∞？』を召喚！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

ゴッドモーメントを展開して機皇神マシニクル∞？を召喚して攻撃する。建物の通路は異常なほど広く、機皇神マシニクル∞？が余裕で収まるほどだ。

「よし、スクルド。もう帰っていいぞ。よくわたしの作戦に乗ってくれた。君をこれ以上危険に晒す必要はない」

スクルドは少し考えてから頷き、帰ることにした。この状況では自分が足を引っ張るかもしれない上に、大した力にはなれないと判断したためだ。

「……トール、行け。この階段から地下フロアに行くことができる。この入口はわたしがガードする、君は君の決着をつけろ」

「……死ぬなよ」

「わたしが人間相手に死ぬはずが無いだろう？」

「……フッ」

トールは最後に少し笑みを浮かべて階段を下りた。

「……わたしの戦いはここからだ」

ディスペアの目の前には大勢の黒服の男が現れた。

～～～トールサイド～～～

「ここは…」

トールの目の前には先の見えないほど長い通路があった。そして、

あちこちから機械音が聞こえる。

「まあいい、急ごう」

トールは長い通路を走る。しかし、その奥からは人間ではなく、堕天使の軍勢が現れた。その数、５体。いずれも最上級だ。

「邪魔をするなぁァァァァァァ！サンダーパイルぅぅぅ！」

トールは、渾身のミョルニルの一撃を堕天使に撃ち込む。撃ちこまれた堕天使は、その場で気絶した。

しかし、次々と堕天使やらデュエルモンスターズのモンスターが襲いかかってくる。トールはできる限りザコを避け、しつこい敵のみを倒して行った。

どれほど走っただろうか。トールの目の前には、巨大な黒い扉がある。地下にこんな物を造るのは余程の物好きだ。

トールは、その黒い扉を足で思い切り蹴飛ばして開けた。

「ラミエーーーーーーーーーーーーール！！」

トールは力の限り叫んだ。

「フフフフ…よく来てくれたね、トール。あの手紙を見たのか。さすがに人間程度なら名前のアルファベットをひっくり返すだけで騙せるけど、君やディスペアはそうもいかないか」

あの手紙にあった差出人のアルファベットをひっくり返せばラミエルになる。ラミエルは、人間をおびき寄せる以外にトールにこれを

気付かせ、ここに来させるという目的があったのだ。

「……あの手紙でここに引き入れた人間はどうした？」

「フフフ…」

ラミエルは自分の胸を指さした。

「……ば…かな。人間の生気を自らの魔力に変換したのか…！」

「わたしの寿命は近い。だが、人間の生気をわたしの物にすることでわたしは永遠に生き続けることができる。君達神と違って、我ら天使は寿命が存在するからね。特に若い人間の生気は、伸びる寿命のケタが違う」

ラミエルは笑みを浮かべながら鋭いグリーンの目をトールに向ける。

「君がここに来た理由はわかるよ。このわたしを殺しに来たのだろう？」

トールは首を横に振った。

「違う。我はお前との決着をつけにきた！そして、お前が闇に堕ちたのならばそこからお前を連れ戻すために！」

「綺麗事を並べるな！」

ラミエルは鋭い視線を一層鋭くしてトールを睨んだ。

「わたしと君では、天使と神と言う絶対的な権力や力の差がある。

その差を埋めるためにわたしが手にしたこの『オレイカルコスの５重結界』。神ごときに敗れるはずが無い」

ラミエルの緑色の髪が、風も吹いていないこの部屋でなびく。トールは、強烈なプレッシャーを放ちながら、無言で固有ディスクを構えた。

「フッ、ミョルニルのディスクか。君はどうやら本気のようだ。ならばこのわたしも、全力で君を闇の世界に連れ込もう」

ラミエルも杖を構えた。

「今のわたしは、例えオーディンでも倒せない。この力の前にひれ伏すが良い」

ラミエルは常に笑みを浮かべたまま言う。トールのプレッシャーをまるで感じていない。

「ラミエル、我の言葉が届かないのなら、全力で叩き潰して連れ帰る」

「ほう…それは楽しみだ。だがここでは少々狭い」

ラミエルは椅子の傍にあったスイッチを押した。すると、この部屋全体が外に出て、地上２００ｍ地点で止まった。

「……ここなら君も出し惜しみをする必要はないだろう。さあ始めよう、君とわたしの決闘を」

「「デュエル」」

「先攻はわたしだ。フィールド魔法『オレイカルコスの結界』を発動する」

フィールド上に巨大な魔法陣が出現し、強力な結界を創った。

「このフィールドから逃げることはできないぞ。敗北した者は、その命を失う。わたしは『オレイカルコス・ライオ』を召喚」

ラミエルのフィールドに、全身が金属で作られているライオンが現れた。

「『オレイカルコスの結界』によって、わたしのモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする」

オレイカルコス・ライオ　ＡＴＫ１８００→２３００

「先攻は攻撃できない。わたしはターンエンドだ」

ラミエル
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
オレイカルコス・ライオ　ＡＴＫ２３００
オレイカルコスの結界

「我のターン！我は『ＸＸ－セイバーボガートナイト』を召喚。このカードの召喚に成功した時、手札からレベル４以下の『Ｘ－セイバー』１体を特殊召喚できる。現れろ『Ｘ－セイバーパシウル』！さらに、フィールド上に２体以上の『Ｘ－セイバー』が存在するこ

とにより、『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する！」

「ほう、１ターンでモンスターを３体展開するとは。さすがは最高神だ」

「『ＸＸ－セイバーフォルトロール』で『オレイカルコス・ライオ』を攻撃する！」

ラミエル　ＬＰ８０００→７９００

「わたしは『オレイカルコス・ライオ』の効果を発動。このカードが破壊された時、デッキから『オレイカルコス』と名のつくフィールド魔法を１枚、手札に加えることができる。わたしは『オレイカルコス・デウテロス』を加え、デッキをシャッフルする」

ラミエルの手札にはオレイカルコス第２の結界が加わった…もう第３の結界はあるのか？いや、第３の結界までなら何とかなる。だが、４，５の結界はまずい。

「我は『ＸＸ－セイバーボガートナイト』でダイレクトアタックだ！」

ラミエル　ＬＰ７９００→６０００

「レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』にレベル２の『ＸＸ－セイバーパシウル』をチューニング！黒き翼よ、悲しみを力に変え、大いなる力を放て！シンクロ召喚、羽ばたけ、『ブラックフェザー・ドラゴン』！」

ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００

「ほう…君はわたしに見せていないカードがあるようだ。前に戦った君とは別人と考えたほうがいいらしいな」

トール、さすがに神だけある。だがわたしも、君に全ての手の内を明かしたわけではない。

「フン、我はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

トール
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
ＸＸ－セイバーボガートナイト　ＡＴＫ１９００
伏せカード×１

「わたしのターンだ。フィールド魔法『オレイカルコス・デウテロス』。１ターンに１度、わたしのフィールド上のモンスター１体につき５００ライフ回復する。さらに、相手モンスターの攻撃宣言時にわたしのモンスター１体を生贄にすることでその攻撃を無効にしてそのモンスターを破壊することができる。わたしは『オレイカルコス・オクトパス』を召喚する」

全身金属のタコのモンスターが現れた。

オレイカルコス・オクトパス　ＡＴＫ１５００→２０００

「『オレイカルコス・デウテロス』の効果で、ライフポイントを５００回復」

ラミエル　ＬＰ６０００→６５００

「『オレイカルコス・オクトパス』で『ＸＸ－セイバーボガートナイト』を攻撃」

トール　ＬＰ８０００→７９００

「この程度、どうということはない！」

「そうでなくては困るがね。わたしはこれでターンエンドだ」

さあトール、ブラックフェザー・ドラゴンではわたしを倒すことはできないぞ？

ラミエル
ＬＰ６５００
手札×５
フィールド
オレイカルコス・オクトパス　ＡＴＫ２０００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス

「我のターン！我は『ＸＸ－セイバーレイジグラ』を召喚する。このカードの効果によって、『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を墓地から手札に！トラップカード『ガトムズの緊急指令』！フィールド上に『Ｘ－セイバー』がいる時、墓地から『Ｘ－セイバー』２体を特殊召喚できる。現れろ『ＸＸ－セイバーボガートナイト』『ＸＸ－セイバーパシウル』！」

「ほう、これだけのモンスターを1ターンで展開し、なおかつフォルトロールを回収するとは…そして極めつけは…」

「2体以上の『X－セイバー』が存在することにより、手札に戻した『XX－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する！レベル6の『XX－セイバーフォルトロール』とレベル1の『XX－セイバーレイジグラ』にレベル2の『X－セイバーパシウル』をチューニング！シンクロ召喚、『XX－セイバーガトムズ』！」

「シンクロ召喚。攻撃力3100と2800のモンスターか。以前の君は3500という超強力モンスターを召喚していたが…」

あえて高攻撃力を捨てて、ある程度の攻撃力のモンスターを数多く展開するか。何も学ばないバカではないようだ。

「我は『XX－セイバーガトムズ』で『オレイカルコス・オクトパス』を攻撃する！」

「フッ、忘れたのか？『オレイカルコス・デウテロス』の効果発動！『オレイカルコス・オクトパス』を生贄に捧げ、『XX－セイバーガトムズ』を破壊する！」

オクトパスが爆発し、それに巻き込まれてガトムズも破壊されてしまった。しかし、トールの狙いはこれだった。

「これでお前のフィールドはがら空き！『ブラックフェザー・ドラゴン』でダイレクトアタック、ノーブルストリーム！」

ラミエルはブラックフェザー・ドラゴンのダイレクトアタックを直に受け、結界の壁に衝突した。

「うわあああああああああ！」

ラミエル　ＬＰ６５００→３７００

「我はこれでターンエンド」

トール
ＬＰ７９００
手札×２
フィールド
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００

「わたしのターンだ。わたしは『オレイカルコス・ビースト』を召喚。このモンスターの召喚時に、デッキから『オレイカルコス』と名のつくフィールド魔法を手札に加える。わたしは、『オレイカルコス・トリトス』を手札に加える。そしてフィールド魔法『オレイカルコス・トリトス』発動！わたしのモンスターは相手の魔法・罠の効果を受けない」

これでわたしのモンスターのカード効果への耐性は完璧に近づいた。

オレイカルコス・ビースト　ＡＴＫ１９００→２４００

「『オレイカルコス・デウテロス』の効果を使用し、ライフを５００回復。ターンエンド」

ラミエル
ＬＰ４２００
手札×５

フィールド
オレイカルコス・ビースト　ＡＴＫ２４００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス
オレイカルコス・トリトス

「我のターン！」

ラミエルのモンスターに魔法・罠の効果は通用しなくなってしまった…そして奴は１ターンに１度フィールド魔法を使っている。ならば、次のターンは『フォルス』が来ると考えていいだろう。

「我はモンスターを１体伏せる！残りの手札を全て伏せ、ターンエンド」

トール
ＬＰ７９００
手札×０
フィールド
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
セットモンスター×１
伏せカード×２

「ハッハハハ！とうとう守りに徹するしかなくなったか。わたしのターン！わたしは『オレイカルコス・プラント』を召喚する！」

金属で造られた食虫植物のモンスターだ。

オレイカルコス・プラント　ＡＴＫ１８００↓２３００

「『オレイカルコス・デウテロス』の効果により、１０００ポイントライフを回復する」

ラミエル　ＬＰ４２００→５２００

「『オレイカルコス・プラント』でセットモンスターを攻撃。プラントプリズム！」

金属に反射された光線がセットモンスター…『メタモルポット』を破壊した。

「このカードのリバース効果により、我らは手札を全て捨ててカードを５枚ドローする！」

ラミエルにドローさせるのは危険だが、我の手札が無くても危険だ。

「さらにトラップ発動、『マインドクラッシュ』！カードを１枚宣言し、しての手札にそのカードがあれば捨てる！無ければ我が手札を１枚捨てる！我が宣言するのは『オレイカルコス・フォルス』！」

ラミエルは手札を全て見せ、その中から『オレイカルコス・フォルス』を捨てた。

「正解だ。よく考えられたコンボだな。ターンエンド」

ラミエルは微笑を浮かべて言った。

ラミエル
ＬＰ５２００
手札×４

フィールド
オレイカルコス・ビースト　ＡＴＫ２４００
オレイカルコス・プラント　ＡＴＫ２３００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス
オレイカルコス・トリトス

「我のターン！トラップカード『マジックスタン』発動！このターン、相手の魔法カードの効果を無効にする！例えフィールドを離れない『オレイカルコスの結界』といえども、１ターンのみ効果を無効にすることはできる！」

オレイカルコスの結界が凍結し、その輝きを失った。普通は魔法・罠・モンスター効果を受けないオレイカルコスの結界だが、マジックスタンを無効にすることはできないため、必ず無効にされてしまう。

「さあ行くぞ。『死者蘇生』発動、蘇れ『ＸＸ－セイバーガトムズ』！『ＸＸ－セイバーガトムズ』で『オレイカルコス・プラント』を攻撃！」

「くっ…」

ラミエル　ＬＰ５２００→４４００

「さらに『ブラックフェザー・ドラゴン』で『オレイカルコス・ビースト』を攻撃する！」

「おのれ…」

ラミエル　ＬＰ４４００→４０００

「この瞬間、手札のトラップカード『オレイカルコス・リカバリー』発動！自分フィールド上の『オレイカルコス』と名のつくカードが２枚以上フィールドを離れたターン、墓地から『オレイカルコス』と名のつくカードを１枚手札に加える！わたしは当然『オレイカルコス・フォルス』を選択」

墓地からカードが１枚飛びだし、ラミエルはそれをキャッチした。

「ちっ…我はカードを１枚伏せ、ターンエンド」

オレイカルコスの結界は、再び光を取り戻した。

トール
ＬＰ７９００
手札×４
フィールド
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
ＸＸ－セイバーガトムズ　ＡＴＫ３１００
伏せカード×１

「わたしのターン。フィールド魔法『オレイカルコス・フォルス』を発動！相手のモンスター効果を受けず、攻撃力７００ポイントアップする。『オレイカルコス・ケルベロス』を召喚」

オレイカルコス・ケルベロス　ＡＴＫ１６００→２８００

「ついに来たか…第４の結界！」

「これでわたしのモンスターはほぼ完璧な耐性を誇る。わたしはカードを1枚伏せ、『オレイカルコス・デウテロス』の効果を使用してターンエンド」

ラミエル
ＬＰ４５００
手札×３
フィールド
オレイカルコス・ケルベロス　ＡＴＫ２８００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス
オレイカルコス・トリトス
オレイカルコス・フォルス

「我のターン！」

どうする！？攻撃すればダメージは与えられるが、少なくともガトムズを失う。しかもブラックフェザー・ドラゴンの攻撃力は２８００、今のラミエルならば２８００程度の攻撃力を超えるのは容易い……。

「我はこの伏せカードをオープン！『ガトムズの緊急指令』！墓地から『Ｘ－セイバーレイジグラ』と『Ｘ－セイバーパシウル』を特殊召喚し、レイジグラの効果によって墓地から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を手札に戻し特殊召喚。そして『ＸＸ－セイバーガトムズ』の効果によって『Ｘ－セイバーパシウル』を生贄に捧げ、貴様の手札を1枚墓地に送る！」

ガトムズが斬撃を飛ばしてラミエルの手札を1枚切った。

「手札から『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を召喚！レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』とレベル１の『ＸＸ－セイバーレイジグラ』にレベル３の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング！光臨せよ、『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』！！」

「ほう、新しい切り札か。だが攻撃力はたったの２５００、わたしのモンスターには敵わない」

「それはどうかな？『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』は自分の墓地の『Ｘ－セイバー』１体につき攻撃力を１５００ポイントアップする！さらにこのカードはカード効果の対象になった時、その効果を無効にし破壊する！そして墓地のＸ－セイバー１体を除外することで相手の手札を全て捨てる！」

ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター　ＡＴＫ２５００→８５００

「な、なんだと！！？攻撃力８５００！！」

「墓地から『Ｘ－セイバーパシウル』を除外し、ラミエルの手札を全て墓地に送る！ブラストハンデス！」

オメガブラスターが剣から青いエネルギーを飛ばし、ラミエルの手札を全て墓地に送った。

ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター　ＡＴＫ８５００→７０００

「この瞬間墓地に送られた『オレイカルコス・リベンジャー』を特殊召喚。このカードが戦闘以外の方法で墓地に送られた時、１度だけこのカードを特殊召喚できる。さらにデッキから『オレイカルコス・ラスティス』を手札に加える」

オレイカルコス・リベンジャー　ＡＴＫ２３００→３５００

「その程度の攻撃力では無駄だ！『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』で『オレイカルコス・リベンジャー』を攻撃、ラスト・セイバー」

「フッ、『オレイカルコス・リベンジャー』は戦闘ダメージを０にし、バトルフェイズを終了させるのだ。残念だったな」

ラミエルの前には紫色の障壁が出現し、ラミエルを守っている。

「我はこれでターンエンド！」

トール
ＬＰ７９００
手札×４
ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター　ＡＴＫ７０００
ＸＸ－セイバーガトムズ　ＡＴＫ３１００
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００

「フッフフフ…ハッハッハハハハハハハ、わたしのターンッ！！フィールド魔法『オレイカルコス・ラスティス』、発動ォ！」

「来たか…オレイカルコスの最終結界」

我はこれに敗北した。だが、今回は絶対に勝つ！

「さらに『オレイカルコス・リローダー』を守備表示で召喚！」

マッド・リローダーの金属バージョンみたいなモンスターが出現した。

「わたしがこのカードの召喚に成功したことで、手札が5枚になるようにドローする。そして、このカードの攻撃力はこの効果によってドローしたカードの枚数×３００ポイントダウンする。わたしは５枚ドローした。よって攻撃力は１５００ポイントダウンし、『オレイカルコスの結界』『オレイカルコス・フォルス』『オレイカルコス・ラスティス』の効果により２０００ポイントアップする」

オレイカルコス・リローダー　ＡＴＫ１５００→２０００

「わたしは『オレイカルコス・ラスティス』の効果により、１ターンに１度、墓地から『オレイカルコス』と名のつくモンスター１体を特殊召喚できる。現れよ、『オレイカルコス・ビースト』！」

オレイカルコス・ビースト　ＡＴＫ１９００→３９００

「レベル４のモンスターが攻撃力３９００…！」

オレイカルコスの５重結界。モンスターへの魔法・罠・モンスター効果を無効にし、攻撃力を２０００ポイントアップさせ、攻撃対象モンスターを生贄に捧げることで攻撃モンスターを破壊する。さらに毎ターン、自分のモンスター１体につき５００ライフポイント回復し、墓地から『オレイカルコス』モンスターを特殊召喚できる。そしてオレイカルコスの５重結界は魔法・罠・モンスター効果を受けない。

「わたしは『オレイカルコス・ビースト』で『ＸＸ－セイバーガトムズ』を攻撃！」

「ぬぅ…！」

トール　ＬＰ７９００→７１００

「我の墓地に『Ｘ－セイバー』が増えたことによって、『ＸＸ－セイバーオメガブラスター』の攻撃力が１５００ポイントアップ！」

ＸＸ－セイバーオメガブラスター　ＡＴＫ７０００→８５００

「『オレイカルコス・ビースト』のモンスター効果発動！オレイカルコスの５重結界が揃っている時に相手モンスターを破壊して墓地に送った場合、その攻撃力分のダメージを与える！」

オレイカルコス・ビーストは、牙の先から黄色い光を放出した。だがそれは、トールに当たることなくブラックフェザー・ドラゴンに吸収された。

ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００→２１００

「ほう、『ブラックフェザー・ドラゴン』の効果か。なかなか面白いじゃないか。ダメージ効果を無効にして攻撃力を７００ポイントダウンするとは…」

さすがはトールだ。わたしよりも先の展開を読んでいる。だが、わたしはまだ、誰にも見せていない切り札があるのだよ。

「では『オレイカルコス・デウテロス』の効果により、１０００ポイントライフを回復し、ターンエンド」

ラミエル
ＬＰ５５００
手札×５
フィールド
オレイカルコス・リローダー　ＡＴＫ２０００
オレイカルコス・ビースト　ＡＴＫ３９００
オレイカルコスの結界
オレイカルコス・デウテロス
オレイカルコス・トリトス
オレイカルコス・フォルス
オレイカルコス・ラスティス

「我の…ターン！我は魔法カード『断痛剤』を発動する！このカードを発動したターン、我は戦闘ダメージを受けない！よって『オレイカルコス・ラスティス』の効果で我が戦闘ダメージを受けることはなくなる！」

「ほう…」

だが、それでいい。まだ君に倒れてもらうわけにはいかない。こちらにも一応目的と言う物があるのでね。

「さらに『ブラックフェザー・ドラゴン』効果発動！このカードのカウンターを全て取り除き、１個につきお前のモンスターの攻撃力を７００ポイント下げ、下げた分のダメージを与える！１４００ポイントのダメージだ」

ラミエル　ＬＰ５５００→４１００

「我は『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』で『オレイカルコス・

ビースト』を攻撃！ラスト・セイバー！！」

オメガブラスターの剣によって、ビーストは真っ二つになり、消滅した。

「この瞬間、『オレイカルコス・ビースト』の効果発動！わたしのライフを、このカードを破壊したモンスターの攻撃力分…つまり８５００ポイント回復する！」

ラミエル　ＬＰ４１００→１２６００

「バカな！ならば『ブラックフェザー・ドラゴン』で『オレイカルコス・リローダー』を攻撃！ノーブルストリーム！」

「『オレイカルコス・リローダー』の効果により、わたしはわたしのデッキの上からカードを１枚除外し、１０００ポイントライフを回復する」

ラミエル　ＬＰ１２６００→１３６００

「ライフポイントが…１３６００だと…」

「どうだ？これがわたしの力…オレイカルコスの力だ！」

「ターンエンドッ！」

トール
ＬＰ７１００
手札×４
フィールド

ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター　ＡＴＫ８５００
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００

「クックック…トール。そろそろこのデュエルの終わりを、君の敗北で迎えようと思う。わたしのターン！わたしは『オレイカルコスの結界』『オレイカルコス・デウテロス』『オレイカルコス・トリトス』『オレイカルコス・フォルス』『オレイカルコス・ラスティス』を生贄に捧げる！」

「何だと！！？」

「光臨せよ！我が暗黒の魂『オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン』！！」

オレイカルコスの結界が空に浮かび上がり、エネルギー体となって竜を形作る。その後、金属の鎧を装備した、全体的にエメラルド色の巨大なドラゴンが現れた。

オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン　ＡＴＫ３５０００

「攻撃力３５０００！！？」

「このモンスターの召喚に成功した時、１００００以上存在するわたしのライフポイントは１になり、手札を全て捨てる。『オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン』は１ターンに１度、魔法・罠・モンスター効果を無効にすることができる。さあ行くぞ！君にオレイカルコスの力を体感させてやる。『オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン』で『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』を攻撃！オレイカルコス・エンド！」

「我は手札から…トラップカード『ＸＸ－セイバーアウェイ』を発動する。『ＸＸ－セイバー』が攻撃対象になった時、その攻撃対象モンスターをデッキに戻してバトルフェイズを終了する。そして、この効果を無効にすることはできない」

ラミエルよ。お前の『闇』、見せてもらったぞ。そこまで深い闇を抱えて居ながら生き続けていたとは…我が気づいてやれなかったのか。あの時の戦いから既に、お前の心は闇に堕ちてしまっていたことに。

「クッ…ターンエンド」

わたしの寿命は近い。そしてトール。わたしのこの勘が正しければ、君は次のターンわたしを倒すだろう。闇に堕ちたわたしの魂を救うには遅すぎた。

ラミエル
ＬＰ１
手札×０
フィールド
オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン　ＡＴＫ３５０００

ならばその魂！我が救う！

「我の……ターーーーーーーーーーンッッ！！」

……！！

「我はチューナーモンスター『エボリューション・フェザー』を召喚する！このカードの効果により、デッキから１枚ドロー！」

「勝手にするが良い。その程度の効果を無効にするなど無駄なことだ」

「……それがお前の最後の過ちだ。チューナーモンスター『レボリューション・ウィング』を特殊召喚！このカードは我のフィールド上に『ブラックフェザー・ドラゴン』が存在する時に手札から特殊召喚できる！」

「チューナーが2体…？それがどうした。わたしのフィールド上にはわたしの魂そのものである『オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン』がいる。その攻撃力は３５０００、例え三幻神であっても倒すことなどできはしない！」

「レベル8の『ブラックフェザー・ドラゴン』にレベル2の『エボリューション・フェザー』と『レボリューション・ウィング』をダブルチューニング！黒き羽根、闇の翼に進化する！大いなる翼よ、その闇を以って闇を払え！シンクロ召喚、７つの希望、その１つ！！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』！！」

天空は黒い暗雲に包まれ、４枚の闇の翼をはばたかせて、ブラックフェザー・ドラゴンの面影が残るダークネス・ウィング・ドラゴンが舞い降りた。その全長は４０ｋｍ前後。しかし黒いために、夜のこの町では人間がダークネス・ウィング・ドラゴンを見ることはなかった。

『グオオォォオオオオオオオオオオ！！！』

ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「だが攻撃力は４０００、攻撃力３５０００には遥かに届かない！」

「『ダークネス・ウィング・ドラゴン』効果発動！１ターンに１度、相手のモンスター１体をゲームから除外することができる！ダークネス・ディメンジョン！」

「そうはさせん！『オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン』は１ターンに１度、相手の効果を無効にする！」

ジェノサイドドラゴンは翼をはばたかせ、ダークネス・ウィング・ドラゴンの効果を封じようとした。

「『ダークネス・ウィング・ドラゴン』効果発動！このカードに『黒翼カウンター』を１つ置き、相手の発動・適用したカード効果を無効にし、攻撃力・守備力を１０００ポイントダウンする！」

「くっ…それでも『オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン』は１ターンに１度だけフィールドを離れない！攻撃力３０００にダウンしたのでは、さらに３５０００には届かなくなった！」

「……それはどうかな？『ダークネス・ウィング・ドラゴン』効果発動！このカードの黒翼カウンターを全て取り除き、相手モンスターの攻撃力をこのターンのみ０にする！ダークネス・ウィンド！！」

オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン　ＡＴＫ３５０００→０
ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ３０００→４０００

「バカな！！」

「さあ行くぞ、『ダークネス・ウィング・ドラゴン』で『オレイカ

ルコス・ジェノサイドドラゴン』を攻撃！ダークネス・ブレイズ・ストリーム！！」

巨大な黒い炎がオレイカルコス・ジェノサイドドラゴンを焼き尽くした。

「うわあああああああああああああああああ！！」

ラミエル　ＬＰ１→－３９９９

「ラミエル、しっかりしろ！」

ラミエルが倒れたところにトールが走ってきた。

「わたしの命はここまでだ。『オレイカルコス・ジェノサイドドラゴン』はわたしの魂そのもの。闇に堕ちたわたしの魂を救うのは遅すぎたようだ」

「なっ…ふざけるな！！しっかりするのだ！」

「わたしは君と最初に戦った時、既に闇に堕ちかけていた。だから君を幻覚で惑わしてわたしが勝った。わたしはその後、堕天神に囚われ、今の姿になった…ゴホッ、ゴホッ…」

ラミエルは血を吐き、既に力無い状態だ。

「だが、今のわたしは光が戻った。最後に君に、謝ろう。悪かった」

「……」

「そしてもう1つ。君の仲間には最高神ロキがいるはずだ。そしてロキの恋人の名はセレナ。それであっているな？」

トールはラミエルの質問に黙って頷いた。

「セレナは生きている。セレナをロキの城ごと襲った堕天神は、セレナの遺体を偽物とすり替え、今も城に幽閉している。あそこは時が流れていないため、年を取らない。わたしが君に伝えたかったのはこれだけだ。セレナを幽閉している理由は、特別な力を持つ人間であるからしい。……どうやら、本当にここまでのようだ。闇に堕ちる前に、君達の輪に入れてもらえば、こんなことにはならなかったかもしれない…だが、最期の最期に君と話せて、わたしは満足だ」

「待て、まだ逝くな、まだ逝くな～～～ッ！」

「……わたしの魂は君に預ける。もしも君が、わたしにふさわしい肉体の器を見つけてくれた時は、そこにわたしの魂を吹き込んでほしい。では、しばしの間さらばだ」

ラミエルは、光の粒子となった。しかしその光の粒子は、水晶玉になってトールの懐に入った。しかし、器は適応度が９９％以上でなければならない。それを見つけるのには、奇跡を起こさない限り、数えきれないほどの年月がかかるだろう。だが、トールは近いうちに必ず器を見つけると誓った。ロキとは逆にバッドエンドが嫌いなトールらしいことだ。

戦いを終えたトールのもとにディスペアが来たが、トールはラミエルが最後に話した情報を伝え、先に帰らせた。その後、トールはしばらくの間、海岸に居た。

第１１３話　オレイカルコスの決戦！（後書き）

今回の切り札『ダークネス・ウィング・ドラゴン』の効果です。トールの設定の方にも書き加えておきます。

ダークネス・ウィング・ドラゴン
レベル１２　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『ブラックフェザー・ドラゴン』＋『エボリューション・フェザー』＋『レボリューション・ウィング』
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。１ターンに１度、相手のモンスター１体を除外することができる。このカードに黒翼カウンターを１つ置くことで、相手の発動・適用したカードの効果を無効にすることができる。この効果に対して魔法・罠・モンスター効果を発動することはできず、この効果はスペルスピード３として扱う。このカードに乗っている黒翼カウンター１つにつき、このカードの攻撃力と守備力は１０００ポイントダウンする。このカードは戦闘では破壊されない。１ターンに１度、自分のメインフェイズまたは相手のバトルフェイズ開始時に、このカードに乗っている黒翼カウンターをすべて取り除くことで、エンドフェイズまで相手フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力を０にする。

第１１４話　堕天城の決戦１（前書き）

どうも。パソコンをノートパソコンに変えたので、時間制限などがなくなりました。今回はすごく超展開です。当たり前か…。

最近の出来事

魚族を強化しまくると深海の怒りが抜けるという罠。どうしよう…？

第１１４話　堕天城の決戦１

～～～校長室～～～

「ロキ…君に大切な話がある」

わたしはロキに、トールがラミエルから聞いたという情報を話そうとする。

「へえ。やけに真剣だね」

ロキはいつもの口調だ。

「話してよ」

「……セレナは生きている」

「！！？」

「君たち２人を襲った堕天使は、堕天使の神だ。堕天神は、セレナを襲った際に遺体を偽物とすり替え、君の前に置いた」

ロキは驚きの顔を隠さない。

「そんな馬鹿な！？」

「本当のことだ。ラミエルが言っていたことだからな」

ロキに死ぬ間際にラミエルが残した言葉をすべて話す。わたしが直接聞いた話ではないが、ロキは納得したようだ。

「……でも僕はセレナを助けることはできない」

「！」

「もうセレナが攫われてから３００年以上経つんだ。今頃助けに行ったって、恨まれるにきまってる」

「ロキ…」

次の瞬間、ディスペアはロキを殴っていた。

「ロキ！貴様が腑抜けてどうする！！恨まれる、恨まれないは関係ない！今ここで助けに行かなければ、絶対に後悔する！」

「でも…」

「わたしならば絶対に助けに行く。もう大切なものを失う絶望などいらないはずだ」

そもそも助けに来た者を恨む理由がどこにある。

「堕天使も今は半分の勢力を失い、混乱を極めているころだ。今強襲をかければ、成功する確率は高い」

あれだけの数をわたしのもとに向けてきておきながら、そのほとんどは命を失った。今の堕天使の力は相当弱体化している。逆に言え

ば、強襲をかけることができるのは今しかないということになる。

「…わかった。助けに行く。でも、僕1人では助けられない。ディスペア、僕に力を貸してくれ」

「…頼まれなくても、わたしは行こうと思っていたところだ」

ディスペアは笑って答える。

「我も行こう。ラミエルが我に提供した情報、ここで無駄にして我1人でのんびり過ごしてなどいられない」

トールもミョルニルを構えて言う。

「ロキ、私を置いて行ったら、ひどいわよ?」

「ウルズ、脅迫はしないの。ロキだって困るじゃない?」

「え?え?ウルズもヴェルザンディーも行っちゃうの?」

スクルドは戸惑っている。

「スクルド…ここからは危険な戦いになる。怖いのなら、残っていればいい。無理に参加する必要はない」

本当ならスクルドはここに残しておきたいが、それだとスクルドが納得しない。

「……皆行っちゃうなら、私も行く。ディスペアと一緒がいい」

これで全員が堕天界に行くことになった。オーディンはすでにゲートの準備をしており、神力をチャージしている。

「スクルド、行く前にこれを持て」

ディスペアはスクルドに、星の形をしたペンダントを渡した。

「堕天使の中には呪術を使って対象を呪い殺す者もいる。呪いなどの耐性がない君が何の装備もなしに行けば、危険すぎる」

「…ありがとう！」

ゲートの準備も完了した。

「さあ、行くぞ」

目的は堕天神の命とセレナ救出。
わたし達は全員、オーディンが創ったゲートに入った。

～～～堕天界～～～

この世界は気温が低く、そのうえ空が常に闇に覆われている。なので、足元は暗い。

「堕天使ってこんなところに住んでいて満足しているのかしら？」

「まあ、堕天使にとってはいい場所なんじゃないの？私達からすれば考えられないけど」

「お前たち、観光に来たわけではないぞ…」

ディスペアは多少あきれた表情でウルズとヴェルザンディーに言う。だが、この暗い世界では黙っていると恐怖心を煽られる。そのために、少しでも会話して紛らわそうとしているのだ。

しかし、突然ディスペアの前に堕天使が出現した。

「ほう…さっそく刺客がきたようだ」

ディスペアはゴッドモーメントを起動してデッキをセットした。

「グフフフ…来るころだと思っていたぞ、最高神共…」

「「デュエル」」

「わたしの先攻。わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。さらに魔法カード『機皇召集』発動。デッキから『機皇』モンスター1体を特殊召喚する。現れろ、『機皇神マシニクル∞？』！わたしはこれでターンエンドだ」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００

「わたしのターン。わたしは『暗黒界の騎士ズール』を召喚する。

カードを1枚伏せてターンエンド」

堕天使
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
暗黒界の騎士ズール　ＡＴＫ１８００
伏せカード×１

「わたしのターン！わたしは魔法カード『サイクロン』を発動し、その伏せカードを破壊する！」

破壊されたのはヘイト・バスター。悪魔族モンスターが攻撃対象にされたときに発動し、その2体を破壊して破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える強力な罠カードだ。

「さらに『機皇兵スキエル・アイン』を召喚。そして、わたしのフィールドに3体の『機皇』モンスターが存在することにより、手札から『機皇神龍アステリスク』を特殊召喚する！このカードの攻撃力は、わたしのフィールド上の攻撃表示の機械族モンスターの攻撃力の合計になる！よって攻撃力は…」

機皇神龍アステリスク　ＡＴＫ０→７０００

「こ、攻撃力７０００！」

「『機皇神マシニクル∞？』で『暗黒界の騎士ズール』を攻撃！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「ううううう！」

堕天使　ＬＰ８０００→５８００

「『機皇神龍アステリスク』でダイレクトアタック、インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「うわあああああああ！」

堕天使　ＬＰ５８００→－１２００

堕天使は光に包まれて消えた。この程度、ウォーミングアップの相手にもならない。

「さあ急ぐぞ。今堕天使が現れたとおり、堕天使は警戒を強めているようだ」

これは戦力が減少している証拠だ。

「流れは我らに来ている。このまま押し切るぞ！」

ディスペア達は、堕天神の城がある方向に飛行する。
ディスペアは何かの考えごとに集中しているのか、横からきている敵に気付かなかった。
だがその敵は、スクルドが撃ち落とした。

「ディスペア、考え事もいいけど、よそ見はだめだよ」

スクルドはディスペアにウィンクする。ディスペアはうなずいて返事した。

「さあ、そろそろ着くころだ。心の準備は今のうちにしておけ」

ここまで来て後戻りはできないししない。あとは堕天神を葬り、セレナを助けるだけだ。

「うん…！」

全員が頷いた。それを確認したディスペアは、堕天神の城の扉を思い切り蹴とばした。

まずは大広間の下級堕天使を殲滅しにかかる。

少し時間がかかると、すでに大広間にいた下級堕天使は消えていた。トールとディスペアによる猛攻で、瞬く間に死んでしまったのだ。

「この城の地図を手に入れた。堕天神は最上階にいる。だが、それまでには最上級の中の最上級堕天使がフロアを守っている。その数は3体」

「たったの3体？なめているのか？」

トールはミョルニルを懐にしまって言う。

「だが、いずれも最高神クラスの力を持っているようだ」

なかなか面白い戦いになりそうだな。

「堕天使を倒し、堕天神を絶望の底に叩き落として葬ってやろう。わたしの友の恋人を幽閉した罪は重いぞ」

ロキは今、精神を集中させている。堕天神を倒すのはロキの役目だ。

これがロキのけじめであり、復讐の終点。堕天神を倒したとき、ロキを縛るものはなくなってわたしたちと同じように本当に自由になる。

「行くぞ。１秒でも早くセレナを助けに」

ディスペア達は、次のフロアへの階段を上った。

～～～堕天神の城２Ｆ～～～

「成程。上に昇れば上るほどフロアは暗くなるらしい」

すでに周りを確認するのがやっとだ。上に続く階段には強力な結界が張ってあり、このフロアの堕天使を倒さないことには上のフロアには行けないらしい。その堕天使は、すでにわたしの前にいた。

「堕天神の命令によって貴様らを皆殺しにする」

ディスペアはゴッドモーメントを展開しようとしたが、トールがそれを制した。

「待て、ディスペア。ここは我にやらせてくれ。上のフロアに行くほど堕天使は強力になるはずだ。最強の切り札は、そこで使いたい」

最強の切り札はディスペアのことだ。ここでディスペアを温存し、最後のフロアの堕天使との戦いに参戦させるようだ。もっとも、究極神は使用できないが。

「最高神トールがわたしの相手か」

「そうだ！貴様ごとき、我が力で粉砕してやる！」

「「デュエル」」

「わたしの先攻。『アックス・ドラゴニュート』を召喚。さらにこのカードをゲームから除外し、手札から『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚する。このカードの効果によって、1ターンに1度手札または墓地からドラゴン族モンスター1体を特殊召喚することができる。手札より『タイラント・ドラゴン』を特殊召喚する。先攻は最初のターン、攻撃できない。わたしはこれでターン終了」

堕天使
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン　ＡＴＫ２８００
タイラント・ドラゴン　ＡＴＫ２９００

「我のターン」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果で、奴はドラゴン族モンスターを生贄なしで特殊召喚できる…タイラント・ドラゴンは、トラップカードの対象になった時にそれを無効にして破壊する能力がある。しかし、墓地から復活する際はドラゴン族モンスター1体の生贄が必要なモンスターだ。どちらも攻撃力は最上級モンスターにふさわしい。だが、我はその上を行く！

「我は『ワイズ・コア』を召喚。魔法カード『ディストラクション・チェーン』を発動。我のモンスターをすべて破壊し、このターン中手札からトラップカードを1枚発動することができる！『ワイズ・コア』がカード効果で破壊されたことで『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルT』『ワイゼルA』『ワイゼルG』『ワイゼルC』を特殊召喚する！合体するのだ、機皇帝ワイゼル！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００

「さらに手札からトラップカード『インフィニティ・チェンジ』を発動。『機皇帝ワイゼル∞』に装備し、シンクロモンスターの代わりに効果モンスターを吸収できるようになる。我は『タイラント・ドラゴン』を吸収する！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００→５４００

「攻撃力５４００…少しまずいか？」

「『機皇帝ワイゼル∞』で『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を攻撃する！」

機皇帝ワイゼルが剣の先からタイラント・ドラゴンの形をしたエネルギー弾を撃ち出して、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを破壊した。

「むううう！」

堕天使　ＬＰ８０００→５４００

「我はカードを1枚伏せターンエンド」

トール
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ５４００
＋タイラント・ドラゴン
＋インフィニティ・チェンジ
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』を発動。デッキから『真紅眼の飛竜』２体と『ミンゲイドラゴン』、『ダーク・ホルス・ドラゴン』『ボマー・ドラゴン』を墓地に送り、２ターン後のわたしのスタンバイフェイズに『Ｆ・Ｇ・Ｄ』を特殊召喚する」

元々の攻撃力はデュエルモンスターズ界最強のカードの１つ。このカードさえ召喚できれば最高神トールといえども…！

「『Ｆ・Ｇ・Ｄ』…攻撃力５０００では、『機皇帝ワイゼル∞』に勝つことはできないぞ？」

どうせ手札に装備魔法『巨大化』があるのだろうが…。

「ほざけ！わたしは『デコイドラゴン』を守備表示で召喚！カードを1枚伏せ、ターン終了」

堕天使
ＬＰ５４００
手札×１
フィールド
デコイドラゴン　ＤＥＦ２００
伏せカード×１

「我のターン！『機皇帝ワイゼル∞』の効果発動。『デコイドラゴン』を吸収する！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ５４００→５７００

「行くぞ！『機皇帝ワイゼル∞』でダイレクトアタックだ！」

「そうはいかん。わたしはトラップカード『威嚇する咆哮』をバトルフェイズ開始時に発動していた。これにより『機皇帝ワイゼル∞』は攻撃できない」

「ちっ…とどめを刺し損ねたか！ターンエンド」

トール
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ５７００

＋タイラント・ドラゴン
＋デコイドラゴン
＋インフィニティ・チェンジ
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００
伏せカード×１

「わたしのターン。この瞬間『未来融合－フューチャー・フュージョン』のカウントは１、次のターン攻撃力５０００の『Ｆ・Ｇ・Ｄ』が降臨する！わたしは永続魔法『ドラゴニック・シールド』を発動。墓地に存在するドラゴン族モンスター１体をゲームから除外することで、バトルフェイズを終了させることができる。そして、わたしのメインフェイズに相手のカード１枚の効果を、このターンだけ無効にすることができる」

「……」

時間稼ぎのつもりか。もう貴様の敗北は決定している。巨大化を装備して機皇帝ワイゼルを攻撃した時が終焉だ。

「ターン終了」

堕天使
ＬＰ５４００
手札×１
フィールド
ドラゴニック・シールド

「我のターン！我は『機皇帝ワイゼル∞』でダイレクトアタック！」

「そうはいかないぞ。『ドラゴニック・シールド』の効果により、墓地から『ダーク・ホルス・ドラゴン』を除外し、バトルフェイズを終了させる！」

機皇帝ワイゼルの攻撃は、堕天使の目の前で霧散した。

「ターンエンド」

トール
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ５７００
＋タイラント・ドラゴン
＋デコイドラゴン
＋インフィニティ・チェンジ
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００
伏せカード×１

「わたしのターン！ハッハハハハハハハハ！出でよ、『Ｆ・Ｇ・Ｄ』！！」

５つ首の龍が現れた。首はそれぞれ、光と神属性以外の属性を体現しているかのようだ。

「装備魔法『巨大化』！『Ｆ・Ｇ・Ｄ』の攻撃力を倍にする！」

Ｆ・Ｇ・Ｄ　ＡＴＫ５０００→１００００

「攻撃力１００００…それに対し、トールの機皇帝は攻撃力５７００、その差は４３００だが…」

「トールは明らかに罠を張っている。堕天使の勝利は無いな」

「なんでわかるのよ？」

「キッヒャッヒャ、トールの顔を見ればわかることだよ」

「食らうがいい！『Ｆ・Ｇ・Ｄ』で『機皇帝ワイゼル∞』を攻撃！」

堕天使は、何の警戒もせずに攻撃を仕掛けた。

「…速攻魔法『サイクロン』。『巨大化』を破壊する」

Ｆ・Ｇ・Ｄ　ＡＴＫ１００００→５０００

「！！」

機皇帝に返り討ちにされ、その余波が堕天使を襲った。しかしＦ・

G・Dは光と神属性以外のモンスターとの戦闘では破壊されないモンスターだ。もっとも、今は効果モンスターを吸収できる機皇帝が存在する以上、足手まといにしかなっていないが。

「おのれ…だがわたしはこのターン、通常召喚を行っていない！エンドフェイズに墓地から『真紅眼の飛竜』を除外し、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を墓地から守備表示で特殊召喚する！ターンエンド」

堕天使
ＬＰ５４００
手札×１
フィールド
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン　ＤＥＦ２４００
Ｆ・Ｇ・Ｄ　ＤＥＦ５０００
ドラゴニック・シールド

「我のターン！魔法カード『ダブル・サイクロン』！『デコイドラゴン』と『ドラゴニック・シールド』を破壊する！」

「なっ！？」

「さらに『機皇帝ワイゼル∞』の効果により、『Ｆ・Ｇ・Ｄ』を吸収する！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ５７００→５４００→１０４００

「まだだ！『ワイゼルＡ』を墓地に送り『ワイゼルＡ３』を特殊召喚し、『ワイゼルＡ３』を墓地に送ることで『ワイゼルＡ５』を特殊召喚する！さらに『機皇帝ワイゼル∞』の攻撃力は、パーツの攻

撃力の合計になる！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ１０４００→１１２００
ワイゼルＡ５　ＡＴＫ２０００

「『機皇帝ワイゼル∞』で『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を攻撃！『ワイゼルＡ５』の効果によってトラップカードが発動した時、１度だけ無効にし、守備表示モンスターを攻撃していた場合、２倍の貫通ダメージを与える！！」

「馬鹿な！！？２倍の貫通ダメージだと！！」

機皇帝ワイゼル∞の攻撃力は１１２００、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの守備力は２４００だ。その差、８８００ポイントの２倍、１７６００ポイントがダメージになって堕天使を襲う。

「ぬわあああああああああああああ！！」

堕天使　ＬＰ５４００→－１２２００

堕天使は、闇の霧になって消滅した。そして、階段に張られていた結界も消える。
ディスペア達は、急いで次のフロアに進んだ。

……次回に続く。

第１１４話　堕天城の決戦１（後書き）

次回「堕天城の決戦２」

ワイゼルＡ５ってものすごく強いですね…似たような効果の機皇サポートが出ないかなぁ…

第１１５話　堕天城の決戦２（前書き）

どうも。今回はいつもよりもなんかグダグダしています。すいません。デュエルを真剣に書いていたらこうなってしまいました。

最近の出来事

昼にレストランに行ってきました。受験勉強をしている人達でいっぱいでした。

第１１５話　堕天城の決戦２

次のフロアについたディスペアは、周りを見渡した。所々黒い炎が灯っている。しかし、あまり遠くを見ることはできない。ノルン三姉妹が杖に光を灯し、周りが見えるようになった。

「……何もいないな」

周りには堕天使どころか生命体の気配を感じられない。時々水滴が落ちる音が聞こえる。
トールとロキが、とりあえず進もうとする。

「待て」

しかし、ディスペアがそれを制止した。そして、ディスペアは何もない空間にアーティスの斬撃を飛ばした。すると、その場所から叫び声が聞こえて何かが倒れる音がした。

「姿の見えない堕天使か。ずいぶんと賢い手段を採用したな」

１体がやられると、他の堕天使がすぐに姿を現した。姿を隠す魔法が使えるのは、今倒した堕天使のみのようだ。

「フハハハハ…待っていたぞ、パワーバカのあいつを倒したことは褒めてやる」

どうやら、先ほど倒した堕天使はこの堕天使からは下に見られてい

るようだ。

「お前たち、デュエルディスクを持ってこい！」

この階の結界を守る堕天使が、周りのしもべに言うと、すぐにデュエルディスクを持ってきた。

「…わたしが行こう」

オーディンが固有ディスクを創り出して1歩前に出た。

「あまり痛めつけないで、すぐに葬り去れ」

トールがオーディンに言う。オーディンは軽く頷いた。

「「デュエル」」

「先攻はわたしだ。わたしはフィールド魔法『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』を発動。ドローフェイズにドローする代わりに、デッキからランダムに『Ｓｉｎ』と名のついたカードを手札に加える。わたしはエクストラデッキから『スターダスト・ドラゴン』を除外し、手札の『Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する」

この堕天使相手ならばこの程度で十分だ。サイバー・エンドやレインボー・ドラゴンは召喚する必要がない。

「わたしはカードを1枚伏せ、ターンエンド」

オーディン
ＬＰ８０００

手札×３
フィールド
Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード×１

「我のターン。我はチューナーモンスター『アンノウン・シンクロン』を特殊召喚する。このカードは、相手フィールド上にのみモンスターが存在する場合、デュエル中に１度手札から特殊召喚できる。さらに手札を１枚捨て、『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚。そして、今捨てた『ボルト・ヘッジホッグ』を、フィールド上にチューナーモンスターが存在することにより墓地から特殊召喚する。レベル５の『ＴＨＥ　トリッキー』とレベル２の『ボルト・ヘッジホッグ』にレベル１の『アンノウン・シンクロン』をチューニング。現れよ、『ギガンテック・ファイター』」

「１ターンでレベル８のシンクロモンスターを召喚したか。だがトラップ発動『Ｓｉｎ　Ｃｌａｗ　Ｓｔｒｅａｍ』。わたしのフィールド上に『Ｓｉｎ』モンスターが存在する場合、相手モンスター１体を破壊する」

ギガンテック・ファイターは赤黒い光に包まれて消えた。

「おのれ…我はカードを３枚伏せ、ターンエンド」

堕天使
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
伏せカード×３

「わたしのターン、わたしは『Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン』でダイレクトアタック。シューティング・ソニック」

「トラップ発動『リビングデッドの呼び声』！蘇れ、『ギガンテック・ファイター』！」

Ｓｉｎスターダスト・ドラゴンは、ギガンテック・ファイターの出現に伴い攻撃をやめた。

「ほう…カードを1枚伏せ、ターンエンド」

オーディン
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ２５００
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード×１

「あの堕天使…先程のクズとは比べ物にならんな」

トールは冷静に感想を述べる。

「そうだな。オーディンに任せて正解だった。『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』の効果が大いに役立つ」

Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンは、シンクロ召喚成功時に墓地からシンクロモンスター1体を特殊召喚できる。見たところ、あの堕天使はシンクロ召喚が主体だ。Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンの効果によ

りシンクロモンスターを奪うことができれば、勝利は一気に近づく。

「ディスペア…ちょっと疲れちゃった…」

今まで、常に防御魔法を使用していたスクルドがバテたようだ。無理もない。耐性のない者が呪いを防ぐためにはまず防御魔法を使用していることが最低条件だ。

仕方がないのでわたしはスクルドにゴッドモーメントの輪を渡した。

「これを持っていれば究極神の加護がつく。あらゆる攻撃に対する耐性が飛躍的に上昇するから持っているといい」

わたし自身は最初から呪いの類の魔法は効かないため、問題ない。ちなみに、ゴッドモーメントには神力の回復作用もある。

「我のターン。我は魔法カード『天よりの宝札』を発動する。互いに手札が6枚になるようカードをドローするのだ」

堕天使は6枚、オーディンは3枚ドローした。

「我は『トライデント・ウォリアー』を召喚。このカードの効果により、手札からレベル3のモンスター『デルタフライ』を特殊召喚する。そして『デルタフライ』の効果によって、『トライデント・ウォリアー』のレベルを5にする。レベル5の『トライデント・ウォリアー』にレベル3の『デルタフライ』をチューニング。現れよ『スクラップ・ドラゴン』！

このカードの効果により、我の伏せカードと貴様の『Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン』を破壊する！」

伏せカードが粉々になり、その破片がＳｉｎスターダスト・ドラゴ

ンを襲い、破壊した。

「『スクラップ・ドラゴン』と、墓地に戦士族が増えたことにより攻撃力が２９００になっている『ギガンテック・ファイター』でダイレクトアタック！」

「フン…」

オーディン　ＬＰ８０００→２３００

「ターンエンド」

堕天使
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
ギガンテック・ファイター　ＡＴＫ２９００
スクラップ・ドラゴン　ＡＴＫ２８００

少し手加減をすれば調子に乗る。ならば、もう手加減はなしだ。完全に再起不能になるように叩きのめしてやる。

「わたしのターン。魔法カード『ブラック・ホール』発動。フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

黒い穴が出現し、フィールド上のすべてのモンスターを巻き込んで、粉々につぶしてから消えた。

「わたしは『Ｓｉｎパラレル・ギア』を召喚。このカードのシンクロ素材は、手札の『Ｓｉｎ』モンスターでなければならない。手札

より『Ｓｉｎ青眼の白龍』を素材とする！レベル８の『Ｓｉｎ青眼の白龍』にレベル２の『Ｓｉｎパラレル・ギア』をチューニング！次元の裂け目から生まれし闇、時を越えた舞台に破滅の幕を引け！『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』！！」

Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「オーディンが本気になったな」

「あの堕天使がオーディンを怒らせたのがいけないんだろ？あんな調子に乗ってシンクロモンスターを並べるから…」

トールとロキは、勝利を確信した顔で言った。本気のオーディンがディスペア以外に負けたことはない。

「『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』効果発動。このカードのシンクロ召喚に成功した時、自分または相手の墓地のシンクロモンスター１体を特殊召喚する！わたしは『スクラップ・ドラゴン』を、わたしのフィールドに攻撃表示で特殊召喚する！現れろ『スクラップ・ドラゴン』」

Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンが咆哮を上げると、時空の裂け目からスクラップ・ドラゴンが現れた。

「『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』と『スクラップ・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

２体の龍が、それぞれ瓦礫と黒いエネルギーを堕天使に向けて放ち、２つとも直撃した。

堕天使　ＬＰ８０００→１２００

「おのれぇぇ…神ごときが！手札よりトラップカード『シンクロモーメント・エクスプロージョン』発動。このカードは相手の2体以上のモンスターの攻撃によってライフが半分以下になったとき、手札から発動できる！エクストラデッキからシンクロモンスター2体を召喚条件を無視して特殊召喚する！我は『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』2体を特殊召喚する！

そして先程のターン、『スクラップ・ドラゴン』によって破壊された我のトラップカード『シンクロオーバードライブ』の効果を発動する！このカードが墓地に存在し、自分フィールド上に2体以上のシンクロモンスターが存在する場合、このカードを除外して、手札のモンスターでシンクロ召喚できる！手札からレベル1の『チューニング・サポーター』と『グローアップ・バルブ』の2体をシンクロ素材とし、『フォーミュラ・シンクロン』をシンクロ召喚する！そして、『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』2体と『フォーミュラ・シンクロン』『チューニング・サポーター』の効果によりカードを4枚ドロー！！」

堕天使は怒りに任せて、手札とフィールドと墓地を駆使してシンクロモンスターを3体召喚した。これには、オーディンですら驚いている。堕天使の手札は4枚から5枚に増えている。最高ランクの堕天使というだけあり、戦術はワンパターンではない。

「わたしはカードを2枚伏せ、ターンエンド」

くっ…手札が5枚もあるようでは、考えなしにスクラップ・ドラゴンの効果を使用できない…。ここは温存するべきか。

オーディン

ＬＰ２３００
手札×２
フィールド
Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
スクラップ・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
伏せカード×２

「我のターン。レベル５の『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』２体にレベル２の『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング！フハハハハハハ、神ごときが我に勝負を挑んだことを後悔させてやるわ！デルタアクセルシンクロ！！『堕天龍インフィニット』！！」

堕天龍インフィニット　ＡＴＫ５０００

城のフロアにギリギリ収まる、巨大な龍が異次元の闇より出現した。禍々しい６枚の翼を持ち、全体的に赤黒い龍だ。

「固有カードを持っているのは貴様ら神だけではない！我ら堕天使も、誕生の時より与えられる自らの命を司るカードを授けられるのだ！」

そう、固有カードや固有ディスクは神のみに与えられたものではない。しかし、神以外の種族が固有カードを持つとき、それは持ち主の命そのものということになる。究極神は、前世ではそうだったが、今はそうではない。世界を創った後にカードになって戦い続けるうちに、ディスペアを蝕むことがなくなったのだ。そういう意味では、堕天使も固有カードに蝕まれているということになる。

「『堕天龍インフィニット』の効果発動。このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する

！インフィニット・デスフレア！」

堕天龍の翼から、無数の闇が飛び散って周りの物を粉砕し、最後にはオーディンのモンスターが塵になって消えた。だが、闇が収まると、オーディンのフィールドには巨大な黄色い龍が存在していた。

「わたしはわたしの『Ｓｉｎ』と名のつくモンスターが破壊されたことで、ライフを半分払って手札から『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』を特殊召喚した」

オーディン　ＬＰ２３００→１１５０

オーディンのライフは２３００だったが、堕天龍の前では無いに等しいため、オーディンは何の躊躇もなくＳｉｎトゥルース・ドラゴンを召喚した。Ｓｉｎトゥルース・ドラゴンは、自分の『Ｓｉｎ』モンスターが戦闘またはカード効果で破壊されたとき、ライフを半分払うことで墓地または手札から特殊召喚できる。ディスペアすらも苦戦を強いられたオーディンの今現在の切り札だ。

Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「まだ切り札を残していたか…『堕天龍インフィニット』で『Ｓｉｎトゥルース・ドラゴン』を攻撃！」

「何ッ！？」

堕天龍インフィニットは、ブレス攻撃でＳｉｎトゥルース・ドラゴンを攻撃した。Ｓｉｎトゥルース・ドラゴンもそれに対応し、ブレス攻撃をぶつけた。爆発して煙が晴れると、堕天龍インフィニットだけが残っていた。オーディンだけでなく、ディスペア以外の全員

が驚いていた。

「クククク…『堕天龍インフィニット』は破壊されない」

「！！」

「……」

まずいな。オーディンのフィールドはがら空き、それに対して攻撃力５０００のデルタアクセルシンクロモンスター、堕天龍インフィニット。このままではオーディンのライフは確実に尽きる。最悪の場合を考え、究極神召喚の準備は完了しているが…。

「ディスペア、オーディン様危ないよ！？」

「少し静かにしてくれ、スクルド。最悪の場合の回避手段はすでに考えてある」

オーディンが敗北するとは考えていないがな。

「我はこれでターンエンド。言っておくが『堕天龍インフィニット』は１ターンに１度、相手の召喚・特殊召喚・反転召喚したモンスター１体をデッキに戻すことができる」

堕天使
ＬＰ１２００
手札×６
フィールド
堕天龍インフィニット　ＡＴＫ５０００

「わたしのターン」

…あまり召喚するべきモンスターではないが…仕方がないな。ここで敗北するわけにもいかない。

「わたしはエクストラデッキから『サイバー・エンド・ドラゴン』を除外し、『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』を特殊召喚する」

「この瞬間『堕天龍インフィニット』の効果発動！『Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴン』をデッキに戻す！」

「……堕天使よ。貴様はわたしの罠にかかった。わたしは手札より魔法カード『Ｓｉｎ　ｒｅｖｉｖａｌ』を発動。墓地に存在する『Ｓｉｎ』モンスター１体を、召喚条件を無視して特殊召喚する。『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』を特殊召喚！さらに手札よりチューナーモンスター『Ｓｉｎスフィア』『Ｓｉｎデルタフォース』を特殊召喚する。このカードは『Ｓｉｎ』と名のつくシンクロモンスターがフィールド上に存在する場合のみ手札から特殊召喚できる」

黒い球体と、三角の形をした白い物体が現れた。

「堕天使よ、絶望を見るがいい。レベル１０の『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』にレベル１の『Ｓｉｎスフィア』と『Ｓｉｎデルタフォース』をダブルチューニング。降臨せよ『Ｓｉｎインフィニティ・ドラゴン』！」

全体的に白い、Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンが現れた。

Ｓｉｎインフィニティ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「わたしは『Ｓｉｎインフィニティ・ドラゴン』の効果を発動する。このカードの攻撃を放棄し、自分の墓地の『Ｓｉｎ』モンスター１体を除外することで、除外した『Ｓｉｎ』モンスターの攻撃力分のダメージを与える！わたしは『Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン』を除外」

「！！」

堕天使　ＬＰ１２００→－１３００

堕天使は悲鳴を上げる間もなく、無数のエネルギー弾にハチの巣にされて消えた。

堕天使が消えると同時に、階段の結界が破壊された音がした。

「……さらばだ、堕天使よ」

オーディンは堕天使がいた場所に一言告げてから、階段を上り始めた。ディスペア達も、それに続いて階段を上った。

～～～堕天城３Ｆ～～～

３階に上ると、そこにはすでに堕天使が構えていた。

「貴様らがだいぶ暴れてくれたおかげで、堕天神がお怒りだ。貴様らには怒りを鎮めるための生贄になってもらう」

「…今度こそわたしが行くぞ」

ディスペアは戦うのを我慢しきれなかったようで、既にゴッドモーメントを展開していた。

「堕天使。少しはわたしを楽しませろ」

「ほざけ！貴様こそ堕天神の生贄にしてくれる！」

「「デュエル」」

「わたしのターン。わたしは『ワイズ・コア』を召喚する。『熱線爆破』発動。デッキの上からカードを1枚墓地に送り、フィールド上に『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』が存在する時、フィールド上のモンスターをすべて破壊する。『ワイズ・コア』がカード効果によって破壊されたとき、手札・デッキ・墓地からレベル1の『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルT』『ワイゼルA』『ワイゼルG』『ワイゼルC』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝ワイゼル！」

熱線爆破はデュエル中に1度しか使用できないため、使いたくなかったが仕方がない。

「先攻は攻撃できない。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００

ワイゼルG　ATK1200
ワイゼルC　ATK800

「我のターン。我は魔法カード『地砕き』発動」

「！！」

機皇帝ワイゼルは、一瞬にして分解し、破壊された。

「『グリーン・ガジェット』召喚。デッキから『レッド・ガジェット』を手札に加え、手札から『マシンナーズ・フォートレス』と『レッド・ガジェット』を捨て、今捨てた『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚する。『グリーン・ガジェット』『マシンナーズ・フォートレス』でダイレクトアタック」

「むううううう！」

ディスペアは、マシンナーズ・フォートレスの砲撃をアーティスで防ぎ、グリーン・ガジェットの突撃をアーティスで薙ぎ払って回避した。モンスターが実体化しているこのデュエルで、直接攻撃をもろに受けるのは危険だ。

ディスペア　LP8000→4100

「ターンエンド」

堕天使
LP8000
手札×3
フィールド

マシンナーズ・フォートレス　ＡＴＫ２５００
グリーン・ガジェット　ＡＴＫ１４００

「わたしのターン！」

さすがに、堕天神を守護する最後の堕天使というだけあるな。一筋縄ではいかないか。

「わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚し、魔法カード『機皇召集』を発動。自分フィールド上に『機皇』モンスターが存在する時、デッキから『機皇』モンスター１体を特殊召喚する！光臨せよ『機皇神マシニクル∞？』！！」

「攻撃力４０００のモンスターをこれほど簡単に召喚するとは…さすがは最強の神というだけあるな」

堕天使は明らかに余裕の表情でディスペアを見ている。

「『機皇神マシニクル∞？』で『マシンナーズ・フォートレス』を攻撃。ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「くっ…」

堕天使　ＬＰ８０００→６５００

「この瞬間、戦闘破壊された『マシンナーズ・フォートレス』の効果発動。相手フィールド上のモンスターを破壊する！消えるがいい『機皇神マシニクル∞？』！」

マシンナーズ・フォートレスの残骸がマシニクルを襲う。

「甘い。『機皇神マシニクル∞？』の効果により、墓地から『ワイゼルＴ』を除外し、このカードの破壊を無効にする！」

マシニクルは緑色のバリアを張って、残骸を弾き飛ばした。

「『機皇兵ワイゼル・アイン』で『グリーン・ガジェット』を攻撃。クォーク・カーブ」

堕天使　ＬＰ６５００→６１００

「カードを１枚伏せ、ターンエンド」

余裕の表情だったのはマシンナーズ・フォートレスの効果があったからか。だが、機皇神マシニクル∞？の効果を知った以上、もはや余裕はないはずだ。除去ガジェットはほとんどが『破壊』という手段で相手フィールドをこじ開けて制圧する。そのため次元幽閉でもない限り、破壊耐性を持ったモンスターを処理するのは困難だ。

ディスペア
ＬＰ４１００
手札×２
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
伏せカード×１

「我のターン！我は手札の『イエロー・ガジェット』と『レッド・ガジェット』を捨て、墓地から『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚。魔法カード『命削りの宝札』！カードを４枚ドローする。

手札から速攻魔法『リミッター解除』を発動する。このターンのエンドフェイズ時に、このカードの効果を受けたモンスターをすべて破壊する。機械族モンスターの攻撃力を倍にする！」

マシンナーズ・フォートレス　ＡＴＫ２５００→５０００

「『マシンナーズ・フォートレス』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃！」

ディスペア　ＬＰ４１００→９００

「我は永続魔法『マシンブラスター』を発動。機械族モンスターが相手モンスターを破壊した場合、エンドフェイズに破壊したモンスター１体につき８００ポイントダメージを与える。ターンエンド。ディスペア、貴様には８００ダメージを受けてもらう！」

堕天使
ＬＰ６１００
手札×３
フィールド
マシンブラスター

ディスペア　ＬＰ９００→１００

「ディスペア！」

スクルドが思わず叫ぶ。ディスペアはすでに満身創痍だ。体の一部が破壊され、青い光が放たれている。

「大丈夫だ…わたしはまだ戦える。わたしのターン！」

ここまで追い込まれるとは…思っていなかったぞ。堕天使ごときがわたしのライフを１００にするとは…！

「わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を守備表示で召喚。そしてトラップカード『カオス・インフィニティ』！フィールド上のモンスターをすべて攻撃表示にする！そして墓地とデッキから『機皇』モンスター１体ずつをモンスター効果を無効にして特殊召喚する！来い『機皇兵スキエル・アイン』『機皇兵グランエル・アイン』！」

「お願い、無理しないで…」

スクルドの言葉は今のインフィニティ・アイを起動したディスペアには届かない。ディスペアは、インフィニティ・アイを起動して自分の身体を高速再生させている。それでも時間はかなりかかりそうだが。

「わたしは魔法カード『機皇帝の賜与』を発動。わたしのフィールド上には４体の『機皇』モンスターが存在する。よってカードを４枚ドローする。『機皇神マシニクル∞？』でダイレクトアタック」

「手札より『速攻のかかし』を墓地に送り、バトルフェイズを終了する」

「しまった！……ターンエンドッ！」

ディスペア
ＬＰ１００
手札×４
フィールド

機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇兵グランエル・アイン　ＡＴＫ１６００
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００

「我のターン、『イエロー・ガジェット』召喚。『機皇兵スキエル・アイン』に攻撃」

スキエル・アインとイエロー・ガジェットが相打ちになった。

「ターンエンド。ディスペア、さらばだ」

マシンブラスターのカードからエネルギー弾が1発発射され、ディスペアは吹き飛ばされた。

ディスペア　ＬＰ１００→－７００

「そ、そんな…」

スクルドは、膝をついた。オーディンたちも、何が起こったかわからないという顔だった。

……次回に続く。

第１１５話　堕天城の決戦２（後書き）

次回は今日の午後にあげられると思います。…たぶん。

第１１６話　堕天城最終決戦　前編（前書き）

どうも。堕天使編の最後の話です。
最後の終わらし方が微妙な形になってしまいました。ごめんなさい。

最近の出来事
メタイオン３枚目を購入。
あとは図書カードをもらったりとか…
次回のストラクチャーは暗黒界ですね。セルリ（タッグフォースオリジナル）が収録されていたらうれしいです。

最近ココアシガレット（お菓子）にはまってしまいました。おいしいですｗ

第１１６話　堕天城最終決戦　前編

ディスペア　ＬＰ０（－７００）

「そ、そんな…」

スクルドは膝をついてディスペアが吹き飛ばされた方向を見ている。

「フハハハハハハ、最高神ごときが、魔力だけならば堕天神よりも上の我に刃向うからこうなるのだ！」

堕天使は笑いながらディスペアの方を見る。煙でよく見えないが、堕天使は確実にディスペアを葬ったと思っている。煙が晴れると、そこにはディスペアの姿はなく、瓦礫に埋もれていた。

しかし、突然光が放たれ、１枚のカードが飛んできた。

「『機皇蹟』…？」

スクルドは飛んできたカードを手に取った。

その後すぐに、瓦礫が吹き飛んで、中から更に満身創痍のディスペアが歩いてきた。しかし、血は流れていない。ディスペアの器には一切の液体が流れていないのだ。

「……わたしが…新たなる機皇最強の切り札を、召喚するのは…貴様が…初めてだ」

ディスペアは怪我…というよりも破損した場所から神力の火花を散らしている。

城の外には、１０ｋｍほどはある、機械の２枚の翼を持ち、眼が∞の形に光っている全体的に赤い龍が浮遊していた。

『キュオオオオオオオオ』

機械とは思えない咆哮が聞こえる。

「『機皇神帝龍エクスブルム』…は、わたしの発動した魔法カード『機皇蹟』の効果によって特殊召喚される。わたしのライフが０になったとき、手札・デッキ・墓地・フィールドから『機皇神』と名のつくモンスター３種類を除外し、デッキ・手札・墓地から特殊召喚する」

ディスペアは『機皇神マシニクル∞？』『機皇神龍アステリスク』『機皇神帝フィニシクル∞？』を除外した。

機皇神帝龍エクスブルム　ＡＴＫ１００００

堕天使
ＬＰ６１００
手札×３
フィールド
マシンブラスター

「わたしの……ターーーンッ！」

ディスペアの神力の火花が激しくなった。普通の機械ならばショートしている程だ。

「わたしは『機皇神帝龍エクスブルム』でダイレクトアタック！ア

ルティメット・インフェルノ！」

機皇神帝龍エクスブルムは、巨大な炎の球を口で作り、発射した。放たれた炎の球は堕天使に直撃して焼き尽くした。

「グギャアアアアアア！」

堕天使　ＬＰ６１００→－３９００

城全体が揺れ、階段の結界が解けた。

「……わたしは…ここで休む。お前たちは…堕天神を倒せ。ロキ、お前のけじめを…つける時が来た。セレナを救って…来い」

ディスペアは強制的に意識を閉ざし、神力と身体の再生モードに入った。神力の再生にはそこまで時間がかからないが、器の回復に時間はかかる。

「…私達はここの階段をガードするわ。スクルドはディスペアの器を守らなきゃならないしね」

「そうよ。ここは私達に任せて、ロキ達は行ってちょうだい」

ウルズとヴェルザンディーが言い、スクルドは黙って、真剣な顔でうなずいた。

「……任せたぞ。ディスペアが戦闘不能の今、階段を守れるのはお前達しかいない。我とオーディンは上の階に上がった時に、周りの堕天使を排除しなければならないからな」

「…君達、ディスペアを頼んだよ」

「またあとでな」

オーディン、トール、ロキの3名は、それだけ言い残して階段を上って行った。

～～～北欧の三神サイド～～～

「ここが最上階…」

周りには2体の堕天使と、その奥に神の金属で作られた巨大な扉。僕たちが最上階に来た瞬間、階段は塞がって、戻れなくなってしまった。

2体の堕天使を、オーディンとトールが手早く排除し、神の金属で作られた扉を開いた。

中には、2本の光。そして、巨大な台座には身長2mほどの、最後の堕天使…堕天神が堂々と座っていた。

「待っていたぞ、最高神共よ。お前達…特にディスペアが暴れてくれたおかげで、わたしの城はもう崩れる寸前になってしまった」

「堕天神、セレナを返せ！」

「…ほう、あの時の神…ロキだったのか。確かにあの少女は生きている。今も監獄に閉じ込めてある。しかし、あの監獄を解き放ちたければ、わたしをデュエルで倒すしかない」

堕天神は、黒髪をなびかせ、鋭い威圧感を持った金色の目でロキを見つめる。そして、巨大な黒い翼を大きく羽ばたかせた。
オーディンとトールは、扉の外に移動し、扉を守っている。

「クククク…わたしがあの少女をなぜ監禁したかわかるか？」

「……」

「あの少女は、他のどの世界にいた人間とも違う力を持っていた。それこそ、世界を潰すことなど容易いほどに」

「何…！」

「わたしは少女を堕天使にしようとあらゆる絶望を与え続けた。しかし、今もなお絶望を弾き返し、ロキ。貴様の助けを待っている。つまり、わたしが貴様の亡骸を少女のもとに持っていけば、少女は間違いなく究極の堕天神になり、悪魔も神も葬ることができる」

強力な力を持つ者が堕天すれば、その力をさらに増大させ堕天使になる。わたしが続けてきた強力な力を持つ者を堕天使にする実験。それは成功し、ようやく巨大な力を持つ、わたしに代わる新たなる堕天神の器…セレナを見つけた。あとはロキを倒し、少女セレナを絶望の底に叩き落とすのみ。

「…さあ構えろ、最高神ロキ。わたしがこのデュエルに勝利すれば、お前達神々と悪魔は全滅する運命を辿る」

「セレナをそんなことに利用させるわけにはいかないね。貴様みたいなゲス野郎はこの僕がこの世界から消してやる！行くよ！」

（ＢＧＭ：５Ｄ′ｓのテーマ）

「「デュエル！！」」

堕天神は、自らの前に巨大な石板を浮かせた。これが堕天神のデュエルディスクのようだ。ロキも、ゴッドモーメントに限りなく似ている固有ディスク『デルタフォース』を起動した。

「僕の先攻。僕は魔法カード『強欲な壺』を発動してカードを2枚ドロー。手札を1枚捨て、『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚する。さらに『ダーク・リゾネーター』を通常召喚！レベル５の『ＴＨＥ　トリッキー』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚、燃えあがれ『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

「ほう、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』か。知の神ロキがパワー押しの戦術を使うとはな」

堕天神は、鋭い目でレッド・デーモンズ・ドラゴンを睨んだ。

「僕はカードを2枚伏せてタァーンエンド」

（ＢＧＭ終了）

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

伏せカード×２

「わたしのターン。わたしはフィールド魔法『堕天城』を発動。１ターンに１度、デッキまたは墓地からレベル８以上のモンスターを特殊召喚する。攻撃力は０になるがね。そして、この効果によって特殊召喚されたモンスターが破壊されるたびに、このカードに『堕天カウンター』を１つ置く。
わたしは『堕天城』の効果により、『堕天使イアリス』をデッキから攻撃表示で特殊召喚」

堕天使イアリス　ＡＴＫ３０００→０

「バトルだ」

「僕はこの瞬間トラップカード『スカーレッド・カーペット』を発動。ドラゴン族のシンクロモンスターがいるとき、墓地から『ダーク・リゾネーター』と『バリア・リゾネーター』を特殊召喚！そしてもう１枚！『緊急同調』。レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』とレベル１の『バリア・リゾネーター』をチューニング！荒ぶる魂『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに、墓地のチューナーの数だけ光が入り、攻撃力が上昇する。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→４５００

「ほう…わたしは『堕天使イアリス』で『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃する」

「なっ！」

堕天使イアリスの攻撃力は０！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは４５００、そんなことをしたらいきなり４５００ポイントのダメージを受けることになる！いったいこいつは何を狙っているんだ？

「『堕天使イアリス』がこのカードよりも攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う場合、ダメージステップ時にカードを２枚ドローする。そして、戦闘ダメージは０になるのだ」

「！！」

堕天使イアリス…ダメージを０にして２枚ドロー…ほかの堕天使もこんな効果を持っているとしたらまずい。

「『堕天城』の効果によって、このカードに『堕天カウンター』を１つ置く。わたしはカードを２枚伏せ、ターンエンド。最高神ロキよ、貴様は人間を忌み嫌っていたはず。ならば、なぜその人間のために戦う？」

堕天使
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
堕天城　堕天カウンター×１
伏せカード×２

「確かに僕は人間が好きじゃない。他人を平気で裏切り、殺し、挙句の果てには欲望のままに動く。でも、セレナは信用できた。純粋な瞳は、一切の欲望を知らなかった。僕は初めて見たときから純粋

な人間…セレナに惹かれた」

「ほう…」

「僕のタァーン！僕は『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』でダイレクトアタック！バーニング・ソウル！！」

「わたしは認めない。人間の絆など！神々の愛など！永続トラップ発動『堕天輪生』！１ターンに１度、相手の攻撃宣言時に、墓地からレベル８以上のモンスターを特殊召喚する。ただし、攻撃力と守備力は０だ。わたしは『堕天使イアリス』を守備表示で特殊召喚！絆に何ができた！？愛が何かをもたらしたか！？もたらしたのは深い悲しみと絶望だけだァ！！」

堕天使イアリス　ＡＴＫ３０００→０

「そんなことはない！確かに時には深い悲しみを、絶望を残すこともある。でも、その一時は幸福で、楽しい時間だ！僕はその一時のために生きているんだ。『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で攻撃を続行！」

２枚の翼をはやした堕天使を、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが一撃で粉砕した。堕天神は、イアリスの効果でデッキからカードを２枚引いた。

「その一時よりも絶望の方がはるかに深い！トラップ発動『無限天』。わたしのフィールド上に空きがある限り、『堕天城』の効果を発動できる！わたしはデッキから『堕天使ザリオン』『堕天使クジャロス』『堕天使ミザエル』『堕天使ライアン』『堕天使ホルロス』を特殊召喚する！」

堕天使ザリオン　レベル８　ＡＴＫ３０００→０
堕天使クジャロス　レベル８　ＡＴＫ３１００→０
堕天使ミザエル　レベル９　ＡＴＫ２９００→０
堕天使ライアン　レベル９　ＡＴＫ３２００→０
堕天使ホルロス　レベル１０　ＡＴＫ３５００→０

「絶望…ね。僕にとっては、セレナが生きていてくれたってだけで絶望なんてしなくなったよ。僕はカードを１枚伏せ、タァーンエンド」

ロキ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ４５００
伏せカード×１

「わたしのターン。なぜわたしが堕天神になったかわかるか？それは貴様の言う『愛』『絆』のせいなのだ」

「何？」

「教えてやろう、わたしがなぜ深い絶望をし、堕天神になったか」

次の瞬間、ロキと堕天神は、堕天神が放った闇にのまれた。

～～～謎の場所～～～

僕は目を開けると、すぐ前には堕天神がいる。僕たちは、空中に浮いており、下の方には城下町が見える。

「これは…」

「最高神ロキ、これはわたしの記憶だ。わたしはかつて、最上級の天使だった」

城下町に2人の男女が見えた。

「あれがわたしだ」

堕天神になる前は、白い翼を持っており、隣には1人の女性がいた。

「わたしの当時の名はジルリーグ。わたしは彼女とともに暮らしていた。…人間だがな」

「人間!?」

「そう。わたしは天使の掟を破り、人間の女と暮らしていた。その一時は、貴様の言うように幸せだった。しかし…」

城下町の、ジルリーグと女性が家に入った。

「ある時、彼女は死んでしまった。いや、人間とともに過ごす以上、これは仕方のないことだった」

「どういう意味だ…」

「私たち天使の暮らす天界は、時の流れが存在し、天使にも寿命はある。しかし、天使と人間の寿命は違いすぎた。生きることのできる時間が少なすぎる人間は、彼女はわたし1人を残して逝ってしまった」

堕天神は、無感情な顔で言う。

「そ、そんなことが…」

「それだけならばまだよかった。しかし、神界は我ら天使が入ることが許されぬ世界。入ることができる天使は、ごく一握り、神に気に入られた者などの一部だ。そして、神界に暮らす天使に聞いた。『神界は時の流れが存在せず、人間ですら寿命をなくすことができる』と。わたしはその時、深く絶望した。神々は人間と永遠の時を過ごすことができる事にな。いつしか神々を深く恨んだわたしはこの世界にたどり着き、同じような境遇の者を集め、堕天界を創った。彼らはわたしに惜しみなく協力してくれ、ともに神々に反逆を起こす準備もした。ここから先は貴様も知っているだろう?」

「ああ…」

反逆を起こした堕天使は、ディスペアやトールなどの、一部の最高神を除いた神々によって虐殺された。ディスペアもトールもこのことを知ったときは、怒りを露わにしていて少しでも刺激すれば世界を滅ぼすと噂されたほどに。その時はまだ『ディスペア』じゃなかったけど…。

「それ以来、神々は堕天使の憎き敵になった。…話はここまでだ、これ以上深く語る必要はない」

ジルリーグが指を鳴らすと、元の空間に戻った。

～～～～～～～～

「わたしは『堕天使ザリオン』で攻撃。『堕天使ザリオン』がこのカードよりも攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う場合戦闘ダメージを０にし、ダメージ計算時に相手の手札をすべてデッキに戻す」

４枚の黒い翼を持つ堕天使ザリオンは、その手に持つ巨大な剣でスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを攻撃する。

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の効果発動。エンドフェイズまでこのカードを除外して、相手モンスター１体の攻撃を無効にする！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは炎に包まれて消え、ザリオンは剣を振るうのをやめた。

「だが、わたしにはまだ４体の堕天使の攻撃が残っている。『堕天使クジャロス』でダイレクトアタック。『堕天使クジャロス』が戦闘を行うダメージ計算時に、相手のデッキの上から１０枚のカードを除外する！」

金と黒の混じった２つの翼を持つクジャロスが、その手に持つ弓で矢を放ち、ロキに直撃した。

すると、ロキのデッキの上から１０枚のカードが異次元の彼方に消えた。

「くっ…」

「『堕天使ミザエル』でダイレクトアタック。『堕天使ミザエル』が戦闘を行うダメージ計算時に、相手のフィールド上の魔法・罠カードをすべてデッキに戻す」

ミザエルの赤と黒の翼が羽ばたき、ロキの魔法・罠がすべてデッキに戻された。

「（くそ…『スカーレッド・ノヴァ・プロミネンス』が…）」

「『堕天使ライアン』でダイレクトアタック。『堕天使ライアン』が戦闘を行うダメージ計算時に、相手の墓地と手札のカードをすべてデッキに戻してシャッフルする」

灰色の翼を持つ堕天使ライアンが、闇の塊をロキに向けて放ち、ロキの手札と墓地のカードがすべてデッキに吸い込まれてシャッフルされた。

「『堕天使ホルロス』でダイレクトアタック。『堕天使ホルロス』が戦闘を行うダメージ計算時に、相手プレイヤーに４０００ポイントダメージを与える。そしてわたしのライフが１０００以下の時、ライフポイントを４０００回復する」

闇そのもののような４枚の翼から、無数の羽を飛ばしてロキに攻撃した。

「ぐぁぁぁあああぁぁぁあ！！」

ロキ　ＬＰ８０００→４０００

堕天神　ＬＰ８０００→１２０００

「エンドフェイズに『堕天城』の第３の効果を発動。わたしのエンドフェイズに『堕天城』の効果によって特殊召喚されていたモンスターをすべて破壊する。そして、『堕天城』の効果によって特殊召喚されたモンスターが破壊されたことにより、『堕天カウンター』が乗る。手札が７枚以上あるので、６枚になるように捨てる」

堕天城　堕天カウンター　１→６

「くっ…『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』は、エンドフェイズに…フィールドに、戻る」

堕天神
ＬＰ１２０００
手札×６
フィールド
堕天城　堕天カウンター×６
堕天輪生

「僕のタァーン！僕は魔法カード『紅蓮魔竜の壺』を発動。デッキからカードを２枚ドローする！『紅蓮魔龍の導き』発動。『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』がいることで、デッキからチューナーモンスター『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を特殊召喚する！さらにチューナーモンスター『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』を召喚！レベル１２の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』にレベル０の『フォース・ノヴァ・フォーチュン』と『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』をダブルチューニング！究極神より誕生した７つの力…その１つが今ここに…限りなく長い時を経て封印を解かれ降臨する！シンクロ召喚！究極のシンクロモンスター！『クリムゾ

ン・スーパーノヴァ・ドラゴン』！！」

城の内部なのでわからないが、外にはすでにクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンが降臨している。

「攻撃力は墓地のチューナー×１０００ポイントアップ！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→６０００

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』が攻撃する時、相手はカード効果を発動・適用できない！ダイレクトアタック！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！！」

城の外から巨大な白金の炎が壁を貫き、堕天神を直撃した。

「がああああああ！」

堕天神　ＬＰ１２０００→６０００

「さらに、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果によってメインフェイズ２終了時にもう１度バトルフェイズを行うことができる！」

「そ、そうはさせん！手札よりトラップカード『堕天使の加護』を発動…私がダイレクトアタックを受けたターン内に手札から発動し、『堕天城』の効果を使用できる。デッキから『堕天使エアロス』を守備表示で特殊召喚する！」

堕天使エアロス　ＤＥＦ３４００→０

「構わない！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『堕天使エアロス』を攻撃する！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果でカード効果の発動・適用はできない！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

再び外から吐かれた炎が壁ごと堕天使を破壊した。

「だ、だが『堕天城』にカウンターは乗る！」

堕天城　堕天カウンター　６→７

「僕はこれでターンエンドだ」

ロキ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ６０００

「わたしのターン！！わたしは魔法カード『堕天凶宴』を発動する！このターン、『堕天城』の効果を３回まで使用できる。現れよ『堕天使クルシス』『堕天使マナエル』『堕天使イグレス』！！」

堕天使クルシス　レベル１０　ＡＴＫ４０００→０
堕天使マナエル　レベル１１　ＡＴＫ４５００→０
堕天使イグレス　レベル１２　ＡＴＫ５０００→０

「そして、このターン戦闘を行わなくても『堕天使』の効果を使用できる。『堕天使クルシス』の効果により、相手のフィールド上のカードをすべてゲームから除外する！」

「させるか！『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』を墓地から除外し、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』はフィールドに留まる！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ６０００→５０００

「『堕天使マナエル』の効果によって相手の除外されたカードをすべてデッキに戻し、１枚ドローさせる」

ロキのカードが異次元から直接デッキに戻った。ロキは、デッキからカードを１枚ドローした。

「『堕天使イグレス』の効果によってわたしはすべての手札をデッキに戻し、相手に１００００ポイントのダメージを与える！死ね、ロキ！」

「手札からカウンタートラップ『紅蓮の生命』を発動！１度だけライフを１ポイント残し、相手ターンを終了させる！」

「…エンドフェイズになったことで、『堕天城』によって特殊召喚されたモンスターはすべて破壊され、『堕天カウンター』が乗る」

堕天神
ＬＰ６０００
手札×０
フィールド
堕天城　堕天カウンター×１０
堕天輪生

「僕のターン！」

「この瞬間『堕天輪生』の第２の効果を発動。このカードを墓地に送り、相手はこのターン、１度しか攻撃宣言を行えない。いかにバトルフェイズを２回行おうとも、攻撃は１回のみだ」

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』でダイレクトアタック！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！！」

「ぐあああああああああ！」

堕天神　ＬＰ６０００→１０００

「どうだ、堕天神！希望は、絆は絶対に絶望には負けることはない。カードを伏せてターンエンド！！」

ロキ
ＬＰ１
手札×０
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「……わたしの…ターーーーーーーン！！」

堕天神は、漆黒の翼を広げた。

「『堕天カウンター』が１０個乗った『堕天城』を墓地に送り！デッキから『堕天神ルシファー』を！！特殊召喚するッ！！」

城の外壁が崩れ、黒い空から８枚もの暗黒の翼を持つ堕天神ルシフ

ァーが、巨大な剣を携えて降臨した。

堕天神ルシファー　ＡＴＫ１００００

「クックックック…ハーッハッハッハッハ、最高神ロキ！ルシファーが降臨した今、貴様に勝ち目はないぞ！！ハハハハハハ、ハーハハハハハハ！！」

「こ、攻撃力１００００…いったいどんな効果があるっていうんだ…」

……次回に続く。

第１１６話　堕天城最終決戦　前編（後書き）

次回「堕天城最終決戦　後編」

脱出のシーンも書きます。むしろそっちのほうがメインだったり（ｒｙ

堕天城最終決戦　後編（前書き）

どうも。

最近全然更新できておりませんでした。理由はインフルエンザにかかってしまったためです。

…正直言って、熱よりも頭痛のほうがひどいものですね（苦笑）。

…インフルエンザだけならまだよかった。だが、不幸なことに大地震が来まして、頭痛はさらに悪化しました。急いで外に逃げて、再び家の中に入った後の速報『あわてて外に逃げないようにお願いします』…その注意、遅かったです。熱も上がりました。頭痛がさらに悪化。ＯＴＬ

熱はそのあと下がり、結果として2日間で治ったのですが、タミフルを処方されたときはビルの屋上から飛び降りるイメージしか思いつきませんでした。

あ、メロンシャーベットこぼれてる…

わたしの部屋にある７０００枚近くのカードがバラバラに散らかっていました。病人がなぜ片づけをしなければならないのか…。久しぶりに絶望した1日でした。（ちなみに被害を受けたのは弟とわたしの机の上の教科書やカードだけ、地震が起きてまず最初にノートパソコンとカードが折れていないかと心配したわたしはいろんな意味で病気）

…みなさん、ご無事ですよね？特にわたしと同じようにインフルエンザなどの病気と地震のダブルコンボを受けた方、生きていますよね？

今回はとにかく短いです。シリアス（？）な雰囲気をぶち壊すわけにもいかないので、ぶち壊すのは次話にすることにしました。

あと、設定でディスペアをいろいろ改変したので見ていってください。第５章の冒頭に改めてキャラクター設定を作り、４章のものは削除しようと思っていますが…。

この前のファイブディーズの感想

ゾーンさんは完全な悪ではなかったようです。涙腺崩壊の話だと思っていたのですが、わたしは見事にスタッフに騙されました。ＥＤの冒頭で、感動をすべて粉砕されました。究極時械神セフィロンはどうかんがえてもチートの塊だと思うんだ。ＯＣＧ効果も大体判明しているようなので一応載せときます。※間違っている可能性有り

レベル１０　光属性　天使族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
効果モンスター
このカードは通常召喚できない。自分の墓地にモンスターが１０体以上存在する場合、手札からこのカードを特殊召喚することができる。１ターンに１度、手札または墓地からレベル８以上の天使族モンスター１体を特殊召喚できる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃力は４０００になる。

…これが本当でしたら、異常ですね。

堕天城最終決戦　後編

堕天神ルシファー　ＡＴＫ１００００

「『堕天神ルシファー』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃。『堕天神ルシファー』が戦闘を行う場合、相手への戦闘ダメージは０になり、相手モンスターを破壊した場合、相手のライフを０にする！食らうがいい、我らの怒りを！我らの嘆きを！堕天断罪！」

「冗談じゃない、トラップ発動『スーパーノヴァ・ウォール』！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』が攻撃対象になったとき、デッキの上からカードを５枚墓地に送りその攻撃を無効にする！」

墓地に送られたのは『エキセントリック・ボーイ』『グローアップ・バルブ』『ゾンビキャリア』『クリムゾン・ヘル・セキュア』『レッド・ノヴァ』。クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの攻撃力は４０００ポイントアップする。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→９０００

「ほう…ターンエンド」

堕天神
ＬＰ１０００
手札×０
フィールド
堕天神ルシファー　ＡＴＫ１００００

「僕のターン」

ルシファーの攻撃力は１００００…クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンでは１０００ポイント足りない…でも、墓地からチューナー１体を除外するたびに１度、フィールドから離れない。あと５回はフィールドに留まれる。

「僕はカードを１枚伏せてターンエンド！」

ロキ
ＬＰ１
手札×０
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ９０００
伏せカード×１

「わたしのターン。…ロキよ、堕天神ルシファーの神話は知っているか？」

「…知らないね。興味がないよ」

「かつて、自分達天使よりも神に愛された人間に対し嫉妬したルシファーは、堕天使共を率いて神に反逆を起こし、神々に敗北した。簡単に言えばこんなところだが…ルシファーは肉体無き今でも人間に対するその嫉妬心を増幅させている」

「…それがどうしたっていうんだ」

「…『堕天神ルシファー』の効果発動。１ターンに１度、墓地またはデッキに存在する『堕天使』１体を特殊召喚することができる。

出でよ『堕天使エルシス』！このカードの召喚に成功した時、わたしは自分のフィールドまたは墓地に存在する『堕天使』１体につき１０００ポイントライフを回復する。『堕天使』の数は１１体、よってライフは１１０００ポイント回復する」

「何！」

堕天神　ＬＰ１０００→１２０００
堕天使エルシス　レベル１２　ＡＴＫ４０００

「『堕天神ルシファー』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃。堕天断罪！」

「トラップカードオープン！『クリムゾン・インフェルノ』！相手がモンスター効果を発動したターンに発動でき、デッキからチューナー３体を墓地に送ることで次のターンのエンドフェイズまで相手モンスターの攻撃とカード効果の発動を封じる！」

墓地に送ったのは『クリエイト・リゾネーター』『ダーク・リゾネーター』『フォース・リゾネーター』。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ９０００→１２０００

「またしても…エンドフェイズに『堕天使エルシス』は墓地に送られる」

堕天神
ＬＰ１２０００
手札×１

フィールド
堕天神ルシファー　ＡＴＫ１００００

「僕のターン！僕はこのターン、何もせずにターンエンド」

ロキ
ＬＰ１
手札×１
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ９０００

「わたしのターン。ルシファーの嫉妬心が生み出した力を見せてやろう。『堕天神ルシファー』の効果発動。墓地に存在するレベル８以上の１１種類の『堕天使』をすべてゲームから除外し、『堕天神ルシファー』の攻撃力を１１倍にするッ！」

「！！」

１１個の黒い光の球が堕天神の持っている剣に入り込み、禍々しいオーラを放つ。

堕天神ルシファー　ＡＴＫ１００００→１１００００

「こ、攻撃力１１００００…！」

「『堕天神ルシファー』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃。堕天断罪！！」

「僕は『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果を発動！墓地から『エキセントリック・ボーイ』を除外して、フィールドに

留まる！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１２０００→１１０００

「『堕天神ルシファー』が相手モンスターに攻撃を行い、その破壊に失敗した場合、わたしの２ターン後のスタンバイフェイズにわたしの勝利が決定する。つまり、どれだけ耐えようともあと２ターンだ。わたしの勝利でこのデュエルは幕を閉じる…堕天使達はわたしを残して全滅し、もはや戦力と呼べるほどの力も残っていない。だが、何としてでもこの場にいる最高神共は葬ってやる…。ターンエンド」

堕天神
ＬＰ１２０００
手札×２
フィールド
堕天神ルシファー　ＡＴＫ１１０００

「僕のタァーン！」

あと２ターン…残されたときは少ないか…！

「魔法カード『エクストリーム・クリムゾン・フレア』発動！自分のライフが１００ポイント以下の時に相手に『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の攻撃力分のダメージを与え、デッキまたは除外ゾーンからチューナー３体を墓地に送る！」

『フォース・ノヴァ・フォーチュン』『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』『エキセントリック・ボーイ』が墓地に送られた。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１２０００→１５０００

「がああああああ！」

堕天神　ＬＰ１２０００→４０００

奴のライフは４０００…。でも、フィールドには攻撃力１１０００の堕天神ルシファーがいる。しかもルシファーは相手の魔法・罠・モンスター効果を受け付けない…！

「僕はこれでタァーンエンド」

ロキ
ＬＰ１
手札×１
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１５０００

「…わたしのターン。わたしは『堕天神ルシファー』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃。『堕天神ルシファー』の効果により、攻撃力を１００００ポイントダウンすることで追加攻撃できる」

「バカな！！」

「堕天断罪！！１１連打！」

堕天神ルシファーの翼から無数の鋭い羽がクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンに向かい、クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン

の炎が堕天神ルシファーに向かう。

堕天神ルシファー　ＡＴＫ１１００００→１００００
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１５０００→４０００

「わたしはこれでターンエンド。次のターンで貴様ら神々の終焉が決まる。我ら堕天使の悲願が叶う時が来るのだ…！」

堕天神
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
堕天神ルシファー　ＡＴＫ１００００

本当にこの僕のターンですべてが決まる。さっきまで攻撃力が１５０００だったクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンも今は４００ポイント。攻撃力１００００を超えるには６体のチューナーが必要だけどデッキに６体もチューナーはいない。絶望の中に消えていくのはごめんだけど、今回ばかりは無理…かな？

『ねえロキ、奇跡って信じる？』

…セレナ？

『奇跡？信じない方かな…信じて起こらなかったらガッカリ感半端じゃないだろうし』

そうか、これは３３０年前の僕の記憶。セレナは１９歳の時点で神界に来て、すでに時が止まってしまっているから変わらない。

『でも、信じて起こったときは、うれしいよ？』

『…まあ、考えておくよ』

……。

面白いじゃん。

「僕の……タァァァーーン！！！」

……！

「『究極神の加護』発動！自分フィールド上の神属性のレベル１２のシンクロモンスター１体の攻撃力をこのターンのみ相手フィールド上のモンスターすべての攻撃力分アップして、魔法・罠・モンスター効果の影響を受けなくする！！」

「なんだと！！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→１４００

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『堕天神ルシファー』を攻撃！アルティメット・クリムゾン・ソウル！！」

全身を炎に包んだクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンが堕天神ルシファーに突進し、焼き尽くした。堕天神ルシファーは、断末魔とともに灰になって消えた。

「こんなことが…わたしが今まで捨ててきた物に敗北するだと…だが最高神ロキ！わたしは信じない、絶望しか残さない絆など！！」

堕天神　ＬＰ４０００→０

堕天神はそれだけ言い残して光の粒子になって消えた。

「…信じる、信じないは個人の勝手さ」

ロキの勝利とともに堕天城が崩壊する音がする。それと同時に、地下牢の結界も解き放たれた。

ロキは大慌てで扉の前にいるトールとオーディンに呼びかけて、地下牢に向かう。

「くそ、瓦礫が邪魔だ…！」

「どけ、ロキ。サンダーパイル！」

トールがミョルニルの一撃で瓦礫を粉々に粉砕する。さらに、オーディンが上から落ちてくる瓦礫を防御する。

そして、気が遠くなるほど長い階段を下りると、そこには地下牢がいくつもあり、その１つに金髪の少女がいる。

「…セレナ」

ロキは静かにセレナを呼ぶ。

「堕天使なら帰りなさい。私に絶望を与えようと屈しはしない」

「僕はロキだ」

ロキの名を聞くと、セレナは空色の目を開き、その姿を見据える。
そして、すぐに牢屋の扉を開こうとする。ロキも外から牢屋を開こうとするが、神の金属の中でも純度が最も高い物で造られた牢屋はビクともしない。

「くそ…っ！ここまで来たのに…！！」

ロキは歯をかみしめる。トールとオーディンも、悔しそうな顔をする。
だが、そこに未だに満身創痍のディスペアが、ノルン三姉妹とともに来る。

「……わたしが開ける」

ディスペアは、わずかに残っている神力を牢屋にぶつける。わずかとはいえ、それでもオーディンやトールよりもはるかに強大な力を持つディスペアの一撃は、牢屋を吹き飛ばした。
それと同時に、ディスペアの身体から散る火花も激しくなる。

「…限界が近い。脱出するぞ」

ディスペアは、あまりしゃべることができなくなってきていた。すぐに時空転移用魔法陣を用意すると、自身を含めた全員を校長室に転移させた。

戻ってきたことを確認し、スクルドからゴッドモーメントを受け取ると、ディスペアは目をつぶり、再び自己再生モードに入った。ゴッドモーメントがあるのとないのとでは、自己再生のスピードがは

るかに違う。

「とりあえず今日は休め。話などは明日改めてすることにしよう」

オーディンがそれだけ言って、退室する。トールはあまり疲れていないが、仮眠をとることにした。

ノルンは、階段を守っている間、堕天使の残党との戦いですっかり体力を使っていて、もうベッドに入った。

――――――――――――――――――――――――――――次回に続く。

堕天城最終決戦　後編（後書き）

次回「セレナ＝ハーヴ」

４００００ユニーク記念　ドローパンで帰れま１０をやってみた　絆をぶち壊す

どうも。お試しかっ！のあれをやってみることにしました。…注意です。ほとんどのキャラが崩壊しています。特にディスペアが。スクルドを抹殺する寸前のところまで行きました。なぜそうなったのかは本編をどうぞ。

※万丈目と明日香は、ホワイト状態ではありません。

最近の出来事

クロス・ローズ・オブ・カオスを１パックかったら『デスカイザー・ドラゴン』が出ました。…いらねえええええええええ、ブラッククローズがほしかったのに。

ちなみに友人がゴールドシリーズ２０１１を２パック買って、トリシューラを当てました。ノーマルですが。

～～～購買部・午後８時～～～

「と、いうわけであつまってもらったぜ」

今日は俺がスペシャルな企画を用意した。集まったのは十代、万丈目、天上院明日香＆吹雪、三沢なんとか、ノルン三姉妹、ディスペア、トール、オーディン、ロキ、セレナ、そして俺…つまりヘイムダルだ。ちなみに順番もこの順だ。ノルン三姉妹はウルズ↓ヴェルザンディー↓スクルドだぜ。

「…なぜわたしがこんなことを…絶望しかない企画だぞ…」

「大丈夫だ、体力はＬＰで表示され、０になっても強制参加だ」

「どこら辺が大丈夫なのかわからない。この絆を破壊する機皇神以上の威力を持った山のようなドローパンからたった１０種類の、それもランキングベスト１０を当てるなど…」

「そうだ。ちなみに、引いた本人だけじゃなくて、引いた本人と同じ種類のドローパンを全員で食べるルールだぞ。ちなみに、他人が引いているときとかは、あまり大きな声でしゃべるなよ。時間も時間だからな」

「…黄金の卵パンが間違いなく1位だが、１つしか入っていないのか？」

「そんなことはない、すべて平等に２０個ずつ入ってる。あ、巻き添えくらって食べる奴は別の在庫だから」

「……」

ドローパンの種類は数えきれん。正直言って、絶対にクリア不可能だと思うのだが…

「さあ、始めるぜ。まずは十代から引いてくれ」

「おう！ドロー…甘栗パンだ」

「……」

全員が冷ややかな目を十代に向ける。
そして、トメさんが全員に甘栗パンを配る。

「……わたしの口には合わない」

「ディスペア、お残しは許されないぞ」

どこの食堂のおばちゃんだ。

「……わたしは栗系の甘いものが嫌いなんだが…」

ディスペア　ＬＰ４０００→３９００

「私は大丈夫だよ？ディスペア、食べてあげよっか？」

「…頼む、スクルド」

数分後、全員が食べ終わる。万丈目も文句を言う。

「順位は…３４位！」

「……もう１００万円のチャンスが消えてしまったではないか」

「十代、俺の引きを見ておけ！ドロー！…具なしパン…」

十代以外の全員の冷たい目線が万丈目を捉える。

「う…すまない。とりあえずカードは…」

『ツインテール』『王虎ワンフー』『Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー』『モリンフェン』『ミスト・ボディ』

「お、激レアカードじゃん」

ロキがカードについて感想を漏らす。嫌いなものがあまりないロキだからこそ、気にせずに食べられる。

だが、パン２つでも腹にたまるものはたまる。

「順位は…６７位！」

「……そもそも何種類あるんだ？」

トールが最初からあきらめた顔でヘイムダルに訊く。

「１５０種類だそうだ。最近新しい種類を増やしたってさ」

「…もういい、続けろ」

「次は私ね」

明日香が引いたのはチキンカツサンド。

「…重い」

セレナは早くも危ない。

セレナ　ＬＰ４０００→３３００
スクルド　ＬＰ４０００→３７００
トール　ＬＰ４０００→４５００

トールはスタミナ系の食べ物は逆に回復するようだ。

「順位は……２３位！！」

「ヘイムダル、貴様ランキングを裏で変えていないな？もしもそうならわたしは今ここで機皇神マシニクル∞？を召喚するぞ」

「大丈夫だ、ランキングはいじっていない。さあ続けてくれ」

「次は僕だね。愛の力でランキング入りを目指すよ。ドロー」

吹雪が引いたのは…

「…野菜サラダパン」

全員の、特にトールの鋭い目線が吹雪を刺す。

「…軽く死ね」

トールは野菜が嫌いなわけではないが、好きでもないのだ。

トール　ＬＰ４５００→３５００
ディスペア　ＬＰ３９００→３８００
十代　ＬＰ４０００→３８００
万丈目　ＬＰ４０００→３７００
三沢　ＬＰ４０００→３６００

「順位は…５１位！」

「まあ当然だろうな。次のプレイヤーは早くドローしろ」

三沢は少し深呼吸してから１つパンを引いた。

「…エビカツバーガー」

「これはいけるのではないか？」

ウルズ　ＬＰ４０００→３７００
ヴェルザンディー　ＬＰ４０００→３５００

ウルズとヴェルザンディーは油ものをあまり好まない。

「順位は…お、９位だ」

「よし、少し進んだか」

～～～現在、午後９時～～～

「次は私ね。…これでいいかしら？…ごめんなさい、アンパンよ」

「……」↑ディスペア

「ディスペア、私が食べてあげるからそんなに落ち込まなくても…」

「わたしがこの戦いで頼れるのは君だけだ…わたしを助けてくれ…」

「…何このリア充、早く爆発しろよ」↑トール

「順位は…１１位だ」

「…惜しかったな」

「さて、気を取り直して次行こう。ヴェルザンディーの姉さん、引いてくれ」

「…その呼び方やめてくれないかしら？まあいいわ…ディスペア、ごめんなさい。甘栗パンよ」

「……（２個目か）」

スクルドは苦笑いを浮かべてディスペアからアンパンを受け取る。

「さあ、次引いてくれ、スクルド」

「あ、うん……なにこれ？」

…『キャビアパン』？…きゃびあってなんだろう？

「あ…世界三大珍味だ」

三沢が自分の出番をかせ…知識を広めるために言う。

「へぇ～…僕はあまり好みじゃないかな」

「…わたしは特に問題ないな」↑オーディン

「我もだ」

「……誰か、水」↑ディスペア

「あ、はい。私の飲みかけだけど」↑スクルド

ディスペアはスクルドから水の入ったコップを受け取り、一気に飲み干した。関節キスなんて気にしない、気にしていられない。周りの連中、特にヘイムダルと万丈目が反応を見せる。十代は興味がないのか反応を見せない。

「…わたしには無理だ」

ディスペア　ＬＰ３８００→３０００

「順位は…４４位！」

「……わたしのターン！……『海鮮焼きそば』…！これが希望か！！」

ディスペアに向けて暖かい視線が贈られる。報われなさ過ぎていたが、今ようやく少しだけ報われた。

ディスペア　ＬＰ３０００↓４４００
スクルド　ＬＰ４０００↓４５００

「順位は…２１位！」

ランキングインはしなかったが、ゲテモノを引かされるよりかははるかにましだ。

「我のターン！…『イナゴの佃煮パン』だと！？」

全員が露骨に嫌な顔をする。ディスペアに至っては今にも昇天しそうだ。

「ルルル～♪」↑ディスペア、現実逃避の歌

「なんか歌ってるし。僕は別にイナゴも平気かな」

「きゅ～…」↑スクルド

スクルドはパンの中身を見たとたんに顔を青くして目を回す。お姫様はこんなものを食べたことも見たこともありません。ウルズとヴェルザンディーは仕方なさそうに食べる。十代や万丈目達も、仕方なしに平らげた。ウルズとヴェルザンディーは比較的苦手なものがないため、大抵の物はイケる。

「待て、スクルド！君がダウンしたらわたしは一体どうなるというのだ！！？」

「……ドンマイ！（ ゜∀ ゜ノノ ゛☆チャチャチャ♪」↑ロキ

ディスペアはやけになって一口かじった。一口と言っても４分の３は行ったが。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああ！！」

ディスペア　ＬＰ４４００→－１００００

「そこまで食べたんだからスクルドの分も食べてあげなよ、自分の姫だろ、助けるためなら体を張りなよ」

ロキは強引にスクルドの分もディスペアの口に放り込んだ。

「うおあああああああああああああああああああああ！！」

ディスペア　ＬＰ－１００００→－１０００００

～～～３０分後～～～

「と、トール、貴様覚えておけ…」

ディスペアはもう絶望しか残っていない目でトールを睨み、トール

は軽く目をそらした。

「だ、大丈夫!?ごめんね、ごめんね…」

スクルドが涙目でディスペアに謝り、水を渡す。ディスペアは受け取った水をとにかくすごい勢いで飲む。

「順位は…１４９位!!」

「…わたしは１５０位が気になって仕方がなくなった」

「まあ後でわかるだろう。ドロー。わたしが引いたのは『イチゴジャムパン』だ」

特に誰もよかったという顔や嫌な顔は見せない。普通ということだ。

「順位は…１４位!」

「さ、僕のターン!…『卵パン』だって」

「なんだ、普通の卵パンか」

「十代、ゲテモノが出なかっただけでも良かったじゃん」

全員難なく平らげる。

「順位は…３位!」

「まあ無難だからな」

「次は…セレナ嬢に引いてもらうか」

「じゃあ、引きますね…『きな粉もち団子パン』だそうです」

「…変わり種だが…悪くはなさそうだ」

「うん、意外とうまい」

「あ、これいいかも」

「順位は…２８位！」

「…まあ順位は気にするな、全員の腹が膨れて地獄を見るのはしばらく先だ」

「次は俺だな、ようやく俺様が引く時が来たぜ。ドロー！…『あんみつパン』」

「……だからわたしは小豆を使ったものが基本的に苦手だと……まあいい、これ以上スクルドに負担をかけるのも考え物だからな。このぐらいは自分でいただくことにしよう」↑ディスペア

「でも、意外とイケるんじゃないかしら？」

「なかなかよね」

「順位は…１０１位！」

「……まあいいだろう、次は再び十代だったはずだ」

「そうだな、ドロー！…『食用蟻の佃煮パン』…」

「！！！！！！！！！！！！！！！」↑ディスペア

「……ディスペア、ごめん…」↑スクルド

スクルドは自分の分を、ものすごく申し訳ない顔でディスペアに渡した。

その後……

「ぬあああああああああああああああああああ！！」

ディスペア　ＬＰ－１０００００００→－１０００００００

「順位は…１５０位！！」

「もう何も恐くない」↑ディスペア

「じゃあそのあとなんだっけアレ？なんかやたらと身体の長いキモい奴に食べられるんだね。キモかったかどうかは憶えてないけど。やたらとトラウマだったのは憶えてる」

「いや、例のアレは来ないだろう…このフィールドにお菓子はないしついでに言うと魔法少女もいないぞ。…あ、チーズバーガーはあるかもしれんが」↑トール

「いいから早く次行くぞ」

万丈目がパンを引く。出たのは、『？』と書かれた紙が入っているパンだった。

「お、ラッキーだな。スキップだ、次の人引いてくれ」

「なんだそれ」

万丈目は少し安心した顔になった。別にラッキーではないと思うが。

「私よ」

「……」

天上院が引いたのは何だ?何が来ようとも今のわたしは何も恐くない、未来は必ずわたしの手で開く。

「…ごめんなさい、また『イナゴの佃煮パン』よ」

「やめろおおおおぉぉおおおおおおお!!……やめて…くれ…!!」

その後、ディスペアの機嫌が悪くなったのは言うまでもない。

「今度は僕か、ドロー!『コロッケパン』だ」

「よし、よくやった天上院!ようやくまともなものが来た」↑ディスペア

「…まあ、普通だね」↑ロキ

「そうだね、コロッケだ」↑吹雪

「コロッケだな」↑万丈目

「さあ気になる順位は…7位！」

「人気なのか」

「次は俺だ、ドロー！…『エアーパン』…」

「！？」↑トール

「え、エアーパン…？」

「そうだ、何も入っていない、ハズレだ！」

「……わたしは『究極神オシリス』『究極神オベリスク』『究極神帝ラー』を！！」

「まって、お願いだからやめて！」↑スクルド

怒りが爆発したディスペアをスクルドが必死にしがみついて止める。これこそがこのゲームの真骨頂。『絆の崩壊』だ。

「…スクルドに免じて許してやる…」

「順位は…圏外！」

「死ぬがよい！」↑トール

トールがミョルニルでヘイムダルをたたく。

「いってえええええええええええええ！！」

「何が圏外だ、許さんぞ、イナゴの佃煮や蟻の佃煮よりも下の順位があるなど！！わたしは絶対に許さんぞ！！！わたしは『機皇神龍アステリスク』を召喚し、ヘイムダルにダイレクトアタック！インフィニティー・ネメシス・ストリーム！！」

「ぎゃあああああああああああああああ！！」

～～～４０分後～～～

「さ、さあ次行こう…ウルズの姉さん引いてくれ」

「あ、ごめんなさい。ちょっと考え事してたわ。…『焼きそばパン』よ」

「これは無難だな」

「うまいな」

「順位は…１０位！」

「よし、また1歩この地獄から逃れるためのピースが埋まった」

「次は私ね。…『焼き鮭パン』よ」

「また変わったものを…」

「うまそうじゃねえか、いただきまーす！」

「……」

十代、人間はそんなにたくさんの食糧が腹に入るものなのか。他の人間のメンバーはかなり辛そうな顔をしているというのに。

「順位は…８位！」

「ほう、ランクインしているのか」

これで３、７、８、９、１０位と半分埋まったことになる。

「次は私だね。…！！」

スクルドは顔が真っ青になる。そしてスクルドが軽く泣く。

「…『蟻の佃煮パン』」

「スクルドォォォォ！！！」↑ディスペア

ディスペアはどこからかアーティスを取り出した。周りのメンバーが全力で抑え込む。このままではスクルドがディスペアによって殺されかねない。

スクルドは、もうこれ以上ディスペアに迷惑をかけるわけにはいかないとディスペアの分も自分で食べる。

スクルド　ＬＰ－１００００００

「次は、わたしだ…！必ず希望を引き当てて未来を切り開いて見せ

る。わたしの…タァァァァーーーン！！……！！『黄金の卵パン』！！」

「よっしゃーー！」↑十代

「よし、ＧＪだ！」↑トール

そのほかにも全員が喜びの声を上げる。

「順位は…１位！！」

「当然だ」

だがしかし…ここからがメンバーにとっての地獄だった。

「『マンゴーパン』！４５位！」

「『メロンパン』！２３位！」

「『クリームソーダパン』！８８位！」

～～～４時間後～～～

「……ここまでおよそ５０種類、何もあたりはなしか…」

時刻はもう3時を回っている。わたしとトール以外の全員が眠そうだ。

「次はわたしだ。…『クッキーパン』だそうだ」

「…もう甘いものはいらない…」↑ロキ

「順位は…6位！」

「なぜこれが焼きそばパンよりも上なのだ…」

「女子に人気なんだよ」

だがこれで1位、3位、6位、7位、8位、9位、10位が埋まった。

「あと3種類だ。頑張るぞ。ドロー『アップルパイ』…」

「パンじゃなくてパイか。…順位は？」

「奇跡的に5位だ…卑猥な言葉しかイメージしない」

「よし！ヘイムダル、そういう連想は他でやれ。R18タグはつけたくない」↑ロキ

「なんかだんだん作者の頭がかっとビングしてきているが大丈夫か？」

「大丈夫じゃない、問題だ」

「メタ発言はやめろ、さあオーディン、頼む」

「うむ、『ホットドッグ』だ」

「来た、これで勝つる！」↑万丈目

「ああ、うまい」↑十代

「でもさすがにつらいわ」↑明日香

「順位は…4位！そしてこの形はやっぱり卑猥な…」

「死ね」↑トール

「次は僕だね。…皆ごめん、『食用Gのパン』引いた」

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」↑ディスペア

「………もうやだよ、帰りたいよ。どうしてこんな目に遭わなきゃいけないの？私は幸せな時間が欲しいだけなのに、ディスペアと一緒にいたかっただけなのに」↑スクルド

「我はそろそろ昇天するころだな、さあ、今のうちにお別れ会をしておこうか」

「わたしもそろそろ寿命が来たようだな、この世界は楽しかったぞ」↑オーディン

「私達、天界に帰っていいかしら？」↑ウルズ

「ダメよ」↑ヴェルザンディー

「……」

「なぜこの万丈目サンダーがこんなものを食べなければならんのだ！」

「ロキ、いくらなんでもひどいよ」↑セレナ

「胸キュンポイント－２０だ」↑吹雪

「……ここがＸで、Ｙ×Ｚ＝Ａになるから…」↑三沢

「さすがに食べたくねぇ…」↑十代

「兄さん、食べてくれるわよね？」↑明日香

「……謹んで遠慮…いえ、いただきます」↑吹雪

明日香が吹雪を威圧して、吹雪はあっさりと負けた。

全員　ＬＰ－１０００００００００００

「さあ、次行こう、セレナ嬢、引いてくれ」

もはや全員疲れて、途中から順番など関係なくなってきていた。ちなみに『食用Ｇのパン』は幻の１５２位だ。１５０種類だけではなく、エアーパンとこの食用Ｇのパンという２つのシークレットレパートリーが存在する。

「はい…『豪華パニーニ』です」

「普通のが来たな」

「これで少しは救われるか」

「順位は…2位！！全部埋まったぞ！！」

「ヤッターーーーーーーーー！！」↑全員

「さあ帰ろう、すぐに帰ろう」

「ああ、やっと終わったー…早く寝よう」

「X＝Y＋P…」

「こいつは放っておこう」

「ああ、疲れた、二度とこんな企画やりたくないな」

「わたしも同意見だ。絶対に参加しないぞ」

「次にわたしを誘ったら究極神の餌食にしてやるぞ」

この後、全員が疲れきった顔または怒りの顔で帰って行った。たった1人を残して。

「…H＝R＋Y×K…」

企画終了時刻：午前5時

４００００ユニーク記念　ドローパンで帰れま１０をやってみた　絆をぶち壊す

こうなりました。ゲテモノはひどいものばっかりになってしまいましたね。ランキングは一部を除いて完全に適当です。
下手をすれば今回は本当にディスペアによってスクルドが殺されるところでした。危ない危ない。

第１１７話　ジェネックス１０日目　セレナ＝ハーヴ（前書き）

ウルズとヴェルザンディーに活躍してもらいました。
あと、前半はディスペアの黒歴史公開です。
…サブタイ関係ないｗ

最近の出来事
地震が多いです。はい。
この地震を『天罰』といった例のあの方に怒りを感じている毎日です。大変な思いをしている方もいるというのに、不謹慎だと思いました。
…愚痴はここまでにしましょう。いいこともありました。それはついに三邪神デッキが強化できたことです。あとは毎回停電が中止になることです。

第117話　ジェネックス10日目　セレナ＝ハーヴ

～～～堕天城の決戦の翌日・校長室～～～

「ようやく帰ってこれたな。しかし、この学園は学年が多いのに寮の数が少なすぎる。せめてあと1つずつ造るべきだろう」

「ディスペア、最高神界に戻る必要がないだけいいと思わなくちゃ。これで戻る必要があったら、ディスペアは死んじゃうかもしれなかったんだよ？」

スクルドの底抜けの明るさとポジティブさには呆れるレベルだ。もっとも、このポジティブもディスペアがいるからこそだが。

「ねえウルズ、ディスペアなんだか暗いわね。いったいどうしたの？」

「ヴェルザンディー、ディスペアは疲れてるのよ。察してあげなさい。ディスペアは一番苦労したんだから」

牢屋の壁を吹き飛ばすために自分のボロボロの身体を酷使して神力を使用し、帰る際にも時空間の歪みを抑えるために神力を使用している。その上、神力の供給ケーブルが崩壊する寸前の状態だったのだ。

「スクルド、わたしはこの体がつぶれてもまだ最終形態が残っている。まだ1回だけ死にはしない」

「え？まだ変身できるの？」

「本当にあと1度だけだ。その1度は使うことがないようにとゼウスとオーディン、おまけにフレイヤとフリッグから厳しく言われている。なんでも、固有デッキが誰かとほとんど同じになるほか、名前も変わるらしい」

「へえ～…新しいデッキにせよ、新しい名前にせよなんだかワクワクするね！」

「どんな姿になるのかわからないからな。ただし、頭以外の身体は黒い服を着ているように見え、顔より下の部分は素肌＝服、髪と目の色が黒になるのは決定しているらしい。身体は人間の物よりもロボットの方が近い。なぜわたしの身体が毎回服＝体なのか理解できないが」

「…しかしディスペアも随分と変わったものだな」

オーディンが何やらよろしくないことを考えている顔で言った。

「そうか？」

ディスペア自身は特に自覚はない。

しかし、オーディンは次の瞬間、考えていた『よろしくないこと』を実行に移した。あくまで『ディスペアにとってよろしくないこと』だが。

強い光が辺りを包み、校長室にいた全員が巻き込まれた。

～～～ディスペアの記憶世界～～～

全員が目を覚ますと、そこは空中だった。そして、下には神界の映像が映し出されている。

「うっわあ…確かこの時って、まだ最高神界が誕生してなかったときだよね？」

「お、オーディン。君はまさか…わたしの、わたしの黒歴史を公開するつもりか！！！」

「気づかれたか」

「やめろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおお！やめて…くれ…！」

スクルドは黒歴史と聞いた瞬間に目を輝かせて下を見始める。ディスペアの過去を一部しか知らないスクルドは、ずっとディスペアの過去を知りたがっていた。

「ちなみに、まだディスペアがノルンと会っていなかった頃だ。確かこの後1か月で会うのだったな」

「な…よりにもよってこの時期の記憶…！」

確かこの時期は…まずい、特にノルン三姉妹に見られるのはまずい。

「さあ、始まるぞ」

ディスペアの必死の制止もむなしく、オーディンによるディスペア

の黒歴史公開が始まった。
まだヘルカイザーに姿が酷似しており、背も小さいころの話だ。
ディスペアが暗黒神と相打ちになって滅び、究極神と共に転生し、神界を創ったすぐ後に封印され、それが解かれたのがゼウスやオーディンがそれなりに年を取ってからだったため、オーディンやゼウスの方が年を取っているように見える。

これは、まだディスペアが最高神界を創っておらず、神界にあるゼウスの城に住んでいたころだ。

「また勝手に城を抜け出して…本当に困るのですよ？」

ゼウスは小さき日のディスペアに説教する。ディスペアは城にいるのが退屈で仕方がないと思っていたのだ。

「うるさい！オレは町で聞いたぞ。西の方に行くと、たまにこの城に来るオーディンの城があり、オーディンの城からしばらく歩くとノルン三姉妹ってーのが住んでる町に行けるんだろ！オレをノルン三姉妹に会わせろ！ものすごく可愛いっていう噂だぞ！城の中には男ばっかり、つまんねぇんだよ」

「ダ・メ・で・す！そんな場所まで出かけることは許可しません！大体男の友達だけではいけないのですか？」

「ふざけんな！毎日毎日こんな城の中でただただ座っているだけ、誰との語らいもなければ友達もいない！こんな1人ぼっちの生活なんていつまでもやってられるか！」

幼少期のディスペアは、城を飛び出してノルン三姉妹が住む町に行く。幼少期のディスペアに対して、砕けた感じで話してくれた者は

誰1人いなかった。ディスペアは、遠い街の女の子なら自分の存在を知らないはず、会いに行けば砕けた感じで話してくれるはず、と思って出かけた。

「ここが噂のノルン三姉妹がいるっていう町か！」

ディスペアはこの後、いじめられているスクルドを助けてノルン三姉妹に出会い、いったん城に帰る。もうこれを見ているディスペアは、軽く自殺衝動に駆られている。ちなみに、ノルン三姉妹はやはり最初は砕けた感じでは話してくれなかった。オーディンからすでにディスペアの存在は伝えられていたのだ。

「まったく呆れますね。で、見てきたのでしょう？どうでした？」

呆れ顔ながらも、微笑んでゼウスは幼少期のディスペアに訊く。

「やっべえ、噂以上だ。ものすごく可愛い！ちょっともう一回行って話してくる」

なんということだ、若い日のわたしは一体何をやっている？『ものすごく可愛かったからもう1度会いに行く』？

「今度は許さないぞ」

ディスペアを止めたのは、オーディンの息子であるバルドルだ。

「あ、バルドルてめえ、何しにきやがった！離せ、オレはノルン三姉妹にもう一回会うんだぁぁ！」

「…っていうのは冗談だ、俺は止めないぞ。でもな、惚れたのなら

スクルドだけはやめとけ。ドジッ子の面倒を見るのは大変だぞ」

バルドルは手を離し、ディスペアを降ろす。

「サンキューバルドル！でもドジッ子は気にしないから、オレ」

「…とまあ、これが初めてディスペアがノルン三姉妹に会いに行こうとしたときの話だ。次はスクルドとディスペアが恋人同士になって、スクルドがワルキューレとして出かけた後のことだな。わたしとしてはこの時期が一番大変だった」

ちなみになぜこの映像を持っているのかというと、ゼウスがわたしのところに送ってきたのだ。懐かしい思い出が詰まっているというメッセージと共に。

「お、オーディン。もうやめてくれ、特にスクルド達に見せるのはやめてくれ…」

わたしが今まで隠してきたことを…こうも簡単に！わたしはあとで絶対にノルンに白い目で見られる…オーディン、わたしは君の怒りに触れるようなことを何かしたのか？

だがディスペアの意思など関係なく、記憶公開は続く。このころはもうオーディンとディスペアの立場がオーディン＜ディスペアになっており、最高神界も創られていた。

「今なんといった！スクルドを悪魔討伐の戦地に向かわせただと！？貴様オレに殺されたいのか！」

ディスペアはオーディンに向かってワイングラスを投げつけ、大広間を去る。

「ふざけるな、戦地に向かわせただと！ウルズもヴェルザンディーもなぜ止めてくれなかった！オーディンの命令は絶対とでもいうのか、そんなことがあってたまるか！あのクソジジイ…おのれえええええええええええええええええええええ！スクルドは身体が弱いんだぞ、オレが今でこそ自由に行動できるように魔法をかけたというのに、それによって強いと勘違いして戦場に連れて行くなど！」

この後ディスペアは、ひたすら戦場に向かって走る。この後、神力を持って行かれたスクルドが倒れているのを発見したディスペアが怒り狂って辺りを破壊した。

「うっわあ…ディスペア、ものすごい怒ってる…僕じゃ止められないな…」

「クソジジイ…懐かしいな。ワイングラスを投げつけられたときは、大切な人と引き離されたという悲しみが伝わってきてな。あの後の罪悪感は半端なものではなかった。そのあと告げられた今の事実を聞いたときは、ディスペアには顔向けできなかった。スクルドは戦場で魔法が切れてしまい、病弱な身体から神力を持って行かれたのだからな」

オーディンは今でこそ笑って話すが、当時は本当に深刻な顔をしていた。

「うわぁあああああああああ！こんなものを映すな、どれだけわたしに恥をかかせるつもりだ！」

「ディスペアよ、恥などではないぞ」

トールは恥ではないとディスペアに静かに言った。

「これのどこが恥なのだ。自分の好きな者のために怒り、ひたすら走っただけではないか。これほど行動力のある神はお前ぐらいしかいないぞ。寧ろ、怒ったりしない方が恥だろう」

全員否定しない。

「わたしにとっては恥なのだ！」

「でも、私はうれしいよ。私なんかのために必死に走ってくれたんでしょ？」

ディスペアは何も言わなくなった。ちなみに今スクルドに何かあったら、ディスペアは確実に暴走するだろう。元々一目惚れから始まった恋が成功したのだから、スクルドを大切にするのはディスペアにとっては当たり前の話だ。ウルズとヴェルザンディーですら暴走はしない。

ディスペアが話している間にも、次の過去が映し出される。

「あ、これは結婚式前の映像…」

「オーディン、止めろ！今すぐ止めろ！頼む、この通りだ！」

ディスペアはあろうことか土下座してオーディンに頼み込む。だが、そんな努力は報われない。

「明日はいよいよ結婚式ですね。スクルド様もすでに準備し終わっているとのことです」

今日までディスペアに仕え続けている上級神がディスペアに報告する。

「一目惚れから始まったオレの今日までの行動は、間違っていなかったのか…」

毎日ノルンの家に遊びに行き、オーディンにワイングラスを投げつけ、ゼウスに怒られていたのも今はいい思い出だ。

そして、当日の映像が流れる。スクルドがこれを見て真っ赤になり、ディスペアはもう強制的に現実世界に戻ろうとしている。ウルズとヴェルザンディーは興味津々の顔で映像を見続け、ついに耐えきれなくなったのか、ディスペアはスクルドを連れて現実世界に意識を戻す。

～～～現実世界～～～

「今すぐに死にたい」

ディスペアがアーティスで切腹しようとするのをスクルドが泣きながら止める。

「お願いだから！お願いだからやめて！どうせ逝くなら私も連れてって！」

とりあえずディスペアは落ち着くとアーティスをしまう。

「お、オーディンめ…ワルキューレ後の映像までなら許せた、だがしかし、結婚式の映像は許さん」

いいだろうオーディン、貴様とフリッグの結婚式映像を神界に公開してやるわ！

…この後、ディスペアが神界全体にパニックだらけだったオーディンとフリッグの結婚式映像を流し、オーディンが土下座をして『映像を流したことを無かったことにする魔法』を使用してくれとディスペアに頼み込んでいたのはまた別の話。

～～～2時間後～～～

「…どうしてこうなった」

オーディンはスクルドにボコボコにされた。普段は絶対に人を傷つけないスクルドだが、さすがに怒ったようだ。

「お姫様にボコボコにされる北欧神話の主神…バカじゃないの？ス

クルドを怒らせたら怖いっていうのは堕天使戦でよくわかってるでしょ？」

ロキは倒れているオーディンを木の枝でつつきながら言った。スクルドの手には『１０ｔ』と書かれたハンマーが握られていた。

「あ、スクルドありがとね。おかげで告白の仕方とか、結婚式場での対応っていうものがわかったよ」

「あ、それはよかったね。役に立ったみたいでよかったよ」

それなりに仲のいいこの２人はうまくいっているようだ。ディスペアはというと…

「最終形態になるためには…究極神１体分の神力が必要になるか。仕方がない、こまめに戦って集めるとしよう」

テーブルにいろいろな魔法陣を描いて、どうしたら最終形態になれるのか研究していた。

もう校長室はお祭り騒ぎだ。ノルン三姉妹は無理やりディスペアをトランプに引き入れ、トールとロキはデュエル、オーディンはハンマーにやられて倒れている。セレナはロキのデュエルをすぐそばで見ており、アドバイスしたりしている。

「あなたたち…ジェネックス中なの、忘れてるノーネ？」

校長室に戻ってきたクロノスが、まともなツッコミを入れる。

だが、このお祭り騒ぎが止むのは１時間後の話だった。

「さて、いい加減わたしはメダルを集めないとならないのでな」

「でも、今日は世界チャンピオンがデュエルするんだよ？見ないの？」

「何！世界チャンプだと！！」

ということはついにＤ－ＨＥＲＯＢｌｏｏ－Ｄが動き出す。斎王戦のフィナーレは近い。万丈目も天上院も、十代が元に戻したか。よくやってくれた、わたしの仕事が減ったぞ。

「…ついにこの時が来たか」

斎王、どう動く？わたしの掌の上で踊り続けるがいい、人間が企てた野望などこのわたしが粉砕してやる。

チャンプのデュエルはやはり途中で向こうの中継カメラが壊れ、放送はできない状況になった。

「こんな時のための『神の鏡』だ」

会場内の映像が見える。炎に包まれ、逃げ遅れた人たちの亡骸なども映し出される。ノルンはそれを見て絶句する。

「ノルンよ、人間界は決していいことだけではない。わたしはスクルドを連れずに１人で人間界に降りたとき、人間の何たるかを教わった。彼ら人間は決して絶望しても希望を捨てない。だからそんな悲惨なことが起きても必ず、どれ程の時がかかろうとも心の傷に負けずに希望を勝ち取る。

オーディンよ、神力はどれ程たまっている？」

「すまない、せいぜい星界の三極神程度だ。これでは最終形態には間に合わない」

「いや、斎王との決戦までは少しだけ時間がある。その間に神力のチャージを終える。わたしの最終形態は斎王戦で解放する」

ディスペアはすぐにデュエルアカデミアの外に向かう。そして、片っ端からホワイト生徒を倒していく。神の本気と人間の本気では比べ物にならない。

「あ～あ…ヘル、ヨルムンガンド、フェンリルがいればあっという間に溜まるのにな…」

「仕方がないだろう、未だに彼らはグレイプニルにしばりつけられ封印されているのだから」

そのカギを知るのはノルン三姉妹だ。そして、ノルンから聞き出したところすべてのカギはディスペアが所持している。いつか時が来ればロキに渡すと言っていたな。オーディンは永遠に封印しておくべきだというが、すべてはディスペアの意思で決まる。ディスペアほど気まぐれな神もいない、ひょんなことから封印を解除する日も来るかもしれん。

「そういえば、最終形態の固有デッキは誰かのとそっくりになるって聞いてるんだけどさ、今のところだと誰？」

ロキはオーディンに訊く。それなりに気にしているようだ。

「現段階ではわたし達全員の中でも最高クラスに強力な『Ｘ－セイ

バー』だな。もっとも、トールの物とは比べ物にならないくらい究極神が召喚しやすい仕様にはなるだろうが」

「へえ、トールのは『ダークネス・ウィング・ドラゴン』が召喚しやすいようになってるからね。それはそれでまた別のデッキってことか」

「そういうことだ。ところで、ノルン三姉妹を知らないか？少し目を離した隙にどこかに行ってしまったようだ…」

「彼女たちなら放っておいても大丈夫でしょ」

～～～ノルンサイド・デュエル場～～～

「迂闊でしたわ。まさかちょっと歩いているうちに囲まれるなんて…」

「万条目達が抜けても光の結社自体は止まったわけじゃないからね…私達のミスかな」

「まったくついてないわ。ロキがいれば強運だから問題はなかったのでしょうけど。まあいいわ、暇だったし相手をしてあげるわ」

ウルズもヴェルザンディーもすでに戦闘態勢に入っている。

「ウルズ、ヴェルザンディー。戦わなくても大丈夫だよ」

「「え？」」

次の瞬間、周りの時間が停止した。

「時の女神の悪戯。ちょっとやってみたかったんだ♪」

「よくやるわね。妹なのに怖いわ」

「スクルド、あなた女神というより魔女よ」

「ひっどーい…まあいいや、時間が動き出す前に逃げるよ」

言葉ではこうして落ち着いているが、実際のところかなり急いでいる。時間停止魔法はその有効時間がきわめて短い。

「あんまり無理をしてはいけませんわよスクルド。もう疲れているのでしょう？」

「そうよ、たまには甘えなさい」

スクルドを見ると、かなり疲れた様子で走っている。時間を操るとはそういうことだ。神力の消費量が他の系統の魔法と比べても大きいため、連発できる神は少ない。

「だ、大丈夫。元から走るのはそんなに得意じゃないだけだよ」

元気に走れ回れる小さいときに、もっと走っておけばよかったかな。まさかこんなに疲れちゃう身体になるなんてあの時は未来を見てもわからなかった。走っておけば、もう少しぐらい体力はあったかもしれないのに。

「ノルン三姉妹、わたしが助けようか？返事は求めていないが」

「「「！」」」

いつの間にかいたのはディスペア。そして次の瞬間には、スクルドはもうディスペアに抱えられていた。

「わたしの姫は思った以上に強情のようだ。悪いが、多少強引に抱かせてもらう」

「妬けるわね」

「そんなこと言ってないで、行きますわよ。それなら自分の彼氏を作りなさい」

「まさか、作るならディスペアみたいな人じゃないと嫌ね。恋人を置いて恐怖から逃げる腑抜けに要はないわよ？」

「アハハハ…ウルズは随分と厳しめだね」

「…3人とも、いいか？逃げられるのはここまでのようだ」

目の前には、白い影がある。

「人間ではない、光の一部そのものと考えた方がいいだろう」

「ディスペア。ここは私達に任せてください」

ウルズとヴェルザンディーは、自分から杖を構えた。そして、杖に向かって念ずると４０枚のカードがバラバラになってそれぞれの杖

の宝玉に取り込まれた。

「この世界ではこの世界の戦い方がある。それなら、その戦い方で立ちはだかる敵を倒すのみです」

「何！」

「あなたはスクルドをお願い。かわいい妹を頼むわよ」

「待て、それならばわたしも戦う」

スクルドを簡単な眠り魔法で浅い眠りにつかせて肩に乗せ、ゴッドモーメントを展開する。

「2よりも3人の方が早く済む。行くぞ、ウルズ、ヴェルザンディー！」

「「…了解！」」

「先攻はわたしだ。わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。そして永続魔法『機皇連召』を発動。わたしのモンスターがカード効果で破壊された時、デッキまたは手札より『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』いずれか1体を特殊召喚し破壊する。永続魔法『機皇連召』は相手のカード効果では無効にならず、フィールドを離れない。ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド

機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇連召

「私のターンですわね」

カードが5枚ヴェルザンディーの前に浮かび、杖の中から新たに1枚出てきた。見ている限り手などが疲れずに便利そうだ。

「私は手札からレベル2の『ゾンビキャリア』を捨てて手札から『パワー・ジャイアン』を特殊召喚するわ。『パワー・ジャイアント』のレベルは6から4に変更。手札からチューナーモンスター『トラスト・ガーディアン』を召喚。レベル4の『パワー・ジャイアント』にレベル3の『トラスト・ガーディアン』をチューニング。シンクロ召喚、『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』。守備表示です。カードを3枚伏せてターンエンド」

ヴェルザンディーは空中にカードを伏せる。すると、カードはそのまま消えてしまった。発動時には出現するようだ。モンスターを召喚した時は、空中にカードを置いていた。ディスクが必要ないのは便利だな。

ヴェルザンディー
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
エンシェント・フェアリー・ドラゴン　ＤＥＦ３０００
伏せカード×３

「私のターンね。『融合』を発動。手札の2体の『ギガプラント』を融合して『超合魔獣ラプテノス』を融合召喚。そして『炎妖蝶ウ

ィルプス』を召喚するわ。ラプテノスの効果によってデュアル召喚済みの状態になっているウィルプスを生贄に、墓地から『ギガプラント』を特殊召喚。そして、たった今召喚した『ギガプラント』の効果で墓地から『ギガプラント』を復活して、復活した『ギガプラント』の効果で手札からチューナーモンスター『プチトマボー』を特殊召喚。レベル6のデュアルモンスター『ギガプラント』にレベル2の『プチトマボー』をチューニング。シンクロ召喚『ブラック・ブルドラゴ』」

「ウルズの切り札よ。ディスペア、あなたでもウルズに簡単に勝てるとは思えないくらいにウルズは強いわ」

「知っている。植物軸デュアル。その実力はオーディンの『Ｓｉｎ』に匹敵するらしいな」

「カードを2枚伏せてターンエンドよ」

ウルズ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
ブラック・ブルドラゴ　ＡＴＫ３０００
超合魔獣ラプテノス　ＡＴＫ２２００
ギガプラント　ＡＴＫ２４００
伏せカード×２

「…我のターン。我は魔法カード『ブラック・ホール』を発動、フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

「来ると思っていたわ。カウンタートラップ『魔宮の賄賂』。さあ、

1枚ドローしなさい」

ウルズのカウンタートラップによってブラック・ホールが無効になった代わりに、光は浮いているカードの枚数を1枚増やした。

「我は手札を1枚捨て魔法カード『種族混同』発動。このターン、フィールド上のモンスターをすべて機械族にする。『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚する」

「今度は私ですわね。トラップカード『奈落の落とし穴』。攻撃力1500以上のモンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚時に発動し、そのモンスターを破壊してゲームから除外します。残念でしたね」

「ならば我は『死者蘇生』を発動する」

「カウンタートラップ『神の宣告』。私のライフ半分を対価に、『死者蘇生』を無効にして破壊するわ」

ウルズ　LP4000→2000

「我は『光の援軍』を発動する」

「カウンタートラップ『魔宮の賄賂』。ウルズが使ったから私も使用させていただきます」

「むうう…」

これで光の手札は…残り2枚。

「ターンエンド」

光
ＬＰ１２０００
手札×２
フィールド
なし

「わたしのターン。わたしは『機皇兵スキエル・アイン』を召喚。２体の機皇兵でダイレクトアタック。クォーク・カーブ、ツイン・パルス！」

ワイゼル・アインがレーザーでできている剣で、スキエル・アインが無数の弾丸を飛ばして攻撃する。

「むう…」

光　ＬＰ１２０００→９０００

「魔法カード『機皇帝の賜与』。２枚ドローする。カードを１枚伏せ、ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００
機皇連召
伏せカード×１

「私のターンですわね。私はこのカードを伏せてターンエンドです」

ヴェルザンディー
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
エンシェント・フェアリー・ドラゴン　ＤＥＦ３０００
伏せカード×２

「随分と短いわね。することがないとはいえ、もう少し考えるふりでもしてあげたら？この光が可哀そうよ…私はそんなこと微塵にも思っていないけれど。私のターンね。『ギガプラント』の効果で墓地から『ギガプラント』を特殊召喚。『超合魔獣ラプテノス』『ブラック・ブルドラゴ』『ギガプラント』２体でダイレクトアタックよ。あなたごときでは私の相手にはならないということを教えてあげるわ」

「そうはさせん、手札より『バトルフェーダー』を特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる」

鐘の音が聞こえ、モンスターたちは攻撃をやめる。ウルズは少しだけ表情を厳しいものに変える。

「魔法カード『ハイレベル・ドロー』。私のフィールド上にレベル５以上のモンスターが４体以上いるときに発動。デッキからカードを２枚ドローするわ。カードを２枚伏せてターンエンドよ」

ウルズ
ＬＰ２０００
手札×０

フィールド
ブラック・ブルドラゴ　ＡＴＫ３０００
超合魔獣ラプテノス　ＡＴＫ２２００
ギガプラント×２　ＡＴＫ２４００
伏せカード×２

「我のターン」

コイツら…なぜ我が苦戦しているのだ。我は破滅の光、すべての存在に破滅をもたらすもの。なぜその我に破滅が訪れようとしている？

「我はデッキの上からカードを５枚除外し、レベル１２の『ロスト・エンペラー』を特殊召喚する」

中世ヨーロッパの貴族の服を着た、いかにも王たる風格を漂わせる人型のモンスターが出現した。

ロスト・エンペラー　ＡＴＫ４０００

「攻撃力４０００か。その上カード効果では破壊されない。厄介だな」

これは少しまずいな。わたしには何も対抗策がない。せめてスクルドだけでも攻撃範囲から逃がしてやらなければ…！

「『ロスト・エンペラー』でディスペアの『機皇兵スキエル・アイン』を攻撃。ロスト・ストーム」

ディスペアは衝撃に備え、自分の防御手段をすべてスクルドに使う。

「そうはいかないわよ。ディスペアはやらせないわ、ディスペアがいなくなったらスクルドが悲しむもの。トラップ発動『次元幽閉』。相手の攻撃宣言時に発動し、攻撃モンスター1体を除外するわ」

悲しむのはスクルドだけじゃないわ。私達もそうだし、オーディン様たちもね。

「ウルズ…」

「ディスペア、死を恐れる必要はないわよ。私達運命を司るノルンがついているのよ？」

「…すまない、助かった」

ウルズはディスペアなりの礼の返し方に、微笑んで答える。

「我は破滅の光…欠片とはいえこいつらを光の無に帰するだけの力はあるはず、なのになぜ苦戦している…？」

光
ＬＰ９０００
手札×１
フィールド
バトルフェーダー　ＤＥＦ０

「わたしのターン。わたしは『機皇兵スキエル・アイン』に、『機皇兵ワイゼル・アイン』の効果による貫通能力を持たせて守備力０の『バトルフェーダー』を攻撃する。ツイン・パルス」

「ぬおおおおおおお！」

光　ＬＰ９０００→７８００

「『機皇兵ワイゼル・アイン』でダイレクトアタック、クォーク・カーブ」

「おのれ…だが３０００以上のダメージを受けたことで我は手札から『ライトニング・ルイン』を特殊召喚する…」

カードから光があふれ、人型の白いモンスターが現れた。全身が白いエネルギーでできている。

光　ＬＰ７８００→６０００
ライトニング・ルイン　ＡＴＫ３０００

「このカードの効果により、特殊召喚成功時に我はカードを５枚ドロー」

「なんだと！」

奴の手札は０から一気に５枚に…！

「すまない、わたしが不用意な攻撃をしなければ…」

「いいえ、これでＯＫよ。トラップカード『逆転の名札』。このカードの効果で、相手がドローフェイズのドロー以外の方法でカードを手札に加えたとき、相手の手札枚数と自分の手札枚数が同じになるようにドローする。私の手札は０だから、５枚ドローさせてもらうわ」

ウルズは相手の効果によるドローも利用して自分の手札を増やす。ウルズの戦い方はオールラウンダー、どんな状況でも適切な判断を下して戦う。ヴェルザンディーは、基本的に守りの戦法。そしてスクルドは新しい力で非常に攻撃的なデュエルをする。この３人がタッグを組めば、おそらくディスペアが相手でも互角に戦えるといわれている。実際には強力な切り札がある分、ディスペアの方が強いが。

「わたしは魔法カード『機皇召集』を発動、デッキから『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚する！ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００
機皇連召
伏せカード×１

「私のターンですわね」

さすがはディスペア。失敗しても、必ず保険の手を残してある。相手にすれば絶対に勝てない相手ですが、味方になると頼もしいですわね。

「私は『エンシェント・バーン』を発動。相手に２１００ポイントのダメージを与えます」

「ぬううううう！」

光　ＬＰ６０００→３９００

「ならば我は『ライトニング・ルイン』のモンスター効果を発動。相手ターンに１度、手札を１枚除外することでライフを３０００回復する」

光　ＬＰ３９００→６９００

「！またしてもわたしの攻撃が原因で…！！」

わたしが攻撃しなければあのモンスターは出てこなかった。今更後悔しても遅いが…。

「違いますわ。ディスペアのせいではありません！」

「そうよ。あなたがどこで失敗したの？全部あいつが勝手にやったことよ、ディスペアの失敗じゃないわ」

「さあ続きです。…といっても私にやることはありませんが。ターンエンド」

ヴェルザンディー
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
エンシェント・フェアリー・ドラゴン　ＤＥＦ３０００
伏せカード×２

「私のターンね」

さっそくあいつは手札を1枚除外して3000ポイントライフを回復した。早く片付けないと、面倒なことになるわね。でもあのモンスターは破壊することはできない…。ディスペアもやっぱりミスを気にしているようだし、早く決着をつけないとまずいわ。

光　LP6900→9900

「私は魔法カード『デュアル・フェイク』を発動。デュアルモンスターが存在する時、墓地からトラップカードを1枚手札に加える。私が加えるのは『次元幽閉』よ。カードを1枚伏せるわ。あなたのおかげで私の手札はあと5枚。これだけあれば、あなたを倒すには十分よ」

光はやってみろと言わんばかりに自らの輝きを増大させる。スクルドやヴェルザンディーのためにも負けられない。ディスペアもついてくれてる。私は、1人で戦っているわけじゃない。

「ディスペア、行けるわね？」

「…当然」

「魔法カード『ブラック・ホール』！フィールド上のモンスターをすべて破壊する」

「トラップ発動、『フェアリーウォール』。『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』の破壊または除外を無効にします」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンとライトニング・ルイン以外

のすべてのモンスターが破壊される。

「『ブラック・ブルドラゴ』のモンスター効果で『ギガプラント』をデュアル召喚状態で特殊召喚するわ」

「『機皇連召』効果発動。デッキから『グランド・コア』を特殊召喚し、破壊する。『グランド・コア』がカード効果で破壊された時、デッキ・手札・墓地からレベル1の『機皇帝グランエル∞』『グランエルT』『グランエルA』『グランエルG』『グランエルC』を特殊召喚する、合体しろ、機皇帝グランエル！！」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ０↓４０００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００

「機皇帝だと？そんなモンスター我は知らないぞ…」

光は自分の記憶にないモンスターを見て焦る。機皇神マシニクル∞？の時にあせらなかったのは何かしら対抗策があった上に、５体のモンスターで完成するモンスターという未知のモンスターではなかったから。しかし、グランエルのパーツの効果を知らない以上何が起こるかわからないため、落ち着いていられないのだ。

「『ギガプラント』のモンスター効果発動。墓地から『ギガプラント』を特殊召喚して装備魔法『スーペルヴィス』を装備。これでデュアル召喚した状態にするわ。そして『ギガプラント』の効果で墓地の『プチトマボー』を特殊召喚。
レベル６の『スーペルヴィス』を装備した『ギガプラント』にレベ

ル2の『プチトマボー』をチューニング。シンクロ召喚、来なさい、『ブラック・ブルドラゴ』！！墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果によって墓地の『ギガプラント』を特殊召喚して、デュアル召喚。その効果で墓地の『炎妖蝶ウィルプス』を特殊召喚。ターンエンドよ」

ウルズ
ＬＰ２０００
手札×３
フィールド
ブラック・ブルドラゴ　ＡＴＫ３０００
ギガプラント×２　ＡＴＫ２４００
炎妖蝶ウィルプス　ＡＴＫ１５００

「我のターン。『ライトニング・ルイン』で『炎妖蝶ウィルプス』を攻撃。破滅の意思を食らえ！」

光の光線がウィルプスを貫き、ウルズを狙う。しかしディスペアがアーティスでそれを弾いた。

ウルズ　ＬＰ２０００→５００

「あ、ありがとう…今のは危なかったわ」

「怪我はないな？お前に怪我をさせればスクルドに顔向けできないのでな」

「ターンエンド」

光は空気を読まずに輝きを増しながらすかさず言葉を入れる。

光
ＬＰ９９００
手札×４
フィールド
ライトニング・ルイン　ＡＴＫ３０００

「わたしのターン！」

やはり手札を除外して３０００ポイントのライフを回復した。これで奴のライフは１２９００ポイント。始まりのライフを上回った。
だが、ライフがどれだけあろうとも無駄なこともある。
このターンでとどめを刺せるわけではないが、十分だろう。

「装備トラップ『インフィニティ・チェンジ』。『機皇帝グランエル∞』に装備し、シンクロモンスターの代わりに効果モンスターを吸収する。わたしは『ライトニング・ルイン』を『機皇帝グランエル∞』に装備させる」

機皇帝グランエルの胸部から無数の光の糸が発射され、ライトニング・ルインを捕獲し、胸部に引き入れた。

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ４０００→７０００

「『機皇帝グランエル∞』でダイレクトアタック、グランド・スローター・キャノン！！」

「グボアアアアアアアアア！」

光　ＬＰ１２９００→５９００

「ターンエンド」

ディスペア
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ７０００
＋インフィニティ・チェンジ
＋ライトニング・ルイン
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００
機皇連召

「私のターンですわね。私はカウンタートラップ『フェアリー・ブレス』を発動。このターンのみ、『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』の守備力を３０００ポイントアップして６０００にします。そして、魔法カード『フェアリー・フォース』。『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』の守備力分、『ブラック・ブルドラゴ』の攻撃力をアップしますわ」

ブラック・ブルドラゴ　ＡＴＫ３０００→９０００

「さ、あとはウルズに任せます。ターンエンド」

ヴェルザンディー
ＬＰ４０００
手札×０

フィールド
エンシェント・フェアリー・ドラゴン　ＤＥＦ３０００

「私のターン。ヴェルザンディーの力も加わったこの一撃、受けきれるものなら受け切ってみなさい。『ブラック・ブルドラゴ』でダイレクトアタック！」

「おおお……おお…！我は所詮欠片、次は必ず貴様らを光の餌食に…ぬわあああああああああ！」

光　ＬＰ５９００→３１００

「……まったく、これで少しは余裕ができたかしら？」

光の欠片を倒したことで、さっきの生徒は洗脳が解除されたみたいだし。人数が多すぎてある程度は欠片を分散させて操っているのね。…スクルドも目覚めたみたいだから、校長室に戻りましょうか。

「あれ？私、どうして…」

「君はずっとわたしの腕の中で寝ていただけだ。まあ、眠りの魔法をかけたのは悪かった。君の体力を考えればこうするしかなかったのだ」

スクルドは笑って気にしていないという。

「この仲の良すぎる夫婦は喧嘩をしたことがないのかしら？」

「さあ、無いんじゃない？」

ウルズとヴェルザンディーは、戦いの後でも調子を崩さずに話していた。

ここから先が斎王戦のクライマックスだとわかっていても。

――――――――――――――――――――――――次回に続く。

第１１７話　ジェネックス１０日目　セレナ＝ハーヴ（後書き）

結構長くなりましたね。この長さの割には満足できるレベルの文章が書けたと思います。…それを決めるのは読者の皆さんですが。

さあ、バリバリ伏線を張ってしまった…頑張って回収するぞ！

第１１８話　ジェネックス１１日目　口は災いの元（前書き）

今回の見どころ『ヘイムダル』『屋根裏部屋』『機嫌の悪いディスペア』

最近の出来事

…一度も停電が来ません。何度も中止になります。そのたびにパソコンを切り、立ち上げ、スリープ状態にする…翻弄されていますねｗ

第118話　ジェネックス11日目　口は災いの元

やはりスクルドはいつも通りの時間に起きてくる。…時間はお世辞にも早いとは言えないが。すでに人間界単位で午前10時。起きる順番はスクルドが3番目に早く、最後はウルズだ。わたしとトールがずっと起きているため、1位と2位らしい。ちなみに起こせばしっかりとおきるので問題ない。

「…あ、おはよー、ディスペア。今日は…雨か…」

スクルドは寂しそうに言った。雨の日はあまり好きではないらしい。

「……ああ。……スクルド。今日くらい、ずっと一緒にいないか」

「いいよ！」

スクルドは笑顔で言う。

「……ありがとう」

～～～回想～～～

「ディスペア、最近見ていて思ったんだけどさ、気づかないの？」

「何にだ？」

「スクルドがものすごく寂しがってるの。キッヒャッヒャッヒャ、僕の勘違いだとは思えないんだ。普段は見えないけど、ディスペアがいないとき、時々一瞬だけ悲しい表情になってるんだ。だから僕から頼みたい。明日はスクルドと一緒にいてやってくれよ。神力は僕が集めとくからさ。もちろん、オーディン達にも僕から話しておくよ」

「…そうだったのか。わかった」

「ただし、ネガティブな話は絶対にしちゃダメだ。わかった？」

「……ああ」

～～～回想終了～～～

…オーディン達は寝ているのではない。もうどこかに出かけてしまっただけだ。つまり、今この部屋にいるのはわたしとスクルドだけとなる。……暇だ。

「……スクルド。君に新しい靴を用意した…履いてみてくれないか？」

ディスペアはどこからともなくきれいな箱を取り出す。

「これを私に？」

「…開けてみてほしい」

スクルドはゆっくりと箱を開けた。中には、人間界ではお目にかかれないであろうほどにきれいな水色の靴が用意されていた。スクルドの靴がだんだんボロボロになっていくのを見かねたディスペアが、自分の城にあった材料を使っていつの間にか作っていたものだ。

「ありがとう！」

子どものようにうれしそうにスクルドは靴を履いてみる。ディスペアはそれを満足気な表情で見ていた。

「（わたしとしては出来がよくなかったから、喜んでもらえて何よりだ）」

どこがよくないのかわからないくらいよく作りこまれている。作業時間４８時間。一休もせずに作ったようだ。

「失礼しまーす」

校長室に入ってきたのは十代達だ。ディスペアはスクルドと一緒にいたかったために良い顔はしない。

「あ、ディスペア！デュエルしようぜ！」

「…すまない、今日はスクルドと一緒に過ごすと決めた」

それにアブソルートＺＥＲＯに勝てる気がしない。いかにわたしが最強と呼ばれようが、主人公補正に勝てるかどうかは怪しい。封じればいいだけの問題だが。

「ふ～ん…本当に仲良いよな、二人とも。クロノス先生は？」

「…今日は見ないな。どこかに出かけているようだ」

ディスペアはクロノスがどこに行ったのか本当に知らない。

～～～屋根裏部屋～～～

「あ～、どうして2人きりになると誰かくるんだよ！」

何とロキ達は、屋根裏部屋で様子を見ていた。トールとオーディン、ロキが時間を決めて交代で神力を集めに行っており、その間に確認している。何かあれば、直接手を加えることはせずに、遠回しにトラブルを排除する。

「仕方ないわよ。ここは学園、生徒が校長室に入ってくることなんて何も不思議なことじゃないわ」

「それにしても、屋根裏部屋なんて思いつくのはロキぐらいですわよ？もう少しいい場所はなかったのですか？」

デュエルアカデミアの屋根裏部屋はなぜか掃除が行き届いており、かなりきれいだ。

「ごめん、無かった」

こんなやり取りが行われていたが、ディスペア達は気付かなかった。この構図を何も知らない人が見れば、悪の組織が暗い場所で何やら作戦を立てている様子にしか見えないだろう。

～～～～～～～～～

「しかし2人だけというのも暇なものだな」

特にやりたいこともない。靴を喜んでくれたのはいいが、それでは暇つぶしにならない。

「う～ん…ねえ、ちょっと校舎内を歩かない？」

スクルドはもらった靴を履いてさっきから楽しそうに踊っていたが、一応終わったらしく、今度は歩きたいと思っているようだ。

「その靴で踊って疲れないのか？」

「大丈夫だよ。前の靴の方が疲れちゃってたかな？アハハ…」

「やれやれだな…」

周りの人が見ればこのやり取りは全然夫婦などではなく、仲のいい親友か恋人のやり取りだ。もっとも、この2人は昔から変わらないだけだが。

廊下を歩いていたディスペア達の前に、やはりしつこいというべきかホワイト生徒が現れる。

「ディスペア、たまには私にやらせてくれない？」

「む、君がやるのか？わたしは構わないが…」

「たまにはいいとこ見せたいんだ」

杖を構えると、スクルドの髪がふわりと舞った。デュエルスタートの合図のようだ。

今回はスクルドも、デッキを杖の中に収納し、手札やフィールドのカードは浮かせてデュエルするようだ。ある程度レベルが上がればこういったことができるようになり、余計に疲れることはなくなる。つまり、スクルドも確実にレベルアップしているということだ。

「先攻は私がもらうね。『ロードポイズン』を守備表示で召喚して、ターンエンド」

スクルド
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
ロードポイズン　ＤＥＦ１０００

「俺のターン。ドロー、俺は『レッド・サイクロプス』を攻撃表示で召喚。『ロードポイズン』を攻撃だ！」

ホワイト生徒はカードが浮いていることには驚かずにデュエルを続ける。

「ターンエンド」

ホワイト生徒
ＬＰ４０００
手札×５

フィールド
レッド・サイクロプス　ＡＴＫ１８００

「私のターン…私は『夜薔薇の騎士』を召喚。このカードの効果で手札から『キラー・トマト』を特殊召喚するね。レベル４の『キラー・トマト』にレベル３の『夜薔薇の騎士』をチューニング。シンクロ召喚『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力は２４００と心許ないが、効果は強力だ。

「ディスペアとの時間を無駄にしたくないから、ごめんね！『二重召喚』を発動して手札から『フォーチュン・ローズ』を特殊召喚。その効果で手札から『エボリューション・ローズ』を特殊召喚して１枚ドロー！レベル７の『ブラック・ローズ・ドラゴン』にレベル４の『フォーチュン・ローズ』とレベル１の『エボリューション・ローズ』をダブルチューニング！シンクロ召喚、『エターナル・ローズ・ドラゴン』！！」

校舎の窓を見ると、外には黄金の薔薇の竜が光臨していた。

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』で『レッド・サイクロプス』を攻撃！エターナル・ローズ・ストリーム！」

無数の薔薇の花びらが、レッド・サイクロプスを恐ろしい勢いで襲う。

「ちっ…」

ホワイト生徒　ＬＰ４０００→１８００

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果、相手モンスターを破壊した時、『エターナル・ローズ・ドラゴン』の攻撃力分…つまり４０００のダメージを与える！エターナル・フレア・ストリーム！」

今度はエターナル・ローズ・ドラゴンが炎を吐き、直接生徒を焼き尽くす。

「うあああああああ！」

ホワイト生徒　ＬＰ１８００→－２２００

「さすがは４０００ダメージ…わたしは『時械神サンダイオン』を思い出したぞ…」

『時械神サンダイオン』※多少効果変更
レベル１０　光属性天使族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
自分フィールド上にモンスターが存在しない時、このカードは生贄なしで召喚することができる。この効果によって召喚したこのカードの攻撃力と守備力は０になる。このカードは戦闘・カード効果では破壊されず、このカードによって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが戦闘を行ったダメージ計算後、相手プレイヤーに４０００ポイントのダメージを与える。自分のスタンバイフェイズにこのカードはデッキに戻る。

「時械神って確かオーディン様が…」

「これ以上は言わなくていい。今日くらい戦いのことは忘れろ」

ディスペアはスクルドの言葉を遮り歩き出す。スクルドは置いて行かれるわけにもいかないので話をやめて一緒に歩き出した。

「やあ、2人とも。偶然この世界に来たものだから君たちに会いに来たよ」

なんというタイミング。ヘイムダルが会いに来た。これを見ているロキはさぞ拳を握り締めているだろう。

「…久しぶりだな、何の用だ？」

「何、お熱い2人にこれをプレゼントしようと思ってね」

ヘイムダルはどこからか花束を取り出した。値札に『１００００００』と書かれている。わたしがそれを受け取ると、ヘイムダルはすぐにどこかに転移してしまった。

「本当にプレゼントをしに来ただけか…」

「いいところあるね！ちょっと見直したよ」

スクルドは機嫌がよくなったようだ。わたしにとってはありがたい話だ、ヘイムダルＧＪ。
まあ、それよりもロキ達がどこで神力回収をしているのか知りたいが。

「さて、どうしたものか…スクルド、ちょっと失礼」

「へ？」

ディスペアはいきなりスクルドを抱いてドミノ町に転移した。
ロキ達は当然慌てる。急いでネットワークに回して、ドミノ町の様子をモニタリングする。

～～～ドミノ町～～～

「スクルド、ロキから良いパフェの店があると聞いている。少し行ってみないか？確かゴールデンデリシャスパフェというものがあって…」

「ごーるでんでりしゃすぱふぇ？…カロリー高そうな名前だね」

話しているうちに店の前についた。

「…君はカロリーなど気にしないだろう？…とりあえず入るとしよう」

ディスペアはロキから渡された無数のデートについての条件が書かれた『デートのお約束ブック』の中身を思い出し、スクルドの手を引っ張って店に入った。普段は絶対にしないことをしたディスペアに対し、スクルドは一体何があったのかと心配する。

「ディスペア、何か変なもの食べたの？」

「…なぜ？」

「だって、一度も手を引いてくれたことなんてなかったから。突然

してくれなかったことをしてくれるようになるってことは、その人に何かが起きたか変なものを食べた時だってフリッグ様が…」

「……」

ロキ、わたしの頭がおかしいことになっているじゃないか…そしてフリッグ、貴様スクルドになんということを教え込んだのだ。

ディスペアはすぐに手を離した。これ以上変なものを食べたとは思われたくない。しかし、手を離されたスクルドは今の言葉を言わなければよかったと深く後悔した。

「……」

店の中に座ると、この2人の間に沈黙が生まれる。地味に機嫌が悪いディスペアに、スクルドが話しかけれない状態だ。

「あ、あ…」

スクルドは何とかディスペアに話しかけようとするが、恐ろしいプレッシャーにあてられてとても話しかけられない。しかし、ディスペア自身はあの後すぐに機嫌を直し、じっとスクルドが何か頼むのを待っているだけなのだが。

「す、すいませーん…」

「はい、何でしょうか?」

「ゴールデンデリシャスパフェ?っていうのを1つください」

うぅ…勝手に2つも頼んだら怒られちゃうかも…いつもなら気にしないのに。

「はい、かしこまりました」

「……」

ディスペアはじっと目をつぶって黙っている。

～～～屋根裏部屋～～～

「…僕の計画が丸つぶれだよ。フリッグ、お前のせいだ…」

せっかくトールやオーディンまで協力してくれたのに。ヘイムダルまで、稀にしか見ないいい働きをしてくれたのに。それがフリッグのせいで…フリッグのせいで…。

「ロキ、フリッグにはあとでわたしからきつく言っておく。だから今はおとなしく見守ってやってくれ」

「でも！ディスペアもスクルドも全然上手くいっていないじゃないか！スクルドから見たらディスペアは絶対に機嫌が悪そうにしか見えていないよ！」

「…むぅ…昔からウルズとヴェルザンディーはよくわたしの言うことを聞いてくれたが、スクルドだけはディスペアと共に遊び続けた分、わたしの言うことを聞かずにディスペアの言うことだけを聞いているからな…機嫌の取り方はスクルド自身に任せよう」

「なんて無責任な…そんなことより神力は？」

ロキが質問すると、オーディンはビンを取り出した。

「これがあと１０個分で終わりだ。今、トールが９０個目を埋めたところだからな」

～～～喫茶店～～～

「……」

ディスペアは突然目を開けた。さっきから何度も頭の中で再生するスクルドの言ったフリッグの言葉を思い出すたびに若干機嫌が悪くなる。

「いるのだろう、ヘイムダル？」

すぐにディスペアのいる席のすぐ横に店員に気付かれないようにヘイムダルが現れる。

「ま、俺は神話上じゃ神々のお目付け役だからな」

「貴様は北欧の神だけ見張っていればいいだろう、わたしを見張る必要はどこにもない」

やはりどことなくご機嫌斜めにディスペアはヘイムダルを追い返そうとする。

「まあそう冷たくするなよ（スクルドが悲しそうだぜ？）」

ヘイムダルはスクルドに聞こえないようにディスペアに告げる。

「……もう一度言う、帰れ（そうか、すまないな。でもやっぱり君は帰れ）」

「ま、俺は食べ終わったからいいんだけどな（あ、やっぱり？パフェおごってくれないのか）」

ヘイムダルはこの段階で既に帰ろうとしている。

「（君に今おごるパフェなどない。今度何か送ってやるから今は帰れ）」

「（あいよ）」

「……スクルド」

「な、なに！？」

こ、怖いよ～…。今ので謝っておけばよかった…。

「…いや、わたしに少しくれないか？」

さすがに丸々１つ頼む気は起きない。しかし少しだけ食べてみたい。

「へ？」

「いや、だからパフェを少しくれないかと…」

スクルドはきょとんとする。てっきり怒られたりするかもしれないと思っていたスクルドは、思わず裏返った声を出してしまった。それに対し、ディスペアは裏返った声のことを笑わずにパフェが欲しいと再び頼む。不器用なディスペアなりにこの沈黙の空気を吹き飛ばそうとしたのだ。

～～～屋根裏部屋～～～

「あれ？ウルズがいなくなったな…」

「ああ、ウルズならもう大丈夫だと言って出て行かれましたわよ？」

「なんで大丈夫なんてわかるんだよ」

「占いですわ。ウルズの占いは良く当たりますから」

的中率９０％。素晴らしいくらい高い確率だ。神界で、自分を見失った天使や神が度々占いをしてくれと訪れる。

「ふ～ん…まあでも、一応最後まで見ておこうか」

～～～喫茶店～～～

結局のところ少しだけパフェをもらったディスペアは機嫌が直り、

店を出た後スクルドを連れて歩き始める。ディスペアは洋菓子系の甘いものが好きなのだ。

「……あ、あのさディスペア…」

「ん？何だ」

「…ディスペアは、私なんかといて幸せなの？」

「そうでなければとっくにわたしは君の前から消えている」

幸せでなければ女神と関わろうなどしなかった。まあ、神の間でもここまで行動を共にする恋人同士の２人組はわたしたち以外にはいないらしいが。しかし恋した原因が『可愛かったから』という何とも単純なもので、よくここまで別れずにいるものだな。

「…ありがとね」

機嫌が悪くても、どんなに怒っていても私と一緒にいてくれるディスペアが大好きだよ。

「…礼を言われるほどのことではない。そろそろわたし達の帰りを待っているころだろう。心配をかけないうちに帰るとしようか」

…もうじきわたしの容姿は変わる。この姿でいるのもあと２日だ。どんなぶっ飛んだ容姿になるのだろうか。それだけが心配でならない。

第118話　ジェネックス11日目　口は災いの元（後書き）

次回『斎王戦前日』

…5章からこのあとがきで何かやろうと思っています。しかし、最強カード紹介などは他作者様もやっていることなので、何か別のことをやる予定です。今のところはノルン三姉妹を出す予定ですね。

第１１９話　斎王戦前日（前書き）

前日のつもりだったんですが、デュエルも書いてしまいました。

最近の出来事
…高校の入学説明会に行ってきました。疲れましたよ…

第１１９話　斎王戦前日

明日はいよいよ斎王戦だ。…いや、戦うのは十代とエド・フェニックスだが…この２人にはあまり期待しない方がいい。当然のように補正を受けた破滅の光とやらの力はかなりのレベルになっているはずだ。当然、十代やエドも補正は受けている。しかし…

「やはり期待はできない…か」

現在の十代の切り札『Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ』、エド・フェニックスの切り札は不明。『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』だけでは補正がなさすぎる。何か別の物があるとみて間違いない。だが、その程度の力だけでは『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』か『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ』という攻撃力４０００の超大型モンスターを操る斎王相手には少々力不足。効果に関してはこの上ないほど強力だが。何よりも気になるのは必ず斎王がこの２体の超大型モンスターの先に何かを隠している事だ。

「だが、『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ』がある時点で補正は受けているということになる」

「そんなことは分かっている、しかし、いずれ手に入るカードが多少早く手に入ったところでそれは大きな補正とは呼べない。十代が本来手に入れるはずがなかった『Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ』などが強力な補正になる。それにこれは予想だが…十代はまだネオスの進化形態として新しい切り札を持っている」

「何！」

「…十代達についてはこれぐらいでいいだろう、あとはわたしが使用する神力、あれは集め終わったのか」

「む、問題ない。無事１００ビン集め終わった」

「…ご苦労だったな」

これで完成する、わたしの最後の器が。死の可能性がある最後の１度を使用することを先にフレイアとフリッグに謝っておかなければならないな。だがわたしは死なない。わたしの運命はわたしが決める、死の運命がわたしの前にあるというならばわたしはそれを叩き壊して進む。

「…運命の時まで残り１５時間。今のうちにできる事はやっておこう」

厳しい戦いになるだろう。せめてデッキの確認程度はしておくとしようか。…いや、意味がないな。『ディスペア』で『シーラカンス』と共に戦うことはないだろう。だが、シーラカンスはわたしと共に戦ってくれたデッキ、消すわけにはいかない。

「…オーディンよ、わたしの『シーラカンス』を受け取ってほしい。わたしがディスペアでいるのはこれが最後になる。わたしは新しい容姿で新しいデッキと共に戦う、しかしそのデッキを捨てるわけにはいかない」

３枚のカードが抜けて３８枚になっているシーラカンスデッキをオ

ーディンに差し出す。

「…わかった」

オーディンはただ一言それを言い、わたしからデッキを受け取った。ディスペアで在ったわたしが消えることはなくなった。シーラカンスがある限り。

「…最終形態になる意義はあるのか？」

「…当然だ、肩幅が広すぎるのは苦労するということがよくわかったからな」

冗談気に言った。正直言うと理由の一部に含まれていたりする。

「フッ、ではさらばだ、ディスペア」

「そうだな。さらばだ、オーディン」

ディスペアは消える。だから最後の別れの挨拶は済ませておく。

～～～１５時間後、斎王の部屋～～～

わたし達はトールとオーディン、ロキとセレナをホワイト寮の見張りとして残し、残りのノルン三姉妹とわたしで斎王の部屋に突入した。すると、すでにエド・フェニックスと斎王の戦いが始まった直後だった。まだ先攻１ターン目のようだが。

「僕のターン。出でよ！ダイヤモンドガイ！」

全身にダイヤモンドがついているＤ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイが現れる。

「このエフェクトによってデッキの一番上のカードを確認、魔法カードならセメタリーに送り次のターンで発動する。…『天使の施し』だ。次のターンに発動が決定した！カードを１枚伏せてターンエンド」

エド・フェニックス
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ　ＡＴＫ１４００
伏せカード×１

「わたしのターン！わたしは『アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』を召喚、さあ、ストップの宣言をするのだ、エド！」

「ストップだ！」

やはり正位置で止まる。

「魔法カード『運命の明札』。わたしのフィールドに『アルカナフォース』がいるとき、デッキから２枚ドロー！自分フィールド上に『アルカナフォース』が存在する時、手札のこのモンスターを特殊召喚することができる！現れよ『アルカナフォースＸＶＩ－ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲ』！！そしてこのターン『アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』の攻撃力は倍になる」

アルカナフォースＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ　ＡＴＫ１１００
↓２２００

巨大な塔のモンスターが斎王のフィールドに現れ、モンスターの頭上でカードが回転する。

アルカナフォースＸＶＩ－ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲ　ＡＴＫ２６００

「何だと！？」

斎王のデッキに新たなモンスターが…！あれはタロット１６番目の『塔』…！

「さあ、ストップの宣言をするのだ！」

「…ストップだ」

「正位置の効果！このカードがフィールド上に存在する時、デッキから『アルカナフォース』と名のつくモンスター１体を１度だけ特殊召喚することができる！現れろ、『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ』！！」

星を持った、異形の天使が現れた。

アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ　ＡＴＫ２７００

「…ストップ！」

「当然正位置ィ！この効果によって１ターンに１度、相手モンスタ

ー1体を破壊する！ダイヤモンドガイを破壊する」

無数の隕石が天井から現れ、ダイヤモンドガイを粉砕した。

「『アルカナフォースXVIーTHE　TOWER』でダイレクトアタックだ！」

塔の上から瓦礫が落ちてきた。

「トラップオープン『デステニーフェローズ』！相手の攻撃宣言時にセメタリーの『D－HERO』1体を手札に加え、そのバトルを無効にしてバトルフェイズを終了する！」

ダイヤモンドガイの影がエドを瓦礫から守り、そのまま手札に加わった。

「ターンエンド！」

斎王
LP4000
手札×5
フィールド
アルカナフォースI－THE　MAGICIAN　ATK1100
アルカナフォースXVI－THE　TOWER　ATK2600
アルカナフォースXVII－THE　STAR　ATK2700

「僕のターン！『天使の施し』のエフェクトによって3枚ドローし、2枚捨てる」

エドは焦った様子もなくデュエルを続ける。何かしらの秘策がある

とみて間違いない。

「僕はマジックカード『デステニーコラージュ』を発動。手札から『Ｄ－ＨＥＲＯ』を相手フィールド上のモンスターの数だけ特殊召喚することができる。現れろ『Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ』『Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイ』『Ｄ－ＨＥＲＯデビルガイ』！そしてセメタリーのマジックカード『デステニーブラスト』のエフェクト発動。このターン、戦闘を放棄する代わりにセメタリーのこのカードを除外し、自分フィールド上の『Ｄ－ＨＥＲＯ』の数だけ相手フィールド上のカードを破壊する！僕は『アルカナフォースＸＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』『アルカナフォースＸＶＩ－ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲ』『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ』を破壊する！」

成程、エドの狙いはこれか。手札を大きく消費したが、斎王のフィールドはがら空きになった。

「ダイヤモンドガイのエフェクトにより、デッキの一番上を確認。『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドガイ』だ。デッキの一番下に戻す。カードを2枚伏せてターンエンド」

エド
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ　ＡＴＫ１４００
Ｄ－ＨＥＲＯデビルガイ　ＡＴＫ６００
Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイ　ＡＴＫ８００
伏せカード×２

「わたしのターン！墓地の『アルカナフォースＸＶＩ－ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲ』の効果発動。このカードが正位置の状態で墓地に送られた次のターンのスタンバイフェイズにこのカードを特殊召喚する！」

…自己再生モンスターか！エドのフィールドには攻撃力の低いＤ－ＨＥＲＯが存在するのみ、攻撃力ではＴＨＥ　ＴＯＷＥＲには勝てない…。

「さあ、ストップの宣言をするのだ、エド！」

「…ストップだ！」

「…逆位置の効果。相手はデッキから手札が５枚になるまでドローし、ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲの攻撃力を４００ポイントアップする」

エドはカードを４枚引く。表情を変えない辺りさすがはプロか。

アルカナフォースＸＶＩ－ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲ　ＡＴＫ２６００↓３０００

「わたしは『アルカナフォースＸＩ－ＪＵＳＴＩＣＥ』を特殊召喚。このカードは『アルカナフォース』と名のつくレベル５以上のモンスターが特殊召喚されたターン、手札から特殊召喚することができる。さあ、宣言をしろ、エド」

アルカナフォースＸＩ－ＪＵＳＴＩＣＥ　ＡＴＫ２１００

「ストップだ」

カードは正位置で止まる。恐ろしい運命力だ。

「正位置の効果。１ターンに１度、デッキから１枚ドローしてデッキからカードを１枚墓地に送る」

斎王はカードを１枚引き、デッキの一番上のカードを墓地に送ると表情を変えた。

「２体の『アルカナフォース』を生贄に！『アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ』を特殊召喚する！」

太陽に両手をかざしている異形の天使が現れ、頭上でカードが回転し始める。

アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ　ＡＴＫ２９００

特殊召喚モンスター…！やはり斎王のデッキは明らかにパワーアップしている。

「ストップだ」

「正位置の効果！このカードの攻撃力はこのカードの召喚の生贄になった『アルカナフォース』と名のつくモンスターの攻撃力の合計分アップする」

「バカな！？」

生贄のアルカナフォースの攻撃力の合計分…つまり攻撃力は８０００になる！究極神クラスの攻撃力をこうも簡単に叩き出すとは…！

アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ　ＡＴＫ２９００→８０

００

「『アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ』で『Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイ』を攻撃。フレアブラスター！」

「トラップカード『Ｄ－カウンター』！ＴＨＥ　ＳＵＮを破壊する！」

Ｄ－カウンター…Ｄ－ＨＥＲＯが攻撃対象になったとき、その攻撃モンスターを破壊するトラップカード…わたしは絶対に強いとは思わない。せめてあと２つくらいメリットをつけてもよかっただろう。１枚ドローとかライフ回復またはダメージとか。

「『アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ』が破壊された時、デッキから『ザ・スピリチアル・ロード』『ザ・マテリアル・ロード』『ザ・ヘブンズ・ロード』を手札に加える！そしてカードを３枚伏せ、ターンエンド」

斎王
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
伏せカード×３

殆どと言っていいほど、既存のアルカナフォースを使用していない…一体どれほどの改変を受けた？ここまで来るとわたしにも予想できない。

「僕のターン」

「トラップ発動！『ジャッジメント・フォース』！墓地から『アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ』『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ』『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ』を除外！『アルカナフォースＸＸ－ＴＨＥ　ＪＵＤＧＥＭＥＮＴ』を特殊召喚する！」

星と太陽と月が互いに混ざり合い、その光の中からまるで皇帝のような姿をした異形の生命体が出現し、頭上のカードが回転する。そして、その生命体は持っていた杖をエドに向ける。

アルカナフォースＸＸ－ＴＨＥ　ＪＵＤＧＥＭＥＮＴ　ＡＴＫ３０００

「さあ、ストップの宣言をするのだ！」

「…ストップだ」

「正位置の効果！デッキから『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ』を墓地に送る」

送った次の瞬間、斎王がすさまじいまでの顔芸をお披露目する。

「なっ！？まだ上級のアルカナフォースがいたのか！」

「そして『アルカナフォースＸＸ－ＴＨＥ　ＪＵＤＧＥＭＥＮＴ』は戦闘以外でフィールドを離れることはない…！」

斎王はすでに勝ち誇った顔をしている。おそらく、ＪＵＤＧＥＭＥＮＴを破壊した際に何かが起こる。しかし、余計なアドバイスをし

ようがエドは耳を貸さないだろう。

「僕は3体の『Ｄ－ＨＥＲＯ』を生贄に『Ｄ－ＨＥＲＯドグマガイ』を特殊召喚する！！そしてトラップカード『デステニーインパクト』発動！エンドフェイズまでドグマガイの攻撃力を倍にする！行くぞ、斎王！」

わたしの目がおかしいのか、エドの後ろに斎王の姿が見えた気がする。いや、わたしの目はおかしくない。きっとこれが2人の力なのだ。Ｂｌｏｏ－Ｄは召喚されなかったが、十分だろう。

Ｄ－ＨＥＲＯドグマガイ　ＡＴＫ３４００→６８００

「『Ｄ－ＨＥＲＯドグマガイ』で『アルカナフォースＸＸ－ＴＨＥ　ＪＵＤＧＥＭＥＮＴ』を攻撃する！デス・クロニクル！！」

「ぬうううううううううう！」

斎王　ＬＰ４０００→２００

「ターンエンド！」

エド・フェニックス
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
Ｄ－ＨＥＲＯドグマガイ　ＡＴＫ３４００

「…ラストターンドロー！！」

斎王のライフがドグマガイの効果で１００になる。…エド・フェニックス、ここまでか。

「『ザ・スピリチアル・ロード』発動！『ザ・マテリアル・ロード』発動！『ザ・ヘブンズ・ロード』発動！！この３本の光の柱を生贄に！バケモノに止めを刺すための『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』が召喚される！！」

アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　ＡＴＫ　４０００

「だが攻撃力は４０００！まだ僕のライフは残る…！」

「墓地の『アルカナフォースＸＸ－ＴＨＥ　ＪＵＤＧＥＭＥＮＴ』のモンスター効果発動。このカードを除外し、相手モンスター１体の攻撃力分、エンドフェイズまで自分フィールド上のモンスター１体の攻撃力をアップする！」

アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　ＡＴＫ　４０００→７４００

エドに逆転の手はない。

「『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』で『Ｄ－ＨＥＲＯドグマガイ』を攻撃！！ジ・エンド・オブ・レイ！」

「……っ！！」

エド・フェニックス　ＬＰ４０００→０

エドは目を開け、十代に何か頼んだのち、砂になって消えた。が、その後すぐ部屋の奥にある天秤の上に再びエドが気絶した状態で現れる。どうやらレーザー衛星の鍵と釣り合っているらしい。

十代は斎王を睨むと、デュエルディスクを展開した。休みを入れずに斎王はデュエルをするらしい。そこまでしてあの鍵が欲しいのか。

「「デュエル」」

十代、君は一体どのような戦術で斎王に対抗する？

「俺のターンドロー！バブルマンを召喚！２枚ドローだ。そして融合発動！手札のネクロダークマンとフィールドのバブルマンを融合！来い『Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ』！さらに墓地のネクロダークマンの効果で『Ｅ・ＨＥＲＯネオス』を召喚！『強欲な壺』を発動して２枚ドロー、『Ｎ・グラン・モール』を召喚。ネオスとグラン・モール！コンタクト融合！！現れろ『Ｅ・ＨＥＲＯグラン・ネオス』！」

Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　ＡＴＫ２５００
Ｅ・ＨＥＲＯグラン・ネオス　ＡＴＫ２５００

「フィールド魔法『ネオスペース』を発動」

Ｅ・ＨＥＲＯグラン・ネオス　ＡＴＫ２５００→３０００

「……」

さすがは十代だ、１ターン目から斎王相手にここまでやるとはな。だが十代、先攻１ターン目で展開するのは危険だ。返しのターンで

すぐに倒されることが多いからな。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

十代
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯグラン・ネオス　ＡＴＫ３０００
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　ＡＴＫ２５００
ネオスペース
伏せカード×１

「わたしのターン！わたしは『アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥ　ＨＥＲＭＩＴ』を召喚」

透明な異形の生命体が出現した。もはや天使だとは分からないだろう。

アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥ　ＨＥＲＭＩＴ　ＡＴＫ１９００

「…ストップだ！」

「当然正位置！相手ターンに1度、このカードをエンドフェイズまで除外することで相手モンスター1体の攻撃を無効にする！さらにこのカードは相手のカード効果では破壊されない」

…スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンのような効果か。『隠れる者』にはちょうどいい効果だろう。

「『ディスティニーフォース』を発動。『アルカナフォース』が存在する時、相手フィールド上のカードを1枚破壊する。わたしは『E・HEROアブソルートZERO』を破壊する」

アブソルートZEROが死ぬ間際に無数の尖った氷を発射するが、HERMITには通用しなかった。

「フィールド魔法『光の結界』発動！」

ネオスペースが崩れ、光が辺りを包む。

「……」

来たか、宇宙の精霊の力を奪うフィールド魔法。斎王が光の力を使っていつの間にか後ろにいたオージーンに天秤に乗っていた2つの鍵を渡した。オージーンはそれを持つとすぐに走り出した。一方で、マグマに沈みそうになったエドを剣山が助け出す。最初から助けに行けばよかったのではないだろうか？

「フィールド魔法が存在する時、手札の『アルカナフォースII－THE HIGH PRIERSTESS』は特殊召喚できる。現れるのだ『アルカナフォースII－THE HIGH PRIERSTESS』！！」

アルカナフォースII－THE HIGH PRIERSTESS
ATK1200

女教皇の姿をしたモンスターが現れ、頭上のカードが回転する。

「『光の結界』の効果によって正位置・逆位置はわたしが決める。

正位置の効果。手札を1枚デッキに戻し、デッキからカードを1枚手札に加える。相手はこのカードを確認することはできない！」

斎王はこれで重要なカードを手札に加え、十代を倒すつもりか。もうこのデュエルの行方はわたしにもわからない。だが、わたしの出番があるのは確実だ。

「わたしはこれでターンエンド！」

このエンドフェイズ、ネオスペースが存在しないことにより十代のグラン・ネオスはデッキに戻る。十代のフィールドはがら空きになったな。

ノルン三姉妹はこのデュエルをただ黙ってみている。彼女たちには既にこのデュエルの結末が見えているのか？

斎王
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
アルカナフォースＩＩ－ＴＨＥ　ＨＩＧＨ　ＰＲＩＥＲＳＴＥＳＳ
ＡＴＫ１２００
アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥ　ＨＥＲＭＩＴ　ＡＴＫ１９００
光の結界

「俺のターン！ドロー。カードを2枚伏せて魔法カード『命削りの宝札』を発動！俺の手札は0だから5枚ドローだ！伏せてあった『融合』を発動！手札のバーストレディーとフェザーマンを融合！来い『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン』！」

十代のお気に入りか。攻撃力は２１００だが、シャイニング・フレ

ア・ウィングマンの融合素材だ。

「そして『Ｒ－ライトジャスティス』！『光の結界』を破壊するぜ！」

ほう…原作とは違い随分と早く光の結界が破壊されたな。両者ともに恐ろしいまでの実力だ。比較的にパワー押しの斎王と、融合モンスターを素早く展開して応戦する十代。技と力ではやはり勝負の行方が見えない。

「『アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥ　ＨＥＲＭＩＴ』の効果発動！このカードをエンドフェイズまで除外し、攻撃を１度だけ無効にする！」

おそらくあのモンスター…一旦フィールドを離れても効果を失うことがないだろう。でなければ１度きりの攻撃無効になってしまうからな。

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン』を召喚！エアーマンの効果で、デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯオーシャン』を手札に加えるぜ。『融合』発動！手札のクレイマンとオーシャンを融合してもう１度アブソルートＺＥＲＯを召喚だ！」

伏せカードは２枚とも融合だったのか。捉え方によっては手札事故だな。

「『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン』で攻撃だ！」

「『アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥ　ＨＥＲＭＩＴ』の効果によって攻撃を無効にする！」

「なら、アブソルートＺＥＲＯでＨＩＧＨ　ＰＲＩＥＲＳＴＥＳＳを攻撃、エアーマンでダイレクトアタックだ！」

「ぬううう！」

斎王　ＬＰ４０００→９００

斎王のライフを大きく削った…その上十代のフィールドにはアブソルートＺＥＲＯがいる。勝負の流れは十代に傾いているはずなのだが…。何だというのだ、斎王のあの余裕は…。いくらＨＥＲＭＩＴが戻ってきたとはいえ状況では圧倒的に十代が有利だぞ？

「ターンエンド」

十代
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺＥＲＯ　ＡＴＫ２５００
Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン　ＡＴＫ２１００
Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン　ＡＴＫ１８００

「わたしのターン！十代、貴様の力では今のわたしを止めることはできん！」

「何！！」

「『アルカナフォースＩＩ－ＴＨＥ　ＨＩＧＨ　ＰＲＩＥＲＳＴＥＳＳ』の効果発動！このカードを墓地に送ることでデッキから2枚

のカードを選択して墓地に送る！わたしは『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』と『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ』を墓地に送る！さあ十代、見せてやる！エドとのデュエルでは召喚する前に決着がついてしまったからな！

わたしは墓地に存在する『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』と『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ』を除外する！現れろ『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ』！！」

召喚と同時に攻撃宣言され、辺りが闇と光に包まれ、しばらく目を開けていられなくなる。ディスペアだけはずっと目を開けていた。そして、光と闇が同時に消えると大爆発を起こし、十代のライフが…

十代　ＬＰ０

０になっていた。

「アニキが負けた…」

翔は信じられないという顔でフィールドを見渡す。しかし、現実が変わることはない。十代が負けた。それだけで既に周りのメンバーが絶望の顔をしていた。やはり十代の人を惹きつける力は半端なものではないようだ。

「やれやれだな。本当にこのわたしが斎王と戦う時が来るとは…十代に少しでも期待したわたしがおろかだったか？いや、十代は十代なりに良くやってくれたな。貴様の切り札がなんであるか晒しただけでも十分だ」

斎王は最初からディスペアが目的であったかのようにディスペアを見据える。対するディスペアは、仕方がなさそうに斎王の前に立つ。

「十代が貴様を倒してくれればわたしが最終形態になることもなかっただろう…」

ディスペアはオーディン達が集めた神力が入っているビンを叩きつけて割り、宙に舞った神力をすべて吸収した。次の瞬間、ディスペアの身体は赤い光に包まれた。

2分ほど経っただろうか。光が形を変える。そして、光が収まるとそこには『ディスペアだった神』が宙に浮いていた。

「我が名はスレイ。スレイ＝アルアス。…いや、名など飾りにすぎないか」

スレイと名乗ったそれは、すさまじい神力を放つ。放たれた神力は天井を貫き、宇宙空間に存在するレーザー衛星を粉々に破壊した。

「…斎王琢磨、わたしは貴様を葬る」

第１１９話　斎王戦前日（後書き）

次回「ｖｓ斎王」

スレイの実力やいかに！？

※デッキは話の中でも出てきたとおりトールのアレです。

しかしネーミングセンスどうにかならないかなこれ…

第１２０話　ｖｓ斎王（前書き）

どうもです。

斎王戦、ついに決着！…ですが、これから先の話は寄り道をしまくってまともにＧＸ本編のストーリーが進むのは遅くなるかもしれません。…いつものことか。

最近の出来事
ついに！ついに１枚目ですがガトムズの緊急指令が手に入った！さらに、タングニョーストも手に入った！キター！！

第１２０話　ｖｓ斎王

いきなり現れた『元』ディスペアは、一瞬にして宇宙に存在するレーザー衛星を破壊した。
その姿はパラドックスの服と髪、眼を黒くし、肩と手を露出しておらずにしっかりと黒い服を着ているように見える。実際のところ服は着ていないも同然で、細部まで神力の供給がなされている。服の白かった部分は白いままであり、あの不思議な形の眉毛は普通の形になっている。
ちなみに声とゴッドモーメントはディスペアのままだ。

「…スレイ…」

スレイを見てスクルドがただ一言名前を呼ぶ。スレイはチラリとスクルドの方を見ると、再び斎王に視線を向ける。

「…光の結社の終焉だ」

「「デュエル！！」」

「先攻はわたしがもらう。わたしは『Ｘ－セイバーパシウル』を攻撃表示で召喚。カードを2枚伏せターンエンド」

スレイ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
Ｘ－セイバーパシウル　ＡＴＫ１００

伏せカード×２

「わたしのターン！運命はわたしに味方している！貴様がたとえ姿を変え名前を変えようとも無駄なことだ！『アルカナフォースＸＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』召喚！！」

「カウンタートラップ『セイバー・ホール』。相手モンスターの召喚を無効にし破壊する」

アルカナフォースＸＩ－ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮは召喚された途端に異次元の穴に落とされた。

「ならば魔法カード『アルカナデストロイ』！デッキから『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』と『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ』を墓地に送り、デッキから１枚ドロー！さらに『死者蘇生』発動！わたしは『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』を…」

「永続トラップ発動『木遁封印式』。『Ｘ－セイバーパシウル』を生贄に捧げ墓地の『アルカナフォースＸＸＩ－ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』と『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ』を除外する。墓地に対象モンスターが存在しなくなったことにより『死者蘇生』は不発となる。わたしの前で浅はかな戦術は通用しない、無駄な余裕は捨て本気でかかってこい」

「クッ…」

「邪魔な肩幅が消え、ようやく動きやすくなった。第２形態は、パワーは高かったが動きにくかったからな…全身スーツ？のような格好もあまり頂けなかったかもしれない。ぶっ飛んだ姿になると思っ

たが酷くはならなかったな、むしろ満足だ」

スレイはかなり余裕の表情で自身の姿の感想を述べ、斎王を見下ろす。アポリアがいたらどんな思いだっただろうか。

「ターンエンド…」

斎王
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
無し

「わたしのターン。わたしはカードを1枚伏せる。そして『Ｘ－セイバーガラハド』を召喚。ガラハドでダイレクトアタック」

わたしの攻撃を遮るものはない。

「ぬううううう」

斎王　ＬＰ４０００→２２００

「ターンエンド」

スレイ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
Ｘ－セイバーガラハド　ＡＴＫ１８００
木遁封印式

伏せカード×１

「わたしのターン！」

「トラップカード『ダスト・シュート』。貴様の手札を確認し、モンスターカード1枚をデッキに戻しシャッフルする」

斎王の手札…『アルカナフォースＶＩＩ－ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ』『アルカナリバイブ』『ザ・ヘブンズ・ロード』『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ』…。

「『アルカナフォースＶＩＩ－ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ』をデッキに戻してもらう。これで貴様に召喚できるモンスターは存在しない。そして、伏せるべきカードもない。完全な八方塞の貴様にはこの状況…ターンエンドするしかないはずだ」

スレイは異常なまでの精神攻撃を兼ねて斎王に現状を説明した言葉を投げかける。斎王はすさまじい顔でターンエンドを宣言した。

斎王
ＬＰ２２００
手札×３
フィールド
無し

「わたしのターン…ほう、幸運だな。わたしは『Ｘ－セイバーガラハド』でダイレクトアタック」

斎王　ＬＰ２２００→４００

「さあ、死にたくなければサレンダーするがいい。破滅の光の意思よ。貴様程度にわたしの神々など見せる必要がないということを身を持って教えてやったはずだ。わたしはこれでターンエンド、これ以上デュエルを続けるようであればわたしは手加減をしない」

異常なまでに強力な神力を溢れさせてスレイは斎王…破滅の光を威圧する。スクルドはデュエルのことなどそっちのけでスレイの顔を見つめている。どっちの方がかっこよかったか考えているのだ。いや、普通は第3形態だと思いますよ女神様。

スレイ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
Ｘ－セイバーガラハド
木遁封印式

「わたしのターン！魔法カード『運命の天札』！手札をすべて捨てデッキから4枚ドローする！！『アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥＨＥＲＭＩＴ』を召喚！」

「ストップだ」

カードは逆位置で止まる。

「バカな！」

「わたしの力により貴様の運命力は0になっているため、完全に2分の1の確率で正位置になる。『アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥＨＥＲＭＩＴ』の逆位置の効果により、カード効果が発動・適用し

た時に破壊される。ガラハドは攻撃されたときに攻撃力が５００ポイントダウンする効果が存在する。つまりＨＥＲＭＩＴで攻撃した瞬間、ＨＥＲＭＩＴは破壊されるということだ」

宙に浮いているスレイの声は部屋によく響く。十代達はこの圧倒的な光景にただただ驚く。墓地利用戦術は封じられ、せっかく召喚したモンスターもデメリットしかない。斎王にとっては絶望的な状況だ。

「わたしの名の由来は『破壊』。あらゆる相手の勝利への手段を破壊し勝利する、それがわたしの戦いだ」

無より生まれたわたしの魂は無限の力を得て最終形態になった。この魂は無闇な破壊のために在るのではない。

「だが、それでもわたしの魂はわたしが愛する者のために在る…！」

スレイがユベルといい勝負ができるかもしれないくらいの爆弾発言をしてしまい、スクルドは顔を真っ赤にして後ろを向いてしまった。翔が真っ赤なスクルドの顔を見てなんだか危ない発言をしていたのは言うまでもない。…さすがに『君は僕の物だ』などというセリフには勝てないか。

「おのれえええ！カードを3枚伏せてターンエンド！」

斎王
ＬＰ４００
手札×０
フィールド
アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥ　ＨＥＲＭＩＴ　ＡＴＫ１９００

伏せカード×３

「わたしのターン。モンスターを1体伏せ、『Ｘ－セイバーガラハド』で『アルカナフォースＩＸ－ＴＨＥ　ＨＥＲＭＩＴ』を攻撃する。この時、ガラハドの攻撃力は３００ポイントアップするが、効果が適用されたことによりＨＥＲＭＩＴは破壊される」

透明な生命体は霧散して消えた。透明だったので消えたことすらよくわからないかもしれない。

「攻撃を続行。貴様のライフもここまでのようだな」

スレイは目を閉じてデュエル終了だと思ったが、斎王は表情を一気に変え、1枚の伏せカードをオープンした。それと同時に光がスレイに向かうが、光はスレイに届くことなく消える。スレイは目を閉じたままだ。

「『アルカナコーリング』。自分のライフが１００以下の時に相手が直接攻撃した場合、そのダメージを無効にし、デッキから『アルカナフォース』と名のつくモンスター2体を特殊召喚する！」

斎王が呼び出したのは『アルカナフォースＶ－ＴＨＥ　ＨＩＥＲＯＰＨＡＮＴ』と『アルカナフォースＸ－ＷＨＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＵＮＥ』。タロットの５番目と１０番目、新たなモンスターだ。ＨＩＥＲＯＰＨＡＮＴは法王、ＷＨＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＵＮＥは輪の姿をしている。

アルカナフォースＶ－ＴＨＥ　ＨＩＥＲＯＰＨＡＮＴ　ＡＴＫ１５００
アルカナフォースＸ－ＷＨＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＵＮＥ　ＡＴＫ

2000

「『アルカナフォースX－WHEEL　OF　FORTUNE』が存在する限り、正位置・逆位置はわたしが決める！当然2体とも正位置だ！『アルカナフォースV－THE　HIEROPHANT』の効果により、手札をすべて捨てて手札が5枚になるようにカードをドロー！『アルカナフォースX－WHEEL　OF　FORTUNE』の効果により、相手フィールド上の裏側表示モンスターをすべて表側守備表示にする！」

スレイの唯一の裏側表示モンスター、『メタモルポット』が守備表示になった。

「互いにすべての手札を捨ててカードを5枚ドローする。貴様が手札補充をしたのは単純にデッキ枚数が減っただけのようだな」

デッキの枚数が減るのは大半のデッキには良いことだが…。

「トラップ発動『アルカナリカバリー』。墓地に存在する『アルカナ』と名のつくモンスターをすべてデッキに戻してシャッフルし、デッキから『アルカナフォースXVI－THE　TOWER』を特殊召喚する！そして次のターン、わたしへのダメージは0になるのだ！WHEEL　OF　FORTUNEの効果によりTHE　TOWERの効果は正位置を選択し、デッキから『アルカナフォースXVII－THE　STAR』を特殊召喚。STARも正位置の効果を適用する！」

「ほう…わたしのターンで4体ものモンスターを召喚するか。カードを2枚伏せ、ターンエンド」

スレイ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
Ｘ－セイバーガラハド　ＡＴＫ１８００
メタモルポット　ＤＥＦ６００
木遁封印式
伏せカード×２

「わたしのターン！『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ』の効果により『Ｘ－セイバーガラハド』を破壊する！」

無数の流星がガラハドを襲うが、その寸前にスレイのフィールドに２体のＸＸ－セイバーフラムナイトが特殊召喚された。そのあとすぐにガラハドは破壊されたが。

「わたしはトラップカード『ガトムズの緊急指令』を発動した。フィールドに『Ｘ－セイバー』が存在する時、墓地から2体の『Ｘ－セイバー』を特殊召喚する」

「ならばわたしは『アルカナフォースＸ－ＷＨＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＵＮＥ』で『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を攻撃する！」

輪の中央にエネルギーを収束して放った。だが、それはフラムナイトには届かずに消える。

「『ＸＸ－セイバーフラムナイト』はフィールド上に存在する限り１度だけ相手モンスターの攻撃を無効にできる…」

「ならばＳＴＡＲで効果を使用したフラムナイト攻撃だ！」

「ＳＴＡＲの攻撃は2体目のフラムナイトの効果により無効にさせてもらう」

「ＨＩＥＲＯＰＨＡＮＴでフラムナイトを攻撃！」

スレイ　ＬＰ４０００→３８００

「トラップ発動『ガトムズの緊急指令』。現れよ『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』『ＸＸ－セイバーレイジグラ』。レイジグラの効果により墓地から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を手札に加える」

レイジグラは守備表示、エマーズブレイドは攻撃表示だ。効果を知らない斎王は多分フラムナイトを攻撃してくるはず。

「『アルカナフォースＸＶＩ－ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲ』で『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を攻撃！！」

スレイ　ＬＰ３８００→２５００

「わたしはＴＨＥ　ＴＯＷＥＲとＨＩＥＲＯＰＨＡＮＴを生贄に捧げ『アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ』を特殊召喚する！ＷＨＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＵＮＥの効果により正位置を選択し、攻撃力を４１００ポイントアップ。よって攻撃力は…」

アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ　ＡＴＫ２９００→７０００

「攻撃力７０００…フッ、通常のカードにしては上出来だ」

だが攻撃はすでに終了している。わたしの攻撃を抑制するための攻撃力７０００か。無駄なことを。

「スレイ…！」

スクルドはやはり心配そうにスレイを見る。そしてスレイがやたらと余裕そうなので尚更心配する。

「ターンエンド！」

斎王
ＬＰ４００
手札×５
フィールド
アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ　ＡＴＫ７０００
アルカナフォースＸ－ＷＨＥＥＬ　ＯＦ　ＦＯＲＴＵＮＥ　ＡＴＫ２０００
アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ　ＡＴＫ２７００
伏せカード×１

攻撃力２０００オーバーのモンスターが3体。しかし、ＳＴＡＲを生贄にＳＵＮを召喚しなかったのは失敗だったな。

「わたしのターン。先程手札に戻した『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を守備表示で特殊召喚し、そのモンスター効果を発動。１ターンに1度、自分の墓地のレベル４以下の『Ｘ－セイバー』１体を特殊召喚する。現れろ『ＸＸ－セイバーフラムナイト』！

『ＸＸ－セイバーフラムナイト』と『ＸＸ－セイバーレイジグラ』、『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』、わたしのライフ半分を生贄

に捧げ『究極神オベリスク』を特殊召喚する！」

部屋の巨大モニターには外の様子が映された。そこには巨大な神が立っている。

スレイ　ＬＰ２５００→１２５０

「新たなる力が備わった究極の神の力を見るがいい。『究極神オベリスク』で『アルカナフォースＸＩＸ－ＴＨＥ　ＳＵＮ』を攻撃する。アルティメット・クラッシャー！」

オベリスクの拳から放たれた青い光がＳＵＮを丸ごと飲み込み粉砕した。しかし、前のターンに斎王が発動したアルカナリカバリーの効果によりダメージは０になる。

「命拾いしたな。究極神が召喚された今、貴様に希望はない。光は神によって与えられる究極の絶望によってそのすべてが塵になり消え去る…！わたしはこれでターンエンド」

スレイ
ＬＰ１２５０
手札×３
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
ＸＸ－セイバーフォルトロール　ＤＥＦ１８００
木遁封印式

「わたしのターン！『アルカナフォースＸＶＩＩ－ＴＨＥ　ＳＴＡＲ』の効果によって『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を破壊する！そして速攻魔法『不吉の連鎖』を発動。『アルカナ』と名のつく

カードの効果によって相手モンスターがフィールドを離れた時、わたしのモンスターすべてを破壊し、フィールドを離れた相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！」

スレイに向かってダメージが現実のものとなる金色の光線が迸る。

スレイはそれを指１本で弾いた。

スレイ　ＬＰ１２５０→５０

「無限の力がわたしの元に存在する今、ライフポイントなど１あれば十分」

斎王は不吉の連鎖の追加効果によってデッキの『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』と『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ』を墓地に送った。

「ほう、ならばその軽口がいつまで叩けるか試してやろう！わたしは墓地の『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ』と『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ』を除外する！光臨するのだ、『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ』！！！」

「十代を葬ったモンスターか…」

フィールドに現れたのはＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲとＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲによく似ているモンスターだ。

アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ　ＡＴＫ　８０００

…これならば十代のライフが一瞬で０になったことも説明がつく。攻撃力８０００、究極神クラスの攻撃力を備えた最上級のアルカナフォース。召喚条件も容易だな。

「このカードの召喚に成功した時、手札をすべて墓地に送る。ターンエンド、エンドフェイズにＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ以外のすべてのカードを除外する」

「…フィールドに召喚しやすい強力なモンスターにはやはりデメリットがつきものか。『究極神オベリスク』は相手のトラップ・モンスターカードの効果とコストを受けない」

斎王
ＬＰ４００
手札×０
フィールド
アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ　ＡＴＫ８０００

「わたしのターン。邪魔な者には消えてもらう。わたしは『究極神オベリスク』で『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ』を攻撃。アルティメット・クラッシャー」

しかし、スレイのこの宣言に…

「スレイ、それを攻撃しちゃダメ！」

スクルドは叫ぶ。嫌な予感がしたスクルドは、その予感の正体がこのモンスターだとたった今理解したのだ。

だがそれは遅かった。オベリスクの強大なエネルギーとＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲの放ったブレス攻撃が大爆発を起こし、２体とも爆発に巻き込まれて消えた。…と思われた。

「クックックックックック…」

アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ　ＡＴＫ４０００（逆位置）
アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　ＡＴＫ４０００（正位置）

「…『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ』がフィールドを離れた時、除外されているレベル８以上のモンスター２体を召喚条件を無視して特殊召喚できる。そして召喚するモンスターが『アルカナフォース』ならば正位置・逆位置は自由に決められるのだ。さらに『アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＣＨＡＯＳ　ＲＵＬＥＲ』はデッキに戻る」

「……スレイの努力が…すべて無に帰すというのですか…！」

「このフィールドに何もない局面で攻撃力４０００が２体…！限りなく絶望的な状況ね…」

「スレイの、スレイのライフはもう…５０しかないんだよ…？」

「ほう…確かにわたしのフィールドはがら空き、ライフは残り５０…しかし１つ忘れている。言ったはずだ、『ライフは１あれば十分』とな。スクルド、君がいる限りわたしは負けない。魔法カード『死者蘇生』発動。わたしが復活させるのは当然『究極神オベリスク』！モンスターを伏せ、ターンエンド」

スレイ
ＬＰ５０
手札×２
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
セットモンスター×１

「わたしのターン！カードをセット、さらに2体のアルカナフォースを守備表示に変更！ターンエンドだ。この伏せカードは『運命の終焉』！相手のダイレクトアタックを受けるときに発動し、そのダメージは相手が受けるのだ！」

斎王
ＬＰ４００
手札×０
アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　ＤＥＦ４０００
アルカナフォースＥＸ－ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＲＵＬＥＲ　ＤＥＦ４０００
伏せカード×１

「わたしのターン」

「この瞬間『運命の終焉』を発動！このターンダイレクトアタックした時のダメージは貴様が受ける。いかに貴様が十代を上回る強力な力を持っていようと運命の前にはただひれ伏すのみだ！」

「…貴様は神の力を甘く見過ぎている…『ＸＸ－セイバーレイジグラ』召喚。この効果で『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を手札に

加える。セットモンスターオープン『Ｘ－セイバーパロムロ』。そして『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する。破滅の光よ、貴様に女神の力を見せてやろう。レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』にレベル１の『Ｘ－セイバーパロムロ』をチューニング。シンクロ召喚、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

「何いぃ！？」

スレイは召喚されたブラック・ローズ・ドラゴンの頭に乗った。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果発動。フィールド上のカードをすべて破壊する。ブラック・ローズ・ガイル」

斎王の部屋がブラック・ローズ・ドラゴンの起こした嵐によって壊滅した。しかし、フィールドには究極神オベリスクが残っている。

「『究極神オベリスク』でダイレクトアタック、アルティメット・クラッシャー！」

「バカめ、ダメージは貴様が受けるのだ！８０００ポイントのダメージを受けて死ぬがいい！！」

斎王のフィールドに結界が出現して強い光を放ち、オベリスクの放ったエネルギーと衝突する。

「『究極神オベリスク』の効果。このカードが戦闘を行うダメージステップ時に相手はカードの効果の発動・適用はできない。最初から貴様に希望などなかった、わたしにデュエルを挑んだ時点で貴様がレーザー衛星と共に滅することは判っていた」

「ぬあああああああああああああああああ！」

斎王　ＬＰ４００→－７６００

斎王のすさまじい顔が元に戻り、中から破滅の光の本体が出てくる。本体はあろうことかスクルドの身体を乗っ取ろうとする。…が。

「ぐあああああああああ！」

スレイが放った神力に破滅の光の本体は耐えきれずに消滅した。

～～～その後～～～

斎王とエドを連れた十代達が外に出ると、ヘリコプターが飛んできて斎王を病院に運んで行った。その中には斎王の妹もおり、斎王は笑っていた。

「…斎王戦の幕は閉じた」

しかしこれで新たなる戦いが幕を開けた。これからは十代に協力を求めることもあるだろう。だが、今くらいは戦いを忘れて少し休むとしようか。

……その後、ジェネックスで万丈目が優勝し、ロキが悔しそうにしていた。もっとも成績で考えればかなり高い方なので、しばらく疑惑は晴れるだろう。

第１２０話　ｖｓ斎王（後書き）

次回「第5章　キャラクター設定」

たぶんキャラ設定はすぐにあげれると思います。
究極神を、友人と相談した結果もっともわかりやすく簡潔な書き方にしましたので次回に載せます。最初からこうすればよかったのに。

第5章からのキャラ設定（前書き）

キャラ設定です。
追加キャラクター：ウルズ、ヴェルザンディー、スレイ、セレナ
削除キャラクター：ディスペア

あれ、スレイを除いて女の子ばっかりだな…これでも主人公陣は男４人女４人です。（ヘムは含まない）

第5章からのキャラ設定

名前　スレイ＝アルアス

性別　無し

年　不明

誕生日　不明

身長　２ｍ５ｃｍ

体重　７５キロ

性格　好戦的　デュエルも基本的にはアグレッシブな戦術をとる。

一人称　『わたし』※女は私、男はわたしで分けています。性別がない場合も『わたし』です。ただし、ノルン三姉妹に限り『私』です。

見た目：パラドックスの不思議な形をしたほうの眉毛を、普通のほうの形に直して、髪の毛、眉毛、目の色を黒にしている。

服装：パラドックスがもともと着ていた上半身と、腕の部分から離れている例の服を、腕と肩をつなげて色を黒にした容姿。早い話が首より下の肌の露出部分はまったく無い。手もアポリアがつけていたような手袋（？）の緑の結晶無しＶｅｒで覆われている。基本的に服の色は黒。ただし、白かった部分は白のままであり、肩についていた金属（？）の色はそのままである。…結局のところやはり服

は着ていないのであり、『服に見える身体』すべての細部まで神力の供給はなされている。人間よりも機械のほうが近い。また肩に飾りがあるせいで動きにくいかもしれない…と思ったがそうでもないようだ。

デュエルディスク：ディスペアの時と変わらず、後頭部にゴッドモーメントが着いており、コレで戦う。

備考：姿と名前の変わったディスペア。しかし、時々爆弾発言をすることがある。
３つの心臓は体のどこかにある。人格も見た目も男。見た目はパラドックスさんだが、ＣＶはアポリアさんのまま。基本デッキはトールとはタイプの違うＸ－セイバー。と機皇、三極神などなど。

究極神オシリス　全長７５ｋｍ　見た目は常に赤い光を纏っている
『オシリスの天空竜』
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力Ｘ０００　守備力Ｘ０００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体とライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻撃力と守備力は自分の手札×２０００ポイントになる。このカードは魔法・効果モンスターの効果・コストを受けず、罠の効果・コストは１ターンのみ有効とする。このカードが戦闘を行う場合、ダメージステップ時に相手はカードの効果を発動できず、自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールド上を離れた場合、エンドフェイズにライフを半分払い、このカードを自分フィールド上に戻す。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、そのモンスターの攻撃力と守備力を２０００ポイントダウンする。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

攻撃名が『アルティメット・サンダーフォース』、攻守ダウンの効果名が『サンダー・プレッシャー』
前口上「神の鼓動、永き時を経て封印を解かん。究極の力よ、光臨せよ！『究極神オシリス』」
攻撃のモーションは、下の口から雷の砲撃を吐き出す。効果は上の口から雷の弾丸をぶつける。

究極神オベリスク　全長５０ｋｍ　見た目は常に青い光をまとっている『オベリスクの巨神兵』
レベル１２　神属性　究極神族　攻撃力８０００　守備力８０００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体とライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠・効果モンスターの効果・コストを受けず、魔法の効果・コストを1ターンのみ有効とする。このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ時にカードの効果を発動できず、自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールド上を離れた場合、エンドフェイズにライフを半分払いこのカードを自分フィールド上に戻す。自分または相手のターンに、このカード以外のモンスター2体を生贄に捧げることで、このターンこのカードは相手モンスター全てに攻撃することができる。このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上に存在するレベル１１以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

攻撃名は『アルティメット・クラッシャー』、効果を使用した時の攻撃名が『ゴッド・ジェノサイド・エナジー』
前口上「あらぶる巨神、究極の力を以って我が敵を粉砕する！光臨せよ、『究極神オベリスク』！」

攻撃モーションは、拳に青い神力をまとって殴りつける。

究極神帝ラー　全長１００ｋｍ　見た目は常に白金の光を纏っている『ラーの翼神竜』
レベル１２　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体とライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。
このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在する時のみ効果が適用され、攻撃可能になる。このカードはこのカード以外のいかなる効果・コストも受けず、戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果は無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、お互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードを全て除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。このカードの元々のレベルは∞として扱う。
このカードの効果のスペルスピードは∞として扱う。

攻撃名は『ゴッド・アルティメット・フレア』、∞のダメージを与える効果名が『ゴッド・アルティメット・ノヴァ』
前口上「限りなき力、究極の神々を束ねその全てを放つ！時空を滅せよ！『究極神帝ラー』！！」
ダメージ効果のモーションは、ラーの口に白金の神力が凝縮され、超爆発を起こす。射程距離は∞のため、ゴッドモーメントで召喚した状態で使用すると時空の極地である最高神界も消してしまう。通常攻撃のモーションは、巨大な炎を吐く。

名前　スクルド

年齢　？

性別　不明

誕生日　？

身長　１７５センチ

体重　ものすごく軽い。

スリーサイズ　本人により削除。胸はそんなにない。

性格　ドジな面がある。

一人称『私』

見た目と服装：『女神スクルドの託宣』（遊戯王ＤＭオリジナルカード）参照。ただし、目の色は青に変更。服装は色を多少変更しただけで、あとは同じ。髪はツインテールだったが、今は縛っておらず、スレイからもらったティアラをつけている。ティアラについてはチームラグナロクの回想のブレイブがつけてたアレを思い出してくれるとありがたい。

デュエルディスク（固有ディスク）：デッキを杖に取り込み、手札は自身の前に浮かせる。墓地も杖の中、召喚するカードは空中に浮き、基本的には消えている。（Ｚ－ＯＮＥとのライディングデュエルのような感じ）

備考：ノルンの三姉妹の一人で末っ子、スレイの妻。告白はスクルドから。スレイ同様、誕生の時よりかかっている魔法で、風呂など

には（ｒｙ
食べた物は直接神力に変換される。
外見は女性だが、性別がない。人格も女性。
ＣＶは明るい女のひと。想像に任せます。
戦女神をやめてから、その無理がたたって体が弱くなってしまった。
ちなみに、２人の姉も合わせて決して面倒だからという理由で容姿はカードのイラストから採用したわけではない。
切り札は『エターナル・ローズ・ドラゴン』。

エターナル・ローズ・ドラゴン
シンクロモンスター　レベル１２　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『ブラック・ローズ・ドラゴン』＋レベル４の植物族チューナー１体＋『エボリューション・ローズ』
このカードは上記の素材でしかシンクロ召喚できず、このカードはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚できない。また、このカードの召喚条件を無視することもできない。このカードは相手のカードの効果では自分フィールド上を離れず、コントロールも変更されない。
１ターンに１度、墓地のモンスターカードを１枚除外する。このカードの攻撃力は除外したモンスターの攻撃力分アップする。このカードが相手モンスターを破壊した場合、このカードの攻撃力分のダメージを与える。このカードが戦闘によって破壊されたとき、フィールド上のカードをすべて破壊する。

攻撃名は『エターナル・ローズ・ストリーム』、ダメージを与える効果名が『エターナル・フレア・ストリーム』、フィールド上のカードをすべて破壊する効果名が『エンド・オブ・エターナル』
前口上「永き封印が解かれ、黄金の薔薇が開花する！シンクロ召喚！大いなる７つの希望、その１つ！『エターナル・ローズ・ドラゴン』！！」

名前　ヴェルザンディ

年齢　スクルドより上、ウルズより下

性別　不明

誕生日　？

身長　１８０ｃｍ

体重　軽い

スリーサイズ　本人により削除。胸は普通。

性格　お嬢様

一人称『私』

見た目：『女神ヴェルダンディの導き』参照。ただし、目の色は淡いグリーン。服装の細部の装飾を多少豪華にしている。

デュエルディスク（固有ディスク）：スクルドと同じ。

備考：ノルンの三姉妹の１人、次女。誕生時よりかかっている魔法の効力で服や身体が汚れることがない。性別なしで、女性人格。食べたものなどは直接神力に変換。切り札は今のところエンシェント・

フェアリー・ドラゴン。ＣＶはおとなしい女の人。想像に任せます。
名前の英語読みは『ヴェルダンディ』。本来名前のあとは伸ばさないが、スレイ達にはヴェルザンディーと伸ばし音を付けて呼ばれている。

名前　ウルズ

年齢　ヴェルザンディよりも上。

性別　不明

身長　１８５ｃｍ

体重　軽い

スリーサイズ　本人により削除。胸は普通。

性格　大人の女性？

一人称『私』

見た目：『女神ウルドの裁断』参照。服の装飾を多少豪華にし、目の色を淡い黄色に変更。

デュエルディスク（固有ディスク）：スクルド、ヴェルザンディーと同じ。

備考：備考：ノルンの三姉妹の１人、長女。誕生時よりかかっている魔法の効力で服や身体が汚れることがない。性別なしで、女性人

格。食べたものなどは直接神力に変換。切り札は今のところ『ブラック・ブルドラゴ』。ＣＶはおとなしい声の女の人。想像に任せます名前の英語読みは『ウルド』。

名前　オーディン

年齢　？

性別　無し

誕生日　？

身長　２メートル１０センチ

体重　７０キロ

性格　５Ｄ’ｓのホセ…つまり、トールとロキのまとめ役。

一人称　『わたし』

見た目と服装：ハラルド。チームラグナロク参照。ちなみに、髪の毛と眉毛は直結してない。

デュエルディスク（固有ディスク）：神力によって、完全にその場で創りだす。デザインはその時々で自由に決められるが、基本的には遊戯王ＤＭで使われていたのと同じモデル。

備考：いろいろ省略。スレイで殆ど全部書き終わってしまった…ＣＶはハラルドさん。

切り札は不明、今現在は『極神聖帝オーディン』と『機皇帝グランエル∞』と『機皇帝クラフィリア∞』。

『機皇帝クラフィリア∞』
レベル１０　光属性　機械族　ＡＴＫ１００００　ＤＥＦ１００００
『機皇帝グランエル∞』＋『機皇帝スキエル∞』＋『機皇帝ワイゼル∞』
このカードは『∞融合』による融合召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。１ターンに１度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスターをすべてゲームから除外することができる。このカードはシンクロモンスターの効果を受けない。このカードの効果は無効化されない。

名前　トール

年齢　？

性別　男

誕生日　？

身長　１メートル９５センチ

体重　６７．５キロ

性格　ジャック・アトラス（ときどき傲慢なところが）

一人称『我』

見た目：チームラグナロクより、ドラガン。服装は基本的に一般的な私服に見えるが重装備。

デュエルディスク（固有ディスク）：自らの得物、ミョルニルを変形させてデュエルディスクにする。形は一般的な物に近い。

備考：スレイ達と違って性別があるので、スレイ達と違って男湯に入らないとぶっ飛ばされて警察行きになる。食べた物は（ｒｙ
モテないという不遇の神。
ＣＶはドラガンさん。
今現在の切り札は『極神皇トール』と『機皇帝ワイゼル∞』、『ＸＸ－セイバーオメガブラスター』、『ダークネス・ウィング・ドラゴン』。

『ＸＸＸ－セイバーオメガブラスター』
レベル１０　地属性　戦士族　ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２５００
『ＸＸ－セイバー』と名のつくチューナー１体＋『ＸＸ－セイバー』と名のつくチューナー以外のモンスター２体
このカードは上記のカードでしかシンクロ召喚できない。このカードの攻撃力と守備力は、自分の墓地の『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスター１体につき１５００ポイントアップする。このカードを対象にする魔法・罠・モンスター効果を無効にし破壊する。このカードがフィールドを離れたターンのエンドフェイズ、墓地から『Ｘ－セイバー』と名のつくカードを２枚除外することで、このカードを自分フィールドに特殊召喚する。この効果によって特殊召喚に成功したとき、自分のデッキの上からカードを３枚墓地に送る。１ターンに１度、墓地から『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスター１体を除外することで、相手の手札を全て墓地に送る。

攻撃名は『ラスト・セイバー』ハンデス効果名は『ブラストハンデス』

ダークネス・ウィング・ドラゴン
レベル１２　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『ブラックフェザー・ドラゴン』＋『エボリューション・フェザー』＋『レボリューション・ウィング』
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。１ターンに１度、相手のモンスター１体を除外することができる。このカードに黒翼カウンターを１つ置くことで、相手の発動・適用したカードの効果を無効にすることができる。この効果に対して魔法・罠・モンスター効果を発動することはできず、この効果はスペルスピード３として扱う。このカードに乗っている黒翼カウンター１つにつき、このカードの攻撃力と守備力は１０００ポイントダウンする。このカードは戦闘では破壊されない。１ターンに１度、自分のメインフェイズまたは相手のバトルフェイズ開始時に、このカードに乗っている黒翼カウンターをすべて取り除くことで、エンドフェイズまで相手フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力を０にする。

攻撃名は『ダークネス・ブレイズ・ストリーム』
相手モンスターの攻撃力を０にする効果名が『ダークネス・フォール』
前口上「黒き羽根、闇の翼に進化する！大いなる翼よ、その闇を以って闇を払え！シンクロ召喚、７つの希望、その１つ！！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』！！」

名前　ロキ

年齢　？

性別　無し

誕生日　？

身長　１５７ｃｍ

体重　４３キロ

性格　ルチアーノ

一人称『僕』

見た目と服装：機械化されていないルチアーノ。普段からルチアーノが被っていたフードやマントを装備している。中の服はルチアーノと同じ、ライディングデュエル時は、ルチアーノは髪の毛の先に帽子のようなものをつけていたがロキはつけていない。

デュエルディスク（固有ディスク）：ルチアーノと同じ。ただし、緑色のエネルギーの部分は、白になっている。名前は『デルタフォース』。

備考：外見は男で、人格も男。性別がないの（ｒｙ

食べた物は（ｒｙ

ＣＶはルチアーノさん。

ノルン三姉妹のウルズと仲がいい。

切り札は『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』、『極神皇ロキ』、『機皇帝スキエル∞』。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン
レベル１２　神属性　ドラゴン族　シンクロモンスター　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』＋『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』＋『フォース・ノヴァ・フォーチュン』
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナー×１０００ポイントアップする。このカードが攻撃する場合、ダメージステップ終了時まで相手はカードの効果を発動・適用できない。このカードがコントローラーのフィールドを離れる場合、代わりにコントローラーの墓地のチューナー１体をゲームから除外することができる。この効果のスペルスピードは４として扱う。このカードがフィールドを離れた場合、自分の墓地から『レッド・デーモンズ・ドラゴン』１体を特殊召喚することができる。また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンのメインフェイズ２終了後、もう１度だけバトルフェイズを行うことができる。

攻撃名は『エクストリーム・クリムゾン・ソウル』

名前　セレナ＝ハーヴ

性別　女

年齢　？

誕生日　２月２９日

身長　１５７ｃｍ

体重　４０キロ

性格　素直でおとなしい

一人称『私』

見た目：目の色を空色にしたフェイト。２人並んだら紛らわしい。

デュエルディスク：ノーマルＶｅｒ。普通に人間が使ってるアレ。

備考：ロキのことが好きな人間の女の子。ただし告白はしていない。ロキからもされておらず、先は長そうである。切り札は不明。また、普通のディスクでも現実にダメージを発生させる能力を持っている。モンスターや魔法・罠の実体化も可能。ＣＶはやっぱりフェイトと同じで、紛らわしい。

名前　ヘイムダル

性別　男

年齢　？

誕生日　人間時間で１月２３日

身長　１７８ｃｍ

体重　６０キロ

性格　リア充を茶化す、所謂自分が目立ちたがり屋で、他人の不幸を喜ぶタイプ。よほどのことであれば喜んだりはしない。

一人称『俺』

見た目：銀髪で紫色の目の、調子に乗りそうな顔。服は、中世ヨーロッパの貴族のような感じ。

デュエルディスク（固有ディスク）：ギャラルホルンを変形させてデュエルディスクにする。デッキの内容は基本的に『エロゲデッキ』と呼ばれる。

備考：性別があるので男湯に入らないと女性の方々にボコボコにされて警察行きになる。本小説での、最強のネタキャラ。スクルドに昔というか今も恋心を抱いているが、茶化すたびに『最低』と言われて首を吊ろうとする。誰か止めてあげてくれ。最近ではスクルドもいいが、『世界は広い、自分のパートナーを探しに行く』と言って出掛けたので、番外編以外の出番はスレイ達がいる世界に偶然いたときのみとなる。

第5章からのキャラ設定（後書き）

今のところはこうです。後々変更あるかもしれません。次回のあとがきから、5章でやると言っていた企画をやろうと思います。

第１２１話　長期休暇１　一難去ってまた一難（前書き）

どうも。
第５章からデュエル中の名前表記を英語（？）にしようと思います。
あと、性懲りもなく究極神の効果変更に熱中して、ダメージステップなどの研究をした結果また変わってしまったのでキャラ設定をご覧ください。ダメージステップに関しての効果は本当に難しいですね。

最近の出来事
遊戯王をやめた友達からガトムズの緊急指令を2枚もらい、３枚になりました。あとは高校で３～４人くらいやっている人を見つければ満足できますね。

第１２１話　長期休暇１　一難去ってまた一難

～～～最高神界・最高神議会～～～

「むぅ…では皆の者、始めるとしよう」

臨時の最高神議会、その議題は『スレイの強力過ぎるパワー』。この議会には北欧の三神とゼウスは出席していない。

「すでに封印許可クラスのパワーをはるかに超えている。これで暴走されたら止めようがないぞ」

『封印』とは、強力過ぎる力を持つ神や人間の力の大部分を抑え込むことだ。暴走されたら抑えようがないほどの力を持つ者が誕生すると、神はその者について会議を開いて封印するかどうかを決める。

「しかし彼が再び暴走するなど…」

「…ではこうしよう。３人だけ刺客を差し向ける。それを最高神スレイ＝アルアスが撃破すればこの件は無しだ。しかし、もしも刺客に敗北した場合はその力をある程度抑制する」

元々ディスペアの時点で十分封印許可は出るクラスだ。しかしその時はまだ大丈夫だと思っていたが…さすがにこれほど強力な力は見過ごしていられない。

「…皆の者、それでいいか？」

反対する者はいない。いや、反対する者がいないのだ。故意的にこの意見に反対する者は出席させていないのだから。

「では最高神ポセイドン、アポロン、ヘルメスよ、頼む」

ポセイドン達ならば互角に渡り合えるはずだ。新たなるトライデントも完成しているらしいしな。

～～～デュエルアカデミア・南海上空～～～

「新たな大きな力が…わたしを殺そうとしている…わたしの力を封印しようと目論んでいる…」

スレイはただ1人、驚異的な第六感を働かせて刺客の到来を予知していた。残りの仲間はすべてスレイが消えたことに気付いておらず、部屋にいる。スクルドはただ買い物か何かに出かけただけと思っていた。

「……」

突然嵐が到来し、海上には無数の竜巻が出現する。竜巻は龍になり、スレイを襲った。

「…茶番などこのわたしには通用しないぞ。……ポセイドン」

スレイの目の前に現れたのは海の神ポセイドン。自分に有利なフィールドを戦いの場に選んだらしい。スレイは無数の竜を力ずくで退けると、ポセイドンがいる方を向いた。

「…久しぶり…いや、初めましてだな、スレイ。破壊の神よ」

ポセイドンは挨拶と同時にトライデントの先端から巨大な力を放出する。周りが海のこの場所では、ポセイドンは絶対有利。最高神界からこの様子を見ている最高神たちもこれなら大丈夫と思っている。

「…ポセイドン、君はその程度の力でわたしを封印しに来たのか？あまり失望させるなよ…」

スレイは当たり所が悪ければ星1つを破壊するポセイドンの攻撃を軽々と弾き飛ばし、いつの間にか手に持っていたアーティスを振り斬撃を飛ばす。斬撃を飛ばした直後にスレイ自身もポセイドンに向かって突進する。

「おろかな！わたしを相手に接近戦を挑むなど！」

ポセイドンも負けてはおらず、斬撃を消し飛ばした後に突進してくるスレイをトライデントで突き刺した。しかし、完全に決まったと思われた一撃は、アーティスに阻まれており、ポセイドンはやむを得ず距離を取り、トライデントを持ち直す。

「…君のそのトライデントはすでに使い物にならないぞ。わたしが単純に突進した理由…それはそのトライデントを砕くためだ」

次の瞬間、海の神が最強を誇るトライデントにひびが入り、瞬きをする一瞬の間に砕け散ってしまった。

「バ、バカな！最高の金属を用いて鍛えなおしたこのトライデントが何故…」

「確かにアーティスの一撃だけではそのトライデントを砕くことはできない。だが…わたしの力を甘く見たな」

スレイはアーティスでトライデントと打ち合う時、全力でトライデントに叩きつけており、その一撃はトライデントを容易く撃ち砕いていたのだ。

ポセイドンはその事実に激昂し、海の水を集めて固有ディスクを創り出した。

「結局最後まで力ずくの勝負はしないのか。つまらん、もっともお前たちがわたしを封印するためにはその手段しかないか」

スレイも後頭部のゴッドモーメントを展開した。次に、ポセイドンの周りにいた2人の最高神アポロンとヘルメスも固有ディスクを創り出して構える。

「ほざけ！」

「「「「デュエル」」」」

Ｓｌａｙ ｖｓ Ｐｏｓｅｉｄｏｎ&Ｈｅｒｍｅｓ&Ａｐｏｌｌｏｎ

「わたしの先攻。…随分とカードが持ちやすくなったな」

前の身体の手はどう考えても大きすぎた。アポリア、お前は持ちにくくなかったのか？

「まあ、手札置きに置くからあまり意味はないが…わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚し、永続魔法『機皇連召』発動。わた

しのフィールドのモンスターがカード効果で破壊された時、デッキまたは手札より『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』を召喚し、破壊する。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇連召
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは『深海のディーヴァ』を召喚し、デッキより『ニードル・ギルマン』を特殊召喚する。レベル３の『ニードル・ギルマン』にレベル２の『深海のディーヴァ』をチューニング。海がその怒りを露わにするとき、古の海竜が現れる！シンクロ召喚『神海竜ギシルノドン』！カードを1枚伏せ、ターンエンド」

Ｐｏｓｅｉｄｏｎ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
神海竜ギシルノドン　ＡＴＫ２３００
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚する。そしてチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を召喚。レベル５の『サイバー・ドラゴン』にレベル１の『グローアップ・バルブ』をチューニング。シンクロ召喚『大地の騎士ガイアナイト』！カードを伏せターンエンド」

Ｈｅｒｍｅｓ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
大地の騎士ガイアナイト　ＡＴＫ２６００
伏せカード×１

「わたしのターン。わたしは『太陽の神官』を特殊召喚、『赤蟻アスカトル』を通常召喚。レベル５の『太陽の神官』にレベル３の『赤蟻アスカトル』をチューニング。太陽昇りし時、すべての闇を照らしだす！シンクロ召喚『太陽龍インティ』！さらに『二重召喚』を発動。手札から『スーパイ』を通常召喚し、手札を１枚墓地に送り、『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚。レベル５の『ＴＨＥ　トリッキー』にレベル１の『スーパイ』をチューニング。闇に月満ちるとき、魔の囁きが聞こえだす。死へと誘え！シンクロ召喚『月影龍クイラ』！カードを伏せ、ターンエンド」

Ａｐｏｌｌｏｎ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
太陽龍インティ　ＡＴＫ３０００
月影龍クイラ　ＡＴＫ２５００
伏せカード×１

３人の神は、目の前の巨大なデュエルディスクに、巨大な石板サイズのカードを置いてデュエルしている。当然手に持っているわけではなく、宙に浮いている。

「わたしのターン」

…機皇の前でシンクロモンスターを召喚するなど愚かな。わたしの圧倒的不利な条件でデュエルを開始したはずだが、どうやらライフ１０００からスタートしても問題なかったようだな。ポセイドン、アポロン、ヘルメス。お前たちのその余裕の顔を崩してやろう。

「わたしは魔法カード『エクスプロージョン・ブラスト』発動。『機皇兵ワイゼル・アイン』を破壊し、デッキから機械族モンスター『機皇神帝龍エクスブルム』を手札に加える。そしてわたしのフィールド上のモンスターがカード効果で破壊されたことにより『機皇連召』の効果が発動し、デッキから『グランド・コア』を特殊召喚して破壊する。『グランド・コア』がカード効果で破壊された時、デッキ・手札・墓地から『機皇帝グランエル∞』『グランエルＴ』『グランエルＡ』『グランエルＧ』『グランエルＣ』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝グランエル！！」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ０→８０００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００

グランエルの攻撃力はコントローラーのライフと同じ数値になる。よってその攻撃力は８０００だ。序盤で召喚に成功していれば究極神オベリスクでさえ攻略は困難になるだろう。

「『機皇帝グランエル∞』の効果発動。１ターンに１度、相手のシンクロモンスター１体を吸収する」

「何だと！？」

ポセイドン達は驚きを隠さない。それもそうだ、自分たちのフィールドにはシンクロモンスターしか存在していないのだからな。

「わたしが吸収するのはアポロン、貴様の『太陽龍インティ』だ！」

機皇帝グランエルの胸部から糸が太陽龍インティに絡みつき、胸部に引き入れようとする。しかし、突然どこかから炎が飛んできてグランエルの効果を妨害した。

「わたしはトラップカード『太陽フレア』を発動した。『太陽龍インティ』がフィールドまたは墓地に存在する時、相手が発動したカードの効果を無効にする」

「ほう…ならばわたしは『機皇帝グランエル∞』でヘルメスの『大地の騎士ガイアナイト』を攻撃する。グランド・スロー・キャノン！」

「おのれ…トラップ発動『ガード・ブロック』、戦闘ダメージを０にして１枚ドローする！」

「ハッハッハッハッハッ！『グランエルＡ』効果発動。戦闘で破壊したシンクロモンスター１体を吸収する！」

何と、機皇帝グランエルは次元に穴をあけ、墓地に送られたはずの大地の騎士ガイアナイトを引きずり出して吸収した。

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ８０００→１０６００

「まだだ、機皇帝グランエルは吸収したシンクロモンスターで相手モンスターを攻撃することができる。吸収した『大地の騎士ガイアナイト』で『月影龍クイラ』を攻撃する！」

縛られたガイアナイトは、月影龍クイラに槍を放つ。クイラはそれを止める手段を持たずに破壊された。

Ａｐｏｌｌｏｎ　ＬＰ８０００→９２００

「『月影龍クイラ』が攻撃対象になった時、攻撃対象モンスターの攻撃力の半分ライフを回復する…ガイアナイトの攻撃力は２６００、だから１３００ポイント回復した」

「だが、１００ダメージは受けてもらった…わたしはこれでターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ１０６００
＋大地の騎士ガイアナイト
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００
機皇連召
伏せカード×１

「くっ…わたしのターン！ギシルノドンを守備表示に変更する。カ

ードを2枚伏せてターンエンドだ」

Ｐｏｓｅｉｄｏｎ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
神海竜ギシルノドン　ＤＥＦ１８００
伏せカード×３

「最高神の1柱ともあろう者が防戦一方とはな。やはりわたしの敵ではない」

スレイは3人をどうでもいい目で見つめる。それなりにこの3人の実力に期待していただけに、ガッカリしたようだ。

「ポセイドンを侮辱するとは、何たる無礼者！わたしのターン、わたしは魔法カード『リバースフォール』を発動する！相手フィールド上に自分のライフ以上の攻撃力を持つモンスターが存在する時、フィールド上のカードをすべて破壊する！！この効果で破壊されたカードの効果は無効になる」

ヘルメスはポセイドンの侮辱に対して激昂し、フィールドをすべて一掃しようと試みる。４人ともそれを防ぐ手段はなく効果自体は成立し、スレイの機皇帝グランエル、伏せカード『インフィニティ・チェンジ』、アポロンのインティ、ポセイドンのギシルノドンと伏せカードはすべて破壊された。…しかし。

「…『機皇連召』効果発動。わたしのフィールドのモンスターがカード効果で破壊されたことにより、デッキから『ワイズ・コア』を特殊召喚して破壊する。『ワイズ・コア』がカード効果で破壊され

た時、デッキ・手札・墓地から『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルT』『ワイゼルA』『ワイゼルG』『ワイゼルC』を特殊召喚する。合体せよ機皇帝ワイゼル！！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ２５００
ワイゼルＴ　ＡＴＫ５００
ワイゼルＡ　ＡＴＫ１２００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ１２００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ８００

「「何！」」

「バカな！？なぜフィールドにカードが残っている！？」

スレイのフィールドにはただ1枚、機皇連召のカードが残っていた。それを見た3人は大きく目を見開き驚きの声を上げる。

「お前達が機皇帝グランエルに対する対抗手段がカード効果による除去しかないのは目に見えていた。『機皇連召』を排除すれば確かに機皇帝は召喚されなくなる。しかし、このカードを除去または無効にすることはできない。何もすることがないのであればターンを終了してもらう」

「ターン…エンド」

Ｈｅｒｍｅｓ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
無し

「ヘルメス、お前の手札には本当に何もないのか!?」

ポセイドンはヘルメスに問う。だが、ヘルメスは本当に申し訳なさそうに

「…すまない、逆転の手札はあった」

と告げた。

「ならばなぜ!?」

「…ポセイドン、わたしは踊らされている気がしてならない。スレイを封印することで、おそらく次の最高神の王の座はこのスレイ封印を決定した奴が就くだろう」

「何!」

「つまり、この作戦は奴が私欲で決定したように思えるのだ。それだけではない、今思えばこの作戦を決定した最高神は今まで見たことがない。何者かが最高神議会に侵入し、動きを錯乱させている」

3人はスレイを見る。スレイはやはり無表情で構えており、いつでも戦いに戻る準備をしている。戦いの神が戦いの最中に油断することはない。

「…早くしてくれないか?スクルドはわたしの帰りを待ってくれている。わたしがスクルドを待たせるということはしたくない」

…わたしがここに来てから人間時間でもう1時間は経過する。スク

ルドにどう謝ればいい？

「…スレイ、詫びさせてほしい。わたし達は間違っていたようだ。しかしデュエルは続ける、それがわたし達のお前に対する礼儀だ。わたしはカードを1枚伏せてターンエンド」

Ａｐｏｌｌｏｎ
ＬＰ９２００
手札×０
フィールド
伏せカード×１

「…わたしのターン」

スレイはポセイドン達の謝罪に対しては返事をせずにカードをドローする。それは、決して許さなかったわけではなく、自分から謝ることはできるが、他人が謝ってきた時にどう返せばいいのか知らないだけだ。

ポセイドン達のフィールドにモンスターはいない。対してわたしには機皇帝ワイゼルがある。機皇帝ワイゼルがあれば手札もほとんどないこいつらのライフを０にするのは容易…早いところ決着をつけて帰りたい。

「トラップ発動『太陽熱線』。墓地に『太陽龍インティ』が存在する時、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「！！」

機皇帝ワイゼルはアポロンの墓地から噴出した炎によって焼き尽く

されてしまった。

「『機皇連召』の効果は発動しない。わたしは『機皇兵スキエル・アイン』を召喚。さらに魔法カード『機皇召集』『機皇帝の賜与』を発動し、デッキから『機皇神マシニクル∞？』を特殊召喚し、2枚ドローする」

…勝利の女神はわたしに勝利をもたらすようだ。……神ともあろうものが女神頼みか。いや、案外神頼みも悪くはないかもしれないな。

「わたしは『機皇神マシニクル∞？』を生贄に『機皇神帝エクシニクル∞』を特殊召喚する。このカードの攻撃力・守備力はわたしの墓地の『機皇』モンスターの攻撃力の合計となる」

機皇神帝エクシニクル∞　ＡＴＫ５８００

「『機皇神帝エクシニクル∞』でアポロンにダイレクトアタック！」

「そうはさせん！」

ヘルメスが手札からカードを1枚ディスクにセットした。

「トラップカード『ダブル・カウンター』！相手が2回以上特殊召喚したターンの攻撃宣言時に発動し、そのモンスターの攻撃を無効にして破壊！破壊するモンスターの攻撃力の2倍のダメージを与える！！」

「何！？」

エクシニクルの攻撃は宇宙から飛んできた2つのエネルギー体に弾

かれ、スレイに直撃した。本来ならばエクシニクルの効果が使用できるところだが、ダブル・カウンターの効果にはチェーンできないため破壊される。

「…やったか？」

煙が晴れ、視界がよくなる。

「ヘルメス、そのセリフは死亡フラグだ。わたしは手札より『機皇蹟』を発動した。ライフが０になった時、『機皇神』３種類を除外し『機皇神帝龍エクスブルム』を特殊召喚する！！」

スレイは手札、墓地から『機皇神帝エクシニクル∞』『機皇神帝フィニシクル∞？』『機皇神龍アステリスク』を取り出して除外する。

『キュオオオオオオオオオオオ！』

スレイの後ろに次元の穴が開き、中から2枚の翼を持ち全長１０ｋｍを誇る巨大な機械龍が飛翔する。

機皇神帝龍エクスブルム　ＡＴＫ１００００

「『機皇神帝龍エクスブルム』でヘルメスにダイレクトアタック。アルティメット・インフェルノ！」

エクスブルムの攻撃を阻むカードは何もなかった。ヘルメスもこれを防ぐ手段は持ち合わせておらず、直撃する。

「……っ！」

Ｈｅｒｍｅｓ　ＬＰ８０００→－２０００

「ターンエンド。『機皇神帝龍エクスブルム』は相手の魔法・罠・モンスター効果では破壊されず、効果の対象にもならない。さらにエクスブルムの効果は無効にならず、ライフ０でも敗北にはならない。そしてシンクロモンスターを特殊召喚した場合、そのシンクロモンスターの攻撃力の２倍のダメージをシンクロ召喚したプレイヤーは受ける…」

まだもう１つだけ…自分の墓地に存在する機皇帝のパーツカードをゲームから除外することでこのカードがフィールドを離れるのを無効にする効果があるが、この効果を使うことは滅多にない。

Ｓｌａｙ
ＬＰ０
手札×０
フィールド
機皇神帝龍エクスブルム　ＡＴＫ１０００
機皇連召

「わたしのターン！」

ポセイドンはエクスブルムを見て戦いの血を躍らせる。例え勝利が不可能だとしても、その不可能にどこまで挑むことができるか試してみたくなる。

「わたしは魔法カード『天よりの宝札』を発動する。互いのプレイヤーは手札が６枚になるようにカードをドロー。そして『深海のディーヴァ』を召喚、その効果によってデッキから『ニードル・ギルマン』を特殊召喚する！」

「またレベル5か。カタストルではエクスブルムは倒せないぞ」

カード効果では破壊されず、効果の対象にもならない。大半のバウンスや除外は対象を取る。いや…何体か対象を取らないバウンスや除外効果を持つモンスターはいることは確かだが…。

「わたしは墓地から『ニードル・ギルマン』を除外し、『水の精霊アクエリア』を特殊召喚する！レベル3の『ニードル・ギルマン』とレベル4の『水の精霊アクエリア』にレベル2の『深海のディーヴァ』をチューニング！！大いなるトライデント、その力を解放し究極の能力を放て！シンクロ召喚『氷結界の龍トリシューラ』！！トリシューラのモンスター効果発動！スレイ、お前の手札1枚と『機皇神帝龍エクスブルム』と墓地の『機皇神マシニクル∞？』を除外する！！」

「『機皇神帝龍エクスブルム』効果発動、ポセイドン、５４００ダメージを受けるがいい！」

エクスブルムは機械の翼から無数の光弾を放ち、トリシューラは3つの首から吹雪を吐きだす。

ポセイドン　ＬＰ８０００→２６００

3つの吹雪と光弾が衝突し、大爆発を起こす。

「『機皇神帝龍エクスブルム』効果発動！墓地から『ワイゼルＡ』を除外し、フィールドに留まることができる」

「何！！」

エクスブルムに向かう吹雪の前に、ワイゼルＡが出現して吹雪を止めた。

「残念だったなポセイドン。確かにトリシューラは対象を取らずにカードを除外することができる優れたカード。だがやはり、シンクロモンスターにエクスブルムを倒すことはできない」

「…ターンエンド」

Ｐｏｓｅｉｄｏｎ
ＬＰ２６００
手札×４
フィールド
氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００

「わたしのターン。ポセイドン、感謝する。魔法カード『太陽の復活』を発動。わたしは『太陽龍インティ』を墓地から特殊召喚し、その攻撃力を０にする。そして、この効果によって特殊召喚されたインティによって発生する自分への戦闘ダメージは０になる」

太陽龍インティ　ＡＴＫ３０００→０

アポロンはまだ諦めていない。自らの手を尽くして勝利をつかみ取ろうとエクスブルムに抵抗する。

「ほう…」

さすがはオリュンポス十二神。その力は最高神ゼウスを見ればわかる通りかなりの物だ。戦意が喪失しないのもプライドがあるからな

のか？

「わたしは魔法カード『月の引力』発動。墓地に『月影龍クイラ』が存在する時発動し、このターン『太陽龍インティ』は戦闘では破壊されず、『太陽龍インティ』が戦闘を行った場合、相手モンスターを全て除外する！」

「だが『機皇神帝龍エクスブルム』は墓地の機皇帝のパーツを除外することでフィールドに留まる。墓地には１４枚のパーツ、残り１４回対象を取らないバウンスか除外効果を発動する必要がある」

この絶望的状況の中、最後にどのような抵抗をする？

「行くぞ！『太陽龍インティ』で『機皇神帝龍エクスブルム』を攻撃！」

４つの首から炎を吐きだし、エクスブルムを狙う。エクスブルムはそれを、翼を羽ばたかせてかき消す。

「『月の引力』効果発動。相手モンスターを全て除外する！」

宇宙から巨大な月の欠片が１つ飛来し、エクスブルムを襲う。エクスブルムは咆哮を上げた。

「『機皇神帝龍エクスブルム』の効果発動、墓地から『ワイゼルＴ』を除外する！」

月の破片は突然現れたワイゼルＴに衝突してしまい、エクスブルムには届かなかった。

「スレイ、確かにエクスブルムは無敵に近い耐性を誇るモンスターだ。どうやらわたしには攻略できないらしい。だが、わたしはエクスブルムと戦うことができたことを誇りに思う。最高神の頂点を相手にここまで戦うことができただけでも満足だ、ターンエンド」

Ａｐｏｌｌｏｎ
ＬＰ９２００
手札×５
フィールド
太陽龍インティ　ＡＴＫ０

「わたしのターン。カードを１枚伏せる。わたしは『機皇神帝龍エクスブルム』で『太陽龍インティ』を攻撃。アルティメット・インフェルノ！」

「うおおおおおおおおおお！」

Ａｐｏｌｌｏｎ　ＬＰ９２００→－８００

「わたしはこれでターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ０
手札×６
フィールド
機皇神帝龍エクスブルム　ＡＴＫ１００００
機皇連召

「わたしのターン！わたしは速攻魔法『氷結のトライデント』を発動、エンドフェイズまでトリシューラの攻撃力をエクスブルムの攻

撃力分だけアップさせる！」

氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００→１２７００

「これがわたしの最後の攻撃だ。『氷結界の龍トリシューラ』で『機皇神帝龍エクスブルム』を攻撃！ブリザード・ドライ！」

トリシューラは咆哮と共に吹雪を吐き、エクスブルムを攻撃する。ポセイドンはその光景を見て満足そうに笑みを浮かべた。

「『機皇神帝龍エクスブルム』効果発動。墓地から『ワイゼルＧ』を除外する」

エクスブルムの前にワイゼルＧが出現し、トリシューラの攻撃は阻まれた。

「…ターンエンド」

「わたしのターン。『機皇神帝龍エクスブルム』で『氷結界の龍トリシューラ』を攻撃。アルティメット・インフェルノ！」

Ｐｏｓｅｉｄｏｎ　ＬＰ２６００→－４７００

～～～神界～～～

「ちっ、使えねぇな。せっかく最高神に化けて最高神議会を開き、スレイを追い詰めたと思ったのによォ」

「まあ、所詮は小手調べだ。どうせ我らは幹部の言いなりなのだから幹部の言うとおりにしていればいい」

「ちっ、ディファ様ももう少しマシな作戦を思いつかないものかねぇ…俺たちの身にもなってほしいぜ、魔界に帰るぞ」

2人の悪魔は最高神の姿から悪魔の姿に戻り、時空の扉を開いて魔界に帰って行った。

～～～～～～～～

「すまなかった、スレイ」

「……気にするな」

スレイは、謝罪に対する答え方を知らないが、自分で考えられる答え方で返しておいた。その後、ポセイドン達は神界に帰り、スレイも校長室に戻った。

その後、スクルドが多少不機嫌だったのはスレイにとっては不運な出来事だった。

第１２１話　長期休暇１　一難去ってまた一難（後書き）

次回「長期休暇２」

ウルズ「で、５章始まったわね」

スクルド「そうだね。で、あとがきで何かやるって言ってたけど、何やるの？」

ヴェルザンディー「とりあえず最強カード紹介はするみたいよ。あとは今回の話の裏話的なことをやるらしいわ…」

スクルド「裏話？まあいいや、とりあえず今日の最強カードはやっぱりこれだね。多分」

『機皇神帝龍エクスブルム』
レベル１２　闇属性　機械族　ＡＴＫ１００００　ＤＥＦ０
このカードは通常召喚できない。『機皇蹟』の効果でのみ特殊召喚することができる。このカードがフィールド上に存在する時、コントローラーはライフが０でも敗北しない。このカードは相手のカード効果では破壊されず、カード効果の対象にもならない。このカードがフィールドを離れる場合、代わりに自分の墓地から『Ｔ』『Ａ』『Ｇ』『Ｃ』と名のつくカードを１枚除外することができる。このカードがフィールド上に存在する限り、シンクロ召喚したプレイヤーはそのシンクロモンスターの攻撃力の２倍のダメージを受ける。
このカードの効果は無効にされない。

ウルズ「トリシューラじゃないの？」

スクルド「……」

ヴェルザンディー「さて、裏話ね。とりあえずスレイが帰ってきたあとスクルドは不機嫌だったそうだけど、実際どうだったの？」

ウルズ「実際には『ツンとしていて話しかけずらかった』みたいね」

ヴェルザンディー「ツンとしてたっていいことないわよ。普段からスレイに甘えっぱなしなんだから少しは自由にしてあげなさい。スレイはあなただけのものじゃないわ」

ウルズ「独占したいっていうのはわからなくもないわね」

スクルド「む～…」

ヴェルザンディー「ちなみにあとがきでやる企画は回ごとに変わるみたいね。下手したら最強カードだけで終わる日もあるかも…そういう日はその回のオリカの効果を１つ載せるそうよ。オリカがなかったらどうしようもないけど」

ウルズ「そもそもあとがきで何かやろうって思った理由が『あとがきで書くことが何もないから』、作者の無計画性がよくうかがえるわね」

第１２２話　長期休暇２　異空間の敵（前書き）

長期休暇なのにトラブルが絶えない…
前半の十代とのデュエルはおまけです。

最近の出来事

Ｘ－セイバーの強化に悩んでいる作者です。なんとしても究極神は抜きたくない。が、デュエルで使うのは気が引ける。まあ、身内なのでいいんですがね（笑）手札断札を２枚積んでみました。手札抹殺が抜けましたが。あとはガラハドを抜いてクリッターを投入したくらいですね。早くボガードナイトとダークソウルに来てほしいものです。

第１２２話　長期休暇２　異空間の敵

～～～デュエルアカデミア・港～～～

「……やはり船は嫌いだ」

わたし達は船に乗り、長期休暇中はデュエルアカデミアを離れるつもりでいる。学年が増えたせいで生徒の数が増え、時空間移動を使用するわけにもいかないので船を使うことになってしまった。本当は昨日には出発する予定だったのだが、思った以上に準備に手間がかかってしまった。

「おい、スレイ？」

突然わたしに話しかけてきたのはデュエルアカデミア最強の実力者であろう遊城十代。十代は休み中に町で仲間と買い物をして帰ってくるらしい。

「…何の用だ、十代」

この船の屋上にいるのは今現在わたしと十代、十代の仲間たちのみ。他の生徒は下の階にいる。

「いや、デュエルしないか？」

「…いいだろう」

スレイは空中に浮き、十代を見下ろす形になる。

「行くぞ、十代」

「「デュエル」」　Ｊｕｄａｉ　ｖｓ　Ｓｌａｙ

「わたしの先攻。わたしは『Ｘ－セイバーガラハド』を攻撃表示で召喚。ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
Ｘ－セイバーガラハド　ＡＴＫ１８００

「俺のターン！スパークマンを召喚！ガラハドに攻撃だ、スパーク・フラッシュ！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ４０００→３７００

「ほう…たった１度斎王戦で見ただけでガラハドの効果を記憶しているとはな。いいだろう、この程度、持っていくがいい」

「ターンエンド」

Ｊｕｄａｉ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン　ＡＴＫ１６００

「わたしのターン。カードを1枚伏せて魔法カード『手札抹殺』発動。互いに手札をすべて捨て、捨てた枚数分ドローする。わたしが捨てたのは4枚、よって4枚ドロー」

十代の手札枚数は5枚。十代は多少悔しそうな表情を浮かべて手札を墓地に置き、新たに5枚ドローした。おそらく何か良い手があったのだろう。

わたしが捨てたのは『ＸＸ－セイバーフォルトロール』『ＸＸ－セイバーレイジグラ』『ＸＸ－セイバーガルセム』『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』だ。

「わたしは『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を通常召喚。カードを2枚伏せてターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ３７００
手札×１
フィールド
ＸＸ－セイバーフラムナイト　ＡＴＫ１３００
伏せカード×３

「俺のターン！『ミラクル・フュージョン』発動！墓地のフェザーマンとバーストレディーを除外し現れろ『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン』！スパークマンでフラムナイトを攻撃だ！」

「『ＸＸ－セイバーフラムナイト』効果発動。1度だけ相手モンスター1体の攻撃を無効にする」

だが2体目の攻撃はさすがに止められないか。

「フレイム・ウィングマンでフラムナイトを攻撃！フレイム・シュート！」

「トラップ発動『ガトムズの緊急指令』。フィールドに『Ｘ－セイバー』が存在する時、互いの墓地から『Ｘ－セイバー』２体を特殊召喚する。わたしは『ＸＸ－セイバーレイジグラ』『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を特殊召喚する。レイジグラの効果により、墓地から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を手札に加える」

「攻撃は続行だ！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ３７００→２９００

「フレイム・ウィングマンの効果！戦闘で相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

フレイム・ウィングマンが炎を直接スレイに向けて発射する。スレイは特になんとも思わず攻撃を受けた。

Ｓｌａｙ　ＬＰ２９００→１６００

「……」

さすがに主人公だけあるか…！Ｘ－セイバーに対してここまで善戦するとは…。

「カードを１枚伏せてターンエンドだ！」

Ｊｕｄａｉ
ＬＰ４０００

手札×４
フィールド
Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン　ＡＴＫ２１００
Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン　ＡＴＫ１６００
伏せカード×１

…だが、わたしのフィールドに２体のＸ－セイバーが召喚された今、十代に勝ち目はない！

「わたしのターン。わたしは２体以上の『Ｘ－セイバー』がいることにより手札の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する！さらに２体目のフォルトロールを特殊召喚！」

「なんだって！？」

「まだだ、『ＸＸ－セイバーフォルトロール』の効果により墓地から『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を特殊召喚。レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』にレベル３の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング！シンクロ召喚『ＸＸ－セイバーガトムズ』！ガトムズの効果発動、レイジグラを生贄に十代の手札を１枚捨てる！」

ガトムズが剣を振って十代の手札を１枚斬る。十代はそれを墓地に送った。

「『ＸＸ－セイバーフォルトロール』のモンスター効果により墓地から『ＸＸ－セイバーレイジグラ』を特殊召喚し、墓地のフォルトロールを手札に戻す」

「こ、これって無限ループ！」

十代の仲間…丸藤翔が気付いて驚きの声を上げた。この世界で無限ループはかなり珍しいようだ。

「そう。わたしは手札に戻したフォルトロールを特殊召喚し、効果を使用したフォルトロールとレイジグラを生贄に十代の手札2枚を墓地に送る。そして再びフォルトロールの効果を使用し、墓地のレイジグラを特殊召喚、フォルトロールを手札に戻す。最後にレイジグラを生贄に、十代の最後の手札を墓地へ」

十代の手札はこれで0枚。スレイは手札からカードを1枚取り出してディスクに差し込んだ。

「魔法カード『セイバースラッシュ』。『X－セイバー』の数だけフィールド上の表側表示のカードを破壊する。わたしはスパークマンとフレイム・ウィングマン、そしてわたしのフォルトロールを破壊する」

これで十代のフィールドにはカードが1枚。わたしのフィールドにはフォルトロールとガトムズ。

「ガトムズとフォルトロールでダイレクトアタック」

ヒーローのように手札消費が激しいデッキはX－セイバーとは相性が悪い。今回は十代が悪かったのではなく、単純にデッキの相性が悪かっただけだ。星界の三極神ならば攻略できるはずだ。……機皇帝？融合モンスター相手に使うわけがないだろう。

「トラップ発動！『聖なるバリア－ミラーフォース－』！」

「カウンタートラップ『神の宣告』。ライフ半分をコストにモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚または魔法・罠の発動と効果を無効にして破壊する」

Ｓｌａｙ　ＬＰ１６００→８００

「なんだって！うわあああああああ」

Ｊｕｄａｉ　ＬＰ４０００→－１５００

スレイは十代のところに行き、十代のデッキトップをめくった。十代の限りない可能性を考えて、もしも十代に次のターンが回っていた場合どうなっていたか見てみたかっただけだ。

「『ミラクル・フュージョン』…！」

このターンの攻撃を防がれていたらわたしは『Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フレア・ウィングマン』を召喚され負けていたというのか…！

「（やはり侮れない…いや、侮れないからこそ味方になれば強力か）」

「あ～悔しい！またやろうぜ！」

「……機会があればな」

スレイは無表情のまま十代の横を通り過ぎて、２階の廊下に行った。

しかし…

「……ここは…なぜだ…どういうことだ?」

何回この場所をループしている?なぜこの場所に戻ってくる?

「…トール!オーディン!ロキ!」

オーディン達はおろか、他の人間がいる気配がしない。というよりも、この空間だけ引き離されたという感じだ。なぜ2階に来た瞬間にこのようなことになった?

「…一体…?」

抜け出そうと思えば抜け出せるだろう。しかし、わたしをこの空間に閉じ込めた者だけでも見つけて排除しなければならない。オーディン達が巻き込まれるのはごめんだ。

「!!」

突然空間の裂け目から剣が1本飛び出して、スレイの腕を1本持って行った。スレイはすぐに腕を再生してアーティスを振り下ろし、剣を粉砕した。

「ここにじっとしているのも危険か…」

心臓を持って行かれるのは避けたい。神力の供給が途絶えれば、戦闘能力は無いに等しいからだ。戦闘能力がなくなろうともロキくらいならば倒せるが…。

スレイがそんなことを考えていると、今度は壁から棘がスレイを縛

ろうと襲ってくる。
スレイは次から次へと襲いくる棘をかわしながらアーティスで斬る。

「…相手は策士か」

ここまで異常な手段で襲ってくるのも普通の襲撃者ならばやらない。
普通の襲撃者ならば直接姿を現し襲ってくる。

「……」

棘の1つに神力で創った爆弾を付けて異次元に送り返す。すると、
異次元の奥で爆発した音が聞こえ、中から何かが飛び出してきた。

「まさかこんな手段であぶりだされるなんて…！！」

「…スクルド？」

見た目はスクルドそのものだが…違うな、人形か。どうやらこの空
間を創り出した者はすでにどこかに逃げてしまったようだ。この空
間の支配権はこの人形にあるらしい。

「ならば…」

倒す。それだけだ。

「行くぞ、人形」

ゴッドモーメントを起動して浮遊する。人形はスクルドと同じよう
に杖の中にデッキを取り込み、カードを5枚自分の前に浮かせた。
スレイはゴッドモーメント起動後に周りの壁や天井などを破壊した。

狭いところで戦うのは好きではない。

「「デュエル」」　Ｓｌａｙ　ｖｓ　Ｅｎｅｍｙ

～～～船・屋上～～～

「で、スレイがどこにもいないんだけど」

「いや、我に言われても仕方がないことなのだが…我も突然消えたことには驚いたぞ。ほんの３０分前にはまだいたはずなのだが…」

「今は信じて待つしかない。きっとすぐに帰ってくるだろう」

～～～～～～～～

「先攻はわたしがもらう。ドロー。わたしはモンスターを伏せターンエンド」

相手の戦力は分からない。ならば、ピンポイントでシンクロモンスターを封じに行く機皇帝よりもこのデッキの方がはるかに安定性は高いはずだ。

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド

セットモンスター×１

「私のターン。私は『暗黒界の騎士ズール』を召喚。ズールで伏せモンスターを攻撃する」

スクルドの姿でまったく違う動作や口調…かなり不愉快だ。デュエル中でなければ、この場で真っ二つに切り裂いて粉々に粉砕するところだろう。

「伏せモンスターは『素早いビッグハムスター』。このモンスターのリバース効果によって、デッキから『極星獣タングニョースト』を裏側表示で特殊召喚する。ビッグハムスターの守備力は１８００、ズールの攻撃では破壊されない」

「私はカードを１枚伏せ、ターン終了」

Ｅｎｅｍｙ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
暗黒界の騎士ズール　ＡＴＫ１８００

「わたしのターン！」

こんな人形すぐに消し去ってやろう。わたしの前にスクルドの偽物を送り込んだことを後悔させてやる…。

「わたしは裏側表示の『極星獣タングニョースト』を反転召喚する。このカードが守備表示から攻撃表示になった時、デッキからレベル４以下の『極星獣』１体を特殊召喚することができる。現れろ、『

極星獣グルファクシ』！そして『クリッター』を通常召喚。レベル３の『クリッター』と『極星獣タングニョースト』にレベル４の『極星獣グルファクシ』をチューニング。星界の扉が開くとき、古の戦神がその魔槌を振り上げん。大地を揺るがし、轟く雷鳴とともに現れよ、シンクロ召喚、『極神皇トール』！」

久しいな、星界の三極神。これだけの力を人形相手に使ったのは無駄だったか？いや、オーバーキルくらいはしなければわたしの気が済まない。

「『クリッター』の効果により、デッキから『極星天ヴァルキュリア』を手札に加える。『極神皇トール』で『暗黒界の騎士ズール』を攻撃、サンダーパイル！」

「うあああああああ！」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ８０００→６３００

スクルドを痛めつけているようでいい気がしない。正直言ってこれで本物だったらわたしはわたしを殺すことができるだろう。そういえば、前にもスクルドの偽物が来たことがあったか。

「わたしはこれでターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×６
フィールド
極神皇トール　ＡＴＫ３５００
素早いビッグハムスター　ＤＥＦ１８００

「私のターン。私は『暗黒界の取引』を発動。互いに1枚ドローし、1枚捨てる」

「……何が狙いだ？」

1枚ドローし、手札1枚を捨てる。その後、人形は笑った。

「『暗黒界の導師セルリ』効果発動。相手フィールド上に特殊召喚する！」

「…！！」

スレイのフィールドに暗黒界の導師セルリが現れ、その効果を発動する。

「このカードが特殊召喚に成功した時、相手は手札を1枚捨てる。召喚されたのはあなたのフィールドだから、捨てるのは私…私が捨てるのは『暗黒界の魔神レイン』！」

「『暗黒界の魔神レイン』だと！」

「効果は知ってるよね？『暗黒界の魔神レイン』が相手のカード効果で手札から墓地に捨てられたときこのカードを特殊召喚して、相手フィールド上のモンスターか魔法・罠カードをすべて破壊する。私が破壊するのは当然…モンスター」

スレイのフィールド上のモンスターがレインの放った黒い波動で破壊された。さらに、敵は暗黒界の魔神レインでスレイに直接攻撃を行う。

「……」

Ｓｌａｙ　ＬＰ８０００→５５００

「へぇ、全然痛がらないんだ。カードを伏せてターンエンド」

「この程度、痛みなどない。墓地に存在する『極神皇トール』の効果発動。このカードが墓地に送られたターンのエンドフェイズにこのカードを特殊召喚する！来い『極神皇トール』！」

復活した極神皇トールは、人形に向けて雷を放つ。人形はそれを、軽々と避けた。

「『極神皇トール』はこの効果で復活した時、相手に８００ポイントダメージを与える」

Ｅｎｅｍｙ
ＬＰ５５００
手札×３
フィールド
暗黒界の魔神レイン　ＡＴＫ２５００
伏せカード×１

「わたしのターン！貴様が先程発動した『暗黒界の取引』の効果によってわたしの手札には既に第２の神召喚の布石がそろった。『極星霊ドヴェルグ』召喚。このカードの召喚に成功したターン、もう１度『極星』モンスター１体を特殊召喚できる。『極星霊リョースアールヴ』を通常召喚。そして、『極星霊リョースアールヴ』の召喚に成功した時、自分フィールド上のモンスター１体を選択し、そ

のモンスターとリョースアールヴのレベルの合計のモンスター1体を手札から特殊召喚できる。わたしが選択するのは『極星霊ドヴェルグ』だ。手札からレベル5の『極星』モンスター1体を特殊召喚する！来い『極星霊デックアールヴ』！」

「バカな！本当に第2の神を…！」

「……！！」

スレイの放つプレッシャーがより一層強くなる。スクルドの声でスクルドが絶対に言わないような言葉を聞いたのが怒りに触れたようだ。人間ならばこのプレッシャーだけで気絶するだろう。

「レベル1の『極星霊ドヴェルグ』とレベル4の『極星霊リョースアールヴ』にレベル5の『極星霊デックアールヴ』をチューニング。星界より生まれし気まぐれなる神よ、絶対の力を我らに示し世界を笑え。シンクロ召喚『極神皇ロキ』！」

道化師のような格好をした背の小さい神が現れる。背が小さいとは言っても、高層ビル程度はあるだろう。

「魔法カード『二重召喚』、このターン、もう1度通常召喚することができる。現れろ『極星天ヴァルキュリア』！」

短剣を持ち、翼をはやした少女がフィールドに現れる。

「何！？」

「『極星天ヴァルキュリア』の召喚に成功した時、手札2枚を墓地に送り『エインヘリアル・トークン』2体を守備表示で特殊召喚す

る。レベル4の『エインヘリアル・トークン』2体とレベル2の『極星天ヴァルキュリア』をチューニング。北辰の空に在りて、全知全能を司る王よ。今こそ星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚、天地神明を統べよ！最高神『極神聖帝オーディン』！！」

2体の神とは比べ物にならないほど巨大な隻眼の神が、その身に見合う巨大な槍…グングニルを持って天空から光臨した。

～～～船・2階～～～

「む、わたしの『極神聖帝オーディン』が共鳴している…！」

「我の『極神皇トール』もだ」

「僕の『極神皇ロキ』もしてるよ。…スレイがどこかで戦っているんだ」

「…三極神を使用しなければならないほどの相手か。一体…」

～～～～～～～～

「1ターンで2体の神を召喚しただと…こんなことが…！」

「黙れ、わたしは『極神聖帝オーディン』の効果を発動する。エンドフェイズまで幻神獣族モンスターを効果範囲とする魔法・罠の効果を無効にする！インフルエンス・オブ・ルーン！」

極神聖帝オーディンの効果は相手ターンにも使用することができる。魔法・罠は効かないも同然だ。

「『極神皇ロキ』で『暗黒界の魔神レイン』を攻撃する。ヴァニティ・バレット！」

極神皇ロキが指先に黒いエネルギーを集めて発射した。ロキの攻撃を阻むものは何もなく、レインはしばらく耐えていたが、とうとう耐えきれなくなり破壊された。

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ７２００→６４００

「トラップカード発動『暗黒の怨念』！自分フィールド上に存在する『暗黒界』を名のついたモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、そのモンスターが相手のカード効果によって捨てられた時に発動する効果を発動できる。『暗黒界の魔神レイン』のモンスター効果！このカードをフィールド上に特殊召喚し、相手モンスターをすべて破壊する！」

「ほう…」

耐性があるのは魔法・罠カードの効果のみ。モンスター効果という抜け穴を突いてきたか。面白い。

「ターンエンド。蘇れ『極神皇トール』『極神皇ロキ』『極神聖帝オーディン』！！」

トールが異次元の底から上昇し、ロキは空に穴をあけて復活。オーディンは天空から光臨した。

「トールの効果発動、８００ポイントのダメージを与える！ロキの効果発動。墓地からトラップカード『リビングデッドの呼び声』を手札に加える。そしてオーディンの効果発動、１枚ドロー！」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ６４００→５６００

Ｓｌａｙ
ＬＰ５５００
手札×２
フィールド
極神聖帝オーディン　ＡＴＫ４０００
極神皇ロキ　ＡＴＫ３３００
極神皇トール　ＡＴＫ３５００

「私のターン」

「『極神聖帝オーディン』の効果により、エンドフェイズまで幻神獣族モンスターへの魔法・罠の効果を無効にする！」

「くっ…私は魔法カード『暗黒界の禁呪』を発動。私のライフ２００ポイントをコストに、自分の手札・デッキ・墓地から『暗黒界』と名のつくモンスター１体を特殊召喚して、相手のカード効果によって手札から捨てられた時の効果を使用する。私が特殊召喚するのはデッキの『暗黒界の魔神レイン』！！相手フィールド上のモンスターカードをすべて破壊する」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ５６００→３６００

レインの放った闇の波動によって再び三極神が破壊される。

「貴様…1度ならず2度までもわたしの神を…」

「2体のレインでダイレクトアタック。スレイの痛覚はどれ程耐えられるか楽しみだね」

「人形ごときがわたしの名を呼ぶな、不愉快だ！」

レインの攻撃をスレイは片手で弾き飛ばし、もう1体のレインの攻撃は全身から放つ神力で防いだ。

Ｓｌａｙ　ＬＰ５５００→５００

「残りライフ５００…絶望的だね。私はこれでターンエンド」

「エンドフェイズに三極神を蘇生！トールの効果により８００ポイントダメージを与え、オーディンの効果で1枚ドロー！墓地にトラップはないためロキの効果は発動しない」

Ｅｎｅｍｙ
ＬＰ２８００
手札×３
フィールド
暗黒界の魔神レイン　ＡＴＫ２５００
暗黒界の魔神レイン　ＡＴＫ２５００

「ドロー！『極神聖帝オーディン』の効果によって魔法・罠の効果を無効にする！行くぞ！『極神聖帝オーディン』と『極神皇トール』で『暗黒界の魔神レイン』２体を攻撃する！サンダーパイル、ヘヴンズ・ジャッジメント！」

オーディンは槍でレインを突き刺し、トールはミョルニルで叩き潰した。その衝撃波が人形に直撃した。

「あああああああああああああああああっ！」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ２８００→３００

「これで終わりだ、『極神皇ロキ』でダイレクトアタック！ヴァニティ・バレット！」

「手札から『バトルフェーダー』のモンスター効果発動。このカードを守備表示で特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる」

次のターン、スレイのフィールドは私の魔法カード『ブラック・ホール』の効果で全滅。そして『暗黒界に続く結界通路』の効果でレインを蘇生してダイレクトアタックすれば私の勝利。

「わたしは魔法カード『ブラック・ホール』を発動。フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

「なっ！自分から自分のモンスターを破壊する！？」

「忘れてはいまいな、『極神皇トール』が自身の効果で復活した時、相手プレイヤーに８００ポイントのダメージを与える！」

人形のライフは残り３００、この効果が決まればわたしの勝利。本当はもっと早くこいつを叩き潰したかったところだが思った以上にてこずってしまった。

「しまった！」

「蘇れ三極神！トールの効果によって８００ポイントのダメージを与える！」

「そ、そんなバカな…私の作戦は完璧だったはず…どこで間違えたというのか…」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ３００→－５００

スクルドの偽物が消えると、周りの空間が歪み、強い光が辺りを包んだ。スレイは異空間に閉じ込められる前の２階の廊下に戻り、念のため屋上に向かう。今度は屋上や１階に移動することができ、戻ってきたと確信する。そのあとはオーディン達と合流し、先ほどまで戦っていた敵などについて報告していた。

～～～船の近く・上空～～～

２人の悪魔が上空に浮いており、何か話をしている。

「ち、また失敗かよ。なんで失敗したんだよ…」

「おそらく、ノルンのスクルドの姿で人形を送り込んだのが間違いだったのだろうな。スレイがここまで怒るとは思っていなかった。わたし達はスレイを甘く見過ぎている」

「ああ、逆に攻撃を躊躇させるのにはちょうどいいと思ったんだがな…とんだ勘違いだったぜ。ディファ様になんて報告すりゃいいん

だよ」

「まあ、適当に報告すれば良いだろう、失敗したとな」

2人のうちいかにも賢そうな悪魔が翼を広げて次元の歪みを創り出した。

「ちぇ、また晩飯抜きかよ」

その歪に2人の悪魔は入り込み、魔界へと帰って行った。

第１２２話　長期休暇２　異空間の敵（後書き）

次回「長期休暇３」

ウルズ「久しぶりね、三極神」

スクルド「そうだね。じゃ、今日の最強カード行ってみよっか」

『暗黒の怨念』
通常トラップ
自分フィールド上に存在する『暗黒界』と名のつくモンスターが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、そのモンスターが相手のカード効果によって手札から捨てられた時の効果を発動する。

ヴェルザンディ「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？極神聖帝オーディンじゃないの！？」

スクルド「最初はそれでもいいと思ったんだけど、でもやっぱりこっちのほうが強いかなって思って…」

ウルズ「この最強カード紹介こそ視点が斜め上だと思うのよね。明らかに活躍したカードを差し置いて、サポートカードの紹介をするなんて」

ヴェルザンディ「しかもオリカですわね…まあ、もう１つのオリカの効果も紹介しておきましょうか」

『暗黒界の禁呪』

速攻魔法
２０００ライフポイント払って発動する。自分の手札・デッキ・墓地から『暗黒界』と名のつくモンスター1体を特殊召喚し、そのモンスターが相手のカード効果によって手札から捨てられた時の効果を発動する。このカードの発動と効果は無効にされない。

ウルズ「コストは重いけど便利ね」

スクルド「というか、カードの感想ばっかりで本編には触れていないんだけど」

ヴェルザンディ「じゃあ触れてみるわね。よくスレイは船の中なのに酔わなかったわね」

スクルド「そこ!?いや、きっと船酔いへの耐性ができたんだよ」

ウルズ「あなたはどうしてたの？スクルド」

スクルド「部屋で寝てたよ」

ヴェルザンディ「ダメじゃないの」

スクルド「だって船は苦手なんだもん…」

第１２３話　長期休暇３　ジャック・アトラス再び（前書き）

先に申しあげておきます。今回、スレイの無双モードを止めにかかりました。

最近の出来事

毎日友人が家に5名ほど来てデュエルするのですが、使用するのがみんなガチデッキ…スクラップ、インフェルニティ、アンデット、スカーレッド&シューティングスター（1ターンでどちらか出てくる、シューティングスターは3回以上の攻撃が当たり前）、そして作者のＸ－セイバー…多人数デュエルで調子に乗ると真っ先に潰されるので注意が必要ですね（笑）

第１２３話　長期休暇３　ジャック・アトラス再び

あのスクルドの人形の襲撃から2時間後、船はドミノ町の港に到着した。それから先はオーディンがあらかじめ用意しておいた別荘に移動し、荷物の整理をした。…大した荷物はないが。その先は買い物に出かけることになったのだが、やはりそこで問題が起きる。

「ねえ、この時代だと欲しいものがないんだけど…」

やはりそうなる。未来の時代の方が、物資が充実しているのは当たり前であり、人間は日々新しいものを作りだして暮らしている。未来にならばこの時代にはない食べ物もある。ロキの目的は、やはりその食べ物だった。神々は家電に用はない。大抵の物は魔法や神々の道具でどうにかなるからだ。

「…仕方がない、未来に飛ぶぞ」

ゴッドモーメントを展開する。そして、デッキから3枚のカードを取り出してゴッドモーメントに置く。

「究極神よ、未来へ飛べ！」

次の瞬間、ロキとスレイは光に飲み込まれた。スレイは未来に飛ぶ際に、Ｄ－ホイールを用意していた。その形は、パラドックスが使用していた巨大Ｄ－ホイールの白い部分と黒い部分の色を入れ替えただけのデザインだ。性能においては比較にならないが。

ちなみに、別荘についた時点で別荘の周りには結界を張り、侵入者を防ぐ。2回に及ぶ襲撃があったと考えれば、このぐらいは当たり

前だ。

「ではロキ、３時間後、不動遊星宅の前で集合だ」

「ＯＫ」

スレイは時空間の間で究極神をカードに戻し、デッキに加えた。スレイとロキはそれぞれ別の場所に飛ぶ。ロキは繁華街へ、スレイはライディングデュエルコースへとＤ－ホイールに乗って飛んだ。

「（遊星たちにもわたしの今の状態を知らせておくか…）」

～～～ライディングデュエルコース～～～

「いい風だな」

やはり１週間延期も悪くない。ブルーアイズマウンテンも手に入ったしな。

「ジャック、気を付けろよ。おまえはすぐにクラッシュするんだからよ」

「何だと！クロウ貴様！」

不動遊星ら３名は、延期した大会の前に走り込みをしていた。ちなみに前にディスペアが来た時から、まだ１日しか経っていない。

「…ん？なんだあれは？」

遊星は後ろからものすごい勢いで走ってくるＤ－ホイールに気付いた。

「で、デケェ！」

クロウもそのＤ－ホイールの大きさに驚く。トリシューラ号（仮）よりは小さいが、それでも一般的なＤ－ホイールと比べたらとんでもなく巨大だ。

「…久しぶりだな、不動遊星、ジャック・アトラス、クロウ・ホーガン」

その巨大な黒いＤ－ホイールに乗ったスレイは、３人のシグナーに普通に話しかける。だが、この３人はスレイがディスペアだったなどということは知らない。

スレイのＤ－ホイールはカーブを曲がろうとするたびに部品の一部が道路に擦りつき、火花を散らす。

「何者だ、貴様！」

「敵なら、容赦しないぜ」

当然こうなる。

「わたしの名はスレイ。…ディスペアで在った者」

「何！？」

「そんなバカな！？姿が変わっているだと！？」

「ありえねぇ！」

「…有り得ないかどうか、そしてわたしが本当にディスペアで在った者かはデュエルをすれば分かる」

スレイはすでにゴッドモーメントではなく、普通のディスクをＤ－ホイールにセットし、デュエルの準備を終えている。

「…いいだろう！この俺が相手になってやる！」

「スピード・ワールド２セットオン」

「「ライディングデュエル、アクセラレーション！」」

Ｓｌａｙ　ｖｓ　Ｊａｃｋ

「先攻はわたしがもらう。わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。さらに永続魔法『Ｕｓｐ－機皇連召』発動。ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ４０００
手札×４
スピードカウンター×０
フィールド
機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ１８００
機皇連召

「俺のターン！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　０→１

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　０→１

「俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！このカードは相手フィールドにのみモンスターがいる時、特殊召喚できる。ただし、攻撃力と守備力は半減する！『ダーク・リゾネーター』を召喚！レベル５の『バイス・ドラゴン』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい、シンクロ召喚！我が魂『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

「…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』…１ターン目でエースモンスターを召喚したか」

さすがはシグナー。しかし、レッド・デーモンズ・ドラゴンでわたしを倒すことはできないぞ。

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

「くっ…」

Ｓｌａｙ　ＬＰ４０００→２８００

スレイのＤ－ホイールが衝撃で大きく回転する。スレイは力ずくでＤ－ホイールを制御し、再びバランスを取った。その制御の仕方に、遊星たち３人は目を見開いた。

「あれほど巨大なＤ－ホイールを力ずくで制御するとは…何という奴だ。カードを１枚伏せてターンエンド！」

Ｊａｃｋ
ＬＰ４０００
手札×３
スピードカウンター×１
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
伏せカード×１

「わたしのターン！」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　１→２
Ｊａｃｋ　スピードカウンター　１→２

ジャックのフィールドには攻撃力３０００を誇るレッド・デーモンズ・ドラゴンと伏せカード…わたしのフィールドは機皇連召１枚のみ…。そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンが守備モンスターを攻撃した時、相手フィールド上の守備表示モンスターをすべて破壊する…その効果、利用させてもらう。

「わたしはモンスターを１体伏せ、ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ２８００
手札×４
フィールド
セットモンスター×１
機皇連召

「俺のターン！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　２→３
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　２→３

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で伏せモンスターを攻撃！相手の守備モンスターを攻撃した時、相手フィールド上の守備モンスターをすべて破壊する！デモン・メテオ！」

「…ジャック・アトラス、お前が破壊した『ワイズ・コア』のモンスター効果発動。わたしのフィールド上に存在するモンスターをすべて破壊し、デッキ・手札・墓地からレベル１の『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルＴ』『ワイゼルＡ』『ワイゼルＧ』『ワイゼルＣ』を特殊召喚する、合体せよ機皇帝ワイゼル」

「何！！機皇帝だと！！」

「イリアステル以外に機皇帝を操るのはディスペアしかいない…やはりディスペアだったというのは本当だったのか…」

遊星は冷静にスレイについて判断し、警戒心を解いた。

「ディスペア…いや、スレイ！疑って悪かったな！」

クロウはスレイが本当にディスペアだったのか疑っていたことを謝る。スレイはクロウの方を向く。

「気にするな、いきなり姿が変わり『ディスペアだった』などと言って信じてもらおうと思っていた方がどうかしていた。…今わたしが滞在している過去の世界ではもう１か月以上がたった。この時間軸はまだ１日しか経っていないようだな。…こんなことはどうでもいい、さあ来い、ジャック・アトラス！」

クロウに返事をしたのち、すぐにジャックに視線を戻す。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

Ｊａｃｋ
ＬＰ４０００
手札×３
スピードカウンター×３
フィールド
レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
伏せカード×２

「わたしのターン」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　３→４
Ｊａｃｋ　スピードカウンター　３→４

「わたしは『スピード・ワールド２』の効果発動。スピードカウンターを４つ取り除き、手札の『ｓｐ一』と名のつくカード１枚につき８００ポイントのダメージを与える。わたしの手札には『Ｈｓｐ一機皇召集』『Ｕｓｐ一機皇蹟』『Ｕｓｐ一機皇帝の賜与』の３枚がある。よってジャック、お前には２４００ポイントのダメージを受けてもらう」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　４→０

Ｄ一ホイールからではなく、３枚のカードから雷が迸り、ジャックに当たる。ジャックのＤ一ホイールは衝撃で回転し、何とか体勢を立て直した。

Ｊａｃｋ　ＬＰ４０００→１６００

「さらに『機皇帝ワイゼル∞』効果発動。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を吸収する」

「させん！カウントラップ『闇の幻影』！闇属性モンスターを対象にする魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊する！」

「何だと！」

機皇帝ワイゼルの効果は不発になり、ワイゼルはレッド・デーモンズ・ドラゴンの幻影が放った炎に焼かれて大爆発を起こし破壊された。その直後、スレイは若干顔をしかめて手札から１枚取り出した。

「『機皇兵スキエル・アイン』を召喚する。『Ｈｓｐ－機皇召集』発動、自分のスピードカウンターが０以上ある時に発動し、わたしのフィールド上に『機皇』と名のつくモンスターが存在する場合、デッキから『機皇』モンスター１体を特殊召喚する。現れろ『機皇神マシニクル∞？』！！」

マシニクルにもシンクロモンスターを吸収する効果はある。しかし、ジャックのあの伏せカード…あれがモンスター効果に対して発動する物だとしたら、マシニクルは確実にやられる。この状況でマシニクルを失えばわたしの敗北は決定的。『Ｕｓｐ－機皇蹟』はＵｓｐであるにもかかわらずスピードカウンターが３つ以上必要…わたしのスピードカウンターは０、今ここでライフが０になっても発動できない。

「なっ！攻撃力４０００のモンスターをこれほど簡単に召喚しただ

と！？」

「……」

…そうか、前にデュエルした時に機皇神マシニクルは召喚しなかったのか。

「機皇神マシニクルでレッドデーモンズを攻撃。ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

この攻撃が通り、機皇兵スキエル・アインの攻撃が決まればジャックは２２００ポイントのダメージを受け確実にわたしの勝利。

「トラップカードオープン！『バーニング・ソウル』！！」

「何だと！」

バーニング・ソウル…わたしが知らないカードが存在するというのか…！

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が効果または攻撃対象になった時、手札のチューナーモンスター２体と『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を墓地に送ることでその効果か攻撃を無効にし、エクストラデッキから『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』１体をシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する！現れろ『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！」

機皇神マシニクルの攻撃がレッド・デーモンズ・ドラゴンに向かうが、レッド・デーモンズ・ドラゴンは手札から現れた２体のチューナーモンスターと共に炎に飲み込まれ、大爆発する。そしてその中

から、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが姿を現した。

「バカな…手札のチューナーを墓地に送って『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』をシンクロ召喚しただと…！」

ジャックの墓地のチューナーは3体、よってスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は５０００…！機皇神マシニクル∞？の攻撃力４０００では１０００ポイント及ばない…！いや、それどころか攻撃表示の機皇兵を狙われればわたしのライフは一瞬で0になる。

「ならば…『Ｕｓｐ―機皇帝の賜与』を発動。この効果によってわたしはカードを2枚ドロー。2枚のカードを伏せ、ターンエンド」

『Ｈｓｐ―ブラック・ホール』…ダメだ、このカードではスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに通用しない…。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは相手のカード効果では破壊されず、相手ターンに1度除外してモンスター1体の攻撃を無効にするモンスター。機皇帝の効果ですら吸収できない。何とかして機皇帝グランエルを召喚できれば、グランエルTの効果によってスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンのモンスター効果を無効にすることができるのだが…。守備破壊の効果もなくなってしまった以上、グランド・コアを効果破壊することはないはずだ。やはりあと2ターン耐え切るしかない。スピードカウンターが3つになれば、『Ｕｓｐ―機皇蹟』が使用できる。この効果によって機皇神帝龍エクスブルムを召喚すればスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを倒すのは簡単だ。

Ｓｌａｙ
ＬＰ２８００
手札×２
フィールド

機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００
機皇連召
伏せカード×２

「俺のターン！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　４→５
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　０→１

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『機皇兵スキエル・アイン』を攻撃、バーニング・ソウル！」

「させるものか！永続トラップ『オートディフェンスプログラム』！機械族モンスターが攻撃対象になった時、その攻撃を別のモンスターに移し替えることができる！わたしは『機皇兵スキエル・アイン』を対象とした『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃を『機皇神マシニクル∞？』に移し替え、さらに『機皇神マシニクル∞？』の効果により墓地の『ワイゼルＴ』を除外することで破壊を無効にする！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは体当たりの標的をスキエル・アインからマシニクルに変更して激突する。その衝撃がスレイを襲い、力ずくでのＤ－ホイールの制御を余儀なくさせる。

「ぐっ…」

スレイはコース上に無理やりバランスを取って戻る。

Ｓｌａｙ　ＬＰ２８００→１８００

「『オートディフェンスプログラム』第２の効果を発動…機械族モンスターとの戦闘を行ったモンスターの攻撃力を０にする…」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→０

こんな効果を使用したところでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは自身を除外することで逃げてしまうだろう。だが、これでスキエル・アインで攻撃すればスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは除外せざるを得なくなり、攻撃無効はスキエル・アインに使用するしかなくなる。マシニクルのダイレクトアタックを決めれば今度こそわたしの勝利…！

「カードを１枚伏せてターンエンド！」

Ｊａｃｋ
ＬＰ１６００
手札×１
スピードカウンター×５
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ０
伏せカード×１

「…わたしのターン！」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　１→２
Ｊａｃｋ　スピードカウンター　５→６

「『機皇兵スキエル・アイン』で『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃！ツイン・パルス！」

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の効果発動！エンドフェイズまで除外し、モンスター1体の攻撃を封じる！」

「だがこれは耐えきれんぞ、『機皇神マシニクル∞？』でダイレクトアタック！ザ・キューブ・オブ・ディスペア！」

「トラップカードオープン！『シンクロ・ウィンド』！相手モンスターの攻撃宣言時に発動し、自分の墓地または除外ゾーンのシンクロモンスター1体につき、攻撃力を２０００ポイントダウンする！さらに次の俺のターンのバトルフェイズ終了時まで相手は魔法・罠カードを発動できない！」

機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ４０００→０

機皇神の攻撃はジャックに何のダメージも与えずに終了してしまった。

「……ターンエンド！！」

スレイのターンエンド宣言と同時に、ジャックのフィールドにはスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが復活した。さらに、1度フィールドを離れているためにオートディフェンスプログラムの効果が消え、攻撃力は５０００に戻っている。

バカな…このわたしが…この機皇神が……シンクロモンスターに敗北しただと…！

…対シンクロモンスター用の5体のパーツからなる機皇帝…その上を行く機皇神…わたしはこのデュエルで力の出し惜しみはしなかった。決して手札も悪くなかった。だが、シンクロモンスター相手に

敗北した。進化の力はいかなる壁をも撃ち破るというのか…。

Ｓｌａｙ
ＬＰ１８００
手札×３
フィールド
機皇神マシニクル∞？　ＡＴＫ０
機皇兵スキエル・アイン　ＡＴＫ１２００
機皇連召

「俺のターン！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『機皇神マシニクル∞？』を攻撃！バーニング・ソウル！」

機皇神マシニクル∞？は何の防御もせずにスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの体当たりを受ける。

「ぐあああああああああああああっ！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ１８００→－３２００

スレイのＤ－ホイールが停止する。デュエル終了と共に、召喚していたモンスターも消えた。
クロウと遊星…特にクロウは唖然としている。前にジャックが完敗した相手を今度は叩きのめしたからだ。

「…わたしの戦術に非はなかった……進化の力はこれほどまでに強力なものなのか…」

「そうだ。無限の進化はそれ相応の力をもたらす。使い方を間違えなければ頼もしい味方になる」

「……次に戦う時はわたしに敗北の2文字はない…！また会おう」

スレイは、Ｄ－ホイールを自分の意思で操って再び走り出す。アクセルなどが存在しないこのＤ－ホイールはスレイの手造りであり、今までスレイが持っていたＤ－ホイールをすべて分解して最高のパーツだけを使用したオーディン達の『真・北欧の三戦車』をはるかに上回る性能を兼ね備えている。スレイは自身のＤ－ホイールがないのも困るので、再び材料を集めて仲間に内緒で作り上げていたのだ。なので、最初にロキが見た時は随分と驚いていた。

ちなみに名前は『トゥルース・ウィル』。『真実の意思』だ。

「……」

シンクロモンスターが機皇を撃破した…ジャック・アトラス…パワー押しだが強力なデュエリストだ。

…ロキとの待ち合わせまで残り３０分。スクルドに何か土産を持って帰るとしよう。

第１２３話　長期休暇３　ジャック・アトラス再び（後書き）

次回「長期休暇４」

ウルズ「まさかのジャック相手に敗北…しかもバイス・リゾネーターなのに…死亡フラグは立ってたはずなのに…」

スクルド「……まあ、最強カード紹介行ってみよっか」

『オートディフェンスプログラム』
永続トラップ
相手が機械族モンスターを攻撃対象にした時、その攻撃対象を自分フィールド上の他のモンスターに変更できる。また、機械族モンスターと戦闘を行った相手モンスターの攻撃力をダメージステップ終了時に０にする。

ヴェルザンディ「どう考えても『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』なのに…なんでこんなサポートカードを…」

ウルズ「ところで、スクルドにＤ－ホイール『ワルキューレ（モチーフは青眼の光龍）』とフォーチュンレディ一式、ソリテアマジカルが送られてきたわよ。送ってくれてありがとうございました。龍夜Ｍｋ２様（ｂｙ作者）…だって」

スクルド「ありがとう！」

ヴェルザンディ「せっかく無双モードだったのにもう黒星がついちゃったじゃない」

スクルド「ま、まだ大丈夫だよ！Ｘ－セイバーは負けてないもん！」

ウルズ「やけにスレイを庇うのに必死ね」

ヴェルザンディ「そりゃそうでしょう？」

第１２４話　長期休暇４　オーディンｖｓ襲撃者（前書き）

今回は２回のデュエルがあります…。はい、２回あります…。

最近の出来事
セイバー・ホールは強制脱出装置で十分になってしまいました…

第１２４話　長期休暇４　オーディンｖｓ襲撃者

～～～ドミノ町・屋敷～～～

あの後、スクルドへの土産を買って過去へ帰ってきたわたしは、トゥルース・ウィルを走らせて屋敷に向かう。ロキが勝手にトゥルース・ウィルの後部に乗っているがまあいいだろう。ちなみに、なぜか周りの車やバイクが勝手にトゥルース・ウィルを避けてくれるので停止する必要がない。最悪飛行すればいいから渋滞に巻き込まれたとしても何ら問題はない。

「しかし、４０分も待ち合わせの時刻に遅れるとはいったい何をやっていたのだ、ロキ」

「あ～…ついセレナに何か買って行ってあげようと思って見て回ってたんだけど、なかなか決まらなくてね…」

「…時間に遅れたことは気にしていない。何を買ったのか気になった」

「えっと…これ」

ロキが見せてきたのは人間の間で有名なブランドの洋服が入った紙袋だ。確かその店は前にスクルドと行ったことがある。

「いいじゃないか。喜んでくれると思うが…ん？」

スレイは突然、晴れていた空が曇ったことに気付いた。

「……何か嫌な予感がするな…」

「…これはもしかしたら危ないかもしれないよ…急ごう」

ロキの言うことに同感し、トゥルース・ウィルを飛行モードに変形させて一気に飛ぶ。形はパラドックスのトゥルース・ウィルを見てほしい。

～～～屋敷の外・上空～～～

「まず、直接スレイを狙うのはやめよう。手始めにオーディンから始末する」

「そうだな…人形も送り込んだが、大丈夫なのか？」

「大丈夫だろう。それに見ろ、これを」

そう言って悪魔の1人は8枚のカードを取り出す。

「あいつらから盗んできた地縛神だ。こいつも有効利用できるぜ。何しろ1話分空けて考えた作戦だからな、ぜひ成功させたいぞ」

「さりげないメタ発言はやめろ。地縛神を盗んだのはよくやったと思うが」

「あ、そうそう、スレイがこっちに向かってるっていうから何か送

っとこうぜ」

「…まあ、当然だな」

～～～屋敷内部・オーディンサイド～～～

「…今度はわたしか」

やはりどこをどう曲がっても、この場所に戻ってくる。そして、スレイが言っていた通り次元の穴から攻撃が飛び出してくる。

…ノルン…特にスクルドが巻き込まれていないだけでも好都合だ。スクルドに怪我をさせたらスレイに何をされるかわかったものではないからな。

「フッ、スレイは少々苦戦したようだが、初めから情報を持っているわたしにこのような手は通用せんぞ」

オーディンは次元の穴が開いた瞬間に攻撃の手を加え、中にいる人形を引きずり出す。情報アドバンテージはやはり重要なものだ。

「くっ…」

「人形の姿は…何だ、スレイか」

よし、この前神界に結婚式の映像をばらされた恨みもあるからな、容赦なく潰す。…Ｓｉｎ？そんな甘いデッキは使用しない。わたしの本当の力を見せてやる。

「「デュエル」」

Ｏｄｉｎ　ｖｓ　Ｅｎｅｍｙ

「先攻はわたしがもらう。このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない時、生贄なしで召喚できる。来い『時械神ラツィオン』！」

何というか…機械の身体に天使（？）…の顔が映し出されているモンスターが現れる。

「カードを3枚伏せてターンエンド」

時械神は攻撃表示で戦闘を行う時、戦闘ダメージを0にする。さらに戦闘とカード効果では破壊されず、戦闘した場合、それぞれの時械神特有の効果が発動する。…その代わりわたしのスタンバイフェイズにデッキに戻る。

Ｏｄｉｎ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
時械神ラツィオン　ＡＴＫ０
伏せカード×３

「わたしのターン」

「『時械神ラツィオン』モンスター効果発動。相手がドローした時、１０００ポイントのダメージを与える」

「何！」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ８０００→７０００

「…わたしは『Ｘ－セイバーエアベルン』を召喚する」

「ほう…」

スレイは使用していないＸ－セイバーモンスター…デッキの中身はまるで違うものなのか。こうなるとスレイを奇襲してきたスクルドの人形が使っていたデッキが気になるな…。

「ならば永続トラップオープン『虚無械アイン』。自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札のレベル１０以上のモンスターを生贄なしで召喚でき、その攻撃力を０にする。…もっとも、この段階では意味がないがな」

わたしの持っている時械神はモンスターがいなければ生贄なしで召喚できる。虚無械アインでは役に立たず、無限械アイン・ソフでようやく役に立つようになる。無限械アイン・ソフの『時械神がいる時にモンスターを召喚できない効果を無効にする』という効果も意味がないが。

「カードを２枚伏せてターンエンド」

Ｅｎｅｍｙ
ＬＰ７０００
手札×３
フィールド
Ｘ－セイバーエアベルン　ＡＴＫ１６００
伏せカード×２

時械神の効果を知っているのか…面倒だな。

「わたしのターン。『時械神ラツィオン』はデッキに戻る。そして永続トラップ『虚無械アイン』を墓地に送り永続トラップ『無限械アイン・ソフ』をオープン。その効果によってレベル１０以上のモンスターを手札から特殊召喚でき、攻撃力を０にする…わたしはアイン・ソフの効果により手札から『時械神ザフィオン』『時械神カミオン』『時械神ガブリオン』を特殊召喚する」

ラツィオンと同じように、機械の身体に天使の顔が映っているモンスターが現れる。時械神は全てが機械の身体に天使の顔が映っているモンスターだ。

「『時械神ザフィオン』で『Ｘ－セイバーエアベルン』を攻撃する」

極太の水砲がエアベルンに向かった。攻撃力は０なので何もない。

「『時械神ザフィオン』の効果発動。ザフィオンが戦闘を行った場合、相手の魔法・罠カードをすべてデッキに戻す」

「何！」

人形のフィールド上にあった3枚の魔法・罠カードがすべてデッキに戻された。人形もさすがに驚く。

「ほう…人形のわりに感情があるとは…よくできているな。わたしは『時械神カミオン』で『Ｘ－セイバーエアベルン』を攻撃する」

カミオンが無数の瓦礫をエアベルンに飛ばして攻撃した。やはりエ

アベルンは破壊されない。

「『時械神カミオン』の効果発動。相手フィールド上に存在するモンスターをすべてデッキに戻し、1体につき500ポイントのダメージを与える」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ７０００→６５００

ガブリオンの効果は相手フィールド上のカードをすべてデッキに戻す…すでに人形のフィールドにカードはないため戦闘を行う意味はない。

「わたしはこれでターンエンド」

Ｏｄｉｎ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
時械神ザフィオン　ＡＴＫ０
時械神カミオン　ＡＴＫ０
時械神ガブリオン　ＡＴＫ０
無限械アイン・ソフ
伏せカード×１

「くっ…わたしのターン、わたしは2枚のカードを伏せ『命削りの宝札』を発動…5枚ドローする。そして『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を召喚、ターンエンド」

Ｅｎｅｍｙ
ＬＰ６５００

手札×４
フィールド
ＸＸ－セイバーフラムナイト　ＡＴＫ１３００

「わたしのターン。この瞬間３体の時械神はデッキに戻る…が、ザフィオンの効果により手札が５枚になるようにドローする。よって４枚ドロー」

…この程度か。やはり人形では話にならないな。そろそろ幕を下ろしてやるとしようか。

「永続トラップ『無限械アイン・ソフ』を墓地に送り、『無限光アイン・ソフ・オウル』を発動。時械神のデッキに戻る効果を無効にし、さらに攻撃力は０にならない。そして手札からレベル１０以上のモンスターを特殊召喚できる。現れよ『時械神ガブリオン』『時械神ミチオン』『時械神ハイロン』『時械神ザディオン』『時械神サンダイオン』！！」

時械神サンダイオン　ＡＴＫ４０００
時械神ハイロン　ＡＴＫ０
時械神ミチオン　ＡＴＫ０
時械神ガブリオン　ＡＴＫ０
時械神ザディオン　ＡＴＫ０

「『時械神ガブリオン』で攻撃！」

時械神ガブリオンが水を一滴落とし、それが大波になって人形のフィールドを飲み込み、すべてのカードをデッキに戻した。

「『時械神サンダイオン』でダイレクトアタック！」

巨大な雷の砲撃が人形に直撃し、人形はほとんどの部位が破損した。
そこに、時械神サンダイオンの追い討ちが来る。

「『時械神サンダイオン』が戦闘を行った場合、相手に４０００ポイントのダメージを与える！」

「ふ、ふざけるな！サンダイオンとガブリオンが同時にフィールドに出現すれば負けではないか！」

「フッ、聞く耳持たんな。さらばだ人形！スレイを真似てＸ－セイバーを使用したことを後悔しながら死んでゆけ！」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ６５００→－１５００

人形は断末魔を上げる間もなく粉々になって消え、屋敷の元の空間に戻る。

「まさか屋敷の周りに張っておいたはずの結界を無視して襲撃してくるとは…これは思った以上に面倒な敵かもしれんな」

～～～ドミノ町・某所上空～～～

「スレイ…」

「ああ、わかっている…」

わたし達の前には2体の敵…多分人形だろう。おそらくは屋敷を襲

撃している途中での邪魔をさせないための時間稼ぎか、もしくはわたし達の抹殺だろう。ちなみに人形の見た目は不動遊星とクロウ・ホーガンに似ている。

「だがこの程度では…ナンセンスな時間稼ぎだな」

わたし達を止めたところでオーディンがいるあの屋敷に何か問題があるとは思えない。それにこの程度の人形でわたしを倒そうなど笑止。

「キヒャヒャヒャヒャヒャ、全くだよね。軽く潰してあげよっか」

ロキは軽くジャンプしてわたしの前に出て、固有ディスク『デルタフォース』を起動する。わたしのゴッドモーメントにかなり似ている。ロキがデルタフォースを起動したのでわたしもゴッドモーメントを起動させた。

「「「「デュエル！」」」」

Ｓｌａｙ＆Ｌｏｋｉ　ｖｓ　Ｅｎｅｍｙ１＆Ｅｎｅｍｙ２

「先攻は僕がもらうよ。キヒャヒャヒャヒャヒャ、手札を１枚捨てて『ＴＨＥトリッキー』を特殊召喚。そして『トラスト・ガーディアン』を特殊召喚！キヒャヒャ、レベル５の『ＴＨＥトリッキー』にレベル３の『トラスト・ガーディアン』をチューニング、シンクロ召喚『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！さらにレベル８以上のシンクロモンスターがいることで手札の『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚し、デッキの一番上のカードを墓地に来ることで墓地の『グローアップ・バルブ』を特殊召喚。

レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル３の『クリエイト・リゾネーター』とレベル１の『グローアップ・バルブ』を

チューニング！シンクロ召喚『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！」

グローアップ・バルブの効果で墓地へ送られたのはゾンビキャリアか。キヒャヒャ、使う機会はないだろうけど落ちておいて損はないね。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン強化の材料にもなるし。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→５５００

「カードを2枚伏せてタァーンエンド！」

Ｌｏｋｉ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５５００
伏せカード×２

ロキのターンが終了し、不動遊星に似ている人形にターンが回る。

「俺のターン。俺は魔法カード『天使の施し』を発動。３枚ドローし2枚捨てる。そして『ジャンク・シンクロン』を召喚し、その効果で墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚。さらにフィールドに『ジャンク』と名のつくモンスターが存在することで手札から『ジャンク・サーバント』を特殊召喚」

「そのデッキは…！」

不動遊星が使用していたジャンクデッキ…、シンクロ召喚主体の超展開力を持つ、使い方によっては恐るべき強さを誇るデッキ！

「レベル４の『ジャンク・サーバント』とレベル２の『ボルト・ヘッジホッグ』にレベル３の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！シンクロ召喚『氷結界の龍トリシューラ』！！」

「何！」

トリシューラ！？これでは僕のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが…！対象を取らないトリシューラの効果には闇の幻影も意味がない…！

「俺が除外するのは『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』とロキの墓地の『ゾンビキャリア』、スレイの手札１枚だ」

「……」

スレイの手札から除外されたカード：『ラーの翼神竜（究極神帝ラー）』

「僕の『ゾンビキャリア』と『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』が…！絶対潰してやる」

「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ」

Ｅｎｅｍｙ１
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００
伏せカード×２

「わたしのターン。わたしは『手札抹殺』を発動。互いに手札をすべて捨て、捨てた枚数分ドローする」

ロキは0枚、不動遊星の人形が2枚、わたしが5枚、クロウの人形が5枚だ。

「わたしはカードを4枚伏せてモンスターをセット。ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
セットモンスター×１
伏せカード×４

「俺のターン！俺は『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚だ！」

「トラップカードオープン、『奈落の落とし穴』。暁のシロッコを破壊してゲームから除外する」

スレイの4枚の伏せカードの内1枚が表になり、シロッコは破壊されてゲームから除外される。人形はこれに対して顔をしかめる。

「カードを2枚伏せてターンエンド…！」

ＥｎｅｍｙＢ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド

伏せカード×２

「僕のタァーン！僕はカードを１枚伏せてタァーンエンド」

手札が１枚しかないし、さっきゾンビキャリアも除外されちゃったからこれしかやることがないな…。

ライフがスレイと共有だからダメージは受けたくないんだけど…。

Ｌｏｋｉ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
伏せカード×３

「俺のターン。俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚、その効果によって墓地から『スピード・ウォリアー』を特殊召喚する。さらに手札から『ジャンク・サーバント』を特殊召喚。レベル４の『ジャンク・サーバント』とレベル２の『スピード・ウォリアー』にレベル３の『ジャンク・シンクロン』をチューニング。シンクロ召喚『ミスト・ウォーム』！このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを３枚まで手札に戻す。俺はスレイの伏せカード２枚とロキの伏せカード１枚だ！」

しかし、ロキのカードは手札に戻るが、人形が指定したスレイの２枚の伏せカードがオープンする。

「『奈落の落とし穴』『強制脱出装置』。この効果によって『ミスト・ウォーム』は破壊し除外され、『氷結界の龍トリシューラ』にはエクストラデッキに戻ってもらう」

2体の最上級シンクロモンスターは一瞬のうちにフィールドから消え去り、2体の人形は唖然とする。

「くそ…ターンエンド」

Ｅｎｅｍｙ１
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
伏せカード×２

「わたしのターン。わたしは『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を攻撃表示で召喚し、伏せモンスター『メタモルポット』を反転召喚。このカードのリバース効果により、互いのプレイヤーは全ての手札を捨ててカードを5枚ドローする」

ロキとスレイは捨てるカードがないので無条件でカードを5枚ドローし、遊星に似ている人形が1枚、クロウに似ている人形が嫌そうな顔をしながら3枚捨てて5枚ドローした。

「4枚目のトラップカードをオープン『ガトムズの緊急指令』。墓地から『Ｘ－セイバーパロムロ』と『ＸＸ－セイバーガルセム』を特殊召喚し、さらに『手札断札』を発動。互いに手札を2枚墓地に送り、2枚ドローする。
そして手札の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚。レベル4の『ＸＸ－セイバーガルセム』にレベル1の『Ｘ－セイバーパロムロ』をチューニング、シンクロ召喚！行け『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』！さらにレベル2の『メタモルポット』にレベル3の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング！シンクロ召喚『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』！

1体目のライブラリアンの効果により、わたしはカードを1枚ドロー。そして『ＸＸ－セイバーフォルトロール』の効果により、墓地の『Ｘ－セイバーパロムロ』を特殊召喚。レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』にレベル１の『Ｘ－セイバーパロムロ』をチューニング、シンクロ召喚！『Ｘ－セイバーソウザ』！２体のハイパー・ライブラリアンの効果によってカードを２枚ドロー。

魔法カード『死者蘇生』を発動し、墓地から再びパロムロを特殊召喚し、手札から２体目の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する。レベル７の『Ｘ－セイバーソウザ』にレベル１の『Ｘ－セイバーパロムロ』をチューニング、シンクロ召喚！『スターダスト・ドラゴン』！『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』の効果によって２枚ドロー。

フォルトロールの効果により、墓地から『Ｘ－セイバーパシウル』を特殊召喚。レベル６の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』にレベル２の『Ｘ－セイバーパシウル』をチューニング、シンクロ召喚！『スターダスト・ドラゴン』！当然『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』の効果が発動して２枚ドロー」

「ば、バカな…！！」

「こんなことがあってたまるか…」

２体の人形は驚きを隠せない。なぜなら今のスレイのフィールドはスターダスト・ドラゴン、Ｘ－セイバーソウザ、ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン２体というシンクロモンスターのオンパレードだからだ。その上スレイの手札は８枚。ロキですら苦笑いを浮かべている。

「わたしはカードを５枚伏せる。まずは『スターダスト・ドラゴン』でダイレクトアタック。シューティング・ソニック」

「させるか、トラップ発動『くず鉄のかかし』！」

「キヒャヒャヒャ、僕のことを忘れないでほしいね。カウンタートラップ『神の宣告』。ライフを半分払って、『くず鉄のかかし』の発動と効果を無効にして破壊するよ」

人形がせめてライフを１００残そうとして発動したかかしは無残に破壊されてしまった。もはや人形に防御手段はなく、スターダスト・ドラゴンの攻撃を受ける。

Ｅｎｅｍｙ１　ＬＰ８０００→５５００

「続いて『Ｘ－セイバーソウザ』でダイレクトアタック」

「トラップ発動『エンジェル・リフト』！蘇れ『ボルト・ヘッジホッグ』！」

「ならばわたしはクロウの人形にダイレクトアタックする」

遊星に似ている人形はボルト・ヘッジホッグを復活させたが、スレイはやはりというべきかクロウの人形に攻撃対象を変更した。阻むものは何もなく、ダメージを受ける。

Ｅｎｅｍｙ２　ＬＰ５５００→３０００

「２体の『ＴＧ－ハイパー・ライブラリアン』でダイレクトアタック！」

「「ぐあああああああああああああ！！」」

Ｅｎｅｍｙ１＆Ｅｎｅｍｙ２　ＬＰ３０００→－１４００

人形は負けた途端に黒い塵になって消える。

「…やはりナンセンスなデュエルだったな…人形相手ではこんなものか」

「スレイがソリティアで楽しんだだけじゃん」

スレイ達は再びＤ－ホイールで飛行し、屋敷に向かう。

～～～ドミノ町・某所～～～

「おいおい、せっかく3体も人形を創ったってのに、全部やられちまったじゃねぇか」

2人の悪魔は、どこかのビルの上で話している。

「むぅ…さすがにやるな、神々…」

「また晩飯抜きってのはごめんだから何か買ってから帰ろうぜ」

「それは賛成だ。腹が減っては戦はできぬ…最悪、わたし達自身が戦う時が来るだろう」

「ゲッ…まじかよ。悪魔に生まれなきゃもっと楽な生活できたはずなんだけどなぁ…」

「それを言ったらおしまいだ。悪魔に生まれたのが不幸なわけではなく、ディファ様に使われていることが不幸だと考えるのが正しいだろう」

「まあでも、今回は地縛神っていう戦力が手に入ったからな。きっとうまくいくだろ」

「……だといいがな」

2人の悪魔は人間に姿を変えて店に入り、食料を購入してから魔界に帰った。

第１２４話　長期休暇４　オーディンｖｓ襲撃者（後書き）

次回「長期休暇５」

ウルズ「１回無双モードが止まったと思ったらまた無双モードに突入した…」

スクルド「それがスレイの良いところだよ。さあ、最強カード紹介行ってみよ！」

『時械神ラツィオン』
レベル１０　炎属性　天使族　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、生贄なしで召喚することができる。このカードは戦闘とカード効果では破壊されない。表側攻撃表示のこのカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、自分への戦闘ダメージを０にすることができる。このカードが戦闘を行った場合、相手フィールド上のモンスターと墓地のカードをすべてデッキに戻しシャッフルする。相手がドローフェイズにドローした時１０００ポイントのダメージを与える。自分のスタンバイフェイズにこのカードはデッキに戻る。

ヴェルザンディ「だから絶対に『時械神サンダイオン』だと思うんだけど…」

ウルズ「スクルドに任せておいたら危ないわね」

ヴェルザンディ「そうですわね…それはともかく、地縛神が盗まれてしまいましたね」

スクルド「そうだね。この先どうなるんだろう？」

ウルズ「それは次回以降わかることよ」

ヴェルザンディ「それではまた次回！」

第１２５話　長期休暇５　悪魔の契約（前書き）

どうも。久しぶりにシリアスを書いてみました。
どうせ書くならどん底になるほど暗いように書いたつもりなのですが、果たしてどのように受け取ってもらえるか…。そんなところです。

※キャラ設定のエターナル・ローズ・ドラゴンの効果を一部変更しました。

最近の出来事
今日も友人が来ました。アポなしです。月曜日はちょっと遠出する予定ですね。

第１２５話　長期休暇５　悪魔の契約

～～～ドミノ町・某所～～～

「おい、ゲーセンよってから帰ろうぜ」

「ダメダメ、オレんトコ親がうるさくてさぁ…」

「あ～…そうだったな」

２人の男子が話しながら帰宅しようとしている。寄り道がしたいが、門限があるので寄れないらしい。どちらかというと不良の類に入るであろう格好をしている。制服が破けている部分があるあたり、よく喧嘩したりするのだろう。すれ違う人たちも、皆この２人を避けて通る。

「ほんと、高校生にもなって門限とかうるさいよなぁ…」

「過保護すぎるのも問題だな。まあ、今度の帰りにでも寄るよ」

だが、この２人の前に１人の人間の姿をした悪魔が姿を現す。

「お前達、自由になりたくはないか？」

そしてその悪魔は、２人の男子高生に声をかけた。…内心で嘲るように笑いながら。

「「はぁ？そりゃあなりたいさ」」

2人の男子高生は口をそろえて返事をする。自由を求めるのは当たり前の話だ。

「ならばわたしと契約しないか。わたしと契約すれば自由が手に入る。門限も無く、学校にも行かなくて良い本当の自由が…。ただし、1つだけ条件があるがな」

「はぁ…？まあいいや、その条件ってなんだよ？」

男子高生の答えに、悪魔は不敵な笑みを浮かべて1枚の写真を差し出す。

「この者を殺せ。それが条件だ」

写真に写っているのはスレイだ。悪魔は、今度は人間を使ってスレイを殺そうとしている。

「なっ、人殺しをしろって言うのかよ！冗談じゃねぇぞ！」

「安心しろ。この者は人間ではない。信じられないかもしれないが、お前たち人間の自由を縛り、自分たちは遊び続けている神の1体だ。こいつを殺しても何も証拠は残らない」

その悪魔は、その言葉に暗示をかけて人間に語りかける。人間はその言葉の虜になってしまい、いとも簡単に契約を成立させる。呪いの契約を。

「では、この力を受け取るがいい」

悪魔は男子高生2人に剣を渡す。念じれば様々な攻撃ができるという優れものだ。

「これでお前たちは自由だ。自らの人生を意のままに操るがいい。ただし、この者を殺せ。それだけが本当の自由になる最後の条件だ。お前たちはすでに自由の扉の前に立っている…さらばだ」

だが、お前たちがスレイを殺した瞬間にお前たちの寿命は尽きる。失敗すればその剣に魂を食われる。どちらの結果にせよ、残り少ない自由を楽しめるんだ、対等な契約だろう?…まあ、寿命が尽きた魂も、食われた魂もわたしの力の糧になるがな。

「ハーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ!」

〜〜〜その後、ゲームセンター〜〜〜

2人の男子高生は門限を気にすることなくゲームセンターに寄って遊ぶ。だが、そこに警備員がやってきた。

「君達、もう遅いよ?帰りなさい」

だが、悪魔との契約によって渡された剣の呪いによって、男子高生は素直に帰ろうとしない。

「黙れ、お前が帰って遊んでろよ」

警備員はこういう時、半強制的に帰らせるのだが…。

「でないとこいつでズタズタに切り刻むぜ？」

剣を向けられてしまっては何もできない。だが、警備員はすぐにその場から逃げると警察に連絡を入れた。時間はあまりかからずにすぐに警察がやってくる。

「君達、銃刀法違反で逮捕する！」

警察に完全包囲されながらも、男子高生は剣を振るう。すると、剣から炎が飛び、周りの警官を命の別状がない程度に焼き尽くす。男子高生はすぐにその場に離れ、銀行に向かい、銀行から金を脅し取り、自由になったと実感する。

「この力があれば全部自由だ！」

「ああ、最高だぜ！」

もはや歯止めが利かなくなった2人の前には、偶然にも買い物に来ていたスクルドとスレイが現れる。当然2人はスレイを抹殺しようと剣を構える。

「お前があの男が言ってた殺す相手か…やっと見つけたぜ」

「…何のことだ？わたしに対して刃を向けるというのなら、その刃をへし折るだけだ」

スレイはスクルドをその場から離れさせ、アーティスを構える。なんと、男子高生は背中から黒い翼を生やし、空を飛ぶ。

「…あの剣は…悪魔との契約でもたらされる呪いの剣…」

…あの剣が人間の手に渡ってしまった今、残念だがあの人間を救う手段はない…。

「ならば仕方あるまい…！お前達を排除する」

スレイは力をためてジャンプする。そして、高層ビルの屋上を超える高さまで飛ぶと、その場で浮遊する。すぐに2人が剣を構えて突進してくるため、スレイはアーティスを盾にする。

「いくら悪魔と契約しようが人間は人間、この一撃で叩き落としてやろう！」

アーティスを素早く振り回して2本の剣を退けると、真上から全力で叩きつける。だが、2人も負けておらず、剣で受け止める。その力は通常の人間では相手にならない。

スレイもこれほどの力があるとは思っておらず、多少驚きの表情を浮かべた。

「成程…悪魔との契約時にその契約者の闇が深ければ深いほどその力は増すと聞いたことがある。お前たちは一体どれほどの闇を抱えていたのか…？だが、闇の力だけではわたしを倒すことなどできはしない！」

スレイは一度アーティスを振り上げ、再度力を込めて叩きつける。さすがに耐えきれなかったようで、2人はものすごい勢いで地面に向かう。地上では一般人がこの光景を見て驚愕していた。

2人は空中でどうにか止まると、再び空に向かって飛び、スレイと対峙する。

「俺たちはこんな生ぬるい日常から抜け出して自由を手にするんだ！そのために恨みはないがお前には死んでもらう！」

「悪いな！」

スレイは一瞬の隙を突かれ、刃が自らに刺さるのを覚悟した。が、いつまで経っても刃は器を貫かない。スレイの前には薄く青いバリアが張られていた。

「…おかしいよ」

いつの間にかスレイに横にはスクルドがいた。バリアはスクルドが張っていたものだ。

「スクルド？」

「どうして自由のためにスレイを殺すのか…私にはそれがわからないよ」

「俺たちはあの男に『本当の自由が欲しければこの者を殺せ』ってこいつの顔が映った写真を渡されたのさ！だからこいつには死んでもらうぜ！」

男子高生はスレイに突進しようとしたが、突然天空から堕ちた黒い雷によって止められ、最後は悲鳴を上げる間もなく剣ごと光の粒子になって消えてしまった。スレイはその光景を多少驚きの表情を浮かべて黙って見ていた。

「やっぱお前らに任せた俺達…というか、あいつがバカだったわ。

やっぱ神は悪魔が倒すべきだよな。まあ、人間を使うってのは俺が考えたわけじゃないけどな」

スレイ達の前に現れたのは、度々人形を送ってきていた悪魔のうちの1人だ。賢そうではない方の。

「契約するところまではうまくいったんだが、ちっとも戦いが進展しないからよ、この俺直々に出てきちまったじゃねぇか」

「やはり悪魔か。オーディンが言っていたな…その手の契約の結び方と言えば、ディファの手下か」

ディファが誰か知らないが…。

「あ～、グダグダ言ってんじゃねぇ！さっさとてめえらをぶっ潰して晩飯にありつかせてもらうぜ！こっちは何度の作戦失敗してるせいで夕飯食ってねぇんだからよ！」

悪魔はデュエルディスクをどこからか持ち出し構える。結局こうなるのか。

「いいだろう、わたしが…」

「待って」

スレイがゴッドモーメントを起動しようとしたが、スクルドが止めた。

「私はあなたを許さない…！私があなたを倒す！」

「……」

このデュエル、女神の怒りが…落ちる！

「あ～…俺1人じゃ勝てる気しねぇ…まあ、俺の運もここまでってこった。行くぜ！」

「「デュエル」」

Ｓｋｕｌｄ　ｖｓ　Ｄｅｖｉｌ

「先攻は俺がもらうぜ。俺はカードを5枚伏せてターンエンドだ」

Ｄｅｖｉｌ
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
伏せカード×５

「私のターン」

絶対何かあるよね…モンスターを召喚しなかったし…。でも、ここで守りに入るわけにはいかない。ここで攻めなかったら、勝てない！

「私は『夜薔薇の騎士』を攻撃表示で召喚！この効果で手札から『返り咲く薔薇の大輪』を守備表示で特殊召喚！自分フィールド上に植物族モンスターを含む2体以上のモンスターが存在する時、手札のモンスター『トラップ・プラント』を捨てることでこのターン、手札からトラップカードを発動できる！私が発動するのは『異次元封鎖』！このターン、フィールド上のカードを除外することはできない！」

「やりやがるな…女神」

奈落が使えないじゃねぇか…せめてフィールド上のカードをすべて破壊するブラック・ローズ・ドラゴンだけでも除外してやろうと思ったのによ。破壊で墓地に送られるようじゃだめだな。

「まだだよ。手札から『シンクロガードナー』を捨ててそのモンスター効果を発動、このターン、シンクロモンスターはカード効果では破壊されない！」

「なっ！」

激流葬も意味がなくなったか…なんてこった。

「レベル４の『返り咲く薔薇の大輪』にレベル３の『夜薔薇の騎士』をチューニング！シンクロ召喚、開け、漆黒の薔薇！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

「来たな、『ブラック・ローズ・ドラゴン』…花言葉はいろいろあるが、とりあえず『貴方は私の物』だったか？」

確かディファ様が言ってたな。花言葉なんざどうでもいいが、効果の方は危ないな。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果発動。フィールド上のカードをすべて破壊する！」

普段は使わないけど…こんな相手に絶対手加減なんてしない。これで悪魔のフィールドの伏せカードは０枚。私の攻撃は確実に通る。

「ダイレクトアタック！ブラック・ローズ・フレア！！」

「誰がさせるかよ！墓地からトラップ発動！『セメタリー・シリンダー』！相手が攻撃宣言した時に墓地のこのカードを除外し、戦闘ダメージは相手が受ける！」

この攻撃が現実化する特殊なデュエルで炎属性の攻撃はよく効くぜ。何しろ実際に燃えるわけだからな。ダメージの現実化とはわけが違う。

「！！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃がそのまま跳ね返ってくる。スクルドに防御する手段はない。

「……ッ！！」

スクルドは自身が炎にのまれるのを覚悟した。

Ｓｋｕｌｄ　ＬＰ８０００→５６００

「……？…！！」

だが、いつまで経っても炎は来ない。スクルドはまさかと思い目を開ける。すると、予想していた最悪のルートが目に映っていた。

「……」

スレイが身体１つで仁王立ちしており、すべての炎を受け切ってい

たのだ。

「ハッ、やるな！まさか現実化した炎の攻撃を身体１つで受け切るとはよォ！」

だがこれでくたばってくれればスレイを始末する手間が省けるな。

「わたしは…これ以上誰かを失う悲しみと絶望は欲しくない」

今まで多くの神々がわたしの目の前で消えて行った。時には無意味な戦いで命を落とした者もいた。その中の１人に、スクルド達だけは加えさせない。例えわたし自身がこの命散らすことになっても。

「だから自己犠牲ってか。泣かせるねぇ…ディファ様じゃ絶対そんなことはしてくれねぇからよォ、スクルドが羨ましく見えてくるぜ。だがなぁ、こっちは命令でお前らを殺しに来てるんだ、これ以上夕飯を失うのは嫌でね。墓地からもう１枚のトラップカードを発動。『シリンダーブースト』！こいつによってこのターン、トラップカードによって発生した効果ダメージ分、相手にダメージを与える！」

このターントラップによって発生したダメージは２４００、つまりスクルドが受けるダメージは２４００だ。シリンダーブーストのカードから多分スターライト・ブレイカー程はあるだろう極太の炎がスクルドに向かう。だがやはり、スレイがスクルドの盾になって炎を受け止める。何一つ防御せずに。

「やめて！スレイが私なんかの盾になる必要なんてないから！」

だがスレイは、スクルドの方に顔を向け、静かに笑みを浮かべる。…死期を悟った者が力なく笑うように。だがスレイの目は死んでい

ない。体中が炎に包まれてなお、スレイは余裕そうな表情を浮かべる。

Ｓｋｕｌｄ　ＬＰ５６００→３２００

「スクルド、わたしの力をあまり過小評価しないでくれよ？仮にもこれで最終形態だからな」

…いや、わたしの力ではないか。

「この程度の炎でわたしを焼き尽くそうとしていた炎が消える。究極神帝の力を見るがいい！」

次の瞬間、スレイを焼き尽くそうとしていた炎が消える。そして、眼を見張るスピードでスレイの器の損傷部分が回復した。

「スクルド、わたしのことは気にせずに戦え。君がこいつを撃破しろ。この程度、スターライト・ブレイカーの方がまだ上だ…！」

そういえば、彼女たちは最近見ないな。どこで何をしているのだろうか？こんなときくらい力を貸してほしいものだ。

「へぇ。噂に聞く、究極新星の神『究極神帝ラー』か。まさかその力を利用して回復に転用するとはさすがだな。やっぱスクルドを倒さなきゃダメだったか。そんじゃ、墓地からトラップ発動『ラグナロクの天札』。相手か自分のライフが半分以上減ったターン、手札が５枚になるまでドローだ。ちなみに炎を受けたのはスレイだが、当然ダメージはスクルドに受けてもらったぜ」

「……！」

スクルドがラグナロクという単語にわずかに反応を見せた。

「ああ、そういや北欧の神はラグナロクで終了のお知らせだったな。未来の女神だからなおさらか。だがそんなことを気にしている暇はないぜ？ターンエンドならターンエンドの宣言をしてくれよ」

「カードを1枚伏せてターンエンド…」

Ｓｋｕｌｄ
ＬＰ３２００
手札×０
フィールド
ブラック・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ２４００
伏せカード×１

「俺のターン。そうだな…カードを5枚伏せてターンエンドだ」

…まだこいつらを殺すなってあいつに言われてんだけどなぁ…生かしておいて何の意味があるんだよって話だよな。まあ、あいつの考えてることはディファ様でも理解不能だから仕方ねぇけどな。
さて、様子見…というか、小手調べはここまでだ。そろそろ帰るか。殺して怒られるんじゃ意味ねえしな。

Ｄｅｖｉｌ
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
伏せカード×５

「私のターン！私は…？」

スクルドは突然悪魔の方を見る。すると、悪魔は自身の周りに結界を展開し、だんだんと姿が消えていく。

「ま、今回はここまでだ。ここでダメージ食らうと、後の作戦に支障をきたすからな。じゃあな！」

「逃がすものか！ゴッド・アルティメット・フレア！」

スレイがゴッドモーメントを使用して3体の究極神を召喚し、究極神帝ラーが攻撃を放つ。だが、惜しくもその攻撃は間に合わずに逃げられてしまった。ラーの攻撃は宇宙に放たれ、銀河の彼方にある恒星の1つを粉砕した。スクルドはたった3文字攻撃の名前が違うだけで、どの世界からも最も距離の遠い最高神界の極地まで消滅させる規格外の規模を誇る攻撃が飛び出すと思うと、顔を引きつらせる。

「…逃がしたか…！」

幸い海に近かったので、究極神召喚と攻撃の衝撃が街を襲うことはなかった。

「あまり気に病むな。帰るとしよう」

「でも…でもっ…！！」

スクルドは人間を犠牲にしてまで自分たちを殺そうとした悪魔を逃がしたことが悔しくてたまらない。手札には既にエターナル・ローズ召喚の手段があった。

「ほかの最高神ならば、『たかが人間の1人や2人死んだところで何も問題はない』と切り捨てるところだがな。…わたしもどちらかと言えば、誘惑に負けてしまった方にも問題があると考える方だ。もちろん誘惑する悪魔の方が問題だと考えるがな。今回ばかりは仕方がない」

それに人間の1人や2人どころか、恒星を1つ消してしまった。これだからラーの攻撃はあまり使用したくない。

この30分後、ようやくスクルドが気を取り直していつものスクルドに戻った。わたしは説得に気力を持って行かれたが。

「まったく、災難だったな。もう深夜2時だ…」

そう、屋敷に到着したのは深夜2時。スレイには時間は関係ないが、スクルドが途中で眠ってしまい、お姫様抱っこでここまで運んできた。

スクルドをベッドに入れて離れようとするが、スクルドは眠っているにもかかわらず、スレイにしがみついて離れようとしない。仕方がなさそうにスレイはしばらく、スクルドの寝顔を黙って見つめていた。

「まさか、手を出そうとはしていないよね?」

「…ロキか。手を出すとは一体どういう意味だ?そんなことよりも黙るか、静かに話すかどちらかにしてくれ。スクルドを起こしたくない」

「ところで、鏡で見てたんだけど今日は災難だったね。人間をあまり信用してない僕からすれば、あれが当然の姿だと改めて思い知らされたよ」

ま、最近はいろいろなところに出張しているうちにまあまあ信用できる奴も増えてきたけどね。

「わたしは…そんなことは微塵にも思わない。当然の姿だろうが何だろうが、わたしに敵対するなら倒す。それだけだ」

「キヒャヒャヒャヒャ、スレイらしい答えをありがとう。まあ、僕はもう休ませてもらうとするよ。最近は出張が忙しいからね」

ロキはその場から立ち去り、自分の寝室に向かう。

「……いつも暇だろう」

ロキが立ち去り、スクルドを今度こそベッドに入れた後、スレイはただ一言つぶやいた。

第１２５話　長期休暇５　悪魔の契約（後書き）

次回「長期休暇６」

ウルズ「まあ、作者が書くシリアスなんてこの程度よね」

スクルド「……最強カード紹介、行こうか」

『セメタリー・シリンダー』
通常トラップ
このカードを墓地から除外して発動する。相手モンスター１体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。

ヴェルザンディ「墓地で発動するのが魅力ね。墓地に送る方法は手札コストとかで捨てるくらいかしら」

ウルズ「龍夜Ｍｋ２様からスクルドにいただきものがあるわよ。『フォーチュンレディ・ブリッツ（独：稲妻）』『フォーチュンレディ・ドンナー（独：雷）』『フォーチュンレディ・デュレ（独：日照り）』『フォーチュンレディ・グルート（独：Ｇｌｕｔ　灼熱）』『フォーチュンレディ・トルナード（仏：竜巻）』『フォーチュンレディ・ラファール（仏：突風）』『フォーチュンレディ・レーゲン（独：雨）』『フォーチュンレディ・ヘイル（英：雹（ひょう））』『フォーチュンレディ・ニクス（羅：雪）』『フォーチュンレディ・ギフト（独：毒）』『フォーチュンレディ・シャッテン（独：影）』『フォーチュンレディ・フェルス（独：岩塊）』『フォーチュンレディ・フェルゼン（独：岩壁）』・『フォーチュンレディ・シュ

テル（独：星）』『フォーチュンレディ・ナハト（独：夜）』『フォーチュンレディ・アーベント（独：夕方）』『フォーチュンレディ・ネブラ（羅：霞　）』『フォーチュンレディ・ヴァン（仏：疾風）』『フォーチュンレディ・マテリアル』『フォーチュンレディ・スピリット』『フォーチュンレディ・ファントム』…以上よ」

スクルド「…多いね＾＾；。ありがとう！」

ウルズ「大切に保管させてもらうわ。使用できる日が来るかはわからないけれど、できる日が来たら存分に使わせてもらうわ」

ヴェルザンディ「さて、若干シリアスだった今回はどうだったかしら？まあ、こんなのシリアスなんかじゃねーよって方もいるかもしれないけれど、作者の感性はこれで十分シリアスだそうよ」

ウルズ「最後のほうにネタを入れるあたり甘いわね」

スクルド「あまりシリアスなのを書くと作者がダウンするらしいよ…」

第１２６話　長期休暇６　邪神と悪魔（前書き）

悪役にしか見えないスレイｖｓディファの回です。

※今回はデュエルはありません。リアルファイト回です。戦闘描写の難しいこと難しいこと、練習が足りませんね。ちなみにこのまま書き続けて２００部を超えたら長すぎやしませんか？と思われたりしそうですね。

最近の出来事
日曜日に池袋のメ〇ロポリ〇ンホテルで昼食を食べてきました。
月曜日は往復２０ｋｍはあるであろう距離をカードショップ目的で自転車で移動してきました。買ったものはヒュンレイとガトムズと美品の死者蘇生です。

第１２６話　長期休暇６　邪神と悪魔

～～～某世界・ディファの城～～～

「……邪神スレイ…数々の私の作戦を崩し、人形を何体も破壊した…」

「ディファ様、申し訳ありません。すべてこのわたしの責任…」

「いや、お前に責任はない。私の作戦が甘かっただけだ。そもそも最初から神相手に人形を使うという時点で間違っていた。しかし、もう人形も使い果たし、作戦も無い…だから私自身が奴を潰す。…お前達を見るのは最後になるかもしれん。今まで私についてきてくれたこと、感謝するぞ。…部下ではなく、私の仲間に告げる。さらばだ」

「そ、そんな！待ってください、ディファ様が消えたら私はどうすればいいのですか！」

今まで数えきれないほどこき使われ、どう考えても部下の扱いをされたこともあった。しかし、何度も作戦失敗し足を引っ張ったこんなわたしでもディファ様は見捨てずにここまで面倒を見てくださった。それなのに、突然別れの挨拶をして自ら邪神スレイに勝負を挑む？

「お前はもう十分役割を果たしてくれた。隠居して静かに暮らすの

もいいし、他の悪魔に仕えて人間や神を襲撃するのもいい。もしくは、お前が新たなる組織を作り、仲間を集めて神を倒すかだ。…最後にもう一度言っておく。私は一度としてお前達を部下と見たことはない。いつだって私についてきてくれた仲間だ。だが、悪魔の宿命がある以上、私の命も運がなければここまで。破壊の邪神スレイを倒し、戻ってくることができればお前達の顔を再び見ることができる」

それだけ言い残し、魔皇軍最高幹部の1人ディファは歩き出す。部下…いや、仲間の悪魔たちは、それを呆然と見ている事しかできなかった。

ディファが立ち去った後、ディファに仕えていた悪魔達は今までの行いを悔い、涙し、どこか別の世界に飛んで静かに人間と共存して生きていくと誓った。決して自分たちの罪が晴れるわけではない。しかし、ディファはその罪を背負って最後に神に抗う。仲間の責任は自分の責任としていたディファが、最後に仲間の悪魔に救いをもたらしたのだ。当然人間にも神にも良く思われていないのだから共存するのは難しいだろう。だが、世の中にはきっと理解してくれる者がいる。悪魔はそれを信じ、旅立った。

「ディファ様…。わたし達は今まで間違ったことをしていたというのでしょうか。間違っていてなお、まだわたし達に新しい生き方があるというのなら、そこにお導きください…」

～～～屋敷～～～

「うっわぁ～…ほんとに2人並ぶと紛らわしいなぁ…」

僕は今、僕の目の前に立っている2人の人間を見て思わず感想を漏らした。僕の前に立っているのはセレナとテスタロッサ。目の色が違うからわかるものの、眼を閉じていたら全然どちらがセレナなのかわからないくらいだ。

なぜテスタロッサ達がいるのかというと、今朝突然、自分たちの仲間と部下を連れて大人数でやってきたからだ。いくら屋敷が広いとはいえさすがに11人で来るのはやめてほしい。当然、高町達3人と以前スレイと戦ったことがあるシグナム…だっけ？以外は僕たちが神などということは信じていない。

「……しかしなぜ突然やってきた。今まで姿を見せないからようやく自分たちの世界に帰ったと思っていたのだがな…」

ちなみに、最初にわたしを見た時はこの3人はわたしが誰だかわからないため、人違いだと思っていた。ロキの説明がなければ帰っていただろう。

「実は、お願いがあってきたんよ」

やはりこの中では最も立場の高い八神が用件を言う。その用件も大体わたしが予想していたのと同じだ。

「で、その頼みとは？」

「ちょっとだけでいいから、時空管理局の仕事を手伝ってほしいんだ」

「断る」

スレイはその願いを即答で断った。ただでさえ謎の襲撃者が襲ってくる、自分たちが忙しいこの状況で手を貸している暇などない。なのは達はそれを悟ったのか、これ以上は強く要求せずに退く。ちなみに、この3人以外のメンバーは屋敷の庭を回っているようだ。人の屋敷の庭を勝手に歩くあたり、さすがだ。

「で、用はそれだけか？」

「まあ、それだけかな。あとは、久しぶりだねってことで遊びに来ただけだから」

「それでこの人数か。なぜ連れてきた」

「このまま次の仕事に向かうからだよ。久しぶりに機動六課のメンバーを集めてね。時間もあるから、そろそろ行くね」

「…また会おう」

八神は全員を集めると、すぐに転送ポートのある場所に行き、仕事の場所に向かった。わたしはそれを見届けると、すぐにトゥルース・ウィルに乗ってある場所に向かう。
その場所は、ドミノ町の港。到着すると、トゥルース・ウィルは次元の扉を自動的に開き、屋敷に戻る。そしてわたしは、ここに感じたただ者ではないであろう生命体の魔力を辿り、港のすぐそばの廃工場に入る。

「……待っていたぞ、邪神スレイ」

「ほう…邪神スレイの名を知っているということは、貴様ただ者で

はないな。…何者だ」

邪神スレイ…究極の破壊の力を持つがゆえに他の神々によって名づけられた。この名を知るのは、極少数のはずだ。

「私の名は魔皇軍最高幹部の1人、ディファ」

現れたのは、長く赤い髪で赤い目の、見た目は人間の女性そのものの女性悪魔。その両手には剣が握られている。

「…最高幹部自ら出陣か。ディスペアから最終形態に進化したのは正解だったようだ」

スレイはゴッドモーメントを展開しようとするが、ディファがそれを止める。

「あいにく、私はデュエルはやらなくてね。私の決着の方法はこれだ」

ディファは手に持っていた双剣を構えた。悪魔にも神々にも半数程度はいる、固有デッキも固有ディスクも持たない者。デュエルをやらず、直接自らの力で決着をつける方法を取る者だ。

「いいだろう。わたしが女を手にかける時が来るとは…思ってもみなかったぞ。スクルドが聞いたらどう反応するのか気になるな」

スレイはそんなことを余裕の顔で言っているが、既にアーティスを構え、確実にディファを殺る気でいる。戦闘態勢に入ったスレイを止めることができる者はいない。北欧神話最強の雷神トールでさえスレイに太刀打ちすることはできないほどだ。

「（さすが邪神スレイ…このプレッシャー、私の仲間が受けたら死ぬだろうね）」

「さあ行くぞ、ディファ。貴様の命はここまでだ。邪神の力を受けてみるがいい！」

「来るか！」

スレイは光速の5倍はあろうスピードでディファの後ろに回り込む。その風圧で、周りの壁が吹っ飛んだ。スレイはすぐにアーティスを振り下ろし、ディファを真っ二つに斬ろうとする。だが、ディファは、斬られる直前にその身をかわし、スレイに向かって剣を振る。

「甘い！」

スレイは何の魔法もなしで、腕1本を剣の盾にした。だが、その腕は剣に斬られることはなかった。

「な、なぜ！？」

「わたしの腕をその程度の力で斬れると思うな…！」

スレイはその直後、アーティスを全力でディファに向けて叩きつけた。ディファはそれをギリギリでかわし、アーティスは地面をたたきつけた。地面はアーティスが叩きつけられた地点を中心に、半径１００m程度がクレーターのようにへこみ、その影響で付近の廃工場が崩れてしまった。

「（やはり私では無謀だったか…しかし！ここまで来てしまった以

上、後戻りはできない。邪神スレイ、我が生涯最後の敵。こいつに敗れようとも、私の仲間たちの命が救われるなら私は満足だ）」

「フン、死を恐れていない表情を…！気でも振れたか…」

スレイは神力の弾丸を放ち、さらに自分も突撃する。

「そんな手は通用しない！」

だがディファは、神力の弾丸を片方の剣で切り裂き、スレイの突撃をもう片方の剣で何とか止める。

「やるではないか…だが！これはどうだ！」

スレイはゴッドモーメントを展開し、3体のモンスターを手早く召喚して生贄に捧げ、カードを1枚置く。

「光臨せよ、究極神オシリス！」

「何ッ！」

天から究極神の1体、オシリスが出現する。

「アルティメット・サンダーフォース！！」

オシリスはディファに向かって巨大な雷を吐きだし、スレイは巻き込まれないように時空移動魔法を使用し、一瞬でオシリスの傍に移動した。

アルティメット・サンダーフォースはまっすぐに港に直撃し、船や

廃工場などが一瞬にして消滅する。しかし、ディファは直撃の寸前に空高く飛び上がりかわしていた。だが、まだコンクリートで埋め立てられ陸だった港は破壊され、完全に海に浸水されてしまった。

「アルティメット・サンダーフォースをかわしたか…第2打にはまだ時間がかかるか」

スレイはアーティスの槍の先端部分を真正面に向けてディファに突進する。ディファはそれを、双剣をクロスさせて防御する。だがやはりというべきか、押されている。ディファは大きく弾かれ、大分遠くの線路に着地した。

「そこで立ち止まっていると、人間の創造物の餌食だぞ」

ディファのいる線路には、既に電車が迫っていた。ディファはそれに気付くと、すぐにジャンプして電車をかわす。しかしその先には、自分に向かってアーティスからの斬撃が飛んできていた。

「わたしは敵を待ったりしない。隙を見せたが最後、このアーティスの錆だ」

ディファは歯を噛みしめ、双剣を盾にしてガードする。だが、双剣の内1本が斬られてしまった。

「おのれぇぇぇぇぇ！」

ディファは思い切り叫んでスレイに突進する。だがスレイは、再びアーティスの斬撃を飛ばした。その数、１００。

「これでフィナーレだ。貴様もわたしに挑まずに仲間と共に逃げれ

ばよかったものを」

「な、なぜそれを！」

ディファは斬撃をかわしきってスレイに訊く。

「フッ、貴様の顔を見て、今ようやく理解できた。仲間に別れを告げ、たった1人で戦場に来た顔だ……だが戦場に来た以上、死の覚悟はできているはずだ。今更逃がしはしないぞ！」

「逃げなどしない、私は今までの所業の罪を背負ってここに来た。悪魔の宿命から逃れられず、あらゆるものを利用して生きてきた罪を」

「綺麗事など聞く耳持たん！」

スレイはディファの言葉を一蹴し、自身の身体を無数の光の粒子に分解した。

「何！消えただと…」

ディファが辺りを見回していると、突然目の前に光の粒子が集まりスレイが現れ、全身全霊を込めたアーティスの一撃を振り下ろした。この時何も事情を知らない人間が、攻撃の余波が来ない程度の場所からこの戦いの様子を唖然としながら見ており、スレイの方を悪だと思っていたらしい。

「…！！」

ディファはそれをたった1本残った最後の剣で受け止める。

「フッハッハッハ、どうやらここまでのようだな」

「……それはどうかな」

「何！うおぉっ！？」

突然、超圧縮された高圧水がスレイの腕を弾いた。

「…邪神スレイ、いくらお前でもこの超高圧水の力には耐えきれないはずだ！」

「ちっ…水の魔法か…！」

「…それだけだと思っているのか？」

「何だと！？…こ、これは…ッ！」

スレイの腕に魔術に用いる特殊な文字が刻まれていた。スレイはそれに気づいた瞬間、その腕を斬り落とし、再生させる。

「この…小娘が！」

スレイはディファを神力の解放による風圧で吹っ飛ばすと、神力で創られた無数のナイフを飛ばした。今の魔術は相手の神力などの特殊な力を根こそぎ奪う上位魔法の１つだ。

ディファはナイフを避ける。

「策略の悪魔…追い詰められていたのも演技か…」

「いや、追い詰められていたのは本当だ」

もう魔力は残っていない。スレイとの戦いの中で使い果たし、あとはこの剣1本のみ。

「だから、この一撃にすべてを託す。最後の勝負だ」

「「！！」」

ディファは剣を持って、スレイに向かい突撃した。対してスレイはアーティスを片手で構え、自分に向かって振り下ろされた剣を空いた素手の片手で握り砕き、もう片方の手に握られていたアーティスを躊躇することなく振り下ろした。

「ぐあああああああああああああっ！」

深く刺さったその刃は血が付着することなく冷徹なまでに銀色の輝

きを放っている。ディファが人間の姿から本来の悪魔の姿に戻った。この姿を見れば、なぜディファが人間の姿を取っていたかわかるだろう。

「…刃は心臓に届いた。お前の命はあとわずか、何か言い残したいことがあれば言うがいい。覚えておいてやる」

「…1つだけ頼みがある。私の部下に…仲間に手を出さないでほしい。それだけだ」

最高神によって邪神と呼ばれ、その名の通りに戦った最高神スレイ。だが、こいつは力こそは邪神を遥かに上回るが、絶対に邪神ではない。私はこいつと戦ったことを誇れる。

「……いいだろう、お前の誇りを見せてもらった。最高神界にも手を出さないように伝えておこう」

スレイが『いいだろう』と言ったところでディファは消えた。そして、ディファが消えたところに何かが落ちた。

「……これは一体…」

落ちていたのは何も書かれていない紫色のカード。デュエルをしない悪魔がこんなものを落とすはずがない。

「明らかに融合モンスターカードだな」

やはりその結論（？）にたどり着く。仕方ないだろう、それ以外に何もわからないのだから。

「今は帰るか」

わたしはトゥルース・ウィルを呼び出し、走り出す。わたしはその時、わずかに邪気を感じたが気にも留めなかった。それが思わぬ大物であるとも最初から考えずに。

～～～近くのビルの屋上～～～

そこには青い髪、青目の少女と、茶髪で青目と赤目のオッドアイの男が立っていた。少女の身長は大体小学４年生程度で、男の方が１８０ｃｍはある。もちろん悪魔が変身しているだけではあるが。

「ディファが敗れた…！おのれディファめ、最高幹部ともあろうものが最高神ごときに敗れるなど恥さらしなことを！」

「本当ですね。邪神スレイ相手に剣の勝負を挑むなど…無謀にもほどがある」

「やつは邪神と呼ばれてはいるが邪神ではないぞ。邪神でもなければ聖神でもない。それこそある意味本当の“神”だ」

「ですね。本来感情を持たず、ただ戦いに明け暮れる。暗黒神から聞いた話によれば、今の感情は全て人間を見ているうちに感化されたものだそうですよ。恋心だけは最初からあったようですが」

「恋心などどうでもいい。究極神がそれだけ与えたのだろう…無駄

話をしていても何も起こらない。ディファが敗れたとなると、次はわたしか。もう最高神共相手に最高幹部以外の悪魔は向かわせるわけにはいかんからな」

「そうですね。いくら悪魔の数が膨大とはいえ、無駄に駒を使うわけにはいきませんからね。さて、私は人形の調整でもしておきます」

「頼んだぞ、ディファの使用した人形よりもランクは上だからな。調整もその分だけ重要になる」

「はい、お任せください！」

2人の悪魔はそれぞれ魔法陣を展開し、男が住んでいる城に帰った。

第１２６話　長期休暇６　邪神と悪魔（後書き）

次回「長期休暇６　新たなる敵」

ウルズ「戦い方が卑怯すぎるでしょ…不意打ちに究極神の現実攻撃って」

スクルド「まあ、没ネタよりましだよ。今日はカードが出てきてないから没ネタ紹介行くね」

『最後の勝負でディファを切ったところ、幻影でスクルドだったという流れ』

ウルズ&ヴェルザンディ「……作者の考えそうなこと（ですわ）ね。そういう展開が大好きなようだし」

スクルド「これはこれで…いいわけないじゃん！」

ヴェルザンディ「まあまあ…とりあえず落ち着きなさい」

ウルズ「このまま悠長に書き続けていたら２００部超えちゃうかもしれないわよ？」

ヴェルザンディ「６章くらいから作者の気分と考え次第で新しい小説として投稿するかもしれないわ。いつの話になるかわからないけど」

スクルド「正直、超展開にすればあと３０話くらいで終わらせられ

るよね」

ウルズ「それは多分無理」

第１２７話　長期休暇６　ロキの休日尾行作戦Ｉ（前書き）

平和的な話を書いてみました。デュエルはありません。次回はデュエルですが…。

最近の出来事
ゴールドパックを買っても女神はわたしに味方せず、トリシューラは逃げていく。ならばと思い、トリシューラのウルトラレアを買いました。

第127話　長期休暇6　ロキの休日尾行作戦I

〜〜〜屋敷〜〜〜

やぁ…今日もいい天気だね。ロキだよ。昨日スレイの戦いの報告を聞いていたから大分寝不足かな。正直、スレイがインフィニティ・アイを起動せずに最高幹部を倒したことに驚いた。使ったら使ったで地獄絵図だろうけど。

「あ、ロキ。ちょっと見てほしいんだけど」

「セレナ、何を見てほしいの？」

セレナは3着の服を持ってきた。

「どれがいいかな？今日着るのに迷っちゃって…」

「…出かける時のスクルドとヴェルザンディーみたいだね。う〜ん…これかな」

僕は似合いそうな服を一着選ぶ。今日はセレナと2人で出かけようと思っている。どうやらセレナは、出かけるための服を選んで迷っていたみたいだ。僕はいつもこの服だから何も迷うことなんてないけどね。

〜〜〜1時間後〜〜〜

「遅い」

…あれから1時間。一体何をしていたらこんなに時間がかかるんだろ？

ああ、スレイが言ってたっけ。『女性の準備は時間がかかる。何をしているのかは知らないが、暇をつぶすための何かを持っておくことを勧める』ってね。でも、スクルドって未だに性別わからないんだよね。女性型なのかそれとも本当に女性なのか。正直言って外見だけじゃ絶対に判断できないし。ウルズとヴェルザンディーもわからない。

「結局ノルンって謎だらけだね」

「お、お待たせ〜…」

「待ってたよ、行こっか」

さてと…スレイから恋についてまとめられた本を渡されてるからね。参考にさせてもらおっかな。

行き先はネオ・ドミノシティ。オーディンが準備してくれた。

〜〜〜ネオ・ドミノシティ〜〜〜

「さてと…どこに行こうかな…」

「私はロキが行きたいところならどこでもいいよ」

「そう？じゃ、適当に歩いていい場所見つけたら行くことにするよ」

その頃、スレイ。

「フッ、ロキらしいな」

スレイはとあるビルの屋上からロキ達の様子を見下ろしていた。その手には不可視のアーティスが握られており、その身の後ろにはトゥルース・ウィルがある。ちなみにアーティスを見えないようにしているのは、周りの人間に見えないようにするためだ。実戦でも見えない武器は有効ではあるが、スレイがそれをしないのは自らがアーティスのリーチを目で見えるようにするためだ。

「さて、追うとしようか」

わたしはトゥルース・ウィルを次元にしまい、ロキを気付かれないように追いかけ始める。あの2人がデートで何をするかは予想がつく。どうせ大したことはせずにただ楽しんで帰ってくるだけであり、特別な進展はないだろう。

「待って、スレイ」

だが、追おうとしたわたしの前には1人の少女が現れた。青目青髪の少女だ。

「…悪魔か、場合によっては今ここで斬るが、何の用だ」

「いえいえ、私が仕えている主が、あなたは最初に生まれた時に恋心以外の感情がなかったと聞きましてね。真偽のほどが知りたくなっただけです」

「フン、最初に恋心などなかった。貴様の主の頭がおかしいだけだ」

まあ、恋心とはまた別の感情はあったが。戦いとは別にわたしに愛のみを与えてその神にしたかったのはどこのどいつだ?見つけたら叩き潰してやろう。わたしは愛<戦いなものなのでな。
ちなみにそれ以外の感情は周りの者たちからトレースしたものだ。

「へぇ…」

そうだったんだ。主の嘘つき。じゃあ今の恋心なんかも全部偽りか。スクルドさん、かわいそ~。

「念のために言っておくが、かりそめの感情とはいえそれは本物だ。この感情はわたしの物だ」

「成程。ま、満足したので帰りますね」

哀しい神だね~…。まあ、誕生の仕方が他の神と全然違うから当たり前か。あの何か隠している言い方には疑問を感じますけど無視しましょうか。

「…ようやく行ったか。まだ見失ってはいない、早いところ追わなければ」

スレイはビルの屋上から飛び降り、周りの人間の目を気にせずにロ

キを追う。ちなみに、ノルンも来ているので今の会話は聞かれていた。スクルドは本当のことを知っているので何も言わない。

ロキを追う際にスクルドがわたしと合流し、他の2人は別方向から追いかける。その間、歩きながら片手にポッキーの箱を持って食べる。ちなみにアーティスはもう必要ないだろうと思って懐に収めた。

「あ、スレイ。ロキはどこ？」

「そういえば…ああ、あの方向…だ？」

次の瞬間、なぜかわたしのもう片方の手に握られていたポッキーが消えた。次にスクルドを見ると、いつの間にかわたしが持っていたはずのポッキーを持って食べていた。

「それはわたしの食べかけだぞ…欲しければ言えばよかったはずなのだが？」

「わざわざ新しいのを出してもらうのも悪いし、これでいいよ。さ、行こ」

「……大分遠くに行ってしまったな。……失礼、スクルド」

「へ／／／！？」

スクルドを抱いて建物を飛び移ってロキを追いかける。ちなみに、なぜロキを追いかけているのかというとオーディンの差し金だ。オーディン曰く『あの2人は何があるかわからない』だそうだ。

「まったく、あの2人の行動の速さには呆れる…降ろすぞ」

「あ、うん」

「さて…喫茶店に入ったようだな。ここは変身している2人に任せよう」

～～～喫茶店～～～

「セレナは何がいい？僕はとりあえずショートケーキとブルーアイズマウンテンかな」

ロキは普段の態度を変えずに注文する。セレナと一緒にいて全然あがらないのを、こっそりと覗いているウルズとヴェルザンディが驚いていた。

「じゃあどうしようかな…うん、私はショートケーキと紅茶でいいかな」

実は、ロキはポーカーフェイスや感情を隠すのが非常にうまい。それどころか、自分自身が感じている感情や感覚を麻痺させることすらできる。やはり戦いでは有利なスキルだが使用しない。

「お待たせしました」

未来というだけあって、注文した物が来るのも早い。

ロキとセレナがケーキを食べているところをスレイ、ウルズ、ヴェルザンディ、スクルドの４人が見ている。ちなみにこの４人、スレイ以外は現代の人間が来ているラフな服に着替えている。普段から

着ている服では明らかに周りから浮いてしまう。
各現在位置は、スレイ・スクルドの2名がこの喫茶店の向かい側にあるビルの屋上から、ウルズとヴェルザンディの場所はロキ達が座っている席の2つ斜め後ろの席だ。

「さて、スレイのとどっちが美味しいかな？」

「ロキ、そんなこと言っちゃダメだよ」

セレナは自分の感情を隠したりすることはできないため、思っていることがすぐに顔に現れてしまう。

～～～ビルの屋上～～～

スクルドの青い髪が風になびく。これだけ書けば、純粋な女性が落ち着いて立っているように見えるが、実際にしていることはストーカーに近い。しかもポッキー食べてるし。

［オーディンだ。どうだ？］

［いいところなのに連絡を入れるな。しっかりと記録しておく、帰ったら渡してやるからそれを見ろ］

［なぜわたしとトールはこの作戦からハブられたのだ？］

［トールはわたしより低いからともかくとして、お前の身長は高すぎるのだ］

「そ、そんな理由でハブられたのか…」

オーディンとの連絡を強制的に切る。これ以上は見逃してしまうかもしれない。老人の戯言に付き合っている暇はないので、早いところ切るのが吉だ。

…あ、老人ではないか。

「スクルド、どうだ？」

「う～ん…よく見えないや…ウルズとヴェルザンディーに訊いてみるよ」

ウルズとヴェルザンディーの返事は、『まだティータイム中』とのことだった。

大体１０分が経っただろう。

「！！スレｉ…」

スクルドがわたしの名前を呼ぼうとしたところで急に口を押えて声を出さなくなった。どうやら舌を噛んだらしい。

「慌てて喋るからそうなる…あれほど気を付けろと言ったはずなのに…」

半分涙目になりながらスクルドはビルの下を指さす。すると、ロキがセレナを連れて店を出ていた。

「よし、追うぞ…」

スクルドを抱きかかえて建物を飛び移ってロキを追いかける。少し目を離すと途端に見失うから困り者だ。

［私…じゃわからないか。ウルズよ。ヴェルザンディーと一緒に別ルートから追うわ］

［了解。こちらは上空からだな。飛行すれば神力反応で見つかるから、ジャンプで追いかける。見失ったときの連絡を頼むぞ］

［ＯＫ］

「さて、スクルド。少し時間をいじってくれないか。わたしと君の時間を5分だけ進めてほしい」

要は先回りしたいだけだ。

「いいよ」

スクルドがロキにバレないように魔法陣を展開してわたし達だけの時間を5分進ませた。ウルズは時間をさかのぼる魔法、ヴェルザンディは現在の空間ならどこにでも移動できる魔法を使用できる。後悔した場合、ウルズに頼めば大抵のことは解決する。逆に未来がお先真っ暗ならスクルドに頼むといい。その時間だけ飛べばの〇太のようにジャ〇アンに殴られた痛みを味わう必要はない。

「さて、ここはどこだ?」

なぜそうなることを考えなかった。あと5分待つのも暇だな。今更後悔しても遅い。ウルズカムバック。

「あ、来たみたいだよ」

まだ2分も待っていない気がするが…まあ、暇がつぶれただけ良しとしよう。

「デパートに入ったな。仕方ない、わたし達も入るとしよう」

スレイは変身魔法を使用して一般人に紛れ込む。スクルドはもとから服は一般人の物なので問題ない。

〜〜〜デパート〜〜〜

「で、セレナは何を見たいのかな?」

「う〜んと…やっぱり洋服かな」

「（何着も持ってるじゃん…ま、いっか）じゃあ行こうか」

一応オーディンからもらってきた分が２０万…足りるかな?

ロキ達は洋服のフロアに行き、服を見て回る。ウルズとヴェルザンディが悟られないようにさりげなく尾行していた。

「これなんかどう?」

「いいと思うよ」

ウルズとヴェルザンディはまじめだったのだが、スレイはスクルドにつられて洋服を見てしまっていた。ロキがすぐ横を通り過ぎるが、気づいている様子はない。スレイはロキを見かけるとようやく用事を思い出したのか尾行を再開する。

「スクルドにつられていたせいですっかり忘れていた」

「ご、ごめん…」

「冗談だ。行くぞ」

スクルドの手を引っ張って走る。記憶玉への保存をしておかないとオーディンが機嫌を悪くするからな。

～～～現在時刻　５：４０～～～

「じゃあ、そろそろ帰ろうか」

「うん」

ロキとセレナはもう屋敷に帰ろうとしている。スレイは、記憶玉を三姉妹に預け、自身はトゥルース・ウィルを呼び出してどこかに走り去って行ってしまった。

「ほら、スクルドにヴェルザンディー、帰るわよ」

「そうですね。スレイのことは大丈夫でしょう。スクルド、いつまでも心配していても仕方がないです、帰って待ちましょう」

「そうしよっか」

三姉妹は屋敷に続く次元の扉を開くとその中に入る。もう変身を解き、元の姿に戻っている。

～～～スレイサイド～～～

「……」

回想…

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンで攻撃！」

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ０

回想終了…

「……」

ジャック・アトラス…わたしの真の力を見せてやろう。
わたしのライフを０にした数少ない人間…全力で叩き潰すに相応しい。

第１２７話　長期休暇６　ロキの休日尾行作戦Ｉ（後書き）

次回「長期休暇７」

今回は非常に短かったですね。最近は高校入学とともに提出しなければならない課題をやっていたので執筆時間が足りなかったのが原因だと思います。

ウルズ「スレイって感情無かったんだ。驚いたわ」

ヴェルザンディ「完全にないってわけじゃないわ」

スクルド「最強カード紹介行こうよ」

ウルズ「え？今回は何も出ていないわよ？」

スクルド「そんなことないよ。ほら」

『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』
レベル１２　闇属性　ドラゴン族　ＡＴＫ３５００　ＤＥＦ３０００　※アニメ効果
チューナー２体＋『レッド・デーモンズ・ドラゴン』
このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在するチューナー×５００ポイントアップする。このカードは相手の魔法・罠・モンスター効果では破壊されない。相手ターンに１度、このカードをゲームから除外することで、相手モンスター１体の攻撃を無効にする。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

ウルズ「ああ、そういえば最後のほうにちらりと出ていたわね…さすが公式チートカードね。強力な破壊耐性に加えて攻撃無効、さらに攻撃力アップ効果まで…」

ヴェルザンディ「闇の幻影もあったら突破は困難になるわね」

スクルド「さ、次はジャックとのデュエルだよ」

第１２８話　長期休暇７　ジャックｖｓスレイ　紅蓮と白金（前書き）

久しぶりに日をあけずに更新できました。
今回はちょっと書いているうちにこんがらがってしまいましたね。
究極神のおかげで次の展開も考え付いたので良かったのですが。

最近の出来事
友人にミスト・ウォームを１０００円で売ろうと思ってます。ちょっと安めですが店に売るよりは高くなりそうなので…。

第１２８話　長期休暇７　ジャックｖｓスレイ　紅蓮と白金

～～～ハイウェイ　現在時刻午前１０：００～～～

「……」

現在地点、ハイウェイＰＡ

「……」

スレイはパーキングエリアから再びＤ－ホイールを走らせる。だが、よく見ればタイヤが道路に接触していないことがわかる。それ故に摩擦によってスピードが減少することがなく、並みのＤ－ホイールでは追い抜くことはおろか、並んで走ることはできない。飛行モードのトゥルース・ウィルを追い抜くには、分速２０ｋｍ以上のスピードが必要になる。これでも飛行モードにしてはスピードを落としている方だ。

「…世界は…時の流れが変わる」

いつ訪れても時間の流れが変わる。前回訪れた時は延長期間よりも１日たっただけ。しかし、今回はあまり期間を空けていないのに２日が経っていた。

スレイはしばらく考え事をしながら走る。すると、３つのＤ－ホイールがスレイの目に映る。

スレイが見ているのはそのうちの１つ。白い機体で、その形は輪。

名は『ホイール・オブ・フォーチュン』。

スレイはそのＤ－ホイールを睨む。神力の放出によってスレイのただでさえ黒かった髪が、漆黒の輝きを放ち、眼が白金に光る。

「ジャック・アトラス！！」

「む…そのＤ－ホイールはスレイか！何の用だ！」

ジャックはスレイのＤ－ホイールを見て判断したようだ。いきなり変わると案外わからないものである。だが、ジャックはもう一度見直す。すると、すぐにスレイだと分かった。

「わたしとデュエルだ！」

ジャック・アトラス…わたしに2度目の敗北はないことを教えてやる…。

「フン、リベンジというわけか！いいだろう、デュエルだ！！」

「「デュエル」」

Ｓｌａｙ ｖｓ Ｊａｃｋ

「第一コーナーを取った方が先攻だ」

ジャックはそれを言うと、すぐに加速してコーナーを曲がろうとする。だが…

「……」

スレイは恐ろしいスピードでコーナーを曲がって行った。少しでも

操作を間違えれば、壁にぶつかってクラッシュしそうなほどだった。

「わたしのターン…わたしは『ＸＸ－セイバーガルセム』を召喚。カードを5枚伏せてターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
ＸＸ－セイバーガルセム　ＡＴＫ１６００
伏せカード×５

「フン、伏せカードが5枚か。俺のターン！！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　０→１
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　０→１

「俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！さらに『ダーク・リゾネーター』を召喚！レベル5の『バイス・ドラゴン』にレベル3の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚、我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』…まあいい」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『ＸＸ－セイバーガルセム』を攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

「トラップ発動『次元幽閉』！攻撃モンスター1体を除外する」

「何！攻撃モンスターを除外するだと！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンは攻撃したが、その攻撃が次元にのまれて広がる次元の穴に自身も吸い込まれ消え去ってしまった。

「おのれ…カードを3枚伏せてターンエンド！」

Ｊａｃｋ
ＬＰ４０００
手札×１
フィールド
伏せカード×３

「わたしのターン…」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　１→２
Ｊａｃｋ　スピードカウンター　１→２

「ジャック、お前は神を見たことがあるか？」

「何？」

「見たことはあるだろうな。三極神という名の神を。だが、わたしがこれから見せる神はそんな次元では収まりきらない。無限の力を放出し続け、その力で文字通りすべての存在を消し去る。わたしは『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を召喚し、ジャックにダイレクトアタック」

トラップなど気にするものか。わたしの戦い方はアグレッシブ。それ以外のスタイルは絶対に取らない。攻められるときは必ず攻める。

「トラップカード発動！『チューナーズ・リボーン』！『ダーク・リゾネーター』を復活し、攻撃力１０００につき1枚ドローする。よって1枚ドローだ！」

ダーク・リゾネーターが墓地から出てきて、ジャックにデッキの一番上のカードを手渡した。

「『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』の攻撃を続行。攻撃力は同じ…本来ならば2体とも破壊されるところだが…『ダーク・リゾネーター』は1度のみ、戦闘では破壊されない。よってわたしのエマーズブレイドだけが破壊される。だがエマーズブレイドはリクルーター。デッキよりエマーズブレイドを特殊召喚し、再び攻撃を行う。これで2体とも戦闘破壊されたな」

「くっ…しかしエマーズブレイドは…」

「そう、エマーズブレイドの効果によりデッキから『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を特殊召喚する」

戦いに躊躇など必要ない。それに、何も考えなしで2体もモンスターを犠牲にしたわけではない。

「だが！『チューナーズ・リボーン』が破壊された時、バトルフェイズは終了する！」

「知っている。トラップ発動『ガトムズの緊急指令』。墓地からエマーズブレイド2体を特殊召喚する。レベル3の『ＸＸ－セイバー

エマーズブレイド』２体とレベル３の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング」

「レベル…９…まさか！」

どうやら、あのカードはこの世界でもかなりのレアカードのようだ。

「シンクロ召喚。３つの絶望を味わうがいい。『氷結界の龍トリシューラ』！」

「やはりか…この世界にも１５０枚あるかないか程度のレアカード…！」

それならお前が持っているレッド・デーモンズ・ドラゴンの方がレアだろうと普通の人間は言うだろう。だが神はそんなことをそもそも疑問にも思わない。
こいつの効果を知っているのはジャックだけではないようだな。

「トリシューラの効果により、お前の墓地から『ダーク・リゾネーター』、フィールドから右のカード、手札から左のカードを除外してもらう」

除外されたカード：『バーニング・ソウル』『クリエイト・リゾネーター』

「フッハッハッハッハ、『バーニング・ソウル』を除外されてしまってはそう簡単には紅蓮の悪魔は召喚できないか。もっともすでに、レッドデーモンズは除外されているがな」

「それはどうかな？トラップカード発動『闇次元の解放』！除外さ

れた闇属性モンスター『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を特殊召喚する！さらに、ゲームから除外された『バーニング・ソウル』の隠された効果を発動する！このカードが発動せずにフィールドを離れた時、カードを5枚ドローする」

「ほう…」

しつこいな。いや、レッド・デーモンズ・ドラゴンがエースモンスターで、その上1枚しかない以上そのくらいはするか。だが手札補充は厄介だ。

「トラップ発動『強制脱出装置』。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』をエクストラデッキに戻す」

「何ぃ！？」

「これでわたしの伏せカードは残り2枚だが…まあいい。ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００
伏せカード×２

「俺のターン！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　２→３
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　２→３

スレイは間違いなくまだトラップを隠している…！だが！このジャック・アトラスがその程度の罠で怯むものか！

「俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚。そして、『フレア・リゾネーター』を召喚！」

「性懲りもなく『レッド・デーモンズ・ドラゴン』をシンクロ召喚するつもりか…」

わたしの伏せカードは奈落の落とし穴とガトムズの緊急指令…レッド・デーモンズ・ドラゴンごときでは突破できはしない。

「フン！レベル５の『バイス・ドラゴン』にレベル３の『フレア・リゾネーター』をチューニング！シンクロ召喚『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！シンクロ素材になった『フレア・リゾネーター』の効果により攻撃力３００ポイントアップだ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００→３３００

「無駄なことを。トラップ発動『奈落の落とし穴』。攻撃力１５００以上の召喚・反転召喚・特殊召喚されたモンスターを破壊してゲームから除外する」

「何だと！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが底なしの落とし穴に落ちて消える。

「ジャック、何度エースモンスターを召喚しようと同じことだ。何度でも破壊してやろう」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

Ｊａｃｋ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
伏せカード×２

やはり伏せカードのみか。だが、必ずレッド・デーモンズ・ドラゴンを呼び戻すトラップはあるだろう。

「わたしのターン…！」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　３→４
Ｊａｃｋ　スピードカウンター　３→４

「わたしは『Ｈｓｐ一封印の黄金櫃』を発動。スピードカウンターが0以上ある時、デッキから1枚除外し、2ターン後のわたしのスタンバイフェイズに手札に加える。わたしが除外するのは『メタモルポット』だ」

2ターン後…互いの手札は5枚になる。それまでにライフが0にならないように防御するなど容易。

「わたしはこれでターンエンド」

トリシューラで攻撃して、万が一トリシューラを失うようなことがあればガトムズの緊急指令だけでは逃れられない。攻めに転じるのは3ターン後だ。

Ｓｌａｙ
ＬＰ４０００
手札×０
フィールド
氷結界の龍トリシューラ　ＡＴＫ２７００
伏せカード×１

攻撃してこなかった?俺のトラップを警戒したのか?

「俺のターン!」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　４→５
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　４→５

「俺は『Ｓｐ－ドラゴンズ・チューン』を発動!スピードカウンターが４つ以上ある時、墓地と手札の素材を除外することでドラゴン族のシンクロモンスターをシンクロ召喚できる!墓地の『フレア・リゾネーター』と手札の『ヘル・ドラゴン』を除外!王者の叫びがこだまする!勝利の鉄槌よ、大地を砕け!シンクロ召喚、羽ばたけ、『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』!!」

「『フレア・リゾネーター』がシンクロ素材となったことで攻撃力が３００上がる…」

エクスプロード・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ２４００→２７００

しかもエクスプロードはその攻撃力以下のモンスターと戦闘を行う時、そのモンスターを戦闘を行わずに破壊し、その攻撃力分のダメージを与える効果がある。つまり、トリシューラに攻撃された場合、

トリシューラは無条件で破壊され２７００のダメージを負うことになる。

「『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』で『氷結界の龍トリシューラ』を攻撃！キング・ストーム！」

「ぐぁあああ！！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ４０００→１３００

スレイのＤ－ホイールが空中で激しく回転する。浮遊していないので摩擦を利用しての力ずくの制御はできない。スレイはガードレールに激突するが、すぐにコースに戻ると再び加速する。

「あれだけの激突をしながらＤ－ホイールに傷がついていない…！」

「当然。このＤ－ホイールはわたし自身が作り上げたもの。この程度で破損するはずがない」

オリハルコン製の機体を甘く見るなよ…。

「ターンエンド！」

Ｊａｃｋ
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
エクスプロード・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ２７００
伏せカード×２

「わたしのターン！」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　５→６
Ｊａｃｋ　スピードカウンター　５→６

「わたしは『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を攻撃表示で召喚する。ターンエンド」

手札はこれで再び０だ。フラムナイトを引けただけでも十分だな。

Ｓｌａｙ
ＬＰ１３００
手札×０
フィールド
ＸＸ－セイバーフラムナイト　ＡＴＫ１３００

「俺のターン！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　６→７
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　６→７

「俺はスピードカウンターを７つ取り除き１枚ドロー！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　７→０

「『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』で『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を攻撃！キング・ストーム！」

「させるものか、『ＸＸ－セイバーフラムナイト』のモンスター効果発動。１度だけ相手モンスター１体の攻撃を無効にする！」

フラムナイトが剣でエクスプロード・ウィング・ドラゴンの攻撃を受け止めて弾いた。

「フン、ターンエンド！」

Ｊａｃｋ
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
エクスプロード・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ２７００
伏せカード×２

「わたしの…ターーーーーン！」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　７→８
Ｊａｃｋ　スピードカウンター０→１

ようやく来たぞ…この手札を補充するためのカードが。スピード・ワールドの効果に頼ることも無い。わたしはわたしの力のみでジャックを粉砕する！！

「わたしはモンスターをセット。さらに『Ｈｓｐ－死者蘇生』発動。スピードカウンターが０以上ある時、墓地のモンスターを蘇生させる！『バイス・ドラゴン』復活。レベル５の『バイス・ドラゴン』にレベル３の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング！シンクロ召喚『スクラップ・ドラゴン』！『スクラップ・ドラゴン』よ、『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』を粉砕しろ！」

無数の瓦礫がエクスプロード・ウィング・ドラゴンに当たり、爆発

した。

「ちっ…」

Ｊａｃｋ　ＬＰ４０００→３９００

「ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ１３００
手札×０
フィールド
スクラップ・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
伏せモンスター×１
伏せカード×１

「俺のターン！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　１→２
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　８→９

「俺はトラップカード『闇次元の解放』を発動！帰還せよ『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！そして『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『スクラップ・ドラゴン』を攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

「『スクラップ・ドラゴン』が…」

本来ならスクラップ・ドラゴンが破壊された時、墓地からシンクロモンスター以外のスクラップと名のつくモンスター１体を特殊召喚

することができる。だがわたしのデッキにシンクロモンスター以外のスクラップモンスターは存在しない。

Ｓｌａｙ　ＬＰ１３００→１１００

「さらにトラップカード『スカーレッド・クリエイト』！自分フィールド上の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』とデッキのチューナー２体をゲームから除外し、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』をシンクロ召喚する！デッキの『レッド・ノヴァ』と『クリエイト・リゾネーター』、フィールドの『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を除外！シンクロ召喚『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！バトルフェイズ中の召喚により、攻撃はできる！伏せモンスターに攻撃、バーニング・ソウル！」

「『メタモルポット』のリバース効果発動。互いに手札をすべて捨て、５枚ドロー！」

ようやく来たか…！待ちわびたぞ、我が神よ。

スレイのドローしたカード：『ラーの翼神竜』『オベリスクの巨神兵』『オシリスの天空竜』『ＸＸ－セイバーフォルトロール』『ＸＸ－セイバーレイジグラ』

「ターンエンドだ！」

Ｊａｃｋ
ＬＰ３９００
手札×５
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００

「フハハハハ、ハッハッハッハッハ！わたしのターン！」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　９→１０
Ｊａｃｋ　スピードカウンター　２→３

「なにがおかしい！？」

「…ジャック・アトラス、次元の違いをその身で思い知るがいい！わたしは『ＸＸ－セイバーレイジグラ』を召喚、その効果により墓地から『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を手札に加える。そしてトラップカードオープン『ガトムズの緊急指令』。蘇れ『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』！」

２体のエマーズブレイドが蘇り、更にスレイは手札から１枚ディスクに置く。

「『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚。さあ、その目で神を見るがいい！わたしは『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』２体と『ＸＸ－セイバーレイジグラ』、わたしのライフ半分を生贄に『究極神オベリスク』を特殊召喚する！！」

「何、『究極神』だと！！…な、なんだこれは？」

天地が青く染まり、次元が開く。その中から、青い巨神が出現する。

究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００

「こ、攻撃力８０００…！！ならば手札より『スカーレッド・ガーディアン』の効果発動、このターン、『スカーレッド・ノヴァ・ド

ラゴン』は戦闘では破壊されず、ダメージは０になる！」

「ほう、勘がいいな。我が神の効果を肌で感じ取ったか。まあいい、ならば『ＸＸ－セイバーフォルトロール』のモンスター効果により墓地から『ＸＸ－セイバーレイジグラ』を守備表示で特殊召喚する。そして『ＸＸ－セイバーレイジグラ』の効果で墓地から『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を手札に加える。ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ５５０
手札×６
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００
ＸＸ－セイバーフォルトロール　ＤＥＦ１８００
ＸＸ－セイバーレイジグラ　ＤＥＦ１０００

「俺のターン！」

Ｊａｃｋ　スピードカウンター　３→４
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　１０→１１

「俺は『Ｓｐ－シンクロフォース』を発動。スピードカウンターが４つ以上ある時、デッキからチューナーを５体墓地に送ってシンクロモンスター１体の攻撃力を２５００ポイントアップする！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→８５００

「だが、確かその魔法カードによってパワーを上げたモンスターは相手モンスターを破壊できない」

ジャック・アトラス…デッキにそれほどのチューナーを積んで事故を起こさないとは…なかなかやるな。

「そうだ！だがダメージは受けてもらうぞ、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『究極神オベリスク』を攻撃、バーニング・ソウル！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは究極神オベリスクに体当たりをかまし、究極神オベリスクがよろめく。

Ｓｌａｙ　ＬＰ５５０→５５０

「何！なぜライフが減っていない！？」

「『究極神オベリスク』が戦闘を行う時、相手はカードの効果を発動できず、わたしへのダメージは０になる…もっともダメージ０は基本的に戦闘ダメージを相手に移し替える効果を防ぐために存在するものだが…稀にこういうことにも役に立つ。先程までの余裕がないぞ？」

「クッ…カードを３枚伏せターンエンド」

Ｊａｃｋ
ＬＰ３９００
手札×２
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ８５００
伏せカード×３

「わたしのターン！ジャック・アトラス…そろそろこのデュエルに

幕を下ろしてやろう。わたしは『ＸＸ－セイバーフォルトロール』の効果によって墓地から『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を特殊召喚し、さらに手札から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚。そして、効果を使用した『ＸＸ－セイバーフォルトロール』と『ＸＸ－セイバーレイジグラ』『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』とわたしのライフ半分を神への供物とする。光臨せよ、『究極神オシリス』！！」

天地が赤く染まり、次元の穴の奥から赤い巨大龍が姿を現した。

「２体目の『究極神』だと！！」

「『究極神オシリス』の攻撃力はわたしの手札×２０００…つまり１００００だ。だが、ジャック…お前は究極神オシリスの攻撃を見ることなくライフが０になる。フォルトロールの効果で墓地のレイジグラを特殊召喚し、もう１体のフォルトロールを墓地から手札に加えて特殊召喚する」

「再び３体のモンスター…！！」

「光栄に思え、ジャック。人間でありながら、わたしの究極の神の力を直に見ることができるのだからな。無限の力よ、我が手に…！３体のモンスターとわたしのライフ半分を神への生贄とし、『究極神帝ラー』を特殊召喚！！」

最後の神が次元を揺らして出現する。白金の光が世界を照らし、曇っていた天気は晴れになる。これを見ている人間たちは己の力の限界を思い知る。いくら強力な力が集まろうとも越えられない壁が存在する。この神はスレイの最後の剣。触れるものすべてを消滅させる力。

究極神帝ラー　ＡＴＫ∞

「そ、そんなバカな！」

「攻撃力∞だと！インチキカードもいい加減にしやがれ！！」

「神々のインチキも何もない。これをインチキというのならば、神の存在そのものがインチキだな。前にも話した気がしなくもないが…ディスペアの記憶などいずれ薄れる。忘れているのかもしれないな。…さあ、覚悟はできたか？『究極神帝ラー』は２体の究極神が存在している時効果が起動し、攻撃可能になる。その効果によって相手は全てのカード効果を封じられ、サレンダーできない。そして１ターンに１度、相手のカードを全て除外し、∞のダメージを与えることができる」

だが、この究極神帝ラーこそがわたしの最強の力であり最大の弱点。

「何！！」

「だがこの効果は使用しない。神の劫火を受けるがいい、紅蓮の悪魔よ！『究極神帝ラー』で『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃！ゴッド・アルティメット・フレア！！」

ラーが宇宙に巨大な炎の球を撃ち出す。宇宙空間からばらけた炎が降り注ぎ、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを破壊し、ジャックのＤ－ホイールが停止する。ソリッドビジョンで呼び出されていた究極神が消え、世界を焼き尽くす炎も消滅した。

「ジャック・アトラス…これがわたしの全力だ。また会おう」

スレイは満足したようで、すぐにトゥルース・ウィルを走らせてその場を去る。勝利に浸るのはほんの一瞬で、そのあとはすぐ次の戦いに身を投じる。

～～～その頃、別世界の城～～～

「うわあああああああ！助けてくれ…ッ！ぎゃあああああああああ！」

叫び声をあげて倒れたのは魔皇軍最高幹部の１人。最高幹部の数は全部で２５０体。そして、この最高幹部を倒したのはたった１人の人間の少女。赤目赤髪の、大鎌を持った少女だ。

だが、最高幹部は倒してもいくらでも候補が存在するため侵攻を食い止める以外にはあまり意味がない。

「最高幹部もこんなもんか」

「たまたまだろう？」

少女に話しかけたのは剣を持った黒髪でツリ目の剣士、この少女が従えている精霊のようなものだ。

「でも２人で１つの城を落とせるようじゃその程度ってことよ。さ

あ、ちょっと遠くの次元だけど４つの大きな反応があったわ。そのうち１つは、時空を楽に消せるくらい力を持ってる。でも、４つの内１つにはその主人みたいなのがいて、それを制御してる。…行くよ」

「おいおい、悪魔かどうかわかった者じゃないぞ」

「そんなのどうでもいいわ。人間じゃなければね。それに、そんな馬鹿でかい力を振り回すのは悪魔以外にはいないわ」

「……まあ、お前が言うならついて行こう」

「それでいいわ。さあ、行くわよ」

少女は鎌を振って次元の扉を開いて中に入る。人間で神が創った時空間の壁を切り裂いて移動できる者など数えるほどしかいない。この移動ができるのは、大抵神が転生させた者か悪魔を退治するために力を蓄えた者。もう１つ例外として、生まれた時から特殊な神器を所持している者くらいだ。この少女の場合は２つ目に該当する。

「……」

さあ、次は一体どんな敵が待ち受けているのかしら?楽しみね。

第１２８話　長期休暇７　ジャックｖｓスレイ　紅蓮と白金（後書き）

次回「長期休暇８　神と少女」※サブタイ変更の可能性有り

ウルズ「さて、リベンジ成功ね」

スクルド「さあ！最強カード紹介行ってみよー」

『究極神帝ラー』
レベル１２　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体と自分のライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在する時のみ効果が適用され、攻撃可能になる。このカードはこのカード以外のいかなる効果・コストも受けず、戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果は無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、お互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードを全て除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。このカードの元々のレベルは∞として扱う。このカードの効果のスペルスピードは∞として扱う。

ヴェルザンディ「書いてあることのほとんどが意味不明なチート効果ね」

スクルド「すさまじいよね…」

ウルズ「ジャックもさすがに無理だったか。まあ、最初にバイス・リゾネーターしちゃったから無理だったのね」

ヴェルザンディ「さあ、最後のほうでもわけのわからないのが動いてるようだし用心するに越したことはありませんわね」

スクルド「本編の私たちはそんなこと知らないけどね」

第１２９話　長期休暇８　神と少女（前書き）

どんどんカオスな方向に進んでいく…大変だ、さあ大変だ。…おふざけはここまでにします。

最近の出来事
今日はアポなしで友人２人が来ました。どうやらＦＦのカードゲームに少しはまっているようで、わたしの存在意義がなかったというｗなんでお茶だけ飲んで帰ったよ…

第１２９話　長期休暇８　神と少女

～～～屋敷～～～

「……先刻、時空壁が破られるのを感知した」

「！！」

オーディンの突然の知らせに、スレイを除く全員が驚く。

「スレイ、驚かないのか？」

「……フッ」

スレイは目を閉じたまま笑った。そしてゆっくりと目を開ける。

「次元の扉が開かれたくらいで何を驚く？前例がある以上、何も思うまい」

スレイの言葉に全員が黙る。

「だが、気になるのも事実。わたしが様子を見よう。お前達は手を出すな」

スクルドは『私も』と言おうとしたが言葉が出なくなった。今のスレイには言葉が届かない。戦いの魂を燃やして髪が漆黒の輝きを、

眼が白金の輝き放っている間は誰にもスレイの意思を阻むことはできない。

スレイの眼光は空に向かっていた。そして、スレイはアーティスを一度だけトールから借りたミョルニルで叩きつける。すると、アーティスは一瞬でその形を変え、グングニルの部分が消えた。普通、ハルバードというだけで槍と斧の複合武器とわかるが、わざわざハルバードランスと呼んでいたのはグングニルがついていたためだ。完成形となったハルバードを振り回すとスレイは満足そうに笑みを浮かべた。

「十分だ。グングニルを取り付けて、オリハルコンの性能を弱めていた方がおろかだったな」

神々の金属、オリハルコン。その性能は他の金属とは比べ物にならず、それだけで魔力と神力を持つ。オリハルコンで創られ、完全に完成された武器はこの世にアーティス程度しかない。

「さあ、いい加減わたしは行く。お前達はわたしの戦いを見ておけばいい」

スレイは鋭い眼光を空に向けたまま飛び立つ。

〜〜〜ドミノ町、海馬ランド前〜〜〜

「やっとついた…」

「時空転移などそんなものだ。お前の目的はこの空間にいるのだろ

う？」

「さあ？私が狙ってるのは最高幹部の1体、ヴェルギルよ」

私の家族を皆殺しにした挙句、私の町があった大陸一つを嗤いながら沈めた…。絶対に許さない、倒すべき敵！…でも、他の悪魔だって見過ごせない。

「おい、こちらに1人向かっているぞ」

「わかってる。こっちから行くわよ」

少女は赤い長髪をなびかせながら飛び立った。大鎌を構えて。

「ハッハッハッハッハ、どうやらわたしは女に狙われる方が多いようだな。手にかけたくはないが、わたしに楯突くならば容赦はしない」

「え！！？」

少女が振り向く。すると、そこには白金に輝く鋭い眼光を少女に向けているスレイがいた。

「大体人間界で言う高校生程度か。若き命を散らしに来るとはな」

「黙れ悪魔！」

「ほう……？」

悪魔か。面白い、勘違いしている今、わたしが神だと言っても信じ

まい。ならばこの戦闘を楽しもう。

「はぁぁっ！」

少女が鎌を振り上げスレイを斬ろうとする。だが、スレイは多少体を動かすだけでかわした。

「その程度の実力でよく最高幹部ヴェルギルを倒そうなどとほざくな…名を聞こうか？」

「くっ…私の名はイリア！」

「フッ、本気でわたしを倒そうというならまだ足りんぞ…！」

スレイは完成形のアーティスで斬りつけようとするが、イリアは鎌の柄で防ぐ。しかし、完全に力を解放したアーティスの一撃を堪え切れるはずもなく、鎌の柄は真っ二つに斬れる。イリアは光速で飛び退いた。

「人間ごときがそれほどのスピードを出せるとは…その上、スピードの反動を受けていない…」

女子供と甘く見るのは危険か。ディファ程度では使用するに値しなかったが、この少女は手を抜けばやられる。

「時空のバランスが崩れるだろうが構わん。起動せよ、我が右目よ」

スレイはインフィニティ・アイを起動した。その瞬間、アーティスが黒い光を放ち、ゴッドモーメントが強制起動する。

「究極の力を…思い知れ、人間！！」

時空が揺れ、巨大な神力が放出される。

「こ、この力が…」

「あの４つの反応の１つか。わたしも出よう。イリア１人では手こずりそうだ」

黒髪でツリ目の剣士が具現化する。

「精霊か。だが剣士が１人増えたところで何も変わらん。行くぞ！」

剣士の持つ剣とスレイのアーティスがぶつかる。そして、イリアが鎌でスレイを斬ろうとする。

「２人掛かりでその程度…トールの方がまだやるぞ…」

スレイがアーティスを一旦引っ込め、薙ぎ払う。２人ともスレイの傍から離れ、スレイと対峙する。

「トールって…あの雷神のことか！」

剣士は北欧の伝説を知っているようで、雷神トールの名を聞くと驚いた。

「だったらどうした?恐れをなして逃走を図ろうとしようが、わたしはお前達を逃がすことはしないぞ」

スレイは剣士に向かって突進し、再び剣と打ち合う。

「貴様、名は何だ!?」

「わたしの名はスレイ。貴様の名こそ気になって仕方がない。わたしの質問に答えてもらう」

「くっ…我が名はアレク。聖剣の使い手なり!そして、イリアの従者!」

「聖剣の使い手が従者か。笑わせる!」

スレイは剣士と距離を取ると、再びアーティスを構えなおす。だが、ここでスレイはイリアが消えたことに気付いた。気付いた次の瞬間、スレイの頭上から炎が降り注ぐ。

「奇襲か。だが、その程度の炎でわたしを炭にできると思うな!」

スレイは炎を直に食らったが、すぐに神力を放出して炎を振り払った。

「だが、このまま戦えば町が壊れる。結界を張らせてもらうぞ」

スレイの真下の地面を中心に、∞の形の光が広がる。

「これでいいだろう。どれだけ暴れても何も害を及ぼさない。まさに戦いのための空間…」

この空間から逃げるにはわたしを殺すか、わたし自身がこの結界を解除するしかない。

……あの少女の背が低いせいで、標的が小さいせいで、攻撃を当て

るには困難だった。広域魔法が使えるようになった今、もはや小細工で逃げることはかなわない。

「始めよう…」

スレイはカードを5枚引き、カードを1枚セットした。

「『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』召喚」

「なっ!?召喚!?何の詠唱もなしで召喚魔法を!?」

「うろたえるなイリア、あの魔物のレベルは高くない!アレの相手はわたしがする。イリアは悪魔の退治を!」

「アーティスよ、天を貫け!!」

スレイはアーティスを天空に飛ばした。無数の雷が降り注ぎ、アーティスはスレイの手に戻る。イリアはとにかくかわし続けるが、鎌が避雷針の代わりになってしまい、大きく回避しなければならなくなる。エマーズブレイドの傍にいる剣士アレクには雷がよらない。だが、スレイは降り注ぐ雷を気にすることなくイリアに突進する。アーティスの一撃を鎌で防ぐが、やはり押され始めた。

「その鎌…未完成とはいえオリハルコンか。道理で柄が砕けても再生したはずだ」

スレイは、アーティスを振り上げて距離を取り、再び突進しようとした。…が。

「悪いが、その戦いはここまでにしてもらおう」

突然現れた悪魔と、大量の人形によって阻止された。人形は全て同じ姿をしている。その姿は、何とスレイを模していた。ただし、髪の色が紫で服は基本的に青と赤だが。

「（キモ…）」↑アレク

「死にたいようだな…、わたしの姿を模すとは…」

「うっわぁ…」↑イリア

「どうだ？最高神スレイよ、気に入ってくれたかな？」

「え？最高神！？」

イリアが素直に驚く。悪魔と勘違いして戦っていた相手が、本来味方であるはずの神をだったと知れば正しい反応だろう。

「チッ、いいところだったものを、わたしの正体をバラすとは…」

「ご、ごめん…神だなんて思わなくて」

「人間、そんなことはどうでもいい。わたしは先程までの戦いを楽しんでいたというのに、楽しんでいたというのに…！邪魔をしたこの悪魔を殺す」

「怖い怖い、だがこの最高幹部アクティブを簡単に殺せると思うなよ…？人形もあるからな」

「最高幹部…！」

イリアが1本だけ立っている髪を揺らして反応した。

「神様…あの人形はあなたが倒して。最高幹部だけは、私が倒す！」

イリアが鎌を構えた。赤い髪が静かに揺れる。

「人間がわたしに命令するか。面白い、その要望聞き入れてやる」

「ありがと！」

イリアはアクティブに突進した。

「名の通り随分と活発な最高幹部だな。まあいい、かかってこい人形共」

いや、アクティブなのはイリアとかいう少女の方か。…そんなことを考えている場合ではなかったな。

「クズが…わたしの真似事をするな」

スレイはアーティスをブーメランのように投げる。アーティスはおそらく２０００体はいる人形を数体だが切り裂いて戻ってくる。

「この…っ！」

「その程度では我を倒すことなどできん！」

鎌を剣で防いでいるアクティブはかなり余裕そうだ。光速で突進してくるイリアの一撃を軽く受け止め、押し返す。

「これならどう？」

イリアは鎌に炎をまとわせて振る。炎がアクティブに向かって飛んで行った。それだけではなく、次々に違う属性の魔法を纏わせては放つ。

「甘い！」

アクティブが剣を大きく振りかぶった。その衝撃波で魔法を弾き、イリアの腕を斬る・

「くっ…今回は多少ピンチかな」

「フッ、ではこういう芸はどうだ？我は『ブラッド・ヴォルス』を召喚」

斧を持った獣人が出現する。獣人に似てはいるが悪魔族だ。

「やっぱり詠唱無しで召喚魔法…！こんな奴！！」

イリアはブラッド・ヴォルスを斬り、撃破した。

「やるではないか。どうやらこの程度では甘かったようだな」

アクティブは強い炎と雷をイリアに向けて放つ。しかし、それはイリアには届かずに聖剣によって弾かれた。

「やっと回復？」

「すまない、遅れた」

エマーズブレイドに斬られた場所を回復していたアレクが戦線復帰し、イリアは笑う。

「行くわよ」

「わかっている」

2人はアクティブに向かって飛んだ。

「この程度の人形の力ではわたしの体力を削るには役不足だ」

スレイは戦いの真っ最中に偶然持っていたマシュマロを食べながら余裕の表情で人形の軍勢を見る。

「…もうこれ以上こいつらの相手をするのは飽きた。人間！うまく避けろよ」

スレイの言葉にイリアがとっさに反応して大きく退く。

「超広域殲滅魔法…久々だな。結界も張ってあるから心配はないか。

天の怒りを知れ！」

スレイは自身を中心に広く魔法陣を展開した。人形全部とアクティブが魔法陣の中に入ると、魔法陣が拡大を停止して光を放つ。

「か、体が動かん…！」

結界内に入っているスレイ以外の生命体の身体が動かなくなる。魔法陣が起動して結界内に雷がスレイのいる場所を除いて隙間なく降り注いだ。

「うがあああああああああああ！！」

アクティブが巨大な力を持った魔法を食らって叫びをあげる。

「す、すごい…これが神様の魔法…」

「まだ生きていたのか。インフィニティ・アイを起動しておくべきだったか」

イリアとの戦闘を遮られた時に解除したのが間違いだったか。だが、人形の半分は消えた。これで多少動きやすくなるな。

残念なのはアクティブが大したダメージを負っていないことだ。活発と言う名は伊達ではなく、あらゆる治癒能力や防御能力が他の者よりも数段上だ。

「くそ…本気を出していないのにこの威力の広域殲滅魔法だと…」

「戦闘中に無駄口をたたくだけの余裕はあるか。まあ、貴様の相手はあの少女だ。任せるとしよう」

スレイは再び人形を破壊する。スクルドのもそうだが、自分の姿をした偽物がいるのも気に入らない。

「おのれ…こうも我の作戦を…！！おおおおおおおおおおおおお！」

「！！？」

「最高神スレイ、デュエルだ！！」

アクティブはイリアを無視してスレイに勝負を挑む。

「結局そうなるのか。まあいいだろう、最も合理的で確実に貴様を葬る手段だ」

スレイはゴッドモーメントを起動し、アクティブは腕を変形させてディスクにする。そして、大気が４０枚のカードの形を成し、ディスクに収まる。スレイは次元宝物庫を開き、デッキを取り出してセットした。まるでゲ〇ト・オブ・〇ビロンのようだ。全然違うが。

「「デュエル」」

Ａｃｔｉｖｅ　ｖｓ　Ｓｌａｙ

「先攻は我がもらう。我は『名推理』を発動」

「レベルは８だ」

あのカードの効果は相手がレベルを１つ宣言し、自分はデッキの上からカードを順にめくっていく。最初に出た通常召喚可能なモンス

ターのレベルが、宣言していたレベルと同じだった場合はそのモンスターを墓地に送り、外れていた場合は特殊召喚する。そして残りのめくったカードはすべて墓地に送る。…ちなみに、通常召喚可能ではあるが特殊召喚できないモンスターが出た場合はそこで打ち止めだ。

「…1枚目、レベル10『トラゴエディア』。特殊召喚する」

「よりにもよってそのモンスターか…」

手札×600ポイントの攻撃力を持ち、更に手札のモンスター1体を捨てることで相手フィールド上の捨てたモンスターと同レベルのモンスターのコントロールを得る。あともう1つ効果があるが説明は不要だろう。

「何？何なの？…？？」

「人間、黙って見ているがいい。これからお前は命のやり取りを目にする」

ただ一言でイリアを黙らせる。

「では続きだ。カードを1枚伏せターンエンド」

Ａｃｔｉｖｅ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
トラゴエディア　ＡＴＫ２４００
伏せカード×１

「わたしのターン！…わたしは永続魔法『機皇連召』を発動」

機皇デッキは久しいな。あれから随分と改造したものだ。機皇神龍アステリスクと機皇兵を三種、各1枚抜いてちょっといじっただけだが。

「『ワイゼルT』召喚。このカードはフィールドに機皇帝の本体が存在しない時に破壊される。だがここで『機皇連召』効果発動。自分フィールド上のモンスターが効果で破壊された時にデッキまたは手札から『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』を特殊召喚し破壊する。わたしは『グランド・コア』を特殊召喚して破壊。破壊されたコアの効果により『機皇帝グランエル∞』『グランエルT』『グランエルA』『グランエルG』『グランエルC』を特殊召喚する。合体しろ機皇帝グランエル！！」

機皇帝の攻撃力はわたしのライフを同じ。よって…

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ８０００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００

「『機皇帝グランエル∞』で『トラゴエディア』を攻撃する！グランド・スローター・キャノン！」

殺戮砲がトラゴエディアを襲う。

「相手モンスターの悪魔族に対する攻撃宣言時、『トラゴエディア』

と手札の『闇の侯爵ベリアル』を墓地に送ることで手札より『ダークネス・ネオスフィア』を守備表示で特殊召喚!!」

「そのモンスターは!面倒な…」

神の影響だけで歴史が変わるというのに、よりにもよってこの世界の最強の敵のカードを何の躊躇もなく使うか。効果は戦闘では破壊されず、自分のターンに1度、自分の表側表示のトラップカードを全て手札に戻す。召喚条件は悪魔族が攻撃対象にされた時にフィールドと手札の悪魔族モンスターを1体ずつ墓地に送ること。

「だが!その程度の力でわたしを倒すことなどできはしない!」

「やってみなければわからん」

「ならばやって見るがいい。カードを伏せてターンエンド!!」

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ８０００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００
機皇連召
伏せカード×１

「我のターン。『ダークネス・ネオスフィア』を攻撃表示に変更。

我は魔法カード『デビルズアリュール』発動。このターン、フィールド上のすべてのモンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上の悪魔族モンスター1体の攻撃力と同じになる」

機皇帝グランエル∞　ＡＴＫ８０００→４０００
グランエルＴ　ＡＴＫ５００→４０００
グランエルＡ　ＡＴＫ１３００→４０００
グランエルＧ　ＤＥＦ１０００→４０００
グランエルＣ　ＡＴＫ７００→４０００

「機皇帝の攻撃力が４０００に…！」

こんな効果を持つ魔法カードがあるのか…。

「『ダークネス・ネオスフィア』で『機皇帝グランエル∞』を攻撃」

ネオスフィアの攻撃がグランエルとの相打ちになる。しかし、ネオスフィアは破壊されていなかった。

「戦闘破壊耐性…攻撃力が互角の場合は厄介なものだ。機皇帝の本体が消えたことで他のパーツはすべて破壊される。だがここで『機皇連召』の効果発動。デッキから『スカイ・コア』を特殊召喚して破壊。デッキ・手札・墓地から『機皇帝スキエル∞』『スキエルＴ』『スキエルＡ』『スキエルＧ』『スキエルＣ』を特殊召喚。合体しろ、機皇帝スキエル！」

この機皇帝の連続召喚を止めるには、機皇帝をパーツを含めて同時に除外するかバウンスするしかない。もしくは3体とも倒すかだ。

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００

スキエルＴ　ＡＴＫ６００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００
スキエルＧ　ＤＥＦ３００
スキエルＣ　ＡＴＫ４００

「しつこいな、さすがは機皇帝だ。カードを1枚伏せてターンエンド」

Ａｃｔｉｖｅ
ＬＰ８０００
手札×１
フィールド
ダークネス・ネオスフィア　ＡＴＫ４０００
伏せカード×２

「しつこい烙印を押されたのは初めてだな。わたしのターン、わたしは装備トラップ『インフィニティ・チェンジ』を『機皇帝スキエル∞』に装備する。この効果により、シンクロモンスターは吸収できないが効果モンスターを吸収できるようになる。『ダークネス・ネオスフィア』を吸収する！」

スレイが鋭い眼光でアクティブを睨む。アクティブは一瞬怯んだが、すぐにトラップを発動させた。

「『暗黒経典』…デッキから悪魔族モンスター2体を墓地に送り、このターン、相手のカードの効果を全て無効にする」

「成程…」

墓地に送ったのは『ヘルウェイ・パトロール』2体か。理想的な使

い方だな。これではこのターン、機皇帝の攻撃力が０になり戦闘もロクに行えない。墓地に送ることが目的でも十分強力だ。

「ターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ２２００
＋インフィニティ・チェンジ
スキエルＴ　ＡＴＫ４００
スキエルＡ　ＡＴＫ１０００
スキエルＧ　ＤＥＦ３００
スキエルＡ　ＡＴＫ６００
機皇連召

「我のターン！」

最高神のフィールドには機皇帝…次のターンまであの機皇帝を残しておくと効果モンスターを吸収される。早いところ殺して帰るとしよう。

「我は『ヘルウェイ・パトロール』を墓地から除外し、効果発動。手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター１体を特殊召喚する。現れろ『ダブルコストン』！」

「…ダブルコストモンスター…」

あのモンスターは闇属性の生贄になる場合は２体分の生贄になる…

奴が召喚するのは間違いなく最上級モンスター。

「さらに手札から魔法カード『デビルズトレジャー』発動。自分フィールド上の悪魔族モンスター1体につき2枚ドローする。ただし、このドローで悪魔族モンスターカード以外のカードをドローした場合、手札をすべて捨てる。4枚ドロー」

ドローしたカードをスレイに向けてみせる。だが、スレイは目を瞑ったままそのカードが何であるかを正確に認識した。

『邪神ドレッド・ルート』『ヘル・セキュリティ』『死霊騎士デスカリバー・ナイト』『ファントム・オブ・カオス』…デッキのほとんどがモンスターカードで埋め尽くされているのか?だが、これで奴のフィールドにデスカリバー・ナイトが召喚されれば機皇帝の効果も使用すればデスカリバー・ナイトによって無効にされ破壊される。

だが…奴はこのターン、デスカリバー・ナイトを召喚するまい…。

「我は墓地からもう1体の『ヘルウェイ・パトロール』を除外し、手札の『ファントム・オブ・カオス』を特殊召喚する!2体分の生贄となった『ダブルコストン』と『ファントム・オブ・カオス』を生贄に捧げ、『邪神ドレッド・ルート』を召喚!!」

「やはりか…」

ドレッド・ルートの効果は…ドレッド・ルート以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力を半減させる。

「『ダークネス・ネオスフィア』で『機皇帝スキエル∞』を攻撃!」

「『スキエルG』のモンスター効果発動、相手モンスターの攻撃を無効にする」

「だがこれはどうだ！『邪神ドレッド・ルート』で『機皇帝スキエル∞』を攻撃！フィアーズ・ノックダウン！」

「ぐぁあああああああああああああ！？」

Ｓｌａｙ　ＬＰ８０００→５１００

「な…なんだこれは…！？」

「どうだ？特殊改造した邪神のパワーは…全身を貫く痛みは苦しいか？恐怖が何倍にも痛みを増幅させるのだ。だが、恐怖が無い者は更なる痛みを味わうことになる。恐怖が無いのも困り者だな？」

「恐怖が…ない者…」

イリアが目を見開き、スレイを見る。

「小娘…お前は今確実にこの邪神に、アクティブに対して恐怖しているだろう。…だがそれでいい、それが正しい感情だ。お前たち人間はその感情があるから思い留まることができる。だがその感情がなければ何も知らずに突っ込んで死ぬことすらある。それをよく覚えておけ。

『機皇連召』効果発動、デッキより『ワイズ・コア』を特殊召喚して破壊する！現れろ『機皇帝ワイゼル∞』『ワイゼルＴ』『ワイゼルＡ』『ワイゼルＧ』『ワイゼルＣ』を特殊召喚…！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ１２５０

ワイゼルＴ　ＡＴＫ２５０
ワイゼルＡ　ＡＴＫ６００
ワイゼルＧ　ＤＥＦ６００
ワイゼルＣ　ＡＴＫ４００

機皇帝がここまで惨めな姿になるとは…邪神ごときが…！

「我のバトルフェイズはまだ終わっていない。トラップカード『インパクト・ブースト』。レベル１０以上のモンスターが相手モンスターを破壊したターン、デッキからレベル７以下の悪魔族モンスター１体を特殊召喚してもう１度バトルできる！！」

そして…この効果によって特殊召喚したモンスターが相手モンスターを破壊した場合、この効果によって特殊召喚したモンスターを手札に戻し１０００ポイントのダメージを与える。ただし、戦闘ダメージは０だがな。

「何だと！？」

「か…神様！？」

イリアは何となくだがルールを理解したようで、この効果で何が起こるか分かったようだ。

「デッキより『冥府の使者ゴーズ』を特殊召喚し再びバトル！『ダークネス・ネオスフィア』で『機皇帝ワイゼル∞』を攻撃！」

「『ワイゼルＧ』効果発動、攻撃対象をこのカードに変更する！」

ワイゼルＧが盾になることで、機皇帝を守った。

「『冥府の使者ゴーズ』で『機皇帝ワイゼル∞』を攻撃！この時、ダメージは０になる！」

「何！？」

機皇帝がパーツ諸共全滅する。

「更に『冥府の使者ゴーズ』を手札に戻し、１０００ポイントダメージを与える！」

「くっ…！！」

悪魔族のモンスターは効果もサポートもバラつきがあるが、このデュエルでアクティブが使用しているカード…あれは明らかに神や人間が創ったものではなく、何か別の空間から来た産物。

Ｓｌａｙ　ＬＰ５１００→４１００

「『邪神ドレッド・ルート』でダイレクトアタック！フィアーズ・ノックダウン！！」

「ぐぅうううううううううう…ッ！！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ４１００→１００

スレイはアーティスを盾にするが、その衝撃が直接襲ってくる。この広い結界が揺らぎ、一部が砕ける。

「お…のれ…ッ！これ以上結界を壊すわけにはいかない…人間を巻

き込むわけにはいかない。…究極神よ！」

スレイは結界の外側の３ヵ所に究極神のカードを飛ばし、結界を強化する。

「この反応って…！アレク！」

「わたし達のサーチにかかった４つの反応の３つはアレだったか。そのうち１つは…感じるだけで気を失いそうだ」

「……」

オーディン達を動かすか？いや、最初に『見ていろ』などと言ったのはこのわたし自身…今更前言を撤回し、動かすわけにはいかない。まだだ、まだ最終手段がある。

「ターンエンド。このエンドフェイズ、わたしは『デビルズトレジャー』の効果により手札を全て除外する」

Ａｃｔｉｖｅ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
邪神ドレッド・ルート　ＡＴＫ４０００
ダークネス・ネオスフィア　ＡＴＫ２０００

「神様…」

わかる。神様の命は残り少ない。あのスレイって神様だけ名前で呼

ばずに『神様』って呼ぶのは…きっと、他のどんな神様よりも強いから。だからあの神様は負けない。

「その考えは、多少理不尽だな」

アレクはどちらかというと理屈で判断する方だ。

「うるさい」

「わたしのターン！！…アクティブ。わたしをよくもここまで追い詰めてくれたな…わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚」

邪神ドレッド・ルートの効果で攻守半減。だが、今更そんなものは意味がない。

「無限の力がわたしを呼ぶ…わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』で『ダークネス・ネオスフィア』を攻撃！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ１００→－１０００

突如、結界内の５ヵ所から巨大な光の柱が上がった。その光がすべてスレイの前に収束し、更なる光となって龍を形作る。

「速攻魔法『機皇蹟』…わたしのライフが０になった時、手札・デッキ・墓地から『機皇神マシニクル∞？』『機皇神帝エクシニクル∞』『機皇神帝フィニシクル∞？』を除外。『機皇神帝龍エクスブルム』を特殊召喚…！！」

Ｘ－セイバーを使用しなくて正解だったな。究極神が結界の維持に

使われている今、恐らく機皇の力では結界を維持できなかっただろう。

機皇神帝龍エクスブルム　ＡＴＫ１００００→５０００

「バカな…ライフが０で…まだ生きているだと…！！どういうことだ？」

「フッ、『機皇神帝龍エクスブルム』で『邪神ドレッド・ルート』を攻撃。アルティメット・インフェルノ！」

「ぬううううう！？」

Ａｃｔｉｖｅ　ＬＰ８０００→７０００

「どういうことだ、なぜ貴様にここまでの力が残っている！？」

「答える必要は無い。ターンエンド」

邪神が存在しなくなった今、このエクスブルムを阻む者はいない。

Ｓｌａｙ
ＬＰ０
手札×０
フィールド
機皇神帝龍エクスブルム　ＡＴＫ１００００
機皇連召

「くっ…ドロー！『ダークネス・ネオスフィア』を守備表示に変更してターンエンド！」

戦闘破壊耐性のネオスフィアが守備表示でいれば、貫通効果がないエクスブルムでは我を倒すことはできない。このまま耐えきり、デッキの数が少ない最高神スレイのデッキ切れを待てば…我の勝利！

Ａｃｔｉｖｅ
ＬＰ７０００
手札×１
フィールド
ダークネス・ネオスフィア　ＤＥＦ４０００

「わたしのターン！！…アクティブ、どうやら、神が神頼みをしても効果はあるらしい」

「なん…だと…！！」

「魔法カード『機皇殲滅』」

これがデッキ改造をした時に入れ替えた最後のカード。

「このカードの効果により、このターンわたしの『機皇』モンスターはダイレクトアタックできる」

「へ！！？」

「……」

前にわたし自身がトールに言ったことだ。

「トール。多人数デュエルで誰か1人が『スキルドレイン』を発動したとしよう。この時、誰も『スキルドレイン』を除去できないとする。そして、この『スキルドレイン』は発動者以外全員が損をする。こういう時どうすると思う？」

「そんなもの、誰か1人が除去を引けるまで待てばいいだろう？」

「甘い。甘すぎる。この場合は…発動者自身を殺してしまえばいい」

「は？」

「発動者を全員で潰し、ライフを0にすればいい。そうすれば『スキルドレイン』の発動者が消えたことでその効力が消え、全員が再び元のデュエルをすることができる」

「な、なんて残酷な…」

「そういうものだ。ではトール、戦闘破壊できないモンスターがいる時に除去がなければどうする？モンスターをすり抜けて直接攻撃で潰せばいいだろう？それと同じことだ」

「『機皇神帝龍エクスブルム』でダイレクトアタック。アルティメット・インフェルノ」

「うぉおおお！！……ここまで来て……スレイ抹殺が失敗するだと……がはぁっ…！！」

Ａｃｔｉｖｅ　ＬＰ７０００↓－３０００

アクティブが消えると、スレイが張った結界が砕け散り、３枚の究極神がスレイの元へと集まる。

しばしの静寂が続いた後、イリアが言葉を発する。

「あ、あの…」

「何だ？人間…いや、イリアだったか。話はあとだ、話がしたければわたしの屋敷に来い」

「え？」

人間が…神の屋敷に？

「…神は気まぐれだ。来たければこの手を取れ」

アレクは黙って頷く。イリアはちょっと迷ったようだが、手を握った。スレイはそれを確認すると、すぐに時空転移魔法陣を展開して屋敷に移動した。

第１２９話　長期休暇８　神と少女（後書き）

次回「長期休暇９」

ウルズ「いろいろあったわね」

スクルド「そうだね。じゃあ、最強カード紹介行ってみようか」

『ファントム・オブ・カオス』
レベル４　闇属性　悪魔族　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
自分の墓地に存在する効果モンスター１体を選択し、ゲームから除外する事ができる。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名カードとして扱い、選択したモンスターと同じ攻撃力とモンスター効果を得る。この効果は１ターンに１度しか使用できない。このモンスターの戦闘によって発生する相手プレイヤーへの戦闘ダメージは０になる。

ヴェルザンディ「よりにもよってそこ！？」

スクルド「だってエクスブルムはこの前出したし…確かこのカード、アニメだと除外する必要がなかったよね」

ヴェルザンディ「そうね。何度でも使えるのは魅力だけど、やっぱり攻撃力０をさらすのはいやね」

ウルズ「ファンカスノーレの切り札だけどね。さて、次もまた超展

開らしいわよ」

第１３０話　長期休暇９　紅蓮の業火と落とし穴とサンダーパイル（前書き）

どうも。最近宿題をやっていて時間がありませんでした。
今回のキーワード『ジェラシー』

※変更点『インフィニティ・アイ』→『無限眼』

最近の出来事
エロゲデッキ使いの人の回を見てきました。さすがはエロゲデッキ、城之内が粉砕されましたね。５枚ドローはひどい。

第１３０話　長期休暇９　紅蓮の業火と落とし穴とサンダーパイル

～～～屋敷～～～

「で、連れてきたんだ」

「まあそういうことだ。何か不都合でもあるのか？」

スレイの連れてきたイリアを見て、そのわけを聞いたロキが言った。
スレイがイリアを連れてきた理由。それは、イリアの力を見てまだ限界ではないと判断し、力の強化の利点があると感じたからだ。

「でも、具体的に強化って何するのさ？」

「この人間…イリアの使用する魔法の中でも炎系は段違いに強力だ。これを強化すれば、わたし達がわざわざ悪魔の城に突入することもなく悪魔を片付けられるかもしれない」

「つまり…単純に１人でも悪魔と戦える人間が増えた方がいいってことか」

「……」

まあ、要約すればそんなところだ。ロキが何となく面倒そうにしているのは、その強化の仕方が『実戦』だから。そして、その最初の相手がロキだからだ。

「僕『天空の領域』について調べたいんだけど」

「そんなのオーディンがやっている。出張先の出来事の調べ事は基本オーディンの役目だ」

ロキが出張して巡った世界の中で、わたしも知らない物がある。そういう時はオーディンが勝手に調べる。

「というわけだ。スクルド達がすでに準備を完了している。イリアを連れていけ」

「はいはい。スレイは高みの見物かよ」

「いや…兆しを感じた。わたしは少し、試したいものがある。ではロキ、またあとで会おう」

「兆し？まあいいや、じゃあ…何だっけ？イリアだったかな、行くよ」

「うん…」

ロキとイリアは別の世界に飛ぶ。その世界とは…

「あっつ～…」

ひたすら続く砂漠。１年中真夏をはるかに上回る気温を保つこの世界は、人間であるイリアにはつらかった。

「こんなのでへばってたら強化も何もできないよ。じゃ、とりあえず僕は北の１０ｋｍ地点で待ってるから頑張って来てね。でも、砂漠には当然砂漠の生物がいたりするから一筋縄じゃいかなかったり行ったりするかもね。じゃあね～。キッヒャッヒャッヒャッヒャ！」

ロキはそれだけ言うと、レーヴァテインで空間を切り裂いて移動してしまった。

「は？ちょっと！」

「どうやら、この程度クリアできないようでは強化のしようがないということだろう」

アレクが納得したように首を縦に振る。

「…やってやるわよ！」

ちょっと怒ったような表情でイリアが歩き出した。

「まったく…強化してくれと言ったのは君じゃないか」

神の力をその目で見て、実際に使ってみたいというのは分からなくもないがアレはさすがに無理だと思う…。まあ、あの破壊神スレイは『そのくらいの欲望がなければ魔力を使いこなすことはできない』と言っていたからいいのかもしれないが。しかし、スレイは一体どこの神話の所属者だ？北欧には明らかにいなかった。ギリシアにも。そのほかの神話も探してみたが『スレイ』という名は見つからなかった。

アレクはそれだけ言って再び具現化していない状態に戻る。

「無駄口叩いてる暇はないな…敵よ、アレク」

イリアの前には巨大なワーム状の生物が現れた。

「のどもカラカラなのに…！」

～～～スレイ・吹雪の世界～～～

「……この辺りなら…いいだろう」

スレイがいるのは雪山の山頂。スレイはとりあえず雪山の山頂を平らにすると、早速神力を集め始め、無限眼（インフィニティ・アイ）を起動する。

「……天の翼…」

スレイの背中にスレイの神力の色…つまり漆黒の翼が現れる。そして、ハルバードだったアーティスがその姿をスレイの身の丈ほどはある剣に変えた。

「また剣か…ポールウェポンの方が使いやすいが…仕方がないか」

スレイが無限眼を解除すると、翼が消えた。

「オリハルコンは…持ち主にとってもっとも扱いやすい形状に姿を変える…わたしにはこれが使いやすいということになるが…」

確かに剣は使いやすい上にこのサイズならばリーチもあるが、柄の

部分で攻撃ができないのは多少不便だ。

～～～砂漠の世界～～～

「はぁ…はぁ…まだつかないの？」

「さっきから距離を測っているが、今現在９ｋｍだ」

「あとちょっと…アイスないかな…」

スカートだから日照りが直接肌に当たり、余計に暑く感じる。

「水の魔法で水を生成して飲んではいかんのか？」

「……あ」

とかそんなこと言ってる内に着いちゃった。低空飛行で移動していたから速いのは当たり前。

「早かったね。まあいいや、とりあえず水分補給しなよ。人間は水がないと死んじゃうらしいからね、用意しておいたよ」

ロキがよく冷えた水を手渡した。ロキのいる地点を中心に、３角形になるようにノルンの三姉妹が配置されており、この砂漠の世界を具現化させている。ちなみに、イリアはこのことを知らない。

イリアは水を５杯一気飲みすると、落ち着いたようだ。

「飲み過ぎて腹を壊しても知らないよ。さて、本番に入るよ」

「何をするの？」

「簡単だよ。僕に1発攻撃を当てればクリア。条件はそれだけ。制限時間は4時間、どんな手を使ってもいいから。じゃ、3秒後にスタートってことで」

ロキは再びレーヴァテインを使用して転移する。

「無茶振り…だよね。まあ、弱音なんて吐いていられない！行くよ！アレク」

「了解」

イリアはしばらく飛び続ける。すると、背を向けているロキを見つけた。

「（もらった！）」

イリアは音を立てずにロキに突進して鎌を振り下ろそうとしたが、突然撃ち落とされた。

「バーカ！気付かれていないとでも思ったのかよ。重力魔法と落とし穴のコンボは屈辱だろ？キッヒャッヒャッヒャ」

「このー！」

イリアは怒って鎌を滅茶苦茶に振り回す。紅蓮の業火を纏わせて振るので、鎌を振れば振るほど炎が飛ぶ。

「怖い怖い。まあ、嘘だけど」

ロキは距離を取り、一瞬で巨大な炎の球を飛ばしてきた。

「くっ…こんなの！…ってあれ？」

鎌を振り、炎の球を切り裂いたつもりだったのだが、炎の球は何の手ごたえもなく消えた。だが、その直後大爆発が起き、イリアは爆発の直撃を食らってしまった。

「う…体が…動かない、どうして？」

何で大爆発が…？それに今のは…何？どちらにしても…ちょっと当たり所が悪い。

「あんなバカでかい炎の球を一瞬で創れるわけないだろ。見せかけでかいのを創ってぶつければ相手は必ず防御か弾き飛ばしに来る。これが起爆剤で、炎の膜が破られると大爆発を起こすトリック攻撃だ。…なんて話してる場合じゃなかった、ごめん。やりすぎた」

ロキは慌てて回復魔法をかける。放っておけば出血多量で死んでしまうところだった。

殺してしまえばスレイに何をされるかわからない。利益のない殺しを嫌うからだ。

「じゃあ、続き行くよ！」

ロキはイリアが立って鎌を構えるのと同時にロキが突進する。素早い反応でイリアはレーヴァテインの一撃を避け、炎を纏わせて鎌を

振り、炎を飛ばす。

「こんなのは通用しないんだよ！殺す気で来い！！」

ロキが意外と長い髪を揺らして炎をレーヴァテインで蹴散らす。そして、レーヴァテインの柄でイリアの腕を叩く。

「うっ…」

鎌を落とし、イリアが怯む。ロキはその瞬間を見逃すことなく、頭にかかと落としを食らわして叩き落とした。

「まあ、今日はここまでかな。僕くらいは倒せるようになってもらわないと、トールと戦うなんて無理だよ？」

「まだ…まだやれる…」

イリアは鎌を持って立ち上がる。

「1つ思ったんだけどさ、自分1人で何でも出来るなんて思ってない？もしそうならそんなのスレイでもできないのに、人間ができるわけがないんだからそこは割り切るべきだよ？」

「うるさい！」

「強情だな…あれ！？」

次の瞬間、ロキはすぐにその場を離れる。ロキがいた場所には鎌で切り裂いた跡があった。

「本気で行かせてもらうわ。これ以上嘗められてたら悪魔となんて戦えない」

「光速移動…オーディンだってできないのに…」

つうか、全然本気じゃなかったのかよ。こんなの相手にできるわけねーじゃん、ただの人間どころか化け物だってこんなの相手にしねぇよ。

「ロキ、喋っている内に殺されるのはよくあるわ」

ロキは、一瞬の油断をした隙にレーヴァテインを叩き落され、首に鎌を当てられていた。

「…お前の勝ちだよ」

ちっ、前に出かけたある世界の炎使いで赤髪の日本刀少女を思い出す…まったくもって気に入らない。

ロキは舌打ちをすると三姉妹に連絡を入れて砂漠の世界を崩した。その後すぐにロキがその場を去る。

「次は多分、トールが相手をしてくれるよ。僕から教えたことは、不意打ちや囮も有効な戦術だってことだ。卑怯だと思うかもしれないけど、覚えておいて損はない」

パワー押しよりも罠を張った方が確実にうまくいく。安全性と確実性を求めるなら、卑怯な戦術も使用するべきだ。

「トール…北欧神話最強の雷神…」

「イリア、雷神トール相手に手加減はできない。伝説では、ミョルニルを食らって1度でダウンしなかったのはヨルムンガンドのみ。つまり、食らえば終了の一撃必殺と同じだ」

アレクが眉間に皺を寄せる。

「……大丈夫よ…」

そういうイリアは、既にある程度の恐怖を抱いていた。

～～～吹雪の世界～～～

「何の用だ、トール？」

あの後すぐにこの世界にトールがやってきた。

「いや、最高神程度の物とは思えない程の強大な力を感じたものでな…この恐怖の原因はお前だったか。悪魔の力だと思ったぞ」

「雷神トールが恐怖するか。ゼウスは一体どのような反応を返すか楽しみだな」

スレイは今一度無限眼を起動してトールに本当の姿を見せる。ちなみに、翼はあくまで神力で具現化した物なので、自由に消すことができる。翼がある意義はスピードが上がる程度のものだが、意外とバカにできたものではない。

「まあ、戦闘時はこのようなものだ。…わたしの力が上がっても勝負の方法がデュエルではあまり意味がないがな」

無限眼を解除する。そして、剣になったアーティスで空間を切り裂き、中に入る。

「帰るぞ。こんな場所にいつまでもいたら風邪をひく」

「ほう、お前でも風邪をひくのか」

「何を言う、お前のことだ。わたしが風邪をひくなどあるわけがないだろう」

今のスレイの言葉にトールは多少怒ったようだ。

「サンダーパイル！！」

「うおおお！？」

～～～屋敷～～～

「今帰ったぞ…イリア、やけに疲れているな？ロキに何をされた…？」

「えげつない戦い…あと5分でトールが相手の強化プランが始まるから行かなくちゃ」

「む、もう我の番か。ロキを倒すとはなかなかやるではないか」

ロキの戦術に嵌ってよく勝利を掴みとれたな。ロキの罠は質が悪いから食らうと1発で終了の物すらあった気がするが…。

「では行くとしよう」

トールはイリアを連れて真っ平な未開の世界に飛んだ。そして、ミョルニルを構える。

「ロキの試練をクリアするとはな。えげつなかっただろう？」

「え、ええ…落とし穴にはめられたり、炎の膜を破壊すると大爆発を起こす魔法を使われたりとか…」

「やはりか…我からの強化プランは簡単だ」

「（簡単て言ったってロキの時は酷かったわ…今度は一体何が来るのよ？）」

「我と戦え。一撃でも掠らせたらお前の勝ちだ。このフィールドに罠は無いから、力の限り戦うことができる。もちろん、聖剣の使い手を具現化させてもいい。１０秒後にスタートだ」

「（随分と簡単そうね。これならいけるわ）」

１０秒後…

「サンダーパイル！！」

「はあぁっ！！」

鎌とミョルニルがぶつかり、火花が散る。

「フッハッハッハッハ！やるではないか！！」

血が滾る。これほど手ごたえのある人間は久しぶりだ。どんな力を持っているのか見せてもらおう！

「まだこれからよ！」

イリアが光速でトールの後ろに回り込む。

「甘い！光速移動など我に通用するわけがないわ！」

「えっ！？」

トールが背中よりも少し離れたところから無数の針を飛ばす。神力で創ったものだ。

無数の針を炎の盾で何とか防いだが、さすがに無傷ではいられない。回復魔法を使用して回復を図るが、トールはミョルニルで叩き潰そうとする。

「回復は前線で行うな！格好の的だ！」

「きゃあああああ！」

パワーだけなら…スレイ様と同じくらいはある…！！

面白いじゃない。これほど純粋な戦いをするのは久しぶりね。

「行くわよ！アレク」

「わたしが出るのか。確かにそうでもしなければ勝てないか」

「いいだろう、かかってこい！！」

「「はぁぁぁっ！」」

「天地を砕け、ミョルニルよ！サンダーパイル・オメガ！」

聖剣と鎌がミョルニルと衝突した瞬間、聖剣と鎌がイリアとアレクごと叩き落とされた。さらに、ミョルニルを振り下ろした時の衝撃で地面に巨大なクレーターができてしまっていた。

「か…体が動かない…こんなに重いなんて…」

「くそ、ミョルニルの一撃がここまで重いとは…我が聖剣が叩き潰されるなど…」

この状況からどうやって回復を図り、雷神トールに一撃を入れるか…。

～～～屋敷・午後3時～～～

「スクルド、いないのか？スクルド？」

「あ、ごめん。何？」

慌てた様子で部屋から出てきた。髪が濡れていることで、風呂に入っていたことがうかがえる。

「食糧庫にもう何もなかったぞ。わたしは食事など摂らなくてもいいが、君達は無ければ身が持たないだろう。少し買いにいかないか？」

「あ、もう無かった？じゃあ行かなきゃ」

スクルドにバスタオルを渡す。髪が濡れたまま外に出れば、風邪をひく。

スクルドの準備ができたところで、Ｄ－ホイールを準備した。スペース的に2人乗りくらいはできる。

「後ろに乗れ」

スクルドは言われたとおりにスレイの後ろに座り、落ちないように抱きつく。

「（温かい……／／／）」

「しっかり掴っておけ」

スレイは別に抱きつかれていることを気にしている様子はない。このくらいでどうにかなるようではそれこそヘタレの烙印を押されるが。

「行くぞ」

スレイがものすごいスピードでＤ－ホイールを走らせるので、スクルドが目を瞑ってさらにきつくスレイに抱きつく。

「（……苦しい）」

ちなみに、走っている途中にたまたま車に乗ったジーク（ピンク頭の鼠）を見かけて、『女神スクルドの託宣』を思い出したスレイが多少不機嫌になったのは別の話。

～～～未開の世界～～～

「さあどうした？もう終わりか、この程度ではポセイドンにすら勝てないぞ」

ポセイドンに失礼だが、トールはそんなことを気にせずに言葉にしてぶつける。

「くっ…まだだ…」

アレクの方が早く立ち上がり、聖剣を手に取る。アレクが聖剣に祈りをささげると、イリアとアレクの傷が全回復した。

「便利な聖剣だな。サンダーパイル！」

再びミョルニルで叩き潰そうとするが、２人は素早く避けた。さらに、炎の砲撃でトールを挟み撃ちする。

「ぐおおおっ！？」

トールは咄嗟によけようとしたが、僅かだが炎が掠った。

「むぅ…お前たちの勝ちだ…」

トールは渋々といった様子でミョルニルを懐に収め、ゲートを開く。

「屋敷に続くゲートだ。ちなみに風呂を沸かしておいた。入るがいい」

イリアはそれを聞くと、すぐにゲートに入り込み風呂に入る支度をした。トールは思わず口を開けていた。

～～～ドミノ町・デパート～～～

「着いたぞ、スクルド」

スクルドは恐る恐る目を開け、Ｄ－ホイールから降りた。珍しいことにスレイと腕を組んで歩く。

「…幼少期を思い出すな。２人で出かけた時に腕を組んで歩いた覚えがある」

ディスペアの記憶がほとんど消えているのに対し、幼少期の記憶は全て覚えていたりする。

デートの約束をした場所に、スクルドが１時間前に来ていたと聞いたときはもっと早くいけばよかったと思った。

「（どうでもいいが、さっきからスクルドに近寄ろうとしている人間は一体何なんだ。本当ならまとめて片付けるところだぞ…）」

「あ、財布を落としましたよ」

スクルドが男の落とした財布を拾って手渡す。照れた顔で礼を言ってその場を去る男を、スレイが『この野郎…絶対財布をわざと落としただろう』という目つきで見ていた。

「あれ？もしかしてスレイ、妬いてるの？」

スクルドが悪戯っぽい笑顔でスレイに訊く。

「…だったらどうした？」

確実にディスペアの時なら『していない』と答えるところだろうが、スレイはそんな意地は張らない。だが組んでいた腕を離す。それが不機嫌なスレイクオリティー。

「スレイでも嫉妬するんだ…」

突然吹いた風にスクルドの青い髪がなびいた。ツインテールならなびくことも無いが、やはり結ぶ気はないようだ。

「もういいだろう、で？何を買うつもりだ」

デパートの入り口に向かいながらスレイがスクルドに訊く。スクルドはメモ用紙を取り出して確認しようとする。

「えっと…」

「あ、あのお姉さん、俺と食事に行きませんか？」

だがここで、空気を読まずに1人の男がスクルドに話しかける。

「…いい加減にしろ、人間」

スレイが剣になったアーティスの刃の腹で男の腹を殴った。

「あ〝あ〝あ〝あ〝！」

殴られた男は景気よくホームランのボールのようにどこかに飛んで行った。きっとギャグ補正で死ぬことはないだろう。

「断るつもりだったのに…」

「君の場合は無理矢理連れて行かれかねない」

スレイになってからますますスクルド至上主義が酷いレベルになったようで、これにはオーディンすらため息をつく。

ちなみに、オーディンは時々フリッグと喧嘩するので、どうしてこの2人が喧嘩しないのか不思議に思っていたりする。

スレイが少し早く歩く。ジェラシーと言うのは意外と怖い。

「待ってよ～」

「……」

スクルドがスレイに追いついて歩く。

「冷えるぞ」

スレイがスクルドの悴んだ手を握る。氷のように冷たい手がだんだん温かくなる。

～～～屋敷～～～

「どうだった？トール？」

「やはり、侮れないな。我が負けるとは…オーディンがどんな強化プランを立てるかだな」

「まさか僕たちが負けるなんてね。神の面子が丸つぶれだよ」

「仕方がないだろう。オーディンとスレイに任せよう。しかし…腹減ったな」

「そうだね。…スクルド、早く帰って来てよ～」

ロキがソファーで横になる。トールは、椅子に座って目を瞑る。イリアとアレクが借りた部屋でくつろいでいた。

「なぁ、トール」

「何だ？」

「女の子のさ…可愛いと美しいだったらどっちが好み？」

僕的には美しいより可愛い方が好みなんだけど。トールは一体どっちかな？

「ハ？」

～～～デパート～～～

「う～ん…これだけ買えば大丈夫かな」

スレイが器用に４つのかごを持っている。その中にはそれぞれ一杯に食べ物が入っていた。

「スレイ、重くない？」

「これで重いとか言っているようでは、アーティスなど持てない」

レジに行き、かごを４つとも置く。会計、５３６７８円。スレイが周りに見えないように次元宝物庫から金を取り出して払った。ちなみにスレイはレシートを絶対受け取らない。

荷物を次元宝物庫に入れ、Ｄ－ホイールに乗って走り出した。

「…スレイ、温かいね」

「突然どうした！？」

「何でもない。ただ、スレイがいたら全然寒くないなって」

ちなみに、スレイの体温は普通の人間よりも3度ほど高い。常に40度前後の体温だ。
スクルドはスレイの体温が暖かいという意味で言ったのではないが。

～～～10分後～～～

「着いたぞ」

スレイが荷物をすべて持って屋敷に入った。スクルドは手ぶらだが、スレイはこれが当然だと思っているためにスクルドに荷物は持たせない。

「ロキ、トール、今戻ったぞ」

ソファーでダウンしているロキと、椅子に座って目を瞑っているトールに声をかける。

「おっせぇ～…腹減ったんだけど」

「ロキごめん、すぐ作るから待ってて」

スクルドがすぐに準備をして料理を始めた。イリアとアレクが2階から降りてきたころには、テーブルには豪華な食事が並んでいて、ロキとトールがすごい勢いで食べていたそうだ。

「（明日はオーディンが私の相手…一体何をやるのかしら?）」

「そういえばオーディン、『天空の領域』については?」

「すまん、天界の産物ということしかわからなかった」

「（オーディンの後はスレイ…大丈夫、私とアレクなら。絶対に強化を成功させてみせる！）」

――――――――――――――――――――次回に続く。

第１３０話　長期休暇９　紅蓮の業火と落とし穴とサンダーパイル（後書き）

次回「長期休暇１０」

通りすがりのデュエリスト様、天空の領域ネタをお借りしました。
ありがとうございます。

ウルズ「スレイのジェラシー…怖いわね」

スクルド「今回は特に紹介するものもないなぁ…これでいいや」

『ゲート・ガーディアン』
レベル１１　闇属性　戦士族　ＡＴＫ３７５０　ＤＥＦ３４００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上の『雷魔神サンガ』『風魔神ヒューガ』『水魔神スーガ』を生贄にささげた場合に特殊召喚できる。

ウルズ「なんでそれ！？」

スクルド「ここに落ちてたから」

ヴェルザンディ「スレイって嫉妬するのね。初めて知ったわ」

第１３１話　長期休暇１０　スレイの願い（前書き）

スレイの本心を書いてみました。
※今回は変則デュエルです

最近の出来事
一昨日は高校の入学式でした。ちなみに更新のペースはそんなに変わらないと思います。

第１３１話　長期休暇１０　スレイの願い

～～～未開の世界～～～

「さて、今日の相手はわたしだな。本来人間の相手をするには手加減が必須だが、今回は手加減できない。それを理解してくれ」

今日はオーディンがイリアの強化担当。しかし、なぜかスクルドとスレイがいる。

「…はい」

「しかし、実戦に移る前にお前にはさらに強力な呪術を覚えてもらう」

「呪術？」

「そうだ、少し見ていろ」

オーディンはスレイとスクルドに杖を向け、呪文を唱えた。不思議な光が２人を包み、すぐに光は収まる。

「お、オーディン！貴様一体何をした！？……！！？」

スレイは鏡を用意して自分の姿を見る。すると、そこにはスクルドの姿が映し出されていた。

「貴様！スクルドとわたしの精神を入れ替えたな！？今すぐに元に

戻せ！！」

「そんな声で言われても、迫力がないぞ？」

そう、こんな言葉を言っても、声はスクルドの物。迫力など微塵にも感じられない。

「スクルド！アーティスを貸せ！」

自分の姿をした身体に向かって言う。中身はスクルドなので仕方がない。

「ど、どうやって取り出すの？」

「しまった…」

わたしの魔術をスクルドが使えるわけがない。意識や精神力はスクルドの物だ…わたしの力を使えば精神力が奪われる…。そもそも、スクルドには悪いが、こんな軟弱な身体でアーティスなど持てない。

「とまあ、こんなこともできるようになる。そろそろ戻してやるか」

オーディンが再び呪文を唱えると、スクルドとスレイが元に戻った。

「覚えておけ…帰ってきたら潰してやる」

スレイはスクルドを連れて屋敷に戻る。

「（…屋敷に帰れなくなったな）さて、しばらくは魔術の練習だ」

～～～屋敷～～～

スレイは、屋敷に戻った瞬間にアーティスを取り出した。

「…招いた覚えのない来客が来ているようだな。ノルンよ、万が一わたしが死んでも絶対にこの扉を守り通してくれ。わたしは迎撃に向かう」

なぜ奴が生きている？つい最近葬ったばかりのはず…その決着方法も魂の復活が望めないデュエル。となると、寸前で器を捨てて逃げたか仲間が割り込んで拾っていったかのどちらか。

どちらにせよこの扉を通すわけにはいかない。未来の戦士をここで潰せば、せっかくの戦力が削られてしまう。この扉はノルンの三姉妹が創った物。つまり、扉の消滅を防ぐためにもこの3人がここを離れるわけにはいかない。

「スクルド……いや、何でもない」

「待って、スレイ…これを持って行って」

スクルドはスレイに、自分の宝剣を渡す。

「だが、これは君が大切にしていた短剣…宝物じゃないのか？」

短剣とはいえやはりオリハルコンでできている。スクルドが護身用に持っていた宝物だ。護身用とはいっても使う機会はほとんどなかったが。

「持ってもらうだけでも、一緒に戦えると思えるから。せめて気持ちだけでも一緒に戦う」

スクルドの返事に、スレイはキョトンとする。だが、その後すぐに微笑を浮かべて短剣を受け取り、懐にしまう。

「わかった、気持ちだけでも共に行こう。きっと、わたしの大きな力になってくれる」

…もう行こう。戦場へ。

～～～ドミノ町上空・結界内～～～

「フッハッハッハッハ、久しぶりだな、スレイ。たったの1人で我の元に来たか」

「…アクティブ、貴様、なぜ生きている？」

1人で来たかという割には、アクティブも1人だ。

「フッハッハッハッハ…我は確かに、お前のエクスブルムの攻撃によって消滅した…いや、消滅したはずだった。だが、我はその寸前に器のみを残して魂は離脱させたのだ。その後は人間の魂を使い、我が肉体を再構築し魂を宿らせた。我が真の名はゼクス！」

「人間の魂を？…貴様、そうまでして何がしたい？」

器を再構築し、真の名を敵に明かした…。奴は本気だ。

「決まっているだろう、スレイ。貴様の抹殺だ！！」

ゼクスは闇の粒子を集め、デュエルディスクに変えた。

「……良いだろう！貴様がそれを望むなら、相手になってやる！」

「「デュエル！」」

Ｓｌａｙ　ｖｓ　Ｚｅｘ

Ｚｅｘ　ＬＰ５０００００

「ライフ５０００００だと！？」

「クックック、貴様に固有カードや固有デッキ、はたまた固有ディスクがあるように、我には固有スキルが存在するのだ。我のスキルはライフ５０００００からのスタート。もっとも、スキルを持つのは本当に一握りの存在であり、尚且つ固有カードを持たないことが前提として誕生するのだ」

「……わたしの先攻」

つまり奴は固有カードを持たない。だが、ライフが５０００００である以上苦戦は必至。スキルが存在するなど初めて聞いたぞ。

「わたしは『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を守備表示で召喚する。カードを3枚伏せ、ターンエンド」

これほど誰かに助けを求めたくなったのはいつ以来だろうか。スクルドが本当に一緒にいれば、求めたくもならなかっただろう。わた

しの中で彼女の存在がこれほど大きいとはな。

Ｓｌａｙ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
ＸＸ－セイバーエマーズブレイド　ＤＥＦ８００
伏せカード×３

「我のターン。１人で戦うのが怖いか、スレイ？」

「…そうだな。いくら無限眼を発動していないとはいえ、確かにこの底のない感情は恐怖だ」

わたしの周りに仲間がいる限り、わたしはこの恐怖という感情を失くさない。恐怖があれば、引き際も判る。帰るべき場所に帰ることができる。

「フッ、最高神があっさりと恐怖を感じていると認めるか。まあいい、我は『ジェスター・コンフィ』を特殊召喚する。そしてこの『ジェスター・コンフィ』を生贄に『邪帝ガイウス』召喚、このモンスターの生贄召喚に成功した時、フィールド上のカードを１枚除外できる。我は『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を除外する！」

「させるものか！カウンタートラップ『セイバー・ホール』！『ＸＸ－セイバー』がいる時、相手モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚を無効にして破壊する！」

召喚そのものが無効になればガイウスの効果も発動しない。手札に他の下級モンスターが存在しない今、エマーズブレイドをカード効

果で失うわけにはいかないのだ。

「やるではないか。我は魔法カード『死者蘇生』を発動する。墓地から『邪帝ガイウス』を特殊召喚」

「トラップ発動、『奈落の落とし穴』！相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時、そのモンスターをすべて破壊し除外する！」

邪帝ガイウスが奈落の落とし穴に落ちて消える。だが、ゼクスがさらにディスクに1枚のカードをセットする。

「装備魔法発動『ＤＤＲ《ディファレント・ディメンション・リバイバル》』。手札を1枚捨て、除外された我のモンスターを特殊召喚してこのカードを装備する。帰還せよ『邪帝ガイウス』！」

「またしても…！」

くっ…伏せカードはガトムズの緊急指令、攻撃を防ぐことはできない…だが、エマーズブレイドはリクルーター。戦闘で破壊され初めて効果を発揮する。

「スレイよ、貴様まさかこの程度で終わると思っていないだろうな？」

「何！」

「手札より魔法カード『虚無の宝札』を発動。このカードの発動時に、自分フィールド上に闇属性モンスターが存在し、手札にカードが無い時、デッキから2枚ドロー。そして、手札を1枚デッキの上

に戻して墓地から『ゾンビキャリア』を特殊召喚する」

「何だと！」

D・D・Rの時に墓地に送っていたのか…つまり奈落の落とし穴は失敗…！

「フッハッハッハ、貴様が死んだと知ったらスクルドはどれ程の絶望をするだろうな？レベル６の『邪帝ガイウス』にレベル２の『ゾンビキャリア』をチューニング。深き闇の竜よ、立ちはだかるものを葬るべく今ここに降臨せよ！シンクロ召喚『ダークエンド・ドラゴン』！」

「くっ…わたしがここにいるのはスクルドに絶望させないためだ」

しかし、こんなことを言おうと戦局は圧倒的に不利。エマーズブレイドは確実にダークエンドの効果の餌食になる…。

「フッ、そんなことを言っても貴様のフィールドには戦闘破壊がトリガーのエマーズブレイドと、伏せカードが１枚。ダークエンドを排除しなかったということは、そのカードは攻撃反応型のトラップか、『Ｘ－セイバー』の強力なサポートカード『ガトムズの緊急指令』のみ。我は『ダークエンド・ドラゴン』のモンスター効果を発動する。このモンスターの攻守を５００下げることで、相手モンスター１体を墓地へ送る。我は当然『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を墓地へ送る」

ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ２６００→２１００　ＤＥＦ２１００→１６００

「くっ…」

手札にもフィールドにも打開策が無い。このままでは…確実にわたしの命が尽きる。

「『ダークエンド・ドラゴン』でスレイにダイレクトアタック！」

「クッ…」

Ｓｌａｙ　ＬＰ８０００→５９００

スレイに向かって闇のブレスが吐き出されるが、スレイはそれを防御手段を用いずにうける。だが、スレイに究極神の加護がある以上現実のダメージは最小限になり、スレイ自身の再生能力ですぐに回復する。

「カードを1枚伏せてターンエンド」

Ｚｅｘ
ＬＰ５００００
手札×０
フィールド
ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ２１００

「わたしのターン！」

くっ…モンスターカードではない…だが、奴が次のターンドローするのは、先ほどゾンビキャリアで戻したカード。あれが大したものでなければまだどうにかなる。

「カードを1枚伏せてターンエンド」

Ｓｌａｙ
ＬＰ５９００
手札×２
フィールド
伏せカード×２

「我のターン！我は手札より『サイクロン』を発動。貴様が先程伏せたカードを破壊する」

「！！」

破壊されたのは攻撃反応型トラップ『次元幽閉』。

「ほう、『次元幽閉』か。この状況で引いた強運は褒めてやるが、破壊されれば役に立たんな。ハッハッハッハッハ！」

「チッ……」

攻撃反応型罠の弱点を突かれたか…発動前に破壊すれば何も起こらない。

「バトル、ダークエンドでダイレクトアタックだ！」

「ぐあああっ…！！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ５９００→３８００

くっ…こうなるとわかっていれば、スクルドに別れを告げてから来

たものを…いや、わたしは命を散らすわけにはいかない。スクルドとの約束を破らないために。

「ターンエンド。言っておくが、サレンダーなど認めんぞ。貴様は我の手で完全に消滅させてやる」

Ｚｅｘ
ＬＰ５０００
手札×０
フィールド
ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ２１００

「わたしのターン！」

「この瞬間、墓地の『虚無の宝札』効果発動。自分が手札０の時に、相手がドローした時にこのカードを除外することで、デッキの一番上のカードを１枚墓地に送り、１枚ドロー」

墓地に送られたのは『地獄の宝札』か。なかなかいいカードが落ちたものだ。このカードは相手が自分フィールド上の闇属性モンスターを破壊した時にこのカードを墓地から除外することで手札をすべて捨てて６枚ドローするカード。これでスレイがダークエンド・ドラゴンを破壊しようとも手札切れは無い。デュエルの流れは確実に我に向かっている。

「わたしは…カードを１枚伏せてターンエンドだ」

Ｓｌａｙ
ＬＰ３８００
手札×２

フィールド
伏せカード×１

「我の」

「させるかよ！」

「ぐおおお！？な、何だ！？」

ゼクスがカードをドローしようとした瞬間、どこかから巨大な炎の球が飛んできた。ゼクスは何とか炎の球を避け、炎の球は大分離れた地点で大爆発を起こした。

「キーッヒャッヒャッヒャヒャヒャヒャヒャ！！悪いけど僕も参加させてもらうよ。ライフ５００００をスレイ１人で相手するとか無茶すぎるでしょ」

「そういうことだ。我も参加させてもらおう」

「ロキ…トール…」

「ごめんごめん、ちょっと出かけてたらスレイの神力がどんどん感じられなくなってるんだもん。助けに行こうと思ったけど、トールがなかなか用事を済ませてくれなくてね」

「我のせいにするな。まあ、何はともあれ間に合ってよかった」

「…すまない」

「気にすんなって。僕はただ単に用事が済んだから来ただけだし。

さて、あいつをボコボコにぶっ潰して早く帰るよ。キッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ！」

トールとロキが固有ディスクを展開してデッキをセットした。

「…いいだろう、我が3人まとめて葬り去ってやる！行くぞ！」

我には５００００ポイントのライフがある。奴らは3人合わせても１９８００ポイント、これだけの差があれば3人を葬ることなど容易いわ！

Ｚｅｘ　ｖｓ　Ｓｌａｙ&Ｌｏｋｉ&Ｔｈｏｒ

「我のターン、我は『ダークエンド・ドラゴン』でスレイにダイレクトアタック！」

スレイだけでも葬れば我の作戦は成功同然。

「バーカ、させるかよ。手札から『ガード・リゾネーター』の効果発動！相手のダイレクトアタック宣言時にこのカードを手札から墓地に送ることで、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する」

こんな奴、本当はオーディンも混ぜてぶっ殺してやりたいところだけど、オーディンはイリアの相手の真っ最中だからね。しょうがないから僕達3人でぶっ殺そう。

「さらに手札からもう1体、『デストラクト・リゾネーター』の効果発動。このターン、『リゾネーター』と名のつくモンスターの効果が発動された場合、こいつを手札から墓地に送って相手モンスター1体を破壊する！消えろ、ダークエンド！」

ダークエンド・ドラゴンが突然光に包まれて破壊された。しかし、ダークエンド・ドラゴンが破壊された場所にはカードが1枚表側表示で出ていた。

「『ダークエンド・ドラゴン』が破壊されたことで、墓地に存在する『地獄の宝札』の効果発動。手札をすべて捨て、デッキから6枚ドローする。さらに、手札から捨てられた『悪魔の邪教祖』のモンスター効果発動。このカードがカード効果によって手札から墓地へ送られた時、このターンを終了して墓地から闇属性モンスター1体を特殊召喚する！蘇れ『ダークエンド・ドラゴン』！」

Ｚｅｘ
ＬＰ５０００００
手札×６
フィールド
ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ２６００

「ではロキ、先に行かせてもらうぞ。我のターン！我は『ＸＸ－セイバーボガートナイト』を召喚する。ボガートナイトの召喚に成功した時、手札からレベル４以下の『Ｘ－セイバー』モンスター1体を特殊召喚できる。現れろ『ＸＸ－セイバーフラムナイト』！さらに、２体の『Ｘ－セイバー』がフィールド上に存在することによって、手札から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する」

トールのフィールドにはすぐに3体のモンスターが召喚された。

「まだ終わっていない。レベル４の『ＸＸ－セイバーボガートナイト』にレベル３の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング！シンクロ召喚、『Ｘ－セイバーソウザ』！最後にフォルトロール

の効果で墓地のフラムナイトを特殊召喚し、『Ｘ－セイバーソウザ』の効果を発動。フラムナイトを生贄にすることで、このターンソウザが戦闘を行うモンスターをダメージ計算を行わずに破壊する！」

つまり、どの属性でも破壊できるようになったＡ・Ｏ・Ｊカタストルだ。しかし、ゼクスからは余裕の色が消えない。ライフ５０００の耐久力と持久力は半端なものではない。

「ソウザでダークエンドを攻撃する」

ソウザはダークエンドに斬りかかる。ダークエンド・ドラゴンは当然ブレス攻撃でソウザを迎撃するが、ソウザの光った剣によって炎ごと斬られてしまった。

「『ＸＸ－セイバーフォルトロール』でダイレクトアタック！」

「この程度、痛くも痒くもない！」

Ｚｅｘ　ＬＰ５００００→４７６００

トールは改めてゼクスのライフの多さを思い知る。しかし、負ける気は微塵もない。

「ターンエンド」

Ｔｈｏｒ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
Ｘ－セイバーソウザ　ＡＴＫ２５００

ＸＸ－セイバーフォルトロール　ＡＴＫ２４００

「僕のタァーン！僕は手札を１枚捨てて『ＴＨＥトリッキー』を特殊召喚、さらに『リバイブ・リゾネーター』を召喚！レベル５の『ＴＨＥトリッキー』にレベル３の『リバイブ・リゾネーター』をチューニング！シンクロ召喚、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！さらに『リバイブ・リゾネーター』の効果、このカードが『レッド・デーモンズ・ドラゴン』のシンクロ素材になった場合、墓地から『リバイブ・リゾネーター』以外の『リゾネーター』２体を特殊召喚！来い、『ガード・リゾネーター』『デストラクト・リゾネーター』！」

ロキが済ませた用事とは、この新しいリゾネーターの入手だ。ロキのデッキは如何に早くクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンを呼び出すかに懸かっている。固有デッキの中身を入れ替えるのはどうかと思うが、ロキにとってはこれが正しい選択だ。

「レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル１の『ガード・リゾネーター』とレベル３の『デストラクト・リゾネーター』をダブルチューニング！シンクロ召喚『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は自分の墓地のチューナー１体につき５００ポイントアップ！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００↓５０００

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

「チッ、小癪な！」

Ｚｅｘ　ＬＰ４７６００↓４２６００

「ターンエンド」

Ｌｏｋｉ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「くっ…わたしのターン…トラップ発動『ガトムズの緊急指令』…フィールド上に『Ｘ－セイバー』と名のつくモンスターが存在する時、墓地から2体の『Ｘ－セイバー』をわたしのフィールド上に特殊召喚する。トールの墓地から『ＸＸ－セイバーフラムナイト』を、わたしの墓地から『ＸＸ－セイバーエマーズブレイド』を特殊召喚…さらに手札から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する」

「3体のモンスター…しまった！」

これではライフが４２０００ポイントあっても足りるかどうかわからん…だが、とにかくスレイを殺せば目的達成となりこの場から離脱できる。最悪、再び魂だけを逃がして新たな器に乗り換えれば…！

「3体のモンスターと私のライフ半分を究極神への供物とする！あらぶる巨神、究極の力を以って我が敵を粉砕する！光臨せよ、『究極神オベリスク』！！」

Ｓｌａｙ　ＬＰ３８００→１９００

全長５０ｋｍを誇る究極神の1体が光臨した。ゼクスの表情に焦り

の色が浮かび始める。スレイの表情は、相変わらず満身創痍の状態であり、ダメージの大きさを物語っていた。

「『究極神オベリスク』でダイレクトアタック！アルティメット・クラッシャー！！」

「ぐわあああああああああああああああ！！」

Ｚｅｘ　ＬＰ４２６００→３４６００

ゴッドモーメントにより現実化された神の攻撃をゼクスがもろに受けた。この時点で死んでもおかしくはない。

「ロキ、トール…すまない。ここまで来て、わたしはわたしの命が惜しくなった…ターンエンド」

もちろん、孤独の戦いであれば惜しくなどない。この命散るまで戦うだけだった。だがわたしは今、わたしの帰りを持ってくれている者がいる場所に帰りたいと思っている。一体いつから、そんな叶うかもわからないことを願うようになった？

Ｓｌａｙ
ＬＰ１９００
手札×１
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００

「スレイ、今ものすごく帰りたいと思ってない？」

「なぜわかる？」

…いつから願うようになっただと?決まっている。わたしはいつだってそう願っていた。わたし自身気付かない程だったが、はっきりとそう願っていたに違いない。

「なんとなく」

なんてね。単純にそういう顔をしていたし。僕と初めて会ったときに、スクルドに先に帰らせておきながらそういう顔をしていたのをよく覚えていただけ。それに、スレイが命を惜しがる理由なんてスクルドくらいしかないしね。

「我のターン!残念だがスレイ、惜しがってもその願いは叶わんぞ!我は『死者蘇生』を発動し、『ダークエンド・ドラゴン』を特殊召喚する!さらに魔法カード『フォース』!フッハッハッハッハ、どうやらここまでのようだな!『究極神オベリスク』の攻撃力を半分にして、その数値分ダークエンドに加える!」

「何だと!!」

究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００→４０００
ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ２６００→６６００

「そして攻撃力と守備力を５００下げ、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を墓地へ!」

ダークエンド・ドラゴン　ＡＴＫ６６００→６１００　ＤＥＦ２１００→１６００

「しまった!…なーんてね、手札から『ヘル・リゾネーター』の効

果発動！相手のカード効果で自分のカードが墓地へ送られる場合、代わりにこのカードを墓地へ送り、その効果を無効にして破壊する！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００↓５５００

「またしても『ダークエンド・ドラゴン』を…！！」

おのれ…スレイに止めを刺してからでもよかったではないか、なぜ我は勝負を焦っている？ライフは残り３００００以上もある我の方が圧倒的に有利なはずなのに！？

「ならば！もう手加減はなしだ。我は墓地・手札・デッキから『邪帝ガイウス』『闇の侯爵ベリアル』『ヘル・セキュリティ』『魔轟神レイヴン』『ダーク・リゾネーター』『スナイプストーカー』『地獄将軍メフィスト』『冥府の使者ゴーズ』『インヴェルズ・ホーン』『トラゴエディア』の、レベル１からレベル１０の１０体の悪魔族モンスターを除外し、降臨せよ！『闇天ウイグル』！」

１０体のモンスターが天に昇り、天から１体の巨大な人型の皇帝が闇の瘴気を纏って出現した。

「暗黒神より授かった闇天の力を見るがいい！」

闇天ウイグル　ＡＴＫ４０００

奴を暗黒神と呼ぶのはこれで最後だ。今度は我が暗黒神と呼ばれる時が来るのだからな！

「『闇天ウイグル』のモンスター効果発動、このターン相手モンス

ターを破壊した場合、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！スレイ、お前の命だけでもいただく！『闇天ウイグル』で『究極神オベリスク』を攻撃！デススライサー！」

これでスレイのライフは０だ。あとはこの場を脱出する術式を完成させれば…。

「バーカ、消えるのはお前だけだよ！相手の攻撃宣言時に『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を除外することでその攻撃を無効にする！」

スレイは絶対に殺らせない。いつも僕がスレイに願いを叶えてもらっていたんだ。たまには僕がスレイの願いを叶えてあげないと、割に合わないしね。それに、スレイを待ってる時の女神様もいるわけだし。

「何！？」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが自身を炎に包んで消える。それと同時に、究極神オベリスクに向かっていた黒く丸いノコギリのようなものも消えた。

「おのれ…ターンエンド」

エンドフェイズになったことで、ロキのスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが炎と共にロキのフィールド上に戻ってきた。

Ｚｅｘ
ＬＰ３４６００
手札×０

フィールド
闇天ウイグル　ＡＴＫ４０００

「我のターン！スレイ、お前先程『自分の命が惜しい』と言ったな！？」

トールがゼクスを睨んだまま、スレイに言った。ゼクスは不敵な笑みを浮かべて『いつでも来い』と言わんばかりに構えている。

「…やはり、戦いの神が、破壊神がそんなことを言っても誰も『逃げろ』『無理はするな』などという言葉は貰えないか？いや、承知の上だ」

本当なら『破壊神』などと呼ばれたくなかった、わたしはスクルドと2人で静かに暮らしていたかった。だが、いつしか神々によって付けられたこの肩書はそれを許すことはなく、戦いという戦いを呼び込んだ。確かに戦いは好きだ。しかし、それでもスクルドを心配させるようなことはできる限りしたくない。

「その逆だ。命が惜しければ逃げても構わん、無理をせずに退いても責めん。寧ろ、好きな者がいるのなら退け、そこで命を失えばもう2度と会えんのだからな！お前には我とは違い恋人がいる。危なくなったらいつでも逃げろ、誰もそれを責めたりしない」

珍しくトールがまともなことを言ったので、ロキが唖然とする。だが、トールの本心は実はこの通りだったりする。

「うっわぁ…あのトールがすっげぇまともなこと言ってるよ…絶対『逃げるくらいならリア充爆発しろ』っていうと思ったのに。まあ、僕も同意見だけどね」

「……お前達…」

…わたしは逃げない。わたしはまだ戦える。本当に逃げるのは、絶体絶命の瞬間のみだ。

「さて、我のターンだったな！我は『ＸＸ－セイバーフォルトロール』のモンスター効果によって、墓地の『ＸＸ－セイバーボガートナイト』を特殊召喚し、特殊召喚したボガートナイトを『Ｘ－セイバーソウザ』の効果のコストとして生贄にする！当然、選択する効果は相手モンスターを破壊する効果だ。行くぞ！『Ｘ－セイバーソウザ』で『闇天ウイグル』を攻撃！」

ソウザの光る剣が、ウイグルを一刀両断した。しかし、その瞬間ウイグルから放たれた闇の瘴気がスレイ達を包む。

「フッハッハッハッハ、闇天の怨念の呪縛を食らうがいい！『闇天ウイグル』がフィールドを離れた時、相手ライフを１００にする！」

闇天の呪いは半端なものではない！これこそ、闇天の本当の力。次のターンに確実に相手を葬るためのな！

「何！？」

Ｓｌａｙ　ＬＰ１９００→１００
Ｌｏｋｉ　ＬＰ８０００→１００
Ｔｈｏｒ　ＬＰ８０００→１００

「でもこれで、墓地の『ヘル・リゾネーター』の効果が発動できるけどね」

ヘル・リゾネーターのもう1つの効果。それは、自分のライフが1００の時にこのカードを除外することで、墓地から自分フィールド上に任意の数だけ『リゾネーター』を特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは相手がシンクロ素材として使えるけど。本当は『ヘヴンズ・リゾネーター』と合わせて使うんだけど、今回はラッキーだったね。

「『ヘル・リゾネーター』の効果で、僕は墓地から『ガード・リゾネーター』を特殊召喚。トール、使いなよ。キッヒャッヒャッヒャ」

「ではそうさせてもらう。レベル7の『X－セイバーソウザ』にレベル1の『ガード・リゾネーター』をチューニング、シンクロ召喚！羽ばたけ『ブラックフェザー・ドラゴン』！！さあ、本気を出そうではないか！『エボリューション・フェザー』を召喚！このカードが召喚に成功した時、デッキから1枚ドローする」

トールのデッキの一番上のカードが光った。奇跡のドローの予兆だ。

「ドロー！…『ブラックフェザー・ドラゴン』が存在する時、このカードは特殊召喚できる。来い『レボリューション・ウィング』！レベル8の『ブラックフェザー・ドラゴン』にレベル2の『エボリューション・フェザー』と『レボリューション・ウィング』をダブルチューニング！！黒き羽、闇の翼に進化する！大いなる翼よ、その闇を以って闇を払え！シンクロ召喚、7つの希望、その1つ！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』！！」

ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

『グオオオオォォオオオオオオ！！』

究極神オベリスクの前に、４０ｋｍ程のブラックフェザー・ドラゴンの面影が残る巨大なドラゴンが光臨した。

「な、何だこれは!?我の情報にはこんなドラゴンは無かったぞ!?」

「フッ、当然だ」

なぜなら、このカードはまだラミエル戦で1度使用したのみだからな、悪魔の耳に入っているわけがない。それどころか、我はしばらくデュエルをしていなかったしな。

「ターンエンド」

Ｔｈｏｒ
ＬＰ１００
手札×３
フィールド
ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「わたしのターン!わたしは『究極神オベリスク』でダイレクトアタック!アルティメット・クラッシャー!」

「グアアアアアアアア!」

Ｚｅｘ　ＬＰ３４６００→２６６００

「ターンエンド…」

なぜだ？わたし達は確実にゼクスを追い詰めているはず…だが、何だ？この恐怖は…身体が震えそうになるこの嫌な予感は…？無様なのはわかっている。しかし、それでもこう思ってしまう。『死にたくない』と。死そのものは怖くない。だが、はっきりと言える。わたしはまだスクルドと共に居たい。

Ｓｌａｙ
ＬＰ１００
手札×２
フィールド
究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００

「我のターン！…フッハッハッハッハ！！スレイ、運が良かったな。決着は延期にしてやろう。墓地の『闇天ウイグル』の効果発動。自分フィールド上にモンスターが存在しない時、墓地のこのカードを特殊召喚でき、攻撃力を倍にする。この効果を無効にすることはできないッ！」

これ以上戦えば、あの謎のドラゴンと究極神の攻撃を受ける。それは、スレイを倒せたとしても重すぎる代償。ならばここは一旦撤退し、体勢を立て直してから再度襲撃した方がいい。だがこのまま撤退するのも癪だ、置き土産をくれてやる。

闇天ウイグル　ＡＴＫ４０００→８０００

「『闇天ウイグル』で『究極神オベリスク』と相打ち！」

オベリスクの拳から放たれた莫大なエネルギーと、闇天の杖から放たれた闇のエネルギーが衝突して大爆発を起こし、互いを消滅させた。

「ぐあああああああああああああああああっ！！」

だが、スレイが突如倒れこんだ。ロキとトールがスレイを見ると、スレイの身体の2か所に剣が刺さっている。その剣は、スレイの2つの心臓を刺していた。ゼクスが今の大爆発に乗じて放ったものだ。

「くっ、貴様！」

トールがゼクスの居た方を見るが、ゼクスはすでに撤退したようで、何もいなかった。

「トール、追うよ！」

ロキが次元の扉を開こうとした。が…

「ま……待……て……追…う、な……」

「む、スレイ、しっかりしろ！」

「わ、わたし…達…も、撤退する…」

「しかし…」

「頼……む」

ここで追って死んでは意味がない…わたしは、今はスクルドの顔が見たい。この後に死ぬことになるのなら、彼女の顔を記憶に焼き付けておこう。わたしが世界で一番好きな彼女の顔を。…もしもこの後の死を免れることができるなら、わたしはもう破壊神の肩書を捨

てる。破壊神の肩書を捨ててまで願うこのわたしの願い…すべての戦いが終わったら、スクルドと2人で、静かで幸せな生活がしたい…。叶うことなどないだろう。だが、願うだけなら許されるハズだ。

幸い、スクルドが貸してくれた宝剣が懐に入っていたことでオシリスの心臓は防御できた。失ったのは戦闘を行う力のみ。1週間の間戦いはできないが、移動できるだけマシだ。

この後、スレイ達はその場を退き、屋敷に戻った。

――――――――――――――――――――次回に続く。

第１３１話　長期休暇１０　スレイの願い（後書き）

次回「長期休暇１１」

ウルズ「スレイって、そこまでスクルドのことが好きだったんだ…知らなかったわね」

ヴェルザンディ「今日はスクルドが休んでるから、最強カードは私が紹介しますわ」

『闇天ウイグル』
レベル１１　闇属性　悪魔族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このカードは通常召喚できない。自分の手札・デッキ・墓地から、レベル１からレベル１０の悪魔族モンスターを１体ずつ除外した場合に特殊召喚することができる。このカードは１ターンに１度、戦闘では破壊されない。１ターンに１度、自分のメインフェイズに発動することができる。このターン、自分フィールド上に存在するモンスターが相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える。この効果を発動するターン、このカードの以下の効果を無効にする。
●このカードは相手のカード効果を受けない。
自分のスタンバイフェイズに、自分フィールド上にモンスターが存在せず、このカードが墓地に存在する場合、このカードの攻撃力を倍にして自分フィールド上に特殊召喚することができる。

ウルズ「暗黒神からもらったらしいわね」

ヴェルザンディ「召喚条件が難しいけど、効果はおかしいことしか

書いていないわ」

第１３２話　長期休暇１１　スレイの療養旅行（前書き）

この…いつまでたっても甘ったるい糖分の話が書けんよ！誰か教えて～…

最近の出来事
高校１日目でした。…単純につかれた。

第１３２話　長期休暇１１　スレイの療養旅行

～～～屋敷～～～

…屋敷に戻ってきて、スレイはすぐに自分の部屋に入って鍵を閉めてしまった。僕たちは、スレイを責めてなんかいない。寧ろ、生きて帰ってきてくれただけで十分だ。

…今、イリアとアレク、スレイを除いた全員が大広間に集まった。

「……スクルド。…スレイの願いって何だか知ってる？」

僕は戦いの最中、スレイの心を読んでいた。この願いを知った時は、今までで一番、心を盗み見たことを後悔した。その願いはあまりにも平和で、多分、世界で最も幸せを望んでいたから。

「…知らない…」

スクルドは、顔を俯かせて答えた。スレイがあそこまでやられるとは思っておらず、スレイが傷ついたことを自分のことのように思っているからだ。

「…スレイの願いは…」

でも、ここにいる全員に伝えておく。それは、スレイを破壊神という束縛から解放するために。もうスレイを破壊神と呼ばせないために。

「『スクルドと2人で、静かで幸せな生活をすること』」

「…！！」

スクルドだけではなく、全員が驚く。

「スレイは、スクルドに笑顔でいてほしいんだ。自分が世界で最も好きな人にね」

あれだけスクルドのことが好きなのに、どうして幸せな生活をせず戦い続けたのか。それはやっぱり、破壊神の呼び名がそうさせてくれなかったに違いない。確かに、平和な願いを持った破壊神なんて他にはいない。だから他の最高神達もスレイがそんなことを願っているとも知らずに戦いを宿命づけた。

「きっとスレイは、今までの戦いで自分の心をすり減らしてきた。幸せな生活をいつまで経っても送れず、ただただ戦っていた日々で」

「……」

オーディンが立ち上がった。

「…どうしたの？」

「…わたし達は、スレイが自分の願いをすり減らしていることを何とも思わずに戦いの中に放り込んできたことになる。…たまには休ませてやろう。奴はスクルドとの時間を大切にしたいはずだ。スクルドよ、スレイと旅行にでも行って来い。チケットなどは全て、たった今用意したその封筒の中に入っている」

オーディンはそのまま部屋を出て、次元の扉を開き、どこかへ行ってしまった。

「ま、行って来れば？スレイと居られるのはスレイが生きている間だけだし」

「…うん、それじゃあ、行ってくるね」

スレイが生きている間だけ…ダメ、私にはスレイの居ない世界は考えられない。今までずっと一緒にいてくれた人が死ぬなんて考えたくない。どんな宝物を失っても、スレイだけには一緒にいてほしい。

スクルドはそんなことを考えながらスレイの部屋の扉をノックする。

「…スクルドか」

スレイは、ドアのノック音だけでそれがスクルドだと判断して鍵を開ける。

「一体何の用だ？…！？」

スクルドはスレイの顔を見た瞬間、眼に涙を溜めて抱きつく。

「どうした？」

「ロキからスレイの願いを聞いたんだ…」

「ほう…心を読まれていたのか…スクルド。ロキから聞いたであろうあの願いは…確かなわたしのたった１つの本当の願いだ。わたし

が欲しいのは力でも富でも、最高神の権力でもない。そんなものはこの願いのためなら喜んで捨てられる。……すまない、余計な話をしてしまった。何か用があったのだろう？」

成程な、ロキが話したのか。スクルドが泣く理由もわかる。

スクルドがスレイから離れると、オーディンからもらった封筒を見せ、その封筒の中身とオーディンの話を説明した。ちなみに、旅行先は京都。

「戦えないこの身が、オーディン達と共にいても足手まといになるだけだ。イリアには悪いが、旅行には行かせてもらう」

本来、そんな暇がないのは分かっている。しかし、それでもスクルドと2人でいられるのなら行こう。オベリスクの心臓が停止している今、わたしが戦いに参加することもできないしな。

スレイはすぐに旅行の準備を終えた。そして、スクルドに訊く。旅行の準備中に、スレイがふと気になったことだ。

「わたしには、君の居ない世界など必要ない。…いつまでもわたしと一緒にいてくれるか？」

ダメでもいい。この質問の答えはスクルドの自由だ。ダメならわたしは、やはり破壊神という運命から逃れることはできない。それだけのことだ。さすがにここまでスクルドに心配をかけておいて見限られていない方が不思議だがな。

「…当たり前だよ。私だって、スレイがいない世界なんていらない」

スレイが私を可愛いって言ってくれて、噂を聞きつけて会ってくれたから退屈な日々を抜け出せたんだ。何の力にもなれず、足手まといな私をスレイが好きでいてくれる。私は、これがどんなことよりも幸せ。

「…ありがとう。…行くとしようか」

昔からそうだ。わたしがどれ程無茶をしようと、見捨てずにわたしの傍にいてくれた。わたしは、今もそれが変わっていないことが嬉しかった。

「うん」

～～～その頃、オーディン・ゼクスの城～～～

「道を開けろ！クズども！」

オーディンが広域魔法を放ち、下級の悪魔を焼き尽くす。そして、ついにゼクスの前にたどり着いた。

「最高神オーディンか。何の用だ？スレイの敵討ちか？」

「そうではない！これはスレイに対するせめてものわたしの罪滅ぼしだ！」

今まで何億年と共に戦ってきた仲間の願いを聞かず、それどころか更なる戦場に向かわせてしまったわたしのな！

「オーディン、貴様の話は長い。そんなことを聞いている暇は我にはないのでな、早急に始末させてもらおう」

「「デュエル」」

Ｚｅｘ　ｖｓ　Ｏｄｉｎ

Ｚｅｘ　ＬＰ５０００

「先攻はわたしがもらう。わたしは『時械神ザフィオン』を攻撃表示で召喚し、カードを3枚セット。ターンエンド」

スレイよ、お前は悪魔と戦う時、自らに襲いくるとてつもない恐怖とも戦っていたのだな…戦いは助けてもらえるが、恐怖との戦いはスクルド以外誰も手を貸してくれなかったのだな…お前の心がよくわかる。この愚かな最高神をどうか許してくれ、スレイ。お前の心を理解せず、破壊神という称号だけで恐怖など無いと思い込み戦場に送りだしてしまったこの愚か者を。

Ｏｄｉｎ
ＬＰ８０００
手札×２
フィールド
時械神ザフィオン　ＡＴＫ０
伏せカード×３

「フッハッハッハッハ！貴様ごとき、スレイと同じように葬り去ってくれよう！ドロー、我はデッキ・手札・墓地からレベル１から１０の悪魔族モンスターを除外し、『闇天ウイグル』を特殊召喚する！」

「これが…スレイを恐怖の気圧で打ち負かした邪悪なるカード…」

このカードさえなければスレイは1人でも恐怖に勝利できた。だが、スクルドがいなかったあの状況でこの恐怖に勝利することはできなかった。スレイが異常なまでにスクルドを守り、傷つけないようにしてきたのは、単純にスクルド至上主義だったからではなく、本当にスクルドのことを誰よりも愛していたから。そして、自分がどんな恐怖にも勝つことができるからだったのか。わたしにはフリッグがいるが、それほどの存在ではない。やはり『好き』レベルで終わってしまっている。もはやスレイは、言葉では表せない程スクルドのことが好きなようだ。だがしかし、それをわたしは…わたし達最高神は…！！

「破壊神という名だけで戦場に送りだしスレイの平和な生活を奪った！！ならばせめて！この邪悪なモンスターを倒し貴様を葬り、スレイに謝罪させてもらう！」

スレイだけを戦場に送りだし、他の最高神はのうのうと自分が愛する者と静かに暮らし、会議に参加するだけで済ませている。その上、スレイの心の悲鳴を誰も聞いてやらなかった。スクルドを除いてな。ロキやトールでさえも、スレイの心の奥深く…堅い戦いの意思の殻で守られた、平和を願う心の悲鳴を聞いてやることはできなかった。

「フッハッハッハッハ！貴様の考えていることがわかるぞ。だがしかし、それは叶わん！『闇天ウイグル』で『時械神ザフィオン』を攻撃する！」

「無駄だ！時械神は破壊されず、戦闘ダメージを0にする！」

「何だと！？…くっ、ターンエンド」

ウイグルのコストで手札は全て除外してしまった…何も伏せるカードは無い…！だがライフは５０００、オーディンごときが削りきれるものか。

Ｚｅｘ
ＬＰ５０００
手札×０
フィールド
闇天ウイグル　ＡＴＫ４０００

「わたしのターン！」

今は長期休暇。スレイとスクルドには、残り2か月の長期休暇を2人で静かに過ごせるだけのプランを立てた。これで少しは休めるといいが…。

「スタンバイフェイズに『時械神ザフィオン』をデッキに戻す！この時、わたしは手札が5枚になるまでドローする！よって2枚ドロー。さらに永続トラップオープン『虚無械アイン』『無限械アイン・ソフ』『無限光アイン・ソフ・オウル』！『無限械アイン・ソフ』は『虚無械アイン』を、『無限光アイン・ソフ・オウル』は『無限械アイン・ソフ』を墓地に送り発動する。『無限光アイン・ソフ・オウル』の効果により、わたしの時械神はスタンバイフェイズにデッキに戻らない！さらに、手札からレベル１０以上のモンスターを特殊召喚することができる！」

「何！？レベル１０以上のモンスターをコストなしで特殊召喚だと！？」

「わたしは手札から『時械神サンダイオン』３体と『時械神ミチオン』『時械神ザフィオン』を特殊召喚！！」

時械神サンダイオン　ＡＴＫ４０００
時械神サンダイオン　ＡＴＫ４０００
時械神サンダイオン　ＡＴＫ４０００
時械神ミチオン　ＡＴＫ０
時械神ザフィオン　ＡＴＫ０

「何だと！！一気に攻撃力４０００のモンスターが３体…！！」

まずい、これはオーディンの力を侮っていた…！！だがウイグルは１ターンに１度、戦闘では破壊されない。２打までなら防げる！

「『時械神ミチオン』で『闇天ウイグル』を攻撃！」

「おろかな！攻撃力はウイグルの方が上だ！」

時械神は戦闘ダメージを０にできる。しかし、それ以外に何もないなら攻撃する意味はまったくない！

「『時械神ミチオン』が戦闘を行ったとき、相手のライフを半分にする！」

「何ィィ！？」

Ｚｅｘ　ＬＰ５０００００→２５０００

「１体目の『時械神サンダイオン』で『闇天ウイグル』を攻撃」

「くっ…ウイグルは1ターンに1度、戦闘では破壊されない！」

「だが、『時械神サンダイオン』がバトルを行ったとき、相手に４０００ポイントのダメージを与える！」

「ふ、ふざけるな！ライフが４０００または８０００スタートならば即終了の効果だぞ！？」

こ、こんな効果があってなるものか！５００００でも１３回受ければ０に、ダイレクトアタックによるダメージ込みなら6回だぞ！

「黙れ、クズが。必死に恐怖と戦っていたスレイを、更に蹂躙した悪魔が何を言う」

Ｚｅｘ　ＬＰ２５０００→２１０００

「続いて2体目の『時械神サンダイオン』で『闇天ウイグル』を攻撃」

ウイグルが破壊された。１ターンに1度の戦闘態勢では時械神の攻撃を防ぎきることなどできはしない。

Ｚｅｘ　ＬＰ２１０００→１７０００

「3体目の『時械神サンダイオン』でダイレクトアタック！！」

「グボアアァァァァァ！！」

Ｚｅｘ　ＬＰ１７０００→９０００

ば、バカな、５００００もあったライフが１ターンでたったの９００に…ふざけるな、こんなところで死にたくない、こんなところで…！！

「どうだ、スレイが味わった恐怖は？『愛する者の待っている場所に帰りたい』…そう願ったスレイに対し貴様が一体何をしようとしたのか…わたしはこれでターンエンド」

もっとも、こいつに愛する者がどうのと語ったところでどうにかなるものではないか。

Ｏｄｉｎ
ＬＰ８０００
手札×０
フィールド
時械神サンダイオン　ＡＴＫ４０００
時械神サンダイオン　ＡＴＫ４０００
時械神サンダイオン　ＡＴＫ４０００
時械神ミチオン　ＡＴＫ０
時械神ザフィオン　ＡＴＫ０

「くっ…嫌だ、我は…死にたくないいいいい！！」

「黙れゼクス、貴様の命はここで果てる」

「冗談では済まさんぞ…！墓地の『闇天ウイグル』の効果により、このカードを墓地から特殊召喚！カードを１枚伏せてターンエンド！」

こうなったら…撤退する。３体目の時械神サンダイオンの攻撃に乗

じてこの場を脱出する。

Ｚｅｘ
ＬＰ９０００
手札×０
フィールド
闇天ウイグル　ＤＥＦ４０００
伏せカード×１

「わたしのターン！２体の『時械神サンダイオン』で守備表示の『闇天ウイグル』を攻撃。貴様には８０００ポイントダメージを受けてもらう」

「ギャアアアアアアアア！」

Ｚｅｘ　ＬＰ９０００→１０００

「これで終わりだ。『時械神サンダイオン』で『闇天ウイグル』を攻撃！消え去れゼクス！！」

「フッハッハッハッハッハ！悪いがここで撤退させてもらう！さらばだオーディン…？」

なぜだ？なぜ結界が起動しない？

「愚か者が、わたしが貴様が逃げることを想定していないとでも思ったのか。最初にこの部屋に入った時に、転移封じの結界を張らせてもらっていた。言ったはずだ、消え去れと」

「そ、そんな…バカなあああああああああ！！」

Ｚｅｘ　ＬＰ１０００→－３０００

ここまで来て…スレイ抹殺の最終段階まで来て…計画がたった１人の最高神に邪魔されただと…？ふざけるな。

「……最後の最後まで救いようのない奴だったな。…スレイ、これで少しは許してくれるか？」

オーディンはゼクスが完全に消滅したのを確認すると、次元の扉を開いて屋敷に戻った。オーディンが帰ったころには、スレイとスクルドはすでにトゥルース・ウィルで高速道路を走り、京都に到着していた。

～～～京都・某所～～～

「着いたぞ、スクルド…スクルド？」

声をかけてみるが、反応がない。どうやらわたしにしがみついている間に眠気に襲われてしまったらしい。

「仕方ないな…さすがはわたしの姫…ところ構わず眠れるのはわたしにそっくりだ」

スレイは近くの自販機でコーラを買って、スクルドの頬に当てる。スクルドは冷たさにびっくりして起きた。

「ひゃあっ！」

ちなみにスクルドはところ構わず眠れるわけではない。スレイの傍でないと野宿は絶対にできない。

「目が覚めたか？」

スレイがスクルドの手にコーラの缶を置く。先程から、この時代では見かけないデザインのバイク…トゥルース・ウィルに人だかりができている。物珍しさに写真に撮っておこうと思っているようだ。しかし、この２人はそんなことを気にする余地もない。中にはスクルド目当てで近づいてきている輩がいるが、身長２ｍ５ｃｍもあるスレイを見るだけで近づくのをやめる。スクルドも１７５ｃｍと結構高い方だが。

「まあ、眠くなるのも仕方がないな。ずっと休まずにここまで走り続けてきたからな」

「……飲んでもいい？」

スクルドはコーラが飲みたいようで、スレイに訊いた。

「もちろん」

スクルドが嬉しそうに缶を開けた。特に炭酸で怯むことなどが無いので、一気に飲むことができる。スクルドは５０秒足らずでコーラを飲み干してしまった。

「……さて、一応オーディンが観光パスを用意していたな」

観光パスとは、見せるだけでどんな施設にも入れるある意味チート

過ぎるカードのことだ。実際には普通のカードに幻覚術をかけている物だが。

「一番近いのは…二条城？しかし、今日から2か月の間京都に居て、このパンフレットだけで暇にならないだろうな？」

2か月あれば多分全部の観光名所が回れるはずだ。そうした場合どうすればいいのか…ん？封筒の内側に手紙が貼ってあるな。

『2か月もあれば、さすがに暇になる時が来るだろう。そういう時は、スクルドとの時間を大切にして過ごすがいい』

「……」

オーディンめ、そこまで気遣ってきたか。わたしは病人ではないのだぞ？…いや、2か月は貴重だな。

「行こう、スクルド」

トゥルース・ウィルを起動させて走る。見物客はすぐにその場を退いたのでけが人は0だ。

ちなみに、この旅行に出発してからずっと『神の記憶玉』を使用しており、スクルドの表情などを撮っていたりする。人によっては変態などというかもしれないが、もしかすれば死んでしまうかもしれない今、彼女の笑顔は撮っておきたい。きっと死んでも共に居てくれるような気がするから。

～～～京都・二条城～～～

「すっごーい！スレイ、お城だよ、お城！」

「…わたしの城の方が大きいだろう」

「そうじゃなくてね、これ人間が造ったんだよ？」

「確かにそういわれれば一理あるが…」

さっきから男だけで観光に来ているグループの視線が地味に刺さる。
この世界は嫉妬であふれているのか？

「ねえ、中が見れるんだって！行こうよスレイ」

「……仕方ないな。君がそういうなら見ていこうか」

※観光名所の説明はしません。

～～～1時間後～～～

「あ～、楽しかった♪」

「……（城の中を見て回るのが楽しかったのか？）」

それよりも、近くに感じるこの悪魔でも神でも人間でもない気配の方が気になる。多分幽霊とかいう存在だった気がする。まあ、わたし達には関係ないが。

「庭を見に行こうよ」

「……わかった（だから何が楽しいのか教えてくれ）」

いや、わたしはスクルドがそばにいるだけで満足だが、やはり何が楽しいのかは気になる。

「あ、そこのお2人さん、ちょっと協力してくれないかな？」

突然わたし達に誰かが話しかけてきた。外見的に、恐らく写真家か何かだろう。腕前はかなり高そうだ。

「何だ？」

「城を背景に、抱き合っている恋人か夫婦同士の写真が欲しいんだが…付き合ってくれないか？」

ちなみにこの写真の条件、片方が可愛い女の子かイケメンが前提だったりする。

「要はこの場で抱き合えと……（何が目的なんだ…）……スクルド、わたしはどちらでもいい」

自分から『やろう』など言うわけがないだろう。…だからロキにヘタレと言われるのか？

「じゃあせっかくだし、1枚くれるのを条件にやってあげようよ」

スクルドは撮った写真を1枚くれるのを条件にOKの返事を出した。別にどこかに写真をばらまかれようが何も被害は無いので問題ない。

人間の世界だとこれをプライバシーの何とかというらしいな。

しかし、いざやるとなると抵抗感が…今までこんなことをしたのは…結婚式以来か？

スクルドは何の抵抗もなしにもう抱きついてきているしな…ここは少しぐらい自棄になってもいいだろう。

「3、2…1」

シャッター音が鳴り、写真が1枚出てきた。その場で現像されるタイプのカメラで撮ったらしい。もう1枚は普通のデジタルカメラで撮ったようだ。

「じゃあ、ありがとうね…」

それだけ言うと写真家はその場を去って行った。

「スクルド、いつまでくっついているつもりだ？……？？」

返事がない。スクルドの顔を見てみると、真っ赤になってあがってしまっていた。

「…無理をしていたのか。わたし相手にあがる必要などないだろう」

スレイはスクルドをお姫様抱っこして城を後にする。何とか復活したスクルドをトゥルース・ウィルに乗せ、オーディンが用意しておいたパンフレットの中にある旅館の1つに行く。知っている人は知っているだろう、聖護院の中か近くにあった旅館だ。

「しかし、スクルド。ベッドではなく布団だが大丈夫か？」

「うん、どっちかっていうと、ベッドより洋風のデザインの布団の方がいいかな」

理由は、だいぶ前にさかのぼる。

〜〜〜スレイの城・ある日の朝〜〜〜

この日は、一体何があったのかスクルドとスレイが同じベッドでくっついて寝ていた。そこまでは…問題があるかどうかは微妙なところだろうが、それ以上に問題なのはこの後だった。

「起きろ、スクルド…」

「む〜…」

「いつまでこんな格好で寝ているつもりだ？わたしを下敷きにするのか？」

なんと、昨日の夜はしっかりベッドの上で寝ていたはずなのに、朝になったらスクルドがスレイを押し倒すような形で床に落ちていた。だがここまでならスクルドもスレイも気にしない。が…

「キッヒャッヒャ、おはよう……って、えええええぇえええぇぇぇぇぇえ！！オーディーーーーーーーーン！」

朝の挨拶をしに来たロキが勘違いをしてオーディンに言ってしまったのだ。その後何もそういったR指定を食らいそうな事柄を何も知

らないスクルドはともかくとして、スレイが勘違いされてしばらくの間自室に閉じこもってしまったのは忌まわしい思い出だろう。

～～～回想終了～～～

「あの時の君の寝相の悪さは異常だったな…」

「ひど～い…」

「可愛い寝顔なのに残念だ」

「へ？／／／」

スレイの爆弾発言が飛び出した。平然と本人の前で可愛いと言ってのける辺り度胸がある。

とりあえず旅館の中に入ったスレイ達は、２時間後に運ばれてきた夕食を食べてスクルドが風呂に入ってから布団に入ろうとする。

「待て、風邪をひくぞ」

だが、スクルドは普段ドライヤーを使用せず、自然乾燥してから寝る。しかしまだ髪が乾いていなかった。スレイは、寝る前のスクルドの頭に手を当てて、魔法で乾かした。

「もういいぞ」

スクルドはその言葉を聞くと、安心した顔で眠りについた。スレイはやはり不眠の神であり、ほとんど眠らなかったらしい。

第１３２話　長期休暇１１　スレイの療養旅行（後書き）

次回「長期休暇１２」

ウルズ「さて、２人で旅行に行っちゃったわね」

ヴェルザンディ「そうですわね。例によってスクルドが休みなので私が何か紹介しますわ」

『二条城』
フィールド魔法
だいぶ昔に建てられた城。誰が建てたかは作者が知らないので書かない。このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、相手は靴を脱いで見学しなければならない。また、城の城内や庭で食べ物を食べたり飲んだりすることもできず、カードを破壊・除外・墓地に送る効果も使用できない。

ウルズ「……ツッコまないわよ、絶対」

ヴェルザンディ「いい出来だと思ったのですけれど…」

第１３３話　長期休暇１２　スレイの療養旅行２　前編（前書き）

前後編に分けました。理由？…気分です。

最近の出来事

デュエルしてないです。さて今週の土日位は誰かを誘ってやりましょうか。

第１３３話　長期休暇１２　スレイの療養旅行２　前編

～～～時空の狭間～～～

「……」

Ｓｌａｙ
ＬＰ２５
手札×０
フィールド
究極神オシリス　ＤＥＦ０
究極神オベリスク　ＤＥＦ８０００
究極神帝ラー　ＡＴＫ∞

Ｄａｒｋｎｅｓｓｇｏｄ（Ｕｌｔｉｍａｔｅｍｏｄｅ）
ＬＰ∞
手札×１４
フィールド
？？？　ＡＴＫ∞
？？？　ＡＴＫ∞
？？？　ＡＴＫ∞
？？？？？？

「『究極神帝ラー』：効果発動。１ターンに１度、相手の全てのカードを除外して∞のダメージを与える」

この効果の発動は、再び世界をリセットして神ｖｓ悪魔の戦いの輪

廻を繰り返すことを意味する。リセット前の記憶は基本的に消滅し、今まで何百回、何千回と繰り返してきた。

「貴様…世界をリセットしてまたしてもこの戦いの輪廻を繰り返すつもりか!?」

「いや…逝くのはわたしとお前だけだ。永き戦いの輪廻はここで断ち切る。この究極神帝の力でな。…スクルド、すまない。わたしは、君との約束も自分の願いも叶えられそうにない。……君といた時間、わたしには永遠の思い出だ。オーディン、最高神達に伝えろ、『スレイは死んだ』とな。ゴッド・アルティメット・ノヴァ!!」

次の瞬間、強い光が全次元を包み込む。しかし、スレイの言った通り消えたのはスレイと、スレイと戦っていた暗黒神だけだった。

「そ、そんな…スレイ…嫌…うあああああああああ!」

その後、傍にいるスクルドが泣き崩れた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「…ッッ!!」

スクルドが飛び起きた。夢を見ていたらしい。

「どうした?スクルド…怖い夢でも見たのか?」

スレイはスクルドの頭を撫でる。昔からスクルドが何かにうなされ

ていたり、怖がっていたりすると撫でていた。スレイ曰く『スクルドならこれで大体落ち着く』そうだ。

「まあ、何か飲み物を買ってくるとしようか。眠れない夜は何か温かいものを飲めばいい」

スレイが立ち上がり、飲み物を買いに行こうとするが、スクルドがスレイの服の裾を掴んで離さない。服とはいっても器の一部だが。

「お願い…離れないで…私の傍から居なくならないで」

今の言葉の真意は、文字通りずっと一緒にいてほしいのであり、決して今この場だけ近くにいてほしいという意味ではない。スクルドは今の夢の内容を重く見ていた。

「……わかった」

しかしスレイは、そこまでだとは思っていなかった。

現在時刻、午前3時。スレイはこの間、ずっと起きている。心臓の回復には睡眠が必要だが、スレイは眠ろうとしない。それは、スレイが襲撃してきた敵を迎撃するため。オベリスクの心臓は本来、あまりにも負担がかかる神力を使用する技の反動を0にするためのもので、反動が無い技ならば使用できる。

「……」

このスクルドの状態からして、余程酷い夢だったのだろう。だが、わたしには夢を覗く魔法が使用できない。だからスクルドがどんな夢を見たのかはわからない。

「安心しろ、わたしはここにいる」

とりあえず久しくスクルドの隣で寝ることにする。心臓が早急な回復を求めているのか、すぐに眠気が襲ってきて、わたしの意識はスクルドよりも先に途絶えた。

～～～朝～～～

「……スクルド、スクルド」

スレイがスクルドを起こす。内心、もう少し寝顔を見ていたかったりする。

「む～…おはよう…」

スクルドが珍しく起きたばかりでフラフラしており、スレイに向かって倒れこんでしまった。意外と朝に弱いのかもしれない。

「ねえスレイ…昔みたいに手を握って一緒に歩こうよ」

まだスレイと会ったばかりのころ…確かスレイが、初めて私と一緒に中央都市まで出かけてくれた時、中央都市で迷子になりかけた私の手を引っ張ってくれて、あれが嬉しかったのを覚えてる。

「！！」

スレイがスクルドの突然の発言に驚き、思わず床に躓いてしまい、

危うく転ぶところだった。

「…まあ、そんなに望むならいいだろう」

スクルドの手を握る。この時の笑顔が印象に残った。幼少期のスクルドの笑顔と重なったからだ。…わたしは決めた。例え周りから非難を浴びようとも、これがわたしの意思だ。わたしの決意だ。

「スクルド、よく聞いてほしい」

「何？」

「わたしは……最高神を降りる」

「へ？ど、どうして？」

「きっとわたしは今まで『最高神だから』『破壊神だから』という理由で戦ってきた。だが、わたしはもうそんな理由も権力も肩書も

欲しくない。わたしはわたしの願いの為に、そして君を守るために戦いたい」

ようやく気付いた。『最高神』という名の権力など所詮は飾りに過ぎない。わたしはいつも、そんな下らないもののために戦ってきた。宿命など知らない。使命などいらない。わたしは自分の願いを叶えるために戦う。

「……いいよ。それがスレイの考えなら、私はスレイに付いていくよ」

きっと、今のスレイは誰にも負けない。自分だけの理由を持ってるから。

「……ありがとう」

これで心置きなく戦える。世界を管理するのは最高神ではなく、その世界の住人1人1人。我ら神は本来、それを見守るのが役目だったはずだ。ここまで徹底して世界を管理する必要などどこにもない。大きすぎる人間の進化を潰す必要もない。

…わたしはもう、誰にも縛られない。破壊神の宿命で破壊の限りを尽くすのはもう終わりだ。私情だけで戦える。

「でも、まだ回復しきってないし、せっかくオーディン様からチケット貰ったんだから、2か月くらい楽しもうよ。もちろん、回復したからって無茶はしないで…」

私は自分よりもスレイが傷つく方が辛い。無茶をしてまで勝利するくらいなら、逃げて無事に帰ってきて欲しい。私の願いはずっとスレイと一緒にいることだから。

「…そうしよう。で、今日はどこに行く？」

「えっとね…今日はここかな」

～～～屋敷～～～

「はいはい、じゃあ途中報告しますよ～…」

「キッヒャッヒャッヒャ、待ってました！」

ロキに神の鏡で通信しているのは、二条城でスレイ達が出会った写真家だ。実はこの写真家、ロキがヘイムダルを変身させてこっそりあとをつけさせたもので、２人に何かあったらすぐに報告するように言ってある。

もちろんヘイムダルがタダでそんな仕事を引き受けるはずがない。ロキはヘイムダルを恋愛シミュレーションゲームで釣ったのだ。当然、このエサにヘイムダルが飛びつかないはずはなかった。ものすごい速さでスレイ達のプランを確認すると、あっという間に恋愛シミュレーションゲームを片手に尾行を開始していた。

「報告はとりあえず１つだけ。スレイが最高神を降りるって」

「！！！！！」↑トール

「な、なんだって～～～～～～～～！！」↑ロキ

「っ！！（紅茶を吹いた）」↑オーディン

「じゃ、また何か報告あったら連絡するわ」

ヘイムダルはそれだけ言って連絡を切ってしまった。

「さ、最高神を降りるって何言ってんだよ？」

「…おそらくスレイは、もう権力や肩書に興味がないということだろう。元からあまりそういった物には興味を示さず、力押しの方法が得意だったからな」

「どっちかというとそれを捨てて肩の重荷を降ろして戦うのではないか？いや、わたし達がスレイの真意を探ることはできない。奴はもう、誰にも辿り着けない高みへと歩み始めている」

かつて破壊神が望んだことはなかった平和の願い。奴は、それを叶えようとしているのだろう。

～～～～～～～～

「おいしいよ、スレイ。スレイも食べない？」

スクルドはスレイに、京都特有の菓子八つ橋を勧める。スクルドはこれが気に入ったらしい。

しかし、生憎スレイは餡子などを使用した和菓子が苦手であり、スレイが食べているのは何も入っていない八つ橋だ。

「スクルド、わたしはその中に入っている物が苦手でな…すまない

が、これでいい」

スクルドは、そんなスレイを見て静かに笑った。

「さて、そろそろ行くか」

たまたま立ち寄った店で1時間も居座るとは思わなかった。土産の店は1度入るとあまり抜け出せないな。

わたしは食べ終わったスクルドを乗せてトゥルース・ウィルをある場所へと走らせる。スクルドがパンフレットを見て、かなり行きたがっていた。

その場所は…

「本当に金色だ～！スレイ、これ本物だよ？本当に金色だったね！」

金閣寺だ。スクルドは子供のように喜んでくれた。

「そうだな…！？」

スレイは少々苦笑いでスクルドを見る。だが、次の瞬間にはスクルドを抱いてその場を飛び退いた。その場所には極太の火柱が上がった。

「今の攻撃をかわしたか…さすがだ」

そして、火柱の中から1体の悪魔が出現し、人間を巻き込まないように結界を張る。目的はスレイらしい。

「破壊神スレイ、今の貴様は弱っている…ゼクスごときでそこまで

体力を失った貴様を葬るにはこのタイミングがちょうどいい」

炎でできた身体を持つ灼熱の悪魔が、マグマで固有ディスクを創り出した。

「その名で…呼ぶなあああああああぁぁ！！」

スレイが激昂してゴッドモーメントを展開しようとしたが、スクルドが止めた。

「スレイはまだ回復しきってないから…私がこのデュエル、引き受けるよ」

それに…スレイがあんなに怒るってことは絶対嫌がってる。それを嘲笑うかのように言うなんて絶対許さない。

「ほう、わたしの相手は女神の小娘か。良いだろう」

「「デュエル」」

Ｓｋｕｌｄ　ｖｓ　Ｆｉｒｅｄｅｖｉｌ

「先攻はわたしがもらう。そして、わたしの固有スキルによってわたしはドローフェイズに2枚ドローできる！」

「そんな！！」

1ターンに2枚ドロー…スレイはこんな能力を持つ悪魔たちを相手に戦ってたの？

「わたしは『フレムベル・ヘルドッグ』を攻撃表示で召喚し、カー

ドを2枚セット。ターンエンド」

全身が炎でできているのに、カードを触っても燃えない。どうやら、燃やすものは悪魔の意思で決められるようだ。

Ｆｉｒｅｄｅｖｉｌ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
フレムベル・ヘルドッグ　ＡＴＫ１９００
伏せカード×２

「私のターン…私は『ボタニカル・ライオ』を攻撃表示で召喚。『フレムベル・ヘルドッグ』に攻撃！」

ボタニカル・ライオの攻撃力は１６００だけど、効果で自分フィールド上の植物族モンスター1体につき３００ポイントアップする。相打ちだけど、残しておくよりかはいい。

「愚かな、速攻魔法『禁じられた聖槍』。『ボタニカル・ライオ』の攻撃力を８００ポイントダウンする」

「きゃああ！」

ボタニカル・ライオ　ＡＴＫ１９００→１１００

Ｓｋｕｌｄ　ＬＰ８０００→７２００

「どうだ？我がデュエルによる現実の痛みは…ゼクスとは比べ物にならないはずだ…『フレムベル・ヘルドッグ』が相手モンスターを

破壊した場合、デッキから守備力２００以下の炎属性モンスター１体を特殊召喚できる。現れよ『フレムベル・アーチャー』！」

「……カードを2枚伏せて、ターンエンド」

うぅ…たった８００なのに…太陽に焼かれてるみたい…。

Ｓｋｕｌｄ
ＬＰ７２００
手札×３
フィールド
伏せカード×２

「わたしのターン。わたしは手札より『手札抹殺』を発動。互いに手札をすべて捨て、捨てた枚数分ドローする。さらに『ネオフレムベル・サーベル』を通常召喚」

手札抹殺で捨ててドローしたのは、炎の悪魔が5枚、スクルドが３枚だ。

「レベル４の『ネオフレムベル・サーベル』にレベル３の『フレムベル・アーチャー』をチューニング！紅蓮の炎、火柱を上げ古の魔神を呼び覚ます！シンクロ召喚『エンシェント・ゴッド・フレムベル』！！」

「そのモンスターは！！」

奴が手札抹殺を発動したのはそのためか…墓地があればあるほど有利な植物族にとって、あのモンスターは天敵。

「え？そんなに強力なモンスターなの？」

スレイが珍しくモンスターの召喚に反応したので、スクルドは一体何があるのだろうかと考える。

「『エンシェント・ゴッド・フレムベル』のシンクロ召喚に成功した時、相手の手札の枚数分まで相手の墓地からカードを除外し、１枚につき攻撃力を２００ポイントアップする」

「そんな！！」

私が手札抹殺で墓地に送ったのは……

「わたしは貴様の墓地から『グローアップ・バルブ』『ブルーローズ・ドラゴン』『ギガプラント』の３枚を除外し、『エンシェント・ゴッド・フレムベル』の攻撃力を６００ポイントアップする」

エンシェント・ゴッド・フレムベル　ＡＴＫ２５００→３１００

「攻撃力３１００…」

「わたしは『フレムベル・ヘルドッグ』でダイレクトアタック！フレムベルハウンド！」

「させない！トラップカード『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！相手モンスターの攻撃宣言時に、相手フィールド上の攻撃表示モンスターをすべて破壊する！」

「カウンタートラップ『フレムベルカウンター』、墓地の『ネオフレムベル・サーベル』を除外し、『聖なるバリアー ミラーフォース

一』を無効化して破壊する」

「くっ…」

それならせめて攻撃だけでも…！スクルドはそう思って自分の周りに防御用の結界を張って、フレムベル・ヘルドッグの攻撃を防ぐ。

Ｓｋｕｌｄ　ＬＰ７２００→５３００

「これはどうだ？『エンシェント・ゴッド・フレムベル』でダイレクトアタック！ブレイズインパクト！」

「くっ…うぅ…うあああああああっ！！」

Ｓｋｕｌｄ　ＬＰ５３００→２２００

スクルドのバリアが耐え切れなくなり、ついに破壊されエンシェント・ゴッド・フレムベルの巨大な拳が直撃した。スクルドはあまりの威力の攻撃に気絶してしまった。

「おい、しっかりしろスクルド！」

スレイがすぐにスクルドに駆け寄り、体を揺らす。だが、スクルドはピクリとも動かない。

「安心しろ、生きてはいる。その様子ではかなり深い怪我を負ったようだがな」

「……！」

スレイはスクルドをお姫様抱っこして、近くのベンチに寝かせた。
そして、スクルドの手から杖を取り、炎の悪魔の前に立った。

「貴様は今ここでわたしが叩き潰してやる…！デュエルの状況はスクルドを引き継ぐ」

スクルドのライフはまだ残っている。ならばスクルドが本当に悪魔ごときに負けるのか試してやろう。

「ほう、そんな小娘のカードを引き継いでわたしに勝てるとでも思っているのか？」

「ああ、わたしが貴様に勝利する。貴様のナンセンスなデュエルはもう飽きた。これ以上スクルドは傷つけさせない」

もはや１ターンの猶予も与えはしない。

「わたしのデュエルがナンセンスだと！！…いいだろう、スレイ、それならば貴様を葬り去ってこのデュエルがナンセンスではないと証明してやる。ターンエンド」

Ｆｉｒｅｄｅｖｉｌ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
エンシェント・ゴッド・フレムベル　ＡＴＫ３１００
フレムベル・ヘルドッグ　ＡＴＫ１９００
伏せカード×１

「わたしのターン。…『手札抹殺』発動。互いにすべての手札を墓

地に送り、捨てた枚数分ドロー。魔法カード『増草剤』を発動。墓地から『凛天使クイーン・オブ・ローズ』を特殊召喚する」

「させるものか、カウンタートラップ『フレムベルカウンター』。墓地から『フレムベル・アーチャー』を除外し、『増草剤』を無効にして破壊する！」

蘇生カードなど通すとでも思ったか。今の手札断札で、確実に奴の墓地には何かしらのモンスターが送られているのだからな。

「魔法カード『死者蘇生』発動。墓地より『凛天使クイーン・オブ・ローズ』を特殊召喚する」

「しまった！！」

2枚目の蘇生カード…！！

「トラップ発動『凛天使の救済』。『凛天使クイーン・オブ・ローズ』が存在する時、墓地から2体の植物族モンスターを特殊召喚できる。現れろ『ギガプラント』『エボリューション・ローズ』！『エボリューション・ローズ』の特殊召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする」

「凛天使の専用トラップだと！？そんなものは存在しないはず…！」

「確かにな」

だいぶ前にスクルドが突然出かけた先で手に入れてきた物だ。わたしが使うことになるとは思わなかったがな。

「デッキの一番上のカードを1枚墓地に送り、『グローアップ・バルブ』を墓地から特殊召喚する。レベル6の『ギガプラント』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング。シンクロ召喚、『ブラック・ローズ・ドラゴン』。手札より『フォーチュン・ローズ』を召喚。レベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』にレベル4の『フォーチュン・ローズ』とレベル1の『エボリューション・ローズ』の2体のチューナーをダブルチューニング。シンクロ召喚!!『エターナル・ローズ・ドラゴン』!!」

巨大な黄金の薔薇の竜が天空より降臨した。主人であるスクルドが倒されたのを怒っているようで、炎の悪魔を睨みつける。

「バカな!?ここで『エターナル・ローズ・ドラゴン』だと!?」

「スクルドを甘く見たこと…後悔させてやろう。『エターナル・ローズ・ドラゴン』のモンスター効果により、わたしは墓地から『ブラック・ローズ・ドラゴン』を除外し、その攻撃力を吸収する」

エターナル・ローズ・ドラゴンの棘が次元の渦に入り込み、ブラック・ローズ・ドラゴンを引きずり出して力を吸収、その後次元の彼方に吹き飛ばした。本来は相手の墓地からモンスターを除外して発動する効果なのでこういう吸収の仕方なのだろう。

エターナル・ローズ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→６４００

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』で『エンシェント・ゴッド・フレムベル』を攻撃。エターナル・ローズ・ストリーム!」

黄金の炎がエンシェント・ゴッド・フレムベルを包み込み破壊した。

「ぬおおおおおお！？」

Ｆｉｒｅｄｅｖｉｌ　ＬＰ７２００→３９００

「まだだ、『エターナル・ローズ・ドラゴン』が相手モンスターを破壊した場合、『エターナル・ローズ・ドラゴン』の攻撃力分のダメージを与える！エターナル・フレア・ストリーム！」

エターナル・ローズ・ドラゴンの攻撃力は６４００…終わりだ。

「ぬあああああああ！」

Ｆｉｒｅｄｅｖｉｌ　ＬＰ３９００→－２５００

「…貴様はわたしに勝ててもスクルドには勝てない」

「……なぜ？」

「その答えは地獄の中で貴様が見つけろ」

優しさを持たぬ者は優しさを持つ者には勝てない。それだけだ。

炎の悪魔が霧のように霧散して消えた。そして、結界が崩れて止まっていた時が再び動き出した。当然、人間たちは何が起こっていたかなど知る由もない。

「スクルド…」

次元宝物庫から１つしか持っていない秘薬を取り出して、気絶しているスクルドに少量飲ませる。すると、一瞬で怪我が完全に回復した。回復魔法を使用できないわたしは、怪我や病を治すにはこれを

使うしかない。

「ん…ぅ…？」

「目が覚めたか？」

「スレイ…？…！！悪魔は！？」

「……君が倒した」

わたしはスクルドに杖を返す。スクルドは杖を見てから、わたしの顔を見る。

「君が気絶した後、わたしが君のデュエルを引き継いで戦っただけだ。君の力は奴に負けてなどいなかった」

スレイが笑みを浮かべてスクルドに手を差し伸べる。スクルドが笑顔でスレイの手を握って立ち上がった。

「邪魔が入ったが、まだ昼間だ。…とりあえず、昼食にするか」

「うん！」

「…行くぞ」

わたし個人は、どのような時間帯でも行動可能だが、スクルドの身体のことを考えれば無理はしない方がいい。
ちなみに昼食も摂る必要は無いが、心臓の回復のことを考えれば食べた方がいいのかもしれない。

……外食よりもスクルドの作った料理が食べたい。

――――――――――――――――――――後編に続く。

第１３３話　長期休暇１２　スレイの療養旅行２　前編（後書き）

次回「後編」
※今回のオリカ『凛天使の救済』はユタ様からお借りしたものです。ありがとうございました。登場させるのが遅くなってごめんなさい。

ウルズ「…最高神降りちゃったわよ？」

ヴェルザンディ「さて、それは置いといて…最強カード紹介行ってみますわ」

『金閣寺』
フィールド魔法
正式名称があった気がするがわからないので書かない。このカードが発動している限り、相手の金に対する欲望を引きずり出すか、黒すぎる心を洗うことができる。また、雪の降っている日にこのカードを発動すると非常にきれいである。ただし、１階は金色ではなく、普通の書院造なので注意。対となる銀閣は銀色ではなく、ただの寺。当初銀にする予定があったとかなかったとか。

『八つ橋』
通常魔法
京都名物のお菓子。人によって好みが分かれるが、個人的においしいと思う。このカードが墓地へ送られた場合、自分のライフを４００ポイント回復する。

ウルズ「……」

長期休暇１２　スレイの療養旅行２　後編（前書き）

高校が始まってから1週間です。……なかなか楽しいのですが疲れますね。

最近の出来事

３日前に別の高校の友人からメールが来てたのですが、あろうことか返信するのを忘れていた…

長期休暇１２　スレイの療養旅行２　後編

～～～京都より少し離れた場所～～～

わたしはトゥルース・ウィルを次元宝物庫に入れ、スクルドと２人で歩いていた。京都から少し離れるだけで、周りはビルの建つ街の景色になる。人間の言うこういった『都会』はどうもわたしは好きになれない。スクルドはそんなことを気にせず、まっすぐ歩いていく。

「早くー！スレイ、置いてっちゃうよー！」

「……時間はある、急ぐ必要などないだろう…！！」

突然、スクルドの頭上にビルの上の看板が落ちてくる。……幸先悪いな。それなりに急いでアーティスを１回振る。その衝撃波が看板を粉々に砕いた。心臓の回復はもう９０％以上完了しているため、最上級魔法以外ならばある程度使用できる。

こんなことでスクルドは死なないが、周りに人間はいる上に、回復には時間もかかる。人目に触れるのは気にしていないためこれくらいのことはできる。

看板が砕け散った後、下にいた死を覚悟したであろう人間の何人かが目を開け、何が起こったのかというような顔をしていた。

「スクルド、大丈夫か？」

看板の砕けた欠片が当たらないように頭を抱えていたスクルドに手

を差し伸べ、立ち上がらせる。

「大丈夫、ありがとう」

スクルドを連れてすぐにその場を離れる。稀にこの程度のことで礼を言ってくる人間がいて、時間を取られるからだ。わたしは人間の為に看板を破壊したわけではないからな。

「しかし、君なら未来を見通してこのことを知ることができたのではないか？」

未来を司る女神にはこのくらいのことは楽にできる。自らの危険を避けるためにも、知っておくのは良い対策になると思うが…。

「だって未来を知っちゃったらつまんないもん…スレイがこの先で何をしてくれるのかなんて知りたくない」

「……成程な」

未来を司るものとしてあるまじき言葉と意思ではあるが、その気持ちはよくわかる。仮にわたしが未来を知ることができたとして、この先の運命を知っていてはやはり楽しみは薄いだろう。知らないからこそ楽しめることもある。…と、感情が殆ど無いわたしが『楽しみ』などと言っても、説得力は無いか。

「で、ここか…」

オーディンのよこしたパンフレットには、料理の美味な店などが書いてあるものもある。試しに行ってみるのもいいかもしれないと思ってここに来た。…たこ焼きとかお好み焼きと言った料理の店らし

い。…たこ焼きは知っているがお好み焼きってなんだ？

「お好み焼きってなんだろうね？私、ちょっと楽しみだよ」

スクルドも知らないのか。百聞は一見に如かず…まあ、近くの人間に訊いてみるよりも食べた方が早い。

「いらっしゃい！」

店に入ると、店員と店長の張りのある声が聞こえた。席は適当に決めて座って良いようだ。わたしはスクルドが希望した窓際の席に座った。スクルドの白い肌が日の光に当たりよく見える。

店員が水を運んできたところで、スクルドが気になっていたお好み焼きを注文した。わたしは水を一気に飲み干すと、スクルドにあるものを渡す。

「これは？」

「……君の宝剣だ」

わたしとしたことが、あの時の戦いで借りたまま、返すのをすっかり忘れていた。

「あ、そういえば」

スクルドはそういいながら宝剣を受け取った。忘れていたことに関しては何も言わないでくれるらしい。

「お待たせしました。お好み焼きです」

……方言というものを使わずに共通語か。わたし達…特にスクルドは外国人とみられているようだな。言ってしまえば外国人どころか人間ですらないが。

「ほう、これが…」

「美味しそうだね！スレイ、食べてもいい？」

「構わない」

スクルドが早速お好み焼きを食べ始める。食べたことがないものは基本的にわたし1人では食べない。口に合わない物が入っていては気分が悪くなるだけだからな…スクルドの反応を見て食べるかどうか決めるとしよう。

「…どうだ？」

「美味しいよ！スレイ、食べてみてよ」

「む……（食事中）……美味だな」

スレイはスクルドの言葉を一切疑わずに食べてみた。スレイの口に合う食べ物のようだ。ちなみにスレイは、スクルドの言葉を疑ったことは無い。

～～～1時間後～～～

「２５００円になります」

スレイが懐に手を入れ、次元宝物庫を開いて金を取り出した。スレイが自分の懐に手を入れた時は、大抵次元宝物庫を開いて何かを取り出す時だ。

「おおきに～」

「……そこだけ方言か」

スレイは多少不満そうに呟いて店を出る。単純に『それなら最初から方言でいいだろう』と思っただけだ。

「……2時か。どこか行きたいところはあるか？」

「う～ん……お茶とお菓子が美味しいところ…かな？」

いくらスレイでも今食べたばかりだって言うよね…。でも、資料を見た限りだと美味しそうだったんだけどな…。

「わかった。では行ってみるとしよう」

スレイは微笑を浮かべ、トゥルース・ウィルを取り出した。取り出したというよりも、念じて呼び出したと言った方が近いかもしれない。スクルドが乗ったのを確認して走り出す。

だが、高速道路のインターチェンジを通り過ぎた辺りで、後ろからトゥルース・ウィル同様、この時代では奇抜なデザインをしたバイクが走ってきた。

「ん…？」

乗っているのは…何だ？人型ではあるが、人間ではないな。

「スレイ＝アルアス、わたしとデュエルしてもらおう。スピード・ワールド２、セットオン」

「何！！」

ライディングデュエルだと…その上今のは…機械音のような声…一体何者だ？

「良いだろう、わたしに立ちふさがるなら排除する！」

「スレイ！？」

「スクルド、この高速道路を抜けるまでに終わらせる。振り落とされないように掴っていろ。行くぞ！愚か者よ！！」

「「ライディングデュエル、アクセラレーション！」」

Ｓｌａｙ　ｖｓ　Ｅｎｅｍｙ

「わたしのターン。わたしは『クリッター』を召喚。ターンエンド」

奴の力は未知数。ならば１ターン目はより警戒するべきではある。だがライフは４０００…悪魔ではないし神でもない。

Ｓｌａｙ
ＬＰ４０００
手札×５
フィールド

クリッター　ＡＴＫ１０００

「わたしのターン…」

Ｅｎｅｍｙ　スピードカウンター　０→１
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　０→１

「わたしは『Ｕｓｐ－苦渋の選択』を発動」

「バカな！『Ｕｓｐ』だと！！」

Ｕｓｐは神のみが使用できるライディングデュエル専用のコスト無しの魔法カード…苦渋の選択はこの世界では禁止カードではないから使用できるのは知っているが…。

「自分のスピードカウンターが０以上ある時、デッキから５枚のカードを選択、相手に公開する。相手はその中から１枚を選びわたしの手札に加え、残りを全て墓地へ送る。わたしが選択するのはこの５枚だ」

……『グローアップ・バルブ』『ゾンビキャリア』『スポーア』『Ｈｓｐ－サイクロン』『Ｈｓｐ－ライトニング・ボルテックス』か。

「わたしは『Ｈｓｐ－ライトニング・ボルテックス』を選択する」

「ならば残りをすべて墓地に送り、手札に加える。『ゾンビ・マスター』を召喚する。その効果により、手札の『ゾンビ・マスター』を捨てて捨てたこのカードを特殊召喚、さらに手札より『ゴブリンゾンビ』を捨て、このカードを特殊召喚する」

如何にもゾンビらしい人型のモンスターと、剣を持った怪物が出現した。

「くっ……」

この展開力は…アンデット族の特殊効果を利用したシンクロ召喚…もしくはビートダウン…。

「バトル、『ゴブリンゾンビ』で『クリッター』を攻撃する」

「『ゴブリンゾンビ』に戦闘ダメージを与えられたことでわたしのデッキトップのカードを1枚墓地へ送り、フィールドから墓地に送られた『クリッター』の効果により、デッキから『メタモルポット』を手札に加える」

墓地に送られたのは…ＸＸ－セイバーフラムナイトか。

Ｓｌａｙ　ＬＰ４０００→３９００

「2体の『ゾンビ・マスター』でダイレクトアタック！！」

「ぐぁあああああ！！？」

Ｓｌａｙ　ＬＰ３９００→３００

トゥルース・ウィルが衝撃で激しく揺れる。スレイは力ずくで制御し、バランスを取り戻した。

「墓地の『ゾンビキャリア』のモンスター効果発動。手札を1枚デッキトップに戻し、このカードを墓地から特殊召喚する。さらに『

グローアップ・バルブ』の効果により、デッキトップのカードを墓地へ送って墓地から特殊召喚」

「……」

シンクロ召喚をしてくるのは間違いない。だが、今の戦術は明らかにミスがなかった。ゾンビキャリアの効果はメリットにもなり得るが、時としてドローロックというデメリットをもたらす。それをグローアップ・バルブのモンスター効果により回避した…。

「レベル4の『ゴブリンゾンビ』にレベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング。聖なる力、今その姿を邪悪なるものに変え降臨せよ。シンクロ召喚！殲滅せよ、滅びの光『聖騎士ダークブレード』！！」

天から光と共に、黒い馬に乗って禍々しい剣を携えた聖なる騎士が現れた。相反する力を持ち合わせている…、あのモンスター…一体どのような特殊能力を持っている？

「このカードのシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚選択して手札に加える。だが先にフィールドから墓地に送られた『ゴブリンゾンビ』の効果により、デッキから『ゾンビ・マスター』を手札に加える。そして『聖騎士ダークブレード』のモンスター効果によって、デッキから『オネスト』を手札に加え、ターンエンド。ちなみにダークブレードは、自分フィールド上の闇属性、または光属性モンスター1体につき、攻撃力が２００ポイントアップし、相手はダークブレード以外攻撃できない」

Ｅｎｅｍｙ
ＬＰ４０００

手札×４
フィールド
聖騎士ダークブレード　ＡＴＫ３６００
ゾンビ・マスター　ＡＴＫ１８００
ゾンビ・マスター　ＡＴＫ１８００

「わたしのターン」

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　１→２
Ｅｎｅｍｙ　スピードカウンター　１→２

ダークブレード自身はおそらく光属性に加え、闇属性も持っている。だからダークブレードの元々の攻撃力は２８００だ。それに奴の手札にはオネストと３体目のゾンビ・マスター…。

「わたしは『Ｕｓｐ－死者蘇生』を発動する。自分のスピードカウンターが０以上ある時、墓地からモンスター１体を蘇生させる！『ＸＸ－セイバーフラムナイト』復活。さらに『ＸＸ－セイバーガルセム』を通常召喚し、自分フィールド上に２体の『Ｘ－セイバー』が存在することで手札から『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を特殊召喚する。わたしのフィールド上の３体のモンスターと、ライフ半分を生贄に捧げる！神の鼓動、永き時を経て封印を解かん。究極の力よ、光臨せよ！『究極神オシリス』！」

究極神オシリス　ＡＴＫ６０００

「究極神か。だがわたしの手札にはオネストがある」

「（そんなことは承知の上だ）わたしは『究極神オシリス』で『聖騎士ダークブレード』を攻撃、アルティメット・サンダーフォース

！この瞬間究極神の効果発動、究極神がバトルする時、相手はカード効果を発動できず、わたしへの戦闘ダメージは０になる！」

レベル４の下級天使ごときが、究極神を上回れると思うなよ…。その程度の効果は神の前では無意味だ。攻撃制約そのものはわたしが受ける効果のため、ダークブレードしか攻撃できなかったが…まあいい。

「何ぃ！？ウグアアアアアア！！」

Ｅｍｅｍｙ　ＬＰ４０００→１６００

「……カードを伏せターンエンド」

機械人形（？）に痛覚があるのか。誰が造った物かは知らないがよくできている。

Ｓｌａｙ
ＬＰ１５０
手札×２
フィールド
究極神オシリス　ＡＴＫ６０００
伏せカード×１

「わたしのターン…」

Ｅｎｅｍｙ　スピードカウンター　２→３
Ｓｌａｙ　スピードカウンター　２→３

「わたしは2体の『ゾンビ・マスター』を守備表示に変更し、ター

ンエンド」

Ｅｎｅｍｙ
ＬＰ１６００
手札×５
フィールド
ゾンビ・マスター　ＤＥＦ０
ゾンビ・マスター　ＤＥＦ０

「わたしのターン！」

この場所の空気はスクルドの身体に悪い。早めにデュエルを切り上げ、高速から出なければ…。女神とはいえ、害のある空気には無影響ではない。身体が病弱であれば尚更だ。

Ｓｌａｙ　スピードカウンター　３→４
Ｅｎｅｍｙ　スピードカウンター　３→４

「終焉の時だ。わたしは『ＸＸ－セイバーレイジグラ』を召喚し、その効果で墓地の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を手札に加える。そしてトラップカード『ガトムズの緊急指令』を発動。墓地より『ＸＸ－セイバーフラムナイト』と『ＸＸ－セイバーガルセム』を特殊召喚し、手札の『ＸＸ－セイバーフォルトロール』を再び特殊召喚。レイジグラとガルセム、フラムナイトと、ライフ半分を生贄に捧げる！あらぶる巨神、究極の力を以って我が敵を粉砕する！光臨せよ、『究極神オベリスク』！」

究極神オベリスク　ＡＴＫ８０００

「…２体目の究極神…！！」

「ゴッドモーメントを使用していない分、貴様を粉々にするにはパワーが足りないがいいだろう。『ＸＸ－セイバーフォルトロール』の効果で墓地からレイジグラを蘇生、ガルセムを手札に加える」

この効果をコスト目的ではなく使用する時が来るとは思わなかった。大抵ラーの効果か攻撃で決着がつくからな。

究極神オシリス　ＡＴＫ６０００

「『究極神オベリスク』の効果！レイジグラとフォルトロールの２体を生贄に、このターンオベリスクは貴様のモンスターすべてに攻撃できる！」

奴に次のターンを回せば、スピード・ワールド２の第１の効果により、手札のスピードスペル１枚につき８００ポイントのダメージを受け、わたしが負ける。奴の正体がわからない以上、スクルドのためにも敗北するわけにはいかない。

「何だと！」

「ゴッド・ジェノサイド・エナジー」

はるか遠くから飛んできた青いエネルギーが機械人形のモンスターを全滅させた。

「『究極神オシリス』でダイレクトアタック、アルティメット・サンダーフォース！」

「ウガアアアアアア！？？」

Ｅｎｅｍｙ　ＬＰ１６００→－４４００

決着直後、目的のインターチェンジから脱出する。機械人形のＤホイールから煙が上がり、光に包まれて消えるのを確認した。奴が何者なのかは結局わからなかった。わかったのはアレは機械人形ということだけだ。何の目的で飛ばされてきたのかも理解不能。倒してしまったが、敵かどうかもよくわからなかった。
どちらにしても旅行中ぐらい襲撃はやめてほしい。普通に旅行している時ならともかく、スクルドと２人きりで旅行するのは滅多にないからな。…大体５００年ぶりか？

「スクルド、大丈夫か？」

「うん…何とか」

ちょっと疲れ気味に笑う。これは気遣ってやるべきだった。

「…着いたぞ。…すまなかった」

スクルドの手を握って立ち上がらせ、腰を支える。少し経つと、スクルドは支え無しで歩くようになった。

「ううん、謝らなくていいよ。私がスレイの運転に慣れていなかったから…」

「…入ろう」

トールを見ていると、わたしだけ優しい嫁持ちでいいのか気になってくる。オーディンはオーディンで意外とフリッグが厳しい人だっ

た気がしなくもない。…いつかトールにもフラグが立つ時が来るだろうが…。ロキは進展さえあればどうにかなるだろう。ウルズとヴェルザンディーは知らん。

そういえば前にオーディンが『どれだけ仲が良くても、仲が良すぎればいつか喧嘩して別れる時が来る』とか嫌味を言ってきた。喧嘩などしないし嫁の言いなりになっているお前よりマシだ。ついでに言うとわたしはフリッグのように何かと厳しい者が苦手だ。

そんなのはどうでもいい。当初の目的であった店に入る。時間はジャスト3時。デュエルをした割には時間通りに到着した。…わたしは基本的に時間など気にしないが、営業時間を考えれば時間通りに到着するに越したことはない。

「ヘックション！」

「キヒャヒャ。オーディン、風邪？」

「…わからん」

「誰か我の噂をしたか？」

「誰もしてねぇよ。お前の噂なんかしたって面白いわけないだろ」

「なにおう！？」

「お待たせしました、抹茶セットです」

店員が方言特有の訛りで注文品を運んでくる。店員が店の奥に戻って行ったところで、スクルドが美味しそうに饅頭を食べる。ちなみにわたしは抹茶と餡子未使用の和菓子だ。

「君はそんなに甘い物が好きなのか？」

「うぅ…食べ過ぎかな？」

「いや、そういう意味ではない。君ほど甘いものを喜んで食べる女神は見たことが無いだけだ」

わたしが作ったケーキもウルズやヴェルザンディーより喜んで食べてくれていた。今のわたしにはあの純粋な笑顔は眩しすぎたか。ちなみに甘いものを喜んで食べる男神は…やはり見たことないな。

～～～2時間後、平等院鳳凰堂～～～

あれから店を出たスレイ達は、平等院鳳凰堂に来ていた。そして、スレイ達は今鳳凰堂から帰るところだ。

「楽しかったね」

「……ああ」

ここから聖護院まで飛ばせば２０分程度で到着する。遅くなっても５時半には到着するだろう。今日は邪魔が入ったが、なかなか楽し

めた。

「日も沈んできた。夜は冷えるから、そろそろ帰るとしよう」

スクルドにとっては寒いはずだ。雪山などに長く居たことがあるわたしにはこのくらいはまだ序の口だが。

スクルドと共にトゥルース・ウィルに乗って帰る。道路は不思議と空いており、時間はかからなかった。

ちなみに今日の夜の食事はすき焼きだった。聞いたことはあるが、食べたのは初めてだったりした。

長期休暇１２　スレイの療養旅行２　後編（後書き）

次回「長期休暇１３」

ウルズ「うん、トールにはきっとフラグは立たないわね」

ヴェルザンディ「オーディン様の嫌味…実現しそうだから怖いですわね。最強カード紹介行ってみましょう」

『仲が良い程喧嘩をして別れることがある』
通常罠
相手ターンで数えて2ターン以上、相手フィールド上に表側表示で存在しているモンスターが2体以上存在する場合に発動できる。そのモンスターをすべて破壊し、その攻撃力の合計分のダメージを与える。

『平等院鳳凰堂』
フィールド魔法
１０円玉の裏（人によっては表）に書かれているアレである。『ネフティスの鳳凰神』との関係は不明。このカードが自分フィールド上に存在する限り、自分フィールド上の『鳳凰』と名のついたモンスターは戦闘では破壊されず、相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。このカードは『鳳凰』と名のつくモンスターの効果によってはフィールドを離れない。

『聖騎士ダークブレード』
レベル６　光属性　戦士族　ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２８００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体

このカードの属性は『闇』としても扱う。このカードのシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚選択してお互いに確認して手札に加える。このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する闇または光属性モンスター1体につき２００ポイントアップする。また、相手はこのカード以外のモンスターを攻撃することができない。

ウルズ「2枚目まではともかく、3枚目はかなり強力ね」

ヴェルザンディ「せっかく作ったのに…」

第１３４話　長期休暇１３　スレイの療養旅行３（前書き）

今回はサブタイはあまり関係なく、オーディン達視点での話です。
なお、今回の変則デュエルは墓地引継ぎ有りのＷＲＧＰルールです。
注意：今回、ローマ数字を使った場所があります。場合によっては文字化けしてしまうかもしれません。

最近の出来事
久しぶりに別の高校に行った友人が来ました。なんであんなに強くなってるんだよ…Ｘ一セイバーが負けるなんて…

第１３４話　長期休暇１３　スレイの療養旅行３

～～～屋敷～～～

……スレイが旅行に言ってから3日かな？あと５７日ぐらい戻ってこないのか…。

「ロキ、ご飯作ってみたんだけど、食べてみてくれない？」

「へえ、セレナがご飯をね…」

見た目は普通に美味しそうだね。さ、味はどうなのかな？

「いただきまーす……！！」

これは酷い…見た目は良いはずなのに…何でご飯から栄養ドリンクの味が？てっきりこの黄色いご飯はよくドリアとかに使われてるアレかと思ってたのに…。

「どう…かな？」

「お…美味しいよ…」

不味いなんて言えない…クソ、涙が出てきた。嫁じゃないけど、『恋人の飯が不味い』なんて言う日が来るとは思わなかった。

「よかった～…」

セレナはそれだけ言うと奥の方に行ってしまった。

「……コレ、どうしよう？」

「む、美味そうだな。我にもくれないか？」

「美味しそうだろ？食えないんだぜ、これ」

さすがにご飯の色で『きれいな料理だろ』とは言えないしね。

「……遠慮しておこう」

～～～京都～～～

「スレイ…今日は大雪だね」

「…今日の外出は君のために控えよう。旅館内でゆっくり過ごすとしようか」

今日はバイクや車が走れないほどの大雪で、気温もマイナスだ。外出している客は殆どおらず、皆ロビーや部屋で静かに過ごしている。ちなみに学生が多数いることから、修学旅行であることが見て取れる。時期的には合っているか。

「行こう、スクルド」

「うん……うぅ、寒いよ～…」

「裸足でいるからだろう…いや、君にとってはそれが当然か」

ノルンの3姉妹…いや、大抵の女神が常に裸足でいるのは生まれた時からだという。人間は靴下を履かないと靴擦れをすると聞いたが、女神はそんなものはしないらしい。

「スレイはそんな温かそうな格好してていいなぁ…」

「わたしは服など着ていないぞ？そう考えれば君より寒いと思うが…」

傍から見れば確かに服を着ているように見えるが、これはわたしの身体…創られた器の一部分だ。つまりわたしには脱ぐようなものは何もない。服に見える部分は触れた感じこそ普通の服や肌の感触だが、オリハルコン並の高い耐久力を誇る。素手で剣などの刃物を防げるのは、この耐久力があるからだ。

「部屋なら暖房が効いている。早いところ戻り、温まるといい。わたしは飲み物を買ってから行く」

「うん、わかった」

～～～某所～～～

このビルの屋上に、3人の女性がそれぞれ剣を携えて立っていた。悪魔でもなければ人間でもなく、天使でもなければ神でもない。器に宿った強大な力の魂というのが一番しっくりくる。

「まさか機械人形が倒されるとは思いませんでしたね」

「……さすがは最強の神か」

スレイは諦めよう…。

「……北欧の三神…私達で渡り合えるのはせいぜいこの辺りだと思います」

「行くぞ」

最初に葬ったのは最高神3匹。次は…最高神とまとめて呼べる存在ではないな。北欧の三神…相手にとって不足は無い。

3人とも奇抜なデザインのDホイールに乗り、ビルの屋上から飛び降りた。

～～～屋敷～～～

「やれやれ、ようやく処理できた」

ｖｓ激マズ飯。体力をガリガリ削られた。ウルズとヴェルザンディーはこういう時に限って出かけてる。ずるい。味覚音痴のバルドルなら喜んで食べるだろうけど。…セレナには台所は使わせちゃダメかな？

「ロキ、のんきなことを言っていないで行くぞ。……敵襲だ」

「はぁ…気づかないフリして過ごそうとしてたのに。まあ、スレイ達が襲われるよりかはマシかな？」

正直勝てるかどうか微妙なんだよね。３人なのは判るんだけどそれ以外に１人に１つ…合計３つの巨大な力を感じる。

「しょうがないなぁ…」

でもまあ、オーディンやトールと３人で戦うのは久しぶりかな。

さあ、行こっか。

～～～ドミノ町・上空～～～

オーディンがトールとロキを連れ、目の前にいる３人の女性を睨みつける。鋭い眼光から重いプレッシャーが放たれている。

「……お前達は一体わたし達に何の用だ？」

「我らが名は『三元聖』。まだ神々が誕生する以前、スレイが封印されていた３本の柱の守護神…我らは柱を永久に守護する者。しかし、お前達神々がその封印を解き、スレイを連れだしたことで我らは使命を失い、その住処を離れざるを得なくなった」

「我らが目的は神々の殲滅。我らより使命を奪い去った神への復讐」

「本来、我らは役目を終えるとともに消滅するはずだった。だが、その役目の終わりを迎える前にスレイが連れ出されてしまい、我ら

はこの世を彷徨うしかなくなった。我らが命はあと僅か、だがしかし、神を1体でも多く道連れにしてから消える」

それぞれ赤、黄、青の目と髪の女性3人は、剣の先を北欧の三神に向け、剣が光に包まれて固有ディスクに姿を変えた。ディスクにはそれぞれ、『?』『?』『?』と刻まれている。

「先に行っておくが、スレイに救援を求めても無駄だ。奴は今頃、我らが送った機械人形の相手をしているだろうからな…」

「……この戦いにスレイの救援は必要ない。お前たちの復讐の対象はスレイを連れだした神であって、スレイ本人ではない。わたし達がお前達を葬り去ってくれよう。ルールは勝ち抜き戦。異存はないな?」

女が相手でも手加減は厳禁。こいつらの外見に惑わされてはならない。

「構わん」

「キッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ、僕たち相手にどのくらい立っていられるか楽しみだね」

……まあ、僕自身1人じゃ絶対勝てない相手だと思ってるんだけど。オーディンとトールもいるからきっと大丈夫だと思う。クリムゾン・スーパーノヴァもあるしね。

「…我の力で粉砕してくれる!!」

相手にとって不足は無い。三元聖…どのような力を持っているのか

楽しみだ。久しぶりに戦神の血が騒ぐ。

北欧の三神もそれぞれの固有ディスクを創り出して構えた。

「「デュエル」」

Ｆａｓｔ　Ｌｏｋｉ　Ｐｉｌｌａｒ？

Ｓｅｃｏｎｄ　Ｔｈｏｒ　ｖｓ　Ｐｉｌｌａｒ？

Ｔｈｉｒｄ　Ｏｄｉｎ　Ｐｉｌｌａｒ？

～～～聖護院・正面玄関外～～～

「……隠れていないで姿を現せ。わたしは乱暴な真似はしたくない」

スクルドに『飲み物を買ってから行く』と言ったのは嘘で、この敵の気配を感じたから、その真意を確かめるためだ。スクルドを連れてこなかったのは、この吹雪の中で身体の弱い彼女をずっと外に居させ続けるのは酷だと思ったから。

わたしの前に現れたのは、この前と同じ機械人形。

「貴様は一体何の目的でわたしの前に現れた？スクルドが目的なら、わたしは貴様を排除する。それとも、オーディン達への加勢の足止めか？」

後者なら、そもそもわたしは加勢に行くつもりがない。彼らなら３人で大抵の敵は倒せるし、問題の解決もできる。

「わたしの任務はスレイの足止め…三元聖が北欧の三神を倒すまでの間の…」

「三元聖…忌々しき封印を守護し続けた守護神達か」

確かに奴らなら、わたしの力を甘くは見ないだろう。そのために足止めをよこすのも納得できる。

「去れ。わたしは北欧の三神への援護はしない」

彼らの力を信じているからこそ、援護しない。確かに三元聖は強大な力を誇る。だが、無敗と言われた北欧の三神が敗北するとも思わない。

「……リカイフノウ」

機械人形は、なぜ援護に行かないのか考え、プログラム内で検索を行ったようだが解らなかったらしい。そのためショートしてしまい、その場で爆発して燃え尽きてしまった。

「……さて、言ったことを嘘にしないためにも、飲み物を買ってから戻ろうか」

何か体が温まるものなら、スクルドも喜んでくれるだろう。

～～～ドミノ町・上空～～～

「先攻は僕がもらう、ドロー。僕は手札を1枚捨てて『ＴＨＥトリッキー』を特殊召喚。さらに『アサルト・リゾネーター』を特殊召喚！こいつは、自分フィールド上にレベル5以上のモンスターがい

る時に手札から特殊召喚できる。そしてこの効果で特殊召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする」

トリッキーの手札コストは後々、地味に響いてくる。ここで少しでもコスト分を取り返しておかないと。まあ、捨てたのは『グローアップ・バルブ』だから損失は無いけどね。

「レベル5の『THEトリッキー』にレベル3の『アサルト・リゾネーター』をチューニング！シンクロ召喚、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

まあ、順調ってところかな。先攻だから邪魔は基本的にされないし。ちなみにアサルト・リゾネーターの姿は突撃銃を持ったダーク・リゾネーターってところかな。

「手札より『三元騎士イクシル』のモンスター効果発動。相手が融合モンスター以外のモンスターを特殊召喚した時、手札に存在するこのカードを特殊召喚できる」

三元騎士イクシル　ＤＥＦ３０００

「守備力３０００か。その程度じゃ、僕の攻撃を耐えるには足りないよ！デッキトップのカードを1枚墓地に送り、墓地から『グローアップ・バルブ』を特殊召喚！さらに、手札から『エクステント・リゾネーター』のモンスター効果発動。自分の墓地のモンスターが特殊召喚された時、手札のこのカードを特殊召喚できる。この効果で特殊召喚した『エクステント・リゾネーター』がレベル9以上のシンクロ素材になった時、デッキから1枚ドローする」

1ターン目は攻撃できないからどっちにしても耐えられるけど。ち

なみにグローアップ・バルブの効果で墓地に送られたのはチューナーのレッド・ノヴァ。エクステント・リゾネーターは説明難しいからパス。

「レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』にレベル１の『グローアップ・バルブ』とレベル３の『エクステント・リゾネーター』をダブルチューニング！シンクロ召喚、爆炎より出でよ！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！こいつの攻撃力は、僕の墓地のチューナー１体につき５００ポイントアップする」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ３５００→５５００

「カードを１枚伏せて、ターンエンド」

Ｌｏｋｉ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ５５００
伏せカード×１

「私のターン。私は手札から『三元銃士ヴォルカノン』を特殊召喚する。このモンスターはレベル８の最上級モンスターだが、自分フィールド上にレベル８以上の『三元』の名を持つモンスターが存在すれば特殊召喚できる」

半透明な銃士が出現し、手に持つ巨大な対物ライフルを構える。三元モンスターは基本的に半透明のもののようだ。

三元銃士ヴォルカノン　ＡＴＫ３０００

「バトル、『三元銃士ヴォルカノン』よ、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を粉砕せよ！」

「攻撃力はこっちが上だ！」

「フン、ヴォルカノンが相手モンスターを攻撃する場合、ダメージステップ終了時まで相手のモンスター効果を無効にし、戦闘ダメージは相手が受ける。そしてヴォルカノンは破壊されない」

対物ライフルがスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを貫通してロキに当たった。だがロキは、その弾丸を何とかレーヴァテインで防いでいた。

Ｌｏｋｉ　ＬＰ８０００→７５００

「激マズ飯で体力持って行かれてるんだから、こういう攻撃はやめてほしいね」

思い出しただけで気分が悪くなるよ。まったく。

「知らんな。カードを１枚伏せターンエンド」

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
三元騎士イクシル　ＤＥＦ３０００
三元銃士ヴォルカノン　ＡＴＫ３０００

「僕のタァーン！バトルだ！」

「この瞬間、『三元騎士イクシル』のモンスター効果発動。相手がバトルフェイズに入った時に、任意で発動するかどうかを決められ、このターン相手はイクシル以外のモンスターを攻撃できない。そしてイクシルは1ターンに1度、戦闘では破壊されず、1度目に攻撃された時に相手モンスターの攻撃力がイクシルの守備力を超えていた場合、その数値分相手にダメージを与える」

「それなら2回攻撃するだけだ。トラップ発動『ツイン・バーニング』！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』はこのターン2回攻撃でき、貫通能力を得る！バーニング・ツインソウル！！」

それにしても、貫通分を相手に跳ね返すなんて珍しい効果を持ってるね。初見殺しもいいところだよ。

「ぐうううううううう！」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ８０００→５５００
Ｌｏｋｉ　ＬＰ７５００→５０００

「そして、この効果で2回目の攻撃をした『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』が相手モンスターを破壊した場合、手札を1枚捨ててデッキから2枚ドローする……キヒャヒャヒャヒャ！どうやら、未来の女神は僕に微笑むらしいね。『紅蓮魔龍の導き』を発動して、デッキから『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』を特殊召喚！そして『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を召喚」

…って、未来の女神って言ったらスクルドじゃん。なんで僕にスクルドが微笑むんだよ。スクルドはスレイとウルズとヴェルザンディ

ーにしか微笑まないだろ。
…何で1人で漫才やってんだろ…激マズ飯で僕の頭がおかしくなったのかな？

「どうした？」

（ＢＧＭ：Ｚ－ＯＮＥのバトル）

「ハッ、なんでもねえよ！レベル１２の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』にレベル０の『フォース・ノヴァ・フォーチュン』と『スカーレッド・ノヴァ・フェアリー』をダブルチューニング！究極神より誕生した７つの力…その１つが今ここに…限りなく長い時を経て封印を解かれ降臨する！シンクロ召喚！究極のシンクロモンスター！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』！！」

荒々しく深紅の雷が鳴り、天が深紅色に染まる。天地を揺るがす咆哮と共に、４０ｋｍの巨体を誇る、ロキの最強の切り札が降臨した。

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は、僕の墓地のチューナー１体につき１０００ポイントアップ！」

ツイン・バーニングの効果でドローする前に捨てた手札もチューナーだ。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→１１０００

「ほう、攻撃力１１０００か」

「カードを２枚伏せてターンエンド」

Ｌｏｋｉ
ＬＰ５０００
手札×１
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１１０００
伏せカード×１

「いいだろう、最高神ロキよ。お前が本気を出すというのなら、我ら三元聖の究極の力を見せてやろう。私の……ターーーーン！」

三元聖の１柱の周りに、青き稲妻が降り注ぐ。

「私は手札より『三元戦士クルシオ』を特殊召喚！このカードはレベル８の最上級モンスターだが、自分フィールド上に『三元』と名のつくモンスターが２体以上存在する場合、生贄なしで召喚することができる」

三元戦士クルシオ　ＡＴＫ３５００

「魔法カード発動！『極元聖融合』！ライフを半分支払い、自分フィールド上に存在するレベル８以上の３種類の属性のモンスターを融合し、『極元聖』と名のつく融合モンスター１体を特殊召喚するッ！」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ５５００→２７５０
三元戦士クルシオ　属性：闇
三元銃士ヴォルカノン　属性：炎
三元騎士イクシル　属性：光

三元聖のフィールドにいた3体のモンスターが、空に現れた強い輝きを放つ渦に飲み込まれた。その直後、宇宙から無数の流星が降り注ぎ1か所に集まって爆発し、その中から銀河のような輝きの鎧を身に着け美しい装飾が施された剣を装備した、クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンと同じくらいの身長の戦士が現れた。

「降誕せよッ！『極元聖ー アルクスブレードー』！！」

極元聖ー アルクスブレードー　ＡＴＫ４０００

（ＢＧＭ終了）

「きょ、『極元聖ー アルクスブレードー』…でも攻撃力は４０００、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の方がはるかに上だ！」

（ＢＧＭ：イリアステルバトルモード）

「案ずるな。『極元聖ー アルクスブレードー』モンスター効果発動。融合素材にしたモンスターの属性により、その能力は変わる。私が融合素材にしたのは光、闇、炎の３つ。光属性が融合素材になった場合、『極元聖ー アルクスブレードー』は1ターンに2回の攻撃が可能になる。炎属性が融合素材になった場合、『極元聖ー アルクスブレードー』が相手に与える戦闘ダメージを3倍にする。そして…闇属性が融合素材になった場合、自分のターンのメインフェイズに発動でき、『極元聖ー アルクスブレードー』の攻撃力を3倍にするッ！」

「何！？」

極元聖ー アルクスブレードー　ＡＴＫ４０００→１２０００

「行け！『極元聖ーアルクスブレードー』よ、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を葬り去れ！！天地創造斬！」

アルクスブレードはその巨大な剣から星々のエネルギーを撃ち出して攻撃した。

「くっ…『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果！墓地からチューナーを除外し、このカードの破壊を免れる！ぐあああああああ！」

Ｌｏｋｉ　ＬＰ５０００→２０００
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１１０００→１００００

「２回目の攻撃、天地創造斬！！」

「うわあああああああああああ！」

Ｌｏｋｉ　ＬＰ２０００→－４０００
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１００００→９０００

（ＢＧＭ終了）

「クッ…僕がこんな無様な…！トール、任せたよ…」

「…任せておけ。『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』、確かに預かった」

ルールで墓地は共有。よって攻撃力は９０００から再開だ。これで三元聖の１体と極元聖を倒せる。

「行くぞ、三元聖の１体よ！」

「来るがいい、北欧神話最強の雷神よ」

「「デュエル！」」

――――――――――――――――――――――――次回に続く。

第１３４話　長期休暇１３　スレイの療養旅行３（後書き）

次回「中編（後編の可能性有り）」

ウルズ「なんかとんでもないものが来たわね」

スクルド「久しぶりに私がやるよ」

『極元聖ーアルクスブレードー』
レベル１２　神属性　戦士族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
レベル８以上の属性の違うモンスター×３
このカードは『極元聖融合』による融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードは１ターンに１度戦闘では破壊されず、相手のカード効果では自分フィールド上を離れない。このカードの効果は無効化されない。このカードが融合召喚に成功した時、融合素材にしたモンスターの属性によって以下の効果を得る。
●光属性：このカードは１ターンに２回攻撃することができる。
●闇属性：１ターンに１度、自分のメインフェイズに発動することができる。エンドフェイズまでこのカードの攻撃力を３倍にする。
●地属性：１ターンに１度、相手モンスター１体を破壊することができる。
●炎属性：このカードが相手に与える戦闘ダメージを３倍にする。
●水属性：１ターンに１度、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を破壊することができる。この効果に対してチェーンすることはできない。
●風属性：このカードが戦闘を行う場合、ダメージステップ終了時まで相手のカードの効果を無効にする。

ヴェルザンディ「さすがに封印されていたスレイを守っていた守護神というだけありますわね」

ウルズ「組み合わせで効果が変わるのはなかなか楽しいわね」

スクルド「じゃあもう1枚」

『極元聖融合』
速攻魔法
自分のライフを半分払って発動する。融合モンスターによって決められた自分フィールド上に存在するモンスターを墓地に送り、『極元聖』と名のつく融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。このカードの発動と効果に対し、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動することはできず、このカードの効果は無効化されない。

ウルズ「極元聖融合モンスターのキーカードね」

ヴェルザンディ「コレ、カウンター不可能だったんですか…」

長期休暇１３　スレイの療養旅行３　中編（前書き）

時間がかかってしまいました。いろいろ考えているうちにカードの効果を忘れたりとか、処理の仕方とか…

最近の出来事
まどか☆マギカ最終回、リアルタイムで見ました。
…いろいろ言うのもあれなので、一言で感想を。
面白かったです！

長期休暇１３　スレイの療養旅行３　中編

～～～ドミノ町・上空～～～

フィールド状況

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ２７５０
手札×２
フィールド
極元聖一アルクスブレード一　ＡＴＫ４０００
（光・闇・炎属性融合素材）

Ｔｈｏｒ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ９０００

「我のターン」

ロキが完膚なきまでに叩きのめされるとは…これは油断できない。
だが、とりあえず1柱には消えてもらう。

「我は『Ｘ－セイバーパロムロ』を守備表示で召喚する。カードを２枚伏せバトルだ！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『極元聖一アルクスブレード一』を攻撃！エクストリーム・クリムゾン・ソウル！」

「ぐあああああっ！」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ２７５０→－３７５０

三元聖の1体のライフが超過ダメージで尽きた。しかし、極元聖－アルクスブレード－は破壊されていなかった。

「…戦闘破壊耐性か。我のターンは強制的に終了する。次は誰だ？」

Ｔｈｏｒ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ９０００
Ｘ－セイバーパロムロ　ＤＥＦ０
伏せカード×２

「私だ」

トールの前に、黄色い髪の女性が立った。

「行くぞ、私のターン。私は『極元聖－アルクスブレード－』のモンスター効果により、エンドフェイズまでアルクスブレードの攻撃力を3倍にする」

極元聖－アルクスブレード－　ＡＴＫ４０００→１２０００

「そして『三元魔獣ディメス』を召喚。ディメスはレベル９のモンスター。だが自分の墓地に『三元』と名のつくモンスターが2体以上存在する場合、生贄なしで召喚できる」

半透明の魔獣が出現した。

三元魔獣ディメス　ＡＴＫ２０００

「レベル９で攻撃力２０００？」

攻撃力が低すぎる…一体どんな効果があるというのだ？だが仮にも三元モンスター…強力な効果を持っているだろう。

「『三元魔獣ディメス』の効果を発動。１ターンに１度、手札の『三元』モンスター１体を特殊召喚する。ただし、このターン『三元』と名のつくモンスターは攻撃できない。私はレベル９の『三元魔鳥イスシア』を手札から特殊召喚。イスシアの特殊召喚に成功した時、相手フィールド上のレベル９以下のモンスター１体を破壊する。私は『Ｘ－セイバーパロムロ』を破壊！」

三元魔鳥イスシア　ＡＴＫ２９００

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ９０００→１０００

「獣の次は鳥か…」

攻撃力はやはり１柱よりは下だが…こいつはどうやら攻撃力より効果の方が強力らしいな。

「バトル。『極元聖－アルクスブレード－』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃！天地創造斬！」

「フン、ロキと同じように行くと思うなよ！トラップ発動『針虫の

巣窟』！デッキの上から5枚のカードを墓地へ送る」

墓地へ送られたのは『Ｘ－セイバーエアベルン』『ＸＸ－セイバーフラムナイト』『ガトムズの緊急指令』『ＸＸ－セイバーボガートナイト』『Ｘ－セイバーパロムロ』の5体。そしてチューナーは3体だ。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１００００→１３０００

「だが『極元聖－アルクスブレード－』は1ターンに1度、戦闘では破壊されない！」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ８０００→７０００

「私はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ７０００
手札×３
フィールド
極元聖－アルクスブレード－　ＡＴＫ４０００
三元魔獣ディメス　ＡＴＫ２０００
三元魔鳥イスシア　ＡＴＫ２９００
伏せカード×３

「我のターン！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの攻撃力は１３０００、アルクスブレードは４０００。このまま攻撃すればその差９０００の

ダメージを受け、第2柱はライフが尽きる。だが…

「（あの伏せカード…）我はモンスターを1体伏せる。バトル！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『極元聖ーアルクスブレードー』を攻撃する！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの吐き出した黄金の炎がアルクスブレードに向かい、特に抵抗もなく直撃した。

「……」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ７０００→７０００

「私はお前がバトルフェイズに入った瞬間、このカードを発動させていた。トラップカード『元聖の輝き』。このターン、相手が『極元聖』または『三元』と名のつくモンスターを攻撃した場合、私への戦闘ダメージを０にして、攻撃したモンスターをバトルフェイズ終了時に破壊する。そしてアルクスブレードは1ターンに1度、戦闘では破壊されない」

天からの輝きがクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンを襲う。

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果発動。墓地からチューナーモンスター『クリエイト・リゾネーター』を除外し、フィールドに留まる」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１３０００→１２０００

だが、これで攻撃力は１２０００ポイント。次のターン、アルクス

ブレードで相打ちに持ち込み、攻撃力ダウンに持ち込んでくるはず…。

「カードを1枚伏せてターンエンド」

Ｔｈｏｒ
ＬＰ８０００
手札×３
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１２０００
伏せモンスター×１
伏せカード×１

「私のターン。私は手札より『三元魔狼グルシア』を召喚。このモンスターもレベル9だが、自分フィールド上に2体のレベル8以上のモンスターが存在する場合、生贄なしで手札から召喚できる」

三元魔狼グルシア　ＡＴＫ３０００

「……」

半透明の狼か。攻撃力は３０００…申し分ない。だが奴も三元モンスターである以上、何かしらの効果がある。

「『極元聖ー アルクスブレードー』の効果により、エンドフェイズまで攻撃力を3倍にする」

極元聖ー アルクスブレードー　ＡＴＫ４０００→１２０００

「バトル！『極元聖ー アルクスブレードー』で『クリムゾン・スー

パーノヴァ・ドラゴン』を攻撃！」

アルクスブレードの巨大な剣が巨大龍を捉える。しかし、クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンは深紅色の光に包まれ、剣を弾き返した。

「墓地からチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を除外した」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１２０００→１１０００

「フッ、私はこの時を待っていたんだ。相手のカードの効果が発動したことで『三元魔狼グルシア』の効果が発動する。グルシアは相手のカード効果が発動した時のみ、その効果が発動し、神の力を解放する。その効果によって私の『三元』の名を持つモンスターはこのターン、相手プレイヤーにダイレクトアタックできる！」

「何だと！！」

「それだけではない。『三元魔狼グルシア』が相手プレイヤーにダメージを与えた場合、デッキから『極元聖融合』を手札に加える。さあ行くぞ、雷神よ。『三元魔鳥イスシア』『三元魔獣ディメス』『三元魔狼グルシア』！ダイレクトアタック！」

半透明な3体のモンスターがトールを襲った。トールはミョルニルで3体の攻撃を防ぐ。

Ｔｈｏｒ　ＬＰ８０００→１００

「『三元魔狼グルシア』の効果でデッキから『極元聖融合』を手札に加える。雷神トールよ、その目で我が力を見るがいい。魔法発動！『極元聖融合』！！」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ７０００→３５００

３体の獣が天の渦に吸い込まれ、強い輝きが放たれた。その後、宇宙から巨大な氷塊が降ってきて爆発した。

「このカードの効果により、属性の違うモンスター3体を融合する。光臨せよ！！『極元聖ー アステアブレードー』！！」

三元魔狼グルシア　属性：闇
三元魔鳥イスシア　属性：風
三元魔獣ディメス　属性：地

氷塊の中から銀の輝きを放つ鎧を身に着け、クリスタルでできた剣を構えた、やはりクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンと同じくらいの身長の剣士が現れた。

極元聖ー アステアブレードー　ＡＴＫ４０００

「アステアブレードの効果発動。このモンスターの効果は、融合素材モンスターの属性によって変わる。私が融合素材にしたのは、闇属性・地属性・風属性の３つ。ターンエンド」

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ３５００
手札×３
フィールド

極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ーアステアブレードー　ＡＴＫ４０００
伏せカード×２

「我のターン！」

極元聖ーアステアブレードー…一体どのような効果を持っている？アルクスブレードの効果を見てもかなり強力なものだ。ならば同等か、それ以上の戦闘能力を秘めている。

「バトル！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『極元聖ーアステアブレードー』を攻撃！」

黄金の炎がアステアブレードに向かった。だが、アステアブレードはその剣で黄金の炎をクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンに跳ね返した。

「何！？」

「アステアブレードの第１の効果。アステアブレードが風属性モンスターを融合素材とした場合、アステアブレードが与える戦闘ダメージは２倍になり、相手から受ける超過ダメージは相手も受ける。さらに、１ターンに２度の攻撃が可能になる」

「！！」

攻撃力差は７０００ポイント…第２柱もライフは尽きるが我も尽きる…！

「そうはいかん！トラップ発動、『セイバーズ・エスケープ』！墓

地の『ＸＸ－セイバーボガートナイト』を除外し、バトルを終了。さらに墓地の『Ｘ－セイバー』２体を特殊召喚！そして速攻魔法『手札断札』！互いに２枚の手札を墓地に送り、２枚ドロー。『セイバーズ・エスケープ』の効果処理。墓地から『ＸＸ－セイバーガルドストライク』『ＸＸ－セイバーフラムナイト』の２体を蘇生」

まだだ、まだ倒れるわけにはいかん。ロキがクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンを残したのだ。我も何かしら残しておかなければ…！

「レベル５の『ＸＸ－セイバーガルドストライク』にレベル３の『ＸＸ－セイバーフラムナイト』をチューニング。来い、漆黒の羽！『ブラックフェザー・ドラゴン』！」

「ほう、この期に及んで攻撃力２８００の雑魚を召喚したか」

フィールドに攻撃力４０００の極元聖が２体存在するこの場で、そのようなモンスターをシンクロ召喚するとは…雷神トール、何を考えている？

「手札にあるこのモンスターは、我のフィールド上に『ブラックフェザー・ドラゴン』が存在する場合、特殊召喚できる！現れろ、『レボリューション・ウィング』！さらに『エボリューション・フェザー』を通常召喚する。このモンスターの召喚に成功したことでカードを１枚ドロー。レベル８の『ブラックフェザー・ドラゴン』にレベル２の『レボリューション・ウィング』と『エボリューション・フェザー』をダブルチューニング！黒き羽根、闇の翼に進化する！大いなる翼よ、その聖なる闇を以って邪悪なる闇を払え！シンクロ召喚、７つの希望、その１つ！！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』！！」

ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＤＥＦ４０００

「これは…一体…」

何故北欧の神ばかり希望のカードを継承している？ギリシアの神やそのほかの神にはその神話ごとに１枚、強大なゴッドカードを継承している。だが北欧はそれがない。…我らが主スレイが異世界に飛ばした７つの希望が力を貸したのはそのためなのか？

「ターンエンド」

Ｔｈｏｒ
ＬＰ１００
手札×３
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１４０００
ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＤＥＦ４０００

「私のターン、私は『極元聖ーアルクスブレードー』の攻撃力を３倍にする」

極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００→１２０００

「そして『極元聖ーアステアブレードー』の効果発動。アステアブレードが闇属性モンスターを融合素材にしている時、自分ターンにアステアブレードはカードの効果を受けない。更に、自分・相手ターン問わずに１ターンに１度、スペルスピード３以下の相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にすることができる」

「カード効果耐性…」

元からカード効果ではフィールドを離れない上で、更なる効果耐性を得るか。さらに1ターンに1度、我のカードの効果は無効にされる。極元聖…我らの龍よりパワーは上か。

「雷神トールよ、アステアブレードの効果はこれだけではない。アステアブレードが地属性モンスターを融合素材としている場合、アステアブレードは1ターンに2度まで戦闘では破壊されず、更に戦闘を行ったアステアブレードより攻撃力が高いモンスターを破壊する」

「……」

風属性を融合素材としたことで、超過ダメージは我も受け、その上で戦闘破壊を防ぐ…恐ろしいまでのアンチ戦闘能力だ。

「我ら三元聖は主スレイの究極の柱。我らが消滅するとともに、主スレイの中にある最後の封印が解かれる」

封印が解かれた先に…あらゆる次元のルールが通用しない力を手に入れる。ただ力の封印を解くためならば我らが消えれば済む話だが、主スレイを連れ去った神々を恨まずにはいられない。だから我らは消える前に恨みを晴らすことに決めた。

「最後の封印だと？」

「そう。さあ行くぞ、バトルだ。『極元聖ー アステアブレードー』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を2回攻撃する。アブソリュートブレード！」

アステアブレードの剣が2本に別れ、それぞれがクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンを突き刺した。

「墓地からチューナー2体をゲームから除外。『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の破壊を免れる」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１４０００→１２０００

「『極元聖ーアルクスブレードー』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃！天地創造斬！」

「またしても…『Ｘーセイバーパロムロ』を除外。『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の破壊を免れる！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１２０００→１１０００

「カードを1枚伏せターンエンド。このエンドフェイズ、『極元聖ーアルクスブレードー』の攻撃力が元に戻る」

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ３５００
手札×３
フィールド
極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ーアステアブレードー　ＡＴＫ４０００
伏せカード×３

「我のターン！カードを3枚伏せ、バトルだ！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『極元聖ーアルクスブレードー』を攻撃！」

アステアブレードは戦闘ダメージを受ける場合、相手プレイヤーにもその数値分のダメージを与える。ライフが１００の状態だが、１ターンでも長く生き残った方が有利に進む！

「フッ」

アルクスブレードに向かっていたクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの攻撃が、アステアブレードに当たった。

「何だと！！」

Ｔｈｏｒ　ＬＰ１００→－６９００
Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ３５００→－３５００

「悪いが、バトルフェイズ開始時にこのカードを発動させてもらった。トラップカード『プリズム・シフト』。このターンの相手の攻撃対象は、私が決定する。そして、『極元聖』が存在する場合、このカードにチェーンすることはできない」

「クッ……！！」

だが当初の目的であったダークネス・ウィング・ドラゴンはフィールドに残した。スペルスピード５の極元聖の効果を無効にすることはできないが、残りの効果で十分戦える。

「オーディン、後は任せる」

「…フッ」

トールからカードを受け取り、固有ディスクにセットした。

「まだか？最高神オーディン」

第３柱は既に固有ディスクを構えていた。

「待たせたな」

「「デュエル！」」

Ｏｄｉｎ　ｖｓ　Ｐｉｌｌａｒ？

「雷神トールのターンで終了したため、私のターンから始めさせてもらう。ドロー、『極元聖ーアルクスブレードー』のモンスター効果発動。エンドフェイズまで攻撃力を３倍にする」

極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００→１２０００

「そして魔法カード『聖剣の神炎』発動。エンドフェイズまで自分フィールド上の『極元聖』と名のつくモンスターは攻撃力が倍になる」

「そうはいかん。『ダークネス・ウィング・ドラゴン』のモンスター効果発動。『ダークネス・ウィング・ドラゴン』に黒翼カウンターを１つ置き、相手が発動・適用した効果を無効にする。ちなみに、この効果に対して魔法・罠・モンスター効果は使用できない。アステアブレードの効果によるカウンターは不可能だ」

カウンター1つにつき攻守は１０００ダウンするが、ダークネス・ウィング・ドラゴンの本当の力の発動条件はこのカウンターが乗っていることが前提だ。

ダークネス・ウィング・ドラゴン　Ｂｗｃ　０↓１　ＤＥＦ４０００↓３０００

「クッ…私は『三元霊アステル』を攻撃表示で召喚。このモンスターのレベルは１０だが、自分フィールド上にレベル１０以上のモンスターが2体以上存在する時、手札から生贄なしで召喚できる」

半透明な霊体のモンスターが現れた。

三元霊アステル　ＡＴＫ３０００

「さあバトルだ。『極元聖一アルクスブレード一』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃！天地創造斬！」

「トラップ発動！『聖龍の咆哮』！レベル１２の神属性シンクロモンスターが攻撃対象になった時、それを無効にしてバトルフェイズを終了。自分フィールド上のシンクロモンスター1体につき2枚ドローする。このカードに対してチェーンはできない」

まあ、発動条件こそ恐ろしく厳しいものだが、必ず2枚以上のカードがドローできる。

「わたしのフィールドには2体のシンクロモンスター、よって４枚ドロー」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンが咆哮を上げ、アステアブ

レードとアルクスブレードは怯んで剣を下げた。

「おのれ…ターンエンド」

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ーアステアブレードー　ＡＴＫ４０００
三元霊アステル　ＡＴＫ３０００
伏せカード×２

「わたしのターン。わたしはフィールド魔法『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』を発動する」

「『極元聖ーアステアブレードー』効果発動。１ターンに１度、相手のスペルスピード３以下のカード効果を無効にする」

「だが、カード自体はフィールドに残る。わたしの狙いは、『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』の発動だ。『Ｓｉｎパラレルギア』を召喚。このカードをシンクロ素材にする場合、素材は手札の『Ｓｉｎ』モンスター１体でなければならない。手札のレベル８モンスター『Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン』にレベル２の『Ｓｉｎパラレルギア』をチューニング！シンクロ召喚！！『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』！」

Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「何！攻撃力４０００だと！？」

あれほどの軽コストで攻撃力４０００…極元聖よりも効果は劣るだろうが、それでも奴のデッキ…油断すれば我ら三元聖と言えども敗れるだろう。

「それだけではない、パラドクス・ドラゴンの効果発動。シンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するシンクロモンスター１体を召喚条件を無視して特殊召喚し、相手フィールド上のモンスターの攻撃力はそのシンクロモンスターの攻撃力分ダウンする。わたしは墓地から『ブラックフェザー・ドラゴン』を蘇生させる」

レッド・デーモンズ・ドラゴンはエンドフェイズに攻撃していない自分のモンスターをすべて破壊する効果がある。もし攻撃を無効にされた場合、わたしのモンスターは全滅する恐れがある。

極元聖－アルクスブレード－　ＡＴＫ４０００→１２００
極元聖－アステアブレード－　ＡＴＫ４０００→１２００
三元霊アステル　ＡＴＫ３０００→２００

「クッ…極元聖がこんな無様な…！」

おのれ…この屈辱絶対に許さんぞ…。

「デッキから『究極宝玉神レインボー・ドラゴン』を墓地に送り、手札の『Ｓｉｎレインボー・ドラゴン』を特殊召喚！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』を攻撃表示に変更し、バトルだ！」

「この瞬間トラップ発動、『極元聖の閃光』！このカードをカウンターすることはできないぞ。このターン、極元聖が戦闘を行う時に受ける互いのダメージを０にする」

「『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』『ブラックフェザー・ドラゴン』『ダークネス・ウィング・ドラゴン』で『極元聖アステアブレード』を攻撃！」

３つのブレスがアステアブレードに直撃し、とうとう耐えきれなくなったアステアブレードは破壊された。

「『Ｓｉｎレインボー・ドラゴン』『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『極元聖ーアルクスブレードー』を攻撃！」

オーディンはついに2体の極元聖を破壊し、トールとロキが勝てると思い始めた。

「メインフェイズに移行。『ダークネス・ウィング・ドラゴン』は1ターンに1度、相手モンスター1体を除外できる。『三元霊アステル』を除外。カードを2枚伏せ、ターンエンド」

Ｏｄｉｎ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１１０００
ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
（Ｂｗｃ　１）
Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
Ｓｉｎレインボー・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード×４

「……」

なぜだ?なぜ七聖龍は神々に力を貸す?我らは主スレイの守護神…その我らに対し、なぜ七聖龍が立ちはだかる?主スレイは我らを裏切ったのか?七聖龍が北欧の神を中心に集中しているのも謎だ。本来七聖龍は、身近にいる者を遠ざけて集中するはずなのだ。今となってはそんな疑問もどうでもいい。三元聖が七聖龍に劣るなどあってはならないのだ。

「私の…ターン!!レベル10以上のモンスターが2体以上フィールドから離れた次のターン、手札からこのモンスターは特殊召喚できる!現れよ『三元霊ディシア』『三元然ディオス』『三元空スカイア』!」

三元霊ディシア　ＡＴＫ３０００
三元然ディオス　ＡＴＫ３０００
三元空スカイア　ＡＴＫ３１００

「そして魔法カード…『極元聖融合』」

Ｐｉｌｌａｒ?　ＬＰ８０００→４０００

「お前達最高神を葬る、我が最強の神の姿を見るがいい!私のフィールドの3体のレベル10モンスターを融合素材とし、『極元聖皇ーオメガブレードー』を召喚!」

遥か天空に渦が現れ、3体のモンスターが渦に吸い込まれた。その後、上空に巨大なホワイトホールが出現し、中から白銀の鎧を身に着け、オリハルコンでできた剣を構えた、クリムゾン・スーパーノ

ヴァ・ドラゴンとダークネス・ウィング・ドラゴンよりも一回り巨大な剣士が現れた。

極元聖皇ー オメガブレードー　ＡＴＫ４５００

「くっ…」

歯を食いしばり、握り拳にさらに力を入れる。ここまで来て最後の極元聖…明らかに先程までの極元聖とは異質な存在…。

「オーディン！！」

「！！？」

オーディンは呼ばれた方を向く。すると、そこには旅行に行っているはずのスレイがいた。スクルドがいない辺り、旅館においてきたのだろう。

「三元聖を倒せ。わたしは連れ去られたのではなく、わたし自身の意思であの場所から去った。それをお前が三元聖を倒して証明しろ！わたしはもう最高神を降りた。最高神の敵は最高神が討て！」

加勢はしない。彼らの敵は彼らが倒さなければならない。そして三元聖はわたしの敵ではない。

「最高神を降りた…か。いいだろう…三元聖を倒して見せよう。それがわたしからの引退祝いだ」

「フン、私のフィールドには最強の極元聖がいる。最高神オーディン、お前に絶望をくれてやろう。『極元聖皇ー オメガブレードー』

効果発動。融合召喚に成功した時、自分の墓地に存在する『極元聖』と名のつくモンスター2体を、召喚条件を無視して特殊召喚する！復活せよ『極元聖ー アルクスブレードー』『極元聖ー アステアブレードー』！更にオメガブレードは、アルクスブレードとアステアブレードの攻撃力分、攻撃力をアップする！ハッハッハッハッハッハ！もはやここまでだな、最高神オーディン！！」

極元聖ー アステアブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ー アルクスブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖皇ー オメガブレードー　ＡＴＫ４５００→１２５００

――――――――――――――――――――次回に続く。

長期休暇１３　スレイの療養旅行３　中編（後書き）

次回「後編」

ウルズ「遅かったわね。いつものことだけど」

スクルド「まあ、いろいろあるんじゃない？最強カード紹介行ってみよー（棒」

『極元聖ーアステアブレードー』
レベル１２　神属性　戦士族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
レベル９以上の属性の違うモンスター×３
このカードは『極元聖融合』の効果でのみ特殊召喚することができる。このカードは相手のカード効果ではフィールドを離れず、１ターンに１度、戦闘では破壊されない。このカードの効果のスペルスピードは５として扱う。このカードは、融合素材にしたモンスターの属性によって以下の効果を得る。
●闇属性：このカードは自分のターン中、カードの効果を受けず、１ターンに１度、スペルスピード３以下の相手のカードの効果を無効にすることができる。この効果は相手ターンでも使用できる。
●光属性：このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。
●風属性：このカードが相手に与える戦闘ダメージは２倍になり、１ターンに２回攻撃することができる。また、このカードが攻撃された場合、超過ダメージは相手も受ける。
●地属性：このカードは１ターンに２度まで戦闘では破壊されない。また、このカードがこのカードよりも攻撃力の高いモンスターと戦闘を行った場合、ダメージ計算後にそのモンスターを破壊する。

●炎属性：1ターンに1度、デッキからカードを2枚ドローすることができる。また、相手がカードをドローした時、相手に1000ポイントのダメージを与える。
●水属性：このカードが自分フィールド上を離れた場合、相手フィールド上のカードをすべてゲームから除外する。

スクルド「今回はもう1枚ね」

『極元聖皇ーオメガブレードー』
レベル12　神属性　戦士族　ＡＴＫ４５００　ＤＥＦ４５００
レベル10以上の属性の違うモンスター×3
このカードは『極元聖融合』の効果でのみ特殊召喚することができる。このカードの特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する『極元聖』と名のつくモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。このカードの攻撃力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する『極元聖』と名のつくモンスターの攻撃力分アップする。このカードの効果のスペルスピードは5として扱う。このカードは融合素材にしたモンスターの属性によって以下の効果を得る。
●神属性：1ターンに1度、相手フィールド上に存在するカードをすべてゲームから除外する。
●闇属性：1ターンに1度、エンドフェイズまで相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を0にすることができる。
●光属性：このカードがフィールドを離れた場合、相手の手札・フィールド・墓地のカードをすべてゲームから除外する。
●風属性：1ターンに1度、相手のエクストラデッキのカードをすべてゲームから除外する。
●炎属性：自分フィールド上に存在する『極元聖』と名のつくモンスターは相手のカードの効果を受けず、このカードの効果は無効にされない。また、このカードが戦闘を行うダメージステップ時に、

相手はカードの効果を発動できない。
●地属性：このカードの攻撃力は2倍になる。
●水属性：このカードは相手フィールド上のモンスター全てに1回ずつ攻撃することができる。

ヴェルザンディ「召喚条件は途方もなく難しいですが、3体そろえることができれば勝利は目前ですわね」

スクルド「アステアブレードだけ攻撃力１００００以上にならないんだ…うまくいけば倒せるかも」

ウルズ「オメガブレードで神属性と炎属性と地属性を融合素材にされたら半端じゃないわね。あ、オメガブレードの効果で復活した極元聖は属性ごとの効果を失うから多少は戦いやすくなるかもね」

長期休暇１３　スレイの療養旅行３　後編（前書き）

お知らせです。

あと1～2話で、長期休暇が終了します。
長期休暇終了後の第3期にあたる展開は、別小説として投稿したいと思っています。
理由は…今の話数が多いのと、新しく始めることでの気分転換をするためです。
……まだ続きとして書くか、別小説での投稿をするかは最終決定はしていません。ですので、感想欄にアドバイス的なことを書き込んでいただけると嬉しいです。

長期休暇１３　スレイの療養旅行３　後編

～～～ドミノ町・上空～～～

フィールド状況

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
極元聖皇ーオメガブレードー　ＡＴＫ１２５００
極元聖ーアステアブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００

Ｏｄｉｎ
ＬＰ８０００
手札×４
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１１０００
ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
（Ｂｗｃ　１）
Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
Ｓｉｎレインボー・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
ブラックフェザー・ドラゴン　ＡＴＫ２８００
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード×４

「最高神オーディン、今ここに降臨した最強の極元聖の力を見せてやろう。『極元聖皇ー オメガブレード ー』のモンスター効果！オメガブレードが炎属性モンスターを融合素材とした場合、私のフィールド上に存在する『極元聖』と名のつくモンスターは相手のカード効果を受けず、オメガブレードが戦闘を行うダメージステップ時に、相手はカード効果を発動できない。そしてオメガブレードの効果は無効化されない」

「クッ…」

オメガブレードは完全な効果耐性を持ち合わせ、更に他の極元聖にも耐性を与えるのか…だが戦闘を行うダメージステップならば、攻撃宣言時でのカード効果は使用できるはずだ。しかし、効果を受け付けなくなったことで、Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンの効果が効かなくなってしまった。

「オメガブレードの第２の効果。オメガブレードが地属性モンスターを融合素材とした場合、このカードの攻撃力を２倍にする」

極元聖皇ー オメガブレード ー　ＡＴＫ１２５００→２５０００

「何だと！」

「そしてオメガブレードが光属性モンスターを融合素材としている時、オメガブレードがフィールドを離れた場合、相手の手札・フィールド・墓地のカードをすべてゲームから除外する」

「！」

安易にオメガブレードをフィールドから離すことができないか。だがどちらにしても攻撃力２５０００で完全な耐性持ちのモンスターなど、そう簡単に倒すことはできないがな。

「バトルだ！」

「この瞬間トラップ発動、『Ｓｉｎ　Ｒｅｆｌｅｃｔｏｒ』！このターン、相手から受ける戦闘ダメージを全て無効化し、自分フィールド上の『Ｓｉｎ』モンスターは１度だけ戦闘では破壊されない」

「構わん！『極元聖ーアルクスブレードー』で目障りな『ブラックフェザー・ドラゴン』を攻撃する！」

アルクスブレードの巨大な剣が、ブラックフェザー・ドラゴンを真っ二つに切り裂いた。だがオーディンが発動したＳｉｎ　Ｒｅｆｌｅｃｔｏｒの効果で、戦闘ダメージは０になる。

「『極元聖ーアステアブレードー』『極元聖皇ーオメガブレードー』で『Ｓｉｎレインボー・ドラゴン』を攻撃！」

「ちっ…」

Ｓｉｎレインボー・ドラゴンの効果に気付いていたか…自分フィールド上のＳｉｎを墓地に送ることで１体につき攻撃力を１０００アップし、さらに自分の墓地のＳｉｎをすべてゲームから除外することでフィールド上のカードをすべてデッキに戻す。

「オーディン、お前はここで終わるのか？……まあ、それはこの戦（デュエル）の結果でわかることか。わたしはもう行くぞ。スクルドが待っているからな」

「フン、わたしはこんなところで倒れたりしない」

クソ、スレイ本人は『わたしはスクルドとの関係は夫婦というよりも、恋人であり親友としての見方をしている』と言っていた。確かに周りから見てもそうだし、スクルドもそう言っていた。つまり何が言いたいのかというと、もう少しわたしを心配してくれたっていいじゃないかということだ。

「ではな」

スレイはそれだけ言うと、アーティスで空間を切り裂いて帰って行ってしまった。

「話は済んだか？デュエル続行だ。ターンエンド」

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ４０００
手札×２
フィールド
極元聖皇ーオメガブレードー　ＡＴＫ２５０００
極元聖ーアステアブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００

「わたしのターン！わたしは永続トラップ『Ｓｉｎ　Ｍｉｓｔ』を『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』に装備。装備モンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージを０にする。さらに自分フィールド上に『Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ』が存在する場合、『Ｓｉｎ　Ｍｉｓｔ』をフィールドから除去することはできない」

「では、こちらも手札から永続トラップ『神の神託』を発動。自分フィールド上の神属性モンスターによって発生する自分への戦闘ダメージを0にする。そしてこのカードは、三元聖が3体そろっている場合フィールドから離れることはなく、カード効果も無効化されない。ただし、このカードを維持するために私は、エンドフェイズに手札を1枚捨てなければならない」

第3柱は更に自分の防御を固める。だが、オーディンの目はまだ勝負をあきらめていない。

「『ダークネス・ウィング・ドラゴン』の効果発動。このカードの黒翼カウンターをすべて取り除き、してモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで0にする」

ダークネス・ウィング・ドラゴン　Ｂｗｃ　1↓0　ＡＴＫ３００0↓４０００

「何を愚かな。『極元聖』は相手のカードの効果を受けない」

「そんなことは承知の上。バトル！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』で『極元聖ーアルクスブレードー』を攻撃！」

わざわざ効きもしない効果を使用したのはダークネス・ウィング・ドラゴンの攻撃力を極元聖と同じ４０００に戻すためだ。

「させるとでも思ったか?手札よりトラップ発動『セイントシールド』。『極元聖』はこのターン、戦闘では破壊されない。そしてカードを2枚ドロー」

「クッ…」

ここでダークネス・ウィング・ドラゴンの効果を使用しては攻撃力が下がる…ましてや最初からセイントシールドは無効化されないカード…。

「ターンエンド」

Ｏｄｉｎ
ＬＰ８０００
手札×５
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１１０００
ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
＋Ｓｉｎ　Ｍｉｓｔ
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード×３

「私のターン！」

なぜ？なぜこの状況でオーディンは勝負をあきらめない？いくら七聖龍とは言え、極元聖よりも効果、パワー共に遥かに下。なぜそれで奴は絶望せずに戦う？プラスの感情のない私には理解できない…。

「オーディン！貴様のその闘志がプラスの感情によるものならば、それを我が負の感情で撃ち砕く！魔法カード『極元光』！このターン、３体の極元聖が全て攻撃した場合、相手に８０００ポイントのダメージを与える！」

「カウンタートラップ『Ｓｉｎ　Ｊｕｄｇｅｍｅｎｔ』！『Ｓｉｎ』が存在する場合、相手が発動したカードの効果を無効にし、更にこのターン、わたしへの全てのダメージを０にする！」

「この…神ごときがぁぁ！バトルだ！『極元聖皇ーオメガブレード』で『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃！アルティメット・ブレイク！」

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の効果発動！墓地から『Ｓｉｎパラレルギア』を除外！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１１０００→１００００

まだだ、わたしはトールとロキの命を預かっているのだ。このとてつもなく重いモノを安易に捨てるなど、絶対にするわけにはいかない。どのような絶望の状況だろうと、この２人の命が賭かっている限り勝負を捨てない。

「まだ終わらん！『極元聖ーアルクスブレード』『極元聖ーアステアブレード』！『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を攻撃！手札より速攻魔法『デスペラードブラスト』発動！このターン３体以上の神属性モンスターが戦闘を行った場合、バトルフェイズ終了時に１体につき２０００ポイントのダメージを与える！」

このターン戦闘を行った神属性モンスターはオーディンのも含めて６体。よって１２０００ポイントのダメージが発生し、我ら三元聖の勝利となる！

「カウンタートラップ『Ｓｉｎ　Ｓｔｏｒｍ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏ

ｎ』！『Ｓｉｎ』が存在する時、このターン発生する１０００以上の効果ダメージを回復に変換し、このターン自分のライフが回復した場合、デッキからトラップカードを３枚セット！」

Ｏｄｉｎ　ＬＰ８０００→２００００

「何だと！」

「わたしがセットするのは、『Ｓｉｎ　Ｉｎｆｅｒｎｏ』『Ｓｉｎ　Ｂｌａｓｔ』『Ｓｉｎ　Ｄｅｓｐａｉｒ』の３枚だ」

「エンドフェイズにカードを１枚捨て、『神の神託』を維持。今捨てたカード『神の天札』の効果により、私は手札が４枚になるようにドロー。ターンエンド」

どうして私の戦術がことごとく防がれるのだ？仮にも最高神を遥かに上回る三元聖の一柱であるこの私が…なぜ最高神のライフを削れない！？奴のトラップはまた増えた。奴は確実に私の戦術を潰しに来る。

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ４０００
手札×４
フィールド
極元聖皇ーオメガブレードー　ＡＴＫ２５０００
極元聖ーアステアブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００
神の神託

「わたしのターン！バトル、『ダークネス・ウィング・ドラゴン』

『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』で『極元聖ーアルクスブレードー』を攻撃！」

「手札よりトラップ発動、『プリズムバリア』！このターン、相手はモンスター１種類には１度しか攻撃できない！よって『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』の攻撃は他のモンスターにしなければならない」

つまり、２度同じモンスターに攻撃することはできなくなるカード。使いどころはやはり極元聖との併用くらいしかない。だが、私のデッキはオメガブレード召喚の前にもともと２体の極元聖が召喚されていることが前提の構築。そのため専用カードの投入は十分考えられる。

「攻撃しても無駄な時に攻撃はしない。ターンエンド」

Ｏｄｉｎ
ＬＰ２０００
手札×６
フィールド
クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１０００
ダークネス・ウィング・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００
＋Ｓｉｎ　Ｍｉｓｔ
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード×４

「私のターン！……！魔法カード『極元聖の断罪』！３体の極元聖がそろっている時のみ発動可能。このカードは無効化されず、このターン、極元聖は与えるダメージが半分になるがダイレクトアタ

ックできる！さらにダイレクトアタックに成功した場合、１体につき１０００ポイントのダメージを与える」

「何！」

「『極元聖ーアルクスブレードー』『極元聖ーアステアブレードー』『極元聖皇ーオメガブレードー』でダイレクトアタック！！」

「クッ…！！」

オーディンは３つの剣をギリギリでかわした。現実のダメージで、まともに食らえばその時点で命は無い。

Ｏｄｉｎ　ＬＰ２０００００→５００

「トラップオープン、『Ｓｉｎ　Ｂｌａｓｔ』！このターン、２００以上のダメージを受けた場合のみ発動し、相手に自分が受けたダメージ分のダメージを与える！」

「させん！手札から速攻魔法『極元聖の防壁』を発動！このターンのダメージを無効にし、手札が４枚になるようにドローする！当然『極元聖』が存在する時にこのカードの効果を無効にすることはできない」

私のデッキのほとんどのカードは極元聖が存在する場合に効果を無効にされないカード。パーミッションならば私の敵ではない。

「ターンエンド。『神の神託』を維持する。そして、今捨てたカード『極元聖の絶対裁断』の効果により、相手は全ての手札を捨てる。更に、互いのターンで数えて２ターン後まで貴様は魔法・罠カード

を使用できない」

「何！！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ１０００００→１３０００

Ｐｉｌｌａｒ？
ＬＰ４０００
手札×３
フィールド
極元聖皇ーオメガブレードー　ＡＴＫ２５０００
極元聖ーアステアブレードー　ＡＴＫ４０００
極元聖ーアルクスブレードー　ＡＴＫ４０００

手札０、伏せカードは使用できず、更にオメガブレードの攻撃力を超えるモンスターはわたしのフィールドにはない。今度こそ終わりか…

『お前はここで終わるのか？』

…！フン、こんな時に奴の言葉を思い出すとはな…スレイ、よくも余計な言葉を残して行ってくれたな…！

「いいだろう、こんなところで終わるかどうかはこのドローでわかることだ！」

「無駄な足掻きを。いかなるカードをドローしようと、我が極元聖

を上回ることなどできはしない！！」

「それは試してみなければわからんな…ドロー！！」

……このカードは…！

「ついに来たか。わたしは『エクスプロージョン・ノヴァ』を召喚！このカードの召喚に成功した時、デッキから1枚ドローする！自分フィールド上に『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』が存在する時、このカードは特殊召喚できる！来い、『インフェルノ・エボリューション』！」

「何！そんな…まさか…」

なぜなのだ？なぜ七聖龍は北欧神に力を貸す？なぜ私達に敵対するのだ…。世界に散る前は、我らを守護していた龍が、なぜ我らの敵になるのだ？やはり主スレイは、私達を裏切ったのか？いや、主スレイは決して私達を裏切らない…裏切られたなどとは思いたくない。

「レベル１０の『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』にレベル１の『エクスプロージョン・ノヴァ』と『インフェルノ・エボリューション』をダブルチューニング！！大いなる力、今具現化し世界を破壊する！我が究極の頂点！シンクロ召喚、暴走する力を意のままに振るえ！『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』！！」

Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンとエクスプロージョン・ノヴァ、インフェルノ・エボリューションを無数の岩がつつむ。完全に包み込んで岩が球体になった後、宇宙から隕石が落ちてきて岩の球体に直撃し、中から全身が無数の六角形の炎でできた、全長５０ｋｍはある巨大な龍が現れた。Ｓｉｎパラドクス・ドラゴンの面影は殆ど無い。

エクスプロージョン・デス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「墓地に送られた『Ｓｉｎ　Ｍｉｓｔ』の効果発動！このターン、相手は２回までダメージを無効化できるが、墓地から『Ｓｉｎ』モンスター１体を召喚条件を無視して特殊召喚する！『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』復活！バトルだ！『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』で『極元聖ーアルクスブレードー』を攻撃！」

アルクスブレードはその剣でパラドクス・ドラゴンを斬った。

「アルクスブレードは１ターンに１度、戦闘では破壊されない！」

「承知！『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』で『極元聖ーアルクスブレードー』を攻撃！『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』は自分ターンのみ、戦闘では破壊されない！」

「何だと！？」

エクスプロージョン・デス・ドラゴンがアルクスブレードに突っ込んで大爆発を起こした。

極元聖皇ーオメガブレードー　ＡＴＫ２５０００↓１７０００

「それだけではない。『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』が相手モンスターを破壊した時、自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える！」

「『Ｓｉｎ　Ｍｉｓｔ』の効果によってダメージを無効にする！」

「『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』効果発動！破壊したモンスターの攻撃力を加算してもう1度攻撃できる！だが、先に『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』で『極元聖皇ーアステアブレードー』を攻撃！」

エクスプロージョン・デス・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→８０００

アステアブレードも剣でクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの体当たりを防いだ。攻撃力が下なので、破壊することはできなかったが。

「『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』で『極元聖ーアステアブレードー』を攻撃！」

「『Ｓｉｎ　Ｍｉｓｔ』の効果によってダメージを無効にする！」

ここまでか。なぜ負けた？私は完全にオーディンを押していたはずなのに…。

「…許せ、お前達。オーディンを倒すことができなかった」

「いえ。構いません」

「これもまた運命。ならば大人しく受け入れましょう」

エクスプロージョン・デス・ドラゴン　ＡＴＫ８０００→１２０００

極元聖皇ーオメガブレードー　ＡＴＫ１７０００→９０００

「『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』で『極元聖皇ーオメガブレードー』を攻撃！！エクスプロージョン・フレア！」

「うあああああああああっ！！」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ４０００→１０００

「『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』の効果発動…自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える…」

「……」

Ｐｉｌｌａｒ？　ＬＰ１０００→－２０００

三元聖が負けた瞬間、光に包まれ始めた。

「…悔いは残さない。オーディン、我らが主スレイを頼む」

「……わかった」

三元聖は目を瞑り、消えるのを覚悟した。だが…

［三元聖よ］

［あ、主スレイ…］

［今までご苦労だった。だが、このままお前達が何の自由も得られぬまま消えるのは不憫だ］

［そ、それは一体…仮に私達の器を現世にとどめようとしてもそれ

は不可能…」

「可能だ。お前達が敗れたことで、わたしの中にある最後の封印が解かれた。あらゆる次元のルールが通用しない力…これを使おう」

今スレイは、消えゆく者の消滅をその力で封じた。

その力の正体は、早い話がスレイの感情を常に無限眼の起動状態にして、更なる防御力と魔術を手に入れる。無限眼の起動状態は、殆どの感情が失われる。ただ、無限眼の起動状態でもスクルドに対してだけは変わらなかったので大丈夫だろう。

それだけではない。痛覚が消え去ることで、心臓が動いている限りスレイに敗北は無くなる。だが、最大の変化は間違いなく究極神だろう。

「お前達は真の自由を手に入れた。どこへなりとも、好きな場所に旅立つがいい」

「あ、主…しかし私達には生きる意味がありません…」

「それを見つけるのがその意味だろう？お前達はもうわたしに縛られることは無い。自由の身で過ごしてみろ。その先にはわたしには決して手に入れられない輝きがあるはずだ」

スレイはそれだけ伝え、念話を切ってしまった。初めての自由を手に入れた三元聖は戸惑う。当然だ。今までただ意味もなく復讐のために生きており、それが不要となって自由となった時に何も目的が無いのだから。だが、目的は探せばいい。その目的を見つけて果た

した時に、スレイの言う『わたしが決して手に入れられない輝き』がある。三元聖はそれが何なのか探すことにした。

ここでオーディン達は、七聖龍のカードが光っていることに気付いた。

『我らが主…は、お前達か』

「！！」

そして、現在覚醒している七聖龍は持ち主…クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンはロキ、ダークネス・ウィング・ドラゴンはトール、エクスプロージョン・デス・ドラゴンはオーディン、エターナル・ローズ・ドラゴンはスクルドの前に姿を現した。あまりにも巨大だが、一般人には見えないので関係ない。七聖龍は精霊に似て非なる存在と化し、その主に語りかける。

『…我らを従えるお前達の三元聖をも上回るその絆…見せてもらった。我らは正式にお前達のしもべとなろう。この力果てるまで、遠慮なく使うがいい』

多分、今現在はリーダー格のエクスプロージョン・デス・ドラゴンが各七聖龍を通してその意思を４人に伝えた。どうやら今後、ずっと精霊に酷似した存在として主の傍にいるらしい。４人は『こんな巨大なドラゴンが常に精霊として傍にいるのか』と苦笑いを浮かべてそれを了承した。

ちなみに、効果や攻撃力が優れているからリーダー格というわけではないようだ。それならば明らかにエクスプロージョン・デス・ドラゴンよりもダークネス・ウィング・ドラゴンやクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの方が上だからだ。

「…オーディン、トール、ロキ。……私達の非礼を許せとは言わん。だがせめて謝罪はする。すまなかった。…私達はこれから旅に出る。再び出会ったときは、よろしく頼む」

「神を上回るものと言えど過ちは犯すもの。わたしはそれだけ言おう」

「ま、そーゆーことで」

「また会おう」

三元聖は去り際に静かに笑い、Ｄホイールに乗って次元の扉を開いて行ってしまった。

「行ったか。奴らはこれから、自分だけの生きる意味を見つけることができるはずだ」

「ま、少しだけど期待してあげるよ。キッヒャッヒャッヒャッヒャ」

きっと三元聖は、その目的を見つけて再び会いに来る。その時は盛大に歓迎してやろう。

長期休暇１３　スレイの療養旅行３　後編（後書き）

次回「長期休暇最終日」

ウルズ「とりあえず、前書きのことについて感想欄に書いてくれると作者が喜ぶらしいわよ？ちなみにこのことは、活動報告にも書いておくから時間があったらどちらにするべきかアドバイスしてほしいわ」

スクルド「さあ、最強カード紹介行ってみよ！」

エクスプロージョン・デス・ドラゴン
レベル１２　神属性　ドラゴン族　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
『Ｓｉｎパラドクス・ドラゴン』＋『エクスプロージョン・ノヴァ』＋『インフェルノ・エボリューション』
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。このカードは相手のカード効果ではフィールドを離れず、自分のターンでは戦闘によって破壊されない。１ターンに１度、このカード以外の自分フィールド上に存在するモンスター１体の攻撃力を４０００にすることができる。このカードが相手モンスターを破壊した場合、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターの攻撃力の合計分のダメージを相手プレイヤーに与える。このカードが相手モンスターを破壊した場合、エンドフェイズまで破壊したモンスターの攻撃力をこのカードに加え、もう１度攻撃することができる。

ウルズ「効果と組み合わせて、理論上５回攻撃して自分フィールド

上のモンスターの攻撃力がすべて４０００なら１０００００ポイントのダメージが入るわ。今までのドラゴンと違って、一撃必殺に向いている能力ね。Ｓｉｎにはふさわしいわ」

ヴェルザンディ「２回攻撃すればこのカードだけで終わりですわね。ちなみに、モンスターを破壊するともう１度攻撃できますが、続けて攻撃する必要はありませんわ」

スクルド「私のドラゴンっていったい…」

長期休暇最終日　出航！デュエルアカデミア　イリアｖｓスレイ（前書き）

一応最終回です。

次回作（というか続き）の小説の名前『Ｔｈｅ　Ｕｌｔｉｍａｔｅ　ＧＯＤ　Ｆｏｒｃｅ』……おう、高校生なのに中二病だぜ！だけど後悔はしないし反省も（ｒｙ

※最初の話に今までの大まかなあらすじを、その次の話にキャラ設定（最新版）を載せます。次回作もよろしくお願いします。書き方の変更もするかもしれません。

ちなみに、最終話らしくかなり短いです。

最近の出来事
リア充

長期休暇最終日　出航！デュエルアカデミア　イリアｖｓスレイ

～～～三元聖との戦いから1か月と3週間・屋敷～～～

「ただいま～！」

「……」

スレイとスクルドが旅行から帰ってきた。スレイは更なる力を手にして、スクルドはよりスレイへの理解を深めて。
スレイは感情が常に無限眼の起動状態と同じであるため、自分からはあまり喋らない。

「イリアとアレクも旅立つ前に、スレイと戦っておいた方がいいんじゃない？キッヒャッヒャ」

イリアとアレクは顔を見合わせる。

「お前達が望むならわたしは相手になろう」

スレイは無表情で懐に手を入れ、宝物庫からアーティスを取り出した。

「……お願いするわ。旅立つ前に、神様の力をこの手に刻み付けておく」

「……いいだろう」

スレイはアーティスを天に振りかざした。すると、大広間にいた全員がただ荒野が広がる世界へ飛ばされた。

飛ばされた後、２人が対峙し剣と鎌を構える。

「戦う前に言っておく。お前たち人間はわたし…わたし達のことを『神』と呼ぶ。だが、わたしから見ればこの世に本当の神などたった3体しか存在しない。なぜなら、わたし達『神』と呼ばれしものが何かを願ったとき、それを叶えてくれる存在などないからだ。お前達に『神』と呼ばれるわたし達は人間の願いを叶えることなど容易い。だがわたしが自分の願いをかなえるには戦いの試練がある。……お前がもし人間を見限り、神と呼ばれる存在になった場合は今わたしが言ったことを覚えておくといい」

「大丈夫です。……人間を見限る時なんて来ませんから」

暫くして、風が止む。それと同時に、両者が突進した。だが、やはりというべきかパワーは圧倒的にスレイの方が強い。

「純粋な想いの力…だが純粋ゆえに軽い」

スレイは自らの身体を光の粒子に変え、イリアの後ろで再構築してアーティスで斬りかかる。イリアはそれを読んでおり、すぐに振り返って防いだ。

「想いの力が軽いって…あなたはスクルドさんのことが好きでしょう！？」

「当然。わたしの生涯の親友でもあり恋人でもある」

「その想いの力も軽いというの！？」

「それはお前自身が確かめてみろ。わたしの剣を受け止めればわかることだ」

スレイは剣を一旦振り上げ、再度叩きつける。イリアは鎌で防いだが、一瞬と耐えられずにすぐに叩き落とされてしまった。

「うっ…く…（全然軽くなんかない…あの人のスクルドさんに対する想いの力は…半端な物じゃない）……！！」

起き上がろうとしているイリアに、スレイは上空から剣を構えて突進する。『この星の重力』というルールをスレイ自身に対してのみ無効化し、自身の突進力だけで攻める。スレイは、次元のルールの殆どをスレイ自身に対して無効化することができるのだ。

「……身の程を知れ」

イリアが敗北を覚悟したが、アーティスは聖剣によって防がれていた。

「…聖剣の使い手」

「わたしを忘れてもらっては困る」

アレクは鋭い目でスレイを見据える。アレクの特技である、相手の次の考えや心情を知ることができる能力だ。

「（バカな…何も見えない…だと？）」

「わたしの感情を読もうとしても無駄だ。わたしと究極神以外の全ての存在に、わたしの感情を知ることはできない」

スレイは無表情のまま目を見開き、更に本気でアーティスに力を加える。その上で、アーティスに通常の１０００倍の重力を加えた。

「ぐううううっ！」

必死に耐えていたアレクに、体勢を立て直したイリアが、力が最も伝わりやすい角度から鎌の一撃を加えた。突然の力の加わり方にスレイが一瞬だがよろめき、その隙を狙って２人がアーティスを押し戻した。

その隙を２人が見逃すはずがなく、全力の攻撃を追加しようとした。が…

「正しいことは間違いであり、間違いであることは正しい」

スレイは、例えどんな戦いの達人でも立て直せないであろうよろめきから、平気で立て直しアーティスで斬りかかった。

「バカな！？この体勢から立て直すなど…！！」

アレクがほぼ直感に近い反応で、剣をアーティスにぶつけて防いだ。

「言ったはずだ。正しいことは間違いであり、間違いであることは正しいと」

オリハルコンで創られていた聖剣とイリアの鎌の完成度が９０％以

上になっている…オーディン、一体何をした？
だが完全なる完成形のアーティスと９９％では大きな違いがある。
１％の欠陥は敗北を呼ぶ。

「どういう意味だ！？」

「そのままの意味だ。次元のルールを無力化するわたしにお前たち人間が正しいと思っているこの世界のルールなど通用しない、間違いだ。そして人間は次元のルールが通用しない者など存在せず、何かの間違いだと思っている」

「くっ……ならば秘奥義！カオティックソード！」

アレクの聖剣が、何とも言えない色の光を纏って輝く。
そして、スレイに同じ色の光がまとわりつき、アレクが離れた直後に大爆発した。そこにイリアが巨大な火球を放り込む。

「……」

だが、煙が晴れそこにいたのは、無傷のスレイだった。

「そんな…太陽と同じ威力と温度の炎なのに…」

「わたしに太陽をぶつけたくらいで、わたしが死ぬと思ったのか？この身にその程度の炎と雷は一切通用しない」

スレイは圧倒的なプレッシャーを放つ。アレクとイリアは、その身の毛もよだつようなプレッシャーに怯み、全身の力が抜けていくのを感じた。

「動けんか？そうだろうな、だが戦場では身体が動かなくなったものから死ぬ。相手に飲まれれば一瞬で敗北するのだ」

「くっ……」

「わたしから教えられることはこれが全てだ。敵はどのような能力を持っているかわからない。油断をするな」

スレイはアーティスに神力を込める。その漆黒の輝きが、地上を照らして闇に飲まれゆく瞬間を想像させる。スレイはこれをとどめの一撃にするつもりだ。

「大技はこういうものを言う」

スレイはアーティスを振り下ろす。その斬撃が飛び、アレクとイリアは余裕を以って避けた。だが、斬撃が飛んで行った跡が空間に刻まれ残っており、その空間から光が溢れ出し大爆発を起こし続ける。2人はこの広範囲の爆発をよけきれずに被爆した。

「そん…な…あれだけ強化したのに、傷一つつけられずに負けるなんて…」

イリアは悔しさを噛みしめ、涙を呑む。それを踏み台にして、更なる強さを手に入れると心の中で誓っていた。習得した光速移動も、極炎魔法もスレイには通用しなかった。

「お前の魔法はわたしと相性が悪かったようだ。時にはこういうこともある、炎だけに頼らず、別の魔術も何かしら使えるようにするといいかもしれないな」

スレイはアーティスを振り、全員を屋敷に転移させた。

「…これを渡しておく。一瞬でもわたしを怯ませた価値は大きい」

スレイはイリアに水晶を渡した。

「近くにいる神の居場所がわかる。悪魔と戦う戦士の1人と言えば協力を惜しまないはずだ」

その直後にイリアとアレクを光がつつみ、その眩しさに目を瞑った。次に目を開いた2人が見たのは、周りに建物1つ無い草原だった。

「…行こ」

「うむ」

～～～屋敷～～～

「わたし達もそろそろ行くか」

「キッヒャッヒャ、準備はできてるよ」

明日よりデュエルアカデミアの3期が始まる。だが、3期までは何が起こるか予想がつく。

問題なのは、この世界に来たことで生じてしまったイレギュラーである第4期から第7期だ。所謂高校から大学に進学するのと同じ要領らしく、希望者は全員が大学と呼ばれる部分に進学するそうだ。

定員割れの場合は外部から人員を募集するらしい。ちなみに今のは

全てクロノスから聞いた話だ。

出航まで時間も無い。いい加減出発するとしよう。イレギュラーとアクシデントを片付けるために。

長期休暇最終日　出航！デュエルアカデミア　イリアｖｓスレイ（後書き）

次回作『Ｔｈｅ　Ｕｌｔｉｍａｔｅ　ＧＯＤ　Ｆｏｒｃｅ』

ウルズ「というわけで、この小説は連載終了ってことになるわね。…次回作に引き継がれてまだまだ続くっぽいけど」

スクルド「作者さん、休みの日は部活に入ってなくて暇らしいからね…さて、今回の最強カードはこれだよ」

『究極神帝ラー』
レベル１２　神属性　究極神帝族　攻撃力∞　守備力∞
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体とライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在する時のみ効果が適用され、攻撃可能になる。このカードはこのカード以外のいかなる効果・コストも受けず、戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、相手のカードの効果は無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している場合、お互いのプレイヤーはサレンダーできない。１ターンに１度、相手のカードを全て除外し∞のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。このカードの元々のレベルは∞として扱う。このカードの効果のスペルスピードは∞として扱う。

ウルズ「２体の神とともにフィールドにそろえることができれば、一瞬で相手を時空ごと抹殺できるわ。レベル∞、攻守∞は伊達じゃないわよ」

スクルド「スレイの最後にして最強の切り札だね！…時空ごとっていうのは勘弁してほしいかな」

三姉妹「次回作で会いましょう！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5717o/

遊戯王　～絶望と希望の神々の物語～

2011年8月8日20時41分発行